

下東西遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第16集—

本文編

1987

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

下東西遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第16集—

本文編

1987

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県は遺跡の多い県として広く知られています。そのなかでも下東西遺跡の位置する前橋市西部は、榛名山南麓より延びる肥沃な扇状地を背景に古代から多くの遺跡が分布することが知られています。特に古墳時代から歴史時代前半にかけては大型前方後円墳、古代寺院、官衙跡などの主要な遺跡が集中し、古代上野国の中心地として大いに栄えた地域であったことを物語っております。

下東西遺跡の発掘調査は、本県を縦断する関越自動車道新潟線建設工事に伴うものとして、昭和55年度に第1次調査、昭和57、58年度に第2次、第3次調査と、3年次にわたり実施されました。

本調査によって、官衙をうかがわせる遺構、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、墓跡など歴史時代を中心とする多数の遺構、遺物の発見がありました。これらの貴重な埋蔵文化財の発見は、この地域が歴史時代における群馬県の中心地域の一角を占めていたことを十分にうかがわせるものであります。

本遺跡の整理事業は、昭和59年4月から3年計画で進められ、ここに本文編、図版編の2分冊で、関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第16集として刊行する運びとなりました。

本遺跡の調査にあたっては、日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所、前橋市教育委員会等の関係諸機関、ならびに発掘調査に直接携わった方々、また、本報告書の作成にあたり、整理事業を進めていただいた関係者各位の労苦と熱意に深く感謝いたします。本報告書の刊行によって、その成果が広く活用され、今後の埋蔵文化財の保護・普及に大いに役立ちえることを願い、序の言葉といたします。

昭和62年3月31日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、関越自動車道新潟線建設に伴い事前調査された前橋市青梨子町、群馬郡群馬町字北原地内に所在する下東西遺跡の調査報告書である。
2. 下東西遺跡は、1980年度においては「北原地域」、1982年度以降は「北原B地域」という事業名称が称されていた。
3. 委 託 者 日本道路公団東京第二建設局・群馬県教育委員会
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 第1次調査 1980年5月19日～1980年10月28日
第2次調査 1982年6月21日～1982年7月6日
第3次調査 1983年2月7日～1984年3月31日
6. 調査組織
事務担当 常務理事 小林喜久治
事務局長 沢井良之助 (1980年4月1日～1982年3月31日)
白石保三郎 (1982年4月1日～)
調査研究部長 井上 唯雄 (1980年4月1日～1982年3月31日)
松本 浩一 (1982年4月1日～)
管理部長 大沢 秋良 (1983年4月1日～)
庶務課 課長 近藤 平志 (1980年4月1日～1983年3月31日)
主事 国定 均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏
調査研究第一課長 平野 進一
調査担当 第一次調査 調査研究員 巾 隆之
調査研究員 坂口 一
嘱 託 員 三浦 京子
第二次調査 調査研究員 唐沢 至郎
第三次調査 主任調査研究員 大江 正行
調査研究員 津金澤吉茂 (1983年4月以降)
調査研究員 麻生 敏隆 (1983年2月～3月)
調査研究員 神谷 佳明
7. 発掘調査にあたっては、立正大学・成蹊大学学生、地元前橋市をはじめ、群馬町・高崎市・榛東村・吉岡村・沼田市・月夜野町から多くの方々が作業に従事していただいた。ここに感謝の意を表します。
遺構図の作成にあたっては株式会社測研に大半を委託した。
井戸跡の調査は、株式会社原沢ポーリングに委託した。
8. 発掘調査後の整理作業は、1984年度、1985年度、1986年度事業として実施した。
整理期間 1984年4月1日～1987年3月31日
9. 本報告書作成の組織は、以下のとおりである。
事務担当 常務理事 白石保三郎

事務局長	梅沢 重昭 (1984年4月1日～1986年3月31日)
	井上 唯雄 (1986年4月1日～)
調査研究部長	松本 浩一 (～1985年3月31日)
	上原 啓己 (1985年4月1日～)
管理部長	大沢 秋良
庶務課 課長	定方隆史
	主事 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏
	調査研究第一課長 平野進一
整理担当	調査研究員 神谷佳明
	嘱託員 三浦京子
	補助員 尾田正子、小野里明美、富永セン、長井洋子、真下悦子、宮沢房子、山田キミ子
遺物写真	技 師 佐藤元彦
保存処理	技 師 関 邦一
	嘱託員 北爪健二
委託業務	遺構トレース 株式会社測研・航空写真合成 青高館

第3章第1節縄文土器図版作成にあたっては糸井宮前班、第4章第4節図版作成にあたっては師A班の協力をえた。

10. 本報告書の作成にあたっておこなった科学分析、鑑定は、下記の方々に依頼した。
- 人骨鑑定 聖マリアンナ医科大学解剖学教室 森本岩太郎教授、吉田俊爾講師、平田和明助手
 獣骨鑑定 群馬県家畜登録協会常任理事 大江正直
 石材鑑定 群馬県地質学協会 飯島静男
 胎土分析 群馬県工業試験場独立研究員 花岡絃一
 花粉分析 株式会社 パリノ・サーヴェイ
 樹種同定 株式会社 パリノ・サーヴェイ
 井戸跡掘削状態に関する所見 原沢ボーリング株式会社 有賀正明
11. 本報告書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（前橋、下室田、伊香保、渋川）昭和56年（下室田は昭和49年）、前橋市役所発行2千5百分の1現形図（24）昭和49年を使用した。
12. 本報告書の執筆は、下記のとおりである。（敬称略）
- | | |
|--------------|---------------|
| 第1章 第1節 | 調査研究第1課長 平野進一 |
| 第2節 | 調査研究員 神谷佳明 |
| 第2章 | 調査研究員 神谷佳明 |
| 第3章 第1節 埋嚢遺構 | 調査研究員 桜岡正信 |
| 縄文土器 | 調査研究員 関根慎二 |
| 縄文石器 | 調査研究員 麻生敏隆 |
| 第2節 竪穴住居 | 調査研究員 神谷佳明 |
| 弥生石器 | 調査研究員 麻生敏隆 |
| 第3節 竪穴住居 | 調査研究員 坂口 一 |

	第4節		調査研究員	神谷佳明、嘱託員	三浦京子
	第5節		調査研究員	神谷佳明、嘱託員	三浦京子
第4章	第1節		調査研究員	神谷佳明	
	第2節	1、2	嘱託員	三浦京子	
		3	調査研究員	神谷佳明	
	第3節		主任調査研究員	大江正行	
	第4節		主任調査研究員	大江正行	
	第5節	1	主任調査研究員	大江正行	
		2～6	主任調査研究員	津金澤吉茂	
	第6節		嘱託員	三浦京子	
	第7節		調査研究員	神谷佳明	
第5章	第1節	聖マリアンナ医科大学	森本岩太郎教授、吉田俊爾講師、平田和明助手		
	第2節	財団法人 群馬県家畜登録協会常任理事	大江正直		
	第3節	群馬県工業試験場独立研究員	花岡紘一、当事業団嘱託員	三浦京子	
	第4節	パリノ・サーヴェイ株式会社			
	第5節	パリノ・サーヴェイ株式会社			

第4章第1節中世遺構、東覚寺堆鐘拓影図・写真は、当事業団調査研究員木津博明より提供をうけた。

13. 発掘調査、整理作業にあたっては下記の方々から資料提供、御指導、御教示、御協力を頂いた。記して謝意を表わす。(敬称略・順不同)

田口昭一・若尾正成(多治見市教育委員会)、池上 悟(立正大学講師)、小島弘義(平塚市教育委員会)、林部 均(奈良県立橿原考古学研究所)、進藤秋輝・白鳥良一(宮城県多賀城跡研究所)、笠原信男(宮城県東北歴史資料館)、芹沢清八(財団法人栃木県文化振興事業団)、立石盛詞・浅野晴樹(財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団)、橋本澄朗(栃木県立博物館)、石井克己(子持村教育委員会)、志村 哲(藤岡市教育委員会)、間庭 稔(月夜野町教育委員会)、前原 豊(前橋市教育委員会)、若狭 徹(群馬町教育委員会)、前橋市教育委員会

14. 本遺跡の図面・写真・遺物は、現在群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。なお、土器には、パラロイドB72・エチルシリケートSS101の混合液を含浸処理した。

凡 例

1. 本遺跡の名称は、1977・79年度に前橋市教育委員会で隣接する地点を下東西遺跡H区・L区・M区として調査を実施しており、本遺跡の溝遺構で同一と推定されるものも見られるため、本遺跡における字下東西の占める割合は僅かではあるが、「下東西遺跡」と呼称した。また、本遺跡の群馬町北原に所在する調査区（E区）は、下東西遺跡と別台地に立地しており、同一台地を1981年度に群馬町教育委員会で北原遺跡として発掘調査しており、E区は北原遺跡と同一遺跡と考えられるが、本報告書では、下東西遺跡E区として取り扱っている。なお、前橋市教育委員会で調査した地点と区別を必要とする場合は、下東西遺跡（関越自動車道地区）と称する。

2. 本報告書では、遺構名称を下記の略号で表記している。

竪穴住居跡	SJ	掘立柱建物跡	SB	柵	列	SA		
竪穴状遺構	ST	溝	SD	土	塚	墓	SZ	
土	塚	SK	井	戸	SE	ピ	ット	P

3. 本報告書に掲載した遺構実測図の縮小率は、下記のとおりである。

SJ	1:80	SB	1:80	SA	1:80	ST	1:80
SD	平面図	1:200	SD	断面図	1:60	SZ	1:40
SK	1:40	SE	1:40	P	1:40		

遺構実測図の縮小率は、上記のとおりであるが、上記のものと異なる場合は、そのつど明記した。

4. 本報告書中の断面水準線数値・等高線数値は、L = mで表示し、標高値を示す。

5. 遺構実測図の示した方位記号は、真北を示す。

6. 遺構面積は、デジタルプランメーターによる3回の計測の平均値である。

7. 遺物実測にあたっては、当事業団拡大整理委員会歴史部会で編集した「仕様書一遺物編」（未刊）を基にして実施したが、細部では、異なる点もある。

8. 観察表中の計測値は、口径・底径・器高を表わしその単位はcmである。

9. 遺構・遺物の写真図版は、本文のタイトルの右側に記載してある。なお、遺構検索に際しては、遺構索引を748～749頁に掲載しているので、ご利用下さい。

10. 本報告書に掲載した遺物実測図の縮小率は、下記のとおりである。

縄文土器	1:3	縄文石器	1:3	弥生土器	1:4	弥生石器	1:3	
土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器	1:4	瓦	1:4					
焼き締め陶器	1:4	陶磁器	1:3	軟質陶器（火鉢・鉢	1:4	内耳鍋	1:5）	
土師質土器	1:4							
石製品	砥石	1:4	石皿	1:6	石臼	1:6	板碑	1:6
五輪塔	1:6	用途不明品	1:6	金属製品	1:4	渡来銭	1:1	

遺物の縮小率は、上記のとおりであるが、上記のものと異なる場合は、そのつど明記した。

11. 遺物写真の縮小率は、概ね実測図と同率にしてある。

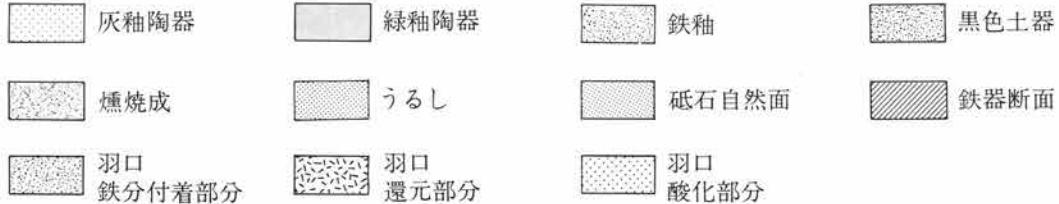
12. 遺物写真の番号は、遺物実測図の番号と同一のものである。

13. 本報告書中で使用したスクリーンは、下記のとおりである。

遺構



遺物



14. 本報告書中の第3章では、本遺跡から検出・出土した遺構・遺物を日本考古学における一般的な時代区分名称である「縄文時代」、「弥生時代」、「古墳時代」、「歴史時代」という呼称と「歴史時代」をさらに区分するため「中世」の名称を使用した。

本遺跡では、縄文時代と弥生時代、弥生時代と古墳時代との区分は、遺構・遺物に時間的連続性が見られないため、容易に区分でき、問題も生じないと考えられる。しかし、古墳時代から歴史時代の区分については、古墳時代の終焉についての時期が明確化されておらず、一応、暦年代における7世紀末とされているが、本遺跡においては、7世紀中頃から11世紀にかけて、ほぼ連続的に、この地域での生活がみられ、その連続性のなかで特に大きな画期とか時間的断絶がみられないため、7世紀中頃から11世紀にかけての遺構・遺物を歴史時代の範疇としてとらえた。また、「歴史時代」という呼称が古墳時代以降を示す名称であるため、近年多く使用されている「奈良時代」・「平安時代」の名称は、その名称自体が政治史的時代区分であり、奈良時代は、平城京遷都（710年）から長岡京遷都（794年）までの間、平安時代は、長岡京遷都（794年）から鎌倉幕府が開かれる（源頼朝が右近衛大将に任命された1185年か征夷大将軍に任命された1192年）までの間であり、暦年代が明確である。暦年代を明確に示唆する資料をもたない本遺跡では、この政治史的時代区分は適当ではないと考えられるため、使用しなかった。

歴史時代と中世の間は、本遺跡では、時間的な断絶（歴史時代は、7世紀中頃から11世紀にかけて、中世は、13世紀後半から16世紀中頃にかけてで、11世紀中頃から13世紀中頃にかけての約200年間の遺構は検出されず、遺物も12世紀代の白磁等が出土しているだけで、これらの遺物も本遺跡に12世紀代にすでに存在していたことは考えられず、後に持ち込まれたと考えられる。）がみられることから、名称的に不適当な点はあるが、本遺跡の一時代を示す名称として「中世」の呼称を使用した。^{註1)}

註

(1)詳細は、第4章第1節 中世遺構、第4章第4節 中世土・陶・磁器の項を参照して下さい。

参考文献

- 勅使河原 彰 「時代区分論」『日本考古学を学ぶ(1)』 有斐閣選書 1978年
 山本忠尚 「日本考古学と時代区分」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983年
 近藤義雄・横山浩一編 「刊行にあたって」『岩波講座 日本考古学』 岩波書店 1985年
 杉山晋作 「高塚古墳の終末」『考古学研究 129』 考古学研究会 1986年

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経過・方法	2
第1節 調査に至る経過	2
第2節 調査の経過	4
第3節 調査の方法	5
1 調査区の設定	5
2 基本的土層	6
第2章 立地・環境	9
第1節 立地について	9
第2節 周辺遺跡について	11
第3章 検出遺構・遺物	36
第1節 縄文時代	36
1 埋 葬 遺 構	36
2 遺構外出土遺物	37
第2節 弥生時代	58
1 竪穴住居跡（S J）	58
2 遺構外出土遺物	63
第3節 古墳時代	66
1 竪穴住居跡（S J）	66
2 遺構外出土遺物	73
第4節 歴史時代	74
1 竪穴住居跡（S J）	74
2 掘立柱建物跡（S B）	410
3 柵 列（S A）	430
4 竪穴状遺構（S T）	434
5 溝（S D）	460

6	土 塚 (SK)	543
7	土塚墓 (SZ)	563
8	井 戸 (SE)	565
9	ピ ッ ト (P)	569
10	遺構外出土遺物	571
第5節	中 世 以 降	575
1	豎穴状遺構 (ST)	575
2	溝 (SD)	580
3	土 塚 (SK)	618
4	土塚墓 (SZ)	648
5	井 戸 (SE)	656
第4章	調 査 成 果	720
第1節	遺構について	720
第2節	出土土器について	733
第3節	瓦 類	777
第4節	中世土・陶・磁器	787
第5節	石製品について	826
1	砥 石	826
2	石 皿	836
3	石 臼	839
4	板 碑	847
5	五 輪 塔	880
6	用途不明石製品	885
第6節	金属製品について	889
第7節	渡 来 銭	898
第5章	付 編	912
第1節	下東西遺跡出土人骨について	912
第2節	下東西遺跡出土獣歯・獣骨について	916
第3節	胎 土 分 析	932
第4節	花 粉 分 析	943
第5節	樹 種 同 定	945
	遺 構 索 引	948
付図	下東西遺跡全体図	

下東西遺跡

本文編

第1章 調査経過・方法

第1節 調査にいたる経過

関越自動車道新潟線は、国土開発幹線自動車道建設法に基づき、太平洋側と日本海側を結ぶ主要幹線道路として計画されたもので、その路線は東京都練馬区を基点とし、埼玉県、群馬県を經由して新潟県西蒲原郡黒崎村にいたる約310kmに及んでいる。

路線の基本計画が決定された昭和43年に、群馬県教育委員会はその対応に資するための分布調査を計画し、昭和44年度に渋川以南を、昭和46年度に渋川以北の分布調査を実施した。

昭和46年6月、日本道路公団は、群馬県に渋川以南の幅200mにわたる計画路線内の関係公共事業について調査を依頼してきた。その要請に基づき群馬県教育委員会は、改めて埋蔵文化財の分布調査を実施し、藤岡市から渋川市間に下東西遺跡（当時は北原遺跡を含んで北原地域として取り扱われていた）を含む22箇所の遺跡を確認している。下東西遺跡はその分布調査に基づき、群馬郡群馬町大字北原に所在する古墳時代の包蔵地として把握され、県道前橋・箕郷線の南側と牛池川にはさまれた台地上に、広い範囲にわたって土師器破片の散布が認められた。

これら22箇所の遺跡の取り扱いについて、昭和48年3月に日本道路公団東京建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で、関越自動車道新潟線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する了解事項が締結された。この了解事項に基づき昭和48年度より発掘調査を実施することとし、これに伴い県教育委員会では文化財保護課の職員増を図る等、組織、体制の拡充に務めている。

関越自動車道新潟線にかかわる発掘調査は、昭和48年度から県南の藤岡市温井遺跡から開始し、県中央部の前橋市中尾遺跡まで15の遺跡が終了し、昭和55年7月には前橋インターチェンジ以南の路線が供用開始されることとなった。

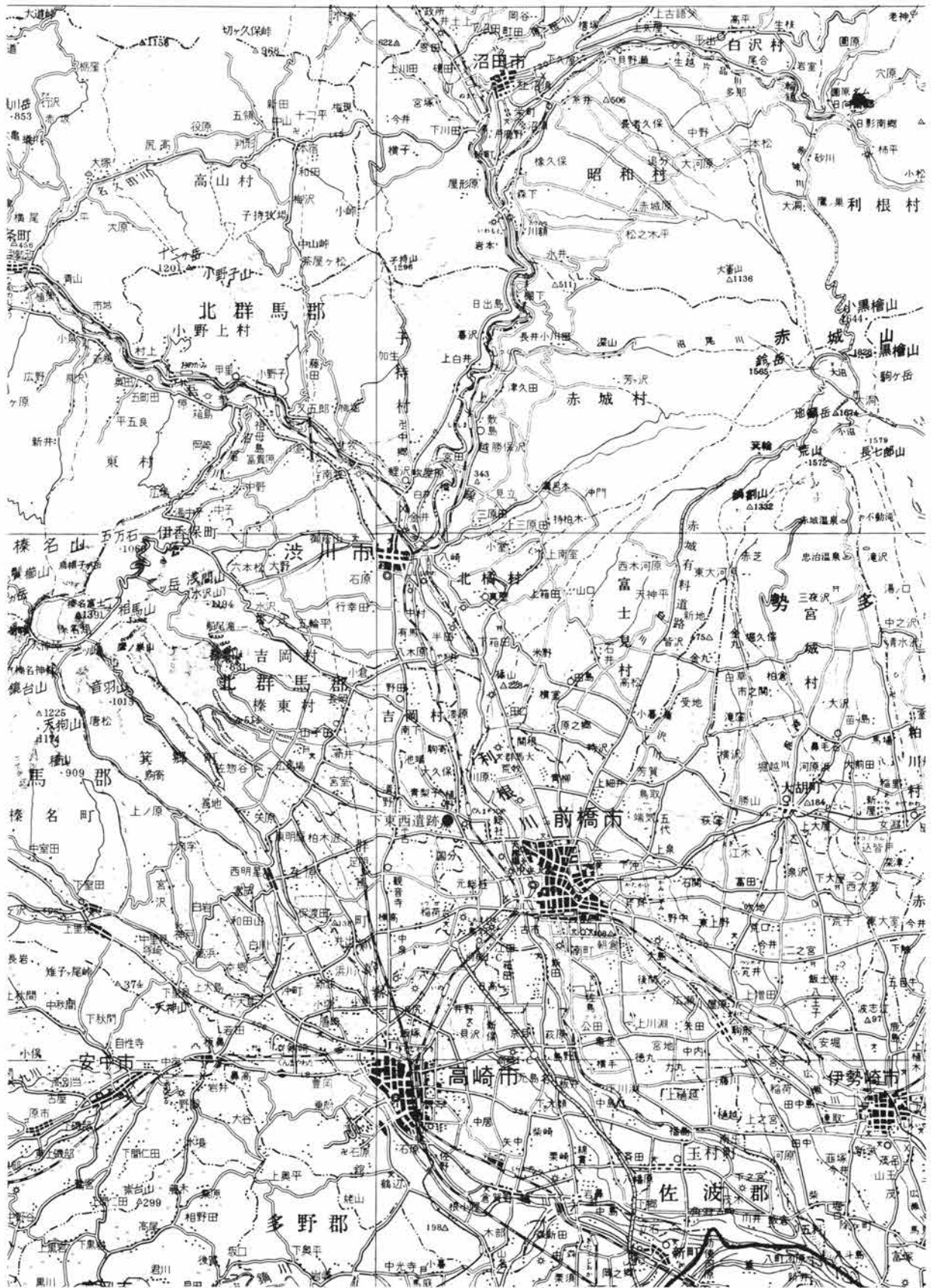
群馬県では昭和53年、関越自動車道新潟線を始めとして、上越新幹線、上武国道、公共関連事業の増大に対処するため、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を設立し、昭和55年、県教育委員会の直営事業として実施されてきた関越自動車道新潟線発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が県教育委員会から再委託を受けて実施するところとなった。

昭和55年度の発掘調査は、関係者間の協議に基づき、下東西遺跡（当時は北原地域）を含む鳥羽Ⅰ・国分寺中間地域Ⅰ・国分寺中間地域Ⅱ・鎌倉・大釜遺跡の5遺跡、遺跡の性格を把握するための試掘調査を鳥羽Ⅱ・後田（帥A）・帥B遺跡の3遺跡について実施するところとなった。

昭和55年4月、当事業団では、榛名山東南麓の末端付近、八幡川と午王頭川にはさまれた低台地上に立地する下東西遺跡の性格を把握するため、詳細分布調査を行った。その結果、群馬郡群馬町大字北原に所在する八幡川南側の低台地、前橋市青梨子町に所在する八幡川北側の旧河道に分断された小台地、その北側に広がる低台地の3地区に土師器破片の分布が認められ、遺跡の範囲も北側に110mほど拡張された。

本発掘調査は、分布調査の検討を踏まえ、遺跡地北側の台地から実施することとし、昭和55年5月から同年10月にわたる調査に入った。調査対象面積は八幡川旧河道から台地を東西に走る農道までの、約5,000㎡ほどであるが、関越自動車道センターラインの東側部分の未承諾地を除く、約2,000㎡の調査から着手した。

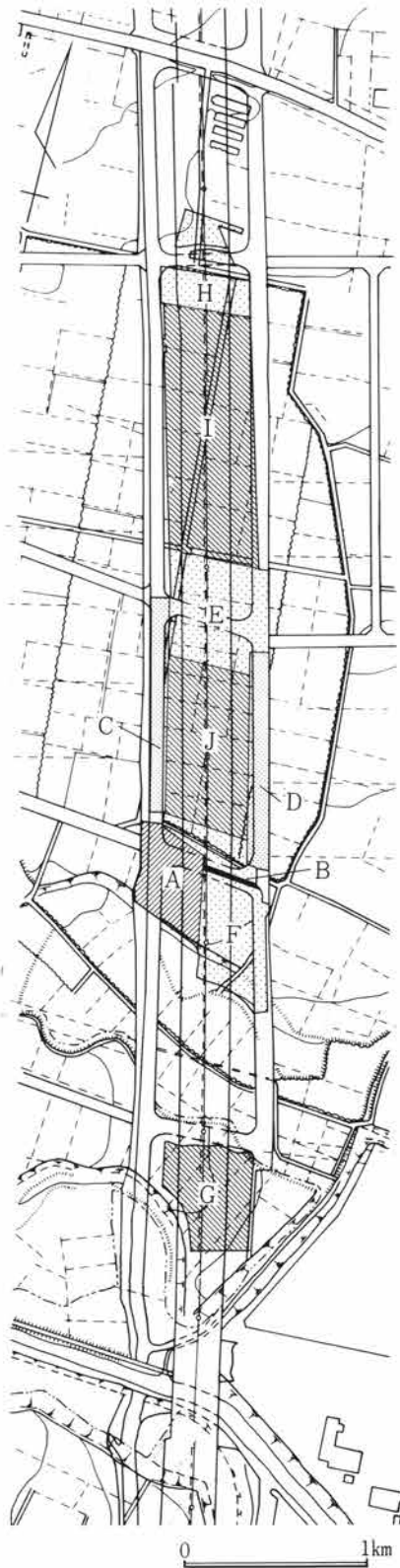
第1節 調査に至る経過



下東西遺跡位置図

0 1 : 200,000 10km

第2節 調査の経過



調査区分図

下東西遺跡の発掘調査は、1980年度から1983年度にかけて3期間に分割して実施された。

第1次調査(調査区分図A地区)は、群馬郡群馬町北原から前橋市青梨子町にいたる遺跡範囲の内、用地買収の済んだ前橋市青梨子町地内の1,872m²を対象に1980年5月19日から10月28日にかけて実施した。その後、用地買収の未了や他遺跡の優先等により、調査は中断された。

第2次調査(B)は、前橋市によって以前より実施されていた土地改良事業の一部工事として関越自動車道を横断する形で本遺跡内に水道管が埋設されることになり、1972年6月21日から7月6日にかけて巾1.8m、全長37m、面積67m²の調査を実施した。

1982年度より本遺跡の内で一括に取り扱かれていた八幡川以南の群馬町北原地内の21,150m²の調査範囲が群馬町教育委員会によって実施されることになった。

第3次調査は、1983年2月7日から1984年3月31日にかけて実施された。調査は、関越自動車道の1985年秋の開通のため建設工事と平行して実施され、日本道路公団側の要請により工事に必要な箇所と工事期間のかかる地点を優先して実施することになり、調査地区区分図のように8ブロックに分割して実施された。当初調査順は、西側道地区、東側道地区、カルバート・ボックス(以後C・Bと略す)地区、本線地区の順であったが、遺跡の広がり北側にみられるため、範囲確認のためトレンチ調査を実施し、北側に約180m、面積7,934m²を追加した。各調査地区の期間は、下記のとおりである。

西側道地区	(C)	面積1,052m ²	'83年2月7日～3月30日
東側道地区	(D)	面積1,492m ²	2月26日～7月23日
範囲確認トレンチ調査			5月12日～5月19日
No.8 C・B地区	(E)	面積2,713m ²	5月23日～7月29日
No.7 C・B地区	(F)	面積3,083m ²	6月8日～10月11日
E区(本線)	(G)	面積2,427m ²	8月5日～10月12日
No.9 C・B地区	(H)	面積1,532m ²	9月6日～11月11日
H・I地区(本線)	(I)	面積6,402m ²	10月18日～12月27日
G・H地区(本線)	(J)	面積3,724m ²	11月26日～'84年3月5日

以上のとおりで総面積は、22,423m²である。

第1次～第3次調査までの総面積は、24,362m²である。

第3節 調査の方法

1. 調査区の設定

下東西遺跡の発掘調査は、1985年度の調査開始当初では前述のように群馬町教育委員会で調査を実施した北原遺跡をも調査対象範囲に含んでいたため、調査範囲の全長は、約600mに及んだ。調査区の設定にあたっては、前橋インター・チェンジ以北の発掘調査では、今まで各遺跡の調査ごとに設定していた調査区の設定方法を統一した方法で設定することとなった。

その内容は、次のような事項である。1、グリッドの最小単位は、2m四方とする。2、調査区の設定は座標軸の第2象限にあてはめ、関越自動車道を横断する方向をX軸とし、関越自動車道を東京側から見て新潟方面に向う方向をY軸とする。3、グリッドの呼称については、基準になる点を00A-00と称し、その点から

X・Y軸の各方向での2m四方を00A-00グリッドとする。また、アルファベットの前の数字は、X軸方向を指し、その数値は、無限大に増大していくこととする。アルファベットとその後の数値は、Y軸方向を指し、A-00から順次数値が増大し、Y軸方向へ100mごとにアルファベットもA・B・C順に変化させ、各100mの内をA区・B区・C区として取り扱うこととする。すなわち、A-00よりY軸方向へ100mの地点は、A-50ではなくB-00とする。4、関越自動車道の利根川以南の前橋市・群馬町・吉岡村・渋川市の調査は、他の遺跡との接近がみられる。例えば、鳥羽遺跡では、上野国府城と上野国分僧寺・尼寺中間地域では、国分僧寺・国分尼寺と接近していることなどから国家座標に調査区を合せて設定する。

下東西遺跡のあたりでは、関越自動車道は、西へ約13°ほど傾いて設計されているが、上記の事項に添って調査区を設定した。基準点である00A-00は、国家座標系第IX系（IX系の原点は、北緯36°・東経139°50'である。） $X = +45,100$ 、 $Y = -72,300$ である。

下東西遺跡の調査範囲は、東端58E-24グリッド、西端148J-22グリッド、南端75E-19グリッド、北端145J-22グリッドである。



調査区設定図

0 2.5km

2. 基本的土層

下東西遺跡では、地質学的な土層分析をおこなっていないため詳細についての究言は不可能であるが、調査を通して確認された土層については、概略ではあるが下記のとおりである。

本遺跡内の土層は、一定化しておらず各地点によって多少のばらつきがみられるが、大旨下記のとおりである。

第I層 暗褐色土 現在の耕作土で割合いサラサラしており砂質に近い。地表面より20～50cmほどの堆積である。

第II層 黒褐色土 浅間“B”降下スコリア・軽石が混じり、多少の粘性がみられる。

第III層 黒褐色土 浅間“C”降下軽石が混じり、粘性がある。

第IV層 黒褐色土 夾雑物は、ほとんどみられない。下位は淡い色調を呈す。粘性は強い。第IV層は、縄文時代の包含層である。

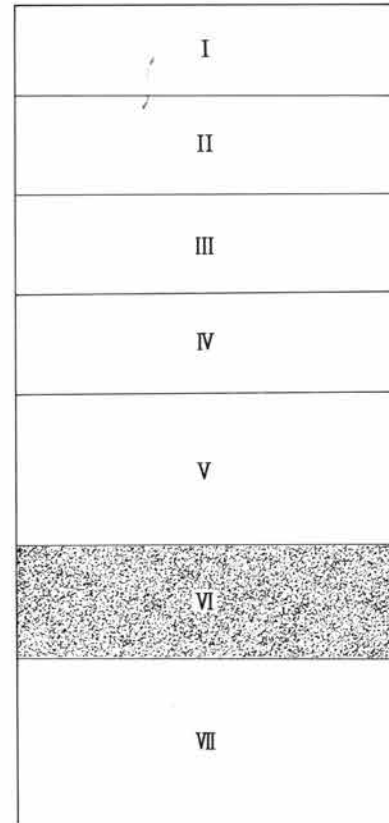
第V層 淡黄褐色土、褐色砂礫、褐色砂
第V層は、水成堆積によるローム土、砂礫、砂の互層である。堆積の順序は、地点によって種々みられ、ローム土、砂礫が何層にも堆積する地点もあれば、ローム土だけであったり、砂礫だけの地点がみられる。

第VI層 黒色土 水成堆積によるもので夾雑物は、みられない。第VI層は、E区では全く確認されなかった。Na7C・B地区以北でも第VI層のみられない地点がある。

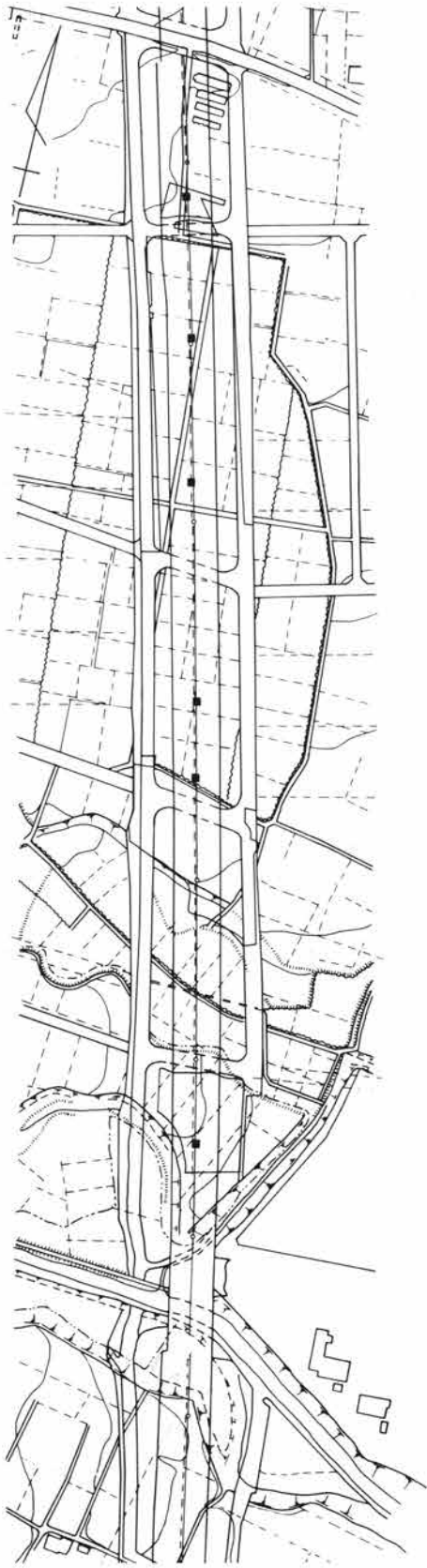
第VII層 黄白色土 灰色砂礫、灰色砂
第VII層も第V層と同様で、水成堆積のローム土、砂礫、砂の互層。ローム土の堆積は、本遺跡の北側の地区では明確に堆積しているが、E区では、灰色砂が厚く堆積しておりローム土の堆積は、みられなかった。

下東西遺跡の一般的な土層は、上記のとおりであるが、第I層から第IV層までは、遺跡地全域でみられる。本遺跡の確認面は、大部分の地区では第III層中であるが、一部の遺構は、第V層上面で確認された。第II層・第III層中に混じる浅間“B”降下スコリア・軽石、浅間“C”降下軽石の純層は、E区のS J 124の覆土で浅間“C”降下軽石が確認されただけである。またS J 124からは、榛名二ツ岳降下火山灰が確認された。

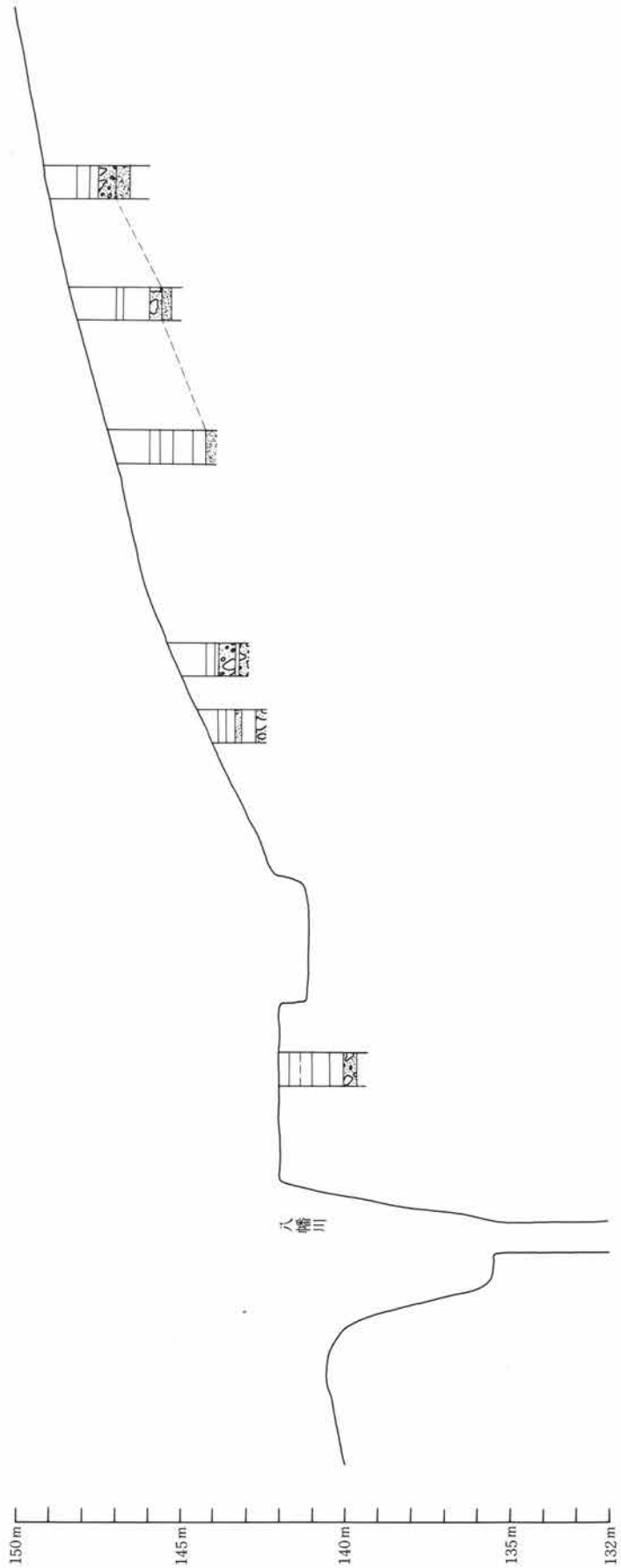
第V層以下は、前橋台地を形成する褐色火山灰シルト層（水成上部ローム層）に相当すると推定され、第VI層の黒色土は、褐色火山灰シルト層中の前橋泥炭層に比定されると考えられる。



基本土層模式図



遺跡地の地質図



第2章 立地・環境

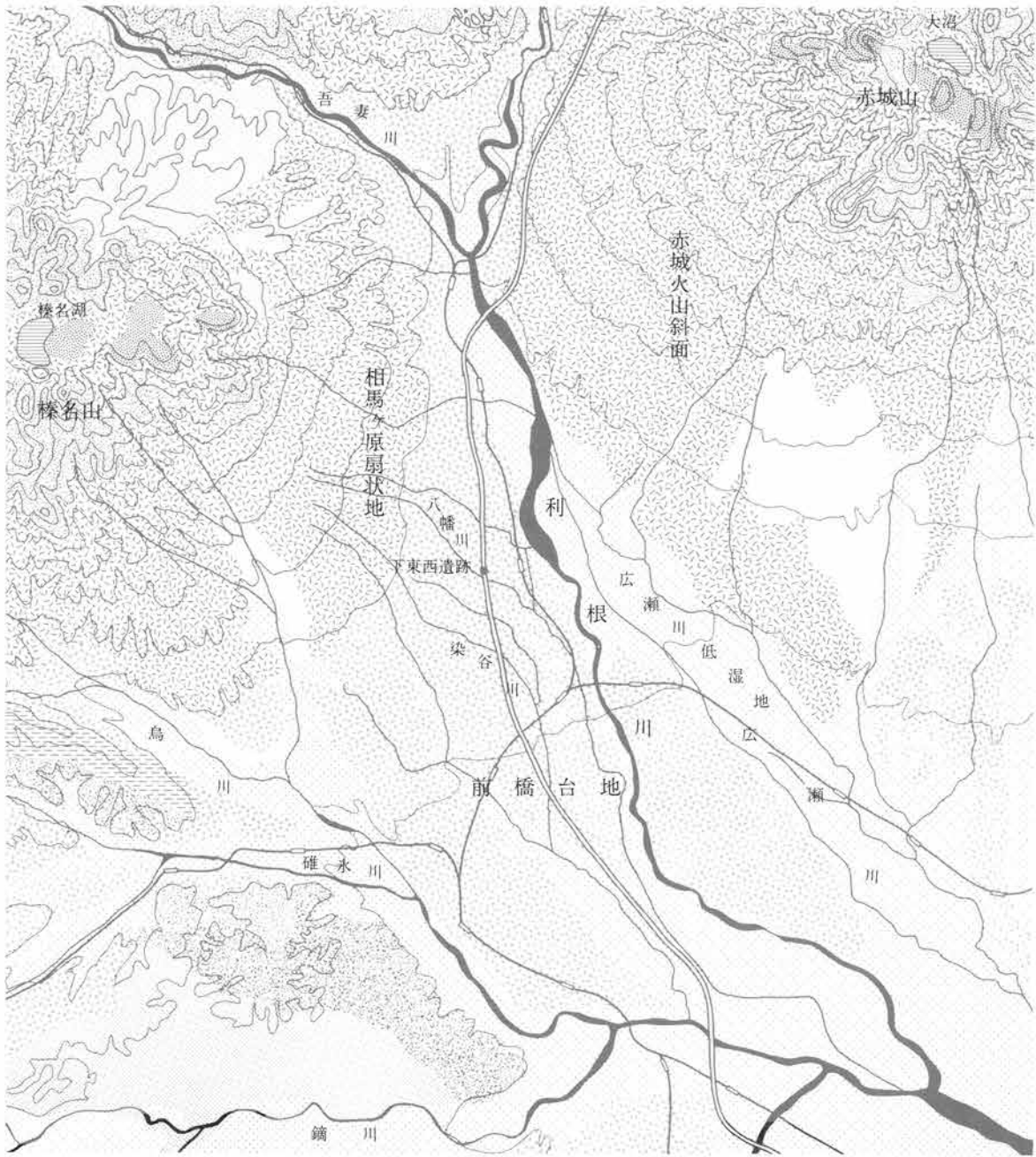
第1節 立地について

下東西遺跡は、前橋市の県庁・市役所のある中心部より西北約4kmのところの位置し、前橋市青梨子町、群馬郡群馬町字北原に所在する。当遺跡の東南部は、区画整理がすすみ、卸業を中心とした商業化や弱電・食品加工を中心とした工業化が進み、以前の面影を失っている。また、遺跡の東側100m付近まで工場・倉庫、個人住宅が建ち並び様相を変えつつある。しかし、西側は、圃場整備によって一部は水田化しているが、多くは桑・野菜の畑地で昔からの田園風景を残している。

下東西遺跡の所在する地域は、前橋台地と相馬ヶ原扇状地とが交錯する地域に立地する。遺跡地の標高は、142～148mで西北から東南にかけての緩やかな傾斜地である。当遺跡の東側1.5kmを流れる利根川は、周辺の山々から中小河川を無数に集め、日本一の流域面積をもち古くから坂東太郎と称されている。榛名山麓からも平沢川・滝沢川・午王頭川・八幡川・牛池川・染谷川などをはじめとする河川が台地を細長く開析し流れている。当遺跡も榛名山南麓の富士見峠付近の標高650～700mあたりに源を発する午王頭川と八幡川にはさまれた台地上に立地する。両河川は、相馬ヶ原扇状地を開析し、巾400～1500mの台地を形成する。午王頭川は、前橋市総社町の元景寺北方で、利根川に合流する。八幡川は、前橋市総社町大字屋敷で天狗岩用水と合流し、滝川と名称を変え、佐波郡玉村町川井で烏川と合流する。当遺跡の南端は、八幡川と接しており、遺跡の近辺では、八幡川の開析はすすみ、比高差が4m以上の崖を形成している。

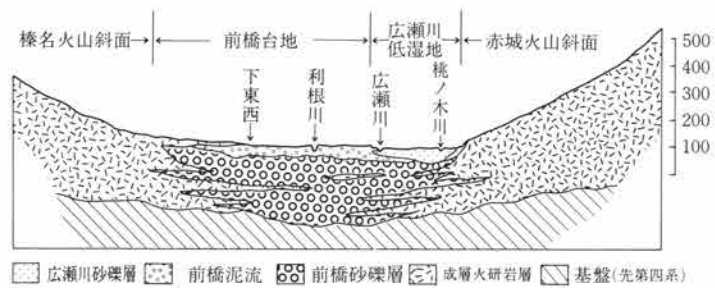
午王頭川や八幡川の流路を占める相馬ヶ原扇状地は、標高600m付近を扇頂とし、扇端部は標高110m付近に達しており、北から渋川市・吉岡村・箕郷町・群馬町・前橋市に広がっており、扇端では前橋台地と交錯している。相馬ヶ原扇状地は、標高150m付近より上部では80/1000程の傾斜で、標高150mから前橋台地にかけては20/1000と平坦に近い傾斜である。扇状地の形成は、河川によるものではなく凝灰角礫岩の上ののる火山灰や砂礫の堆積によって構成されており、扇端にあたる陣場付近にみられる比高10m前後の瘤状の丘は、陣場泥流丘群(陣場熱雲)、その堆積物は、陣場泥流堆積物と呼ばれ、角閃石安山岩で構成されており、相馬山を構成する岩石と類似していることから榛名山・相馬山の火山活動の時代に降下あるいは斜面を流れ下った堆積物によって形成されたものと考えられている。また清里・長久保古墳群の内には、陣場泥流丘を利用した山寄せ式古墳がみられる。

前橋台地は、東は16世紀代まで利根川の河道と氾濫源であった広瀬川低地帯から西南は高崎市の烏川にかけてと南東は玉村にかけての広範囲にわたる台地面である。前橋台地は、若干の起伏はみられるもののほぼ平坦である。台地の構成は、上部から表土(黒土)、褐色火山灰質シルト層(水成上部ローム層)、火山泥流堆積物(前橋泥流堆積物)、砂礫層(前橋砂礫層)からなり、その下層は基盤(先第四系)となる。褐色火山灰質シルト層のなかには、前橋泥炭層と呼ばれる泥炭層がみられ、層中の埋木による放射性炭素(C^{14})年代の測定によれば、 $13,130 \pm 230 B \cdot P$ という数値が報告されており、この年代は、洪積世末の最後の氷期(ウルム氷期)の最盛期に相当する。なお、前橋泥流堆積物層中の木片からは、 $24,000 \pm 650 B \cdot P$ という数値が報告されており、洪積世後期にあたる。前橋台地の形成は、洪積世後期におこった大規模な火山泥流により、堆積したものと推定される。その給源は、浅間火山であろうとされているが、断定されるに至っていない。この火山泥流によってそれ以前の砂礫層を構成していた古期扇状地面の凹凸が埋めならされ、かなり平坦な



下東西遺跡近辺の地質図(群馬県地質図より)

0 20km



模式的地質図断面図(前橋市史より)

第2章 立地・環境

地形面（前橋台地原面）が出現したため、それ以前の排水系が消失し、沼沢のある湿潤地があらわれ、その上を火山灰シルト粘土、上部ロームが覆っている。このようにして前橋泥炭層を含む水成上部ローム層は形成された。

本遺跡は、前述のように相馬ヶ原扇状地と前橋台地の交錯する地域でも前橋台地よりに立地し、土層確認調査のためトレンチによると前橋泥炭層の存在する地点とない地点がみられる。

また、遺跡の南よりのE区とNo.7 C・B調査区の間には、開析谷が形成されている。この谷は、八幡川と東西堀の合流する地点の東150mの地点から西北西にかけて約700mみられ、八幡川の旧河道と考えられる。それが、榛名山の火山泥流等によって河道を現在の流れに移したものと考えられる。また、現在でも周辺の湧水は、この谷に集まり水田として利用されている。

テフラについて

下東西遺跡では、第1章3節2の基本土層のなかで述べたように浅間“B”降下スコリア・軽石、浅間“C”降下軽石、榛名二ツ岳降下火山灰が確認されているが、周辺の地域での沖積土中からは、下記の「黒土中のテフラ層について」の表のようなテフラ層の堆積もみられる。

本遺跡で確認された各テフラ層について概略を述べると次のようである。

浅間“B”降下スコリア・軽石層、“B”降下スコリア・軽石は、淡灰褐色の軽石粒と黒色～暗灰色のスコリア粒からなり、本遺跡周辺では、粗砂粒状を呈す。降下年代は、現在では『中右記』による1108年（天仁元年）の年代が相当すると考えられる。

浅間“C”降下軽石層、“C”降下スコリアは、灰褐色～淡褐色を呈し、きわめて発泡のよい軽石である。降下年代は、弥生後期の住居を覆っていることや古式古墳である前橋天神山古墳の積土直下にみられることから4世紀前半と推定されている。

榛名二ツ岳降下火山灰層、FAは、淡黄色～淡橙色を呈し、全体としては粒径2mm以下の物質からなっている。FA層は、多数の降下ユニットからなり、場所によっては10数枚が確認されている。降下年代は、6世紀後半と推定される。

	軽石・火山灰名	略称	噴出源	噴出年代	適要
完 新 世 層	浅間山“A”降下軽石層	A	浅間火山（前掛山）	A. D. 1983年（天明三年）	II層中に混在
	“B”	B	浅間火山（前掛山）	A. D. 1108年（天仁元年）	
	黒 ニッ岳第2軽石流堆積物	F P F-2	榛名火山（二ツ岳）	7世紀初頭	
	ニッ岳降下軽石層	F P		6世紀中～後期	
	土 ニッ岳第1軽石流堆積物	F P F-1			
ニッ岳降下火山灰層	FA			S J 124で純層確認	
層	浅間“C”降下軽石層	C	浅間火山（前掛山）	4世紀前半	S J 124で純層確認

黒土層中のテフラについて 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナルNo.157』 1979年より

参考文献

- 森山昭雄 「榛名火山東・南山麓の地形」『地理学報告第36・37合併号』（栗原光政先生退官記念号）愛知教育大学地理学会1971年
 新井房夫 「自然」『前橋市史 第1巻』前橋市教育委員会 1971年
 新井房夫 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナルNo.157』 1979年
 木崎喜雄・野村 哲・中島啓治 「群馬のおいちをたずねて（上）・（下）」上毛新聞社出版局 1977年
 依田治雄 「自然環境の特色」『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 1986年

第2節 周辺遺跡について

下東西遺跡の周辺は、上野国府跡（82）、上野国分僧寺跡（83）、国分尼寺跡（84）、山王廃寺跡（81）、総社古墳群（60～72）等周知の遺跡の存在から古代上野国にあっては中枢地域であり、その中に位置している。以前より多くの遺跡の存在は知られていたが、近年の関越自動車道建設、上越新幹線建設、区画整理、圃場整備等に伴う発掘調査の増加によって、古代の様相の一端や新たな事実が多く発見されている。特に王山古墳（70）、日高遺跡（3）の水田跡、鳥羽遺跡（6）の神社跡、三ツ寺III遺跡（18）の豪族館跡等の新発見が見られる。周辺遺跡を時代別に概観してみると、旧石器時代は、近年の発掘調査によって利根地方、赤城山西麓・南麓の後田遺跡・善上遺跡（利根郡月夜野町）、中畦・諏訪西遺跡・房谷戸遺跡（勢多郡赤城村）、下触牛伏遺跡（佐波郡赤堀町）等が知られているが、下東西遺跡周辺では、現在まで検出されていない。

縄文時代では、周辺遺跡でも土器片・石器等は出土しているが、遺構が検出されている遺跡は少ない。その中でも上野国分僧寺・尼寺中間地域（7）では前期諸磯C式期の竪穴住居1軒、加曾利E2～3式期の竪穴住居35軒、清里・長久保遺跡（53）では前期～後期の竪穴住居11軒、包含層から多量の土器片、下新井遺跡では後期～晩期の配石墓・竪穴住居10軒・敷石遺構、三ツ寺II遺跡（19）では前期の竪穴住居2軒、保渡田II遺跡（172）では中期の敷石遺構1基、雨壺遺跡（227）では中期阿玉台式期の竪穴住居2軒、産業道路西遺跡（周辺遺跡地図（2）未記載、前橋市総社町所在）では後期の石囲い炉が検出されている。また、下東西遺跡の近隣では竪穴住居は検出されていないが、北原遺跡（9）では中期の加曾利E式期のピットと包含層から多量の土器片が検出・出土している。薬師前遺跡（24）ではピットと包含層から土器片が検出・出土している。周辺遺跡の縄文時代の様相を概観してみると以上のようなようであるが、ある程度の規模をもつ集落がみられる遺跡は、国分寺中間地域だけで他の遺跡は皆小規模のものである。

弥生時代では、群馬町西部、高崎市東部を中心に水田跡・集落跡が発掘調査によって検出されている。特に1977～78年に発掘調査がおこなわれた日高遺跡は、軽石上に残った足跡で話題になったが、谷水田・集落・方形周溝墓の墓域からなる一般集落のありかたを示している。日高遺跡の南に位置する新保遺跡（2）でも同様に集落・墓域がみられ、大溝からは多量の木器が出土している。上野国分僧寺・尼寺中間地域では後期の竪穴住居12軒、方形周溝墓2基が検出されている。清里・庚申塚遺跡（27）では、中期後半の環濠集落が検出されている。その他集落遺跡としては、融通寺遺跡（14）・熊野堂遺跡（15）・浜尻遺跡（233）がみられ、日高遺跡同様に浅間山C軽石に覆われた水田跡として熊野堂遺跡・御布呂遺跡（216）・芦田貝戸遺跡（218）・小八木遺跡（232）・同道遺跡（175）がみられる。弥生時代は、前時代の縄文時代に比較すると遺跡も遺構も多くみられるが、下東西遺跡の近隣では遺物の散布はみられるものの遺構はほとんどみられない。

古墳時代では、この地域も上毛野の他地域同様多くの古墳が存在する地域である。下東西遺跡の東に位置する総社古墳群には王山古墳・宝塔山古墳（65）・蛇穴山古墳（66）・愛宕山古墳（64）・総社二子山古墳（63）・遠見山古墳（67）等が存在する。王山古墳は、榛名山二ツ岳火山灰（FA）の上に構築されており、6世紀初めとされ、当初円墳を構築し後に前方部を構築していることが調査の結果明らかになっている。宝塔山古墳は、7世紀後半の方墳で石室は複室横穴式両袖型で、輝石安山岩と角閃石安山岩が使用されており、漆喰が塗布されている。玄室には脚部に格狭間をくり込んだ家形石棺が安置されており、仏教技術の影響を受けている。蛇穴山古墳は、8世紀初頭の古墳で県内でももっとも新しい。北には、長久保古墳群（53）・南下古墳群（104～108）等のほか多くの古墳が知られている。西では、保渡田古墳群がみられ、愛宕山古墳（213）・

第2章 立地・環境

八幡塚古墳(212)・薬師塚古墳(211)等が存在する。愛宕塚古墳・八幡塚古墳・薬師塚古墳は、5～6世紀にかけての前方後円墳で全長90～111mと大形のもので、三ツ寺I遺跡との関連が注目されている。集落では、上野国分僧寺・尼寺中間地域で前期と後期のものが検出されている。前期の竪穴住居は26軒ほどみられる。下東西遺跡の周辺では上野国分僧寺・尼寺中間地域のほか古墳時代の集落はみられないが、高崎市東部・群馬町西部では新保遺跡で前期、中尾遺跡(5)・大八木遺跡(229)・正観寺遺跡(231)・熊野堂遺跡・保渡田遺跡(21)で後期、引間遺跡で前期～後期の集落が検出されている。また三ツ寺遺跡では後期前葉の環濠をもつ豪族館跡がみつきり注目をあつめている。集落では、前期と後期のものは割合みられるが、中期のものは下東西遺跡と引間遺跡で僅かに検出されているが、山王廃寺跡南で多量の土器の散布がみられ、集落の存在がうかがえる。その他、御布呂遺跡・同道遺跡でFA・FPに芦田貝戸遺跡でFAに覆われた水田跡が検出されている。

歴史時代(奈良・平安時代)では、上野国府 上野国分僧寺・尼寺がこの地に設置され上野国の中核施設の周辺地域であるため多くの遺跡がみられる。特に関越自動車道(新潟線)に伴う発掘調査では、中尾遺跡約250軒、鳥羽遺跡約1000軒、上野国分僧寺・尼寺中間地域約1200軒、国分境遺跡(8)約130軒、北原遺跡約100軒、大久保A遺跡(91)約250軒と多数の竪穴住居が検出されている。また、新保遺跡では官衙的遺構、鳥羽遺跡では、神社跡やカマド材採掘跡が検出されている。下東西遺跡周辺では、柿ノ木遺跡(29)・中島遺跡(23)等で多くの竪穴住居が検出されており、中島遺跡では奈良三彩陶片の出土がみられる。

上野国府跡の範囲は、近藤義雄氏説・松島栄治氏説・川原嘉久治氏説等の諸説がみられ、部分的には発掘調査も行われているが確定には至っていない。上野国分僧寺は、史跡整備事業に伴う発掘調査が実施されておりその全貌が解りつつある。上野国分尼寺は、確認調査が実施されただけでその全貌は明らかではないが、講堂は調査が実施されている。山王廃寺は、白鳳期に建立され平安時代中期(7世紀後半～11世紀)まで存続した私寺であろうと考えられている。寺域は明らかでないが、伽藍配置は、塔・金堂が東西に並列し主軸方向が真北を向く。

中世には、下東西遺跡の近隣でも松田城跡(283)・青梨子砦跡(282)等の城跡がみられ、周辺には、総社長尾氏の居城であった蒼海城跡(290)、鳥羽館跡(291)、金尾城(中尾城)跡(292)がみられ、中世ではこの地域も乱世の様相を呈していたことが解る。城跡の他では、上野国分僧寺・尼寺中間地域で寺院跡と推定される溝・土塙墓等が検出され、中世遺物も多量に出土している。その他、北原遺跡では、五輪塔の出土はみられるが、遺構は検出されていない。松ノ木遺跡(24)では、地下式塚が検出されているが、遺物の出土はみられない。また、各遺跡において集落跡がみられないのは、今日の集落と同じ地域であるためと推定される。

下東西遺跡の周辺遺跡を概観してみると以上のようなようであるが、この地域は、古墳時代から遺跡の増加がみられ、歴史時代(奈良・平安時代)にもっとも繁栄がみられ、それに近い状態が中世まで続き、近世では農村の様相を呈し今日まで続く。



282. 青梨子砦跡

24. 栗師南遺跡

25. 松ノ木遺跡

23. 中島遺跡

26. 柳原遺跡

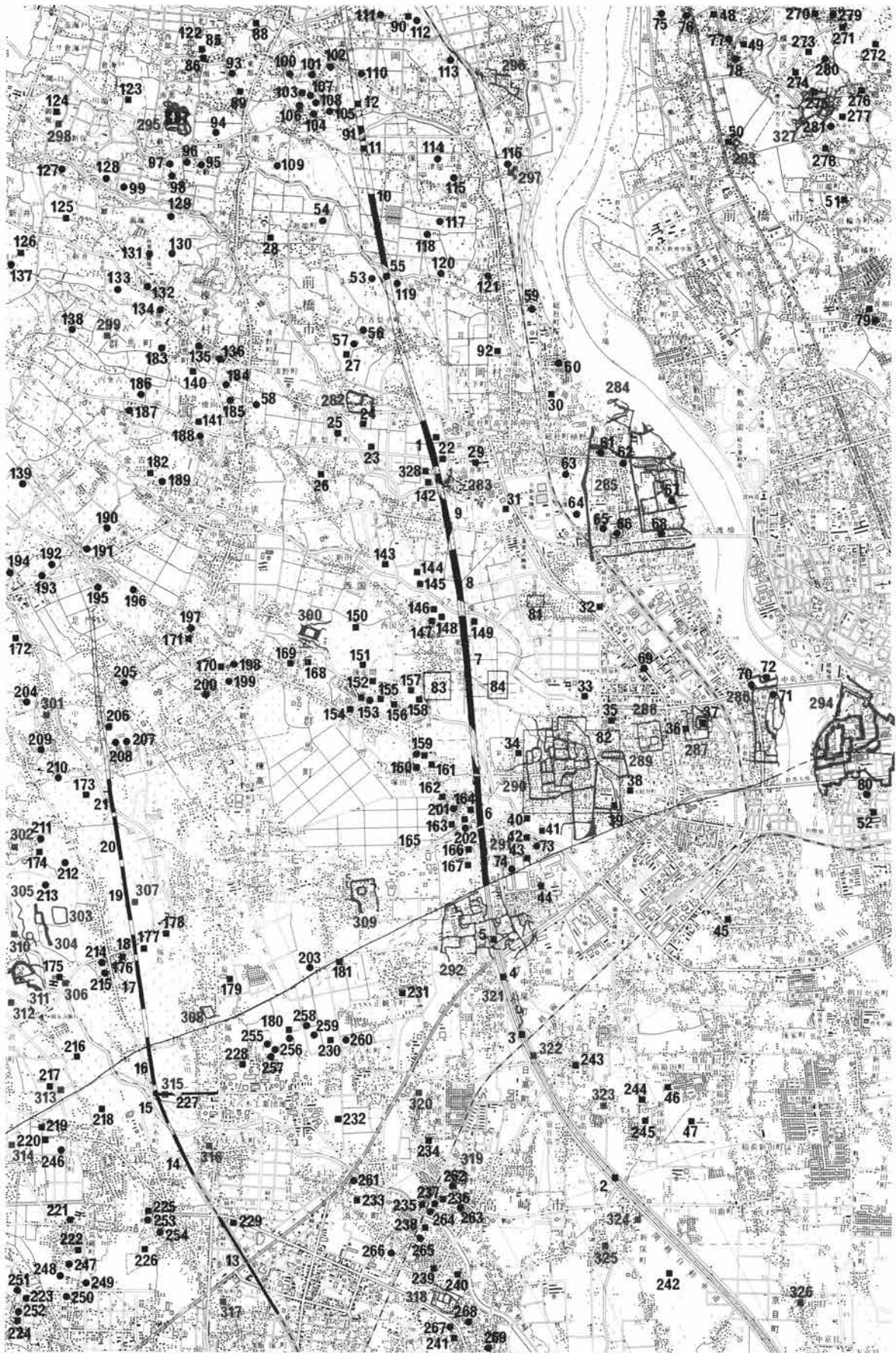
142. 北原遺跡

283. 檜田城跡

29. 柿ノ木遺跡

9. 北原遺跡

下東西遺跡周辺遺跡 地形図(1) (1:5,000)



周辺遺跡 1:50,000

第2章 立地・環境

遺跡 No.	遺跡 (所在地)	遺跡の概要	文献
1	下東西遺跡 (前橋市青梨子町、群馬郡群馬町北原)	本報告書参照。前橋市教育委員会で東側を調査、下東西遺跡H・L・M区(遺跡No22)。	
2	新保遺跡 (高崎市新保田中町)	弥生時代から中世までの大規模な集落遺跡である。住居跡、方・円形周溝墓群、水田跡、それらに伴う水路、小河川などが発見された。又、大量の木製品が出土した。	一部1986年に報告書刊行
3	日高遺跡 (高崎市新保田中町)	弥生時代の水田跡、方形周溝墓3基、土壇2基、及び平安時代の水田跡等を検出した。関越道に伴う調査を県教委、ほ場整備事業によるものを高崎市教委で行なった。市教委の1978年度調査では区画された条里制水田を検出した。	『日高遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 『日高遺跡(I)』高崎市教育委員会 1979 『日高遺跡(II)』高崎市教育委員会 1980
4	吹屋遺跡 (高崎市中尾町)	浅間B降下軽石層下の平安時代水田跡と中世の溝が検出された。同時に万願寺南の古道調査も行なわれた。	『元島名B・吹屋遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
5	中尾遺跡 (高崎市中尾町)	奈良・平安時代の集落、その多くは竪穴住居で掘立柱建物は僅かである。他に土壇、井戸、溝、及び中世の中尾城に関係すると思われる堀跡が検出された。	『中尾』(遺構篇) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
6	鳥羽遺跡 (前橋市鳥羽町・元総社町、群馬郡群馬町稲荷台・塚田)	古墳時代から江戸時代の集落跡、奈良時代から平安時代の集落、鍛冶・神社跡と推定される大型掘立柱建物・墓などを検出した。	『年報1～3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982～1984
7	上野国分僧寺・国分尼寺中間地域 (群馬郡群馬町東国分・前橋市元総社町)	縄文時代中期、弥生時代から古墳時代前期、古墳時代後期から中世にかけての集落遺跡。調査面積58,000㎡におよび竪穴住居1300軒、土壇200基、溝多数が検出された。	『年報1～3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982～1984
8	国分境遺跡 (群馬郡群馬町北原)	古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡。竪穴住居150軒、溝、井戸、土壇などが検出された。なお、県内初の地下式横穴墓を検出した。	『年報1～3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982～1984
9	北原遺跡 (群馬郡群馬町北原)	古墳時代の水田跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土壇。中世の溝等が検出された。	『北原遺跡』群馬町教育委員会 1986
10	七日市遺跡 (北群馬郡吉岡村大久保七日市)	奈良時代の住居跡3軒、中世～近世の溝1条を検出した。	『年報2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
11	女塚遺跡 (北群馬郡吉岡村大久保)	古墳時代の溝、奈良・平安時代の住居跡を検出。	『年報3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
12	大久保B遺跡 (北群馬郡吉岡村大久保宮・十石塚)	奈良・平安時代の住居跡6軒、掘立柱建物跡、さらにB軽石に覆われた畝状遺構。中・近世の井戸跡、溝等を検出した。	『年報2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
13	下小鳥遺跡 (高崎市問屋町西、大八木町下小鳥町)	弥生時代から平安時代の住居跡、掘立柱跡、溝、井戸、さらにB軽石下より水田跡、溝、畦状遺構などを検出した。R17号以北の両側は、高崎市教委により、「大八木水田遺跡」として調査されている。	『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報I』群馬県教育委員会 1973 『年報3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
14	融通寺遺跡 (高崎市大八木町融通寺他)	弥生時代の住居跡、古墳時代から平安時代の住居跡、掘立柱建物跡、水田・畝跡、溝等。室町時代の土壇墓を検出した。	『年報2、3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983、1984
15	熊野堂遺跡・第II地区 (高崎市大八木町熊野堂・下熊野堂)	弥生時代後期から平安時代の住居跡、浅間C降下軽石層下、ニッ岳降下火山灰層下の水田遺構、小型前方後円墳、その他掘立柱建物跡、溝、土壇等検出された。	『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報II、V、VI』群馬県教育委員会1975、79、80 『年報1、2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982、83

第2節 周辺遺跡について

遺跡No	遺跡名(所在地)	遺跡の概要	文献
16	熊野堂遺跡・第Ⅰ地区 (群馬郡群馬町井出東下井出福島熊野堂)	縄文時代から平安時代にかけての集落跡である。竪穴住居跡掘立柱建物跡、土坑、井戸、溝等を検出した。さらにF A、C軽石により、埋没したサク状遺構の発見は県内初めてであり、畠跡と推定される。又、東山道と思われる道路状遺構も確認した。	『年報1、2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982、1983
17	井出村東遺跡 (群馬郡群馬町井出)	弥生時代後期から中近世までの遺構が多く検出された。住居跡、掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝、畠、B軽石層に埋もれた水田跡、さらに火葬土坑、地下式横穴墓などを発掘調査した。	『井出村東遺跡』群馬町井出村東遺跡調査会 1983
18	三ツ寺Ⅰ遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺藤塚道上・西原道・井出村東)	古墳時代の豪族の館跡、濠、柱列、掘立柱建物、溝、石敷遺構、竪穴住居等を検出した。又、B軽石により埋没した水田跡も確認した。	『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 下城 正・女屋和志雄・新井順二 『群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡調査概要』『考古学雑誌』第67巻第4号 1982 『年報1、2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982、1983
19	三ツ寺Ⅱ遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺西原道他)	縄文時代から平安時代の集落、古墳時代の居館の濠、他にB軽石下に水田跡。更にその下から井戸、溝、石敷、石垣等を検出した。同時に木簡、墨書、刻書土器が出土した。	『年報1』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
20	三ツ寺Ⅲ遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺鍛冶街道他)	縄文時代の遺構、古墳時代後期と平安時代の住居跡、及び道路状遺構を検出した。	『三ツ寺Ⅲ・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
21	保渡田遺跡 (群馬郡群馬町保渡田)	古墳時代後期から平安時代の住居跡と掘立柱建物からなる集落遺跡である。他に溝、土坑等を検出した。	『三ツ寺Ⅲ・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
22	下東西遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町下東西)	奈良・平安時代の住居跡、溝等検出。なお関越道下東西遺跡の東側に位置する。	『清里南部群Ⅲ』前橋市教育委員会 1980
23	中島遺跡 (前橋市青梨子町中島・中原)	奈良・平安時代から中世以降にわたる住居跡及その他の遺構を検出。二彩陶器、風字硯、円面硯が出土した。	『中島遺跡発掘調査概報』前橋市教育委員会 1980
24	薬師前遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町薬師前)	縄文時代から江戸時代までの遺構。ピット、地下式土坑、溝等を検出した。なお平安時代の住居跡から鉛釉陶器、硯、墨書土器、巡方などが出土した。	『富田遺跡群・西大室遺跡・清里南部遺跡群』前橋市教育委員会 1980
25	松ノ木遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町松ノ木)	平安時代の住居跡、溝、近世以降の土坑等を検出した。	『清里南部遺跡群Ⅲ』前橋市教育委員会 1980
26	柳原遺跡(清里南部遺跡群) (前橋市青梨子町柳原)	住居跡と溝を検出した。	『清里南部遺跡群Ⅲ』前橋市教育委員会 1980
27	清里・庚申塚遺跡 (前橋市上青梨子町)	弥生時代中期後半の環濠集落を中心とし、他に平安時代の住居跡、井戸、溝、土坑などを検出した。	『清里・庚申塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
28	清里・陣場遺跡 (前橋市池端町、北群馬郡吉岡村陣場)	奈良・平安時代の住居跡、溝、井戸等の検出と大量の灰釉・緑釉陶器を出土した。	『清里・陣場遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
29	柿木遺跡 (前橋市高井町)	縄文・弥生時代の土器片、奈良・平安時代の住居跡、及び中近世の土坑などが検出された。	『柿木遺跡』前橋市教育委員会 1984
30	桜ヶ丘遺跡 (前橋市総社町植野)	C軽石下より弥生時代樽期の住居跡を検出した。	尾崎喜左雄『第二編 古代上 第一章 古代人の生活』『前橋市史』前橋市教育委員会 1971

第2章 立地・環境

遺跡 No.	遺 跡 在 名 地	遺 跡 の 概 要	文 献
31	八幡川遺跡 (前橋市総社町高井観音鍛冶)	多量の土師、須恵器片にまじって施釉陶器の破片がみられる	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
32	昌楽寺廻村東遺跡 (前橋市総社町総社昌楽寺廻村東)	建物遺構と推定される柱痕を検出。	尾崎喜左雄「第三編 古代下 第一章 国司政治」『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
33	散布地 (前橋市元総社町)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁 1977
34	草作遺跡 (前橋市元総社町)	縄文・奈良・平安時代の住居跡、中近世の井戸を検出した。他に古墳時代の埴輪・方頭太刀柄頭が出土。	『年報4』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
35	閑泉樋遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の住居跡、奈良・平安時代及び中世の溝。	『年報2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
36	散布地 (前橋市大友町雲雀海道)	広範囲に土師器・須恵器の散布がみられる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
37	長尾氏遺跡 (前橋市大友町村内)	長尾山長見寺旧境内、現在の長見寺前の水田から先年須恵器の骨蔵器が発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
38	元総社明神遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代から平安時代の住居跡、溝、土壇、井戸、中世の溝等検出、又旧石器・縄文・弥生時代の遺物が出土している。	『元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅲ』前橋市教育委員会 1982～1984
39	元総社小学校校庭遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の住居跡と掘立柱建築遺構が検出されている。	尾崎喜左雄「第三編 古代下 第一章 国司政治」『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
40	散布地 (前橋市元総社町)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁 1977
41	染谷川遺跡 (前橋市元総社町)	古墳時代の土師器片が散布。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
42	散布地 (前橋市鳥羽町)	土器と炉らしきものが三ヶ所発見され、住居跡の存在も確認された。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
43	散布地 (前橋市鳥羽町)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁 1977
44	早道遺跡A、B (前橋市鳥羽町)	土師器片が散布。中でも2個体分の壺形土器の口縁部が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
45	赤鳥遺跡 (前橋市古市町)	古墳時代の住居跡、土壇、溝、畝状遺構、中近世の溝を検出 奈良・平安時代の須恵器、瓦片が出土した。	『赤鳥遺跡』前橋市教育委員会 1985
46	箱田境遺跡 (前橋市前箱田町箱田境)	B軽石下の水田跡を検出、奈良・平安時代の土師・須恵器が出土した。	『年報4』群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団 1985
47	前箱田遺跡 (前橋市前箱田町)	B軽石層下から水田跡、溝状遺構、耕作状遺構が検出された	『前箱田遺跡』前橋市教育委員会 1982
48	千手堂遺跡 (前橋市田口町千手堂)	広範囲に石器と土器片が多量にみられる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
49	八幡遺跡 (前橋市田口町八幡甲)	縄文土器片、土師、須恵器の散布がみられる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺跡 (所在地)	遺跡の概要	文献
50	寄居遺跡 (前橋市関根町寄居)	利根川の旧河床と思われる地点に住居跡が検出された。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
51	諏訪遺跡 (前橋市日輪寺町諏訪)	縄文土器及び土師器が散布。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
52	歓禪順喜和尚経塚遺跡 (前橋市紅雲町)	江戸時代(正徳3年)の歓禪順喜和尚追善供養のための経塚	『年報2』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
53	長久保遺跡 (前橋市池端町、北群馬郡吉岡村大久保)	縄文時代前期から後期の住居跡11軒、土塚2基、土器だまりと平安時代の住居跡1軒、土塚墓1基の検出。又、主に陣場泥流の残丘を利用した6C. から7C. の円墳12基も調査された。	『清里・長久保遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
54	清里3号墳 (前橋市池端町神明宮)	北半分が円形の盛土を示し、埴輪片が認められる。径は30m程と推定される。南半分は神明宮の石段のため崩されている	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
55	青梨子古墳 (前橋市池端町)	墳丘径40cm、高さ3m、自然地形を利用した山寄古墳。長久保遺跡13号墳と同一である。	『年報1』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
56	池端古墳 (前橋市池端町池端)	小丘陵の高所に石室の用杭らしきものがあり、埋葬の施設を示すものと思われる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
57	庚申塚古墳1号・2号 (前橋市上青梨子町)	南北径12.7m、東西径12.6mの円墳、周堀は墳丘北西で幅1m、東で1.2m、両袖型の横穴式石室で自然石を用いた乱石積の石室。 径15.9mの円墳・墳丘は幅3.4m、深さ0.5m、西は幅3.8m、深さ0.2m程の「块状周堀」、両袖型の横穴式石室、自然石の乱石積石室。	『清里・長久保遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
58	諏訪古墳 (前橋市青梨子町諏訪廻)	諏訪神社が祀られている丘陵頂上社殿には、石室の石材らしきものが散在する。埴輪破片もみられる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
59	薬師塚古墳 (前橋市総社町植野)	墳丘は東半分と南一部が削りとられ、残存部分は南北17m、東西10mの円墳である。横穴式石室は浮石質紡垂状角閃石安山岩使用の石室。	尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
60	大神宮様古墳 (前橋市総社町植野)	墳丘は殆んど破壊され、盛土は北東部から西南部にかけて残っている。その中腹には、石室の石材らしきものがみられる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
61	稲荷山古墳 (前橋市総社町総社)	墳丘は大部分破壊され、横穴式石室の石材も一部露出。頂上部には、穂積稲荷が祀られている。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
62	大小路山古墳 (前橋市総社町総社栗島)	径20m、高さ2m程の円墳で頂上は平坦化されている。石塔や頂上部に散在する石、及び石片は石室に使用されたものと思われる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
63	総社二子山古墳 (前橋市総社町植野)	前方部、後円部の二ヶ所に両袖の横穴式石室をもち全長約90m。周濠は盾型で幅20m前後と推定される。前方部石室は自然石乱石積、後円部石室の天井石以外は角閃石安山岩の削石を使用している。なお両石室の構築年代には時差がみられる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」、『前橋市史』前橋市教育委員会 1971 『日本古文化研究所報告第4』日本古文化研究所 1935
64	愛岩山古墳 (前橋市総社町総社)	巨石を使用した横穴式両袖型石室をもつ円墳。石室内に凝灰岩製の家型石棺が安置、壁石は巨石の輝石安山岩を乱石積にしている。一部角閃石安山岩も認められる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」、『前橋市史』前橋市教育委員会 1971

第2章 立地・環境

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
65	宝塔山古墳 (前橋市総社町総社)	東西49m、南北54m、高さ12mの方墳である。南面に開口する複室の横穴式両袖型石室には、輝石安山岩と角閃石安山岩が使用され、漆喰が塗布されている。玄室には脚部が格狭間型の家型石棺が安置されている。終末期古墳の典型的なものである。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981『群馬総社古墳群』観光資源 保護財団 1977
66	蛇穴山古墳 (前橋市総社町総社)	墳丘東西43.4m、南北39.1mの古墳、石室は角閃石安山岩使用の截石切組積の横穴式両袖型石室。奥壁、左右壁、天井ともに一石づつの巨石で箱状に構成されている。羨道がなく直接前庭に至る。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章豪族の支配と古墳の築造」『前 橋市史』前橋市教育委員会 1971 『前橋市教育委員会調査報告書』 前橋市教育委員会 1976
67	遠見山古墳 (前橋市総社町総社粟島)	主軸の長さは約70mの前方後円墳。後円の東南部分は封土が流れ石室の位置を示す。墳丘南北には周濠の一部や基石が認められる。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員 会 1963
68	葉師様古墳 (前橋市総社町総社粟島)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
69	稲荷山古墳 (前橋市総社町稲荷塚)	墳丘はほとんど平坦化され、その中央部のみが径10数m、高さ2m程残っている。	『上毛古墳総覧』No1 群馬県 1938『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
70	王山古墳 (前橋市総社町総社)	全長75.6mの前方後円墳でF A上に構築されている。横穴式両袖型石室の長さは16.37mで県下最長。円墳として当初築造したものを後に前方後円墳に改修したものである。墳頂や基壇のあたりから、円筒・器財埴輪や、玉纏大刀が出土した。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981『群馬総社古墳群』観光資源 保護財団 1977
71	王山陪塚墓一 (前橋市総社町石倉)	墳丘は大部分崩され、その中心をわずかに残すのみである。都市計画区域のため1972年滅失。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
72	王山陪塚墓二 (前橋市総社町石倉)	王山古墳の北方約100mの地点に在る円墳。盛土は平坦化され周囲は削られ、現存する部分はその中心のみ。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
73	弥勒山古墳 (前橋市元総社町弥勒)	1924年発掘時は高さ8尺、径66尺の円墳で金環、刀等の出土が認められた。1964年時は墳丘はほとんど削り取られ、角閃石安山岩の削石による石室も、すでに破壊されている。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章豪族の支配と古墳の築造」『前 橋市史』前橋市教育委員会 1971
74	弥勒遺跡(墳墓) (前橋市鳥羽町弥勒山)	中世墳墓と思われる。地下約30cmの地点で自然石の割石が埋めてあり、その中に陶器片と板碑片が発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
75	冠木古墳群A (前橋市田口町鬼木)	8基の小円墳があり、その内1基は開口している。石材は安山岩、自然石である。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
76	冠木古墳群B (前橋市田口町鬼木)	径8m、高さ1.5m程の観音山古墳。他の2基はそれよりも小さい。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
77	古墳 (前橋市田口町岡市)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
78	南橋35号墳 (前橋市田口町八幡)	橋神社の頂上部にあり、封土は崩れ、頂上、中央部には石宮が祀られている。前庭には石室の石が露出している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
79	神明古墳 (前橋市青柳町神明)	墳丘はなく、横穴式石室部分が露出している。土器と直刀一振が出土した。付近一帯には、広範囲にわたり土器片が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺 跡 在 名 地 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
80	龍海院裏古墳 (前橋市紅雲町)	墳丘は半壊状態、長径南北16m、幅6.5m、高さ3.3m。石室の壁は自然石の乱石積で横穴式の性格を合わせもった竪穴式石室と認められる。現在はその痕跡なし。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 尾崎喜左雄「第二編 古代上 第二章 豪族の支配と古墳の築造」『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
81	山王廃寺跡 (前橋市総社町総社昌栄寺廻り)	伽藍の形態は不明だが瓦の散布状況は北は蚕糸試験場の周辺から西は旧国府村北原の付近、南は塔跡の南300～400mまで。山王塔跡は1928年9月19日、国指定史跡、塔心柱根巻石や寺城出土の緑釉水注は国指定重文になった。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
82	上野国府跡 (前橋市元総社町他)	国府跡については、いまだに決定的な遺構がみられない。	尾崎喜左雄「第三編 古代下 第一章 国司政治」『前橋市史』前橋市教育委員会 1971
83	上野国分僧寺跡 (群馬郡群馬町東国分村前・引間石堂)	東西・南北、約220mの方形の中に金堂、講堂、塔、南大門中・大門跡などが想定されている。礎石、瓦など多数散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』（西毛編）群馬県教育委員会 1971
84	上野国分尼寺跡 (前橋市元総社町小見、群馬郡群馬町国分)	金堂・講堂などの存在を確認。古瓦、土師・須恵器の破片が散布している。	『上野国分尼寺跡発掘調査報告』群馬県教育委員会 1971
85	散布地 (北群馬郡吉岡村北下諏訪台)	縄文時代から古墳時代に至る縄文・弥生土器、石器等の破片が南北200m、東西400mの範囲に散在している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
86	集落跡 (北群馬郡吉岡村北下山下)	旧三国街道西100mに囲炉裏跡及び直径3mの住居跡が発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
87	桃井城（大藪城）跡 (北群馬郡吉岡村南下大藪)	古墳が城址山頂付近（全壊）にあった。住居跡は午王頭川北に続く平地及び南傾斜地にみられる。円筒埴輪が1個出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
88	散布地 (北群馬郡吉岡村上野田大門河原)		『全国遺跡地図 群馬県』文化庁 1977
89	集落跡 (北群馬郡吉岡村小倉藤塚)	弥生式土器、土師器、矢筈、石器類が多数出土した。東西約300m、南北約150mの範囲。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
90	散布地 (北群馬郡吉岡村大久保頭梨子)	弥生式土器が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
91	大久保 A 遺跡 (北群馬郡吉岡村大久保宮前宮田)	古墳時代末から平安時代の住居跡、掘立柱跡、土壇、溝、及び鎌倉時代の道路状遺構を検出した。	『年報2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
92	散布地 (北群馬郡吉岡村大久保新田入口)	東西200m、南北150mにおよぶ地域に弥生式土器の破片等が点在している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
93	藤塚山古墳 (北群馬郡吉岡村北下藤塚)	前方部が東南にのびる前方後円墳、石室は破壊されている。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
94	古墳 (北群馬郡吉岡村南下長山)	墳丘の直径30m、高さ3.6m、石造の聖天祠がある。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971
95	古墳 (北群馬郡吉岡村南下小蓋)	墳丘の直径7m、玄室は消滅したが天井石は現存する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』（東毛編）群馬県教育委員会 1971

第2章 立地・環境

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
96	古墳 (北群馬郡吉岡村南下上八幡)	かつては円墳が4基あったが、現在は2基が残る。	『上毛古墳総覧』No.1 群馬県 1938 『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
97	古墳 (北群馬郡吉岡村南下上八幡)	A墳は径16m、高さ3mの円墳。玄室は半壊し巾2m、奥行4m。B墳の石室は完存し玄室入口付近に砂防の石積がある。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
98	古墳 (北群馬郡吉岡村南下上八幡)	直径14m、高さ3mの前方後円墳、羨道(埋没)巾0.7m、長さ1.5m、玄室巾1.4m、高さ1.7m、奥行2.7mである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
99	丸山古墳 (北群馬郡吉岡村南下丸山)	A墳は石室が完存し、その巾1.2m、高さ1.5m、奥行5m。B墳は南面に向いて石室は埋没しているが奥行は6m。いずれも自然の丘を利用した乱石積古墳である。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
100	古墳 (北群馬郡吉岡村南下鬼ヶ橋)	直径20m、高さ2.5m、丘頂南斜面に石室用の石が見られる。羨道は崩壊しているが玄室は残っているようである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
101	古墳 (北群馬郡吉岡村南下鬼ヶ橋 大林)	A墳は直径16m、高さ1m。B墳は直径12m、高さ1.5m。C墳は直径6m、高さ1m、いずれもわずかに残るのみである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
102	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保境 堀)	小丘南斜面に開口している。直径16m、高さ3m、天井石3枚を残す。玄室は完存し、巾1.5m、高さ1.6m、奥行2.2m。羨道巾0.85m、高さ0.7mである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
103	古墳 (北群馬郡吉岡村南下大林)	A墳は直径20m、高さ3.2m、玄室は完存する。B墳は玄室が完存し、墳丘、羨道はわずかに残る。C墳は直径16m、北半分に封土が残る。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
104	南下A号古墳 (北群馬郡吉岡村南下)	径約27mの二段構築の円墳、角閃石安山岩の截石を切組み積にした両袖型石室をもち、真南に開口する。壁面には漆喰が塗られている。7C末の築造と思われる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 『古墳めぐりハンドブック』 群 馬県立歴史博物館友の会 1986
105	南下B号古墳 (北群馬郡吉岡村南下)	直径約30mの円墳である。自然石を乱石積にした全長2.7mほどの両袖型石室をもつ。玄室上部はドーム状を成し、壁面には漆喰の痕跡がみられる。7C中～末の築造と思われる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 『古墳めぐりハンドブック』 群 馬県立歴史博物館友の会 1986
106	南下C号古墳 (北群馬郡吉岡村南下)	丘陵上に構築され、東に開口する自然石乱石積の横穴式袖無型石室である。6C中～末のものと思われる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 『清里・長久保遺跡』群馬県埋 藏文化財事業団 1986
107	南下D号古墳 (北群馬郡吉岡村南下)	山寄せ古墳で円墳である。南西に向って開口する自然石乱石積の横穴式両袖型石室をもつ、7C中の築造と思われる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 松本浩一、桜場一寿、右島和夫「截 石切組み横穴式石室における構築技 術上の諸問題 上」『群馬県史研究 11』 1980
108	南下E号古墳 (北群馬郡吉岡村南下)	一辺約17mの方墳、玄室の長さは3.74m程で截石切組みの両袖型石室である。玄門を備え、角閃石安山岩の截石でケンチ積に壁体を成す。壁面には赤色顔料で引かれた作業線が残る。又前庭の付設も推定される。7C末の築造と思われる。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981 『古墳めぐりハンドブック』 群 馬県立歴史博物館友の会 1986
109	古墳 (北群馬郡吉岡村南下三疋)		『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971
110	十石塚古墳 (北群馬郡吉岡村大久保)	直径12m、高さ4mの墳丘のみ残っている。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群 馬県教育委員会 1971

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No.	遺 跡 名 地 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
111	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保木戸)	A墳は直径12m、高さ1.5m、側壁のみ残存し高さ1.3mである。B墳は直径8m、高さ2m、玄室は完存し、高さ1.4m、巾1.2m、奥行2.2mである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
112	古墳 (北群馬郡吉岡村東原 頭梨子)	A墳は直径12m、高さ2m、石室は僅かに残存。B墳は直径14m、高さ2.3mの墳丘のみ。C墳は直径6m、高さ1.5mの墳丘のみ。D墳は直径20m、高さ2mの墳丘のみ。E墳は直径16m、高さ2.5mの墳丘と巾1.3m、高さ0.8m、奥行1.3mの石槨一部。H墳はなし。I墳は直径1.9m、高さ2.3mの墳丘が残る。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
113	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保長坂)	南向きの玄室側壁、巾1.7m、高さ1.3mのみ残存する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
114	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保三津屋)	南面開口の円墳で直径20m、高さ3.6m、玄室及び羨道が残っている。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
115	大日山古墳 (北群馬郡吉岡村大久保不動久保)	墳丘のみが残存する前方後円墳。南北300m、東西150mである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
116	瀬来古墳 (北群馬郡吉岡村漆原瀬来)	不詳	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
117	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保十二)	墳丘のみ残存する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
118	源平山古墳 (北群馬郡吉岡村大久保熊野)	南面に開口した円墳で、その径15m、高さ2.5m、玄室は完存し、羨道も一部を残す。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
119	大久保山古墳 (北群馬郡吉岡村大久保吉開戸)	直径12m、高さ2mの墳丘のみ残存する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
120	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保大松)	直径18m、高さ2mの墳丘が残る。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
121	古墳 (北群馬郡吉岡村大久保下町)	墳石のみが残存する乱石積の円墳。玄室巾1.6m、高さ1.0m、奥行2.7m。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
122	諏訪廃寺 (北群馬郡吉岡村北下諏訪台)	東西30m、南北20mの範囲に布目瓦を検出する。平安時代と思われる。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
123	倉海戸遺跡 (北群馬郡榛東村山子田倉海戸)	平安時代の小規模な集落である。住居跡、土坑、溝等検出した。	『倉海戸遺跡発掘調査概報』 榛東村教育委員会 1984
123	御堀遺跡 (北群馬郡榛東村山子田御堀)	奈良・平安時代の集落跡である。	『御堀遺跡発掘調査報告書』 榛東村教育委員会 1984
125	下新井遺跡 (北群馬郡榛東村新井)	F A下から縄文時代の配石墓、住居跡、敷石遺構、方形柱穴列を検出。更にF A上面から10Cの住居跡が検出された。	『新井第二地区遺跡群』 榛東村教育委員会 1985
126	堂塚遺跡 (北群馬郡榛東村新井堂塚)	平安時代の住居跡を検出した。	『御堀遺跡発掘調査報告書』 榛東村教育委員会 1984
127	古墳 (北群馬郡榛東村新井今井)	両袖型横穴式石室をもつ円墳、石室の長さ6m、玄室の長さ4.5m、玄室巾1.8m、玄室入口巾1.3mである。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971

第2章 立地・環境

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
128	庚申塚古墳 (北群馬郡榛東村山子田新保)	直径33m、高さ28mの円墳。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
129	雛子古墳群 (北群馬郡榛東村新井雛子)	榛東村39号墳は直径13.2mの円墳。南に開口し自然石乱石積の両袖型横穴式石室を有する。鉄器、耳環、馬具、歯等出土。北方の円墳は裏込めと天井石が一部露出し、南面開口の横穴式石室。北西の円墳は東面開口の袖無型横穴式石をもつ。	『榛東村39号墳(雛子遺跡)発掘調査報告書』 榛東村教育委員会 1985
130	長久保古墳群 (北群馬郡榛東村新井梨子木長久保)	7C.前後の前方後円墳2基と円墳20基。いずれも横穴式石室を有する。	『長久保古墳群発掘調査略報』日本窯業史研究所 1978
131	高塚古墳 (北群馬郡榛東村新井)	6C.末の前方後円墳、全長60m、後円部径36m、高さ7.0m。墳丘は二段築造で葺石を施している。両袖型横穴式石室を有し墳頂と基壇の縁には円筒列がめぐっていた。	『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
132	北原古墳群 (北群馬郡榛東村新井、北原長久保)	25基の古墳が散在する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
133	立畦古墳 (北群馬郡榛東村新井立畦)	6基の古墳が散在し、埴輪片が出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
134	柿の木坂古墳群 (北群馬郡榛東村新井)	現存するものは9基で、その内1基は開口しており、石室、覆土の保存がよい。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
135	いなり山古墳 (北群馬郡榛東村新井判塚)	全長63m、前方部の高さ4.3m、後円部の高さ6.6mの前方後円墳。現在は後円部のみ残る。円筒埴輪、直刀が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
136	観音山古墳 (北群馬郡榛東村新井判塚)	直径7m、高さ3.5mの円墳で開口しており、石室は完存している。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
137	天王山古墳 (北群馬郡榛東村新井堂塚)	直径40m、高さ3mの円墳。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
138	宮室古墳群 (北群馬郡榛東村広馬場宮室)	6基の円墳が散在する。	『上毛古墳総覧』No.1 群馬県 1983 『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
139	金井古墳群 (北群馬郡榛東村広馬場宮室)	古墳並びに古墳跡が15基散在する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
140	橋向遺跡 (群馬郡群馬町金古橋向内林)	縄文土器片(中期)が出土する。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
141	愛宕遺跡 (群馬郡群馬町金古愛宕)	古墳時代の土師器片が多数発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
142	北原遺跡 (群馬郡群馬町北原)	平安時代の集落跡、住居跡等検出。	『昭和55年度埋蔵文化財調査略報』群馬町教育委員会 1981
143	散布地 (群馬郡群馬町北原下屋敷)	縄文土器片(前期～中期)、短冊型打製石斧片などが発見された。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
144	散布地 (群馬郡群馬町北原下屋敷)	縄文土器片、古墳時代の土器片等多数分布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
145	散布地 (群馬郡群馬町北原下屋敷)	縄文時代の土器片、および古墳時代の土師・須恵器、かまど跡等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
146	散布地 (群馬郡群馬町西国分薬師廻)	縄文土器片が出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
147	散布地 (群馬郡群馬町西国分薬師廻)	古墳時代の土師器片が多数散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
148	散布地 (群馬郡群馬町西国分薬師廻)	縄文土器および古墳時代の土器、瓦等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
149	散布地 (群馬郡群馬町東国分高井道東)	奈良・平安時代の土師・須恵器の壺、瓦等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
150	散布地 (群馬郡群馬町引間永正庵)	縄文時代の短冊型石斧が4個、すい石が1個出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
151	散布地 (群馬郡群馬町後疋間村北)	縄文・古墳・奈良時代の土器等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
152	散布地 (群馬郡群馬町引間古屋敷)	古墳時代の土師器片出土。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
153	散布地・古墳 (群馬郡群馬町引間古屋敷)	古墳・奈良時代の石製蔵骨器身部、板碑片、土師・須恵器等がある。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
154	散布地 (群馬郡群馬町引間屋敷廻)	縄文時代の横型石匙、打製石器等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
155	散布地 (群馬郡群馬町引間古屋敷)	縄文土器片、石鏃、土師・須恵器片等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
156	散布地 (群馬郡群馬町引間石堂)	縄文土器片多数散布、他に凹石、打製石斧片が出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
157	散布地 (群馬郡群馬町引間妙見)	古墳時代の土器、瓦、人骨等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
158	散布地 (群馬郡群馬町石堂)	古墳時代の土師片が多数分布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
159	散布地・墳墓 (群馬郡群馬町引間松葉)	奈良時代の骨壺、土釜、瓦、陶器片出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
160	散布地 (群馬郡群馬町引間松葉中原)	古墳時代の土師器片が多数散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
161	国分寺参道遺跡 (群馬郡群馬町塚田稲荷台村東・中原)	古墳時代から平安時代の土器・瓦等出土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
162	散布地 (群馬郡群馬町塚田村東)	古墳時代から平安時代の土器が出土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
163	散布地 (群馬郡群馬町稲荷台北金尾)	古墳時代の土師器片が多数散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972

第2章 立地・環境

遺跡 No.	遺跡 所在地	遺跡の概要	文献
164	散布地 (群馬郡群馬町稲荷台北金尾)	奈良時代の土器・陶器等が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
165	散布地 (群馬郡群馬町稲荷台北金尾)	奈良時代の土器・陶器等が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
166	散布地 (群馬郡群馬町稲荷台)	古墳時代の土器等が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
167	散布地 (群馬郡群馬町稲荷台村南)	古墳時代から平安時代の土器等が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
168	散布地 (群馬郡群馬町引間諏訪西)	縄文土器片や打製石器が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
169	散布地 (群馬郡群馬町引間諏訪西)	古墳時代の土器片が多数出土している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
170	散布地 (群馬郡群馬町棟高北寝保窪)	縄文時代の石器や、古墳時代の埴輪片、須恵器などが出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
171	散布地 (群馬郡群馬町足門鶴巻)	古墳時代の土師器片が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
172	保渡田Ⅱ遺跡 (群馬郡群馬町中里西谷川)	縄文時代中期後半の敷石住居跡、古墳時代後期の住居跡、二ツ岳降下火山灰層、および同軽石層下の水田跡を発掘調査した。更に中世館跡の周掘と考えられる溝を検出した。	『昭和56年度埋蔵文化財調査略報』群馬町教育委員会 1982
173	保渡田東遺跡 (群馬郡群馬町保渡田)	奈良・平安時代の住居跡、土壇、溝、堀立柱建物跡等を検出した。	『保渡田東遺跡』群馬町教育委員会1986年
174	散布地 (群馬郡群馬町保渡田薬師前)	古墳時代の土師器片が多数散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
175	同道遺跡 (群馬郡群馬町井出同道)	同一地点において、4面の水田跡が重層して検出された。1期はC軽石層下、2期はC軽石層上にあり、FA層によって埋没している。3期はFA層上でFP層下、4期はFP層上B軽石層により埋没している状態であった。	『同道遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
176	どんざわ畑地遺跡 (群馬郡群馬町井出村東)	後期樽式土器が出土しているため集落の可能性もある。	『清里・庚申塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
177	福島遺跡 (群馬郡群馬町福島)	平安時代の水田跡、溝を検出した。	『福島遺跡』群馬町教育委員会 1984
178	中林遺跡 (群馬郡群馬町三ツ寺)	古墳時代の住居跡、平安時代の住居跡、水田跡等を検出した	『中林遺跡調査概報』群馬町教育委員会 1983
179	中泉遺跡 (群馬郡群馬町中泉)	平安時代の水田遺構を検出した。	『中泉遺跡発掘調査報告』群馬町教育委員会 1983
180	諸口遺跡・古墳 (群馬郡群馬町福島諸口)	弥生時代後期の住居跡の検出と、樽式土器の出土をみた。横穴式石室を有する円墳、直径31m、高さ3m、墳丘の裾部に葺石の一部が確認された。	『諸口古墳調査概報』群馬町教育委員会 1984 『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 1986
181	菅谷遺跡 (群馬郡群馬町菅谷石塚)	平安時代の住居跡、溝、井戸、土壇等を検出した。	『菅谷遺跡発掘調査報告』群馬町教育委員会 1980

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺 跡 在 名 地 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
182	諏訪遺跡 (群馬郡群馬町金古諏訪)	古墳時代の土師器片が多数発見されている。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
183	内金古古墳群 (群馬郡群馬町金古内金古)	横穴式石室を有する円墳、埴輪等出土している。	『群馬町の遺跡』 群馬町教育委員会1986
184	橋向古墳群 (群馬郡群馬町金古橋向内林)	主軸長約100mの前方後円墳3基、径約30mの円墳3基、自然丘利用の小円墳2基を含む古墳群。	『清里・長久保遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
185	長久保古墳群 (群馬郡群馬町)		
186	平塚古墳 (群馬郡群馬町金古中原)	墳丘は平夷されている。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
187	金井古墳群 (群馬郡群馬町金古金井)	現在は1基のみ残っている。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
188	金古愛宕山古墳 (群馬郡群馬町金古愛宕)	墳径30m、高さ4mの円墳。葺石、埴輪があり、自然石乱石積の横穴式両袖型石室。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会1963 『群馬県遺跡台帳II』(西毛編)群馬県教育委員会 1972 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
189	諏訪古墳群 (群馬郡群馬町金古諏訪)	円墳1基、古墳跡3基、内1基は径30mで周掘があり、表土中より須恵器の破片出土。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会1963
190	古墳 (群馬郡群馬町金古庚申)	すでに盗掘され、葺石、天井石が露出している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
191	庚申B号古墳 (群馬郡群馬町金古)	直径11mの円墳、石室は横穴式両袖型石室であり、玄門、羨門を具備している。前庭は石組みにより三方を囲み割れ石を敷きつめて構成されている。	『昭和37・38年度における発掘調査』群馬大学 1966 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
192	才春名古墳 (群馬郡群馬町金古金井沢)	墳径は20m、高さ3.5mで葺石は各所に認められる。石槨はT字型で西向きに開口し、位置は墳頂に近い。馬具・須恵器・提瓶等出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
193	金井沢古墳群 (群馬郡群馬町金古金井沢)	8基の円墳が群在していたが殆どが破壊された。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
194	古墳 (群馬郡群馬町)		
195	寺屋敷古墳群 (群馬郡群馬町足門寺屋敷)	径10~20mの円墳が6基群在している。内1基は自然石乱石積の横穴式石室を有する。	『清里・長久保遺跡』 群馬県埋蔵文化財事業団 1986
196	如来古墳群 (群馬郡群馬町金古如来)	径10~20mの円墳が14基群在しているが大半は平夷されている。埴輪片・須恵器片の散布がみられる。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会1963
197	鶴巻・東原・蓋古墳群 (群馬郡群馬町足門鶴巻・東原・蓋)	かつては6基の古墳が存在していたが現在はほとんど滅失している。埴輪片、須恵器等出土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
198	北寝保窪古墳群 (群馬郡群馬町棟高北寝保窪)	円墳が9基ある。内8基は径10~20m、高さ2~3mの小円墳。1基は径40m、高さ7mである。しかしそのほとんどは平夷されており、1基のみ石室巾11mが認められる。	『群馬県の遺跡』 群馬県教育委員会1963
199	薬師さま (群馬郡群馬町)		

第2章 立地・環境

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
200	観音寺古墳 (群馬郡群馬町棟高)	円墳で古墳上に庚申様がまつられている。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
201	墳墓 (群馬郡群馬町稲荷台北金尾)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
202	墳墓 (群馬郡群馬町稲荷台北金尾)	土師・須恵器等出土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
203	菅谷古墳群 (群馬郡群馬町菅谷石塚)	円墳が5基現存している。円筒埴輪が出土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972 『群馬町の遺跡』 群馬町教育委員会 1986
204	古墳 (群馬郡群馬町中里屋敷)		『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
205	薬師さま古墳 (群馬郡群馬町足門稲荷台)	径16mの円墳で葦石がめぐっている。剣が出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
206	中里天神塚古墳 (群馬郡群馬町中里見沙門)	直径約12m、高さ約3mの円墳でF A層上に構築されている。安山岩質崩れ石の乱石積の横穴式両袖型石室を有する。	『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報VI』 群馬県教育委員会 1980
207	古墳 (群馬郡群馬町中里見沙門)		『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
208	古墳 (群馬郡群馬町中里見沙門)	古墳中腹に大石が露出し、葦石も残存する。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
209	大塚山古墳 (群馬郡群馬町中里押出)	自然石乱石積の両袖型石室をもつ円墳である。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
210	古墳 (群馬郡群馬町中里屋敷)	横穴式石室をもつ円墳。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
211	薬師塚古墳 (群馬郡群馬町保渡田)	推定全長90m、後円径約50mの前方後円墳。凝灰岩製舟型石棺は後円部に保管されている。鋳造製の馬具類は国の重要文化財に指定されている。6 Cの築造と思われる。	『群馬県史』資料編3 群馬県教育委員会 1981 『古墳めぐりハンドブック』 県立歴史博物館友の会 1986
212	八幡塚古墳 (群馬郡群馬町保渡田)	全長102m、後円部径56m、前方部巾53mの前方後円墳。盾形に二重の堀がめぐり、内堀には後円部の回りに4基の円墳状の中島が存在する。土師器及び形象埴輪が多数出土した。6 Cの築造と思われる。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
213	二子塚(愛宕塚)古墳 (群馬郡群馬町井出二子山)	主軸の長さ東西92.4mで後円部主軸に平行して竪穴式石室があり、中には凝灰岩製石棺がおかれていた。出土品は愛宕像鏡、鏡、金環、円筒埴輪等である。6 Cの築造と思われる。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
214	賢海坊古墳 (群馬郡群馬町井出下布留)		『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
215	御庫山古墳 (群馬郡群馬町井出中原)	直径約20mの墳頂。出土品は馬具、古刀、土師器等がある。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
216	御布呂遺跡 (高崎市浜川町御布呂、芦田貝戸)	C軽石下・F A下・F P下の水田跡。平安時代の住居、中世建物跡、井戸、土壇墓を検出した。又東山道と思われる道路状遺構が確認された。かわらけ、播鉢、内耳鍋、茶臼、硯、砥石等出土した。	『矢島遺跡・御布呂遺跡』 高崎市教育委員会 1979 『御布呂遺跡』 高崎市教育委員会 1980

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺 跡 在 名 地 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
217	寺ノ内遺跡 (高崎市浜川町)	F Pを掘り込んで、東側にかまどを持つ住居が17軒発掘された。水田は東西の微高地間の谷状低地に営まれた。	『寺ノ内遺跡』 高崎市教育委員会 1979
218	芦田貝戸遺跡 (高崎市浜川町芦田貝戸)	C軽石下の水田36面、F A下の水田は1260面以上、基盤の目のように区画されている。B軽石下の水田は残りが悪く形も不整形である。他に平安時代の住居跡、掘立柱建物跡、土壇墓及び井戸(中世)等を確認。	『芦田貝戸遺跡Ⅰ・Ⅱ』 高崎市教育委員会 1979、1980
219	二ノ宮遺跡 (高崎市上小鳥町二ノ宮)		『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
220	六反田遺跡 (高崎市上小鳥町六反田)	古墳時代の土師器が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
221	森下遺跡 (高崎市上小鳥町森下)	弥生土器片や土師器が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
222	妙義前遺跡 (高崎市筑縄町妙義前)	弥生土器片や土師器が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
223	北海道遺跡 (高崎市上並榎町北海道)	土師器片が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
224	上並榎遺跡 (高崎市上並榎町山王裏)	弥生土器が出土した。住居跡の存在が予想される。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
225	下小鳥遺跡 (高崎市下小鳥町西浦)	古墳時代の土師器等出土。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
226	石田境遺跡 (高崎市筑縄町石田境)	古墳時代の土師器が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
227	雨壺遺跡 (高崎市大八木町雨壺、伊勢廻、群馬郡群馬町福島東浦)	縄文時代から平安時代にわたる集落跡、住居跡、掘立柱建物溝、土壇、井戸、配石遺構、道路状遺構等検出した。	『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』群馬埋蔵文化財調査事業団 1984
228	大八木箱田地遺跡 (高崎市大八木町)	縄文時代の住居跡・埋壘、古墳時代前期住居跡、後期の住居跡等を検出した。	『大八木箱田地遺跡Ⅰ』 高崎市教育委員会 1983
229	大八木水田遺跡 (高崎市大八木町)	一町四方の条理区画を呈する水田跡がB軽石下より検出された。	『大八木水田遺跡』 高崎市教育委員会 1979
230	権現塚遺跡 (高崎市小八木町権現塚)	土師器片が散布している。	『群馬県遺跡台帳Ⅱ』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
231	正観寺遺跡群 (高崎市正観寺町、小八木町)	弥生時代から平安時代の住居跡、土壇、掘立柱建物、大溝、井戸、円墳等を検出した。又古墳時代後期の特徴を示す土師・須恵器の遺物が多く出土した。	『正観寺遺跡群Ⅰ～Ⅲ』 高崎市教育委員会 1979～1981
232	小八木遺跡 (高崎市小八木町)	弥生時代の水田跡、住居跡を検出。水路中より後期樽式土器を出土した。	『小八木遺跡調査報告書(1)』 高崎市教育委員会 1979
233	浜尻遺跡 (高崎市浜尻町)	弥生時代の住居跡、溝状遺溝、土壇、古墳時代の住居跡を検出した。	『浜尻遺跡』 高崎市教育委員会 1981
234	散布地 (高崎市井野町)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977

第2章 立地・環境

遺跡 No.	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
235	散布地 (高崎市井野町岡貝戸・天神 天水)	古墳時代の土師器片が広範囲に散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
236	井野天神遺跡 (高崎市井野町天神)	C軽石層下の黒色土層中に加工痕のある木材と弥生時代後期 樽式土器が出土した。	『清里・庚申塚遺跡』 群馬県埋蔵文化 財調査事業団 1981
237	井野岡貝戸遺跡 (高崎市井野町岡貝戸)	古墳時代の土師・須恵器が出土、住居跡も検出された。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
238	散布地 (高崎市井野町井野団地)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
239	散布地 (高崎市井野町かわらけ屋敷 岡貝戸)	縄文晩期の土器片が散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬 県教育委員会 1972
240	散布地 (高崎市井野町岡貝戸)	縄文中期～後期の破片が散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
241	井之前遺跡 (高崎市貝沢町井之前)	古墳時代中期から後期の土師器が散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
242	西島遺跡群 (高崎市新保町塚越)	C軽石下の弥生時代水田跡及びB軽石下の条里制水田跡を検 出した。	『西島遺跡群III』 高崎市教育委員 会1986
243	上日高町山貝戸遺跡 (高崎市上日高町山貝戸)	弥生時代後期樽式土器が散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
244	新保田中村前遺跡 (高崎市新保田中町村東)	古墳時代の水田跡、平安時代の水田跡と住居跡を検出した。	『年報4』 群馬県埋蔵文化財調査 事業団 1985
245	新保田中遺跡 (高崎市新保田中町)	平安時代の水路跡。口縁部に縄文の名残りをもち弥生式土器 土師器が散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972 『年報4』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
246	森上塚(摩利支天塚)古墳 (高崎市上小島町森上)	かつては円墳があったが現在は削平された。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
247	妙義山古墳 (高崎市筑縄町柴付)	直径10数m、高さ1.2mの円墳、石室が1基確認されている。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
248	小星山古墳 (高崎市筑縄町妙義前)	全長80mの前方後円墳である。二段構造で周囲の水田は周濠 跡かと思われる。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
249	御伊勢山古墳 (高崎市上並榎町霜田)	現在は大部分が削平されているがもとは円墳である。中に石 室をもつ。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
250	稲荷山古墳 (高崎市上並榎町八反田)	かつては前方後円墳だったが現在は何もない。舟型石棺が出 土している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
251	開山堂古墳 (高崎市上並榎町北海道)	径4m、高さ1.8mの円墳。墳丘上には石室の石が露出して いる。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
252	愛宕山古墳 (高崎市上並榎町)	円墳である。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群 馬県教育委員会 1972
253	古墳 (高崎市下小島町)		

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
254	総六郷村6号墳 (高崎市下小島町)	後円径17m、高さ1m、全長36mの前方後円墳である。現在は後円部のみが残存。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
255	清水古墳 (高崎市大八木町清水)	全長50m程の前方後円墳、あるいは径20mと径30mの円墳が連結しているか不明である。高さは北西部が約1.5m、南東部が2m程。墳丘上に埴輪片、土器片が散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
256	清水943古墳 (高崎市大八木町清水)	墳径15m、高さ1mの円墳である。墳丘上には埴輪片が認められる。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
257	清水944古墳 (高崎市大八木町清水)	墳径20m、高さ1.5mの円墳で墳丘上には埴輪片、土師片が認められる。墳頂部には巨石が2個露出している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
258	ボンボン塚古墳 (高崎市小八木町志々貝戸)	現在は平夷され、10m×15m程の不整形な段を残すのみである。石材や埴輪の破片が散在している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
259	オトウカ山古墳 (高崎市小八木町志々貝戸)	径約45m、高さ約3mの円墳である。墳頂部に安山岩の大石が露出し、埴輪片の散布もみられる。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
260	権現塚古墳 (高崎市小八木町)	直径約33mの円墳。横穴式石室を有する。墓石は角閃石安山岩が使用されている。	『正観寺遺跡群(III)』 高崎市教育委員会 1981
261	真福寺古墳 (高崎市浜尻町)		
262	古墳 (高崎市井野町吉岡)	径15m、高さ1mの小円墳であるが現在は不整形である。埴輪片の出土をみる。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
263	古墳 (高崎市井野町)	現状の規模は7m×6m、高さ80cm、円墳と思われるが、削除されているため不整形である。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
264	古墳 (高崎市井野町吉岡)	かつては円墳だったが現在は平夷されている。窯製蔵骨器。石製蔵骨器、板碑、同沓石が出土した。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
265	古墳 (高崎市)		『浜尻遺跡』 現地説明会資料 高崎市教育委員会 1986
266	天王山古墳 (高崎市浜尻町)	全長53m、前方部幅36m、後円部径28m、高さ4.5mの前方後円墳である。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972 『群馬県史』資料編3 群馬県 1981
267	五霊神社古墳 (高崎市貝沢町井之前)	前方後円墳と思われるが、前方部のみ残存する。付近に埴輪が散布している。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
268	古墳 (高崎市貝沢町井之前)	径20m程の円墳である。	『群馬県遺跡台帳II』(西毛編) 群馬県教育委員会 1972
269	聖天山古墳 (高崎市貝沢町正天)	長さ23m、高さ3m程の前方後円墳。阿波式石棺がある。鏡剣、甕等が出土した。	『上毛古墳総覧』 群馬県 1938
270	散布地 (勢多郡富士見村横室前)	土器が出土した。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
271	散布地 (勢多郡富士見村時沢愛宕)	土器の散布がみられる。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
272	散布地 (勢多郡富士見村横室田中)	わずかに土器が散布している。	『群馬県遺跡台帳I』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971

第2章 立地・環境

遺跡 No.	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
273	散布地 (勢多郡富士見村横室田中)	土器が少量散布する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
274	散布地 (勢多郡富士見村横室東沢口)	土器がわずかに散布する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
275	散布地 (勢多郡富士見村原之郷岡)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
276	散布地 (勢多郡富士見村原之郷中原中西)		『全国遺跡地図 群馬県』 文化庁 1977
277	散布地 (勢多郡富士見村原之郷山ノ後)	弥生式甕形土器等が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
278	散布地 (勢多郡富士見村原之郷善養寺)	土師器等が多量に散布する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
279	横室古墳 (勢多郡富士見村横室中横室)	円墳である。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
280	荒井古墳 (勢多郡富士見村横室寄居)	円墳である。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
281	九十九古墳 (勢多郡富士見村原之郷)	自然丘利用の前方後円墳、径12m、高さ9m、後円部に石櫛があり、南面に開口している。金環3個が出土した。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
282	青梨子砦跡 (前橋市清野町青梨子)	現在は消滅して形状の推定も困難である。東西120m、南北80m程で東から南にかけ、別郭をもっていたようである。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
283	桧田城跡 (前橋市総社町高井桧田)	山沢川の北岸で、その旧河道と推定される沼田と山沢川とにはさまれた幅約200m、比高5mの台上にあった。現在は何の遺構も認められない。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
284	勝山城跡 (前橋市総社町立石)	ほとんどが利根川に崩落して、現在は跡も不明である。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
285	総社城跡 (前橋市総社町栗島)	利根川左岸の崖端に築かれていたが、今は大部分崩落し、南北70mの堀跡が鍵形に残り、幅10mにも満たない内郭が認められる。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
286	石倉砦跡 (前橋市石倉町)	縄は同心円だが単純である。丸馬出しも見られず西面外堀などは800mに渉り一直線にのびる。北面では二重の壕を並べその間に王山古墳を取り入れる。南西隅に別の二郭が設けられている。二の丸外側の壕では北寄りに、三の丸壕では南端に折が設けられ、この付近に虎口を開いていたと思われる。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
287	大友館跡 (前橋市大友町)	現存の長見寺が館跡である。本丸は一辺100mの正方形で、現在も北と東北部に高さ2m程の土居が残り、南面中央一方に直虎口がある。南面と西面とには内堀から20mへだてて城跡が認められ、二重堀構えであった。更に聚落の外側には濠も残っている。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
288	村山館跡 (前橋市大友町村山)	本丸は一辺70mの正方形で、東面中央の一方虎口は堀幅半ばの逆の喰違いになっていた。外郭は南北240m、東西200mで、西面には幅6～7mの堀跡が認められる。	山崎 一 『群馬県古墳墓址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺 跡 在 名 地 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
289	八日市場城跡 (前橋市元総社町)	単郭の小城で、北、東、南の三方に濠と土塁をめぐらし西の一方は染谷川に托している。東西、南北、それぞれ150m程であった。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
290	蒼海城跡 (前橋市元総社町小見、横屋草作)	染谷川と支流にはさまれた区域、本丸は北にあり、その南に二の丸、西南隅に櫓台があった。東側には出雲屋敷、西には五霊神社のある郭がつづく。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
291	鳥羽館跡 (前橋市鳥羽町)	二重にめぐる方形環濠の東部と、南面に設けられる橋脚部が検出されている。濠内からは宝篋印塔、板碑、石臼等が出土した。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
292	金尾城跡(中尾城) (前橋市鳥羽町)	本丸は東西80m、南北60m、東北面は弧状に造って鬼門を欠き西面には折があった。虎口は南と東にあり、堀に土橋が通じていた。二の丸堀もわずかに見られる。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
293	関根寄居跡 (前橋市関根町赤城)	桃木川に南側を托し、南北80m、東西60m。北部は二重堀構えになっていて方50mの本郭を構成する。本郭の虎口は南一方で、外郭は東西それぞれに虎口を持っていたらしい。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
294	前橋城跡 (前橋市大手町)	古くは厩橋城だが前身は石倉城。16C.中期以降重要な位置を占める。酒井忠清の頃は古前橋城と言い最も充実していた。慶応3年再築され、現在の県庁の地が旧三の丸を本丸とした所、本丸土手の一部と二の丸と外郭を通じる車橋門の石垣が残る。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
295	桃井城跡(大藪城) (北群馬郡吉岡村南下大藪)	主郭は東西130m、南北120mの広さ、中央には西北から東南方向に50m余り続く低峰があり、上面が削平され、物見台になっている。主郭は峰によって第一郭、第二郭に分断されそれぞれ土居や壕がある。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 下巻 群馬県文化事業振興会 1972
296	漆原城跡 (北群馬郡吉岡村漆原)	土塁跡、およびその外側に空壕跡15mが残存する。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
297	瀬来城跡 (北群馬郡吉岡村漆原)	吉岡川南岸丘陵状地点に位置する。土塁の一部は残存し、堀切りの東北隅の出張った部分は切り落したものである。白井城配下の城。	『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
298	御堀城跡 (北群馬郡榛東村山子田御堀)	中世城郭跡	『御堀遺跡』 榛東村教育委員会 1985
299	金古城跡 (群馬郡群馬町金古内林)	全城域は東西・南北共180m程で、内金古の村落がその中にある。自然の地形を利用し、濠や堡障をつくったと思われる。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 下巻 群馬県文化事業振興会 1972
300	引間城跡 (群馬郡群馬町引間)	染谷川とその支流にはさまれた台地に位置する。主郭は東西の堀切によって東西85m、南北75mの方形の区画を造り出し北側に腰曲輪を配し、その東側から字北谷にかけて礮状土橋が続く。西側の堀跡は、幅30～40mと明確に残っている。	山下歳信 「中世城館址」『群馬町の遺跡』 群馬町教育委員会 1986
301	中里屋敷跡 (群馬郡群馬町中里)	一辺が約100mの方形区画で方形を呈する屋敷構えをもっていたと考えられる。西北隅から北辺にかけて高さ70～80cmほどの土塁が残っている。	山下歳信 「中世城館址」『群馬町の遺跡』 群馬町教育委員会 1986
302	保渡田城跡 (群馬郡群馬町保渡田)	本丸は一辺70～80mの正方形に近い形である。南面中央の失倉台跡のその南側の壕及び東側、北側の壕址をのこす。	山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』 下巻 群馬県文化事業振興会 1972
303	熊野館 (群馬郡群馬町井出熊野)	規模は東西120m、南北130mほどで、堀幅は10m前後を測ることができる。	山下歳信 「中世城館址」『群馬町の遺跡』 群馬町教育委員会 1986

第2章 立地・環境

遺跡 No	遺 跡 名 (所 在 地)	遺 跡 の 概 要	文 献
304	花城寺館跡 (群馬郡群馬町井出)	井野川と嵯峨の河崖にはさまれた自然の要塞。南北75m、東西65mの環濠遺構は南面に掘り残し土橋跡が見られる。	山崎 一 「花城寺と元井出館」『同道遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 山下歳信 「中世城館址」『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 1986
305	元井出館跡 (群馬郡群馬町井出)	井野川と嵯峨の河崖にはさまれた自然の要塞である。南北65m、東西60mの環濠が残る。	山崎 一 「花城寺と元井出館」『同道遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983 山下歳信 「中世城館址」『群馬町の遺跡』群馬町教育委員会 1986
306	同道館跡 (群馬郡群馬町井出同道)	掘立柱建築遺構は南東方向を向いて4棟が建てられている。他に堀、井戸を検出した。15～16C.前半の館跡とおもわれる。	『同道遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
307	三ツ寺I館跡 (群馬郡群馬町三ツ寺藤塚道上、井出村東)	古墳時代の居館跡。南、西、北の濠幅35～40m、深さ3～3.6m、西濠では橋脚柱を2対、北濠では張出部が見られる。南北辺には石垣が築かれ柱列が廻り、南辺で方台形の張り出し部を確認した。その他、住居跡、井戸、石敷遺構、木製品が出土した。	『年報3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
308	中泉砦跡 (群馬郡群馬町中泉)	箕輪城の支城と思われる小塁址。旧三国街道の東側に築かれ西側を濬水によせ、方100m程の広さを持っていたらしいが現存せず。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 1972
309	菅谷城跡 (群馬郡群馬町菅谷)	外郭は東西、南北とも150m程であったらしい、追手は南面し、西面にも虎口があったと思われる。本丸は一辺50mの正方形で北側の堀と土居、東側の堀跡などが残っている。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会 1972
310	乙業館跡 (高崎市浜川町館)	長野産業の父、乙業の館跡と伝えられる。井野川の河崖上、南北130m、東西70mの細長い地域で壕跡は北側と南側では明らかであるが、西側は内縁が残っているのみである。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
311	浜川の館跡 (高崎市浜川町館)	長野隆業の館として築かれた後に箕輪城の外堡となる。東郭は東西130m南北90m、周囲に壕を巡し西南が角欠きである。南面にはもう一つの壕跡もみられる。東郭には、南、西、北に虎口があり、南虎口には土橋の存在が認められる。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』上巻 群馬県文化事業振興会 1971
312	高田屋敷跡 (高崎市)	四方150m程の区域に二重構えの中世屋敷跡が認められる。北と東の壕跡は明らかで、入口は南西中央の一方と思われる。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』補遺篇 上巻 群馬県文化事業振興会 1979
313	寺の内館跡 (高崎市浜川町)	南北220m以上、東西265m、外、中、内堀をもった館跡、他に掘立柱建物跡、井戸、土塚墓等を検出した。	『寺の内遺跡』高崎市教育委員会 1979
314	八木屋敷跡 (高崎市)		『北新波の砦址 古城III』高崎市教育委員会 1986
315	熊野堂館跡 (高崎市大八木町熊野、雨壺伊勢廻)	唐沢川右岸の台地上に立地する。中世の溝が検出され、これにより内外二郭を有する館跡が想定された。他に小穴や井戸跡が検出された。	『熊野堂遺跡第III地区、雨壺遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
316	大八木融通寺館跡 (高崎市大八木町)	11～12C初頭と推定される土塁状遺構を検出した。	『上越新幹線概報II』群馬県教育委員会 1975
317	上飯塚城 (高崎市)	東西170m、南北130mの内外二郭から成っていたと考えられ、一部には土塁が残っている。和田氏関連の遺構と考えられる。	『東山道』群馬県教育委員会 1983

第2節 周辺遺跡について

遺跡 No	遺 跡 在 名 地	遺 跡 の 概 要	文 献
318	新井若狭屋敷跡 (高崎市貝沢町北)	東西200m、南面150m、北西は高さ2m程の小崖に寄り、その下に濠があったとされる。内部は二郭から成り、本郭は方70m、東面北面に高さ2～2.5mの土居がある。西郭は東西40m、南北65m、囲壕跡と西面南半の土居をのこす。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
319	与五右衛門屋敷跡 (高崎市井野町井之田)	方100m、西南にのびた歪んだ形で内郭は方50mの二重堀構え、南面中央に門が開く。内外両濠間は北・東面は10～15mで土居敷があり、西、南部はそれより広くて郭面が形成されていた。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
320	青木屋敷跡 (高崎市)	外堀は東西140m、南北120m、内堀は方75mの構えであったが、現在は内堀跡の一部を残すのみである。	山崎一 『群馬県古城址の研究』 補遺篇 上巻 群馬県文化事業振興会 1979
321	村東館跡 (高崎市中尾町)	14Cの館跡、並郭式に大小3郭から成る。発掘例としては県内最古のもの、木器の出土が顕著。	『元島名B遺跡・吹屋遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
322	上日高屋敷跡 (高崎市)	南北75m、東西70mの内部と南北50m、東西75mの外郭を持ち、南中央に門があったと思われる。	山崎一 『群馬県古城址の研究』 補遺篇 上巻 群馬県文化事業振興会 1979
323	湯浅屋敷跡 (高崎市)	東西90m、南北80mの環壕屋敷跡で正面入口は南中央にあったようである。	山崎一 『群馬県古城址の研究』 補遺篇 上巻 群馬県文化事業振興会 1979
324	串田屋敷跡 (高崎市新保町)	北側と西南部の壕跡は残っているが、東側と南東部の壕は不明である。	山崎一 『群馬県古城址の研究』 補遺篇 上巻 群馬県文化事業振興会 1979
325	井草屋敷跡 (高崎市)	東西80m、南北110mで東北・西南の両角が欠け、南北二郭に分けられている。入口は西の一方であった。	山崎一 『群馬県古城址の研究』 補遺篇 上巻 群馬県文化事業振興会 1979
326	深沢屋敷跡 (高崎市京目町)	近世の改修が見られ、中心部の形を把握することは困難である。	山崎一 『群馬県古城址の研究』 補遺篇 上巻 群馬県文化事業振興会 1979
327	金山城跡 (勢多郡富士見村原之郷岡)	東西380m、南北250mの広さを持ち、並郭式構造である。本丸は東西100m、南北70m、北側中央に物見台跡が半分残る。西曲輪と帯曲輪の北縁に土居が残っている。	山崎 一 『群馬県古城址の研究』 上巻 群馬県文化事業振興会 1971
328	トウノコシ (前橋市総社町高井字池田)	総社町光厳寺に現存する「伝東寛寺層塔」の故地。調査では、遺構は検出されなかった。出土遺物には五輪塔・空風輪・宝篋印塔笠部の破片、瓦片、石白片、陶磁器がある。	『清里南部遺跡群(III)発掘調査概報』 前橋市教育委員会 1981

第3章 検出遺構・遺物

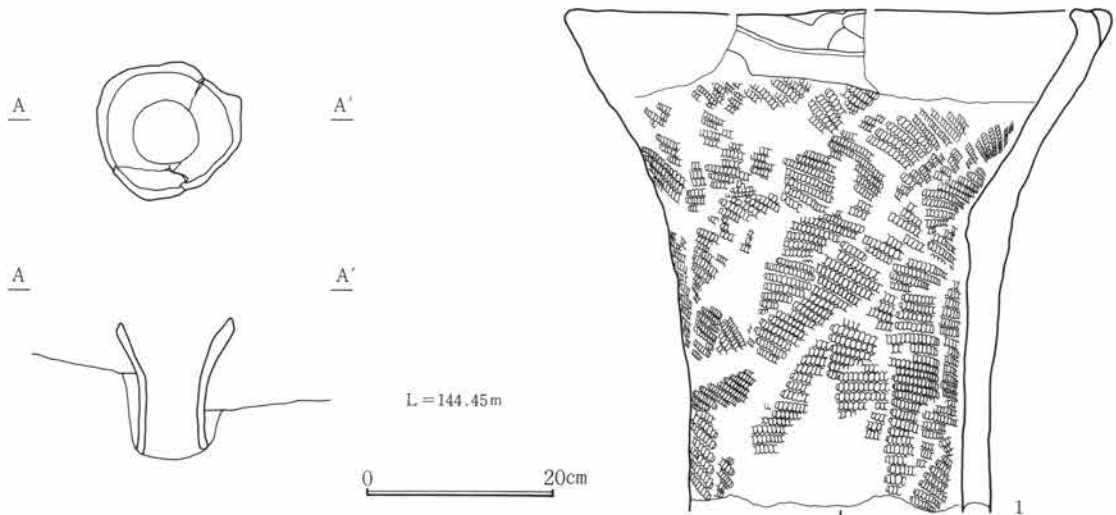
第1節 縄文時代

1 埋甕遺構

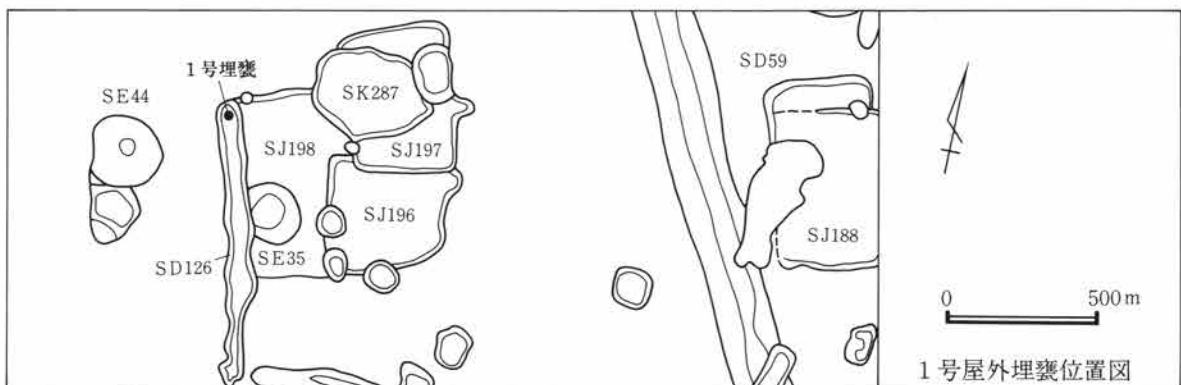
1号屋外埋甕

8

本埋甕は、111G-46グリッドに位置し、SD126の北端の底面より検出された。検出時上半は露呈した状態であり、口縁部を水平にし正位埋設されたものと考えられる。掘り方は明確でなく、埋甕外形に近い大きさに掘り込まれたものと思われる。埋設されていた土器は、口唇部の大半と底部付近を欠いた深鉢である。土器内面に粗れは認められず、住居等の掘り込みも未検出であることから、屋外埋甕と判断した。



番号	文様の観察	胎土焼成	色調	備考
1	胴上部は外反し、口縁部で「く」字状に屈曲する。口縁部に横位、もしくは弧状に隆帯が加えられる。胴部は2段RLの斜行縄文。口径29cm。	白色の軽石、石英、雲母を含む。焼成良くかたい。	赤褐	中期



2 遺構外出土遺物

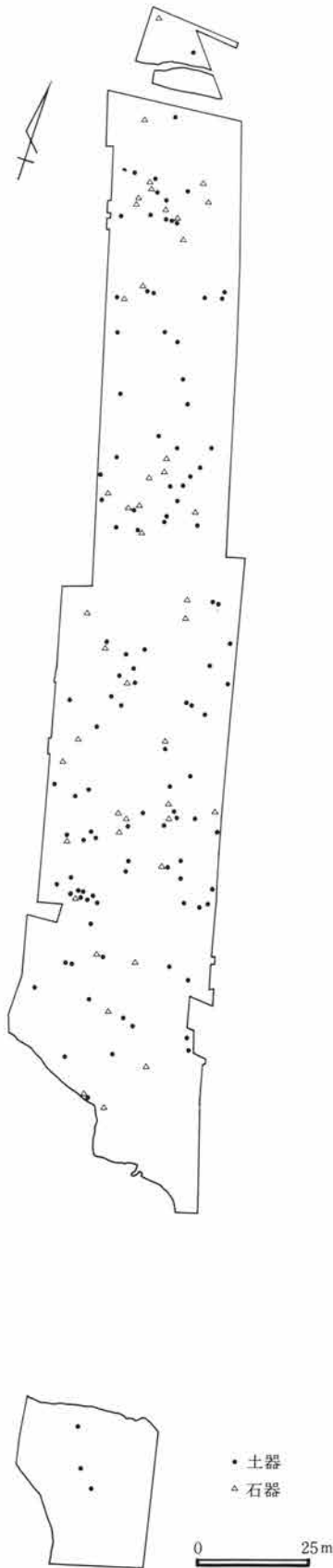
(1) 土器

本遺跡出土の縄文土器は、後世の遺構覆土内、表土中より出土したもので、本来の遺構から出土したものは、土坑から出土した土器のみである。そのため、出土土器については後世に現位置からの移動を受けたものである。遺跡内における縄文土器の分布をみると、ほぼ全域から出土しており特に遺物が集中する傾向を見ないのは、これらの理由によるものであろう。そしてこの事は、本遺跡における縄文時代の性格を正しく示すものではなく、二次的な影響の元に形成された遺跡といえよう。

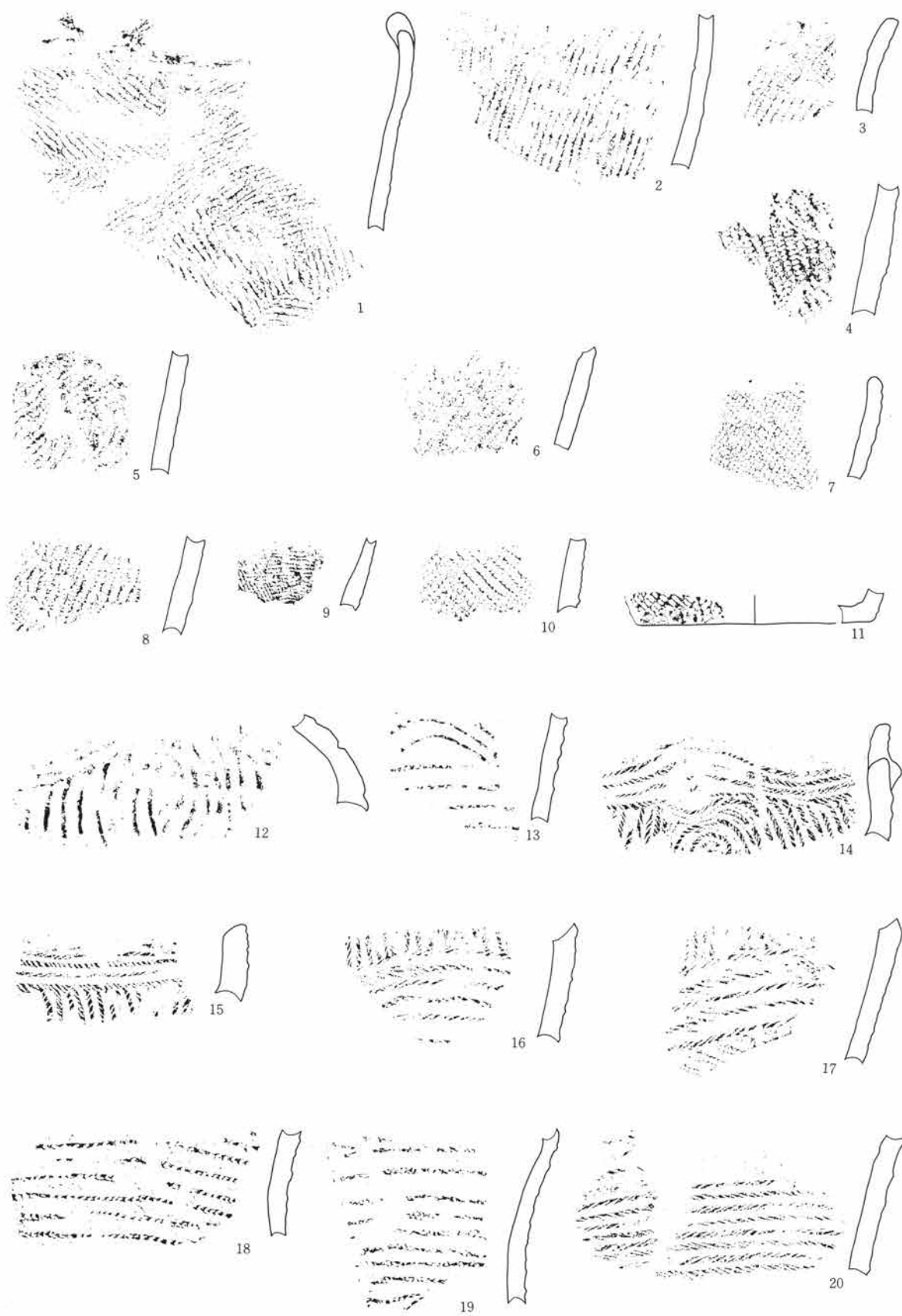
本遺跡の縄文土器は前期から晩期にわたりかなり広い時間的幅を持つ。出土遺物の時期別個体数は、前期中葉有尾・黒浜式11、諸磯b式110、諸磯c式29、その他前期後半から終末47、中期後半20、後期55、晩期5を数え、前期後半の土器が全体の出土量の6割以上を占める。

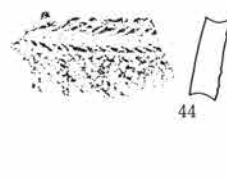
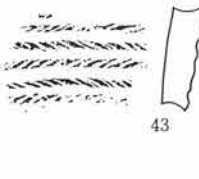
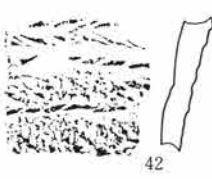
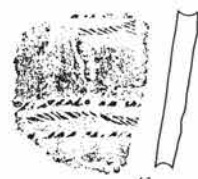
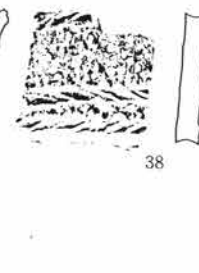
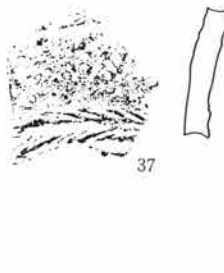
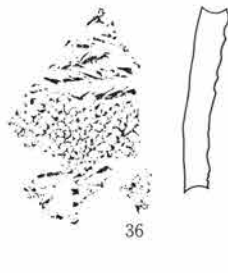
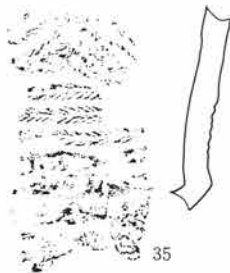
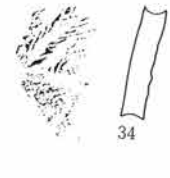
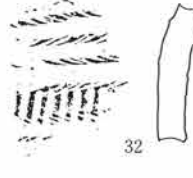
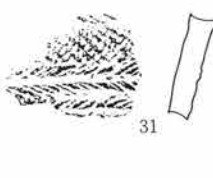
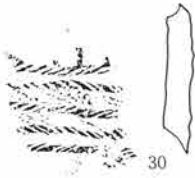
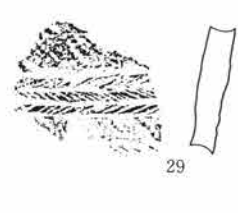
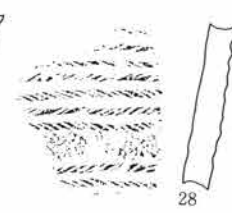
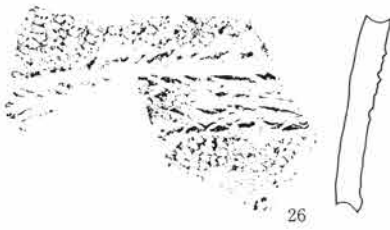
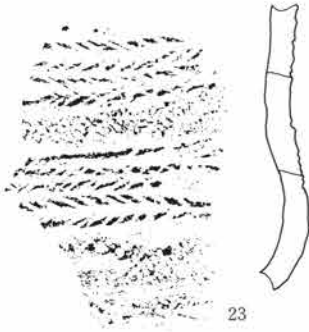
出土土器の細かい観察は次項の観察表にゆずるが、全体の遺物出土傾向をみると、有尾・黒浜期、諸磯b、c期、加層利E新期、堀之内期、加層利B期、安行期と断続的に出土している。出土量からみると諸磯b式土器が多く、本遺跡からは、遺構が確認されなかったが周辺に遺構の存在が予想される。

近年、鬼形芳夫氏による赤城山麓や群馬町周辺の遺跡分布に関する研究によると（「群馬町の遺跡」群馬町教育委員会、1986。「赤城山麓における縄文文化の展開」群馬県史研究21、1986）、前期前半では遺跡の立地が丘陵の狭い台地上に多く、前期後半より中期にかけてより広い台地上に分布し、後晩期には底地帯に進出してくる傾向を示すとしている。本遺跡周辺の縄文時代遺跡の分布は、八幡川、牛池川、染谷川流域の標高130～150mに多く集中し、本遺跡もまたこれらに含まれる。そしてこの地域において国分寺中間地域遺跡のように比較的平坦で広い面積を持つローム台地の縁辺部では、大きな集落が確認されているが、本遺跡などのようにローム台地があまり発達せず小沢の侵食を受けた台地上などでは遺物の分布範囲、出土量が少なくなる傾向を示す。本遺跡の場合出土遺物から見ると遺跡の分布が丘陵部から前橋台地に移行する変換期にあたる時期の土器が多く出土した。これは断続的に存在した遺跡ではあるが、遺跡の地形（発掘調査地）上の理由により集落としては不適當な地形である事が確認できたが、周辺の遺跡分布傾向を考えると鬼形氏の言う時期別の遺跡立地に合致する。



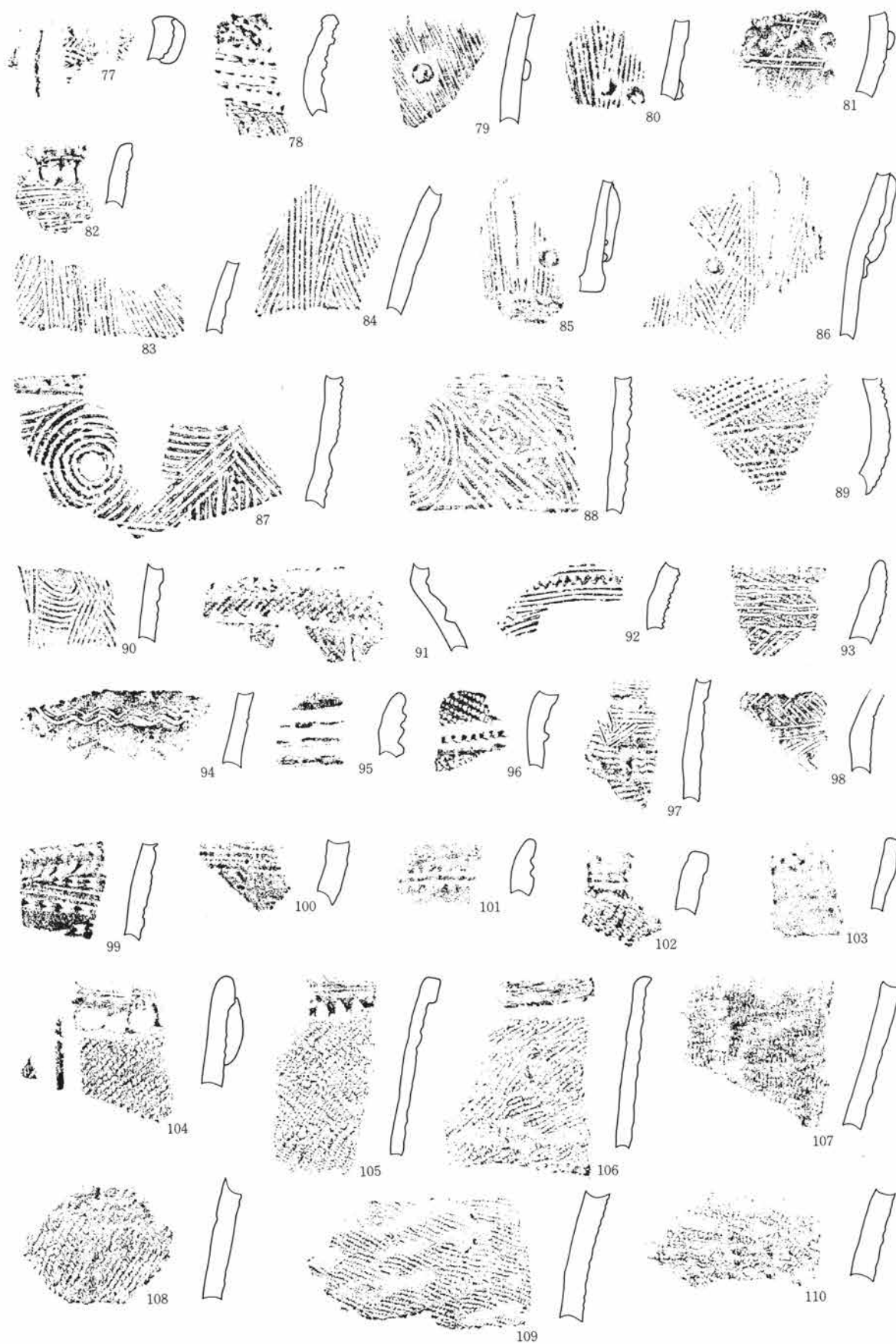
縄文土器・石器出土分布図

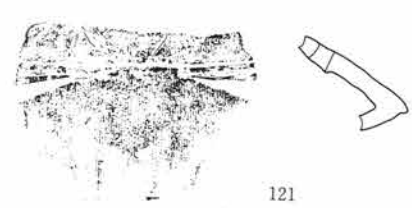
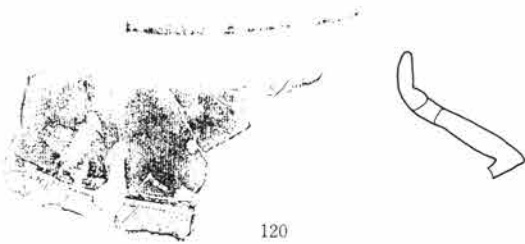
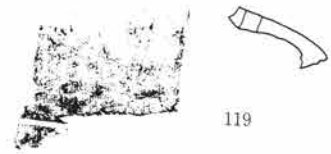
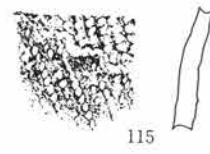
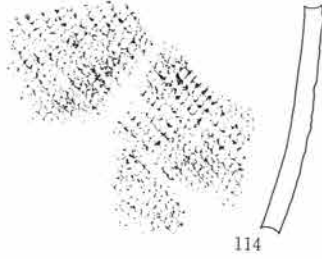
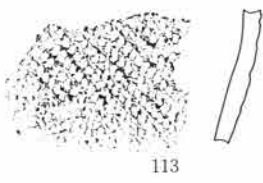
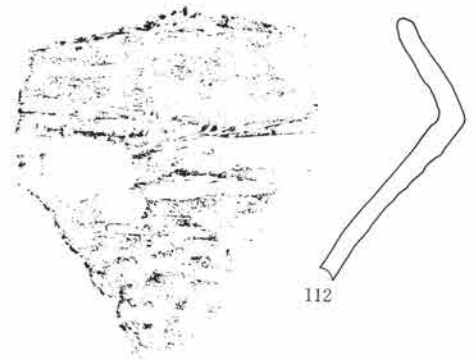
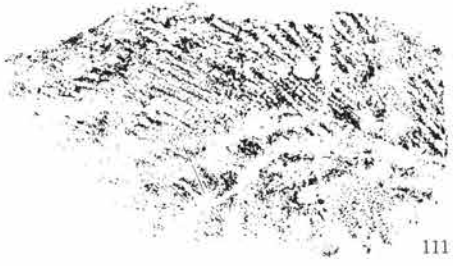


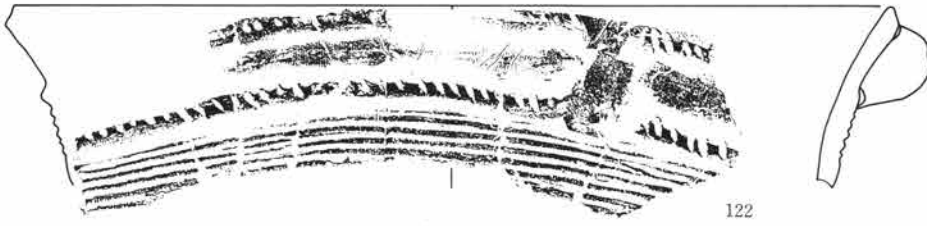




第1節 繩文時代







122



123

124



125

126

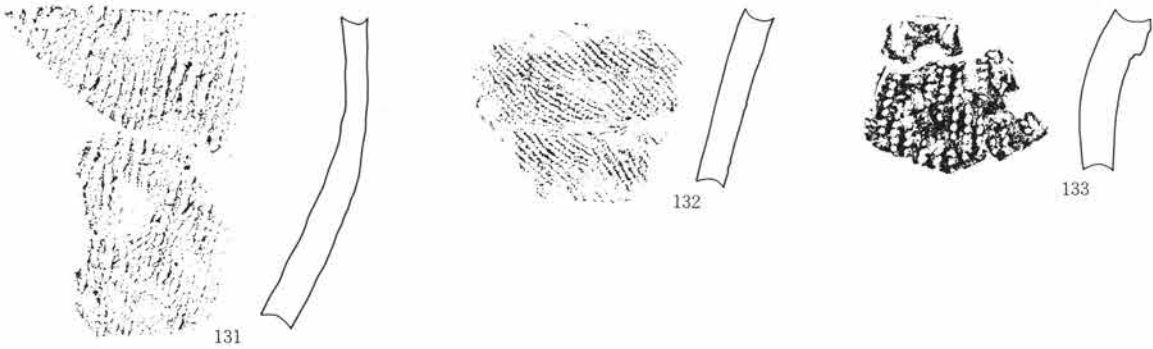
127



128

129

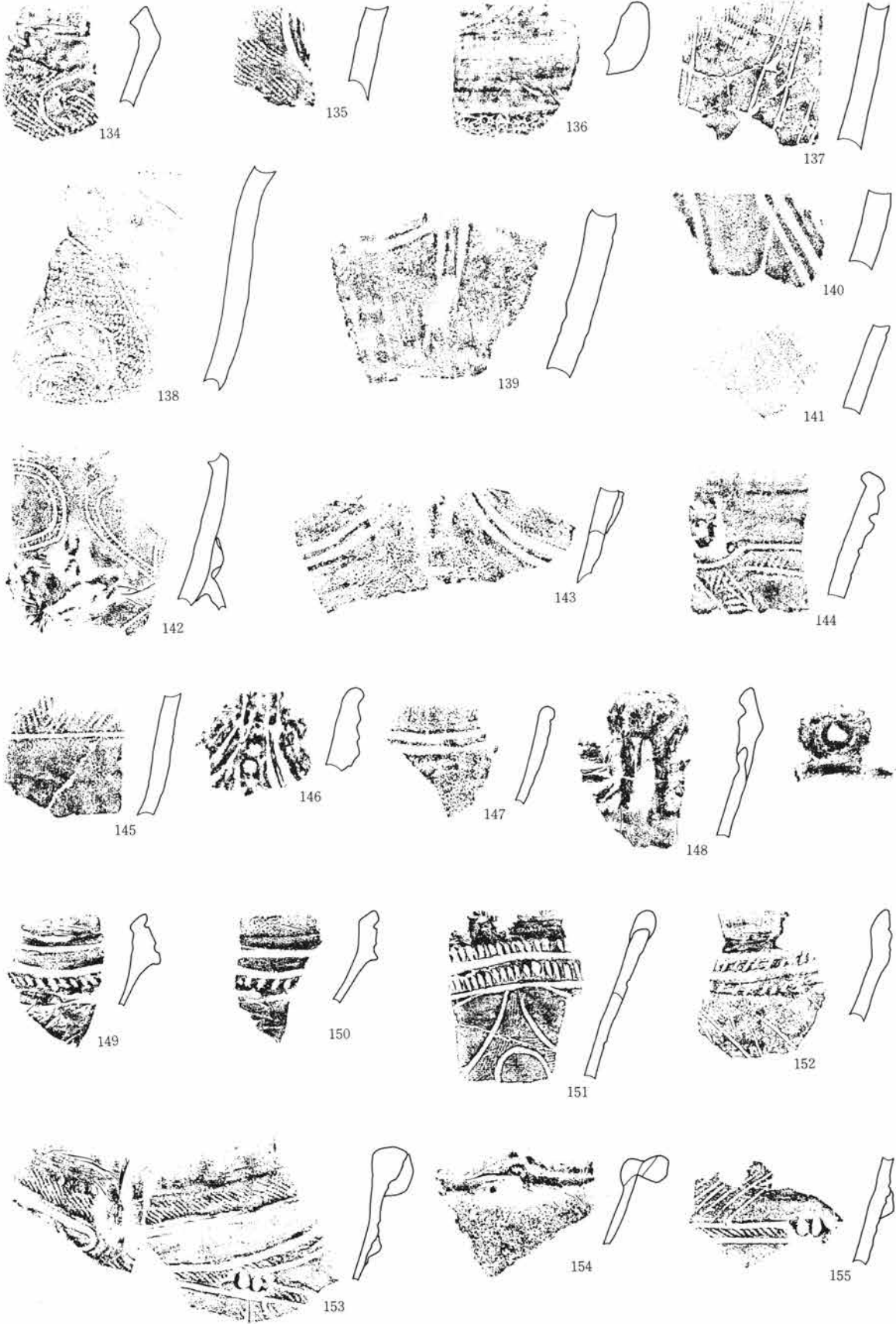
130



131

132

133





第3章 検出遺構・遺物

番号	文様の観察	胎土 焼成	色調	備考
1	口唇部に小突起を2個持つ。1段R ℓ 、Lrの羽状縄文で菱形を構成。	繊維、砂粒、焼成良	にぶい褐	有尾・黒浜
2	2段LRの斜行縄文	繊維、砂粒、焼成良	灰褐	有尾・黒浜
3	2段LRの斜行縄文	繊維、砂粒少、焼成良	にぶい褐	有尾・黒浜
4	2段RLの斜行縄文	繊維、砂粒多、焼成良	明赤褐	有尾・黒浜
5	2段LRの斜行縄文	繊維、砂粒少、焼成良	にぶい赤褐	有尾・黒浜
6	2段LRの斜行縄文	繊維、砂粒少、焼成良	灰褐	有尾・黒浜
7	2段RLの斜行縄文	繊維、砂粒少、焼成良	極暗赤褐	有尾・黒浜
8	2段LRの斜行縄文	繊維、砂粒少、焼成良	にぶい褐	有尾・黒浜
9	2段RL、LRの羽状縄文。	細砂粒少、焼成良	にぶい赤褐	有尾・黒浜
10	2段RL、LRの羽状縄文。0段多条	繊維、細砂粒少、もろい	暗赤褐	有尾・黒浜
11	2段RLの斜行縄文	細砂粒少、焼成良	橙	有尾・黒浜
12	浮線文により弧状の文様が構成される。浮線文は無文。地文2段RL。	細砂粒、もろい	にぶい赤褐	諸磯b
13	浮線文を弧状、横位に施す。浮線文上に縄文施文、地文縄文なし。	砂粒多、焼成良	暗赤褐	諸磯b
14	浮線文を弧状、渦巻状に施す。浮線に矢羽根状の刻み。波頂部小突起。	細砂粒、焼成良	橙	諸磯b
15	浮線文を弧状、渦巻状に施す。浮線に矢羽根状の刻み。	砂粒少、焼成良	にぶい橙	諸磯b
16	浮線文を弧状、横位に施す。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	灰褐	諸磯b
17	浮線文を弧状、横位に施す。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	にぶい褐	諸磯b
18	浮線文を横位に施文。浮線上半截管による爪形文。地文2段RL。	2~3mmの小礫、焼成良	にぶい黄橙	諸磯b
19	浮線文を横位に施文。浮線下に2段RLの線文を施文。	細砂粒少、もろい	にぶい赤褐	諸磯b
20	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	橙	諸磯b
21	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	細砂粒少、焼成不良	橙	諸磯b
22	浮線文を横位に施文。浮線下に2段RLの縄文を施文。	小礫、砂粒多、焼成不良	にぶい赤褐	諸磯b
23	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段LR	細砂粒多、焼成良	橙	諸磯b
24	浮線文を横位に施文。その間渦巻を構成。矢羽根状刻み。2段RL。	小礫多い、焼成良、もろい	赤褐	諸磯b
25	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	灰褐	諸磯b
26	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段LR。	砂粒、小礫多、焼成良	明赤褐	諸磯b
27	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	にぶい赤褐	諸磯b
28	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL	砂粒多、焼成良	橙	諸磯b
29	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	細砂粒少、焼成良	橙	諸磯b
30	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	細砂粒多、焼成良	にぶい橙	諸磯b
31	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	細砂粒極少、焼成不良	橙	諸磯b
32	横位の浮線文間に縦位の浮線文を施す。浮線下に刻み。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	暗赤褐	諸磯b
33	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	橙	諸磯b
34	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	細砂粒多、焼成良	にぶい橙	諸磯b
35	横位、斜位に浮線文を施し刻みを持つ。地文2段RL。	砂粒、小礫、もろい	赤	諸磯b
36	浮線文を横位に施文。浮線下に刻みを持つ。地文2段LR。	砂粒極少、焼成良	にぶい褐	諸磯b
37	浮線文を横位に施文。浮線下に刻みを持つ。地文2段LR。	砂粒多、もろい	にぶい褐	諸磯b
38	浮線文を横位に施文。浮線下に刻みを持つ。地文2段RL。	細砂粒、焼成良	橙	諸磯b
39	浮線文を横位に施文。浮線上半截竹管による爪形文。地文2段RL。	砂粒多、もろい	にぶい黄橙	諸磯b
40	浮線文を横位、斜位に施文。浮線下に刻みを持つ。地文2段RL。	細砂粒多、もろい	にぶい褐	諸磯b
41	浮線文を横位に施文。浮線下に刻みを持つ。	細砂粒多、焼成良	にぶい褐	諸磯b
42	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻みを持つ。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	にぶい黄橙	諸磯b
43	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻みを持つ。地文2段LR。	砂粒多、もろい	黄褐	諸磯b
44	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻みを持つ。地文2段RL。	砂粒多、焼成不良もろい	にぶい黄褐	諸磯b
45	浮線文を横位に施文。浮線に縄文を施文。地文の縄文は原体不明。	砂粒多、焼成不良	橙	諸磯b
46	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	小礫含む、焼成不良	橙	諸磯b
47	浮線文を横位に施文。地文2段RL。	砂粒多、焼成不良	橙	諸磯b
48	浮線文を横位に施文。浮線上半截竹管による爪形文。地文2段RL。	砂粒多、焼成不良	にぶい橙	諸磯b
49	浮線文を横位に施文。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	灰褐	諸磯b
50	浮線文を横位に施文。地文2段RL。	小礫含む、焼成良	灰褐	諸磯b
51	浮線文を横位に施文。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	にぶい赤褐	諸磯b
52	浮線文を横位に施文。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	橙	諸磯b
53	浮線文を横位、斜位に施文。地文に2段RL。	砂粒少、焼成不良	にぶい黄橙	諸磯b
54	浮線文を横位に施文。浮線に縄文を施文。地文の縄文原体不明。	砂粒少、焼成不良	明赤褐	諸磯b
55	浮線文を横位に施文。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	灰赤	諸磯b
56	浮線文を横位に施文。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	灰赤	諸磯b
57	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	にぶい赤褐	諸磯b
58	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文の縄文原体不明。	砂粒多、焼成良	灰赤	諸磯b
59	浮線文を横位に施文。浮線に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	橙	諸磯b

番号	文様の観察	胎土焼成	色調	備考
60	浮線文を横位に施す。浮線上に矢羽根状の刻み。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	にふい橙	諸磯b
61	幅5mmの半截竹管による平行沈線。横位、鋸歯状に施文。地文2段RL	砂粒少、焼成良	にふい黄橙	諸磯b
62	幅5mmの半截竹管による平行沈線。間隔をあけて横位に施文。	砂粒多、焼成不良	にふい橙	諸磯b
63	幅6mmの半截竹管による平行沈線。横位、弧状に施文。	小礫多、焼成良	にふい赤褐	諸磯b
64	幅2～3mm集合沈線。横位、渦巻の文様を構成する。地文2段RL。	砂粒多、焼成不良	にふい褐	諸磯b
65	幅1cmの竹管による連続爪形文。円形の刺突を持つ。	砂粒少、焼成良	にふい黄褐	諸磯b
66	幅2～3mmの平行沈線。横位、渦巻状の施文。地文の縄文不明。	砂粒少、焼成良	にふい褐	諸磯b
67	幅3mmの平行沈線。横位、弧状に施文。	砂粒多、焼成良	暗赤褐	諸磯b
68	幅2～3mmの集合沈線を横位に施文。ボタン状の貼付。	砂粒少、焼成良	明黄褐	諸磯b
69	幅2～3mmの平行沈線を横位に施文。	砂粒多、焼成良	にふい黄橙	諸磯b
70	幅4mmの平行沈線を横位に施文。地文の縄文原体不明。	砂粒多、焼成良	にふい褐	諸磯b
71	幅3mmの平行沈線を横位に施文。地文の縄文原体不明。	砂粒多、焼成不良ザラつく	にふい褐	諸磯b
72	幅2～3mmの平行沈線を数本単位で間隔をあけて横位に施文。	砂粒多、焼成良	灰褐	諸磯b
73	幅4mmの平行沈線。横位、斜位に施文。	砂粒少、焼成良	灰黄褐	諸磯b
74	幅4mmの平行沈線。横位、弧状に施文。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	にふい褐	諸磯b
75	幅5mmの平行沈線。横位に間隔をあけて施文。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	にふい黄橙	諸磯b
76	幅5mmの平行沈線。間隔をあけて横位に施文。	砂粒少、焼成良	橙	諸磯b
77	幅3mmの平行沈線。横位に矢羽根状の施文。棒状の貼付。	砂粒多、焼成良	にふい橙	諸磯c
78	横位の浮線文上に爪形文を施文。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	黒褐	諸磯c
79	幅2～3mmの平行沈線を縦位に施文。ボタン状の貼付。	砂粒多、焼成良	にふい赤褐	諸磯c
80	幅2～3mmの集合沈線を縦位に施文。ボタン状の貼付。	砂粒多、焼成良	明赤褐	諸磯c
81	幅4mmの平行沈線を格子状に施文。ボタン状の貼付	砂粒少、焼成不良	明赤褐	諸磯c
82	幅3mmの平行沈線を横位に施文。口唇凹凸文。地文縄文の原体不明。	砂粒少、焼成良	明赤褐	諸磯c
83	幅2mmの集合沈線。縦位、斜位に施文。	砂粒少、焼成良	にふい赤褐	諸磯c
84	幅3mmの集合沈線。縦位、斜位に施文。	砂粒多、焼成良	明赤褐	諸磯c
85	幅2mmの集合沈線。縦位に施文。棒状、ボタン状の貼付。	砂粒多、焼成良	明赤褐	諸磯c
86	幅2mmの集合沈線。縦位、矢羽根状に施文。棒状、ボタン状の貼付。	砂粒多、焼成良	明赤褐	諸磯c
87	幅5mmの平行沈線。横位、斜位、同心円状に施文。陰刻を持つ。	砂粒多、焼成良	にふい褐	前期末葉
88	幅5mmの平行沈線。横位、斜位、同心円状に施文。円形、三角形の陰刻	砂粒多、焼成良	明赤褐	
89	横位、斜位の結節沈線。地文2段RL。	小礫多、焼成不良、もろい	にふい褐	前期末葉
90	幅3mmの平行沈線。斜位、弧状に施文。	砂粒多、焼成良	にふい赤褐	前期末葉
91	2段LRの斜行縄文。三角形の陰刻を二段に施す。	砂粒少、焼成不良ザラつく	赤褐	前期末葉
92	幅3mmの平行沈線。横位に施文し、沈線間に三角形の陰刻で鋸歯状施文	砂粒多、焼成不良	にふい赤褐	前期末葉
93	幅5mmの平行沈線。横位、斜位に施文。地文2段RL。	砂粒多、焼成良	褐灰	前期末葉
94	幅5mmの平行沈線。波状に施文。	砂粒多、焼成不良ザラつく	にふい赤褐	前期末葉
95	横位の沈線。	砂粒少、焼成不良	にふい赤褐	前期末葉
96	粘土紐を横位に貼付し、爪形文を施文。地文2段RL。	砂粒少、焼成良	にふい褐	前期末葉
97	幅2mmの平行沈線を数本単位で施文。地文は0段多条の1段Lr。	砂粒少、焼成良	赤褐	前期末葉
98	沈線により、横位、矢羽根状に施文。	砂粒多、焼成良	黒褐	前期末葉
99	巾15mmの波状爪形文。巾4mmの半截竹管による平行沈線、刺突文。	砂粒少、焼成良	橙	浮島
100	波状の爪形文と、半截竹管による刺突。	小礫多、焼成不良	橙	前期後半
101	幅4mmの横位に施文された平行沈線、その上下に連続した刺突。	小礫多、焼成不良	にふい赤褐	前期後半
102	2段LRの斜行縄文。	砂粒多、焼成良	明赤褐	前期後半
103	無文。口唇部にゆるい凹凸を持つ。	砂粒多、焼成良	にふい赤褐	前期後半
104	口縁部に凹凸文を持つ。棒状の貼付。地文0段多条の1段Lr。	小礫多、焼成良	赤	前期後半
105	口縁に隆帯を持ち三角形の刻みを持つ。0段多条で2段RL、LR。	砂粒少、焼成良	暗褐	前期後半
106	1段Lrの斜行縄文。	砂粒多、焼成良	暗褐	前期後半
107	2段RLの斜行縄文がまばらに施文される。	砂粒多、焼成良	にふい黄橙	前期後半
108	1段Lrの斜行縄文。	小礫多、焼成不良ザラつく	赤	前期後半
109	2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	にふい橙	前期後半
110	2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	にふい褐	前期後半
111	2段RLの斜行縄文がまばらに施文されている。	砂粒多、焼成良	にふい橙	前期後半
112	無文。口縁部は波状を呈し、屈曲する。	砂粒少、焼成良	にふい褐	前期後半
113	2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	暗赤褐	前期後半
114	2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	暗赤褐	前期後半
115	2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	暗赤褐	前期後半
116	2段RL、LRの羽状縄文。	砂粒多、焼成不良ザラつく	浅黄橙	前期後半
117	有孔浅鉢。口唇直下に隆帯に刻みを持つ。胴部沈線による文様	砂粒多、焼成不良ザラつく	浅黄橙	前期後半
118	117と同一個体と思われる。	砂粒多、焼成不良ザラつく	橙	前期後半

第3章 検出遺構・遺物

番号	文様の観察	胎土焼成	色調	備考
119	有孔浅鉢。無文、孔は径6mmを測る。	砂粒少、焼成良	にぶい橙	前期後半
120	有孔浅鉢。無文。口唇直下に径7mmの孔が穿たれる。	砂粒少、焼成良	橙	前期後半
121	有孔浅鉢。無文。径6～7mmの孔が穿たれる。	砂粒少、焼成良	橙	前期後半
122	口縁に二段の刻みを持つ隆帯。隆帯間に把手を持つ。胴部平行沈線。	砂粒少、焼成良	橙	中期
123	口縁に平行する3条の沈線。沈線下に2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	にぶい橙	加曾利E
124	隆起線により無文帯と、縄文帯に分割。縄文は2段RL、LR。	砂粒多、焼成良	明黄褐	加曾利E
125	隆起線により無文帯、縄文帯に分割。縄文は2段RL。	砂粒少、焼成良	明黄褐	加曾利E
126	隆起線により無文帯、縄文帯に分割。縄文は2段RL。	砂粒少、焼成良	橙	加曾利E
127	隆線を渦巻、弧状に施文。縄文は2段LR。	砂粒少、焼成良	明黄褐	加曾利E
128	縦位の沈線。沈線間無文。縄文2段LR。	砂粒少、焼成不良ザラつく	にぶい橙	加曾利E
129	縦位の沈線。沈線間無文。縄文2段LR。	砂粒少、焼成不良ザラつく	にぶい黄褐	加曾利E
130	2段RLの斜行縄文。	砂粒多、焼成不良ザラつく	にぶい黄褐	加曾利E
131	Rの右巻き燃糸文。	小礫多、焼成不良ザラつく	赤褐	加曾利E
132	2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	にぶい黄橙	加曾利E
133	隆帯を持つ。縄文は2段RL。	砂粒少、焼成良	褐灰	加曾利E
134	口縁部に無文帯を持つ。沈線を渦巻き状に施文。地文縄文2段RL。	砂粒少、焼成良	赤褐	堀之内
135	沈線と、2段RLの斜行縄文。	砂粒少、焼成良	にぶい褐	堀之内
136	口縁部に無文帯を持つ。	砂粒少、焼成良	にぶい橙	堀之内
137	縦位の沈線。表面磨き。	小礫多、焼成良	にぶい赤褐	堀之内
138	太い曲線的な沈線文。磨消縄文。地文縄文2段RL。	砂粒多、焼成良	にぶい黄橙	称名寺
139	太い曲線的な沈線文。縄文は磨り消されている。	砂粒少、焼成良	にぶい橙	堀之内
140	太い沈線文が施される。	砂粒多、焼成不良ザラつく	橙	堀之内
141	沈線文が斜位に施され、沈線間に縄文が充填される。	砂粒多、焼成不良ザラつく	にぶい橙	堀之内
142	沈線が弧状に施され、沈線間に刻みを持つ。橋状の把手が貼付される。	砂粒少、焼成良。	にぶい橙	堀之内
143	口縁に平行に太い沈線が施文され、その間を細い沈線が填れられる。	砂粒多、焼成良	浅黄橙	堀之内
144	口縁に8の字状の貼付。沈線による幾可学文。沈線内2段LRの縄文	砂粒多、焼成良	にぶい赤褐	堀之内
145	沈線文。沈線内は2段RL、LRの縄文。	砂粒多、焼成不良ザラつく	にぶい橙	堀之内
146	口縁に平行する沈線。	砂粒多、焼成不良ザラつく	灰褐	加曾利B
147	口縁に平行する沈線文。	砂粒多、焼成不良ザラつく	明黄褐	加曾利B
148	口縁部突起、隆帯が縦、横位にある。	砂粒多、焼成不良	にぶい黄橙	加曾利B
149	口縁に平行する沈線文、隆帯。隆帯には刻みを持つ。	砂粒多、焼成良	にぶい赤褐	安行
150	口縁に平行する沈線文、隆帯。隆帯に刻みを持つ。	砂粒多、焼成不良	にぶい褐	安行
151	口縁に平行する沈線文。沈線内刻み。胴部は弧線文。縄文2段LR。	砂粒少、焼成良	にぶい橙	安行
152	口縁に平行する斜位の刻みが二段施される。胴部斜位の沈線。	砂粒少、焼成良	褐	安行
153	豚鼻状の貼り付けと、それらを結ぶ隆帯。隆帯上は2段RL。	砂粒多、焼成良	橙	安行
154	口縁に隆帯と突起を持つ。	砂粒多、焼成良	にぶい褐	後期後半
155	豚鼻状の貼り付けと、それを結ぶ隆帯、沈線。縄文2段RL	砂粒多、焼成不良	橙	後期後半
156	口縁部にラッパ状の把手を持つ。	砂粒少、焼成良	暗赤褐	後期後半
157	横位の沈線。縄文は2段LR	砂粒多、焼成良	明赤褐	後期後半
158	口唇部にゆるい凹凸文、列点文が横位に施される。	砂粒多、焼成良	にぶい橙	後期後半
159	細い沈線が施される。	砂粒多、焼成不良ザラつく	橙	後期後半
160	横位の平行沈線。	砂粒多、焼成不良ザラつく	橙	後期後半
161	胴部に隆帯を持つ。隆帯上に凹凸文が施される。	砂粒多、焼成不良ザラつく	橙	後期後半
162	胴部に隆帯を持つ。隆帯上に凹凸文が施される。	砂粒多、焼成不良ザラつく	にぶい赤褐	後期後半
163	太い沈線が施される。	砂粒多、焼成良	橙	後期後半
164	隆帯を持ち、太い沈線によって文様が構成される。	砂粒少、焼成良	明赤褐	後期後半
165	無文	砂粒多、焼成良	明赤褐	後期後半
166	沈線によりL字文状に施文される。	砂粒少、焼成良	にぶい褐	晩期
167	注口土器	砂粒多、焼成良	橙	後期後半
168	注口土器	砂粒少、焼成良	にぶい黄橙	後期後半
169	深鉢口縁把手。	砂粒少、焼成良	褐	後期後半
170	深鉢底部。網代痕	砂粒少、焼成良	にぶい橙	後期後半
171	深鉢底部。無文	砂粒少、焼成不良ザラつく	にぶい橙	後期後半
172	深鉢底部。網代痕	砂粒少、焼成良	にぶい橙	後期後半
173	深鉢底部。網代痕	砂粒少、焼成良	にぶい黄橙	後期後半
174	深鉢底部。無文。	砂粒少、焼成良	橙	後期後半
175	深鉢底部。網代痕	砂粒少、焼成良	にぶい褐	後期後半
176	土製円盤	砂粒少、焼成良	にぶい褐	諸磯b

(2) 石 器

下東西遺跡では、多数の石器や石製品、それに剥片類が出土しているが、遺跡自体が縄文時代から中世に至る複合遺跡である事から、打製石斧などの特定器種の石器を除いては、残念ながら所属する時代を断定できず、縄文時代の石器の総点数もはっきりと把握できない。そのために、ここでは抽出できた石器についてのみ記述する。出土状態は土器と同様に後世の遺構等により原位置から動いていると考えられる。

総点数は64点で、内訳は打製石斧29点、石鏃1点、剥片石器24点、敲石4点、凹石5点、石皿1点である。打製石斧は29点出土しているが、その側縁、及び刃部と頭部の状態から、次の4つに大きく分類される。

(A類) 刃部と頭部の幅がほぼ等しく、両側縁が平行して直線的なもの。

(B類) 刃部が頭部よりも幅広く、撥形の形状を呈するものの、両側縁が直線的なもの。

(C類) B類と同様に刃部が頭部よりも幅広く、撥形の形状を呈するが、側縁は内湾するもの。

(D類) 両端の幅がほぼ等しいうえに同じ形状を呈し、中央部に両側縁から大きなくびれが対称的に入る事により内湾するもの。

これらを従来の分類と照らし合わせると、A類は短冊形、B類とC類が撥形、D類が分銅形の三形態に相当する。点数の内訳は、A類が5点、B類が11点、C類が6点、D類が7点であり、B類がやや多いものの、その他はほぼ点数が等しい。

欠損の状態は、両方を欠損する資料は無い、それに対して、頭部と刃部のどちらか一方を欠損する資料は多い、内訳は頭部のみが9点、刃部のみが7点である。欠損した資料同士の接合例は1点も見られない。また、形態差による欠損部の偏りは認められない。

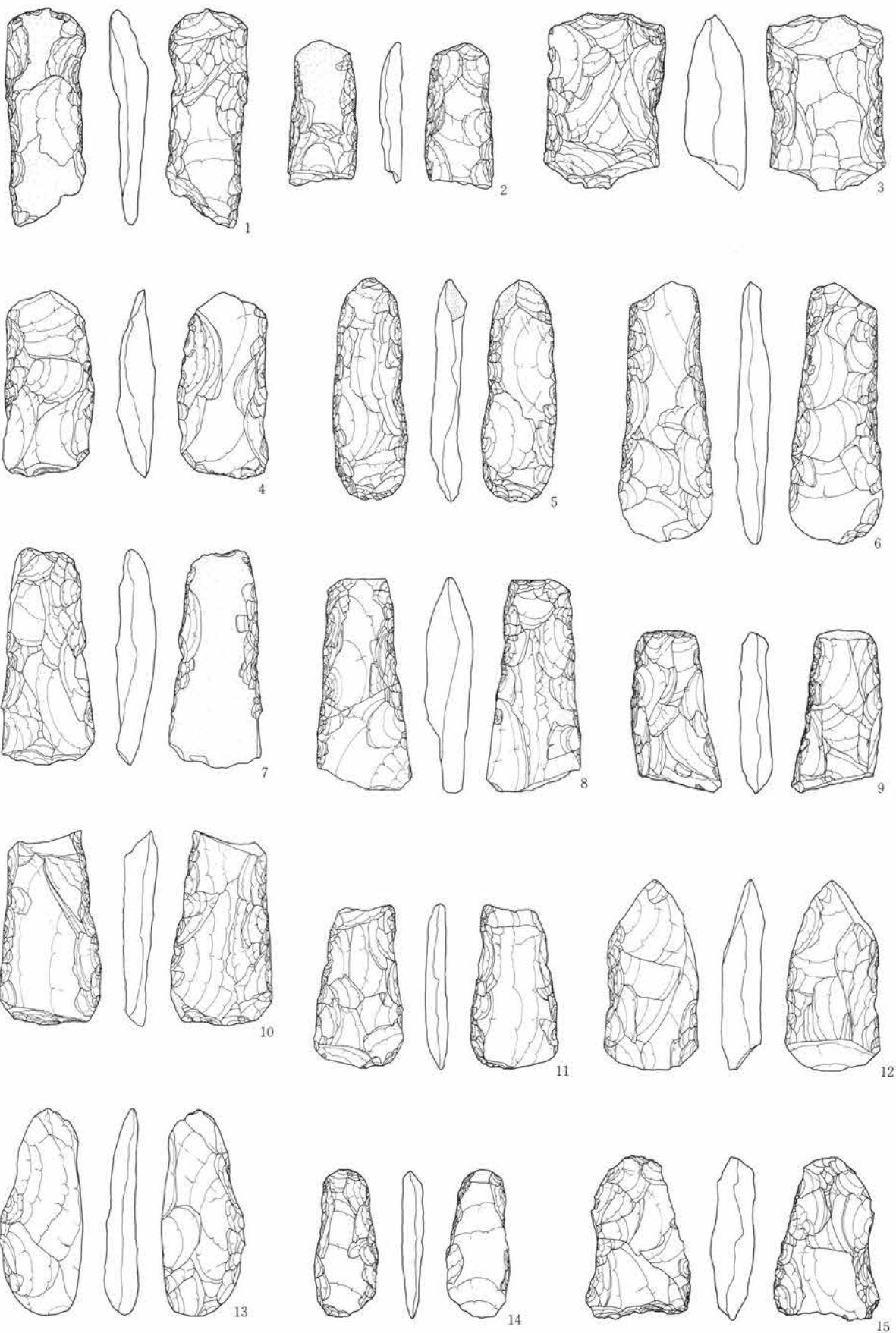
正面や裏面、あるいは側縁や頭部に礫面が残存する資料は20点と多く、全体の約30%を占める。残存位置については主に片面部分に認められ、一部には片面のほぼ全面に残存する資料も5点程存在する。この様に、礫面が残存する大きな剥片を素材とするのは、原石自体の持つカーブの状態が打製石斧の形状に適していると言えるのかも知れない。

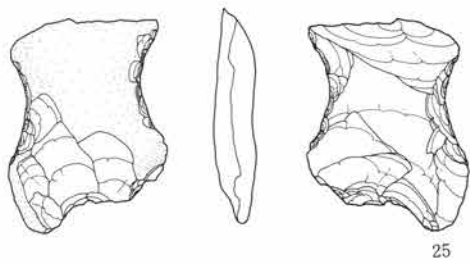
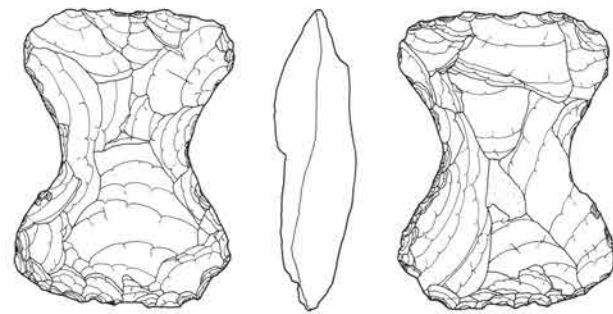
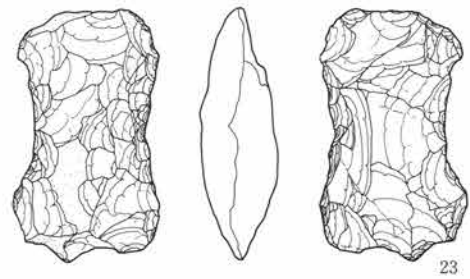
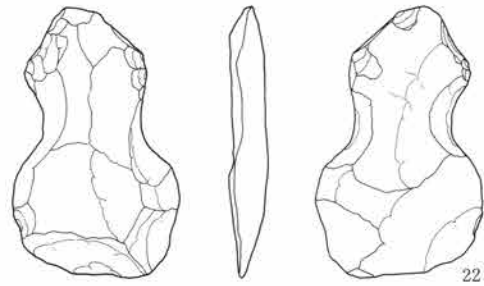
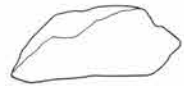
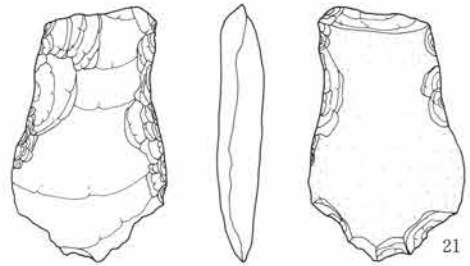
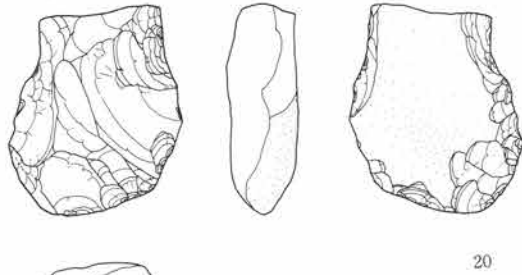
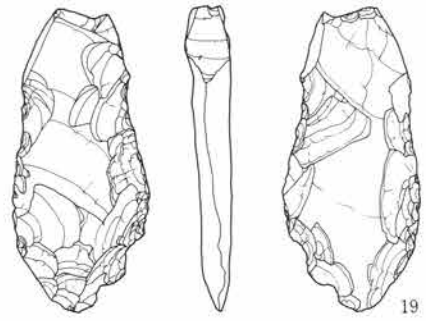
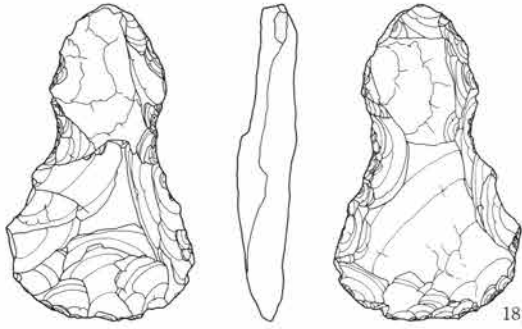
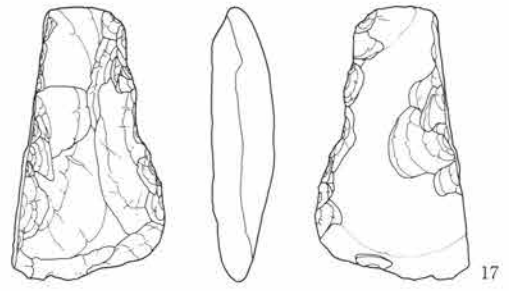
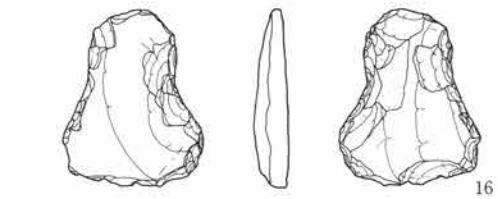
石材については、黒色頁岩が多用されている。この石材は利根川上流の一支流である赤谷川流域を産出地としており、利根川の河川敷で数多く認められる石材の一つである。考古資料として、旧石器時代・縄文時代の石器に最も利用される石材でもある。当遺跡は利根川の旧流路から直線にして約5kmと近接しており、遺跡内への持ち込みも十分考えられる。また、周辺の縄文時代遺跡でもこの石材が多用されている。

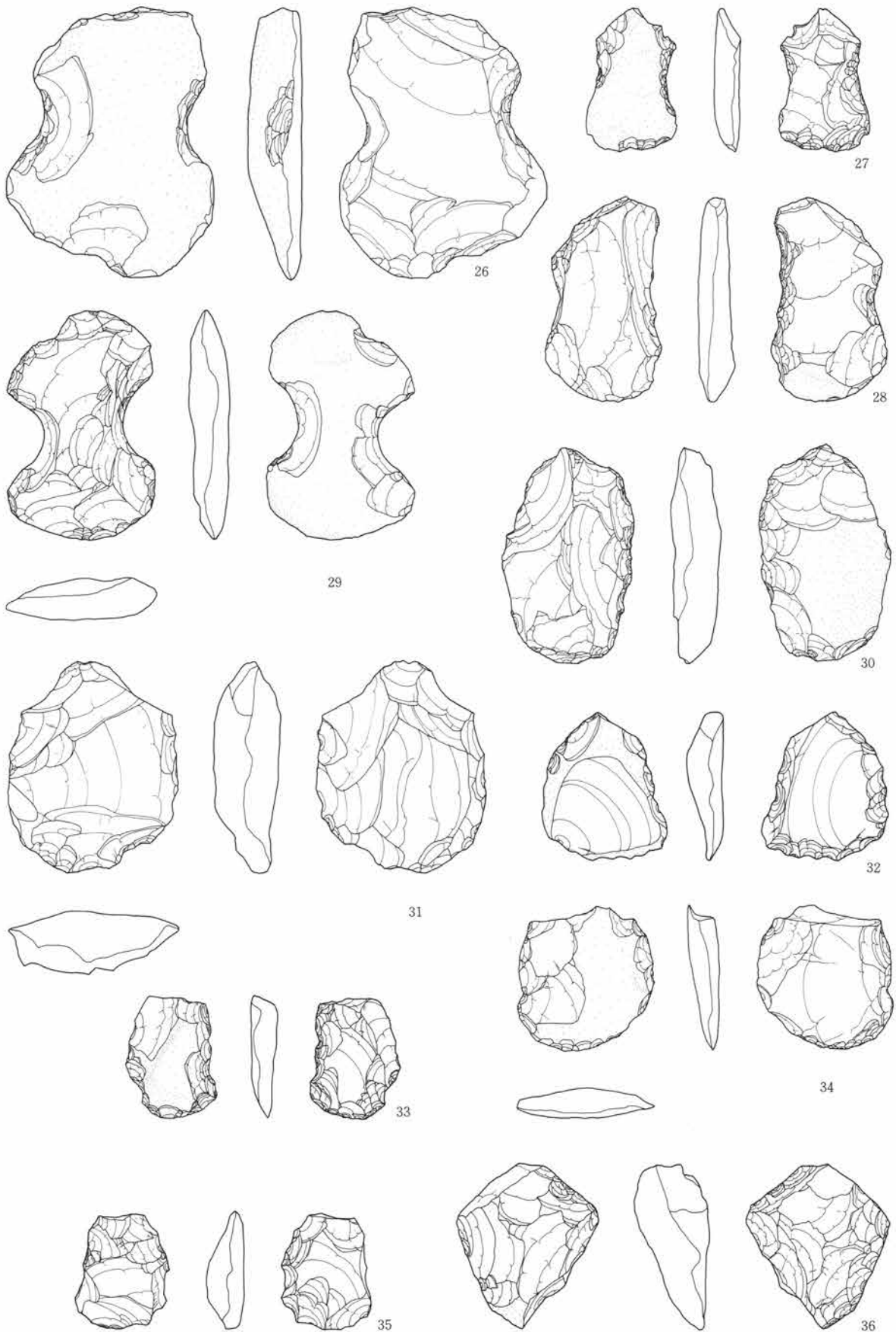
剥片石器は24点出土しているが、その形状から二つに大別できる。一つは調整の施法と厚みのある剥片を素材としている資料で、石核石器と言っているものであり、一部には打製石斧に類似するものも含まれる。もう一方は剥片の両側縁、あるいは先端部分の縁辺に調整加工や使用した痕跡を残す資料である。この両者については、前者には搔器的な用途が想定されるのに対して、後者は削器的な用途がより強く想定される。

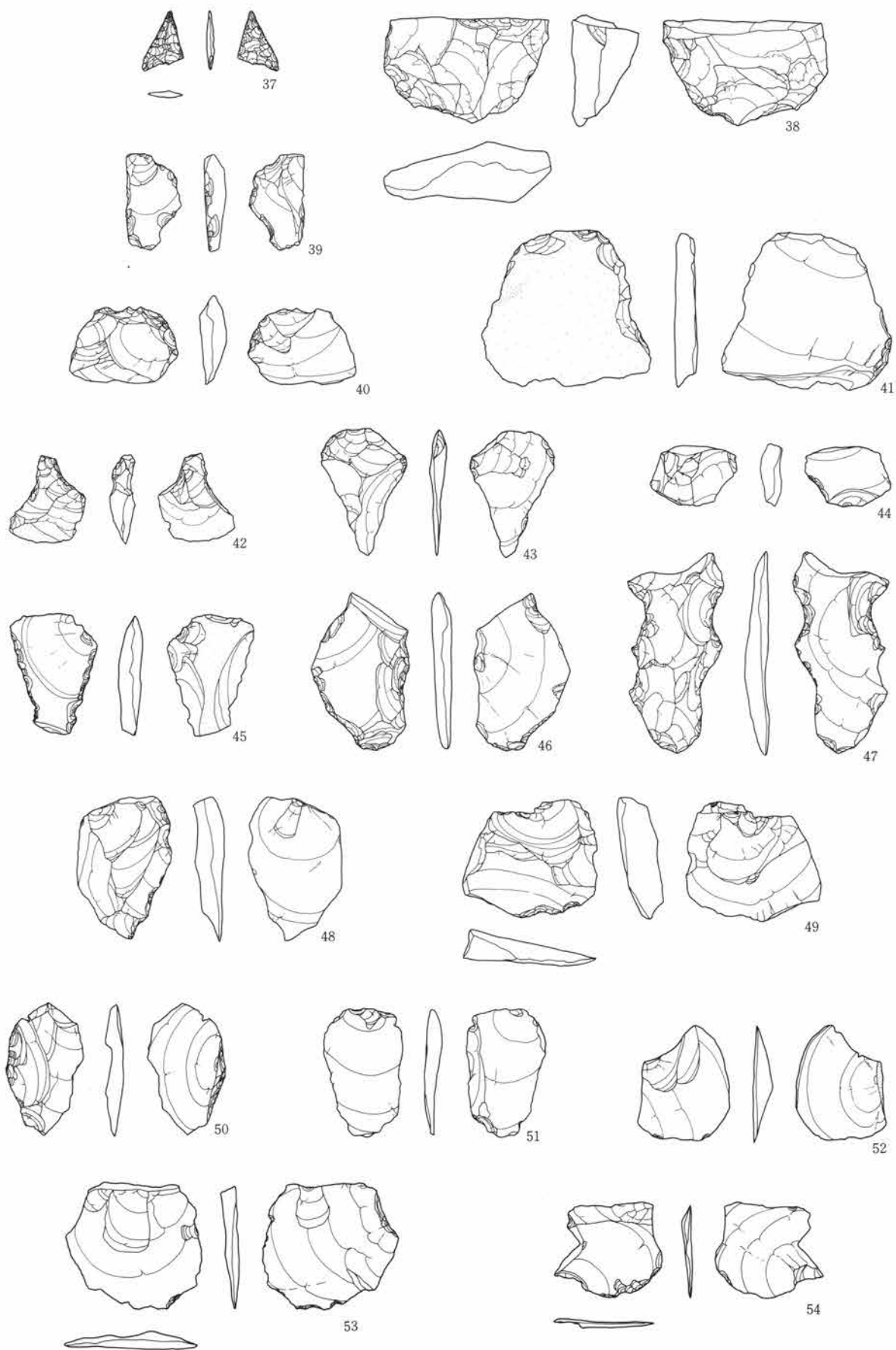
敲石は可能性があるものも含めて4点出土している。そのうちの2点は楕円礫の約半分を欠損しており、残存する一端、さらには両面のほぼ中央に敲打の痕跡が認められる。

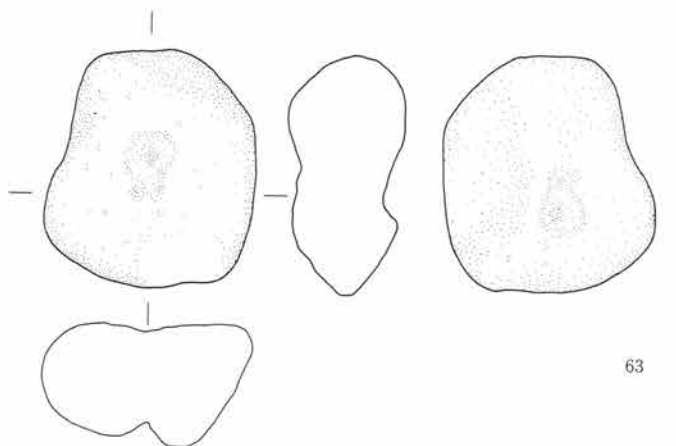
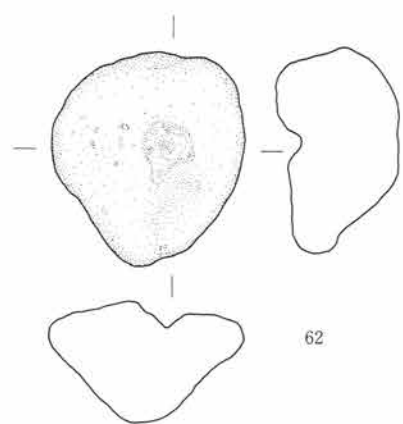
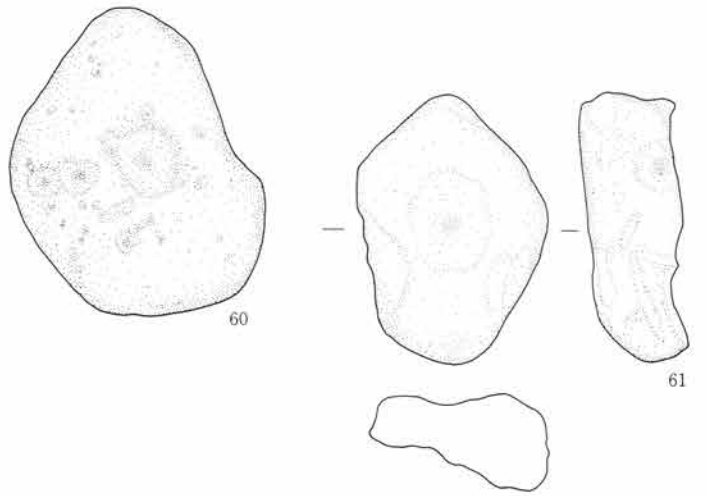
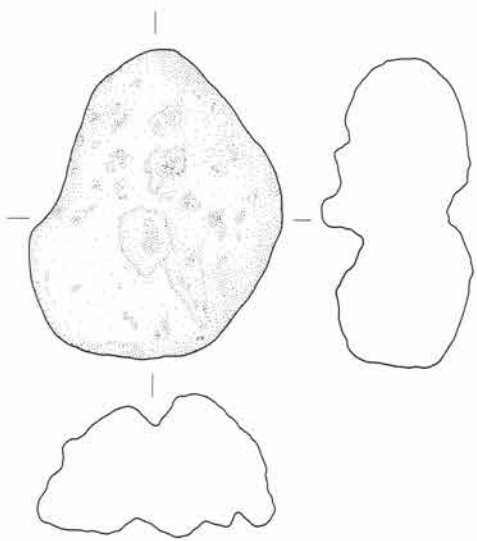
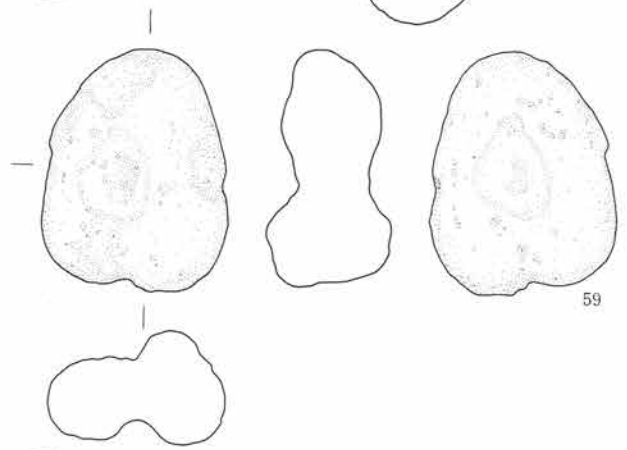
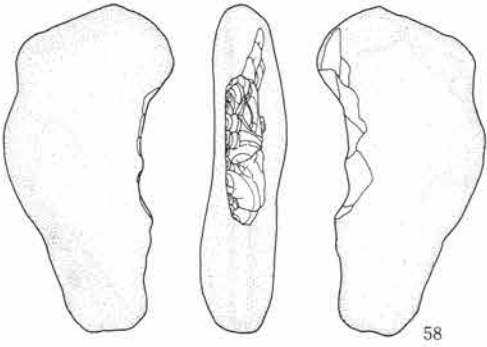
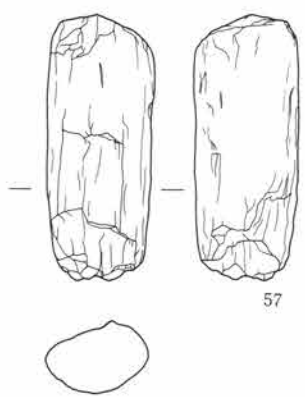
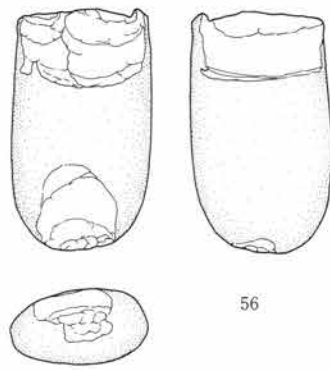
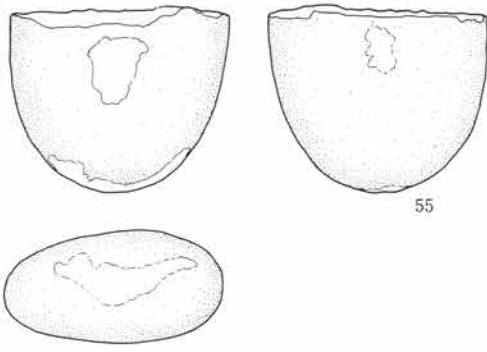
凹石は、5点出土している。すべて粗粒輝石安山岩の楕円礫を素材としており、両面のほぼ中央部に一つ、ないしは数個の凹を持っている。石材は榛名山を原産地とするものであり、本遺跡の周辺で数多く認められる資料である。周辺の縄文時代遺跡では多孔石にもこの石材が多用されている。

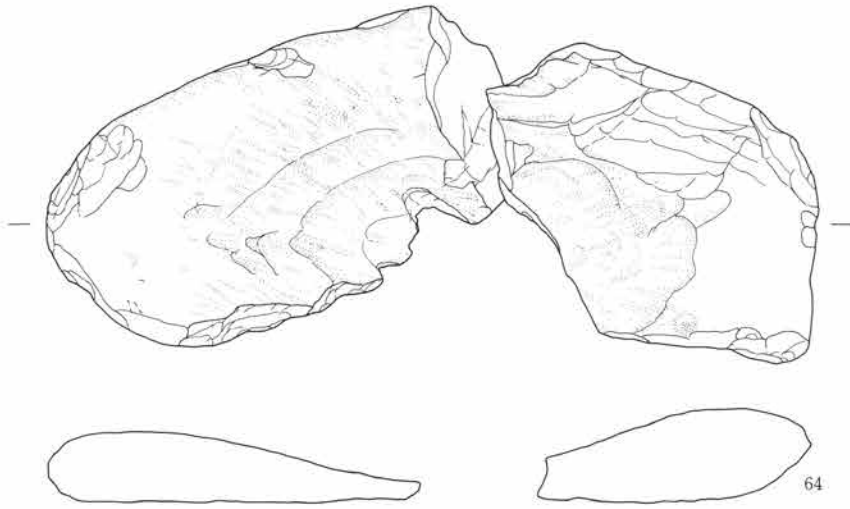












No	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
1	打製石斧 (短冊形)	S K 56	10.6	4.1	1.9	94.2	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面に礫面が残存する。ほぼ平行する両側縁を持つが、刃部を欠損する。
2	打製石斧 (短冊形)	130 I - 42	7.4	3.5	1.2	45.7	輝石安山岩 (粗粒)	縦長の剥片を素材とし、片面の頭部付近に礫面が残存する。ほぼ平行する両側縁を持ち、刃部を欠損する。
3	打製石斧 (短冊形)	126 J - 13	9.2	6.1	3.2	225.8	黒色頁岩	肉厚な剥片を素材とし、片面の頭部付近に礫面が残存する。ほぼ平行する両側縁を持ち、刃部を欠損する。
4	打製石斧 (短冊形)	F 区	9.7	4.8	1.9	93.1	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、ほぼ平行する両側縁を持つ。側縁の調整は少なく、頭部の一部を欠損する。
5	打製石斧 (短冊形)	117 H - 12	11.5	3.8	1.5	86.8	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の頭部付近に礫面が残存する。頭部の一側縁の一部に礫面が残存する。
6	打製石斧 (撥形)	111 H - 24	13.5	4.9	1.7	132.0	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、両側縁に入念な調整を施す。最大幅は刃部に存在する。頭部を欠損する。
7	打製石斧 (撥形)	S D 118	11.1	4.8	2.1	128.6	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。側縁の調整は少なく、刃部を欠損する。
8	打製石斧 (撥形)	S K 222	11.0	4.8	2.4	134.0	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の一部に礫面が残存する。最大の厚さは中央部に存在するが、刃部を欠損する。
9	打製石斧 (撥形)	I 区	8.5	4.8	1.8	71.9	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、頭部に礫面が残存する。一方の側縁の一部と刃部を欠損する。
10	打製石斧 (撥形)	S K 44	10.0	5.3	1.7	108.5	輝石安山岩 (粗粒)	横長の剥片を素材とし、一方の側縁の刃部寄りに礫面が残存する。刃部と頭部を欠損する。
11	打製石斧 (撥形)	S D 23	8.3	4.7	1.1	57.8	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、一方の側縁の頭部寄りに礫面が残存する。頭部を欠損する。
12	打製石斧 (撥形)	130 J 20	9.9	4.9	2.1	117.7	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、頭部は尖頭形を呈す。刃部を欠損する。
13	打製石斧 (撥形)	S J 12	10.8	4.4	1.8	82.4	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、一側縁はほぼ直接的であるものもう一方は外反する。表面は風化が激しい。

第3章 検出遺構・遺物

No	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
14	打製石斧 (撥形)	129 J-17	7.7	3.4	1.1	34.1	輝石安山岩 (粗粒)	縦長の剥片を素材とし、頭部に礫面が残存する。側縁の調整は入念で、最大厚は頭部にある。
15	打製石斧 (撥形)	S K 220	8.1	5.4	2.3	99.5	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、一側縁はほぼ直線的であるものの、もう一方は内湾する。
16	打製石斧 (撥形)	不明	7.0	5.6	1.4	59.1	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の頭部の一部に礫面が残存する。両側縁の頭部寄りに内湾するくびれを作り出す。
17	打製石斧 (撥形)	S K 299	10.7	6.0	2.5	197.5	黒色頁岩	肉厚な横長の剥片を素材とし、一側縁は直線的であるものの、もう一方はやや内湾する。
18	打製石斧 (撥形)	123 J-10	12.5	7.2	2.2	156.7	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、一方の側縁の頭部寄りに礫面が残存する。最大厚は中央部に存在する。
19	打製石斧 (撥形)	S J 49	11.8	5.4	1.8	115.2	黒色安山岩	縦長の剥片を素材とし、両側縁の頭部寄りにやや内湾するくびれを作り出す。刃部の一部を欠損する。
20	打製石斧 (撥形)	123 J-10	7.7	6.6	2.8	174.5	黒色頁岩	肉厚な横長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。頭部を欠損する。
21	打製石斧 (撥形)	S J 86	9.8	6.2	1.7	136.2	輝石安山岩 (粗粒)	縦長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。頭部と刃部の一部を欠損する。
22	打製石斧 (撥形)	136 J-7	10.5	6.6	1.5	104.7	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、両側縁ともほぼ中央部で内湾する。側縁の調整は少なく、表面の風化が激しい。
23	打製石斧 (分銅形)	S K 164	9.9	5.8	3.0	175.7	輝石安山岩 (粗粒)	肉厚な横長の剥片を素材とし、片面の頭部と刃部の一部に礫面が残存する。
24	打製石斧 (分銅形)	S K 246	11.7	8.6	3.0	307.1	黒色頁岩	肉厚な横長の剥片を素材とし、片面のほぼ中央部の1部に礫面が残存する。最大厚は中央部に存在する。
25	打製石斧 (分銅形)	119 I-05	8.0	6.2	1.6	99.1	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面の大部分に礫面が残存する。刃部と頭部を欠損する。
26	打製石斧 (分銅形)	S D 23	14.1	10.9	2.8	495.1	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。大形の打製石斧だが、頭部と刃部の一部を欠損する。
27	打製石斧 (分銅形)	136 J-6	7.3	4.7	1.3	60.0	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。最大厚は中央部に存在し、頭部を欠損する。
28	打製石斧 (分銅形)	S D 23	10.6	6.1	1.8	144.2	輝石安山岩 (粗粒)	横長の剥片を素材とするが、片面の刃部に礫面が残存する。最大厚は刃部に存在し、頭部を欠損する。
29	打製石斧 (分銅形)	118 I-10	11.9	7.7	2.1	205.2	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。最大厚は中央部に存在する。
30	剥片石器	97H-04	11.2	6.8	2.5	211.7	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の約半分に礫面が残存する。周縁の調整は少ないが、打製石斧の可能性も考えられる。
31	剥片石器	S E 37	11.0	8.9	3.5	365.9	黒色頁岩	肉厚な横長の剥片を素材とする。両面の周縁部からの調整を施し、楕円形を呈す。
32	剥片石器	143 J-38	7.7	6.3	1.8	87.0	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の周縁に礫面が残存する。先端と両側縁の三つの縁辺に調整を施す。
33	剥片石器	S J 14	6.2	4.3	1.4	49.8	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面の約半分に礫面が残存する。一側縁に調整が主として認められる。
34	剥片石器	S J 32	7.2	7.0	1.5	98.8	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の約半分に礫面が残存する。両面の周縁部から調整を施すが、一端を欠損する。
35	剥片石器	134 J-09	5.8	4.3	1.9	64.0	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、両側縁に比較的大きめの調整を施す。
36	剥片石器	S J 20	8.6	7.5	3.7	221.6	灰色安山岩	肉厚な横長の剥片を素材とし、一端の一部に礫面が残存する。両側縁を含む三つの縁辺に調整を施す。
37	石 鏃	S J 148	2.8	1.8	0.3	2.0	黒色安山岩	縦長の剥片を素材とする凹基無茎鏃であるが、片脚を欠損する。
38	剥片石器	134 J-09	5.3	8.8	3.1	141.9	黒色頁岩	大形の不定形の剥片を素材とし、半円状の周縁の両面に調整を施す。

第1節 縄文時代

No	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
39	剥片石器	S D118	5.0	3.8	1.1	18.5	珉質頁岩	縦長の剥片を素材とし、両側縁の両面に調整を施す。削器に近いと考えられる。
40	剥片石器	128 J—05	5.7	4.0	1.3	27.5	黒色頁岩	不定形の剥片を素材とし、一側縁の両面に調整を施す。
41	剥片石器	S D118	8.1	8.7	1.1	121.6	灰色安山岩	大形の縦長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。両側縁の一部の片面のみに調整を施す。
42	剥片石器	S J 57	4.6	3.7	1.2	15.3	黒色頁岩	正面の先端部に礫面が残存する剥片を素材とし、左側縁の一部に調整を施す。
43	剥片石器	117 I—14	6.6	4.4	0.8	19.1	黒色頁岩	縦長の薄い剥片を素材とし、両側縁の一部の両面に調整を施す。
44	剥片石器	S K220	3.1	4.0	1.0	18.4	黒色頁岩	不定形、あるいは折断された縦長の剥片を素材とし、一辺に調整を施す。
45	剥片石器	S D100	6.2	4.3	1.1	30.0	黒色頁岩	片面に礫面が残存する横長の剥片を素材とし、先端の縁辺と側縁の隣り合う二つの縁辺に調整を施す。
46	剥片石器	125 I—05	7.7	5.0	1.0	45.6	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、先端の縁辺と側縁の隣り合う二つの縁辺に調整を施す。
47	剥片石器	136 J—06	9.4	5.0	1.1	52.8	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、打点側と先端の相対する二つの縁辺の両面に調整を施す。
48	剥片石器	S J 33	7.4	4.9	1.4	57.9	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、右側縁に調整を施す。裏面の一部に使用痕が認められる。
49	剥片石器	130 I—42	5.8	7.0	1.5	70.5	黒色頁岩	不定形の剥片を素材とし、先端の縁辺に調整を施す。
50	剥片石器	117 I—12	6.9	3.9	0.9	25.3	黒色頁岩	剥離面頭部調整を残す横長の剥片を素材とし、先端の縁辺に使用痕が認められる。
51	剥片石器	S D118	6.7	4.1	0.8	27.4	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、先端部に調整を施す。
52	剥片石器	S J 85	6.0	4.6	1.0	23.0	黒色頁岩	不定形の剥片を素材とし、礫面を打面とする。一側縁の一部の片面のみに使用痕が認められる。
53	剥片石器	S J 148	6.4	7.0	0.8	44.2	黒色頁岩	不定形の剥片を素材とし、両側縁と先端の三つの縁辺に使用痕が認められる。
54	剥片石器	S D23	4.8	5.3	0.5	16.8	黒色頁岩	不定形の薄い剥片を素材とし、一側縁に調整を施し、もう一方の側縁に使用痕が認められる。
55	敲 石	S J 26	7.4	8.7	4.5	383.0	輝石安山岩 (粗粒)	両面のほぼ中央部と一端に敲打痕が認められるが、楕円礫の約半分を欠損する。
56	敲 石	S D59	9.5	5.5	2.9	249.3	輝石安山岩 (粗粒)	楕円礫の一端を欠損するが、その欠損面から両面への剥離痕と、もう一端部分の片面にも剥離痕が認められる。
57	敲 石	S E44	10.3	4.1	2.7	189.5	黒色片岩	円柱状の礫を素材とし、石材のため敲打痕ははっきりしない。
58	敲 石	S E09	12.9	6.3	2.9	311.0	黒色頁岩	長めの不定形の礫の側面に一方からの剥離痕をいくつも持ち、敲石以外の可能性もある。
59	凹 石	S K206	9.5	7.4	5.1	275.3	輝石安山岩 (粗粒)	楕円形の礫の両面のほぼ中央に大きなくぼみ一つずつ持つ。
60	凹 石	109 I—07	12.2	9.8	5.7	669.1	輝石安山岩 (粗粒)	やや楕円形に近い礫の両面にいくつものくぼみを持つ。
61	凹 石	S D59	10.6	7.5	3.8	295.0	輝石安山岩 (粗粒)	楕円形に近い礫の両面と一方の側縁の一つずつのくぼみを持つ。
62	凹 石	S T12	8.4	7.7	4.8	252.4	輝石安山岩 (粗粒)	一端がやや尖るような楕円形の礫の一面の中央にくぼみを持つ。断面は三角形である。
63	凹 石	S D59	9.4	8.4	4.7	512.2	輝石安山岩 (粗粒)	正方形に近い礫の両面のほぼ中央に大きなくぼみ一つずつ持つ。
64	石 皿	S D23	30.7	11.3	3.5	1562.5	緑色片岩	楕円形状を呈し、片面のほぼ中央にくぼみを持つ。約半分を欠損し、残存する資料も二つに割れている。

第2節 弥生時代

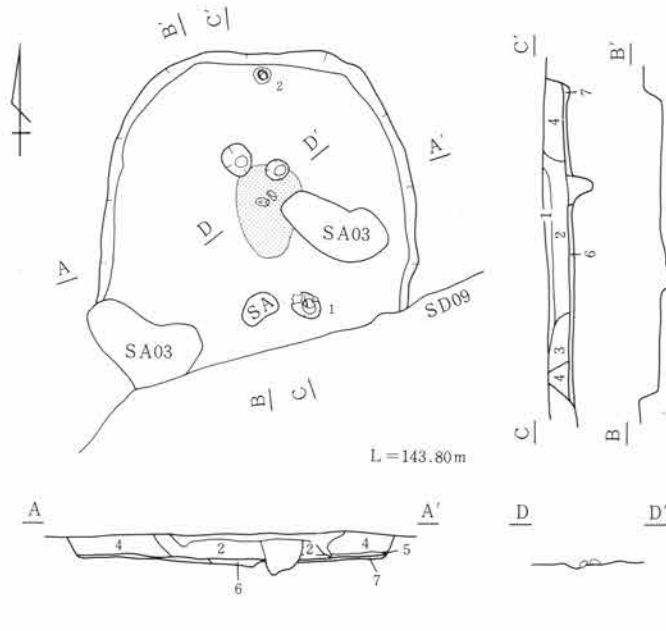
1 竪穴住居跡 (S J)

S J 25

13

本住居跡は、95～97G-16～18グリッドに位置し、SA03、SD09と重複する。新旧関係は本遺構の方が古い。平面形態は、南壁をSD09に削除されているが隅丸方形と推定される。規模は、東西3.3mを測り、南北、面積は不明、主軸方向は、真北を指す。

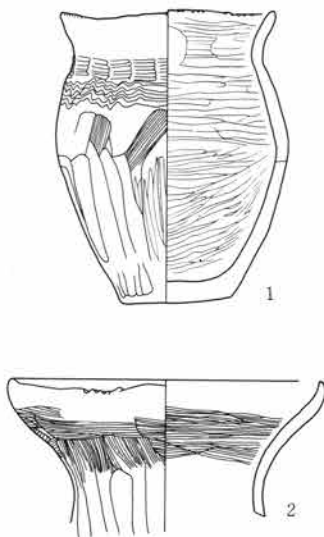
床面は、ほぼ平坦で整い、全体に軟らかい。貼床を2～3cm施している。壁は、勾配をもって立ち上がり、壁高は13～19cmを測り、平均は17cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。



炉は、住居中央北側に位置する。規模は70×100cmの範囲に僅かな焼土ブロック、炭化物が分布するのみで床面を掘り窪めていない。中央より火を受けた角閃石安山岩が出土した。

- 1 黒色粘質土 C軽石 (1～10mm)
- 2 黒褐色土 微量の黄褐色軽石 (2～5mm)
- 3 黒色砂質土
- 4 黒褐色土 多量の黄褐色軽石 (3～10mm)
- 5 黒褐色砂質土
- 6 焼土
- 7 黄褐色粘質土と黒色土の混土

0 2m



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	弥生土器 小型甕 床直	11.3・5.8・15.5 3/4 粗砂粒、細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は直線的にやや開き、胴部は上位でややふくらむ。口縁部は横撫で、口唇端部には刻み目。口縁部は横撫で、頸部は6条単位で右廻りの簾状文でその下には、6条単位の櫛描波状文がまわる。胴部中位以下は縦方向のヘラ削り。内面はヘラ磨きが施されている。
2	弥生土器 壺 床直	16.4・—・— 1/6 細砂粒 軟質 灰白色	頸部から口縁部にかけてのみ、口縁部は外反ぎみに開き、口唇部は内湾する。口唇部は横撫で口縁部は横方向の刷毛目。頸部は縦方向の刷毛目がみられる。口縁部の内面には横方向の刷毛目がみられる。

S J 101

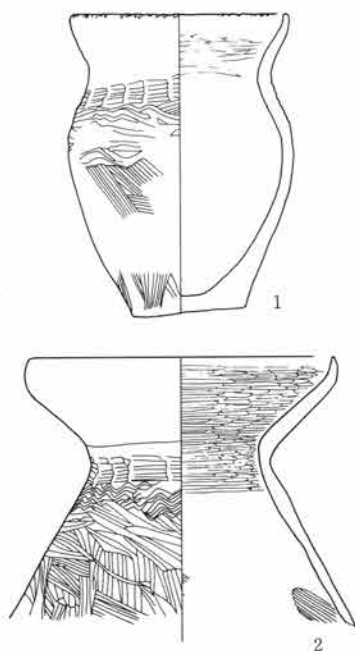
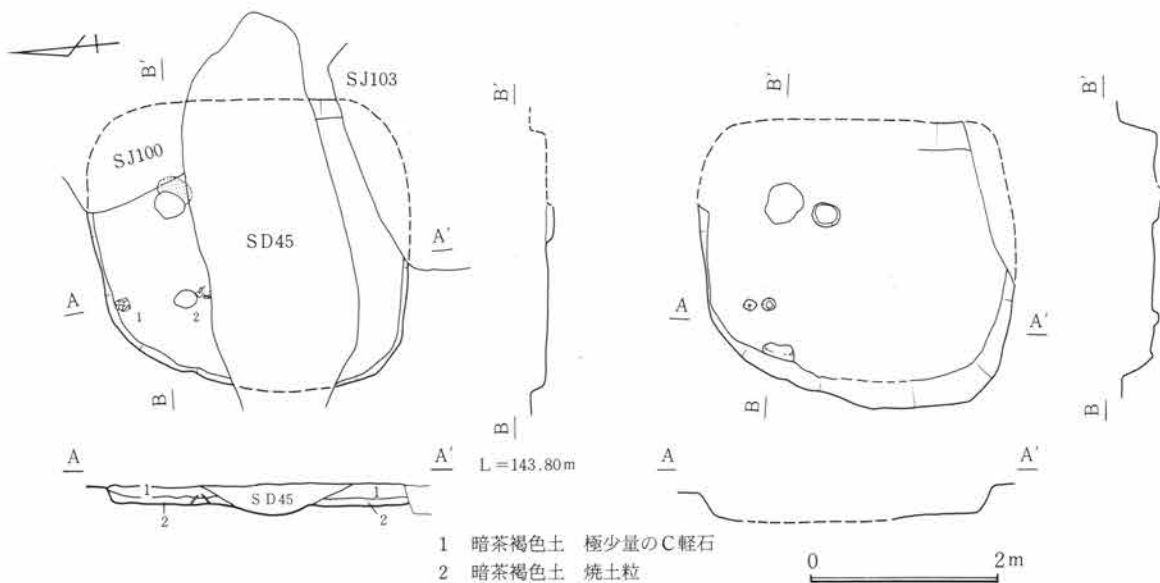
15

本住居跡は、90～92G—14～15グリッドに位置し、S D45、S J 100・S J 103と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の大半は、重複する遺構によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、隅丸台形を呈すると推測される。規模は、東西3.00m前後、南北3.20m前後、面積は推定で7.52m²を測る。主軸方向は、ほぼN方向を指す。覆土は、自然堆積状を呈し、暗褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、16～18cmを測る。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

炉は、住居中央よりやや東北よりに位置し、西側半分をピット状遺構によって壊されている。

掘り方は、床面より20cm前後掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、ピットが1基検出され、形態は楕円形で、規模は径30×24cm、深度5cmを測る。



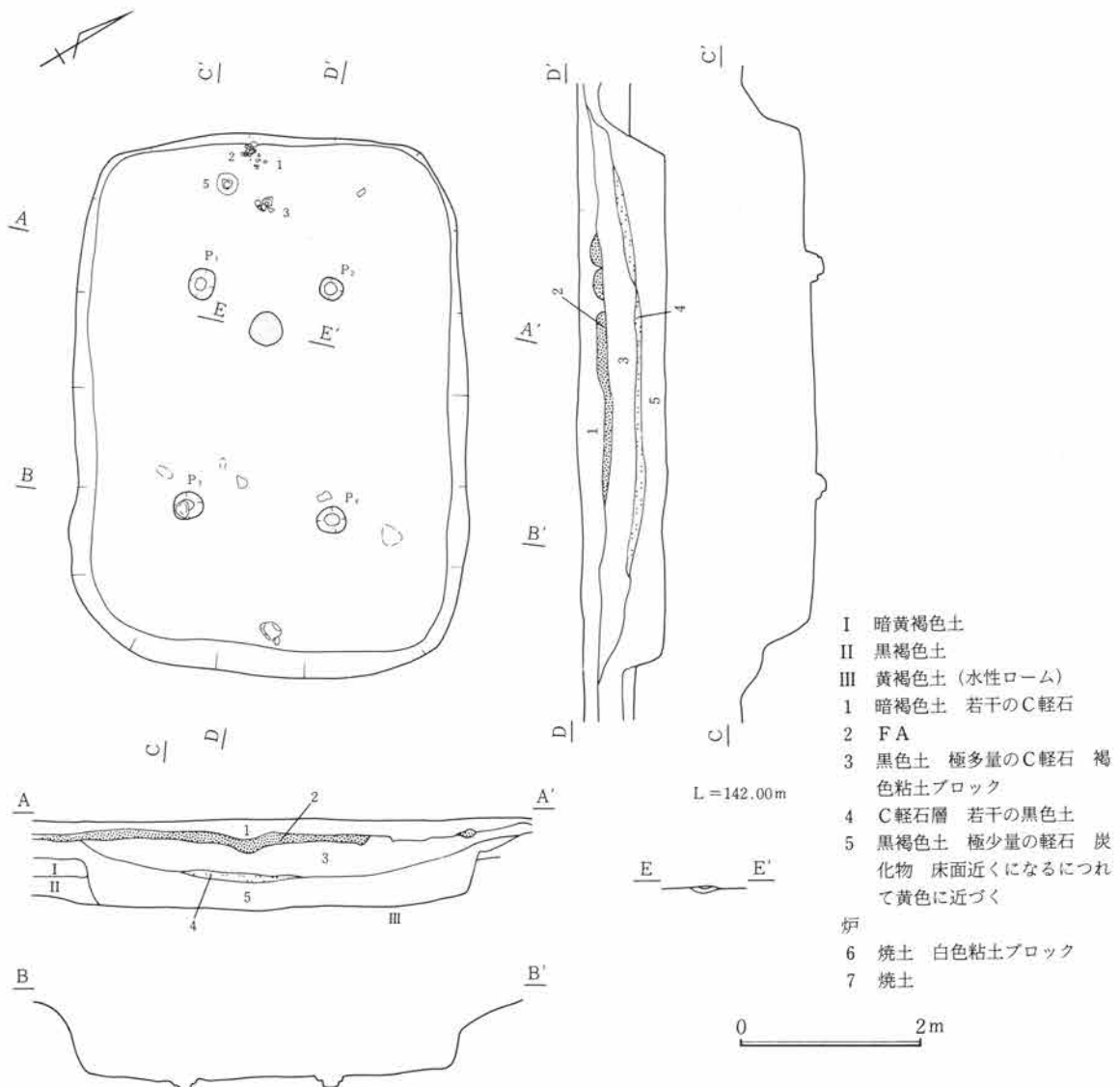
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	弥生土器 小型甕 床直	11.4・6.1・16.0 4/5 細砂粒・粗砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部はやや開き、口唇部は内湾する。胴部は上位でふくらむ。口唇端部は刻み目。口縁部は横撫で、頸部には5条単位で右廻りの簾状文でその下にはくずれた櫛描波状文がまわる。胴部中位以下は縦方向ヘラ削り。内面はヘラ磨きが施されている。
2	弥生土器 壺 床上6cm	16.2・—・— 1/4 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は直線的に開き、口唇部は内湾する。胴部は中位で大きくふくらむ。口縁部は横撫で、頸部は6条単位で右廻りの簾状文でその下には6条単位の櫛描波状文で胴部はヘラ磨き。内面は口縁部から胴部上位まではヘラ磨き、胴部中位は横方向への刷毛目が施されている。

S J 124

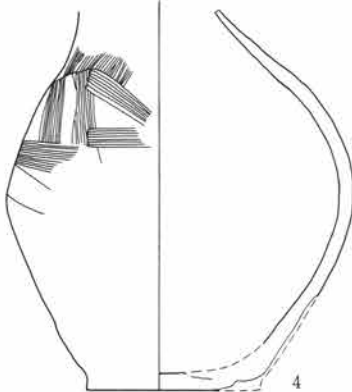
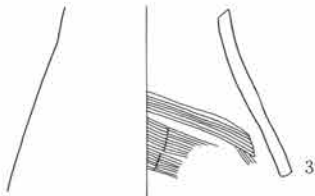
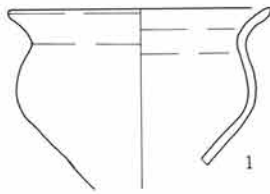
本住居跡は、66~69E-32~34グリッドに位置し、本遺構の確認面より上面で畠状遺構がみられるが、直接的な重複関係はみられない。平面形態は、隅丸長方形を呈す。規模は、東西5.89m、南北4.38m、面積23.76m²を測る。主軸方向は、N-61.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、本遺構廃棄後は、黒褐色土が25cm前後堆積した後に、浅間C軽石層、黒色土、榛名二ツ岳火山灰 (FA) 層で覆われている。

床面は、地山をそのまま踏み固めて使用している。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、44~70cmを測る。壁溝・貯蔵穴は、検出されなかったが、柱穴は、4本検出され、各々の形態・規模は、P₁が楕円形で径34×30cm、深度14cm。P₂は円形で径26cm前後、深度12cm。P₃は楕円形で径34×32cm、深度12cm。P₄は円形で径30cm、深度20cmを測る。また、西壁・北壁側のセクションでは、壁外に土墨状の高まりがみられたが、周堤かどうかは明確でなかった。

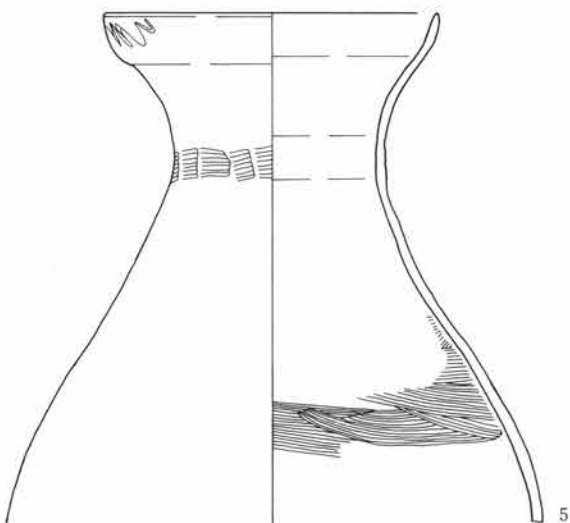
炉は、中央よりやや西に位置し、床面をやや掘り込んで設けられ、形態は楕円形を呈し、規模は径37×32cmを測る。焼土は深さ6cmまで及んでいる。



第2節 弥生時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	弥生土器 台付甕 床直	14.0・—・— 3/4 細砂粒 軟質 灰黄褐色	口縁部は外反ぎみに開く。胴部は上位で大きくふくらむ。口縁部は横撫で、胴部の整形は磨耗のため不明。
2	弥生土器 小型甕 床直	—・—・— 1/5 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部、胴部下半は欠損。頸部には右廻りの簾状文が施されているが単位は不明。その下には6条単位の櫛描波状文、胴部上位には鋸歯文。内面は刷毛目が施されている。
3	弥生土器 壺 床直	—・—・— 1/4 細砂粒 軟質 灰白色	胴部上半のみ。胴部はゆるいふくらみをもつ。外面の整形は磨耗のため不明。内面は刷毛目が施されている。
4	弥生土器 壺 床直	—・10.2・— 2/3 細砂粒 やや軟質 にぶい橙色	頸部から口縁部にかけては欠損。胴部は刷毛目が施されている。

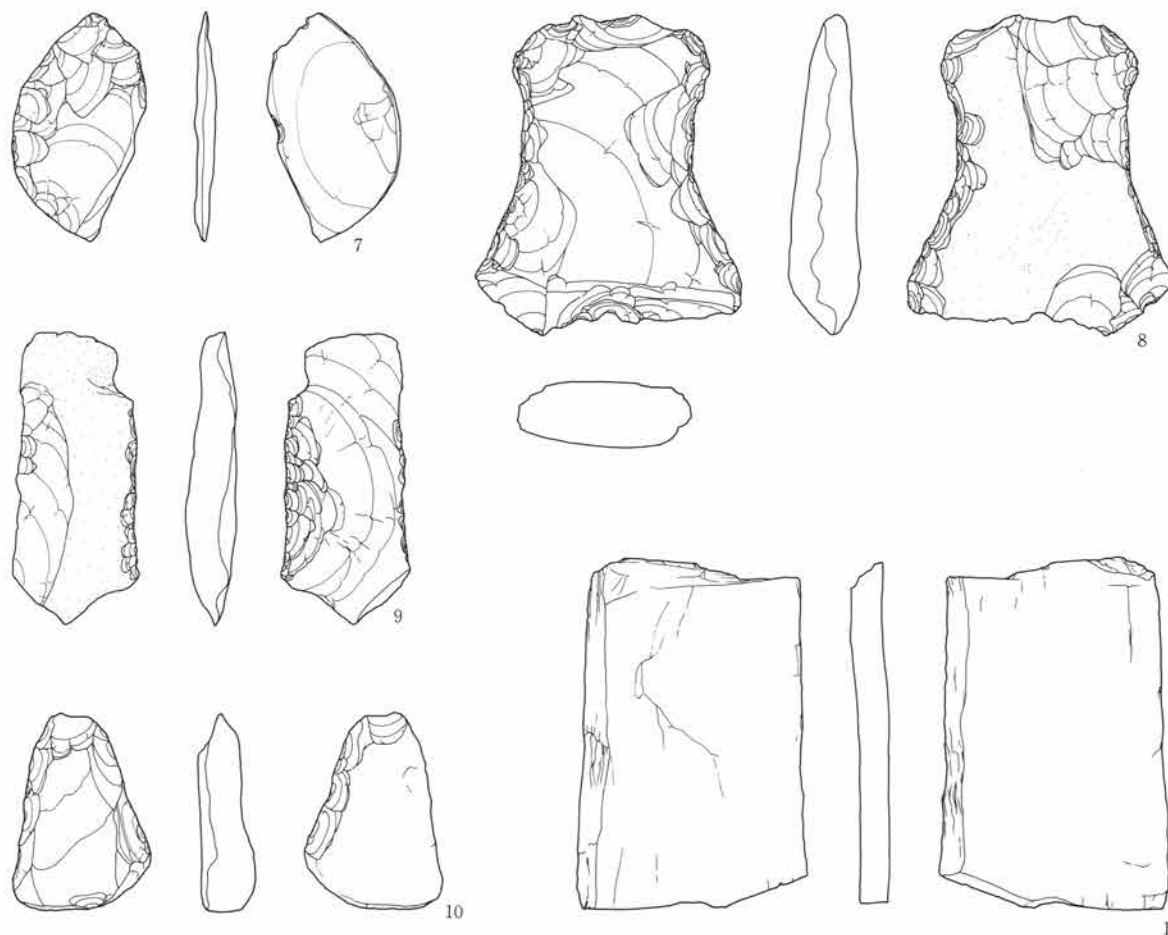


No.	種類・器種	出土位置
5	弥生土器 甕	床直
	計測値・残存率	胎土・焼成・色調
	17.8・—・— 1/2	細砂粒・粗砂粒 普通
	器形・整形の特徴	
胴部下半は欠損。口縁部は外反し、口唇部は直線的でやや開く。胴部はゆるいふくらみをもつ。口唇部には雑な波状文、頸部は7条単位の右廻りの簾状文、胴部はへら磨き、内面の胴部は刷毛目が施されている。		

第3章 検出遺構・遺物

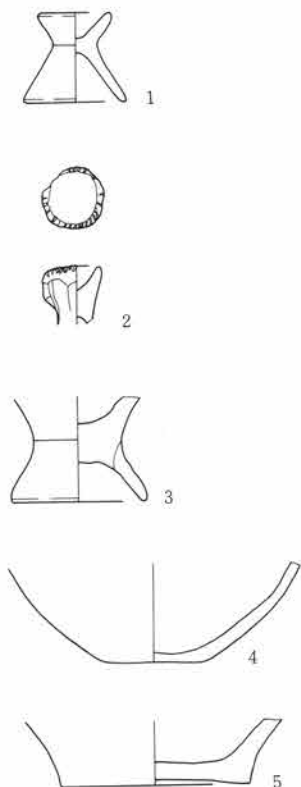


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
6	弥生土器 蓋 覆土	—・鈕3.8・— 細砂粒、普通 にぶい褐色	鈕端部は平坦で中央部に凹みをもつ。天井部は大きく開く。鈕から天井部にかけてはヘラ磨きが施されている。

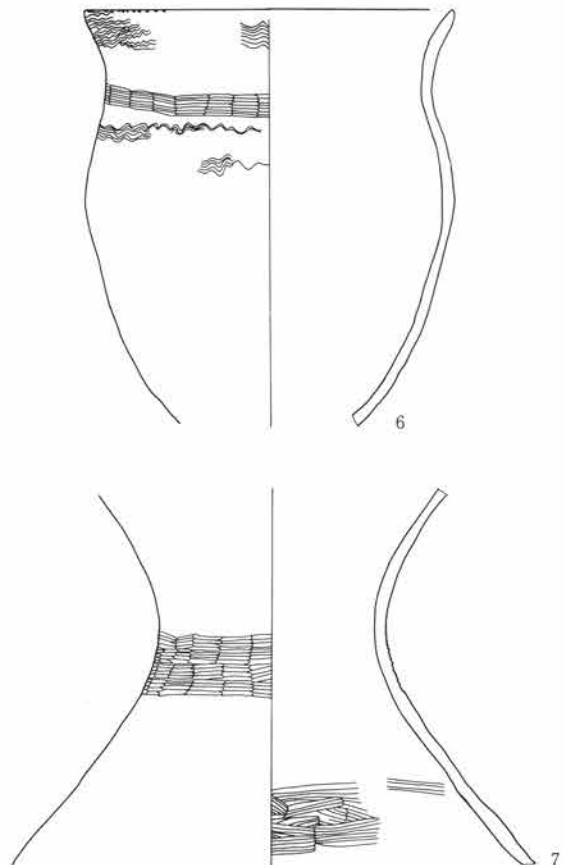


No	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
7	剥片石器	9.0	5.1	0.8	34.4	黒色頁岩	半円形の横長の剥片の先端部の一部に調整を施す。打面は礫面であり、周縁のほぼ半分を占める。正面には剥離面頭部調整的な細かい剥離と、剥片剥離面が残存する。
8	剥片石器	11.5	5.1	2.0	112.6	黒色頁岩	長方形に近い横長の剥片の先端部に調整を施す。打面側にも両面への調整が認められ、打面を除去している。その調整痕は打製石斧の側縁調整に近い。断面は三角形を呈し、正面のほぼ左側半分に礫面が残存する。
9	剥片石器	7.8	5.2	2.1	98.0	黒色頁岩	両側縁に調整を施すが、特に右側縁には両面に認められる。裏面のほぼ全面と側面の一部に礫面が残存する。
10	剥片石斧 (撥形)	12.2	10.6	2.8	423.4	黒色頁岩	片面の半分以上に礫面、もう一方の面に第一次剥離面を残す大形の横長の剥片を素材とする。両側縁には入念な調整を施しており、最大幅と厚さが刃部に存在する。刃部の大部分を欠損する。
11	板状石製品	13.5	9.2	1.2	359.3	珪質頁岩	長方形の板状を呈しており、四つの側面には面取りをした痕跡が認められる。全体の厚さもほぼ等しい。

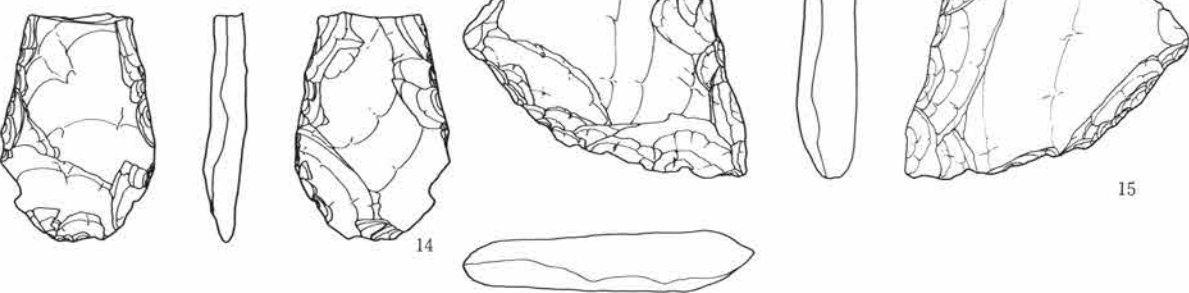
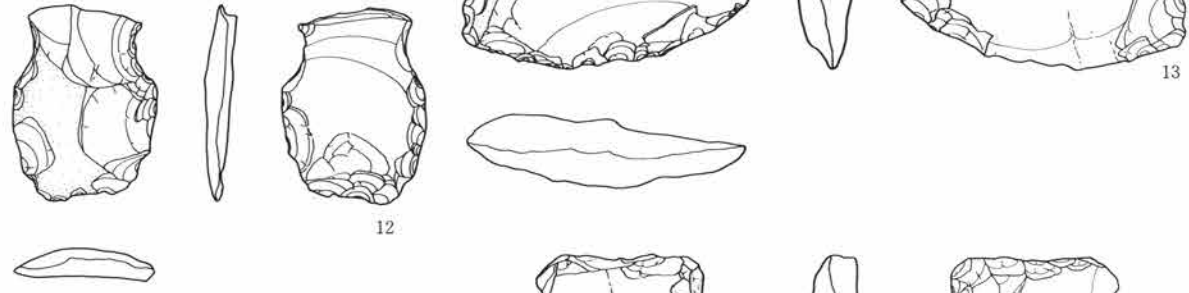
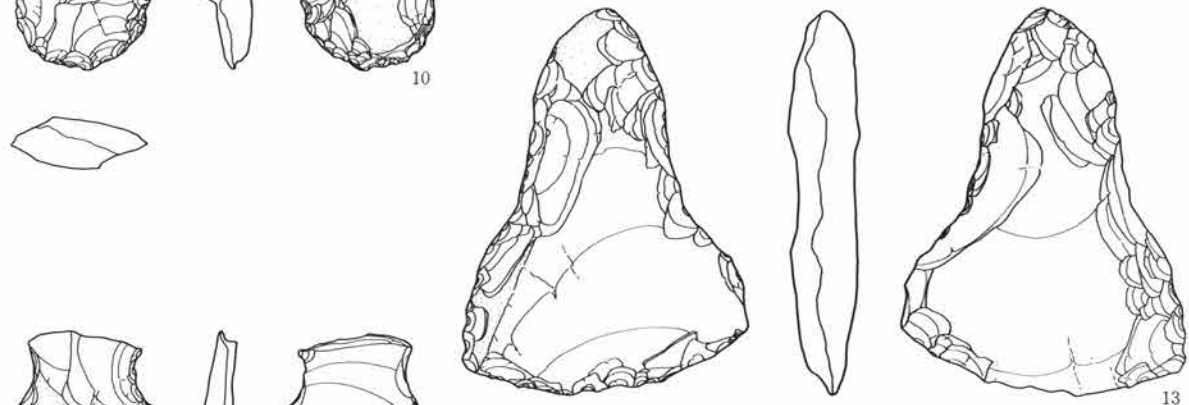
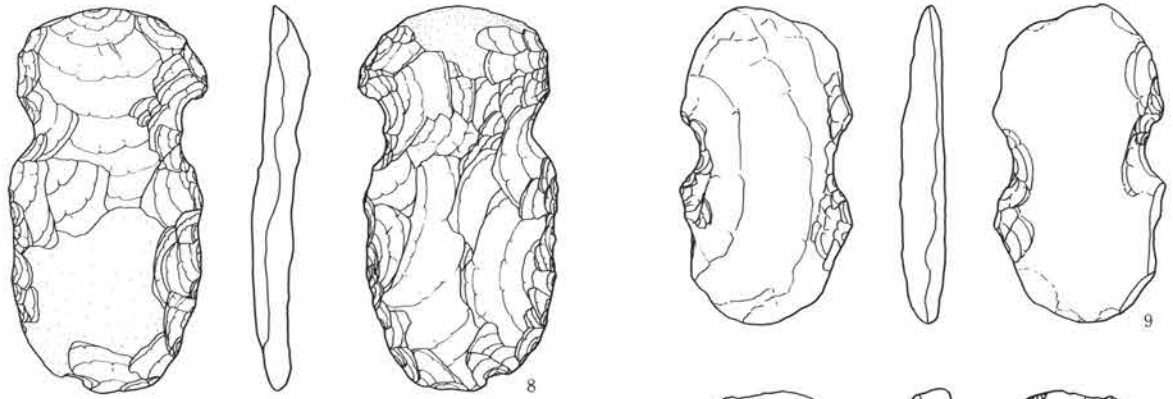
2 遺構外出土遺物

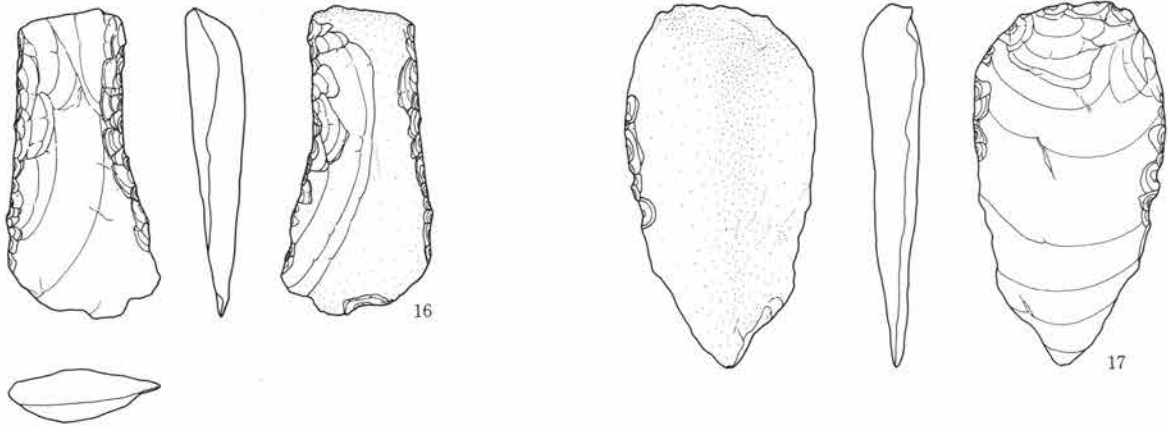


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	弥生土器 器台 90G-02グリッド	5.5・3.9・4.7 3/4 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部、脚部ともに直線的に開き、横撫で。
2	弥生土器 壺蓋 S J 29内	—・3.2・— 小片 細砂粒 普通 にぶい橙色	端部は刻み目、側面はヘラ削り。
3	弥生土器 台付甕 S J 33内	—・7.2・— 小片 細砂粒 普通 明赤褐色	底部から脚部にかけて、脚部は直線的であり開かない。脚部横撫で。
4	弥生土器 壺 S K 248	—・5.0・—、小片 粗砂粒、やや軟質 淡黄色	胴部はふくらみをもち、底部はほぼ平底を呈す。胴部ヘラ削り。
5	弥生土器 壺 S K 124	—・10.2・—、小片 粗砂粒、普通 橙色	胴部はふくらみをもち、底部は内側に僅かにもり上がる。



No	種類・器種・出土位置	計測値・残存率・胎土・焼成・色調
6	弥生土器 壺 84E-35グリッド	19.8・—・— 1/6 粗砂粒 普通 にぶい黄橙色・橙色
	器形・整形の特徴	
口縁部はゆるやかに外反し、胴部はゆるいふくらみをもつ。口唇部は刻み目。口縁部上半には波状文、頸部には7条単位で右廻りの簾状文、胴部は刷毛目と上半には波状文が施されている。		
7	種類・器種・出土位置	計測量・残存率・胎土・焼成・色調
	弥生土器 壺 E区	—・—・— 1/6 細砂粒 軟質 にぶい黄橙色
	器形・整形の特徴	
頸部から胴部上位にかけて、頸部は右廻りの簾状文が2～3廻り施されている。内面は胴部中位以下は刷毛目。		





No.	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	備考
8	打製石斧 (分銅形)	S D59	15.2	7.7	1.6	297.0	灰色安山岩	片面の約半分ともう一方の面の頭部部分に礫面が残存する。楕円礫を素材とし、周縁からの入念な調整により両側縁の頭部寄りに内湾するくびれを作り出す。
9	打製石斧 (分銅形)	130 I-42	12.5	6.8	1.7	205.1	灰色安山岩	横長の剥片を素材とし、両側縁のほぼ中央部に内湾するくびれを作り出す。調整は少なく、表面が風化のために剝離がはっきりしない。
10	打製石斧 (分銅形)	不明	10.6	5.5	2.0	146.7	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の半分程に礫面が残存する。両側縁には入念な調整を施しており、中央部より頭部寄りにやや内湾するくびれを作り出す。
11	打製石斧 (分銅形)	S D21	10.8	6.3	2.5	180.4	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、両側縁のやや頭部寄りに内湾するくびれを作り出す。最大幅は刃部、最大厚は頭部に存在する。刃部と頭部を欠損する。
12	打製石斧 (分銅形)	123 J-10	7.7	5.7	1.1	59.9	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面の約半分に礫面が残存する。一端を欠損しているが、両側縁のほぼ中央にくびれが存在すると思われる。
13	打製石斧 (撥形)	S D58	15.0	11.2	2.8	412.7	輝石安山岩 (粗粒)	かなり肉厚な縦長の剥片を素材とし、頭部の一部と一側縁の刃部寄りの部分の二箇所礫面が残存する。最大厚は頭部寄りに存在し、両側縁はやや内湾する。
14	打製石斧 (撥形)	95H-6	8.8	6.1	1.4	90.9	輝石安山岩 (粗粒)	横長の剥片を素材とするが、頭部と刃部の一部を欠損する。両側縁の両面に調整を施すが、少ない。刃部はかなり外湾する曲刃である。
15	打製石斧	110 I-6	12.7	10.2	2.3	416.9	輝石安山岩 (粗粒)	大形の横長の剥片を素材とし、一側縁に調整を施すが、もう一方の側縁には調整は認められず、折断面に近い。刃部は頭部に対して斜行し、やや外湾する。
16	打製石斧	S J12	12.2	5.8	2.1	147.1	黒色頁岩	横長の剥片を素材とし、片面の約半分に礫面が残存する。両側縁の両面に細かな調整を施し、一側縁はほぼ直線的であるが、もう一方の側縁は内湾する。
17	剥片石器	H区	14.4	7.5	2.4	242.2	黒色頁岩	縦長の剥片を素材とし、片面のほぼ全面に礫面が残存する。剝離面側の両側縁と礫面側の一側縁に調整を施す。

第3節 古墳時代

1 竪穴住居（S J）

S J 11

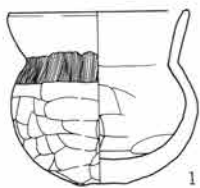
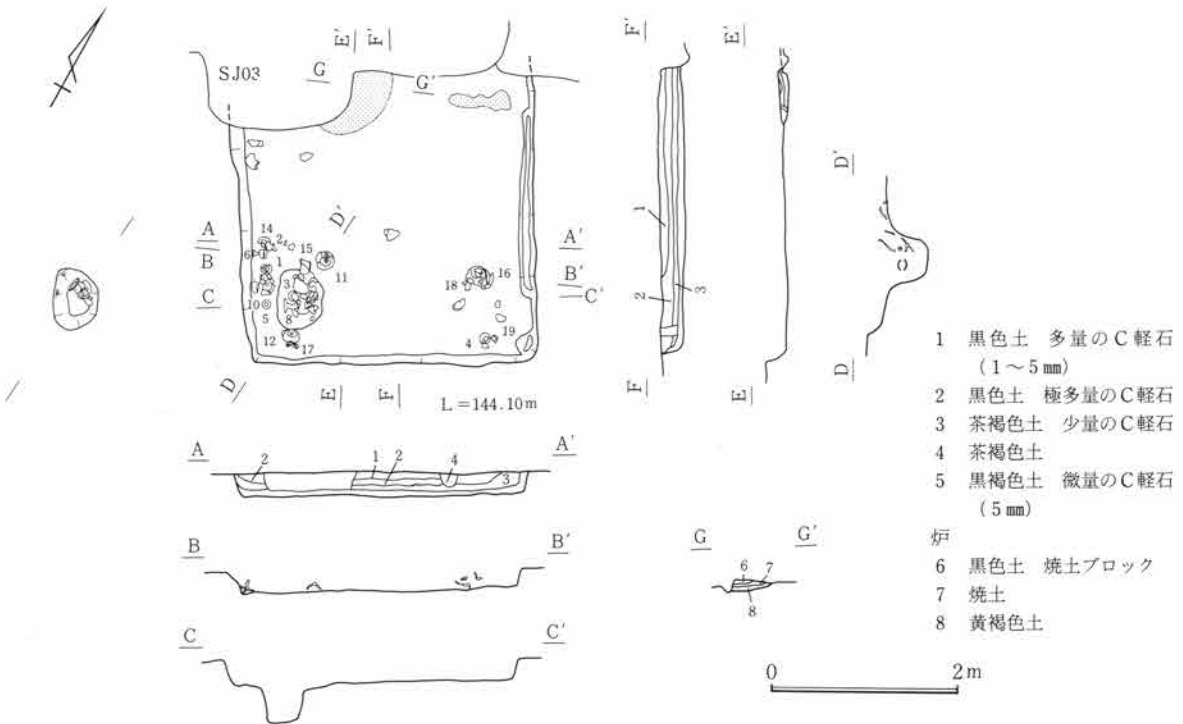
20

本住居跡は、108～111G-20-22グリッドに位置し、S J 03・06と重複する。新旧関係は本遺構がS J 03・06より古い。平面形態は全形が確認できないために不明であるが、同時期と考えられるS J 12との関係から長方形と推定する。規模は東西3.1mを測る。主軸方向は、N-25°-Wを指す。

床面は平坦で整っているが、明らかに生活面と認定できる面は確認できない。確認した面が炉の焼土面より僅かに低いので、構築面に数cmの貼床を施して生活面とした可能性が高い。壁は僅かな勾配で立ち上がり、壁高は20cmを測る。壁溝は東壁の一部に幅10cm、深度5cmで巡る。貯蔵穴は住居の南西隅に設置され、45×65cm、深度40cmの隅丸方形を呈す。

炉は住居の中央から北西に偏して設置される。重複する住居に西側を切られるために焼土の範囲については不明であるが、住居の構築面を5cm掘り窪めて炉床とし、全体に強く焼けた痕跡を残す。

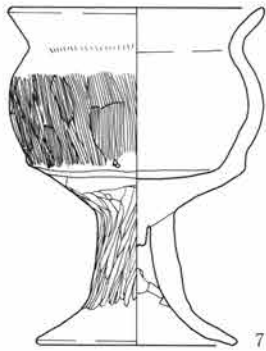
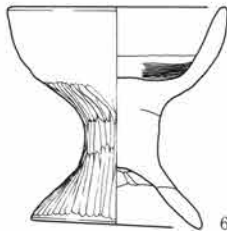
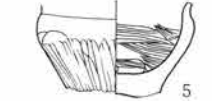
掘り方は平坦で良く整っている。



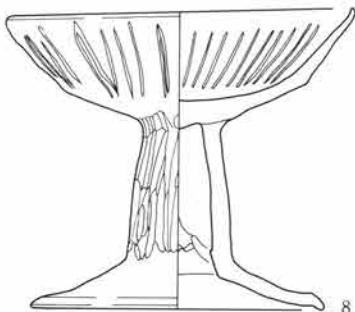
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 小型丸底壺 床上2.5cm	9.6・2.4・9.0、7/8 粗砂粒 普通 ぶい黄橙色	口縁部は丸みをもちやや開く。胴部は球状の丸みもち、底部は小径の平底。口縁部は横撫で、頸部は縦方向の刷毛目。胴部は横方向の細いヘラ削り。内面はヘラ撫で。



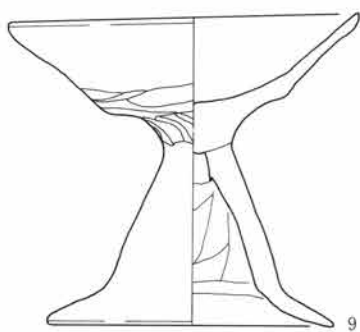
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 小型丸底壺 床直	9.4・—・10.0 完形 粗砂粒、雲母 普通 にぶい橙色	口縁部の下半は直線的で口唇部ではゆるい丸みをもちやや開く。胴部は球状の丸みをもち、底部との区分はできない。口縁部から胴部上位にかけては横撫で、胴部中位以下は横方向への細いヘラ削りが施されている。
3	土師器 碗 貯蔵穴底部より29cm	9.6・4.0・7.3 完形 粗砂粒 雲母 普通 赤褐色	口縁部は内傾し、口唇部はやや開く。体部は丸みをもち開き、底部は小径で平底。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。
4	土師器 碗 床上11.5cm	11.0・—・5.8 3/4 粗砂粒 軟質 にぶい橙色	口縁部は外反ぎみで、ゆるい括れがみられ、底部は丸底を呈する。口縁部は横撫で、括れ部分には縦方向の刷毛目。体部から底部にかけては横方向へのヘラ削り。
5	土師器 碗 床上4cm	—・3.5・— 9/10 粗砂粒 普通 にぶい橙色	脚部が剥離、口縁部は短かく直線的に開く。口縁部から体部上位にかけては横撫で、体部はヘラ磨き。体部内面は刷毛目が施されている。
6	土師器 高坏 床直	11.6・9.4・11.5・脚部 径8.8 完形 細砂粒 普通 橙色	器壁は厚く、坏部では体部は丸みをもち僅かに開く。脚部では上半は円筒状で下半は直線的で「ハ」の字状に開く。坏部口縁部は横撫で、体部はヘラ削り後ヘラ磨き、底部、脚部もヘラ磨き。内面の体部と底部の間には刷毛目が施されている。



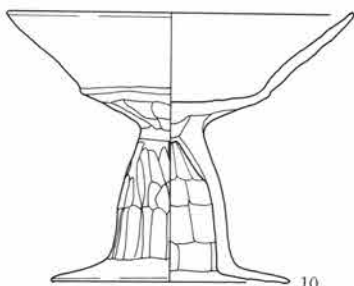
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	土師器 台付壺 貯蔵穴底部より15cm	13.8・10.7・17.2・脚 部径10.8 7/8 粗砂粒・細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は短かく直線的に開く。胴部はゆるい丸みをもつ。胴部と脚部の上に稜をもつ。脚部は上半が円筒状で裾部は大きく開く。全体としては器台の上に壺をのせた形態をとる。壺部は底部と胴部また、壺部と脚部の間に接合痕がみられる。口縁部は横撫で、胴部は縦方向の刷毛目であるが上位は横撫でによって削られている。底部は横方向へのヘラ磨き、脚部は縦方向へのヘラ磨き。内面胴部はヘラ撫で。
8	土師器 高坏 貯蔵穴底部より22cm	18.6・12.8・15.6・脚 部径15.7 7/8 粗砂粒・褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、口唇部は内湾する。脚部の上半はややふくらみもち、裾部は直線的に開き、端部は内湾する。坏部は横撫で、口縁部には内外とも雑な放射状のヘラ磨きが施されている。脚部は上半ではヘラ磨き、裾部は横撫で。



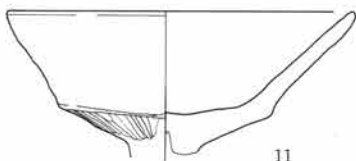
第3章 検出遺構・遺物



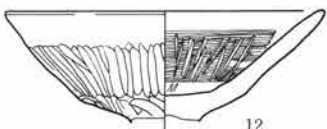
9



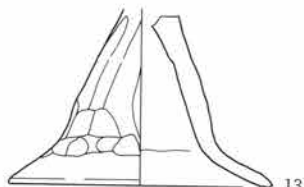
10



11



12



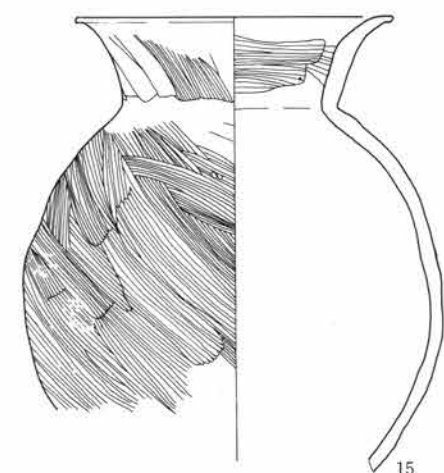
13



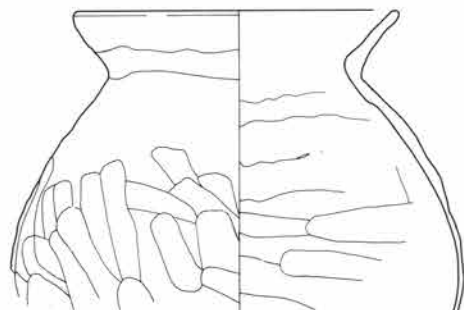
14

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	土師器 高坏 貯蔵穴底部より20cm	18.8・9.7・16.5・脚部 径15.3 完形 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通 赤褐色	口縁部は外反ぎみに開き、脚部上半はふくらみをもちながら開く。裾部は直線的に大きく開く。口縁部は横撫で、脚部上半はヘラ削り。裾部は横撫で。
10	土師器 高坏 貯蔵穴底部より14cm	18.4・10.2・14.1・脚 部径12.5 完形 細砂粒 雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は直線的に大きく開く。脚部上半はゆるいふくらみもち、裾部は直線的で水平ぎみに開く。口縁部は横撫で、脚部上半は縦方向へのヘラ削り、裾部は横撫で。
11	土師器 高坏 床直	18.7・11.2・—・脚 部径— 1/2 細砂粒 普通 明赤褐色	器壁は厚く、口縁部は直線的に開く。口縁部は横撫で、底部はヘラ磨き。
12	土師器 高坏 床直	17.0・9.0・—・脚 部径— 1/2 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	器壁は厚く、口縁部はほぼ直線的に開き、底部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ磨き。内面の体部は横方向への刷毛目、その後雑なヘラ磨きが施されている。
13	土師器 高坏 覆土	—・—・—・脚 部径14.0 2/5 細砂粒 雲母 普通 にぶい橙色	坏身欠損。脚部上半はふくらみもち、裾部は直線的に大きく開く。裾部は横撫で。上半の内面はヘラ撫で。
14	土師器 高坏 床直	—・—・—・脚 部径12.6 2/5 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	坏身欠損。脚部上半はゆるいふくらみもち、裾部は直線的に大きく開く。脚部上半はヘラ磨き、裾部との境付近は刷毛目、裾部は横撫で。内面の裾部と脚部上半の境はヘラ撫でが施されている。

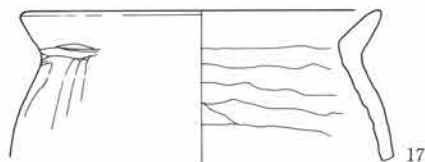
第3節 古墳時代



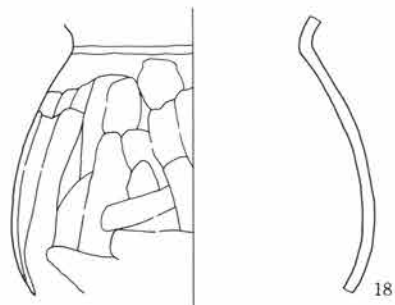
15



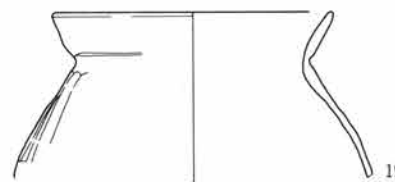
16



17



18



19

	種類・器種・出土位置
No	計測値（口径・底径・器高 cm）・残存率・胎土・焼成・色調
	器形・整形の特徴
15	土師器 甕 床直 17.0・—・—、 $\frac{4}{5}$ 細砂粒・粗砂粒、普通 明黄褐色 口縁部は外反しながら開き、胴部は球状の丸みをもつ。外面の口縁部は縦方向の刷毛目、胴部は斜め方向の刷毛目。内面の口縁部上半は横撫で、下半は横方向の刷毛目。胴部はヘラ撫で。
16	土師器 甕 床直 17.4・—・—、 $\frac{3}{4}$ 細砂粒・粗砂粒、普通 赤褐色 口縁部は外反ぎみに開き、胴部は球状の丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向ヘラ削り。内面はヘラ撫で。
17	土師器 甕 床直 19.2・—・—、小片 細砂粒・粗砂粒・褐色鉱物粒、普通 橙色 口縁部の器壁は厚く、直線的に開く。口縁部は横撫で、胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラ撫で。
18	土師器 甕 床上16cm —・—・—、小片 粗砂粒・雲母、普通 橙色 甕胴部片、胴部は下位に最大径をもつ。胴部はヘラ削り。内面はヘラ撫で。
19	土師器 甕 床直、床上3.5cm、7.5cm 15.0・—・—、小片 粗砂粒・褐色鉱物粒、普通 にぶい橙色 口縁部は直線的にやや開く。胴部はゆるいふくらみをもつ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向ヘラ削り、内面はヘラ撫で。

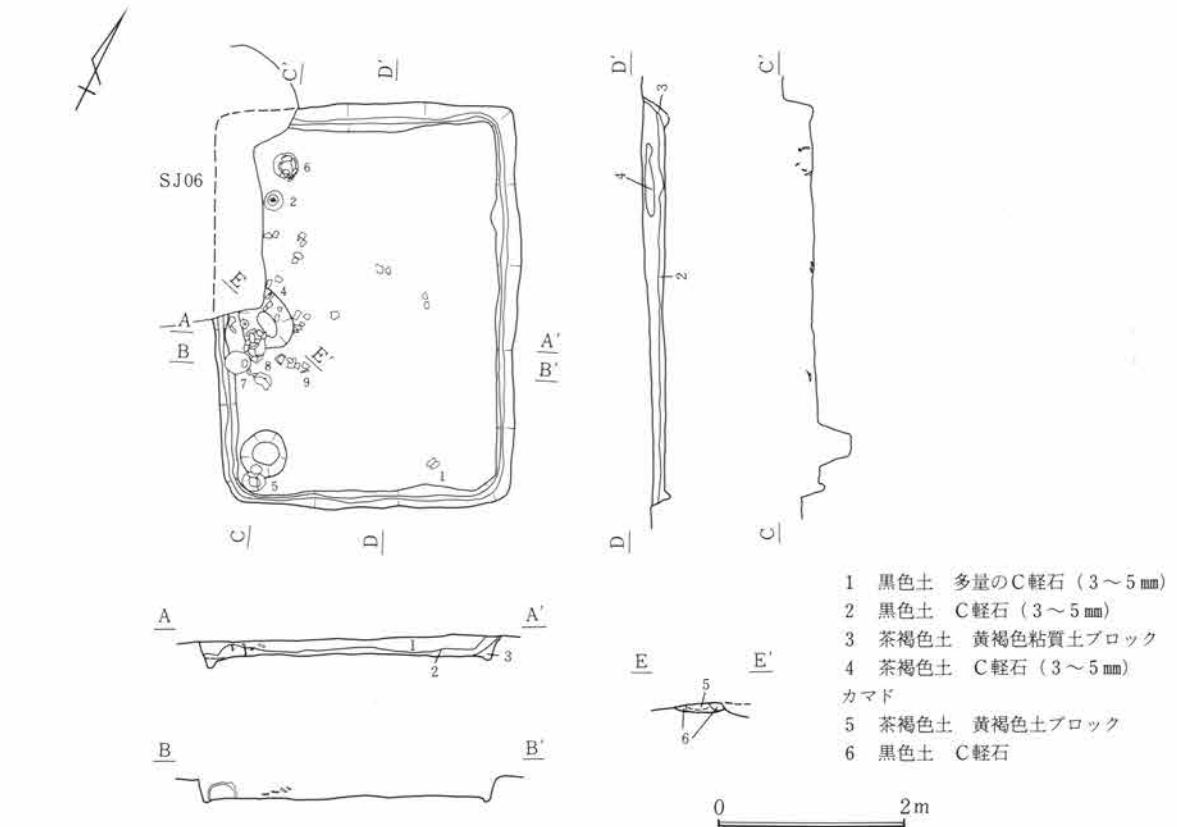
S J 12

本住居跡は、104～106G-22～25グリッドに位置し、S J 06と重複する。新旧関係は本遺構がS J 06より古い。平面形態は長軸を南北にもつ整った長方形を呈す。規模は南北4.3m、東西3.2mを測り、短軸長は近接するS J 11とほぼ一致している。面積は、北西隅が重複する住居に切られているが、13.49m²と推定することができる。主軸方向は、N-25°-Wを指す。

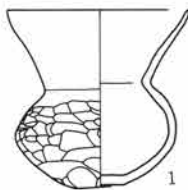
床面は、貼床を施して生活面を作った可能性があるが、生活面は平面的にも土層断面上でも確認することができない。炉床レベルとの関係から、構築面に数cmの貼床を施した可能性が高い。壁は僅かな勾配で立ち上がり、壁高は20cmを測る。壁溝は幅10cm、深度5cmで、重複部を除く全壁下に確認した。貯蔵穴は住居の南西隅に設置し、直径45cm、深度40cmの円形を呈す。

炉は西壁際の中央に設置する。直径30cmの範囲に強く焼けた痕跡を残す。生活面を平面的に把握できなかったために炉床の構築状況は明らかではないが、炉床のレベルが周囲の構築面より僅かに高いことから、直径30cm、深度5cm程の円形に掘り窪めて炉床を構築した可能性が高い。

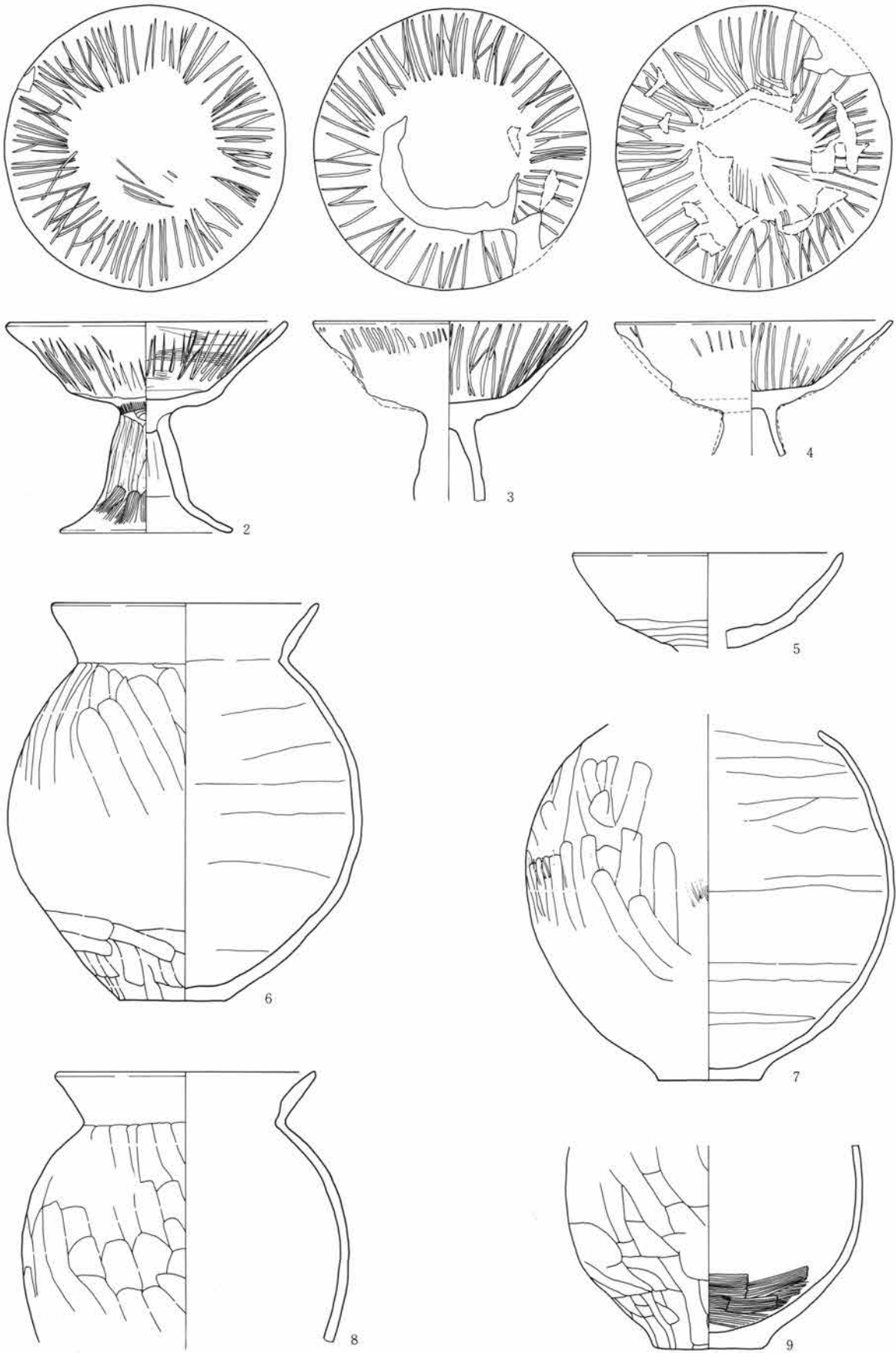
掘り方は平坦で良く整っている。



- 1 黒色土 多量のC軽石 (3～5mm)
- 2 黒色土 C軽石 (3～5mm)
- 3 茶褐色土 黄褐色粘質土ブロック
- 4 茶褐色土 C軽石 (3～5mm)
- カマド
- 5 茶褐色土 黄褐色土ブロック
- 6 黒色土 C軽石



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 小型丸底壺 床直	9.7・2.5・9.1、7/8 細砂粒・粗砂粒・雲母 普通 褐色	口縁部は直線的に開くが口唇部はやや丸みをもつ。胴部は中位で大きくふくらむ。口縁部から頸部にかけては横撫で、胴部は細かい横方向へのヘラ削り。



第3章 検出遺構・遺物

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 高坏 床直	19.3・10.7・14.5・脚 部径11.8 7/8 粗砂粒・褐色鉍物粒、 雲母 普通 明赤褐色	口縁部は外反ぎみに開く。脚部上半はゆるいふくらみもち、裾部はほぼ直線的に開く。外面の口縁部は横撫で後放射状暗文。底部から脚部上半にかけては刷毛目後ヘラ磨き、裾部は刷毛目。内面の口縁部は横方向の刷毛目後放射状のヘラ磨き。脚部上半はヘラ撫で、裾部は横撫でが施されている。
3	土師器 高坏 床上8cm	19.0・9.4・—・脚部 径— 3/5 細砂粒・褐色鉍物粒・ 雲母、普通 明赤褐色	口縁部は外反ぎみに開く。坏部の外面は剝離が激しい。口縁部の内外面は横撫で後放射状のヘラ磨き。
4	土師器 高坏 床直	19.2・9.7・—・脚部 径— 3/5 細砂粒・褐色鉍物粒、 普通 明赤褐色	口縁部は外反ぎみに開く。坏部の外面は剝離が激しい。口縁部の内外面は横撫で後放射状のヘラ磨き。
5	土師器 高坏 床直	18.6・12.4・—・脚部 径— 2/3 細砂粒・雲母 普通 明赤褐色	口縁部は上半で丸みもち、口縁部と底部の間に稜をもつ。内外面とも横撫で、底部はヘラ削り。
6	土師器 壺 床直	18.6・7.5・27.3 4/5 細砂粒・雲母 普通 暗赤色	口縁部は直線的に開く。胴部は中位で大きくふくらむ。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、胴部は縦方向ヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
7	土師器 甕 床直	—・7.0・— 5/6 粗砂粒・雲母 普通 明赤褐色	口縁部欠損。胴部は球状にふくらみ、底部は平底。胴部外面は刷毛目、ヘラ削り。雑なヘラ磨き、内面はヘラ撫で。
8	土師器 甕 床直	17.8・—・— 1/4 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 赤褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状の丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り、内面はヘラ撫で。
9	土師器 甕 床直	—・底径7.7・— 1/5 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 浅黄色	胴部は中位から下位にかけてふくらむ。底部は平底を呈す。胴部外面は縦方向のヘラ削り。内面の中位はヘラ撫で、下位は刷毛目。

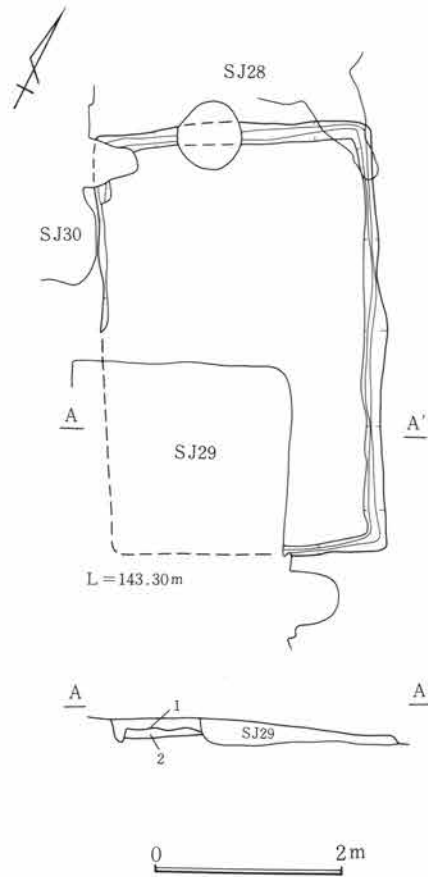
S J 31

25

本住居跡は、98～101G-03～06グリッドに位置し、S J 28・29・30と重複する。新旧関係は、本跡構が重複する全ての住居址よりも古い。平面形態は、南西部は重複によって確認できないが長方形と推定する。規模は東西2.9m、南北4.5m、面積は推定で13.54㎡を測り、主軸方向は、N-27°-Wを指す。

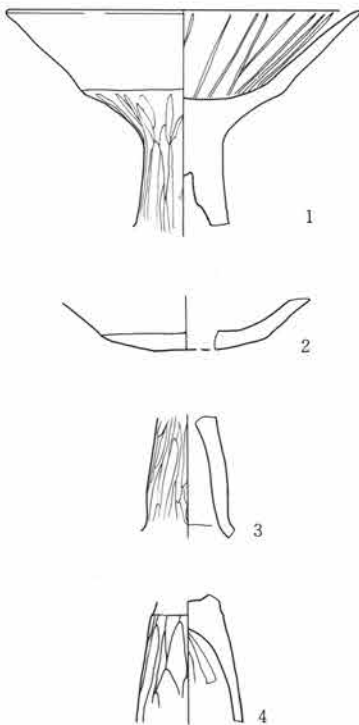
床面は、平坦で良く整い、北側は踏み固められて堅固である。5cmの貼床が施されている。壁は、僅かな勾配をもって立ち上がり、壁高は、9～36cmを測り、平均18cmである。壁溝は、北壁から、東壁・南壁の一部に幅10～15cm、深度5cmで検出された。柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

炉・カマドともに確認できなかった。



- 1 黒色土 白色軽石（3～5mm）
- 2 黄褐色砂質土と黒色土の混土（貼床）

2 遺構外出土遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 高坏	18.8・10.8・—・脚 径— 1/5 細砂粒・褐色鉍物粒 普通、橙色	口縁部は直線的に開く、口縁部は横撫で、底部から脚部にかけてはヘラ磨き、坏部の内面には放射状のヘラ磨きが施されている。
2	土師器 甔	—・—・— 1/10 粗砂粒 普通 橙色	底部のみ、底部は中央に径3.0cmの孔がみられる。
3	土師器 高坏	—・—・—、1/8 細砂粒・普通、にぶい 赤褐色	脚部上半のみ、ゆるいふくらみもち、ヘラ磨き。
4	土師器 高坏	—・—・—、小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい黄橙色	脚部上半のみ、ヘラ磨き。

第4節 歴史時代

1 竪穴住居跡 (S J)

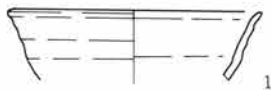
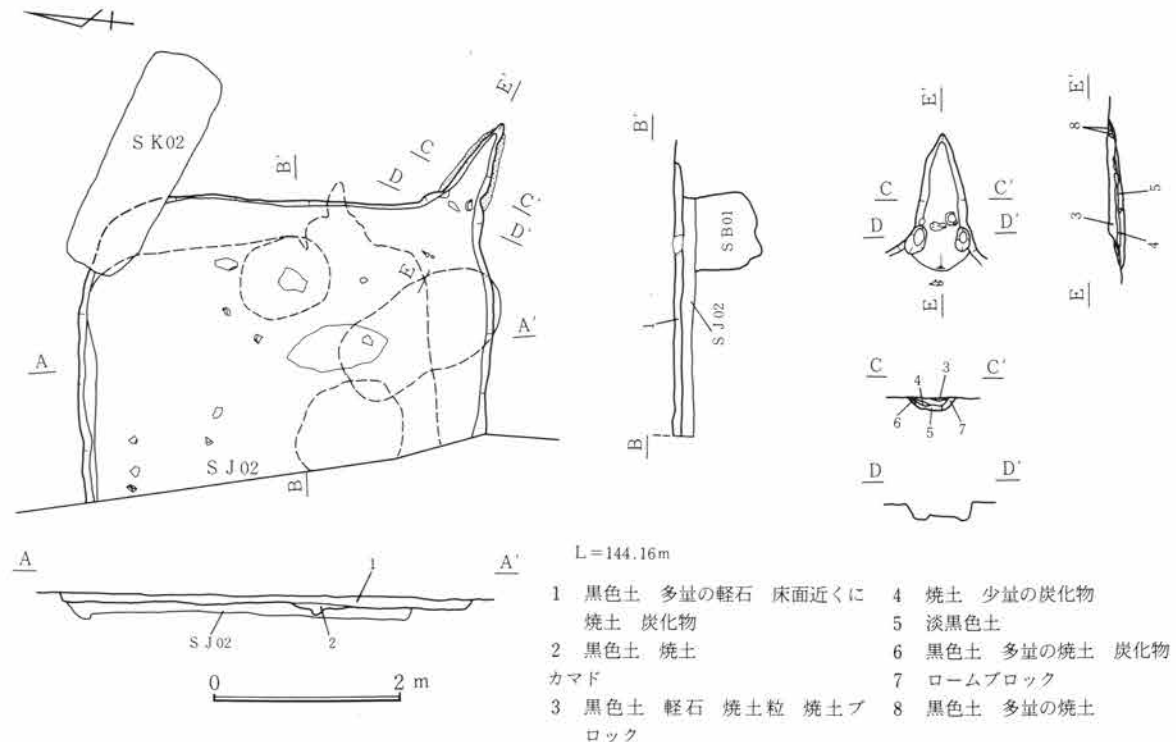
S J 01

26

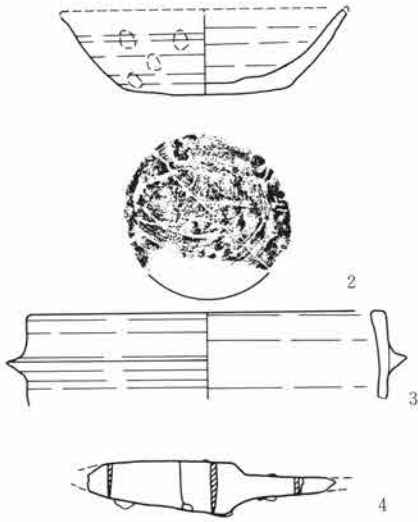
本住居跡は、111～113G-18～20グリッドに位置し、S J 02、S K 02と重複する。新旧関係はS J 02より本遺構の方が新しく、S K 02より古い。平面形態は、西側が調査区域外になるため北西・南西コーナー、西壁は確認できないが、隅丸長方形と推定される。規模は、南北4.35mを測り、主軸方向は、N-93°-Eを指す。

床面は、住居中央部に硬い焼土面と踏み固められた部分があるのみで、この部分を除いて確実に生活面と認定できる面はみられない。壁は、残存する壁高が5cm程度と浅いため状況は不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは、東南コーナーに位置し、残存状態は悪く天井部は確認できない。規模は、燃烧部幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出し、煙道部はその外側80cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。黒色粘質土で構築した痕跡がある。燃烧部・火床は強く焼け、天井部の崩落も強く焼けている。焚口部の両側に径16～30cm、深度5cmの楕円形のピットを検出した。このピットは袖石を埋めていた可能性が考えられる。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	13.6・ - - -、2/5 細砂粒・石英 還元焰、灰オリブ色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みを持ち、口唇部は僅かに外反する。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 床上2cm	(15.4)・8.6・4.5 1/3 粗砂粒・雲母 還元焰、やや酸化ぎみ 浅黄色	ロクロ右回転。体部は直線的に開き、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り。体部の一部に指頭左痕がみられる。
3	須恵器 羽釜 覆土	19.0・一・一、小片 細砂粒・雲母、酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は直立し口唇端部は平坦。罎は水平で断面三角形を呈す。
No	種類		観察表掲載頁
4	鉄製品 刀子		891

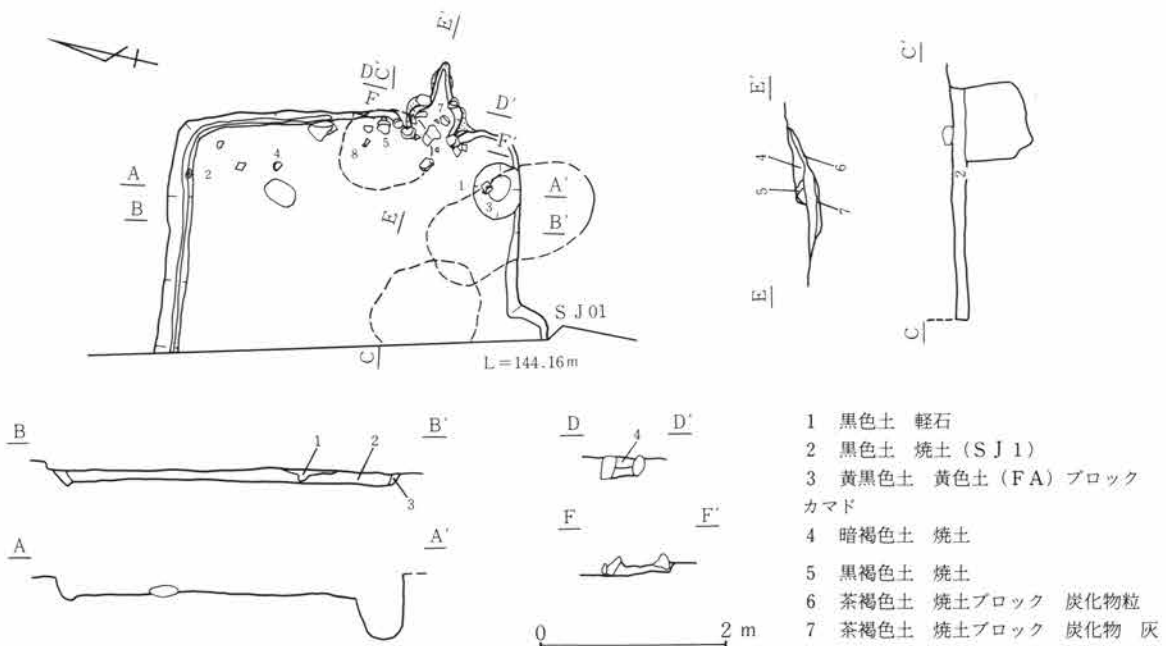
S J 02

27

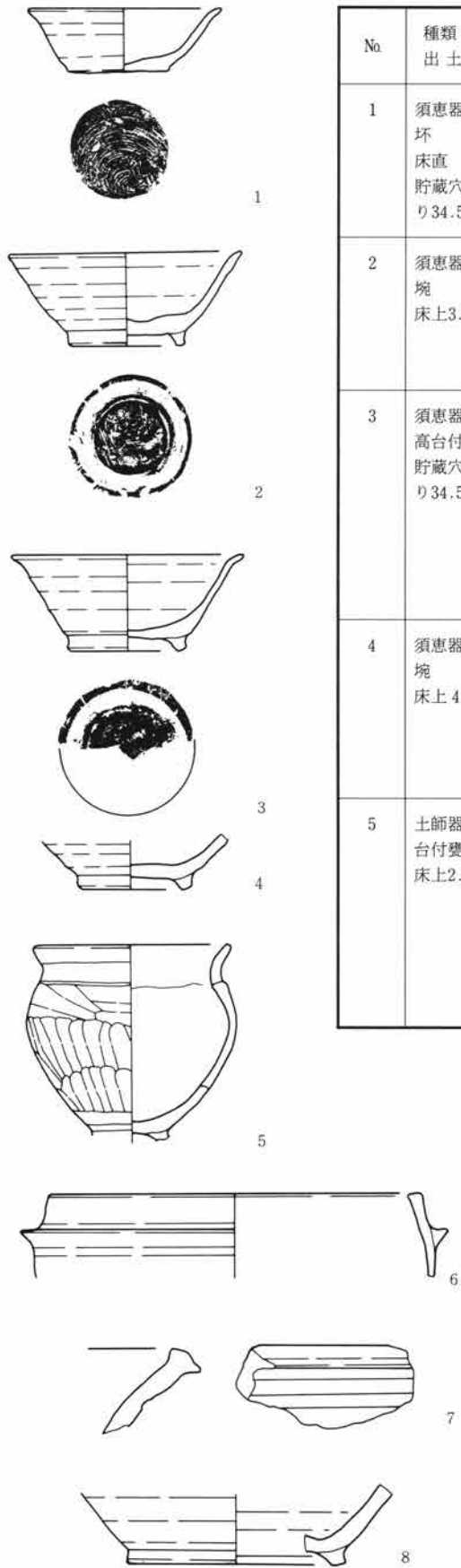
本住居跡は、111~113G-18~21グリッドに位置し、S J 01、S B 01、S K 02と重複する。新旧関係はS J 01、S K 02より本遺構の方が古く、S B 01より新しい。平面形態は西側が調査区域外のため全形は不明だが、長方形と推定される。規模は、南北3.70mを測り、主軸方向は、N-77°-Eを指す。

床面は、平坦で全体に踏み固められている。貼床はない。壁は、最も残存している北壁で壁高は20cmを測り、東南壁はS J 01によって削られ壁高は5cm程である。壁溝は、東壁中央から北壁にかけて幅10cm、深度5cmで確認した。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南壁東寄りに位置し径60×50cm、深度45cmを測る。

カマドは、東壁南寄りに位置し、残存状態は良好。燃烧部は幅50cm、奥行き40cmで、その約半分を壁外に造り出す。煙道部は外側40cmまで緩やかに立ち上がる。天井部は崩落しているが、袖部は黒褐色粘質土で構築され、先端に補強用の石を据え、これに対応する燃烧部奥壁の両側にも石を置く。袖部付け根の壁に焼土があること、火床面が2枚検出されたことからカマドは造り替えた可能性が高い。当初のカマドは同じ位置で、袖部を持たず、火床は約5cm低かったと考えられる。



第3章 検出遺構・遺物



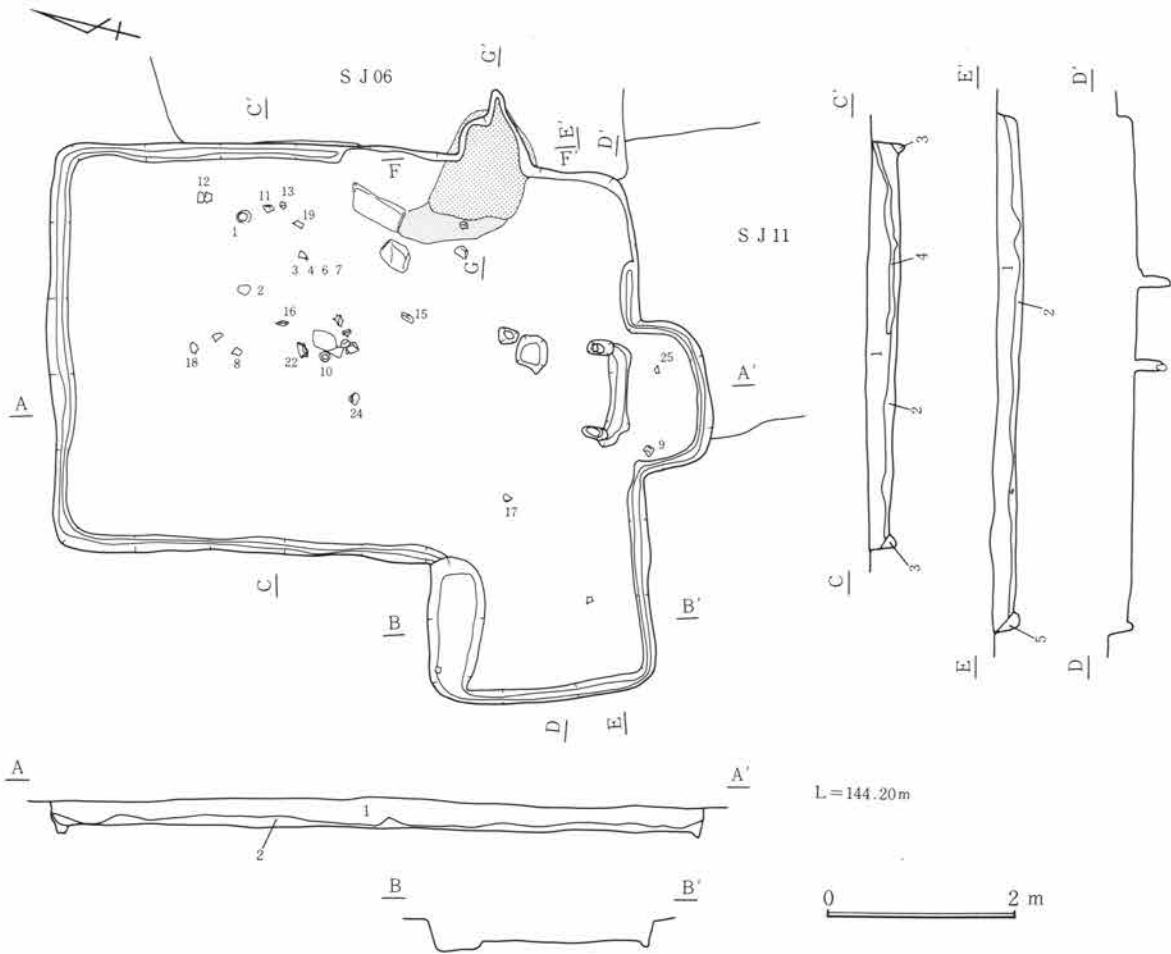
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床直 貯蔵穴底部より 34.5cm	11.6・5.5・3.7 1/4 細砂粒・雲母 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち大きく開く。口縁部は外反する。底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗 床上3.7cm	14.0・7.0・4.5 1/2 細砂粒・雲母・粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、高台は断面四角形で、やや開く。底部は回転糸切り。高台の内側は撫で。
3	須恵器 高台付碗 貯蔵穴底部より 34.5cm	13.8・7.4・5.6 1/3 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部は直線的で、あまり開かず、口縁部は外反し、高台は断面四角形を呈し、やや開く。底部は、回転糸切り。
4	須恵器 碗 床上4cm	—・7.2・— 1/4 粗砂粒 酸化焰 にぶい黄橙色	ロクロ右回転。高台は、やや丸みをもち「ハ」の字状に開く。底部は高台貼付時の撫でにより、切り離し方法は不明。
5	土師器 台付甕 床上2.5cm	11.7・4.2・— 甕部1/2 粗砂粒・雲母 普通 明赤褐色	脚部欠損。口縁部は「コ」の字状の褪化したもので、胴部はゆるい丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は上位で左方向へのヘラ削り。中位から下位にかけては底部から頭部に向けてのヘラ削りが二段に施され底部周辺は横撫で。内面は胴部に横方向のヘラ撫で。
6	須恵器 羽釜 覆土	22.0・—・— 小片 細砂粒・雲母・ 褐色鉱物粒 酸化焰 黄灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内湾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部はゆるい丸みをもち、鑄は断面三角形で、ほぼ水平である。
7	須恵器 甕 床上2cm	—・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 褐色鉱物粒 酸化焰 橙色	口縁部は外反し、口唇端部は縁带状に上下に引き出されている。
8	須恵器 甕 床直	—・12.8・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。胴部は大きく開き、高台はほとんど開かず、接地面は広い。

S J 03

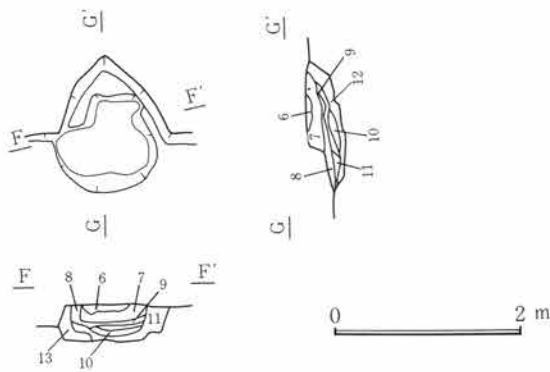
本住居跡は、109～112G-21～25グリッドに位置し、S J 06・11と重複するが、新旧関係は本遺構の方が双方よりも新しい。平面形態は長方形を呈し、西壁南側、南壁中央に張り出しを持つ。規模は、東西4.3m、南北6.3m、西側の張り出し部は、東西1.4m、南北2.4m、南側、東西1.5m、南北0.7m、総面積31.12㎡を測る。主軸方向は、N-72°-Eを指す。

床面は、カマド西側が部分的に高い他は平坦で良く整っており、全体に踏み固められて堅く、特に中央部に顕著である。張り出し部の床面も中央部から水平に続く。壁は、垂直に近い状態で立ち上がり、壁高は20cmを測る。壁溝は、東壁の中央以南、南壁の中央以東を除き幅10cm、深さ5～10cmで確認した。張り出し部分にも壁溝が巡ること、床面が水平に続くことから、この張り出し部も住居と同時に存在していたと考えられる。柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。南壁張り出し部北側に径28×15cm、深度30cmの楕円形ピット2基と、このピットをコの字形に結ぶ浅い溝を確認したが、入口部の施設の可能性が考えられる。

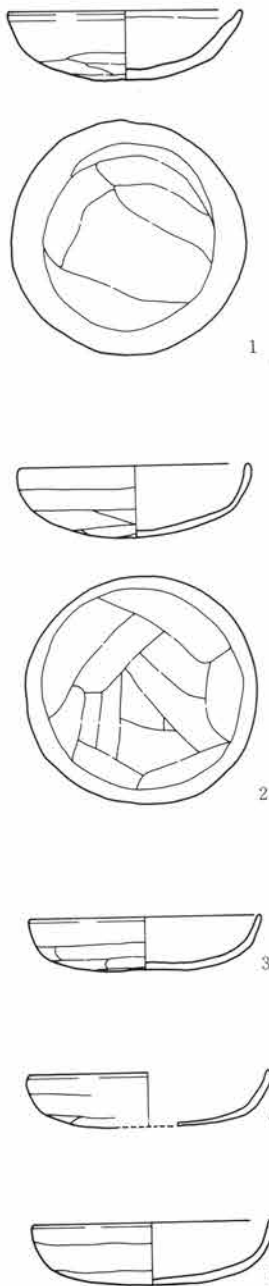
カマドは、東壁南寄りに位置し、残存状態は悪い。規模は、燃烧部幅70cm、奥行き40cmで壁外に造り出す。煙道部は外側20cmまで伸びることを確認した。黄褐色粘質土で構築した痕跡があるが、崩れていて天井部は確認できなかった。全体に焼土が多く火床及び燃烧部の壁は強く焼けている。住居中央東側より火を受けた凝灰岩の切石が出土するが、カマドの構築材料の可能性が高い。カマド掘り方は、床面より深度10cmで円形に掘り窪めている。



第3章 検出遺構・遺物

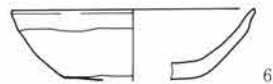


- 1 黒色土 多量の軽石
- 2 黒色土 少量の軽石 少量の褐色土小ブロック
- 3 黄褐色土 黒色土 混土
- 4 炭化物
- 5 黒褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 茶褐色土 焼土小ブロック
- 8 褐色土 焼土ブロック 灰
- 9 褐色土 多量の焼土 灰
- 10 焼土
- 11 灰
- 12 褐色土 微量の焼土粒
- 13 黄褐色土 黄色土ブロック



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上4 cm	12.6・9.0・3.6 完形 粗砂粒・雲母・褐色鉄 物粒・亜角礫 やや軟質 にぶい橙色	口縁部はやや外反し、口唇部は直立ぎみである。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向ヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 床上3.5 cm	12.0・10.6・3.8 完形 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向ヘラ削りが施されている。
3	土師器 坏 床上8 cm	12.2・5.0・2.9 1/4 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は直線的で僅かに開く。体部はゆるい丸みをもち大きく開き、底部は小さく平底を呈す。
4	土師器 坏 覆土 床上8 cm	12.8・10.8・3.9 1/5 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
5	土師器 坏 覆土 床上8 cm	12.6・10.6・3.3 1/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみで、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向ヘラ削り。

第4節 歴史時代



6



7



8



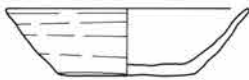
9



9



10



11



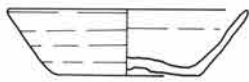
11



12



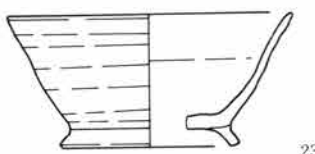
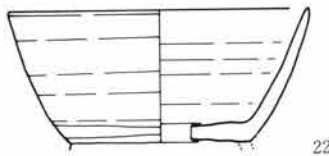
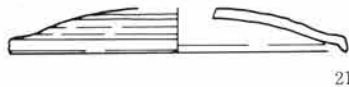
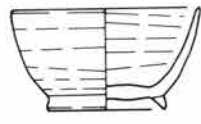
13



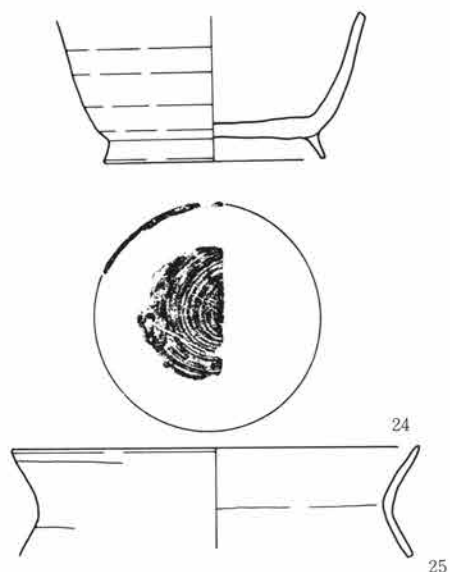
14

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
6	土師器 坏 覆土 床上8cm	13.0・7.2・3.8 1/6 粗砂粒 軟質 にぶい橙色	口縁部は外反し、体部は直線的に開き、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り。
7	土師器 坏 覆土 床上8cm	13.8・9.0 — 1/10 細砂粒・粗砂粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。外面は口縁部横撫で、体部は2段の左方向へのヘラ削り。内面は体部に斜放射状暗文が施されている。
8	須恵器 蓋 床上13.5cm	13.0・3.3・2.6 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状で、天井部はゆるい丸みをもち、口縁部は直立する。天井部は2分の1程度まで回転ヘラ削り。
9	須恵器 蓋 床上6cm	5.0・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は扁平状で、天井部はゆるい丸みをもち、天井部は3分の1程度まで回転ヘラ削り。
10	須恵器 坏 床上16cm	12.0・7.5・3.8 完形 細砂粒・粗砂粒・黒色 鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。底部はヘラ切り後不定方向へのヘラ撫で。
11	須恵器 坏 床上12cm 覆土	13.0・7.4・3.6 2/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。底部はヘラ切り後不定方向へのヘラ撫で。
12	須恵器 坏 床上9cm	12.2・7.2・4.1 1/2 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち、口縁部は外反し、底部は平底を呈す。底部はヘラ切り。
13	須恵器 坏 床上12cm 覆土	12.8・8.8・3.6 1/3 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。底部はヘラ切り後回転ヘラ削り。
14	須恵器 坏 覆土	12.6・7.8・3.5 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は内側にやや盛り上がる。底部はヘラ切り後周辺に回転ヘラ削りが施されている。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
15	須恵器 坏 床上26.5cm	12.6・8.0・3.8 2/5 粗砂粒・円礫 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開き、底部は内側にやや盛り上がる。底部は回転糸切り。
16	須恵器 坏 床上8cm	12.2・6.8・3.9 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は僅かに外反し、底部は内側にやや盛り上がる。底部は回転糸切り。
17	須恵器 坏 床上1cm	12.6・8.8・3.5 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 青灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。底部は平底を呈し、丁寧な回転ヘラ削り。
18	須恵器 坏 床上18.5cm	6.6・—・— 1/4 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。
19	須恵器 坏 床上15cm	6.5・—・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部下位では一段の手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り。
20	須恵器 碗 覆土	9.8・6.2・5.3 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち、高台は断面三角形で「ハ」の字状に開く。底部はヘラ削り。
21	須恵器 蓋 覆土	17.8・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は折り曲げて直立する。天井部は2分の1程度まで回転ヘラ削り。
22	須恵器 碗 床上14cm	16.0・9.6・— 1/3 細砂粒 還元焰 灰白色	高台部欠損。ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては極ゆるい丸みをもつが、あまり開かない。底部は回転糸切り。
23	須恵器 碗 覆土	15.0・8.6・7.0 2/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開き、高台は断面四角形で「ハ」の字状に開く。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
24	須恵器 碗 床直	11.0・—・— 1/6 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部はあまり開かず、高台は細身でやや開く。底部は回転糸切り。周辺は高台貼付時の撫で。
25	土師器 甕 床上1.5cm 覆土	21.8・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	外面は口縁部横撫で。胸部横方向へのへら削り。

S J 04

31

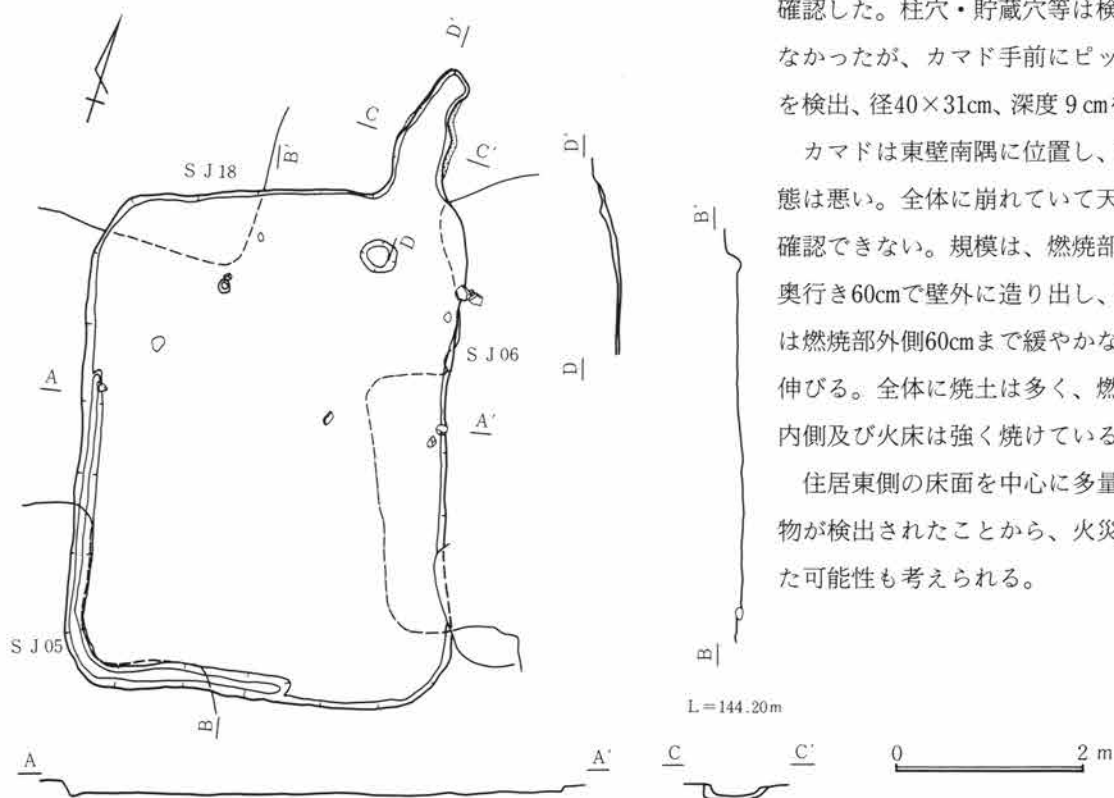
本住居跡は、106～110G-25～28グリッドに位置し、S J 05・06・18と重複する。新旧関係は、本遺構が重複する全住居跡よりも新しい。平面形態は、隅丸長方形を呈す。規模は、東西5.3m、南北3.9m、面積20.79㎡を測る。主軸方向は、N-79°-Eを指す。

床面は、ほぼ平坦で整っているが、全体的に軟らかい。S J 06との重複部を除いて貼床はない。壁は、残存する壁高が5cmと浅いため状況は不明である。壁溝は北壁中央から西壁中央にかけて幅10cm、深度10cmで

確認した。柱穴・貯蔵穴等は検出されなかったが、カマド手前にピット1基を検出、径40×31cm、深度9cmを測る。

カマドは東壁南隅に位置し、残存状態は悪い。全体に崩れていて天井部は確認できない。規模は、燃焼部幅50cm奥行き60cmで壁外に造り出し、煙道部は燃焼部外側60cmまで緩やかな勾配で伸びる。全体に焼土は多く、燃焼部の内側及び火床は強く焼けている。

住居東側の床面を中心に多量の炭化物が検出されたことから、火災に遭った可能性も考えられる。

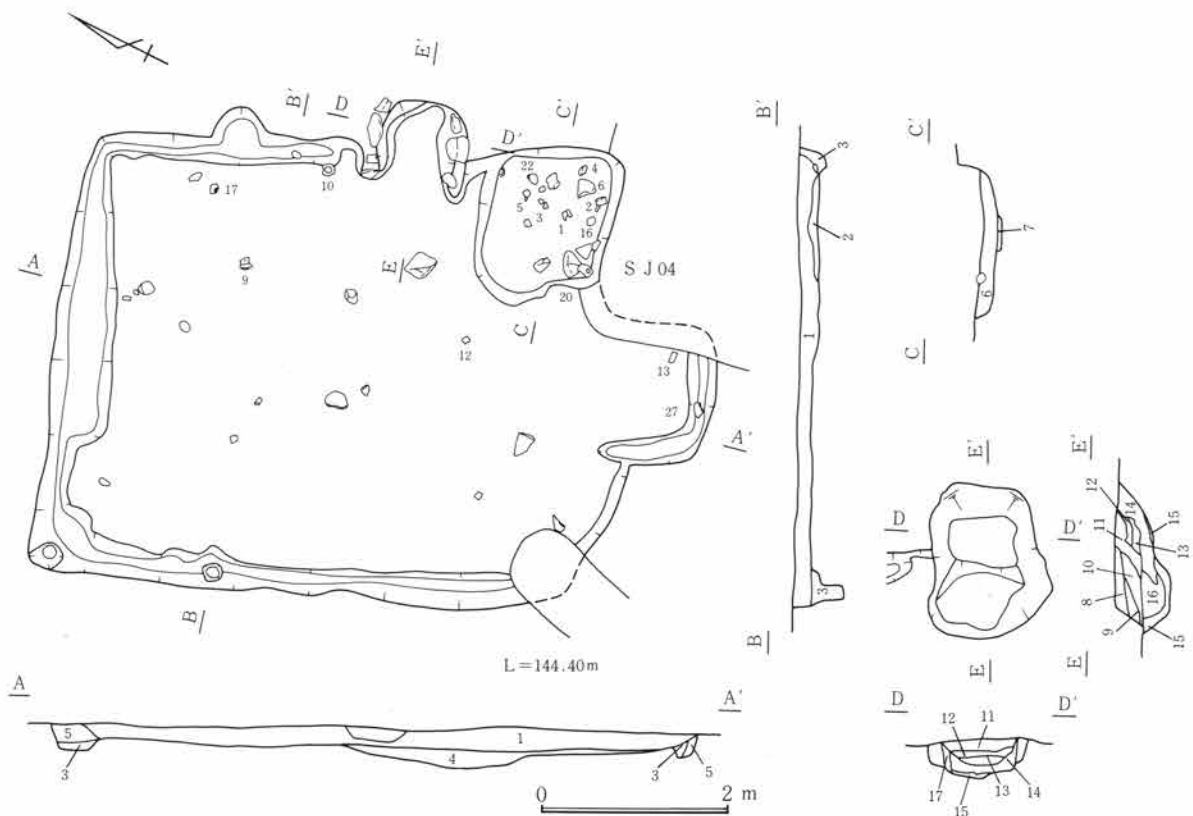


S J 05

本住居跡は、109～112G-26～30グリッドに位置し、S J 04と重複するが、新旧関係は、本遺構の方が古い。南西コーナーは現代の耕作によって削除されている。平面形態は、長方形を呈し南壁中央に張り出しをもつ。規模は、東西4.7m、南北5.8m、張り出し部の東西1.5m、南北1.0m、総面積28.95㎡を測る。主軸方向は、N-72°-Eを指す。

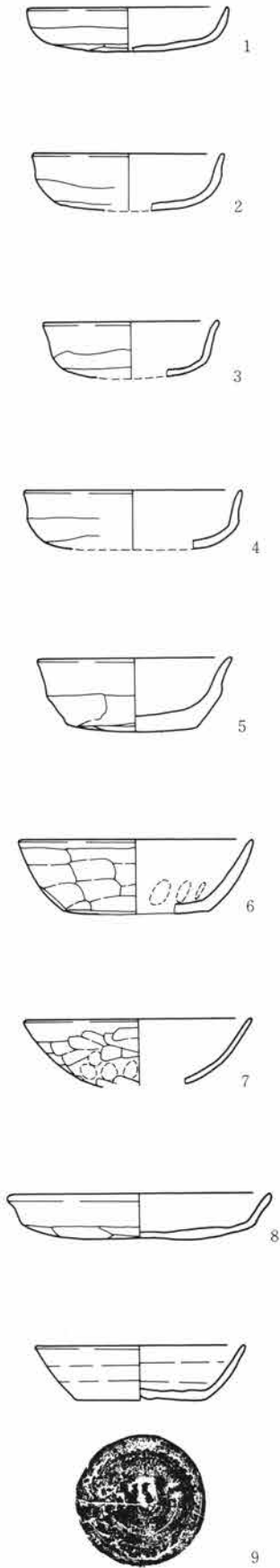
床面は、平坦で良く整い、全体に踏み固められて堅固である。特にカマドの西側部分が顕著。壁は、僅かな勾配をもち、壁高は20cmを測る。南壁東側はS J 04によって削除されているが、貯蔵穴の南壁がS J 04の床下に確認できる。壁溝は、カマド以东から西壁、張り出し部に幅15～30cm、深度5～10cmで確認した。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに位置し、形態は隅丸方形を呈し、規模は、130×130cm、深度20cmを測り、遺物が多く出土している。

カマドは、東壁南寄りに位置し、残存状態は良好である。規模は、燃烧部幅70cm、奥行き70cmでその約半分を壁外に造り出す。煙道部は不明である。天井部は崩れているが、黄褐色粘土で構築した長さ30cmの袖部を確認した。全体に焼土は多く、燃烧部の内側、両袖部の内側、及び火床は強く焼けている。燃烧部の側壁に凝灰岩の切石を並べ、袖部の先端部にも同質の石を埋め込んで補強材としている。カマド掘方は、深度30cmの方形に掘り窪められ、黒色土で埋め戻している。



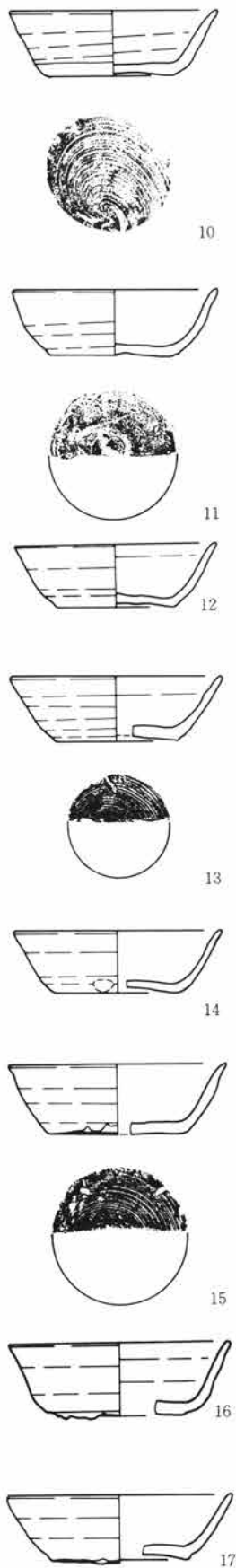
- | | | |
|----------------------|---------------------|-----------------------|
| 1 黒色土 多量の軽石 | 褐色土 | 12 茶褐色土 微量の焼土小ブロック |
| 2 黒色土 多量の軽石 黄褐色土ブロック | 7 黄色砂 | 13 黄褐色土 灰 |
| 3 黒色土 少量の軽石 | カマド | 14 茶褐色土 多量の焼土 焼土ブロック |
| 4 黒色土 微量の軽石 黄褐色土ブロック | 8 茶褐色土 多量の軽石(1～5mm) | 15 黄黒褐色土 軽石 黄褐色土ブロック |
| 5 黒色土 | 9 茶褐色粘質土 微量の軽石 | 16 黒色土 少量の焼土ブロック 炭化物 |
| 貯蔵穴 | 10 茶褐色土 黒味を帯びた色調 微 | 17 黄黒褐色土 黄褐色粘土 凝灰炭の破片 |
| 6 黒色土 微量の軽石 炭化物 多量の黄 | 11 茶褐色土 多量の焼土小ブロック | |

第4節 歴史時代

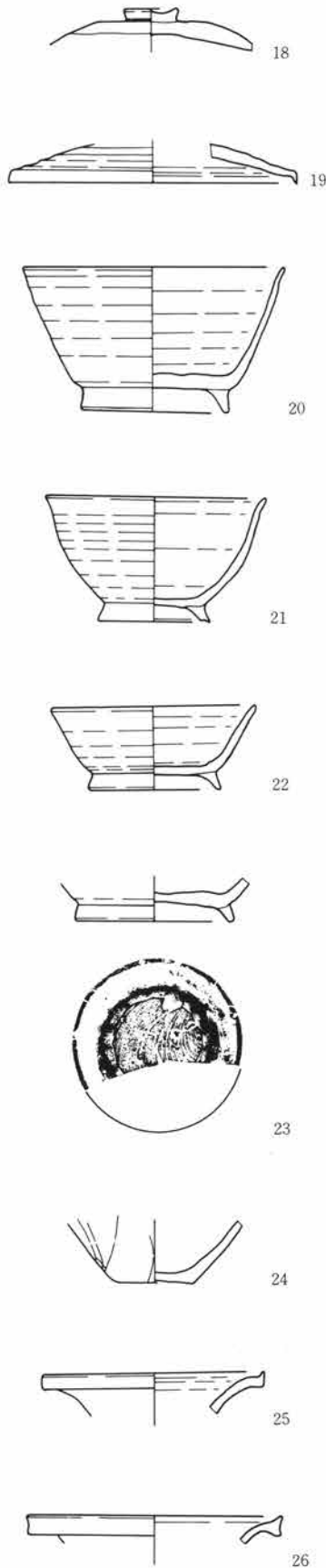


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 皿 床下2.5cm 貯蔵穴	11.8・9.0・2.6 2/5 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直線的で僅かに開き、底部は平底に近い。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
2	土師器 坏 床上16.5cm 貯蔵穴	11.2・9.2・3.5 1/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、口唇部で僅かに外反する。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は外反し、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床上8cm 貯蔵穴	10.4・8.1・— 1/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し体部は丸みをもち開く。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 床上16.5cm 貯蔵穴	13.0・10.4・— 1/6 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、体部は丸みをもち開く。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
5	土師器 坏 貯蔵穴底部より11cm カマド底部より6.5cm	11.4・8.2・4.4 7/8 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、体部との間に弱い稜をもつ。底部は極ゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部は一段の左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
6	土師器 坏 貯蔵穴底部より10cm	14.0・8.6・4.4 1/4 細砂粒・雲母 普通 黄褐色	体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開き、底部は極ゆるい丸みを呈す。口唇部は横撫で、体部は三〜四段の左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
7	土師器 坏 覆土	13.5・—・— 1/2 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は僅かに外反し、体部は丸みをもち大きく開く。口縁部は横撫で、体部は細かいヘラ削りが施され、部分的に指頭痕がみられる。
8	土師器 皿 カマド 覆土	15.4・14.0・2.6 1/4 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は外反し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
9	須恵器 坏 床上6.5cm	12.4・7.7・3.2 完形 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部はヘラ切り。

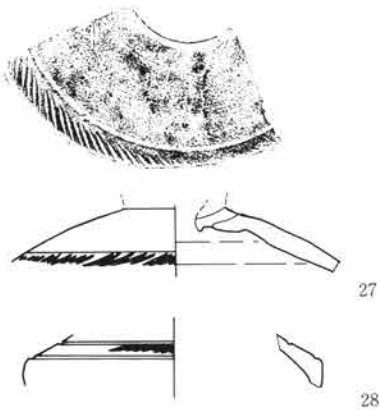
第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
10	須恵器 坏 床上11.5cm	12.4・7.4・3.8 9/10 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。
11	須恵器 坏 床上1cm 覆土	12.2・7.1・3.9 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては丸みをもち開く。底部はへら切り。
12	須恵器 坏 床上3cm	12.0・7.0・3.7 1/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。内部はゆるい丸みをもち、口縁部は僅かに開く。底部は回転糸切り。
13	須恵器 坏 床上2.5cm	12.2・7.2・3.8 2/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、内面に弱い稜をもつ。底部は回転糸切り。
14	須恵器 坏 覆土	12.4・7.2・3.7 1/4 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開き、底部は回転糸切り。
15	須恵器 坏 覆土	12.8・8.0・4.1 1/3 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。底部は回転糸切り。
16	須恵器 坏 覆土	12.5・8.0・3.2 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明、体部の立ち上がりは丸みをもち、口縁部にかけては外反する。底部はへら撫で。
17	須恵器 坏 床直	13.4・8.2・4.0 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
18	須恵器 蓋 覆土	—・鈕3.2・— 1/6 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は扁平状で、天井部は残存部分では回転ヘラ削りが施されている。
19	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は直立。天井部は2分の1程度まで回転ヘラ削り。
20	須恵器 碗 貯蔵穴底部より4cm	15.4・9.1・8.5 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。高台は細身でやや「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り
21	須恵器 碗 覆土	12.8・6.0・7.3 1/5 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。高台は「ハ」の字状に開き、端部を段をもつ。底部は回転糸切り。
22	須恵器 碗 貯蔵穴底部より11cm	12.0・7.2・4.8 3/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。高台は「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切り。
23	須恵器 碗 覆土	—・9.4・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切りで周辺部は高台貼付時の撫で。
24	土師器 甕 覆土	—・4.6・— 小片 細砂粒 普通 橙色	外面は胴部で縦方向ヘラ削り。底部はヘラ削り。
25	須恵器 長頸壺 覆土	13.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、口唇端部は上方へ引きあげられている。
26	須恵器 長頸壺 覆土	15.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 オリーブ黒色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、口唇端部は上・下に引き出されている。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
27	須恵器 長頸壺 床上2cm	—・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰色	長頸壺の肩部の1/5。肩部はゆるい丸みをもち、周辺には二条の沈線がまわり、その区画の内には列点文が施されている。
28	須恵器 長頸壺	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰、灰白色	長頸壺の肩部周辺から胴部上位にかけての小片。肩部の周辺には二条の沈線がまわり、その区画の内には列点文が施されている。

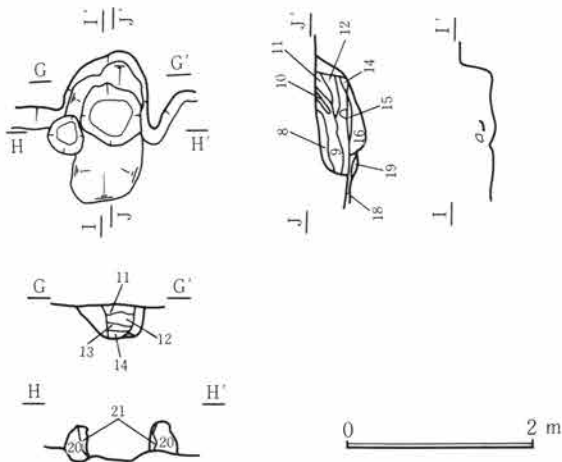
S J 06

34

本住居跡は、105～110G—21～26グリッドに位置し、S J 03・04・11・12と重複する。新旧関係は、本遺構の方がS J 03・04よりも古く、S J 11・12よりも新しい。平面形態は、不整長方形を呈し、北壁、南壁、西壁にそれぞれ張り出しをもつ。規模は、東西6.8m、南北6.3m、張り出し部は北側で東西2.7m、南北1.4m、南側で東西1.7m、南北1.0m、西側で東西1.4m、南北2.6m、総面積50.07㎡を測る。主軸方向は、N—64°—Eを指す。

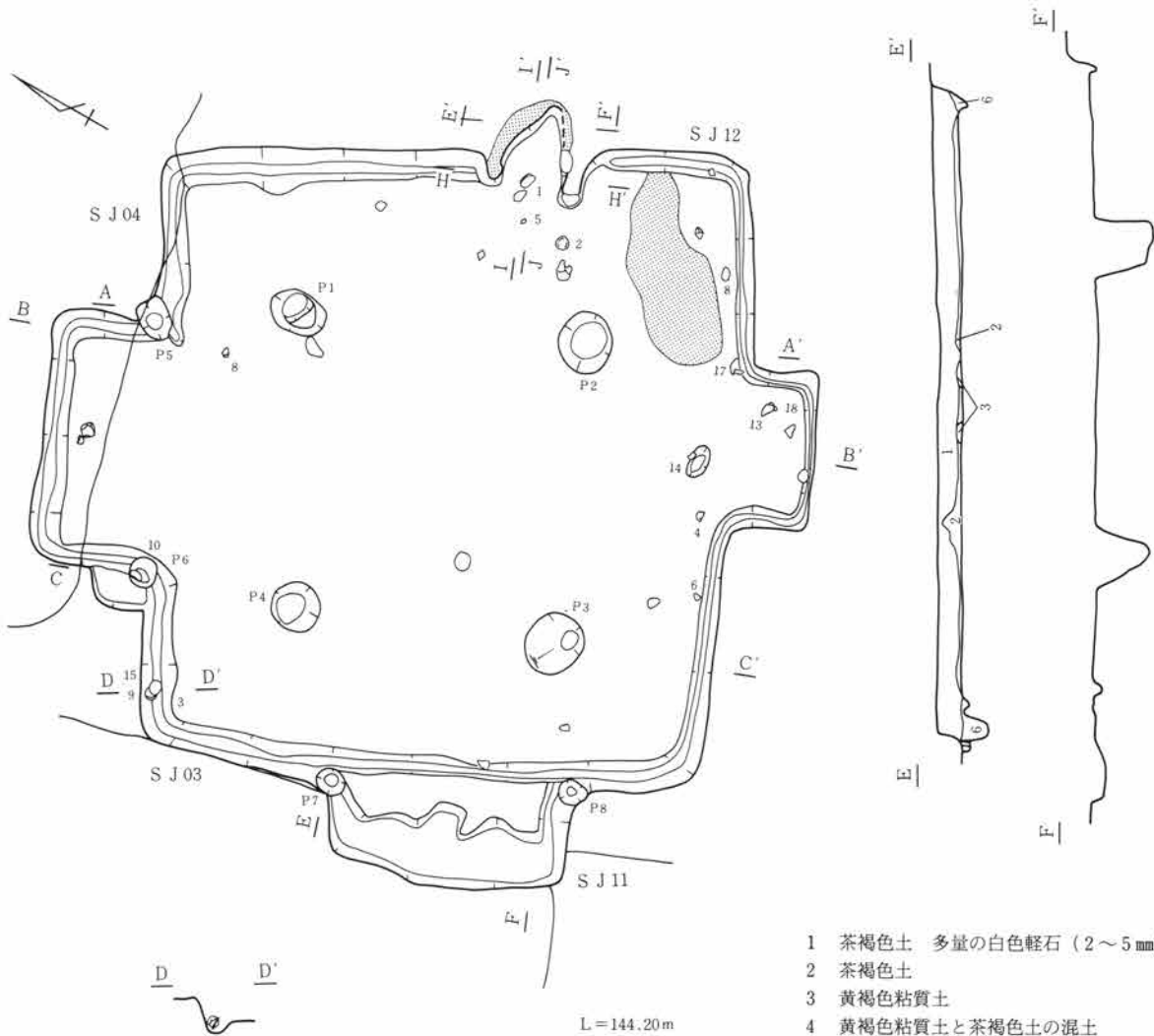
床面は、平坦で良く整い、全体に踏み固められて堅固である。特に住居中央部、カマド西側部分は顕著。壁は、垂直に近く立ち上がり、壁高は17～28cmを測り、平均は22cmである。壁溝は幅10～25cm、深度5.0～15cmでカマド部分を除いて全周する。西壁の張り出し部についてはその手前に周溝が巡るが、その上に貼床をしているので、拡張した可能性が考えられる。柱穴は、主柱穴が4基、住居のほぼ対角線上に位置し、円形を呈す。P₁は径60×44cm、深度77cm。P₂は径66×58cm、深度63cm。P₃は径63×58cm、深度72cm。P₄は径54×52cm、深度63cmを測る。北と西の張り出し部には、内側のコーナー両側にピットが確認された。P₅は径46×32cm、深度は床面から39cm。P₆は直径30cm、深度41cm。P₇は径34×28cm、深度46cm。P₈は径32×26cm、深度34cmを測る。

カマドは、東壁南寄りに位置し、残存状態は良好である。規模は、燃烧部幅70cm、奥行き70cmで、形態は三角形を呈し、煙道部は不明。黄褐色粘性土で構築した長さ30cmの袖部を確認した。全体に焼土は多く、燃烧部の内側及び崩れ落ちた天井部の粘土は強く焼けている。燃烧部右壁、袖部先端に凝灰岩の切石が据えられていた。カマド掘方は、深度10cmで方形に掘り窪められ、黒色土で埋め戻されている。

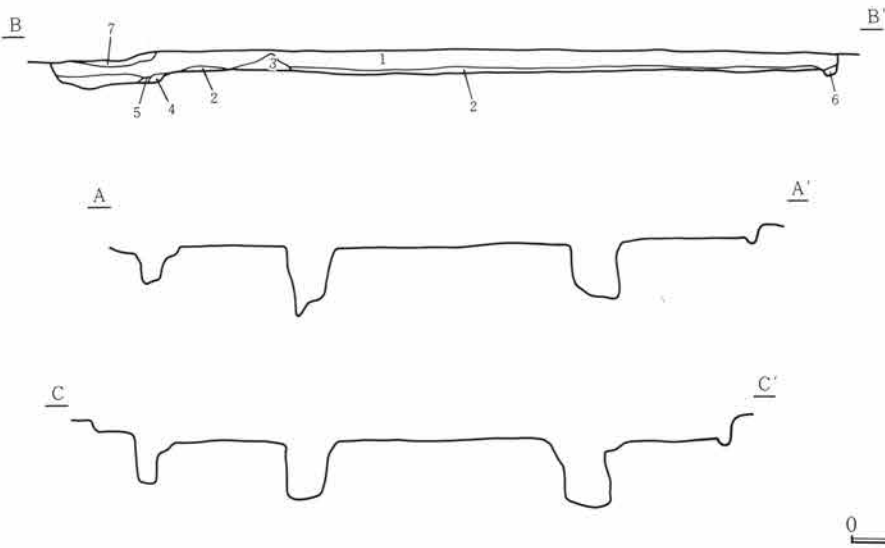


カマド

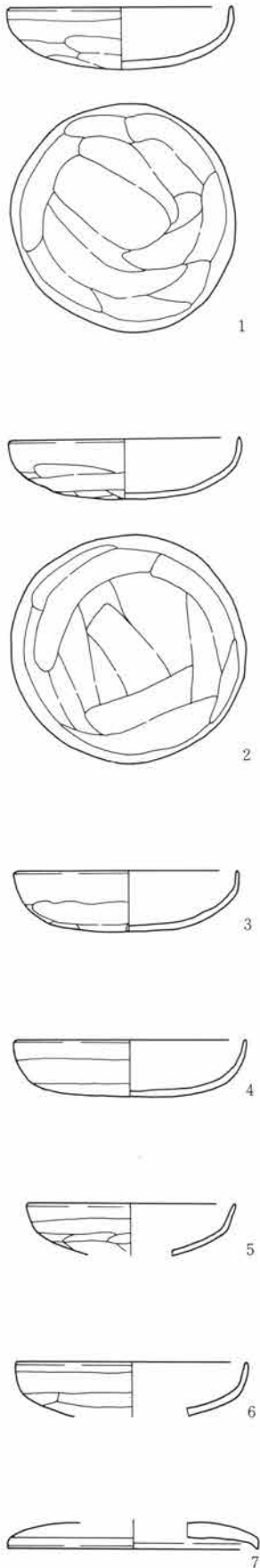
- 8 黄褐色土 多量の白色軽石(1mm大)
- 9 やや黒味の強い茶褐色土
- 10 黒褐色土
- 11 黄褐色土 多量の焼土ブロック
- 12 黒褐色土 多量の焼土ブロック
- 13 やや褐色味を帯びた黒色土 若干の焼土ブロック
- 14 茶褐色粘質土
- 15 黒褐色土 多量の焼土 炭化物
- 16 やや明るい黒褐色土 焼土 炭化物
- 17 黒褐色土 焼土 炭化物
- 18 黒褐色土 少量の焼土ブロック 多量の灰
- 19 黒褐色土 少量の焼土
- 20 黄褐色粘質土と黒色土の混土(袖部構築材)
- 21 同上の焼けたもの



- 1 茶褐色土 多量の白色軽石 (2~5mm)
- 2 茶褐色土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土と茶褐色土の混土
- 5 黄褐色砂質土
- 6 茶褐色土 黄褐色粘質土
- 7 黒褐色土 黄褐色砂質土

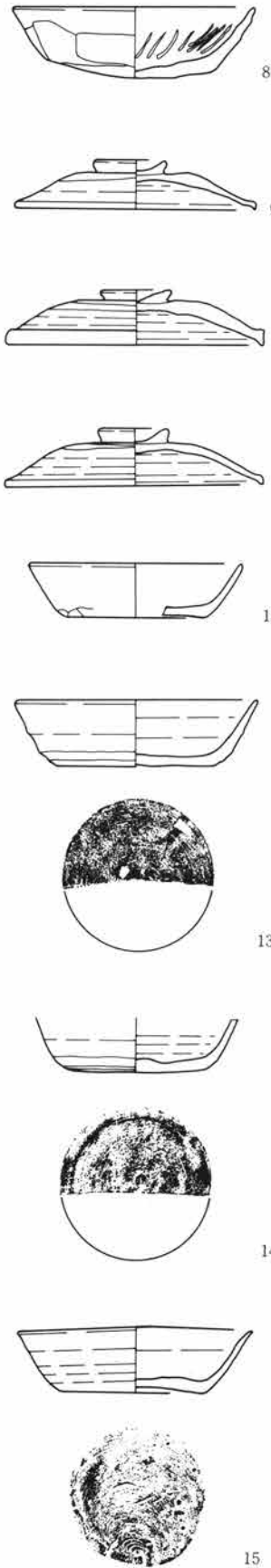


第3章 検出遺構・遺物



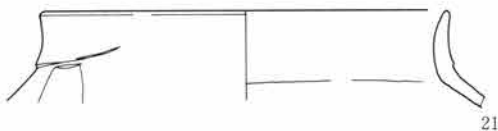
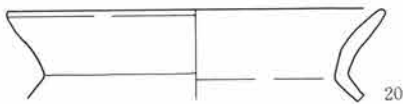
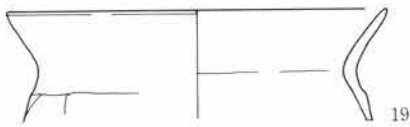
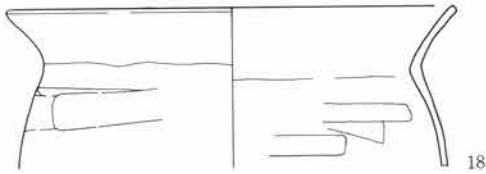
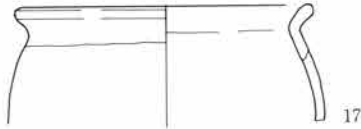
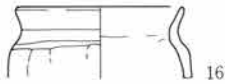
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上8.5cm	13.4・12.3・3.6 完形 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 床直	14.0・12.8・3.5 完形 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 周溝底部より 10cm	13.6・11.4・3.6 完形 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 床上7cm	13.8・12.0・3.4 1/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部はゆるい丸みをもち、僅かに開く。底部は極ゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
5	土師器 坏 床直 覆土	12.6・11.2・— 1/6 細砂粒 普通 明褐色	口縁部は直線的でやや開き、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削りが施されている。
6	土師器 坏 床上5cm 覆土	13.8・13.2・— 1/6 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は直線的でやや開き、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削りが施されている。
7	土師器 蓋 覆土	14.8・—・— 小片 細砂粒・褐色鉱物粒 硬質 橙色	天井部はゆるい丸みをもち、口縁部は直立する天井部はヘラ削り。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
8	土師器 坏 床直	13.8・9.4・4.2 3/5 細砂粒・褐色鉍物粒 やや軟質 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部はゆるい丸みを呈す。外面は口縁部横撫で、体部は一段の左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。内面は体部に放射状暗文が施されている。
9	須恵器 蓋 周溝底部より 5cm	14.3・鈕4.3・2.9 完形 細砂粒・粗砂粒・黒色 鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部は3分の1程度から直線的に開き、口唇部は折り曲げて直立する。天井部は過半くらいまで回転ヘラ削りが施されている。
10	須恵器 蓋 P _s 底部より 51cm 覆土	15.1・鈕4.1・3.2 2/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井部は3分の1程度から直線的に開き、口唇部は折り曲げて直立し、上方にも引き上げられている。天井部は過半くらいまで回転ヘラ削りが施されている。
11	須恵器 蓋 床上9cm 覆土	15.1・鈕3.8・3.3 3/5 粗砂粒・黒色鉍物粒・ 角礫(3~5mm) 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部はゆるい丸みをもつ。口唇部は折り曲げて直立し、天井部は過半くらいまで回転ヘラ削りが施されている。
12	須恵器 坏 覆土	12.4・8.0・3.2 1/6 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。体部は下位に手持ちのヘラ削り。底部は回転ヘラ削り。
13	須恵器 坏 床直	14.0・9.2・3.9 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。体部は下位に2段の回転ヘラ削り。底部も回転ヘラ削りが施されている。
14	須恵器 坏 床上より10.5 cm 覆土	—・7.7・— 1/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部はあまり開かない。底部から体部下位にかけては回転ヘラ削りが施されている。
15	須恵器 坏 周溝底部より 6cm	13.7・8.2・3.8 完形 細砂粒・粗砂粒・白色 鉍物粒 還元焰 (外) 灰色 (内) にぶい黄橙色	ロクロ右回転。口縁部はやや外反し、底部は内側にやや盛り上がり、回転系切り。焼成時の歪みが大きい。

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
16	土師器 小型甕 東南柱穴内	9.0・—・— 口縁部 1/4 細砂粒・粗砂粒 普通 明褐色	口縁部は直線的に開き、横撫で、胴部はへら削りが施されている。
17	土師器 甕 床直 覆土	15.4・—・— 口縁部 1/3 粗砂粒・亜角粒 褐色鉍物粒 普通 褐色	口縁部は短かく外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向へら削り。内面の胴部は横方向へのへら撫でが施されている
18	土師器 甕 床直 覆土	23.4・—・— 口縁部 1/4 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は外反し、胴部は丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は左方向へら削り。内面の胴部は横方向へのへら撫でが施されている。
19	土師器 甕 覆土	20.0・—・— 口縁部 1/8 粗砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、横撫で、胴部は横方向へのへら削り。
20	土師器 甕 覆土	20.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は僅かに外反し、横撫で。
21	土師器 甕 東南柱穴内	21.6・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 普通 褐色	口縁部は直立し、胴部は球状の丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は頸部に向けてのへら削りが施されている。
22	須恵器 蓋 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	短頸甕の蓋。ロクロ回転方向不明。天井部は水平で、口縁部は直立し、屈折部に鏝と凸帯がまわる

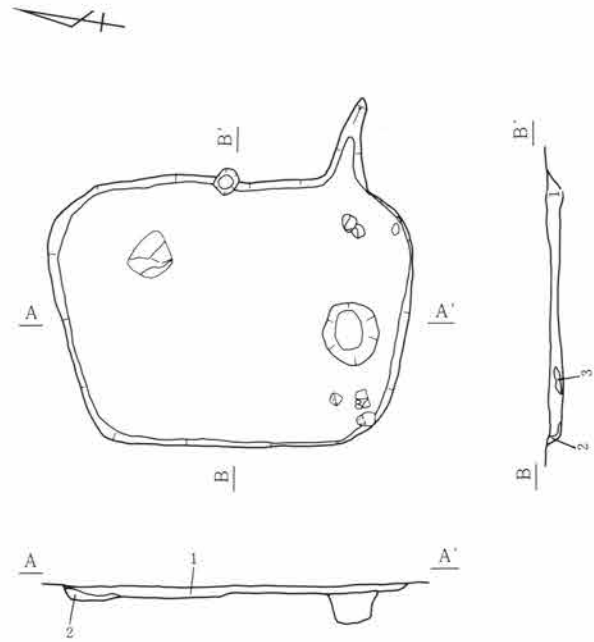
S J 07

36

本住居跡は、105～107G-08～20グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、西壁に対して東壁の長い不整隅丸長方形を呈す。規模は、東西2.8m、南北3.7m、面積9.78m²を測り、主軸方向は、N-87°-Eを指す。

床面は、貼床を2～3cm施して生活面としている。住居の北側が南側より僅かに低いが、全体的には平坦である。住居中央部及びカマドの西側部分は踏み固められて堅固であるが、他は軟らかい。壁は緩やかな勾配をもち、壁高は9～20cmを測り、平均15cmである。壁溝・柱穴は検出されなかった。南壁際中央西側に、径63×60cm、深度35cmの円形ピットを検出した。貯蔵穴の可能性も考えられる。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は悪い。火床に僅かな焼土が検出された程度で、構造、構築状況等は不明である。

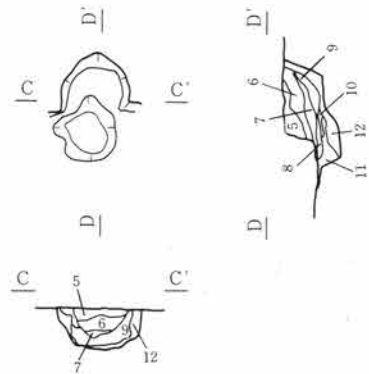
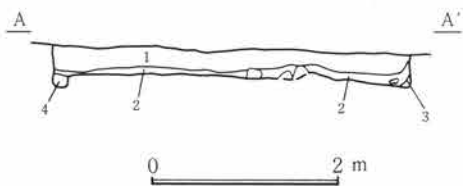
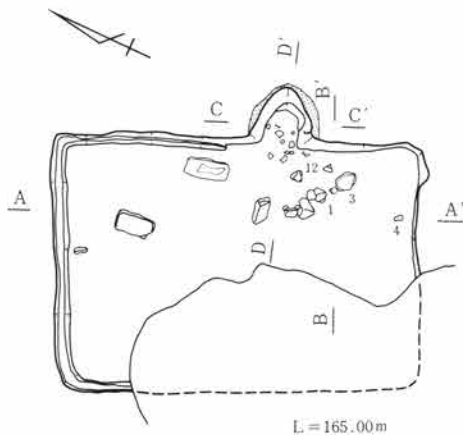


- 1 黒色土 軽石 黄褐色ブロック
- 2 黒色土若干の軽石 多量の黄褐色ブロック
- 3 黄褐色ブロック



S J 08

36



- 1 黒色土 多量の軽石
- 2 黒色土 黄褐色ブロック
- 3 黒褐色砂質土 黄褐色砂質土
- 4 黒褐色砂質土 黒色土ブロック
- 5 黒褐色土 多量の軽石 (1～5 mm)
- 6 褐色土 焼土小ブロック
- 7 褐色土 微量の焼土ブロック
- 8 黒褐色土 微量の焼土小ブロック
- 9 黄褐色土 黒色土の混土
- 10 焼土
- 11 黒褐色土 焼土ブロック 炭化物
- 12 黄褐色土

第3章 検出遺構・遺物

本住居跡は、104～106G-05～08グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、住居南西部は開析谷に削除されて確認できないが、長方形を呈す。規模は、東西2.7m、南北3.8m、面積10.37㎡を測り、主軸方向は、N-66°-Eを指す。

床面は、平坦で良く整い、全体的に踏み固められて堅固である。貼床はない。壁は、直線的に垂直に近く、コーナーも直角に近い。壁高は、24～37cmを測り、平均30cmである。壁溝は、カマド以北から西壁まで、幅10cm、深度10cmで確認した。柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは、東壁の南寄りに位置し、残存状態は悪い。規模は、燃烧部幅65cm、奥行き60cmを測り、煙道部は不明である。形態は三角形を呈す。袖部・天井部共に確認できなかったが、燃烧部内側は強く焼けている。周辺部の床面に密着して火を受けて凝灰岩の切石が出土。カマドの構築材として使用されていた可能性が考えられる。

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	12.8・11.6・3.4 完形 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は直立し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部上半は横撫で、下半は指撫で、底部はへら削り。
2	土師器 坏 床上3cm	13.8・8.4・4.5 5/6 粗砂粒 硬質 にぶい赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部はゆるい丸みを呈す。外面は口縁部横撫で、体部は二段の左方向へのへら削り。底部へら削り。内面は体部に斜放射状暗文が施され、部分的に傾斜の反対の暗文が施され、斜格子状の暗文がみられる。
3	土師器 坏 カマド	15.4・—・— 1/8 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は僅かに外反し、体部との間に弱い稜をもつ。外面は口縁部横撫で、体部はへら削り。内面は体部に斜放射状暗文が施されている。

No.	種類	観察表掲載頁
4	石製品 砥石	832

S J 10

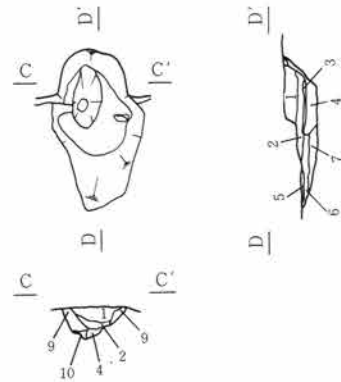
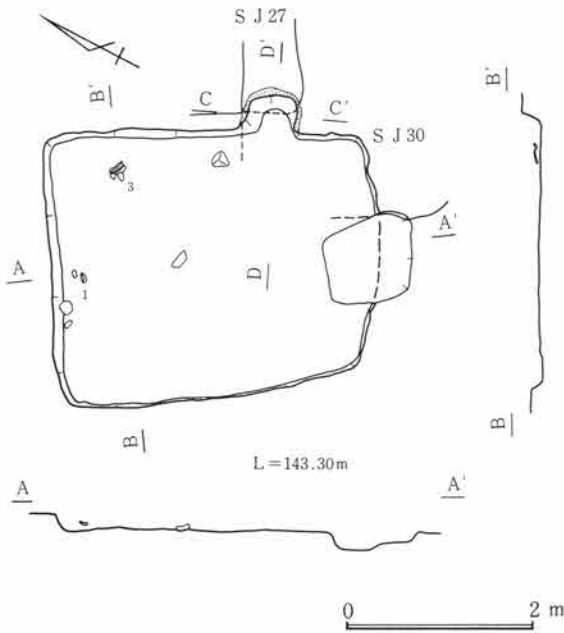
38

本住居跡は、101～104G-04～06グリッドに位置し、S J 30と重複するが、新旧関係は、本遺構の方が新

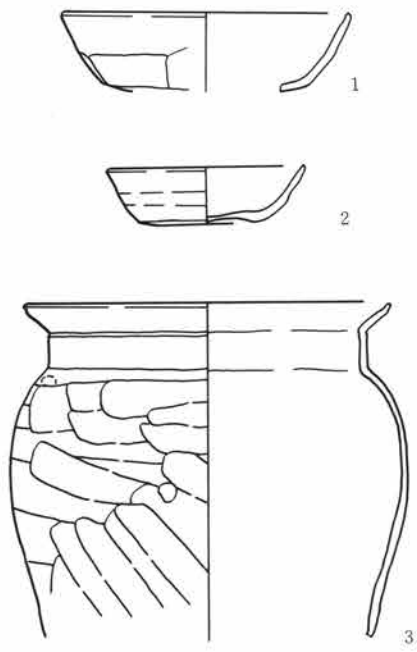
しい。平面形態は、南壁に対して北壁が長い不整長方形を呈す。規模は、東西2.8m、南北3.5m、面積9.75㎡を測り、主軸方向は、N-60°-Eを指す。

床面は、平坦で整っているが、全体的に軟かい。壁は、直線的で垂直に近く立ち上り、壁高は、5~20cmを測り、平均13cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは、東壁の南側に位置し、残存状態は悪い。規模は、燃烧部幅50cm、奥行き35cmを測り、壁外に造り出しているが、残存状態が悪く、正確な範囲は不明である。燃烧部内側は強く焼け、その手前の床面に多量の炭化物を検出した。



- | | |
|-------------------|-------------------------------|
| カマド | ロック |
| 1 黒色土 少量の軽石 | 7 黒褐色土 6層より黒味を増す軽石 黄褐色小ブロック |
| 2 黒色土 微量の軽石 炭化物 | 8 焼土 |
| 3 黒灰色粘質土 炭化物 | 9 黒色土 多量の軽石 少量の焼土 炭化物 |
| 4 黒色土 多量の焼土 炭化物 | 10 黒色土 多量の軽石 少量の焼土 炭化物 粘土ブロック |
| 5 黒色土 淡褐色粘土(床面貼床) | |
| 6 黒褐色土 軽石 黄褐色小ブ | |



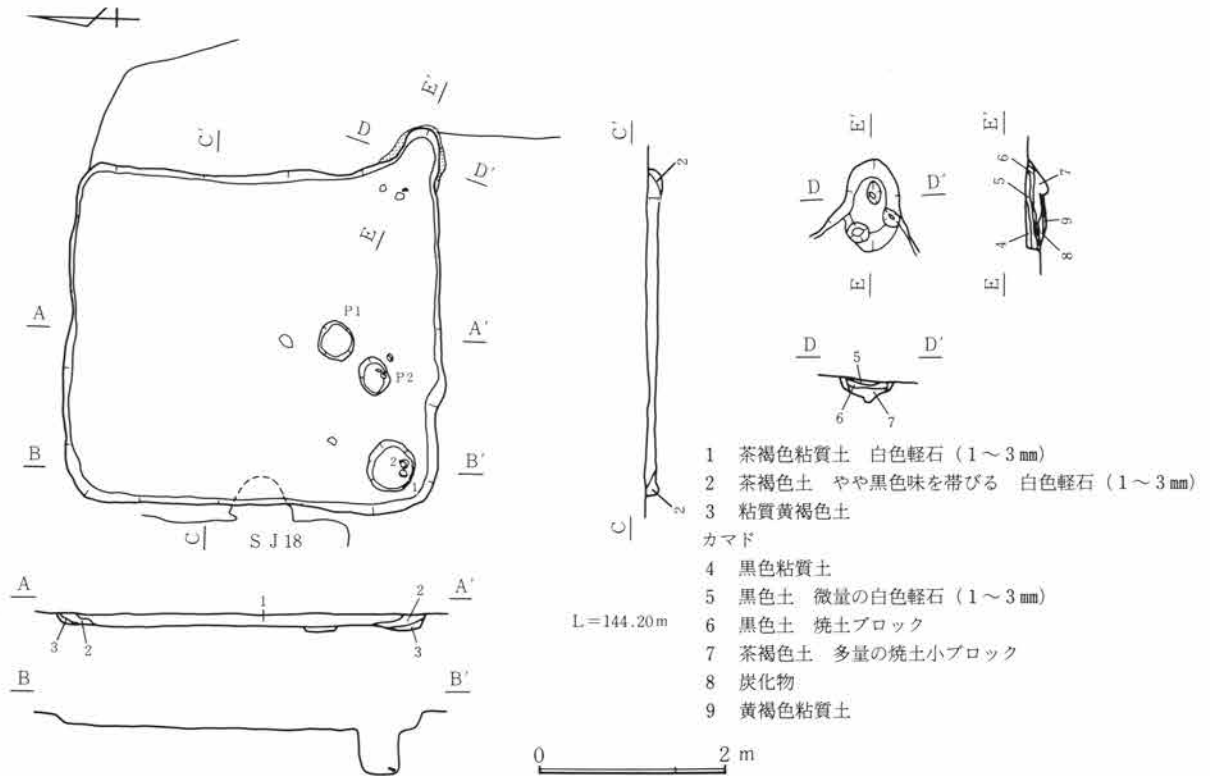
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上5cm	15.2・11.0・— 1/6 細砂粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけてはほぼ直線的、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部は一段の左方向へのヘラ削り。
2	須恵器 坏 カマド 床直	10.4・6.9・2.9 2/5 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部はゆるい丸みをもち開く。底部は内側に盛り上がる。底部は回転糸切りで、周辺に回転ヘラ削りが施されている。
3	土師器 甕 床直	19.4・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位で丸みをもち、中位・下位は底部に向けてつぼまる。外面は口縁部横撫で、胴部は上半で左方向へのヘラ削り、下半は縦方向へのヘラ削り。内面は胴部にヘラ撫でが施されている。

S J 13

本住居跡は、104～106G-26～28グリッドに位置し、S J 18のカマドと住居址西側で重複する。新旧関係は本遺構の方が新しい。平面形態は、整った長方形を呈す。規模は、東西3.5m、南北3.9m、面積13.80m²を測り、主軸方向は、N-90°-Eを指す。

床面は、平坦で良く整い、壁際を除いて固く踏み固められて堅固である。壁は、僅かな勾配をもち、壁高は、10～17cmを測り、平均13cmである。壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南西隅に位置し、直径50cm、深度40cmを測る。住居中央南側に、ピット2基を検出した。P₁は円形で径41×39cm、深度5cm、P₂は円形で径40×31cm、深度7cmを測る。P₂の底面には、少量の焼土、炭化物が検出された。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は悪く、天井部は確認できない。規模は、燃烧部幅50cm、奥行50cmで壁外に造り出し、煙道は確認できない。全体に焼土は多く、燃烧部の内側は強く焼け、覆土内にも多量の焼土ブロックを検出した。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師質土器 皿 貯蔵穴底部より6cm	9.6・5.0・2.6 5/6 細砂粒、酸化焙 にぶい黄橙色	ロクロ右回転。器壁は厚く、底部は回転糸切り。
2	土師質土器 皿 貯蔵穴底部より4cm	9.3・4.3・2.5、2/3 細砂粒・褐色鉱物粒 酸化焙 にぶい黄橙色	ロクロ右回転。器壁は厚く、底部は回転糸切り。

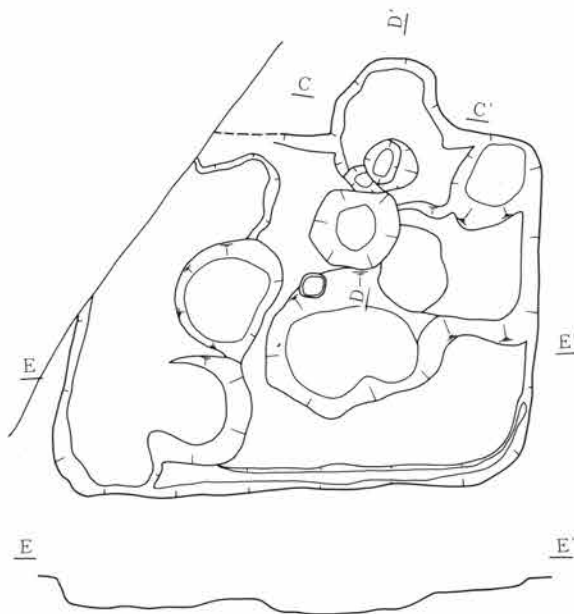
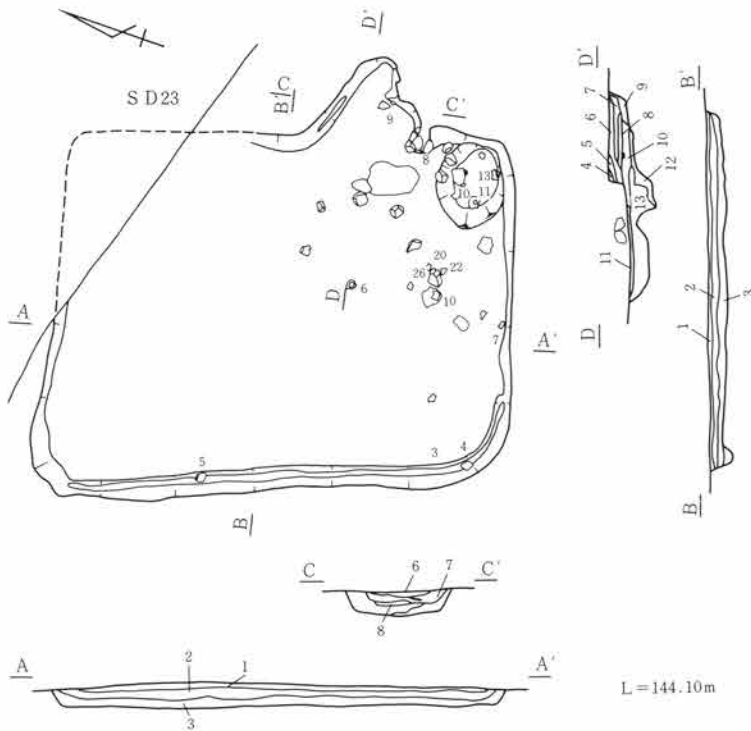
S J 14

40

本住居跡は、99～102G-25～28グリッドに位置し、S D23と重複する。本遺構の北東コーナーはこの溝に削除されている。平面形態は長方形を呈する。規模は、東西3.8m、南北5.0m、面積17.11m²を測り、主軸方向は、N-75°-Eを指す。

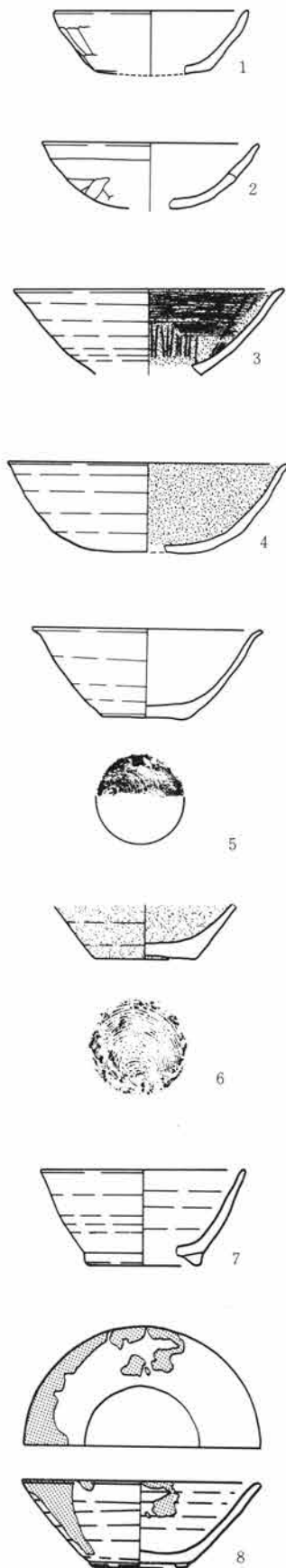
床面は、全体に起伏が多く整っていない。特に踏み固められた部分はなく、カマドの西側部分を除いて軟らかい。壁は、僅かな勾配をもち、壁高は14～17cmを測り、平均15cmである。壁溝は、西壁と南壁の一部に幅15cm、深度5～10cmで確認した。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに位置し、形態は不整円形を呈し、規模は径80×70cm、深度15cmを測る。

カマドは、東壁の南寄りに位置し、残存状態は良い。規模は、燃烧部幅80cm、奥行き50cmで、その大半を壁外に造り出す。煙道部はさらにその外側50cmまで、緩やかな勾配で立ち上がる。天井部は確認できないが、黄褐色粘質土で構築した長さ20cmの袖部を検出した。全体に焼土は少ないが、燃烧部の内側は強く焼けている。右側の袖部の先端と煙道部に沿って、凝灰岩を据えて、補強材としている。



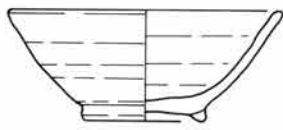
- 1 粘質黒褐色土
- 2 黒色土 多量の白色軽石 (1～5mm)
- 3 黒褐色土
- カマド
- 4 黒色土 少量の炭化物 黄褐色ブロック
- 5 黒色土 炭化物 黄褐色ブロック
- 6 黒色土 少量の焼土
- 7 黒褐色土 多量の焼土粒 少量の焼土ブロック
- 8 黒褐色土 焼土ブロック 炭化物
- 9 茶褐色粘質土
- 10 茶褐色粘質土 焼土粒
- 11 黒褐色粘質土
- 12 茶褐色粘質土 黄褐色粘土ブロック
- 13 茶褐色粘質土 炭化物 黄褐色粘土ブロック

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下	11.4・6.8・(3.8) 1/10 粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はへら削りが施されている。
2	土師器 坏 床下	12.8・10.0・3.8 1/10 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、体部から底部にかけては丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はへら削りが施されている。
3	土師器 碗 周溝底部より 8cm	15.8・—・— 1/3 粗砂粒・雲母 褐色鉍物粒 酸化焰 内面黒色処理 橙色・黒色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、胴部は丸みをもち開く。内面は口縁部から体部中位まで横方向へのへら磨き、体部下位は縦方向へのへら磨きが施されている。
4	須恵器 碗 覆土	16.4・6.0・5.2 1/5 粗砂粒・雲母・褐色鉍物粒 酸化焰 内面黒色処理 明褐色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。
5	須恵器 坏 周溝底部より 3.5cm	13.6・5.0・5.3 1/2 粗砂粒・雲母 還元焰 灰黄色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。底部は回転糸切り。
6	須恵器 坏 床上4.5cm	—・5.8・— 1/4 細砂粒・粗砂粒・雲母 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。
7	須恵器 碗 床上15cm 覆土	12.0・7.0・5.6 1/5 粗砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部はやや外反し、体部は直線的であまり開かない。高台は丸みをもつ断面三角形を呈す。
8	須恵器 碗 床上19.5cm カマド	14.0・6.0・5.0 3/5 細砂粒 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。高台は小型で断面四角形を呈し接地面は広い。底部切り離し方法不明。内外面に漆の付着がみられる。

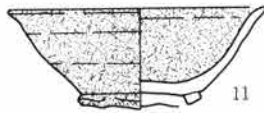
第4節 歴史時代



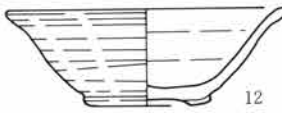
9



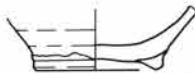
10



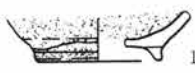
11



12



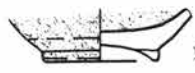
13



14



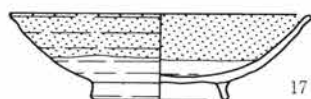
15



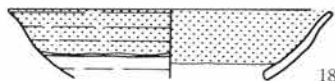
16

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	須恵器 碗 床下5cm カマド	14.4・6.7・5.8 1/3 粗砂粒・雲母 酸化焰 浅黄色	ロクロ右回転。口縁部は極弱く外反し、体部は極ゆるい丸みをもち開く。高台は丸みをもち雑な成形。底部は回転糸切り後ヘラ撫で。
10	須恵器 碗 床上10.5cm 貯蔵穴底部より8cm	13.8・7.2・5.2 1/3 粗砂粒・褐色鉍物粒・ 雲母 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。高台は丸みをもつ断面三角形を呈す。底部は回転糸切り。
11	須恵器 碗 貯蔵穴底部より5cm	13.6・5.3・5.3 7/8 粗砂粒・雲母 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。高台は雑な成形、底部切り離し方法不明。
12	須恵器 碗 覆土	14.8・6.8・5.1 1/6 細砂粒・粗砂粒・雲母・ 褐色鉍物粒 半還元焰 灰褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は丸みをもち開く。高台は扁平な断面四角形を呈し雑な成形。底部は回転糸切り。
13	須恵器 碗 貯蔵穴底部より12.5cm	—・7.2・— 1/4 粗砂粒・褐色鉍物粒・ 雲母 酸化焰 橙色	ロクロ右回転。高台は丸みをもつ断面三角形を呈し、底部は回転糸切り。
14	須恵器 碗 床下	—・6.8・— 1/10 細砂粒 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ回転方向不明。高台は丸みをもちあまり開かない。底部は回転糸切り。
15	須恵器 碗 覆土	—・6.4・— 1/6 細砂粒・雲母・黒色鉍 物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は直線的に開き、高台は丸みをもつ断面三角形を呈し、底部は回転糸切り。
16	須恵器 碗 床下	—・6.2・— 1/8 細砂粒・雲母 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開く。高台は丸みをもつ断面三角形、底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物



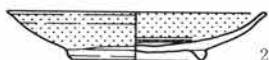
17



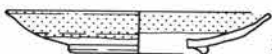
18



19



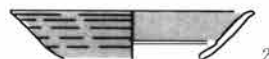
20



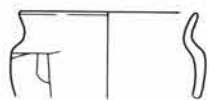
21



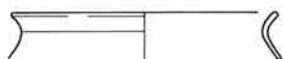
22



23



24



25



26

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
17	灰釉陶器 碗 床下	15.8・7.2・4.5 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は大きく開く。高台は弱い三日月型を呈す。外面の体部はへら削り。底部はへら撫で、施釉は漬け掛け、釉調は不透明な灰緑色を呈す。内面底部に重ね焼き痕がみられる。
18	灰釉陶器 碗 床下	17.0・一・一 小片 緻密・黒色鉍物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反する。体部下半は回転へら削り、施釉は刷毛塗り、釉調は不透明な灰緑色を呈す。
19	灰釉陶器 皿 床下	13.0・6.2・2.3 1/2 緻密・還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は小型の三日月型を呈す。底部はへら撫で。施釉は刷毛塗り。釉調は不透明な灰緑色を呈す。
20	灰釉陶器 皿 床下	13.6・7.4・2.6 1/2 緻密 還元焰焼きしめ 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は丸みをもつ断面三角形を呈す。施釉は刷毛塗り。釉調は、不透明な灰白色を呈す。
21	灰釉陶器 皿 床下	13.8・7.6・2.1 1/6 緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は小型の三日月型を呈す。施釉は刷毛塗り。釉調は不透明な灰緑色を呈す。
22	緑釉陶器 碗 床上20.5cm 覆土	13.6・一・一 1/8 緻密・細砂粒 還元焰焼きしめ 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもち大きく開く。内面の中位に段をもつ。外面の体部はへら削りが施されている。釉調は透明な緑色を呈す。
23	緑釉陶器 床下 覆土	13.6・一・一 1/8 緻密・細砂粒 還元焰焼きしめ 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもち大きく開く。内面の中位に段をもつ。外面の体部はへら削りが施されている。釉調は透明な緑色を呈す。
24	土師器 小型甕 床下	9.4・一・一 1/10 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は直線的に開き、胴部は肩が張る。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。
25	土師器 甕 カマド	一・一・一・一・小片 細砂粒 普通 灰褐色	
26	須恵器 瓶子 床上20.5cm	一・6.7・一・小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰焼成 灰色	器種不明。胴部は縦方向へら削り。底部はへら撫で。

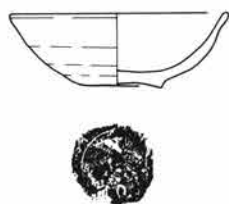
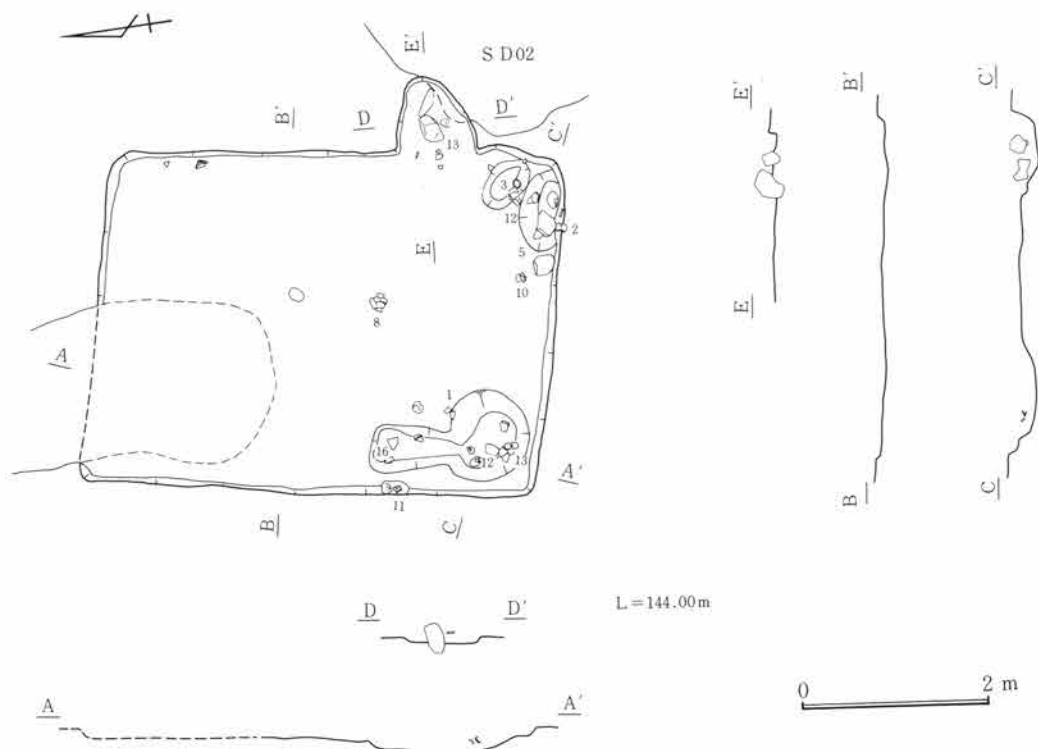
S J 15

41

本住居跡は、101～104G-20～23グリッドに位置し、S D02と重複するが、新旧関係は本遺構の方が古い。平面形態は長方形を呈す。規模は、東西3.6m、南北4.8m、面積17.83m²を測り、主軸方向は、N-77°-Eを指す。

床面は、ほぼ平坦で整い、住居中央部は踏み固められて堅固だが、他は軟かい。貼床はない。壁は、直線的で、垂直に近く立ち上がり、壁高は、6～10cmを測り、平均は8cmである。壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、住居南東隅と南西隅に2基検出した。東南隅のものは、不整楕円形で径85×45cm、深度15cm、南西隅の方は、楕円形で径86×48cm、深度15cmを測る。カマド南側にピットを1基検出した。形態は楕円形を呈し、規模は径60×40cm、深度6cmを測る。

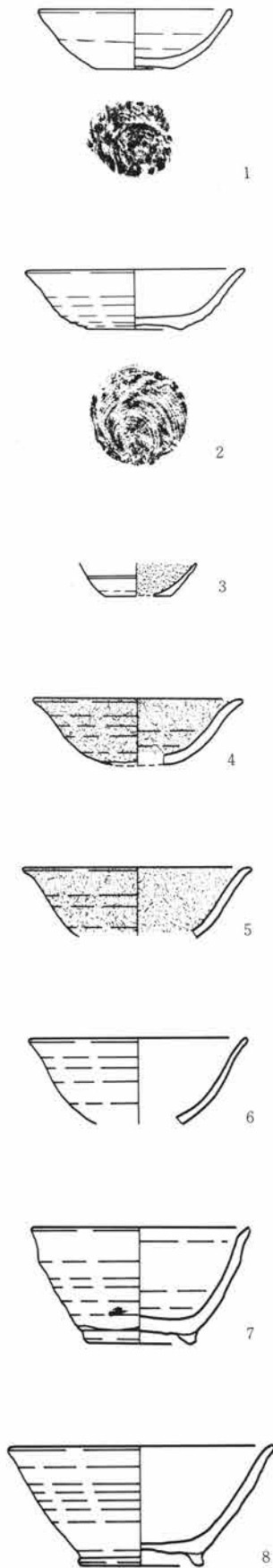
カマドは、東壁の南寄りに位置し、残存状態は悪い。規模は、燃烧部幅80cm、奥行き70cmで壁外に造り出す。煙道部の状況は不明である。天井部は確認できず、火床には多量の焼土及び炭化物を検出した。火床の中央に石製支脚を埋め込んでいる。



1

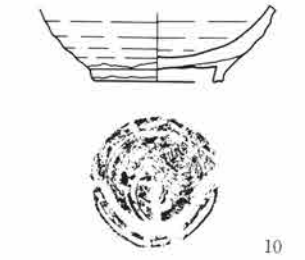
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 K, 底部より 11.5cm	11.5・4.4・3.9 9/10 粗砂粒・褐色鉱物粒 酸化焰軟質 浅黄橙色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反し、体部は丸みを持ち開く。底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物

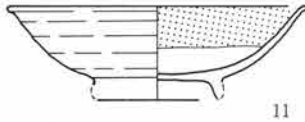


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 床上3.5cm 貯蔵穴	11.2・4.4・3.5 3/5 細砂粒・褐色鉱物粒。 酸化焰軟質 浅黄橙色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。底部は回転糸切り。
3	須恵器 坏 床上5.5cm	12.3・5.6・3.5 1/2 粗砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はやや腰が張る状態を呈し、底部は回転糸切り。
4	須恵器 不明 K ₁ 底部より 4.5cm	—・4.0・— 小片 細砂粒 還元焰 内面黒色処理 黄灰色・黒褐色	ロクロ回転方向不明。器種は非常に薄い。
5	須恵器 坏 床直	12.4・4.6・3.3 小片 細砂粒 還元焰焼成 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みを持ち大きく開く。底部切り離し方法不明。
6	須恵器 坏 床直	13.4・—・— 小片 粗砂粒・雲母 還元焰焼成 褐灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもつ。
7	須恵器 坏 貯蔵穴	13.0・—・— 1/5 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みを呈す。
8	須恵器 碗 床上2cm	12.8・6.8・6.8 1/2 粗砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的であり開かない。高台は丸みを持ち断面三角形を呈す。底部は回転糸切りで周辺部は高台貼付時による撫で。
9	須恵器 碗 床直	13.0・—・— 1/5 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みを呈す。

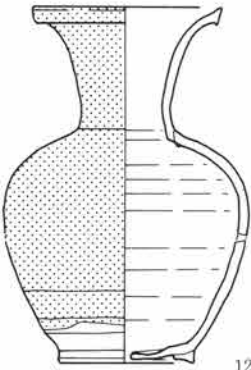
第4節 歴史時代



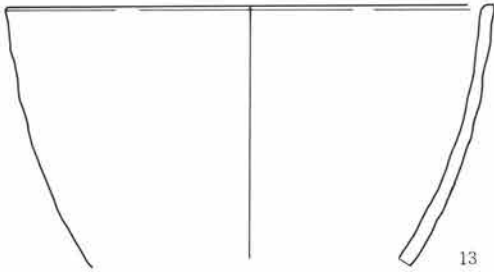
10



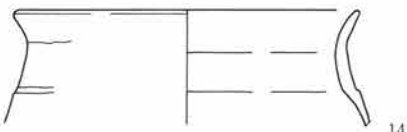
11



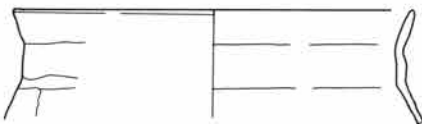
12



13



14



15



16

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
10	須恵器 碗 床直	—・7.2・— 1/4 粗砂粒・石英 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち開く。高台は内傾し、接地面に凹線がまわる。底部は回転糸切り後半分に再度粘土を貼付して器高の修正をおこなっている。
11	灰釉陶器 碗 床直	15.4・6.4・4.9 1/6 緻密・黒色鉱物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、底部は丸みをもち大きく開く。高台は三日月型を呈すると推定される。底部は回転撫で、体部にはヘラ削り痕が部分的にみられる。施釉は刷毛塗り。釉調は不透明な灰白色を呈す。
12	灰釉陶器 長頸壺 床直 覆土	10.2・7.0・推定18.8 2/5 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰焼きしめ 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、口縁部は上下に引き出される。胴部は肩が張り、高台は丸みをもち内側に段をもつ。頸部と胴部の接合は二段成形。胴部下半は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ削り。施釉は刷毛塗り。釉調は透明な淡緑色を呈す。
13	土師器 鉢 床上9.5cm 貯蔵穴	26.0・—・— 小片 粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部から体部にかけては丸みをもって開く。口唇端部は平坦。外面は磨耗のため不明瞭。内面はヘラ撫で
14	土師器 甕 覆土	18.2・—・— 小片 細砂粒 普通 褐色	器壁は薄く、口縁部は「コ」の字状口縁の褪化したもので横撫で、胴部はヘラ削り。
15	土師器 甕 覆土	21.0・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい褐色	器壁は薄く、口縁部は「コ」の字状口縁の褪化したもので横撫で、胴部はヘラ削り。
16	須恵器 甕 K ₁ 底部より 5.5cm	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部は縁带状に上下に引きだされている。

S J 16

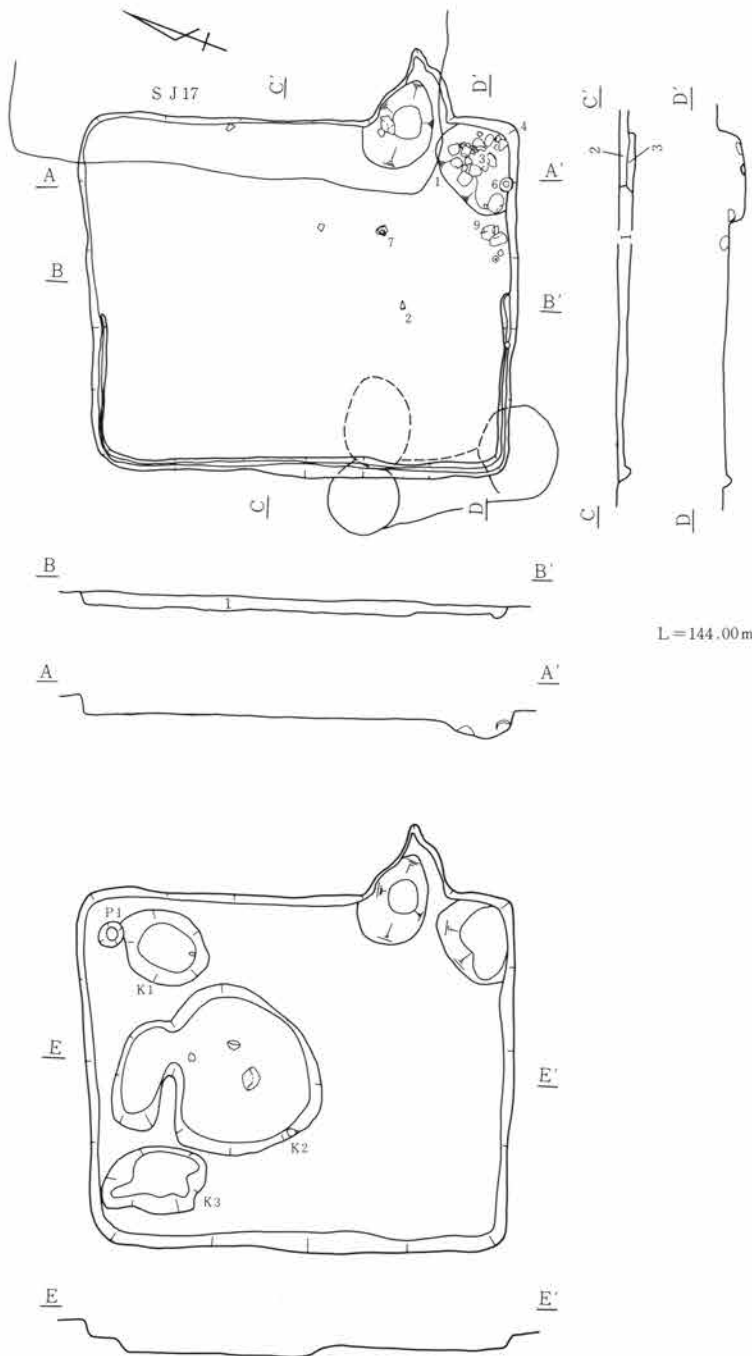
本住居跡は、98～101G21～24グリッドに位置し、S J 17、S B16・17と重複する。本遺構のカマドから北東コーナーまでをS J 17によって削られていることから本遺構の方が古く、S B16・17よりも新しい。平面形態は長方形を呈す。規模は、東西3.7m、南北4.6m、面積17.21㎡を測る。主軸方向は、N-77°-Eを指す。

床面は、平坦で良く整い、特にカマド西側が踏み固められて堅固である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、5～13cmを測り、平均9cmである。壁溝は、北壁西側から西壁、南壁の中央まで、幅10～20cm、深度3～8cmで確認した。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに位置し、不整楕円形で径110×90

cm、深度16cmを測る。

カマドは、東壁の南寄りに位置し、その大半をS J 17によって削られ残存状態は悪い。規模は、壁外への掘り込みが、幅90cm、奥行き60cm、煙道部は長さ20cmを確認した。火床からは少量の焼土が検出された。掘方は、カマド手前から円形に径110×80cm、深度17cmに掘り窪められ、褐色土で埋め戻されている。

掘り方は、住居北側に床下施設として土壇3基、ピット1基を確認した。K₁は円形で径94×78cm、深度19cm、K₂は不整円形で径230×150cm、深度13cm、K₃は円形で径113×78cm、深度16cmを測る。P₁は円形で径30cm、深度27cmを測る。

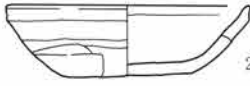


- 1 茶褐色粘質土 白色軽石 (1～5mm)
- 2 茶褐色土 (S J 17覆土)
- 3 茶褐色粘質土と黒色土の混土 (S J 17の貼床)

第4節 歴史時代



1



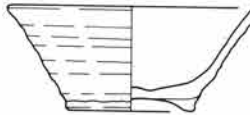
2



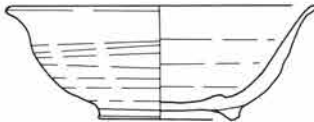
3



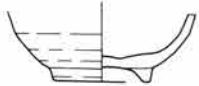
4



5



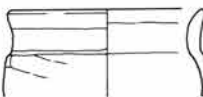
6



7



8



9

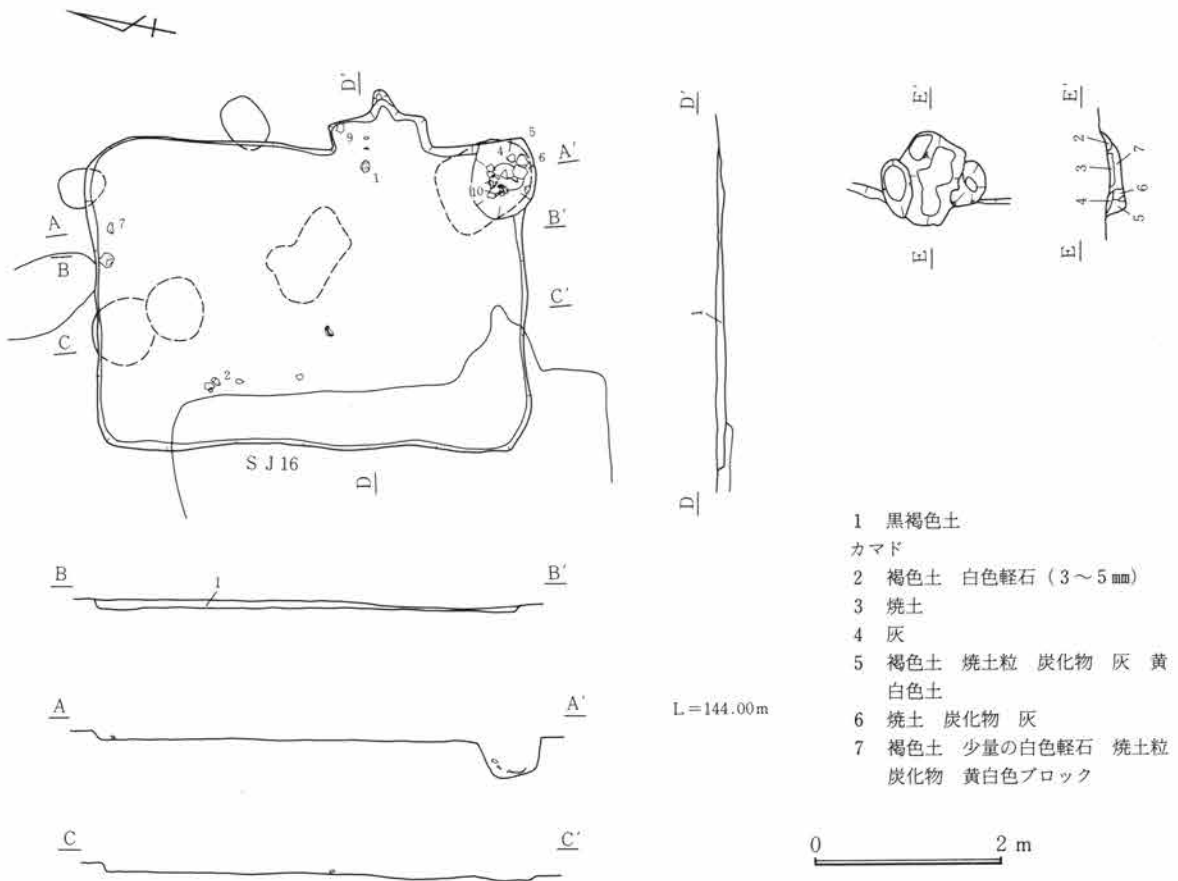
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上3cm	13.0・7.6・4.7 7/8 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	体部から口縁部にかけては極ゆるい丸みを持ち、口唇部で僅かに外反する。口縁部は横撫で。体部の上半は指撫で、下半は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 床直 覆土	13.0・6.8・3.8 5/6 細砂粒・雲母 褐色鉾物粒 普通 明赤褐色	口縁部は外反し、口唇部は直立する。体部は丸みを持ち開く。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削りが施されている。
3	須恵器 碗 貯蔵底部直上	—・6.4・— 1/3 細砂粒・雲母 酸化焰 にぶい黄橙色	ロクロ右回転。体部は直線的に開く。高台は断面四角形を呈し直立する。底部は回転糸切り。
4	須恵器 碗 貯蔵穴底部より2cm	13.6・6.5・5.7 完形 粗砂粒 還元焰軟質 浅黄色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。高台は丸みをもつ断面三角形を呈す。底部は回転糸切り。
5	須恵器 碗 床直	13.2・6.9・5.5 1/2 細砂粒・雲母 還元焰 灰黄色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけて僅かに外反し、高台は丸みをもつ断面三角形を呈す。底部は回転糸切り。
6	須恵器 碗 貯蔵穴底部より7cm	16.6・7.8・6.0 9/10 細砂粒・雲母 還元焰 灰オリーブ色	ロクロ右回転。口縁部は大きく外反し、体部は腰が張る。高台は断面四角形を呈し、底部は回転糸切り。
7	須恵器 碗 床直	—・5.4・— 1/3 細砂粒・雲母 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は丸みを持ち、高台は断面四角形を呈し直立する。底部は回転糸切り。
8	土師器 甕 覆土	—・6.6・— 小片 細砂粒・雲母 普通 明赤褐色	胴部は大きく開き、指頭痕がみられる。
9	土師器 甕 覆土 貯蔵穴底部より10cm	10.2・—・— 1/10 粗砂粒 普通 暗赤褐色	口縁部はやや外反し、胴部はゆるい丸みをもつ外面の口縁は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削りが施されている。

S J 17

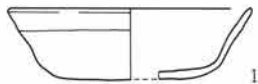
本住居跡は、97～99G-21～24グリッドに位置し、S J 16、S B 16・17と重複する。新旧関係は本遺構の方が重複するすべての遺構よりも新しい。平面形態は長方形を呈す。規模は東西3.10m、南北4.60m、面積14.77㎡を測り、主軸方向は、N-79°-Eを指す。

床面は、全体に平坦で良く整い、住居中央部は踏み固められて堅固である。住居西側のS J 16との重複部にのみ貼床を施す。壁は、残存壁高が5cmと浅いため、状況は不明である。壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、東南コーナーに位置し、形態は隅丸方形を呈す。規模は70×60cm、深度40cmを測り、南壁を10cm切り込んで造り出している。

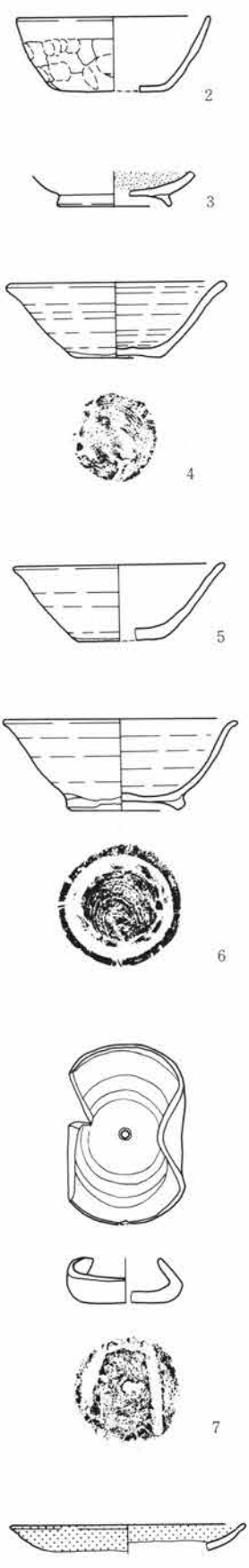
カマドは、東壁の南寄りに位置し、残存状態は悪い。規模は、燃烧部幅60cm、奥行き50cmで壁外に造り出し、煙道部は不明である。天井部は確認できないが、燃烧部の両側に補強材を埋めたと考えられるピットを確認した。掘り方は、深さ10cmに掘り窪めた後、黄褐色粘性土と褐色土の混土で埋め戻している。



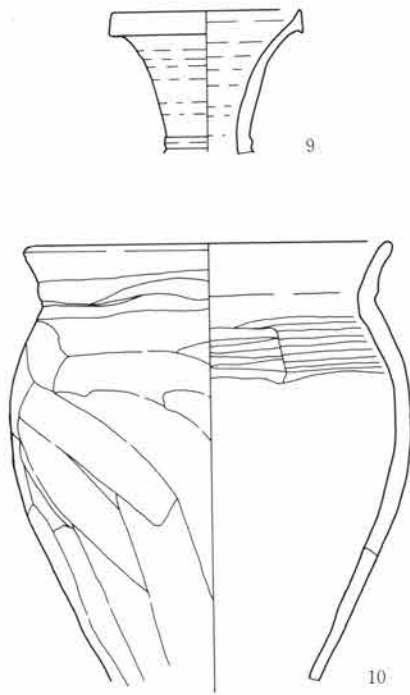
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上5cm	12.8・9.6・3.7 1/4 細砂粒、普通 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は指撫で。底部は不定方向へのヘラ削り



第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 床上1.5cm	11.2・6.4・4.3 2/5 粗砂粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち、やや開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は二段の横方向へのヘラ削りで部分的に指頭痕がみられる。底部は不定方向へのヘラ削り。
3	土師器 碗 覆土	—・6.6・— 1/4 細砂粒 硬質 内面黒色処理 淡黄色	体部は丸みをもち開く。高台は丸みをもった断面三角形で「ハ」の字状に開く。
4	須恵器 坏 貯蔵穴底部より5.5cm、12cm	12.2・5.2・4.4 完形 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
5	須恵器 坏 貯蔵穴底部より12.5cm	12.4・7.0・4.4 1/3 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。底部はヘラ撫でが施されている。
6	須恵器 碗 貯蔵穴底部より12cm	13.7・7.0・5.4 完形 粗砂粒・雲母 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。高台は断面四角形を呈し「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
7	須恵器 耳皿 床上1cm	10.6・2.6・2.6 7/8 粗砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。底部中央に穿孔がみられ、回転糸切り。
8	灰釉陶器 皿 覆土	13.7・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反。施釉方法不明。釉調は不透明な灰白色。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	須恵器 長頸壺 床上4.5cm	10.0・—・— 口縁部から頸部にかけて 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焙 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、口唇部は上下に引き出されている。頸部には半円状の凸線が貼付されている。
10	土師器 甕 貯蔵穴底部より14cm	19.0・—・— 3/4 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 赤褐色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部は上位で左方向へのヘラ削り。中～下位にかけては斜めと底部から頸部に向けてのヘラ削り。内面の頸部は刷毛目、胴部は横方向へのヘラ撫で。

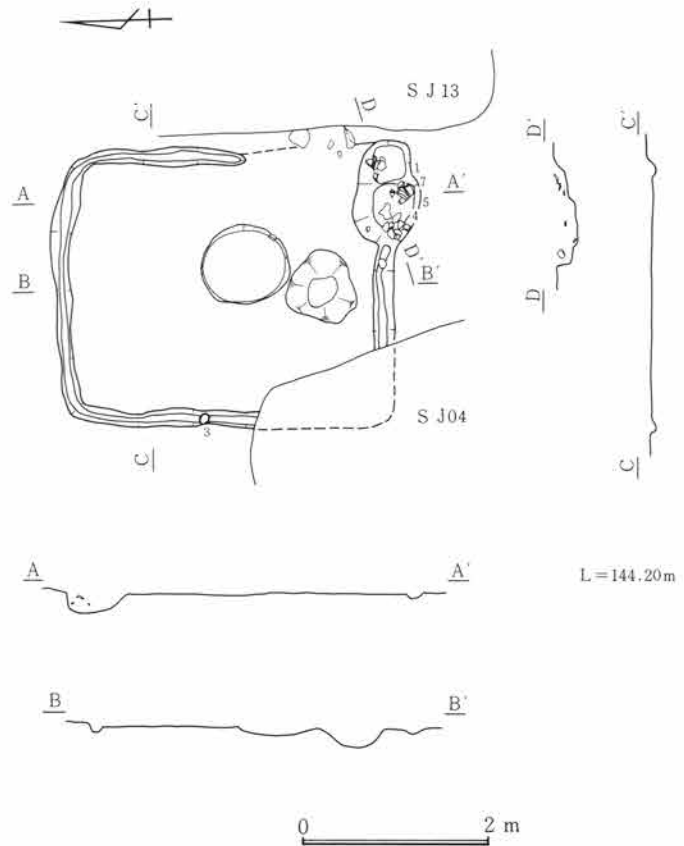
S J 18

45

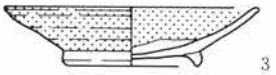
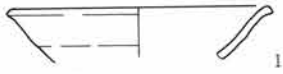
本住居跡は、105～108G-26～29グリッドに位置し、S J 04・13と重複する。南西コーナーをS J 04に、カマドをS J 13によって削除される。平面形態は長方形を呈す。規模は、東西2.90m、南北3.50m、面積は推定で10.56㎡を測る。主軸方向は、N-92°-Eを指す。

本遺構は、現地表面に近く、確認面では、床面、壁とも残存しておらず、平面形態は、壁溝によって確認した。壁溝は、カマド北側から南壁貯蔵穴まで、S J 04との重複部分を除いて、幅10～15cm、深度5cmで検出した。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに位置し、南側は壁を切り込んで造り出す。不整楕円形で径110×70cm、深度15cmを測る。

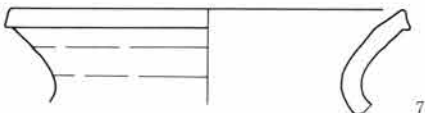
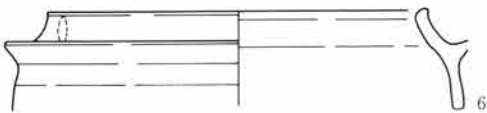
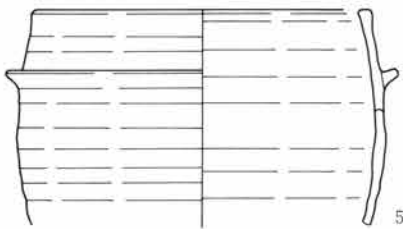
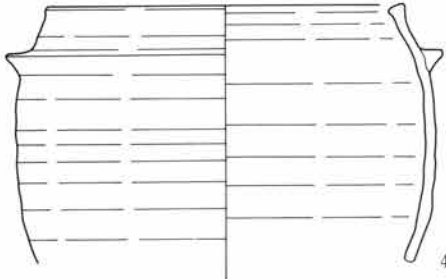
カマドは東壁の南側に位置し、大半をS J 13によって削除され、火床の掘り込みの中に僅かな焼土・灰を検出した程度で全体の構造は不明である。焚口部の両側には、凝灰岩を埋め込んで補強材としている。



第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 貯蔵穴底部より13.5cm	16.6・—・—、1/8 粗砂粒 酸化焰 橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもつ。
2	須恵器 碗 覆土	—・5.6—・— 1/8 細砂粒 酸化焰 黄灰色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈す。底部は回転糸切り。
3	灰釉陶器 皿 周溝内上	13.4・7.4・3.1 2/5 緻密（細砂粒・黒色鉱物粒を若干含む） 還元焰焼きしめ 浅黄色	ロクロ右回転。口唇部は外反し、高台は三日月型を呈す。底部は回転ヘラ撫で。施釉方法は漬け掛けによる。大原2号窯期。



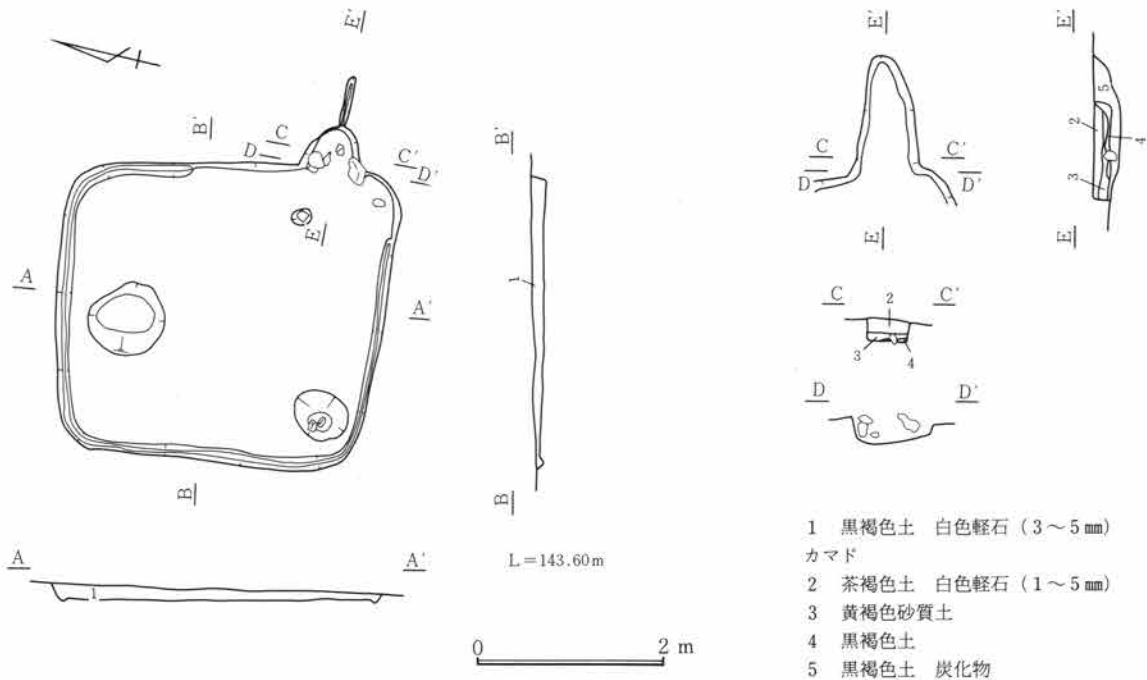
4	須恵器 羽釜 貯蔵穴底部より9.5cm	19.0・—・— 1/6 粗砂粒 酸化焰 淡黄色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で内傾し、内外に肥厚する。胴部は丸みをもち、鐔は断面三角形を呈す。
5	須恵器 羽釜 貯蔵穴底部より13.5cm	18.0・—・— 1/10 細砂粒・粗砂粒 酸化焰 にぶい黄橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部はやや内傾し、口唇端部は平坦で内外に肥厚する。胴部はゆるい丸みをもつ。鐔は丸みをもち、やや上方を向く。
6	須恵器 羽釜 床直	20.0・—・— 口縁部1/6 粗砂粒 酸化焰 赤褐色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内傾し、口唇端部は丸みをもち内傾し、外側にやや突出する。鐔は断面三角形でやや上方を向く。
7	須恵器 甕 貯蔵穴底部より10.5cm	20.8・—・— 口縁部1/6 粗砂粒 酸化焰 にぶい橙色	内面は剝離が激しい。口縁部は外反し、口唇端部は外傾し、下方へ引き出されている。

S J 19

本住居跡は、96～99G-10～12グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、不整隅丸長方形を呈す。規模は東西3.1m、南北3.5m、面積10.50m²を測り、主軸方向は、N-84°-Eを指す。

床面は、全体に平坦で良く整い、住居中央の一部を除いて軟らかい。壁は、僅かな勾配をもって立ち上がり、壁高は、7～16cmを測り、平均10cmである。壁溝は、東壁の北側から南壁の南東コーナー手前まで、幅10cm、深さ5cmで検出された。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、南西隅に位置し、円形で径50cm、深度80cmを測る。住居北側中央にピットを1基検出した。不整円形で径75×50cm、深度15cmを測る。

カマドは、東壁の南側に位置し、残存状態は良く、煙道部の天井部は遺存している。規模は、燃燒部幅50cm、奥行き40cmで壁外に造り出し、煙道部は、外側80cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。燃燒部内側及び火床は強く焼けている。焚口部の両側に石を据えて補強材としている。



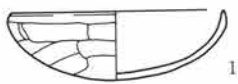
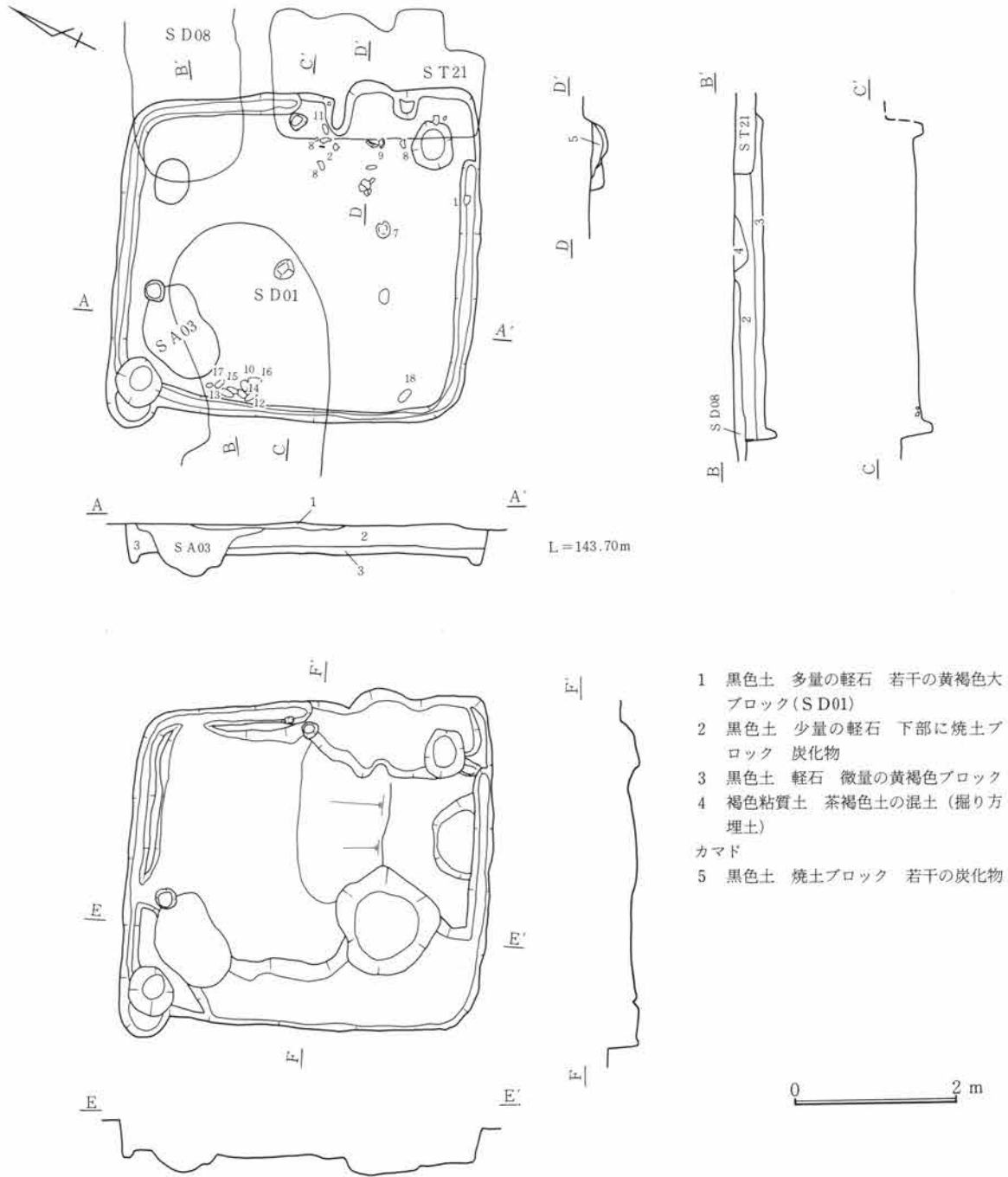
S J 20

本住居跡は、101～104G-10～13グリッドに位置し、S T 21、S A 03、S D 01・08と重複し、本遺構はこれらすべての遺構よりも古い。平面形態は隅丸長方形を呈す。規模は、東西3.9m、南北4.4m、面積17.27m²を測り、主軸方向は、N-70°-Eを指す。

床面は、全体に平坦で良く整い、カマド西側は踏み固められて堅固である。壁は、直線的でほぼ垂直に近く立ち上がり、壁高は25～38cmを測り、平均32cmである。壁溝は、東壁の中央から南壁の南東コーナー手前まで幅15～20cm、深度10～15cmで検出した。貯蔵穴は南東隅に位置し、隅丸方形で50×40cm、深さ25cmを測る。

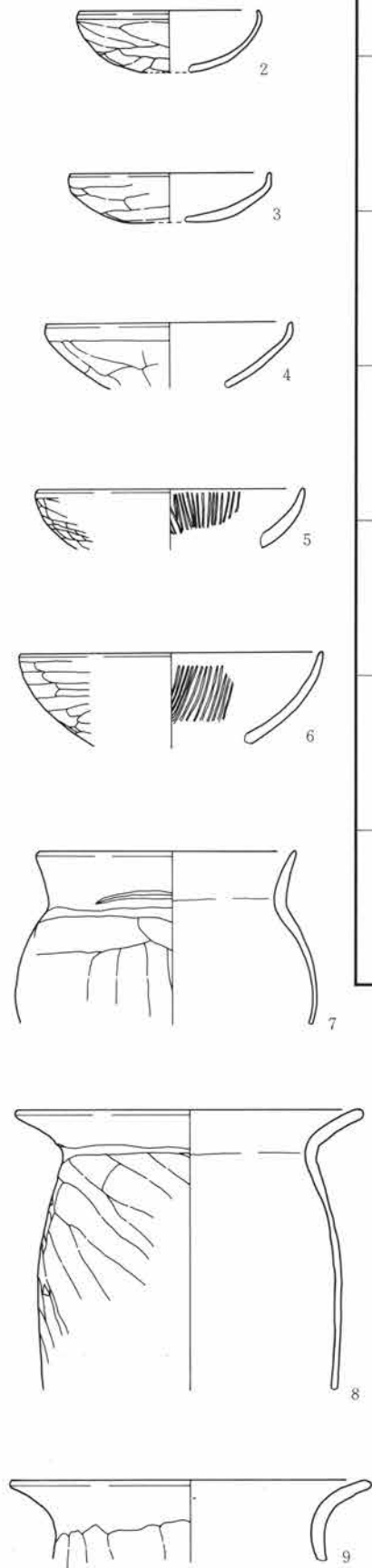
カマドは東壁の南寄りに位置し、S T 21に上部を削られ残存状態は悪い。規模は、燃燒部幅60cm、奥行き50cmで約半分を壁外に造り出す。煙道部は確認できない。黄褐色粘土で構築した袖部を検出したが、全体に焼土は少なく、強く焼けた面もない。

掘方は、床面より5~15cmほど掘り込まれ、西壁際はさらに10~17cm低い。住居南西隅に径100cm、深度30cmの円形ピットを検出した。

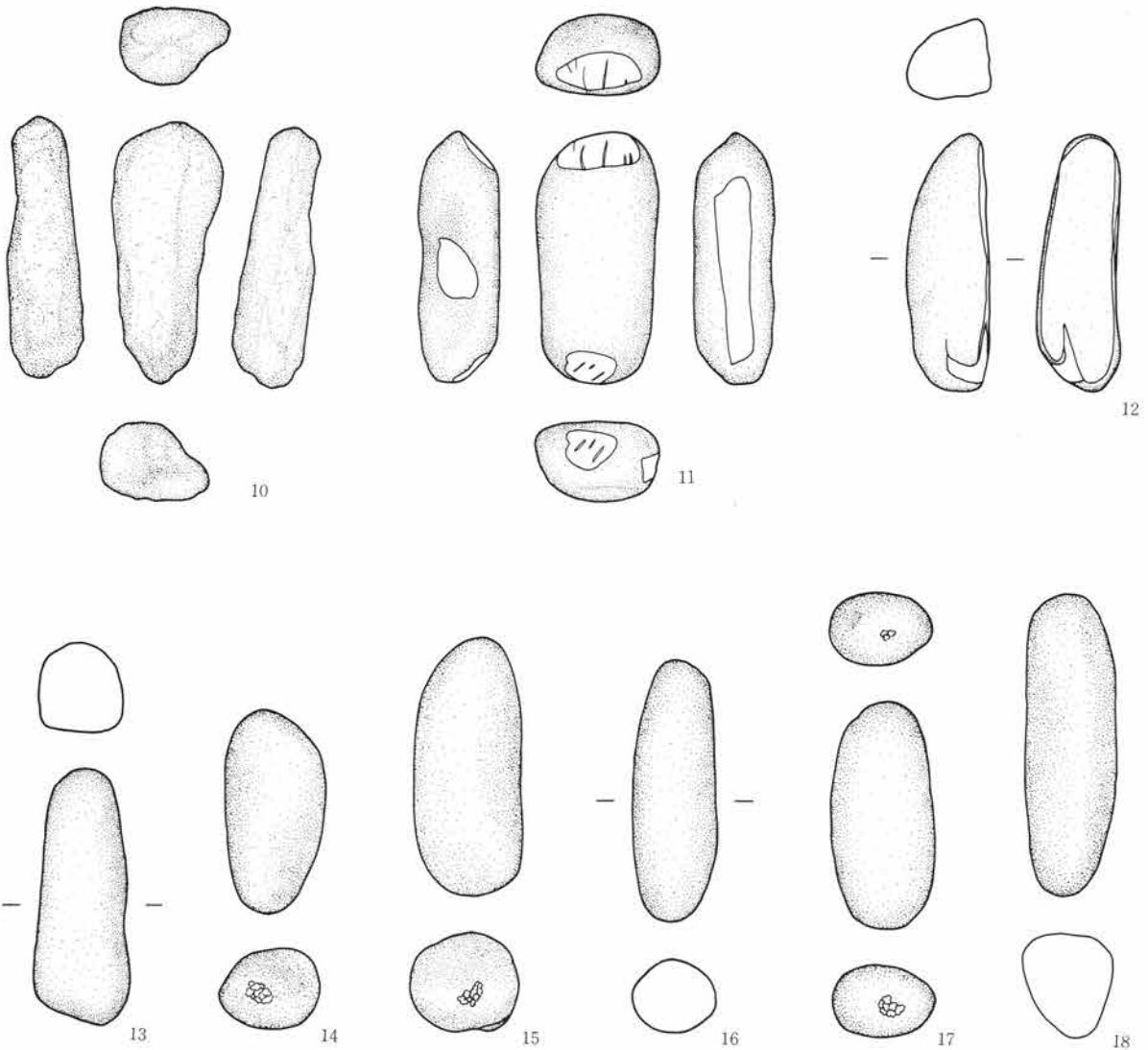


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直 覆土	11.6・8.0・3.6 3/4 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内湾し、体部から底部にかけては丸みをもつ。口唇部は横撫で、口縁部から体部にかけては左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削りが施されている。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 床上4 cm	10.6・8.6・3.6 1/3 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は内湾し、体部から底部にかけては丸みをもつ。口唇部は横撫で、口縁部から体部にかけては左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削りが施されている。
3	土師器 坏 覆土	12.0・5.2・2.9 1/5 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 明赤褐色	口縁部は直立し、体部は大きく開く。底部は小径で平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削りが施されている。
4	土師器 坏 覆土	14.4・—・— 1/6 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は直立し、体部は大きく開く。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
5	土師器 坏 覆土	15.6・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部から体部にかけて丸みをもつ。外面の口唇部は横撫で、口唇部以下は丁寧なヘラ削り。内面の底部は放射状暗文が施されている。
6	土師器 坏 覆土	17.6・—・— 小片 細砂粒・褐色鉾物粒 やや軟質 橙色	口縁部から体部にかけては丸みをもち、外面の口唇部は横撫で、口縁部から体部にかけては丁寧なヘラ削り。内面の体部は斜状暗文が施されている。
7	土師器 甕 床直	14.6・—・— 1/4 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	口縁部は直線的で開き、胴部は丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は一段の左方向へのヘラ削りとその下は底部に向けてのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
8	土師器 甕 床直	20.2・—・— 1/5 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は大きく外反し、胴部はあまりふくらまない。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けて斜めのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
9	土師器 甕 床上4 cm、8 cm	20.6・—・— 口縁部2/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は大きく外反し、胴部はあまりふくらまず、7と同様の器形。口縁部は横撫で、胴部は縦方向のヘラ削りが施されている。



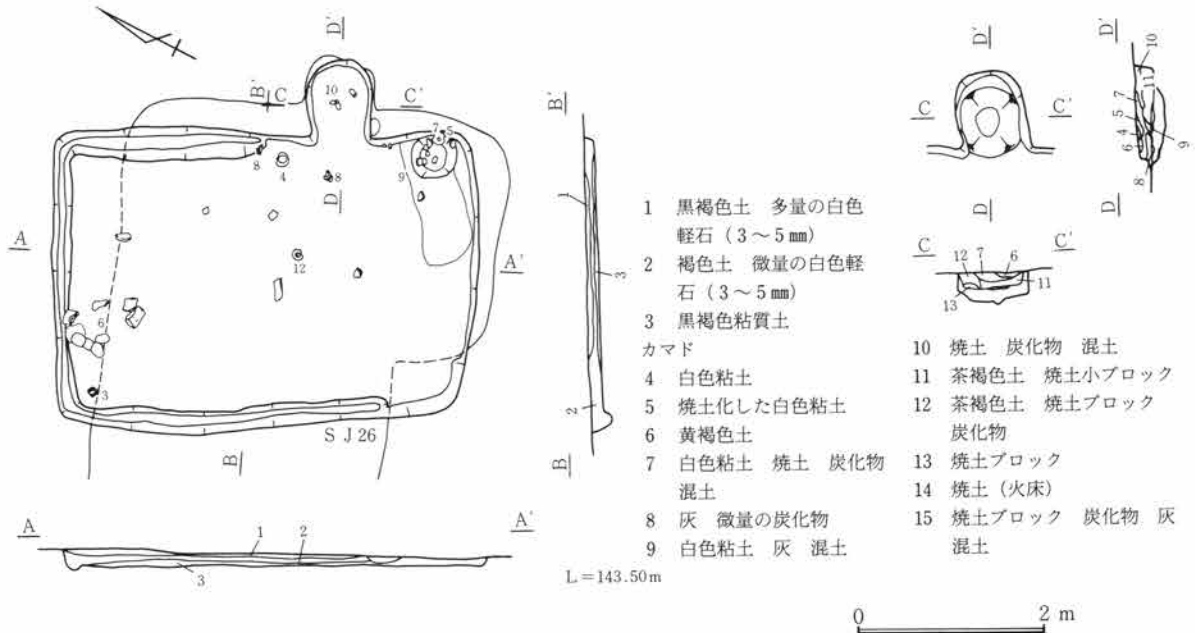
No	種類・器形	出土位置	計測値	石材	特徴
10	石製品・菰編石	床直	14.2・6.6・4.0cm・450g	砂岩	全体的に剥離がみられる。
11	石製品・菰編石	床直	13.8・6.8・4.4cm・715g	変質安山岩	両端と両側面に擦痕がみられる。
12	石製品・菰編石	床直	14.0・4.3・4.3cm・448g	石英閃緑岩	敲打痕・擦痕はみられない。
13	石製品・菰編石	床直	14.1・5.4・4.5cm・560g	溶結凝灰岩（奥日光）	両端に敲打痕がみられる。
14	石製品・菰編石	床直	11.1・5.5・4.3cm・404g	輝石安山岩（粗粒）	端部に敲打痕がみられる。
15	石製品・菰編石	床直	14.2・6.0・5.6cm・748g	ひん岩	端部に敲打痕がみられる。
16	石製品・菰編石	床直	14.5・4.8・3.8cm・425g	輝石安山岩（粗粒）	敲打痕・擦痕はみられない。
17	石製品・菰編石	床直	12.6・5.6・4.0cm・432g	輝石安山岩（粗粒）	両打痕がみられる。
18	石製品・菰編石	床直	16.5・6.1・4.9cm・805g	ひん岩	敲打痕・擦痕はみられない。

S J 21

本住居跡は、101～104G-08～10グリッドに位置し、S J 26と重複する。新旧関係は本遺構の方が新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は東西3.1m、南北4.5m、面積13.59㎡を測り、主軸方向は、N-36°-Eを指す。

床面は、全体に平坦で良く整い、カマドの周辺部を中心とする住居東側部分は踏み固められて堅固である。貼床は施されていない。壁は、僅かな勾配をもって立ち上がり、壁高は、11～16cmを測り、平均13cmである。壁溝は、カマド北側から西壁の南西コーナー手前まで、幅10cm、深度5cmで検出された。柱穴はない。貯蔵穴は、南東隅に位置し、円径で直径50cm、深度30cmを測る。

カマドは、東壁の南側に位置し、規模は、燃烧部幅60cm、奥行き70cmで壁外に造り出し、煙道部は確認できない。白色粘土で構築した痕跡はあるが、残存状態が悪く袖部、天井部ともに確認できない。覆土中に焼土は多く、崩れ落ちた天井部の粘土及び火床は強く焼け、焚口部床面に多量の炭化物を検出した。焚口部の右側に凝灰岩の切石を据えて補強材としている。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.0・7.0・一、小片 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は外反し、体部は大きく開く。口縁部は横撫で 体部は指撫で、底部はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	11.8・9.0・一、1/8 細砂粒・雲母 普通 明褐色	口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
3	須恵器 坏 床上4cm 覆土	13.2・6.9・3.2、2/3 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち大きく開く。底部は 回転糸切り。



4



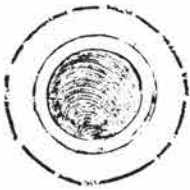
5



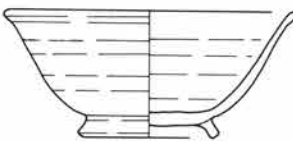
6



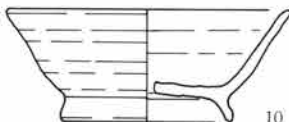
7



8

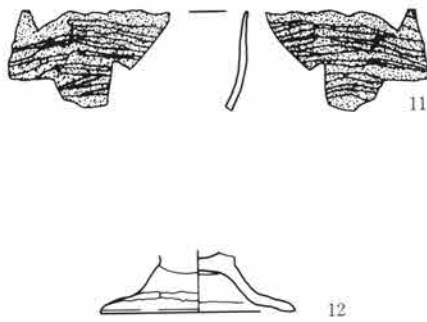


9



10

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 坏 床上7cm	12.6・6.3・3.9 完形 細砂粒 還元焰 灰オリーブ色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開く。底部は回転糸切り。体部の一部に不定方向のヘラ撫でがみられる。
5	須恵器 蓋 貯蔵穴底部より23cm	17.0・鈕3.4・4.2 2/3 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈す。天井部はゆるい丸みをもち、口唇部は折り曲げて直立する。天井部の3分の1程度までは回転ヘラ削り。
6	須恵器 蓋 床上11cm	18.6・—・— 1/6 細砂粒 還元焰 灰オリーブ色	ロクロ回転方向不明。天井部は過半まで回転ヘラ削り。口唇部は短かく折り曲げられ直立する。
7	須恵器 蓋 貯蔵穴底部より8cm、11.5cm	16.0・—・— 2/5 細砂粒 亜角礫 灰白色	ロクロ回転方向不明。鈕は欠損。天井部は直線的で口唇部は折り曲げ。天井部の3分の1程度までは回転ヘラ削り。
8	須恵器 碗 床上5cm、6cm	16.0・9.6・7.5 1/3 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的であまり開かない。高台は断面三角形で直立する。底部は回転糸切り。
9	須恵器 碗 貯蔵穴底部より7cm、8cm	15.2・6.7・6.7 1/2 粗砂粒 (外面)燻焼成 (内面)酸化焰 (外)赤黒色 (内)赤褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はやや腰が張り、高台は断面四角形で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
10	須恵器 碗 床直	14.0・8.7・5.9 1/6 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は僅かに外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。高台は細身で、弱い「ハ」の字状を呈す。底部は回転糸切りで周辺部は撫で。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
11	須恵器 碗 覆土	—・—・—、小片 緻密・細砂粒 還元焰、内外面黒色処理 黒色	口縁部は外反する。内外とも口 唇部下までへら磨きが施されて いる。
12	土師器 台付甕 床上3cm	—・4.0・—、脚部のみ 細砂粒 普通 明赤褐色	脚部は下半から大きく開き、横 撫で。

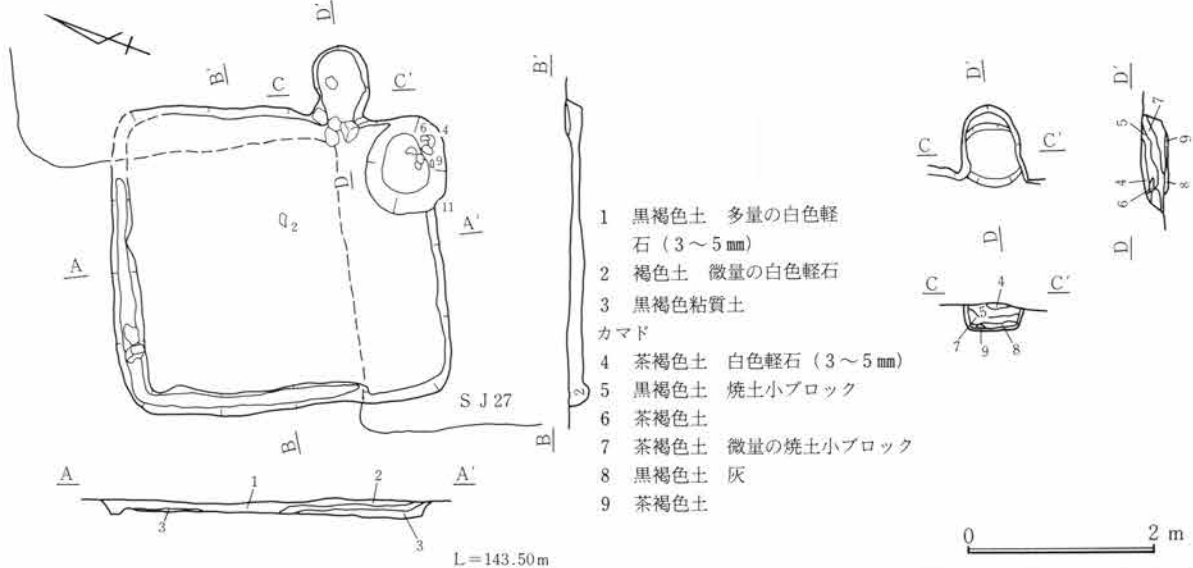
S J 22

50

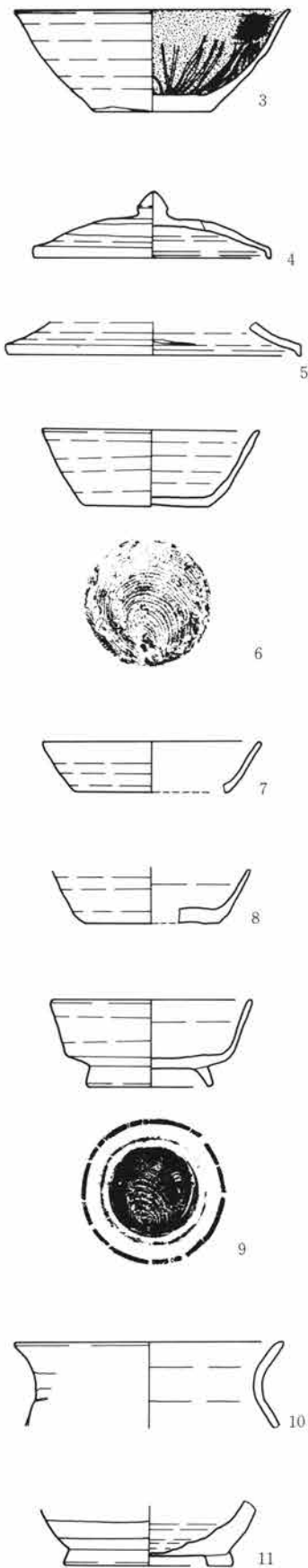
本住居跡は、100~102G-06~08グリッドに位置し、S J 27と重複する。新旧関係は本遺構の方が新しい。平面形態は長方形を呈す。規模は東西3.2m、南北3.5m、面積10.83m²を測り、主軸方向は、N-68°-Eを指す。

床面は、平坦で良く整い、カマド西側部分は踏み固められて堅固である。壁は、ほぼ垂直に立ち上り、壁高は、8~16cmを測り、平均13cmである。壁溝は、北壁の東側から西壁の両側まで幅20cm、深度5~10cmで検出した。貯蔵穴は、南東コーナーに位置し、楕円形で100×86cm、深度30cmを測る。

カマドは、東壁の南に位置し、残存状態は悪い。規模は燃焼部幅50cm、奥行き60cmで壁外に造り出し、煙道部は確認できない。全体に焼土は少なく、強く焼けた面はない。焚口部の両側に凝灰岩の切石を据えている。焚口部床面に同質の石を検出したが、両袖部の間に架構されていたものと考えられる。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	11.0・8.0・3.2、1/10 細砂粒・雲母 普通、明褐色	体部から口縁部にかけては直線的にやや開く。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はへら削り。
2	土師器 坏 床上3.5cm	18.0・15.6・2.3、1/8 細砂粒、普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、底部はへら削り。



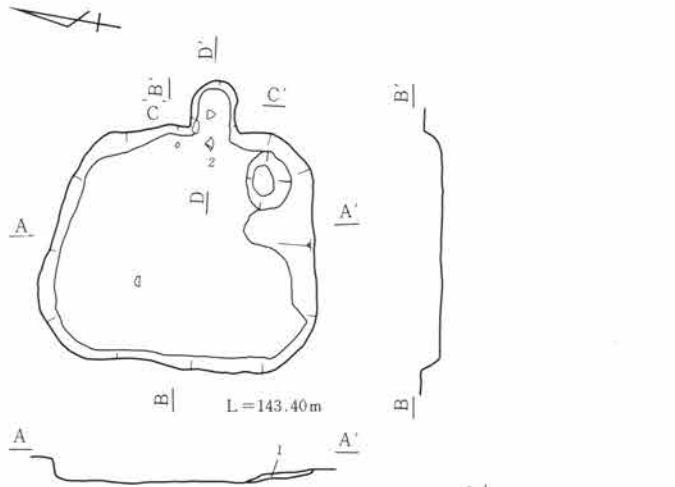
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 坏 カマド 覆土	16.2・7.0・6.0 1/4 粗砂粒・褐色鉾物粒 酸化焙 内面黒色処理 橙色・黒色	ロクロ回転方向不明。口縁部はやや外反し、体部はゆるい丸みをもつ。底部は回転糸切り。内面は口縁部で横方向のヘラ磨き、体部は雑な縦方向のヘラ磨きが施されている。
4	須恵器 蓋 貯蔵穴底部	14.0・鈕1.8・3.9 3/5 黒色鉾物粒 還元焙 灰白色	ロクロ右回転。鈕は宝珠形を呈し、天井部はゆるい丸みをもち、口唇部は折り曲げて直立する。天井部の3分の2程度までは回転ヘラ削りが施されている。
5	須恵器 蓋 カマド 覆土	17.8・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焙 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、口唇部は折り曲げて直立する。
6	須恵器 坏 貯蔵穴底部より6cm 覆土	13.0・7.5・4.5 9/10 細砂粒・粗砂粒 還元焙 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。
7	須恵器 坏 カマド	—・—・— 小片 細砂粒 還元焙 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は極ゆるい丸みをもつがほぼ直線的であり開かない。
8	須恵器 坏 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焙軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。底部は回転糸切り。
9	須恵器 高台付坏 貯蔵穴底部	11.8・9.5・5.1 9/10 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焙 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。高台は高足で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り後、ヘラ撫でを施している。
10	土師器 甕 カマド	15.8・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は「コ」の字状口縁が崩れたものであり、横撫で、胴部は横方向へのヘラ削りが施されている。
11	須恵器 長頸壺 貯蔵穴底部より3cm	—・9.6・— 1/8 細砂粒 還元焙 にぶい赤褐色	長頸壺底部。ロクロ右回転。高台は断面四角形で接地面は広い。胴下位は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後ヘラ撫で。

S J 23

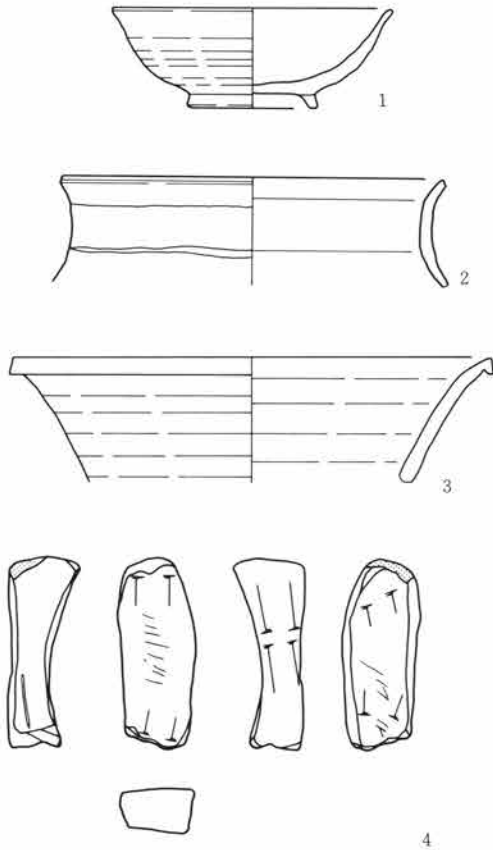
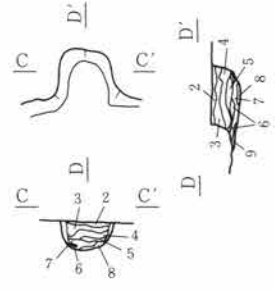
本住居跡は、97～99G-05～07グリッドに位置し、単独に占地する。平面形態は不整隅丸長方形を呈す。規模は、東西2.5m、南北2.8m、面積6.58m²を測り、主軸方向は、N-83°-Eを測る。

床面は、ほぼ平坦で整い、カマド西側及び住居中央部は、踏み固められて堅固である。貼床はない。壁は勾配をもって立ち上り、壁高は16～22cmを測り、平均18cmである。壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、円形で径60×50cm、深度10cmを測る。

カマドは、東壁中央から僅か南寄りに位置する。規模は、燃烧部幅40cm、奥行き40cmで壁外に造り出し煙道部は確認できない。焚口部の左側に凝灰岩を埋め込んでいる。



- 1 砂質黄褐色土 黄褐色軽石 (1～5mm)
- カマド
- 2 黄褐色土 黄褐色軽石 (2～3mm)
- 3 茶褐色土 黄褐色軽石 (2～3mm)
- 4 黒褐色粘質土 少量の黄褐色軽石 (2～3mm)
- 5 焼土と砂質黄褐色土の混土層
- 6 黒褐色土 炭化物
- 7 茶褐色土 極少量の黄褐色軽石 (2～3mm)
- 8 炭化物と茶褐色土の混土層
- 9 炭化物層



0 2 m

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 床直	11.6・6.7・5.3 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。高台は断面四角形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。
2	土師器 甕 床上2cm、2.5cm カマド内	20.2・—・— 口縁部の1/3 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は「コ」の字状の崩れたものであり、横撫で、胴はヘラ削り。
3	須恵器 甕 床直	25.4・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部は下方に引き出され、口縁部帯をつくる。内面には自然釉の付着がみられる。
No	種類	観察表掲載頁	
4	石製品 砥石	832	

本住居跡は、95～97G-03～06グリッドに位置し、S B 04と重複するが、新旧関係はS B 04の住穴と本遺構の重複がないため確認できない。北壁と南壁の一部は現代の耕作により削除されている。平面形態は不整形長方形を呈す。規模は東西2.5m、南北3.5m、面積8.96m²を測り、主軸方向は、N-84°-Eを指す。

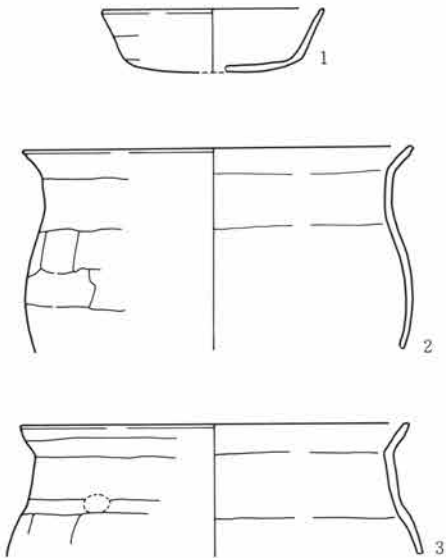
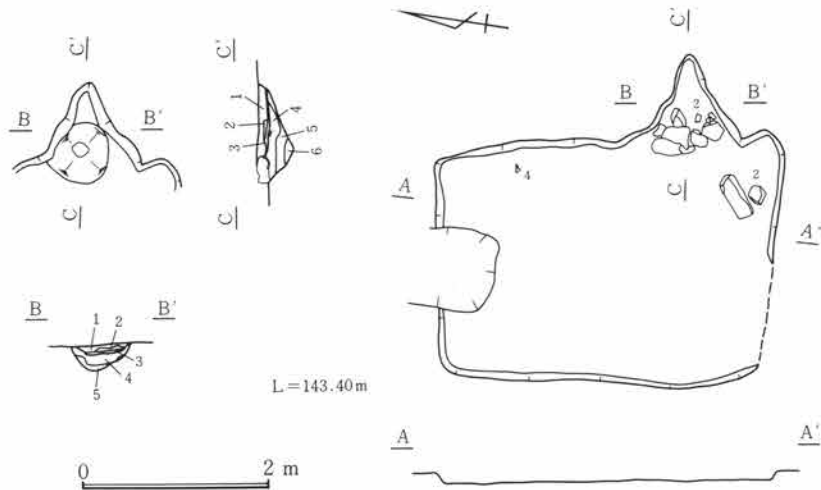
床面は、ほぼ平坦で住居中央の一部を除いて踏み固められた跡はなく、全体に軟らかい。貼床はない。壁は、残存壁高5cmと浅いため状況は不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは、東壁の南側に位置し、残存状態は悪い。規模は、燃烧部幅70cm、奥行き50cmで屋外に造り出し、煙道部はその外側40cmまで緩やかな勾配で伸びる。火床には強く焼けた痕跡を残すが、全体に焼土は少ない。焚口部の両側に凝灰岩の切石を据えている。この間の床面に密着して同質の石を検出したが、これは焚口部の上に架構されていたと考えられる。住居南東隅の床面に密着して焼けた凝灰岩の切石が出土している。

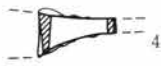
カマド掘方は、深さ30cmに掘り窪めた後、砂質黄褐色土と褐色土で埋め戻している。

カマド

- 1 黒褐色土 焼土小ブロック
- 2 炭化物と灰の混土
- 3 焼土
- 4 黒色土 焼土小ブロック炭化物
- 5 砂質黄褐色土（第10層）と茶褐色土の混土（火床の埋め土）
- 6 砂質黄褐色土と黒色土の混土（火床の埋め土）



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.6・9.4・3.3 1/10 細砂粒 普通 橙色	口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 甕 覆土 床上2cm	20.5・—・— 細砂粒・雲母・褐色鉍 物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、横撫で、胴の上位の左方向のヘラ削り。中位は縦方向のヘラ削り。
3	土師器 甕 覆土 床上4.5cm	20.6・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。



No	種類	観察表掲載頁
4	鉄製品 刀子	891

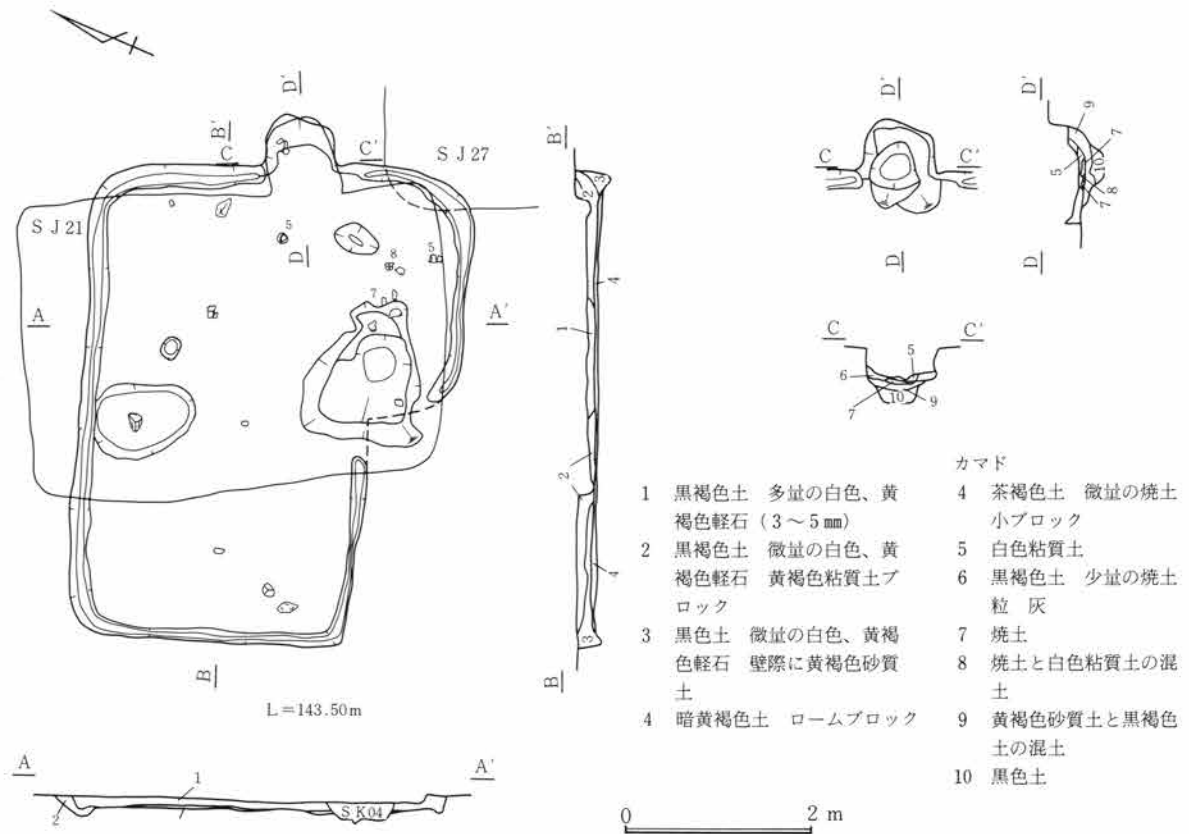
S J 26

53

本住居跡は、101～104G-08～10グリッドに位置し、S J 21・27と重複する。新旧関係は、本遺構の方がS J 21より古く、S J 27よりも新しい。また、南側の張り出し部へ続くコーナーの部分は、ピットによって壊されている。平面形態は隅丸長方形を呈するが、西壁の北側寄りに張り出しをもつ。規模は、東西2.6m、南北4.0m、張り出し部は、東西2.5m、南北3.1m、総面積は17.74㎡を測り、主軸方向は、N-70°-Eを指す。

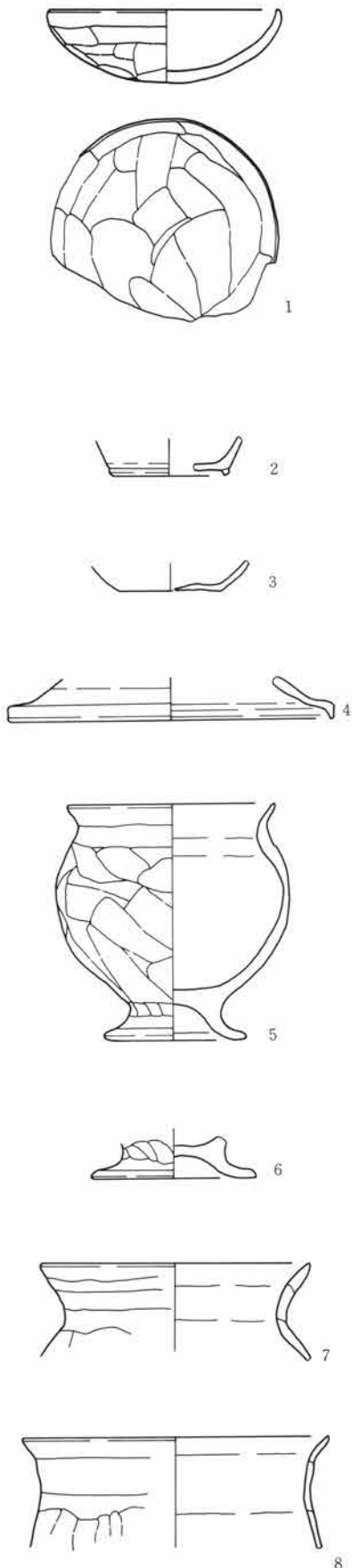
床面は、平坦で良く整い、全体に踏み固められて堅固である。貼床はない。壁は、直線的でほぼ垂直に立ち上り、壁高は13～31cmを測り、平均25cmである。壁溝は、カマド部と南西部のピットとの重複部を除いて全周する。柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りに位置する。本跡のカマドは、上面のS J 21と同一箇所に存在するが、本跡のレベルが10cm低いので僅かに残存している。規模は燃烧部幅60cm、奥行き70cmでその約半分を壁外に造り出す。煙道部は確認できない。袖部・天井部共に確認できないが、白色粘土で構築した痕跡がある。全体に焼土は多く、火床及び燃烧部の内側は強く焼けている。カマド掘方は、深さ15cmで方形に掘り窪めた後、黒褐色粘質土と褐色土の混土で埋め戻している。



- カマド
- 1 黒褐色土 多量の白色、黄褐色軽石（3～5mm）
 - 2 黒褐色土 微量の白色、黄褐色軽石 黄褐色粘質土ブロック
 - 3 黒色土 微量の白色、黄褐色軽石 壁際に黄褐色砂質土
 - 4 暗黄褐色土 ロームブロック
 - 5 白色粘質土
 - 6 黒褐色土 少量の焼土粒 灰
 - 7 焼土
 - 8 焼土と白色粘質土の混土
 - 9 黄褐色砂質土と黒褐色土の混土
 - 10 黒色土

第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	13.0・11.8・4.4 3/4 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 普通 橙色	口縁部は内湾きみで、底部は丸底を呈す。 口唇部は横撫で、口唇部下から底部にか けてはヘラ削りが施されている。
2	須恵器 碗 覆土	—・7.3・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形 を呈しやや開く。
3	須恵器 坏 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。底部の回転糸切り。
4	須恵器 蓋 覆土	19.4・—・— 粗砂粒 酸化焰 浅黄色	ロクロ回転方向不明。口縁部は直立する。
5	土師器 台付甕 床直 床上1.5cm	12.4・5.5・14.0 7/8 粗砂粒・褐色鉍物粒 角礫 普通 にぶい赤褐色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部 は大きな丸みをもつ。脚部は大きく開く 口縁部・脚部はヘラ撫で、胴部はヘラ削 りが施されている。
6	土師器 台付甕 覆土	—・6.2・— 小片 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	脚部は大きく開き横撫で、底部との接合 部分はヘラ削り。
7	土師器 甕 床上1.5cm	16.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し横撫で。 胴部はヘラ削り。
8	土師器 甕 床上6cm	16.2・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 黄灰色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、横撫 で。胴部はヘラ削り。

S J 27

本住居跡は、2軒の住居跡が溝状の廊下によって連結されている遺構である。東西に連なり、全長24mを測る。以下、西側の住居跡A、東側の住居跡をBとして記述する。

住居跡A

本遺構は、98～102G-05～09グリッドに位置し、S J 22・26・28・30と重複する。新旧関係は、本遺構が重複する全ての遺構よりも古い。平面形態は、南壁の一部が50cm程の張りみをもつ不整長方形を呈し、西壁の南側 $\frac{1}{2}$ に張り出し部をもつ。規模は、東西3.1m、南北6.5m、張り出し部は東西3.2m、南北3.0m、面積21.69m²を測る。主軸方向は、N-67°-Eを指す。

床面は、平坦で良く整い、全体に踏み固められて堅固である。壁は、直線的でほぼ垂直に立ち上り、壁高は重複部を除いて、11～20cmを測り、平均18cmである。壁溝は、カマド部を除いて全周し、東壁中央の廊下部への入口では、廊下部の方へ巡る。この入口部分には、凝灰岩の礫が床面から0～10cmのレベルで散在していた。壁溝の規模は、幅14～24cm、深度6～11cmを測る。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は悪い。規模は燃焼部幅70cm、奥行き60cmで、大半を壁外に造り出し、煙道部は確認できない。天井部は確認できないが、黄色粘質土で構築された痕跡がある。全体に焼土は少ないが、火床及び、燃焼部内側は強く焼け、固く締っている。火床面上に崩れた凝灰岩が多量に検出されたが、カマドの構築材と考えられる。カマド掘り方は、円形で深さ30cmに掘り窪め、黒色土で埋め戻している。

廊下

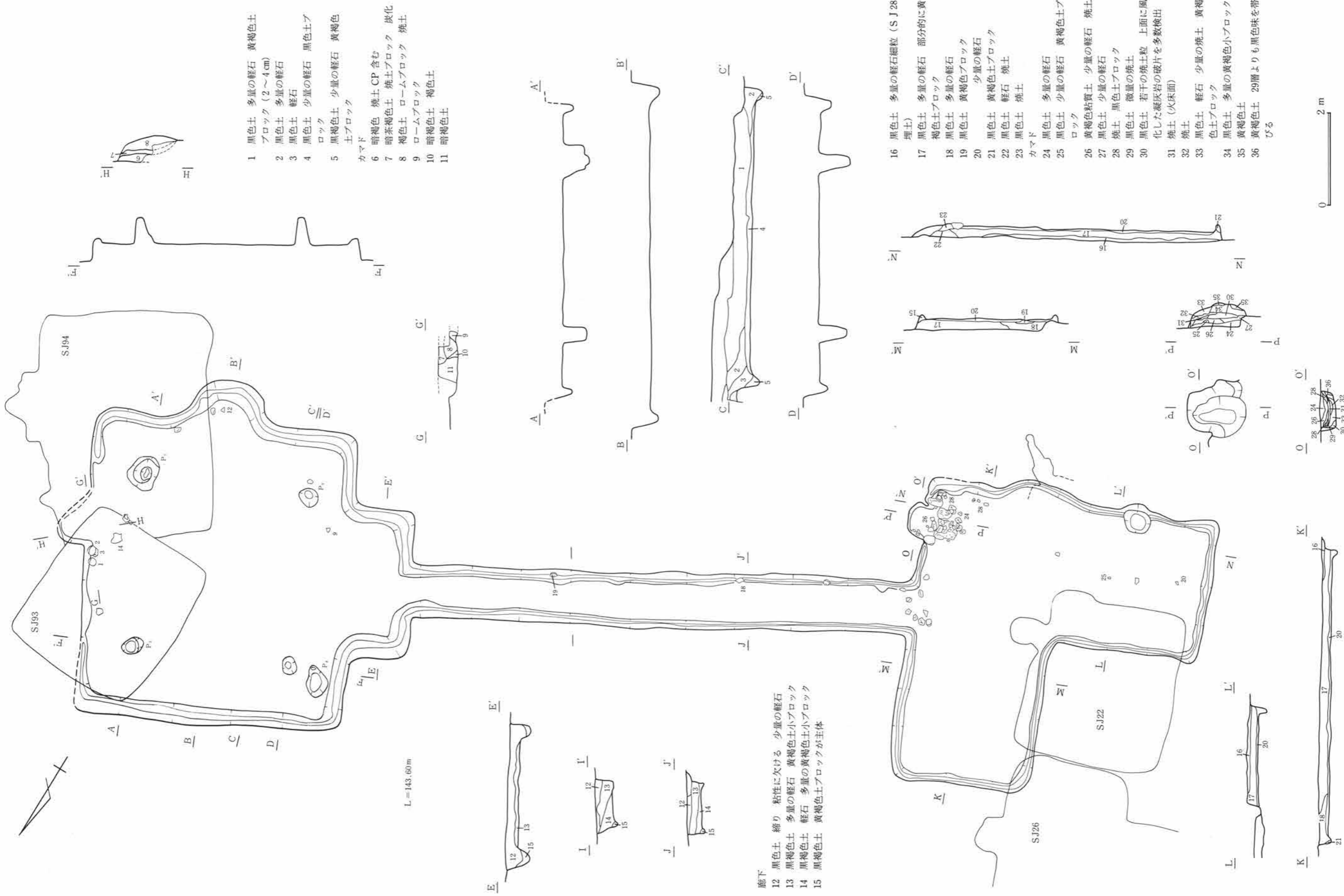
廊下部は、94～99G-07～10グリッドに亘り、重複する遺構はない。規模は、幅1.1m、長さ11mを測り、主軸方向は、N-67°-Eを指す。床面は、平坦で良く整い、踏み固められて堅固である。壁は、直線的でほぼ垂直に立ち上り、壁高は、28～41cmを測り、平均35cmである。壁溝は、住居跡Aから続いて両側に掘られ住居跡Bまで巡る。規模は、幅14～26cm、深度4～10cmを測る。柱穴は、床面、壁外からも検出されなかった。

住居跡B

本住居跡は、91～95G-09～13グリッドに位置し、S J 93・94と重複する。新旧関係は、本遺構の方が双方よりも古い。平面形態は、長方形を呈し、南壁中央と西壁中央に張り出し部をもつ。規模は、東西6.0m、南北6.5m、南側の張り出し部は東西1.7m、南北1.2m、西側の張り出し部は東西1.6m、南北3.6m、総面積21.69m²を測る。主軸方向は、N-67°-Eを指し、Aと同一方向である。

床面は、平坦で良く整い、踏み固められて堅固である。茶褐色土を使用して貼床が施されている。壁はほぼ垂直に立ち上り、壁高は、23～33cmを測り、平均27cmである。壁溝は、東壁のカマドの両側を除いて周り、廊下の壁溝と結ばれている。幅は20～37cm、深度12～25cmを測る。柱穴は、4本検出され、各々の形態・規模は、P₁が楕円形で径48×35cm、深度54cm。P₂は楕円形で径74×63cm、深度58cm。P₃は楕円形で径36×30cm、深度60cm、P₄はほぼ円形で径40cm、深度58cmである。貯蔵穴は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央よりやや南に位置し、残存状態は、東半分をS J 94に壊され、左袖部と焚口部・燃焼部の一部が残っている程度である。規模は、全長100cm、幅は残存部分で72cmを測る。天井部の痕跡は、認められなかった。また、焚口部・燃焼部でも焼土・灰層はみられず、僅かに焼土粒が認められるだけであった。掘り方は、床面より8～18cmほど掘り込まれ、周辺部にかけては緩やかな傾斜がみられる。埋土は、暗褐色砂を含む暗褐色土である。床下の施設等は、検出されなかった。



- 1 黒色土 多量の軽石 黄褐色土ブロック (2~4cm)
- 2 黒色土 多量の軽石
- 3 黒色土 軽石
- 4 黒色土 少量の軽石 黒色土ブロック
- 5 黒褐色土 少量の軽石 黄褐色土ブロック
- カマド
- 6 暗褐色 焼土 CP 含む
- 7 暗茶褐色土 焼土ブロック 炭化
- 8 褐色土 ロームブロック 焼土
- 9 ロームブロック
- 10 暗褐色土 褐色土
- 11 暗褐色土

- 廊下
- 12 黒色土 粘性に欠ける 少量の軽石
 - 13 黒褐色土 多量の軽石 黄褐色土小ブロック
 - 14 黒褐色土 軽石 多量の黄褐色土小ブロック
 - 15 黒褐色土 黄褐色土ブロックが主体

- 16 黒色土 多量の軽石細粒 (SJ28埋土)
- 17 黒色土 多量の軽石 部分的に黄褐色土ブロック
- 18 黒色土 多量の軽石
- 19 黒色土 黄褐色ブロック
- 20 黒色土 少量の軽石
- 21 黒褐色土 黄褐色土ブロック
- 22 黒色土 軽石 焼土
- 23 黒色土 焼土
- カマド
- 24 黒色土 多量の軽石
- 25 黒色土 少量の軽石 黄褐色土ブロック
- 26 黄褐色粘質土 少量の軽石 焼土
- 27 黒色土 少量の軽石
- 28 焼土 黒色土ブロック
- 29 黒色土 微量の焼土
- 30 黒色土 若干の焼土粒 上面に風化した凝灰岩の破片を多数検出
- 31 焼土 (火床面)
- 32 焼土
- 33 黒色土 軽石 少量の焼土 黄褐色土ブロック
- 34 黒色土 多量の黄褐色土小ブロック
- 35 黄褐色土
- 36 黄褐色土 29層よりも黒色味を帯びる

0 2 m

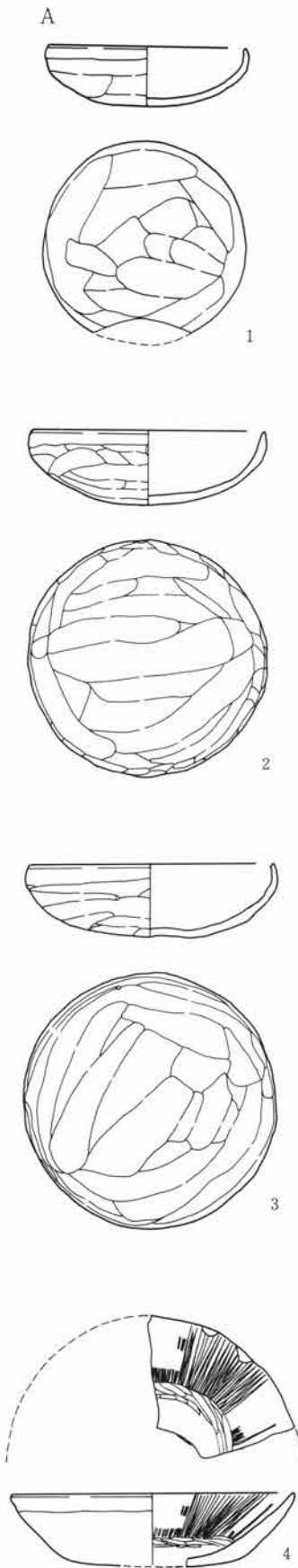
0 28 26 24 28 36 29 31 32

0 16 20

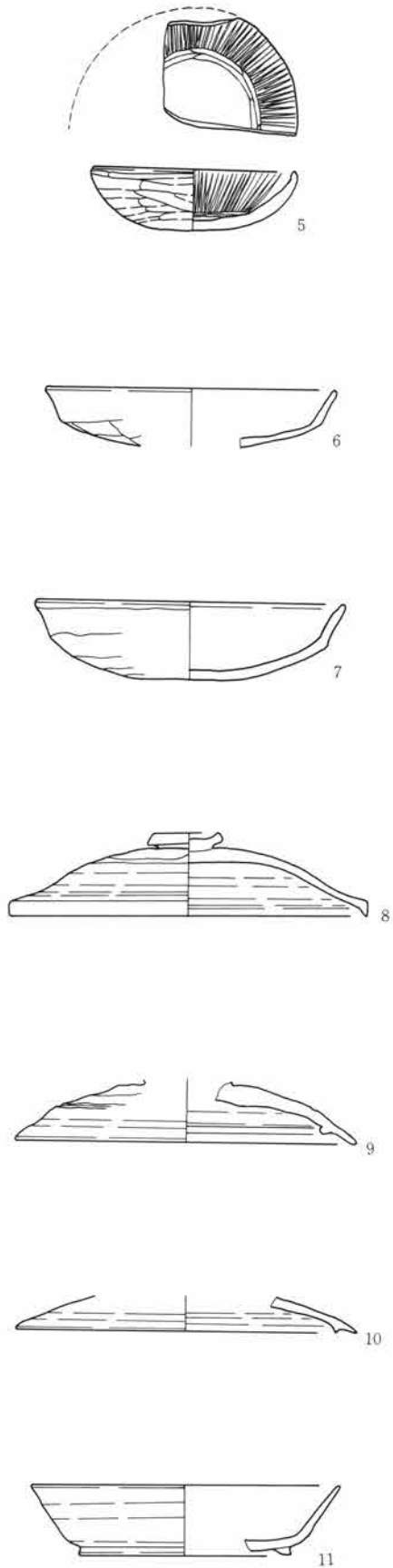
0 17 20

0 18 21

A

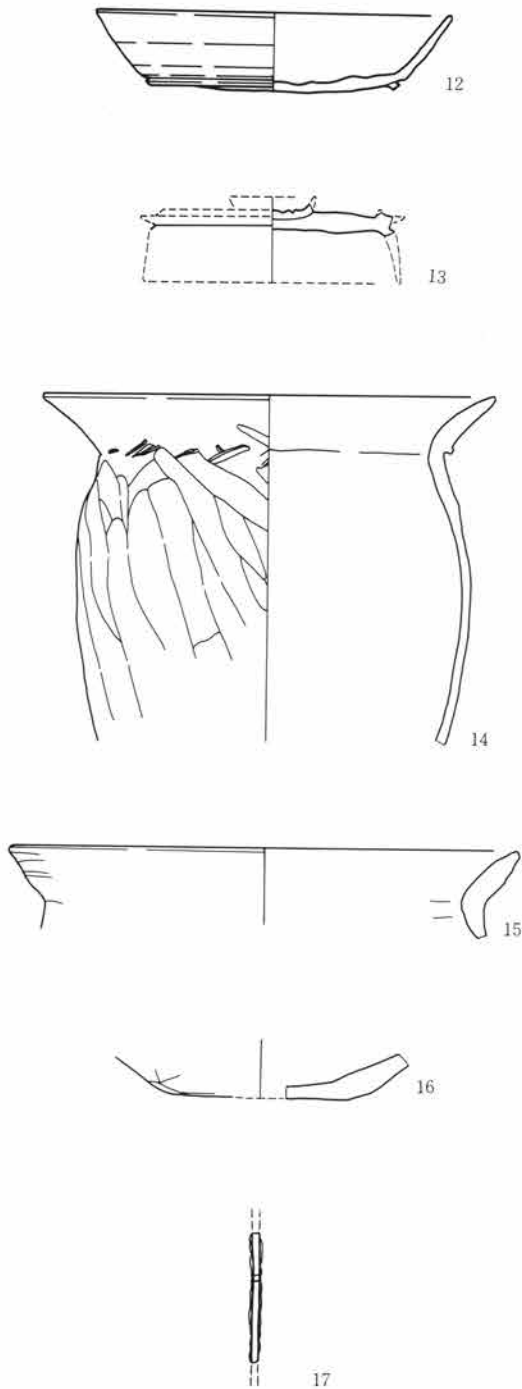


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	11.6・11.1・3.5 完形 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みをもつ。 口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部 はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 床直	13.8・(4.0)・4.3 完形 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内湾さみ、体部から底部は丸みを呈 す。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り が施されている。
3	土師器 坏 床直	14.4・(4.3)・3.2 完形 細砂粒・粗砂粒 雲母 普通 橙色	口縁部は内湾し、体部は丸みをもち、底部は ほぼ平底に近い。口縁部は横撫で、体部・底 部はヘラ削りが施されている。
4	土師器 坏 床上10cm	16.8・9.6・4.3 1/5 細砂粒・褐色鉍物粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。外 面の整形は磨耗のため不明。内面の体部には 斜放射状暗文。体部と底部との間にはヘラ磨 きが施されている。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
5	土師器 坏 覆土 カマド	11.8・6.4・3.5 1/4 細砂粒・粗砂粒 軟質 橙色	器壁はやや厚く、口縁部は内湾ぎみで、体部はゆるい丸みをもち開く。外面の口唇部は横撫で、口唇部下から体部にかけては細かいヘラ削り。底部はヘラ削り。内面の体部には放射状暗文、体部と底部の間にはヘラ磨きが施されている。
6	土師器 坏 覆土	16.8・15.2・— 1/4 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
7	土師器 坏 床直	18.0・14.0・4.1 1/2 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 明灰褐色	ロクロ右回転。口縁部は直線的に開き、高台は小型の断面四角形を呈し「ハ」の字状に開く。底部は高台より突出し、回転ヘラ削りが施されている。
8	須恵器 蓋 貯蔵穴底部より5cm 貯蔵穴底部	20.8・鈕3.7・4.8 1/3 粗砂粒 黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井部はゆるい丸みをもち口唇部は折り曲げで直立する。天井部の3分の1程度まで回転ヘラ削りが施されている。
9	須恵器 蓋 床直	20.0・—・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、内面には身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度まで回転ヘラ削り、カエリは貼付による。
10	須恵器 蓋 覆土	20.8・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部の内面には身受けのカエリをもち、外面は自然釉の付着がみられる。
11	須恵器 坏 床上10cm	18.0・14.0・4.1 1/6 粗砂粒・亜角礫 酸化焰 淡黄色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。高台は断面逆台形を呈し、やや開き端部は平坦で接地面は広い。底部はヘラ削り。

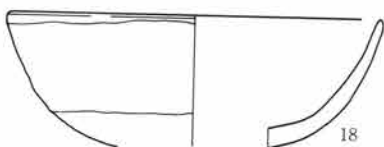
第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
12	須恵器 坏 床直	18.7・14.0・4.1 1/2 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 明灰褐色	ロクロ右回転。口縁部は直線的に開き、高台は小型の断面四角形を呈し「ハ」の字状に開く。底部は高台より突出し、回転ヘラ削りが施されている。
13	須恵器 蓋 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	短頸壺の蓋。鈕は輪状を呈し、天井部から口縁部への折曲部分には一条の凸帯と鐙をもつ。
14	土師器 甕 床直	24.0・—・— 1/4 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらまない。外面の口縁部は横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
15	土師器 甕 覆土	27.0・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通 にぶい橙色	器壁は厚く、口縁部は横撫で。
16	土師器 甕 床下 覆土	—・9.2・— 小片 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通 にぶい赤褐色	底部小片。胴部、底部ともヘラ削り。
No	種類	観察表掲載頁	
17	鉄製品 棒状不明鉄製品	893	

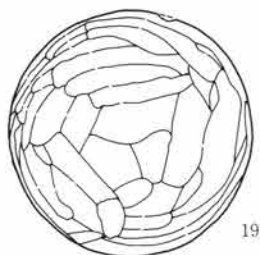
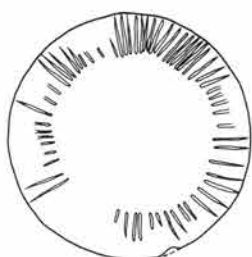
廊下

廊下

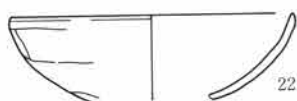


18	土師器 碗 床上10cm	19.8・15.2・— 1/4 細砂粒 褐色鉾物粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開き、底部はゆるい丸みを呈す。
----	--------------------	--	-----------------------------------

第3章 検出遺構・遺物



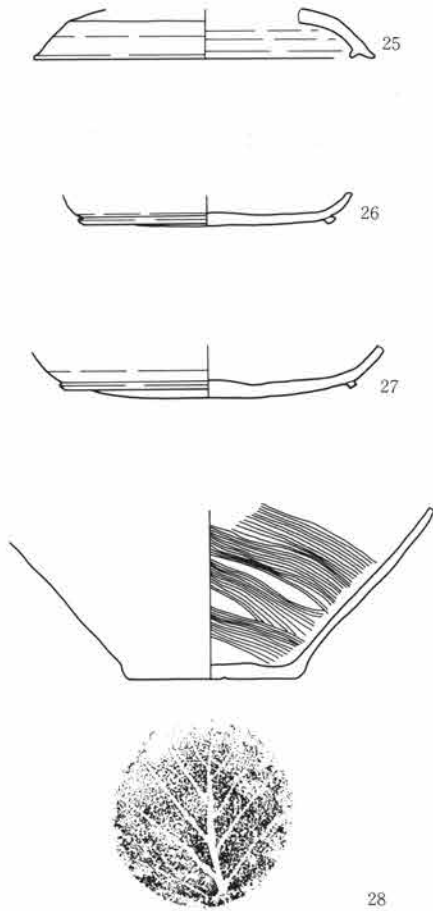
B



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
19	土師器 坏 床上10cm	13.0・8.4・3.9 完形 細砂粒 褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみで、底部はゆるい丸みを呈す。外面の口唇部は横撫で、口唇部下から底部にかけては細かいヘラ削り。内面の体部には放射状暗文が施されている。

B

20	土師器 坏 床上3cm	12.0・10.4・2.8 1/10 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、底部との間に弱い稜をもつ。底部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
21	土師器 坏 床直	10.6・6.0・3.6 1/3 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 普通 明褐色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
22	土師器 坏 カマド底部より15cm 覆土	15.0・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみ、体部は丸みをもつ。口唇部は横撫で、口唇部下は横方向のヘラ削り。
23	土師器 坏 覆土	17.0・14.8・4.2 1/4 細砂粒・雲母・亜角礫 (3mm大) 普通 橙色	口縁部は外反し、底部との間に弱い稜をもつ。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
24	須恵器 坏 床上2.5cm、4cm	12.0・9.5・4.3 1/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焙 灰色	ロクロ右回転。口縁部はやや外反し、底部はゆるい丸みをもつ。底部は手持ちによるヘラ削り



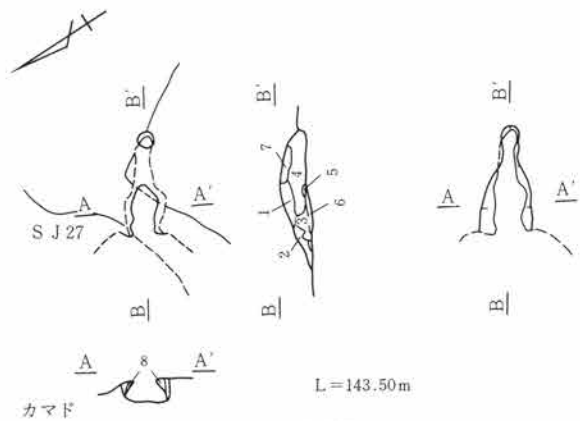
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
25	須恵器 蓋 床上2.5cm 覆土	18.0・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。器壁はやや厚く、天井部は丸みをもち、内面には身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度は回転ヘラ削り
26	須恵器 坏 床直	—・13.2・— 1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面四角形で「ハ」の字状に開く。底部は極ゆるい丸みをもち、僅かに突出し、回転ヘラ削り。
27	須恵器 坏 覆土	—・16.0・— 1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面四角形で「ハ」の字状に開く。底部はゆるい丸みをもち、高台より突出し、回転ヘラ削り。
28	土師器 甕 床直 覆土	—・9.0・— 1/4 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	底部は木葉痕がみられる。胴部の内面には刷毛目が施されている。

S J 28

60

本住居跡は、100G-05グリッドに位置し、S J 27・31と重複し、本遺構のカマドが、双方の覆土の上に構築しているのを確認した。本遺構は、カマドのみを確認し得た住居で、平面形態、規模、方位、床面、壁の状況、壁溝・貯蔵穴その他の一切の住居施設は確認できなかった。

カマドは、中軸線をN-126°-Sにもち、設置されている位置は不明である。規模は、燃烧部幅30cm、奥行き50cmを測り、煙道部は水平に50cm伸びた後、垂直に近い状態で立ち上る。残存状態は良好で、褐色粘質土で構築した煙道部の天井が遺存している。燃煙部の天井は確認できないが、全体に焼土は多く、火床、燃烧部の内側及び煙道部の天井は強く焼けている。



カマド

- 1 褐色土 若干の焼土粒 黄褐色土粒
- 2 褐色土 焼土 若干の灰 黄褐色土粒
- 3 焼土 (天井部の崩落)
- 4 褐色土 微量の焼土粒 黄褐色土粒
- 5 褐色土 焼土 灰
- 6 焼土 黒褐色土
- 7 焼土 (煙道天井部)
- 8 焼土 (袖部)

0 2 m

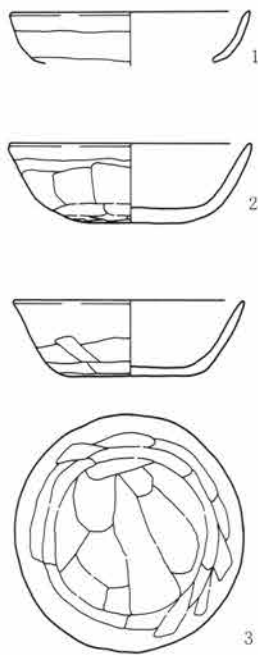
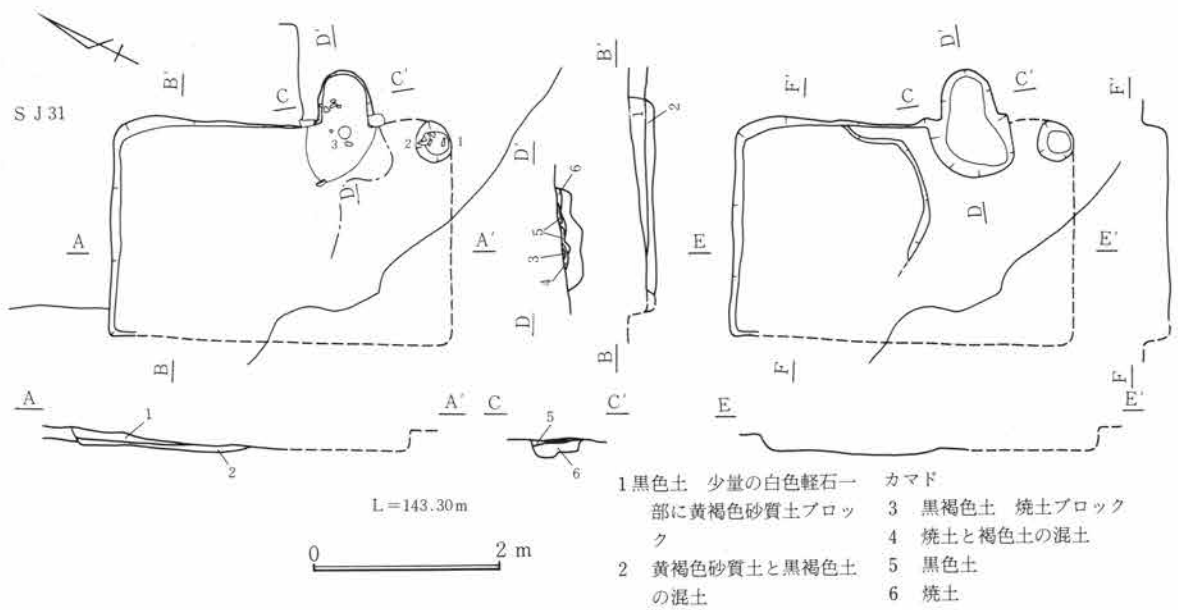
S J 29

本住居跡は、98～100G—02～04グリッドに位置し、S J 31と重複する。新旧関係は本遺構の方が新しい。平面形態は、本遺構の南西部が開析谷に削除されて確認できないが、長方形と推定される。規模は、東西2.3m、南北・面積は推定し得ない。主軸方向は、N—63°—Eを指す。

床面は、貼床を施している。壁は、残存壁高が5cmと浅いため状況は不明である。壁溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に位置し、円形を呈し、直径35cm、深さ25cmを測る。

カマドは、東壁の南側に位置する。規模は、燃烧部幅60cm、奥行き60cmで壁外に造り出し、煙道部は確認できない。火床は強く火を受けている。焚口部の両側に凝灰岩の切石を埋め込んで補強材としている。

掘り方は、住居北側を10cm掘り込み、5cmの貼床を施して生活面としている。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 貯蔵穴底部より8.5cm	12.8・10.6・— 1/8 細砂粒 普通 橙色	器壁は薄く、口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 貯蔵穴底部より18.5cm	12.6・9.0・4.2 3/5 粗砂粒・褐色鉍物粒 軟質 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。口縁部は横撫で、体部は一段のヘラ削り。底部はヘラ削りが施されている。
3	土師器 坏 カマド内 床直	12.2・8.0・4.0 完形 粗砂粒 やや硬質 明褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。底部はヘラ削り後ヘラ撫でが施されている。

S J 30

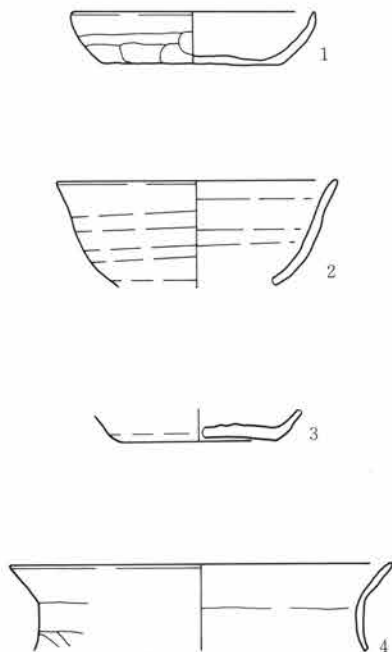
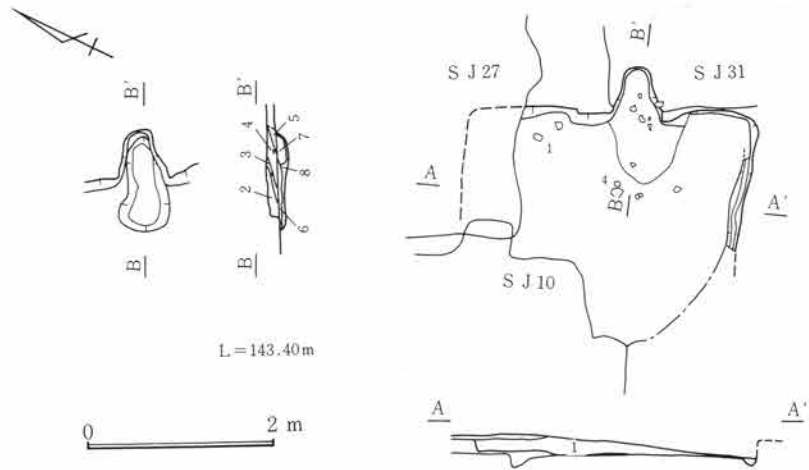
61

本住居跡は、100～102G-03～05グリッドに位置し、S J 10・27・31と重複する。新旧関係は、本遺構の方がS J 10より古く、S J 27・31よりも新しい。本遺構南西部は開析谷によって削られるが、平面形態は長方形と推定される。規模は不明である。主軸方位は、N-63°-Eを指す。

床面は、平坦で良く整い、カマドの西側及び住居中央部は踏み固められて堅固である。壁は、確認し得たのが、東壁と南壁の一部のみであり、残存壁高も2～10cmと浅く状況は不明である。壁高は、南壁の一部に幅10cm、深度5cmで確認した。柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは、東壁の南寄りに位置し、残存状態は悪い。規模は、燃烧部幅50cm、奥行き60cmで壁外に造り出し、煙道部は不明である。燃烧部の内側は強く焼けているが、全体に焼土は少ない。カマド掘り方は、火床手前50cmから深さ10cmの方形に掘り窪めた後、黒褐色土で埋め戻している。

- 1 黒色土 少量の軽石
カマド
- 2 黒色土 少量の焼土粒
- 3 焼土
- 4 黒色土 微量の焼土 多量の炭化物
- 5 黒色粘質土 微量の軽石
- 6 黒色土 少量の炭化物
- 7 黒色粘質土 軽石



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上6cm	12.8・9.5・2.8 2/5 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部はやや内湾し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は一段の左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削りが施されている。
2	須恵器 碗 覆土	14.8・—・— 1/8 粗砂粒 還元焙 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し体部は丸みをもつ。
3	須恵器 坏 覆土	—・8.4・— 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焙 灰白色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。
4	土師器 甕 床上2cm 覆土	20.2・—・—、小片 細砂粒 普通 明褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫で

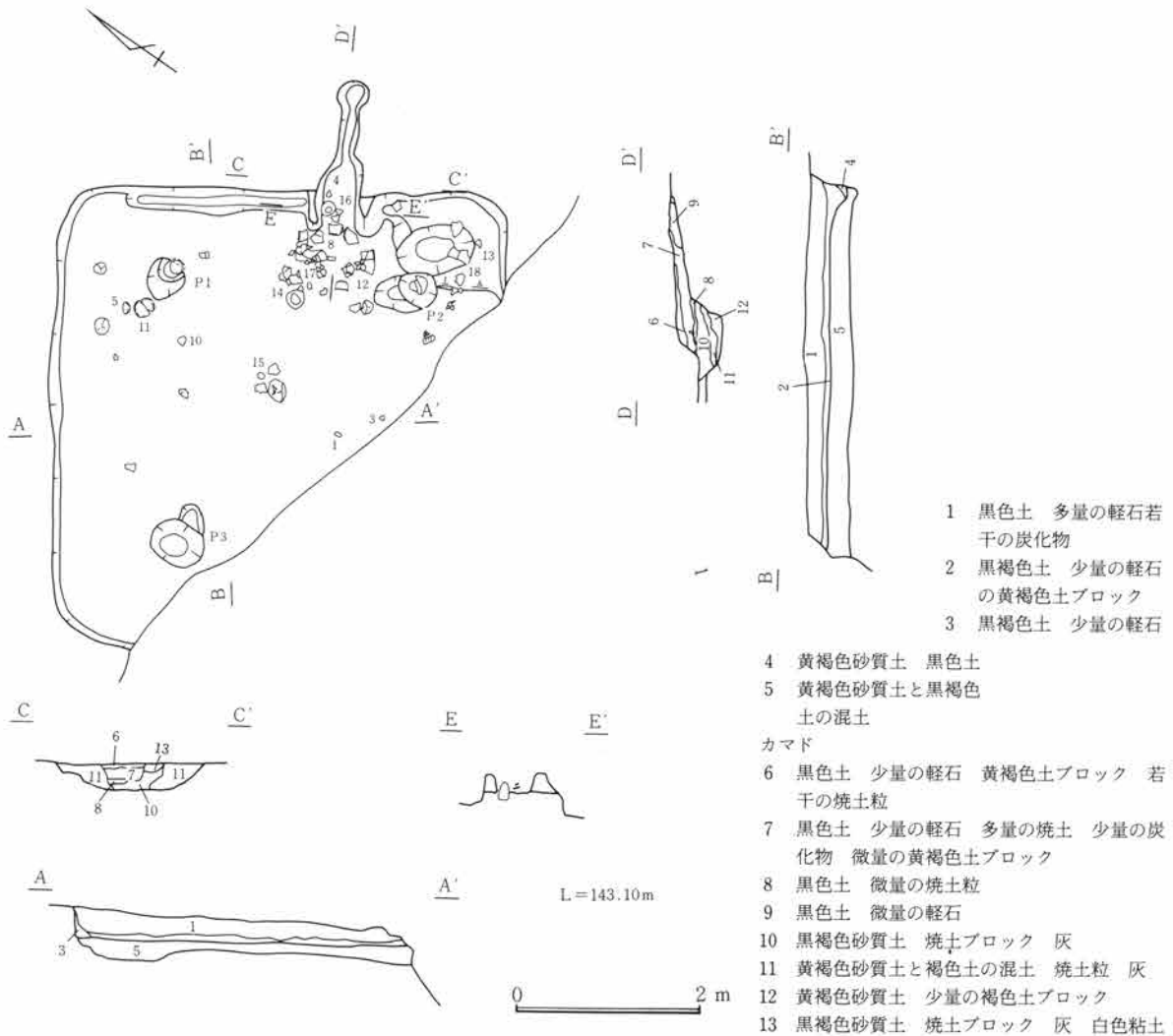
S J 33

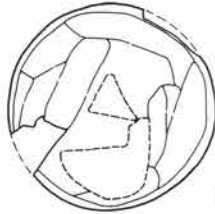
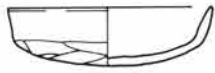
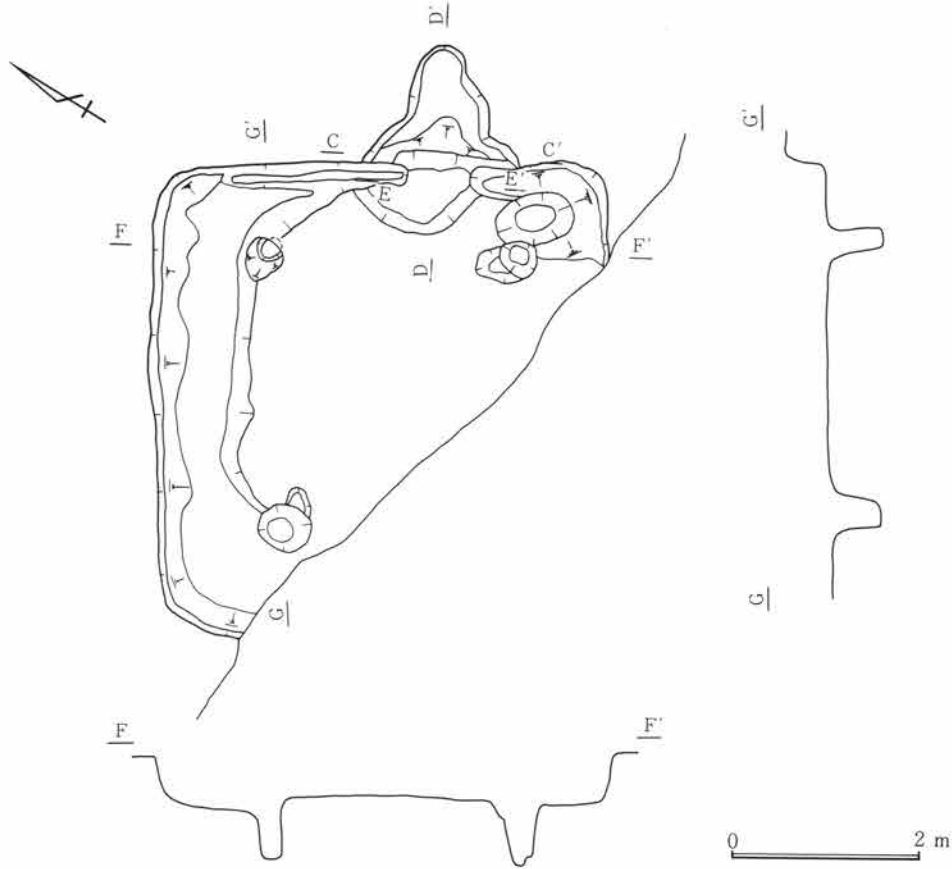
本住居跡は、90~93G-00~03グリットに位置し、単独で占地する。住居南西部は開析谷によって削除されて確認できない。平面形態は、隅丸方形を呈する。東西4.8m、南北4.8m、面積は推定で23.27m²を測り、主軸方向は、N-56°-Eを指す。

床面は、貼床が施され、平坦で良く整う。壁は、直線的で垂直に近く立ち上がり、壁高は、12~37cmを測り平均22cmである。壁溝は東壁に幅20cm、深度15cmで検出した。柱穴は、3基検出したが、南西に位置する柱穴は開析谷に削られたと考えられる。P₁は直径40cm、深度76cm、P₂は直径40cm、深度74cm、P₃は径56×50cm、深度70cmを測る。貯蔵穴は南東隅に位置し、隅丸方形を呈する。規模は70×45cm、深度40cmを測る。

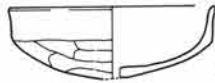
カマドは、東壁の南寄りに位置し、残存状態は良好である。規模は、燃焼部幅40cm、奥行き50cmで、大半が壁内に造られ、煙道部は、その外側110cmまで緩やかな勾配で立ち上がる。黄褐色粘質土と褐色土の混土で構築した袖部を検出したが、天井部は確認できなかった。全体に焼土は少ないが、袖部の内側、火床は強く焼けている。火床の中央左側に、棒状の凝灰岩を埋め込み、その上に甕の下半部を伏せて支脚としている。カマド掘り方は、深さ20cmの方形に掘り窪めた後、砂質黒色土で埋め戻している。

掘り方は、柱穴を結ぶ線より外側を、床面より5~10cm深く溝状に掘り窪め、貼床を施している。

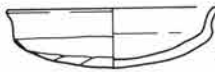




1



2



3



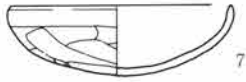
4



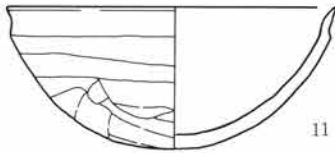
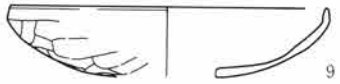
5

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	10.8・10.1・3.1 7/8 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は直線的でほとんど開かず、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	10.8・10.6・3.8、2/3 細砂粒 やや軟質 橙色	口縁部は直立し、口唇部でやや外反する。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
3	土師器 坏 覆土 床直	11.1・10.6・3.1、1/5 細砂粒 やや軟質 にぶい橙色	口縁部は外反し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
4	土師器 坏 床上3cm	11.0・10.2・3.0、1/2 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
5	土師器 坏 床上1.5cm 覆土	11.2・10.2・3.5 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部との間には稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。

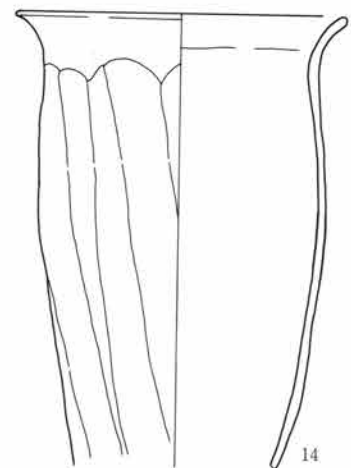
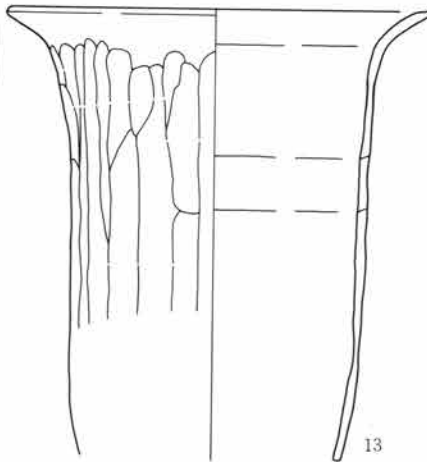
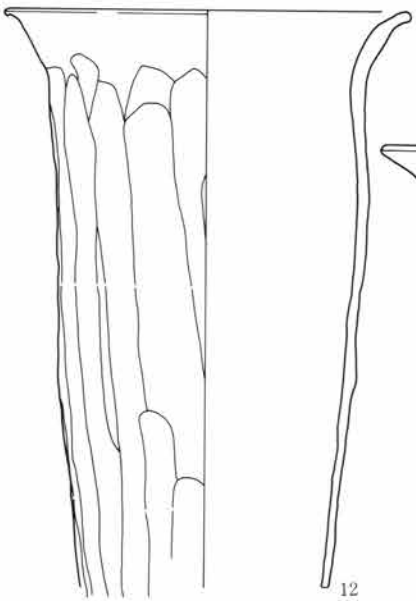
第3章 検出遺構・遺物

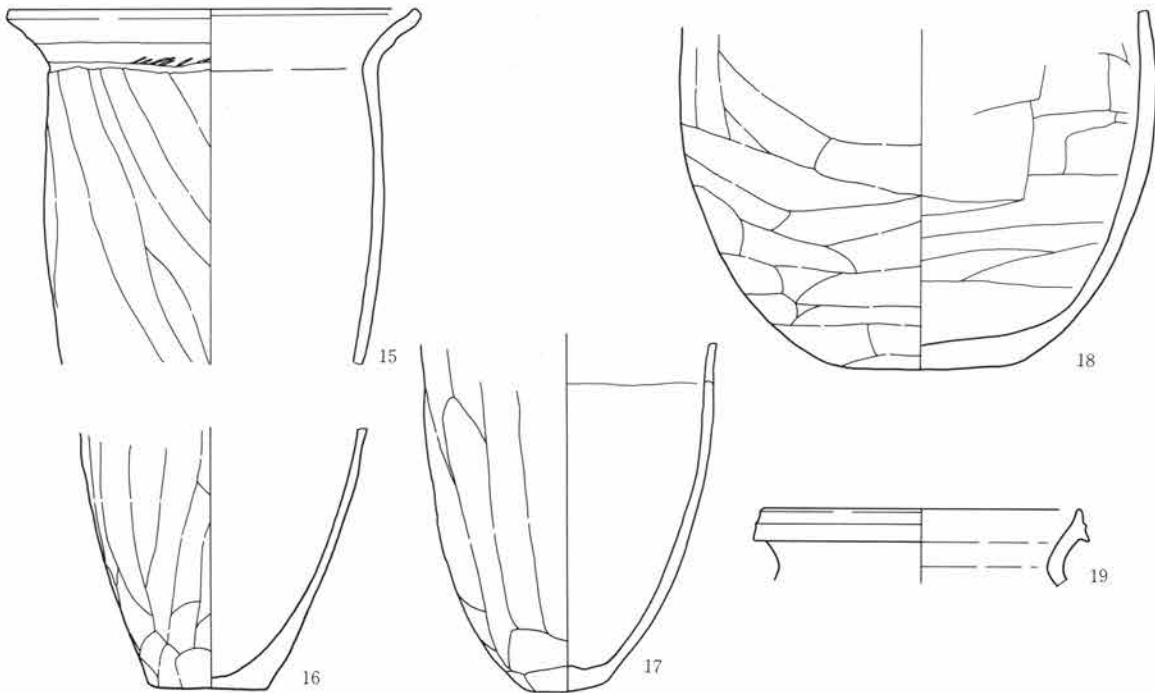


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
6	土師器 坏 覆土	12.7・10.8・3.0 1/5 細砂粒 軟質 にぶい橙色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部はヘラ削りが施されている。
7	土師器 坏 覆土	11.8・11.6・3.7、1/2 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
8	須恵器 坏 床直 カマド 掘り方	11.2・6.0・3.0 完形、粗砂粒、還元焰 (外)灰白色 (内)にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、蓋受けをもつ。底部は撫で。



9	土師器 坏 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 軟質 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
10	土師器 坏 床上4cm	17.8・—・—、1/6 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
11	土師器 鉢 床上1.5cm	17.5・15.0・7.5 完形 粗砂粒 やや軟質 橙色	口縁部は外反し、体部から底部にかけては球状の丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削りが施されてる。





No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
12	土師器 甕 床上1.5cm	—・—・—、1/2 粗砂粒、普通 橙色	口縁部は外反し、胴部はふくらみをもたず長胴型を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向ヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
13	土師器 甕、貯蔵穴底 部より21cm	—・—・—、小片 粗砂粒 普通、橙色	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらみをもたず長胴型を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部は底部に向けてのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
14	土師器 甕 床上1.5cm	17.2・—・—、3/4 細砂粒・雲母 普通、にぶい橙色	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらみをもたず長胴型を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部は底部に向てえのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
15	土師器 甕 床上2cm	21.8・—・—、1/5 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通、にぶい赤褐色	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらみをもたず長胴型を呈す。胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
16	土師器 甕 床直	—・6.3・—、1/4 粗砂粒、普通 にぶい橙色	長胴型を呈し、胴部は縦方向ヘラ削り。底部もヘラ削り。
17	土師器 甕、床上1.5cm 覆土	—・4.1・—、1/4 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通、明赤褐色	長胴型を呈し、胴部は縦方向ヘラ削り。底部もヘラ削り。
18	土師器 甕、覆土 貯蔵穴底部よ り21cm	—・9.4・—、2/5 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通 褐灰色・浅黄色	胴部は大きなふくらみもち、底部は平底を呈す。外面の胴部中位は縦方向、下位は横方向のヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
19	須恵器 甕 覆土	16.8・—・—、小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部は上下に引き出され口縁部帯を形成し、口縁部帯の中央には1条の凸帯がまわる。

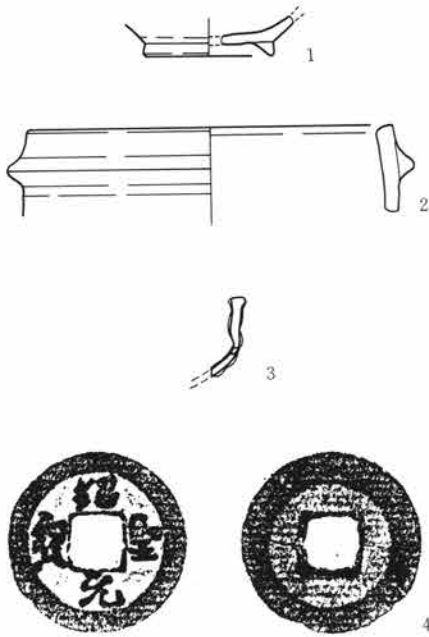
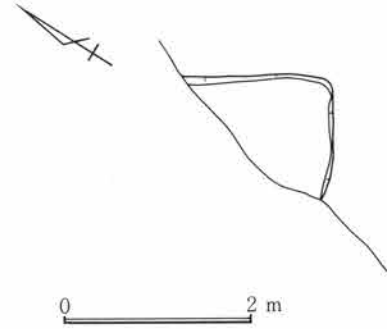
S J 32

62

本住居跡、94～95G-01グリッドに位置する。本遺構は北東隅以外は、開析谷に削除されているため、形態・規模・方位等は不明である。

壁は、残存壁高が5cmと浅いため状況は不明である。

遺物は、覆土中より須恵器の羽釜・高台付碗、鉄製品・釘、古銭等が出土している。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	—・7.0・— 小片 細砂粒・白色鉍物粒・ 雲母・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は断面三角形を呈し、底部回転ヘラ削り。
2	須恵器 羽釜 覆土	19.2・—・— 小片 粗砂粒 酸化焰 橙色	胴部から口縁部にかけては直立し、口唇端部は平坦で内傾する。罫は断面三角形を呈す。
No.	種類	観察表掲載頁	
3	鉄製品 釘	892	
4	銅製品 渡来銭	907	

S J 35

65

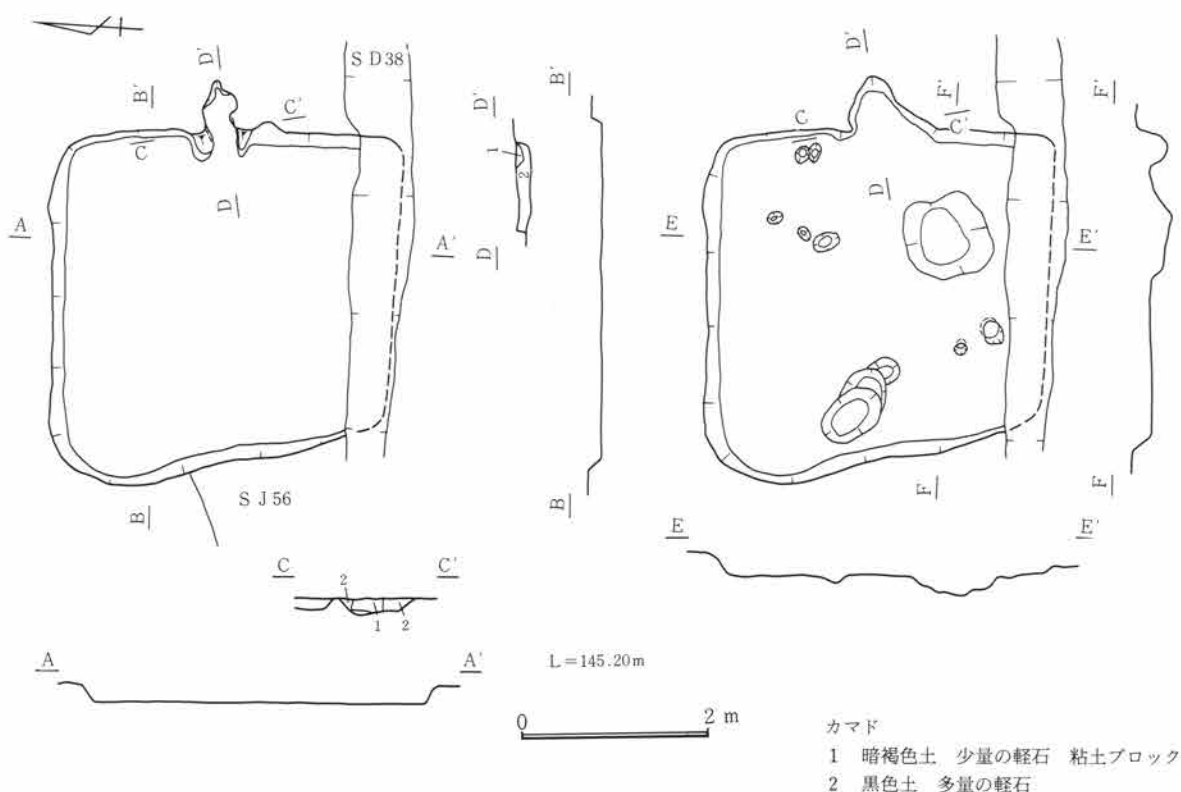
本住居跡は、97～99H-31～32グリッドに位置し、S D 38、S J 73と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうがS D 38より古く、S J 73より新しい。平面形態は、南壁が短い台形を呈し、規模は、東西3.71m・南北（残存部分で）3.21m、面積は残存部分で、11.16m²を測る。主軸方向は、N-83°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、10～21cmを測り、平均は16cmである。壁溝・貯蔵穴・柱穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも良好な状態で残っている。規模は全長85cm、幅65cmを測り、煙道部は壁外に50cmのびる。

掘り方は、床面から5～7cmほど掘り込まれ、中央やや東南よりに隅丸方形で一辺85cm、深度24cmの床下土拡や西壁よりに楕円形のものが3基重複している他、径15cmから25cmのピットが7基検出された。

出土遺物は、土師器の坏・甕・台付甕・須恵器の杯・碗・蓋・甕の他、円礫が出土しており、土器の破片点数は総数100点みられるが、実測可能な個体は以下の5点だけであった。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直 覆土	11.1・10.4・3.4 完形 細砂粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は直線的に開く。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で底部はヘラ削り。底部中央に指頭痕がみられる。
2	土師器 坏 床下 覆土	12.0・9.0・— 1/6 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は丸みをもちやや開き、横撫で。底部はヘラ削りが施されている。
3	須恵器 蓋 床直 覆土	14.8・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部の周辺はゆるい丸みをもち、口唇部は直立する。天井部の中央は回転ヘラ削り。
4	土師器 甕 床下	11.2・—・— 小片 細砂粒 普通 褐色	口縁部はやや外反し、胴部は丸みをもち。口縁部は横撫で、胴部は左方向へのヘラ削りが施されている。
5	土師器 台付甕 床下	—・4.0・— 小片 細砂粒・雲母 普通 褐色	台付甕の脚部と胴部の接合部分、胴部はヘラ削り。接合部分は横撫で。

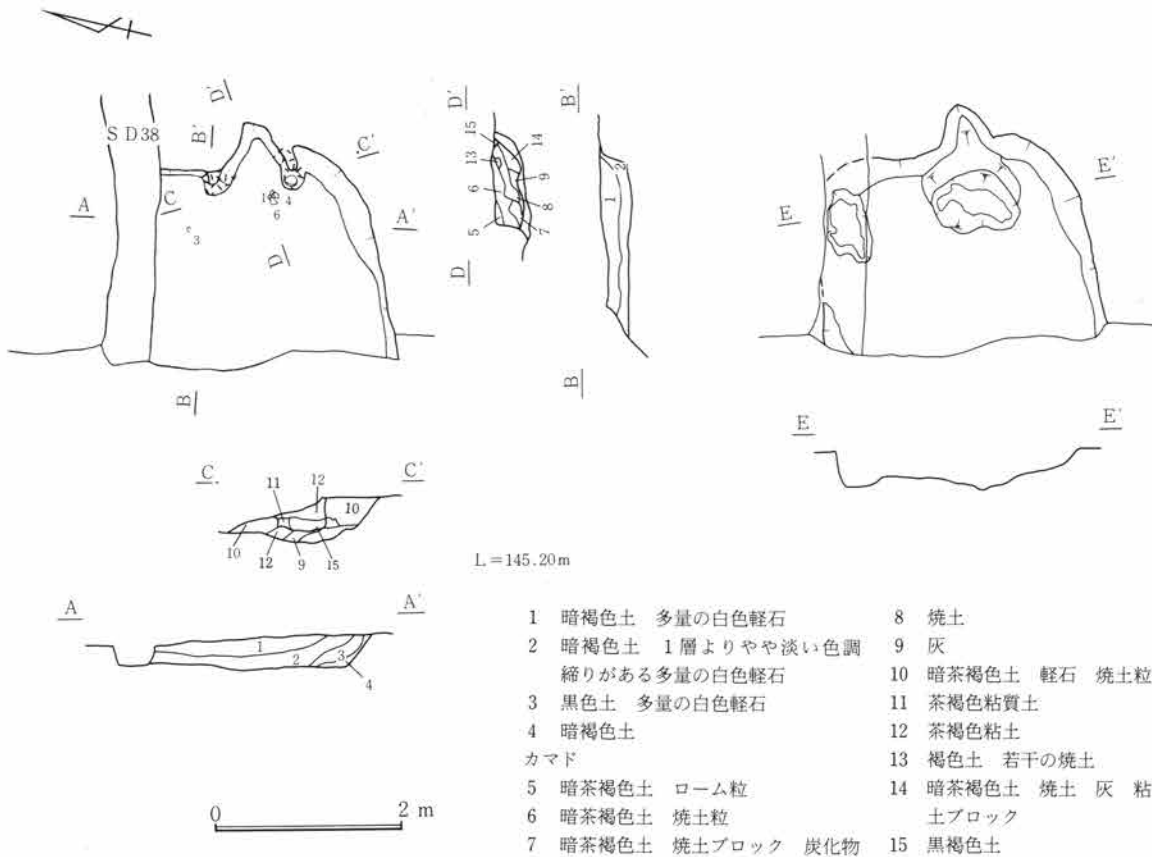
S J 36

本住居跡は、95～96H-30～31グリッドに位置し、S D19と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。また、本遺構の西壁部分は、近代の用水路によって壊され、北壁はS D19に切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、ほぼ長方形を呈すると推定されるが、東壁のカマドの両側でくい違いがみられる。規模は、残存部分で東西2.05m・南北2.58m、面積は残存部分で4.98m²を測る。主軸方向は、N-81.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積で、4層に分けられるが、ほぼ類似した暗褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、20～32cmを測り、平均は27cmである。壁溝・貯蔵穴・柱穴は、検出されなかった。

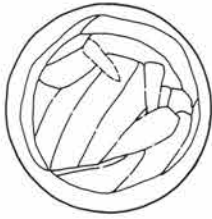
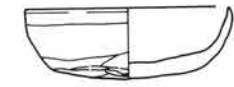
カマドは、東壁の東南コーナー際に位置し、残存状態は、天井部は崩落し、袖部も大部分が欠落している。規模は、全長115cm、幅120cmを測り、煙道部は壁外に30cmのびる。焚口部には灰層がみられ、袖は茶褐色粘土で構築されている。

掘り方は、床面より3～7cmほど掘り込まれ、凹凸が激しい。床下の施設は、西壁よりに不整形を呈し、径84×46cm、深度10cmを測る床下土壇が検出されている。

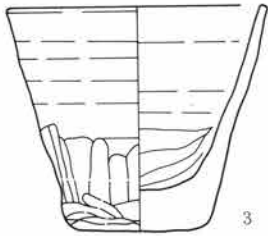


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 床上4cm	11.0・10.2・3.7 1/2 細砂粒 軟質、橙色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。

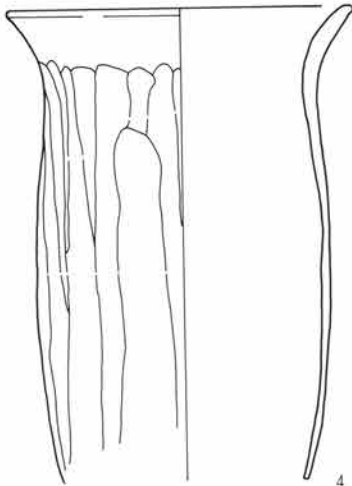
第4節 歴史時代



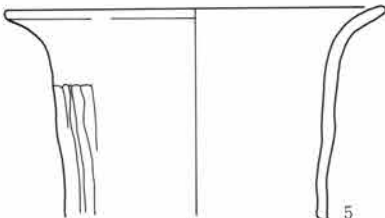
2



3



4



5



6

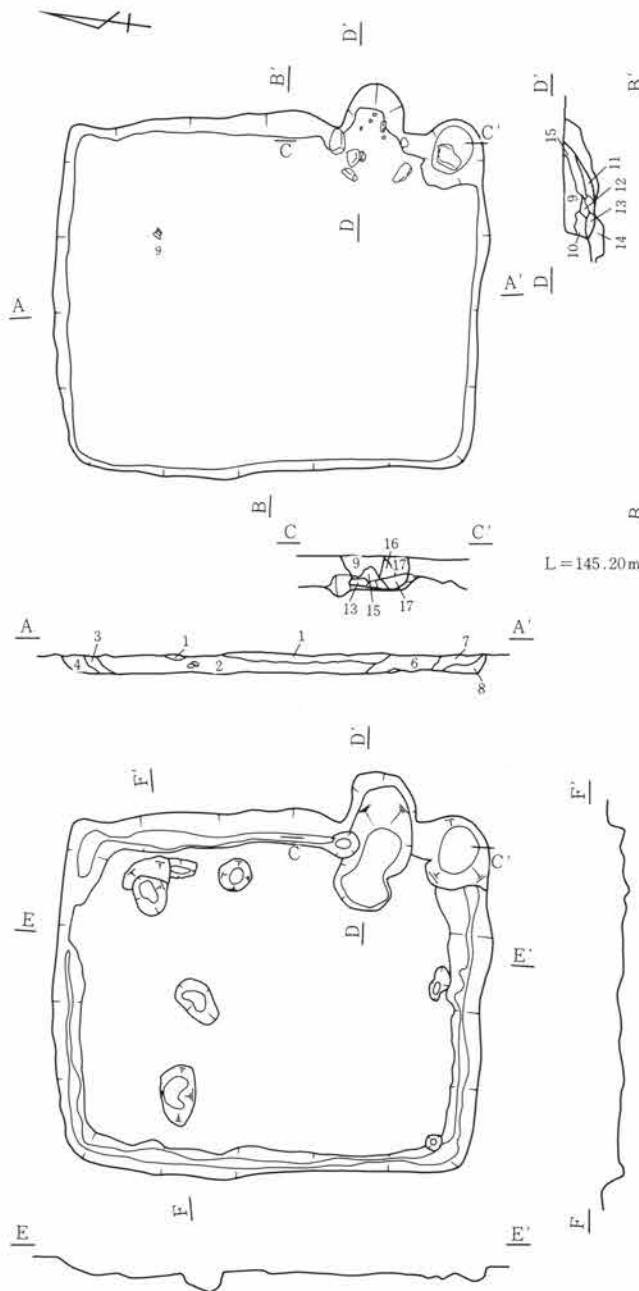
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 カマド 覆土	10.8・8.0・3.7 9/10 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は丸みをもち、底部はゆるい丸みを呈す。底部は手持ちによるヘラ削りが施されている。
3	須恵器 鉢 床直	13.2・8.0・11.9 2/5 細砂粒・黒色鉾物粒・ 白色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。体部の下半は、縦方向へのヘラ削り、底部は手持ちによるヘラ削りが施されている。
4	土師器 甕 カマド (袖部)	18.2・—・— 小片 粗砂粒・細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、胴部は直線的。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
5	土師器 甕 小片 カマド 覆土	20.0・—・— 小片 粗砂粒・細砂粒 雲母 橙色	口縁部は外反し、胴部は直線的、外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向ヘラ削り、内面の胴部はヘラ撫で。
6	土師器 甕 床上10cm カマド	—・6.8・— 1/10 細砂粒・雲母 普通 橙色	胴部の外面はヘラ削り。内面はヘラ撫で。

S J 37

本住居跡は、96～98H-27～29グリッドに位置、畠状遺構が全面的に覆うように重複するが、畠状遺構は、本遺構埋没後のものである。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西3.79m・南北4.56m、面積16.49m²を測る。主軸方向は、N-81.5°-Eを指す。覆土は、自然堆積で、壁際は、廃棄時の崩れがみられ、大半は暗褐色土で覆われている。

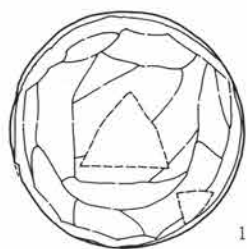
床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、14～23cmで平均18cmを測る。壁溝は床面では検出できなかったが、床下でカマドから貯蔵穴、北壁の一部を除いてまわるのが確認された。幅は14～22cm、深度は4～8cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナーに位置し、2分の1は壁外に出ている。平面形態は、楕円形を呈し、規模は、径68×60cm、深度31cmを測り、底部からロームブロックが出土している。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は右袖部が残存しているが、左袖部は大部分が欠落している。規模は、全長104cm×幅102cmを測り、煙道部は壁外に48cmのびる。袖部と天井部には、加工石が使用されている。掘り方は、床面から3～5cmと全体的に浅いが、小ピット状の凹凸が激しくみられる他、南壁際に小ピットが2基と西半分径35cmから68cm大のピットが検出された。



- 1 暗褐色土 やや砂質 少量の白色軽石
- 2 暗褐色土 多量の白色軽石
- 3 黒色土 白色軽石
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 少量の白色軽石 ロームブロック粒
- 6 黒褐色土 少量の白色軽石 焼土粒 ロームブロック
- 7 黒色土 多量の白色軽石
- 8 黒色土 多量の白色軽石 少量のロームブロック
- カマド
- 9 暗褐色土 軽石 焼土粒
- 10 暗茶褐色土 軽石 焼土粒 白色粘土粒
- 11 暗茶褐色粘質土
- 12 暗茶褐色土
- 13 黒褐色土 灰
- 14 暗茶褐色土 茶褐色粘土
- 15 暗茶褐色土 茶褐色粘土
- 16 茶褐色土 軽石 焼土粒
- 17 暗茶褐色土 軽石 焼土粒

0 2 m



1



2



3



4



5

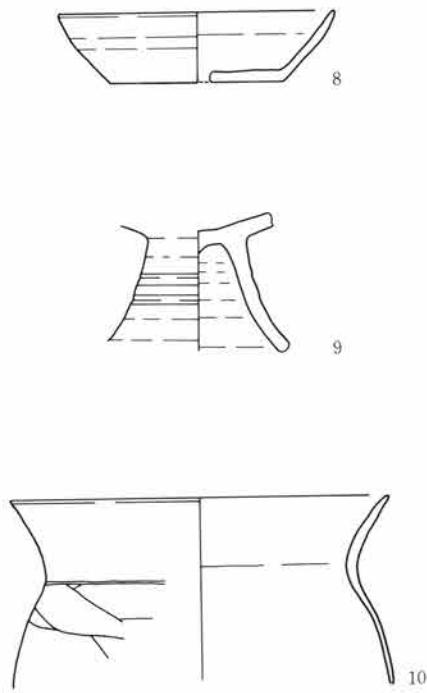


6



7

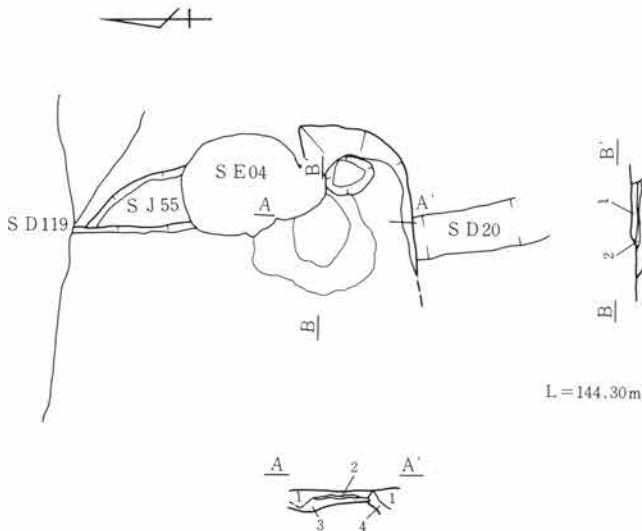
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.2・12.0・3.6 完形 細砂粒 普通 明褐色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、底部の周辺部は指撫で、その内側はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 床下 覆土	12.2・—・— 小片 細砂粒 普通 にふい黄橙色	口縁部は外反する。外面の口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されている。
3	須恵器 蓋 覆土	14.6・—・— 1/6 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みをもち、口唇部は折り曲げて直立する。天井部の過半までは回転ヘラ削りが施されている。
4	須恵器 坏 覆土	14.2・8.4・3.7 1/5 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては極ゆるい丸みをもち開く。底部は丸底で、ヘラ撫で。
5	須恵器 坏 覆土	12.2・8.6・3.8 1/3 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色・オリーブ黒色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部はほぼ平底でヘラ切り。
6	須恵器 坏 覆土	12.4・7.0・4.6 1/2 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ左回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底で回転糸切り後回転ヘラ削り。底部中央に僅かに回転糸切り痕がみられる。
7	須恵器 坏 覆土	13.6・8.0・4.3 3/5 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は極ゆるい丸みをもつ。底部は平底を呈し、ヘラ切り後ヘラ撫でが施されている。内面の口縁部に重ね焼きの痕跡がみられる。外面に自然釉が付着。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
8	須恵器 坏 床下 覆土	14.6・9.4・3.7 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては極ゆるい丸みをもち開く。底部は平底で、ヘラ撫で。
9	須恵器 高坏 床直 カマド密着	—・—・— 1/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	高坏脚部。ロクロ右回転。裾で大きく開き、中位に2条の沈線がまわる。
10	土師器 甕 覆土	20.0・—・— 小片 細砂粒 普通 暗赤褐色	口縁部は外反し、胴部は丸みを呈す。口縁部は横撫で、胴部は横方向ヘラ削り。

S J 38・55

68



S J 38カマド

- 1 黒褐色砂質土
- 2 黒褐色土 灰
- 3 黒褐色土 ロームブロック
- 4 黒褐色粘質土

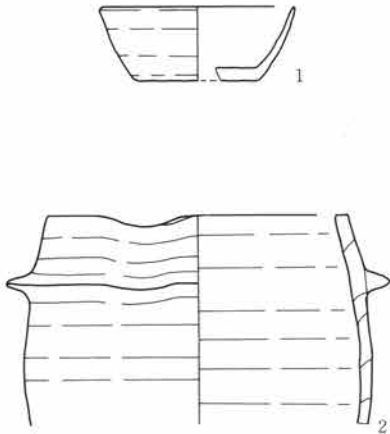
0 2 m

本住居跡は、93～94H-09～10グリッドに位置し、SD119・SD20、SE04、SJ55と重複するが、新旧関係は、SD119・SD22、SE04より本遺構のほうが古く、SJ55より新しい。本遺構は、西半分を性格不明の落ち込み、北壁をSD119によって切られ、4分の1ほどの残存状態のため、平面形態、規模等については確認できなかった。

残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

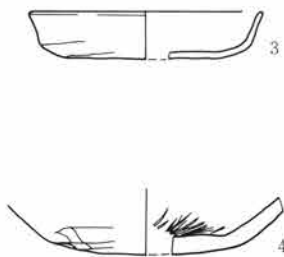
カマドは、東壁の東南コーナーよりにカマドの残骸と推測される焼土・灰が確認されただけであった。

SJ55は、SJ38と大部分が重なりあって位置し、SJ38同様に重複する他の遺構によって切られており、極一部しか確認されなかった。検出された部分は、東壁から南壁の一部のみである。カマドは、SE04に切られて残存しないが、東壁は、一直線ではなくカマドの両側でくい違いをみせる。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径52×43cm、深度37cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	10.2・6.4・3.9 1/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち、底部は平底を呈し、回転ヘラ削り。
2	須恵器 羽釜 床直 覆土	16.0・—・— 小片 粗砂粒・角礫(3mm大) 還元焰 褐灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部はやや内傾し、口唇端部は平坦で水平。胴部はゆるい丸みをもち、鑄は断面三角形で水平。口縁部は焼成時の歪みが大きい。

SJ55



3	土師器 坏 床下 覆土	12.4・8.4・2.5 1/10 細砂粒 普通 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 床下 覆土	—・9.8・— 小片 細砂粒・褐色鉾物粒 軟質 橙色	外面はヘラ削り。内面の体部には放射状暗文が施されている。

SJ39

68

本住居跡は、89～91H-16～18グリッドに位置し、SK71と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、東壁が一直線ではなく、カマドの両側でくい違いがみられる。規模は、東西2.50m・南北3.

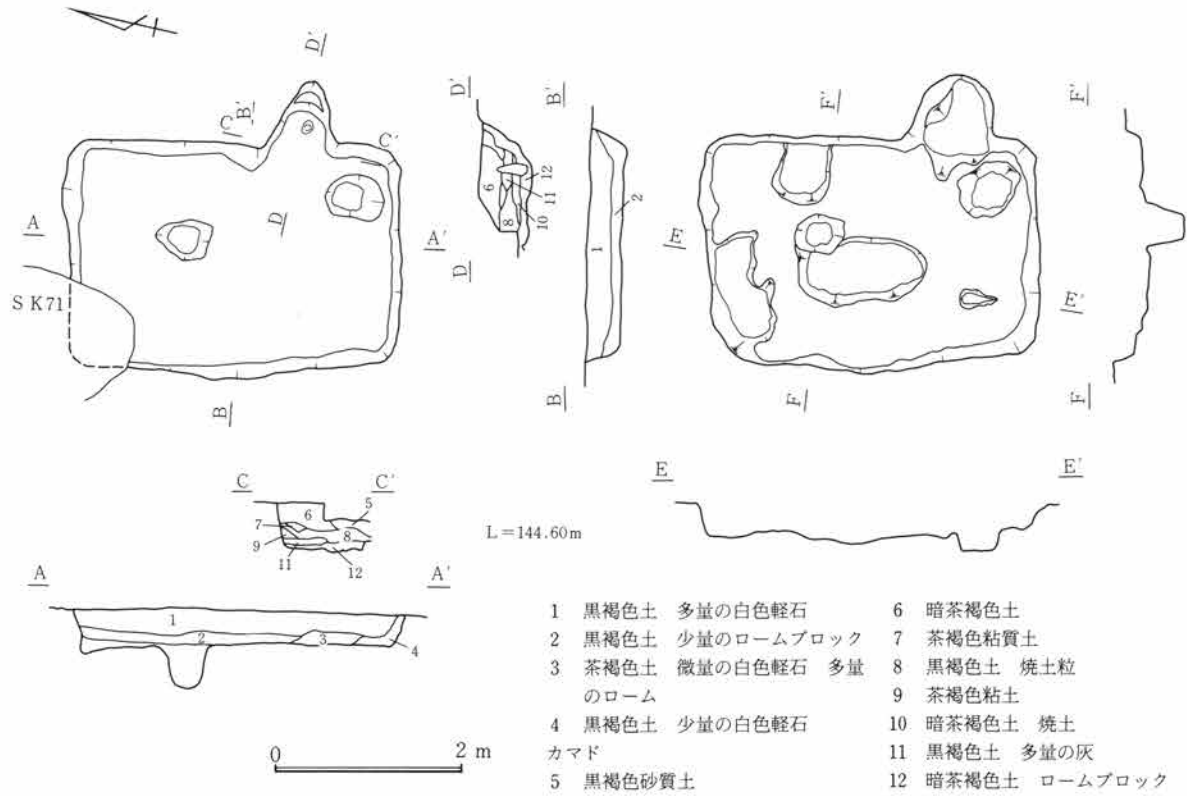
第3章 検出遺構・遺物

50m、面積8.72m²を測る。主軸方向は、N-81°-Eを指す。覆土は、自然堆積を呈し、5層に分けることができるが、大部分が類似した黒褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、31~41cmで平均35cmを測る。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、形態は、楕円形を呈し、規模は、径62×46cm、深度8cmの浅いものである。柱穴は、中央やや北よりに三角形に近い平面形態をし、径56×45cm、深度47cmのものが検出されたが、柱痕は不明であった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は欠落している。規模は、全長115cm、幅80cmを測る。焚口部の一部と煙道部は壁外に72cmのびる。焚口部には、灰層がみられ、煙道部への立ち上り際には、径12cm、高さ30cmの円柱状をした支脚が埋め込まれている。

掘り方は、床面より5~12cmほど掘り込まれている。床下の施設は、中央に楕円形で径135×67cm、深度10cmの大型のものと、東壁際に長方形で、65×12cm、深度3cm、北壁際に不整形で径115×50cm、深度12cmを測る土坑が検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 床下	11.8・10.0・3.8、7/8 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はヘラ削り。
2	須恵器 蓋 床下	—・—・—、1/10 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みを持ち、口唇部は折り曲げで直立する。

S J 40・50

本住居跡は、90～92H11～12グリッドに位置し、S D18、S J50と重複するが本遺構のほうが、S D18より古いが、S J50よりは新しい。平面形態は、ほぼ方形を呈し、規模は、東西4.08m・南北4.02m、面積10.52m²を測る。主軸方向は、N-85°-Eを指す。覆土は、自然堆積を呈し、大部分が黒褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は垂直に立ち上がり、壁高は、33～46cmで平均45cmを測る。壁高・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

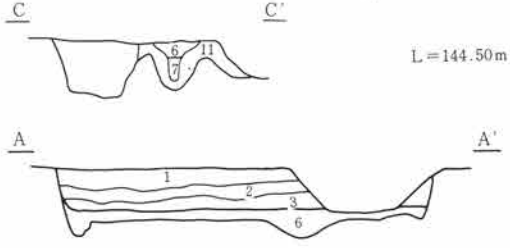
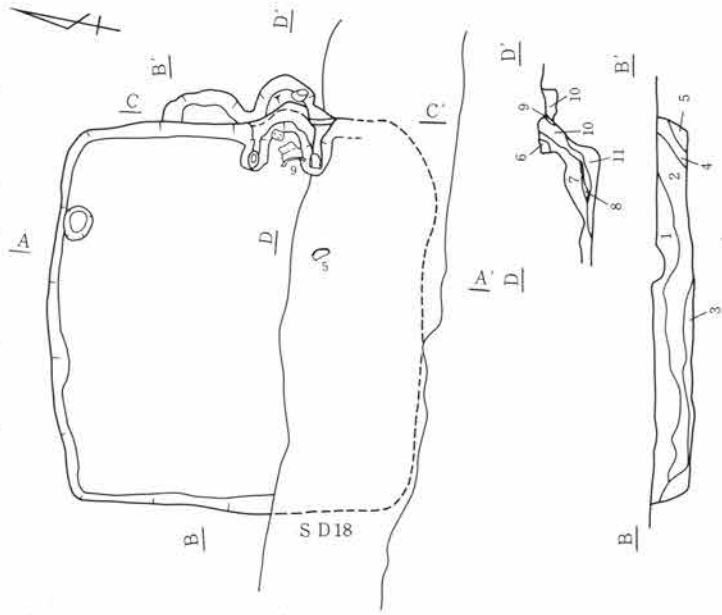
カマドは、東壁の中央やや南に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は良好な状態で残っている。規模は全長75cm、幅92cmを測り、焚口部から煙道部にかけては壁外に23cmのびる。袖部は、両袖部とも加工石が使用されている。

掘り方は、床面から3～12cmほど、掘り込まれている。床下の施設は、西壁よりに、不整形を呈し、径110×85cm、深度17cmのものと東壁よりに同じく不整形を呈し、径60×58cm、深度18cmの床下土壇が2基検出された。

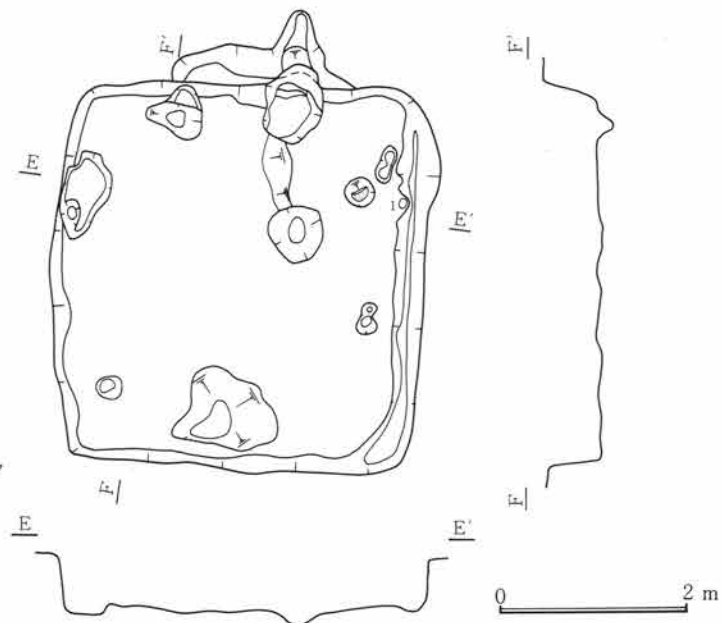
S J50は、大半がS J40と重複し、カマドの一部が残存するだけであった。

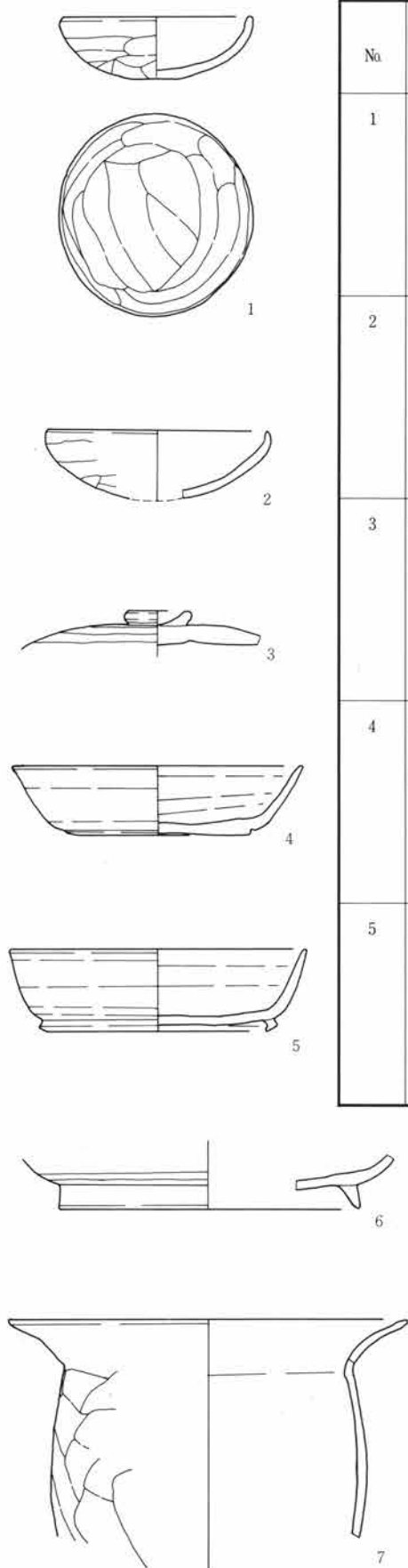
カマドは、東壁に位置し、焚口部の一部と煙道部が残存し、煙道部は壁外に45cmのびる。

- カマド
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック 暗褐色土ブロック
 - 7 暗褐色土 焼土 ロームブロック
 - 8 灰
 - 9 焼土
 - 10 暗褐色土 C軽石
 - 11 暗黄褐色土 多量のロームブロック



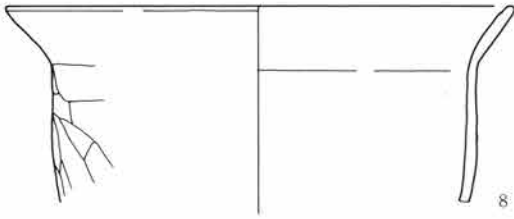
- 1 黒褐色土 多量の白色軽石
- 2 黒褐色土 白色軽石
- 3 黒褐色土 白色軽石 少量のロームブロック
- 4 黒色土 多量の白色軽石
- 5 暗褐色土 焼土 ロームブロック
- 6 黒褐色土 ロームブロック



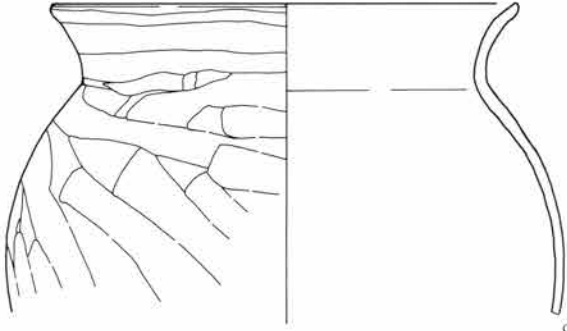


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下	11.2・10.0・3.7 完形 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部は1～2段の左方向へのヘラ削り。底部は不定方向ヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	13.2・—・— 1/8 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はヘラ削りが施されている。
3	須恵器 蓋 床下	—・3.8・— 1/3 粗砂粒 酸化焰 淡黄色	ロクロ左回転。鈕は輪状を呈し、天井部はゆるい丸みをもち、3分の2程度まで回転ヘラ削り。
4	須恵器 坏 床下	17.4・10.4・4.1 1/2 細砂粒・白色鉾物粒 還元焰 暗灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部はベタ高台状の周辺に凹線をめぐらし、回転ヘラ削り、中心部にヘラ切り痕がみられる。
5	須恵器 坏 床上3cm	19.6・14.8・4.9 1/2 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。高台は断面台形状を呈し、「ハ」の字状に開き、内側が折接する。底部は回転ヘラ削り。
6	須恵器 皿 覆土	—・18.0・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は断面三角形を呈し、やや開く。底部は回転ヘラ撫で。
7	土師器 甕 覆土	23.8・—・— 1/10 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるいふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部の上位は横方向ヘラ削り、下位は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部は横方向へのヘラ撫でが施されている。

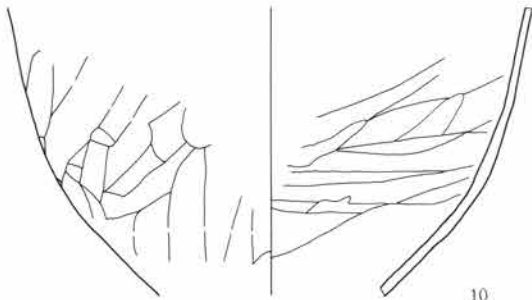
第4節 歴史時代



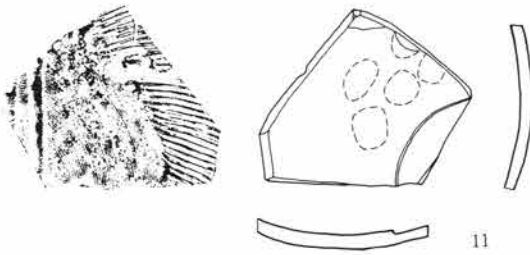
8



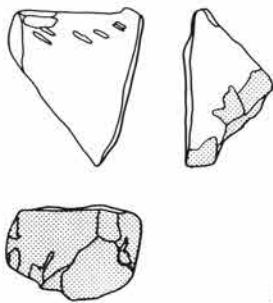
9



10



11



12

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
8	土師器 甕 床下	26.4・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は大きく開き、横撫で。胴部はへら削り。
9	土師器 甕 覆土 カマド底部 より22cm	24.8・—・— 1/3 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるいふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部の上位は横方向へら削り、下位は縦方向のへら削り。内面の胴部は横方向へのへら撫でが施されている。
10	土師器 甕 覆土	—・—・— 1/4 細砂粒 普通 橙色	外面はへら削り。内面はへら撫で。
11	須恵器 横瓶 床下	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉱物 粒 還元焰 灰黒色	横瓶の体部閉鎖部片、閉鎖部はカキ目。その周囲は平行叩き、内面は撫で、閉鎖粘土板接合時の指頭痕がみられる。外面には黒色の自然釉が付着している。
No.	種類	観察表掲載頁	
12	石製品 砥石	832	

S J 41

70

本住居跡は、121～123H-21～23グリッドに位置し、S D14と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、ほぼ長方形を呈し、規模は、東西3.42m・4.28m、面積13.88㎡を測る。主軸方向は、N-80°-Eを指す。覆土は、自然堆積を呈し、軽石を含んだ黒褐色土、暗褐色土で覆われている。

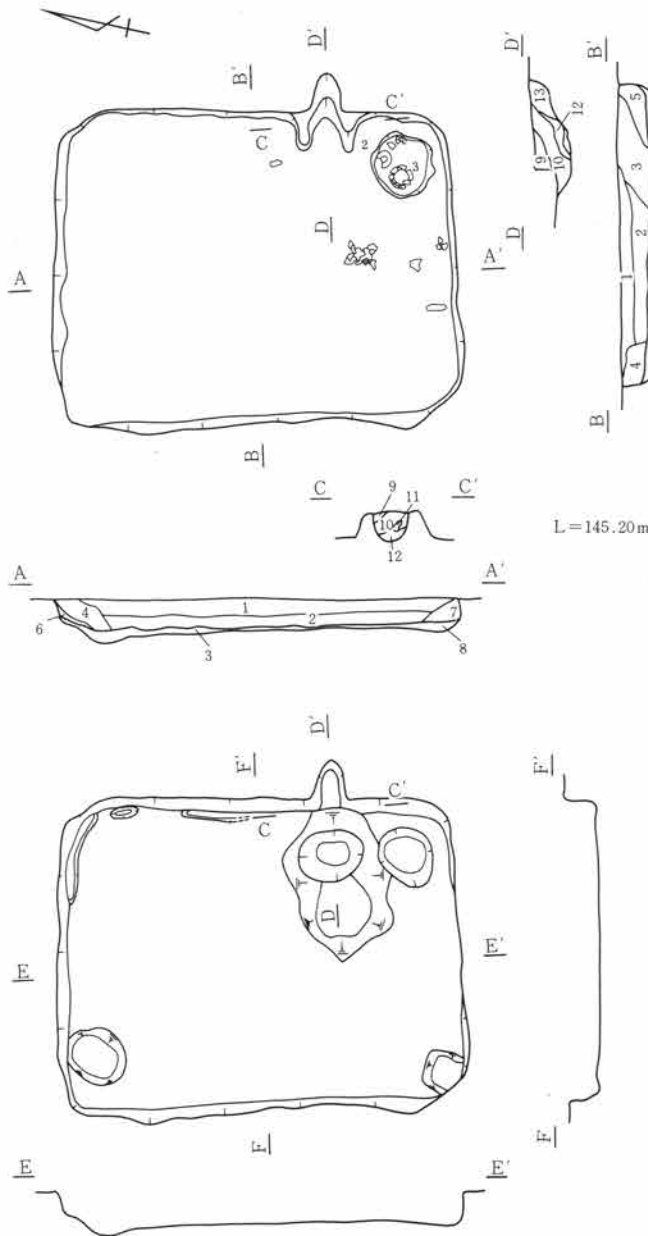
床面は、貼床が施されている。壁は、北壁がやや崩れているものの、他の壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、23～39cmで、平均29cmを測る。壁溝は、床面では検出できなかったが、床下で東壁のカマド北側と北壁の東よりの一部で確認された。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、形態はほぼ円形で、規模は、径70×65cm、深度22cmを測る。貯蔵穴内からは、2（須恵器壺）と3～5（土師器甕）が出土している。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、両袖部は良好な状態で残っている。規模は、全長82cm、幅70cmを測り、燃燒部から煙道部は壁外に40cmのびる。カマドの掘り方は、径150×

100cmの不整形を呈し、さらに燃燒部分では楕円形を呈し、径70×50cmの土壇状の落ち込みが掘られている。

掘り方は、床面より3～12cmと全体的に浅く、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は西南コーナー際と西北コーナー際には、隅丸方形で一辺40cm、深度5cm。楕円形で径70×57cm、深度5cmの浅い床下土壇が検出された。

出土遺物は、土師器の壺・甕・須恵器の壺、蓋と円礫の総数49点が出土したが、大多数は小片であった。また、出土位置は、貯蔵穴とその周辺に集中していた。

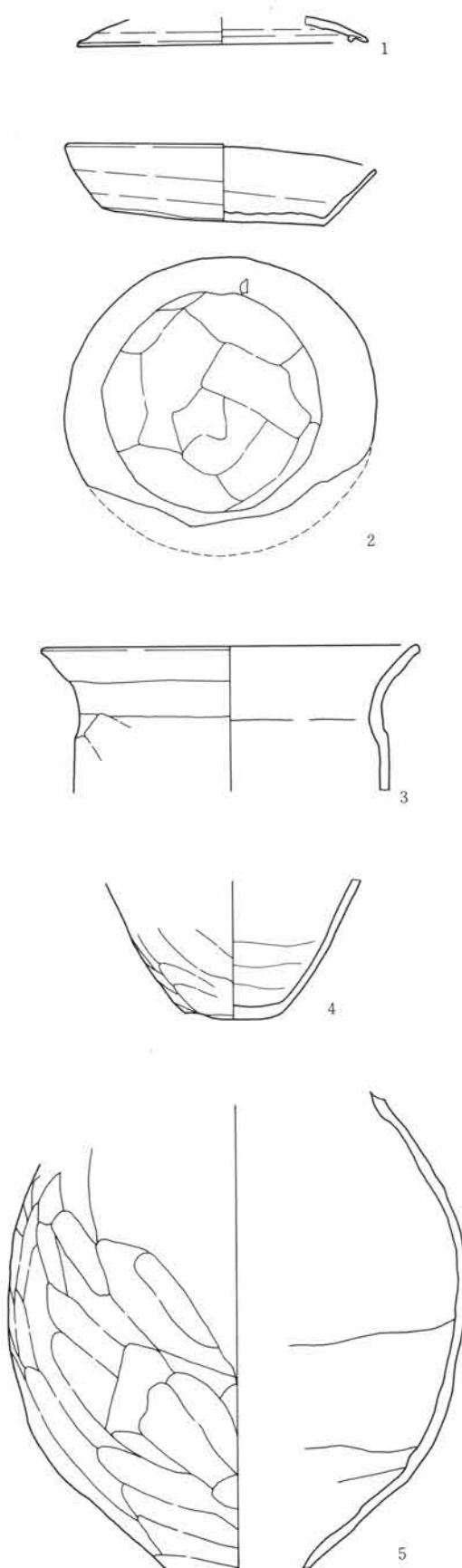


L=145.20m

- 1 黒褐色土 多量の軽石
- 2 黒褐色土 多量の軽石 ロームブロック
- 3 暗褐色土 多量の軽石
- 4 黒色土 多量の軽石 少量のロームブロック
- 5 暗褐色土 少量の軽石
- 6 暗茶褐色土 微量の軽石
- 7 黒色土 多量の軽石
- 8 黒褐色土 少量の軽石
- カマド
- 9 暗褐色土 多量の軽石
- 10 暗褐色土 多量の軽石 少量の焼土粒
- 11 褐色粘質土

0 2 m

第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みをもち、内面に身受けのカエリをもつ。
2	須恵器 杯 貯蔵穴底部 より16cm 貯蔵穴覆土	19.3・13.1・4.5 5/6 細砂粒・黒色鉱物 粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は直線的、底部は平底で、不定方向へのヘラ削りが施されている。焼成時の歪みが大きい。
3	土師器 甕 貯蔵穴底部 より14cm	22.0・—・— 1/8 細砂粒・粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部はやや外反し、胴部はあまりふくらまない。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
4	土師器 甕 貯蔵穴覆土	—・5.6・— 1/6 細砂粒 普通 にぶい黄橙色	底部から胴部下位にかけて、外面の底部、胴部ともヘラ削り。内面はヘラ撫で。
5	土師器 甕 貯蔵穴覆土	—・—・— 3/5 細砂粒 普通 にぶい橙色	胴部は大きなふくらみもち、最大径は27cmを測る。外面は斜め方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫でが施されている。

S J 42

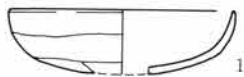
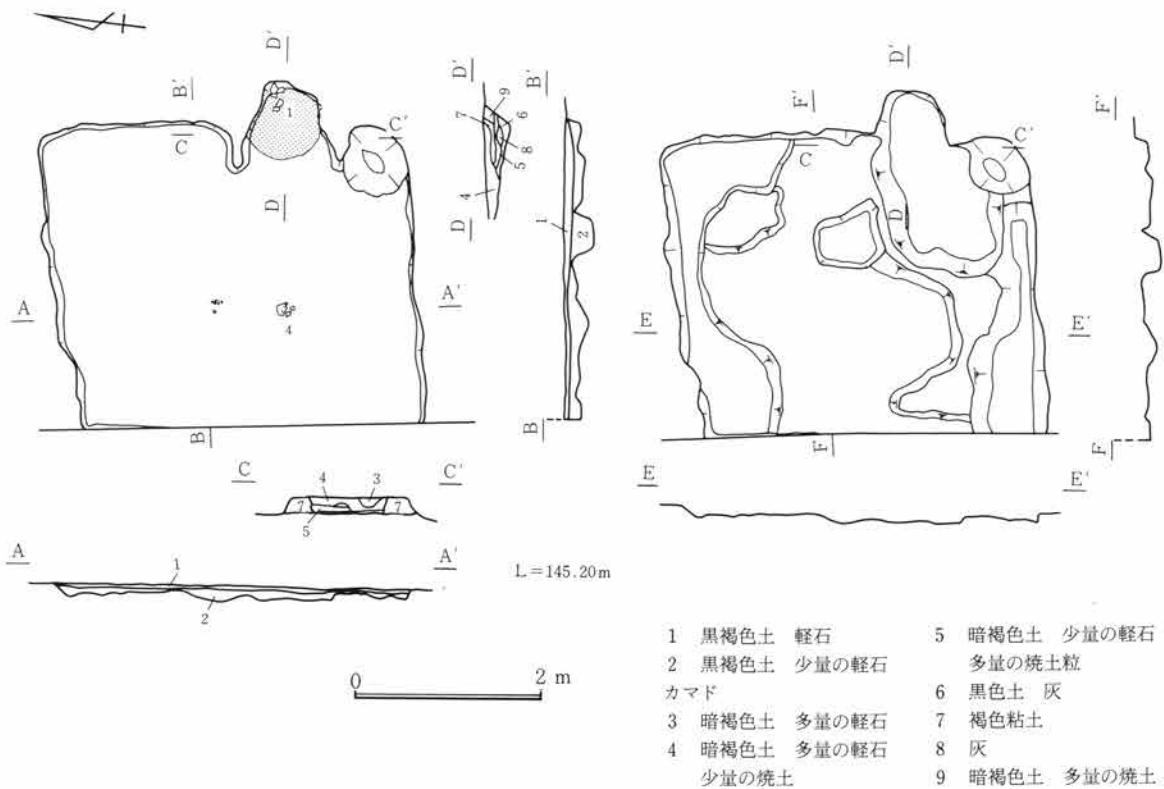
本住居跡は、122～124H-20～22グリッドに位置し、西壁は、調査区域外にのびる。平面形態は、ほぼ長方形を呈し、規模は、東西約3.30m・南北3.95m、面積は残存部分で12.15m²を測る。主軸方向は、N-78°-Eを指す。覆土は、確認面から床面までが浅いため、堆積状態等は不明であるが、黒褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、6～14cmを測り、平均9cmである。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は円形を呈し、規模は、径70×65cm、深度38cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも良好な状態ではないが残っている。規模は、全長100cm、幅140cmを測り、燃焼部から煙道部は壁外に43cmのびる。

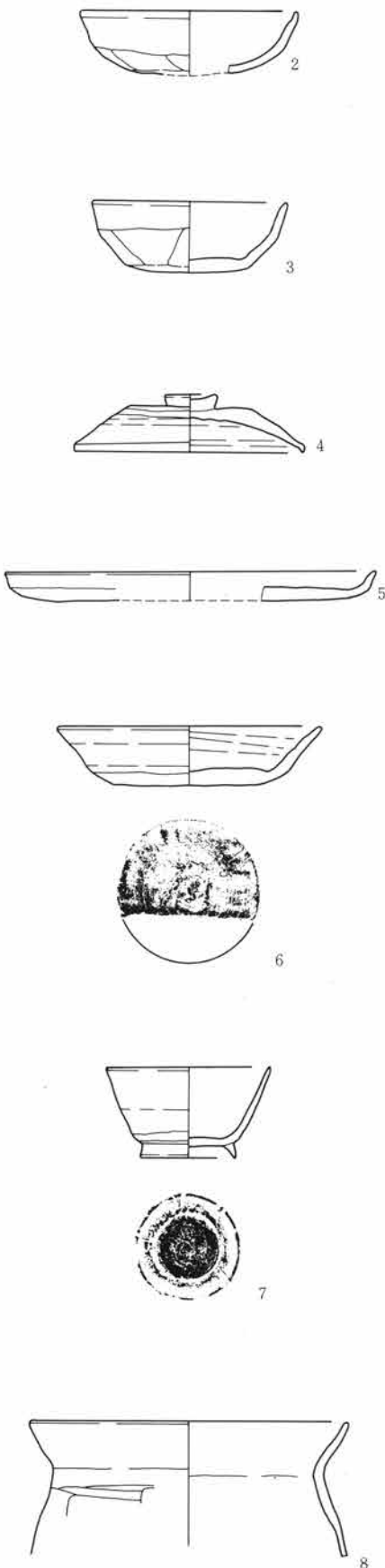
掘り方は、床面から5～10cmと全体的に浅く、凹凸が多くみられ、南壁際と北壁際には溝状の落ち込みがみられる。床下の施設は、中央やや東よりには台形状を呈し、70×65cm、深度8cmを測る床下土壇が検出された。

出土遺物は、確認面から床面までが浅かったが、土師器の坏・甕・須恵器の坏・埴・蓋・灰釉陶器の埴等多数出土している。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.0・9.6・3.3 2/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみで、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はヘラ削りが施されている。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 カマド 覆土	12.6・6.4・3.8 1/3 細砂粒・褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部はやや外反ぎみで口唇部は直立する。体部は大きく開く。口縁部は横撫で、体部は1段の横方向へのヘラ削り。底部もヘラ削り。
3	土師器 坏 カマド底部より15cm	11.4・7.2・4.1 1/3 細砂粒 普通 明褐色	口縁部は僅かに外反し、体部は直線的に開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は1段の横方向へのヘラ削り、底部は不定方向へのヘラ削りが施されている。
4	須恵器 蓋 床直	13.6・鈕3.1・3.4 4/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。鈕は扁平状で、天井部の中心部は水平、周辺部は直線的、口唇部は折り曲げて直立する。天井部の過半までは回転ヘラ削りが施されている。
5	土師器 皿 覆土	21.8・21.2・1.8 1/8 細砂粒 やや軟質 橙色	口縁部は外反し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
6	須恵器 坏 覆土	14.5・9.0・3.4 1/4 粗砂粒・細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては外反ぎみに開く。体部下位に1段の回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ削り。
7	須恵器 碗 カマド	9.6・5.9・5.4 5/6 粗砂粒・黒色鉱物粒・ 白色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的であまり開かない。高台は細身の断面三角形を呈す。底部は回転ヘラ削り。
8	土師器 壺 覆土	18.6・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。

S J 43

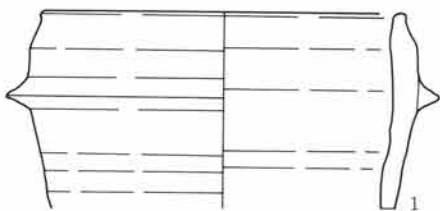
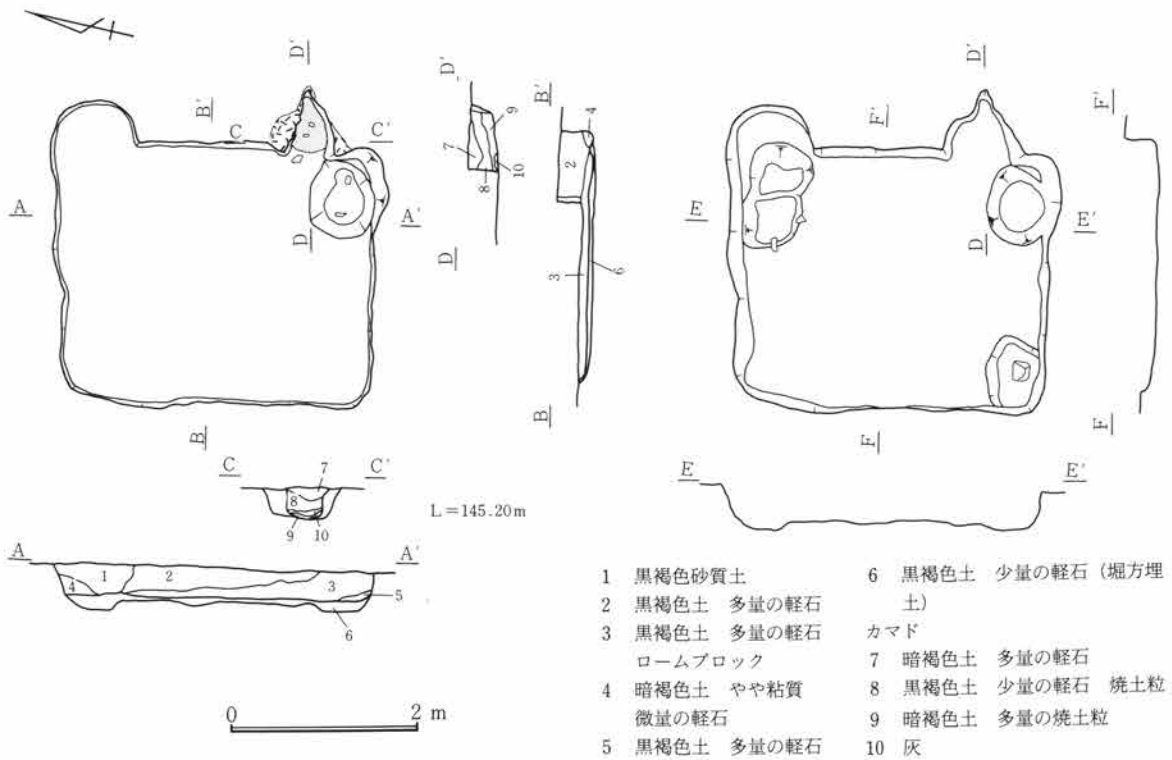
73

本住居跡は、118～119H—17～19グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、東壁の北側に半円形の張り出しをもつ長方形を呈す。規模は、張り出しを除いた部分で、東西2.80m・南北3.57m、張り出し部分は、半径45cm、面積9.80㎡を測る。主軸方向は、N—79°—Eを指す。覆土は、自然堆積を呈するが、北壁際に人為的な堆積がみられる。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、7～35cmを測る。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径78×70cm、深度15cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも割合と良好な状態で残っている。規模は、全長80cm、幅84cmを測り、焚口部の大部分と煙道部は壁外に62cmのびる。天井部と袖部は、褐色粘土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より6～10cmと全体的に浅く、北半分と南壁際で、凹凸が激しい。床下の施設は、張り出し部分の下には、楕円形を呈し、径110×65cm、深度8cmのものが、また、西南コーナー際には、楕円形を呈し、径74×52cm、深度12cmを測る床下土壇が検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 羽釜 覆土	19.4・ — ・ — 小片 細砂粒 還元焰 灰黄色	ロクロ回転方向不明。器壁はやや厚く、口縁部は直線的で口唇部は丸みもちやや内傾する。鏝は断面三角形を呈す。

S J 44

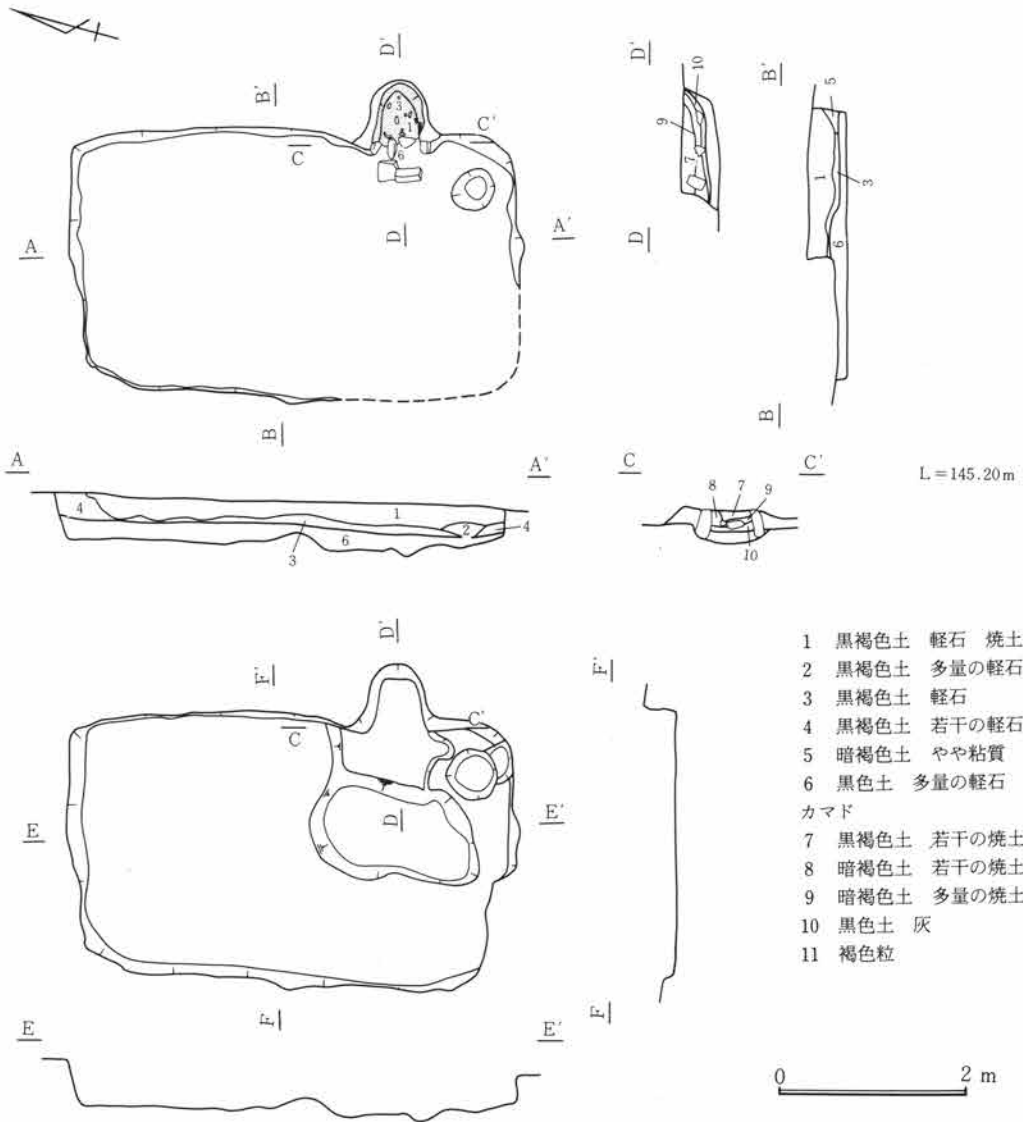
75

本住居跡は、117～118H-13～16グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、長方形を呈し、規模は、東西2.86m、南北4.79m、面積13.00㎡を測る。主軸方向は、N-75.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、大部分が黒褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、東半分では24～28cmを測るが、西半分は確認面が深かったため、壁高がほとんど残っていない。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、形態はほぼ円形を呈し、規模は45×43cm、深度22cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部も大部分が欠落している。規模は110×88cmを測り、煙道部は壁外に55cmのびる。天井部と両袖部には切石が使用されている。

掘り方は、床面から10～20cmほど掘られ、埋土は黒色土が埋められている。南壁よりにやや凹凸がみられるが、他の部分はほぼ平坦である。床下の施設は、カマドの西側に、楕円形を呈し、径182×108cm、深度11cmの浅い床下土壇が検出された。



第3章 検出遺構・遺物

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
	1 土師器 坏 カマド底部より12cm	11.7・9.0・3.2 3/5 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけてはあまり開かない。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
	2 土師器 坏 貯蔵穴底部より1cm	12.0・10.0・3.3 2/3 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直線的で、上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削りが施されている。
	3 土師器 坏 カマド底部より5cm	12.6・11.2・— 1/6 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は直線的でありあまり開かない。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
	4 土師器 坏 覆土	12.2・8.6・4.0 1/2 細砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り。
	5 須恵器 蓋 覆土	—・鈕4.2・— 1/6 細砂粒・黒色鈹物粒 還元焰 灰色	ログロ右回転。鈕は輪状を呈す。天井部の中心部は回転ヘラ削り。
	6 土師器 甕 カマド底部	20.6・—・— 小片 細砂粒・褐色鈹物粒 普通 明褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。
	7 土師器 甕 カマド底部	—・5.6・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい褐色	器壁は薄く、胴部は縦方向へのヘラ削り。底部もヘラ削り。

S J 45

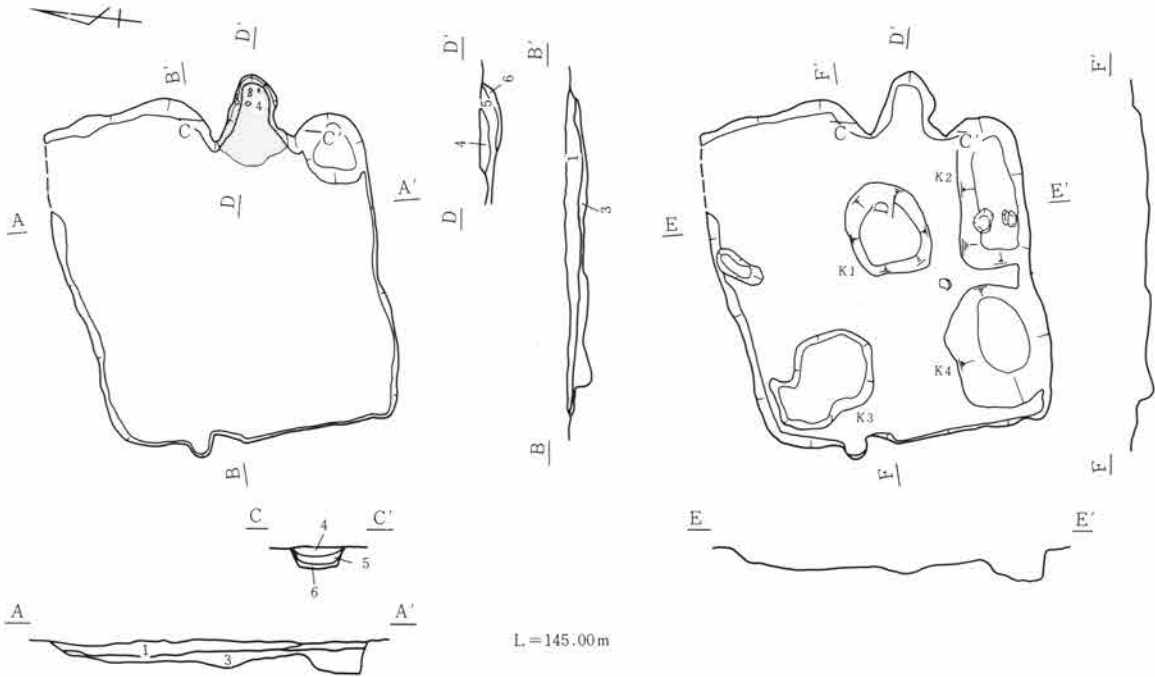
76

本住居跡は、118～120H-09～10グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、やや歪んだ長方形を呈し、規模は、3.70m・南北3.32m、面積11.06㎡を測る。主軸方向は、N-70°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が5～6cmと確認面から床面までが浅かったため不明である。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、形態はほぼ円形を呈し、規模は径70×65cm、深度20cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、焚口部の一部と掘り方が残る程度である。規模は、全長110cm、幅80cmを測り、煙道部は壁外に47cmのびる。

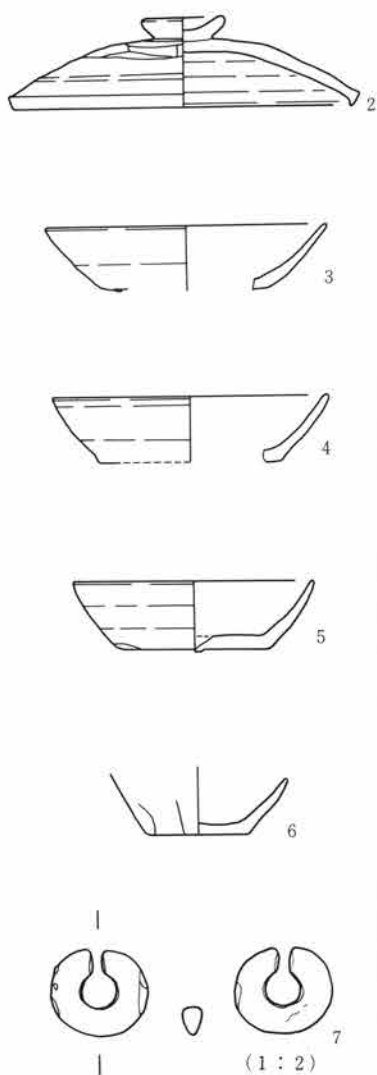
掘り方は、床面から5～10cmと浅い。埋土は、暗褐色土で埋められている。床下の施設には、床下土壇が4基検出され、形態・規模はK₁が楕円形で径140×74cm、深度14cm。K₂は楕円形で径140×74cm、深度12cm。K₃は不整形で径105×95cm、深度11cm。K₄は楕円形で径144×110cm、深度6cmを測る。



- カマド
- 1 黒褐色砂質土 白色軽石
 - 2 黒褐色砂質土 多量の白色軽石
 - 3 暗褐色土 少量の軽石
 - 4 暗褐色土 多量の軽石
 - 5 暗褐色土 多量の焼土粒
 - 6 灰



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 床下	15.0・3.5・4.0、小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。紐は扁平状。天井部はゆるい丸み をもち、口唇部は折り曲げて内傾する。天井部は 過半まで回転ヘラ削り。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴	
2	須恵器 蓋 カマド底部より10cm	18.0・鈕4.4・4.8 1/2 細砂粒・黒色鋳物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は扁平状。天井部はゆるい丸みをもち、口唇部は折り曲げて内傾する。天井部は過半まで回転ヘラ削り。	
3	須恵器 坏 カマド底部より12.5cm	14.8・8.8・— 1/10 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は極ゆるい丸みをもち開く。底部切り離し方法不明。	
4	須恵器 坏 カマド底部より7cm	14.6・9.8・— 小片 細砂粒・黒色鋳物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は極ゆるい丸みをもち開く。底部切り離し方法不明。	
5	須恵器 坏 カマド 覆土	13.6・8.0・3.7 1/6 黒色鋳物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。底部はヘラ切り後回転ヘラ撫で。	
6	土師器 甕 カマド底部より12.5cm 15.5cm 3.4cm	—・5.4・— 小片 細砂粒 普通 褐色	胴部、底部ともヘラ削り。	
No.	種類・器種・出土位置	計測値	重量	石材
7	石製品・玦状耳飾 覆土	長さ 2.2cm、幅 2.6cm 厚さ 0.6cm	4.4g	玉ずい

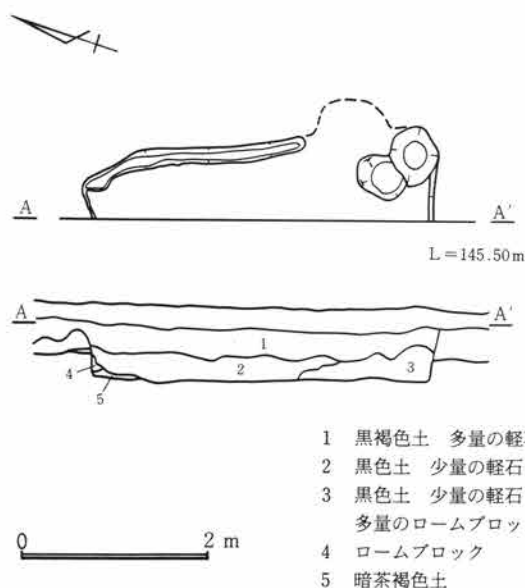
S J 47

78

本住居跡は、120~121H-08~09グリッドに位置し、その大半は、調査区域外にのびている。平面形態は、ほぼ長方形を呈すると推定される。規模は、南北3.76mを測り、主軸方向は、N-77.5°-Eを指す。

本住居跡は、層より掘り込まれ、壁は垂直に立ち上がり、壁高は、55~60cmを測る。残存部分では、東壁のカマドの北側に壁溝が周る。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、形態は楕円形を呈し、径65×60cm、深度26cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、悪く、僅かに焼土・粘土ブロックが残っている程度である。



- 1 黒褐色土 多量の軽石
- 2 黒色土 少量の軽石
- 3 黒色土 少量の軽石
- 4 多量のロームブロック
- 5 ロームブロック
- 暗茶褐色土

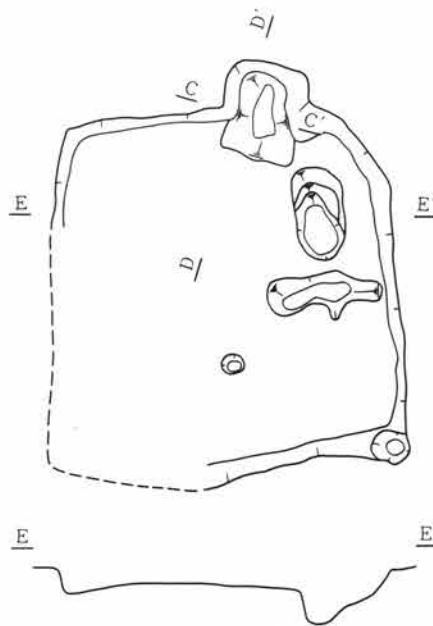
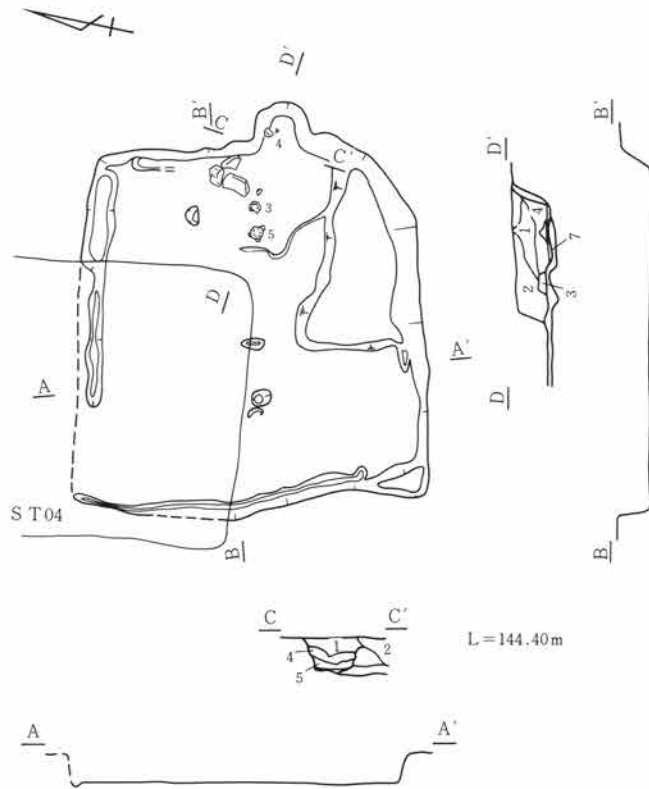
S J 49

本住居跡は、91~93H-06~08グリッドに位置し、ST04と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、東南コーナー部分がやや丸みをもつが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.89m、南北3.62m、面積13.76㎡を測り、主軸方向は、N-75°-Eを指す。覆土は、黒褐色土に覆われ、壁ぎわには廃棄時の地山の崩れがみられる。

床面は、東側の落ち込み部分を除き貼床が施されている。壁は、西壁の一部がやや斜めであるが、他はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、16~35cm、平均24cmを測る。壁溝は、東壁ではカマドの北側、北壁では東北コーナーから3分の2程度まで、西壁では西北コーナー手前まで周る。柱穴は、中央やや西よりに楕円形で径20×15cm、深度が18cmのピットが検出されたが、柱痕等は不明である。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し残存状態は、天井部・袖部とも崩壊しており、カマド左前に袖石と思われる石が出土している。規模は、全長105×幅75cmを測り、煙道部は壁外に45cmのびる。天井部は暗褐色粘質土で作られ、焚口部には、灰層がみられる。

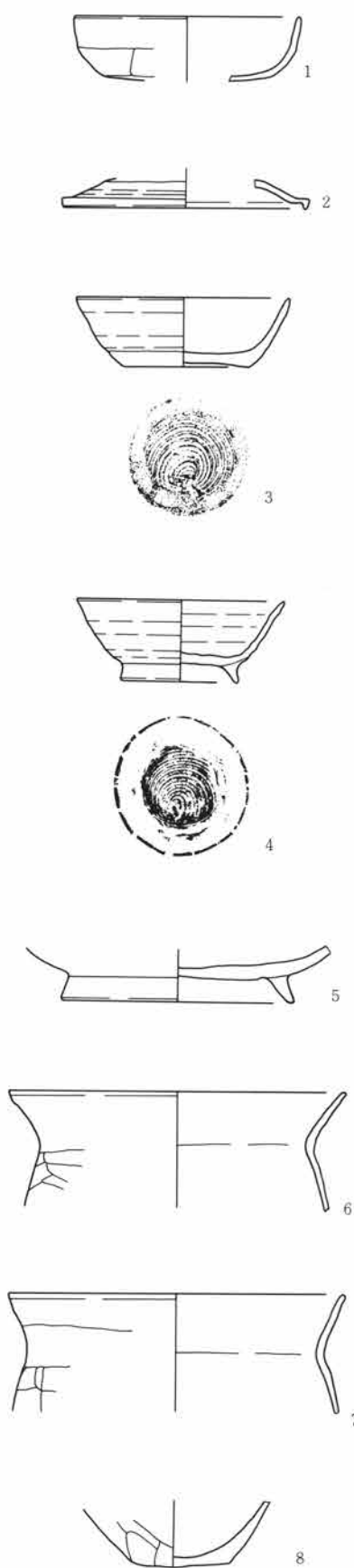
掘り方は、床面より8~10cmほど掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は床下土坑が2基検出された。



カマド

- 1 暗茶褐色土 軽石 焼土粒
- 2 暗茶褐色土 多量の軽石
- 3 暗褐色粘土
- 4 暗褐色粘質土 焼土ブロック 炭化物
- 5 茶褐色粘土
- 6 暗褐色土 軽石 多量の焼土粒
- 7 灰

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.4・10.0・— 1/6 細砂粒・褐色鉍物粒 やや軟質 明黄色	口縁部は直立し、体部は開く。口縁部は横撫で、体部は1段の左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削りが施されている。
2	須恵器 蓋 覆土	14.2・—・— 1/5 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みをもち、口唇部は折り曲げて直立する。
3	須恵器 坏 床上3cm	12.4・7.5・4.1 9/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ左回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもちあまり開かない。体部は最下位に1段の回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、周辺部に回転ヘラ削りが施されている。
4	須恵器 碗 カマド底部より20cm	12.2・7.4・4.8 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開き、高台は断面三角形でやや開く。底部は回転糸切り。
5	須恵器 盤 床直	—・13.0・— 底部のみ 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は足高で、断面三角形を呈し「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り後中心部の3分の1程度を残し回転ヘラ撫でが施されている。
6	土師器 甕 カマド 覆土	19.8・—・— 小片 細砂粒・円礫 普通 明褐色	口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
7	土師器 甕 覆土	19.6・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
8	土師器 甕 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	胴部・底部ともヘラ削り。

S J 51

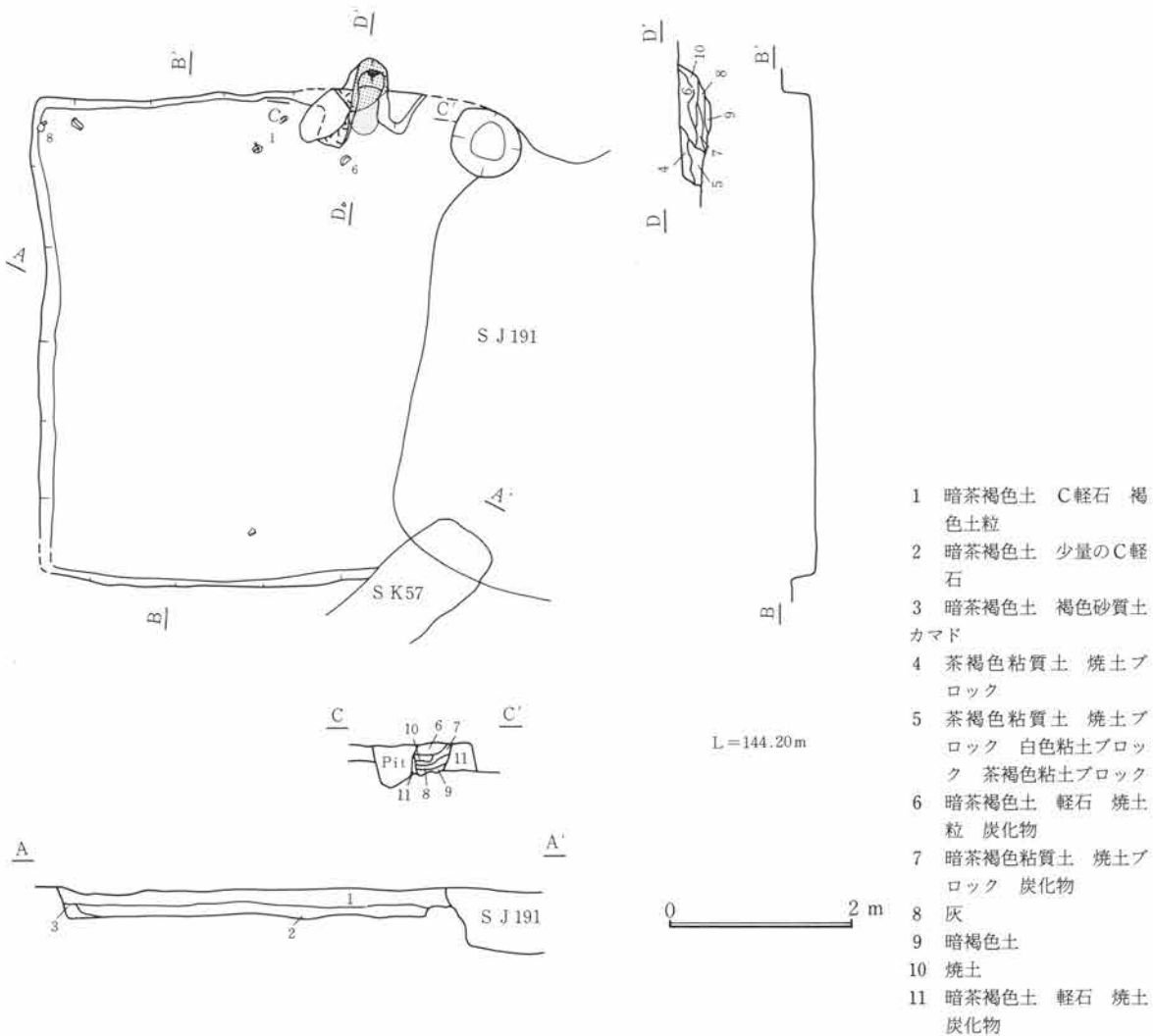
79

本住居跡は、91～94H-00～03グリッドに位置し、東側道本線部分G・H区の2区に分割されて調査された。本遺構は、S K 257、S J 191と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ方形を呈し、規模は、東西5.24m・南北5.30m、面積は、残存部分で22.33m²を測る。主軸方向は、N-53.5°-Eを指す。覆土は、自然堆積を呈し、3層に分けられるが、壁際を除いて類似した暗茶褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、19～39cmを測り、平均28cmである。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、形態はほぼ円形を呈し、規模は、径76×70cm、深度72cmを測る。

カマドは、東壁の中央よりやや南に位置し、残存状態は、天井部が崩落しており、左袖部分には本遺構より新しいピットの掘り込みがみられるが、他の部分は割合と良好な状態で残っている。規模は、全長100cm、幅92cmを測り、燃烧部は壁外に35cmのびる。天井部は、暗褐色粘土を使用して構築されている。

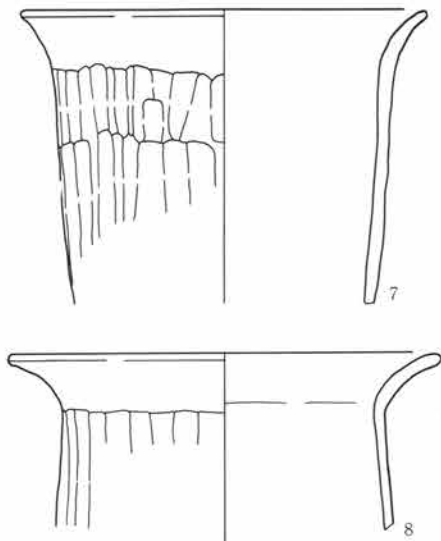
遺物は、カマド周辺から集中して出土しており、土師器の坏・高坏・甕、須恵器の坏・蓋・甕・長頸壺など72点が出土しているが、その内土師器の坏が59点と全体の82%を占めている。



第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上26cm、34 cm	11.6・10.7・3.6 完形 細砂粒・垂角礫・褐色 鉍物粒 軟質 橙色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
2	土師器 坏 貯蔵穴底部より20cm	12.4・11.4・4.3 完形 細砂粒・褐色鉍物粒 軟質 橙色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	10.6・9.8・3.5 2/5 細砂粒・円礫 やや軟質 橙色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
4	土師器 坏 覆土	10.4・9.8・2.9 2/5 細砂粒 やや軟質 橙色	口縁部は外反し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
5	土師器 坏 覆土	11.2・10.6・3.3 3/5 細砂粒・垂角礫 普通 橙色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
6	土師器 坏 カマド 床直	11.2・10.1・3.6 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。



7	土師器 甕 床下 床下21cm	21.2・ - ・ - 1/4 粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は大きく外反し、胴部上位は直線的。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。
8	土師器 甕 床上2cm	22.6・ - ・ - 1/10 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は大きく外反し、胴部上位は直線的。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。

S J 52

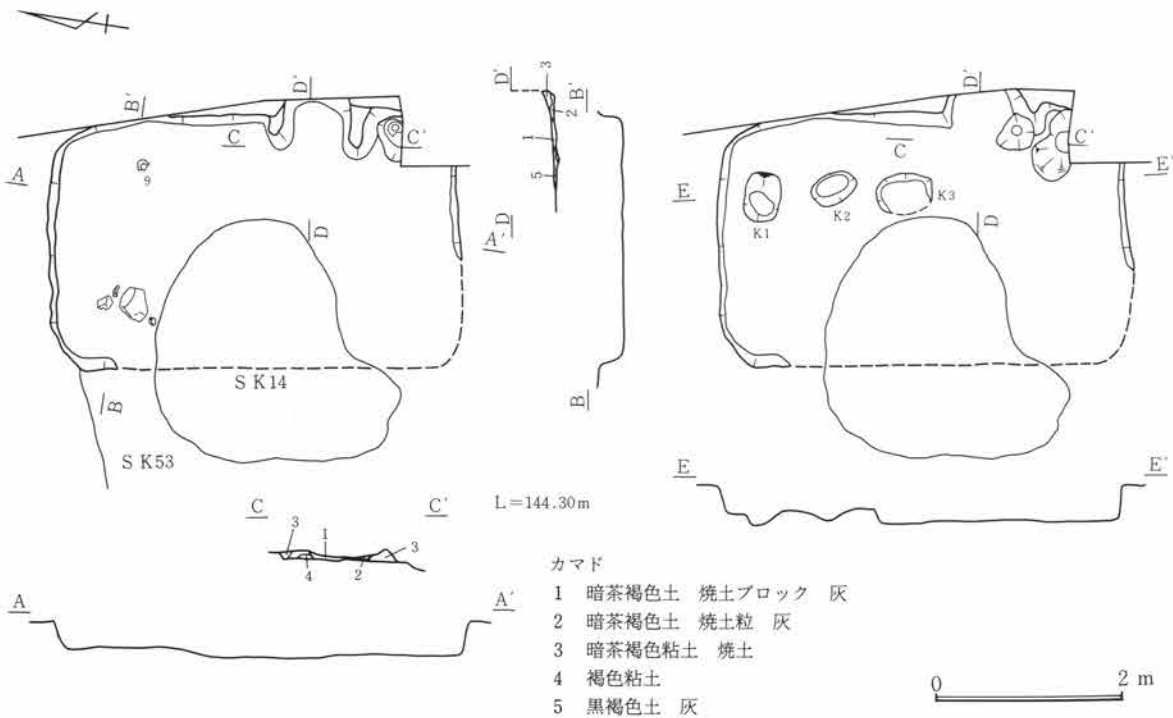
80

本住居跡は、86～87H03～05グリッドに位置し、S K14、S J 53と重複するが、新旧関係は、S K14より本遺構のほうが古く、S J 53より新しい。平面形態は、長方形を呈し、規模は、東西2.68m、南北4.34m、面積は、推定で11.05m²を測る。主軸方向は、N-82°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、25～34cm、平均29cmを測る。貯蔵穴は、カマドの南、東南隅に位置し、半分は調査区域外にのびるが、形態は、楕円形を呈し、規模は、径80×42cm、深度14cmを測る。貯蔵穴からは10の須恵器の坏が出土している。

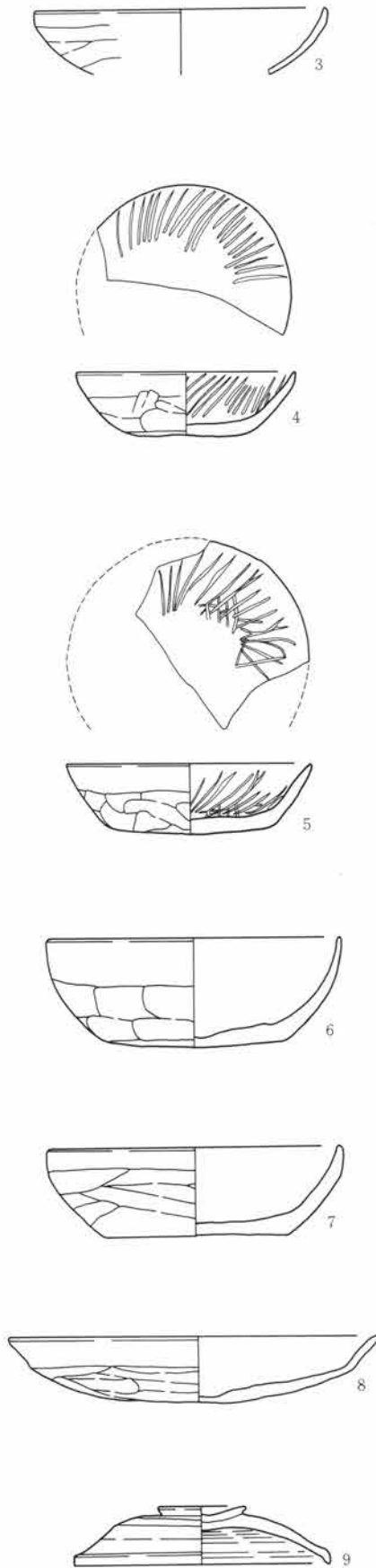
カマドは、東壁の南よりに位置し、煙道部は調査区域外にのびる。残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも割合と良好な状態で残っている。規模は、全長は現状で62cm、幅は120cmを測る。天井部、袖部は、暗茶褐色粘土で構築されている。

掘り方は、床面から2～8cmほど掘りこまれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、北半分に南北に並んで床下土壇が3基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径58×38cm、深度13cm。K₂は楕円形で径47×31cm、深度9cm。K₃は楕円形で径57×40cm、深度3cmを測る。



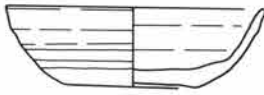
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.3・10.6・3.5 3/5 細砂粒 普通、橙色	口縁部はゆるい丸みをもつ。底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	13.0・12.8・—、1/10 細砂粒 普通、明褐色	口縁部は直立ぎみ、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はベラ削り。

第3章 検出遺構・遺物

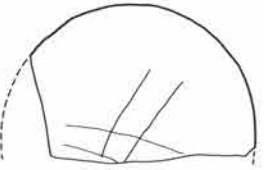


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 坏 覆土	17.0・—・— 1/10 細砂粒・雲母 普通 明褐色	口縁部は内湾し、横撫で。体部は左方向へのへら削り。
4	土師器 坏 床上16cm	12.9・7.8・3.8 2/5 細砂粒・褐色鉱物粒 軟質 浅黄色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部上半は指撫で、下半は左方向へのへら削り。底部はへら削り。内面の体部は、斜放射状暗文が施されている。
5	土師器 坏 覆土	14.4・9.8・3.2 1/3 細砂粒・雲母・褐色鉱物粒 普通 明褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部は左方向へのへら削り。底部はへら削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されているが、部分的に逆の斜放射状暗文が施され、斜格子目状をしている。
6	土師器 碗 覆土	17.0・11.0・6.4 1/2 粗砂粒 普通 明褐色	口縁部は内湾し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのへら削り。底部はへら削りが施されている。
7	土師器 碗 覆土	17.2・10.8・5.2 1/4 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのへら削り。底部はへら削りが施されている。
8	土師器 皿 覆土	21.8・19.3・3.9 3/5 細砂粒・雲母 褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部との間に弱い稜をもつ。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はへら削り。
9	須恵器 蓋 床上8cm	15.1・鈕5.2・3.4 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井部は直線的。口唇部は折り曲げで直立する。天井部の2分の1程度は回転へら削り。

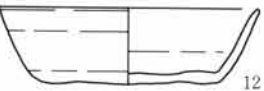
第4節 歴史時代



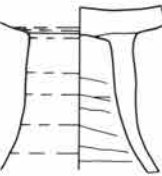
10



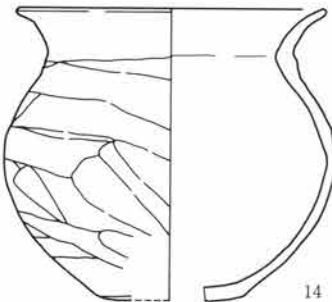
11



12



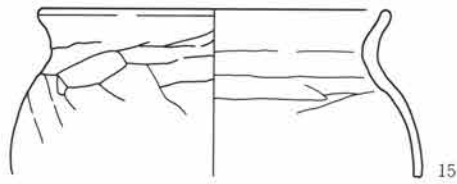
13



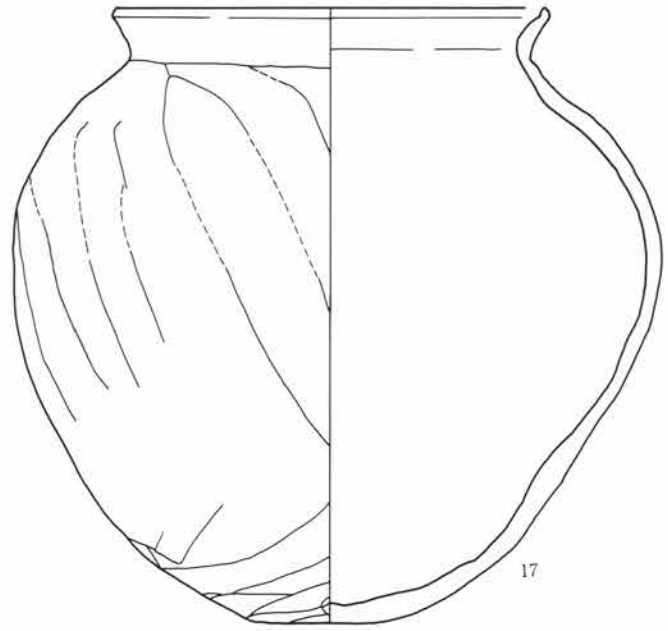
14

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
10	須恵器 坏 貯蔵穴	13.8・6.8・3.7 9/10 粗砂粒・白色鉍物粒・ 黒色鉍物粒 還元焰 暗青灰色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち開き、3 段の回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ削りが 施されている。
11	須恵器 坏 覆土	13.4・8.3・3.5 1/2 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部は直線的に開く。底部 は回転ヘラ切り。内面底部に「井」の字形 のヘラ描きがみられる。
12	須恵器 坏 床上29cm	13.9・9.2・4.0 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては 直線的。底部はヘラ切り。
13	須恵器 高坏 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 明青灰色	高坏脚部、ロクロ右回転。器壁は厚い。
14	土師器 甕 覆土	16.2・7.6・15.4 1/4 細砂粒・雲母 普通 明褐色	口縁部は外反し、胴部は球状の丸みをもつ。 底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、 胴部の上半は横方向のヘラ削り、下半はや や斜めのヘラ削りが施されている。

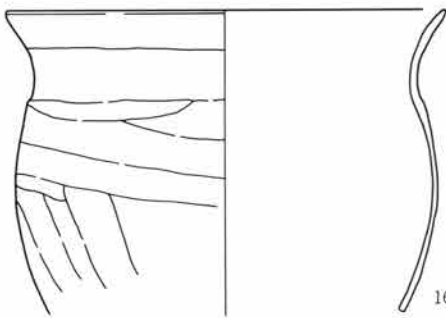
第3章 検出遺構・遺物



15



17



16



18

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
15	土師器 甕 床上23cm	18.0・—・— 1/10 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 明褐色	口縁部は直線的でやや開き、胴部は球状の丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向ヘラ削り。内面の胴部は横方向へのヘラ撫でが施されている。
16	土師器 甕 覆土	23.4・—・— 1/10 細砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は外反し、胴部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部の上位は横方向へのヘラ削り、中位は縦方向へのヘラ削り。
17	土師器 甕 覆土	23.0・6.3・32.5 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は大きく開き、口唇端部は丸みをもち内側に肥厚する。胴部上半は球状の丸みをもち、下半は底部に向けてつぼまり、底部は小径である。外面の口縁部は横撫で、胴部は斜方向へのヘラ削りで、底部周辺では横方向のヘラ削り。底部もヘラ削り。内面胴部はヘラ撫でが施されている。
18	土師器 甕 覆土	—・13.0・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	胴部は大きく開く。外面はヘラ削り。内面はヘラ撫で。

S J 53・54

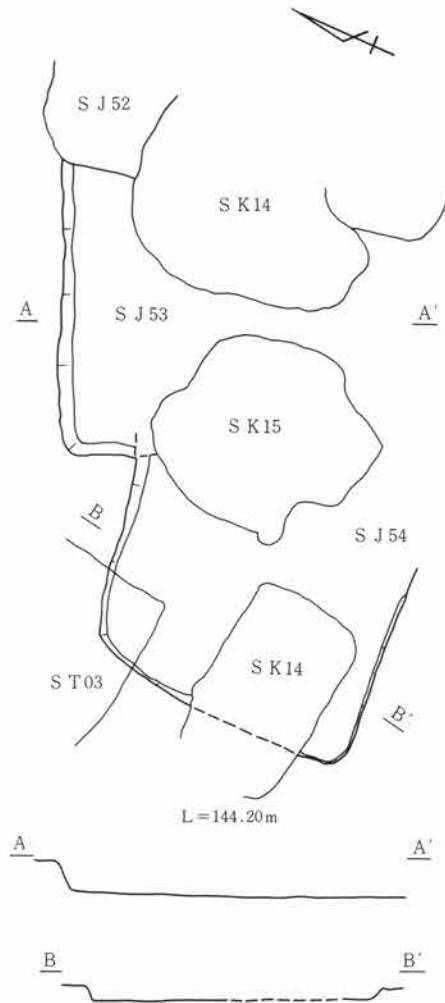
S J 53は、87～89H—03～05グリッドに位置し、S K 14・S K 15、S J 52・S J 54と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうがS K 14・S K 15、S J 52より古く、S J 54との新旧関係は不明である。残存状態は、西北コーナーから北壁にかけての部分が残る程度のため、規模は、計測できない。平面は、長方形を呈すると推定される。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、22～25cm、平均27cmを測る。残存部分では、壁高・柱穴・貯蔵穴・カマド等は、検出されなかった。

S J 54は、88～90H—02～05グリッドに位置し、S T 03、S K 15・S K 16、S J 53と重複するが、本遺構は、S T 03、S K 15・S K 16より古く、S J 53との新旧関係は不明である。

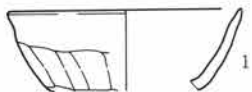
平面形態は、ほぼ長方形を呈し、規模は、東西は不明であるが、南北3.05mを測る。主軸方向は、N—92.5°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、7～25cmを測り、平均12cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴・カマド等は検出されなかった。

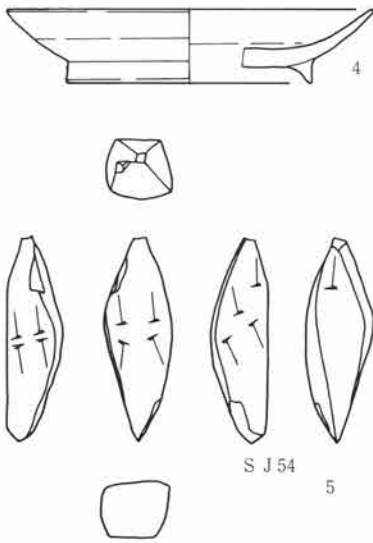


0 2 m

S J 53

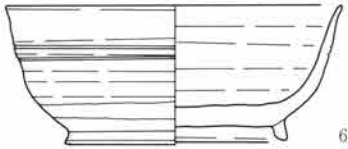


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.3・8.5・— 1/8 細砂粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。口縁部は横撫で、体部は1段の横方向へのヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	13.4・10.1・— 1/8 細砂粒・褐色鉱物粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。外面の口縁部は横撫で、体部は1段の左方向へのヘラ削り、底部はヘラ削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されている。
3	土師器 坏 覆土	14.0・—・— 1/8 細砂粒・褐色鉱物粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。外面の口縁部は横撫で、体部はヘラ削りが施されているが磨耗のため単位不明。内面の体部には斜放射状暗文が施されている。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 皿 覆土	19.4・10.4・3.9 1/4 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかえてはゆるい丸みをもち、高台は断面三角形で直立する。底部は回転ヘラ撫で。
No	種 類	観察表掲載頁	
5	石製品 砥石	832	

S J 54



1	須恵器 碗 貯蔵穴	17.8・11.6・7.4 完形 粗砂粒・黒色鉱物粒・ 角礫(3~5mm) 還元焰 灰色	ロクロ右回転。佐波理碗と同形態。口縁部は外反し、体部は腰が張り、中位に2条の凹線がまわる。高台は断面四角形を呈し、あまり開かない。底部は回転糸切り後中心部の2分の1程度を残し回転ヘラ削りが施されている。
---	-----------------	---	---

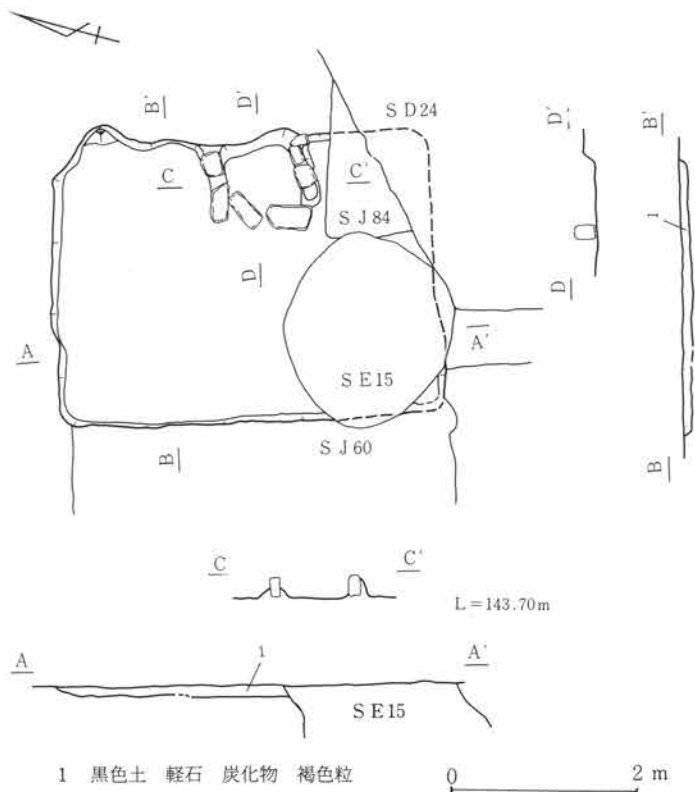
S J 59

83

本住居跡は、81~83G-28~31グリッドに位置し、SE15、SD24、S J 84・S J 60と重複するが、新旧関係は本遺構のほうが、SE15、SD24、S J 84より古く、S J 60より新しい。平面形態は、長方形を呈し、規模は、東西2.90m・南北4.09m、面積は、推定で11.49m²を測る。主軸方向は、N-72.5°-Eを指す。覆土は、確認面から床面まで浅かったため堆積状態は、確認できなかった。

床面は、貼床が施されている。壁は、確認面から床面までが浅かったため状態については、不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

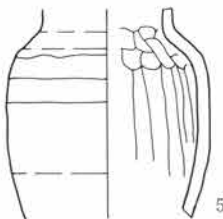
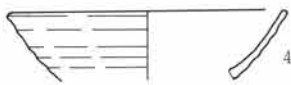
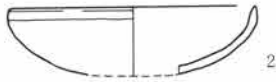
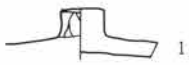
カマドは、東壁のほぼ中央に位置し規模は、全長105cm、幅116cmを測る。煙道部は、壁外にのびるが、大部分は



確認面より上に存在するため確認できなかった。両袖部・天井部には、角柱状の加工石を使用している。

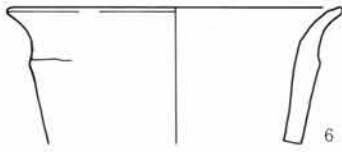
掘り方は、床面より2～8cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、検出されなかった。

出土遺物は、土師器の坏・蓋・甕や須恵器の坏・蓋・甕・瓶および銅製の巡方・鉈尾が出土している。土器の総数は、220点出土しているが、実測できた遺物は、6点と少ない。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 蓋 覆土	—・鈕2.2・— 細砂粒・雲母・褐色鉍 物粒 普通 にぶい橙色	鈕は円筒状を呈し、周辺はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	13.2・—・— 1/6 粗砂粒・石英・円礫 普通 明褐色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は磨耗のため不明。
3	須恵器 蓋 覆土	16.2・—・— 1/8 細砂粒・白色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の過半まで回転ヘラ削り。
4	須恵器 碗 覆土	14.6・—・— 1/6 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開く。内面に重ね焼痕がみられる。
5	須恵器 瓶子 覆土	—・—・— 1/6 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。胴部はゆるい丸みをもつ。外面の胴部上位には2段の回転ヘラ削り。内面の胴部には指頭による撫でが施されている。

第3章 検出遺構・遺物



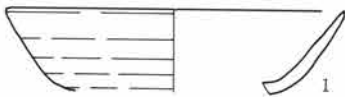
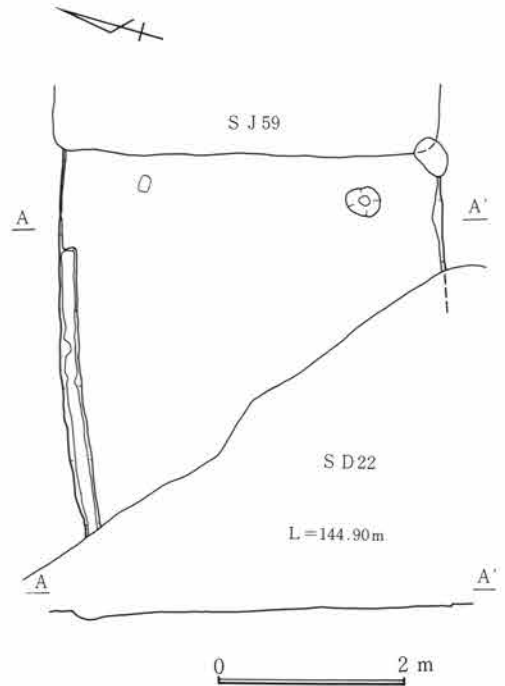
7・8 (1:2)

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
6	土師器 鉢 覆土	17.6・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は外反し、横撫で、体部は縦方向へのへら削り。
No	種 類	観察表掲載頁	
7	銅製品 巡方	895	
8	銅製品 鉞尾	895	

S J 60

本住居跡は、82～84G-28～30グリッドに位置し、SD22、S J 59と重複するが、新旧関係は本遺構のほうが古い。平面形態は、東西の壁が残存しないため明確ではないが、長方形を呈すると推測される。規模は、南北4.10mを測る。主軸方向は、N-58°-Eを指すと推測される。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は壁高が2～3cmと確認面から床面までが浅いため状態は不明である。壁溝は、北壁の一部にみられ、幅17～20cm、深度2～3cmを測る。柱穴は、東南部分に1本検出され、形態は楕円形を呈し、径37×30cm、深度23cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床直	17.8・—・— 小片 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。
2	須恵器 坏 覆土	—・10.6・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部は回転へら削り。

S J 61

85

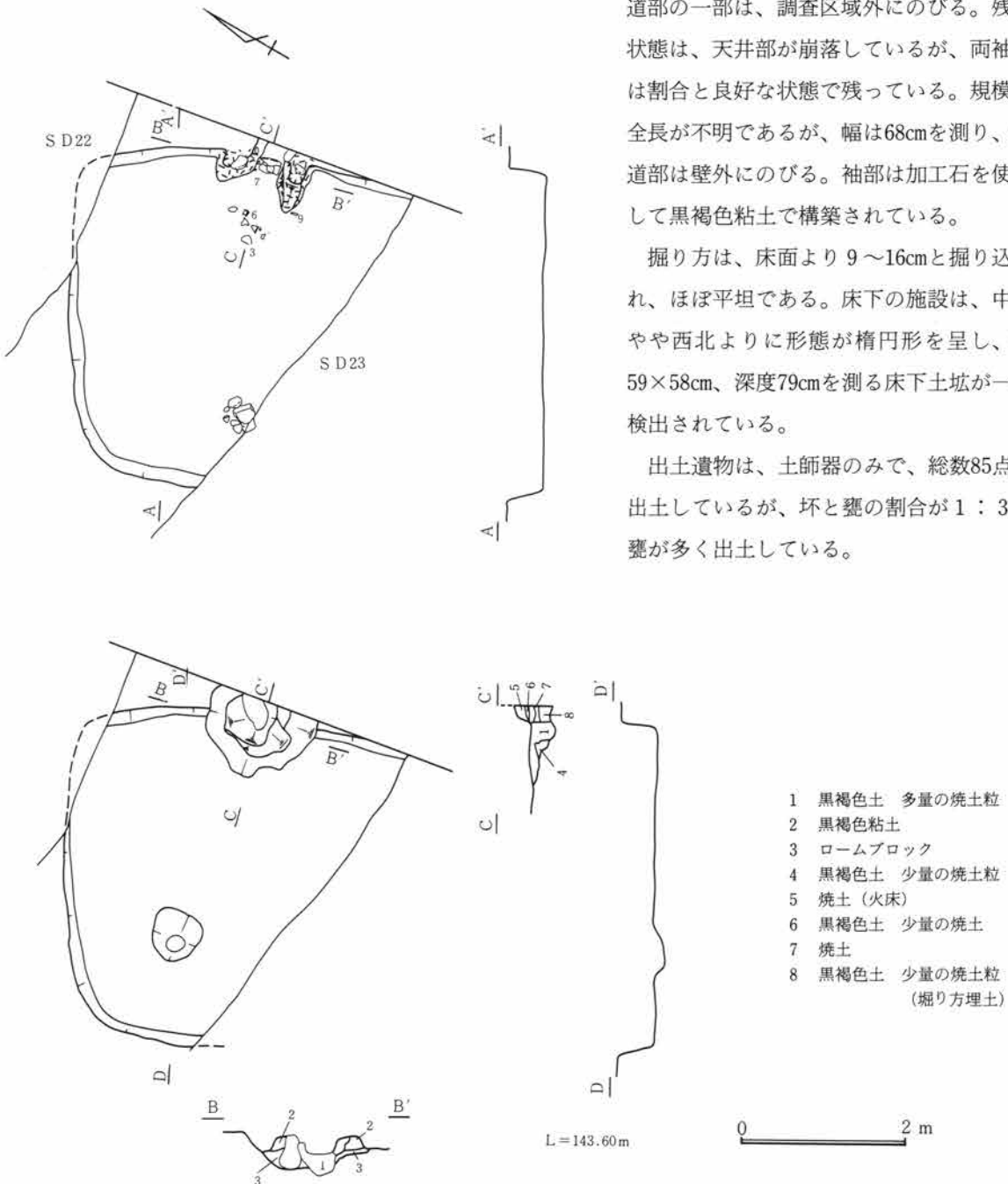
本住居跡は、78～80G-24～26グリッドに位置し、S D22・S D23と重複するが、新旧関係は本遺構のほうが古い。本遺構は、東北コーナーをS D22、東南コーナーから西壁の中央部分にかけてはS D23によって切られているため詳細は不明であるが、平面形態は、隅丸方形に近い形態を呈すると推定され、規模は、東西4.04mを測る。主軸方向は、N-70.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、8～30cmを測り、平均23cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、煙道部の一部は、調査区域外にのびる。残存状態は、天井部が崩落しているが、両袖部は割合と良好な状態で残っている。規模は全長が不明であるが、幅は68cmを測り、煙道部は壁外にのびる。袖部は加工石を使用して黒褐色粘土で構築されている。

掘り方は、床面より9～16cmと掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、中央やや西北よりに形態が楕円形を呈し、径59×58cm、深度79cmを測る床下土壇が一基検出されている。

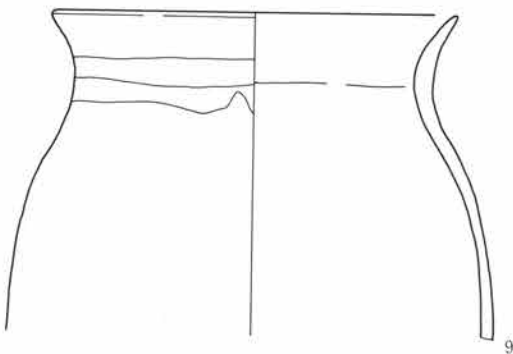
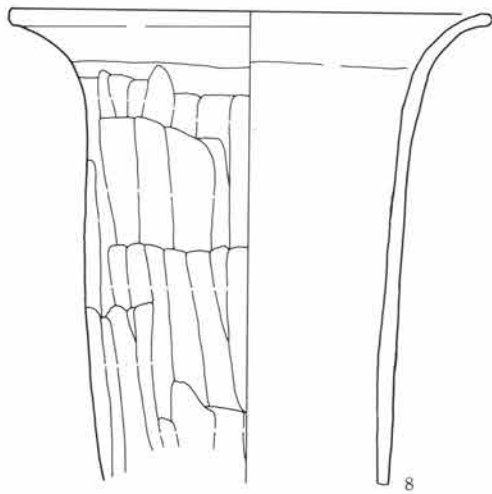
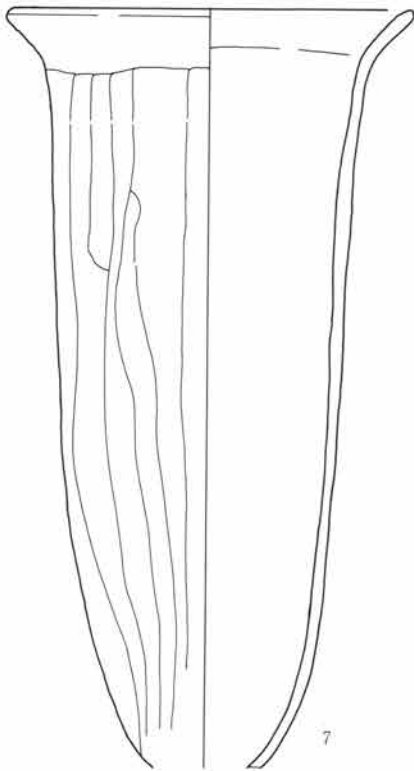
出土遺物は、土師器のみで、総数85点が出土しているが、坏と甕の割合が1：3と甕が多く出土している。



第3章 検出遺構・遺物

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上10cm	10.4・10.2・3.7 7/8 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部の中心部は不定方向へのヘラ削り。その周辺は指撫で。
2	土師器 坏 カマド 覆土	11.2・10.2・— 1/8 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部は丸底を呈す。口縁部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床直	15.4・11.6・5.4 1/2 細砂粒・褐色鉾物粒・ 角礫 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口唇部は横撫で、口唇部下から底部にかけてはヘラ削り。
4	土師器 甕 床上4cm	18.1・—・— 1/6 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は直線的に開き、胴部はゆるいふくらみをもつ。口縁部は横撫で。胴部の外面は縦方向へのヘラ削り、内面はヘラ撫で。
5	土師器 甕 床上14cm	14.8・—・— 1/8 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は外反し、胴部は球状の丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は斜めのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
6	土師器 甕 床直	20.4・—・— 1/10 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	口縁部はやや外反し、横撫で、胴部は右方向へのヘラ削り。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
7	土師器 甕 カマド底部 より27cm	21.6・—・— 9/10 粗砂粒・褐色鉍 物粒・白色鉍物 粒 普通 明赤褐色 にぶい黄褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は上 位から中位にかけては直線的。口 縁部は横撫で、胴部は頸部から底 部にかけて直線的なへら削り。
8	土師器 甕 覆土	25.4・—・— 1/3 粗砂粒・白色鉍 物粒・褐色鉍物 粒 普通 黄橙色	口縁部は外反し、胴部は直線的。 口縁部は横撫で、胴部は縦方向へ のへら削り。
9	土師器 甕 床直	21.6・—・— 1/6 細砂粒・雲母・ 褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	口縁部はやや外反し、胴部は大き くふくらむ。口縁部は横撫で。胴 部は剝離のため不明。

S J 62・63

S J 62は、78～80G-13～15グリッドに位置し、S J 63・S J 110、S B 15と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが、S J 63・S J 110より新しく、S B 15との新旧関係は不明である。平面形態は、長方形を呈すが、東壁は直線ではなくカマドの両側でくい違いがみられる。規模は、東西2.72m・南北4.27m、面積10.80m²を測る。主軸方向は、N-75°-Eを指す。覆土は、自然堆積を呈し、大部分は暗褐色土で覆われている。

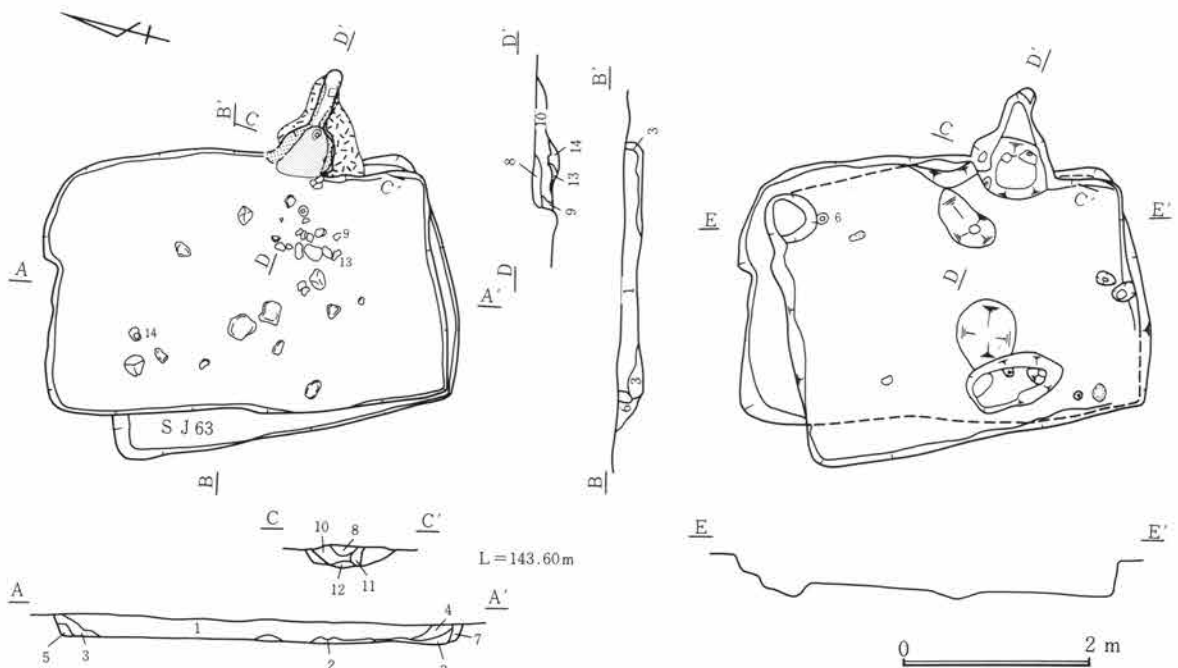
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、12～26cmを測り、平均18cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、左袖部の一部が欠落しているが、右袖部、煙道部は、良好な状態で残っている。規模は、全長123cm、幅95cm、煙道部60cmを測り、燃焼部の一部から煙道部にかけては壁外に105cmのびる。

掘り方は、床面より10～20cmほど掘られている。床下の施設は、東北コーナーに円形で径53cm、深度14cmのものと、西壁よりに、長楕円形で径100×55cm、深度19cmのものと、それに接して楕円形で径65×60cm、深度13cmのものと、カマド際に、長楕円形で径74×36cm、深度11cmの4基の床下土壇が検出された。

S J 63は、S J 62と大部分が重なるように重複し、西壁と南壁とそれぞれの壁際が僅かに残存する。平面形態は、ほぼ長方形を呈すると推測される。規模は、西壁3.68m、南壁2.52mを測る。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、31cm前後を測る。壁溝・柱穴・貯蔵穴・カマド等は、検出されなかった。



S J 62

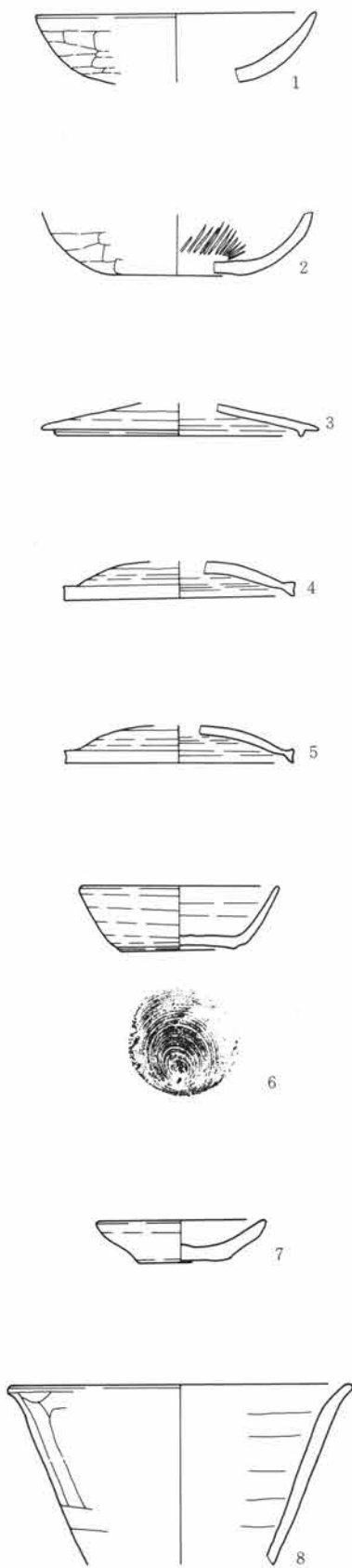
- 1 暗茶褐色土 軽石 黄色土粒
若干のロームブロック
- 2 暗茶褐色粘質土
- 3 黒褐色土 軽石
- 4 暗茶褐色土 少量の軽石
- 5 暗黄褐色土

S J 63

- 6 暗茶褐色土 若干の黄色粒
- 7 黒褐色土
- S J 62 カマド
- 8 暗茶褐色土 軽石 焼土粒
炭化物
- 9 暗茶褐色土 軽石 焼土粒

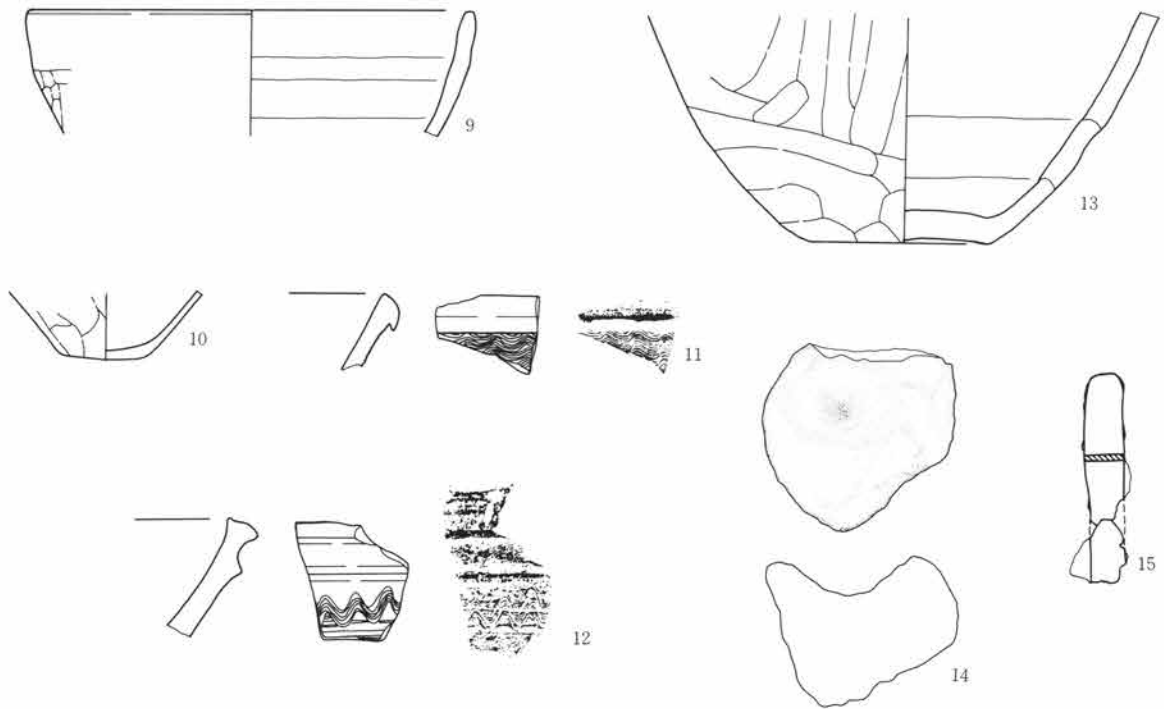
- 10 暗茶褐色土 焼土粒
- 11 暗茶褐色土 焼土小ブロック
- 12 黒褐色土 焼土 灰 褐色粘土
- 13 黒褐色土 灰 黒色砂
- 14 黒褐色土 黒色砂

第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	10.0・—・— 1/10 粗砂粒・褐色鉾物粒 軟質 橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸み をもち大きく開く。底部はゆるい丸み を呈す。口縁部は横撫で、体部はへら 削り。
2	土師器 坏 覆土	—・8.0・— 1/10 粗砂粒・褐色鉾物粒 軟質 橙色	体部は丸みをもって開く。底部は平底 を呈す。外面はへら削り。内面の体部 は放射状暗文が施されている。
3	須恵器 蓋 覆土	16.0・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的 で内面に身受けのカエリをもつ。外面 の一部に自然釉の付着がみられる。
4	須恵器 蓋 床下 覆土	13.2・—・— 小片 黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みを もち、口唇部は折り曲げて直立する。
5	須恵器 蓋 覆土 床下	13.0・—・— 小片 黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みを もち、口唇部は折り曲げて直立する。
6	須恵器 坏 床下9cm	11.2・6.4・3.6 完形 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にか けては直線的に開く。底部は回転糸切り。
7	土師質土器 皿 床上15cm	9.6・5.2・2.4 2/3 細砂粒・黒色鉾物粒 酸化焰 浅黄色	ロクロ右回転。器壁は厚い。底部は回 転糸切り。
8	土師器 鉢 覆土	19.2・—・— 小片 細砂粒・雲母・亜角礫・ 褐色鉾物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、体部は直線的、口唇 部は横撫で、体部上半は縦方向、下半 は横方向へのへら削り。内面はへら撫 でが施されている。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土・ 焼成・色調	器形・整形の特徴		
9	土師器 鉢 床上1cm	23.8・—・—、小片 細砂粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。		
10	土師器 甕 床下 覆土	—・4.7・—、底部のみ 細砂粒 普通 赤褐色	外面の胴部は縦方向ヘラ削り。底部もヘラ削り。		
11	須恵器 甕 覆土	—・—・—、小片 白色鉾物粒 還元焰、暗灰色	口唇部は折り返し、口唇部下には波状文が施されている。		
12	須恵器 甕 床下 覆土	—・—・—、小片 細砂粒 還元焰 暗灰色	口縁部は下に大きく引き出され、口唇部下に1条の凸帯がまわる。凸帯の下には波状文が施されている。		
13	土師器 甕 床上11cm 7cm 覆土	—・9.6・—、1/8 粗砂粒・褐色鉾物粒・黒色鉾 物粒 橙色普通	胴部は大きくふくらみ、底部は平底を呈す。外面の胴部・底部はヘラ削り。		
No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
14	用途不明石製品	886	15	用途不明鉄製品	895

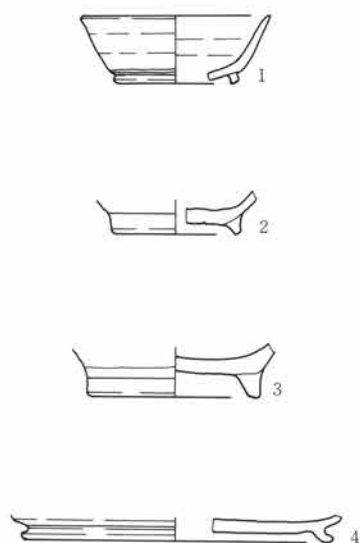
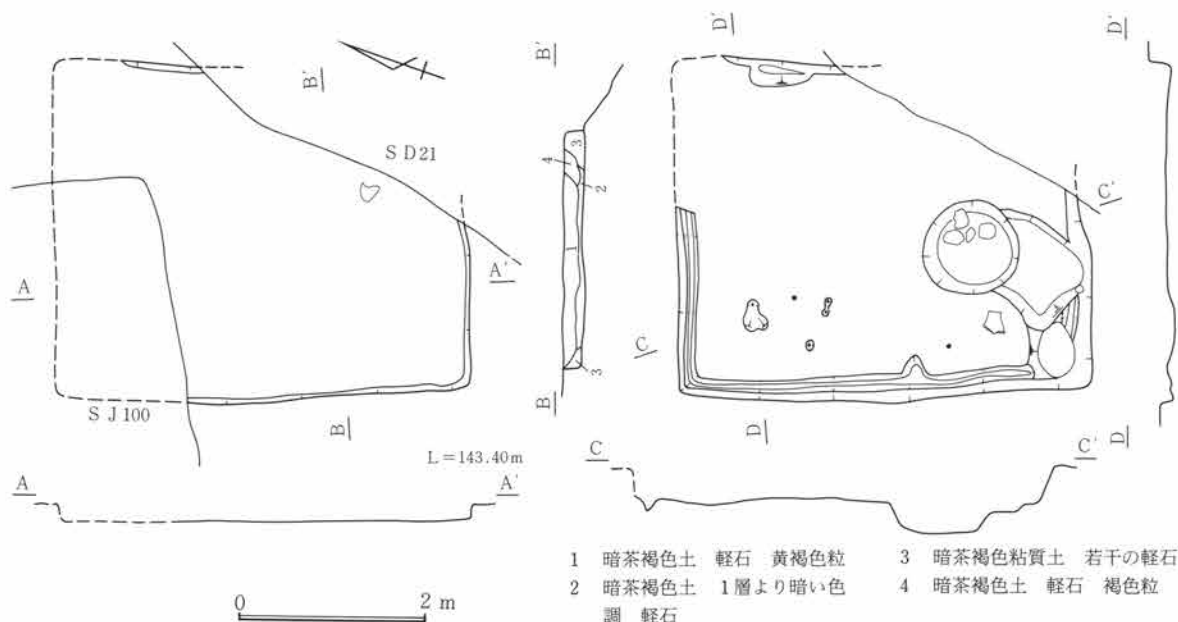
S J 64

88

本住居跡は、75～77G-10～12グリッドに位置し、S D21、S J 110と重複し、S B18と接するが、新旧関係は、本遺構のほうが、S D21、S J 110より古い。S B18との新旧関係は不明である。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.58m・南北4.38m、面積は、推定で12.77m²を測る。主軸方向は、N-72°-Eを指す。

床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、14～19cmを測り、平均17cmである。壁溝は、床面では検出されなかったが、床下で、北壁から西壁、南壁の西よりと東壁の一部で検出され、幅12～15cm、深度4～5cmを測る。

掘り方は、床面より12～15cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が若干みられる。床下の施設は、西壁よりに円形で径100cm、深度36cmの床下土壇が検出された。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床下 覆土	10.0・7.0・3.5 1/10 黒色鈹物粒、還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は僅かに外反し、高台は断面四角形を呈しやや開く。
2	須恵器 碗 覆土	—・7.0—、1/8 細砂粒、還元焰 オリーブ灰色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈し、底部は回転糸切り。
3	須恵器 碗 床下9cm	—・9.3—、1/4 細砂粒・黒色鈹物粒 還元焰 灰白色	底部のみ右回転。高台はやや丸みをもつ断面四角形を呈す。底部は回転糸切り。
4	須恵器 坏 覆土	—・17.2—、—、小片 粗砂粒・白色鈹物粒 還元焰、暗灰色	ロクロ回転方向不明。高台は「ハ」の字状に開き、底部は回転ヘラ削り。

S J 65・221・222

S J 65は、74～75G-04～07グリッドに位置し、S D21、S J 221・S J 222と重複するが、新旧関係は本遺構のほうが、S D21より古く、S J 221・S J 222より新しい。平面形態は、本遺構の大部分がS D21によって切られて不明ではあるが、東壁の短かい台形を呈すると推測させられる。規模は、計測できない。主軸方向は、N-85°-Eを指す。

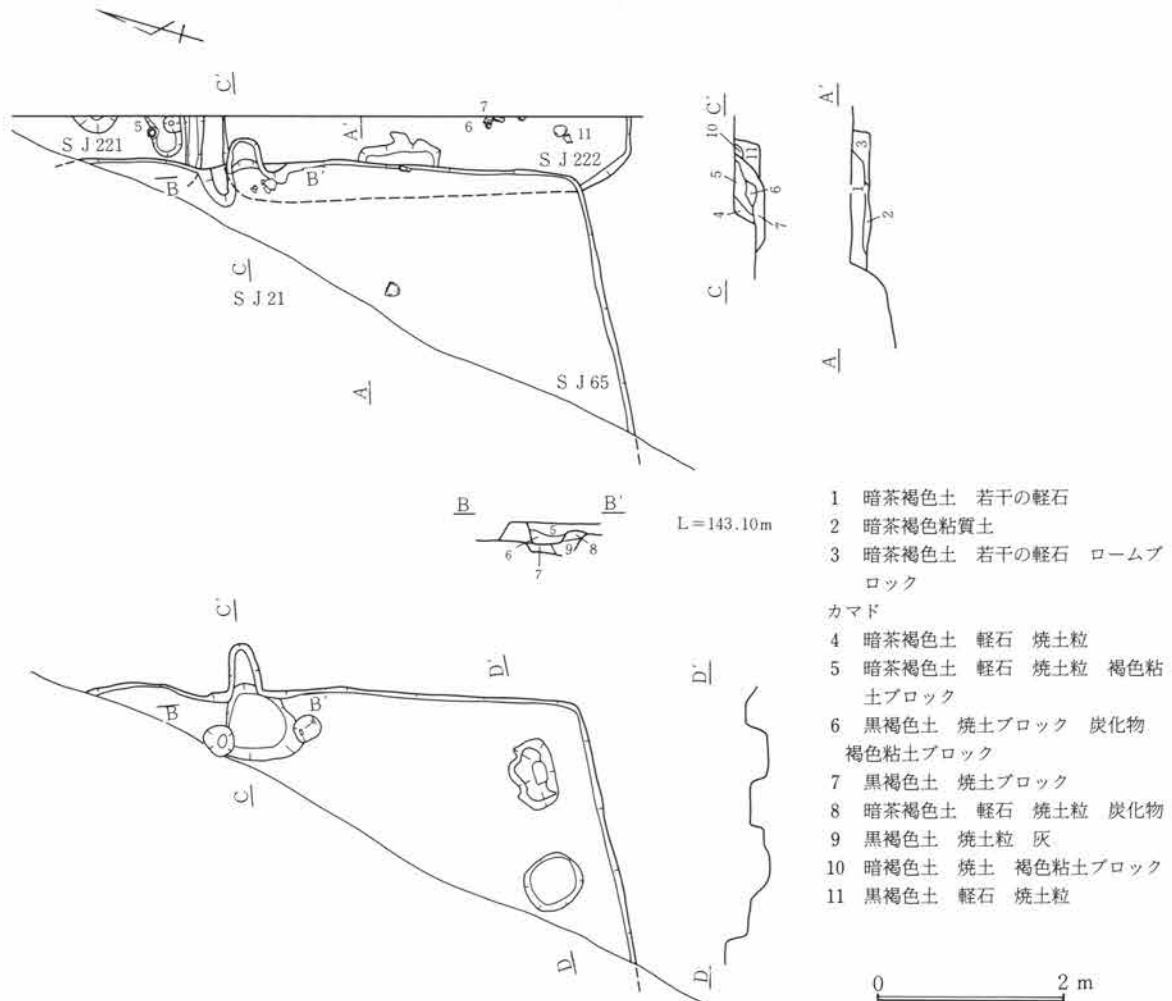
床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、11～26cmを測り、平均19cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央付近に位置し、残存状態は、天井部が崩落し、左袖部の一部は欠落している。規模は、全長92cm、幅91cmを測り、煙道部は壁外に42cmのびる。

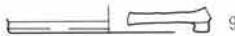
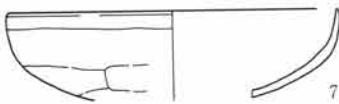
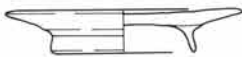
掘り方は、床面より10～15cm掘り込まれ、凹凸は、みられない。床下の施設は、南壁よりに不整形で径72×49cm、深度11cmのものとはほぼ円形で径65cm、深度21cmの床下土壇が2基検出された。

S J 221は、S J 65の東側に位置し、S D21、S J 65と重複するが、本遺構のほうが古い。本遺構の大部分は、調査区域外にのびるため詳細は不明である。

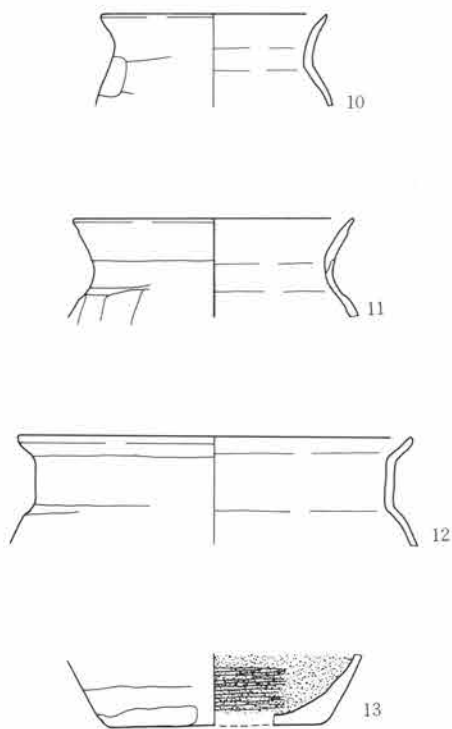
S J 222は、S J 65の東側、S J 221の南側に位置し、S J 65と西壁部分が重複するが、本遺構のほうが古い。本遺構の大部分は、調査区域外にのびるため詳細は不明であるが、残存部分で南北2.18mを測る。



第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 カマド	13.2・5.0・4.3 1/4 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は大きく開く。底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗 カマド	—・6.2・— 1/4 細砂粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ右回転。高台は細身でやや開く。底部は回転糸切り。
3	須恵器 碗 覆土	7.0・—・— 小片 細砂粒・白色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は「ハ」の字状に開く。
4	土師器 坏 カマド	—・12.0・— 1/8 細砂粒 普通 橙色	底部はヘラ削り。
5	須恵器 皿 床直	12.6・8.4・2.2 完形 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。皿部は器壁が厚く水平。高台は細身で僅かに開く。底部は回転糸切り。
6	土師器 坏 床上11cm	12.8・11.0・— 1/10 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみで、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
7	土師器 坏 床上11cm	17.4・—・— 1/6 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみで、体部は丸みをもち開く。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、体部は横方向へのヘラ削り。
8	須恵器 蓋 覆土	11.8・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 黄灰色	口唇部は折り曲げ、天井部は回転ヘラ削り。
9	須恵器 碗 覆土	—・10.6・—、小片 細砂粒・黒色鉍物粒 褐色鉍物粒 還元焰 灰色	高台は断面四角形を呈し、高台は撫で。



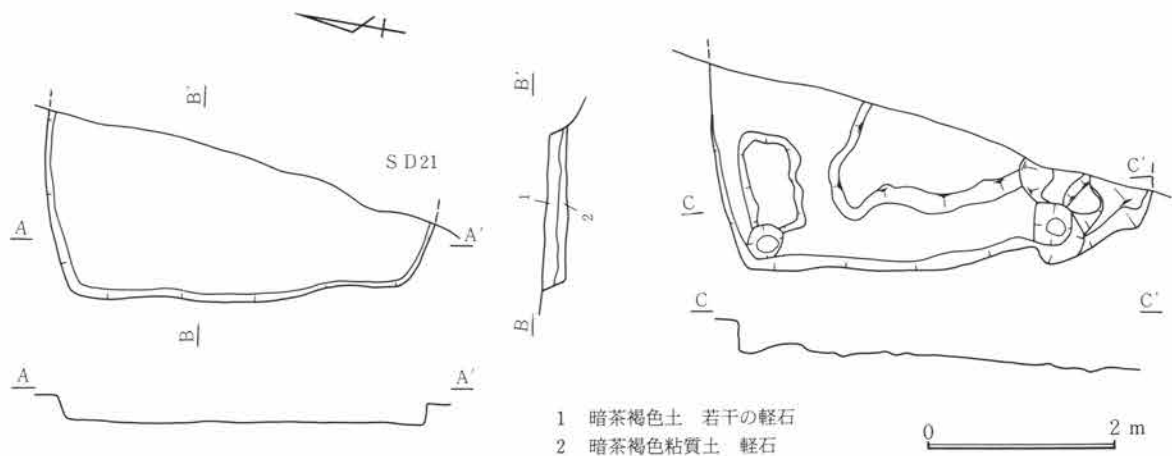
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
10	土師器 甕 覆土	12.0・—・— 小片 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は直線的に開き、横撫で。 胴部は横方向へのヘラ削り。
11	土師器 甕 床直	14.8・—・— 小片 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は直線的に開き、横撫で。 胴部は横方向へのヘラ削り。
12	土師器 甕 覆土	20.8・—・— 小片 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横 撫で。胴部は横方向へのヘラ削り。
13	土師器 碗 覆土	—・11.6・— 小片 細砂粒 内面黒色処理 淡黄色・黒色	外面の胴部は横方向へのヘラ削り。 内面はヘラ磨き。

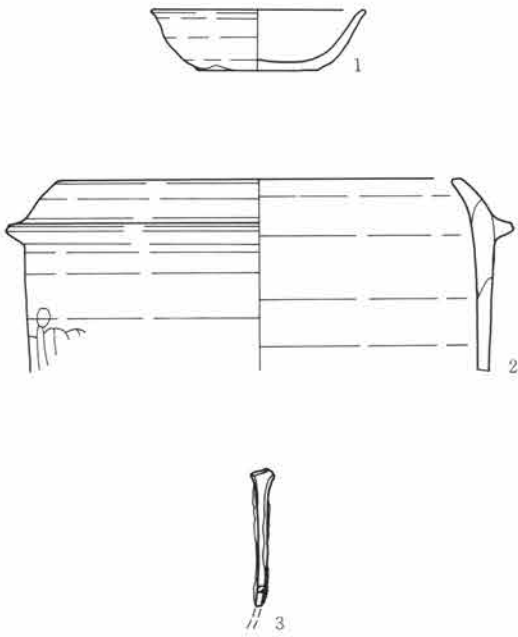
S J 66

本住居跡は、76～77G-06～08グリッドに位置し、S D21と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の3分の2ほどは、S D21に切られているため、全貌は不明であるが、長方形を呈すると推測される。規模は、南北4.02mを測る。主軸方向は、N-80°-Eを指す。

床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、17～25cmを測り、平均21cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

掘り方は、床面より2～20cmほど掘り込まれている。床下の施設は、壁際が溝状に掘り込まれている他、西北コーナー際に円形で径35cm、深度21cmのものと西壁際の南よりに方形に近い形態で一辺40cm、深度26cmのピットが検出された。





No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	11.2・6.4・3.2 1/5 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。底部は回転糸切り。
2	須恵器 羽釜 覆土	20.4・—・— 小片 粗砂粒・垂角礫 酸化焰 灰黄褐色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内傾し、胴部は直線的。鐔は水平方向を向く。胴部下半は縦方向へのへら削り。
No	種類	観察表掲載頁	
3	鉄製品 釘	892	

S J 67

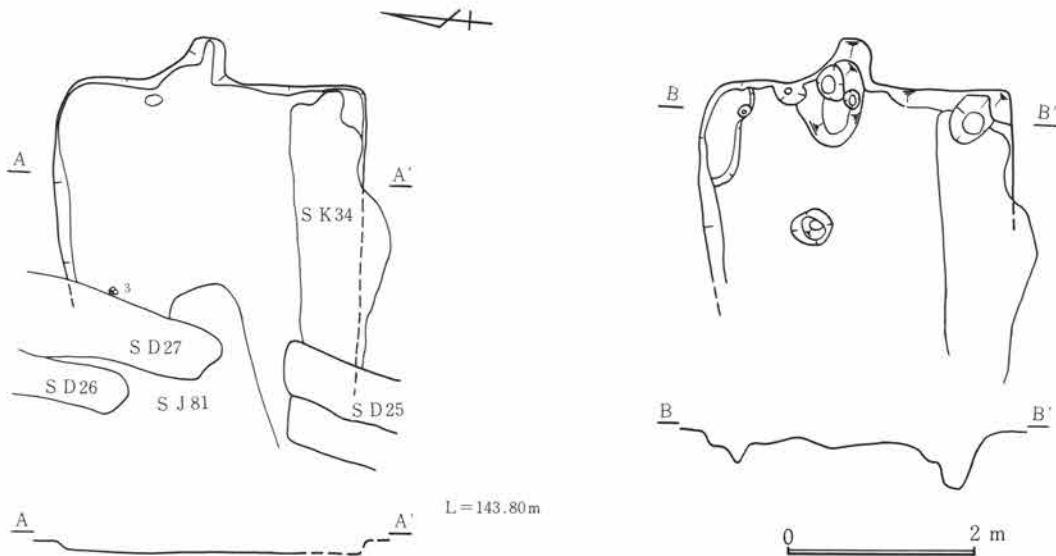
91

本住居跡は、85～87G-37～39グリッドに位置し、S D25・S D26・S D27、S K34、S J 81と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈し、規模は、南北3.29mを測る。主軸方向は、N-86°-Eを指す。

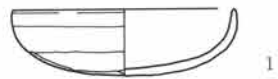
床は、貼床が施されている。壁は、東壁から南壁にかけてはほぼ垂直に立ち上がるが、壁高は、6～13cmを測り、平均8cmである。

カマドは、東壁の中央よりやや西よりに位置し、残存状態は、天井部・袖部とも残りは悪い。規模は、全長70cm前後、幅80cm前後を測り、煙道部は壁外に40cmのびる。

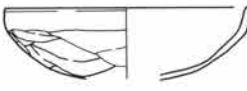
掘り方は、床面より15～20cm掘り込まれている。床下の施設には、東北コーナーに長楕円形で径100×40cm、深度9cmの床下土壇と、中央やや北よりに円形で径41cm、深度38cmのピットが各1基ずつ検出された。



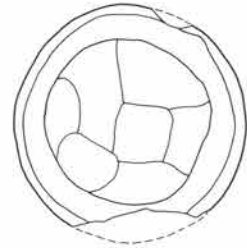
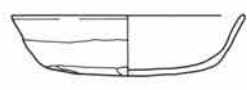
第3章 検出遺構・遺物



1



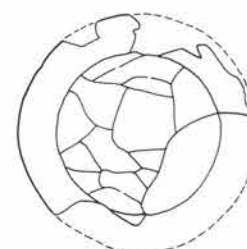
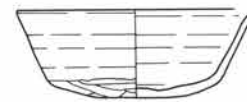
2



3



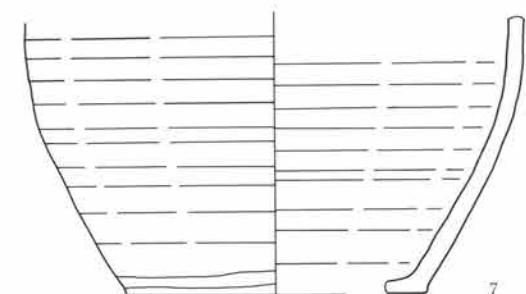
4



5



6

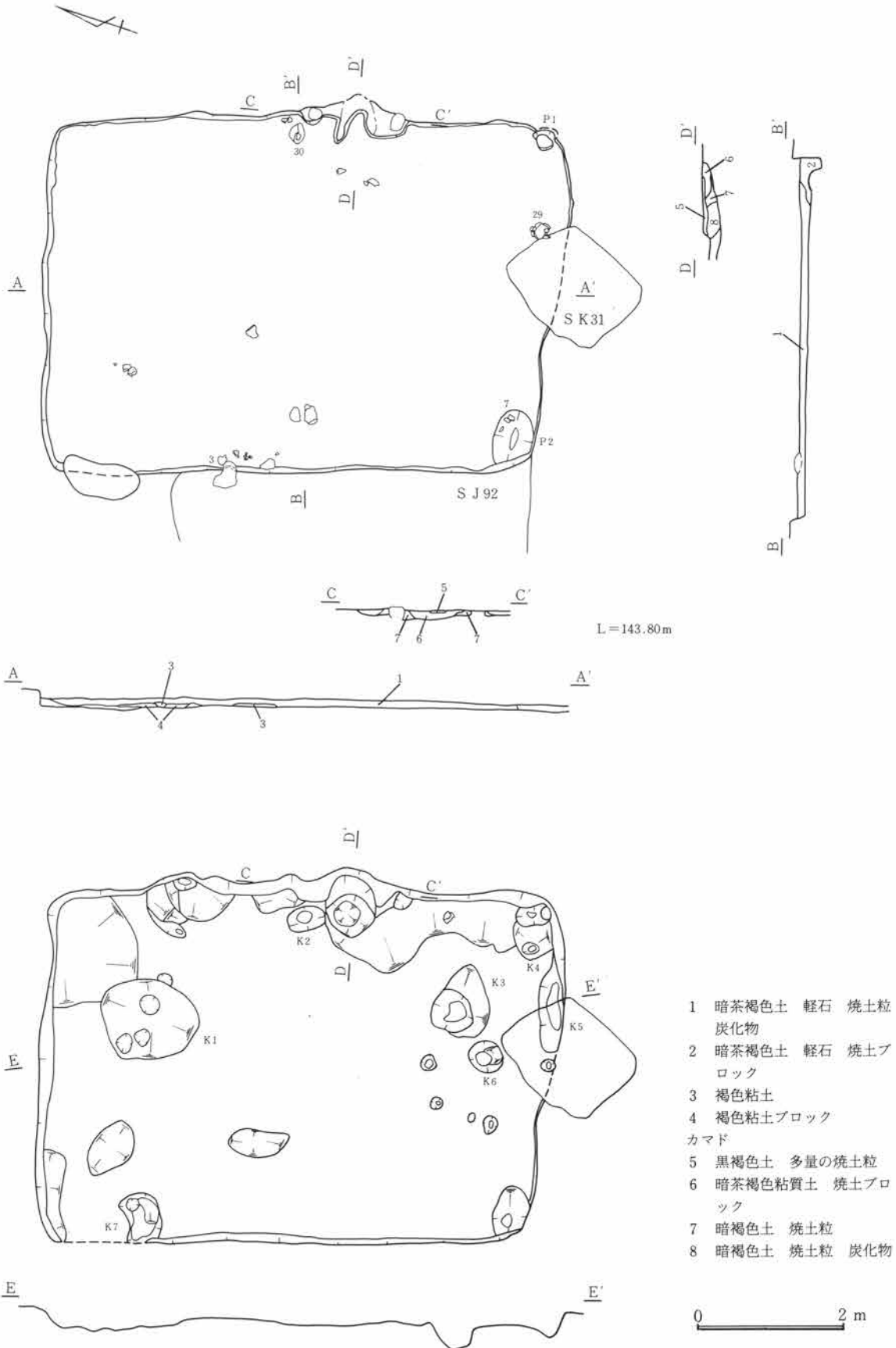


7

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.6・10.6・3.5 1/2 粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	12.8・12.6・— 2/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
3	土師器 坏 床直	12.2・8.8・3.2 9/10 細砂粒・雲母 普通 明赤褐色	口縁部は外反し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削りが施されている。
4	須恵器 蓋 覆土	—・鈕3.5・— 1/10 黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は擬宝珠状を呈し、天井部は丸みをもつ。外面には自然釉が附着。
5	須恵器 坏 覆土	12.6・8.8・4.7 2/3 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ左回転。口縁部は直線的でやや開く。底部はゆるい丸底を呈し、手持によるヘラ削りが施されている。
6	須恵器 坏 カマド	14.0・8.4・3.7 1/2 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反し、底部は平底を呈し、回転糸切り。
7	須恵器 甕 覆土	—・15.0・— 1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。胴部は大きく開く。

SJ68

92



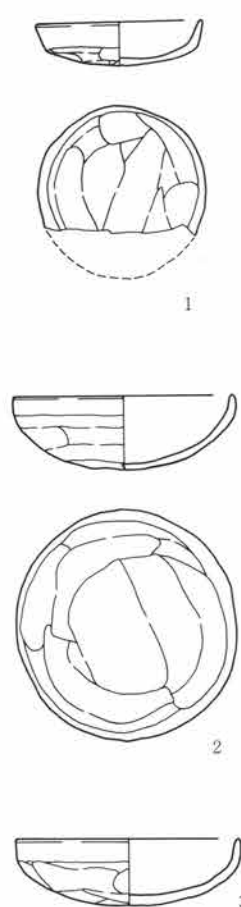
第3章 検出遺構・遺物

本住居跡は、83～86G—39～43グリッドに位置し、SK31、SJ92と重複し、SE06と接する。新旧関係は本遺構のほうが、SK31より古く、SJ92より新しい、平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西4.78m×南北7.02m、面積33.70m²を測る。主軸方向は、N—75.5°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、5～10cm、平均8cmを測る。柱穴かどうかは確認できなかったが、東南コーナーと西南コーナー壁際にピットが検出された。P₁は、円形を呈し、径26cm、深度32cmを測る。P₂は、楕円形を呈し、径65×50cm、深度17cmを測る。

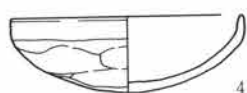
カマドは、東壁中央よりやや南に位置する。残存状態は、天井部から煙道部にかけては確認面より上に位置しており、焚口部と袖部の下位が残る程度であった。規模は、全長68cm、幅150cmを測り、燃烧部の一部が壁外に30cmのびる。袖部は、両袖部とも加工石を使用して構築されている。

掘り方の面は、床面より14～25cmほど掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土坑7基と小ピットが検出され、床下土坑の形態・規模は、K₁が楕円形で径133×108cm、深度15cm。K₂は楕円形で径46×36cm、深度14cm。K₃は、楕円形で径60×58cm、深度32cm。K₄は、楕円形で径44×28cm、深度41cm。K₅は、長楕円形で径109×40cm、深度14cm。K₆は、円形で径40～48cm、深度25cm。K₇は、楕円形で径90×61cm、深度16cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド	8.8・8.0・2.3 3/4 粗砂粒、褐色鉾物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は直線的で僅かに開く。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	11.4・11.0・4.0 完形 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削りが施されている。
3	土師器 坏 床直	11.8・11.6・3.5 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。

第4節 歴史時代



4



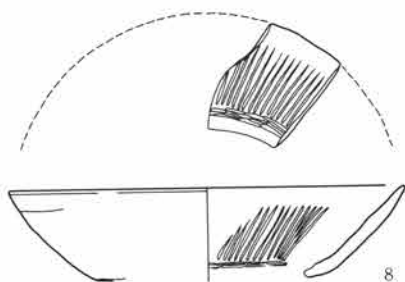
5



6



7



8



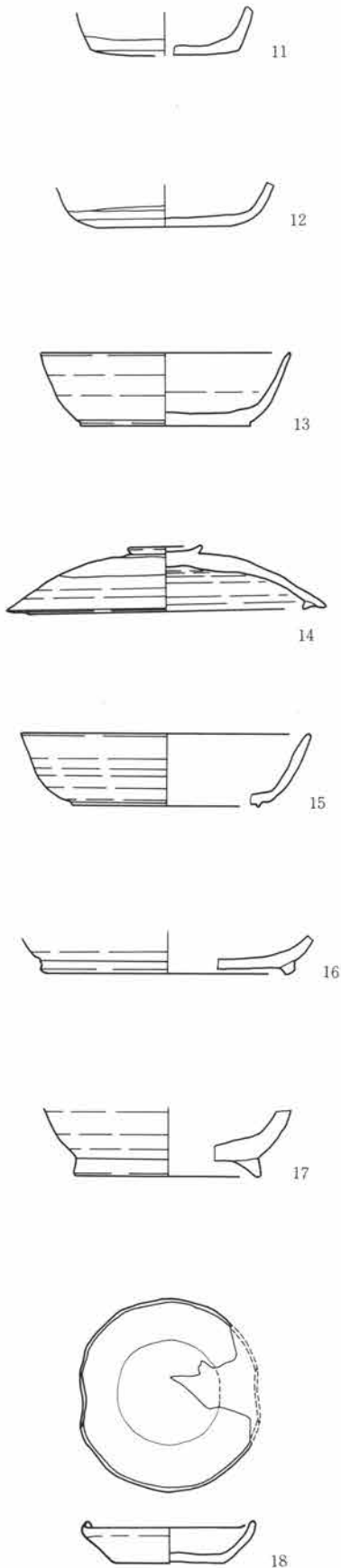
9



10

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	土師器 坏 床下10cm	12.0・10.0・4.0 1/2 粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、横撫での下に僅かに指撫で、底部はへら削りが施されている。
5	土師器 坏 覆土	11.8・11.0・3.5 9/10 細砂粒・粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直線的で僅かに開く。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はへら削りが施されている。
6	土師器 坏 カマド 覆土	11.4・11.0・3.3 1/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的で僅かに開く。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はへら削りが施されている。
7	土師器 坏 P ₁ 底部より 7cm	13.8・10.0・4.2 1/3 細砂粒・粗砂粒 褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は1段の横方向へのへら削り。底部はへら削りが施されている。
8	土師器 坏 覆土	21.0・12.0・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 軟質 橙色	口縁部は直線的に開く。外面の口縁部は横撫で、体部はへら削り。内面の体部は斜放射状暗文が施され体部と底部の境には線状にへら磨きが見られる。
9	須恵器 蓋 覆土	13.0・鈕2.8・3.1 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ左回転。鈕は宝珠状を呈し、天井部は直線的。内面には身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度は回転へら削り。
10	須恵器 坏 カマド 床下	12.6・8.8・— 1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部はゆるい丸底を呈す。

第3章 検出遺構・遺物

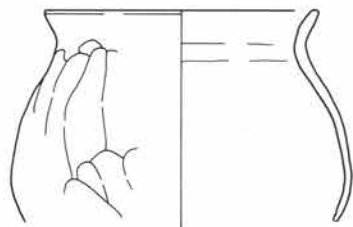


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
11	須恵器 坏 覆土	—・8.8・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。
12	須恵器 坏 覆土	—・8.0・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。
13	須恵器 坏 覆土	14.6・10.0・4.3 1/4 細砂粒・粗砂粒・黒色 鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもちほとんど開かない。高台は削り出しによるベタ高台。底部は回転ヘラ撫で。外面には自然釉の付着がみられる。
14	須恵器 蓋 覆土	19.0・4.4・3.8 小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。鈕は偏平状を呈し、天井部は丸みをもち、内面には身受けのカエリをもつ。天井部の過半は回転ヘラ削り。
15	須恵器 坏 床下	17.0・12.0・4.2 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもち、下位に1段の回転ヘラ削り。高台は極小型で削り出し。
16	須恵器 坏 覆土	—・13.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形を呈し、底部は回転ヘラ削りが施されている。
17	須恵器 瓶類 覆土	—・11.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面三角形を呈し直立する。
18	土師質土器 皿 覆土	11.4・6.6・2.5 7/8 粗砂粒・褐色鉍物粒 酸化焰 にぶい黄橙色	ロクロ回転方向不明。底部は回転糸切り。口縁部を耳皿状につまみあげている。

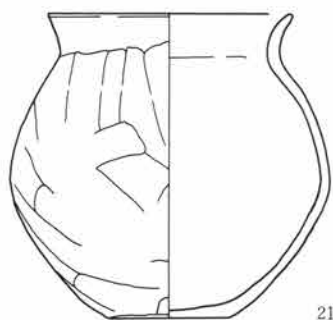
第4節 歴史時代



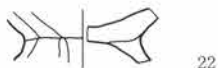
19



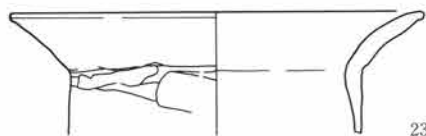
20



21



22



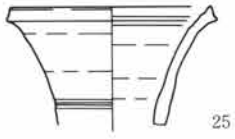
23



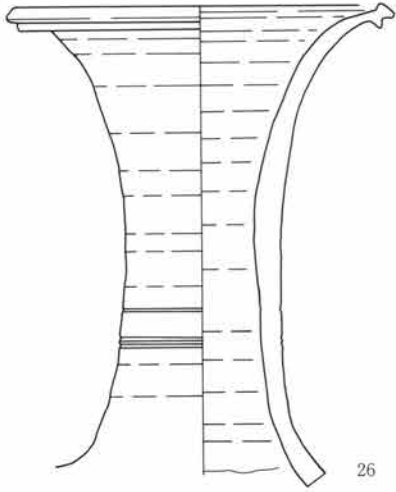
24

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
19	土師質土器 皿 覆土	8.4・5.4・1.6 完形 粗砂粒・褐色鉍物粒 酸化焙 にふい黄橙色	ロクロ回転方向不明。底部は回転糸切り。
20	土師器 甕 床下	14.4・—・— 1/10 細砂粒 普通 にふい橙色	口縁部はやや開き、胴部は下位で大きくふくらむ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。
21	土師器 甕 床直、カマド、 床下	13.0・6.4・16.0 1/6 細砂粒・雲母 普通 褐灰色	口縁部はやや開き、胴部は大きくふくらみ、底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部の上半は縦方向へのヘラ削り。下半は斜め方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
22	土師器 台付甕 覆土	—・4.2・— 小片 細砂粒・雲母 普通 褐灰色	胴部は縦方向へのヘラ削り。脚部は横撫で。
23	土師器 甕 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は大きく開き、胴部は直線的。外面の口縁部は横撫で、胴部は横方向ヘラ削り。内面はヘラ撫で。
24	土師器 甕 覆土	23.0・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 にふい橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。

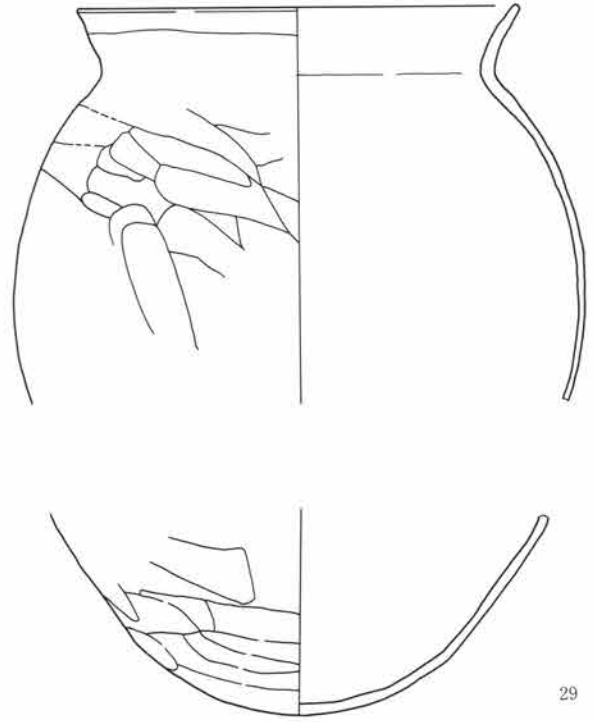
第3章 検出遺構・遺物



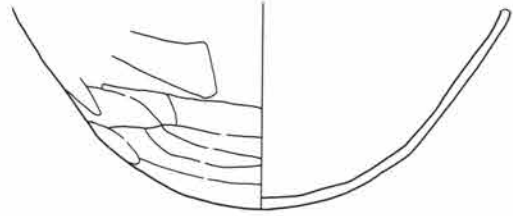
25



26



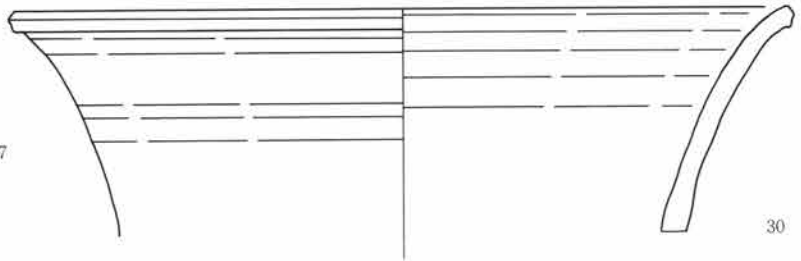
28



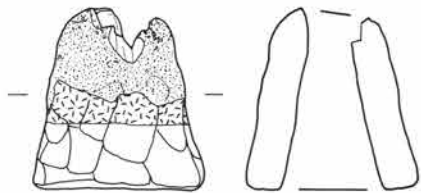
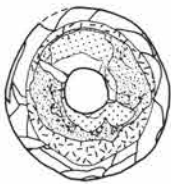
29



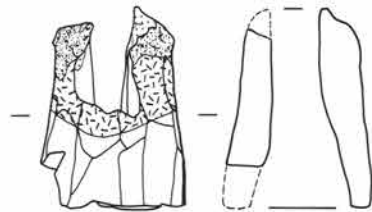
27



30



31



32



33

第4節 歴史時代

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
25	須恵器 長頸壺 床下	11.6・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部はやや外反し、口唇端部は上下に引き出されている。
26	須恵器 長頸壺 覆土	19.4・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	大型長頸壺。口縁部は外反し、口唇端部は丸みもち外傾し、上下にひきだされ、口唇端部下に断面三角形の凸帯がまわる。下位には3条の沈線がまわる。内面には自然釉の付着がみられる。
27	須恵器 短頸壺 覆土	—・15.8・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は「ハ」の字状に開き、底部は回転ヘラ削り。
28	土師器 甕 床直	23.6・—・— 1/4 細砂粒 普通 橙色	口縁部はやや開き、胴部は球状の丸みを呈す。口縁部は横撫で、胴部は斜め方向へのヘラ削りが施されている。
29	土師器 甕 床上5cm	—・—・— 底部のみ 細砂粒・雲母・褐色鉍物粒 普通 明赤褐色	底部は丸底を呈し、外面は横方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。
30	須恵器 甕 覆土	42.0・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色	大甕口縁部。口縁部はやや外反し、口唇端部は平坦で外傾し、口唇端部下に1条の凸帯がまわる。口縁部中位以下にヘラ撫でが施されている。
31	土製品 羽口 覆土	端部径 6.8 底部径 12.2 器高 12.8 孔径 3.2~7.2 粗砂粒 酸化焰	円錐状を呈す。底部端部は幅広で平坦。胴部は荒いヘラ削り。端部は鉄分付着。その周辺は二次的還元焰、孔内端部は二次的酸化焰。
32	土製品 羽口 覆土	端部径 7.8 底部径 10.7 器高 14.2 孔径 3.8~7.8 粗砂粒、酸化焰	円錐状を呈す。底部端部は平坦、胴部は荒いヘラ削り。端部には鉄分付着。その周辺は二次的還元焰、孔内端部は二次的酸化焰。
No	種類	観察表掲載頁	
33	棒状不明鉄製品	893	

S J 69

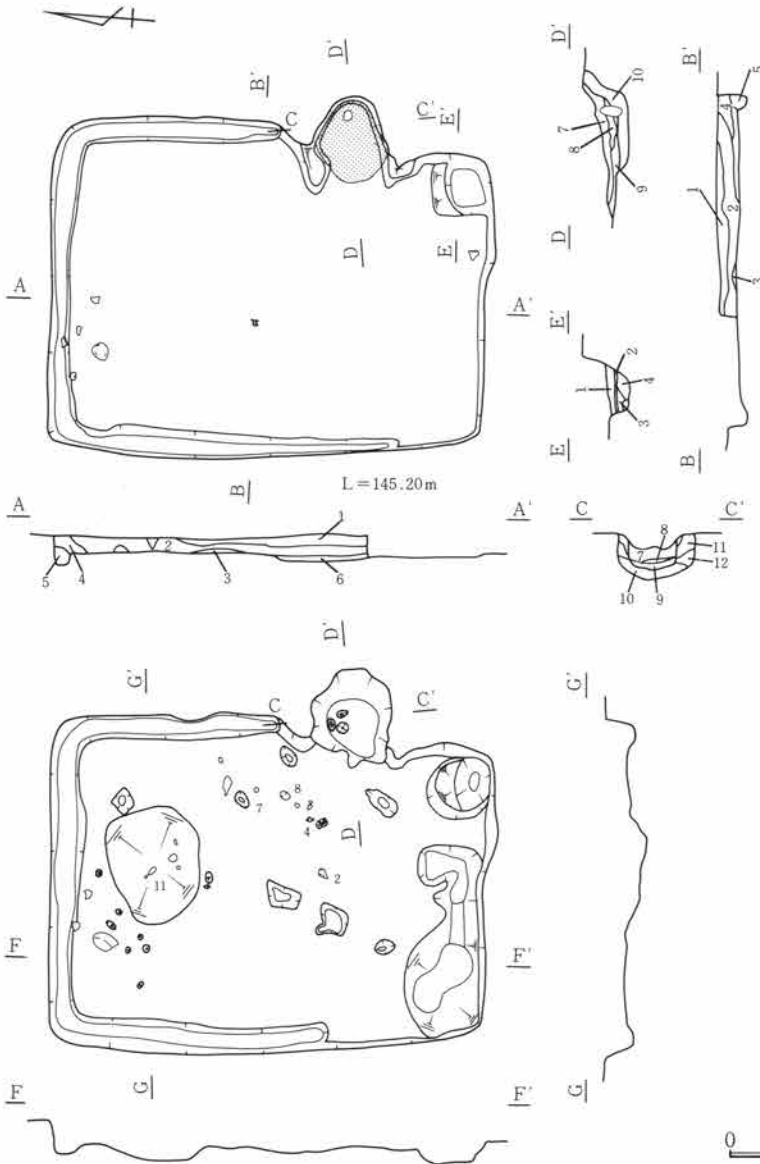
本住居跡は、98～100H-38～40グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、長方形を呈し、東壁は、一直線ではなくカマドの両側で32cmくい違う。規模は、東西3.57m・南北4.71m、面積15.78㎡を測る。主軸方向は、N-92.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を示し、全体的にC軽石を含む暗茶褐色土で覆われている。

床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、7～25cmを測り、平均16cmである。壁溝は、カマドの北側から北壁、西壁の中央よりやや南まで周り、幅は14～30cm、平均21cm、深度は8～13cm、平均10cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー壁際に位置し、形態は長方形を呈し、規模は、55×33cm、深度20cmを測る。

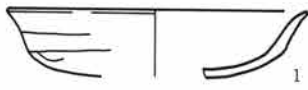
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも良好な状態で残っている。規模は、全長124cm、幅132cmを測り、燃烧部から煙道部にかけては45cm壁外にのびる。焚口

部の奥には、支脚用としての円柱状の自然石が埋め込まれている。

掘り方は、床面より2～20cmほど掘り込まれ、小ピットが多くみられる。床下の施設には、床下土壇が3基検出され、2基は南壁際に接して位置し、東側のものは不整形で72×70cm、深度13cm。西側のものは楕円形で径120×76cm、深度12cmで、他は西壁よりに位置し、楕円形で径124×96cm、深度25cmを測る。



- 1 暗茶褐色土 若干のC軽石 褐色粒
- 2 暗茶褐色土 C軽石
- 3 暗茶褐色土 微量のC軽石
- 4 暗茶褐色土 若干のローム粒
- 5 暗茶褐色土
- 6 暗茶褐色土 ロームブロック
- カマド
- 7 暗茶褐色土 焼土ブロック 炭化物
- 8 焼土
- 9 灰
- 10 暗褐色土 焼土 炭化物
- 11 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒 炭化物
- 12 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒



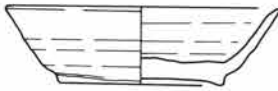
1



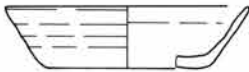
2



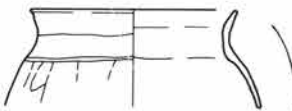
3



4

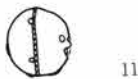
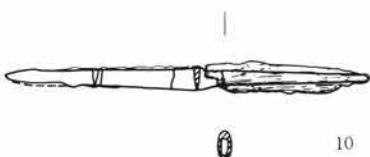
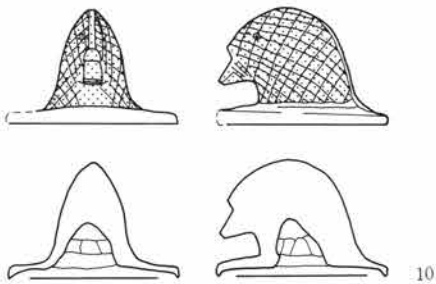
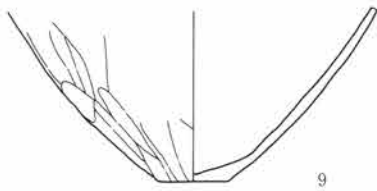
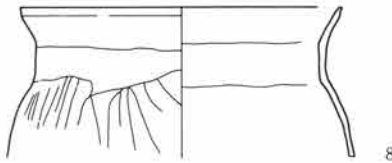
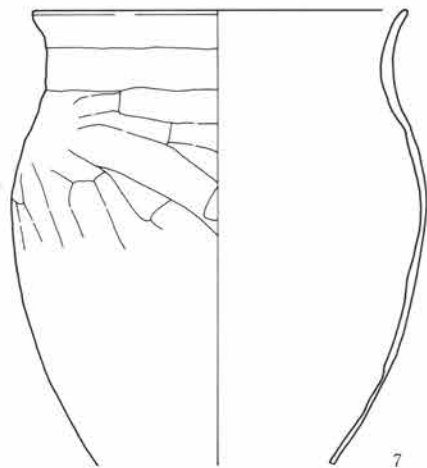


5



6

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	16.2・13.6・— 1/6 細砂粒・雲母 軟質 橙色	口縁部は外反し、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
2	須恵器 坏 床下 5 cm	12.8・6.0・3.8 3/4 粗砂粒・角礫・黒色鉍 物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、底部は回転糸切り。口縁部の歪みが大きい。
3	須恵器 坏 覆土	12.2・6.0・4.0 3/4 粗砂粒・亜角礫・黒色 鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は丸みをもつ。底部は回転糸切り。
4	須恵器 坏 床下 3 cm 床下覆土	14.6・8.8・4.1 1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り、底部糸切りに際して一度失敗して底部がベタ高台状に残存している。
5	須恵器 坏 床下	13.0・6.6・3.9 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的でやや開く。底部は回転糸切り。
6	土師器 甕 覆土	10.8・—・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	台付甕？ 口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、横撫で。胴部は左方向へのヘラ削り。



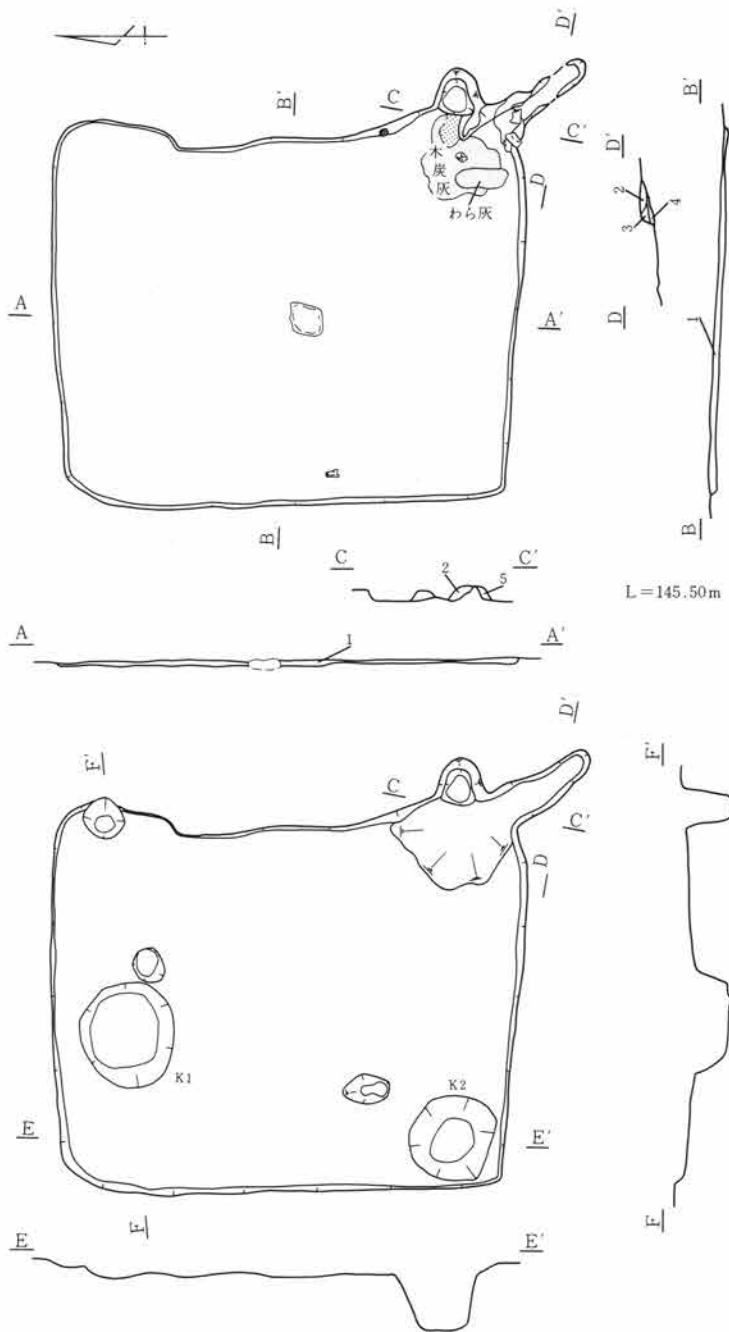
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	土師器 甕 床下3～6cm	20.6・—・— 1/2 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	器壁は薄く、口縁部は弱い「コ」の字状を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部の上位は横撫で、中位以下はヘラ削り。内面の胴部は縦方向へのヘラ撫でが施されている。
8	土師器 甕 覆土	17.0・—・— 1/10 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	器壁は薄く、口縁部は弱い「コ」の字状を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部の上位は横撫で、中位以下は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
9	土師器 甕 覆土 カマド内	—・3.6・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	胴部は縦方向ヘラ削り。
10	灰釉陶器 鳥鈕蓋 床直	9.4・—・6.1 4/5 細砂粒 還元焰 暗灰色	水鳥の頭部を模倣した平瓶の蓋。本住居跡からは平瓶及び同破片の出土はみられなかった。鈕部は、ヘラ描きによって格子目状に羽毛と目を表現している。釉調は、透明な淡緑色を呈し、嘴下からその下部にはみられない。 鳥鈕蓋は、愛知県の猿投山古窯址群の黒笹4号窯址・黒笹7号窯址・長野県金鑄場遺跡一号墳からの出土例がみられるだけで全国的にも稀少なものである。また、堅穴住居跡からの出土は、初めてである。 嘴・羽毛の表現は、猿投山古窯址群から出土したものの方がヘラ描きの表現がきわめて写実的であるのに対して金鑄場遺跡、本址から出土したものは、羽毛の表現がともに格子目状で前者に比べて表現方法の簡略化がみられる。 鳥鈕蓋の製作年代は、黒笹4号窯址・黒笹7号窯址が井ヶ谷78号窯式前半に比定されており、9世紀前半に位置づけられているが、本址出土のものは、表現方法の簡素化がみられる点などからして井ヶ谷78号窯式より後出であると考えられる。 本住居跡からは鳥鈕蓋に伴う平瓶は出土していないが、金鑄場遺跡のものをみると平瓶の把手部分も水鳥の尾を模倣した模様がヘラ描きされている。
No.	種類		観察表掲載頁
11	鉄製品 刀子		891
12	用途不明鉄製品		894

S J 70

本住居跡は、107~110H-34~36グリッドに位置し、S D31・S D44と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが、S D31より新しいが、S D44との新旧関係は不明である。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西3.88m、南北4.86m、面積19.62m²を測る。主軸方向は、N-94°-Eを指す。

床は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が2~8cmと確認面から床面までが浅いため不明である。また、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。床面のほぼ中央には、一辺32cm前後の偏平な石が床面直上に置かれている。

カマドは、東南コーナーに位置する。本址のカマドは、築り替えがなされている。当初は、カマドの主軸

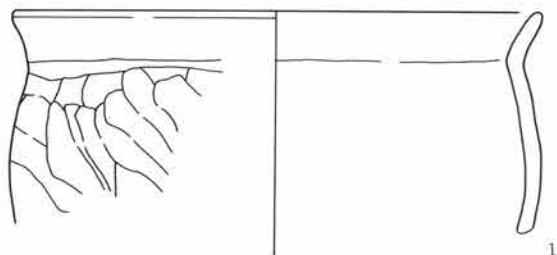


方向がN-143°-Eを指示し、煙道部が壁外に107cmのびているのに対し、作り替え後は、カマドの主軸方向がN-89.5°-Eを指し、住居址の主軸方向と大きな差がみられない。築り替え後のカマドは、天井部が崩落し、左袖部が欠落している。規模は、全長73cm、幅63cmを測り、焚口部から煙道部にかけては壁外に48cmのびる。焚口部と焚口部の前部には、木炭灰・藁灰層がひろがる。

掘り方は、床面から4~15cmほど掘り込まれている。床下の施設には、床下土壇2基、ピット3基が検出され、床下土壇の形態・規模は、K₁がほぼ円形で径97~112cm、深度41cm。K₂はほぼ円形で径86~90cm、深度66cmを測る。

- 1 暗茶褐色土 C軽石 炭化物 褐色粒子
- カマド
- 2 黄褐色土 多量の焼土粒
- 3 黄褐色土 少量の焼土粒
- 4 黒褐色土 多量の灰
- 5 別住居の覆土

0 2 m



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 甕 床上	28.2・—・— 1/10 粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は短かく直線的に 開く。胴部は球状の丸み をもつ。口縁部は横撫で、 胴部の外面はヘラ削り、 内面ヘラ撫で。

S J 71

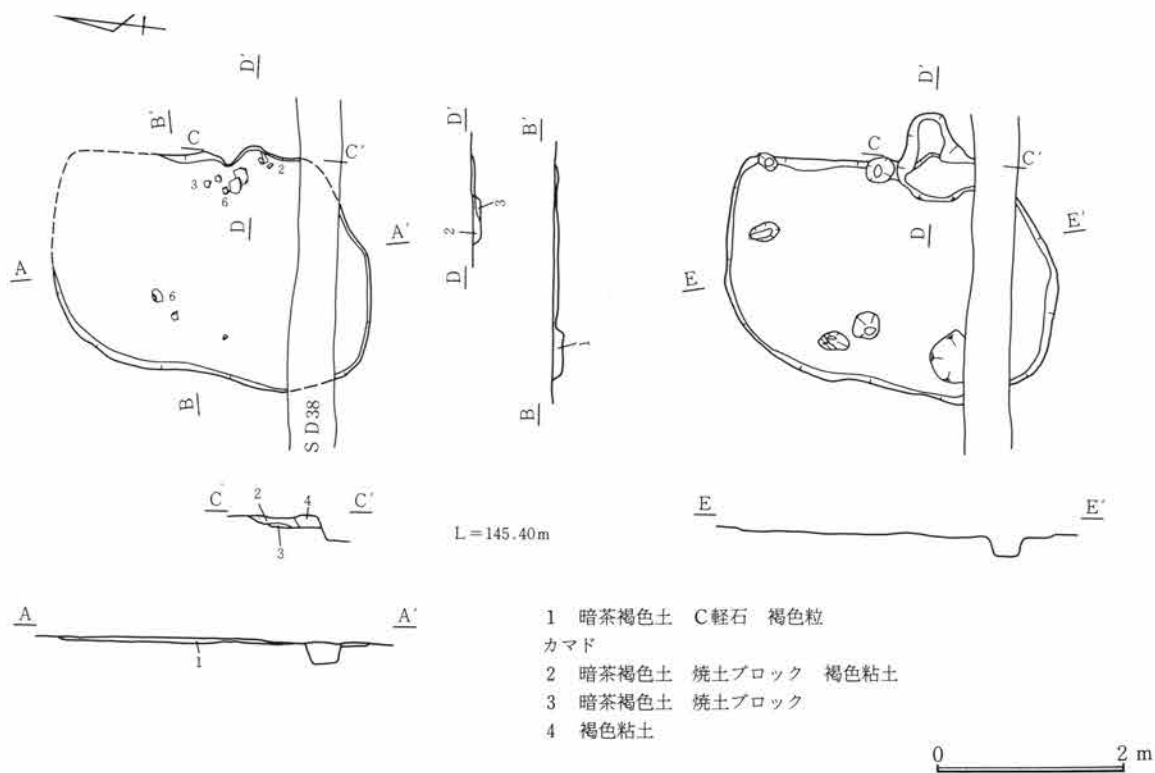
96

本住居跡は、102～103H—30～32グリッドに位置し、S D38と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、やや歪んだ隅丸長方形を呈す。規模は、東西2.47m、南北3.37m、面積7.15m²を測る。主軸方向は、N—89°—Eを指す。

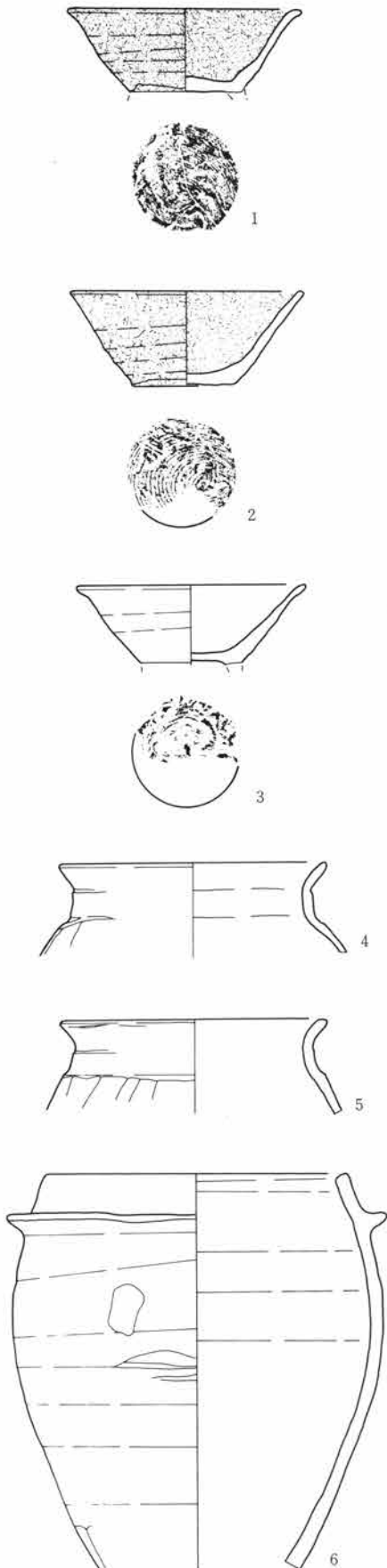
床は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが2～4cmと浅いため不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、大部分が削平されているため、煙道部・袖部・天井部等については不明である。残存する部分での規模は、全長97cm、幅77cmを測る。

掘り方は、床面より10～20cmほど掘り込まれ、多少の凹凸がみられる。床下の施設は、ピット4基、床下土壇1基が検出された。K₁は、形態が楕円形で、規模が径55×42cm、深度42cmである。



第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 床直	13.8・6.6・— 高台のみ欠損 細砂粒・雲母 還元焰燻焼成 暗褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、 高台は剥離、底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗 カマド底部か ら2cm	13.8・6.3・5.7 3/5 粗砂粒・雲母 還元焰燻焼成 にぶい黄褐色	ロクロ右回転。口縁部はやや外反 し、底部は回転糸切り。
3	須恵器 碗 床直	13.6・6.0・— 1/4 細砂粒・粗砂粒 酸化焰 橙色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、 高台は剥離、底部は回転糸切り。
4	土師器 甕 床下	15.8・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 赤褐色	器壁は厚く、口縁部は雑な「コ」 の字状を呈す。口縁部は横撫で、 胴部は左方向へのヘラ削り。
5	土師器 甕 床下	15.6・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 赤褐色	器壁は厚く、口縁部は雑な「コ」 の字状を呈す。口縁部は横撫で、 胴部は左方向へのヘラ削り。
6	須恵器 羽釜 床直 (カマド)	18.0・—・— 1/3 粗砂粒・褐色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内 傾し、口唇端部は平坦で内傾する。 胴部は上位でふくらみもち、下 半は底部に向けつぼまる。鋳は断 面四角形を呈し、やや上方を向く。 胴部下位には縦方向へのヘラ削り が施されている。

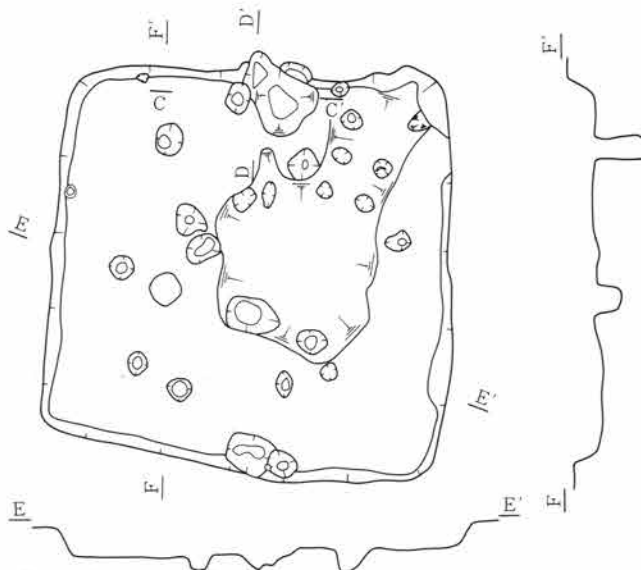
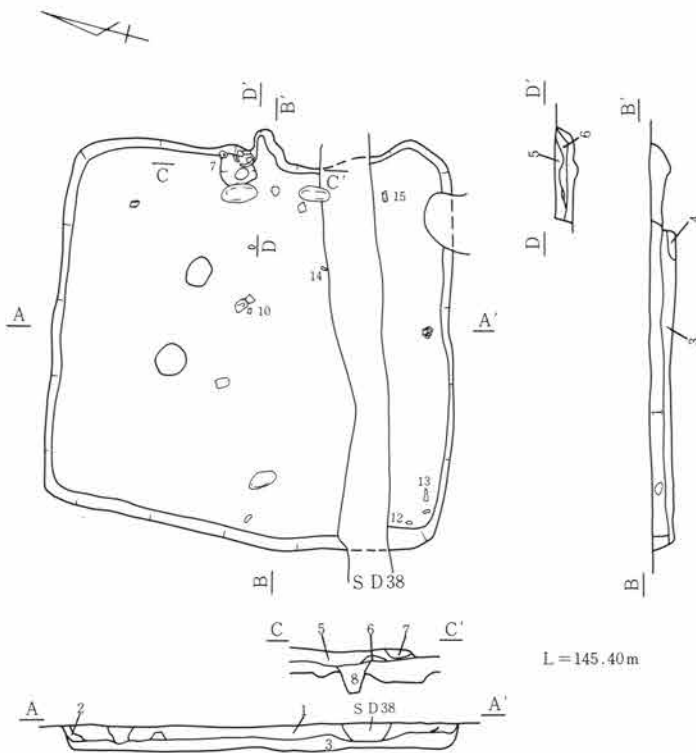
S J 72

本住居跡は、111～113H-28～31グリッドに位置し、S D 35、S D 38と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうがS D 35・S D 38より古い。平面形態は、歪んだ長方形を呈し、規模は、東西4.00m・南北4.28m、面積16.86㎡を測る。主軸方向は、N-82.5°-Eを指す。

床は、貼床が施されている。壁は、やや緩かに立ち上がり、壁高は、8～17cm、平均12cmを測る。壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央に位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は両袖部とも自然石を使用し、左袖部の下はピット状に掘り込まれている。

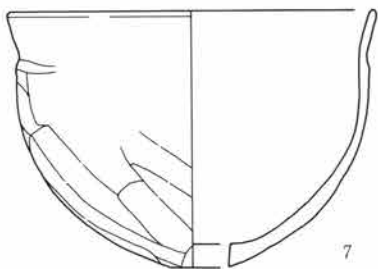
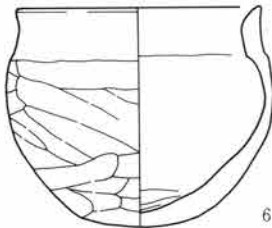
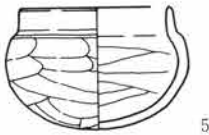
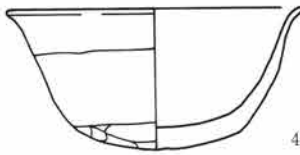
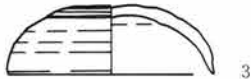
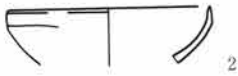
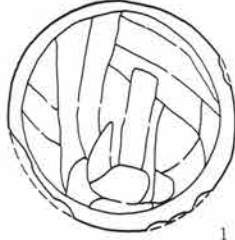
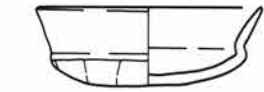
掘り方は、床面から6～16cmほど掘り込まれ、東壁のカマド南側から中央部分にかけては緩い落ち込みがみられる。床下の施設は、大小のピットが21基検出された。



- 1 暗褐色土 C軽石 褐色粒子
- 2 暗褐色土 少量のC軽石
- 3 暗褐色土 若干のC軽石 ロームブロック
- 4 ロームブロック
- カマド
- 5 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒
- 6 暗茶褐色土 1層よりやや明るい色調
- 7 暗茶褐色土 C軽石
- 8 暗茶褐色土 C軽石 若干の炭化物

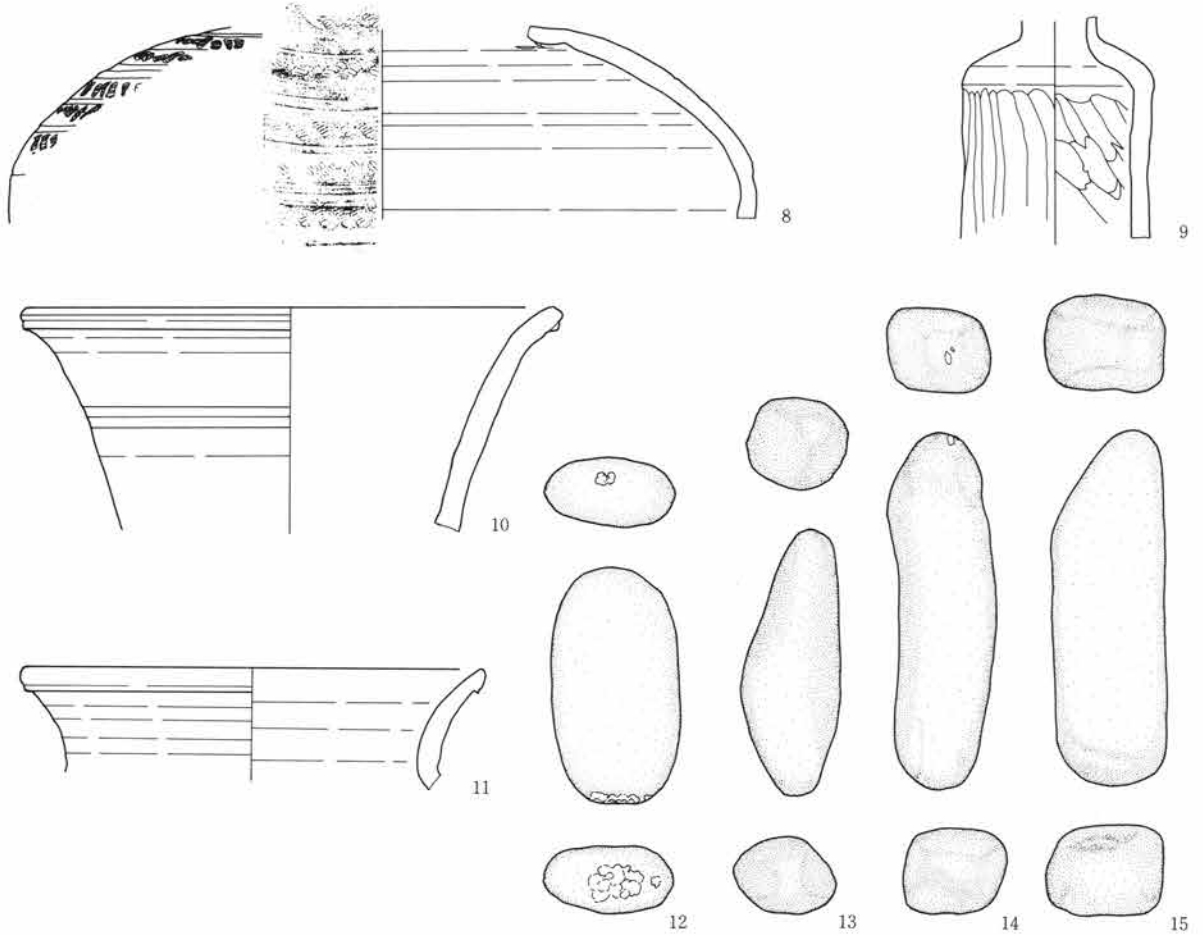


第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	11.8・10.4・4.1 完形 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、底部との間に稜をもつ。底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	11.0・—・— 1/8 細砂粒 軟質 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されているが単位不明。
3	須恵器 蓋 覆土	11.0・—・3.6 1/8 粗砂粒・白色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、過半までは回転ヘラ削り。
4	土師器 鉢 覆土	15.6・9.0・7.5 2/3 粗砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削りが施されているが単位不明。底部は不定方向へのヘラ削り。
5	土師器 短頸壺 床下 覆土	8.0・—・6.5 1/2 粗砂粒・雲母 軟質 橙色	口縁部は直立し、頸部に段をもつ。底部は丸底で胴部は内湾ぎみに立ち上がる。外面の口縁部は横撫で。胴部は右方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。内面の胴部は横方向へのヘラ撫でが施されている。
6	土師器 短頸壺 床上4.5cm 覆土	13.0・6.4・11.6 1/2 粗砂粒・褐色鉱物粒 普通 にぶい黄橙色	口縁部は直立ぎみで口唇部は僅かに外反する。頸部に弱い段をもつ。胴部は上位でふくらみ、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、胴部は右方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
7	土師器 甑 床上4.5cm～ 12cm カマド	19.4・3.0・13.6 1/3 粗砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的でやや開く。頸部には段をもつ。胴部は下半で底部に向けて丸みをもちつぼまる。底部には不整円を1孔もつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は斜め方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴		
8	須恵器 短頸壺 床直	—・—・—、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	大型の短頸壺。胴部は2条ずつの凹線に区画され、区画された内には短かい櫛描文が施されている。櫛描文は上下で逆方向を向いている。		
9	須恵器 瓶子、床直	—・—・—、1/2 粗砂粒、還元焰、浅黄色	ロクロ回転方向不明。外面胴部は縦方向へラ削り後横撫で、内面はへラ撫でが施されている。		
10	須恵器 甕 床直、床上4cm	28.2・—・—、小片 細砂粒、還元焰、灰白色	口縁部は上位で外反し、中位に2条の浅い凹線がまわる。口唇端部は平坦で外傾し、端部下に1条の凸帯がまわる。		
11	須恵器 甕 覆土	24.8・—・—、小片 細砂粒、還元焰軟質 灰白色	口縁部は外反し、口唇部は折り返し。		
No	種類・器形	出土位置	計測値	石材	特徴
12	石製品打斧	床直	12.5・6.75・3.6cm	黒色頁岩	両端に敲打痕がみられる。
13	石製品菰編石	床直	14.0・5.3・4.0cm 400g	変質安山岩	敲打痕・擦痕はみられない。
14	石製品菰編石	床直	18.5・6.0・4.75cm 950g	石英閃緑岩	端部に敲打痕がみられる。
15	石製品石鏃	床直	18.7・5.2・4.4cm	黒色安山岩	敲打痕・擦痕はみられない。

S J 73

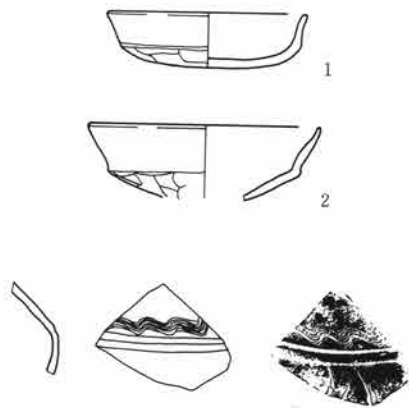
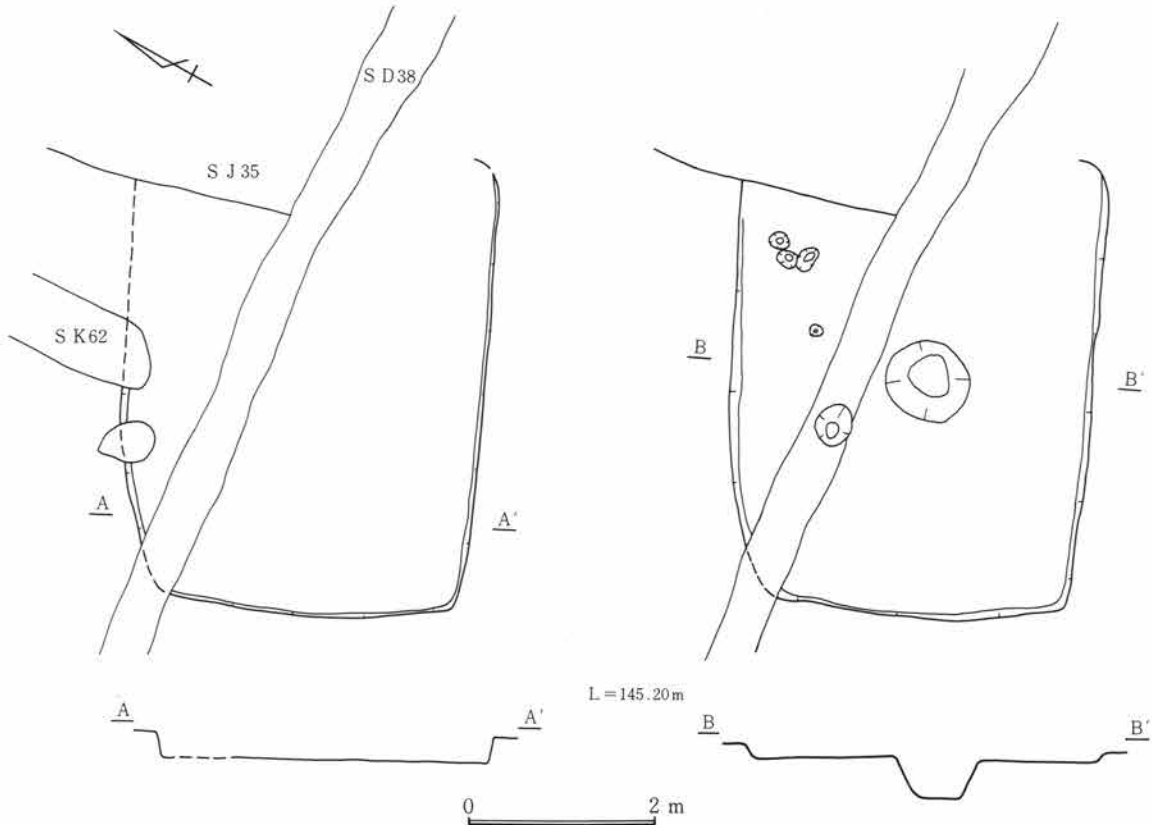
98

本住居跡は、99～101H—29～32グリッドに位置し、東側道地区、No.8 C・B地区に分割されて調査され、S K 62、S D 38、S J 35と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西4.76m、南北3.84m、面積は、推定で18.91m²を測る。主軸方向は、N—67°—Eを測る。

床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、3～21cmを測り、平均10cmである。

カマドは、東壁の南よりに位置するが、大部分がS D 38によって切られ、右袖部の一部が残存する。

掘り方は、床面から4～7cmほどの掘り込みで全体的に浅い。床下の施設は、ほぼ中央に楕円形で径86×82cm、深度41cmの床下土壇が1基検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	10.4・9.6・3.0 完形 細砂粒、やや軟質 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に稜をもつ。底部は極ゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で底部はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	12.2・10.2・—、1/5 細砂粒、普通 にぶい黄橙色	口縁部は外傾し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削りが施されている。
3	須恵器 長頸壺 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	肩部端部に凹線が1条まわり、その上に波状文が施されている。

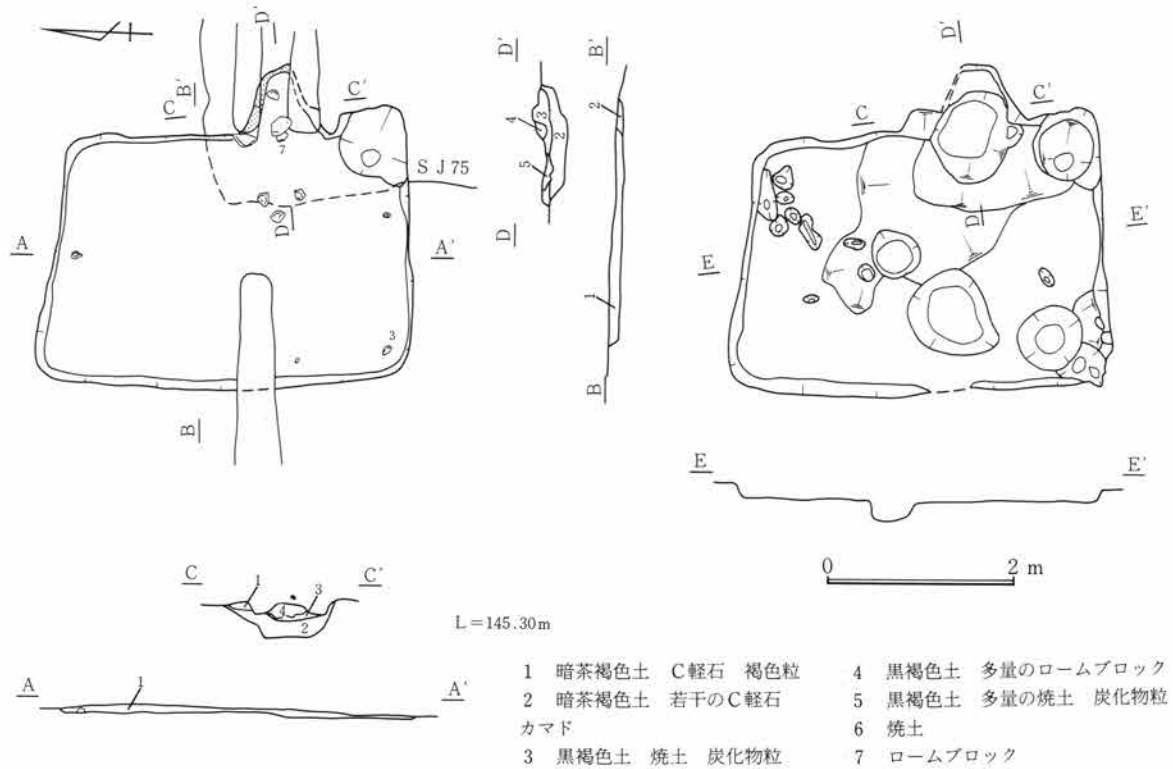
S J 74

本住居跡は、101～103H-27～28グリッドに位置し、畠状遺構01、S J 75と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが畠状遺構01より古く、S J 75より新しい。平面形態は、歪んだ長方形を呈す。規模は、東西2.85m、南北3.90m、面積10.52m²を測る。主軸方向は、N-85.5°-Eを指す。

床は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が3～8cmと確認面から床面までが浅いため不明である。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径90×75cm、深度34cmを測る。

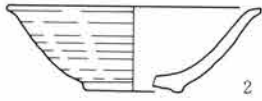
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、煙道部は畠状遺構01によって確認できなかった。規模は、全長85cm、幅165cmを測り、焚口部は壁外に60cmのびる。左袖部は、地山をそのまま掘り残して使用している。

掘り方は、床面より2～8cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、ほぼ中央に円形で径50cm前後、深度21cmのものと西壁よりに楕円形で径70×65cm、深度42cm、楕円形で径100×85cm、深度20cmの3基の床下土壇が検出された。

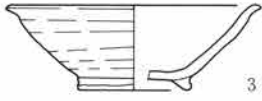


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 覆土	13.0・6.8・3.5 1/8 細砂粒 普通 赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、口唇部は直立する。底部は平底を呈す。口唇部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。

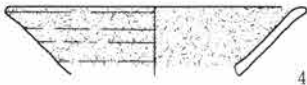
第4節 歴史時代



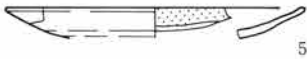
2



3



4

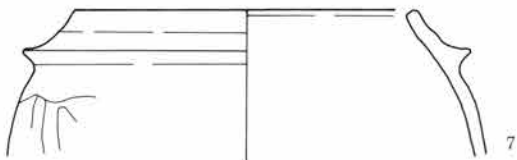


5

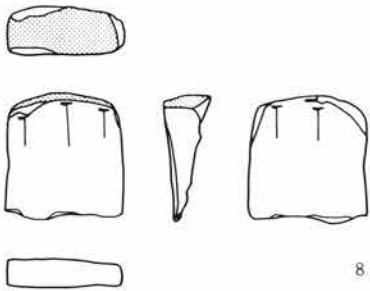


6

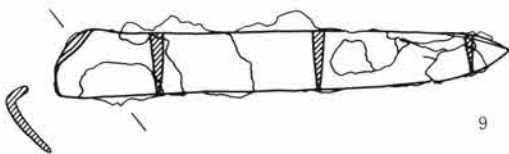
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 碗 カマド袖 上面	13.6・5.4・4.5 1/10 粗砂粒 酸化焰 橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもち開く。高台は低く断面四角形で接地面は広い。
3	須恵器 碗 床直	13.2・6.0・4.5 1/2 白色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、高台は断面三角形を呈し直立する。
4	須恵器 坏 覆土	16.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰燻焼成 灰黄褐色	ロクロ回転方向不明。口縁部は僅かに外反する。
5	灰釉陶器 皿 床直	16.0・—・— 小片 細砂粒、緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。施釉は刷毛塗り、釉調は不透明な灰白色を呈す。
6	土師器 甕 床直	—・6.4・— 小片 細砂粒 普通 褐色	外面はヘラ削り。



7



8



9

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 羽釜 カマド底部より 7cm	18.6・—・— 小片 細砂粒 酸化焰 赤褐色	口縁部は内湾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部は大きくふくらむ。鐙は断面三角形を呈す。胴部は縦方向へのヘラ削り。
No	種類	観察表掲載頁	
8	石製品 砥石	832	
9	鉄製品 鎌	891	

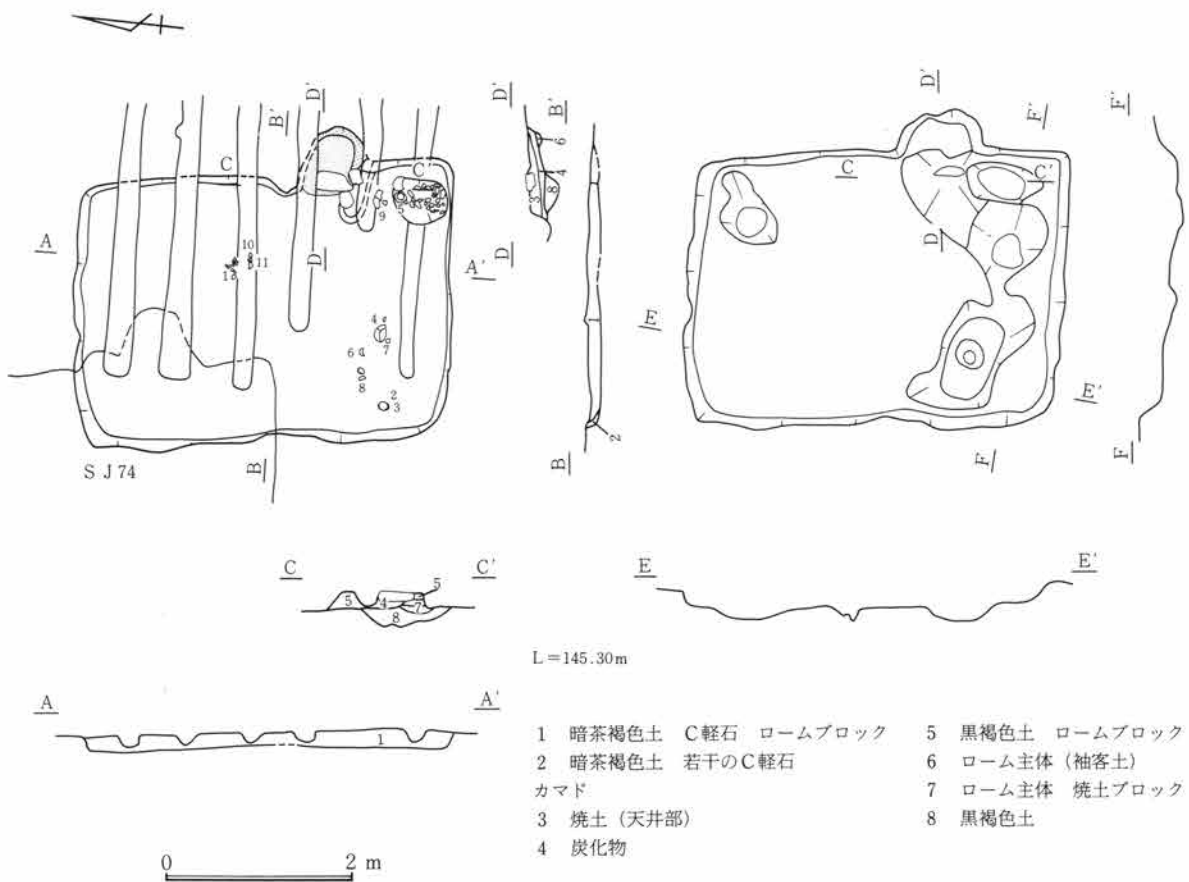
S J 75

本住居跡は、100～102H-26～28グリッドに位置し、畠状遺構、S J 74と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.82m、南北3.98m、面積11.27㎡を測る。主軸方向は、N-79°-Eを指す。

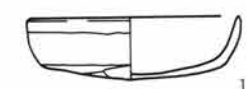
床は、貼床が施されている。壁は、やや緩かに立ち上がり、壁高は、7～19cmを測り、平均11cmである。貯蔵穴は、東南隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径58×45cm、深度31cmを測る。貯蔵穴内部は、底部から10cmの位置に5cm大の円礫が敷かれている。貯蔵穴内からは、須恵器坏(4)、土師器甕(5)が出土している。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも良い状態で残っている。規模は、全長100cm、幅97cmを測り、燃烧部の一部から煙道部にかけては壁外に46cmのびる。天井部と袖部は、角柱状の加工石を使用して構築されている。

掘り方は、床面より5～10cmほど掘り込まれている。床下の施設は、東北コーナーよりに楕円形で、径64×47cm、深度9cmのものと、南壁よりに円形で、径80～85cm、深度17cmのものと、西南コーナーに長楕円形で、径120×65cm、深度14cmの床下土壇が3基検出された。



第4節 歴史時代



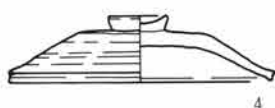
1



2



3



4



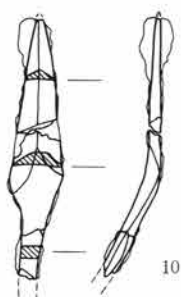
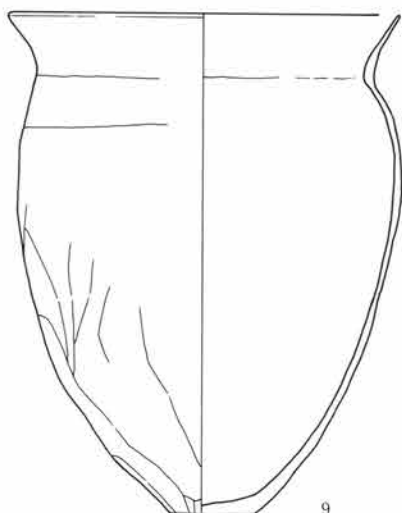
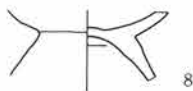
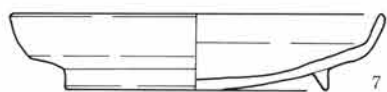
5



6



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下 4 cm	11.6・9.8・3.2 3/5 粗砂粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、口唇部は直立する。底部は平底を呈す。口唇部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
2	土師器 坏 床下 5 cm	11.6・9.8・3.1 完形 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は丸みをもち開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向へのヘラ削りが施されている。
3	土師器 坏 床下 5 cm	12.6・10.2・3.1 完形 細砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、口唇部は直立する。底部は平底を呈す。口唇部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
4	須恵器 蓋 床直	14.0・鈕3.2・3.5 完形 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井部は直線的に開く。口唇部は折り曲げて直立する。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。
5	須恵器 坏 貯蔵穴底部より 1 cm	12.0・7.5・3.6 完形 粗砂粒・亜角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。
6	須恵器 坏 床直	8.4・4.4・3.9 完形 粗砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口唇部は僅かに外反し、底部は不定方向へのヘラ削り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 皿 床直	19.8・18.0・4.0 1/3 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焙 オリーブ灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は直線的でほとんど開かない。高台は直立ぎみ、底部は丸底を呈し、回転ヘラ削り。
8	土師器 台付甕 床直	—・—・— 小片 細砂粒 普通 褐色	台付甕脚部、脚部は横撫で。
9	土師器 甕 貯蔵穴覆土 床下	21.0・4.3・26.5 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、胴部は上位にふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は上位で横方向へのヘラ削り。中位以下は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
No	種 類	観察表掲載頁	
10	鉄製品 鈍	894	
11	鉄製品 刀子	892	

S J 76

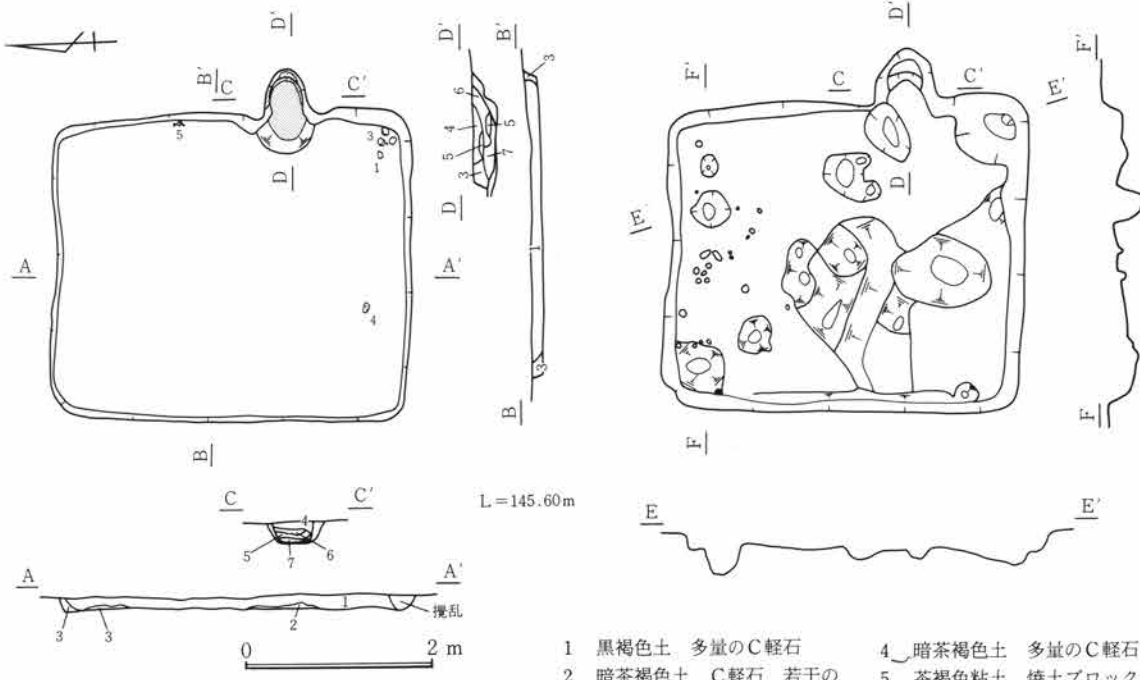
101

本住居跡は、114～116H—34～36グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西3.28m・南北3.83m、面積12.16㎡を測る。主軸方向は、N—91°—Eを指す。

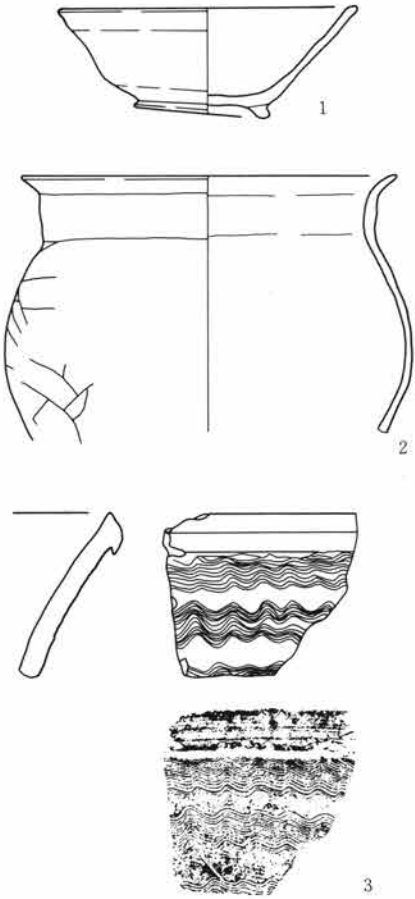
床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、13～20cmを測り、平均は15cmである。壁溝は、床面では検出されなかったが、床下では、西壁下にみられ、幅10cm、深度7cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合良好な状態で残っている。規模は、全長114cm、幅104cmを測り、燃烧部の一部は壁外に57cmのびる。袖部は、地山をそのまま利用して構築している。

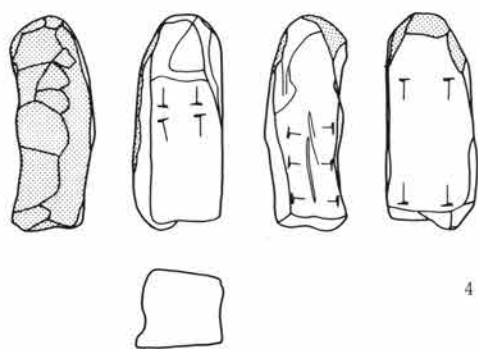
掘り方は、床面より7～20cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、北壁よりに円形で径36cm、深度32cmのものと、楕円形で径40×32cm、深度10cmのピットが2基検出された。



- 1 黒褐色土 多量のC軽石
 - 2 暗茶褐色土 C軽石 若干のロームブロック
 - 3 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒
 - 4 暗茶褐色土 多量のC軽石
 - 5 茶褐色粘土 焼土ブロック
 - 6 茶褐色粘土 焼土粒
 - 7 灰
- カマド



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 床下 貯蔵穴底部直上、覆土	15.8・7.2・5.8 2/3 細砂粒・雲母 還元焰 浅黄色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、高台は断面四角形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切りで周辺部分は高台貼付時の撫で。
2	土師器 甕 床直 貯蔵穴底部直上	20.0・ - ・ - 1/8 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は中位にふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部上位は左方向へのヘラ削り、中位は斜め方向へのヘラ削り。内面の胴部は横方向へのヘラ撫でが施されている。
3	須恵器 甕 床下12cm	- ・ - ・ - 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 亜角礫 還元焰 灰色	口縁部は外反し、波状文が施されている。口唇部は折り返し。



No.	種類	観察表掲載頁
4	石製品 砥石	832
5	鉄製品 刀子	891



S J 77

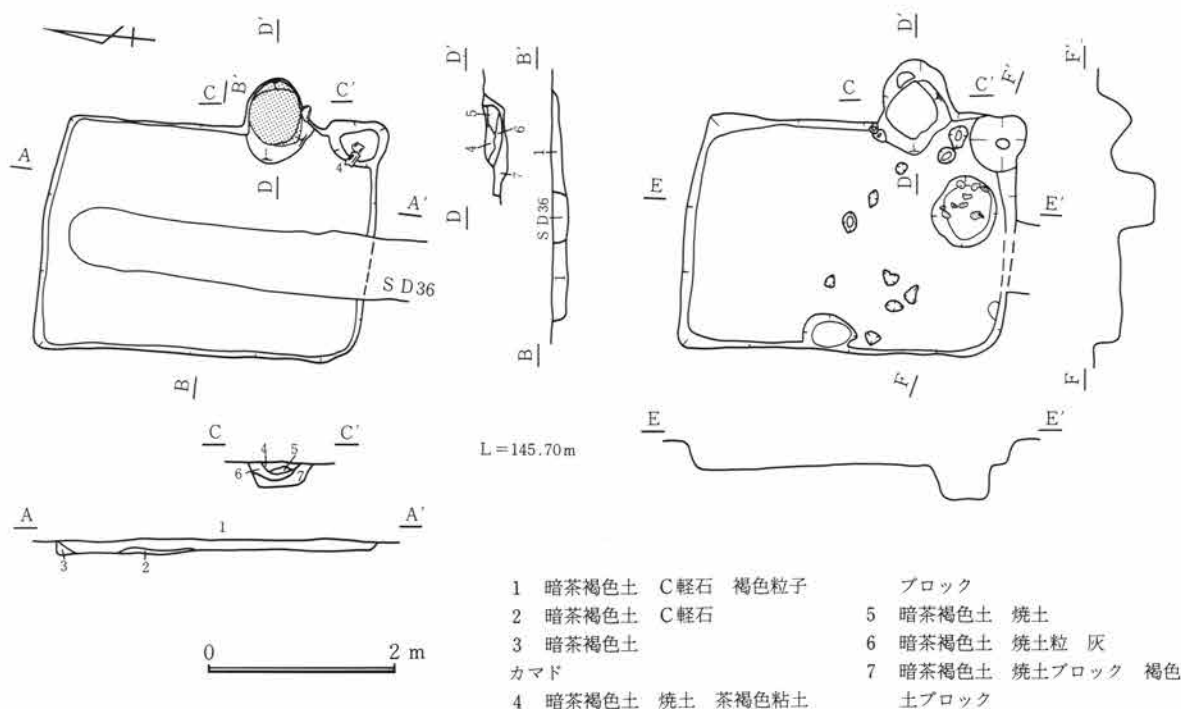
103

本住居跡は、117~118H-33~35グリッドに位置し、S D36と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.46m・南北3.60m、面積8.69m²を測る。主軸方向は、N-91°-Eを指す。

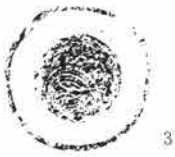
床は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、9~16cmを測り、平均は13cmである。貯蔵穴は、東南コーナーに位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径60×47cm、深度15cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、煙道部は確認面より上位に位置するため検出されなかった。規模は、全長102cm、幅97cmを測り、燃焼部の大部分は、壁外に57cmのびる。袖部は、壁内にはほとんどのびず、右袖部には加工石が利用されている。

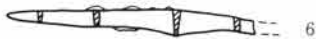
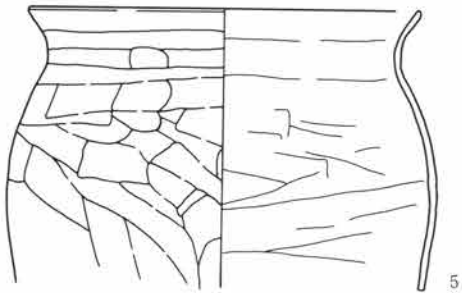
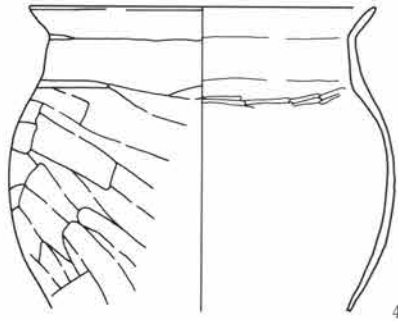
掘り方は、床面より6~11cmほど掘り込まれている。床下の施設は、西壁中央の壁際に楕円形で、径58×35cm、深度30cmのものと、貯蔵穴の西南に円形で、径70cm、深度30cmを測り、上面より10数個の礫が出土している床下土壇が検出された。



第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	13.0・7.8・2.8 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部はやや丸みをもち開く。底部は回転糸切り。体部に糸切りの失敗の痕跡がみられる。
2	須恵器 皿 覆土	13.8・9.2・3.2 1/4 細砂粒 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は「ハ」の字状に開く。
3	須恵器 碗 床直 貯蔵穴	—・7.4・— 1/2 粗砂粒 還元焰 浅黄色	ロクロ右回転。高台は細身で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	土師器 甕 貯蔵穴底部直 上	18.4・—・— 細砂粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位にふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部はやや斜めのへら削り、内面の胴部はへら撫でが施されている。
5	土師器 甕 覆土	20.8・—・— 1/8 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部は上位で右方向へのへら削り。中位以下は斜め方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫でが施されている。
No	種 類	観 察 表 掲 載 頁	
6	鉄製品 刀子	891	

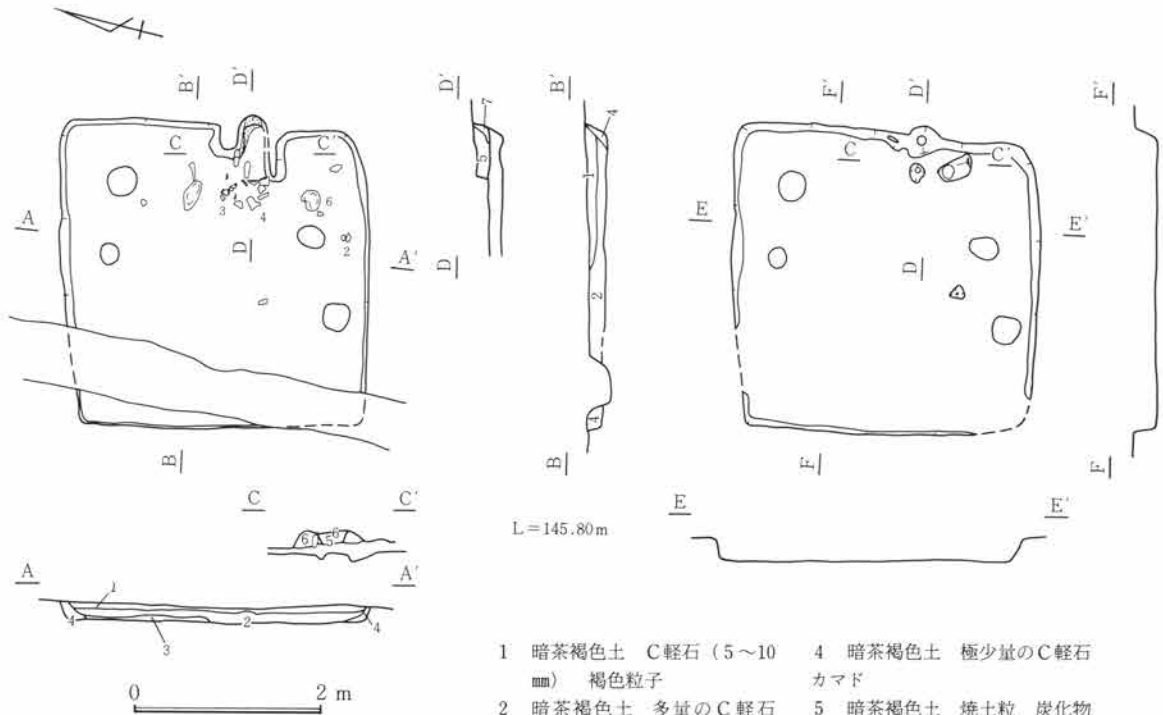
S J 78

本住居跡は、121~123H-42~43グリッドに位置し、S D 31と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、やや歪んだ方形を呈す。規模は、東西3.19m・南北3.18m、面積9.95m²を測る。主軸方向は、N-79.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

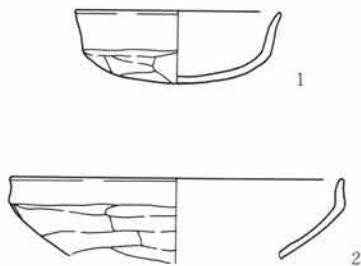
床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、13~19cmを測り、平均17cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央よりやや南に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は、両袖部とも良好な状態で残っている。規模は、全長70cm、幅83cmを測り、焚口部の一部は壁外に12cmのびる。焚口部には、円柱状の自然石が支脚として使用されている。

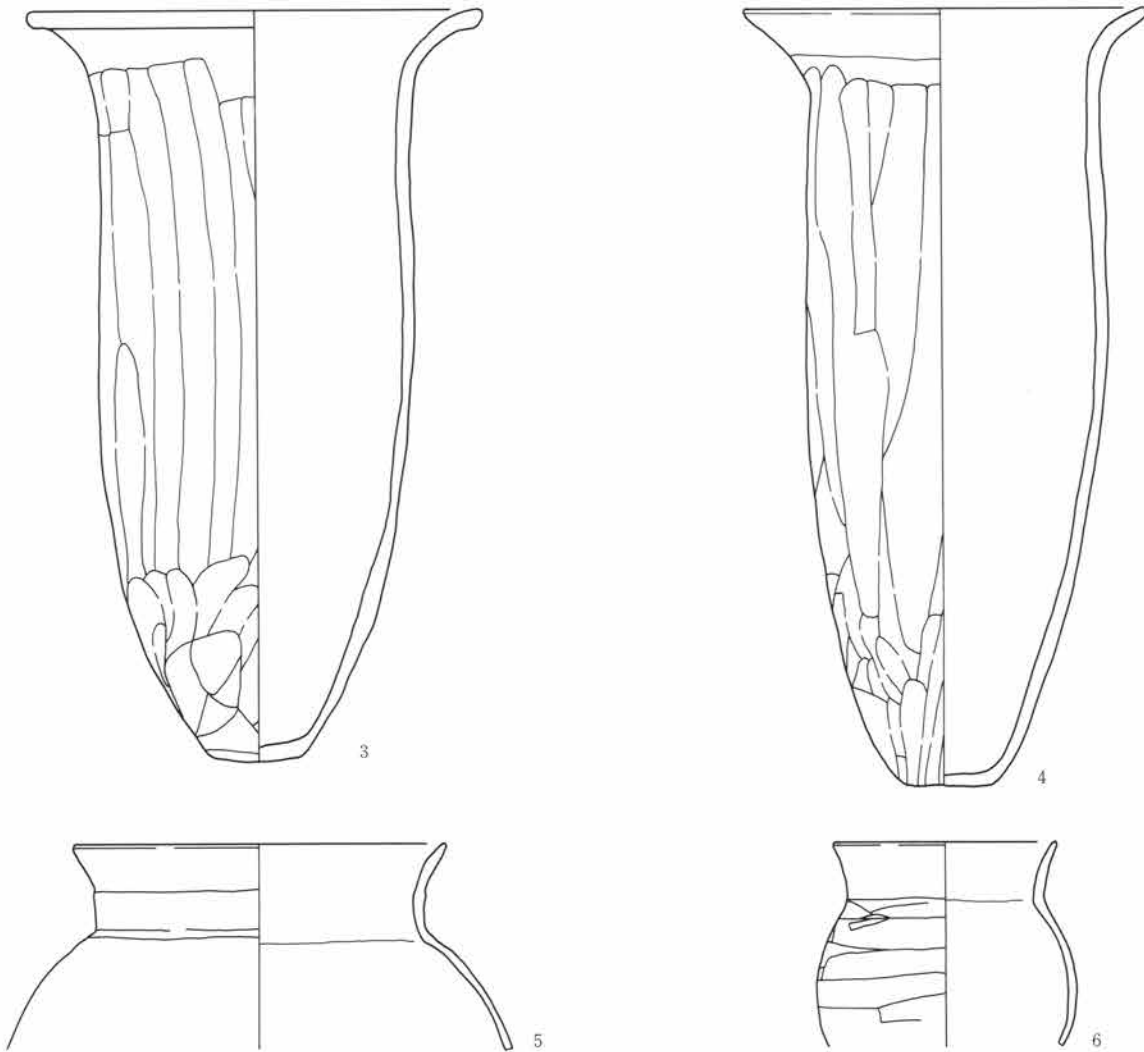
掘り方は、床面より8cm前後掘り込まれ、ほぼ平坦である。



- 1 暗茶褐色土 C軽石（5~10mm） 褐色粒子
- 2 暗茶褐色土 多量のC軽石（10mm程度） 褐色粒子
- 3 暗茶褐色土 ロームブロック
- 4 暗茶褐色土 極少量のC軽石 カマド
- 5 暗茶褐色土 焼土粒 炭化物
- 6 暗褐色土 焼土粒 C軽石
- 7 暗茶褐色土 焼土粒 ロームブロック



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	10.8・10.2・3.8、2/3 細砂粒・雲母、普通 橙色	口縁部は外反し、底部との間に弱い稜をもち、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 床直	17.8・18.0・ —、1/6 粗砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部との間に稜をもち、口唇部でやや外反する。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。



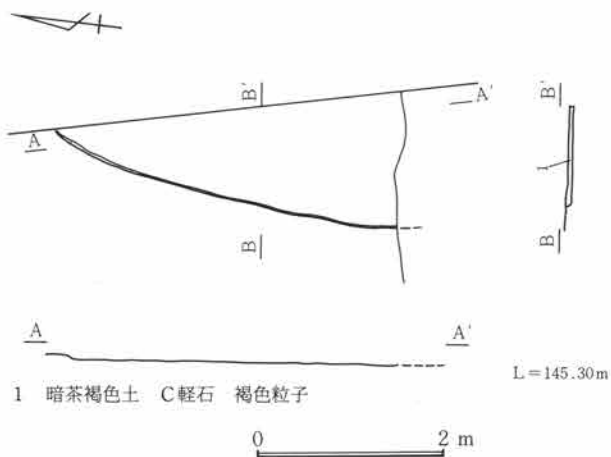
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 甕 床直 カマド	24.0・6.0・39.8、3/5 粗砂粒 普通 褐色	長胴型を呈し、口縁部は大きく開く。外面の口縁部は横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
4	土師器 甕 床直 カマド	21.4・4.4・41.2、3/4 粗砂粒・褐色鉱物粒 普通 褐色	長胴型を呈し、口縁部は大きく開く。外面の口縁部は横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
5	土師器 甕 覆土	19.8・—・—、小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は下半は直立し、上半はやや外反する。胴部は球状の丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
6	土師器 壺 床直	11.6・—・—、1/10 細砂粒・褐色鉱物粒 軟質 黄橙色	口縁部は直線的にやや開く。胴部は球状の丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。

S J 79

106

本住居跡は、79H-44~46グリッドに位置する。本遺構の大部分は、調査区域外にのび、南側は、攪乱によって壊され残存する部分は、西壁の一部だけであった。

出土遺物は、土師器の甕、須恵器の坏が6点出土したが、いずれも小片のため実測できなかった。



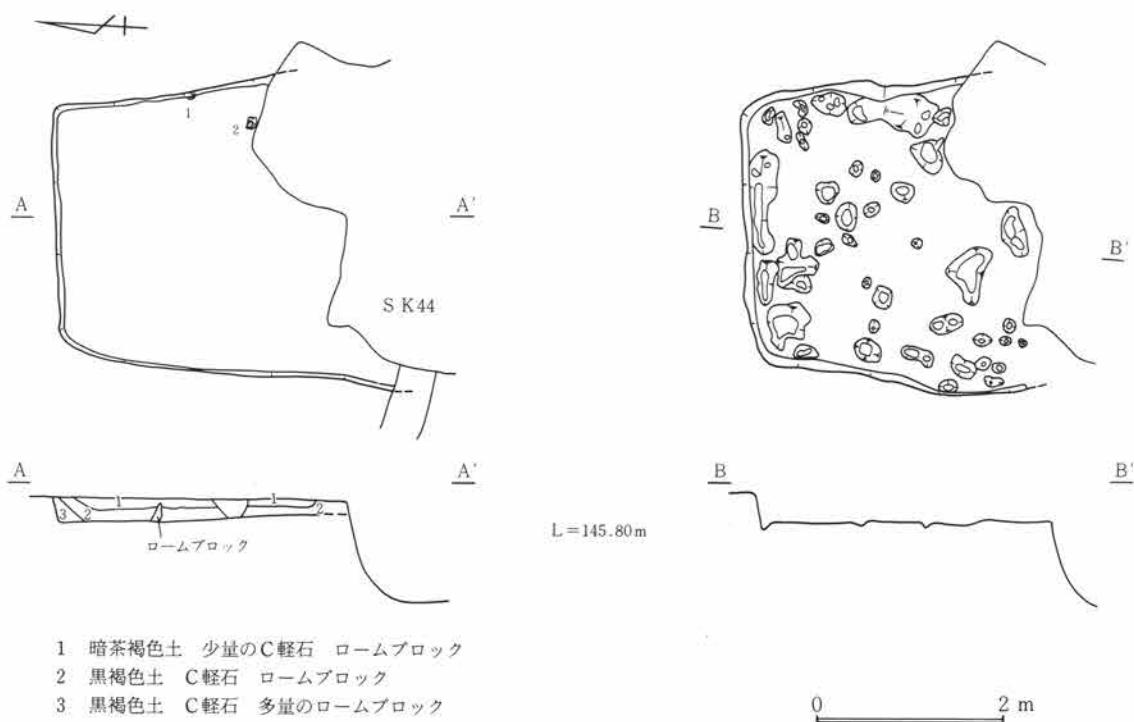
S J 80

106

本住居跡は、116~118H-00~02グリッドに位置し、S K 44と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の南壁側はS K 44に切られ全貌は不明であるが、北壁の短かい台形状を呈す。規模は、東西3.32mを測り、南北は、3.70m以上と推測される。主軸方向は、N-77°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、11~18cmを測り、平均14cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴・カマド等は、検出されなかった。

掘り方は、床面より6~9cmと全体的に浅い掘り込みで、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、北壁際に壁溝状の落ち込みと径25~40cm大のピットが多く検出された。





1

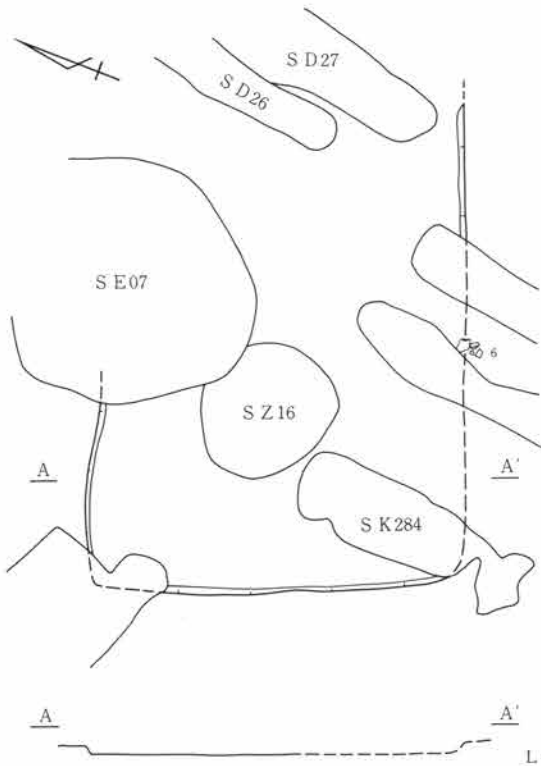


2

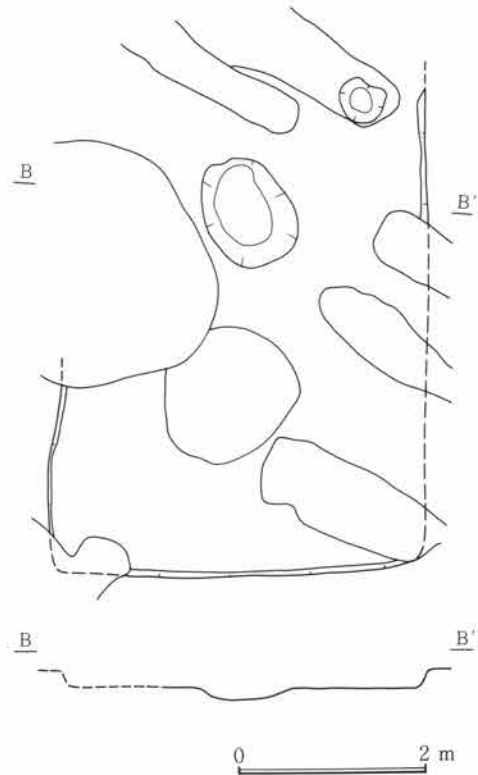
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 短頸壺 床直	7.0・6.6・7.1 5/6 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口唇部は直立し、肩は大きく張り、胴部はあまり開かない。底部は回転糸切り。
2	須恵器 坏 床直	12.2・7.0・4.1 2/3 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反し、底部は回転糸切り。

SJ81

107



L=143.80m



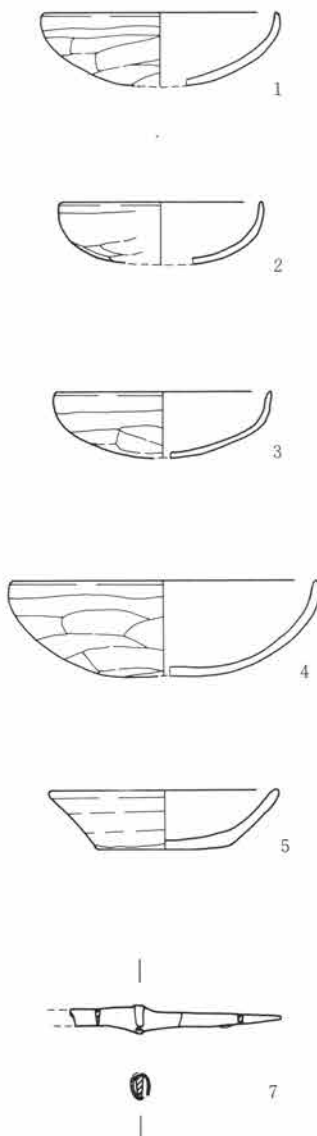
本住居址は、87～89G-37～39グリッドに位置し、S E 07、S D 25・S D 2 6・S D 27、S K 284、S J 67と重複するが、新旧関係は、S J 67より本遺構のほうが新しく、他の遺構より本遺構のほうが古い。本遺構は、

第3章 検出遺構・遺物

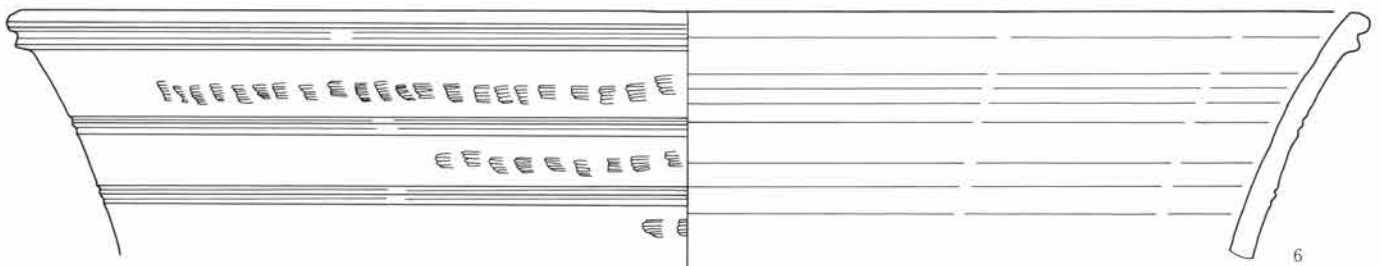
多くの他の遺構との重複や、確認面から床面までが浅いため残存状態は悪く、全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、東西は、5.40m南北4.01m前後と推測させられる。

床面は、貼床が施されている。残存部分では壁溝・柱穴・カマド等は、検出されなかった。

掘り方は、床面より15~23cmほど掘り込まれている。床下の施設は、中央やや東よりに、楕円形で、径116×90cm、深度44cmの床下土坑が1基検出された。



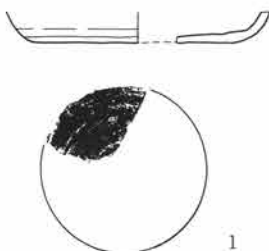
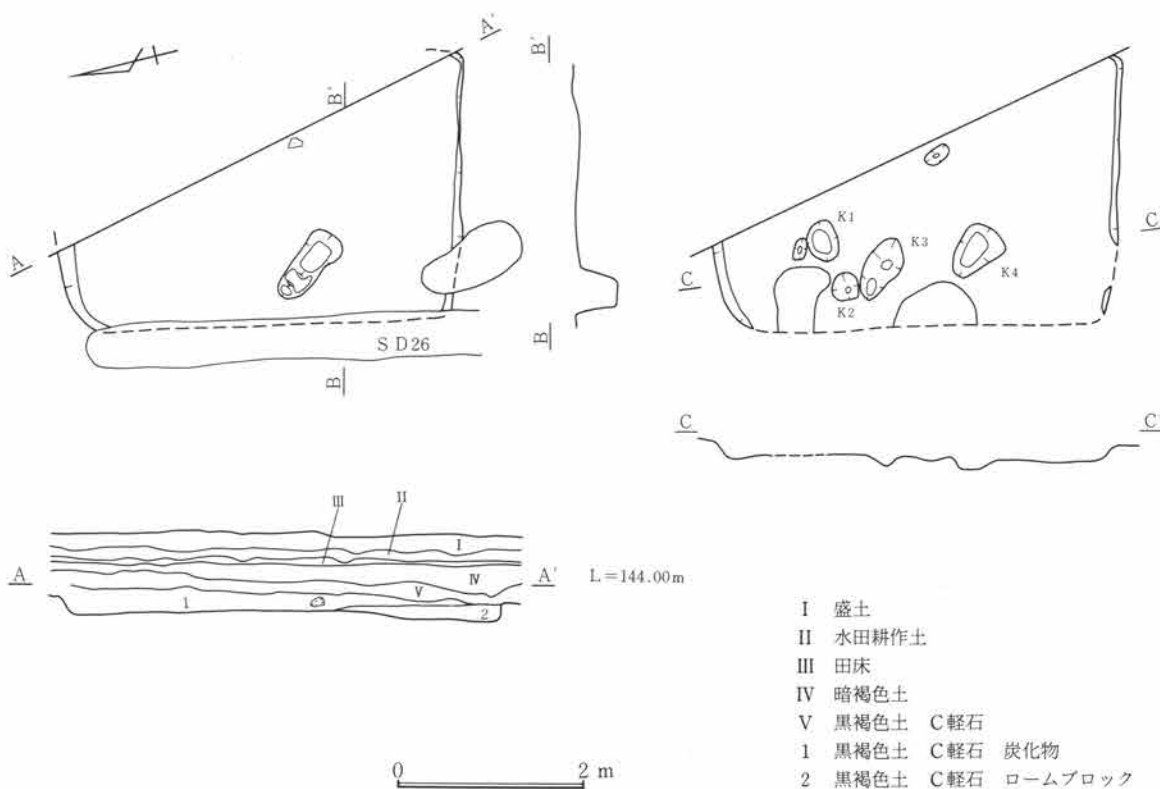
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴		
1	土師器 坏 床直	16.2・7.2・5.0 1/4 細砂粒 普通 暗褐色	口縁部は内湾ぎみで体部はゆるい丸みをもち開く。底部は小径でほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。体部は3段の左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。		
2	土師器 坏 カマド	11.6・10.0・3.5 1/3 細砂粒 普通 にぶい黄褐色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はヘラ削り。		
3	土師器 坏 カマド 覆土	10.8・10.0・— 1/10 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。		
4	土師器 坏 床直	12.2・—・— 1/4 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部内湾ぎみ。体部から底部にかけては丸みをもつ。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。体部は左方向へのヘラ削り。		
5	土師質土器 皿 覆土	12.2・7.0・3.1 2/3 細砂粒・褐色鉍物粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。		
6	須恵器 甕 床直	7.0・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	大甕口縁部は外反し、口唇端部は平坦で外傾する。口唇端部下には1条の凸帯がまわる。口縁部はほぼ3区分され、各区分には2条ずつの沈線がまわり、各区分には櫛描文が施されている。		
No	種類	観察表掲載頁	7	鉄製品 刀子	891



本住居跡は、84～86G-46～48グリッドに位置し、西壁部分でS D26と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の半分は、調査区域外のため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、東西2.90m・南北4.22mを測る。主軸方向は、N-75.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、6～20cmを測り、平均は12cmである。柱穴は、西壁よりに1本検出された。形態は長方形を呈し、規模は径74×37cm、深度20cmを測るが、柱痕は確認されなかった。残存部分では、壁溝・貯蔵穴・カマドは、検出されなかった。

掘り方は、床面より4～13cmほど掘り込まれ、凹凸が多くみられる。床下の施設は、西壁よりに床下土坑が4基集中して検出された。形態・規模は、北よりK₁は楕円形、径54×33cm、深度10cm。K₂は円形、径28～30cm、深度14cm。K₃は楕円形、径70×37cm、深度14cm。K₄は楕円形、径60×45cm、深度15cmを測る。



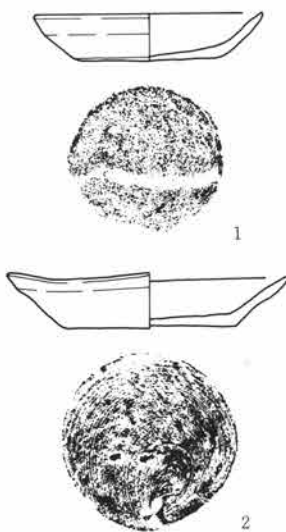
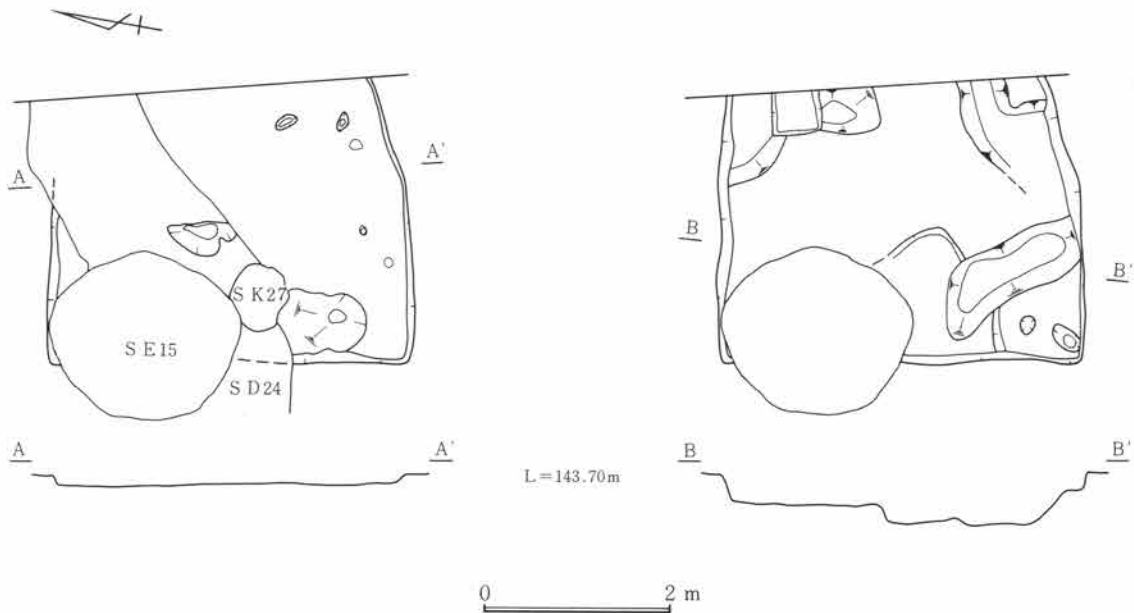
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床下	—・10.8・— 1/10 細砂粒・褐色鉱物粒 還元焰 にぶい黄色	ロクロ回転方向不明。底部は回転ヘラ削り。

S J 84

本住居跡は、79～81G-27～29グリッドに位置し、S E 15、S D 24、S K 27、S J 57と重複するが、新旧関係は、S E 15、S D 24、S K 27より本遺構のほうが古く、S J 57より新しい。本遺構の東壁側は、調査区域外のため全貌は不明であるが、平面形態は、東壁の短かい台形状を呈すと推測される。規模は、南北3.79 mを測る。

床面は、貼床が施されている。確認面から床面までが浅いため、壁の状態等については確認できなかった。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴・カマド等は、検出されなかったが、南壁際に楕円形で、径95×60cm、深度10cmの土壇状の落ち込みが検出された。

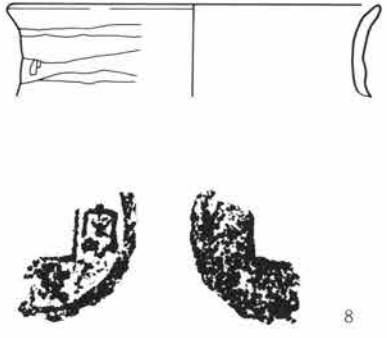
掘り方は、床面より16～20cmほど掘り込まれている。床下の施設は、西南コーナーよりと北壁に床下土壇が検出され、それぞれの形態・規模は、K₁が長楕円形、径160×62cm、深度17cm。K₂が楕円形、径60×45cm、深度9 cm。K₃が長方形、一辺53cm、深度23cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師質土器 皿 床直	12.0・7.8・2.5 3/4 細砂粒・褐色鋳物粒 普通 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。底部は回転糸切りが施されているが摩耗のため詳細は不明。
2	土師質土器 皿 床直	14.8・9.6・2.9 9/10 細砂粒・褐色鋳物粒 普通 にぶい黄橙色	ロクロ左回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。

第4節 歴史時代

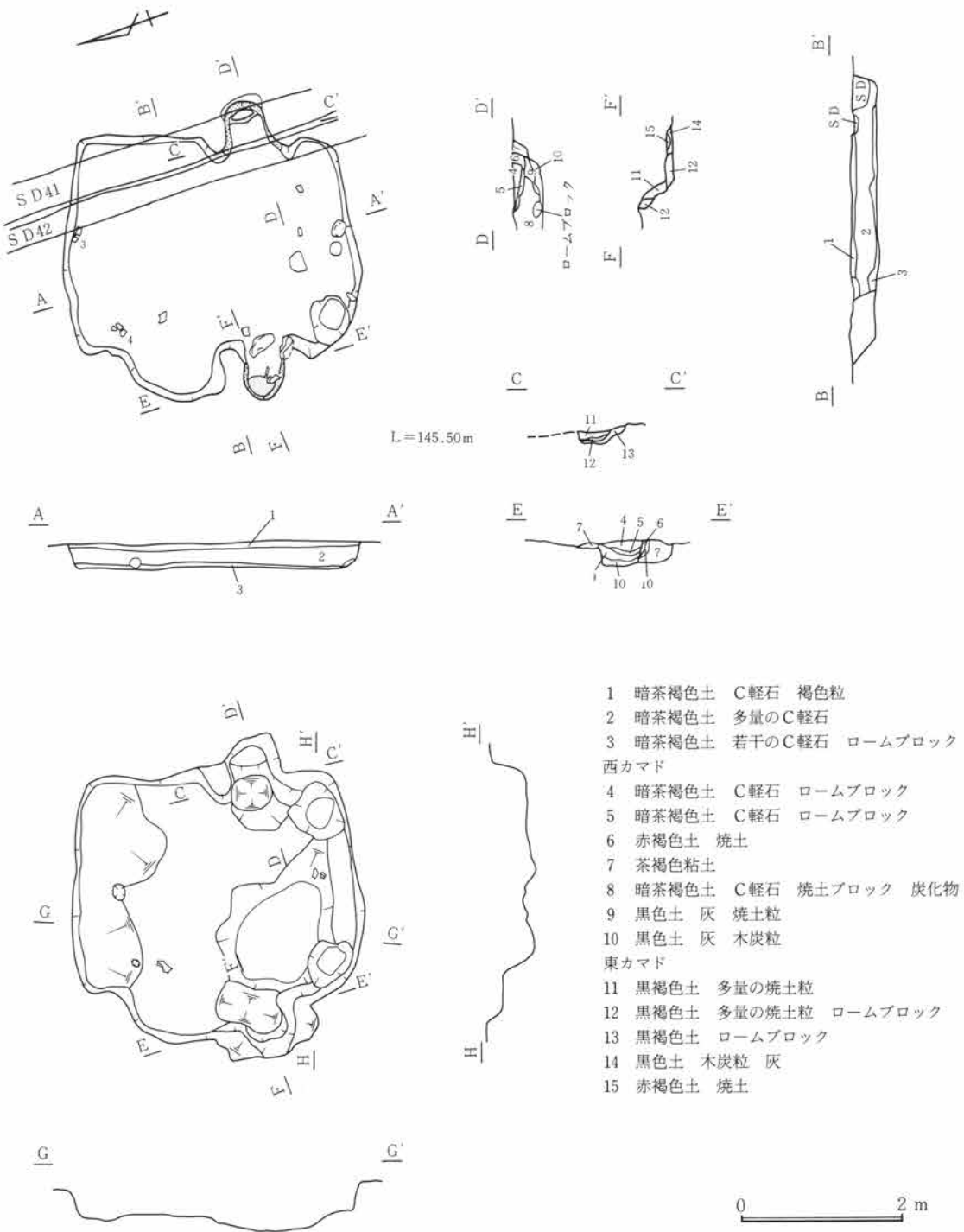
 <p>3</p>	No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
 <p>4</p>	3	須恵器 埴 床直	—・7.0・— 1/2 粗砂粒・褐色鉍物粒 半酸化焰 灰黄色	ロクロ回転方向不明。高台はやや丸みをもつ断面四角形を呈し、底部は回転糸切り。
 <p>5</p>	4	須恵器 埴 覆土	—・6.8・— 1/4 粗砂粒・白色鉍物粒 円礫 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は扁平で接地面が広い。底部は回転糸切り。
 <p>6</p>	5	須恵器 埴 覆土	—・8.0・— 1/4 細砂粒・円礫 還元焰やや軟質 灰白色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈し直立する。底部は回転糸切り。
 <p>7</p>	6	須恵器 皿 覆土	12.4・5.7・2.9 2/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、高台は断面四角形でやや開く。底部は回転糸切り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	土師器 甕 覆土	19.6・—・—、小片 細砂粒・雲母 普通 明赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫で。
No	種	類	観察表掲載頁
8	銅製品	渡来銭	907

S J 85

109



本住居址は、104～106H-40～42グリッドに位置し、S D41・S D42と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、西壁に張り出しをもつ長方形を呈す。規模は、東西3.19m・南北3.68m、面積9.98㎡を測る。主軸方向は、東壁でN-70.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗茶褐色土で覆




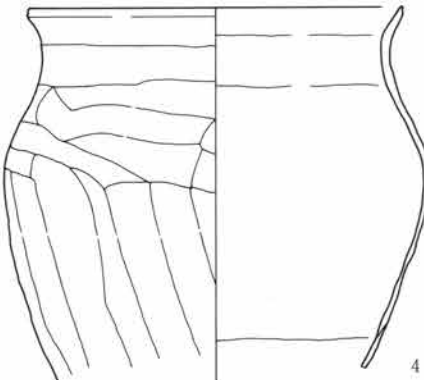
われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、24～33cmを測り、平均は29cmである。貯蔵穴は、西カマドの南、西南コーナー際に位置し、形態は、楕円形を呈し、規模は、径60×47cm、深度34cmを測る。

カマドは、東壁の南よりと西壁の南よりの2ヶ所に存在する。東カマドは、S D41によって上面の多くが壊されているため詳細は不明であるが、規模は、全長91cm、幅135cmを測り、燃烧部から煙道部にかけては、壁外に47cmのびる。袖部は、地山をそのまま掘り残して使用して構築されている。

西カマドは、天井部が崩落している。袖部等は、良好な状態で残っている。規模は、全長110cm、幅130cmを測り、焚口部の一部は壁外に30cmのびる。天井部は、黄褐色粘土で、燃烧部の奥壁は、粘土を貼り付け、袖部は、茶褐色土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より2～10cmほど掘り込まれ、北壁際は、落ち込み状に掘られている。床下の施設は、東南コーナーよりにほぼ円形で、径68cm前後、深度21cmのものと西南コーナーよりに楕円形で、径140×125cm、深度20cmを測る床下土壇が2基検出された。

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
 1	土師器 坏 床直	13.0・9.0・3.4 3/4 細砂粒 普通 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
 2	土師器 坏 床直 カマド	11.8・9.0・3.5 3/5 細砂粒・粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は僅かに外反し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
 3	土師器 坏 床直	11.6・8.4・3.3 3/5 粗砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもち開き、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
 4	土師器 甕 床上10cm カマド	20.0・—・— 2/3 細砂粒・褐色鉾物粒 雲母 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部は上位でややふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部の上位は左方向へのヘラ削り。中位以下は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。

S J 86

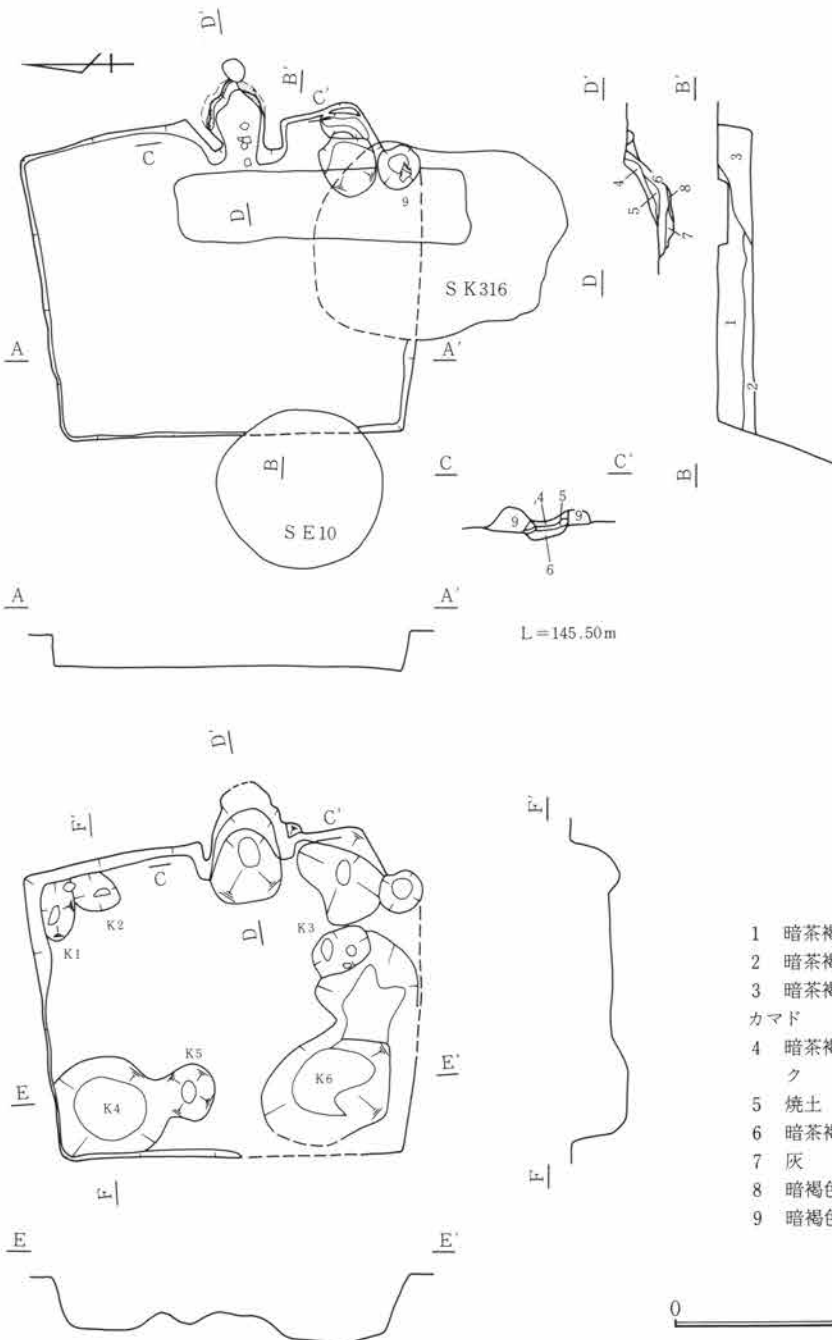
本住居跡は、104～106H-37～39グリッドに位置し、S E 10、S K 316と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、北壁の短い台形状を呈し、東壁は、一直線ではなくカマドの両側でくい違う。規模は、東西3.50m・南北3.75m、面積12.92m²を測る。主軸方向は、N-77.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、30～49cmを測り、平均38cmである。貯蔵穴は、東南コーナーよりに位置し、形態は円形を呈し、規模は径45cm、深度は10cmを測る。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、燃焼部の立ち上がり部分には中世のピットがみられる。規模は、全長110cm・幅120cmを測り、焚口部の一部は壁外に50cmのびる。袖部は、

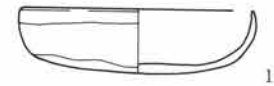
褐色粘土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より4～9cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、壁際より床下土壇が6基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径61×35cm、深度7cm。K₂は楕円形で径54×42cm、深度16cm。K₃は楕円形で径63×43cm、深度18cm。K₄は楕円形で径160×109cm、深度13cm。K₅はほぼ円形で径55～57cm、深度14cm。K₆は瓢箪形で長径234×短径112cm、深度28cmを測る。

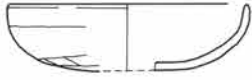


- 1 暗茶褐色土 多量のC軽石 焼土粒 褐色粒
- 2 暗茶褐色土 1層より暗い色調 C軽石
- 3 暗茶褐色土 焼土 炭化物
- カマド
- 4 暗茶褐色土 焼土 炭化物 褐色粘土ブロック
- 5 焼土
- 6 暗茶褐色土 焼土粒 灰
- 7 灰
- 8 暗褐色土 灰
- 9 暗褐色土 焼土 褐色粘土

第4節 歴史時代



1



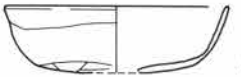
2



3



4



5



6

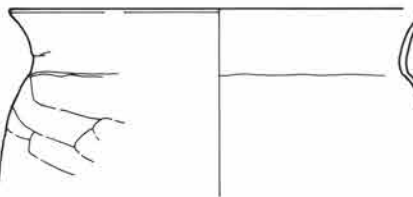
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上12cm	12.4・11.0・3.4、1/4 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾し、底部は平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	12.8・9.8・3.5、1/5 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	13.0・12.0・3.1、4/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部はほぼ直線的にやや開く。底部は極ゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 覆土	13.8・11.6・3.1、1/10 細砂粒 やや軟質 にぶい橙色	口縁部は内湾さみ、底部は平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半と底部は剥離のため不明。
5	土師器 坏 覆土	11.8・9.2・3.5、1/4 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は丸みをもちやや開く。底部は平底を呈す。口縁部の上半はヘラ撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
6	土師器 坏 床直	13.8・10.0・2.9、1/8 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。



7



8



9

7	土師器 甕 貯蔵穴底部直上	20.4・ - ・ - 小片 細砂粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、横撫で。胴部は横方向へのヘラ削り。
8	土師器 甕 床直	19.8・ - ・ - 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、横撫で。胴部はヘラ削り。
9	土師器 甕 貯蔵穴底部直上	21.4・ - ・ - 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部は大きくふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。

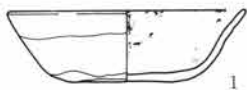
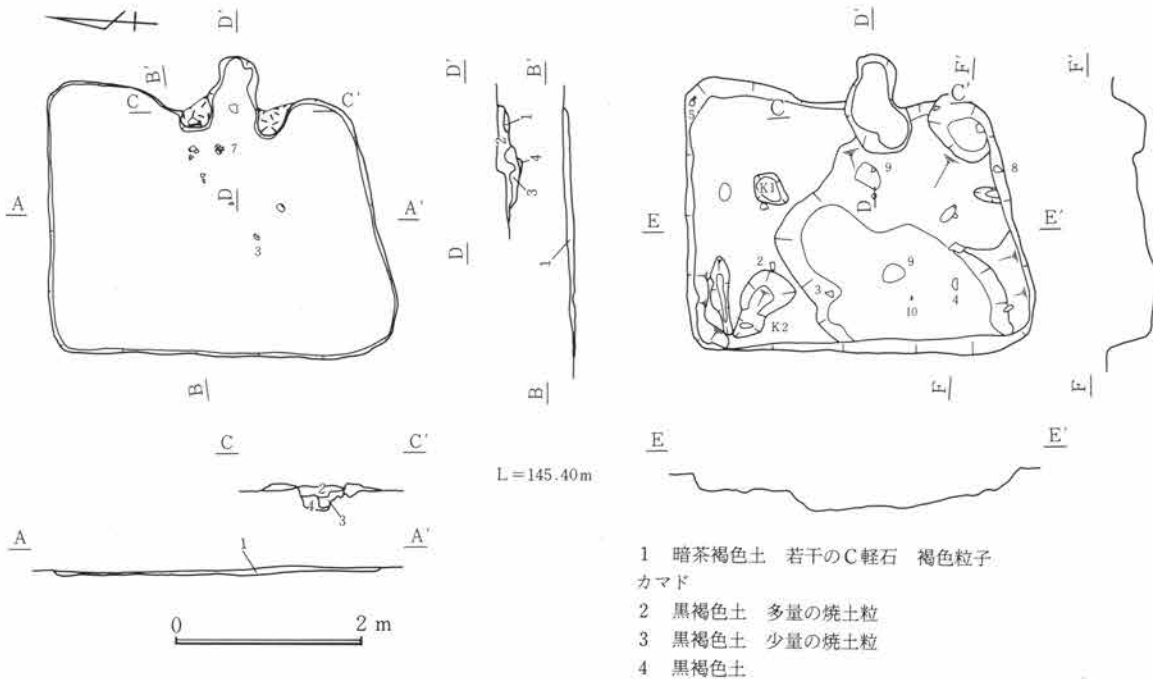
S J 87

本住居跡は、102～103H-38～40グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、大きく歪んだ四角形を呈す。規模は、東西2.84m・南北3.64mで、東壁3.22m、南壁2.82m、西壁3.84m、北壁2.88mで、面積9.35m²を測る。主軸方向は、N-91.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が1～5cmと確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

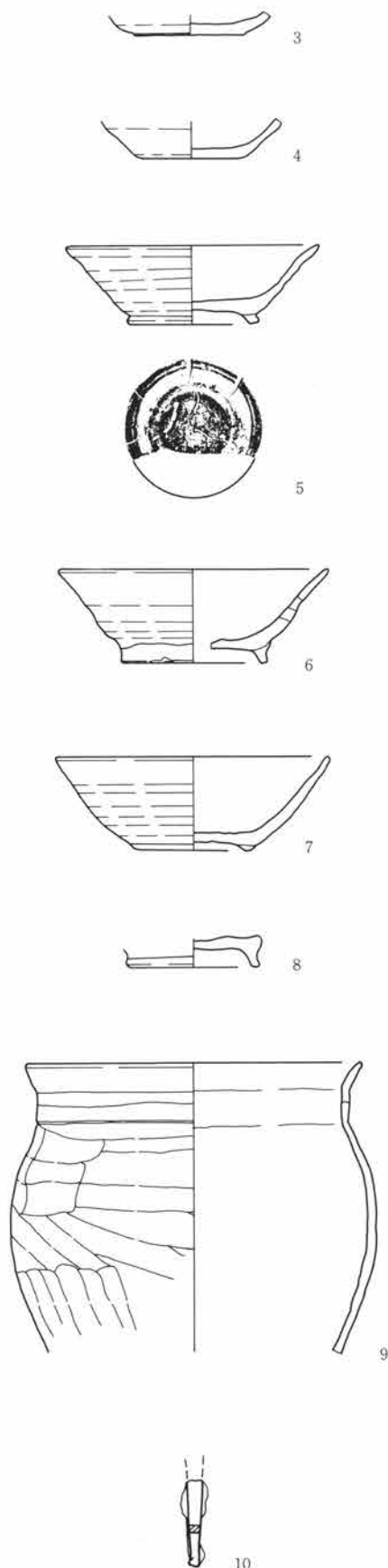
カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は、割合い良好な状態で残っている。規模は、全長87cm、幅115cmを測り、燃焼部の一部は壁外に38cmのびる。袖部は、両袖部とも粘土を使用して構築している。

掘り方は、北半分は床面より11～17cmほどで、南半分は、20～41cmほどで緩やかに落ち込んでいる。床下の施設は、床下土壇が3基検出されている。形態・規模は、K₁が楕円形で、径45×30cm、深度12cm。K₂が楕円形で、径80×45cm、深度20cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド	12.6・8.2・3.8 3/4 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的でやや開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部は指頭による押え。内外の口縁部には煤の付着がみられる。
2	須恵器 坏 床直	—・8.0—、小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。底部回転糸切り。

第4節 歴史時代



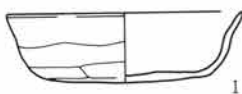
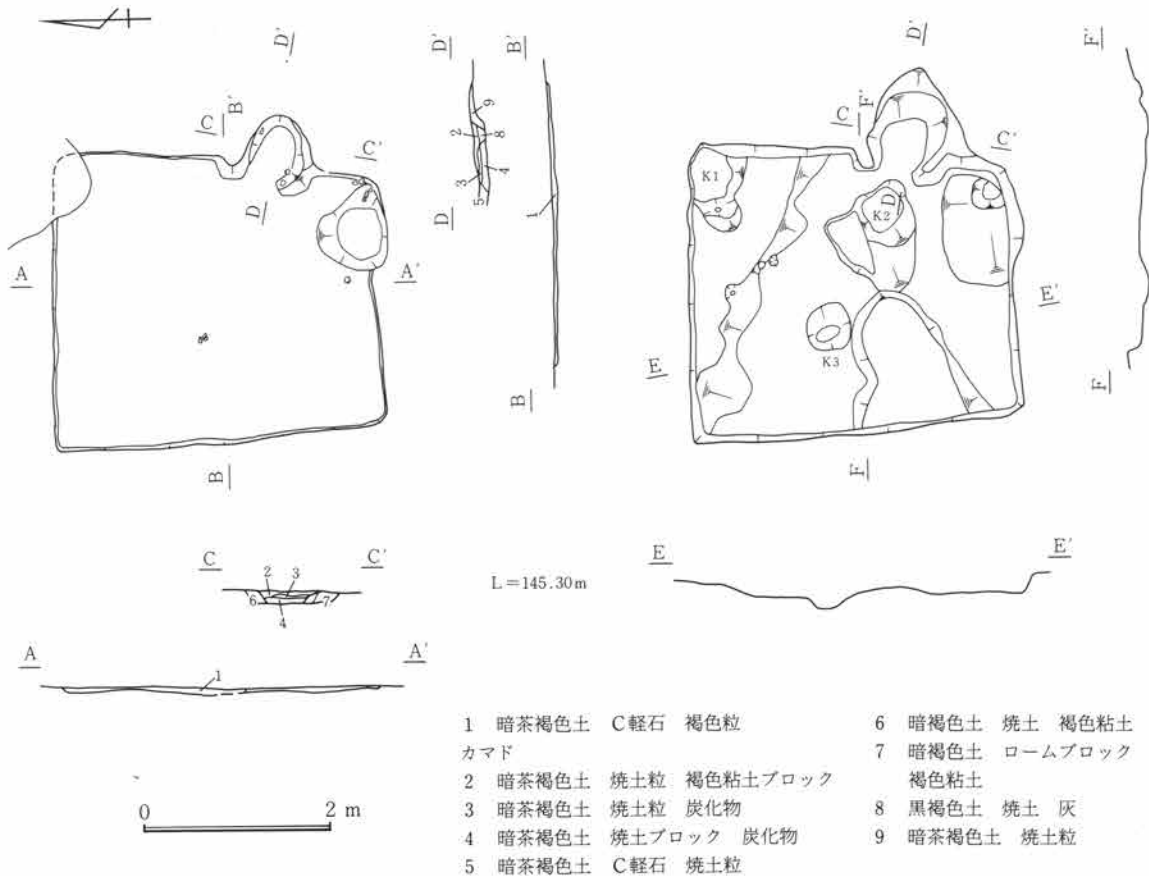
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 坏 床直	—・6.6・— 1/8 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。底部回転糸切り。体部は丸みをもち立ち上がる。
4	須恵器 坏 床直	—・6.0・— 1/8 細砂粒、褐色鉍物粒 酸化焰 褐灰色	ロクロ右回転。底部回転糸切り。
5	須恵器 碗 床上18cm	14.8・7.4・4.6 1/3 細砂粒・角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。高台は断面四角形を呈し、端部は平坦で接地面は広い。底部は回転糸切り後周辺部は高台貼付時による撫でが施されている。
6	須恵器 碗 床直	15.6・8.6・5.5 1/6 黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は断面逆台形状を呈し直立し、端部を数ヶ所へらで押している。底部は回転糸切り。体部断面に巻き上げ痕がみられる。
7	須恵器 碗 カマド火床面	16.0・7.4・5.4 1/3 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。高台は断面半円状を呈し小型。底部切り離し方法は剝離のため不明。
8	須恵器 碗 覆土	—・7.8・— 1/3 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転糸切り。
9	土師器 甕 床直	19.8・—・— 1/4 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は中位にふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部の上半は左方向へのへら削り。下半は縦方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫でが施されている。
No.	種類	観察表掲載頁	
10	棒状不明鉄製品	893	

S J 88

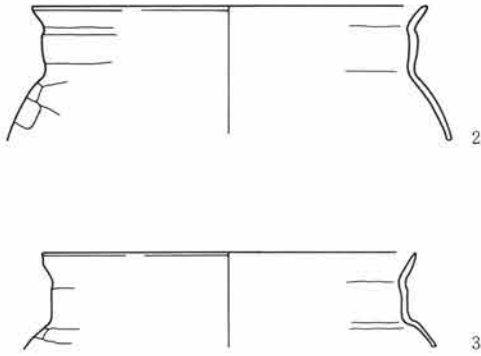
本住居跡は、97～99H-92～93グリッドに位置し、東北コーナーを攪乱によって壊されている。平面形態は、やや歪んだ長方形を呈す。規模は、東西3.13m・南北3.55m、面積10.50㎡を測る。主軸方向は、N-94.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面まで浅いため不明である。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径97×75cm、深度32cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置する。残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長122cm、幅120cmを測り、燃烧部の一部は壁外に82cmのびる。南壁よりとカマドから西北コーナーにかけて溝状に落ち込んでいる。床下の施設は、床下土壇が3基検出された。形態・規模は、K₁が楕円形で、径95×65cm、深度13cm。K₂が三角形に近い形状で、径102×95cm、深度15cm。K₃がほぼ円形で、径47cm、深度9cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下	12.6・8.8・3.7 2/5 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直線的に開く。体部は丸みをもちやや開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 甕 床下13cm	21.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 やや軟質 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、 横撫で、胴部はヘラ削り。
3	土師器 甕 床下	20.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、 横撫で、胴部はヘラ削り。

S J 90

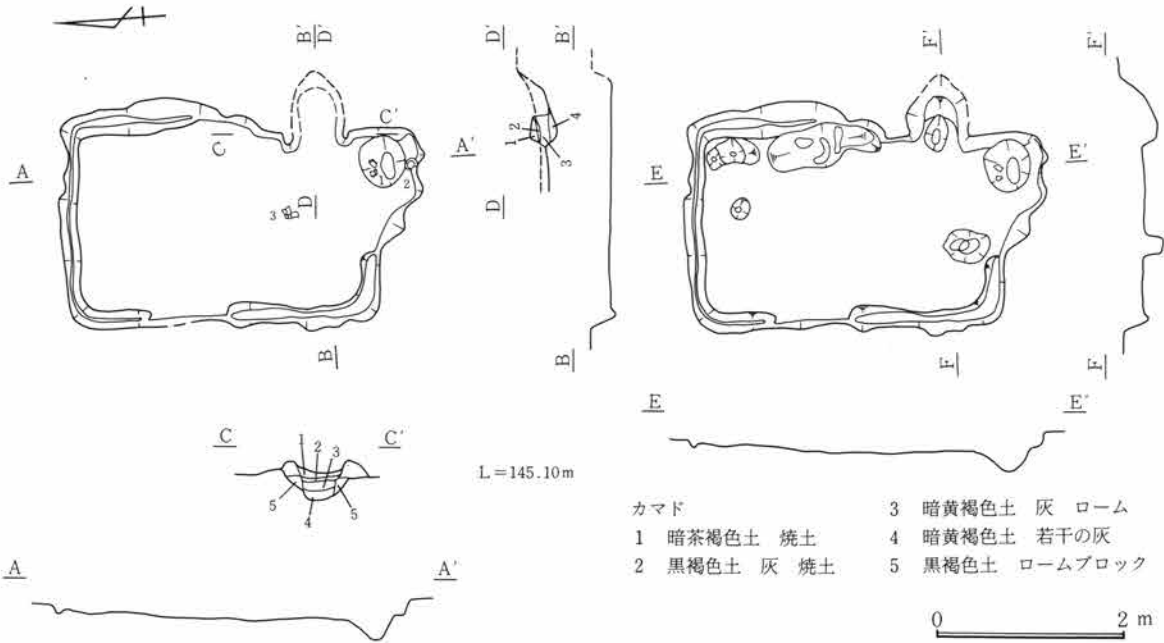
114

本住居跡は、96～97H-23～25グリッドに位置し、畠状遺構が本遺構を覆っている。平面形態は、南壁に張り出しをもつ長方形を呈す。規模は、東西2.39m・南北3.78m、面積7.97m²を測る。主軸方向は、N-92°-Eを指す。

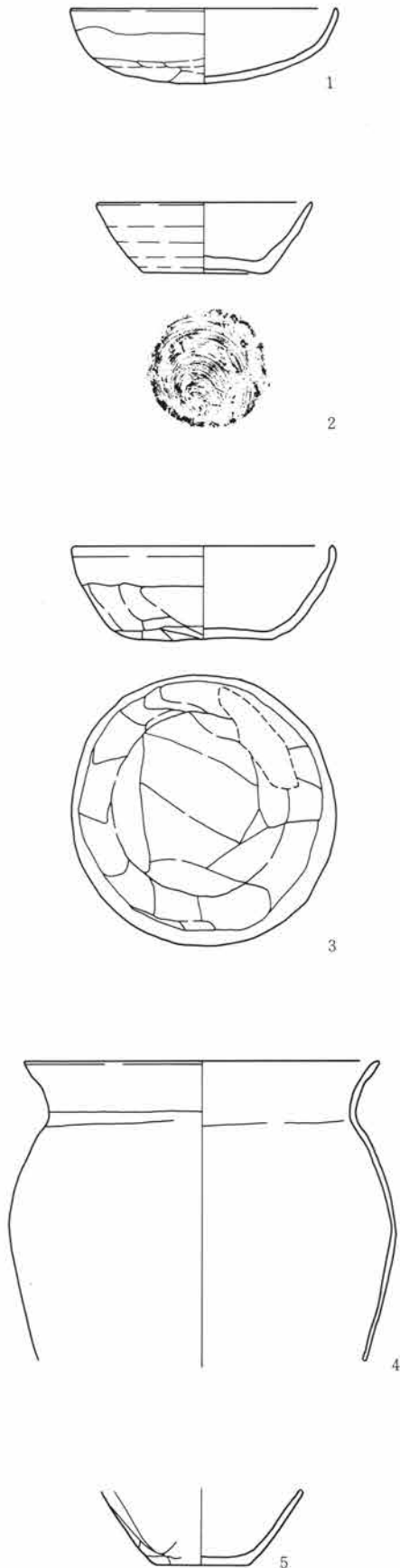
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、13～20cmを測り、平均17cmである。壁溝は、東壁の中央から北壁、西壁の北よりままでと西壁の中央より南壁の張り出しの手前まで周り、幅は10～14cm、深度5～6cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径58×47cm、深度26cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、畠状遺構によって上面は壊されている。規模は、全長85cm、幅77cmを測り、燃烧部の一部は壁外に60cmのびる。袖部は、粘土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より、12～17cmほど掘り込まれている。床下の施設は、東壁際に2基、南壁よりに1基の床下土壇が検出された。



第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 貯蔵穴底部より16cm	15.9・13.4・4.4 2/5 粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直線的でやや開く。底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、底部はヘラ削り。
2	須恵器 坏 床直 貯蔵穴底部より12.5cm	12.8・7.2・4.2 完形 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
3	土師器 碗 床直	15.2・10.4・5.6 完形 粗砂粒・細砂粒 やや軟質 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は横方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
4	土師器 甕 床直	21.0・—・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	器壁は薄く、口縁部は外反し、胴部は上位でふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
5	土師器 甕 カマド 覆土	—・5.6・— 小片 細砂粒 普通 橙色	外面はヘラ削り。内面はヘラ撫で。

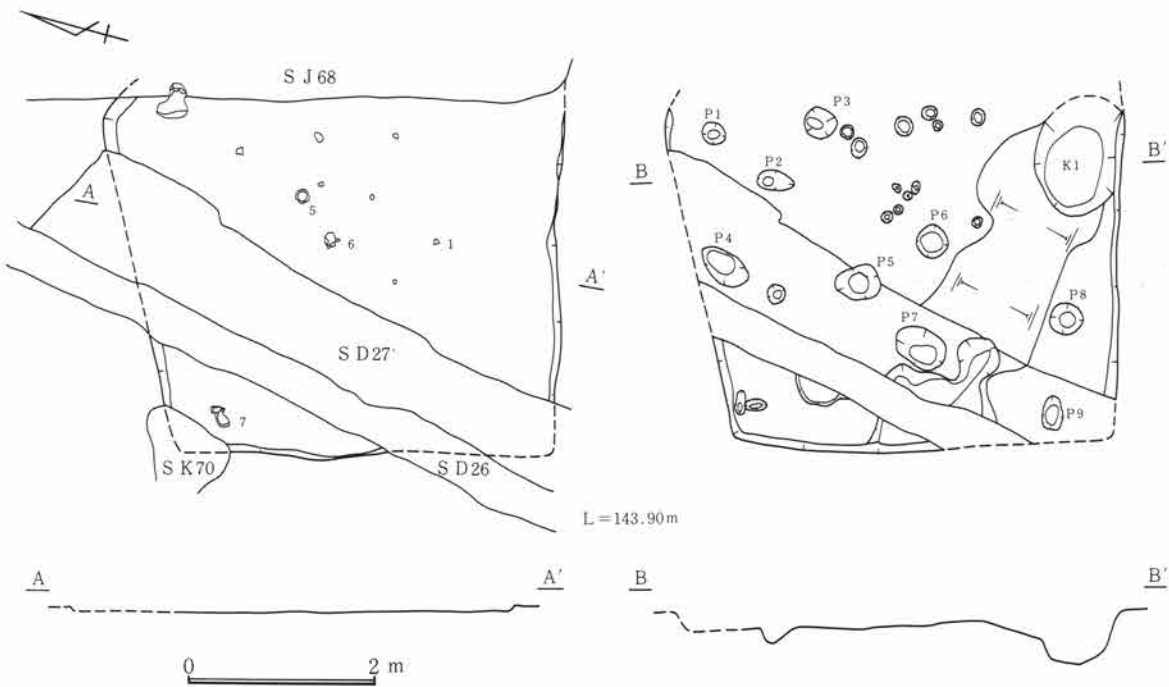
S J 92

115

本住居跡は、85～87G-39～41グリッドに位置し、S D 26・S D 27、S K 70、S J 68と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、東壁がS J 68に切られているため不明であるが台形状を呈すると推測させられる。規模は、南北4.86mを測る。

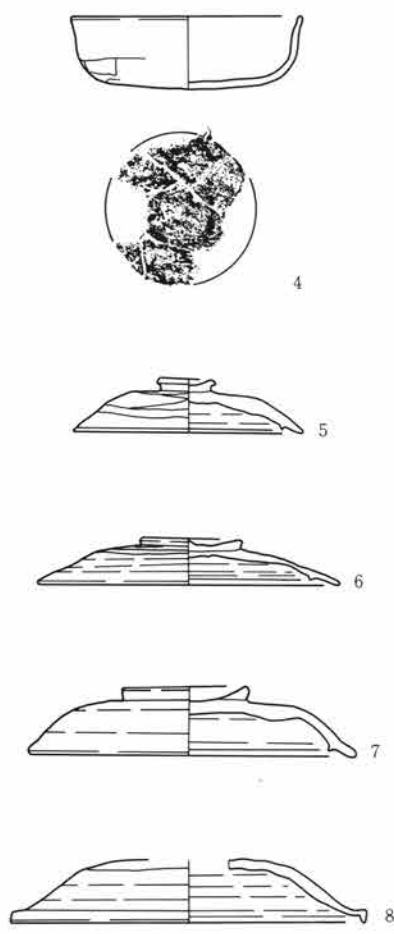
床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴・カマド等は、検出されなかった。

掘り方は、床面より20～30cmほど掘込まれ、小ピット状の凹凸が多くみられ、東南隅から西壁の中央よりに向けて溝状の落ち込みがみられる。床下の施設は、楕円形で、径112×65cm、深度39cmの床下土壇1基と円形または、楕円形で、径25～55cm、深度11～41cmのピットが9基検出された。

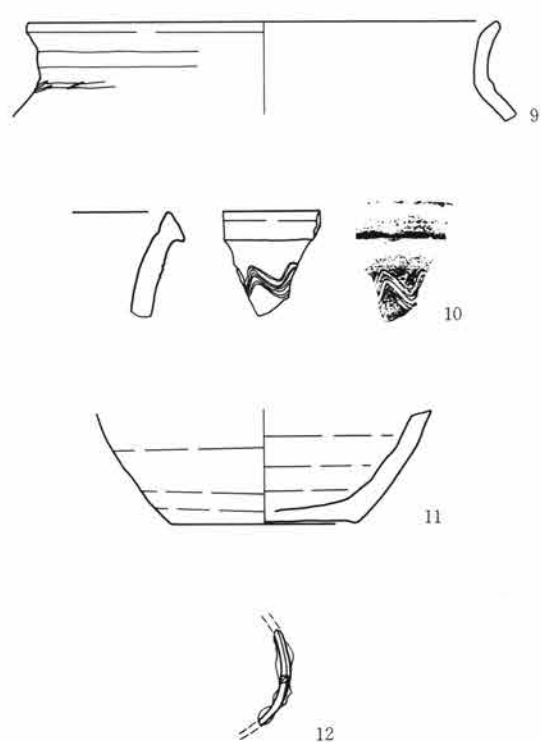


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	12.2・8.0・ — ・1/5 細砂粒・雲母 やや軟質 橙色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 床下	13.2・9.0・4.4 1/4 細砂粒・雲母 褐色鈹物粒、普通 橙色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井部は丸みをもち、口縁部は外反し、内面には身受けのカエリをもつ。外面は全面的に自然釉が付着している。
3	土師器 坏 床下	14.0・10.4・3.5 1/8 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	土師器 坏 覆土	12.2・9.4・3.9 1/5 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は直立し、口唇部は僅かに外反し、 底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体 部、底部はヘラ削り。
5	須恵器 蓋 床直	12.2・鈕3.1・2.9 完形 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ左回転。鈕は扁平状を呈し、天井 部はゆるい丸みをもち、内面に身受けの カエリをもつ。外面の天井部は4分の3 程度まで回転ヘラ削りが施されている。
6	須恵器 蓋 床直	16.0・鈕5.5・2.5 3/4 細砂粒・黒色鉍物粒・ 白色鉍物粒 還元焰 灰オリブ色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井 部はゆるい丸みをもち、内面に身受けの カエリをもつ。天井部は2分の1程度ま で回転ヘラ削り。
7	須恵器 蓋 床直	17.5・鈕7.0・3.7 完形 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部 は丸みをもち、口縁部は外反し、内面 には身受けのカエリをもつ。外面は全面的 に自然釉が付着している。
8	須恵器 蓋 覆土	18.8・ — ・ — 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は大きく盛り 上り、口縁部は外反し、口唇部は折り 曲げて直立する。天井部の2分の1程度 は回転ヘラ削り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	土師器 甕 床下	24.6・ — ・ — 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は外反し、横撫で。 胴部はヘラ削り。
10	須恵器 甕 床下	— ・ — ・ — 小片 細砂粒 還元焰軟質 灰色	口縁部は外反し、波状文 が施されている。口唇部 は折り返して上下に引き だされている。
11	須恵器 鉢 床下	— ・ 10.0 ・ — 小片 粗砂粒・白色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。極 小型の丸みをもった高台 をもつ。
No	種	類	観察表掲載頁
12	棒状不明鉄製品		893

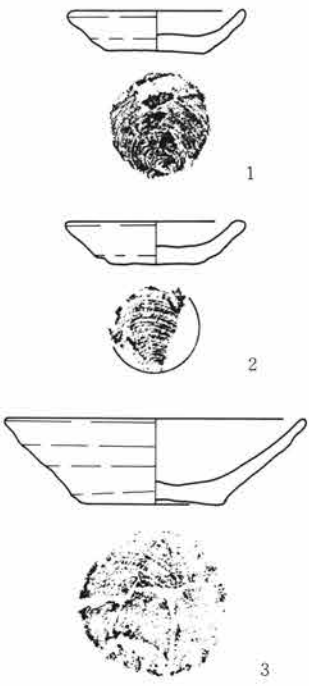
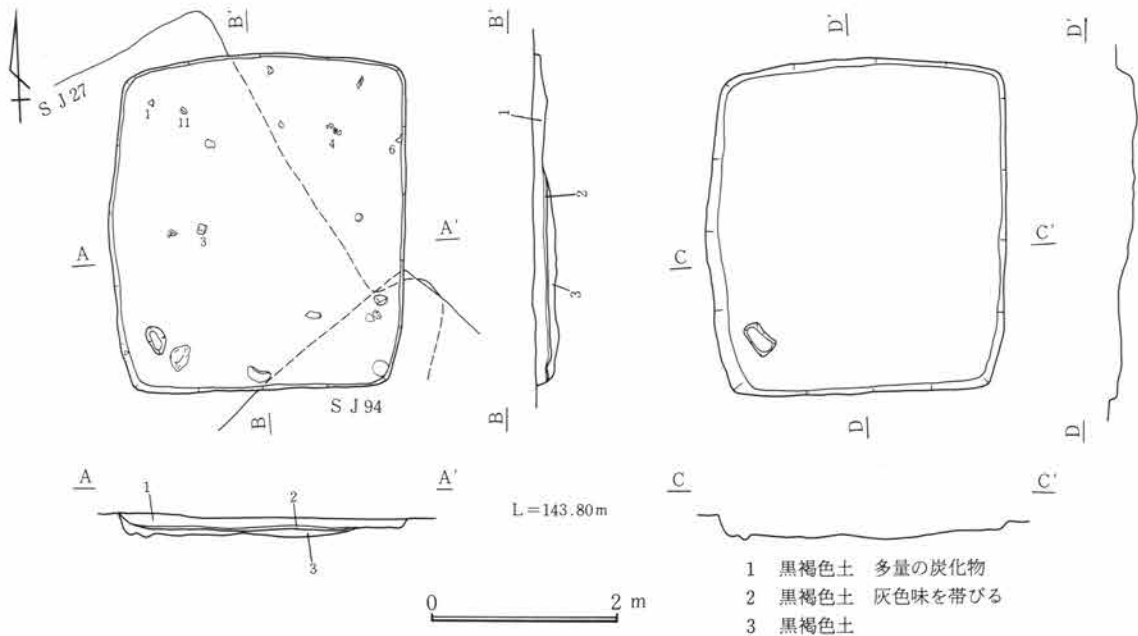
S J 93

116

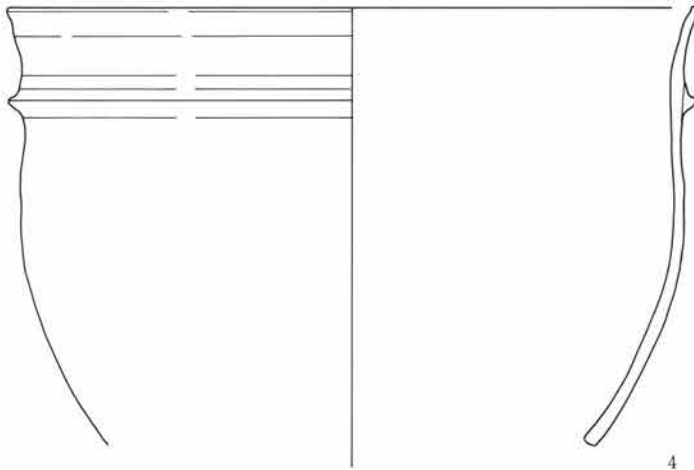
本住居跡は、90～92G-11～12グリッドに位置し、S J 27・S J 94・S J 103・S J 220と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、北壁と西壁がややふくらむがほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.14m、南北3.52m、面積10.43m²を測る。主軸方向は、N-2.5°-Eを指す。

床面は、灰・黒褐色土で貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、9～24cmを測り、平均は17cmである。ピットは、西南隅より検出され、形態は楕円形で、規模は径30×18cm、深度は18cmを測る。カマド等の施設は、検出されなかった。

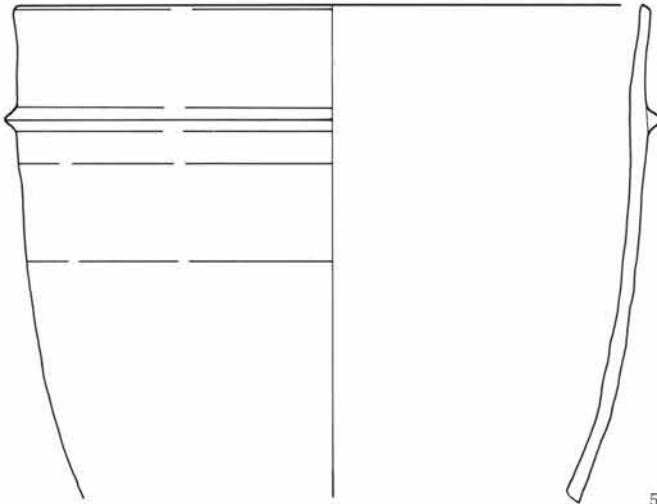
掘り方は、南半分だけで床面より5cm前後掘り込まれ、埋土は黒色土である。



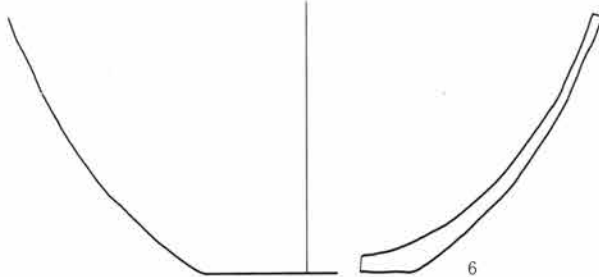
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師質土器 皿 覆土	9.4・5.0・2.2 1/3 細砂粒・褐色鉱物粒 酸化焙 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、底部は回転糸切り。
2	土師質土器 皿 床上10cm	9.4・5.4・2.2 7/8 細砂粒・褐色鉱物粒 酸化焙 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、底部は回転糸切り。
3	須恵器 坏 床上7cm	15.6・7.6・4.5 3/4 細砂粒・褐色鉱物粒 酸化焙 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。体部、口縁部にかけては直線的に開き、底部は回転ヘラ削り後ヘラ撫で。



4



5



6



7

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調
器形・整形の特徴		
4	須恵器 羽釜 床上2~7cm	36.2・—・— 小片 多量の細・粗砂粒 酸化焰 褐灰色
<p>口縁部は外反し、胴部は丸みをもち、罫は断面三角形を呈す。口唇部は僅かに平坦面をもつ。胴部は砂粒が良く沈んでおり、水をつけて指先で撫でたような感じで、撫での痕跡が不明である。口縁部は横撫で、内面は不定方向の撫で。胎土の質は土師器に近い。</p>		
5	須恵器 羽釜 覆土	34.0・—・— 小片 多量の細・粗砂粒 酸化焰 橙色・灰褐色
<p>口縁部は直線的、胴部も直線的で下位でつぼまる。罫は断面三角形を呈す。口唇部はわずかに平坦面をもつ。外面胴部は、4と同じ撫でと思われる。罫の下から口縁部まで横撫で。4よりも粗砂粒がさらに多い。</p>		
6	須恵器 羽釜 床直	—・9.0・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒、酸化焰、赤褐色
<p>胴部は球状にふくらみ、底部は平底を呈す。胴部外面は、ヘラ削りの後、削りの痕跡が見えない位丁寧に撫でている。底部もヘラ削りの後撫で。内面は横撫で。4の羽釜の底部と思われる。</p>		
No	種類	観察表掲載頁
7	鉄製品 釘	892

S J 94

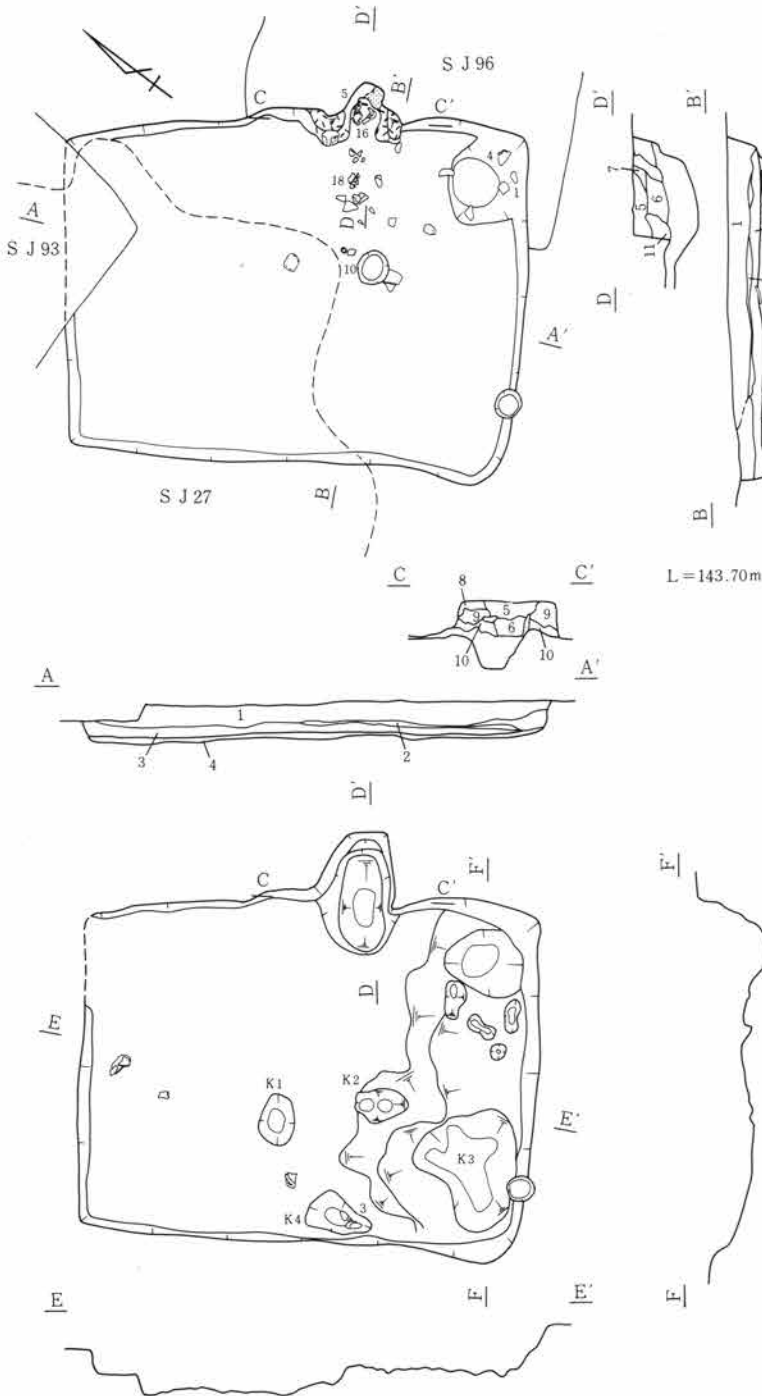
117

本住居跡は、89～92G-08～11グリッドに位置し、S J 93・S J 34・S J 96と重複するが、新旧関係は、S J 93より本遺構のほうが古く、S J 34・S J 96より新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西4.85m、南北3.59m、面積17.35㎡を測る。主軸方向は、N-52°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、25～40cmを測り、平均32cmである。柱穴は、中央やや南より1本検出され、形態は円形で、規模は径32～36cm、深度15cmを測るが、柱痕は確認されなかった。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、径規模は90×82cm、深度35cmを測る。

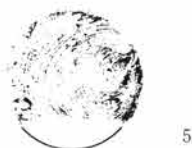
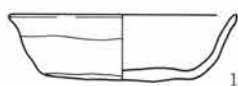
カマドは、東壁の中央よりやや南に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長60cm、幅110cmを測り、焚口部の一部は壁外に32cmのびる。袖部は、両袖部とも加工石と粘土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より4～10cmほど掘り込まれ、北半分はほぼ平坦である。床下の施設は、西南部分に集中して床下土壇4基が検出された。



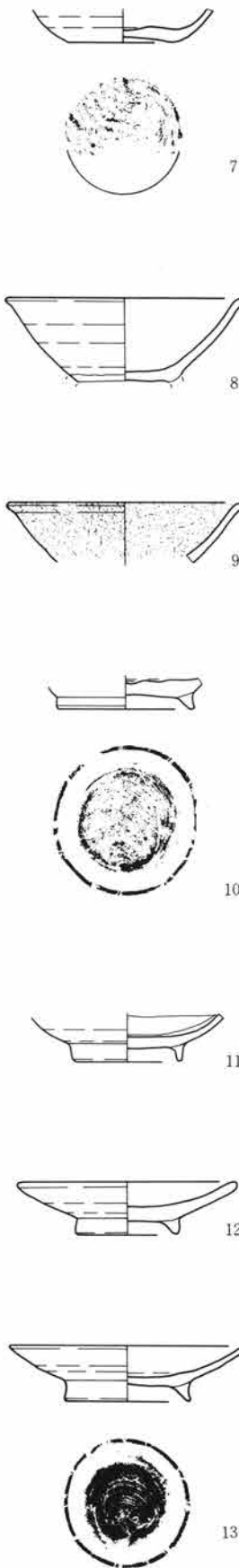
- 1 黒褐色土 多量の軽石
- 2 黒褐色粘質土
- 3 黒褐色砂質土
- 4 灰褐色土 (貼床)
- カマド
- 5 暗茶褐色土 焼土 炭化物
白色粘土ブロック
- 6 暗茶褐色土 焼土 炭化物
- 7 白色粘土 焼土
- 8 暗褐色土 焼土 炭化物
白色粘土ブロック
- 9 暗褐色土 白色粘土ブロック
- 10 暗褐色土 茶褐色砂
- 11 黒褐色土 焼土 灰

第3章 検出遺構・遺物



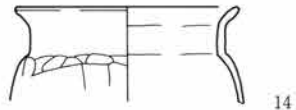
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 貯蔵穴底部より10cm、17cm	12.0・7.8・3.6 完形 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	11.0・7.4・3.8 1/8 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床下26cm 土壇底部から3cm	11.6・6.0・4.4 完形 細砂粒・褐色鉱物粒 やや軟質 橙色	口縁部は内湾し、体部から底部にかけては丸みをもつ。底部中央に穿孔がみられる。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り。
4	須恵器 坏 貯蔵穴底部より17cm	12.4・6.2・4.1 5/6 細砂粒・粗砂粒・雲母 酸化焰 にぶい赤褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、底部は回転ヘラ削り。
5	須恵器 坏 カマド火床面	13.0・7.0・3.5 3/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
6	須恵器 坏 覆土	—・6.6・— 1/3 細砂粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。

第4節 歴史時代

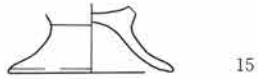


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 坏 覆土	—・6.4・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち立ち上がる。底部は回転糸切り。
8	須恵器 碗 覆土	12.6・6.0・3.1 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反する。高台剥離。底部は回転糸切り後、周辺は、高台貼付による撫で。
9	須恵器 坏 覆土	14.0・—・— 1/10 細砂粒・雲母 還元焰燻焼成 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。
10	須恵器 碗 床上9cm	—・8.2・— 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面四角形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。
11	灰釉陶器 碗 覆土	—・6.2・— 1/3 黒色鉍物粒・緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ右回転。高台は直立ぎみ。体部は回転ヘラ削り、底部もヘラ削り。施釉方法は釉の大部分が剥離しているため不明。
12	須恵器 皿 覆土	12.8・6.0・3.1 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。高台は断面三角形を呈し直立する。底部は回転糸切り。
13	須恵器 皿 覆土	14.0・7.4・3.3 2/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。

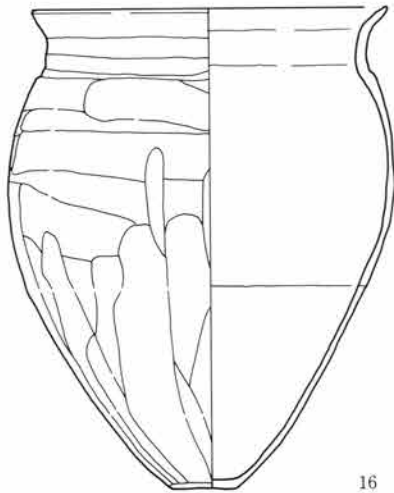
第3章 検出遺構・遺物



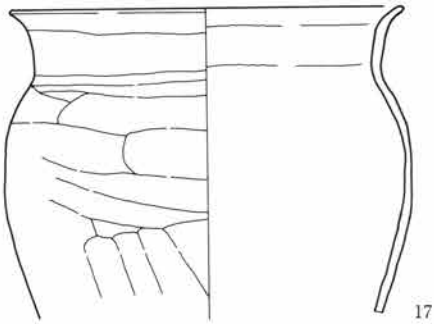
14



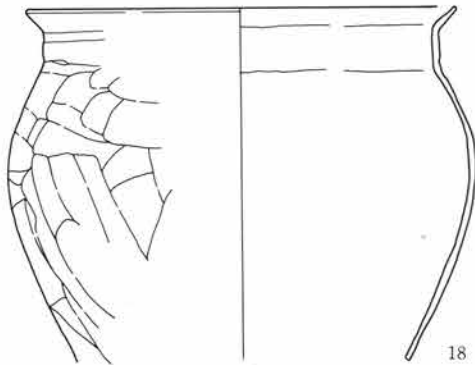
15



16



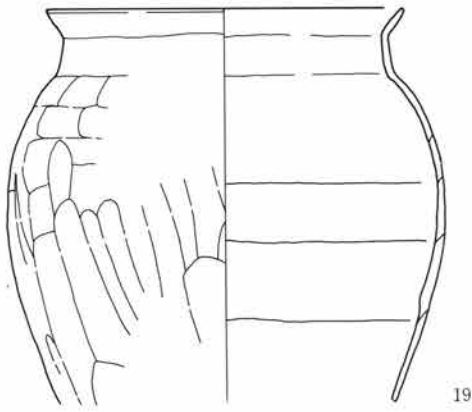
17



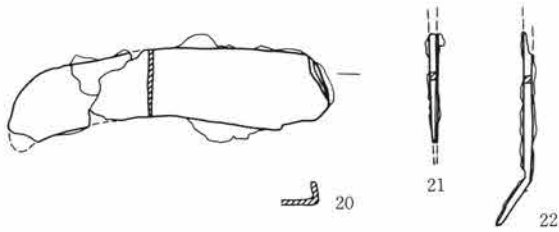
18

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
14	土師器 甕 覆土	11.8・—・— 1/10 細砂粒・褐色鉍物 粒 普通 にぶい橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫で。胴部はへら削り。
15	土師器 台付甕 覆土	—・4.2・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	台付甕脚部のみ、脚部は横撫で。
16	土師器 甕 床直	19.0・3.2・25.3 完形 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位でややふくらみ、底部は小径である。外面の口縁部は横撫で、胴部の上半は横方向へのへら削り、下半は縦方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫でが施されている。
17	土師器 甕 覆土	20.8・—・— 1/5 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位でふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部の上半は横方向へのへら削り。下半は縦方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫でが施されている。
18	土師器 甕 床直 覆土	22.8・—・— 1/10 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は中位でふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部の上位は横方向へのへら削り。中位以下は縦方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫でが施されている。

第4節 歴史時代



19

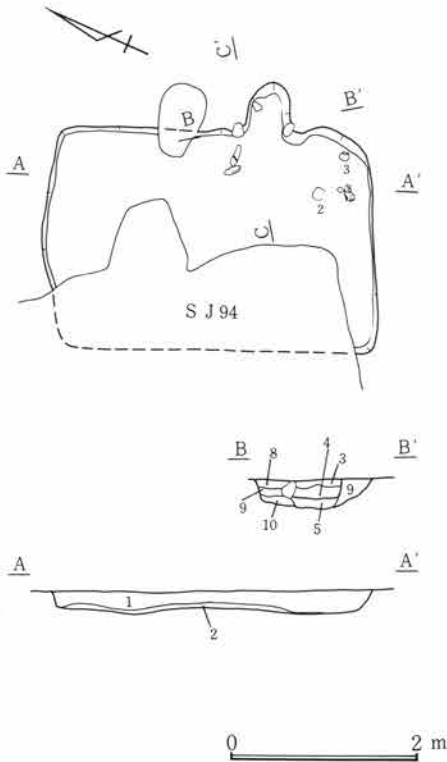


20 21 22

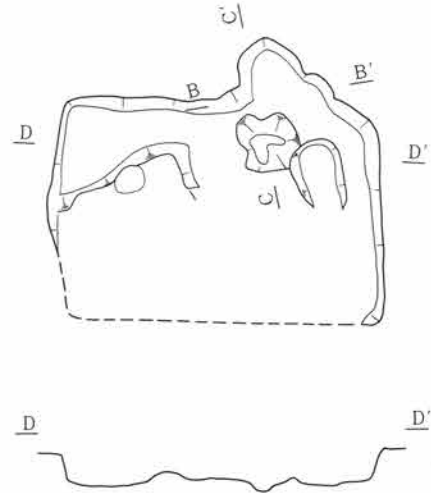
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
19	土師器 甕 覆土	19.0・—・— 1/8 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位でふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部の中位は横方向へのヘラ削り。中位以下は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫が施されている。
No	種類	観察表掲載頁	
20	鉄製品 鎌	891	
21	棒状不明鉄製品	893	
22	棒状不明鉄製品	893	

SJ96

119



L=143.70m



- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 黒褐色土 多量の軽石 | 5 暗褐色土 灰 褐色砂 |
| 2 黒褐色粘質土 やや灰色味を帯びる | 6 焼土 |
| カマド | 7 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒 |
| 3 暗茶褐色粘質土 焼土 炭化物 | 8 暗茶褐色土 若干のC軽石 |
| 4 暗茶褐色土 焼土 | 9 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒 |
| | 10 暗褐色砂質土 |

第3章 検出遺構・遺物

本住居跡は、88～90G-09～11グリッドに位置し、S J 94と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈する。規模は、東西2.26m、南北3.54m、面積は推定で8.11m²を測る。主軸方向は、N-68°-Eを指す。

床面は、黒褐色粘土を使用して貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、14～23cmを測り、平均は17cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長62cm、幅78cmを測り、燃烧部は壁外に50cmのびる。袖部は、両袖部とも加工石を使用して構築されている。

掘り方は、貼床の厚さだけで全体的に浅く、床下の施設等は検出されなかった。

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.2・9.4・3.6 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はへら削り。
2	須恵器 坏 床上4cm	11.7・8.0・4.1 小片 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部はベタ高台状に削り出され、回転糸切り後へら撫でが施されている。
3	須恵器 坏 床上8cm	11.8・7.8・4.0 完形 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。底部はへら切り後不定方向へのへら削り。内外面に火摩きがみられる。
4	須恵器 坏 床直	12.0・7.7・3.9 完形 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。器壁全体的に厚い。底部は回転糸切り。
5	土師器 坏 床上23cm	13.0・6.0・3.0 5/6 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、高台は四角形でやや開く、接地面は広い。底部は回転糸切り。

S J 97

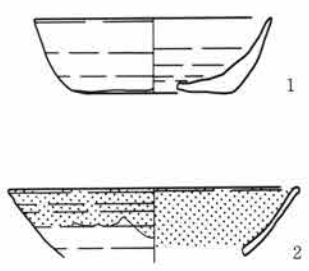
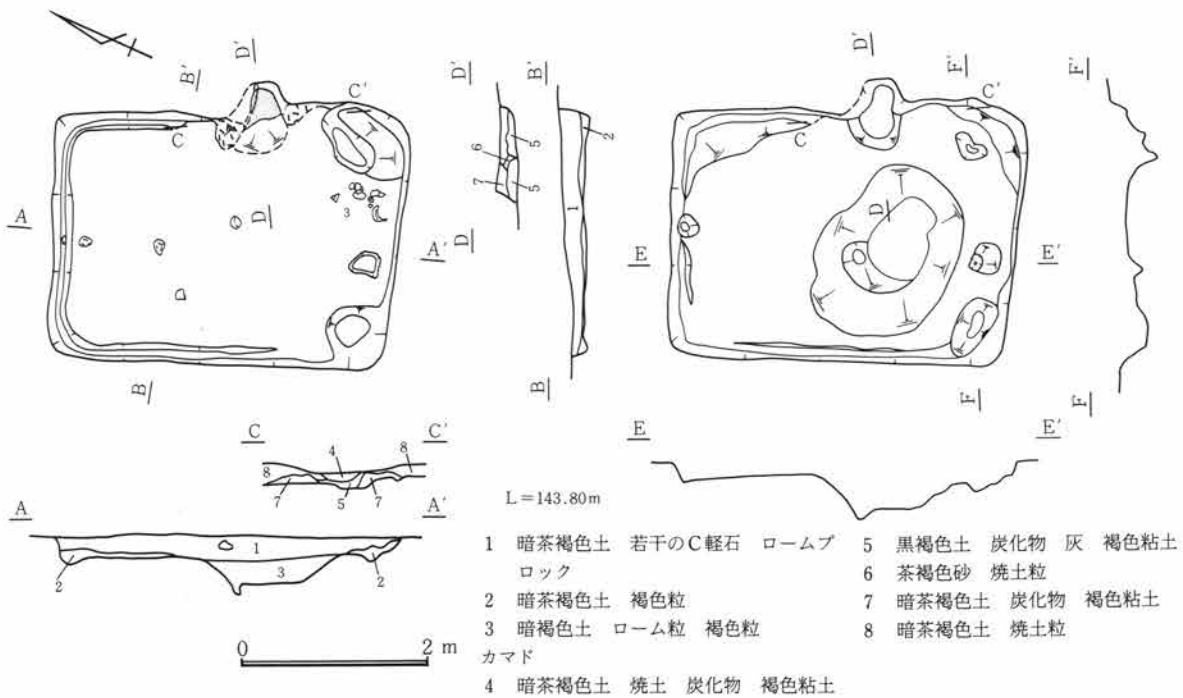
120

本住居跡は、93～95G-13～15グリッドに位置し、S D45と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.80m、南北3.78m、面積9.87m²を測る。主軸方向は、N-63°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、12～34cmを測り、平均は19cmである。壁溝は、東壁のカマドの北側から北壁、西壁まで周り、幅16～25cm、深度5～8cmを測る。柱穴状のピットが南壁よりと西南コーナー際から検出された。P₁は台形状で、32×23cm、深度24cm。P₂は円形で、径50cm前後、深度10cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナーよりに位置し、形態は楕円形を呈し、規模は、径103×57cm、深度19cmを測る。

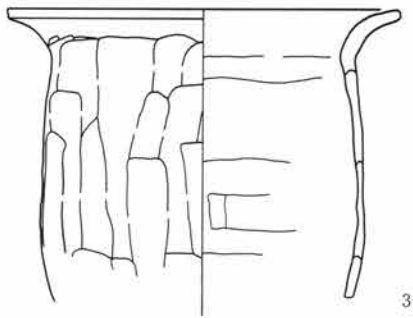
カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部が欠落している。規模は、全長75cm、幅105cmを測り、焚口部の一部は壁外に28cmのびる。

掘り方は、全体的に浅く、ほぼ平坦である。床下の施設は、中央よりやや南に楕円形で、径190×94cm、深度32cmの大型の床下土壇が1基検出された。

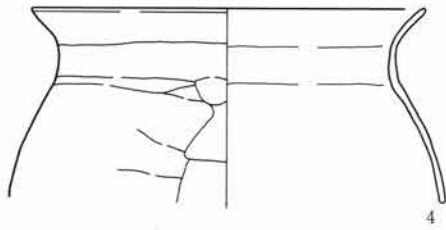


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	12.6・8.6・3.9 1/3 細砂粒、普通 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもちほとんど開かない。底部は回転糸切り後周囲のみを回転ヘラ削りを施している。
2	灰釉陶器 碗 覆土	15.2・一・一・小片 緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。口唇部は僅かに外反する。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰黄色を呈す。

第3章 検出遺構・遺物



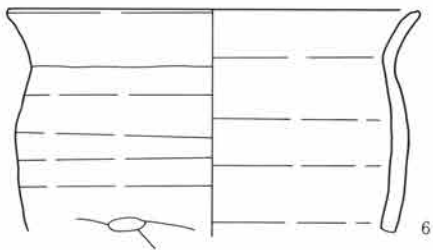
3



4



5

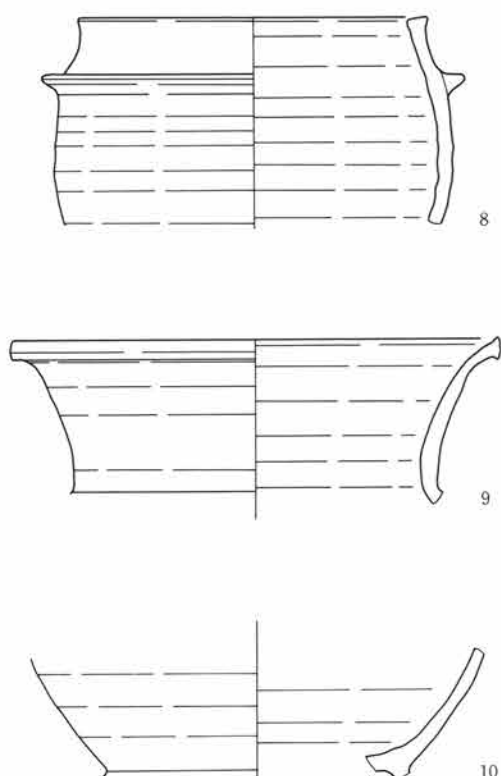


6

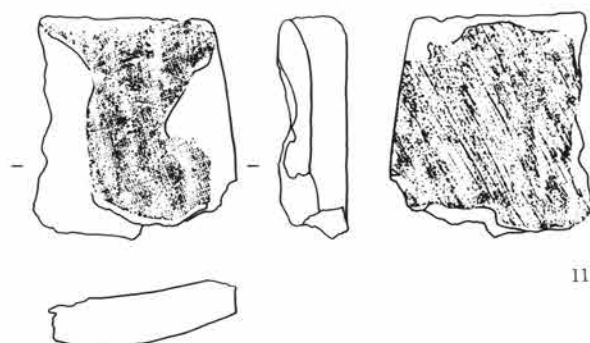


7

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 甕 床直	20.6・—・— 1/4 粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、胴部はほとんどふくらまず長胴型を呈す。外面の口縁部は横撫で、胴部は頸部に向けての縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
4	土師器 甕 覆土	21.0・—・— 1/8 細砂粒・褐色鉱物 粒 普通 にぶい橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部はややふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
5	土師器 甕 カマド	—・4.8・— 小片 細砂粒・褐色鉱物 粒 普通 にぶい橙色	底部は小径、外面胴部は縦方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。
6	須恵器 甕 覆土	22.0・—・— 1/10 細砂粒・褐色鉱物 粒 酸化焙 橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部はやや外反し、胴部はゆるいふくらみをもつ。胴部下半はヘラ削りが施されている。
7	須恵器 甕 覆土	22.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部はやや外反し、胴部は直線的。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
8	須恵器 羽釜 覆土	18.6・—・— 小片 粗砂粒・雲母 亜角礫 酸化焰 橙色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部はゆるい丸みをもち、鐔は断面三角形を呈す。
9	須恵器 甕 覆土	26.0・—・— 小片 黒色鉍物粒・白色 鉍物粒・円礫 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部は上下に引きだされる。
10	須恵器 短頸壺 覆土	—・16.0・— 小片 細砂粒・白色鉍物 粒・褐色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。胴部下半、高台剝離。
No	種類	観察表掲載頁	
11	土製品 瓦	778	



S J 98

121

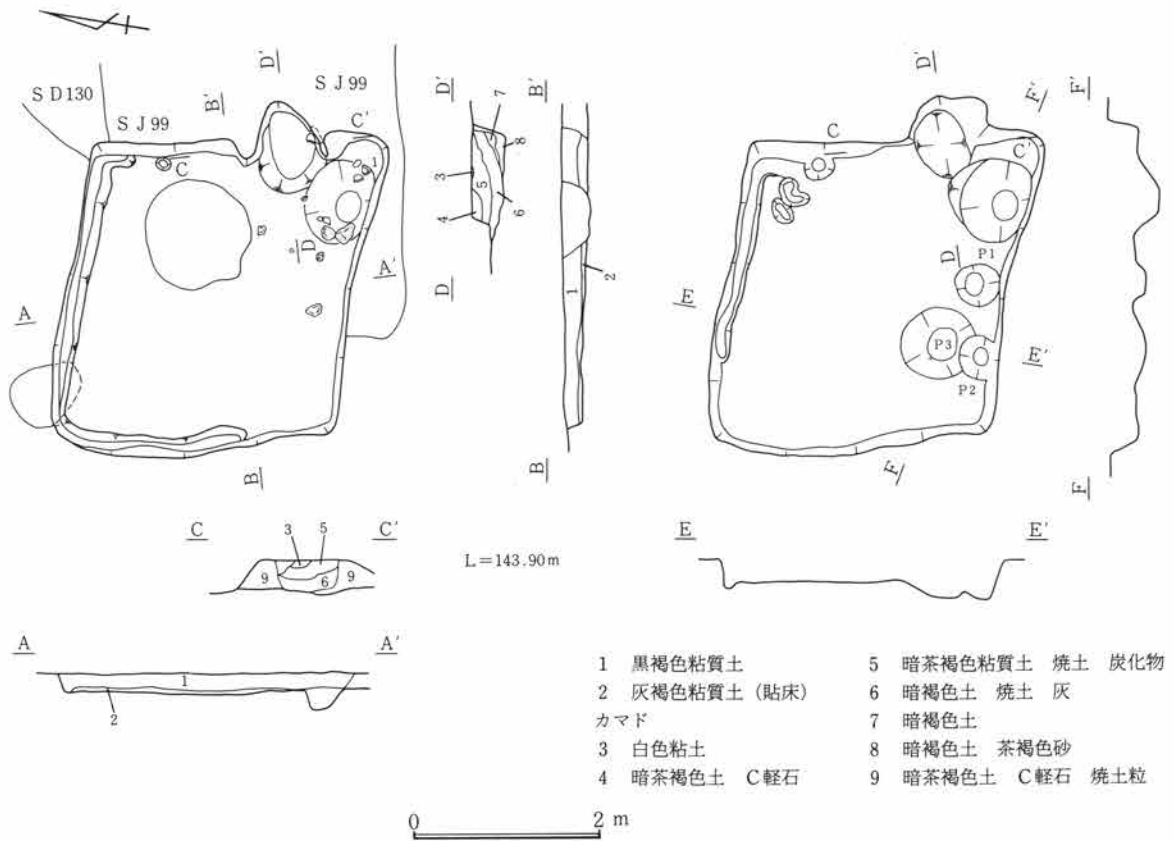
本住居跡は、92～94G-16～17グリッドに位置し、S J 99、S D 09・S D 130と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、南壁が中央でやや屈曲するが、ひし形に近い形状を呈す。規模は、東西3.29m、南北3.17m、面積10.01m²を測る。主軸方向は、N-78.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、10～22cmを測り、平均は16cmである。壁溝は、東北コーナーから北壁を通り西壁の中央まで周り、幅20～25cm、深度3～7cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナーよりに位置し、形態は楕円形を呈し、径90×65cm、深度21cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、規模は、全長97cm、幅120cmを測り、燃燒部は壁外に40cmのびる。

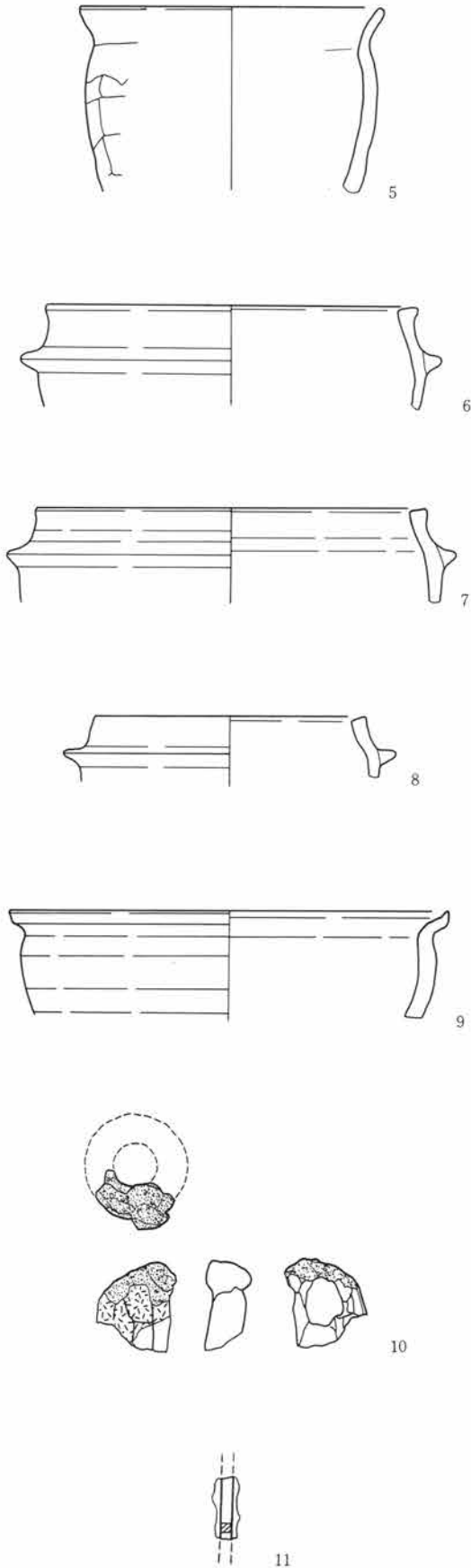
掘り方は、床面より15cm前後掘り込まれており、掘り方の面は平坦である。床下の施設は、ピットが3基検出された。形態・規模は、P₁が円形で、径50cm前後、深度21cm。P₂は楕円形で径50×25cm、深度24cm。P₃はほぼ楕円形で径90×70cm、深度21cmを測る。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 貯蔵穴底部直上	11.4・6.6・4.8 2/3 粗砂粒・褐色鉱物粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は断面三角形を呈しやや開く。底部は撫で、底部のほぼ中央に焼成後の穿孔がみられる。
2	須恵器 碗 覆土	13.8・7.0・— 1/8 細砂粒・褐色鉱物粒 亜角礫 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。体部にはロクロ目が強く残る。高台端部は欠損。
3	灰釉陶器 碗 覆土	15.0・—・— 小片 緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰白色。
4	土師器 甕 覆土	14.0・—・— 小片 粗砂粒・石英・雲母 普通 黒褐色	口縁部は短かく直線的に開く。胴部はゆるいふくらみをもつ。口縁部は横撫で。胴部は縦方向へのヘラ削り。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
5	土師器 甕 覆土	17.6・—・— 小片 粗砂粒・石英・雲 母 普通 にぶい橙色	口縁部は短かく直線的に開く。胴部はゆるいふくらみをもつ。口縁部は横撫で。胴部は縦方向へのヘラ削り。
6	須恵器 羽 釜 覆土	22.0・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉱物 粒・亜角礫 還元焰 灰色	口縁部はやや内傾し、口唇端部は上方にやや突出し、平坦で内傾する。鏝は断面三角形を呈す。
7	須恵器 羽 釜 覆土	23.0・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉱物 粒 酸化焰 橙色	口縁部はやや内傾し、口唇端部は上方にやや突出し、平坦で内傾する。鏝は断面三角形を呈す。
8	須恵器 羽 釜 覆土	16.0・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉱物 粒 酸化焰 橙色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦でやや内傾する。鏝は断面三角形を呈す。
9	須恵器 鉢 覆土	26.0・—・— 小片 細砂粒・白色鉱物 粒 還元焰 灰色	口縁部は外反ぎみに開き、口唇部は直立する。胴部上位はゆるい丸みをもつ。
10	土製品 羽 口 覆土	端部径 6.0 底部径 — 器 高 — 孔 径 2.6 粗砂粒 酸化焰	円筒状を呈すると思われる。胴部は荒いヘラ削り。端部には鉄分付着、その周辺は二次的還元焰と二次的酸化焰がみられる。
No	種 類	観察表掲載頁	
11	棒状不明鉄製品	893	

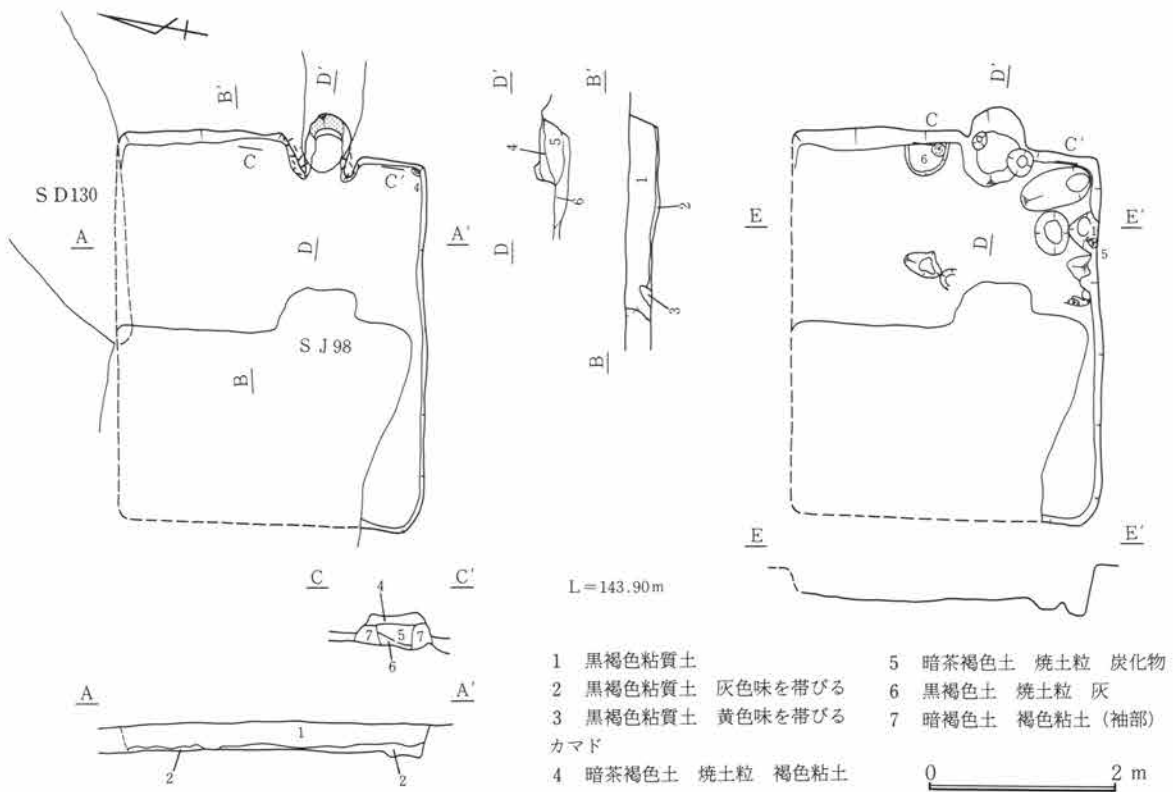
S J 99

本住居跡は、91～93G-15～17グリッドに位置し、S J 98、S D 47・S D 130と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうがS J 98、S D 47より古く、S D 130より新しい。本遺構の約半分は、S J 98によって切られ、全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈し、規模は、東西4.24m、南北3.28m、面積は推定で13.15㎡を測る。主軸方向は、N-78°-Eを指す。

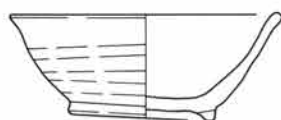
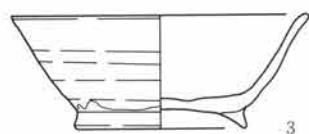
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、9～19cmを測る。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央よりやや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合い良好な状態で残っている。規模は、全長72cm、幅85cmを測り、燃烧部の一部は壁外に39cmのびる。

掘り方は、床面より4～5cmほど掘り込まれている。床下の施設は、床下土壇4基と小ピット3基が検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下土壇底部 より3cm	12.0・8.0・3.4 2/3 細砂粒・雲母、普通 赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	16.2・14.0・—、1/8 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部は極ゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 碗 床下 床下土壇底部 より10cm	15.6・9.0・6.0 1/4 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、口唇部で僅かに外反する。高台は断面三角形を呈し、「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切り。
4	須恵器 碗 床直	16.0・8.0・5.6 2/3 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反し、高台は断面三角形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
5	須恵器 碗 床下土壇底部 より10cm	14.2・7.2・5.6 5/6 細砂粒 還元焰やや軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。高台は断面逆台形を呈す。底部は回転糸切り。
6	須恵器 皿 床下土壇底部 より3cm	13.8・6.2・3.3 完形 細砂粒・雲母 酸化焰 灰黄色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、高台は断面三角形を呈し直立する。底部は回転糸切り。
No.	種類		観察表掲載頁
7	鉄製品 刀子		891

S J 100

本住居跡は、89～91G-14～16グリッドに位置し、S D45、S J 101と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうがS D45より古く、S J 101より新しい。平面形態は、ほぼ方形を呈す。規模は、東西2.79m、南北2.84m、面積は推定で7.52m²を測る。主軸方向は、N-62.5°-Eを指す。

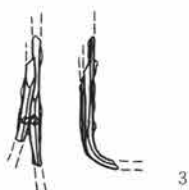
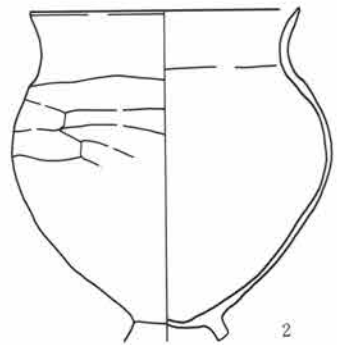
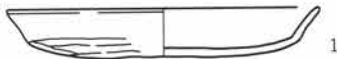
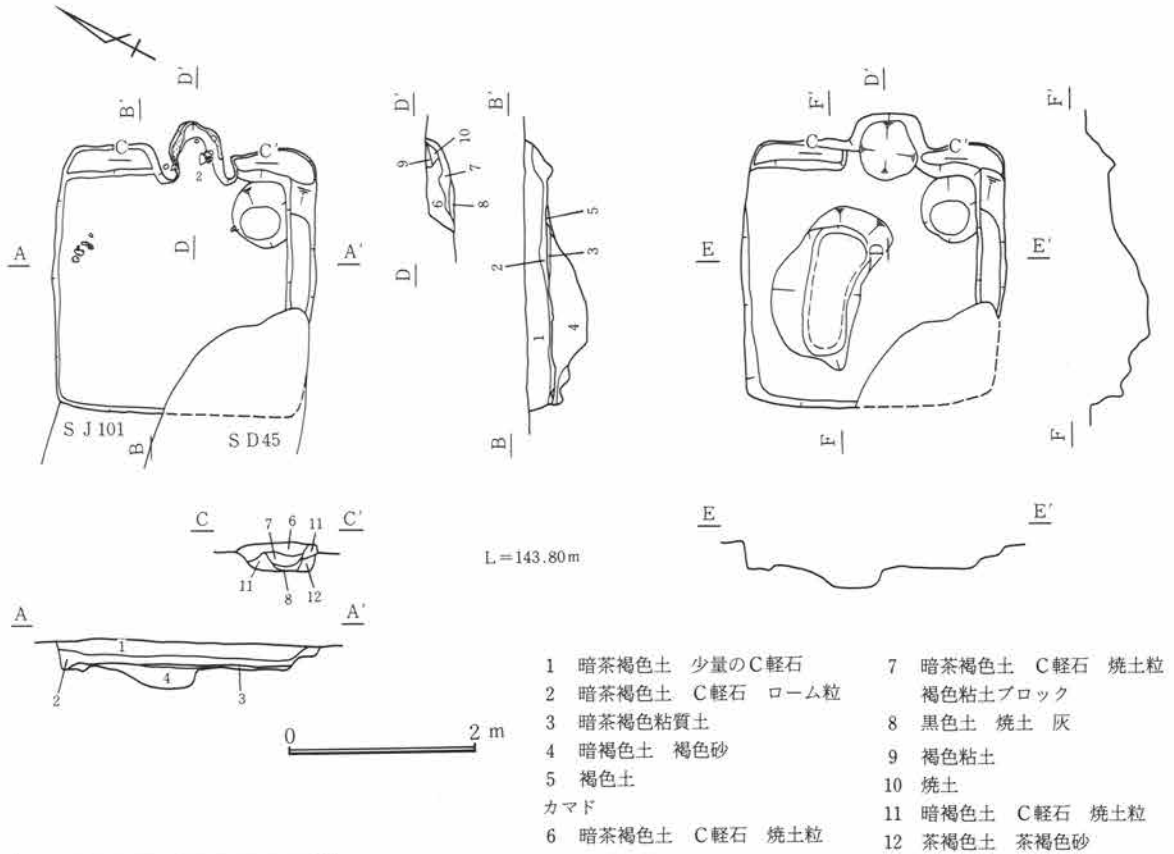
床面は、暗茶褐色粘質土で貼床を施している。壁は、北壁では垂直に立ち上がり、西壁では緩かに立ち上がり、東壁と南壁では、途中で幅20cmの段をもつ。壁高は、18～23cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径70×58cm、深度25cmを測る。

カマドは、東壁の中央に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は良好な状態で残っている。

第3章 検出遺構・遺物

規模は、全長78cm、幅92cmを測り、燃烧部の一部は壁外に22cmのびる。袖部は、褐色粘土を使用して構築している。

掘り方は、床面より10~30cmほど掘り込まれ、埋土は、暗褐色土である。床下の施設は、中央やや北よりに長楕円形で、径164×94cm、深度30cmを測る大型の床下土坑が検出された。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	16.6・14.6・2.6 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 台付壺 カマド火床面	14.2・4.6・— 2/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部は上位で大きくふくらむ。脚部は欠損。外面の口縁部は横撫で、胴部の上半は左方向へのヘラ削り。下半は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
No.	種類		観察表掲載頁
3	棒状不明鉄製品		893

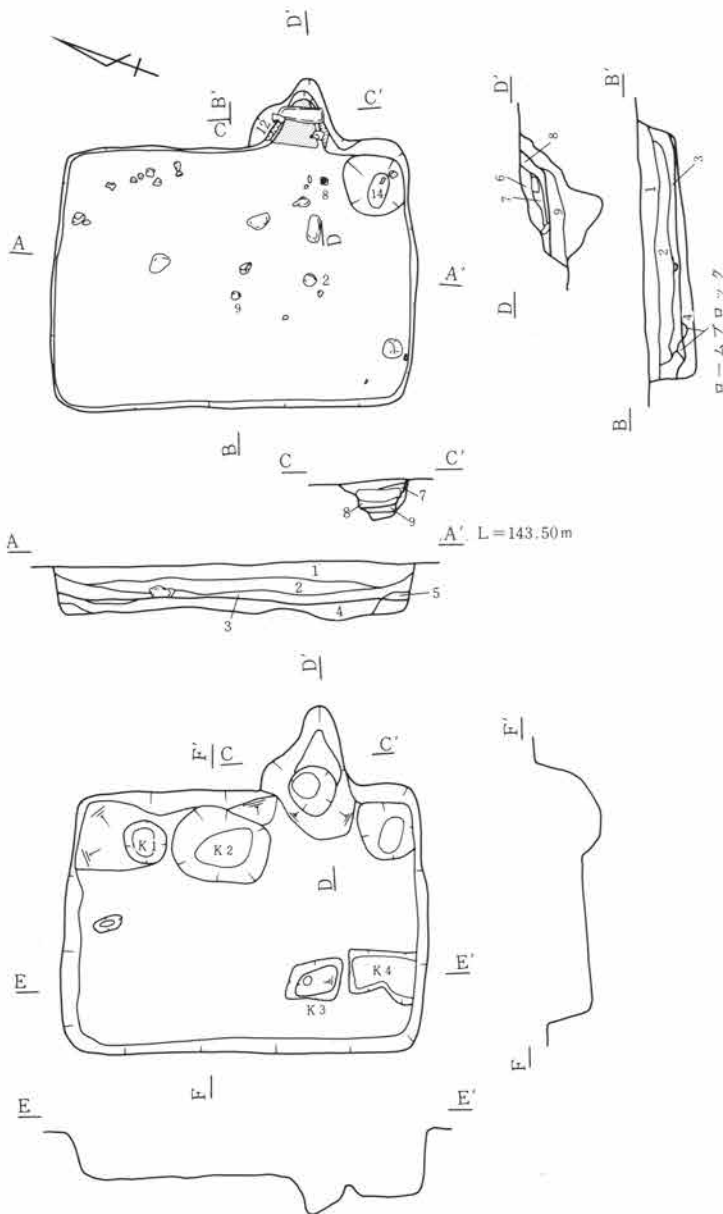
S J 102

124

本住居跡は、83~85G-09~11グリッドに位置し、SD46、SB13、ST12・ST13と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.79m、南北3.89m、面積10.71㎡を測る。主軸方向は、N-67.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、37~43cmを測り、平均は40cmである。貯蔵穴は、東南コーナー隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径55×45cm、深度22cmを測る。床面には5~30cm大の自然石が多くみられる。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部等は良好な状態で残っている。規模は、全長96cm、幅105cmを測り、燃烧部の一部は壁外に47cmのびる。天井部には長さ42cm、幅14cm、厚さ8cmの角柱状の加工石が両袖部にかけて使用されている。

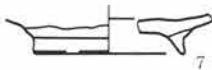
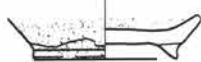
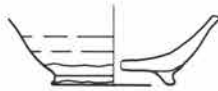
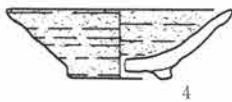


掘り方は、床面より10~13cmほど掘り込まれ、多少の凹凸がみられる。埋土は、ロームブロック混りの暗褐色土である。床下の施設は、壁よりに集中して床下土坑4基が検出された。形態・規模は、K₁が円形で径45cm、深度7cm。K₂は楕円形で径120×80cm、深度17cm。K₃は四角形で一辺48×37cm、深度29cm。K₄は不整形で一辺72×48cm、深度17cmを測る。

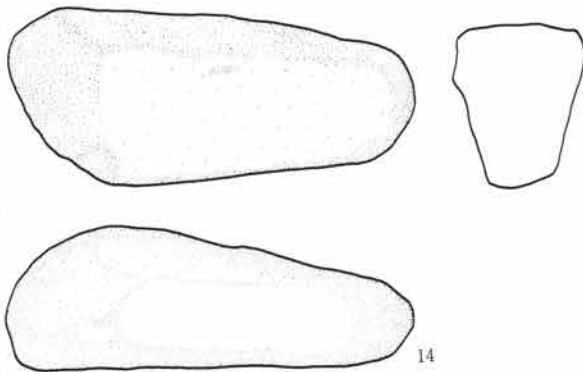
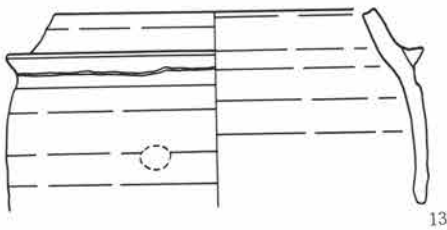
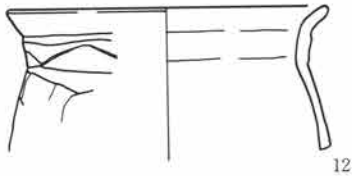
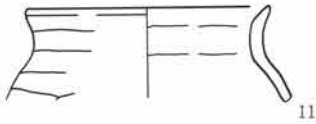
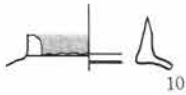
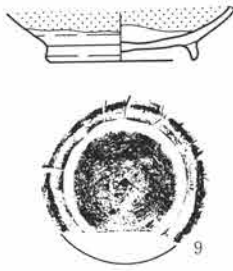
- 1 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒 炭化物
- 2 暗茶褐色土 1層より暗い色調 ロームブロック
- 3 暗茶褐色土 C軽石 ロームブロック
- 4 暗褐色土 ロームブロック 炭化物
- 5 暗茶褐色土 C軽石 ローム粒
- カマド
- 6 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒
- 7 黒褐色土 焼土 炭化物
- 8 黒色土 灰
- 9 黒褐色土 灰 黒色砂

0 2 m

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	—・鈕3.8・— 2/5 細砂粒・黒褐色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。鈕は扁平状を呈し、天井部はゆるい丸みをもつ。外面には全体的に自然釉が付着している。
2	須恵器 坏 床上28cm	12.6・7.2・3.8 5/6 粗砂粒・雲母 角礫 酸化焰 黄褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、底部はへら撫で。
3	須恵器 碗 カマド底部より6cm	14.6・6.0・5.7 1/3 粗砂粒・亜角礫 酸化焰 灰オリーブ色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。高台は丸みをもつ断面三角形を呈し直立する。底部は回転糸切り。
4	須恵器 碗 覆土	11.8・5.2・3.6 1/10 粗砂粒・雲母 還元焰焼成 黒褐色	ロクロ回転方向不明。器壁は厚く、体部から口縁部にかけては直線的に開く。高台は断面四角形を呈しやや開く。
5	須恵器 碗 覆土	—・6.6・— 1/6 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は直線的に開き、高台は丸みをもち端部は外反する。高台は回転糸切り。
6	須恵器 碗 床下	—・8.0・— 1/3 粗砂粒・雲母・角礫 酸化焰焼成 黒褐色	ロクロ回転方向不明。高台は断面三角形を呈し、やや開く。底部は回転糸切り。
7	須恵器 碗 覆土	—・9.0・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面三角形を呈し直立きみ、底部切離し方法不明。
8	緑釉陶器 碗 床上17cm	—・4.8・— 1/3 緻密・黒色鉍物粒、 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。内面の素地は丁寧なへら磨きが施されている。施釉は全面に施され、釉調は透明感のある淡緑色を呈す。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	灰釉陶器 碗 床直	—・8.0・—、1/2 緻密・細砂粒、 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ右回転。高台は三日月型を呈し、高台は回転へら撫で。施釉方法は刷毛塗り。釉調は不透明な灰白色を呈す。
10	灰釉陶器 長頸壺 覆土	—・—・— 小片 緻密・細砂粒 還元焰焼きしめ 灰白色	長頸壺の頸部の一部。
11	土師器 壺 覆土	13.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 褐色鉍物粒 にふい赤褐色	口縁部は「コ」の字状の褪化したもので横撫で。胴部は横方向へのへら削り。
12	土師器 壺 カマド底部より10cm	16.8・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 暗赤褐色	口縁部は「コ」の字状の褪化したもので横撫で。胴部は横方向へのへら削り。
13	須恵器 羽釜 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部はゆるい丸みを持ち、鑿は断面三角形でやや上方を向く。

No	種類 器形	出土位置	計測値	石材	特徴
14	石製品 擦石		21.4 9.2 8.0cm 17.5kg	輝石安山岩(粗粒)	側面に縦方向・横方向の擦痕をみられる。

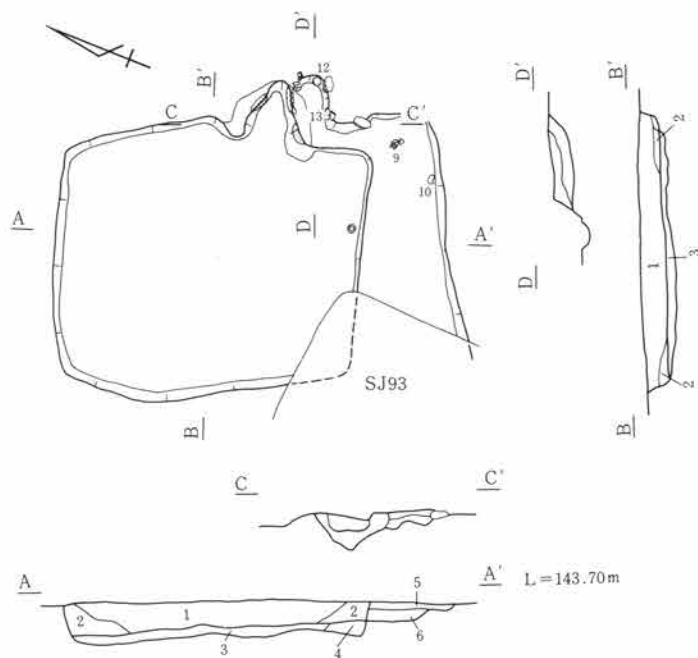
S J 103・220

S J 103は、90～91G-12～14グリッドに位置し、S J 93、S J 220、S J 103と重複するが、新旧関係は、S J 93より本遺構のほうが古く、S J 220・S J 103より新しい。平面形態は、ひし形に近い形状を呈し、東壁は、一直線ではなくカマドの両側でくい違う。規模は、東西2.87m、南北3.40m、面積は推定で8.89m²を測る。主軸方向は、N-59°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、黒褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、20～27cmを測り、平均は23cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長80cm、幅112cmを測り、焚口部の一部は壁外に24cmのびる。

掘り方は、床面より10cm前後掘り込まれ、埋土は、黒褐色土である。床下の施設は、床下土壇が2基検出



された。形態・規模は、K₁が楕円形で径75×40cm、深度15cm。K₂は楕円形で径72×60cm、深度20cmを測る。

S J 220は、89～91G-12～13グリッドに位置し、S J 94・S J 103と重複し、両住居跡によって大部分が切られ、5分の1程度しか残存しないため全貌は確認できない。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。

カマドは、東壁に位置するが、S J 103のカマドによって半分以上が壊されている。規模は、全長72cmを測る。

S J 103

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 微量のロームブロック
- 3 黒褐色土 多量のロームブロック (貼床)
- 4 黒褐色土 3層より黒色味を増す

S J 220

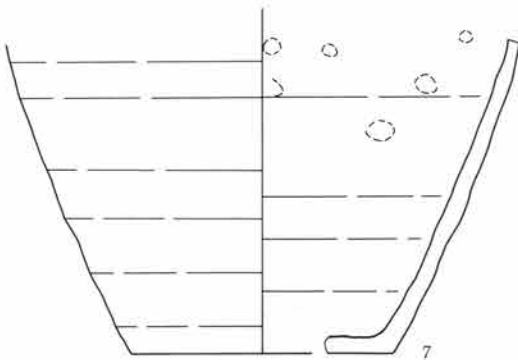
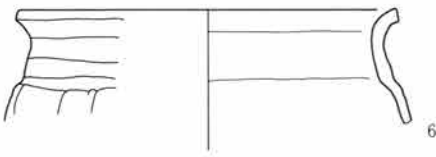
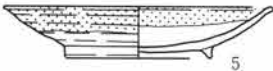
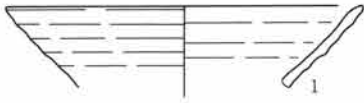
- 5 黒褐色土
- 6 黒褐色土 多量のロームブロック

カマド

- 7 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒 炭化物
- 8 茶褐色土 焼土粒 炭化物 茶褐色砂
- 9 暗褐色土 焼土粒 炭化物 灰
- 10 暗褐色土 C軽石 焼土粒



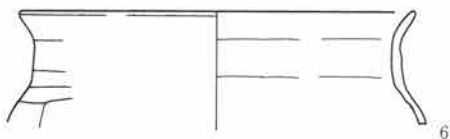
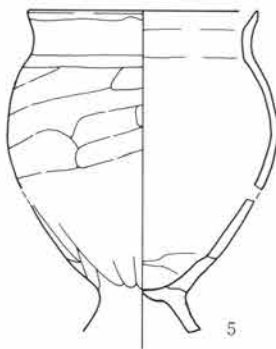
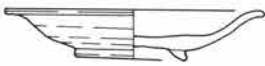
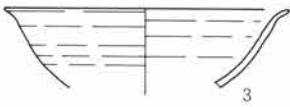
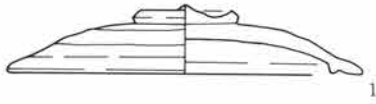
S J 103



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	19.0・—・— 小片 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。
2	須恵器 碗 床直	—・6.4・— 1/3 粗砂粒・褐色鉍物粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。体部は直線的に開く。高台はやや丸みもち低い。底部の切り離し方法不明。
3	須恵器 碗 床直	—・7.6・— 1/6 粗砂粒・円礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は直立し、底部は回転糸切り。
4	緑釉陶器 碗 覆土	—・9.0・— 小片 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	内面の底部には陰刻花文がみられる。施釉は全面的に施され、釉調は透明な淡緑色を呈す。
5	灰釉陶器 皿 覆土	14.2・7.8・2.8 1/2 細砂粒 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ右回転。口唇部は僅かに外反し、高台は断面三角形を呈し直立する。底部は回転ヘラ削り。施釉方法は刷毛塗り。釉調は、不透明な灰白色を呈す。

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
6	土師器 甕 覆土	20.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状の裨化したもので横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。
7	須恵器 甕 覆土	—・14.0・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。底部はヘラ撫で。

S J 220



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	19.0・5.0・3.6 1/5 細砂粒・黒色鈹物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は擬宝珠状を呈し、天井部はゆるい丸みをもち、口縁部はやや開く。内面には身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度までは回転ヘラ削り。
2	須恵器 碗 床直	16.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。
3	須恵器 碗 床下	15.2・—・— 小片 細砂粒・黒色鈹物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。
4	須恵器 皿 覆土	13.4・7.0・2.6 5/6 粗砂粒・褐色鈹物粒 還元焰 灰色	ロクロ左回転。口縁部は外反し、高台は断面逆台形を呈しやや開く。
5	土師器 台付甕 カマド	12.2・4.6・— 小片 細砂粒・褐色鈹物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部はゆるい丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で。胴部は上半で横方向へのヘラ削り。下半では縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
6	土師器 甕 カマド	21.0・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい橙色	器壁は薄く、口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、横撫で、胴部はヘラ削り。

S J 104

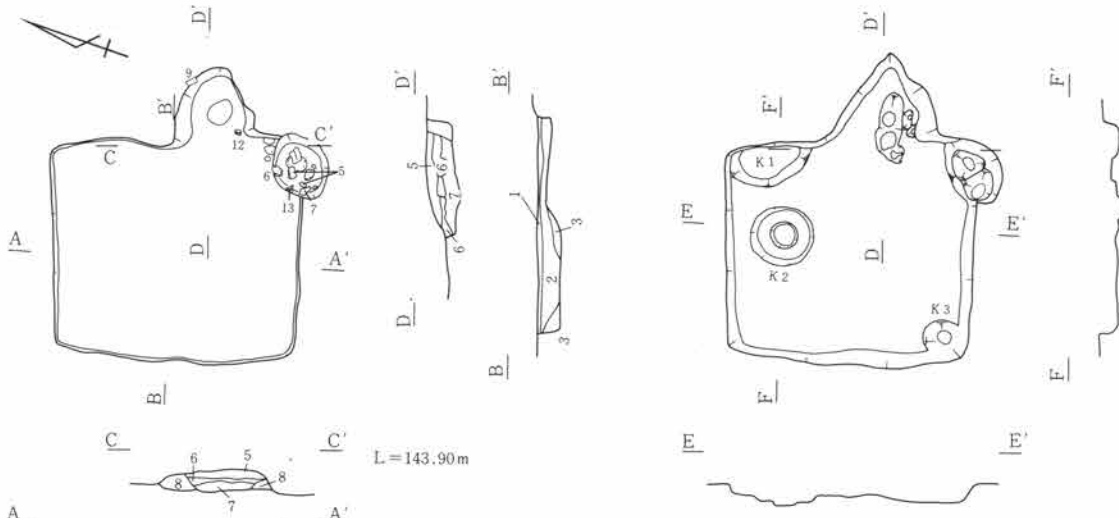
127

本住居跡は、88～89G-16～18グリッドに位置し、SD46・SD47と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.41m、南北2.94m、面積6.63m²を測る。主軸方向は、N-69°-Eを指す。

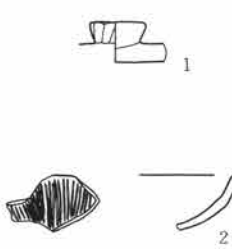
床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。貯蔵穴は、東南コーナーに位置し、半分壁外にのびる。形態は、楕円形を呈し、規模は、径74×58cm、深度24cmを測る。

カマドは、東壁の中央よりやや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部も一部欠落している。規模は、全長98cm、幅120cmを測り、燃烧部は壁外に86cmのびる。焚口部底面の中央には、径25cmほどの扁平な円礫が置かれている。

掘り方は、床面より10～26cmほど掘り込まれ、埋土は黒褐色土と暗褐色土で覆われている。床下の施設は、3基検出され、形態、規模は、K₁が楕円形で、径92×45cm、深度9cm。K₂は円形で段をもち、径66cm、深度12cm。K₃は円径で径40cm、深度18cmを測る。

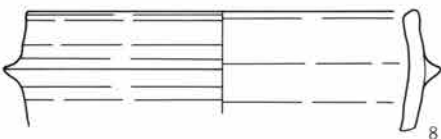
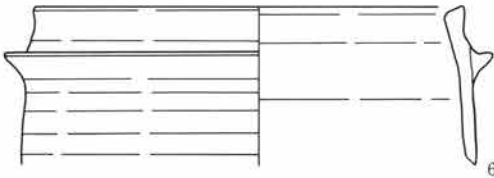
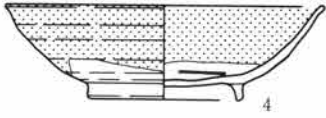


- 1 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒 炭化物
 2 黒褐色土 極少量のC軽石 ロームブロック
 3 暗褐色土 ロームブロック
 4 暗茶褐色土 C軽石 ロームブロック
 5 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒
 6 暗茶褐色土 焼土 炭化物
 7 黒褐色土 焼土
 8 暗褐色土 C軽石 焼土粒



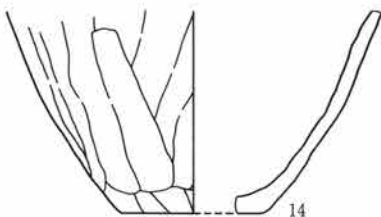
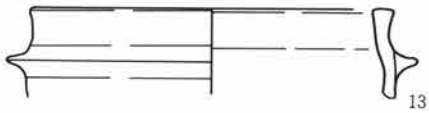
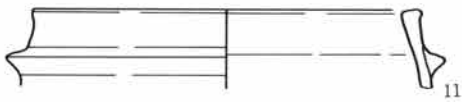
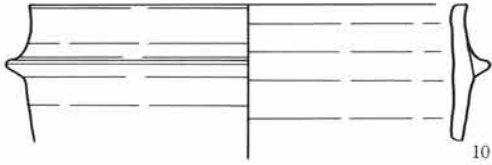
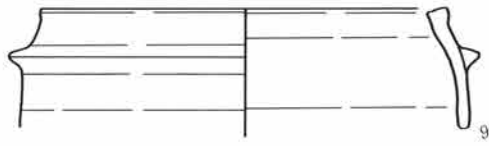
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 蓋 覆土	—・—・—、小片 細砂粒 やや軟質 橙色	蓋鈕部のみ、鈕は扁平状を呈し、周辺はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・褐色鋳物粒 普通 橙色	外面は口唇部までヘラ磨き、内面は放射状暗文が施されている。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 蓋 覆土	15.6・—・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰褐色	ロクロ回転方向不明。鈕は欠損。 天井部はゆるい丸みをもち、口 縁部は外反する。内面には身受 けのカエリをもつ。天井部の2 分の1程度は回転ヘラ削り。
4	灰釉陶器 壺 覆土	16.6・8.4・5.0 1/2 緻密・細砂粒 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は 僅かに外反し、体部はゆるい丸 みをもち開く。高台は端部に丸 みをもち直立する。底部はヘラ 撫で。施釉方法は漬け掛け。釉 調は不透明な緑灰色を呈す。内 面の底部には重ね焼き痕がみら れる。
5	須恵器 羽釜 貯蔵穴底部 より4cm、 12cm	18.6・—・— 1/6 粗砂粒 酸化焰 にぶい黄橙色	口縁部は内傾し、口唇端部は丸 みをもち内傾する。胴部はほと んどふくらまず、鐙は丸みをも つ断面三角形を呈す。
6	須恵器 羽釜 貯蔵穴底部 より12cm	22.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰やや軟質 灰白色	口縁部は内傾し、口唇部は外側 に突出し、端部平坦で内傾する。 胴部は直線的、鐙は断面三角形 で水平方向を向く。
7	須恵器 羽釜 貯蔵穴底部 より5cm	19.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	口縁部は内傾し、口唇端部は丸 みをもち内傾する。胴部はほと んどふくらまず、鐙は丸みをも つ断面三角形を呈す。外面に輪 積痕が残る。
8	須恵器 羽釜 覆土	20.4・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	口縁部は内傾し、口唇端部はや や丸みをもつ。鐙は断面三角形 を呈し水平方向を向く。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
9	須恵器 羽釜 カマド	21.6・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	口縁部は内傾し、口唇部は外側に突出し、端部はほぼ平坦である。胴部は直線的で鏝は断面三角形を呈しやや上方を向く。
10	須恵器 羽釜 床下	22.0・—・— 小片 細砂粒・褐色鉱物 粒 酸化焰 赤褐色	口縁部から胴部上位にかけては直線的。口唇端部は平坦で水平。鏝は断面三角形を呈しやや上方を向く。
11	須恵器 羽釜 覆土	20.4・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	口縁部は直立し、口唇端部は平坦で水平。鏝は断面三角形を呈し、水平方向を向く。
12	須恵器 羽釜 カマドより 4cm	20.0・—・— 小片 粗砂粒 酸化焰 橙色	口縁部は内傾し、口唇部は外側に突出し、端部はほぼ平坦である。胴部は直線的で鏝は断面三角形を呈しやや上方を向く。
13	須恵器 羽釜 貯蔵穴底部 より12cm	19.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	口縁部は直立し、口唇端部は平坦で水平。鏝は断面三角形を呈し、水平方向を向く。
14	須恵器 羽釜 床下	—・7.4・— 小片 粗砂粒・亜角礫 還元焰 灰褐色	胴部は縦方向ヘラ削り。

S J 105

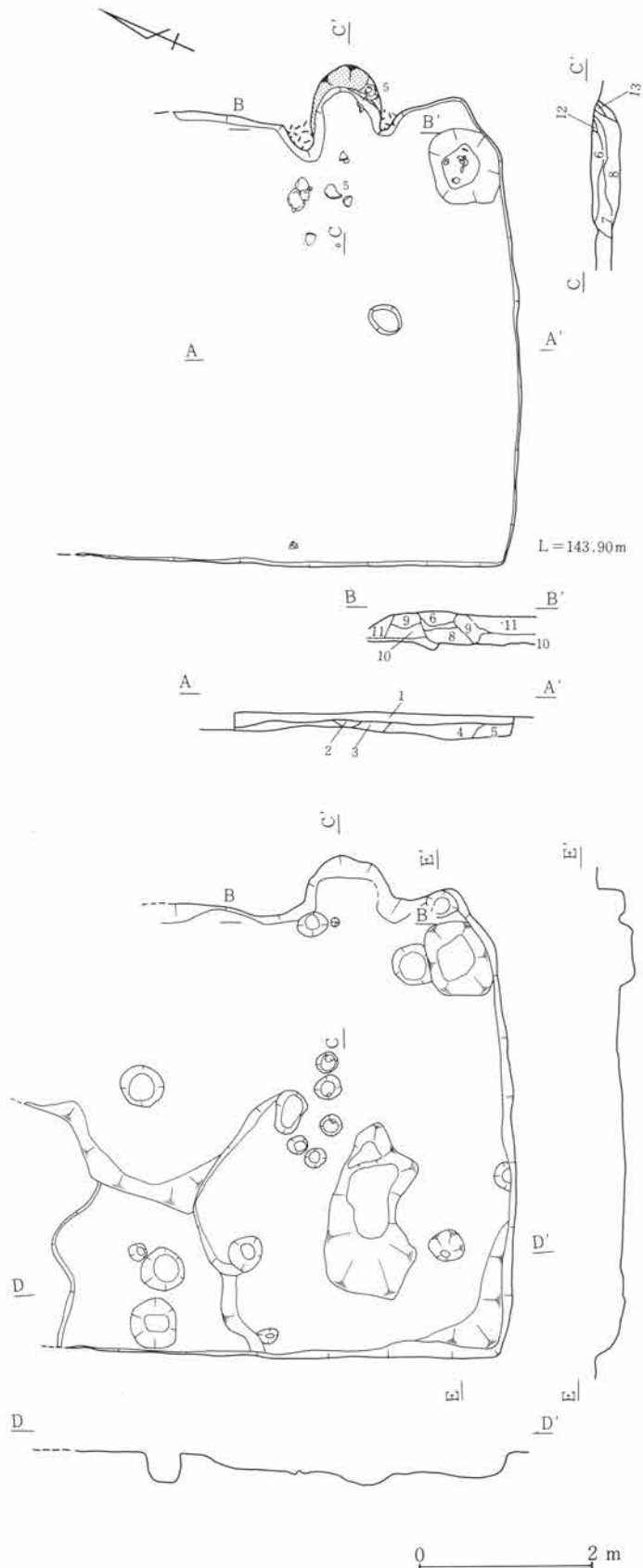
本住居跡は、83～86G-16～19グリッドに位置し、北壁側は、調査前の水道管理設工事によって壊されている。平面形態は、方形に近い形状を呈すると推測させられ、大型の住居跡である。規模は、東西5.07m、南北5m以上を測る。主軸方向は、N-66.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、8～11cmを測り、平均は10cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径100×41cm、深度37cmを測る。

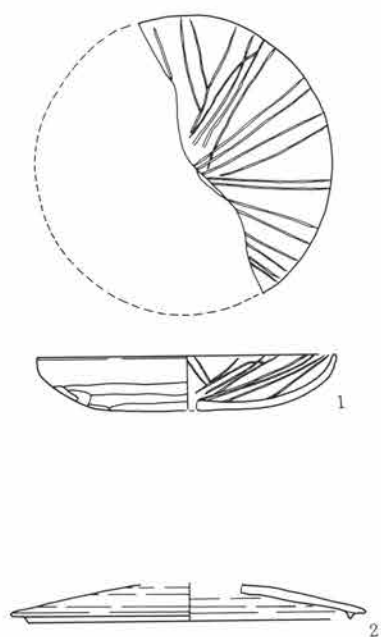
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合良好な状態で残っている。規模は、全長95cm、幅154cmを測り、焚口部の一部は壁外に52cmのびる。

掘り方は、床面より4～18cmほど掘り込まれ、埋土は、ロームブロックを多く含む暗褐色土である。床下の施設は、西半分によくみられ、床下土坑1基の他、ピットが15基検出された。

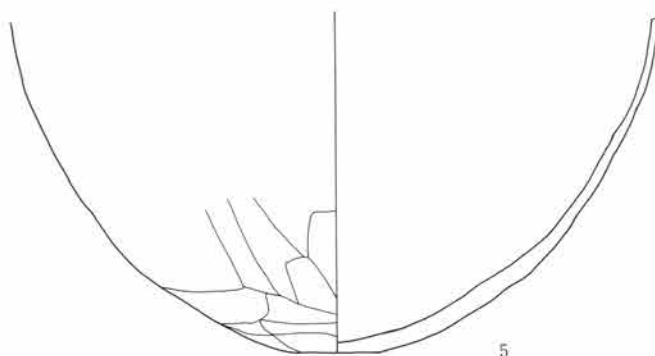
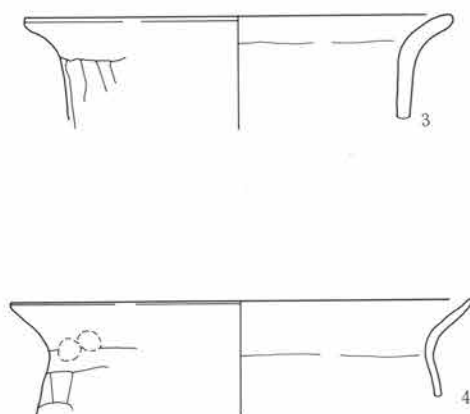
- 1 暗茶褐色土 C軽石 ロームブロック
 - 2 暗茶褐色土 若干のC軽石 ロームブロック
 - 3 暗褐色土 若干のC軽石 褐色粘土 ロームブロック
 - 4 暗褐色土 多量のロームブロック
 - 5 褐色土 暗褐色土ロームブロックの混土
- カマド
- 6 黒褐色土 焼土 炭化物 暗褐色粘土ブロック
 - 7 暗茶褐色土 焼土粒 褐色粘土
 - 8 暗褐色土 焼土粒 灰
 - 9 黒褐色土 焼土粒 黒色粘土ブロック
 - 10 暗褐色土 焼土粒
 - 11 暗褐色土 焼土粒
 - 12 赤褐色土 焼土
 - 13 暗褐色土



第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	15.8・10.6・2.9 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒・ 角礫 やや軟質 橙色	口縁部は直立ぎみ、体部はゆるい丸み をもち開く。底部は平底を呈す。外面 の口縁部は横撫で、体部は左方向への ヘラ削り。底部はヘラ削り。内面は底 部の中心から口縁部に向けての放射状 暗文が施されている。
2	須恵器 蓋 覆土	18.8・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的、 内面に身受けのカエリをもつ。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 甕 覆土	22.8・—・—、小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 褐色	口唇部は外反し、横撫で。胴部は直線的で縦方向へのヘラ削り。
4	土師器 甕 カマド	24.4・—・—、小片 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は直線的に開き、横撫で。胴部は横方向へのヘラ削り。
5	土師器 甕 カマド 床直	—・4.7・—、1/5 粗砂粒 普通 にぶい橙色	胴部は球状の丸みをもち、底部は平底を呈す。胴部は斜め方向へのヘラ削り。 底部周辺は横方向へのヘラ削りが施されている。

S J 106・122

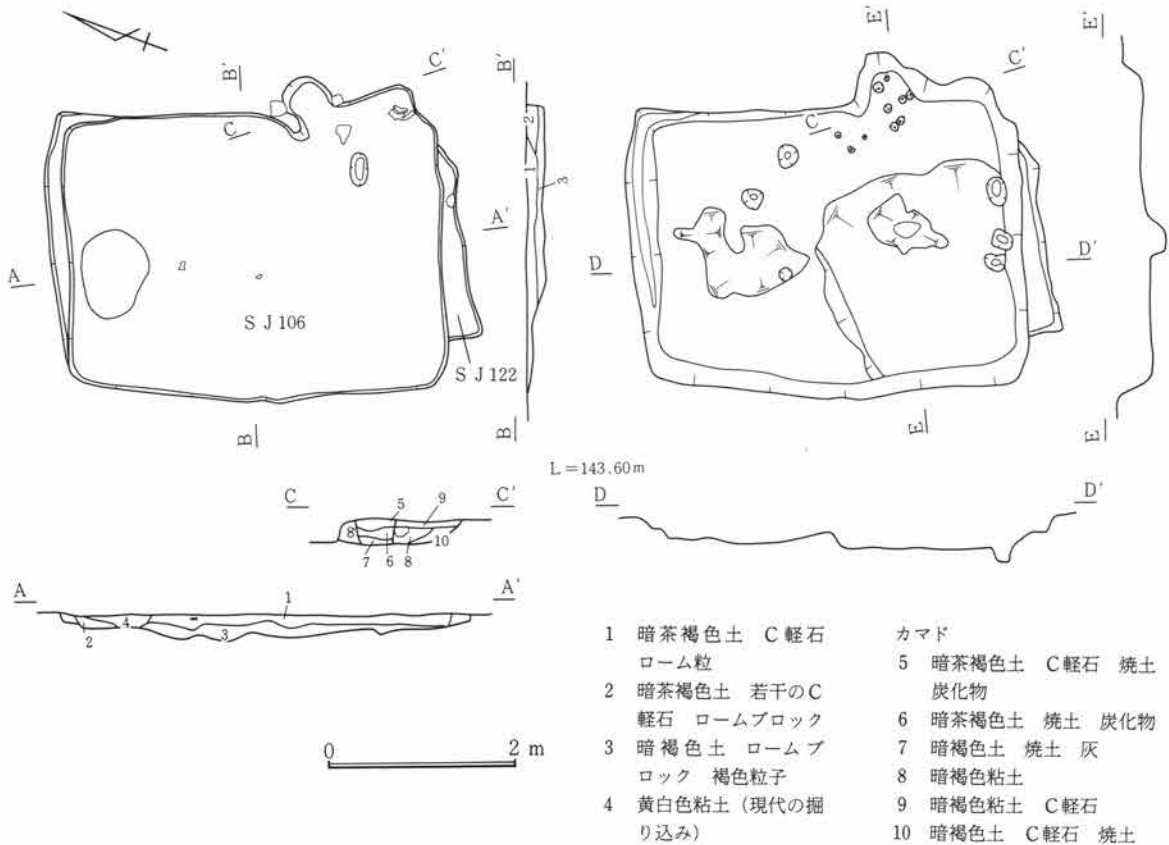
S J 106は、82～84G—14～16グリッドに位置し、S J 122と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、東壁がカマドの所で屈折し、西壁は中央部がややふくらむが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.17m、南北4.02m、面積11.85m²を測る。主軸方向は、N—68.5°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

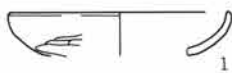
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は右袖部が欠落している。規模は、全長63cm、幅90cmを測り、焚口部の一部は壁外に40cmのびる。袖部は、両袖部とも加工石を使用して構築されている。

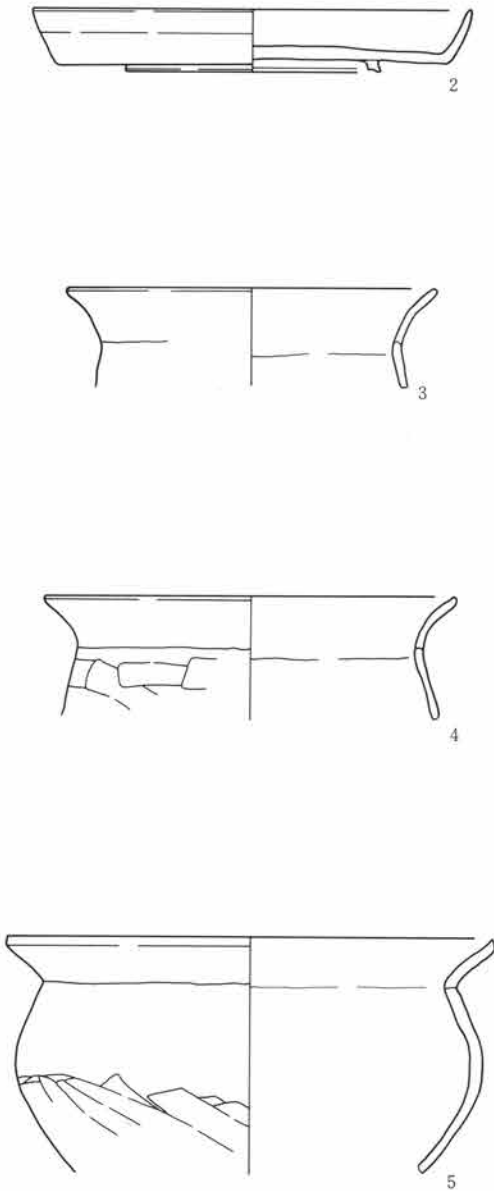
掘り方は、床面より8～10cmほど掘り込まれ、埋土は、暗褐色土である。床下の施設は、不整形で、88×55cm、深度17cmの床下土坑1基と、径20～30cmのピットが5基検出された。

S J 122は、S J 105と重なるように位置し、残存部分は、南壁と北壁の一部だけで全貌は不明である。平面形態は、長方形を呈すと推定される。規模は、南北4.45mを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 覆土	11.4・—・— 1/10 細砂粒、普通 橙色	口縁部は内湾し、横撫で。底部はヘラ削り。





No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 盤 床直 覆土	23.2・21.0・3.2 2/3 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部はほとんど開かず、高台は底部の3分の2程度の所に貼付され、直立きみで内側に段をもつ。底部は回転ヘラ撫で。
3	土師器 甕 覆土	19.2・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
4	土師器 甕 覆土	21.6・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
5	土師器 甕 カマド 床直	25.6・—・— 1/8 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、胴部は楕円形に大きくふくらむ。口縁部は横撫で、胴部上半は撫で、下半は斜め方向のヘラ削り。

S J 107

130

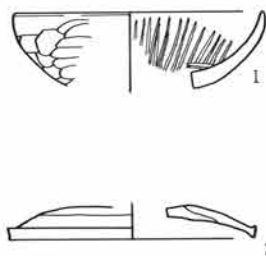
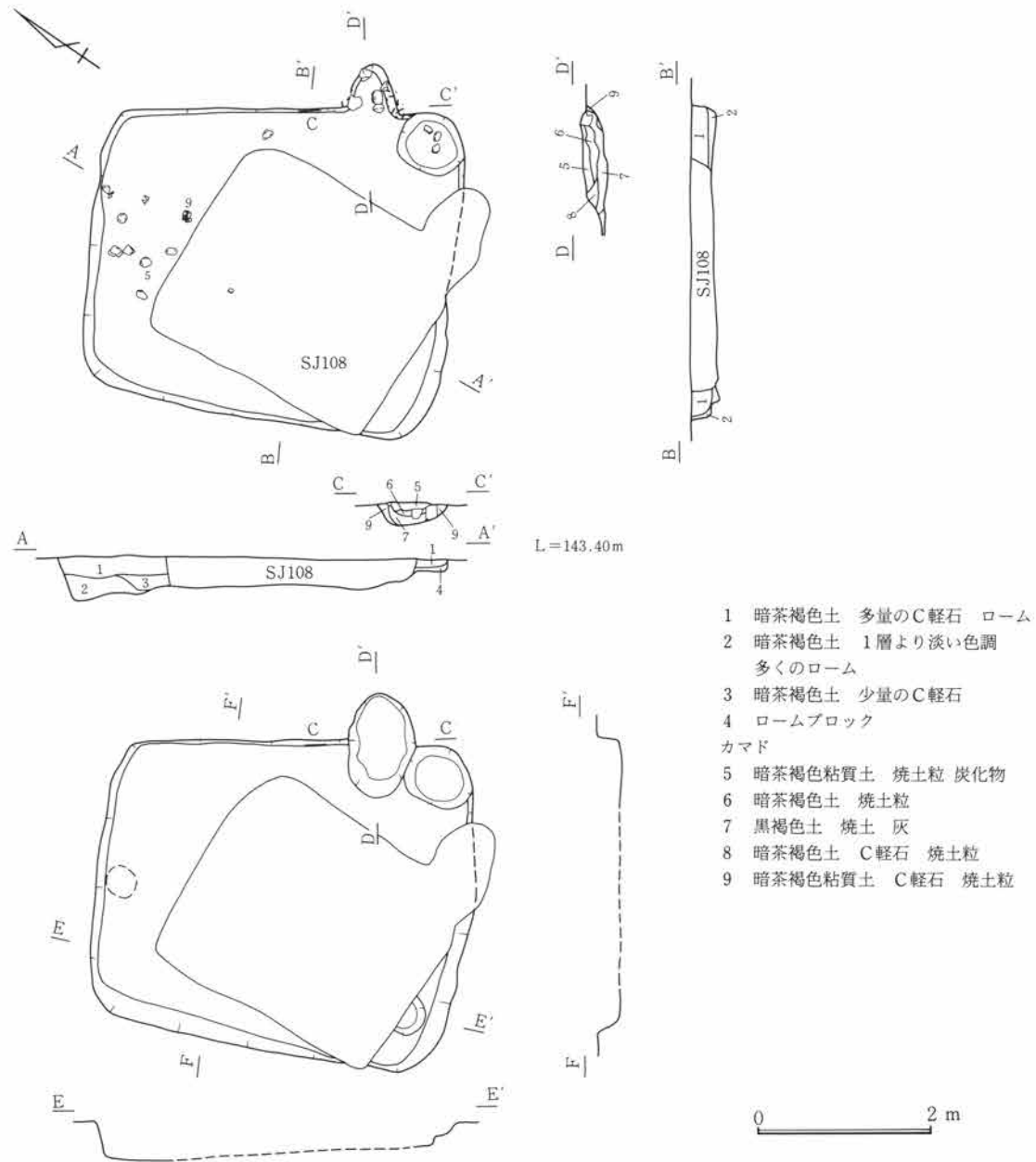
本住居跡は、81～83G-05～07グリッドに位置し、S J 108、S D46、S B13と重複するが、新旧関係は、S J 108より本遺構のほうが古く、S D46、S B13より新しい。本遺構の3分の2は、S J 108に切られ全貌は不明である。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西3.65m、南北4.17m、面積14.32㎡を測る。主軸方向は、N-55°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、28～48cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径76×65cm、深度10cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は両袖部とも欠落している。規模は、全長117cm、幅76cmを測り、焚口部の半分は壁外に50cmのびる。袖部は、自然石を使用して構築されている。

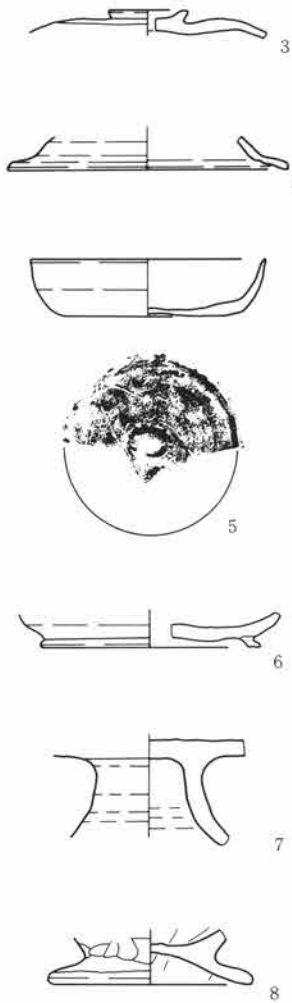
第3章 検出遺構・遺物

掘り方は、全体的に浅く、床下の施設は、床下土壇が1基西南コーナー隅より検出されたがS J 108に切られ、形態・規模は不明である。

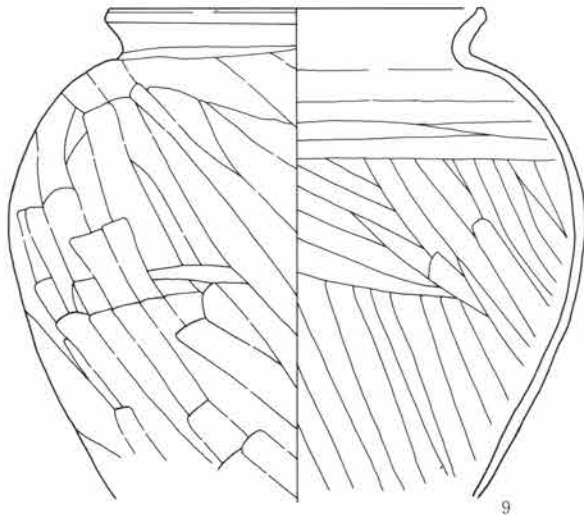


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.2・—・—、小片 粗砂粒・角礫・褐色鉾 物粒 普通・橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもつ。外面の口唇部は横撫で、体部はへら削り。内面の体部は放射状暗文が施されている。
2	須恵器 蓋 覆土	13.0・—・—、小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は折り曲げでやや内傾し、上方に引き出されている。天井部の中心部は回転へら削り。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 蓋 覆土	—・4.2・— 1/6 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。紐は扁平状を呈し、天井部は回転ヘラ削り。
4	須恵器 蓋 覆土	15.0・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、口縁部は直線的に開く。
5	須恵器 坏 床直 覆土	12.4・8.6・3.0 細砂粒 1/2 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は立ち上がりに丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。底部はヘラ切り後回転ヘラ削り。
6	須恵器 坏 覆土	—・11.7・— 1/8 白色細・粗砂粒 還元焰 淡黄色	高台は外側に張り出すように付く。接地面は平坦面をもつ。底部は回転ヘラ削り。
7	須恵器 高坏 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・円礫 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。脚部は粘土紐作り。坏部内面は不定方向への撫で。
8	土師器 台付甕 床直 覆土	—・7.0・—、小片 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 赤褐色	台付甕脚部。脚部は大きく開き、横撫で。胴部はヘラ削り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	土師器 甕 床直 覆土	20.0・—・— 1/3 粗砂粒・褐色鉾物粒・亜角礫 やや軟質 橙色	口縁部は直線的に直立する。胴部は上位で大きくふくらむ。外面の口縁部は横撫で。胴部は斜め方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。
10	須恵器 甕 覆土	25.0・—・—、小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇端部は丸みをもち、端部下には1条の凸帯がまわる。内面には多量の自然釉の付着がみられる。

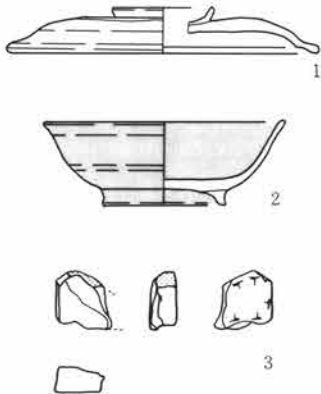
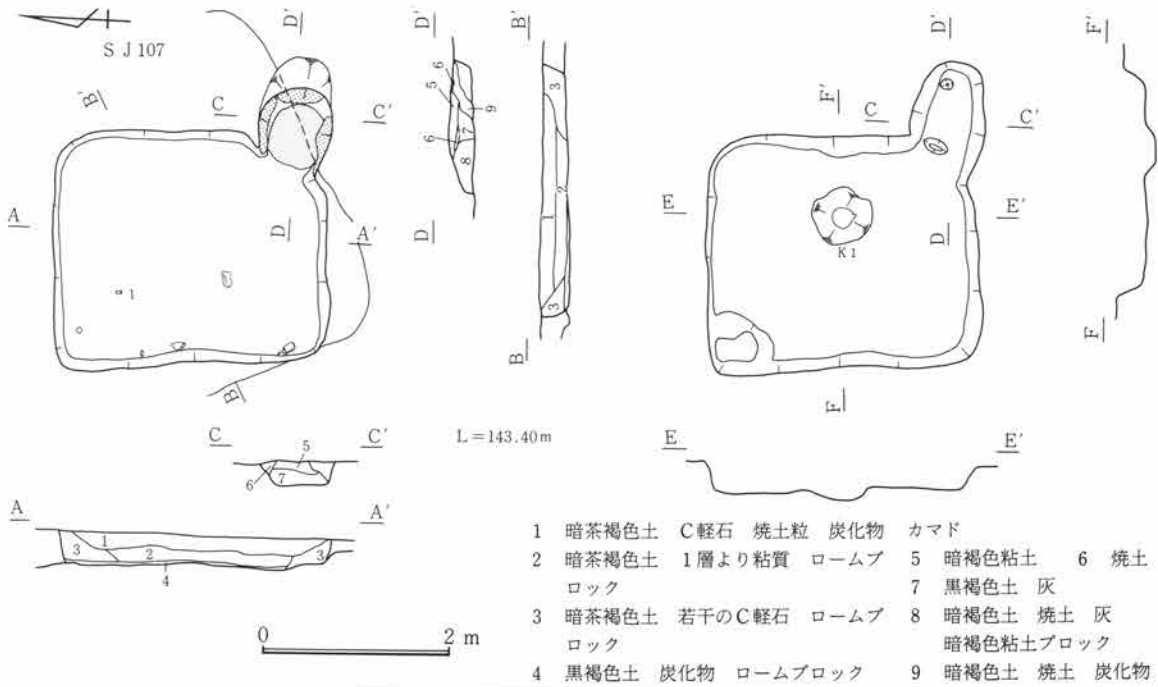
S J 108

本住居跡は、81~82G-05~06グリッドに位置し、S J 107と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.50m、南北2.94m、面積7.22m²を測る。主軸方向は、N-85.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

床面は、黒褐色土で貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、19~38cmを測り、平均は26cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は、天井部は焚口部に外部から土砂が流入してから崩落している程度で他は良好な状態で残っている。規模は、全長110cm、幅78cmを測り、焚口部の大部分は壁外に80cmのびる。袖部は、僅かに築かれている程度で、地山を掘り込んで使用している。

掘り方は、床面から4~6cmほどで全体的に浅く平坦である。床下の施設は、床下土坑が2基検出され、形態・規模は、K₁がほぼ円形で、径35cm、深度9cm。K₂は楕円形で、径66×62cm、深度25cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 床直 覆土	16.4・5.2・2.4 1/10 細砂粒、還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。鈕は輪状?。口縁部は開く。内面には身受けのカエリをもつ。天井部は2分の1程度まで回転ヘラ削り。
2	緑釉陶器 碗 覆土	12.8・6.6・4.4 1/3 細砂粒 還元焰焼きしめ 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はやや開く。底部は回転ヘラ削り。釉調は透明な濃緑色を呈す。内面の底部にはトチン痕がみられる。
No	種類		観察表掲載頁
3	石製品 砥石		832

S J 109

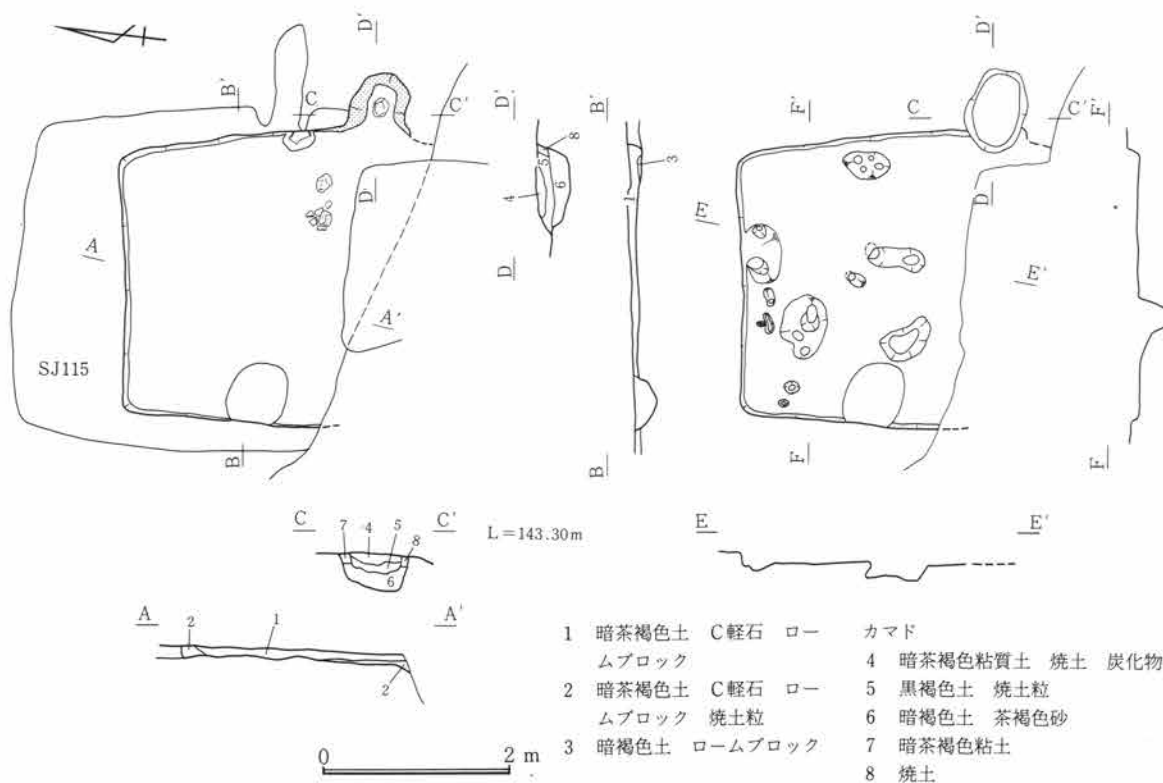
132

本住居跡は、81～83F-48～49グリッドに位置し、S J 115と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。本遺構の南側には、中世に一時的に存在したと推定される河川跡がみられ、その河川と攪乱によって本遺構の南壁よりは、壊されているため全貌は不明である。平面形態は、北壁の短かい台形状を呈す。規模は、東西3.11m、南北は3.20m以上を測る。主軸方向は、N-76.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、7～17cmを測り、平均は11cmである。残存部分からは、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は欠落している。規模は、全長66cm、幅70cmを測り、カマドの大部分は壁外に位置する。

掘り方は、全体的に浅く、ほぼ平坦である。床下の施設は、10～20cmの小ピットが5基と床下土壇が6基検出された。

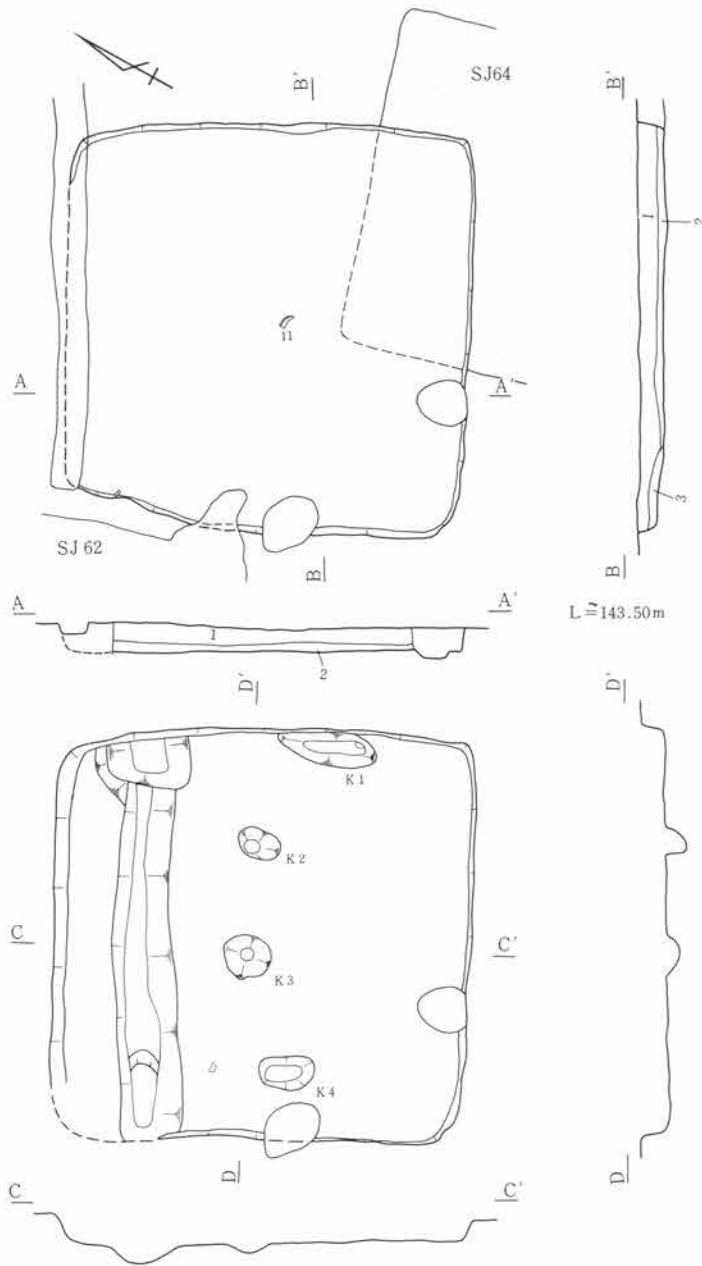


S J 110

133

本住居跡は、76～79G-11～13グリッドに位置し、S B 15、S J 62、S J 64、S J 113と重複するが、新旧関係は、S B 15、S J 62より本遺構のほうが古く、S J 64・113より新しい。また、本遺構の北壁部分は、最近の耕作溝によって壊されている。平面形態は、ほぼ方形を呈す。規模は、東西4.31m、南北4.31m、面積は推定で17.67m²を測る。主軸方向は、N-26°-Eを指す。覆土は、自然堆積状態を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、15～27cmを測り、平均は22cmであ

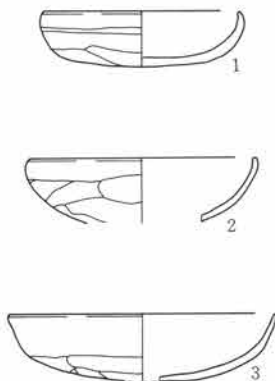


る。壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。カマドは所有していない。

掘り方は、床面より3~10cmほど掘り込まれている。床下の施設は、床下土壇が4基検出され、形態・規模は、K₁が長楕円形で径108×38cm、深度17cm。K₂は楕円形径46×30cm、深度20cm。K₃はほぼ径48×52cm、深度10cm。K₄は楕円形で径58×36cm、深度14cmを測る。

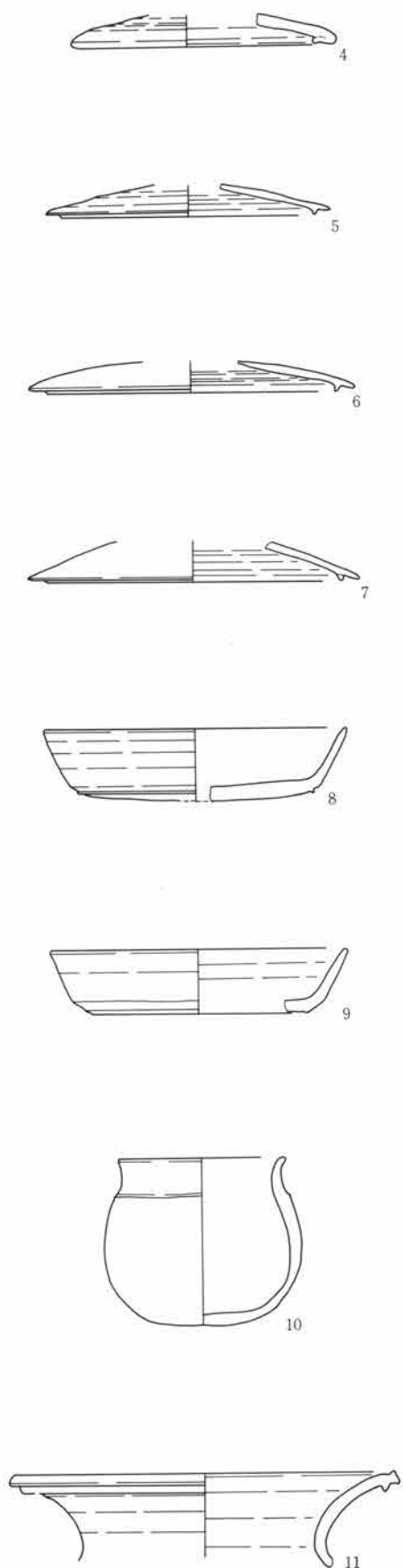
- 1 暗茶褐色土 C軽石 ロームブロック
- 2 暗褐色土 ロームブロック
- 3 暗褐色土 炭化物 ロームブロック

0 2 m



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	10.4・9.2・3.0、2/5 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 覆土	12.0・12.0・—、1/6 細砂粒・普通 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床直	14.2・12.4・3.6、1/5 細砂粒・褐色鉱物粒 雲母・普通 にぶい橙色	口縁部は直線的にやや開く。底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。

第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 蓋 覆土	15.6・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。器壁は厚い。天井部は直線的で内面には身受けのカエリをもち、カエリは折り返し。
5	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・— 1/5 細砂粒 還元焰 緑灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面に身受けのカエリをもつ。
6	須恵器 蓋 覆土	19.4・—・— 1/6 黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面に身受けのカエリをもつ。外面には自然釉が附着している。
7	須恵器 蓋 覆土	19.8・—・— 小片 黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面に身受けのカエリをもつ。外面には自然釉が附着している。
8	須恵器 坏 覆土	17.8・14.7・4.3 1/3 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は小型の断面三角形を呈し、削り出し。底部は高台より突出し、ヘラ撫でが施されている。
9	須恵器 坏 覆土	16.4・11.8・3.8 1/6 黒色鉍物粒 還元焰 暗青灰色	ロクロ回転方向不明。体部下位には回転ヘラ削り、高台は極小型で削り出し、底部は回転ヘラ削りが施されている。
10	土師器 小型甕 覆土	9.8・6.0・9.8 1/4 細砂粒・雲母・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部は丸みをもち、底部は平底に近い。口縁部は横撫で、胴部・底部は剝離のため整形不明。
11	須恵器 甕 床直	22.4・—・— 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は大きく外反し、口唇端部は平坦で上下にやや引き出され、端部下に断面三角形の凸帯がまわる。

S J 111・112

134・135

S J 111は、79～80G-16～17グリッドに位置し、S B 15、S J 112と重複するが、新旧関係は、S B 15より本遺構のほうが古く、S J 112より新しい。本遺構の西壁の一部は、最近の耕作溝によって壊されているが、平面形態は、長方形を呈する。規模は、東西2.12m、南北3.22m、面積7.05m²を測る。主軸方向は、N-61°-Eを指す。

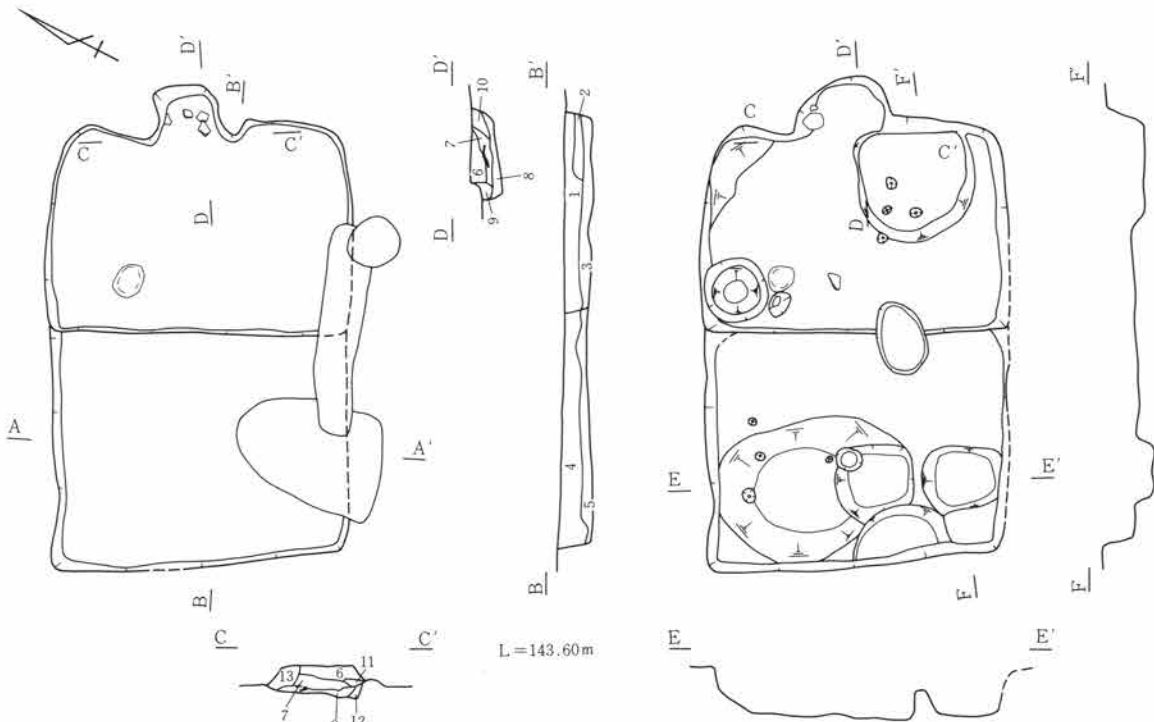
床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、12～19cmを測り、平均は15cmである。

カマドは、東壁の南よりに位置し、規模は、全長63cm、幅115cmを測り、焚口部の一部は壁外に45cmのびる。

掘り方は、床面より5～10cmほど掘り込まれている。床下の施設は、西北コーナー際に円形で径65～68cm、深度21cmを測る床下土壇が1基検出され、床下土壇の南側から径25～28cmの扁平な自然礫が出土している。

S J 112は、S J 111の西側に重複して位置し、平面形態は、長方形を呈し、規模は、東西はおよそ2.70m、南北3.15mを測る。床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、12～24cmを測る。

掘り方は、床面より5～12cmほど掘り込まれている。床下の施設は、床下土壇が西壁より3基検出された。



L=143.60m

S J 111

- 1 暗茶褐色土 C軽石 ローム粒
褐色粒
- 2 黒褐色土 C軽石 ロームブ
ロック
- 3 暗褐色土 ロームブロック

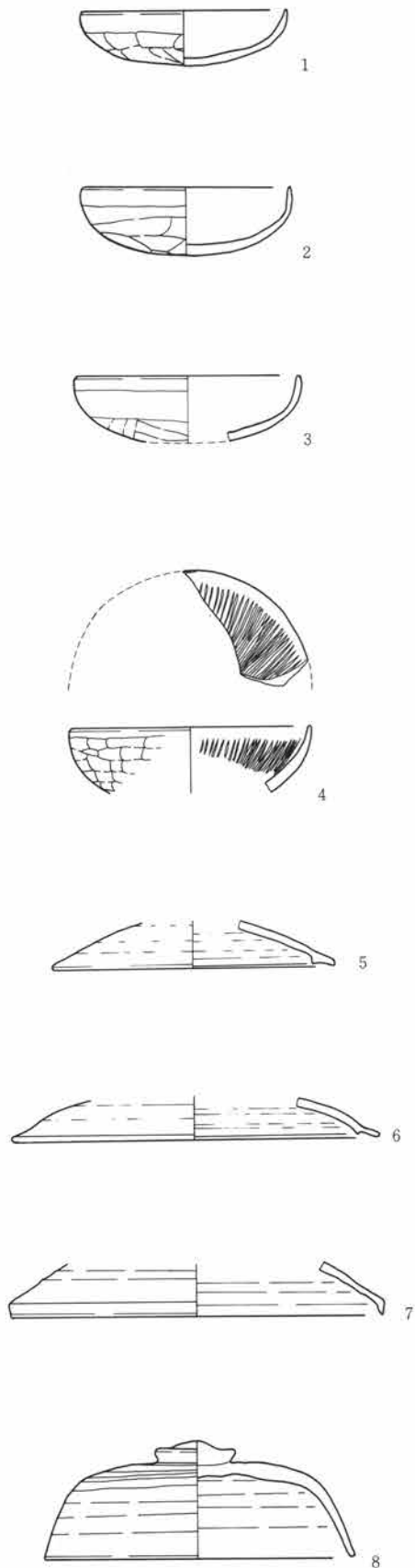
S J 112

- 4 暗茶褐色土 C軽石 ロームブ
ロック 淡褐色粘土ブロック
- 5 褐色土 ロームブロック

カマド

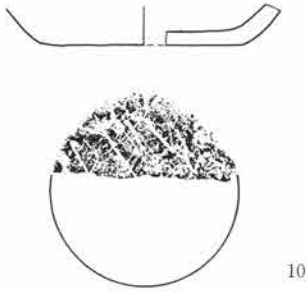
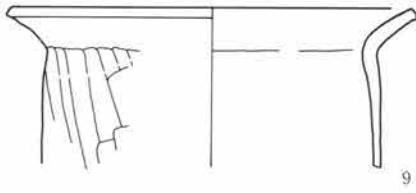
- 6 暗茶褐色土 C軽石 焼土
- 7 暗茶褐色土 焼土 炭化物
- 8 茶褐色土 茶褐色砂
- 9 暗褐色土 焼土 褐色粘土
- 10 暗褐色土 焼土
- 11 暗褐色土 褐色粘土
- 12 暗茶褐色土 褐色粘土
- 13 暗茶褐色土 C軽石 焼土
褐色粘土

第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下	11.8・11.4・3.2 3/5 細砂粒・雲母・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	12.0・11.0・3.8 1/2 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 カマド	13.2・11.6・4.0 1/3 細砂粒 褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 床下	14.0・—・— 1/10 細砂粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもって開く。外面の口唇部は横撫で。体部は細かいヘラ削り。内面は斜放射状暗文が施されている。
5	須恵器 蓋 覆土	16.2・—・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みをもち、内面には身受けのカエリをもつ。
6	須恵器 蓋 覆土	21.2・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、内面に身受けのカエリをもつ。
7	須恵器 蓋 覆土	20.4・—・— 1/8 粗砂粒・黒色鉍物粒・ 白色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、口唇部は折り曲げで直立する。
8	須恵器 蓋 カマド底部より12~15cm	17.6・鈕4.2・5.7 完形 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 オリーブ灰色	短頸壺蓋、ロクロ右回転。鈕は擬宝珠状を呈し、天井部はほぼ水平で口縁部は直線的でやや開く。天井部は回転ヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物



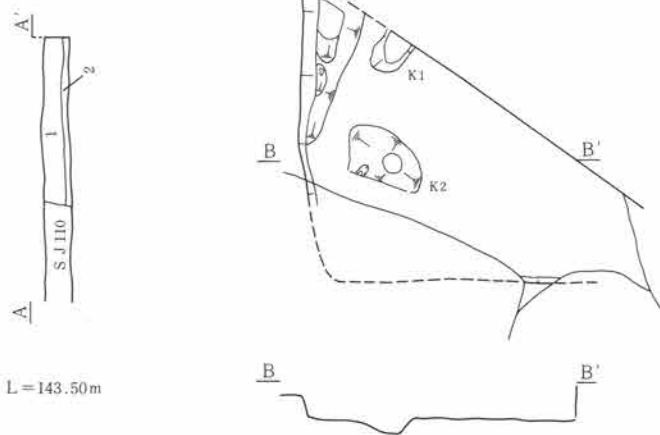
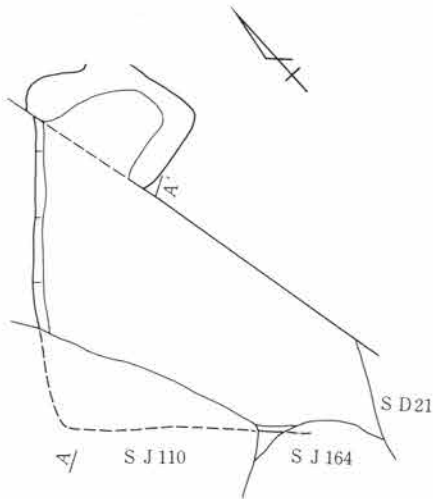
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	土師器 甕 覆土	21.2・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい褐色	口縁部は直線的に開く。胴部も直線的。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。
10	土師器 甕 覆土	—・10.8・— 小片 粗砂粒 普通 にぶい赤褐色	底部は平底で木葉痕がみられる。

S J 112

1	須恵器 蓋 カマド	18.0・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、口縁部で外反する。内面には身受けのカエリをもつ。
---	-----------------	--	--

SJ113

136



L = 143.50m

0 2 m

- 1 暗茶褐色土 C軽石 ローム
- 2 暗褐色土 ロームブロック

S J 113

本住居跡は、76～77G-11～14グリッドに位置し、S D21、S J 110・S J 114・S J 64と重複するが、新旧関係は本遺構のほうが古く、S J 114より新しい。本遺構の3分の2以上が調査区域外にのび、西壁の大部分をS J 110・S J 64、S D21によって切られているため、全貌はほとんど不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、東西、南北とも4m以上になると推測できる。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、18～22cmを測り、平均は20cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

掘り方は、床面より15～21cmほど掘り込まれている。床下の施設は、床下土壇が2基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形、径100×63cm、深度9cm。K₂は楕円形で規模不明である。



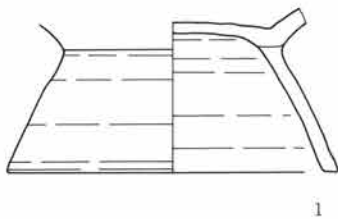
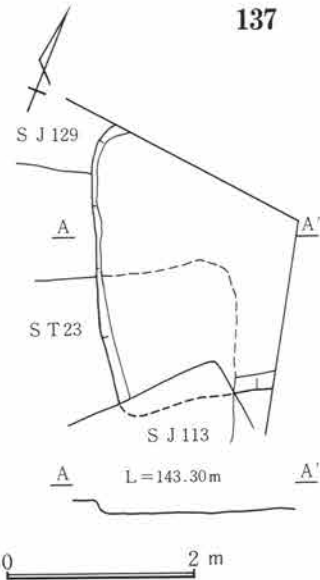
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	—・13.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	高台は断面四角形を呈し、やや開き接地面は広い。
No	種類		観察表掲載頁
2	鉄製品 刀子		891

S J 114

本住居跡は、76～77G-13～15グリッドに位置し、S J 113・S J 129、S T23と重複するが、新旧関係は、S J 113より本遺構のほうが古く、S J 129・S T23より新しい。本遺構の半分以上は、調査区域外にのびているため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推定される。規模は、南北で3m前後を測る。主軸方向は、N-62.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、やや緩やかに立ち上がり、壁高は、15～18cmを測る。残存部分からは、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

掘り方は、床面より19～31cmほど掘り込まれ、中央部にかけて落ち込んでいる。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 脚付鉢 覆土	—・17.6・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 酸化焰 にぶい黄褐色	ロクロ回転方向不明。脚部はやや開き、端部は平坦で接地する。

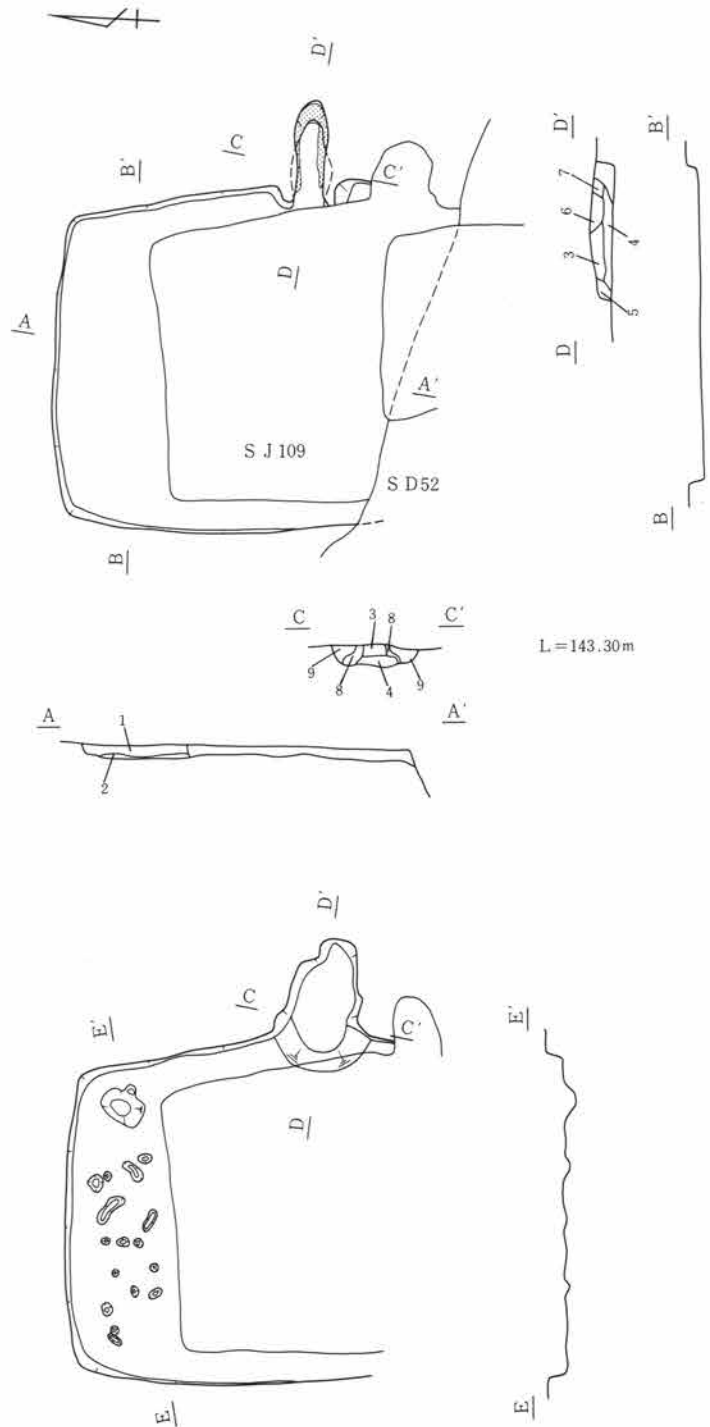
S J 115

本住居跡は、81~83F-47~49グリッドに位置し、S J 109が本遺構の内側にすっぽりと入るように重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の南側は、中世に一時的に流れた河川跡がみられ、その河川跡とS J 109によって本址の4分の3以上は壊されているため全貌は不明であるが、平面形態は、北壁と西壁がややふくらむが長方形に近い形態を呈すと推測され、規模は、東西3.62m、南北4m前後を測る。主軸方向は、N-78°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。残存部分からは壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合良好な状態で残っている。規模は、全長112cm、幅87cmを測り、焚口部から煙道部にかけては壁外に85cmのびる。

掘り方は、全体的に浅く、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、東北コーナーよりに楕円形で、径47×35cm、深度43cmの床下土壇が1基検出された。



- | | |
|---------------------------|--------------|
| 1 暗茶褐色土 若干のC軽石
ロームブロック | 5 暗茶褐色土 C軽石 |
| 2 黒褐色土 ロームブロック
カマド | 6 焼土(天井部) |
| 3 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒 | 7 焼土(煙道部) |
| 4 淡褐色粘質土 | 8 焼土(袖部) |
| | 9 茶褐色土 焼土 粘土 |

0 2 m

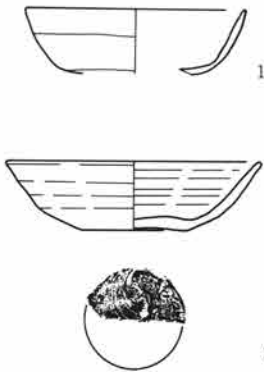
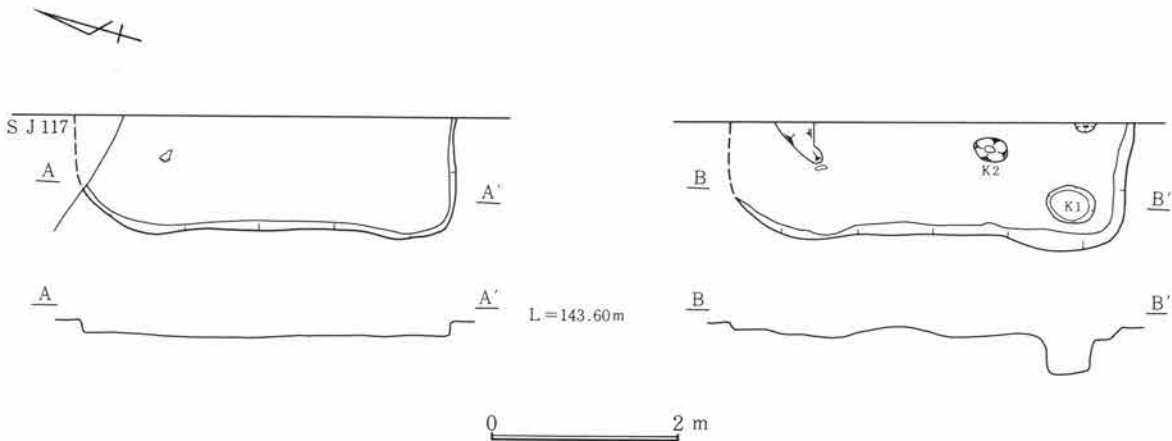
S J 116

139

本住居跡は、78～79G-16～17グリッドに位置し、S J 117と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の4分の3は、調査区域外にのびるため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、南北4m前後を測る。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、10～15cmを測り、平均は13cmである。

掘り方は、床面より3～8cmほど掘り込まれている。床下の施設は、床下土壇が2基検出され、形態、規模は、K₁が楕円形で、径52×37cm、深度28cm。K₂は楕円形で径37×26cm、深度14cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.6・7.4・3.5 1/8 細砂粒、普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的。口縁部は横撫で、体部は指撫で。
2	須恵器 坏 覆土	13.4・5.4・3.7 1/10 細砂粒、酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。底部はベタ高台状で回転糸切り。

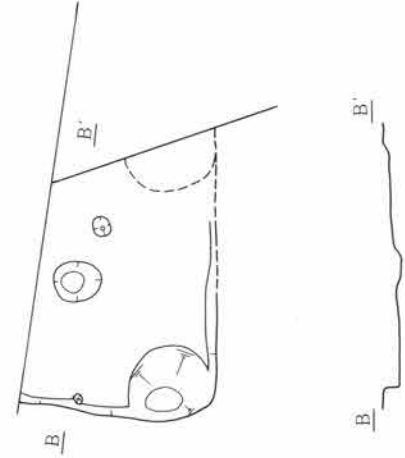
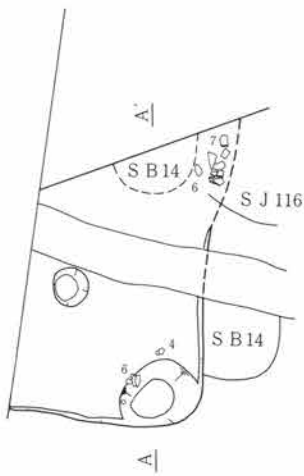
S J 117

139

本住居跡は、78～80G-17～19グリッドに位置する。本遺構は、第2次調査と第3次調査に分断されて調査がおこなわれた。第2次調査では、西壁と北壁の一部、全体の8分の1程度が検出された。第3次調査では、西壁と南壁の一部、全体の4分の1程度が調査されたが、第2次、第3次調査の住居跡をつき合わせてみると壁の一致がみられず、床面も標高差が6cmもみられることから、2軒の重複があったと推定される。

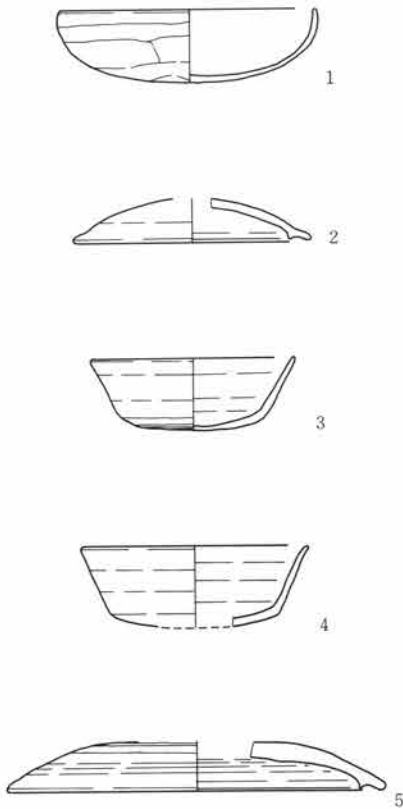
第2次調査で検出された住居跡は、第3次調査のより床面は高く、新旧関係は第3次調査のより新しい。第2次調査での出土遺物は、9～18である。第3次調査での出土遺物は、1～8である。

第3章 検出遺構・遺物



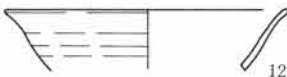
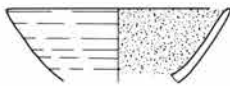
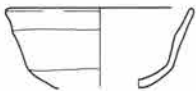
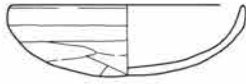
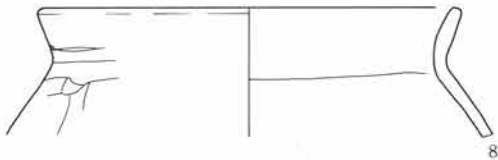
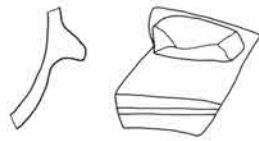
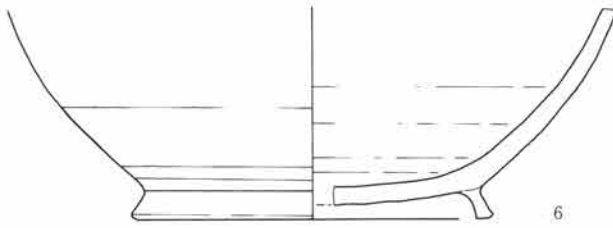
L = 143.60 m

0 2 m



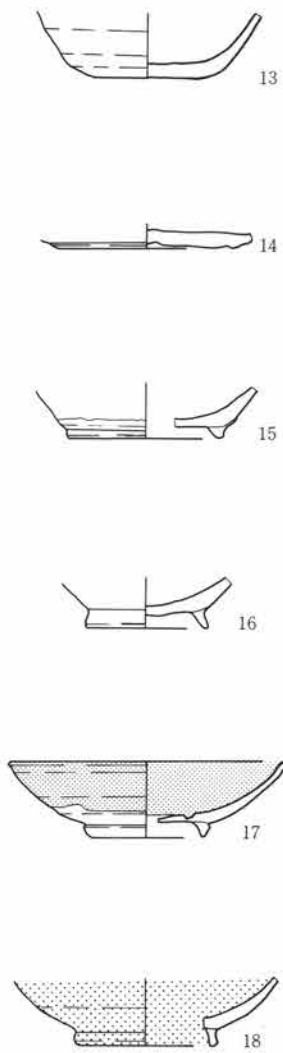
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.6・10.0・3.8 1/4 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部の上半は指撫で、下半は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
2	須恵器 蓋 覆土	12.5・—・— 1/5 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、口縁部はやや開く。内面には身うけのカエリをもつ。
3	須恵器 坏 覆土	10.8・7.8・3.8 1/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は丸底を呈す。底部は回転ヘラ削り。
4	須恵器 坏 床直	12.0・—・— 1/6 細砂粒 還元焰やや軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は丸底を呈す。底部は回転ヘラ削り。
5	須恵器 蓋 覆土	19.8・—・— 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みをもつ。内面には身うけのカエリをもつ。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調
器形・整形の特徴		
6	須恵器 短頸壺 床直 覆土	—・18.0・—、 $\frac{1}{8}$ 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色
短頸壺の胴部下位から底部にかけて、高台は端部に丸みを持ちやや開く。胴部下位は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ削りで部分的に不定方向へのヘラ撫でがみられる。		
7	須恵器 短頸壺 床上 8 cm	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色
短頸壺胴部の把手部分		
8	土師器 甕 覆土	22.0・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 良好 橙色
口縁部は直線的で僅かに開き横撫で。胴部はヘラ削り。		

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	土師器 坏 覆土	12.4・8.6・3.8 $\frac{1}{3}$ 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみ、体部から底部にかけては丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
10	土師器 坏 覆土	9.6・—・— $\frac{1}{10}$ 細砂粒 普通 灰黄褐色	体部から口縁部にかけては直線的、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部・底部は指撫で。
11	土師器 碗 覆土	12.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 酸化焰・内面黒色処理 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。
12	須恵器 碗 覆土	15.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反する。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
13	須恵器 碗 床直 覆土	—・5.4・— 1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部は立ち上がりで丸みをもち、底部は回転糸切り。
14	須恵器 坏 床上8cm	—・10.8・—、1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色・緑灰色	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。高台は削り出しによる小規模な断面四角形。
15	須恵器 碗 覆土	—・8.4・— 1/8 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面三角形を呈し、直立する。
16	須恵器 碗 覆土	6.2・—・— 1/4 細砂粒・雲母・褐色鉍物粒、還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は細身でやや開く。底部の切り離し方法不明。
17	灰釉陶器 碗 覆土	14.4・6.6・4.0 1/10 緻密・黒色鉍物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもち開く。口唇部は僅かに外反する。高台はやや丸みをもつ断面三角形を呈し直立する。内面底部には種子痕がみられる。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰色を呈す。
18	灰釉陶器 碗 覆土	—・7.4・— 1/10 緻密・黒色鉍物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開く。高台は丸みをもつ三ヶ月状を呈す。体部は回転ヘラ削りが施されている。施釉は漬け掛け。釉調は不透明な灰色を呈す。

S J 118

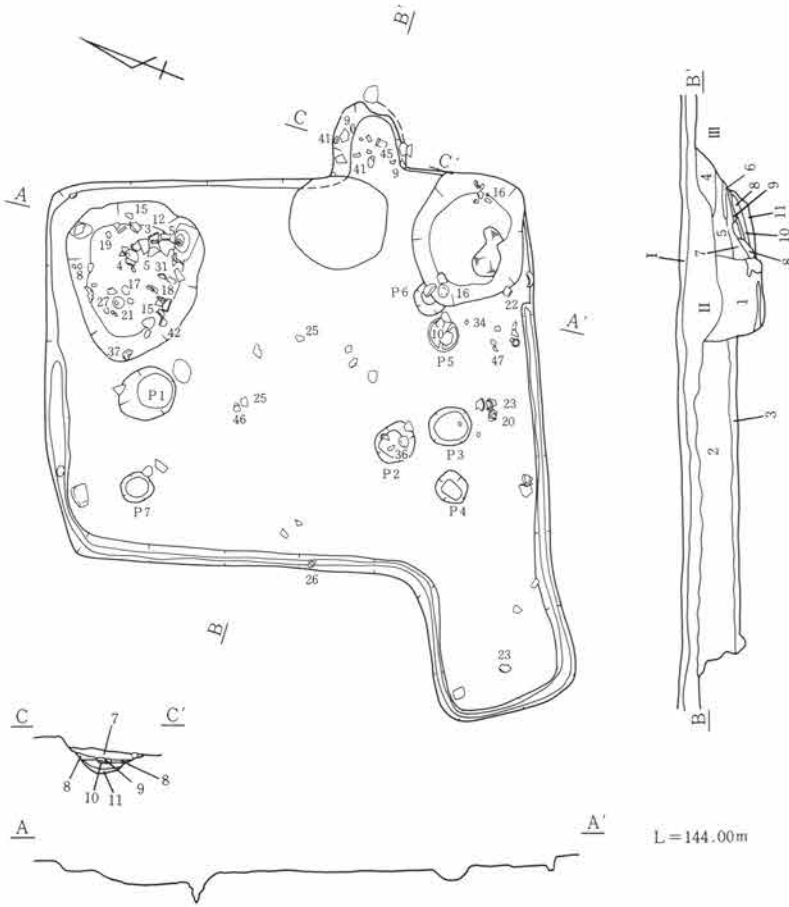
本住居跡は、92～95G—19～22グリッドに位置し、カマドの西側を土壇によって切られている他は、他の遺構との重複はみられない。平面形態は、西壁の南隅に一辺1.60mほどの方形の張り出しをもつ長方形を呈す。規模は、東西が5.81m、南北5.09m、北壁4.09m、面積23.61m²を測る。主軸方向は、N—77°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、7～18cmを測り、平均は13cmである。壁溝は、北壁の中央付近より西壁、張り出し部分、南壁の貯蔵穴よりまで周り、幅は4～13cm、深度2～6cmを測る。ピットは、7基検出され、そのうち柱穴はP₁・P₃の2本と推測され、形態、規模は、P₁が円形で径55～58cm、深度28cm。P₂が円形で径36～42cm、深度21cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー際と東北コーナーよりの2ヶ所に位置し、東南コーナー際のは、楕円形を呈し、径140×122cm、深度27cmを測る。東北コーナーよりのものは、楕円形を呈し、径174×161cm、深度34cmを測り、東よりに2本の小ピットをもち、土器片が多数出土している。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、右袖部は土壇によって欠落している。

規模は、全長70cm、幅82cmを測り、燃焼部は壁外に54cmのびる。

掘り方は、床面より2～5cmと掘り込みは浅い。床下の施設は、床下土壇1基と小ピット6基検出された。



1 灰褐色砂質 微量のB軽石 多量のC軽石（土壇覆土）

2 暗褐色砂質土 多量のC軽石 炭化物 土器片

3 暗褐色土 C軽石 多量の焼土粒 炭化物

カマド

4 赤褐色砂質土 少量のC軽石 多量の焼土ブロック

5 茶褐色粘土 C軽石 多量のロームブロック

6 黒色灰 多量の焼土ブロック

7 黒色灰 多量の焼土粒

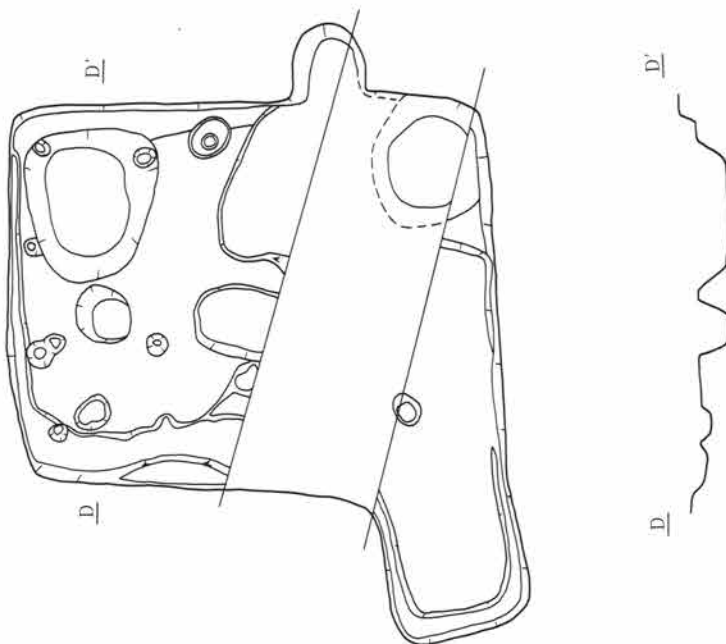
8 焼土（天井部）

9 黒色灰 焼土

10 黒色灰

11 黄褐色砂質土

L=144.00m

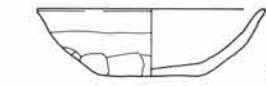


0 2 m

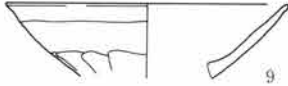
第3章 検出遺構・遺物

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 北貯蔵穴 覆土	12.0・—・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけてはほぼ直線的であり開かない。口縁部は横撫で、体部は指撫で。
2	土師器 坏 北貯蔵穴 覆土	12.0・8.0・3.9 1/10 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけてはほぼ直線的であり開かない。口縁部は横撫で、体部は指撫で。
3	土師器 坏 北貯蔵穴より 5cm 底部直上	11.2・6.4・4.0 9/10 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。口唇部は横撫で、体部は指撫で。底部はへら削り。
4	土師器 坏 北貯蔵穴より 13cm	13.0・6.8・3.9 7/8 粗砂粒 普通 赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのへら削り。底部は不定方向へのへら削り。
5	土師器 坏 北貯蔵穴より 6cm、2cm	12.0・8.0・3.4 3/5 粗砂粒・細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口唇部は直立し、体部はやや外反し、底部はゆるい丸みを呈す。口唇部は横撫で、体部は指撫で、底部はへら削り。
6	土師器 坏 覆土	12.0・10.6・3.3 完形 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部は極ゆるい丸みをもつ。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はへら削りが施されている。
7	土師器 碗 北貯蔵穴 覆土	14.2・7.6・5.5 1/6 細砂粒 酸化焰・内面黒色処理 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。体部は立ち上がりに丸みを持ち、高台は細みでやや開く。

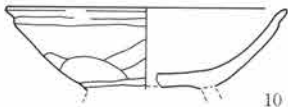
第4節 歴史時代



8



9



10



11



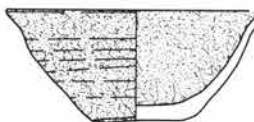
12



13



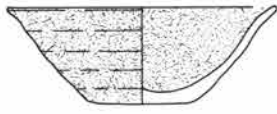
14



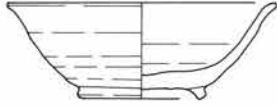
15



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
8	土師器 坏 北貯蔵穴底 部より15 cm、14cm、 13cm	12.2・5.2・3.5 1/5 細砂粒・粗砂粒・雲母 普通 にふい橙色	口縁部は僅かに外反し、体部は直線的に開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部の上半は指撫で、下半は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
9	土師器 碗 床上4cm 床上12cm	14.8・—・— 2/5 細砂粒・雲母 軟質 にふい橙色	口縁部は僅かに外反し、体部は直線的に開く。口縁部は横撫で、体部は上半で指撫で、下半ではヘラ削り、底部は回転糸切り。
10	土師器 碗 床上6cm	14.8・7.0・— 2/5 粗砂粒・石英 軟質 にふい黄橙色	口縁部は僅かに外反し、体部は直線的に開く。口縁部は横撫で、体部は上半で指撫で、下半ではヘラ削り、底部は回転糸切り。高台貼付の痕跡あり。
11	須恵器 坏 南貯蔵穴 覆土	12.8・8.0・3.7 1/8 粗砂粒・円礫 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部はやや外反し、底部は回転糸切り。
12	須恵器 坏 カマド	13.4・5.8・3.6 1/4 粗砂粒・白色鉱物粒・ 円礫 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、底部は回転糸切り。
13	須恵器 碗 南貯蔵穴	14.4・7.4・— 1/5 細砂粒 酸化焰 にふい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反する。高台は欠損。底部は回転糸切り。
14	須恵器 碗 覆土	13.2・6.0・4.2 1/5 粗砂粒・白色鉱物粒・ 円礫 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、底部は回転糸切り。
15	須恵器 碗 床上27cm、 5cm、19cm	13.8・5.2・6.0 1/2 細砂粒 還元焰燻焼成 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的に開く。底部は回転糸切り。



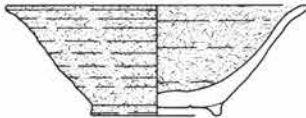
16



17



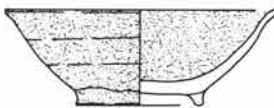
18



19

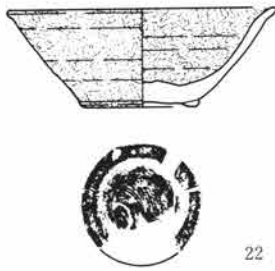


20

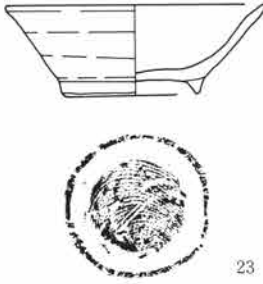


21

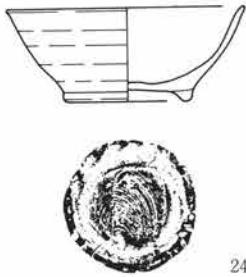
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
16	須恵器 碗 南貯蔵穴底部 より8cm、7 cm	14.2・5.0・5.1 1/4 細砂粒・雲母 還元焰燻焼成 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は直線的 に開く。底部は回転糸切り。
17	須恵器 碗 北貯蔵穴底部 より4cm 直上	14.4・7.0・5.1 1/6 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ左回転。口縁部は外反し、高台は断面四 角形を呈し開く。底部は回転糸切り。
18	須恵器 碗 北貯蔵穴 直上	15.4・6.8・5.4 1/10 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は 大きく開く。高台は断面四角形を呈し、「ハ」の 字状に開き、接地面は広い。
19	須恵器 碗 北貯蔵穴 直上	16.0・6.8・5.8 1/3 細砂粒 還元焰燻焼成 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はほぼ直 線的に開き、高台は断面三角形を呈し、ほぼ直 立する。底部は回転糸切りで周辺部は高台貼付 による撫で。
20	須恵器 碗 床直 南貯蔵穴 直上	13.2・6.8・5.1 3/5 粗砂粒・角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口唇部は外反し、体部から口縁 部にかけては直線的に開く。高台は断面逆台形 を呈しやや開く。底部は回転糸切り。
21	須恵器 碗 北貯蔵穴底部 より10cm	14.4・6.8・5.0 2/3 細砂粒・雲母 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、高台は断面逆 台形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。



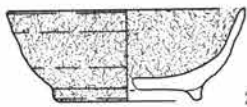
22



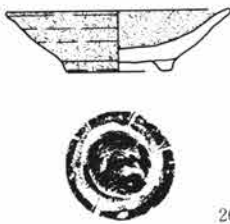
23



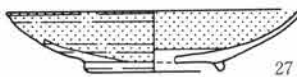
24



25



26



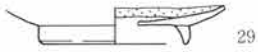
27



28

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
22	須恵器 碗 床上4cm	14.2・6.5・5.2 2/5 粗砂粒 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反し、高台体部は直線的に開く。高台は扁平で、底部は回転糸切り。
23	須恵器 碗 床上13.5cm、 4cm	13.6・7.6・4.8 3/5 細砂粒・雲母・亜角礫 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、高台は断面三角形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。
24	須恵器 碗 覆土	12.4・7.0・4.9 2/5 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反し、体部はやや丸みをもちあまり開かない。高台は断面四角形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。
25	須恵器 碗 床上16.5cm 床直 覆土	12.6・8.0・4.8 1/3 細砂粒 還元焰燻焼成 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は立ち上がりで丸みをもち、口縁部は直線的であまり開かない。高台は断面四角形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。
26	須恵器 小碗 床上5cm	11.8・3.0・3.2 2/5 細砂粒・雲母 還元焰燻焼成 灰黄色	ロクロ右回転。体部は直線的に開き、口唇部で僅かに外反する。高台は断面逆台形を呈し接地面は広い。底部は回転糸切り。
27	灰釉陶器 皿 北貯蔵穴底部 より6cm	15.4・7.4・3.2 1/2 細砂粒・亜角礫 還元焰焼きしめ 灰褐色	ロクロ回転方向不明。口唇部は僅かに外反し、高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転ヘラ撫で、施釉方法は漬け掛け、釉調は不透明な緑灰色を呈す。
28	灰釉陶器 碗 覆土	—・7.0・— 小片 緻密・細砂粒 還元焰焼きしめ 灰白色	高台は「ハ」の字状に開き、明確な稜をもつ。施釉方法は刷毛塗り、釉調は不透明な灰白色を呈す。

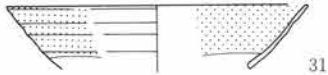
第3章 検出遺構・遺物



29



30



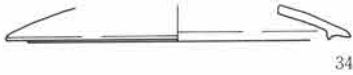
31



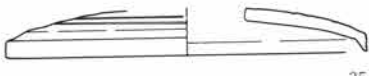
32



33



34



35



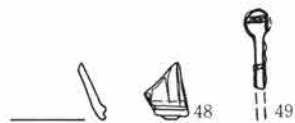
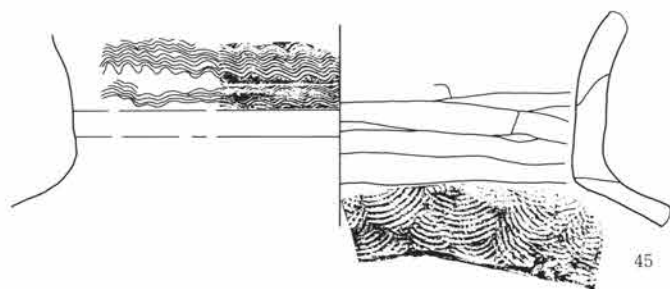
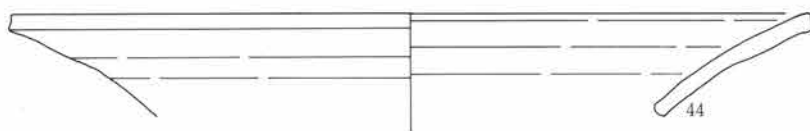
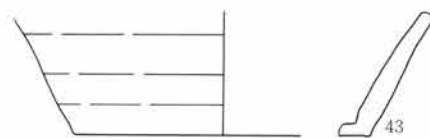
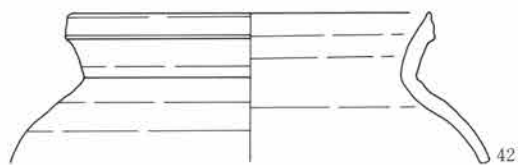
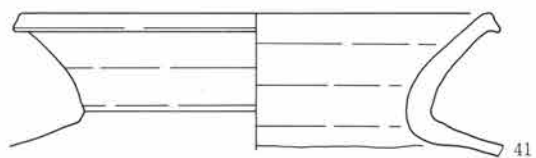
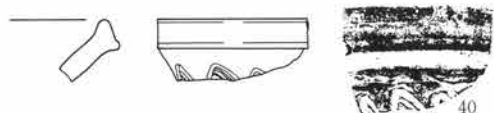
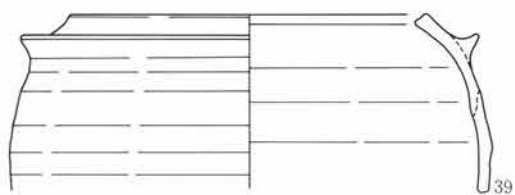
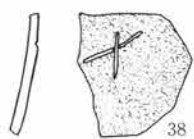
36



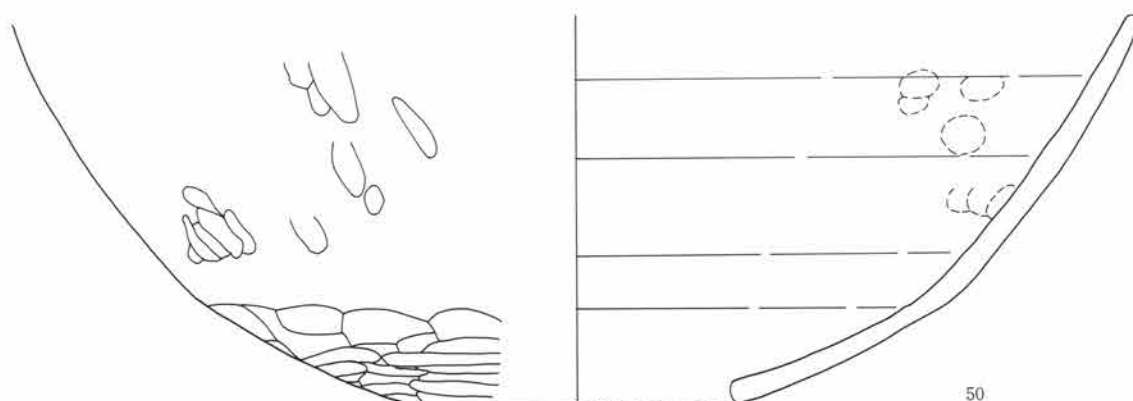
37

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
29	灰釉陶器 碗 覆土	—・7.4・— 小片 緻密・細砂粒 還元焰焼きしめ 灰白色	施釉方法は漬け掛け、釉調は不透明な灰色を呈す。
30	灰釉陶器 碗 床上11cm	—・6.6・— 小片 細砂粒・緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	高台は弱い三ヶ月状を呈す。施釉方法は刷毛塗り、釉調は不透明な灰白色を呈す。
31	灰釉陶器 碗 北貯蔵穴底部、 直上	16.0・—・— 小片 黒色鉍物粒 還元焰焼きしめ 灰色	口縁部は外反する。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な緑灰色を呈す。
32	灰釉陶器 耳皿 覆土	—・7.0・— 小片 緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	底部は回転糸切り。釉調は不透明な緑灰色を呈す。
33	須恵器 蓋 覆土	—・鈕4.6・— つまみ部分のみ 細砂粒 還元焰 灰白色	鈕は扁平状を呈し、外面には自然釉の付着がみられる。
34	須恵器 蓋 南貯蔵穴底部 より6cm	18.4・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	内面に身受けのカエリをもつ。天井部は全面的に回転ヘラ削りが施されている。
35	須恵器 蓋 覆土	19.0・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は欠損、天井部はゆるい丸みをもつ。
36	須恵器 坏 床直	12.6・8.0・3.7 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒・ 角礫 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的でやや開く。底部はヘラ切り。
37	須恵器 碗 床上7cm 覆土	—・8.0・— 1/4 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切りで周辺は撫で。

第4節 歷史時代



第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
38	須恵器 甕 北貯 蔵穴底部より13cm	—・—・—、小片 細砂粒、酸化焰燻焼成、黒色	外面に「ア」のヘラ描きがみられる。内外面とも横撫で。
39	須恵器 羽釜 床上5cm	18.8・—・—、小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 酸化焰、にぶい橙色	口縁部は内湾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部は大きな丸みをもつ。鋳は断面三角形を呈し、やや上方を向く。
40	須恵器 甕 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	口唇端部は上下に引き出され、端部の中ほどに凹みをもつ。口縁部には波状文が施されている。
41	須恵器 甕 北貯 蔵穴底部より14cm	24.6・—・—、小片 細砂粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は下方に引きだされている。
42	須恵器 甕 北貯 蔵穴底部より14cm	24.6・—・—、小片 細砂粒、還元焰	口縁部は外反し、口唇端部は上下に引きだされ縁帯をもつ。胴部は丸みをもつ。
43	須恵器 鉢 床直	44.4・—・—、小片、細砂粒・ 黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	口縁部は直線的に開き、口唇端部は平坦で外傾する。
44	須恵器 甕 床上4cm	—・13.4・—、小片、粗砂粒・ 白色鉍物粒、還元焰、灰色	胴部はヘラ削り。
45	須恵器 甕 カマド直上	—・—・—、小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰、灰色	外面の口縁部は波状文。胴部は平行叩き、内面の口縁部は横撫で、胴部は同心円文のアテ具痕がみられる。
46	須恵器 甕 覆土	—・15.8・—、小片、粗砂粒・ 白色鉍物粒、還元焰、灰色	胴部の最下位に1段の回転ヘラ削りが施されている。
47	須恵器 瓶類 D-6	—・15.4・—、小片 細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。胴部は大きく開く。高台は断面四角形を呈しやや開く。胴部には回転ヘラ削り、底部にも回転ヘラ削りが施されている。
48	須恵器 円面硯 覆土	—・—・—、小片 細砂粒、還元焰、灰色	円面硯脚部。脚部には縦方向へのヘラ描きが施され、下位には1条の凸帯がまわる。
49	用途不明鉄製品		観察表は895頁
50	須恵器 甕 北貯蔵穴底部より 2cm	—・17.0・—、小片、粗砂粒 褐色鉍物粒、還元焰、灰色	甕胴部下位、外面の最下位は横方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。

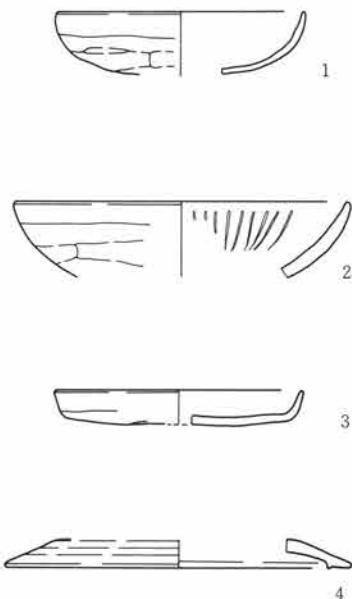
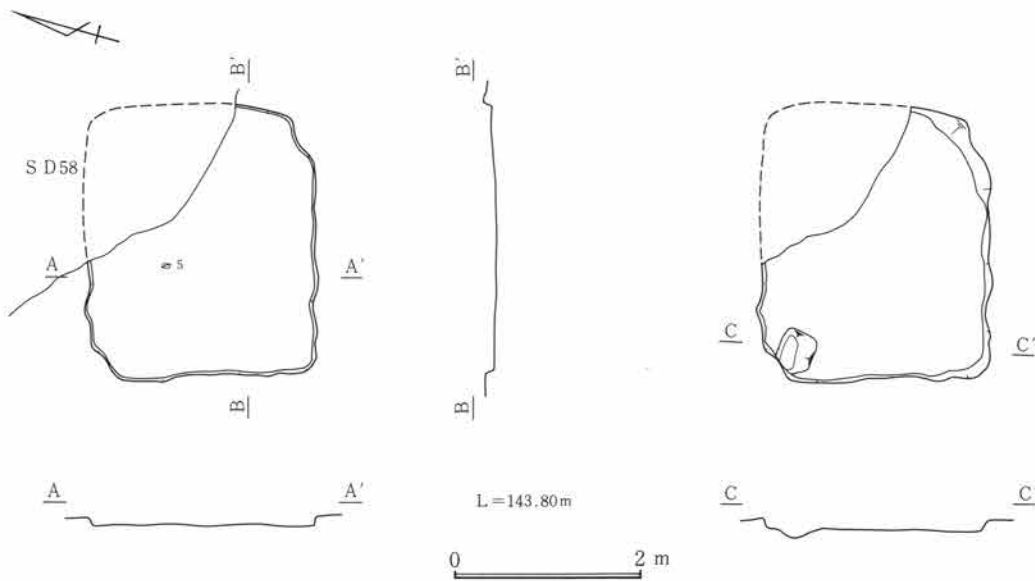
S J 120

144

本住居跡は、88～90G-26～27グリッドに位置し、S D 58と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈すが、壁は直線的ではない。規模は、東西2.88m、南北2.44m、面積は推定6.62㎡を測る。主軸方向は、N-106°-Eを指す。

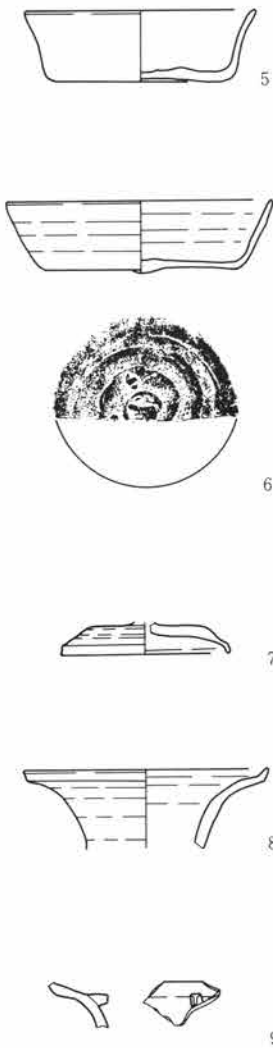
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、6～11cmを測る。残存部分では、壁溝、柱穴、蔵穴は、検出されなかった。また、カマドは、構築されていない。

掘り方は、床面より2～4cmと浅い掘り込みである。床下の施設は、東南コーナー際に楕円形で、径55×38cm、深度9cmの床下土壇が1基検出された。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.0・7.0・4.3 1/8 細砂粒・雲母 普通、褐色	口縁部は内湾ぎみ。体部は丸みをもち大きく開く。口縁部は横撫で、体部の上半は指撫で、下半はへら削り。
2	土師器 坏 覆土	17.6・—・— 1/10 細砂粒、軟質 橙色	外面の口縁部は横撫で、体部は横方向へのへら削り。内面の体部は放射状暗文が施されている。
3	土師器 皿 覆土	13.0・12.0・1.8 1/10 細砂粒・褐色鉾物粒 普通、橙色	口縁部は直線的で僅かに開き、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部はへら削り。
4	須恵器 蓋 覆土	18.2・—・— 小片 細砂粒・白色鉾物粒 良好 灰色	内面に身受けのカエリをもつ。

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
5	須恵器 坏 床直	12.2・9.2・3.8 1/5 黒色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反する。底部は撫で。
6	須恵器 坏 覆土	14.0・10.0・3.8 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては極ゆるい丸みをもち僅かに開く。底部は回転ヘラ切り未調整。
7	須恵器 蓋 覆土	9.0・—・— 1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は欠損。天井部は過半まで水平で、口唇部は折り曲げて直立する。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。
8	須恵器 長頸壺 覆土	13.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部は折り曲げて直立する。
9	須恵器 短頸壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 酸化焰、淡黄色	胴部に把手をもつ。
10	須恵器 瓶類 覆土	—・27.2・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 普通 灰色	短頸壺底部片。高台の端部は平端で、やや開く。底部は回転ヘラ削り。



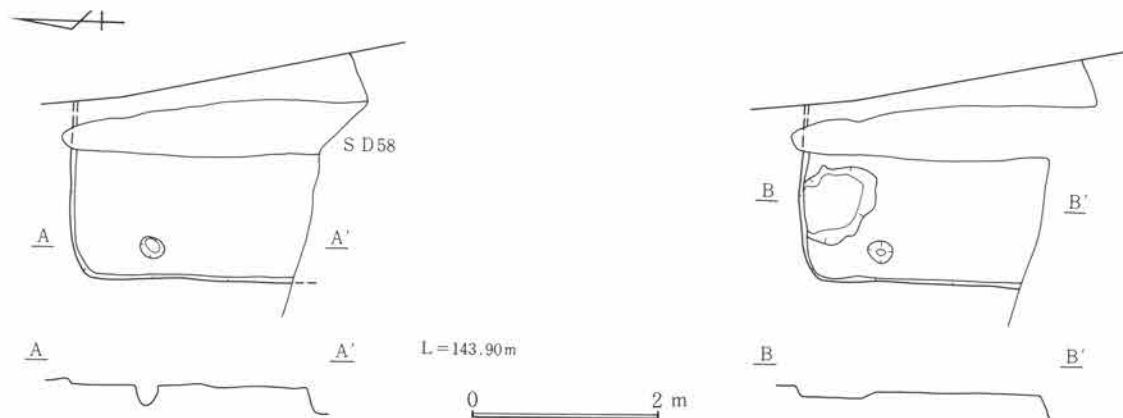
S J 121

144

本住居跡は、87～88G-28～30グリッドに位置し、S D58・22と重複するが、新旧関係は、S D58より本遺構のほうが古く、S D22とは不明である。また、本遺構のほぼ中央、南北に耕作溝が走るため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝・貯蔵穴は、検出されなかったが、西北コーナーよりに楕円形で径25×20cm、深度20cmの柱穴が1本検出された。

掘り方は、床面より2～3cmと全体的に浅い。床下の施設は、北壁際に楕円形で、径80×75cm、深度7cmの床下土壇が1基検出された。



S J 123

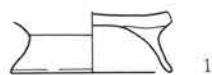
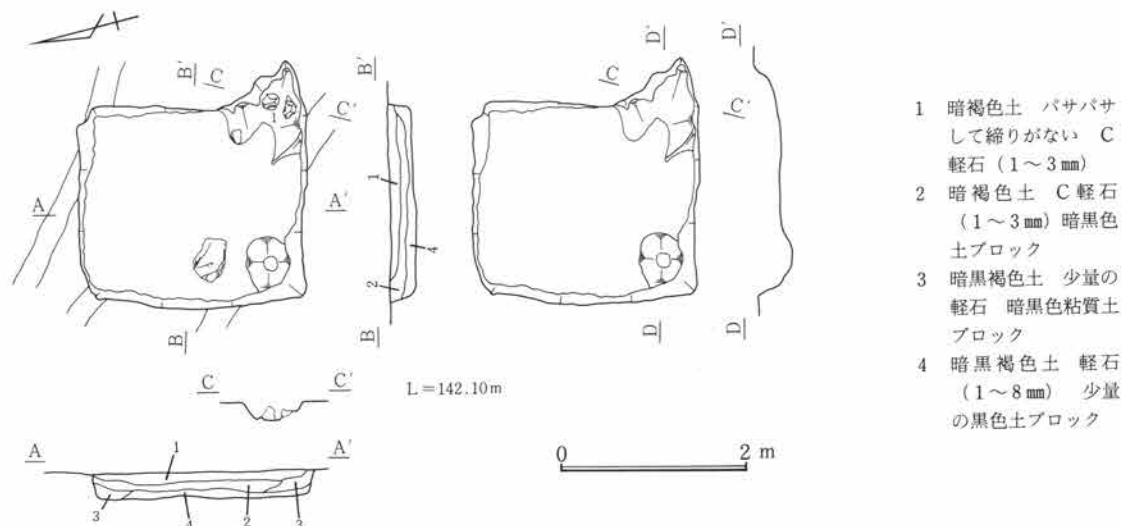
145

本住居跡は、70～71E-29～31グリッドに位置し、本遺構を覆うように畠状遺構が存在する。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.12m、南北2.91m、面積5.09m²を測る。主軸方向は、N-109.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗褐色土で覆われている。

床面は、薄く貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、20～28cmを測り、平均25cmである。柱穴かどうかは確認できなかったが、西南コーナー際には、楕円形で径52×27cm、深度11cmのピットが検出された。また、ピットの北側には、一辺30×45cm、厚さ15cmの礫が出土している。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部が欠落している。規模は、全長114cm、幅110cmを測り、燃烧部から煙道部にかけては壁外に64cmのびる。焚口部の中央部分には、支脚として使用されたとと思われる礫が埋め込まれていた。

掘り方は、全体的に極浅く、床下の施設等は検出されなかった。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 埴 カマド底部より11cm	—・8.0・— 1/3 細砂粒・雲母 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。高台は細身でやや開く。底部は撫で。

S J 125

145

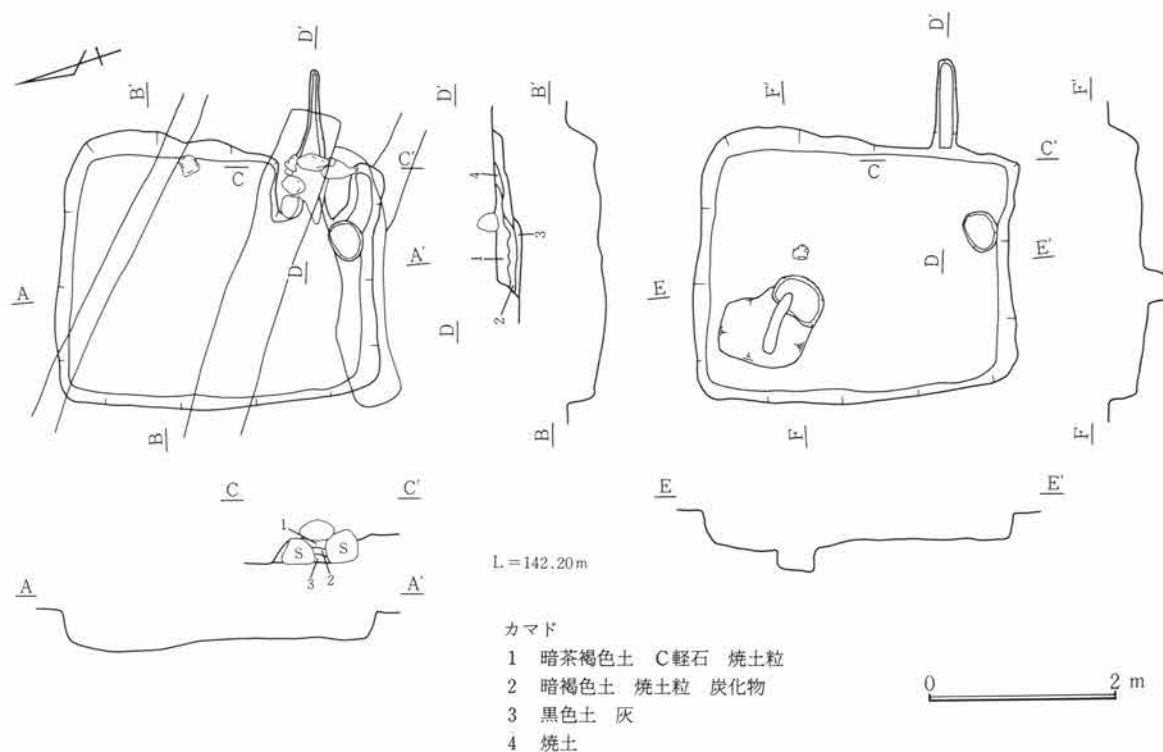
本住居跡は、66～67E-26～28グリッドに位置し、本遺構を覆うように畠状遺構が存在する。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.89m、南北3.42m、面積8.79m²を測る。主軸方向は、N-110.5°-Eを指す。覆土は、自然堆積を呈し、暗褐色土で覆われている。

床面は、薄く貼床が施されている。壁は、やや緩く立ち上がり、壁高は、28～32cmを測り、平均31cmである。貯蔵穴は、カマドの南側、南壁際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径42×35cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置する。規模は、全長167cm、幅92cmを測り、煙道部は壁外に93cmのびる。袖部は、15～40cm大の自然礫を使用し、天井部は、左右の袖部の礫に35×18×22cm大の礫を渡して構築されている。

掘り方は、全体的に浅く平坦である。床下の施設は、西北部分に、不整形の浅い落ち込みと楕円形で径55×45cm、深度31cmの床下土坑が1基検出された。

出土遺物は、自然礫だけで土器類の出土はなかった。



S J 126

146

本住居跡は、78～80E-38～40グリッドに位置する。平面形態は、やや丸みをもった長方形を呈す。規模は、東西3.71m、南北4.14m、面積14.84m²を測る。主軸方向は、N-99°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、3層に分けられるがほぼ同様の黒色土で覆われている。

床面は、薄く貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、32～49cmを測り、平均40cmである。壁溝は、床面では検出されなかったが、床下で西北コーナー部分に存在するのが確認された。ピットは、西壁よりに3本検出された。それぞれの形態・規模は、P₁が楕円形、径51×40cm、深度8cm。P₂はほぼ

第4節 歴史時代

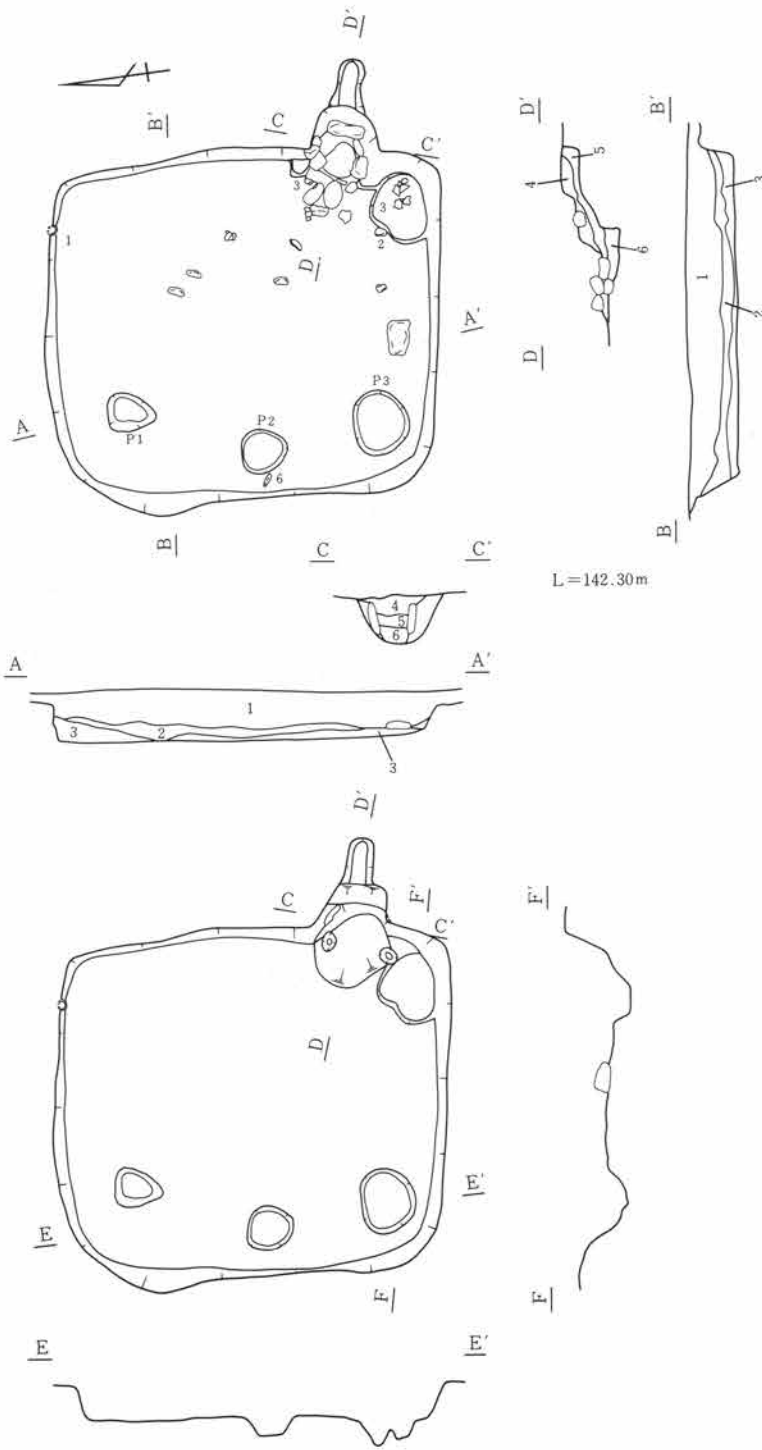
円形、径45cm前後、深度22cm。

P₃は楕円形、径66×58cm、深度23cmを測り、柱穴かどうかは確認されなかった。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は、楕円形を呈し、径80×70cm、深度20cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、焚口部の前部から人為的な破壊を受けているためかカマドの前に礫が散って出土している。規模は、全長131cm、幅98cmを測り、焚口部の一部と煙道部は壁外に87cmのびる。天井部と袖部には、多くの自然礫を使用して構築され、一部は支脚の用途も兼ねていた様である。

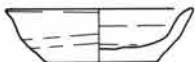
掘り方は、全体的に浅く平坦である。

床下の施設は、検出されなかった。



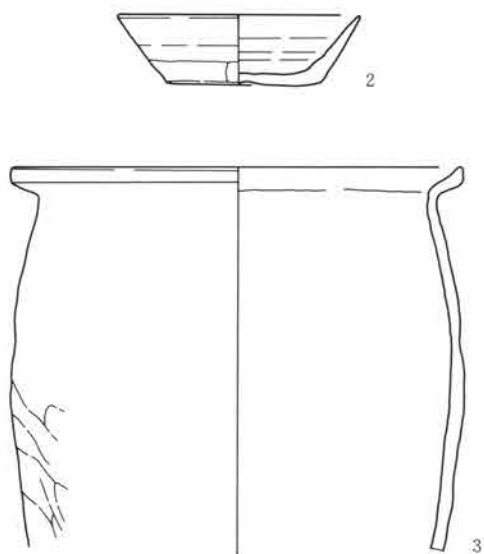
- 1 黒色土 C軽石
- 2 黒色土 C軽石 ロームブロック
- 3 黒色粘性土 微量のC軽石
- カマド
- 4 褐色粘土 焼土 炭化物
- 5 暗茶褐色土 焼土
- 6 黒褐色土 焼土粒 灰

0 2 m

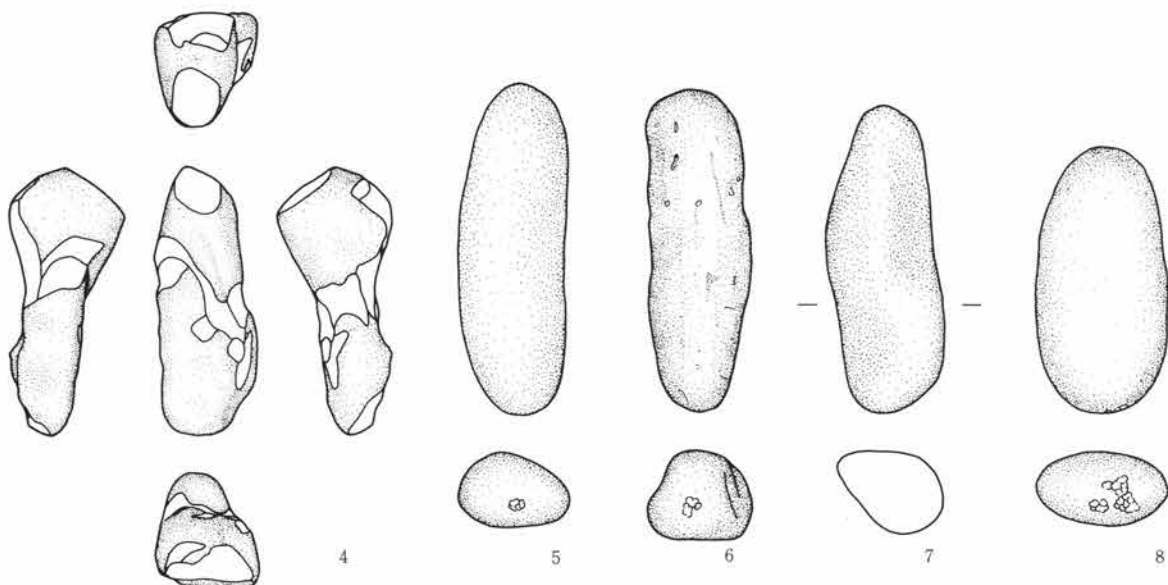


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床上22cm	9.8・5.7・2.9 9/10 細砂粒・白色鉱物粒 還元焰、灰白色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反する。底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 床直	12.8・8.2・3.8 完形 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ左回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は平底を呈す。体部の下位には1段の回転ヘラ削り。底部は手持ちヘラ削り。
3	土師器 甕 貯蔵穴底部より2cm カマド	24.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は大きく開き、胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部下半は斜め方向へのヘラ削り。



No.	種類・器種	出土位置	計測値	石材	特徴
4	石製品 菰編石	床直	14.2・6.3・5.6 507g	輝緑岩	端部には敲打痕がみられ、中程は剥離がみられる。
5	石製品 菰編石	床直	17.5・5.65・3.9 560g	輝石安山岩(粗粒)	両端部に敲打痕がみられる。
6	石製品 菰編石	床直	17.1・5.4・4.7 695g	溶結凝灰岩	両端部に敲打痕がみられる。
7	石製品 菰編石	床直	16.3・5.8・4.3 390g	輝石安山岩(粗粒)	端部に弱い敲打痕がみられる。
8	石製品 菰編石	床直	14.1・7.0・3.9 560g	輝石安山岩(粗粒)	端部に弱い敲打痕がみられる。

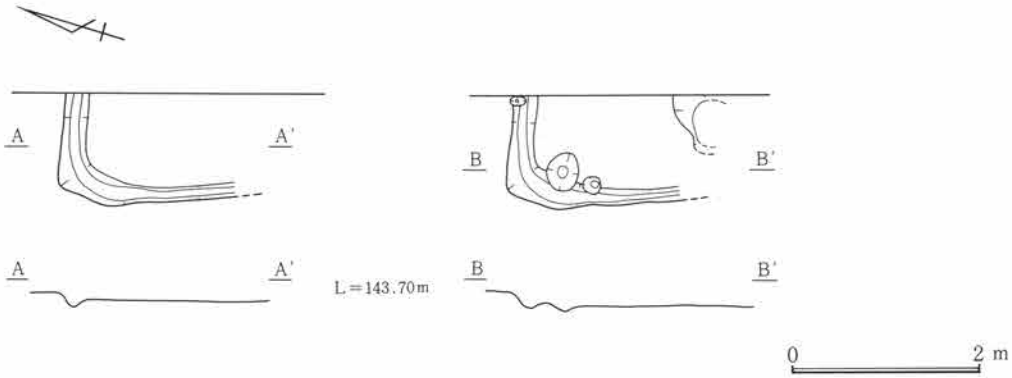
S J 127

148

本住居跡は、81～82G-20～21グリッドに位置し、本遺構の大部分は、調査区域外にのび、残存するのは全体の5分の1程度である。平面形態は、長方形を呈すると推測される。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝は、残存部分では、全て周る。規模は、幅16～22cm、深度6cm前後を測る。

掘り方は、浅く凹凸が多くみられる。床下の施設は、床下土壇1基と小ピット3基が検出された。



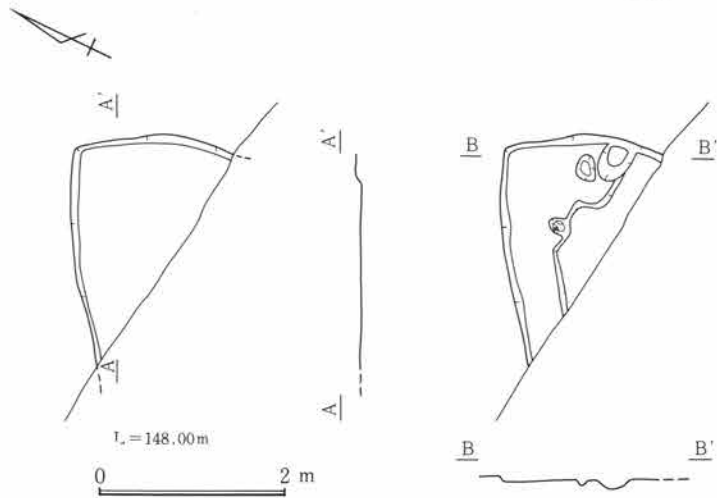
S J 128

149

本住居跡は、82～84G-20グリッドに位置し、東北コーナー部分しか残存しない。平面形態・規模は、不明である。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面より床面までが浅いため不明である。残存部分では、壁溝・柱穴等は、検出されなかった。

掘り方は、全体的に浅く、北壁よりに落ち込む。床下の施設は、小ピットが3基検出された。

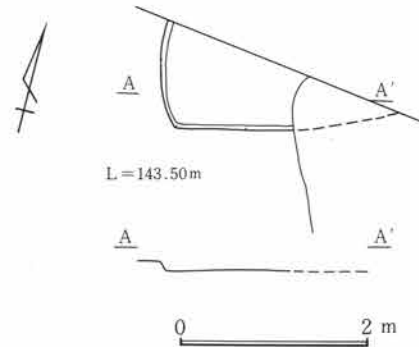


S J 129

149

本住居跡は、76～78G-14～15グリッドに位置し、S J 114と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。また、本遺構は、西南コーナー部分だけで大部分は調査区域外にのびるため全貌は不明である。平面形態は、やや丸みをもつ四角形を呈すると推測される。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、10cm前後を測る。



S J 130

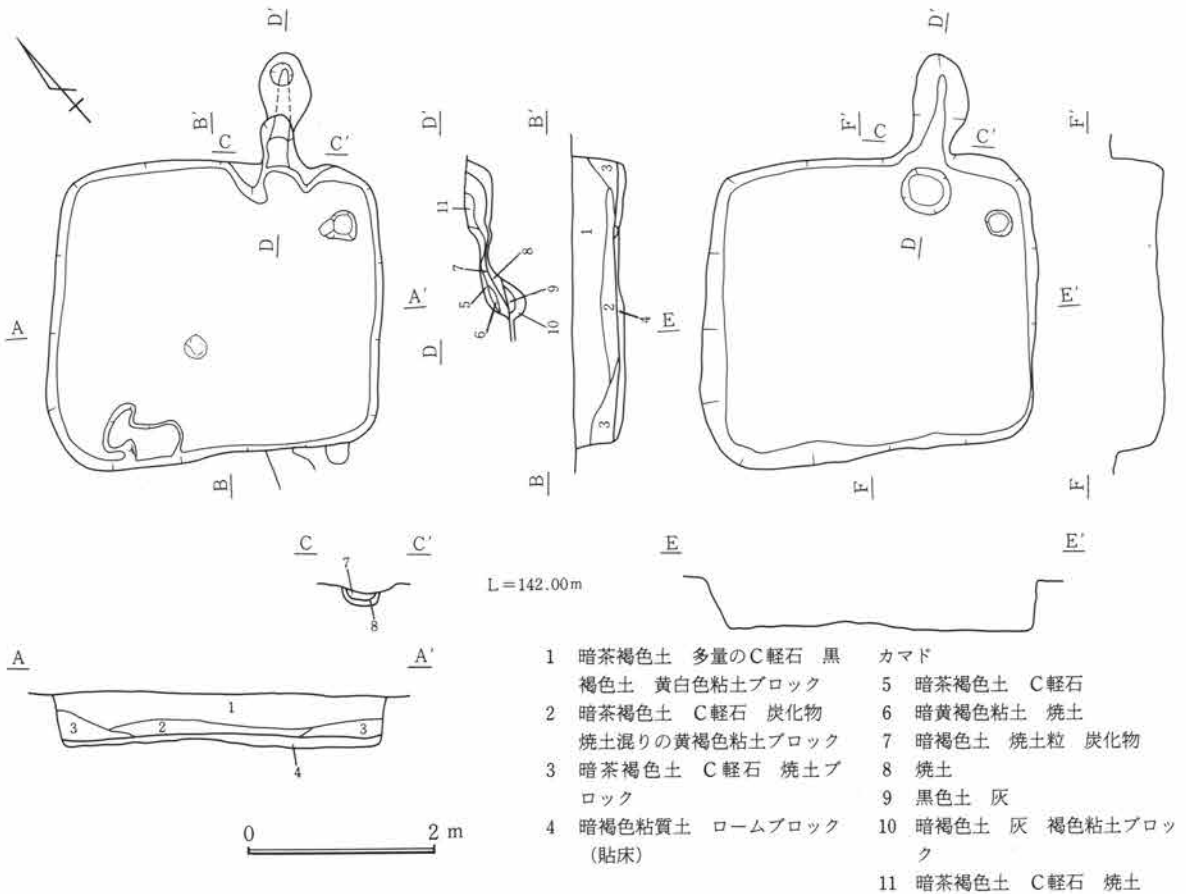
150

本住居跡は、60～62E-31～33グリッドに位置する。平面形態は、やや歪んだ長方形を呈す。規模は、東西3.18m、南北3.52m、面積10.94㎡を測る。主軸方向は、N-42°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

床面は、暗褐色粘質土を使用して貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、39～55cm、平均は49cmである。柱穴は、東南コーナーよりから1本検出された。形態はほぼ円形で、規模は径30cm前後、深度14cmを測り、柱穴のわきから自然礫が出土している。西壁の北よりからは、粘土を約70×40cmの長方形で床面より20cm前後に硬めた階段状のものが検出された。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、煙道部のトンネル部分、袖部等は、良好な状態で残っている。規模は、全長157cm、幅100cmを測り、燃烧部の一部と煙道部は壁外に115cmのびる。煙道部は、75cmを測り、トンネルは径10～15cmの大ききで掘られている。

掘り方は、床面より2～8cmと浅い掘り込みで、平坦である。床下の施設は、検出されなかった。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	17.8・一・一、小片 黒色鈹物粒 還元焙 灰色	ロクロ回転方向不明。内面に身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度は回転ヘラ削り。

S J 131

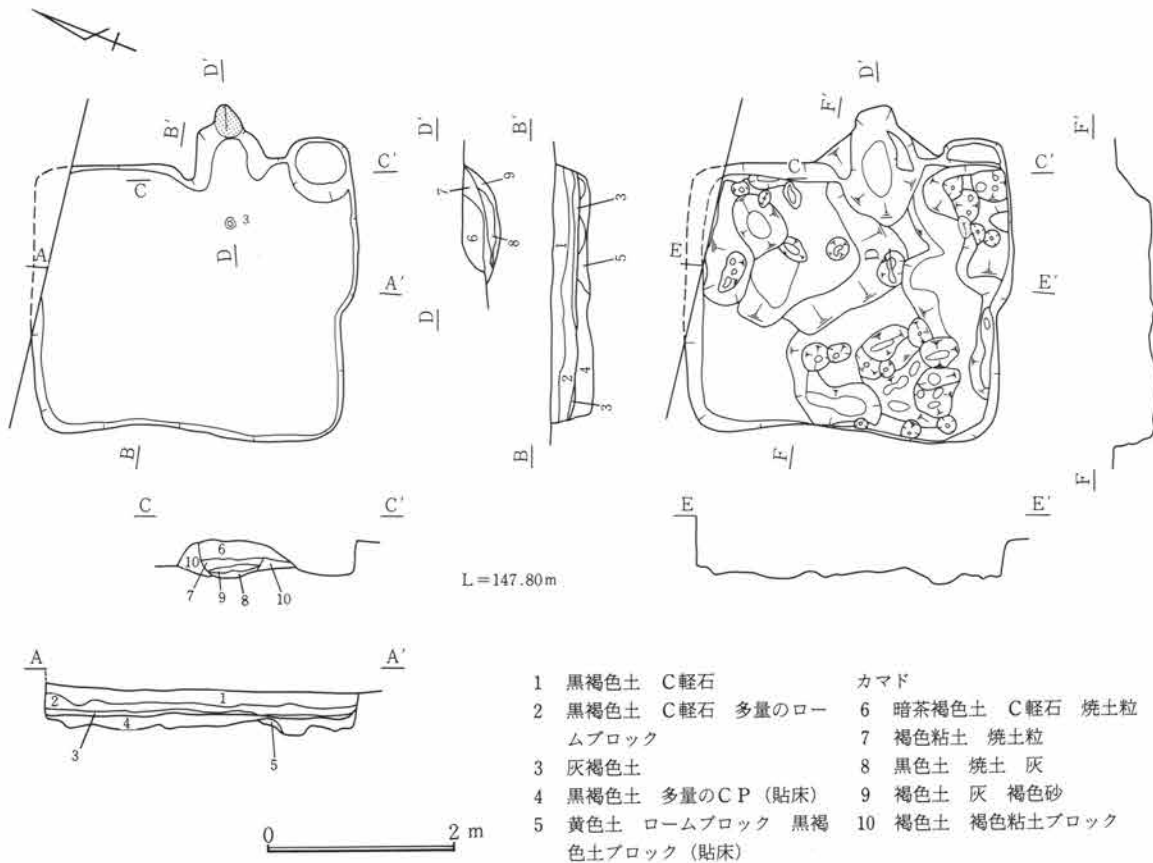
150

本住居跡は、136～137 J—22～24グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、ほぼ長方形に近い形状を呈すが、東壁は、一直線ではなくカマドの両側でくい違う。南壁は、中央付近で段差をもつ。規模は、東西3.26m、南北3.45m、面積10.15m²を測る。主軸方向は、N—68°—Eを指す。覆土は、自然堆積を呈し、黒褐色土で覆われている。

床は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、25～31cmを測り、平均は27cmである。貯蔵穴は、東南コーナー隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径66×46cm、深度18cmを測る。

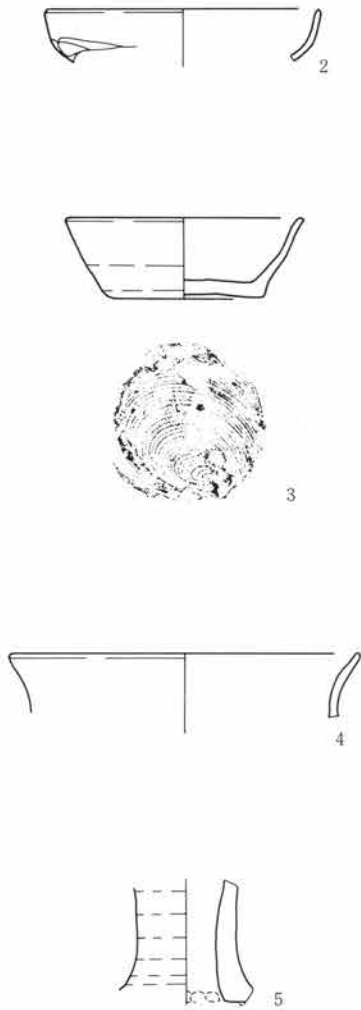
カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部は流出している。規模は、全長105cm、幅92cmを測り、焚口部の一部は壁外に40cmのびる。

掘り方は、床下より5～14cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が多く、埋土は、黒褐色土である。床下の施設は、床下土壇が12基検出された。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	10.0・8.0・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的にやや開き、口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 床下 覆土	14.6・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	体部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
3	須恵器 坏 床直	12.4・8.0・4.2 小片 細砂粒・雲母 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的でやや開く。底部は回転糸切り。
4	土師器 甕 覆土	18.6・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	口縁部は外反し、横撫で。
5	須恵器 長頸壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・雲母 還元焰軟質 灰白色	長頸壺頸部、頸部と胴部との接合部分には指頭痕がみられる。

S J 132

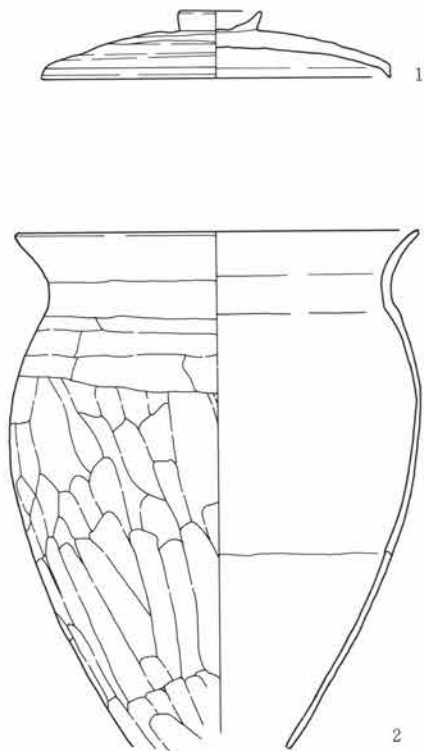
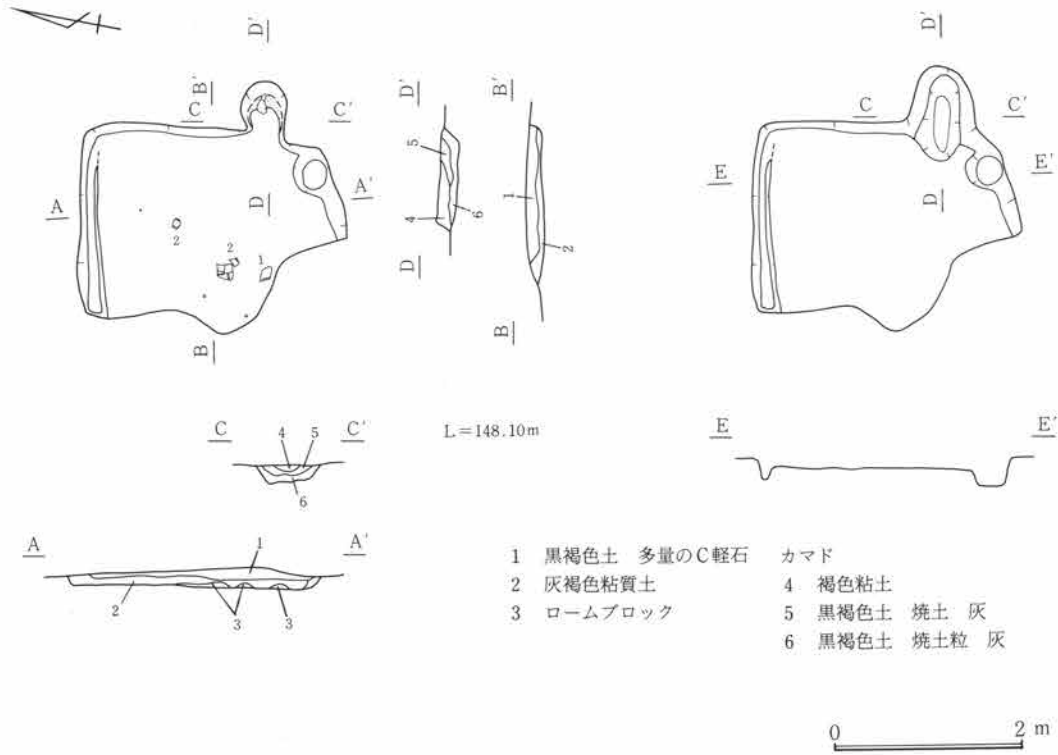
151

本住居跡は、143～144 J—20～21グリッドに位置する。本遺構は、西側半分を削平され残存しないため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形に近い形状を呈すと推され、規模は、南北2.84mを側る。主軸方向は、N—84°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、やや緩く立ち上がり、壁高は、7～13cmを側り、平均は11cmである。壁溝は、北壁下だけ確認され、幅20cm前後、深度4～11cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー隅に位置し、形態は円形で、径40cm前後、深度14cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部が欠落している。規模は、全長77cm、幅78cmを測り、燃烧部の大部分は壁外に63cmのびる。

掘り方は、床面より2～5cmほど掘り込まれ、平坦である。床下の施設は、検出されなかった。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 床直	18.6・鈕4.4・3.6 完形 細砂粒・亜角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部はゆるい丸みを呈し、口唇部は折り曲げて直立する。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。
2	土師器 甕 床直 床下 覆土	21.2・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部は上位でふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部上位は横方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。

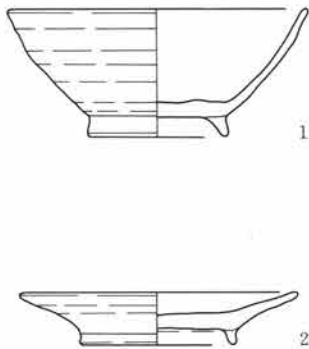
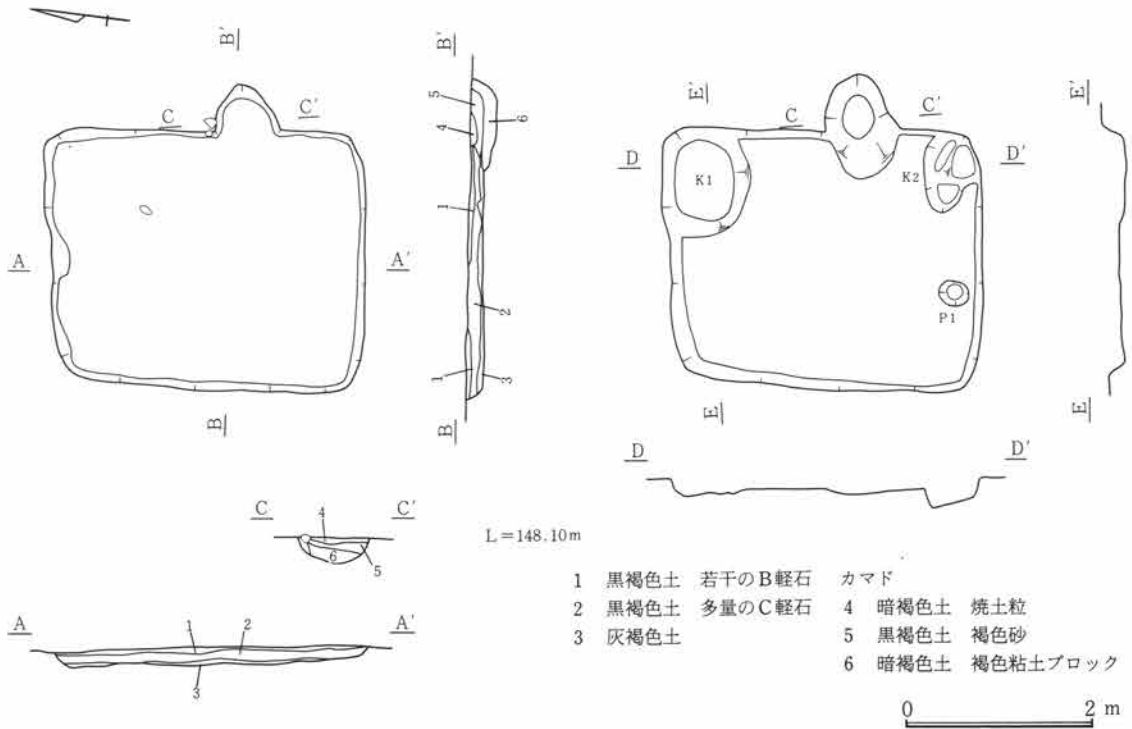
S J 133

本住居跡は、141~143 J-17~19グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.72m、南北3.40m、面積9.08m²を測る。主軸方向は、N-83.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、黒褐色で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、やや緩かに立上がり、壁高は、6~12cmを測り、平均は9cmである。壁溝・柱穴・カマド等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部も欠落している。規模は、全長106cm、幅78cmを測り、燃烧部の一部は壁外に48cmのびる。

掘り方は、床面より3~7cmほど掘り込まれ、床下の施設は、床下土壇が2基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径107×89cm、深度6cm。K₂は楕円形で径70×55cm、深度20cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	15.8・7.4・6.8 1/3 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち開く。高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転糸切り。
2	須恵器 皿 覆土	14.6・8.2・2.8 1/4 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。高台はやや開く。底部は静止糸切り。

S J 134

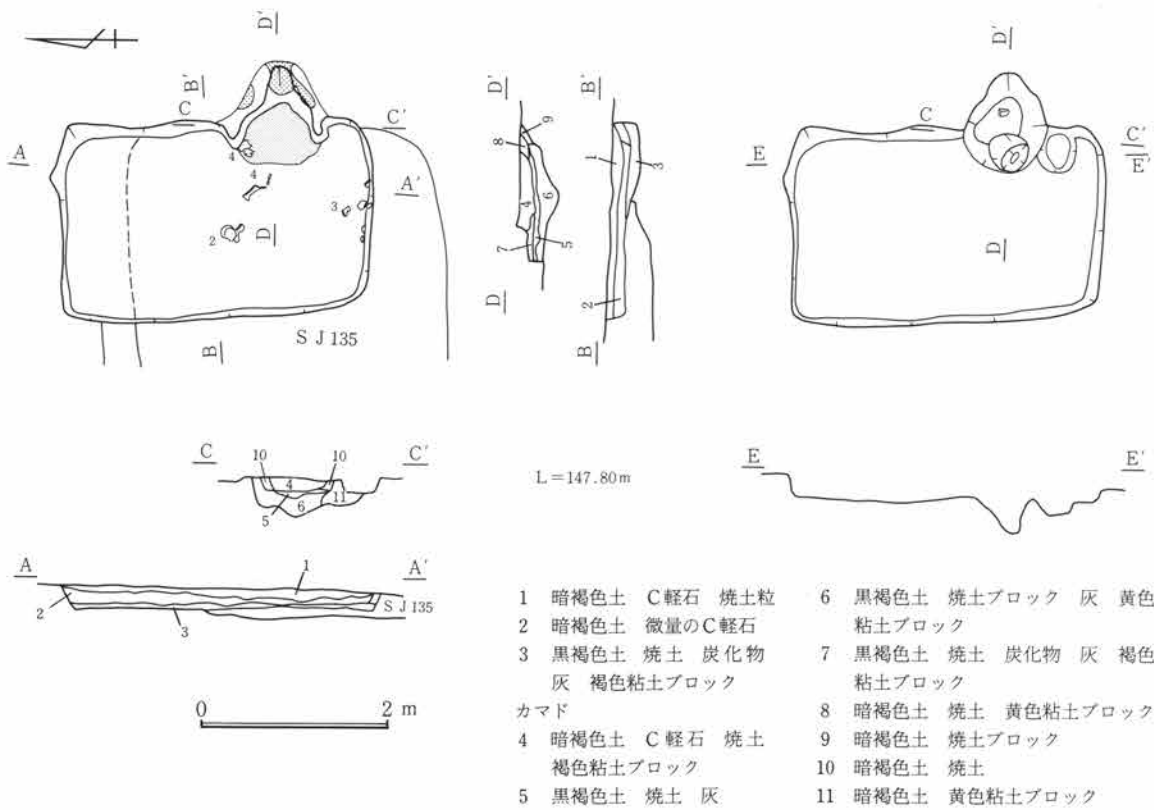
153

本住居跡は、140～141 J-15～16グリッドに位置し、S J 135・136と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.06m、南北3.32m、面積6.81m²を測る。主軸方向は、N-86°-Eを指す。

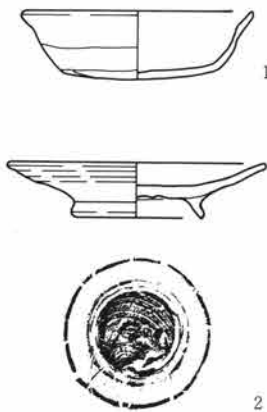
床は、貼床が施されている。壁は、緩かに立ち上がり、壁高は、9～25cmを測り、平均は14cmである。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長110cm、幅110cmを測り、焚口部から煙道部にかけては壁外に55cmのびる。

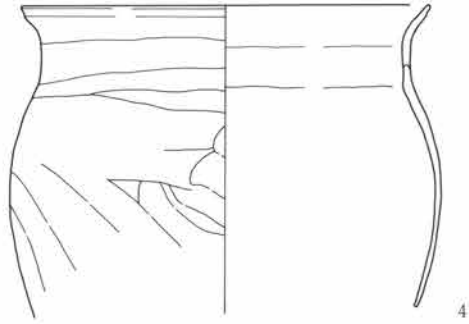
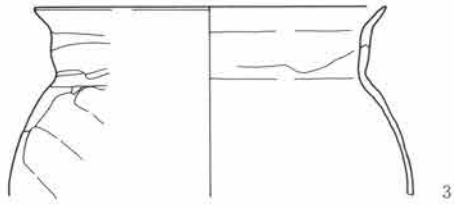
掘り方は、床面より4～8cmほど掘り込まれ平坦である。埋土は、褐色粘土ブロックを含む黒褐色土である。床下の施設は、カマドの南側にほぼ円形で径36cm、深度16cmの床下土壇が検出された。



- 1 暗褐色土 C軽石 焼土粒
- 2 暗褐色土 微量のC軽石
- 3 黒褐色土 焼土 炭化物 灰 褐色粘土ブロック
- 4 暗褐色土 C軽石 焼土 褐色粘土ブロック
- 5 黒褐色土 焼土 灰
- 6 黒褐色土 焼土ブロック 灰 黄色粘土ブロック
- 7 黒褐色土 焼土 炭化物 灰 褐色粘土ブロック
- 8 暗褐色土 焼土 黄色粘土ブロック
- 9 暗褐色土 焼土ブロック
- 10 暗褐色土 焼土
- 11 暗褐色土 黄色粘土ブロック



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 覆土	12.0・8.4・3.6 2/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で。底部はヘラ削り。
2	須恵器 皿 床直	13.6・6.8・2.9 7/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、高台は細身で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 甕 床直	18.8・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈す。外面の口縁部は横撫で。胴部は左方向へのヘラ削り。内面胴部はヘラ撫で。
4	土師器 甕 床直 カマド底部 より24cm	21.8・—・— 1/4 細砂粒 褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部上位でややふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部上位は左方向へのヘラ削り。中位以下は斜め方向へのヘラ削り。内面胴部はヘラ撫でが施されている。

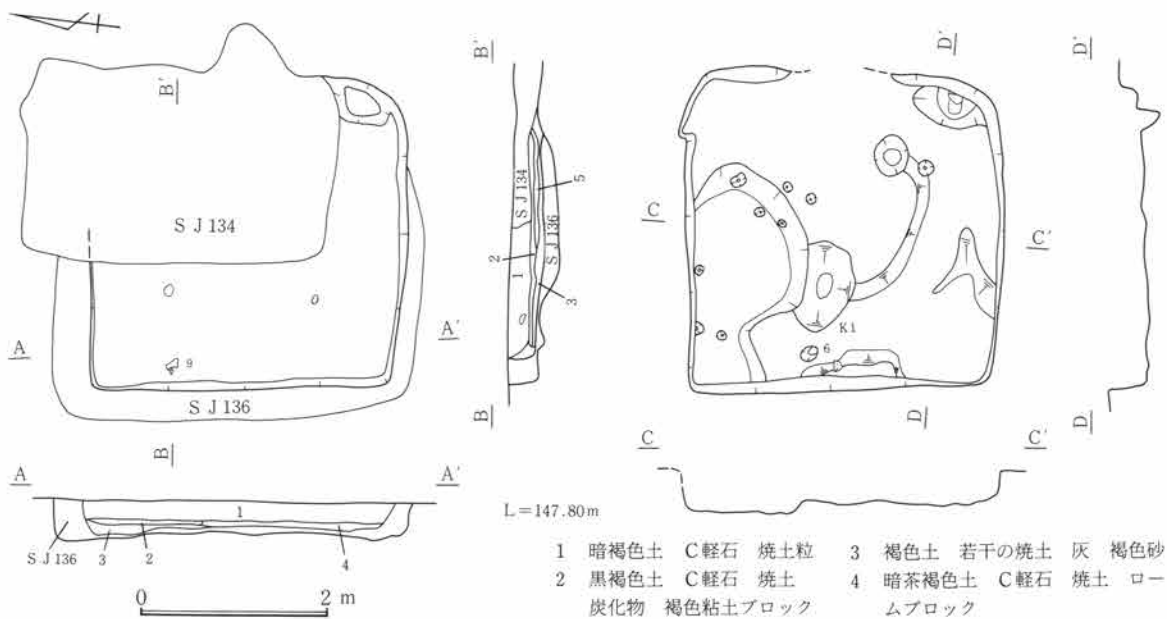
S J 135

154

本住居跡は、140～142 J—14～16グリッドに位置し、S J 134・136と重複するが、新旧関係は、S J 134より本遺構のほうが古く、S J 136より新しい。平面形態は、ほぼ方形を呈す。規模は、東西3.35m南北3.35m、面積は推定で11.19m²を測る。主軸方向は、N—83°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、18～27cmを測り、平均は22cmである。貯蔵穴は東南コーナー際に位置し、形態は楕円形で径60×45cm、深度15cmを測る。

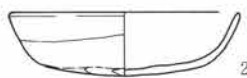
掘り方は、床面より5～20cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が多くみられる。埋土は、砂を含む褐色土である。床下の施設は、北壁側の落ち込みと床下土壇2基が検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径95×55cm、深度7cm。K₂は楕円形で径40×36cm、深度10cmを測る。



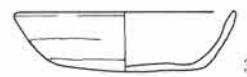
第4節 歴史時代



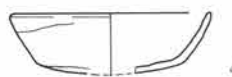
1



2



3



4



5

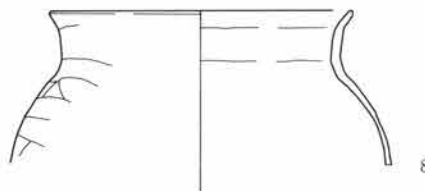


6

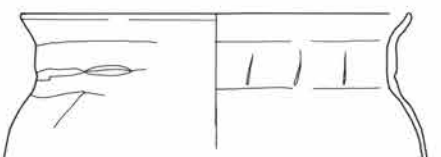


7

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下 覆土	11.8・9.9・3.6 3/4 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけてはほとんど開かず、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。焼成時の歪みがみられる。
2	土師器 坏 床下 覆土	12.2・8.6・3.3 4/5 細砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床下 覆土	11.8・8.6・3.2 1/2 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 床下 覆土	10.6・7.8・— 1/5 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
5	須恵器 坏 覆土	12.2・8.0・3.6 1/4 細砂粒・黒色鈳物粒 還元焰、灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は回転糸切り。
6	須恵器 坏 床下 貯蔵穴底部より12cm	13.0・—・— 1/6 細砂粒・黒色鈳物粒 白色鈳物粒、還元焰 灰色	体部は丸みをもち開き、ロクロ水挽き痕が明確に残る。底部は回転糸切り。
7	土師器 坏 床下 覆土	11.8・9.9・3.6 3/4 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけてはほとんど開かず、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。焼成時の歪みがみられる。



8



9

8	土師器 甕 床下 覆土	16.2・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。
9	土師器 甕 床直	20.6・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫で。胴部は左方向へのヘラ削り。

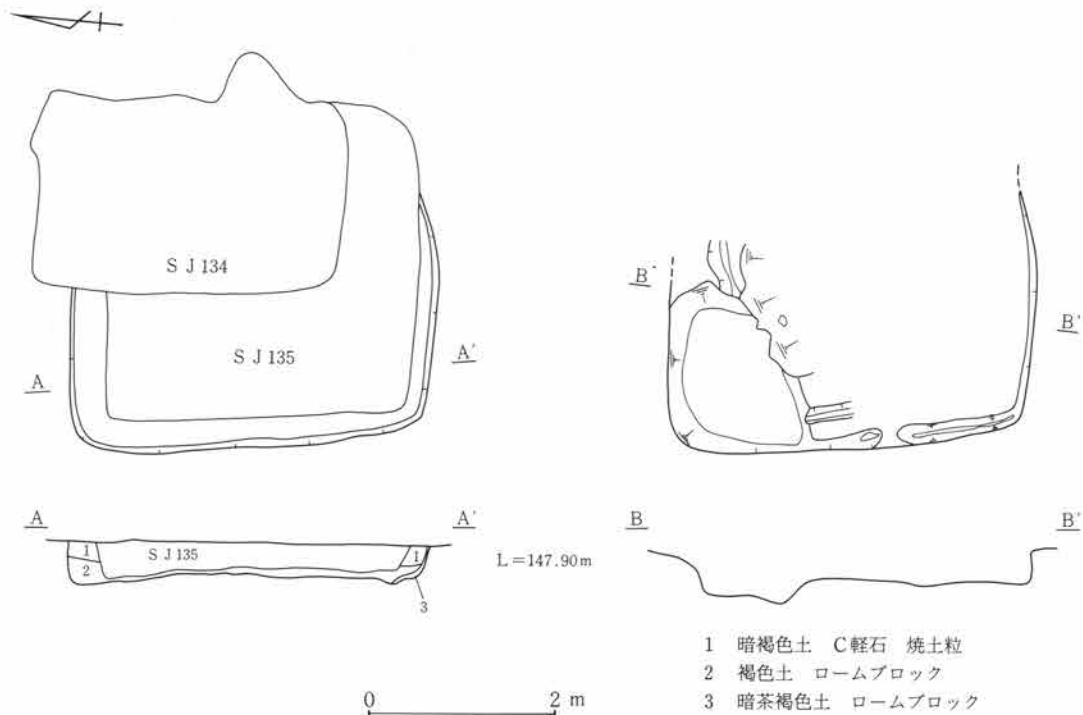
S J 136

154

本住居跡は、140～142 J—14～16グリッドに位置し、S J 134・135と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の大部分は、S J 134・135によって切られ、北壁・南壁・西壁の各壁よりの部分しか残存しないため、全貌は不明である。規模は、南北3.85mを測る。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、15～24cmを測り、平均は20cmである。

掘り方は、床面より10～20cmほど掘り込まれている。床下の施設は、西壁の南半分に壁溝状のものと西北コーナーに楕円形で径200×130cm、深度10cmの大型の床下土壇が1基検出された。



S J 137

155

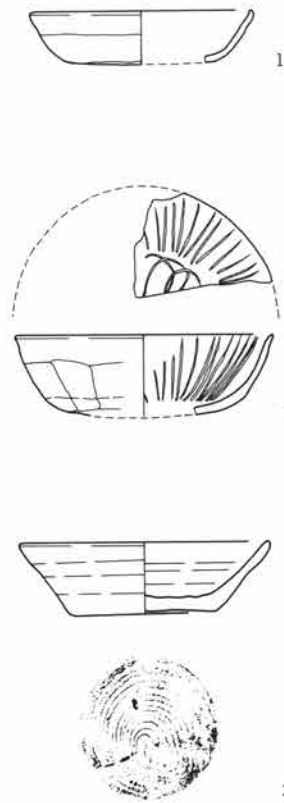
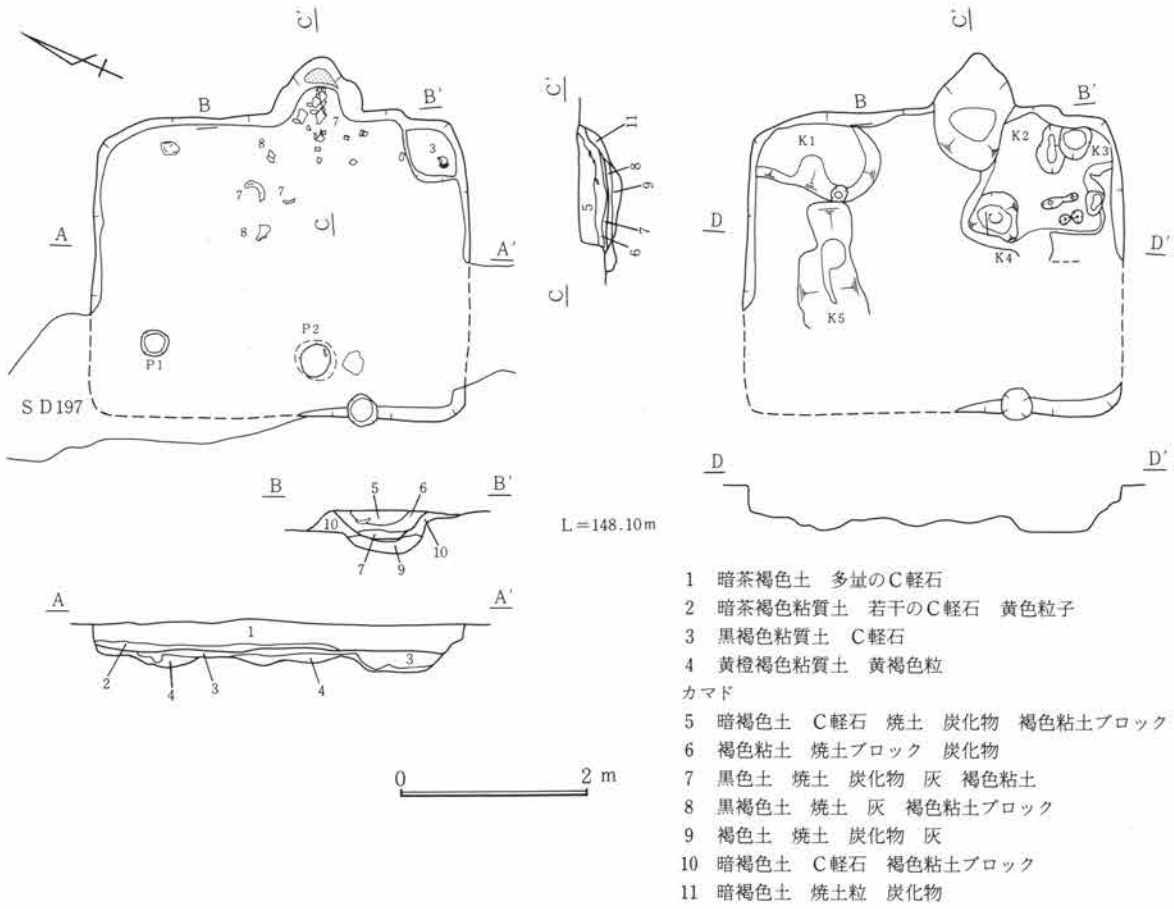
本住居跡は、134～136 J—33～35グリッドに位置し、S D97と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西3.27m、南北3.97m、面積12.79m²を測る。主軸方向は、N—63.5°—Eを指す。覆土は、自然堆積状態を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、18～22cmを測り、平均は20cmである。

柱穴は、西壁よりから2本検出され、形態・規模は、P₁が円形で径25cm、深度8cm。P₂は径30cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー隅に位置し、形態は長方形を呈し、規模は、60×45cm、深度16cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、左袖部の一部が欠落している。規模は、全長131cm、幅98cmを測り、燃焼部の大部分は壁外に60cmのびる。

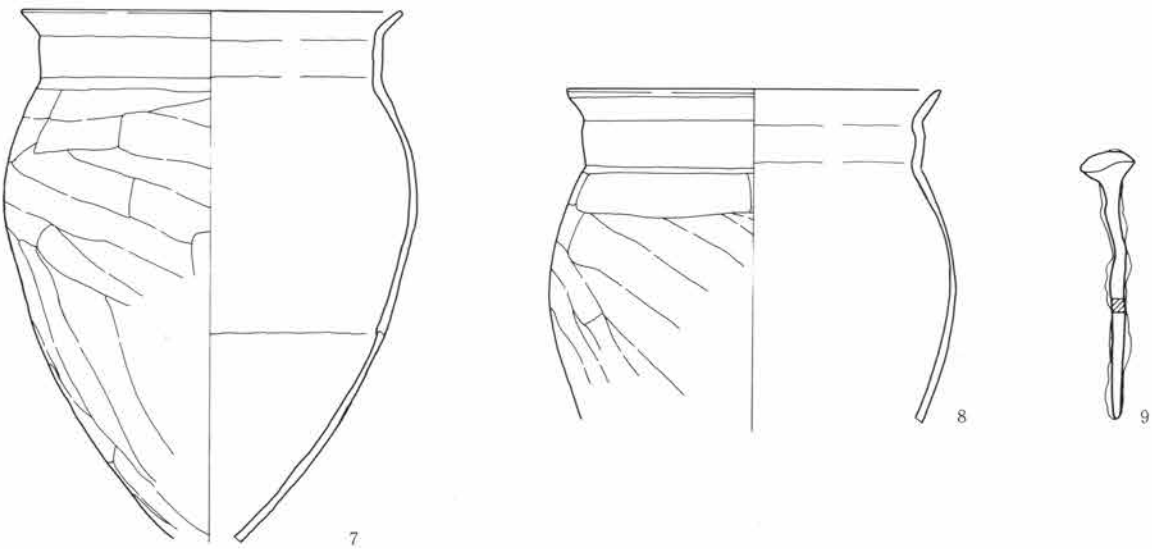
掘り方は、床面より5～10cmほど掘り込まれ、埋土は、粘性の強い黒色土である。床下の施設は、床下土壇が5基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径70×40cm、深度23cm。K₂は楕円形で径50×28cm、深度5cm。K₃は円形で径35cm前後、深度12cm。K₄は楕円形で径55×50cm、深度17cm。K₅は長楕円形で径150前後×65cm、深度21cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド	11.8・8.0・2.8 1/4 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、口唇端部で内側に肥厚する。口縁部は横撫で、体部は指撫で。底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 カマド	13.8・8.2・— 1/6 粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は僅かに外反し、体部は立ち上がりに丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で。体部は2段のヘラ削り。内面の体部は放射状暗文。底部は螺旋状暗文が施されている。
3	須恵器 坏 床上1cm、 7cm	13.4・7.7・3.9 9/10 細砂粒・褐色鉱物粒 還元焙 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては僅かに外反し、底部は回転糸切り。

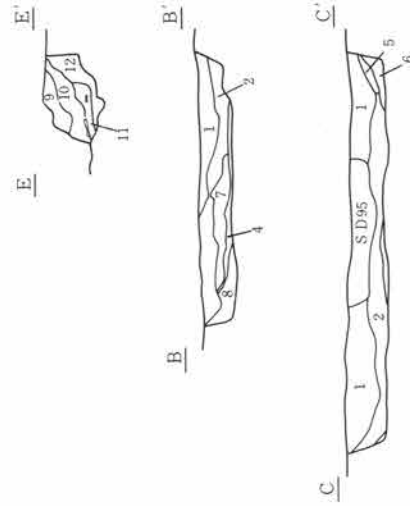
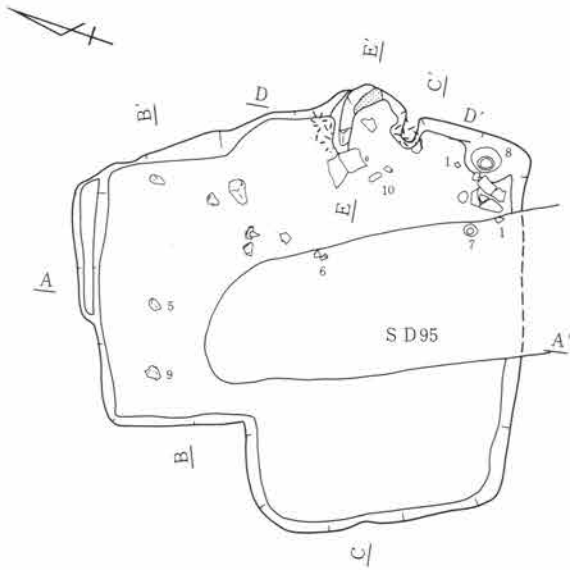
第3章 検出遺構・遺物

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 坏 覆土	13.2・8.2・3.1 1/6 粗砂粒、細礫 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。
5	須恵器 坏 覆土	11.8・7.2・3.0 1/4 黒色鉍物粒、白色鉍物 粒、還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は僅かな丸みをもつ。底部は回転糸切り。
6	須恵器 坏 カマド	13.4・8.2・3.1 1/3 粗砂粒、角礫 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもつ。底部は回転糸切り。

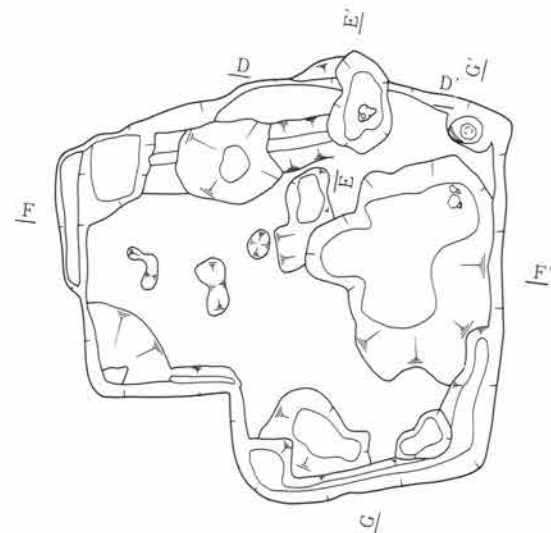
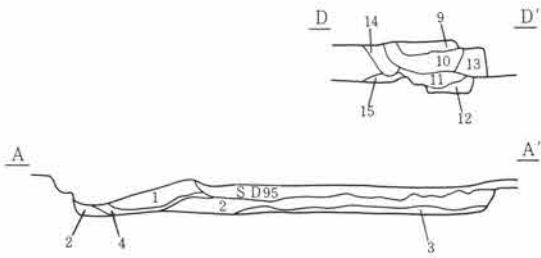


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴		
7	土師器 甕 カマド 床上1cm、6cm、 3cm、11cm	20.0・3.6・28.2 2/3 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位でふくらむ。底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で。胴部は上半で左方向へのヘラ削り。下半は頭部に向けての縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。		
8	土師器 甕 床上14cm、12cm 9cm	—・—・—、小片 粗砂粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位から中位にかけてふくらむ。外面の口縁部は横撫で。胴部は上位で1段の左方向へのヘラ削り。それ以下は左方向への斜めのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。		
No.	種類	観察表掲載頁	9	鉄製品 釘	891

S J 138



L = 147.80m



- 1 黒褐色土 多量のC軽石
- 2 黒褐色土 少量のC軽石
- 3 灰色粘質土
- 4 黒褐色土 木炭粒主体 灰
- 5 黒褐色土 少量のC軽石
- 6 黄褐色土
- 7 粘性の強い黒褐色土
- 8 黒褐色土
- カマド
- 9 暗褐色土 C軽石 焼土粒
- 10 暗褐色土 焼土 炭化物 褐色粘土ブロック
- 11 黒褐色土 焼土 灰
- 12 暗黄褐色土 灰 ロームブロック
- 13 暗褐色土 焼土粒 褐色粘土ブロック
- 14 暗褐色土 C軽石 焼土
- 15 暗褐色土 焼土 灰

0 2 m

第3章 検出遺構・遺物

本住居跡は、137~139J-18~21グリッドに位置し、S D95と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、L字形を呈す。規模は、東西4.43m、南北4.45m、面積17.08m²を測り、張り出部の規模は、北側のものは東西3.08m、南北1.56m、西側のものは東西1.16m南北2.85m、である。主軸方向は、N-68°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、黒褐色土で覆われている。

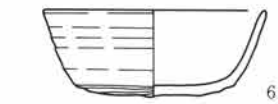
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、35~50cmを測り、平均42cmである。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径50×40cm、深度72cmを測り、貯蔵穴内より1の土師器坏と8の須恵器碗が出土している。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は良好な状態で残っている。規模は、全長72cm、幅100cmを測り、燃烧部は壁外に20cmのびる。

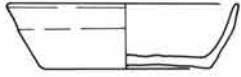
掘り方は、床面より2~10cmと浅い掘り込みで、埋土は、黒褐色土である。床下の施設は、西壁際に壁溝状の溝とカマドの北側から東北コーナーに向けて溝がみられる。床下土壇は、各コーナー際と南壁より6基検出された。

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 貯蔵穴底部より23cm、 床直	12.0・10.6・3.9 1/6 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的でやや開く。底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で。底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 カマド	12.6・7.0・2.5 1/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的でほとんど開かず、立ち上がりに丸みをもつ。口縁部の上半は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床直	13.2・10.0・4.3 完形 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、体部は直線的に開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で。体部は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
4	須恵器 蓋 カマド 覆土	13.8・—・— 1/4 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は欠損。天井部はゆるい丸みをもち、口縁部は外反ぎみに開く。端部は折り曲げ、天井部の3分の2程度は回転糸切り。
5	須恵器 坏 床直	11.8・7.0・3.7 3/5 細砂粒・褐色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。口唇部は僅かに外反し、底部は回転糸切り。

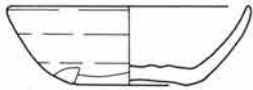
第4節 歴史時代



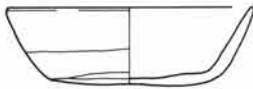
6



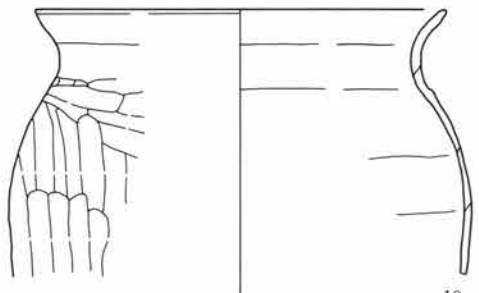
7



8

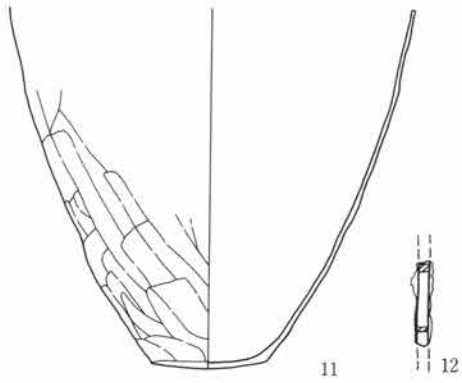


9



10

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
6	須恵器 坏 床直	11.8・8.4・4.7 1/6 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的でほとんど開かない。底部はヘラ切り。
7	須恵器 坏 床直	12.2・9.0・3.4 9/10 粗砂粒、角礫 灰白色	ロクロ左回転。体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。底部は回転糸切り。
8	須恵器 坏 貯蔵穴底部密着	12.6・6.2・4.2 完形 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。体部の下位は左方向への手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り。
9	須恵器 坏 床直	13.0・9.0・4.2 7/8 細砂粒・白色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては僅かに丸みをもつ。体部の下半は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り後、周辺のみに回転ヘラ削りが施されている。
10	土師器 甕 カマド底部より 2cm	21.8・ — ・ — 小片 細砂粒・雲母 普通 褐色	口縁部はゆるく外反し、胴部も上半はゆるいふくらみをもつ。口縁部は横撫で、外面の胴部上位は横方向へのヘラ削り、中位以下は縦方向へのヘラ削りが2段施されている。内面はヘラ撫でで5～6cmの幅で粘土紐積み痕がみられる。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
11	土師器 甕 覆土	21.6・6.0・20.0 小片 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	甕胴部下半。外面は縦方向ヘラ 削り。
No.	種 類		観察表掲載頁
12	棒状不明鉄製品		893

S J 140

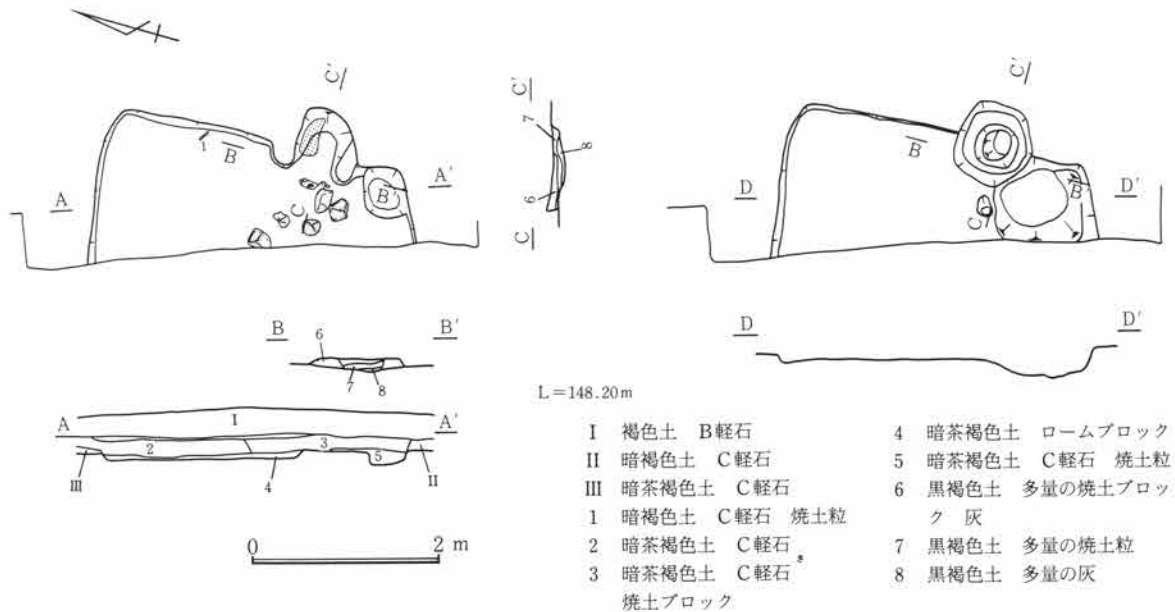
158

本住居跡は、145～146 J-16～18グリッドに位置し、本遺構の3分の2以上は、調査区域外にのびるため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すると推測される。規模は、南北3.46mを測る。主軸方向はN-87-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、4～12cmを測り、平均は7cmである。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径60×45cm、深度21cmを測る。

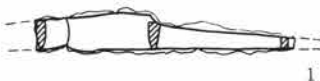
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、カマドに使用されたと推測される礫がカマドと前に散乱している。規模は、全長80cm、幅95cmを測り、焚口部の一部は壁外に50cmのびる。

掘りの方は、全体的に浅く、平坦である。床下の施設は検出されなかった。



L=148.20m

- I 褐色土 B軽石
- II 暗褐色土 C軽石
- III 暗茶褐色土 C軽石
- 1 暗褐色土 C軽石 焼土粒
- 2 暗茶褐色土 C軽石
- 3 暗茶褐色土 C軽石
- 4 暗茶褐色土 ロームブロック
- 5 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒
- 6 黒褐色土 多量の焼土ブロック 灰
- 7 黒褐色土 多量の焼土粒
- 8 黒褐色土 多量の灰



No.	種 類	観察表掲載頁
1	鉄製品 刀子	891

S J 141

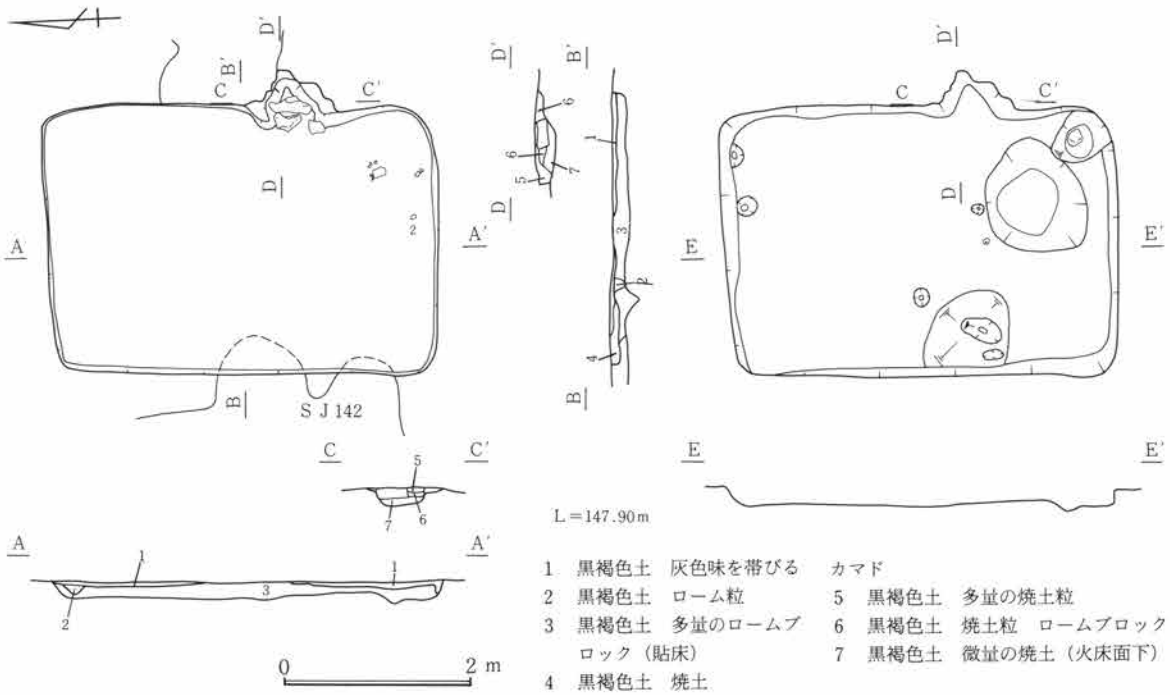
159

本住居跡は、138～140 J-10～12グリッドに位置し、S J 142、S D 113と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.82m、南北4.16m、面積11.60m²を測る。主軸方向は、N-92°-Eを指す。

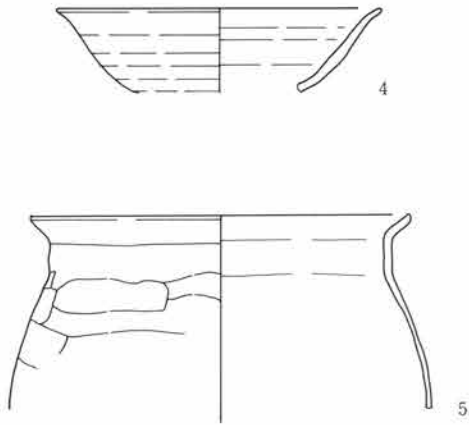
床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部も一部流出している。規模は、全長54cm、幅98cmを測り、燃烧部の一部は壁外に35cmのびる。袖部には、軟質の砂礫を角柱状に加工して使用している。

掘り方は、床面より5～15cmほど掘り込まれ、埋土は、ロームブロックを多く含む黒褐色土。床下の施設は、床下土壇が3基検出されたが、K₁は、床面では確認できなかったが貯蔵穴と推測される。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.4・8.0・— 1/8 細砂粒・雲母 普通、にぶい橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部は指撫で。
2	須恵器 坏 床直 覆土	13.2・7.2・— 1/8 細砂粒・白色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。
3	須恵器 碗 覆土	15.4・—・—、小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	口縁部は外反し、体部は丸みを持つ。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 碗 覆土	17.2・—・— 1/10 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	口縁部は外反し、体部は丸みをもち開く。
5	土師器 碗 覆土	20.0・—・— 小片 細砂粒・褐色鉱物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は左方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫で。

S J 142

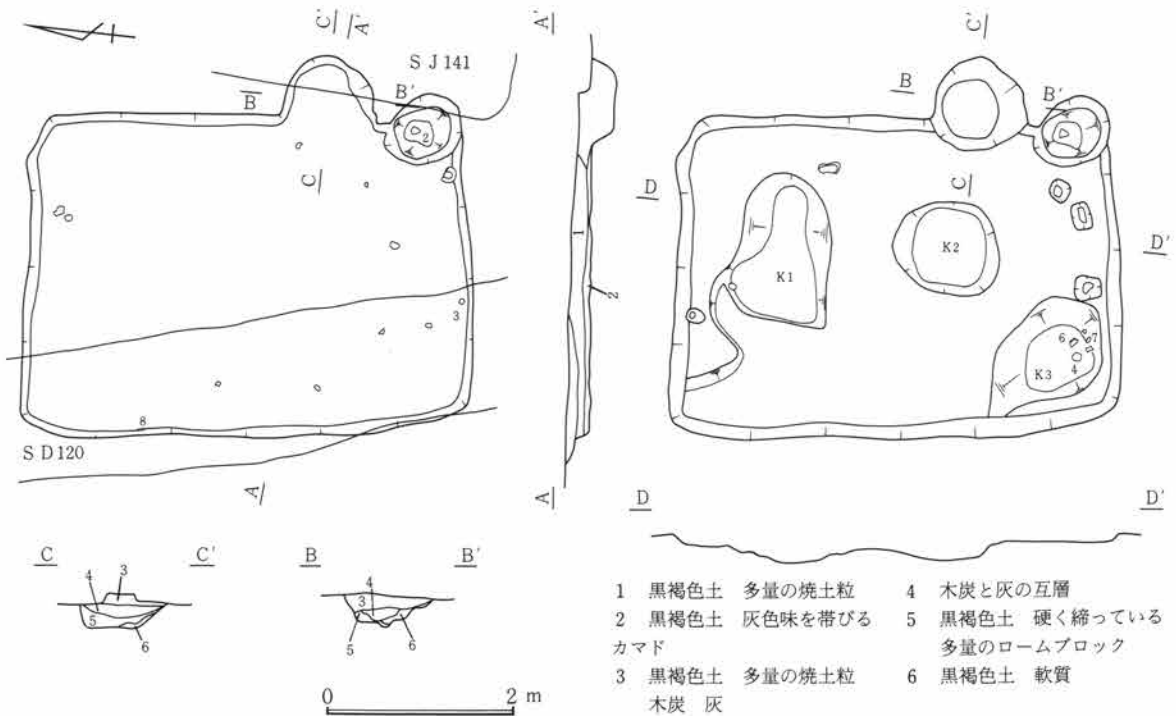
159

本住居跡は、140~142 J-10~12グリッドに位置し、S D 102、S J 141と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.39m、南北4.26m、面積16.12m²を測る。主軸方向は、N-88°-Eを指す。

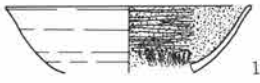
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、8~12cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナーに位置し、約半分は壁外にのびる。形態は、楕円形を呈し、規模は径83×67cm、深度41cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は欠落している。規模は、全長82cm、幅101cmを測り、残存部分の焚口部の全どは壁外に位置する。

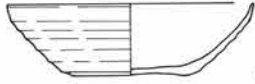
掘り方は、床面より10~16cmほど掘り込まれている。床下の施設は、床下土壇が3基検出された。形態・規模は、K₁が不整形形で径152×113cm、深度13cm。K₂は楕円形で径117×93cm、深度11cm。K₃は楕円形で径130×98cm、深度15cmを測る。



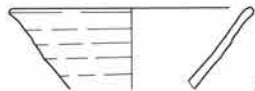
第4節 歴史時代



1



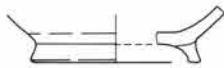
2



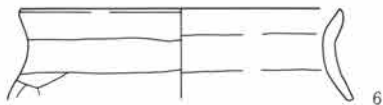
3



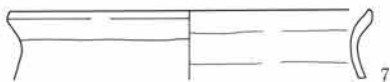
4



5



6



7



8

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 内面黒色処理 外面 灰黄色 内面 黒褐色	ロクロ成形。口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。内面はへら磨き。
2	須恵器 坏 貯蔵穴底部より2cm	13.0・6.0・3.8 1/4 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内湾ぎみ、体部にはロクロ痕が明確に残り、底部は回転糸切り。
3	須恵器 碗 床直	12.6・—・— 小片 細砂粒・白色鉱物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもつ。
4	須恵器 碗 床直	—・8.0・— 1/3 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。高台は端部に丸みをもち直立する。底部は回転糸切り。
5	須恵器 碗 床下 覆土	—・8.4・— 小片 細砂粒・褐色鉱物粒 酸化焰軟質 淡黄色	高台はやや開き、端部は平坦で接地面は広い。底部は糸切り。
6	土師器 甕 床直	17.0・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部はやや外反し、横撫で、胴部はへら削り。
7	土師器 甕 床直	19.0・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、横撫で。
No.	種類	観察表掲載頁	
8	鉄製品 刀子	891	

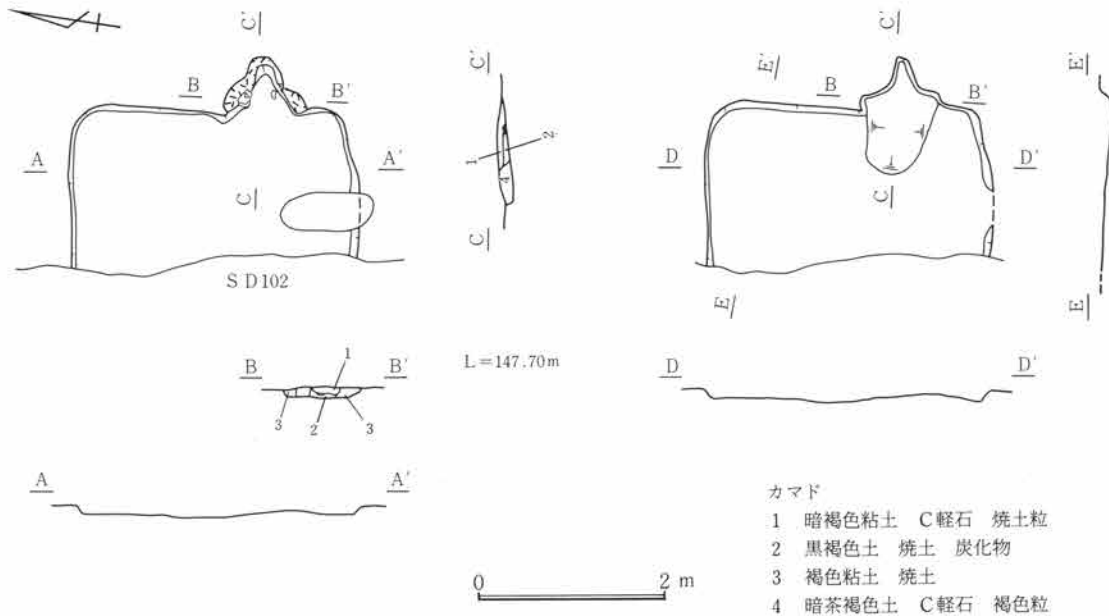
S J 143

本住居跡は、138～139 J—06～07グリッドに位置し、S D102と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の西半分は、S D102によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、南北3.05mを測る。主軸方向は、N—83°—Eを指す。

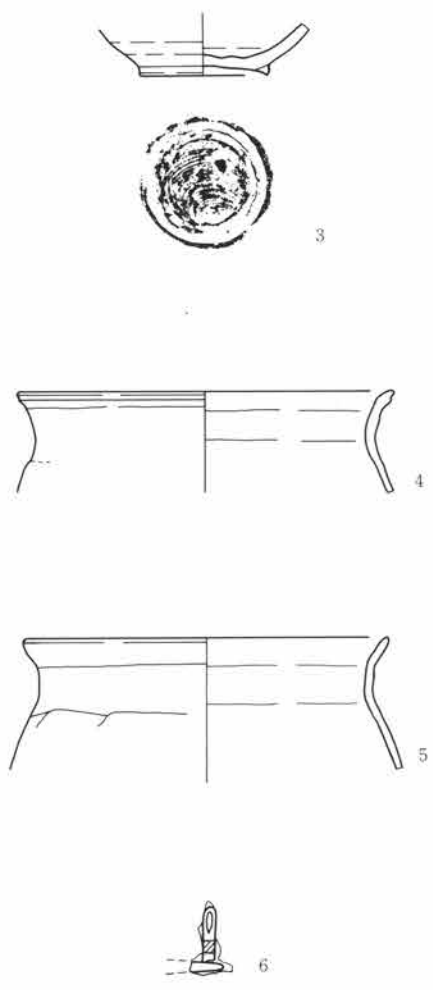
床は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が5～8cmと確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部は欠落している。規模は、全長81cm、幅73cmを測り、燃烧部の一部は壁外に47cmのびる。

掘り方は、床面より2～7cmと浅く、ほぼ平坦である。床下の施設は、検出されなかった。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	13.2・7.2・3.7 9/10 粗砂粒・角礫・雲母 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗 覆土	—・14.4・— 1/3 細砂粒・褐色鉱物粒 酸化焰 にぶい褐色	ロクロ右回転。高台は断面逆台形を呈し、接地面は広い。底部は回転糸切り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 碗 覆土	—・7.0・— 2/5 細砂粒・白色鉱物粒・ 角礫 還元焙 灰色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈し、底部は回転糸切り。
4	土師器 甕 覆土	20.0・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、横撫で。外面の胴部は横方向へのへら削り。
5	土師器 甕 カマド	19.2・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫で。外面の胴部は横方向へのへら削り。
No	種	類	観察表掲載頁
6	用途不明鉄製品		895

S J 144

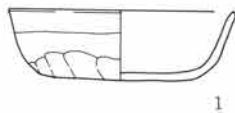
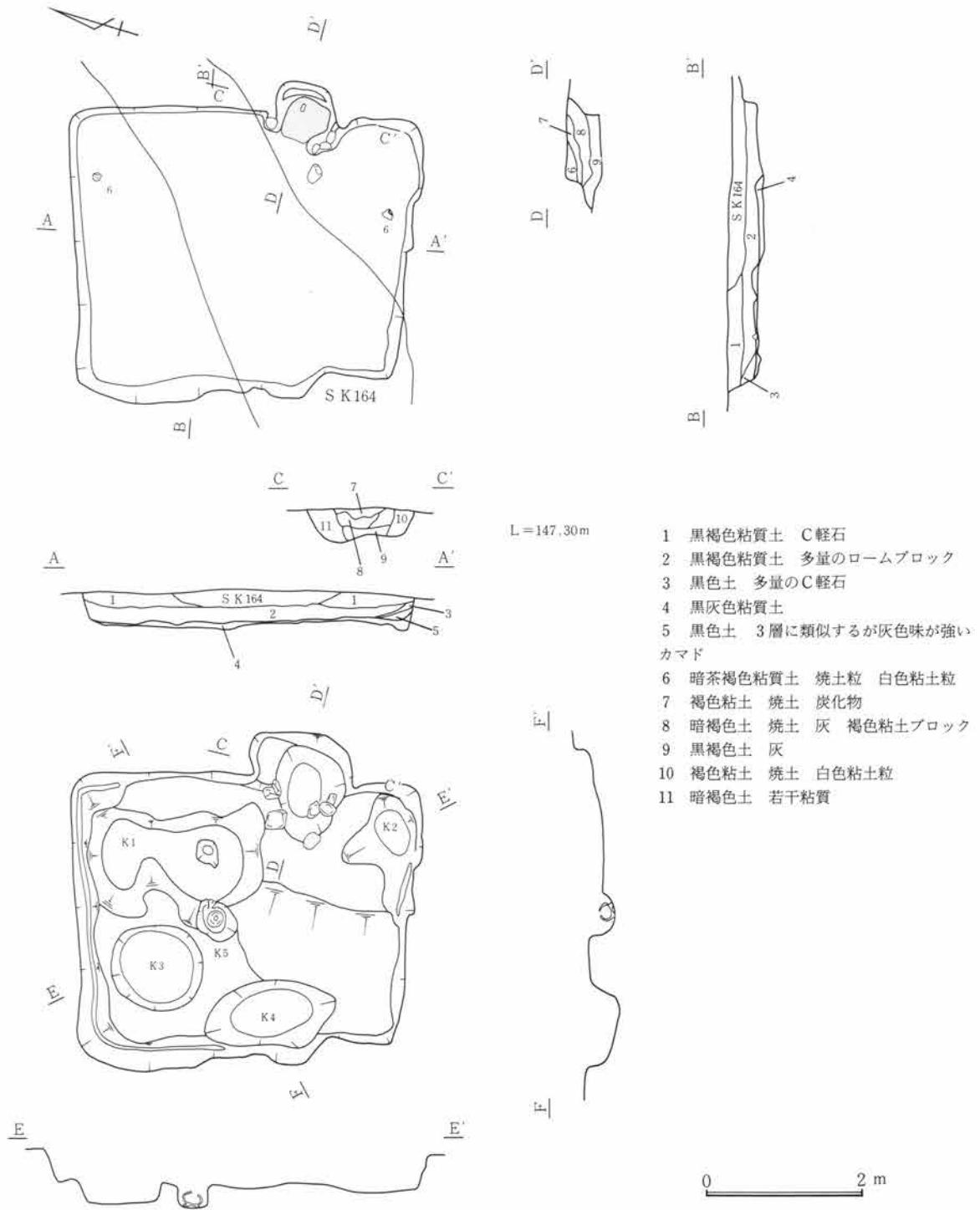
本住居跡は、134～136 J—09～11グリッドに位置し、S K 164と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.72m、南北4.49m、面積15.11m²を測る。主軸方向は、N—77°—Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、大部分が黒褐色土で覆われている。

床面は、粘性のある黒灰色土を使用して貼床を施している。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、30～39cmを測り、平均は34cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合良い状態で残っている。規模は、全長110cm、幅127cmを測り、燃焼部の一部は壁外にのびる。袖部は、両袖部とも18～25cm大の自然礫を使用して構築されている。

掘り方は、床面より2～17cmほど掘り込まれており、多数の小ピット状の凹凸がみられる。床下の施設は、東北コーナーから北壁・西壁の中央付近まで壁溝状の溝が周る。また、床下土坑が5基検出された。形態・規模は、K₁が瓢箪形を呈し、径221×135cm、深度28cm。K₂は楕円形で、径約100×70cm、深度23cm。K₃は長楕円形、径173×85cm、深度25cm。K₄はほぼ円形で、径113～120cm、深度29cm。K₅は楕円形で、径58～46cm、深度23cmを測る。K₅から上を打ち欠いた長頸壺が出土している。

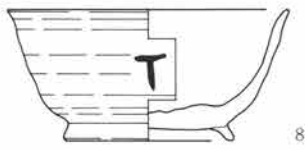
第3章 検出遺構・遺物



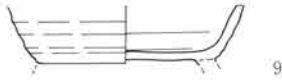
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 貯蔵穴 覆土	12.0・8.6・3.7 1/2 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は僅かに外反し、体部は立ち上がりに丸みをもつ。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部の上半は指撫で、下半は横方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 覆土	13.0・7.5・4.2 1/2 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもつ。底部は回転ヘラ削り。
3	須恵器 坏 覆土	14.6・8.4・4.0 1/3 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
4	灰釉陶器 碗 床直 床上12cm	14.0・—・— 小片 緻密・黒色鉍物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	口縁部は外反し、体部は丸みをもち開く。施釉は内面のみで刷毛塗り。釉調は透明な緑灰を呈す。
5	須恵器 碗 覆土	14.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。
6	須恵器 碗 床直 床上12cm	15.4・8.6・7.9 9/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。高台は細身で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。内面の底部と体部の間に指頭痕がみられる。
7	須恵器 碗 カマド内覆土	15.6・7.8・7.4 1/3 細砂粒・粗砂粒・黒色 鉍物粒・角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口唇部は僅かに外反し、体部は立ち上がりでゆるい丸みをもつ。高台は断面四角形で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。

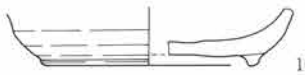
第3章 検出遺構・遺物



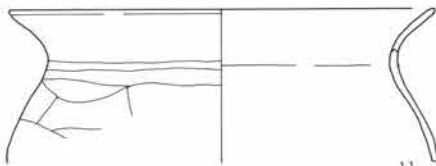
8



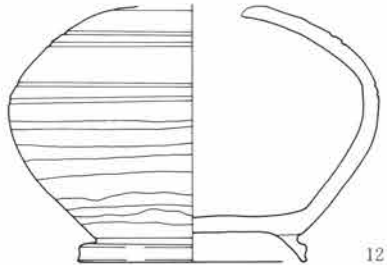
9



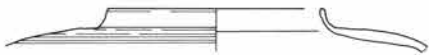
10



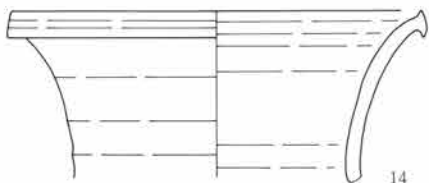
11



12



13



14

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
8	須恵器 碗 覆土	15.0・9.0・6.9 1/3 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。口唇部は外反し、 体部は立上がりで丸みをも つ。高台は丸みをもつ断面三角 形を呈し「ハ」の字に開く。底 部は回転糸切り。体部には「丁」 字型の墨書がみられる。
9	須恵器 碗 覆土	—・9.4・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	高台は剝離。底部は回転ヘラ削 り。
10	須恵器 碗 覆土	—・22.2・— 小片 黒色鉾物粒 還元焰 灰色	体部は立ち上がりに丸みをも ち、高台は端部に丸みもちや や開く。底部は回転ヘラ削り。
11	土師器 甕 カマド 覆土	22.6・—・— 小片 細砂粒 雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、横撫で。胴部 はヘラ削り。
12	須恵器 長頸壺 床下土壇底部 直上	—・12.2・— 3/4 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	頸部から口縁部にかけては欠 損。ロクロ左回転。胴部は中位 で大きく張り出し、高台は「ハ」 の字状に開き、下半は直立する。 胴部の下半は回転ヘラ削り。底 部はヘラ撫で。
13	須恵器 短頸壺 覆土	11.4・—・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	口縁部は短く直立ぎみ、胴部の 肩は大きく張る。
14	須恵器 甕 覆土	21.8・—・— 小片 細砂粒・白色鉾物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、端部は上下に 引きだされ縁帯をつくる。

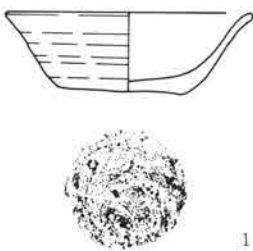
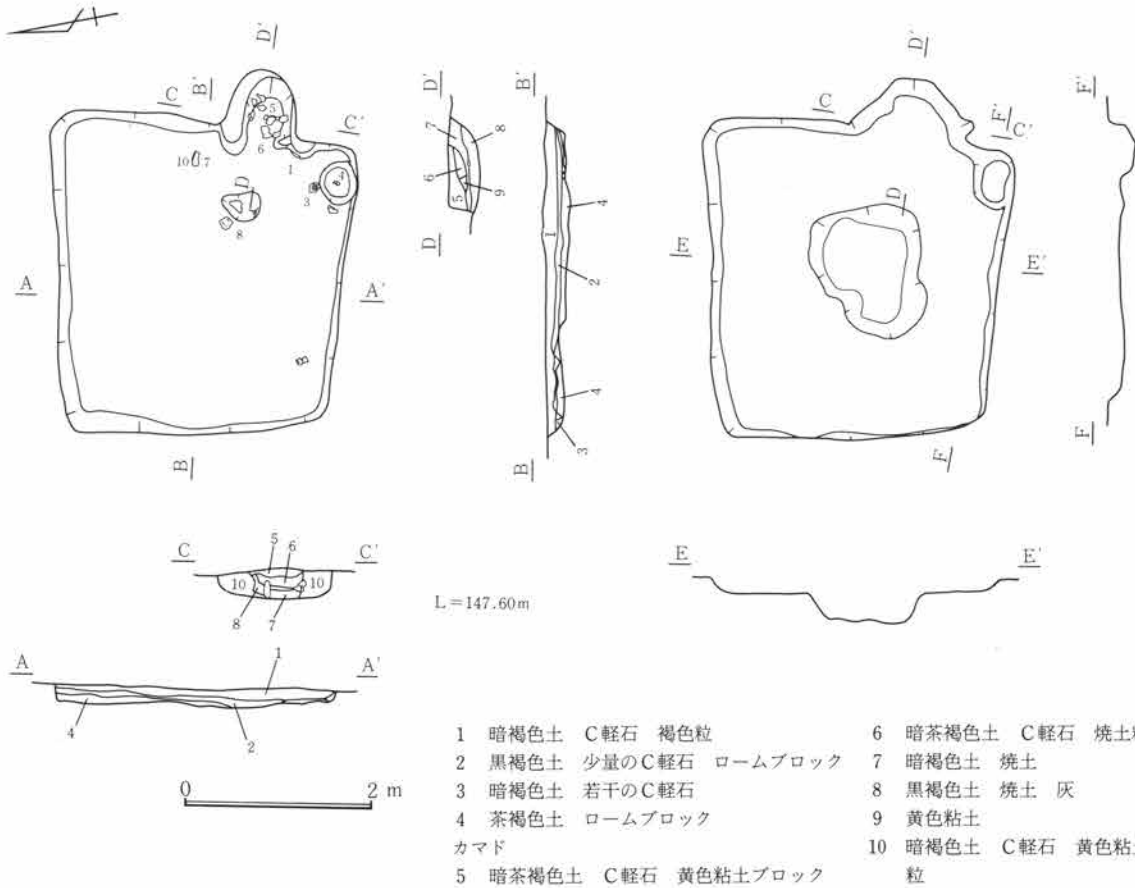
S J 145

本住居跡は、137～139 J -03～05グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、西壁の短い台形状を呈す。規模は、東西3.33m、南北3.37m、面積10.10m²を測る。主軸方向は、N-118.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、8～16cmを測り、平均は11cmである。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径45×40cm、深度18cmを測る。

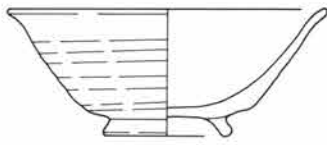
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合良好な状態で残っている。規模は、全長90cm、幅105cmを測り、燃烧部の大部分は壁外に60cmのびる。袖部は、両袖部とも自然石を使用して構築されている。

掘り方は、床面より2～5cmと全体的に浅く、細かい凹凸が多くみられる。埋土は、茶褐色土である。床下の施設は、ほぼ中央に楕円形を呈し、径145×120cm、深度23cmを測る床下土壇が検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床直	13.0・7.5・4.3 7/8 粗砂粒・角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。底部は回転糸切り。

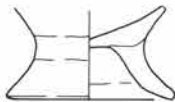
第3章 検出遺構・遺物



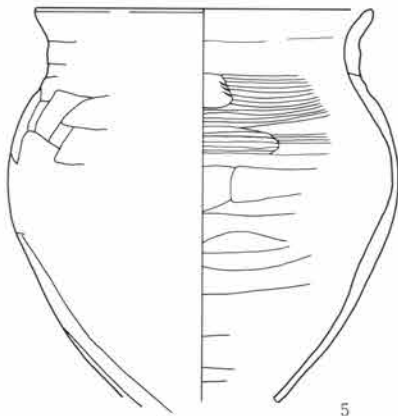
2



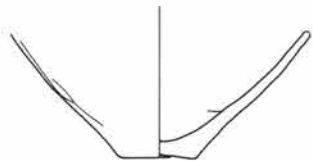
3



4

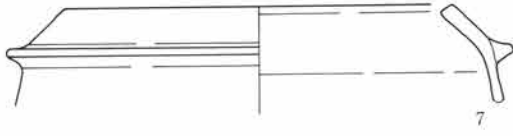


5

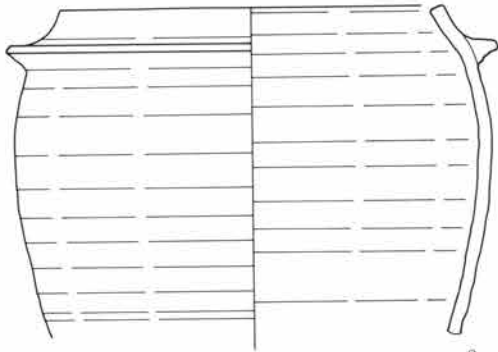


6

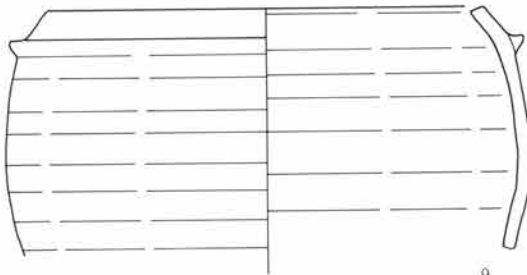
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 碗 床直	17.0・7.8・6.7 1/2 粗砂粒・角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的で口唇部は外反する。高台は端部に丸みをもち「ハ」の字状に開く。底部は撫で。
3	須恵器 碗 床直	—・7.2・— 1/2 細砂粒・褐色鉍物粒・ 白色鉍物粒 酸化焰 にぶい黄橙色	ロクロ右回転。高台は扁平で接地面は広い。底部切り離し方法は不詳明。
4	土師器 台付甕 貯蔵穴底部より12cm	—・5.8・— 小片 細砂粒・雲母 褐色	脚部は下半で大きく開き、横撫で。
5	土師器 甕 カマド内底部より10cm	18.0・—・— 1/8 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 赤褐色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部は上位で大きくふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部は上半で横方向へのヘラ削り。下半で縦方向へのヘラ削り。内面の胴部は上位で荒い刷毛目。中位以下は横方向へのヘラ撫で。
6	土師器 甕 カマド内底部より10cm	—・4.0・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 暗褐色	S J 145-5 と同一個体。外面の胴部は縦方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。



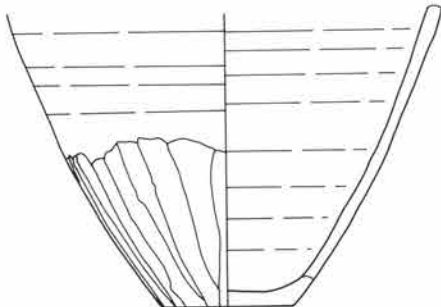
7



8



9



10

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 羽釜 床直	20.6・—・— 小片 細砂粒・角礫 半還元焰 灰黄色	口縁部は大きく内傾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部はゆるい丸みをもち、鐔は断面台形を呈す。
8	須恵器 羽釜 床直	20.4・—・— 小片 細砂粒 半還元焰 灰黄色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部はゆるい丸みをもち、鐔は断面台形を呈す。
9	須恵器 羽釜 覆土	23.2・—・— 小片 細砂粒・角礫 半還元焰 灰黄色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で内傾し、胴部はゆるい丸みをもち、鐔は断面三角形を呈す。
10	須恵器 羽釜 床直	—・7.0・— 小片 細砂粒・褐色鉱物 粒・角礫 還元焰 灰白色	外面の胴部下位は縦方向へのヘラ削り。

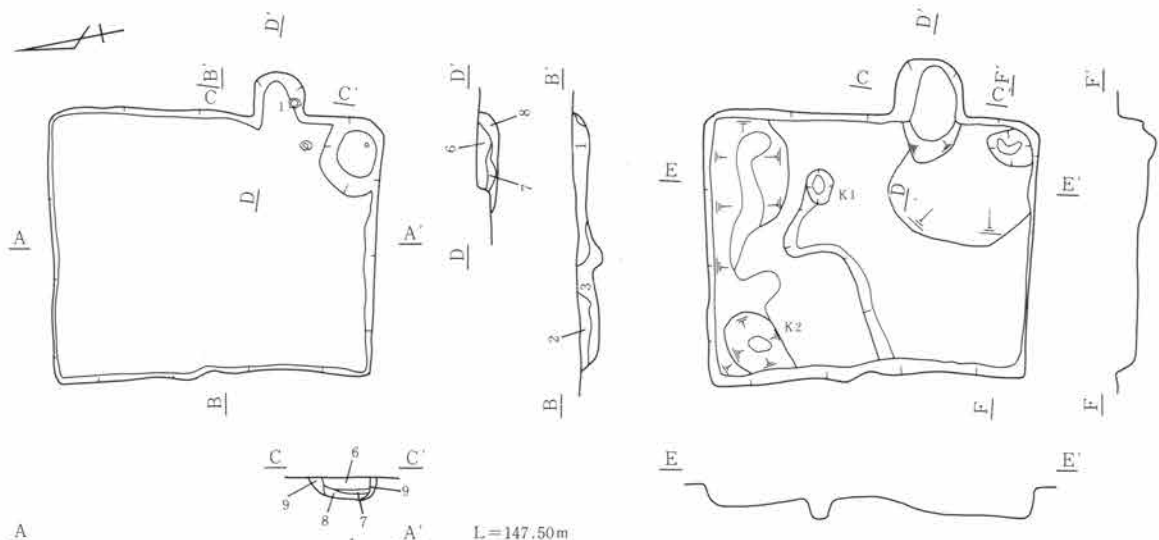
S J 146

本住居跡は、137~138 I-49~J-00に位置し、単独で占地する。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.90m、南北3.56m、面積9.76m²を測る。主軸方向は、N-103.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、北壁が垂直な立ち上がりを呈するが、他の壁は緩やかな立ち上がりである。壁高は、9~15cmを測り、平均は11cmである。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径77×62cm、深度14cmを測る。

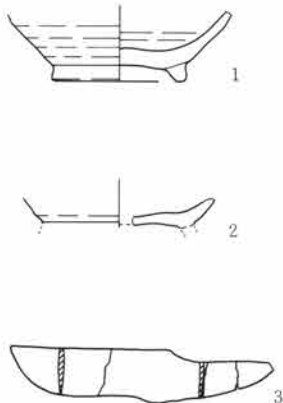
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は欠落している。規模は、全長96cm、幅80cmを測り、焚口部の大部分は壁外に75cmのびる。

掘り方は、床面より2~14cmほど掘り込まれ、細かい凹凸が多くみられ、北から南にかけて緩やかに落ち込んでいる。床下の施設は、床下土壇が2基検出された。形態・規模は、K₁が楕円形で径38×28cm、深度17cm。K₂は楕円形で径68×55cm、深度13cmを測る。



L=147.50m

- 1 暗茶褐色土 C軽石 若干 カマド
のロームブロック
- 2 暗茶褐色土 少量のC軽石
- 3 褐色土 ロームブロック
- 4 暗褐色土 多量のC軽石
- 5 暗褐色土 4層より暗い色
調 少量のC軽石
- 6 黒褐色土 若干の焼土粒
- 7 黒褐色土 多量の焼土ブロック
- 8 黒褐色土 少量の焼土粒 多量
のロームブロック (火床面下)
- 9 黒褐色土



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴		
1	須恵器 碗 カマド内底部 より7cm	- 7.0 -、1/3 細砂粒・雲母 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈しやや開く。 底部は回転系切り。		
2	須恵器 碗 覆土	- 8.0 -、小片 粗砂粒・雲母 酸化焰、黄灰色	ロクロ回転方向不明。高台剥離、底部は回転系切り。		
No	種類	観察表掲載頁	3	鉄製品 刀子	891

S J 147

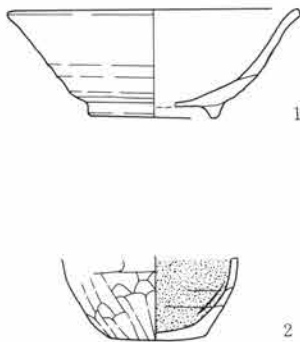
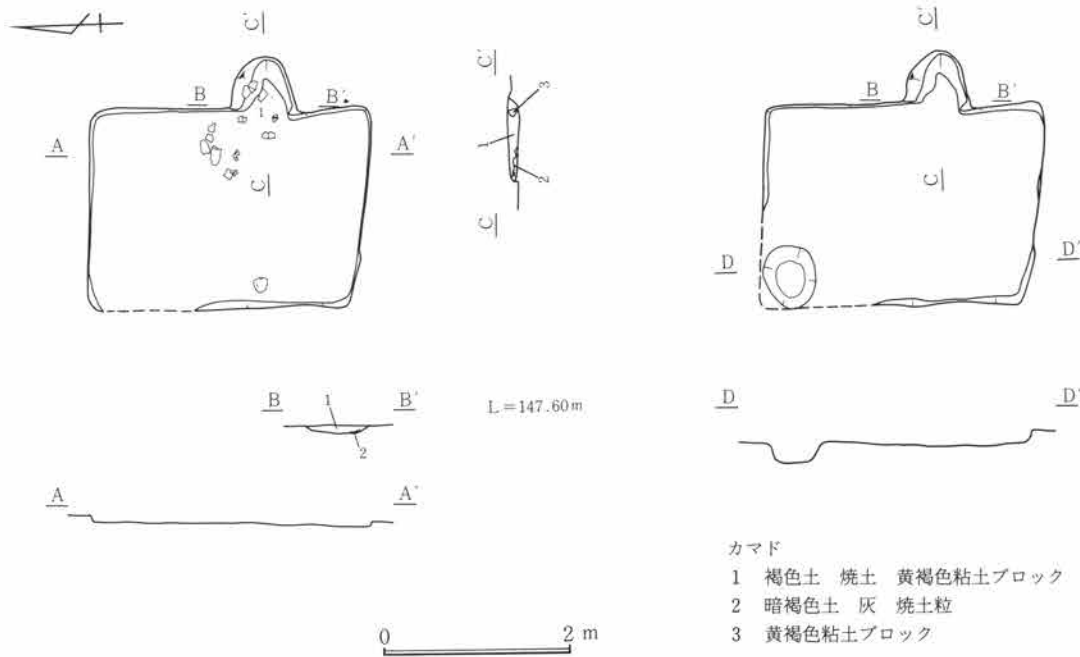
165

本住居跡は、139～141 J-02～04グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、やや歪んだ長方形を呈す。規模は、東西2.13m、南北2.99m、面積6.37m²を測る。主軸方向は、N-91.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、本遺構の中央を遺跡の範囲を確認するためのトレンチによって削平されているため全体は不明であるが、残存部分では、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、8～16cmを測る。壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部も欠落している。規模は、全長67cm、幅69cmを測る。

掘り方は、床面より1～4cmと全体的に浅い。床下の施設は、北西コーナーよりに楕円形で径63×54cm、深度23cmを測る床下土壇が1基検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 カマド内底部 から2～4cm	15.2・8.4・5.8 2/3 細砂粒・亜角礫 還元焰軟質 浅黄色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は断面四角形を呈し直立する。底部切り離し方法不明。
2	土師器 小型甕 覆土	—・5.1・— 1/5 粗砂粒・雲母 普通 にぶい黄橙色	外面の胴部は上半で横方向へのヘラ削り。下半で縦方向へのヘラ削り。底部は一定方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。

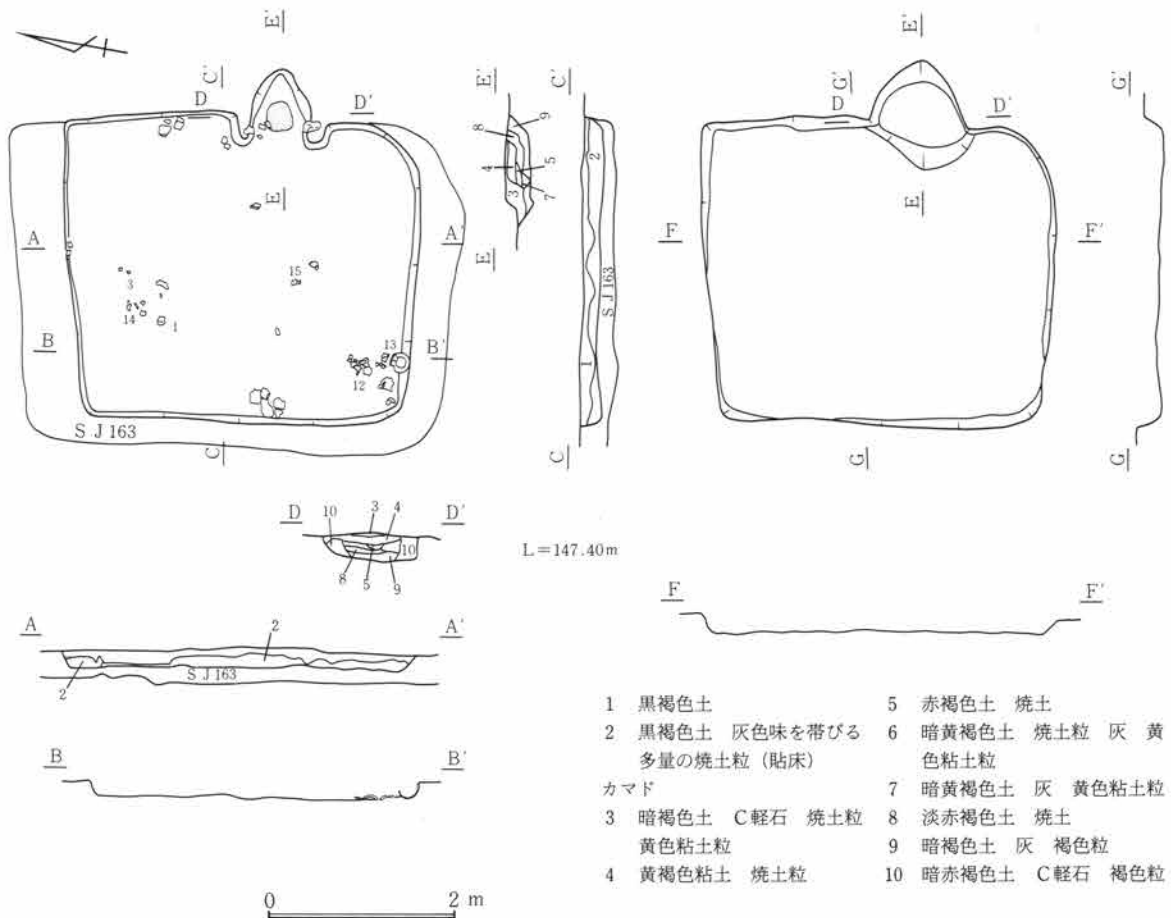
S J 148

本住居跡は、129～131 J—05～06グリッドに位置し、S J 163と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、東壁がカマドの両側でくい違うが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.27m、南北3.80m、面積11.63m²を測る。主軸方向は、N—76.5°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、西壁がほぼ垂直な立ち上がりを呈するが、他の壁は緩かに立ち上がる。壁高は、4～16cmを測り、平均は8cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

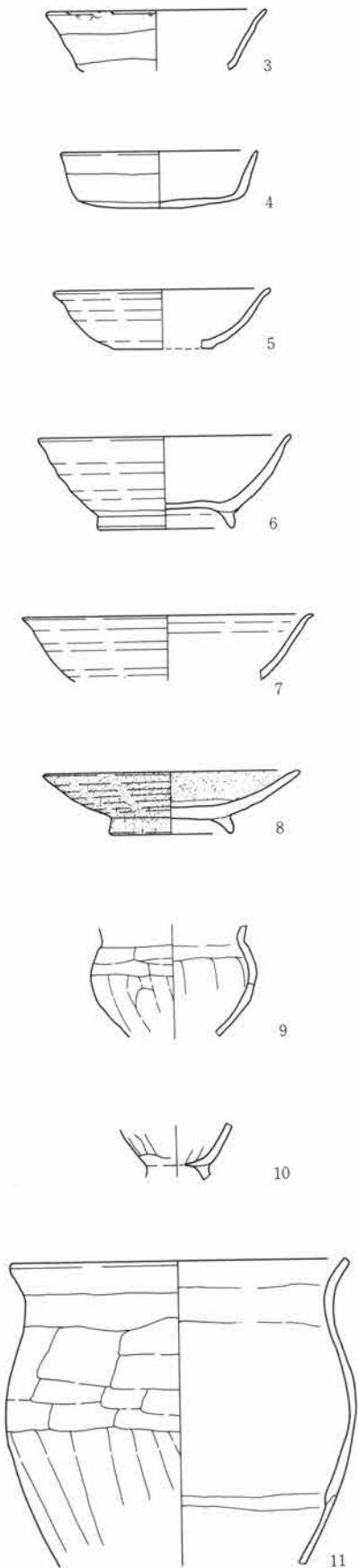
カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合良好な状態で残っている。規模は、全長78cm、幅112cmを測り、燃烧部は壁外に40cmのびる。

掘り方は、床面より4～6cmほど掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、検出されなかった。



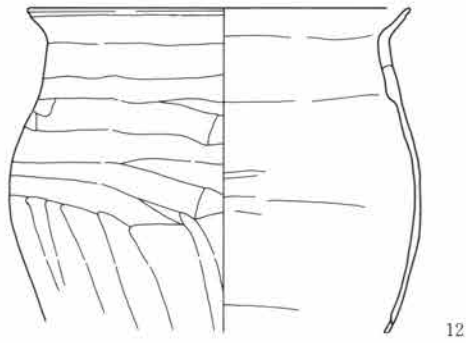
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	11.6・11.0・3.8、3/5 粗砂粒・雲母 普通、橙色	口縁部は直線的でほぼ直立する。底部は丸底を呈す。 口縁部は横撫で、底部はへら削り。
2	土師器 坏 覆土	12.8・8.0・3.5、1/4 細砂粒・雲母 普通、橙色	口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。底部 は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部 はへら削り。

第4節 歴史時代

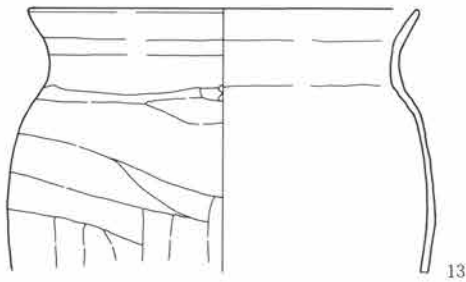


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 坏 床直 覆土	13.0・9.0・— 1/4 細砂粒・雲母 普通 ぶい橙色	口縁部はやや外反し、体部は直線的に開く。口縁部は横撫で、体部は指撫で。口縁部には煤の付着がみられる。
4	土師器 坏 覆土	11.6・10.0・3.3 1/2 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
5	須恵器 坏 覆土	12.8・6.0・3.5 1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、胴部は丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
6	須恵器 碗 床直 覆土	14.8・9.0・5.4 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口唇部は僅かに外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転糸切り。
7	須恵器 碗 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、体部は立ち上がり丸みをもつ。
8	須恵器 皿 覆土	15.0・7.6・3.7 1/4 細砂粒・雲母 還元焰燻焼成やや軟質 暗灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち大きく開く。高台は断面三角形を呈し、ほぼ直立する。底部は回転糸切り。
9	土師器 台付甕 床下	—・—・— 1/6 細砂粒 普通 褐色	胴部は上位でふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部は上位で横方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
10	土師器 台付甕 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒 普通 橙色	外面の胴部下半は縦方向のヘラ削り。脚部は横撫で。内面の胴部はヘラ撫で。
11	土師器 甕 床直	20.0・—・— 1/8 細砂粒・雲母・ 褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部はゆるい丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は上位で左方向へのヘラ削り。中位以下は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫でが施されている。

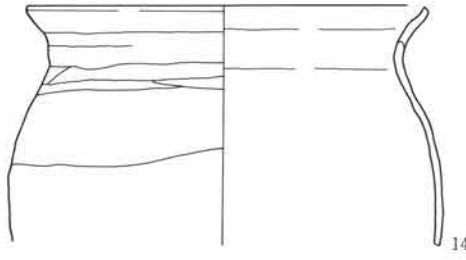
第3章 検出遺構・遺物



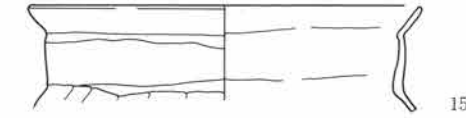
12



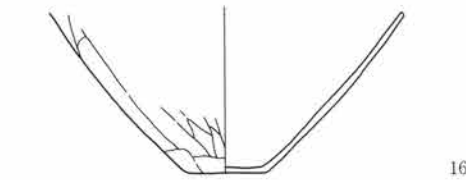
13



14



15



16



17

18

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
12	土師器 甕 床直	19.6・—・— 2/5 細砂粒・雲母・ 褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し 胴部はゆるい丸みをもつ。外面の 口縁部は横撫で、胴部は上位で左 方向へのヘラ削り。中位以下は縦 方向へのヘラ削り。内面の胴部は ヘラ撫でが施されている。
13	土師器 甕 床直	20.4・—・— 1/2 細砂粒・雲母・ 褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し 胴部はゆるい丸みをもつ。外面の 口縁部は横撫で、胴部は上位で左 方向へのヘラ削り。中位以下は縦 方向へのヘラ削り。内面の胴部は ヘラ撫でが施されている。
14	土師器 甕 床直	21.0・—・— 小片 細砂粒・雲母・ 褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し 胴部はゆるい丸みをもつ。外面の 口縁部は横撫で、胴部は横方向へ のヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫 でが施されている。
15	土師器 甕 床上3cm、 7cm	20.8・—・— 小片 細砂粒・雲母 褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横 撫で。
16	土師器 甕 覆土	—・4.2・— 小片 細砂粒・雲母・ 褐色鉱物粒 普通 明赤褐色	胴部は大きく開く。底部は平底を 呈す。胴部は縦方向へのヘラ削り。
No.	種類	観察表掲載頁	
17	鉄製品 刀子	892	
18	用途不明鉄製品	894	

S J 149

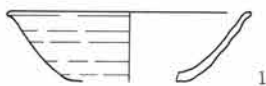
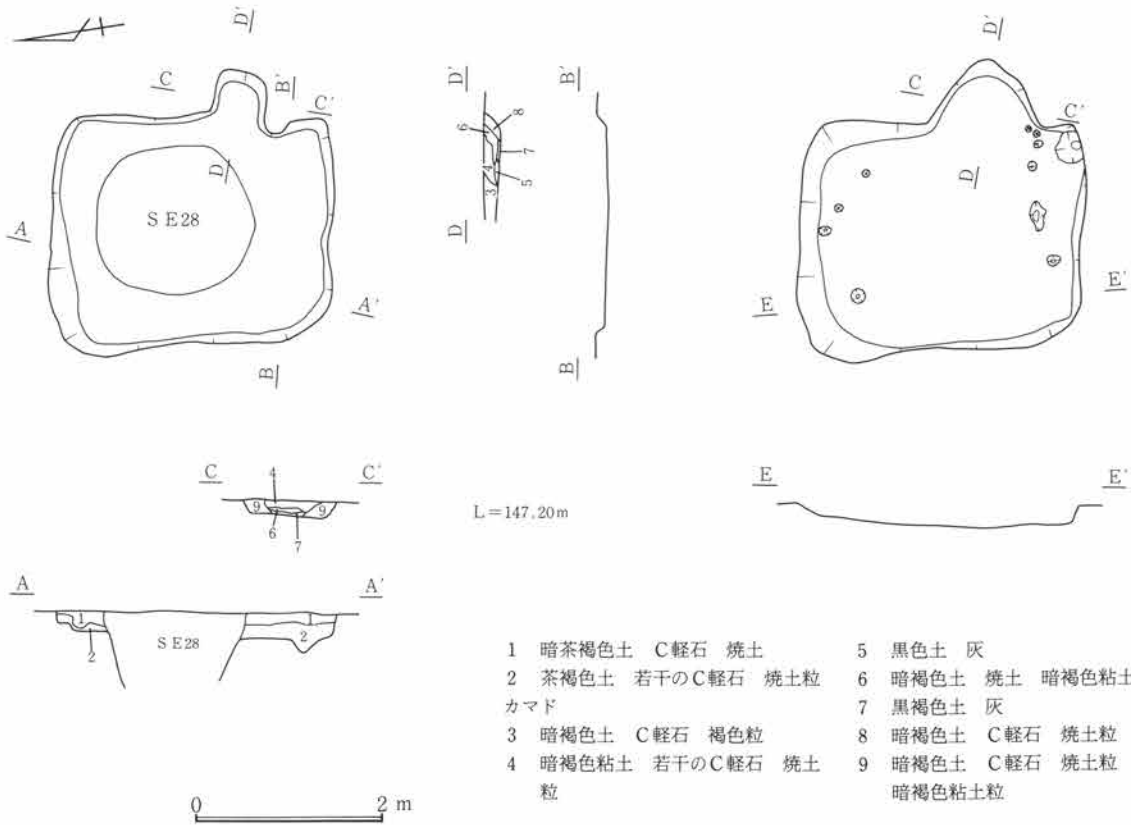
168

本住居跡は、131~132 I-32~33グリッドに位置し、S E 28と本遺構のほぼ中央で重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.53m、南北3.02m、面積7.16m²を測る。主軸方向は、N-99°-Eを指す。

床面は、貼り床が施されている。壁は、垂直に立ち上がる所と緩かに立ち上がる所と両方みられる。壁高は、5~19cmを測り、平均は8.5cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部が欠落している。規模は、全長80cm、幅112cmを測る。

掘り方は、床面より14~18cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が少しみられる。埋土は、茶褐色土である。床下の施設は、東南コーナー際に楕円形で、径40×35cm、深度24cmを測る床下土壇が1基検出されたが貯蔵穴の可能性もある。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.0・—・—、1/10 細砂粒 還元焰 灰色	体部はゆるい丸みを持ち開き、口縁部は外反する。

S J 150

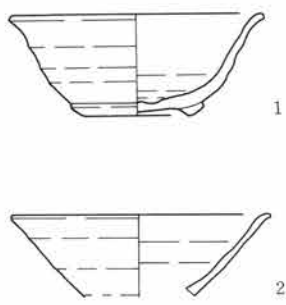
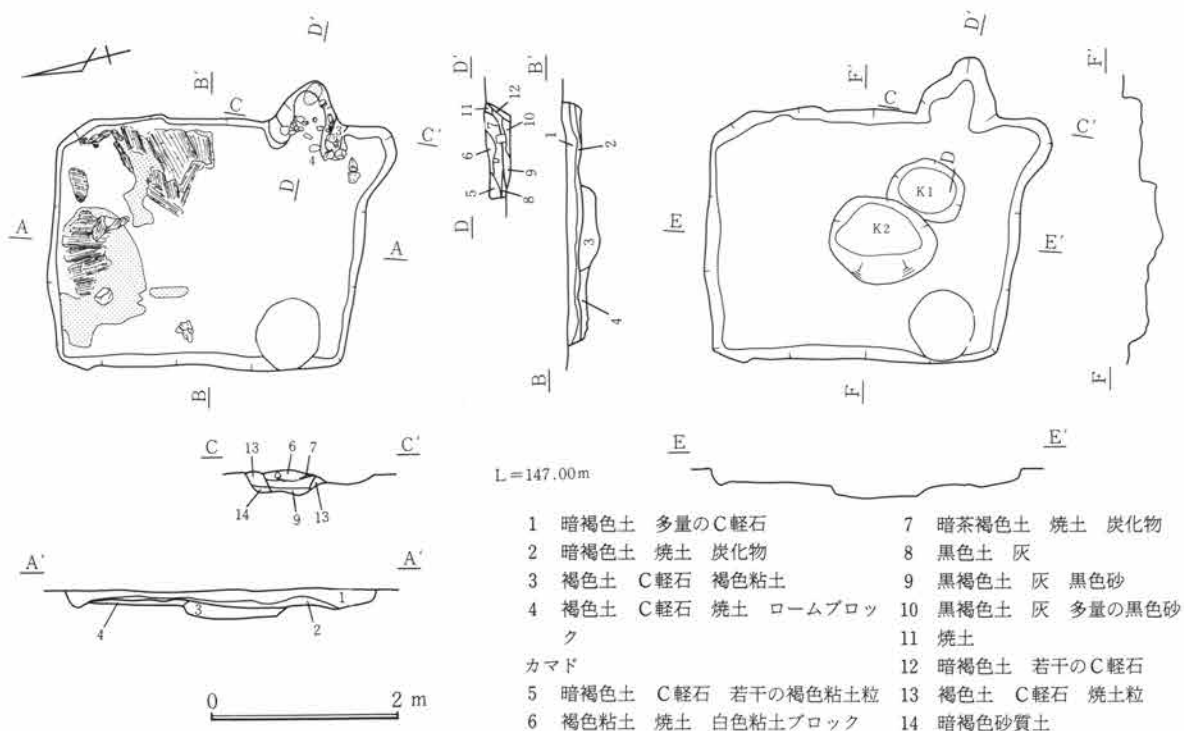
本住居跡は、129～130 I—29～31グリッドに位置し、西壁で土壇と重複するが、新旧関係は本遺構の方が古い。平面形態は、南壁の東端に半円状の張り出しをもつが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.65m、南北3.58m、面積8.69m²を測る。主軸方向は、N—106.5°—Eを指す。

床面は、褐色土を使用して貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、5～15cmを測り、平均は9cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

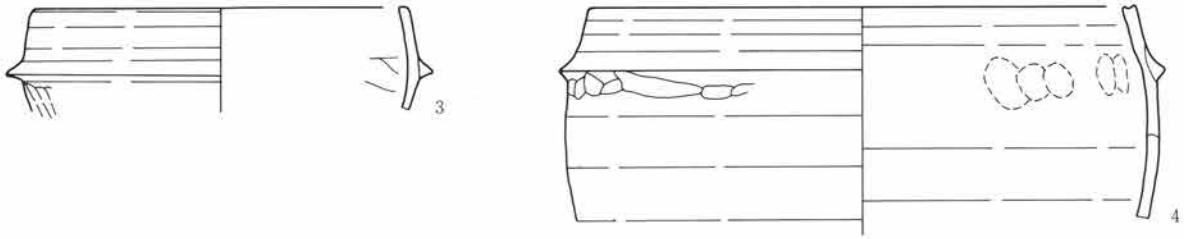
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は、割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長78cm、幅87cmを測り、焚口部の一部は壁外に40cmのびる。

掘り方は、床面より4～8cmほど掘り込まれ、埋土は、茶褐色土である。床下の施設は、ほぼ中央付近に床下土壇が2基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径79×60cm、深度12cm。K₂は、楕円形で径105×80cm、深度21cmを測る。

本遺構は、焼失家屋であるが、炭化材や焼土灰の出土状況は、北半分に集中している。また炭化材も屋根材がほとんどで柱材や梁、桁などはほとんどみられない。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	13.4・7.0・5.4 1/8 細砂粒・褐色鉱物粒 酸化焰、にぶい橙色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は立ち上がりで丸みをもつ。高台は扁平で粗雑なもの。底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗 覆土	13.4・ — ・ —、1/10 細砂粒、還元焰 灰白色	口縁部は僅かに外反し、体部はほぼ直線的に開く。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 羽釜 床直	19.0・—・—、小片 細砂粒・雲母 酸化焰、橙色	口縁部は内傾、口唇端部は平端で水平。鏝は断面三角形を呈し、胴部は縦方向へのヘラ削り。
4	須恵器 羽釜 カマド	29.0・—・—、小片 細砂粒・褐色鉍物粒、酸化 焰、明褐色	口縁部はやや内傾し、口唇端部は僅かに凹みほぼ水平。胴部はゆるい丸みを持ち、鏝は断面三角形を呈す。内面の胴部に指頭痕がみられる。

S J 151

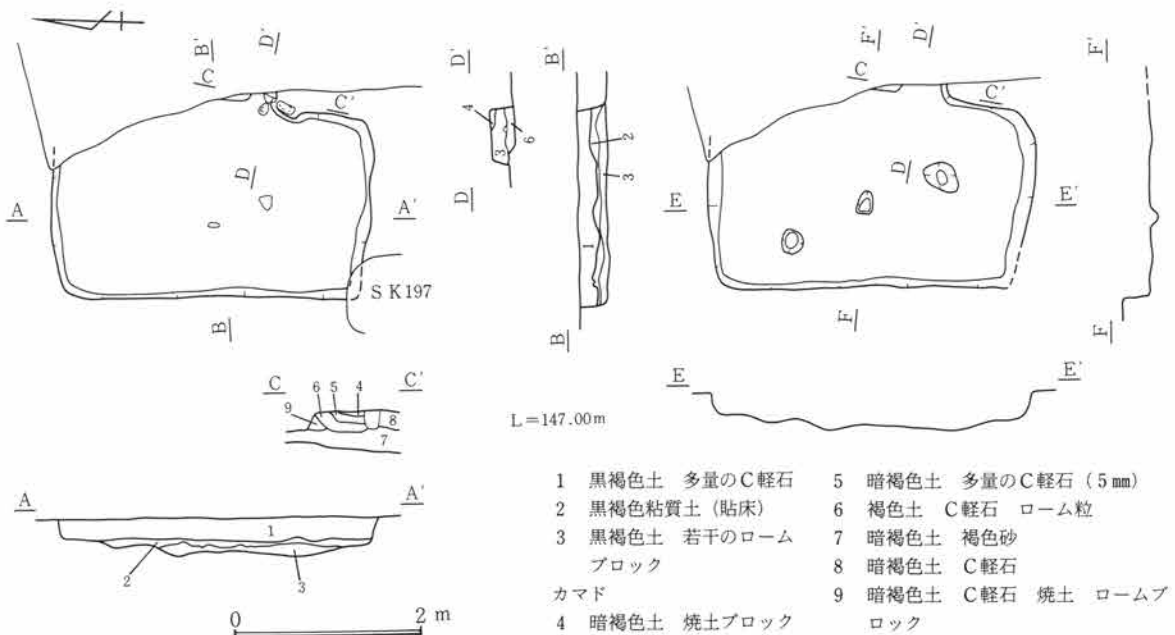
169

本住居跡は、125～126 I—21～23グリッドに位置し、S K 195と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西1.97m、南北3.40mを測る。主軸方向は、N—87.5°—Eを指す。

床面は、黒褐色粘土を使用して貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、16～24cmを測り、平均は20cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、大部分がS K 195によって切られているため全貌は不明であるが、右袖部には、自然礫が使用されている。

掘り方は、床面より3～4cmほど掘り込まれ、埋土は、黒褐色土である。床下の施設は、床下土壇1基、ピット2基検出された。K₁は、楕円形で径43×30cm、深度11cmを測る。



S J 152

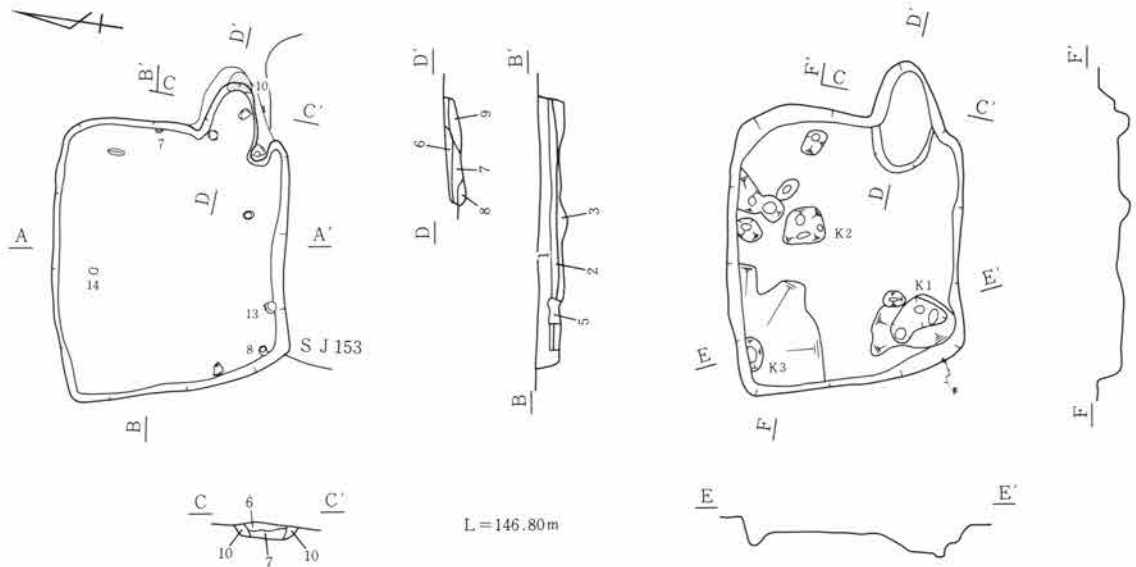
170

本住居跡は、125～126 I-18～20グリッドに位置し、S J 153と南壁でわずかに重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.98m、南北2.49m、面積7.05m²を測る。主軸方向は、N-82°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、南壁が緩な立ち上がりであるが、他の壁は垂直に立ち上がり、壁高は、12～18cmを測る。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

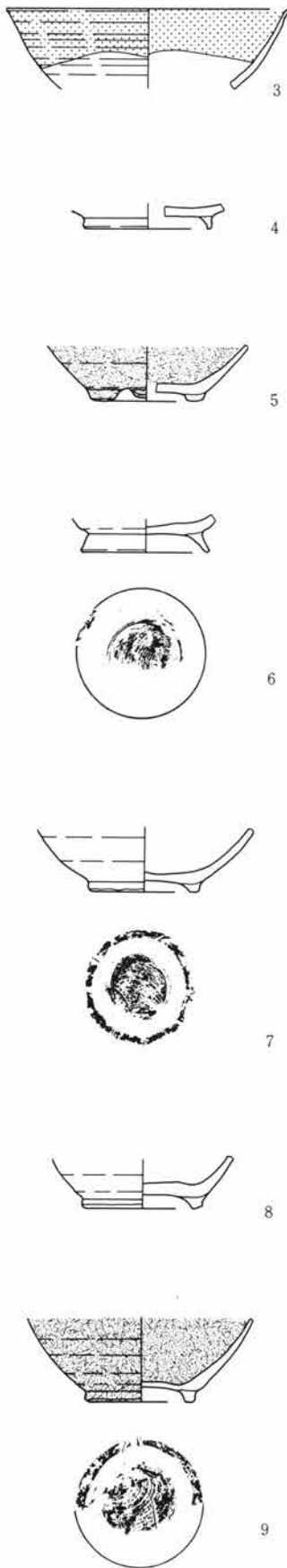
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、左袖部の一部は欠落している。規模は、全長96cm、幅107cmを測り、焚口部の大部分は壁外に65cmのびる。

掘り方は、床面より2～10cmほど掘り込まれ、西北コーナー部分は、緩い落ち込みがみられる他はほぼ平坦である。床下の施設は、床下土壇が3基とピットが6基検出された。形態・規模は、K₁が楕円形で径65×58cm、深度15cm。K₂は隅丸方形で一辺42×45cm、深度7cm。K₃は楕円形で径35×15cm、深度11cmを測る。



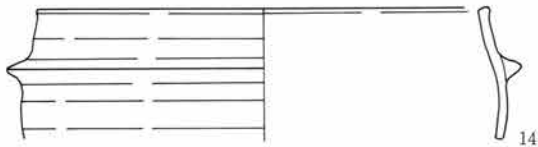
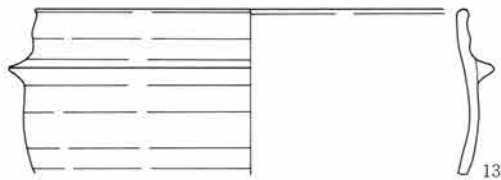
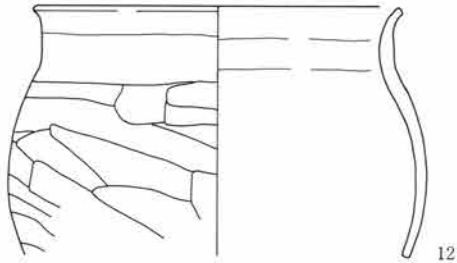
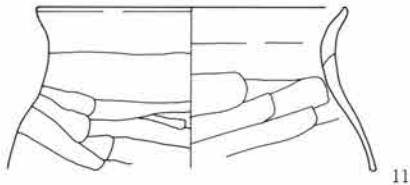
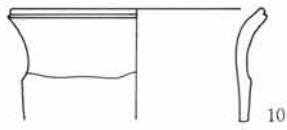
- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 暗茶褐色土 C軽石 褐色粒 | カマド |
| 2 暗茶褐色土 1層より暗い色調 多量のC軽石 | 6 暗茶褐色土 若干のC軽石(2～3mm) 焼土 |
| 3 茶褐色土 ロームブロック | 7 暗茶褐色土 多量のC軽石 |
| 4 暗茶褐色土 少量のC軽石 褐色粒 | 8 暗褐色土 C軽石 焼土ブロック 褐色粘土ブロック |
| 5 褐色土 ロームブロック | |

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床下	12.0・6.0・4.5、2/3 細砂粒 酸化焰、淡黄色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては僅かに外反する。底部は撫で。
2	須恵器 碗 覆土	14.0・一・一、小片 粗砂粒、還元焰燻焼成 黒褐色	口縁部は外反し、体部は丸みをもつ。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	灰釉陶器 碗 覆土	16.8・—・— 小片 緻密・黒色鈹物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	口唇部は外反し、体部は丸みをもち開く。施釉方法は漬け掛けによる。釉調は不透明な灰白色を呈す。
4	須恵器 (灰釉陶器) 碗 覆土	—・7.7・— 小片 黒色鈹物粒 還元焰 灰白色	高台はほぼ直立ぎみに立ち、端部は丸みをもち、底部は回転糸切り、周辺部は高台貼付時の撫で。
5	須恵器 碗 床下	—・7.0・— 小片 粗砂粒・雲母 還元焰燻焼成 黒褐色	体部は丸みをもち開く。高台は扁平で粗雑な成形。底部は回転糸切り。
6	須恵器 碗 床下	—・7.8・— 1/8 黒色鈹物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は細身で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
7	須恵器 碗 床上5cm	—・6.8・— 1/4 粗砂粒・雲母 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち開く。高台は断面逆台形を呈し、端部に丸みをもち直立する。底部は回転糸切り。
8	須恵器 碗 床上10cm	—・6.8・— 1/3 粗砂粒・円礫 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。高台は断面四角形を呈し、底部は撫で。
9	須恵器 碗 床下	—・6.6・— 2/3 粗砂粒・角礫 還元焰燻焼成 黒褐色	ロクロ右回転。体部は極ゆるい丸みをもちやや開く。高台は断面逆台形を呈し、直立する。底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
10	土師器 甕 カマド	13.2・—・— 小片 細砂粒 還元焰 褐色	口縁部は外反し、口唇端部には1条の凹線がまわる。口縁部は横撫で、胴部はへら削り。
11	土師器 甕 カマド	16.2・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 褐色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部はややふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部は横方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫でが施されている。
12	土師器 甕 床下	19.2・—・— 1/8 粗砂粒・石英 普通 褐色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部はややふくらむ。外面の口縁部は横撫で、胴部は横方向へのへら削り。内面の胴部はへら撫でが施されている。
13	須恵器 羽釜 床下4cm	23.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 還元焰 灰色	口縁部は僅かに内傾し、口唇端部は丸みをもち内傾する。胴部はふくらみをもち、鏝は断面三角形を呈す。
14	須恵器 羽釜 床直 覆土	24.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 還元焰 灰色	口縁部は僅かに内傾し、口唇端部は丸みをもち内傾する。胴部はふくらみをもち、鏝は断面三角形を呈す。
No	種類	観察表掲載頁	
15	鉄製品 釘	892	

S J 153

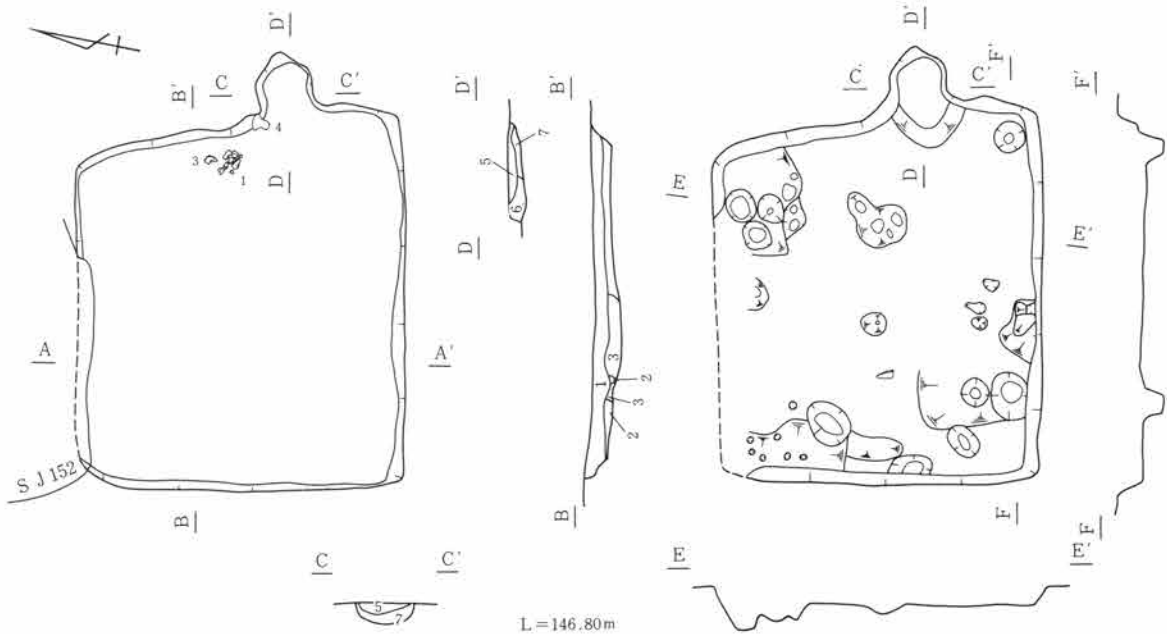
171

本住居跡は、127～129 I—17～19グリッドに位置し、S J 152と北壁の一部分が重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、北壁の短い台形状を呈す。規模は、東西4.03m、南北3.53m、面積13.54㎡を測る。主軸方向は、N-70.5°-Eを指す。

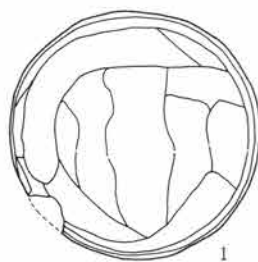
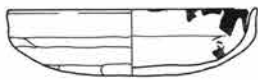
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、13～19cmを測り、平均は16cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は、地山をそのまま利用したと思われる。規模は、全長104cm、幅90cmを測り、燃烧部の大半は、壁外に56cmのびる。

掘り方は、床面より2～10cmほど掘り込まれており、小ピット状の凹凸が若干みられる。床下の施設は、ピットが11基検出された。

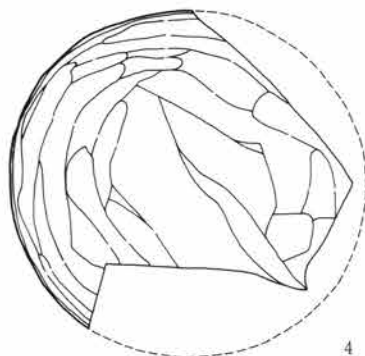
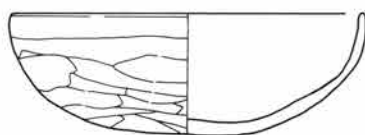
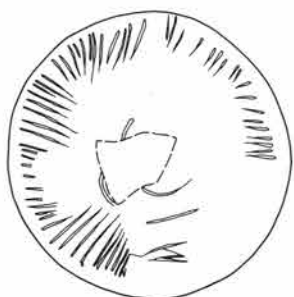


- 1 暗茶褐色土 多量のC軽石 褐色粒 カマド
- 2 暗茶褐色土 5 暗茶褐色土 若干のC軽石 焼土ブロック
- 3 茶褐色土 ロームブロック 6 黒褐色土 C軽石 灰
- 4 暗褐色土 若干のC軽石 7 黒褐色土 焼土 灰
- 8 褐色土 砂 礫



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上12cm	13.0・13.0・3.5 完形 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部はほぼ直立し、体部はゆるい丸みをもち大きく開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は一定方向へのヘラ削り。内面の口縁部には煤の付着がみられる。

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 覆土	13.6・11.6・— 1/8 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的で僅かに開き、底部はゆるい丸みをもつ。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。底部はへら削り。
3	土師器 皿 床上 5 cm 覆土	14.8・13.7・3.2 完形 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は直線的に直立し、底部はほぼ平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、底部はへら削り。内面には放射状暗文が施されている。
4	土師器 碗 床上 8 cm	18.7・13.0・6.5 3/4 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、体部から底部にかけては丸みをもつ。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、体部は左方向へのへら削り。底部は不定方向へのへら削りが施されている。
5	須恵器 蓋 覆土	14.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で口唇端部は屈折する。

S J 154

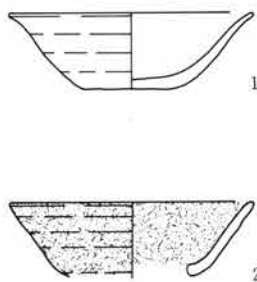
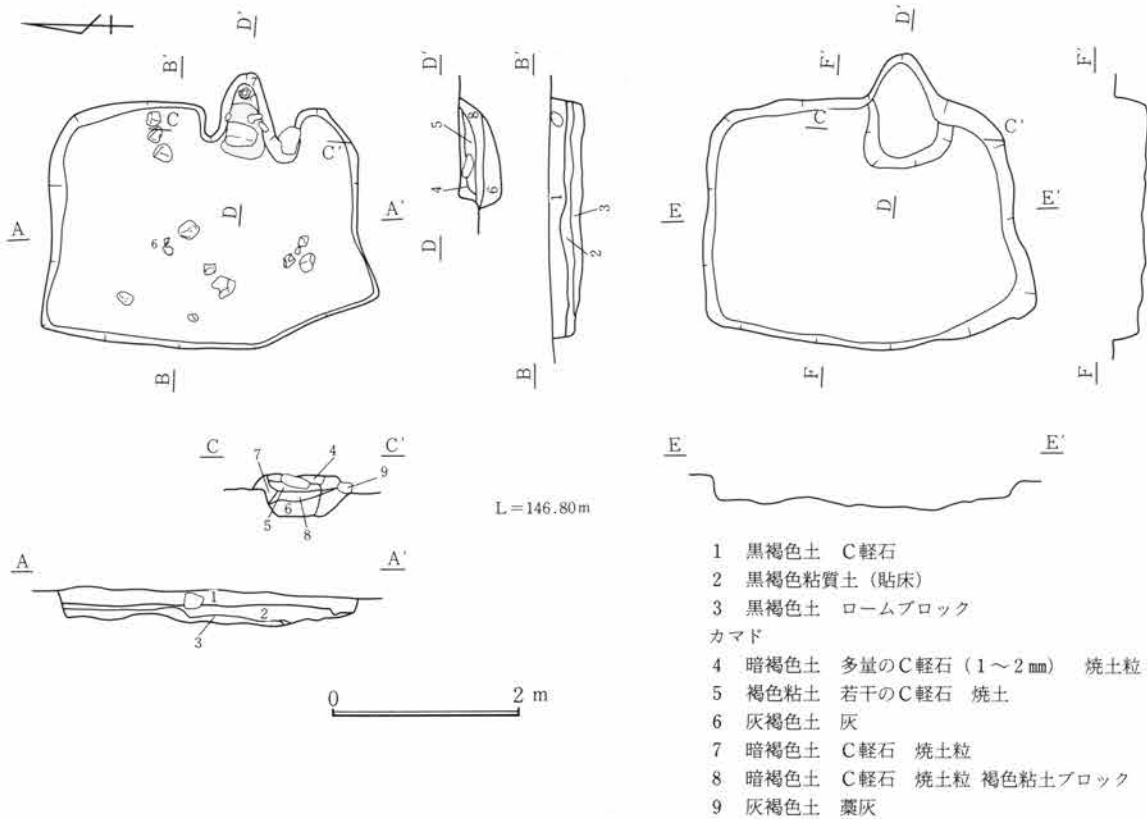
173

本住居跡は、123～124 I-18～20グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、西南コーナーが欠け、南壁が途中で折れ曲がるが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.58m、南北3.55m、面積7.93m²を測る。主軸方向は、N-91°-Eを指す。

床面は、粘性のある黒褐色土を使用して貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、6～15cmを測り、平均は13cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

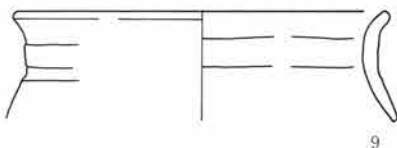
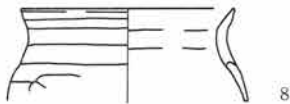
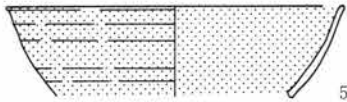
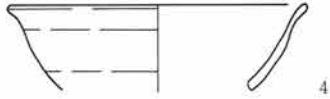
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも良好な状態で残っている。規模は、全長93cm、幅118cmを測り、焚口部の一部は壁外に36cmのびる。天井部には、扁平な自然石を、また、右袖部にも角状の自然石を使用して構築している。

掘り方は、床面より16～23cmほど掘り込まれており、埋土は、ロームブロックを含む黒褐色土である。床下の施設は、検出されなかった。

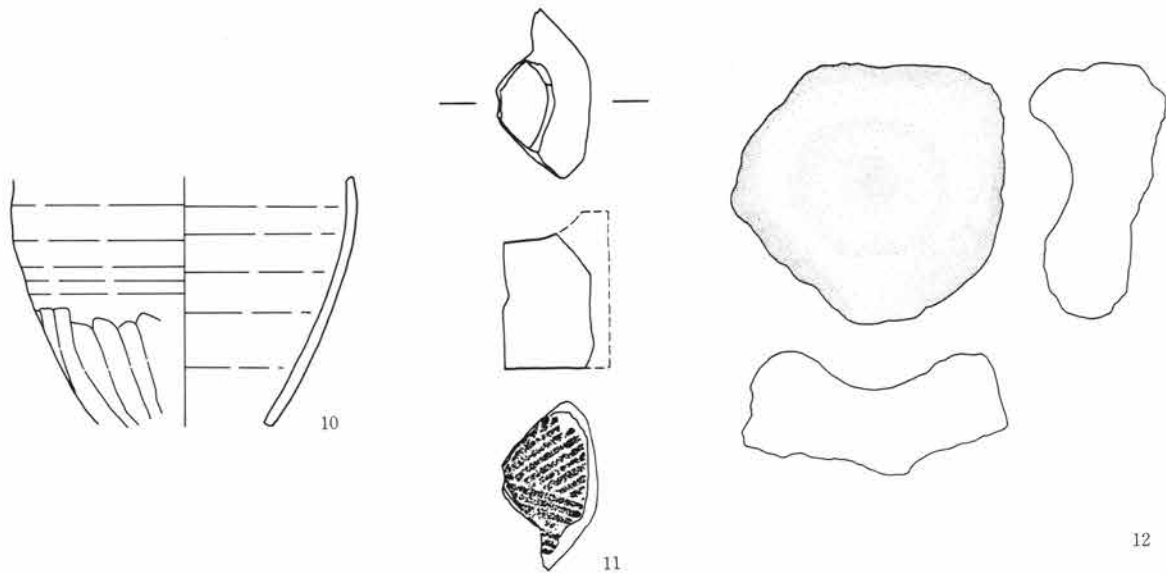


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	12.8・5.0・4.0、1/5 細砂粒 還元焰軟質、灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は極ゆるい丸み をもち大きく開く。底部はヘラ撫で。
2	須恵器 坏 覆土	12.8・ - ・ -、小片 粗砂粒、還元焰焼成 暗灰色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 坏 覆土	—・5.0・— 1/10 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	体部は大きく開き、底部は回転糸切り後撫で。
4	須恵器 碗 覆土	15.8・—・— 1/10 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	口縁部は外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。
5	灰釉陶器 碗 覆土	17.8・—・— 小片 緻密・黒色鉱物粒 還元焰焼きしめ 灰白色	口唇部は僅かに外反。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰白色。
6	須恵器 碗 床上6cm	—・6.4・— 1/8 細砂粒・雲母 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は丸みをもつ断面三角形を呈し、底部は回転糸切り。
7	須恵器 碗 カマド	13.4・6.6・4.8 2/5 粗砂粒・亜角礫 酸化焰 黒褐色	ロクロ右回転。口唇部は外反し、体部はゆるい丸みを呈す。高台は断面四角形を呈し直立する。底部は静止糸切り。
8	土師器 甕 覆土	11.2・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、口唇部はやや立つ。口縁部は横撫で。胴部はヘラ削り。
9	土師器 甕 覆土	19.8・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉱物粒 普通 明褐色	器壁は厚く、口縁部は「コ」の字状口縁のくずれた形態を示したもので横撫で。胴部は左方向へのヘラ削り。
10	須恵器 羽釜 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 酸化焰 にぶい橙色	胴部は下位で縦方向へのヘラ削りが施されている。
No	種類	観察表掲載頁	
11	石製品 石臼	841	
12	用途不明石製品	886	



S J 155

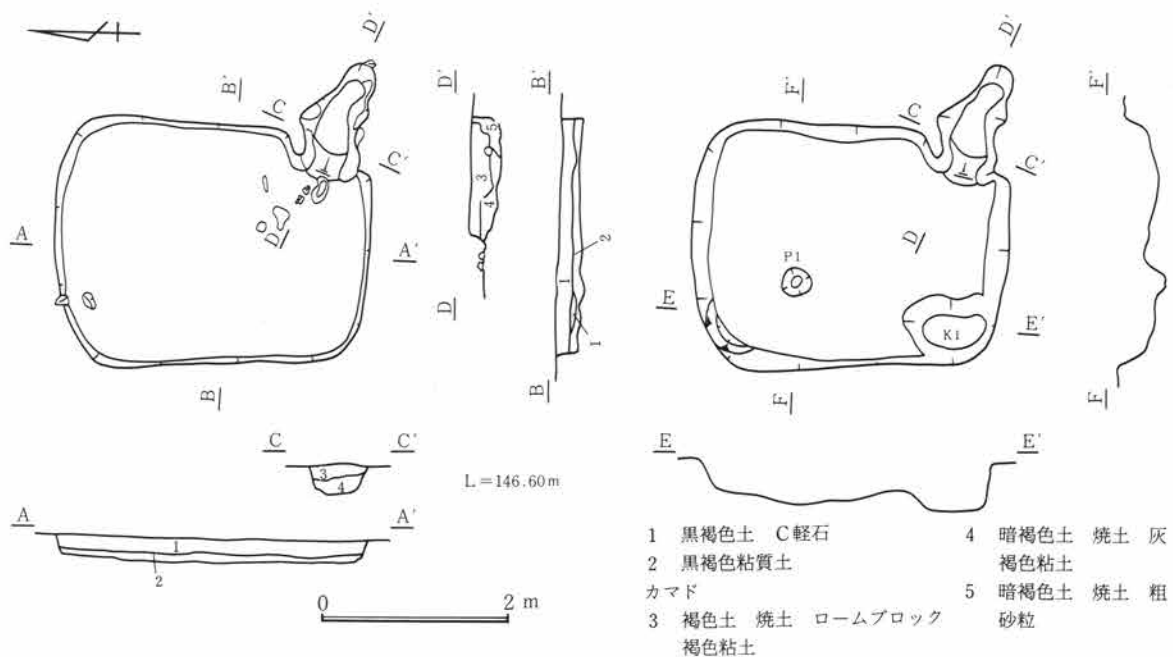
174

本住居跡は、124～125グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、北壁がややふくらみ、南壁が北壁よりやや短いがほぼ隅丸長方形を呈す。規模は、東西2.64m、南北3.34m、面積8.25m²を測る。主軸方向は、N-93°-Eを呈す。

床面は、粘性のある黒褐色土を使って貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、12～15cmを測り、平均は14cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は、割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長132cm、幅135cmを測り、焚口部の大半と煙道部は壁外に102cmのびる。左袖部は、地山をそのまま掘り残して使用している。

掘り方は、床面より5～10cmほど掘り込まれている。床下の施設は、床下土壇・ピットが各1基ずつ検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径95×65cm、深度18cm。P₁は円形で径30～32cm、深度30cmを測る。



- | | |
|------------------|-------------|
| 1 黒褐色土 C軽石 | 4 暗褐色土 焼土 灰 |
| 2 黒褐色粘質土 | 褐色粘土 |
| カマド | 5 暗褐色土 焼土 粗 |
| 3 褐色土 焼土 ロームブロック | 砂粒 |
| 褐色粘土 | |

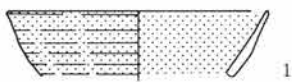
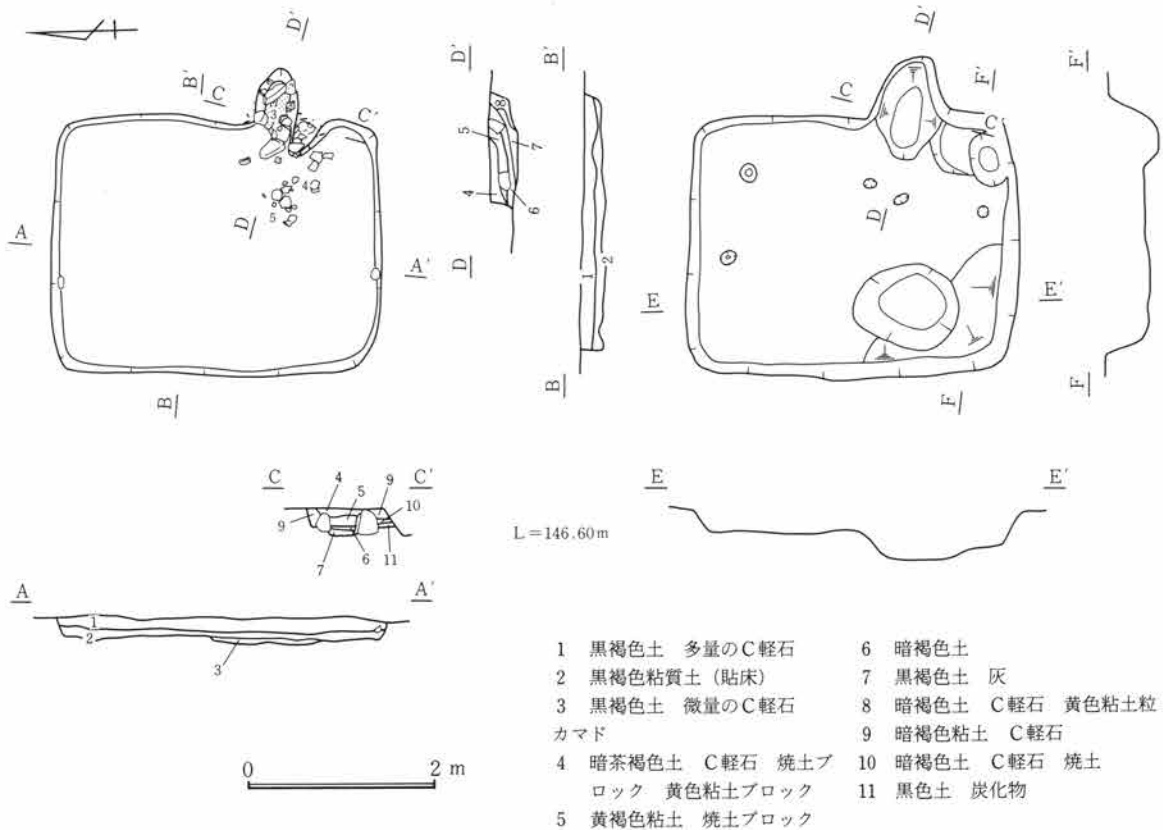
S J 156

本住居跡は、123～124 I - 12～13グリッドに位置し、単独に占地する。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.72m、南北3.53m、面積9.25m²を測る。主軸方向は、N-87.5°-Eを指す。

床面は、粘性のある黒褐色土を使用して貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、16～24cmを測り、平均は21cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央やや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は割合いと良好な状態で残っている。規模は、全長99cm、幅114cmを測り、燃焼部は壁外に32cmのびる。天井部・袖部には、多くの自然石を使用して構築されている。

掘り方は、床面より2～18cmほど掘り込まれ、小ピット状の凹凸が多少みられる。床下の施設は、床下土壇が2基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径57×35cm、深度22cm。K₂は楕円形で径112×87cm、深度35cmを測る。K₁は、貯蔵穴の可能性も考えられる。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	灰釉陶器 碗 覆土	13.8・一・一、小片 緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	口縁部は僅かに外反。施釉方法は漬け掛け、釉調は 透明な緑灰色を呈す。

第4節 歴史時代



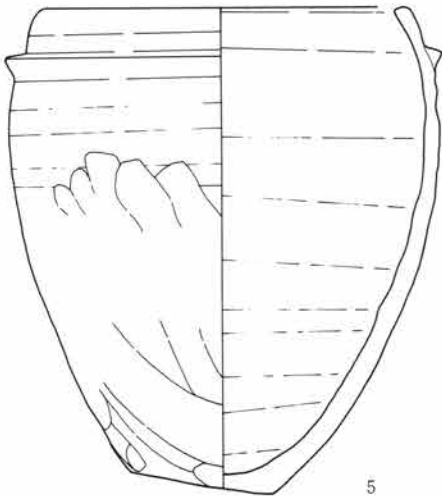
2



3

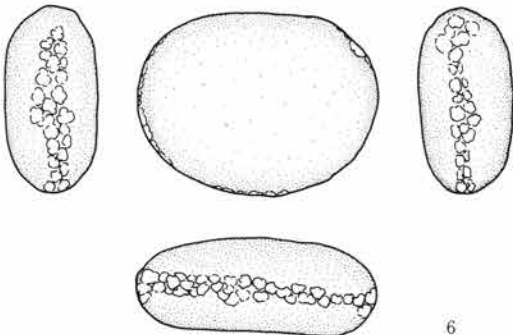


4

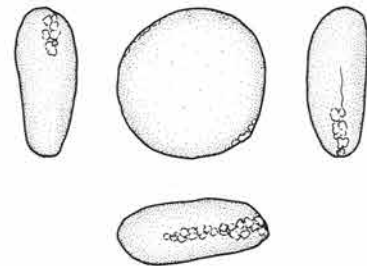


5

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴		
2	須恵器 碗 カマド	11.8・7.2・4.7 1/6 粗砂粒・褐色鉱物粒 酸化焰 橙色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては、ゆるい丸みをもち開く。高台は断面逆台形を呈し、やや開く。底部は撫で。		
3	土師器 甕 カマド底部より6cm	22.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁端部は平端で外傾する。口縁部は横撫で。		
4	土師器 甕 床上18cm	—・6.0・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	外面の胴部は縦方向へのへら削り。内面は刷毛目。		
5	須恵器 羽釜 床直 底部より4cm	19.5・7.7・25.6 3/4 粗砂粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内湾し、口唇端部は平坦でやや内傾する。胴部は上位で僅かにふくらみ、鏝は断面三角形を呈す。胴部中位以下は縦方向へのへら削り。底部は不定方向へのへら削りが施されている。		
No	種類 器形	出土位置	計測値	石 材	特 徴
6	石製品 敲石	床直	12.7・9.5・ 5.0cm920g	石英閃緑岩	側面に敲打痕がみられる。
7	石製品 敲石	床直	7.8・7.8・ 3.1cm260g	輝石安山岩 (粗粒)	側面に敲打痕がみられる。



6



7

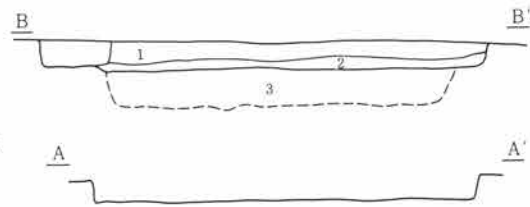
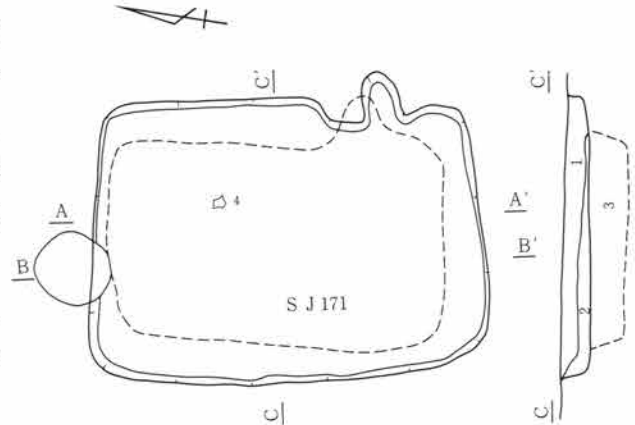
S J 157

176

本住居跡は、125～127 I—08～10グリッドに位置し、北壁で土壇とそして内側でS J 171と重複するが、新旧関係は、土壇より本遺構のほうが古く、S J 171より新しい。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.00m、南北4.25m、面積11.85㎡を測る。主軸方向は、N—80°—Eを指す。

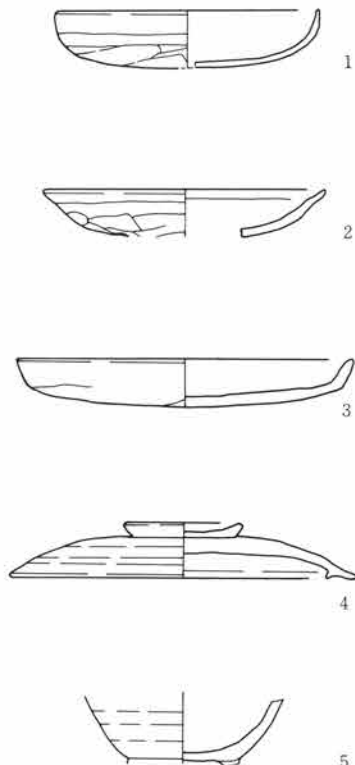
床面は、地山をそのまま踏み固めている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、16～30cmを測り、平均は24cmである。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落している。規模は、全長65cm、幅70cmを測り、袖部は地山を掘り残し使用している。



- 1 暗茶褐色土 C軽石 ロームブロック
- 2 暗茶褐色土 C軽石 褐色砂
- 3 S J 171覆土

0 2 m



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	14.0・13.0・3.0 1/4 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	15.0・—・— 1/6 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は大きく開き、体部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部の上半は指撫で、下半はヘラ削り。
3	土師器 皿 覆土	18.0・16.8・2.5 3/4 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直線的に僅かに開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
4	須恵器 蓋 床直	18.4・6.3・2.9 1/3 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井部はゆるい丸みをもち、内面に身受けのカエリをもつ。天井部は2分の1程度まで回転ヘラ削り。
5	須恵器 碗 覆土	—・6.0・— 1/8 細砂粒・雲母 還元焰軟質 灰黄色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもち立ち上がる。高台は剥離。底部は回転糸切り。

S J 158

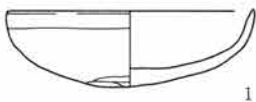
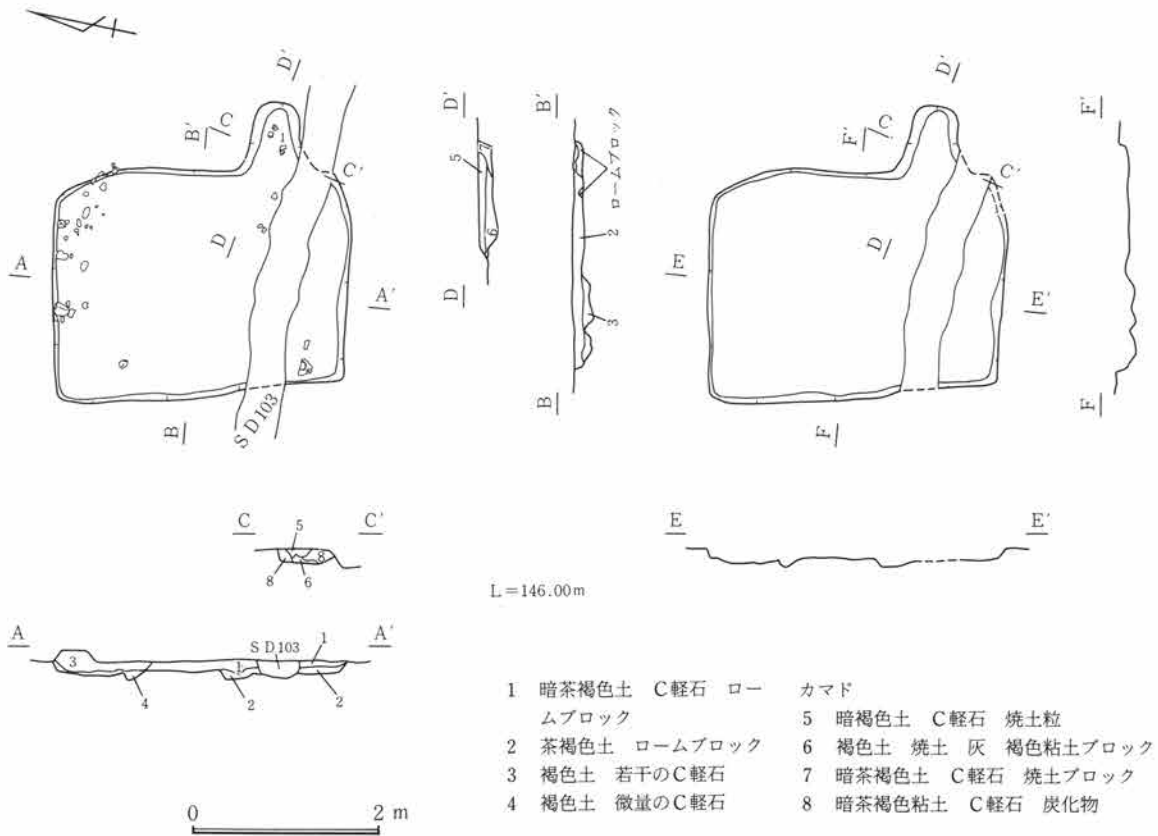
177

本住居跡は、121~123 I-04~05グリッドに位置し、S D103と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.46m、南北3.16m、面積7.58m²を測る。主軸方向は、N-76.5°-Eを指す。

床面は、部分的に貼床が施され、他は地山をそのまま踏み固めている。壁の状態は、確認面から床面までが3~5cmと浅いため不明である。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

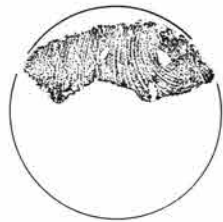
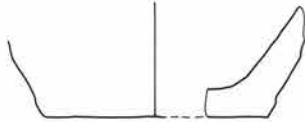
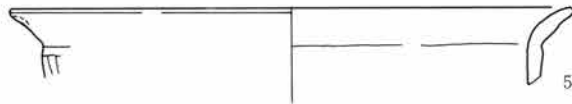
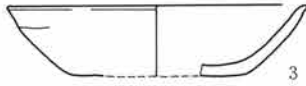
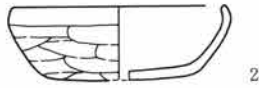
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部は欠落している。規模は、全長75cm、幅87cmを測り、燃烧部の大部分は壁外に67cmのびる。

掘り方は、全面的に掘られておらず、部分的に土坑状に掘られている。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 覆土	13.0・11.4・4.0 3/4 細砂粒、普通 橙色	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削りで周辺部は指撫でが施されている。

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 カマド	11.3・8.0・3.9 1/4 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は4～5段の左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	15.8・9.4・3.7 1/10 細砂粒、軟質 橙色	体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
4	須恵器 蓋 覆土	13.0・—・—、小片 細砂粒、還元焰 灰色	天井部は直線的で、内面の口唇部には1条の凹線がまわる。

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
5	土師器 甕 覆土	29.6・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、横撫で。胴部はヘラ削り。
6	軟質陶器 甕 覆土	—・12.0・— 底部約1/4 粗砂粒 還元焰 黄褐色	体部はヘラ削り。底部は回転糸切り。
No.	種類		観察表掲載頁
7	土製品 瓦		776

S J 159

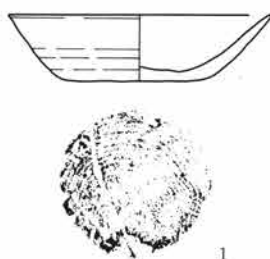
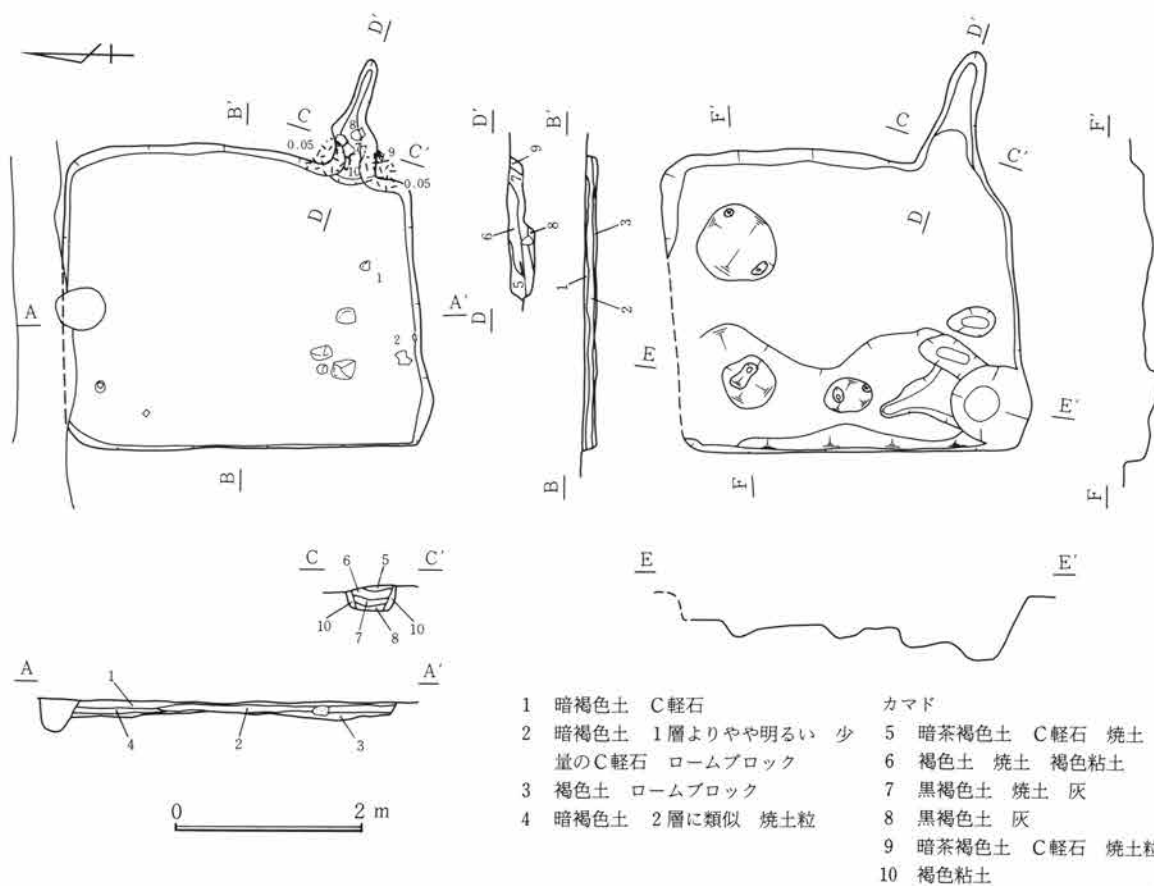
178

本住居跡は、124~126 I-01~03グリッドに位置し、S D103と北壁の西半分で重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、やや歪みがみられるが長方形を呈す。規模は、東西3.20m、南北3.78m、面積11.82m²を測る。主軸方向は、N-91°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、8~19cmを測り、平均は13cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は、確認面から床面までが浅いわりには、良好で天井部が崩落している程度であった。規模は、全長140cm、幅112cmを測り、カマドは全て壁外に位置する。天井部には、補強のために瓦を使用して両袖部は、褐色粘土で構築されている。

掘り方は、床面より2cm前後で、掘り方面は、小ピット状の凹凸が激しい。床下の施設は、床下土壇が6基検出され、西半分によくみられる。

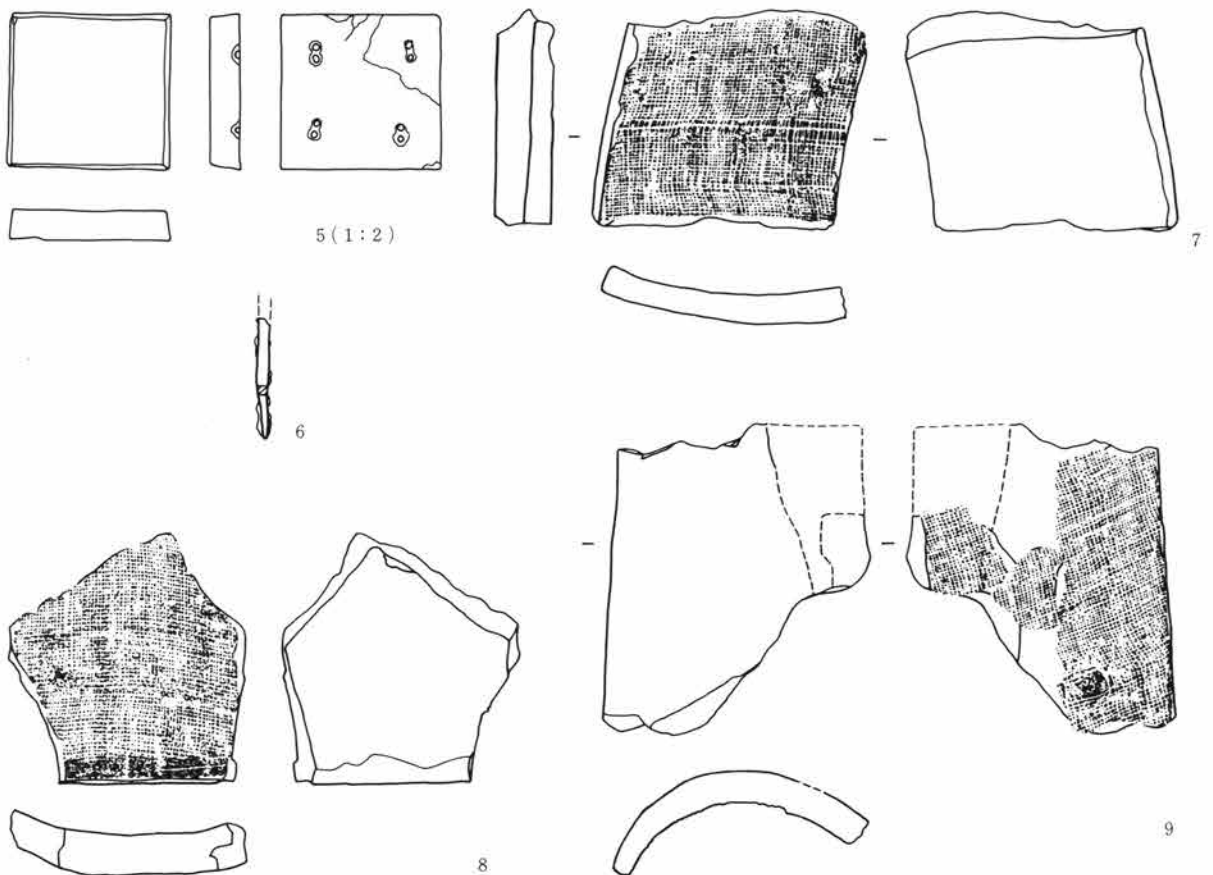


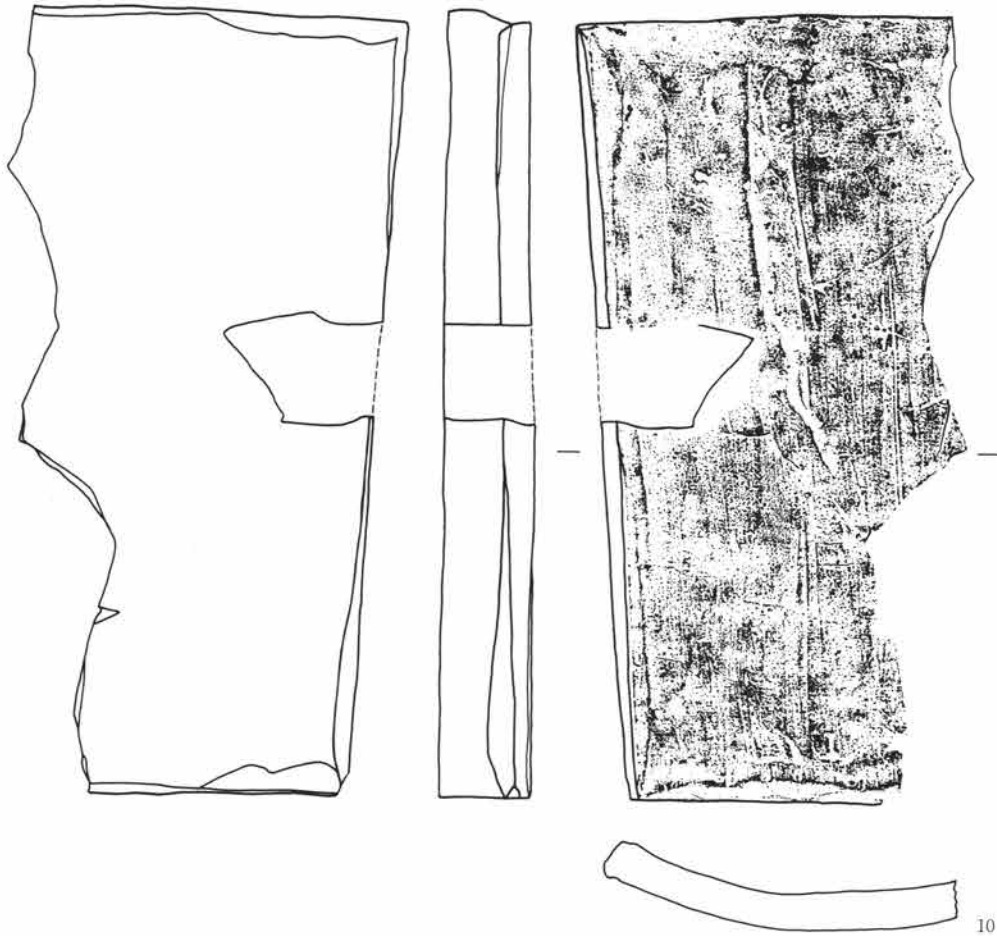
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床直	14.0・8.0・3.5 5/6 細砂粒・雲母・褐色鉍 物粒、酸化焰軟質 淡赤橙色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物

	No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
	2	須恵器 坏 床上9cm	12.8・—・—、1/8 細砂粒、酸化焰 にぶい黄橙色	体部はゆるい丸みをもち開き、口縁部は僅かに外反する。
	3	須恵器 碗 覆土	—・6.0・—、小片 細砂粒・雲母、還元焰 燻焼成、灰色	ロクロ回転方向不明。高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転糸切り。
	4	灰釉陶器 碗 覆土	—・6.6・—、1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転ヘラ撫で。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な黄灰色を呈す。
No	種類 出土位置	計測値・石材 (長さ・幅・厚さ)	特 徴	
5	石製巡方 覆土	4.3・4.0・0.7 蛇紡岩(かんらん岩?)	四隅にかがり孔を持つ。	

No	種 類	観察表掲載頁	8	土製品 瓦	776
6	棒状不明鉄製品	893	9	土製品 瓦	776
7	土製品 瓦	776	10	土製品 瓦	776





S J 160

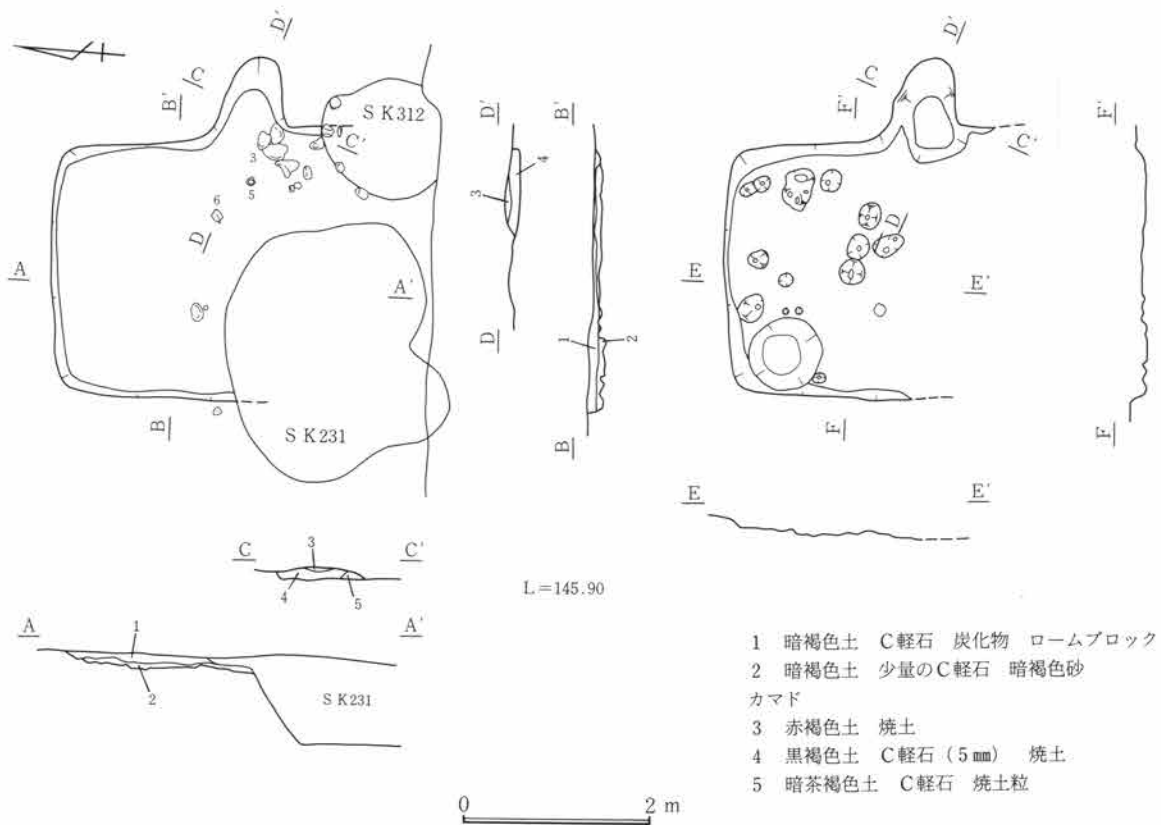
180

本住居跡は、122～124 I—00～02グリッドに位置し、S K 231・S K 232と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構は、南壁側をS K 231・S K 232によって切られているため全貌は、不明であるが、平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.74mを測る。主軸方向は、N—81°—Eを指す。

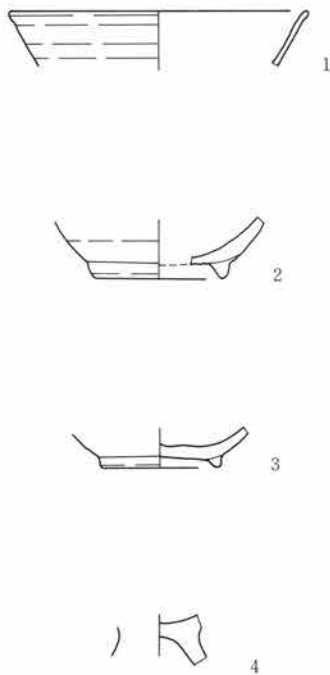
床面は、暗褐色粘土を使用して貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁に位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は欠落している不良な状態である。規模は、全長85cm、幅75cmを測り、袖部の一部は壁内に位置したと推測される。また、カマドの前部には、袖部に使用されたと推測される自然石が多く散乱している。

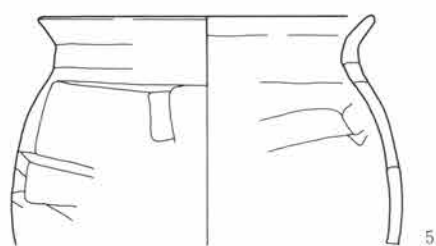
掘り方は、床面より8～16cmほど掘り込まれており、掘り方面は、小ピット状の凹凸が激しい。床下の施設は、多数の小ピットと西北コーナーに楕円形で径80×75cm、深度26cmを測る床下土壇が1基検出された。



- 1 暗褐色土 C軽石 炭化物 ロームブロック
- 2 暗褐色土 少量のC軽石 暗褐色砂
カマド
- 3 赤褐色土 焼土
- 4 黒褐色土 C軽石(5mm) 焼土
- 5 暗茶褐色土 C軽石 焼土粒



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 カマド底部密着	15.8・—・— 小片 細砂粒・白色鉱物粒 還元焰 灰色	口唇部で僅かに外反する。
2	須恵器 碗 覆土	—・7.4・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	体部は丸みもち開く。高台は断面三角形を呈し直立する。
3	須恵器 碗 カマド内 床上4cm	—・6.6・— 1/4 細砂粒・雲母 酸化焰軟質 にぶい黄橙色	ロクロ右回転。体部は丸みもち開く。高台は断面逆台形を呈し直立する。
4	土師器 台付壺 覆土	—・4.2・— 小片 細砂粒・石英 普通 にぶい赤褐色	台付壺の底部。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
5	土師器 甕 カマド内 床上4cm	17.8・—・— 1/10 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は「コ」の字状のくずれた形態を示したもので、胴部にゆるいふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
6	土師器 甕 床直	18.8・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は「コ」の字状のくずれた形態を示したもので、胴部にゆるいふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
No	種類	観察表掲載頁	
7	用途不明鉄製品	895	
8	棒状不明鉄製品	894	

S J 161

181

本住居跡は、116～117 I—06～07グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、西壁の短かい台形状を呈す。規模は、東西2.62m、南北3.17m、面積7.79㎡、各壁の長さは、西壁2.50m、南壁2.22m、北壁2.57mを測る。主軸方向は、N—82°—Eを指す。

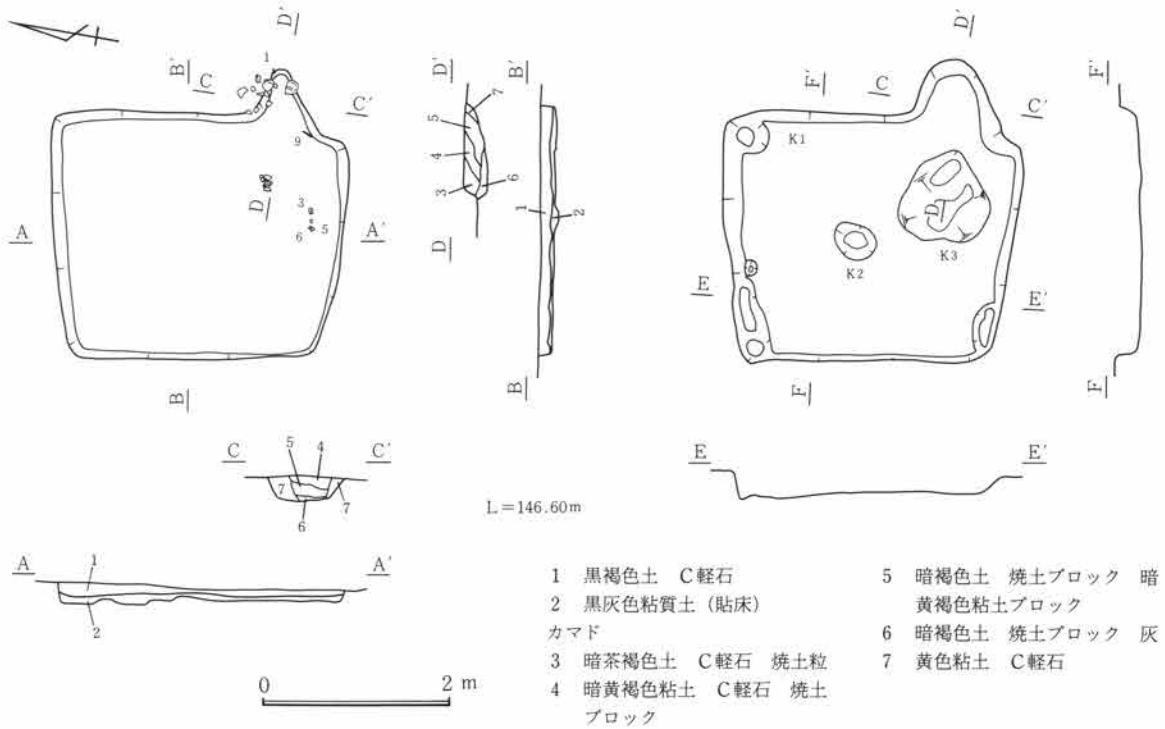
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、9～20cmを測り、平均は14cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部も欠落している。規模は、全長81cm、幅88cmを測り、カマド全体が壁外に位置する。燃烧部の奥には、自然石を2コ埋め込み支脚として使用している。袖部は、黄色粘土を使用して構築されている。

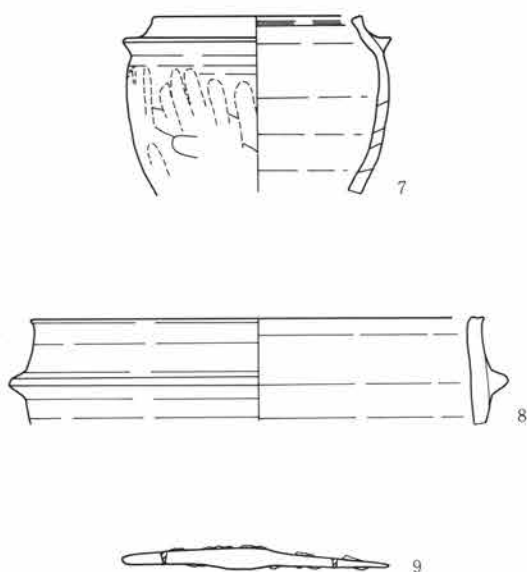
掘り方は、床面より5～12cmほど掘り込まれ、掘り方の面には、小ピット状の凹凸が若干みられる。床下の施設は、北壁と南壁の西よりに壁溝状のものと床下土壇が3基検出された。床下土壇の形態・規模は、K₁がほぼ円形で径35～40cm、深度29cm。K₂は楕円形で径46×38cm、深度28cm。K₃は楕円形で98×93cm、深度12cmを測る。

本遺構は、発掘調査中に出土遺物の一部が盗難のため紛失した。6の緑釉陶器片は、本来復元完形が可能であったが体部片しか残っていない。

第3章 検出遺構・遺物

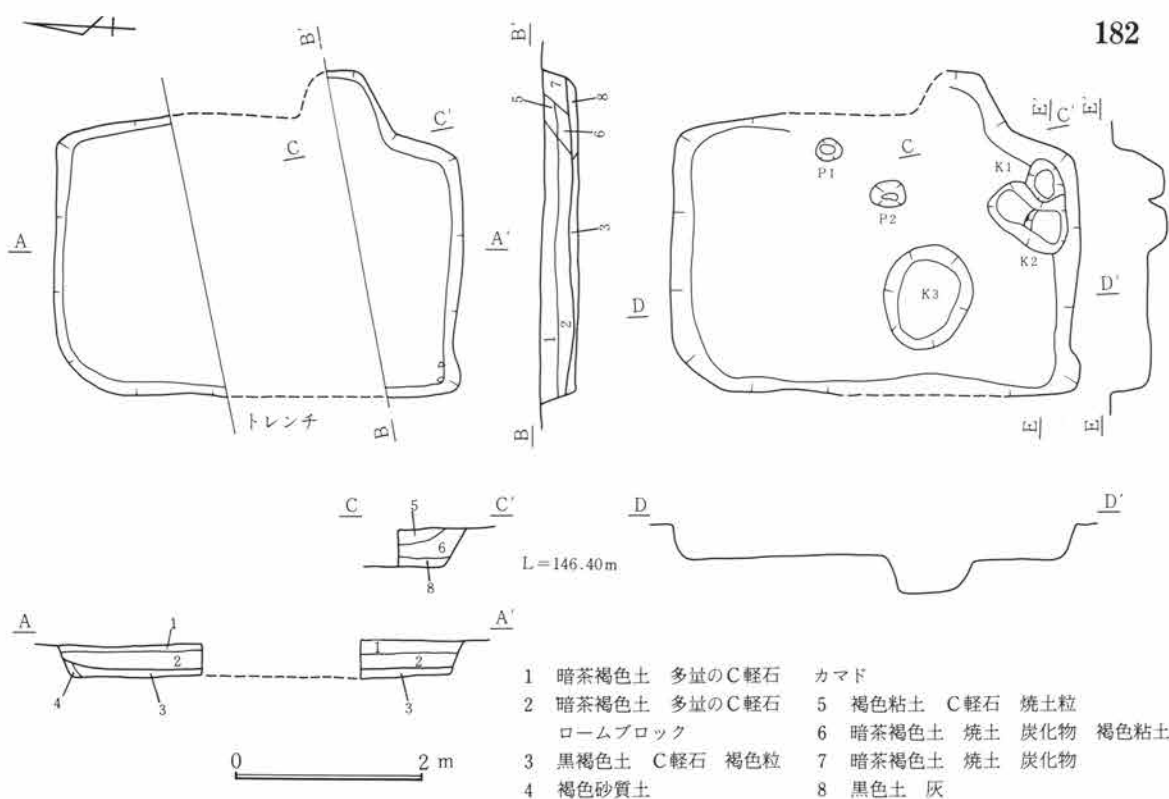


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 カマド底部13cm 覆土	12.8・6.8・5.7 1/2 細砂粒 酸化焰 にぶい黄橙色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は立ち上がり に丸みをもち、高台は断面逆台形を呈し、やや 開く。底部は高台貼付時の回転撫で。
2	須恵器 碗 覆土	—・6.2—、小片 細砂粒・雲母 還元焰 灰色	体部は直線的に開く。高台は断面四角形を呈し直 立する。底部は回転糸切り。周辺部は高台貼付に よる撫で。
3	須恵器 碗 床直	—・7.0—、小片 細砂粒・亜角礫 還元焰軟質 灰黄色	体部は丸みをもち開く。高台は断面逆台形を呈し、 底部は回転糸切り。
4	須恵器 碗 覆土	14.8・—・—、小片 粗砂粒 還元焰 灰色	口唇部は僅かに外反し、体部は直線的に開く。
5	須恵器 碗 床直	—・9.8—、小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	体部は直線的でやや開く。高台は断面三角形を呈 し直立する。
6	緑釉陶器 碗 床直	—・—・— 小片 緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	体部の一部しか残存しないため詳細は不明。釉調 は透明感のある淡緑色を呈す。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 羽釜 カマド内底 部より20、 10、23、 15cm	11.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	口縁部は大きく内傾し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部は鈔の直立であり、鈔は断面三角形を呈しやや上方を向く。外面の胴部は縦方向へのヘラ削り後、指頭による撫でが施されている。
8	須恵器 羽釜 覆土	22.6・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物 粒 酸化焰 にぶい橙色	口縁部はほぼ直立し、口唇端部は平坦で外面が凸帯状に引き出されている。鈔は断面台形を呈す。
No.	種類	観察表掲載頁	
9	鉄製品 刀子	891	

SJ162



本住居跡は、124～125 I -16～18グリッドに位置し、単独で占地する。本遺構は、ほぼ中央を遺跡範囲確定のためトレンチによって壊され全貌は不明ではあるが、平面形態は、隅丸長方形に近い形態を呈す。規模は、東西2.95m、南北4.32m、面積12.46㎡を測る。主軸方向は、N-91.5°-Eを指す。

床面は、黒褐色土を使用して貼床を施している。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、31～35cmを測り、平

均33cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置する。残存状態は、トレンチでカマドの北半分が失なわれているため詳細は不明であるが、天井部は崩落している。規模は、全長76cmを測る。

掘り方は、床面より8～10cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、床下土壇が3基、ピットが2基検出された。形態・規模は、 K_1 が楕円形で径46×40cm、深度25cm。 K_2 は長楕円形で径92×52cm、深度23cm。 K_3 は楕円形で113×93cm、深度26cm。 P_1 は楕円形で径28×24cm、深度29cm。 P_2 は楕円形で径38×30cm、深度13cmである。

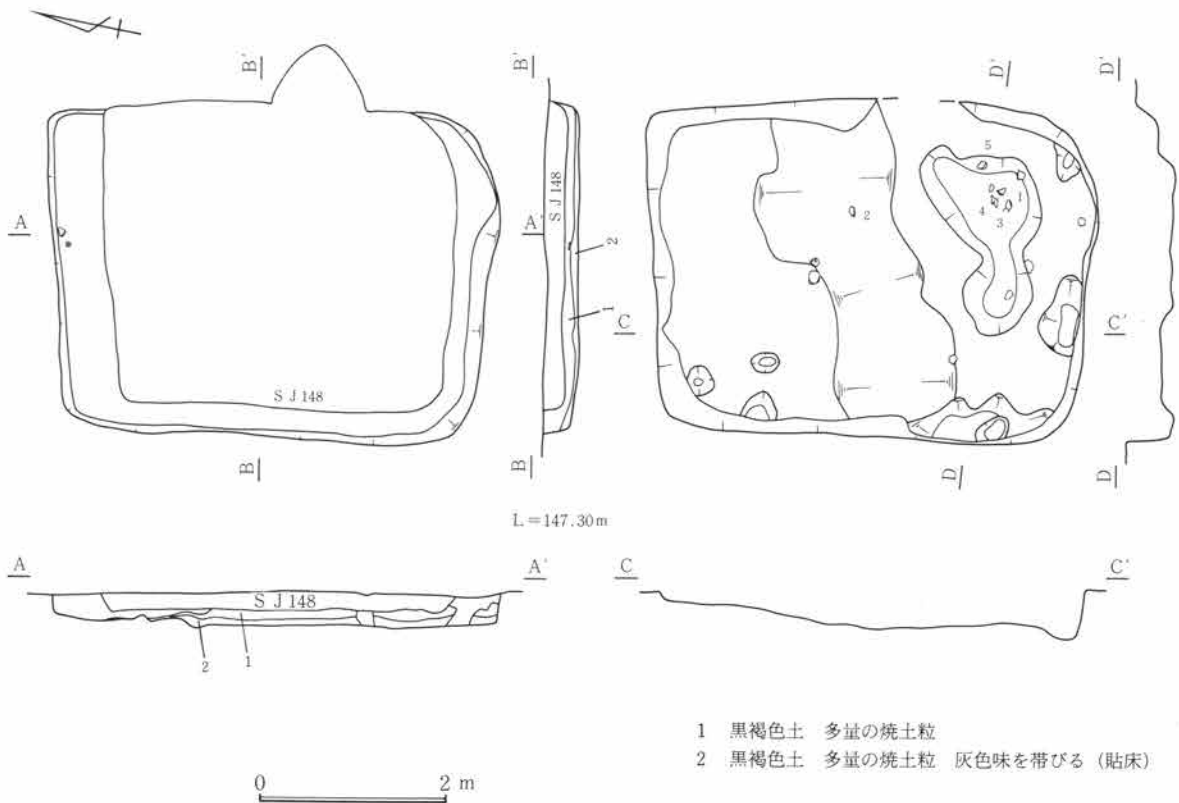
S J 163

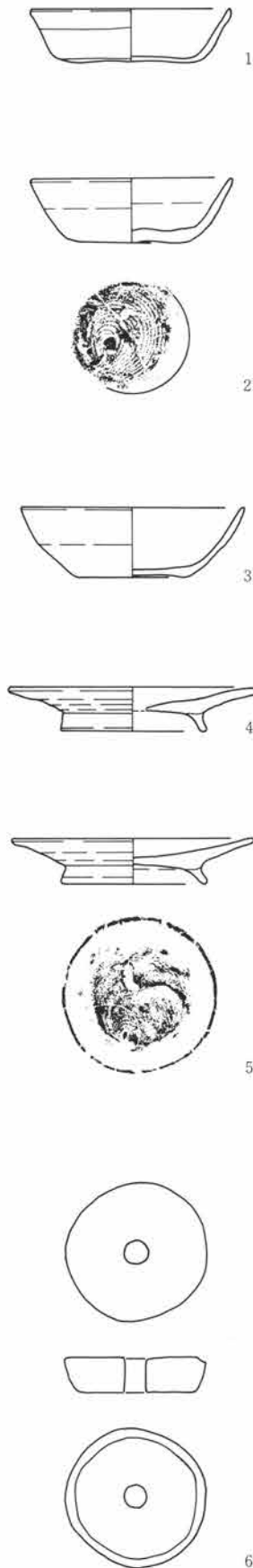
183

本住居跡は、130～132 J-04～07に位置し、S J 148と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本址とS J 148は、ほとんど重なるようにして存在するため本址の全貌は不明であるが、平面形態は、南壁の短かい台形状を呈す。規模は、東西3.45m、南北4.77mを測る。主軸方向は、 $N-105^{\circ}-E$ を指す。

床面は、貼床が施されている。壁は垂直に立ち上がり、壁高は、9～18cmを測り、平均は12cmである。残存部分からは、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。カマドは、当初より構築されていないと推測される。

掘り方は、床面より18～20cmほど掘り込まれ、中央部分には、東壁から西壁にかけて幅100cm、深度3～4cmの溝状の落ち込みがみられる。床下の施設は、瓢箪形で、径185×113cm、深度17cmの床下土壇1基と小ピットが6基検出された。





No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下土壇底部 より16cm 覆土	11.8・8.4・3.2 完形 細砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、口唇部は直立ぎみに立つ。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	須恵器 坏 床下21cm	12.0・7.2・3.8 1/4 粗砂粒・白色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては極ゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
3	須恵器 坏 床下土壇底部 より22cm 床下9cm	13.0・6.6・4.1 1/4 細砂粒 還元焰 灰色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち、底部は回転ヘラ削り。
4	須恵器 皿 床下土壇底部 より13cm 床下19cm	14.4・8.2・2.6 1/4 粗砂粒 還元焰 灰白色	体部は直線的に開く。高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転糸切りで、周辺は高台貼付による撫で。
5	須恵器 皿 床下土壇底部 より11cm 床下22cm	14.5・8.0・3.7 1/2 黒色鉱物粒 還元焰 青灰色	体部は直線的に開き、高台は端部に丸みをもち、「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
No.	種類 出土位置	計測値・石材 (直径・厚み・孔径)	特 徴
6	石製紡錘車 床直	6.0・1.5・1.0 流紋岩(砥沢?)	下面に擦痕が残る。

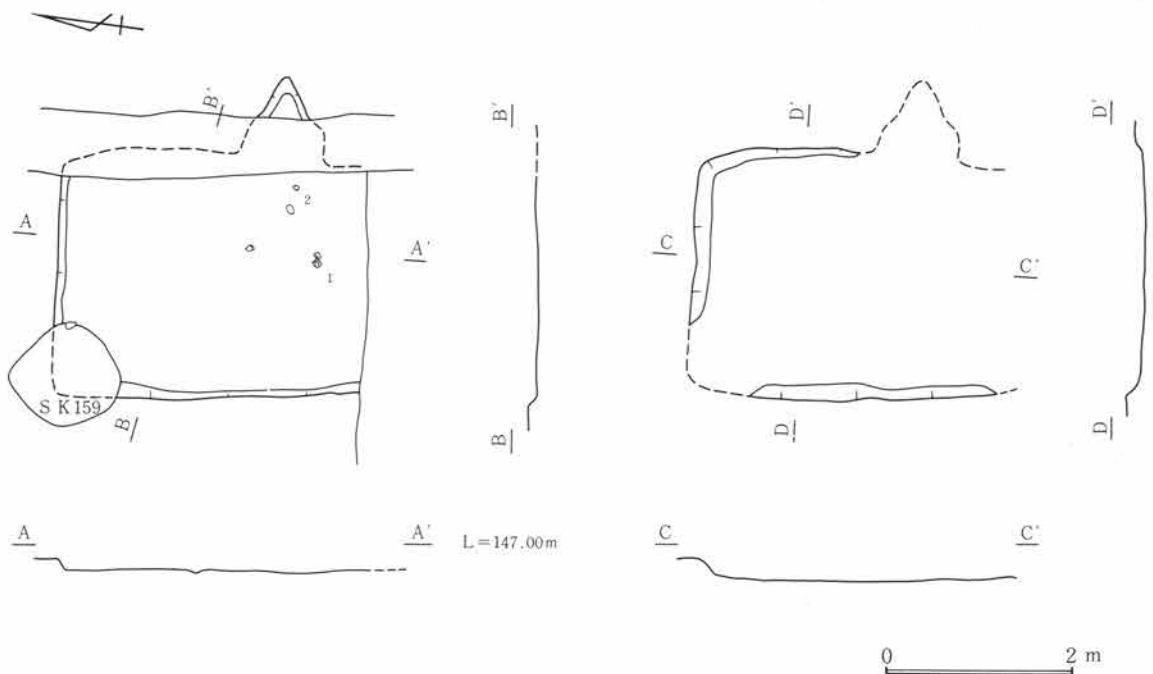
S J 164

本住居跡は、124～126 I-25～26グリッドに位置し、S K 159、S D 104・S D 105と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構は、南壁をS D 104、東壁をS D 105によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、東西2.60m前後を測り、主軸方向は、N-84.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁に位置する。残存状態は、S D 105によって切られているため、焚口部から煙道部の一部しか残存していない。

掘り方は、床面より15cm前後掘り込まれ、僅かに小ピット状の凹凸がみられる。床下の施設は、検出されなかった。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床上14cm	—・6.8・— 1/3 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗 床上19cm	12.8・—・—、小片 細砂粒・黒色鉾物粒 酸化焰 にぶい黄橙色	口縁部は外反する。
3	須恵器 碗 床直	—・7.5・— 1/8 粗砂粒・褐色鉾物粒・ 円礫、還元焰、灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形で端部は平坦で接地面は広い。底部切り離し方法不明。

S J 165

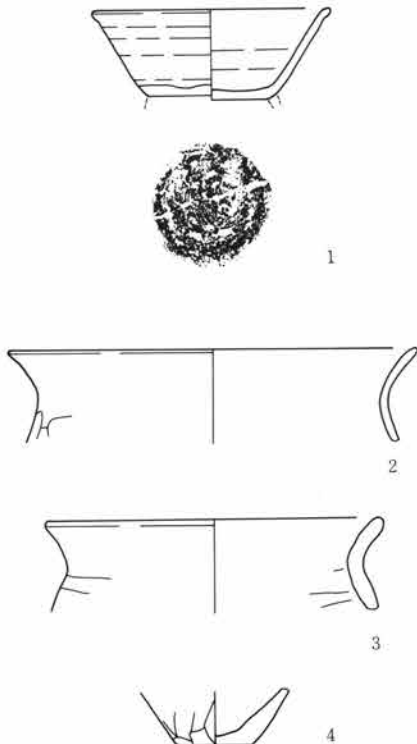
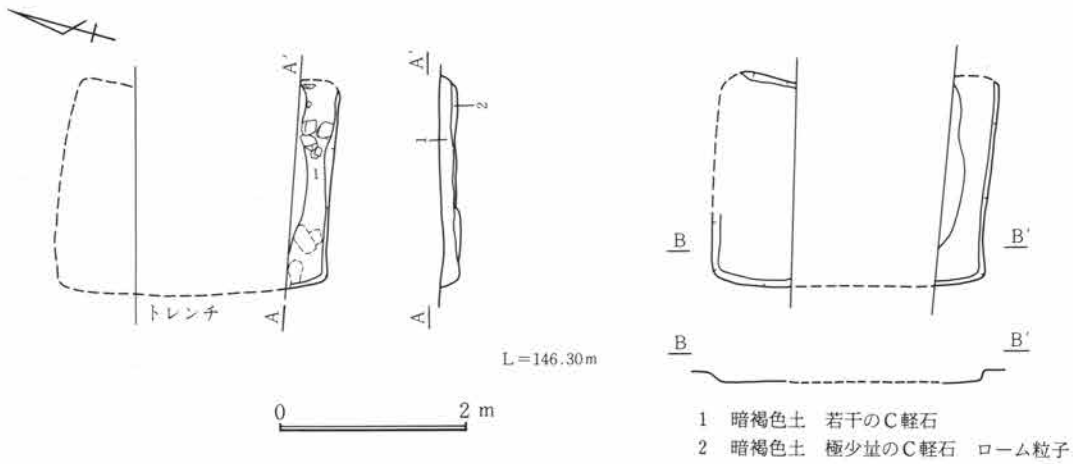
184

本住居跡は、116～118 I—09～10に位置し、単独で占地する。本遺構は、ほぼ中央を遺跡の範囲確定のためのトレンチによって壊されているため全貌は不明である。平面形態は、ほぼ長方形を呈し、規模は、東西2.30m前後、南3.00m前後を測ると推測される。

残存部分では、床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、残存していないが、カマドに使用されると推測される自然石が東南コーナー付近に散乱している。

掘り方は、床面より5～6cmほど掘り込まれている。床下の施設は、検出されなかった。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 床直	12.6・6.0・4.8 小片 粗砂粒・角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口唇部は外反し、 体部は直線的であり開かない。 高台は剥離、底部は回転糸切り。
2	土師器 甕 覆土	21.6・—・— 小片 細砂粒・雲母 にぶい橙色	口縁部は外反し、横撫で。胴部は 左方向へのヘラ削り。
3	土師器 甕 覆土	17.4・—・—、小片 細砂粒・褐色鉱物粒・ 雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、横撫で。胴部は 左方向へのヘラ削り。
4	土師器 甕 床直	—・4.0・— 小片 細砂粒・褐色鉱物粒 普通 にぶい赤褐色	胴部は縦方向ヘラ削り。

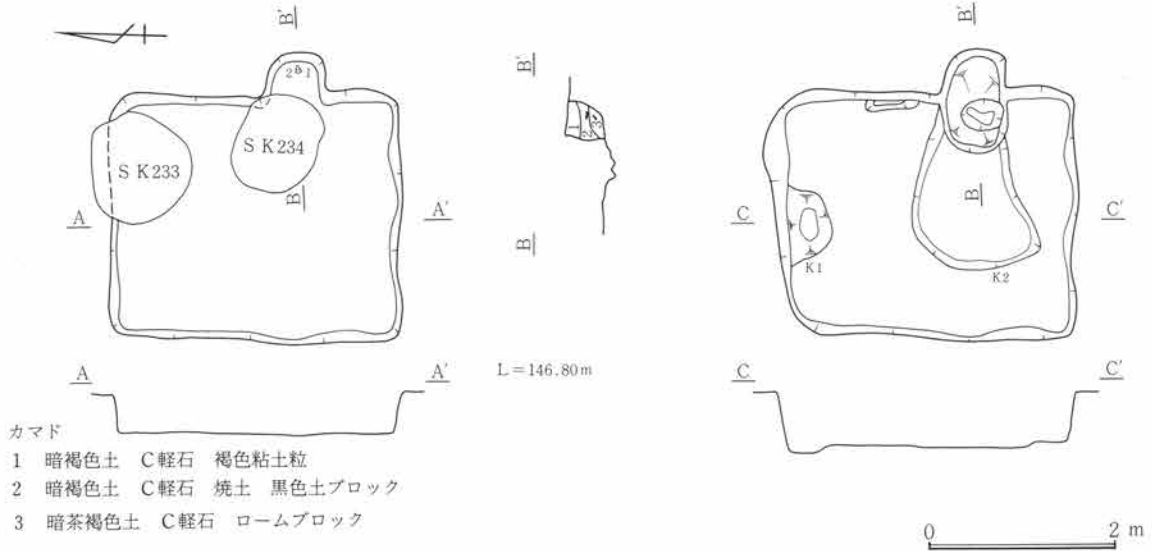
S J 167

本住居跡は、128～130 I—15～16グリッドに位置し、S K 233・S K 234と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、東壁が一直線ではなくカマドの両側でくい違いをみせるが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.67m、南北3.12m、面積8.20㎡を測る。主軸方向は、N—98°—Eを指す。

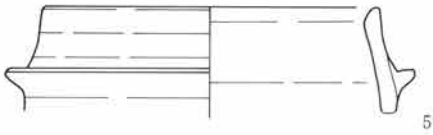
床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、40cm前後を測る。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央よりやや南よりに位置し、残存状態は、焚口部から燃焼部の前部をS K 234に切られ、天井部は崩落している。規模は、全長55cm、幅70cmを測り、燃焼部の大部分は、壁外に位置する。

掘り方は、床面より12～16cmほど掘り込まれ、掘り方は、ほぼ平坦である。床下の施設は、浅い床下土塚が2基検出された。形態・規模は、K₁が楕円形で径74×45cm、深度10cm。K₂は、不整形で径184×110cm、深度8cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 カマド底部より6cm	—・7.2・—、小片 細砂粒、酸化焰・内面 黒色処理 灰褐色・黒褐色	高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗、カマド底部より15cm	—・6.0・—、小片 細砂粒・亜角礫 還元焰、灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形を呈し、僅かに開く。底部は回転糸切り。
3	土師器 甕 (カマド)	—・7.0・—、小片 細砂粒、普通 にぶい赤褐色	外面の胴部はヘラ削り。内面はヘラ撫で。
4	須恵器 盤 床下覆土	—・19.0・—、小片 細砂粒・白色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は細身で「ハ」の字状に開く。高台の内側は回転ヘラ削り。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
5	土師器 羽釜 覆土	18.0・一・一、小片 粗砂粒・雲母 酸化焰 にぶい橙色	口縁部は内傾し、端部は丸みをもち内傾する。鋳は丸みをもちやや上方を向く。

S J 168・172

185

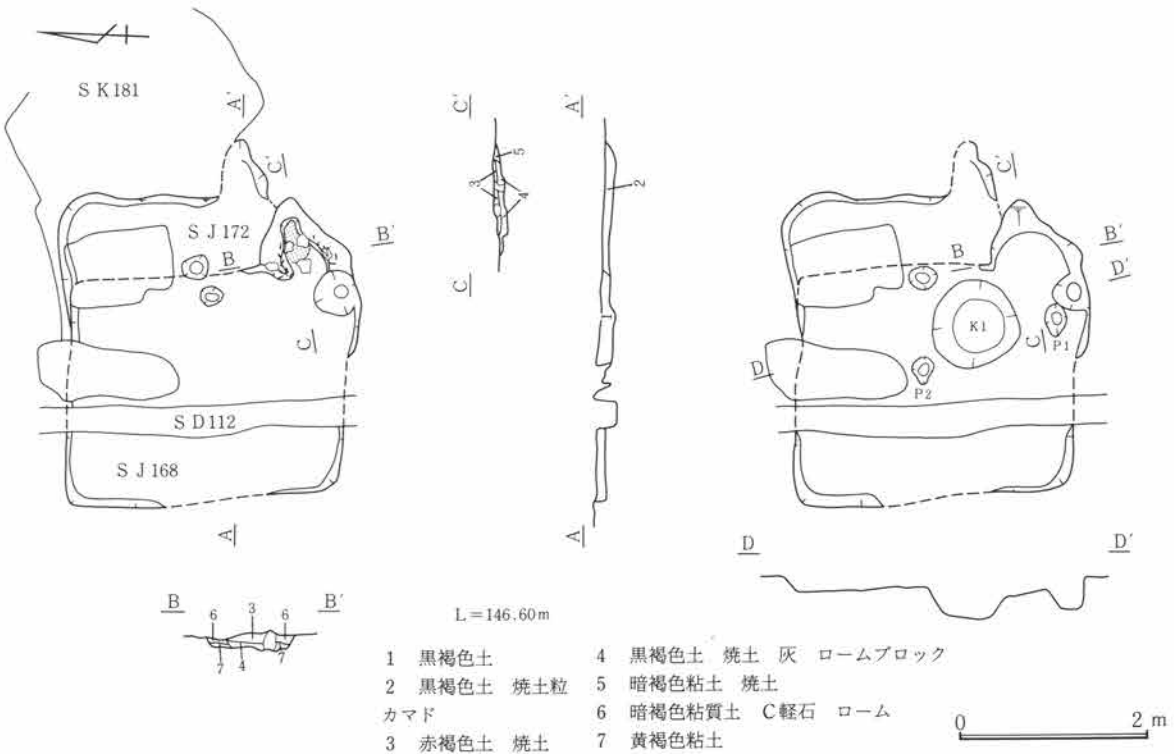
S J 168は、118～119 I-24～25グリッドに位置し、S D112、土壇、S J 172と重複するが、新旧関係は、S D112、土壇より本遺構のほうが古く、S J 172より新しい。平面形態は、やや歪んだ長方形を呈す。規模は、東西2.38m、南北3.07m、面積9.65m²を測る。主軸方向は、N-98.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が2～8cmと確認面から床面までが浅いため不明瞭である。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態はほぼ円形を呈し、規模は径45～48cm、深度13cmを測る。

カマドは、東壁の南際に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は上部が削平されているが割合いと良い状態で残っている。規模は、全長82cm、幅93cmを測り、焚口部の大部分は壁外に62cmのびる。袖部は、角柱状の加工石と暗褐色粘土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より5～10cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、若干の凹凸がみられる。床下の施設は、小ピット2基、床下土壇1基が検出された。P₁は、楕円形で、径32×22cm、深度20cm。P₂は、楕円形で、径24×20cm、深度13cm。K₁は、円形で、径91～93cm、深度37cmを測る。

S J 172は、S J 168の東側、117～118 I-24～25グリッドに位置し、大部分をS J 168によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すると推測される。規模は、計測できない。主軸方向は、ほぼN-90°-Eを指す。



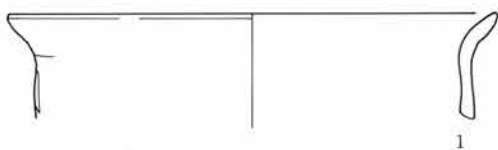
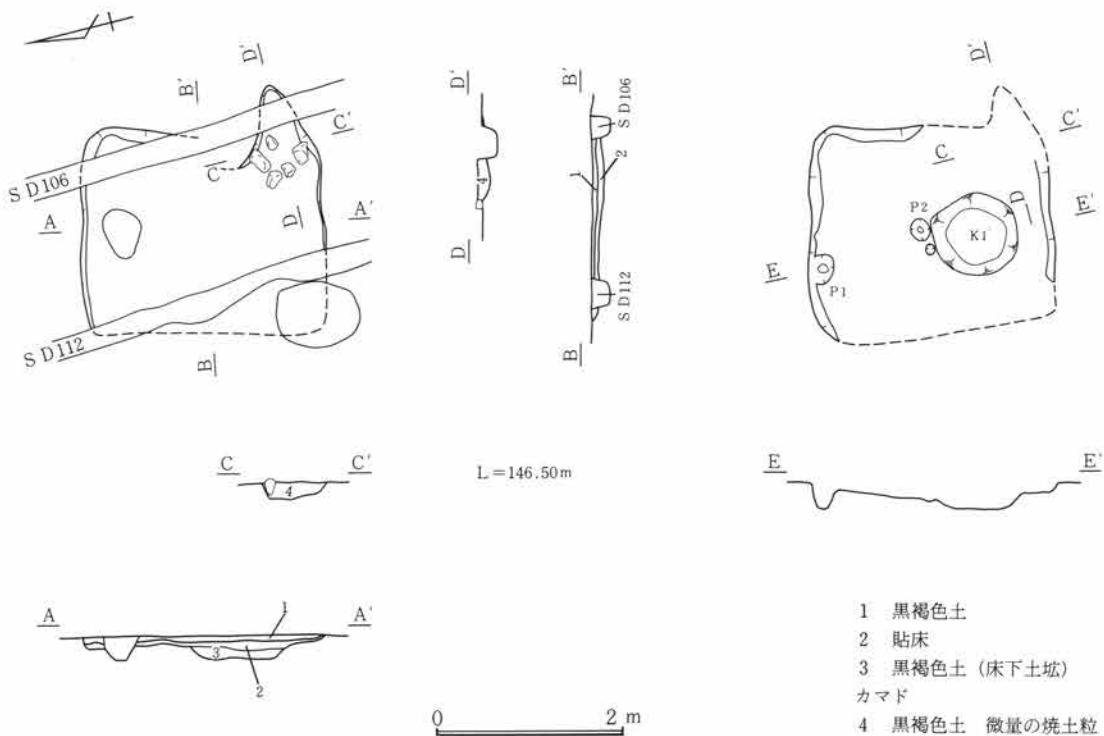
S J 169

本住居跡は、118～120 I-22～23グリッドに位置し、S D106・S D112、西南コーナーで土壇と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.17m、南北2.59m、面積5.49m²を測る。主軸方向は、N-104.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は、S D106によって燃烧部の一部を切られているため詳細は不明であるが、規模は、全長106cm、幅81cmを測り、燃烧部から煙道部は、壁外にのびる。天井部や袖部には、自然石を多く使用したらしく焚口部の前には、自然石が散乱している。

掘り方は、床面より4～5cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、ピットが2基と床下土壇が1基検出された。形態・規模は、P₁が楕円形で、径30×20cm、深度20cm。P₂はほぼ円形で、径22cm前後、深度14cmを測る。K₁は楕円形で、径90×87cm、深度16cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 甕 カマド底部 より12cm	25.6・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉱物 粒・雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で。外面の胴部はヘラ削り。

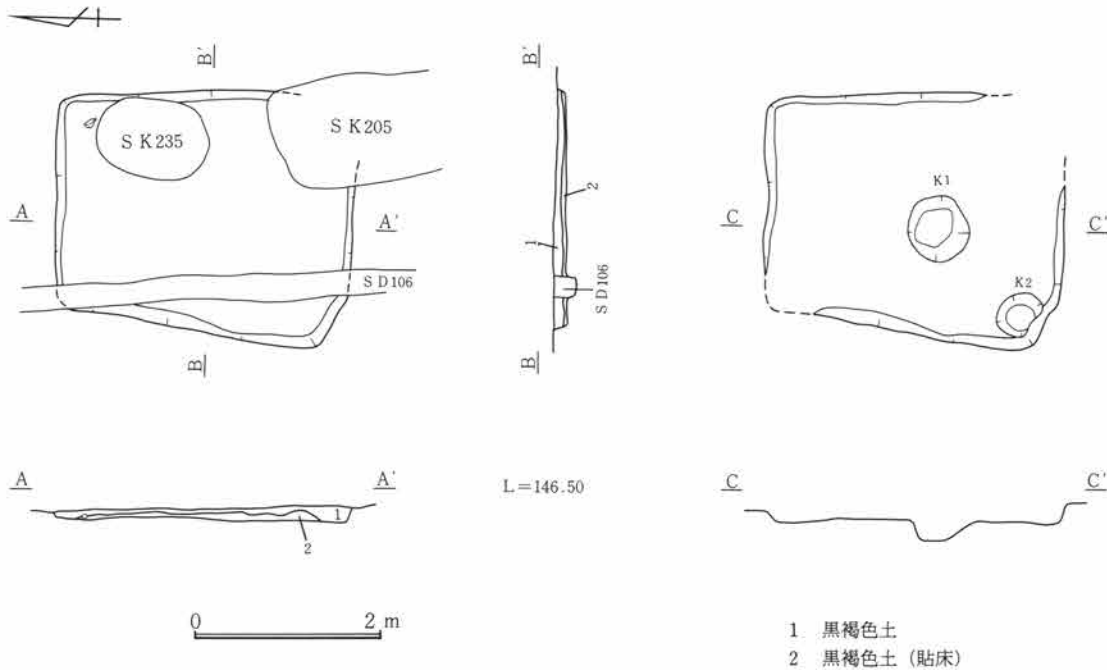
S J 170

187

本住居跡は、117～119 I-20～22グリッドに位置し、S D106、S K205・S K235と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、北壁の短い台形状を呈す。規模は、東西2.64m、南北3.15m、面積7.78㎡を測る。主軸方向は、N-1.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、5～16cmを測り、平均は11cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。また、本住居跡は、カマドが当初より構築されていない。

掘り方は、床面より2～7cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、平坦である。床下の施設は、床下土壇が2基検出され、形態・規模は、K₁がほぼ楕円形で、径120×112cm、深度21cm。K₂は、ほぼ円形で、径50cm前後、深度13cmを測る。



S J 171

188

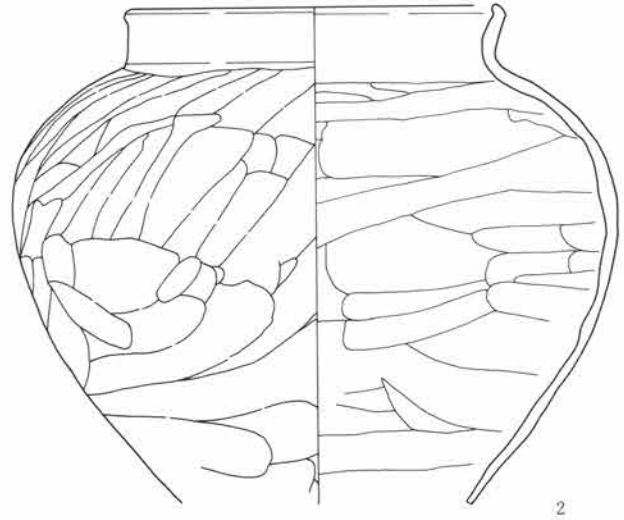
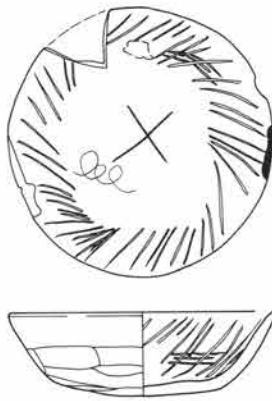
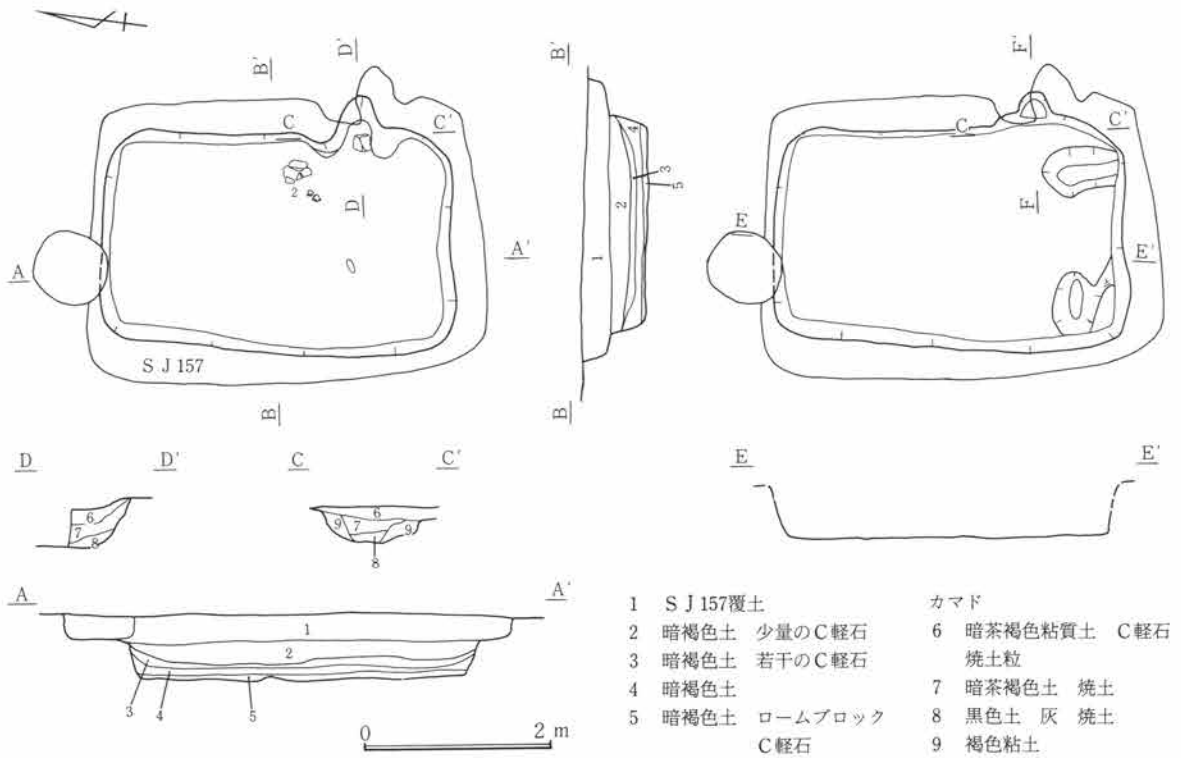
本住居跡は、125～127 I-08～10グリッドに位置し、S J 157と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西2.41m、南北3.88m、面積7.57㎡を測る。主軸方向は、N-84.5°-Eを指す。覆土は、上面をS J 157に切られているがレンズ状の自然堆積で、暗褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、32～34cmを測り、確認面からは、50～62cmになる。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部は欠落している。規模は、全長74cm、幅90cmを測り、燃烧部の半分は壁外に40cmのびる。

掘り方は、床面より4～10cmほど掘り込まれ、掘り方面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、東南-西南コーナーよりに床下土壇が各1基ずつ検出された。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎 土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 覆土	14.0・8.7・4.4 完形、細砂粒・褐色 鉍物粒・雲母 普通、にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部はほぼ平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部は左方向への2段のヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。内面の体部は斜放射暗文、底部の極一部には螺旋状暗文。中央部には「×」型のヘラ書きが施されている。
2	土師器 壺 床直	19.6・—・— 2/3 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 普通、にぶい橙色	口縁部は直線的でほぼ直立し、口唇端部は平坦で外傾し、内側は肥厚する。胴部は球状に大きくふくらみ、最大径を胴部上位にもつ。口縁部は横撫で、胴部は上半が斜め方向へのヘラ削り、下半は斜めから横方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。

S J 173

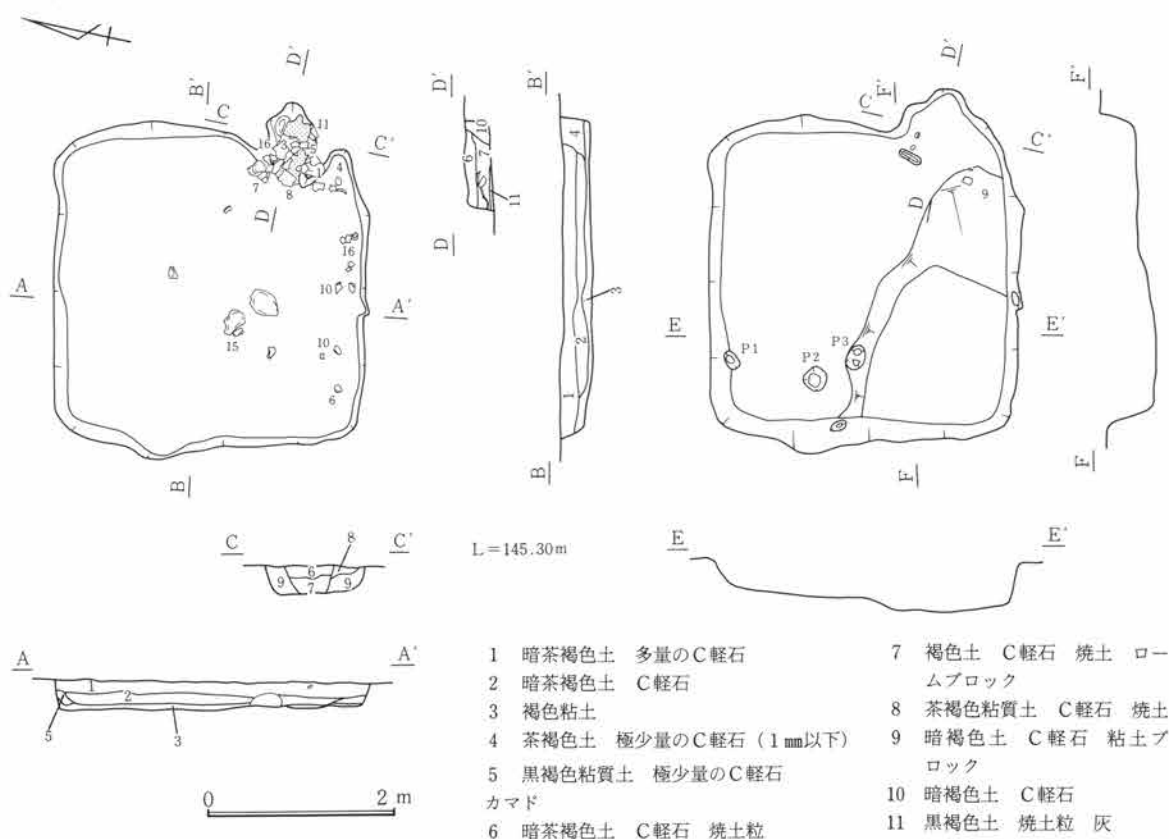
189

本住居跡は、110～112H-19～21グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.30m、南北3.54m、面積10.64㎡を測り、主軸方向は、N-78°-Eを指す。覆土は、ほぼ水平な堆積状態を呈し、大部分は暗茶褐色土で覆われている。

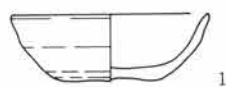
床面は、褐色粘土を使用して貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、24～30cmを測り、平均は28cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南隅に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は両袖部とも良好な状態で残っている。規模は、全長95cm、幅105cmを測り、燃烧部は壁外に42cmのびる。天井部や袖部は、自然石、褐色粘土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より11～14cmほど掘り込まれ、西南部分は、さらに10～15cmほど落ちこむ。掘り方の面は、全体的に凹凸がみられる。床下の施設は、ピットが3基検出され、形態・規模は、P₁が楕円形で径19×13cm、深度5cm。P₂は円形で径22～24cm、深度7cm。P₃は楕円形で径27×19cm、深度11cmを測る。



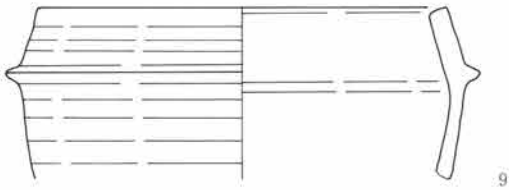
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 カマド、床上 8cm、10cm	10.4・5.0・3.5 1/4 粗砂粒・雲母、酸化焰 褐色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち開く。口縁部は僅かに外反する。底部は回転糸切り。



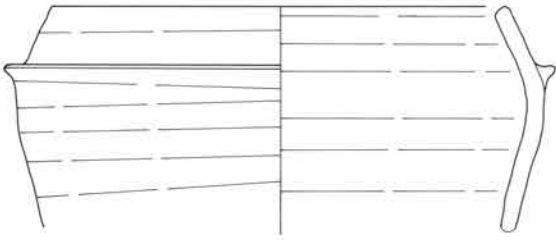
第3章 検出遺構・遺物

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 カマド 床上7cm	10.4・5.2・3.4 2/3 細砂粒・褐色鉱物粒、 酸化焰、橙色	ロクロ右回転。体部は直線的に開き、底部は回転糸切り。
3	須恵器 坏 カマド底部より 8cm	10.6・5.0・3.6 2/5 粗砂粒、酸化焰 橙色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開く。
4	須恵器 碗 床上9cm	10.6・6.0・— 2/3 粗砂粒・雲母 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ右回転。高台は剝離。体部はゆるい丸みをもち開く。口縁部は僅かに外反する。底部は回転糸切り。
5	土師器 碗 カマド底部より 8cm	14.0・5.2・—、1/2 粗砂粒・雲母・亜角礫 酸化焰・内面黒色処理 外、にぶい橙色 内、黒褐色	ロクロ右回転。高台は剝離。体部はゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
6	土師器 碗 床直	—・5.3・— 1/3 粗砂粒・雲母、酸化焰 内面黒色処理 にぶい黄褐色	体部は丸みをもち大きく開く。高台は剝離。底部は撫で。
7	土師器 鉢 カマド底部より 2～11cm	19.8・10.4・15.4 9/10 粗砂粒・雲母 硬質 にぶい黄褐色	器壁は厚い。口縁部は内湾し、口唇端部は平端で水平である。体部は極ゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は縦方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り後撫で、内面はヘラ撫でが施されている。
8	須恵器 羽釜 カマド底部より 10cm、5cm	18.0・—・— 1/6 粗砂粒・雲母・角礫 酸化焰 赤黒色	口縁部は内傾し、口唇端部は上位でややふくらむ。鏝はやや丸みをもつ断面三角形を呈す。胴部は下半で縦方向へのヘラ削りが施されている。

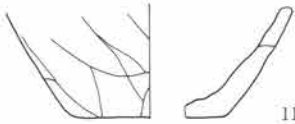
第4節 歴史時代



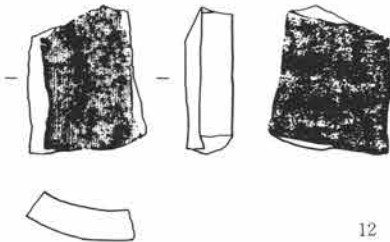
9



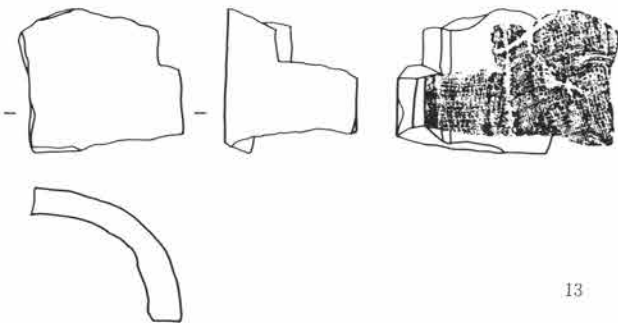
10



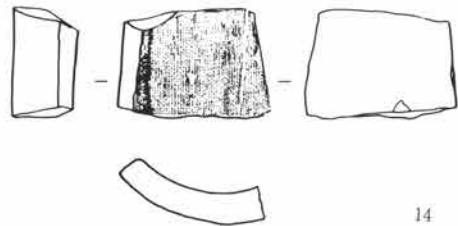
11



12

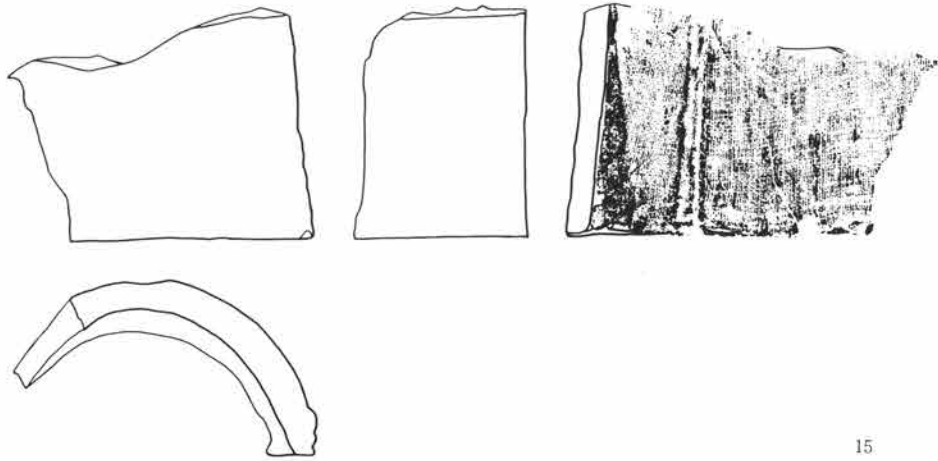


13

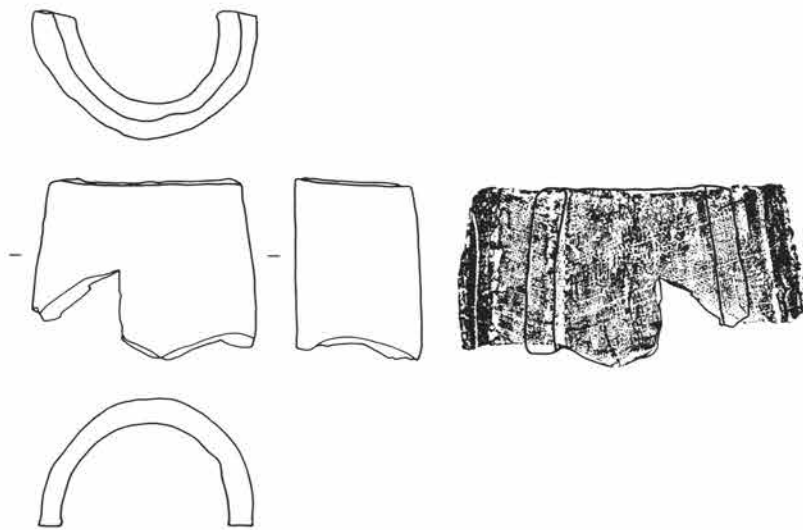


14

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
9	須恵器 羽釜 床下10cm	21.6・—・— 小片 細砂粒・雲母 還元焰 灰色	口縁部は内傾し、口唇 端部は平端でやや内傾 する。胴部はゆるい丸 みをもち、鐔は断面三 角形を呈し、水平方向 を向く。
10	須恵器 羽釜 床直	24.4・—・— 1/10 粗砂粒・角礫 酸化焰 橙色	口縁部は大きく内傾 し、口唇端部はやや丸 みをもち内傾する。胴 部はふくらみをもた ず、鐔は断面三角形を 呈し、やや上方を向く。
11	土師器 甕 カマド底部 より15cm	—・8.0・— 小片 細砂粒 硬質 橙色	外面の胴部はヘラ削 り。内面はヘラ撫で。
No	種 類		観察表掲載頁
12	土製品 瓦		778
13	土製品 瓦		778
14	土製品 瓦		778



15



16

No	種 類	観察表掲載頁	No	種 類	観察表掲載頁
15	土製品 瓦	778	16	土製品 瓦	778

S J 174

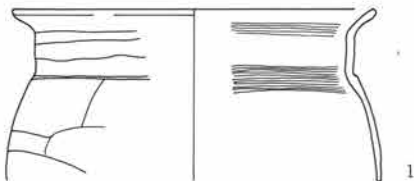
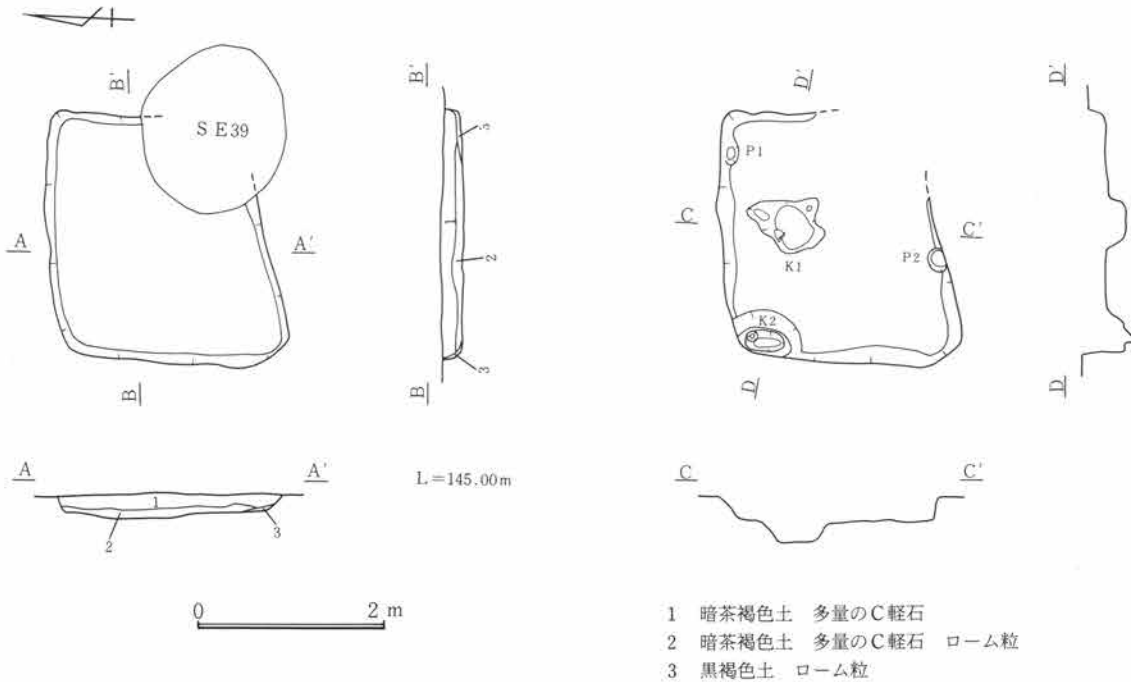
191

本住居跡は、107~109 I-15~16グリッドに位置し、S E 39と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、東壁の短い台形状を呈す。規模は、東西2.45m、南北2.55m、面積は推定で5.92m²を測る。主軸方向は、N-90°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、南壁がやや緩かな立ち上がりであるが、他の壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、10~23cmを測り、平均は16cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマド及びカマドの痕跡は、確認されなかった。

掘り方は、床面より7~12cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、ピットが2基と床下土壇が2基検出され、形態・規模は、P₁が楕円形で径26×25cm、深度8cm。P₂は楕円形で径26×18cm、深度19cm。K₁は、不整形で径85×76cm、深度21cm。K₂は楕円形で径68×48cm、深度37cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 甕 床下土壇K ₁ 底部より19cm 床下9cm	19.0・ - ・ - 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部はややふくらみをもつ。外面は横撫で。胴部は横方向へのヘラ削り。内面は口縁部に楯目、胴部には横方向へのヘラ撫でが施されている。

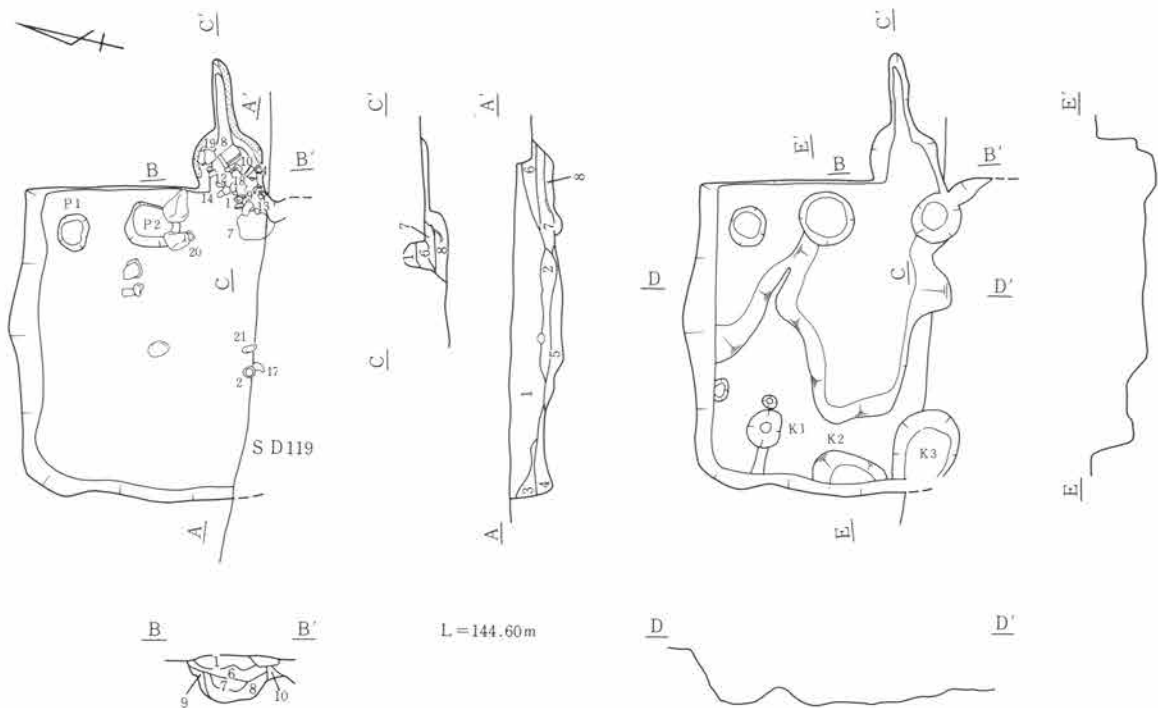
S J 175

本住居跡は、94～96H-11～12グリッドに位置し、S D 119と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構は、南壁側をS D 119によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、方形を呈すると推測される。規模は、東西3.30mを測る。覆土は、レンズ状の堆積を呈し、黒褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施され、周辺部分に比べ、中央部分が15～20cmほど低い。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、38～58cmを測り、平均は46cmである。壁溝・貯蔵穴は、検出されなかったが、柱穴が東壁よりで2本検出された。形態・規模は、P₁が台形状で一辺38×30cm、深度30cm。P₂は長方形で一辺55×44cm、深度22cmを測る。

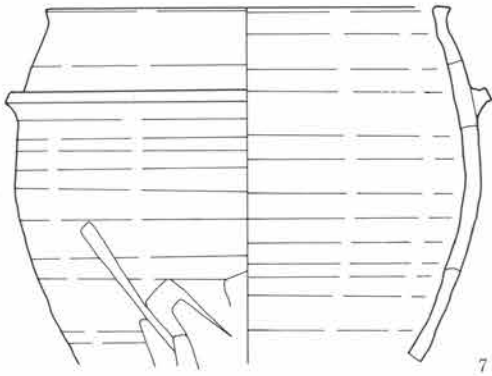
カマドは、東壁に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部・焚口部・煙道部は、良好な状態で残っている。規模は、全長174cm、幅75cmを測り、燃焼部から煙道部にかけては壁外に132cmのびる。袖部は、地山をそのまま掘り残して使用している。

掘り方は、床面より3～15cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、細かい凹凸は全どもみられないが、東北コーナーと中央部分は、緩い落ち込みがみられる。埋土は、ロームブロックの混った黒褐色土である。床下の施設は、床下土壇が3基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径38×33cm、深度15cm。K₂は楕円形で径80×40cm、深度8cm。K₃は楕円形で径80×65cm、深度13cmを測る。

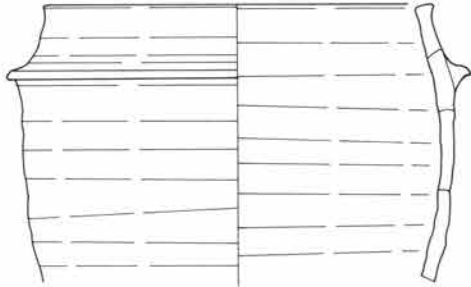


- | | | | | |
|----------|------------|------|---------|----------|
| 1 黒褐色土 | C 軽石 | ローム粒 | ロームブロック | カマド |
| 2 黒褐色土 | 多量のロームブロック | | | 6 暗褐色土 |
| 3 黒褐色土 | 若干のローム粒 | | | 7 黒褐色土 |
| 4 黒褐色粘質土 | | | | 8 黒褐色土 |
| 5 黒色土 | ロームの混土 | 貼床 | | 9 暗褐色粘質土 |
| | | | | 10 褐色土 |
| | | | | ロームブロック |
| | | | | 炭化物 |
| | | | | 焼土 |
| | | | | 灰 |
| | | | | ロームブロック |
| | | | | 焼土 |
| | | | | ロームブロック |

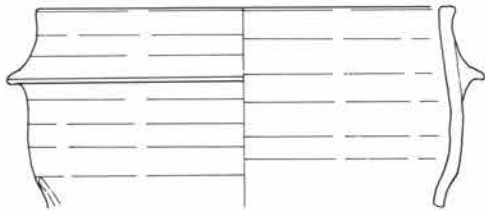
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 カマド底部より4cm	10.7・5.5・3.7 1/4 粗砂粒・雲母 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては僅かに外反し開く。底部は回転糸切り。
2	須恵器 坏 床直	10.0・5.1・3.2 完形 粗砂粒・褐色鉾物粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ右回転。体部は立ち上がりに丸みを持ち、口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。
3	須恵器 坏 覆土	13.2・7.8・4.8 1/8 細砂粒 還元焰軟質 灰色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。
4	土師器 碗 カマド底部より15cm	10.9・6.1・5.1 1/4 粗砂粒・褐色鉾物粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。体部は立ち上がりに丸みを持ち、高台は細身で「ハ」の字状に開く。内面は全面的にヘラ磨きが施され、黒色処理が施されているが二次焼成によるものか、当初から吸炭しなかったのか不明であるが底部とその周辺しか吸炭していない。
5	灰釉陶器 碗 覆土	15.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	体部は立ち上がりで丸みを持ち、ほとんど開かない。口縁部は外反する。内面には段をもつ。施釉は内面のみで、不透明な緑灰色を呈す。
6	須恵器 羽釜 カマド底部より10cm、6cm	19.6・—・— 1/10 粗砂粒・雲母 酸化焰 赤褐色	口縁部は内傾し、口唇端部は丸みを持ち、内傾する。胴部は上位でふくらみ、鏝は断面三角形を呈す。



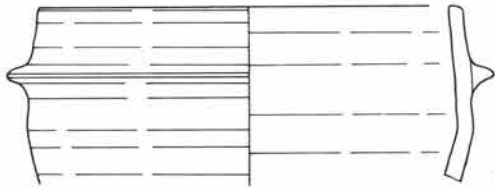
7



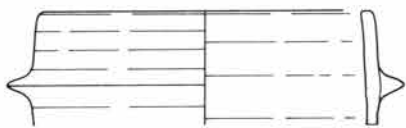
8



9



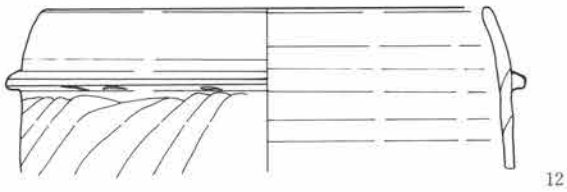
10



11

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 羽釜 カマド底部 より7~10 cm	20.0・—・— 1/6 粗砂粒・褐色鉱物 粒 酸化焰 橙色	口縁部は内傾し、口唇端部はやや丸みをもつがほぼ平坦で外面がやや突帯状になっている。胴部は丸みもち、鏝は断面四角形を呈し、やや上方を向く。胴部下半には縦方向へのヘラ削りが施されている。
8	須恵器 羽釜 カマド底部 より7~10 cm	20.6・—・— 1/8 細砂粒・粗砂粒・ 雲母 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は僅かに外反し、口唇端部は平坦で、やや内傾する。胴部はほとんどふくらまず、鏝は断面四角形でやや下方を向く。
9	須恵器 羽釜 カマド底部 より13cm	22.2・—・— 1/8 細砂粒・粗砂粒・ 雲母 酸化焰 にぶい橙色	口縁部は僅かに外反し、口唇端部は平坦でほぼ水平。胴部はほとんどふくらまず、鏝は断面三角形を呈しやや下方を向く。胴部中位には縦方向へのヘラ削り。
10	須恵器 羽釜 カマド底部 より7cm	22.6・—・— 1/8 細・中礫 酸化焰 灰白色	胴部はほとんどふくらみをもたないと思われる。口縁部は直立し、口唇部は水平な平坦面をもつ。鏝は三角形を呈し、端部は丸みをもつ。内外面ともロクロ整形。
11	須恵器 羽釜 カマド底部 より10cm	17.8・—・— 1/10 粗砂粒 酸化焰 灰白色	胴部上位から口縁部まで直線的である。口唇部は水平。鏝は断面三角形を呈す。内外面ともロクロ整形。

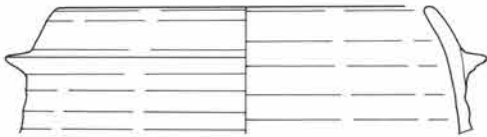
第4節 歴史時代



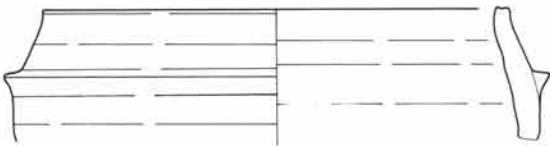
12



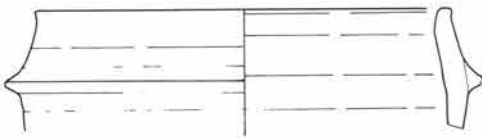
13



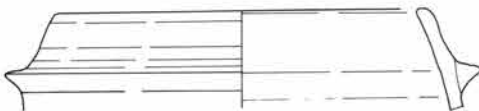
14



15



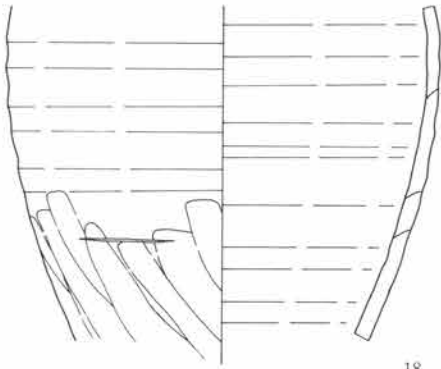
16



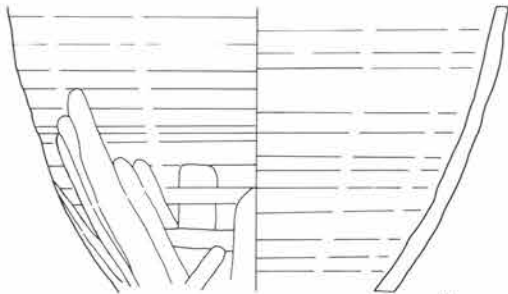
17

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
12	須恵器 羽釜 カマド底部 より6cm	23.6・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉍物 粒 酸化焰 明赤褐色	口縁部は内傾し、口唇端部は丸みをもつ。胴部は直線的、鏝は丸みをもつ。胴部は鏝にいたる縦方向へのヘラ削りが施されている。
13	須恵器 羽釜 カマド底部 より6cm	22.2・—・— 小片 細砂粒・雲母 酸化焰 にぶい橙色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で水平。鏝はやや丸みをもつ断面三角形を呈し、やや下方を向く。
14	須恵器 羽釜 カマド底部 より6cm	20.0・—・— 小片 細砂粒 酸化焰 淡橙色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で水平。鏝は断面三角形を呈し、水平方向を向く。
15	須恵器 羽釜 カマド底部 より6cm	24.6・—・— し/10 粗砂粒 酸化焰 にぶい褐色	口縁部は内傾し、口唇部は水平な平坦面をもつ。鏝の断面は三角形を呈し、やや上向きである。
16	須恵器 羽釜 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒 酸化焰 褐色	口縁部はやや内傾し、口唇端部は平坦で内傾し、外面は突帯状に突出する。鏝は断面三角形を呈す。
17	須恵器 羽釜 床直	19.0・—・— 小片 細砂粒 酸化焰 にぶい黄橙色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦。鏝は断面三角形を呈し、水平方向を向く。

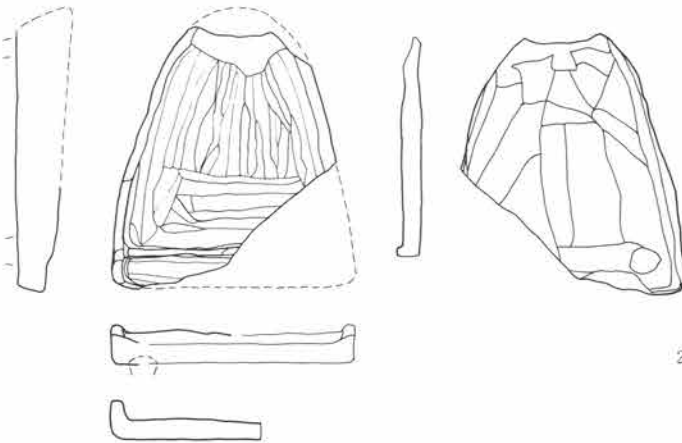
第3章 検出遺構・遺物



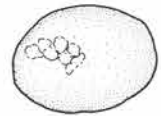
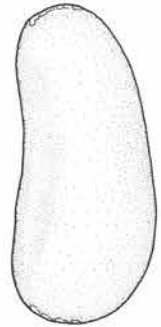
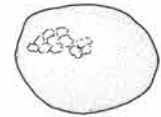
18



19



20



21

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
18	須恵器 羽釜 カマド 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 酸化焙 灰黄色	胴部下位は縦方向へのへら削り。
19	須恵器 羽釜 カマド底部より19cm	—・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 酸化焙 にぶい橙色	胴部下位は縦方向へのへら削り。
20	須恵器 風字硯 床直	—・—・— 3/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焙 灰色	硯の周辺には縁帯が全周し、縁帯は硯頭に向けて高くなる。硯尻近くには両縁帯をつなぐ突帯を設けており、中央やや左よりの部分にへら刻みが入っている。硯背には硯尻に1脚、硯頭に1脚を有した痕跡がみられる。また硯背にはへら削りが施されている。

No.	種類・器形	出土位置	計測値	石 材	特 徴
21	石製品 敲石	床直	26.8・7.5・5.75cm	輝石安山岩（粗粒）	両端部に敲打痕がみられる。

S J 176

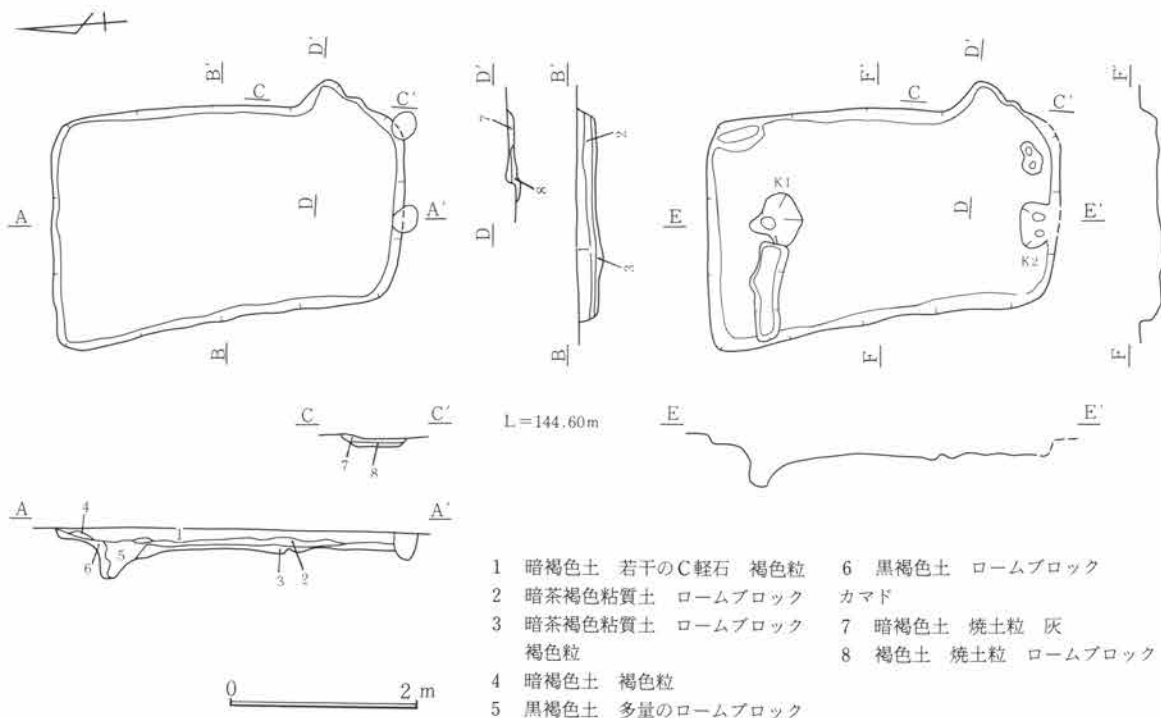
194

本住居跡は、98～100H-07～09グリッドに位置し、南壁で小ピットと重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、南壁の短かい台形状を呈す。規模は、東西2.42m、南北3.73m、面積8.30㎡で各壁の長さは東壁3.80m、西壁3.63m、南壁1.82m、北壁2.45mを測る。主軸方向は、N-91°-Eを指す。覆土は、ほぼ水平な堆積状態を呈し、暗褐色土で覆われている。

床面は、粘性のある暗茶褐色土を使用して貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、11～17cmを測り、平均は14cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、カマドの範囲が確認できる程度で、天井部・袖部の区分はできなかった。規模は、全長98cm、幅82cmを測る。

掘り方は、床面より6～7cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土坑が3基検出され、形態・規模は、K₁が不整形で径55×55cm、深度29cm。K₂は、楕円形で径48×30cm、深度25cmを測る。



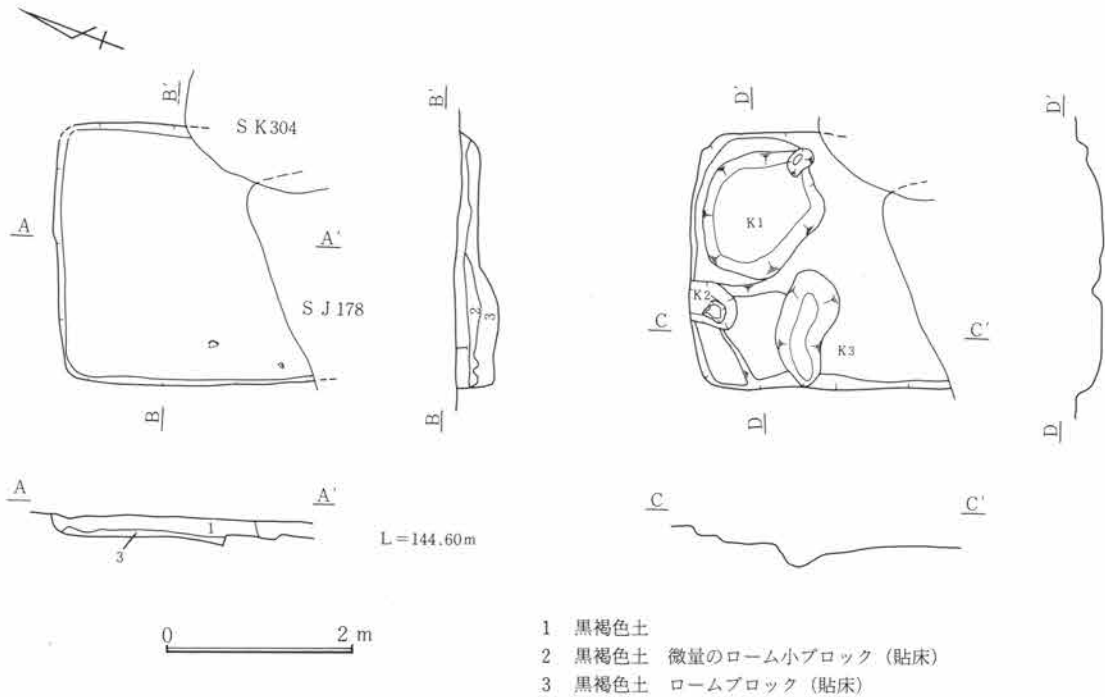
S J 177

194

本住居跡は、102～103H-02～04グリッドに位置し、S K 304、S J 178と重複しているが、新旧関係は、本址のほうが古い。本遺構の南半分は、S K 304、S J 178によって切られ、全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すると推測される。規模は、東西2.73mを測る。主軸方向は、N-69.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、東壁と北壁はやや緩やかな立ち上がりであるが、西壁は垂直に立ち上がる。壁高は、4～14cmと全体的に浅く、平均は9cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。また、カマドは、S K 304によって切られていると推測される。

掘り方は、床面より9～18cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、小ピット状の凹凸が多くみられる。床下の施設は、床下土壇が3基検出された。形態・規模は、K₁が楕円形で径144×115cm、深度6cm。K₂は楕円形で径50×42cm、深度30cm。K₃は楕円形で径120×60cm、深度13cmを測る。



No.	種類・出土位置	計測値(長さ・直径・孔径)	胎土・焼成・色調	特徴
1	土製品 土錘、覆土	2.3・0.9・0.3	細砂粒、良好 明褐色	外面はヘラ削り。

S J 178・179

195

S J 178は、101～103H-01～03グリッドに位置し、S K 304、S J 177・179と重複するが、新旧関係は、S K 304より本遺構のほうが古く、S J 177・179より新しい。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.40m、南北3.44m、面積7.29m²を測る。主軸方向は、N-62°-Eを指す。

床面は、焼土粒、ロームブロック混りの黒褐色土で貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、8～13cmを測り、平均8cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。

カマドは、東壁の南よりに位置するが、残存状態は、焚口部の大部分をピットによって壊されているため詳細は不明である。規模は、全長148cm、幅88cmを測り、燃烧部は壁外に70cmのび、焼土の堆積がみられる。天井部・袖部・煙道部の状態は不明である。

掘り方は、床面より8～12cmほど掘り込まれているが、掘り方の面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土壇3基、ピット1基が検出され、形態・規模は、K₁が鍵穴状で内部に段をもつ長軸132cm、短軸77cm、深度34cm。K₂は楕円形で、径62×42cm、深度20cm。K₃は楕円形で径46×33cm、深度35cmを測る。

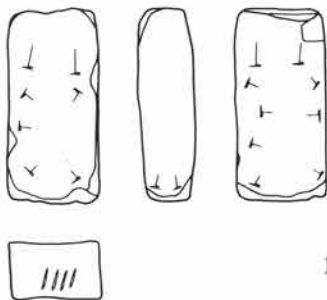
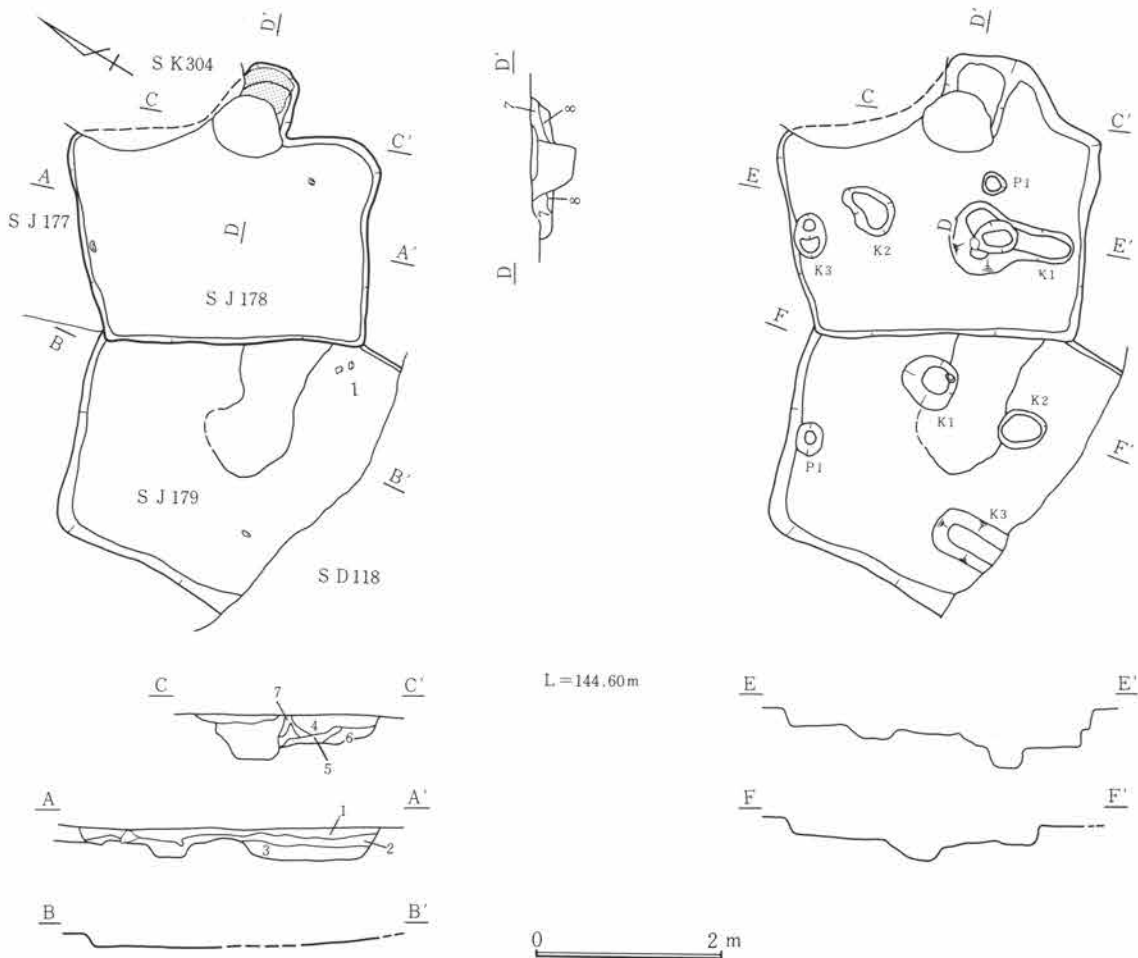
S J 179は、102～104H-01～02グリッドに位置し、S D 118、S J 178と重複するが、新旧関係は、本遺構

第4節 歴史時代

のほうが古い。本遺構は、南壁側をS D118、東北部分をS J 178によって切られているため全貌を知ること
はできないが、残存部分から平面形態は、方形または長方形を呈すると推測される。規模は、東西約3.40m、
南北推定で3.50mである。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、11~21cmを測り、平均16cmである。残
存部分では壁溝・柱穴・貯蔵穴・カマド等はみられなかった。

掘り方は、床面より2~12cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土坑
3基、ピット1基が検出された。



- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色土 微量の焼土粒 | カマド |
| 2 黒褐色土 微量の焼土粒
ロームブロック(貼床) | 4 暗褐色土 若干のC軽石 焼土 褐色粒 |
| 3 黒褐色土 微量の焼土粒 多
量のロームブロック | 5 暗褐色土 焼土 炭化物 |
| | 6 褐色粘質土 焼土粒 |
| | 7 黒褐色土 多量の焼土粒 |
| | 8 黒褐色土 |

No	種類	観察表掲載頁
1	石製品 砥石	832

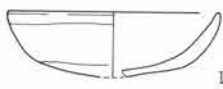
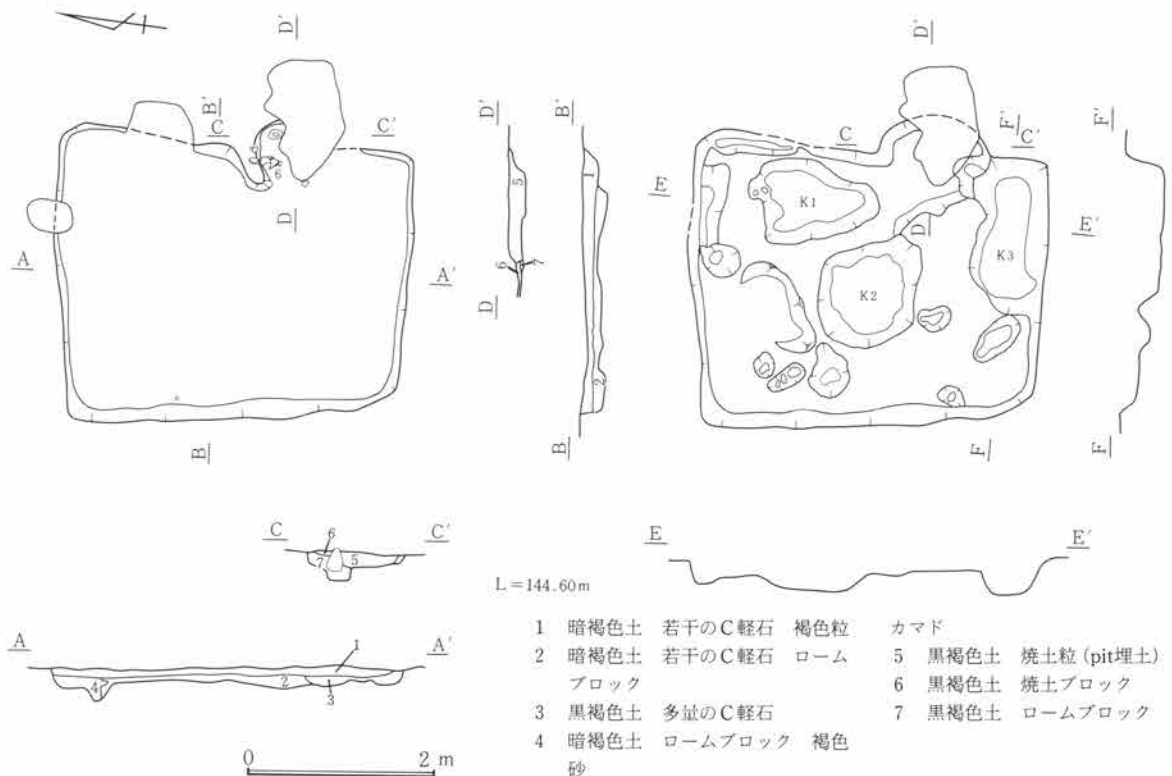
S J 180

本住居跡は、96～98H-08～10グリッドに位置し、カマドや北壁でピットと重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、南壁の短い台形状を呈す。規模は、東西3.09m、南北3.76m、面積10.77㎡を測る。主軸方向は、N-88°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、緩かに立ち上がり、壁高は、6～16cmを測り、平均は10cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかったが、床下の東壁の北よりと北壁の東よりでは、壁溝と推測される溝状のものが検出されている。

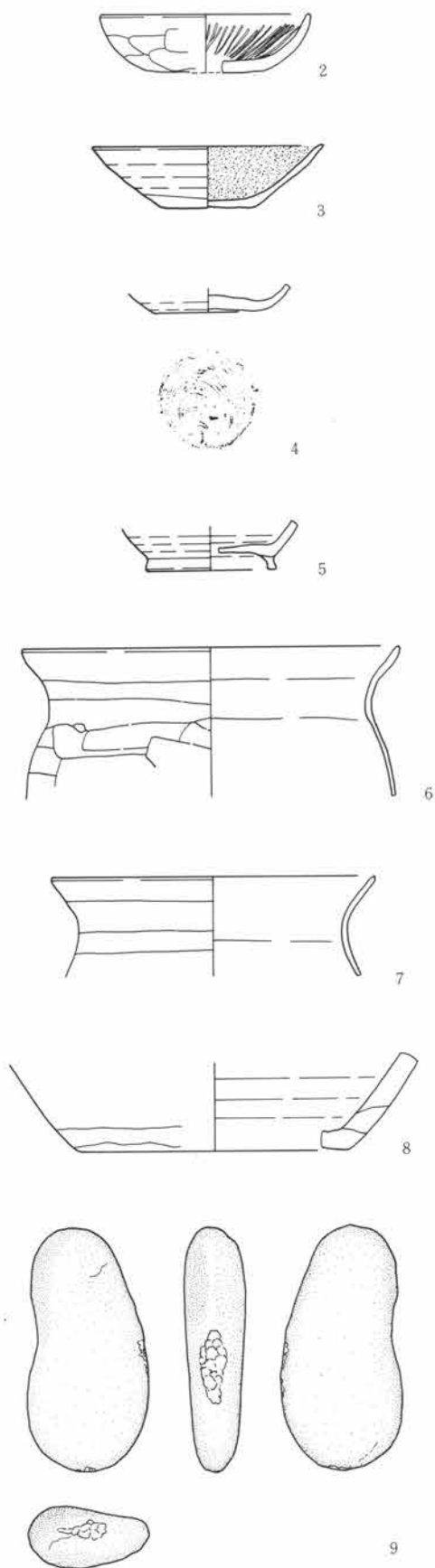
カマドは、東壁の中央よりやや南よりに位置し、残存状態は、大半をピットに壊されており、左袖部が残る程度である。規模は、全長82cm、幅117cmを測る。燃焼部の奥には、支脚用の円柱状の加工石が埋め込まれ、袖部には、自然石を使用している。

掘り方は、床面より10～15cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、多少の凹凸がみられる。床下の施設は、床下土壇3基、ピット7基が検出され、形態・規模は、K₁が三角形に近い楕円形で径124×70cm、深度17cm。K₂は楕円形で径131×111cm、深度24cm。K₃は長方形で150×72cm、深度27cm。ピットは、全て楕円形で、径は28×21cm～60×45cm、深度は8～37cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下	14.0・10.8・2.5、1/8 細砂粒・雲母・褐色鉾物粒 やや軟質、橙色	口縁部は内湾ぎみで、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り。

第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴		
2	土師器 坏 床下	12.2・6.8・3.5 1/6 細砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもち開き、底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で。体部は2段の左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されている。		
3	土師器 坏 カマド 覆土	13.6・5.4・3.6 1/4 細砂粒 内面黒色処理 橙色	体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開き、底部は平底を呈す。		
4	須恵器 坏 床下	—・6.0・— 1/3 黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。		
5	須恵器 碗 カマド	—・7.4・— 1/8 黒色鉾物粒 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は直立きみで、接地面が広い。底部は回転糸切り。		
6	土師器 甕 カマド 直上	22.0・—・— 1/10 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	口縁部は外反し、胴部はふくらみをもつ。口縁部は横撫で。胴部は横方向のヘラ撫で。		
7	土師器 甕 貯蔵穴底部 直上	19.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、横撫で。		
8	須恵器 甕 床下	15.6・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	胴部の最下位に回転ヘラ削りが施されている。		
No.	種類 器形	出土位置	計測値	石 材	特 徴
9	石製品 敲石	覆土	14.2 7.1 3.6cm	輝石安山岩 (細粒)	端部・側面に敲打痕がみられる。

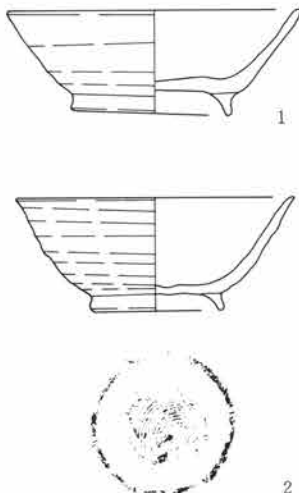
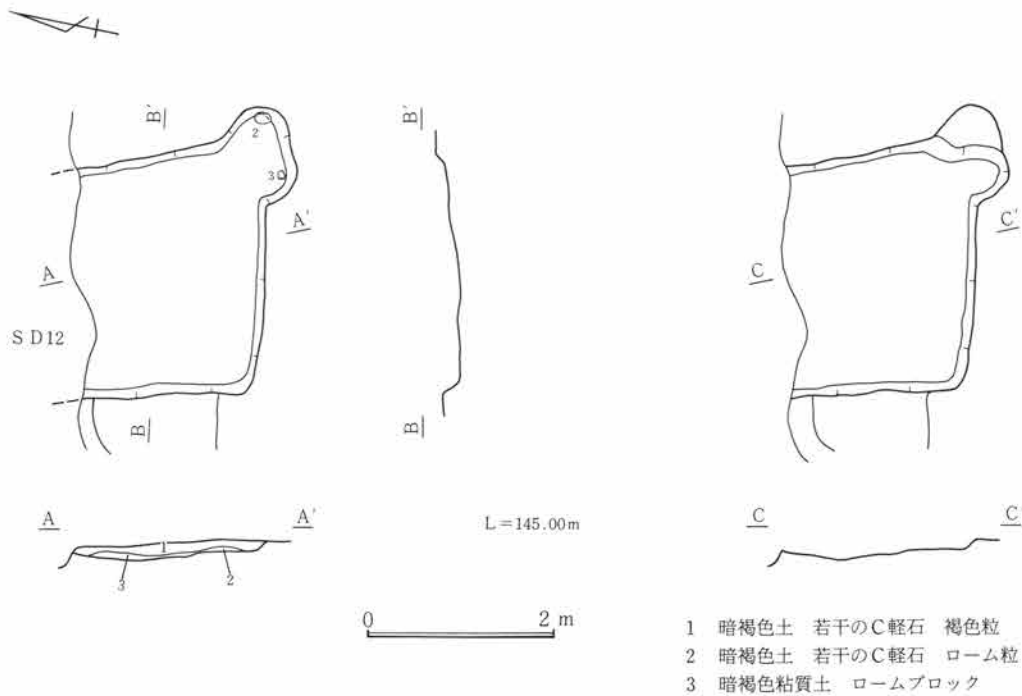
S J 181

本住居跡は、105～107H-17～19グリッドに位置し、S D12と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の北半分は、S D12によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、台形状を呈すと推測される。規模は、東西2.62mを測る。主軸方向は、N-67°-Eを指す。

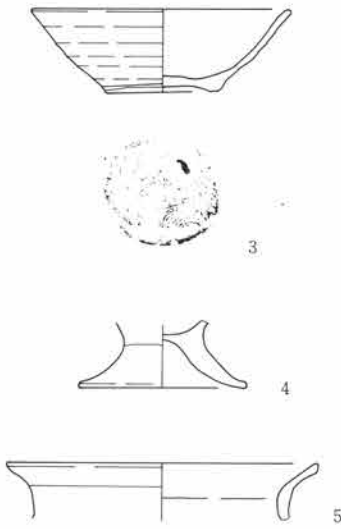
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、8～22cmを測り、平均は14cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東南コーナー部分に位置し、残存状態は、天井部・袖部等の区分は不明確であった。規模は、全長60cm、幅90cmを測る。燃焼部の立ち上がり部分より3の須谷器碗が出土している。

掘り方は、床面より4～5cmほど掘り込まれており、掘り方の面は平坦である。床下の施設等は、検出されなかった。



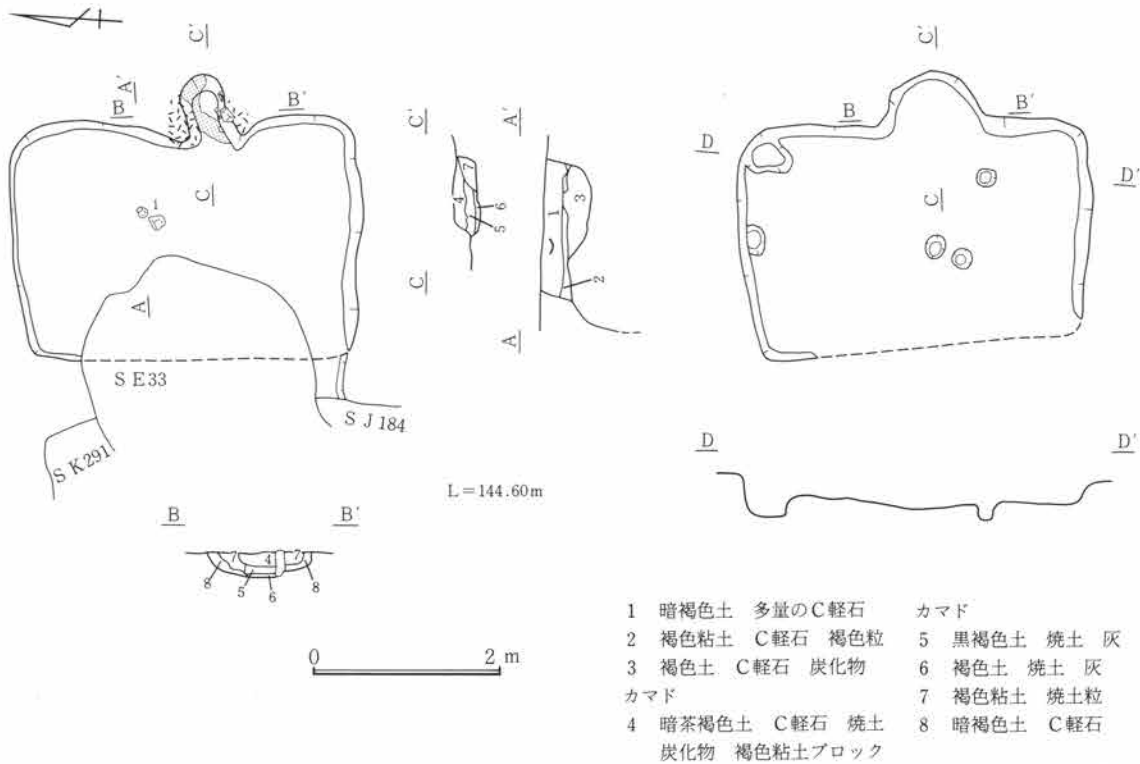
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	15.4・8.5・5.6 完形 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ左回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。高台は断面三角形を呈し、端部に弱い稜をもち直立する。底部糸切り痕は不詳明である。
2	須恵器 碗 床直	14.6・7.0・6.0 完形 粗砂粒・細砂粒・雲母 還元焰 浅黄色	ロクロ左回転。口縁部は外反し、体部は立ち上がりに丸みをもつ。高台は端部に丸みをもち、やや開く。底部は回転糸切り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 坏 床直	13.4・6.0・4.5 1/2 粗砂粒・細砂粒・雲母 還元焰、浅黄色	ロクロ左回転。体部は極ゆるい丸みを持ち、口縁部は僅かに外反する。底部は回転糸切り。
4	土師器 台付甕 覆土	—・4.0—、小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	台付甕脚部のみ、器壁は厚く外反する。脚部は横撫で。
5	土師器 甕 覆土	16.6・—・— 小片 良好 赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈す。口縁部は横撫で。

SJ182

198



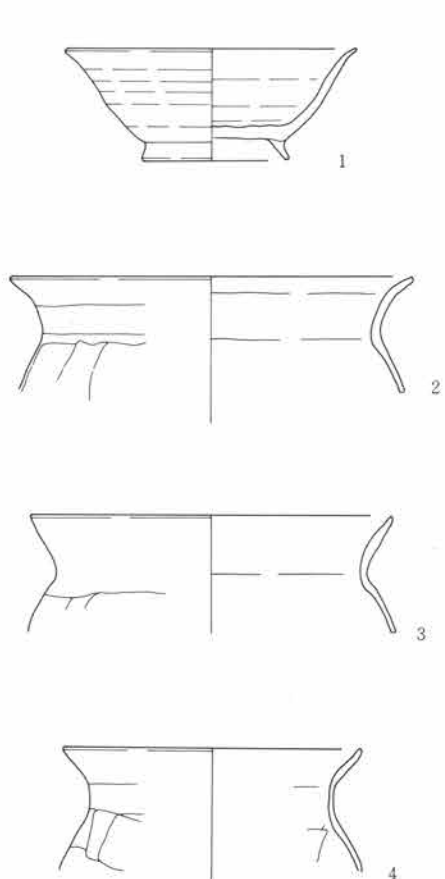
本住居跡は、95～96H-03～05グリッドに位置し、S E 33と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.52m、南北3.74m、面積9.12m²を測る。主軸方向は、N-85°-Eを指す。

床面は、褐色粘土を使用して貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、9～22cmを測り、平均は15cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央付近に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は、両袖部とも良好な

状態で残っている。規模は、全長85cm、幅120cmを測り、燃烧部の大半は、壁外に47cmのびる。右袖部には、角柱状の自然石が使用されている。

掘り方は、床面より8～16cmほど掘り込まれており、掘り方の面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、ピットが5基検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 床上10cm	15.4・7.0・5.8 1/2 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焙 灰色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、 体部はゆるい丸みをもつ。高台は 細身でやや開く。底部は回転糸切 り。
2	土師器 甕 覆土	21.4・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、横撫で。胴部は ヘラ削り。
3	土師器 甕 覆土	19.0・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は直線的に開き、横撫で。 胴部はヘラ削り。
4	土師器 甕 床下 覆土	15.8・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横 撫で。胴部は横方向へのヘラ削り。

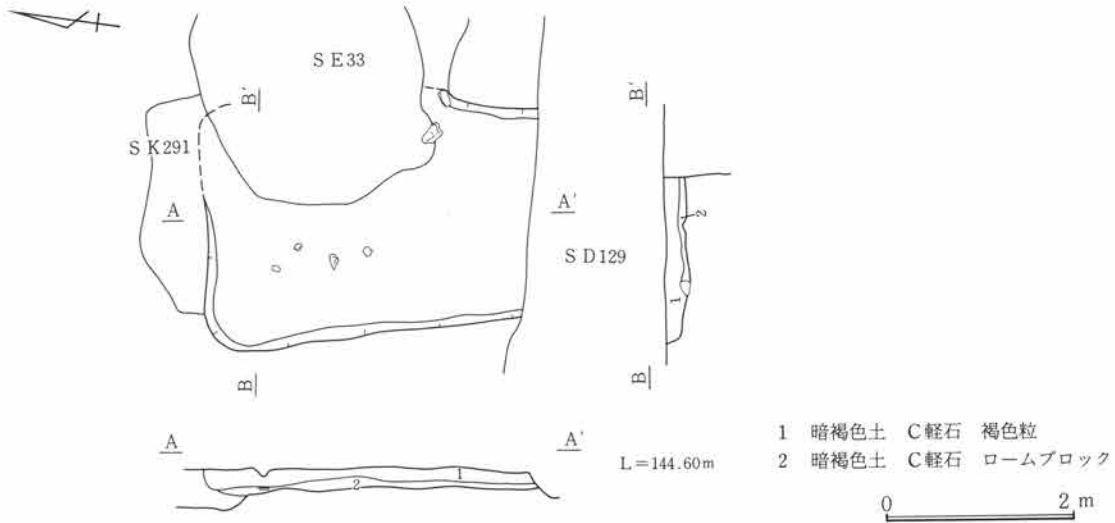
S J 184

本住居跡は、96～98H-03～05グリッドに位置し、S E 33、S K 291、S D 129と重複するが、新旧関係は、S E 33、S D 129より本遺構のほうが古く、S K 291より新しい。本遺構の東北部分は、S E 33、南壁側はS D 129によって切られ全貌は不明であるが、平面形態は、南壁の短かい台形状を呈すと推測される。規模は、東西2.60m前後、南北3.50m前後を測ると思われる。

床面は、暗褐色土を使用して貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、11～18cmを測り、平均は14cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁に位置するが、S E 33によって大部分が壊されて僅かに使用されたと思われる自然石がみられる程度である。

掘り方は、床面より5～12cmほど掘り込まれており、掘り方の面は、平坦である。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	—・鈕6.0—、1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。鈕は偏平状を呈し、天井部の残存部分 は回転ヘラ削り。

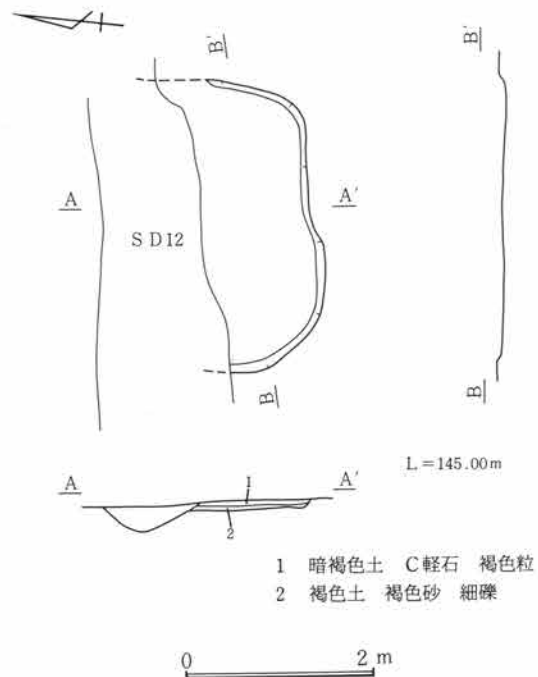
S J 186

199

本住居跡は、104～106H—18～19グリッドに位置し、S D 12と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の北半分は、S D 12によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、隅丸長方形を呈す。規模は、東西3.10m前後を測り、主軸方向は、N—77.5—Eを指す。

床面は、地山をそのまま踏み固めている。壁は、やや緩かに立ち上がり、壁高は、4～7cmを測る。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。また、残存部分では、カマドも存在しなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕・須恵器坏・甕等が全部で5点ほど出土したが小片のため実測不可能であった。

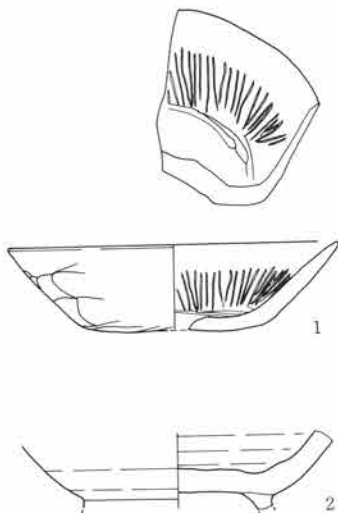
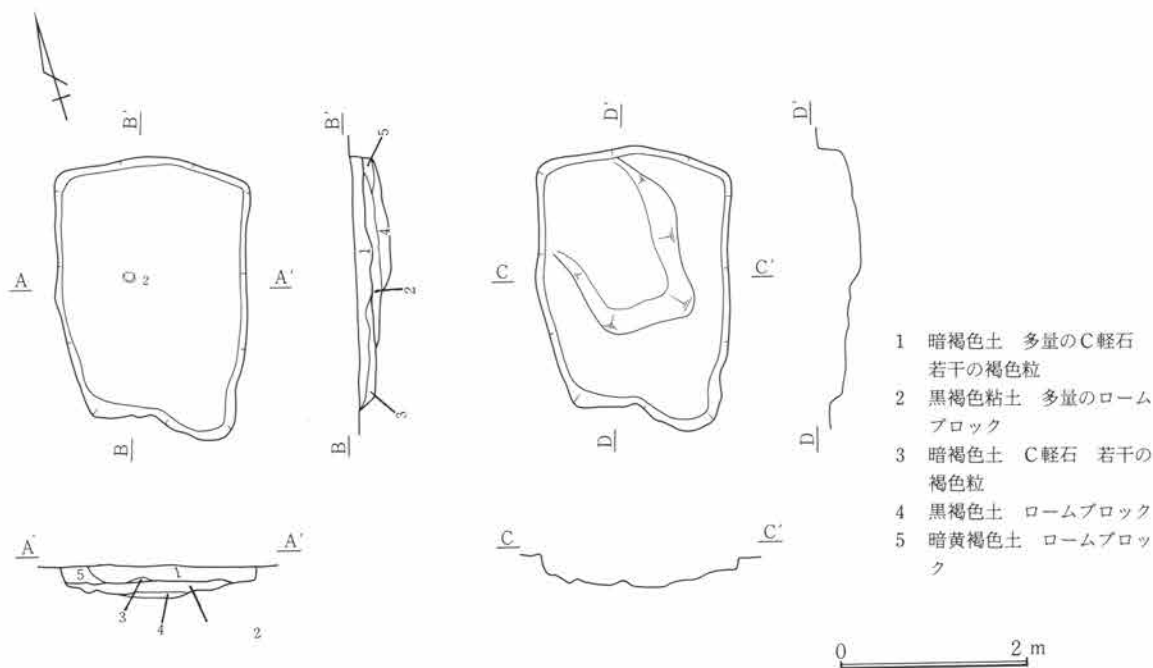


S J 187

本住居跡は、113～114H-07～08グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、北壁と西壁は中央部がやや張り出し、南壁は東半分が半円状に張り出し、くずれた四角形を呈す。規模は、東西2.05m・南北2.72m、面積5.25㎡を測る。主軸方向は、N-20.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の堆積を呈し、暗褐色土・黒褐色粘土で覆われている。

床面は、大部分貼床が施されているが、一部地山をそのまま踏み固めただけである。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、16～22cmを測り、平均は19cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。また、本址は、カマドを構築していない。

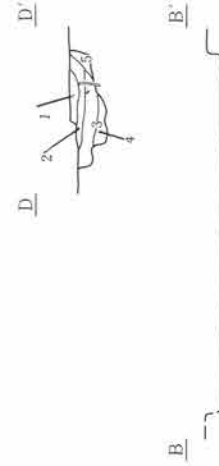
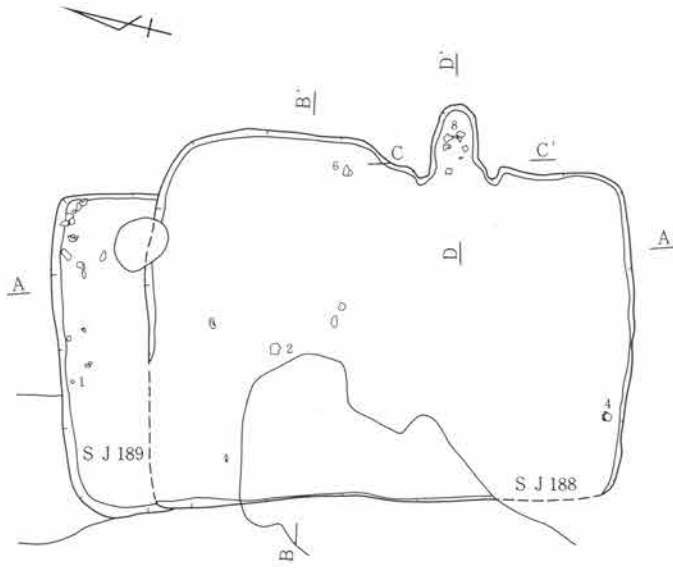
掘り方は、床面より4～8cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、ほぼ平坦である。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	17.6・10.0・4.6 1/6 細砂粒・褐色鉱物粒 やや軟質 橙色	体部から底部にかけては直線的に開き、底部はほぼ平底を呈す。外面の整形は不明。内面の体部は、斜放射状暗文が施されている。
2	須恵器 瓶類 床直	—・9.0・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	短頸壺又は長頸瓶底部、ロクロ右回転。

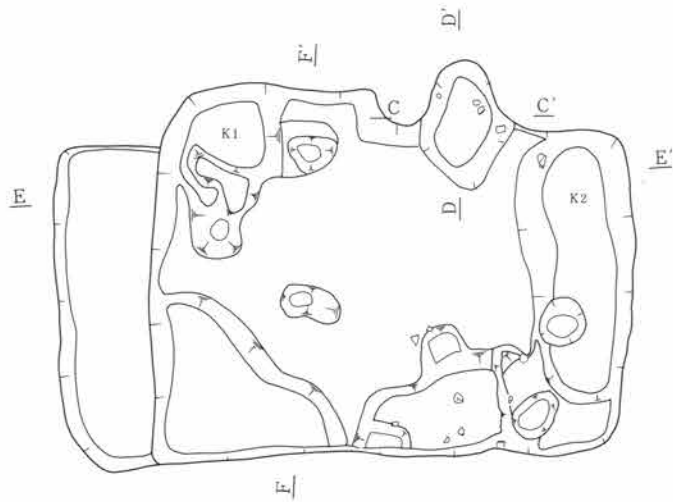
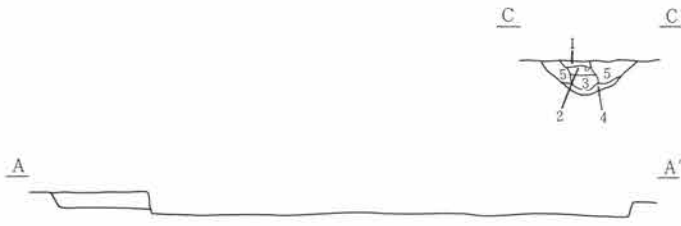
SE188・189

200



L = 144.50m

- 1 暗褐色粘質土 C 軽石 (2 ~ 3mm) 焼土
- 2 暗褐色土 焼土 炭化物
- 3 黒褐色土 焼土粒 灰 ロームブロック
- 4 褐色土 焼土粒 ロームブロック
- 5 褐色土 焼土粒 ロームブロック 褐色粘土



0 2 m

第3章 検出遺構・遺物

S J 188は、100～102G-46～48グリッドに位置し、Pit 7、S J 189と重複するが、新旧関係は、Pit 7より本址のほうが古く、S J 189より新しい。また、西壁側の上面を近代の攪乱によって壊されている。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.97m、南北5.20m、面積10.94㎡を測る。主軸方向は、N-81°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、14～24cmを測る。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

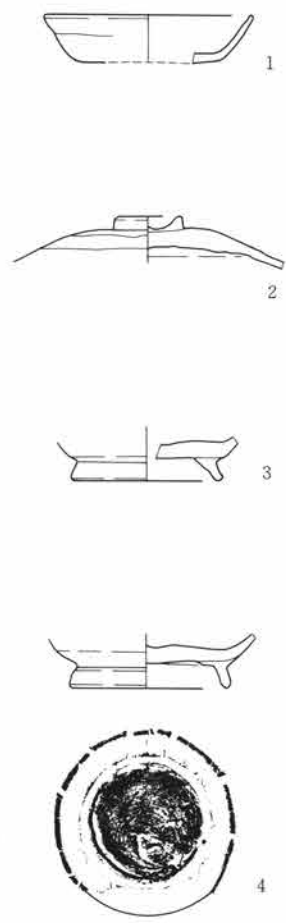
カマドは、東壁の中央よりやや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は、良好な状態で残っている。規模は、全長92cm、幅120cmを測り、燃烧部の大部分は、壁外に67cmのびる。

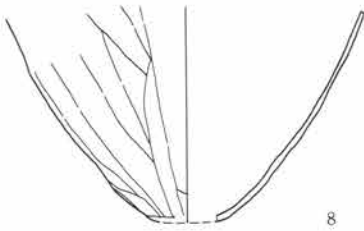
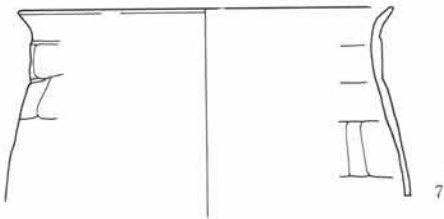
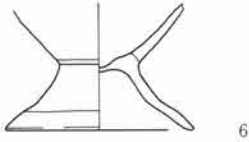
掘り方は、床面より7～10cmほど掘り込まれており、細かい凹凸が多くみられ、西北コーナー、西壁にかけては緩かに落ち込む。床下の施設は、床下土壇が2基、ピットが5基検出された。形態・規模は、K₁が楕円形で径105×95cm、深度11cm。K₂は長楕円形で径275×110cm、深度31cm。ピットは、円形または、楕円形で径50cm前後、深度8～17cmを測る。

S J 189は、大部分がS J 188によって切られ北壁側の一部が存在するだけである。平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、東西3.40mを測る。主軸方向は、N-73°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がる。

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	11.0・7.8・2.5 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 やや軟質 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。口縁部は横撫で、体部は指撫で。
2	須恵器 蓋 床直	—・鈕3.4・— 1/2 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈す。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。
3	須恵器 碗 覆土	—・8.2・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 酸化焰 橙色	ロクロ回転方向不明。高台は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
4	須恵器 碗 床直	—・8.5・— 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。高台は細身で端部は丸みをもつ。底部は回転糸切り。





No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
5	須恵器 盤 覆土	—・18.4・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は断面 四角形を呈しやや開く。体部・底 部は回転ヘラ削り。
6	土師器 甕 床直	19.8・—・— 小片 細砂粒・雲母・褐色鉍 物粒 普通 橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、 胴部はほとんどふくらまない。口 縁部は横撫で、胴部は横方向への ヘラ削り。
7	土師器 甕 カマド底部よ り23cm	—・4.4・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	器壁は薄く、胴部は縦方向へのヘ ラ削り。
8	土師器 甕 カマド火床面 直上	—・4.4・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	器壁は薄い。外面の胴部は縦方向 へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。
No	種	類	観察表掲載頁
9	鉄製品	刀子	892

S J 189

1	用途不明鉄製品	894
---	---------	-----

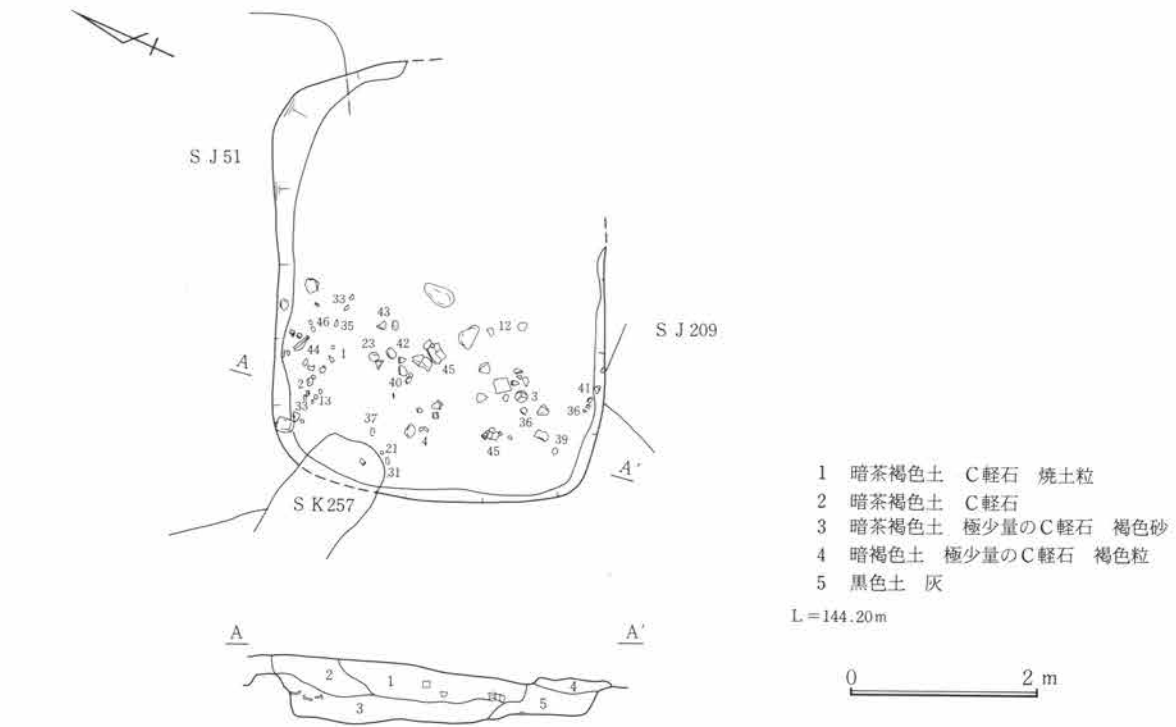
S J 191

201

本住居跡は、90～93G-49～H-01に位置し、S K 257、S J 51・S J 209と重複するが、新旧関係は、S K 257より本遺構のほうが古く、S J 51・S J 209より新しい。平面形態は、隅丸長方形を呈す。規模は、東西4.62m、南北2.52m、面積15.43㎡を測る。主軸方向は、N-65.5°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、大部分が暗茶褐色土で覆われている。

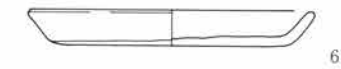
床面は、貼床は施されておらず、地山をそのまま踏み固めている。壁は、緩かに立ち上がり、壁高は、13～33cmを測り、平均は22cmである。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。また、カマドは、構築されていない。

第3章 検出遺構・遺物

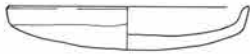


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床上14cm	12.6・—・— 1/5 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直立し、体部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
2	土師器 坏 床上22cm	13.4・13.0・3.7 3/5 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直立し、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床上5cm	12.9・12.9・3.4 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直立し、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 皿 床上25cm	12.2・10.8・2.5 完形 粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部はほぼ直立し、底部は平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
5	土師器 皿 覆土	15.6・15.0・— 1/6 粗砂粒・褐色鉍物粒 やや軟質 橙色	口縁部は直線的に僅かに開く。底部は極ゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。

第4節 歴史時代



6



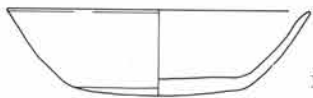
7



8



9



10



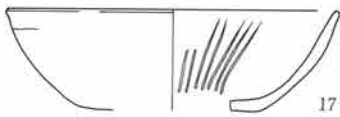
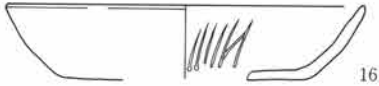
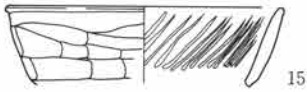
11



12

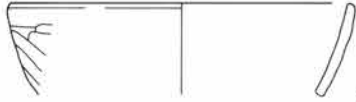






No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
6	土師器 皿 覆土	15.0・13.0・1.9 2/5 細砂粒・雲母・石英 普通 橙色	口縁部は直線的に開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。S J 191-12・13の須恵器皿と同一形態を呈す。
7	土師器 坏 覆土	12.6・12.4・2.3 3/4 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	口縁部はほぼ直立し、底部は極ゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
8	土師器 坏 覆土	16.8・14.6・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、底部はゆるい丸みを呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
9	土師器 坏 覆土	15.8・12.2・— 小片 粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は外反し、底部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
10	土師器 坏 覆土	16.0・9.2・4.5 1/2 粗砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で。体部・底部はヘラ削り。
11	土師器 坏 床上17cm	14.6・10.0・3.6 小片 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	口縁部はやや外反し、底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。内面の体部は斜放射状暗文と部分的に逆傾斜の暗文が施され斜格子をなす部分がある。底部は弧状の暗文が施されている。
12	土師器 坏 床直	15.6・8.4・4.3 1/3 粗砂粒・褐色鉾物粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。底部もヘラ削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されている。

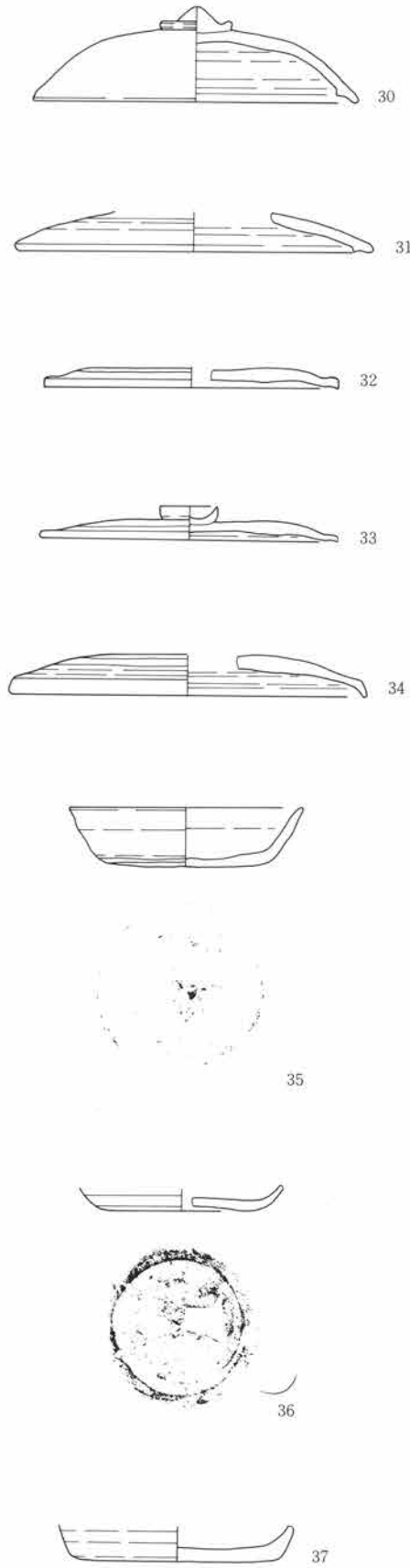
第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
13	土師器 坏 床上27cm	14.0・9.0・3.5 1/3 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。外面の口縁部は横撫で、体部は左方向へのへら削り。底部は不定方向へのへら削り。内面は底部から体部にかけて放射状暗文が施されている。
14	土師器 坏 覆土	12.8・7.8・4.3 1/10 粗砂粒・雲母・褐色鉍 物粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り、内面の体部は放射状暗文が施されている。
15	土師器 坏 覆土	14.4・12.2・— 1/10 粗砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的でほとんど開かない。口唇端部は外側にやや肥厚する。外面の口縁部は横撫で、体部は3段の左方向へのへら削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されている。
16	土師器 坏 覆土	19.0・13.0・4.9 1/10 細砂粒・雲母・褐色鉍 物粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。内面の体部は放射状暗文が施されている。
17	土師器 坏 覆土	17.4・9.4・5.3 1/8 細砂粒 やや軟質 橙色	体部から口縁部にかけて丸みをもち、底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部・底部はへら削り。内面の体部は放射状暗文が施されている。
18	土師器 碗 覆土	18.6・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもつ。口唇部は横撫で、口唇部以下は左方向へのへら削り。
19	土師器 坏 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒 普通 にぶい橙色	外面は体部・底部ともにへら削り。内面の体部は放射状暗文、底部は螺線状暗文が施されている。
20	土師器 碗 覆土	15.6・—・— 小片 細砂粒 還元焰 内外面とも黒色処理 灰色	内外面とも口唇部までへら磨き。

第4節 歴史時代

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
 <p>21</p>	土師器 埴 床上17cm	18.0・—・—、1/10 粗砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
 <p>22</p>	須恵器 蓋 覆土	14.4・鈕3.8・2.4 2/3 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は偏平で、天井部の周辺部はやや外反する。内面には身受けのカエリをもつ。天井部の2分の1程度は回転ヘラ削り。
 <p>23</p>	須恵器 蓋 床上17cm	14.4・4.0・2.9 1/4 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。器壁は厚く、鈕は偏平状で、天井部は直線的で、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の2分の1程度は回転ヘラ削り。
 <p>24</p>	須恵器 蓋 覆土	14.8・4.8・2.2 1/3 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は偏平状で、天井部の周辺部はやや外反する。内面には身受けのカエリをもつ。天井部の2分の1程度は回転ヘラ削り。
 <p>25</p>	須恵器 蓋 93G-49	12.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	天井部はゆるい丸みをもち、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度まで回転ヘラ削り。
 <p>26</p>	須恵器 蓋 93G-49 93G-40	14.2・4.0・1.8 1/3 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は偏平状を呈し、天井部はほぼ平坦、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。
 <p>27</p>	須恵器 蓋 93G-49	16.0・—・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	天井部は丸みをもち、周辺部でやや外反し、内面には身受けのカエリをもつ。
 <p>28</p>	須恵器 蓋 93G-49	14.0・3.8・2.2 2/5 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部は平坦で、端部は折り曲げ、外面は全体的に自然釉が付着。
 <p>29</p>	須恵器 蓋 93G-49	14.0・—・— 1/8 白色鉾物粒 還元焰 褐灰色	天井部は平坦で、端部は折り曲げ、天井部は回転ヘラ削り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
30	須恵器 蓋 96G-37 94G-48	18.6・紐4.0・5.5 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。紐は擬宝珠状を呈し、天井部は丸みをもち、内面には身受けのカエリをもつ。外面は自然釉が全面的に付着。
31	須恵器 蓋 床上22cm	20.6・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	天井部は直線的で、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。
32	須恵器 蓋 床上16cm	17.0・—・— 1/10 細砂粒 還元焰 灰白色	天井部はほぼ平坦。端部は僅かに下方に引き出されている。天井部の大半は回転ヘラ削り。
33	須恵器 蓋 床上25cm・ 24cm・9cm	17.2・紐3.2・2.9 7/8 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。紐は輪状を呈し、天井部はほぼ平坦で、端部は僅かに引き出されている。天井部の2分の1程度までは回転ヘラ削り。
34	須恵器 蓋 覆土	20.6・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	天井部は極ゆるい丸みをもち、端部は折り曲げ。天井部の3分の2程度まで回転ヘラ削り。
35	須恵器 坏 床上18cm・ 10cm	13.4・10.2・3.5 3/4 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に開く。底部はヘラ切り。
36	須恵器 坏 床上13cm・ 10cm	—・10.0・— 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 暗緑灰色	ロクロ右回転。底部は回転ヘラ削り。
37	須恵器 坏 床上33cm	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	底部は不定方向へのヘラ削り。



38



39



40



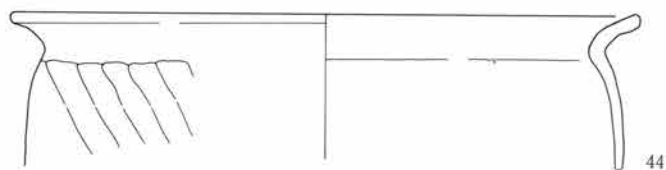
41



42

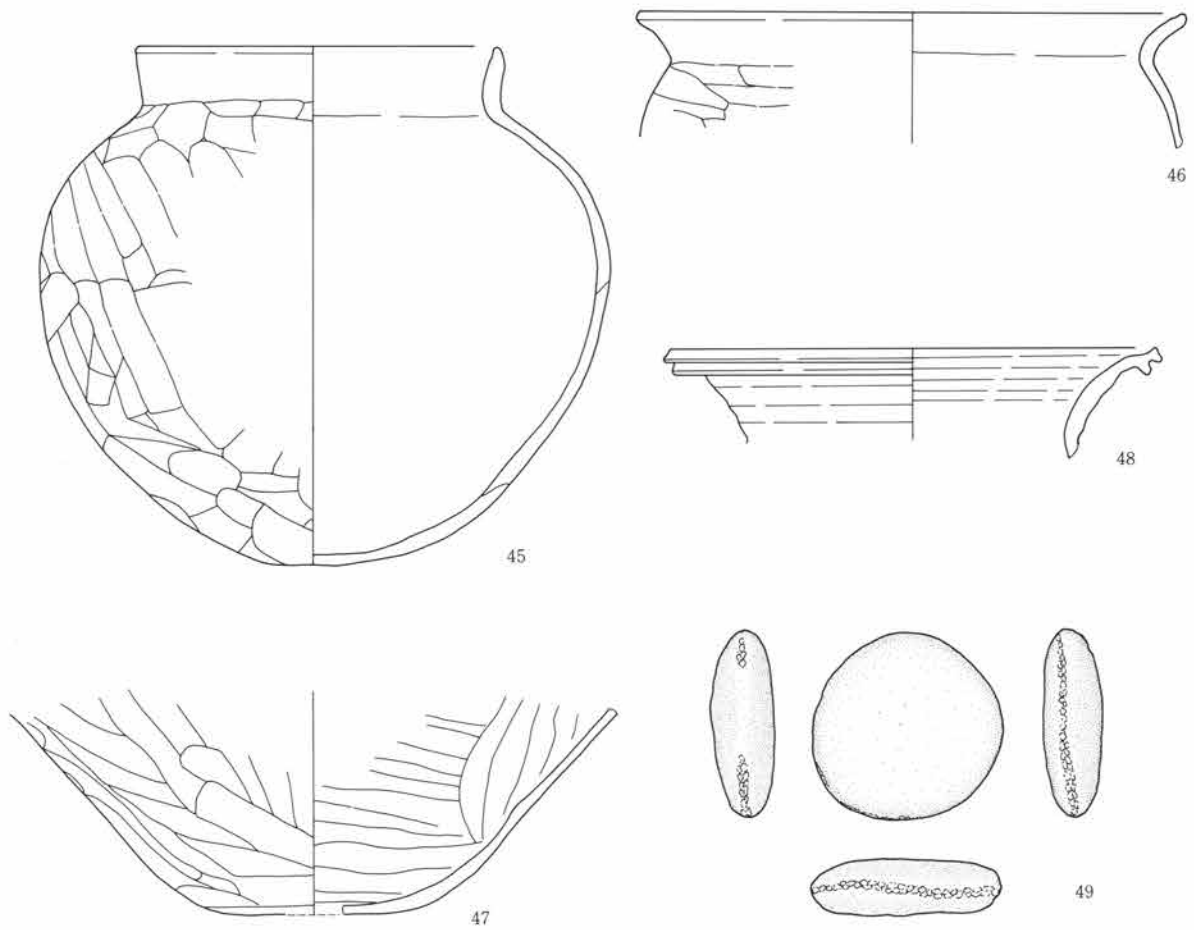


43



44

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
38	須恵器 皿 床上7cm	14.6・12.0・2.0 4/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は直線的に開く。底部は内側にやや盛り上がり。回転ヘラ削りで部分的に不定方向へのヘラ削りがみられる。
39	須恵器 皿 床上14cm	16.8・13.2・2.5 2/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は直線的に開く。底部は回転ヘラ削り。
40	須恵器 皿 床上38cm 覆土	17.4・15.0・2.5 1/4 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部はほぼ直線的に開く。底部はヘラ切り後回転ヘラ削りが施されている。
41	須恵器 盤 床上12cm	24.0・21.4・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	口縁部はやや丸みをもつ。底部は回転ヘラ削り。
42	須恵器 碗 床上7cm	—・12.6・— 1/4 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面四角形を呈し「ハ」の字状に開く。底部は回転ヘラ削り。
43	須恵器 碗 床上4cm	—・9.0・— 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち開く。高台は稜をもち開く。底部は回転ヘラ削り。
44	土師器 甕 床上17cm	33.2・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 普通 暗赤褐色	口径は大きく、口縁部は外反する。胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴		
45	土師器 甕 床上7cm・6cm・ 21cm	19.4・3.8・27.5 3/5 細砂粒・粗砂粒・褐色鉾物 粒 普通、橙色	口縁部は直立ぎみ、胴部は上位で大きくふくらみ、底部は丸底ぎみである。外面の口縁部は横撫で。胴部は頸部周辺で横方向へのヘラ削り。底部周辺は斜め方向へのヘラ削り。その間は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。		
46	土師器 甕 床上10cm	28.8・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒・褐色鉾物 粒 普通、橙色	口径は大きく、口縁部は外反し、胴部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。		
47	土師器 甕 床直	一・12.0・一、小片 細砂粒・粗砂粒・褐色鉾物 粒 普通、橙色	胴部は大きく開く。底部はほぼ平底を呈す。外面の胴部は斜め方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。		
48	須恵器 甕 床直	25.6・一・一、小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は外傾し、端部下には1条の凸帯がまわる。		
No	種類・器形	出土位置	計測値	石材	特徴
49	石製品 敲石	覆土	10.1・9.8・3.3cm 450g	輝石安山岩（粗粒）	側面に敲打痕がみられる。

S J 192

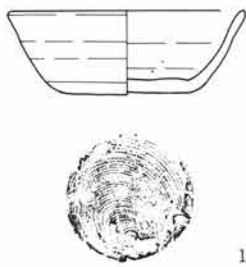
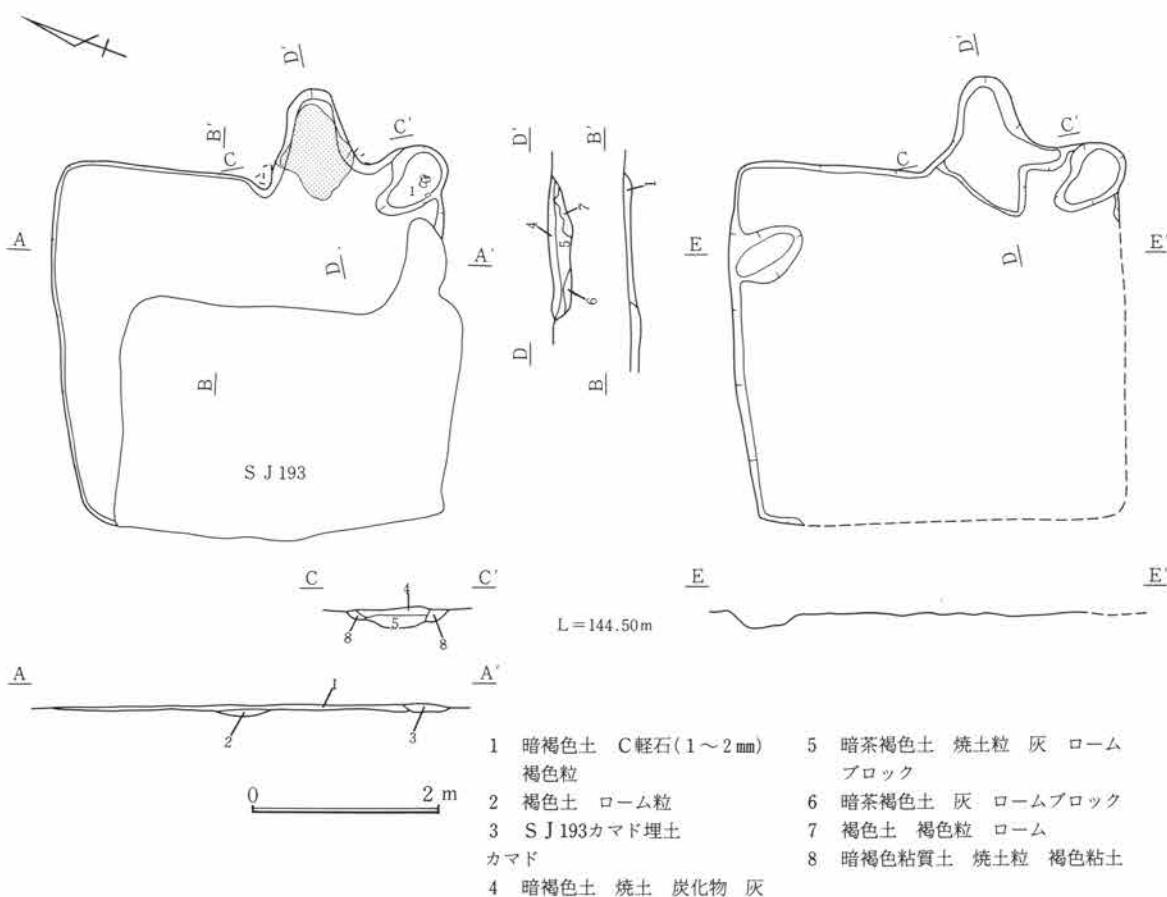
204

本住居跡は、109～111G-38～40グリッドに位置し、S J 193と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の西南部分は、S J 193によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.81m、南北4.15m、面積は推定で16.26㎡を測る。主軸方向は、N-68.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が2～7cmと低いため不明確である。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は、径84×60cm、深度26cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部も右袖部が欠落している。規模は、全長103cm、幅135cmを測る。

掘り方は、床面より2～3cmほど掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、北壁際に床下土壇が1基検出され、形態は楕円形で、規模は径82×56cm、深度11cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 貯蔵穴	12.4・6.8・4.4 1/2 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焙 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的にやや開く。底部は回転糸切り。

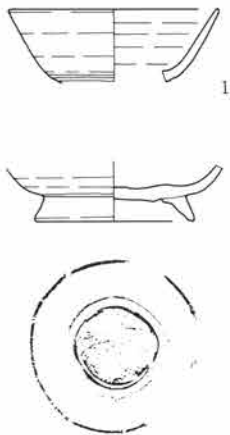
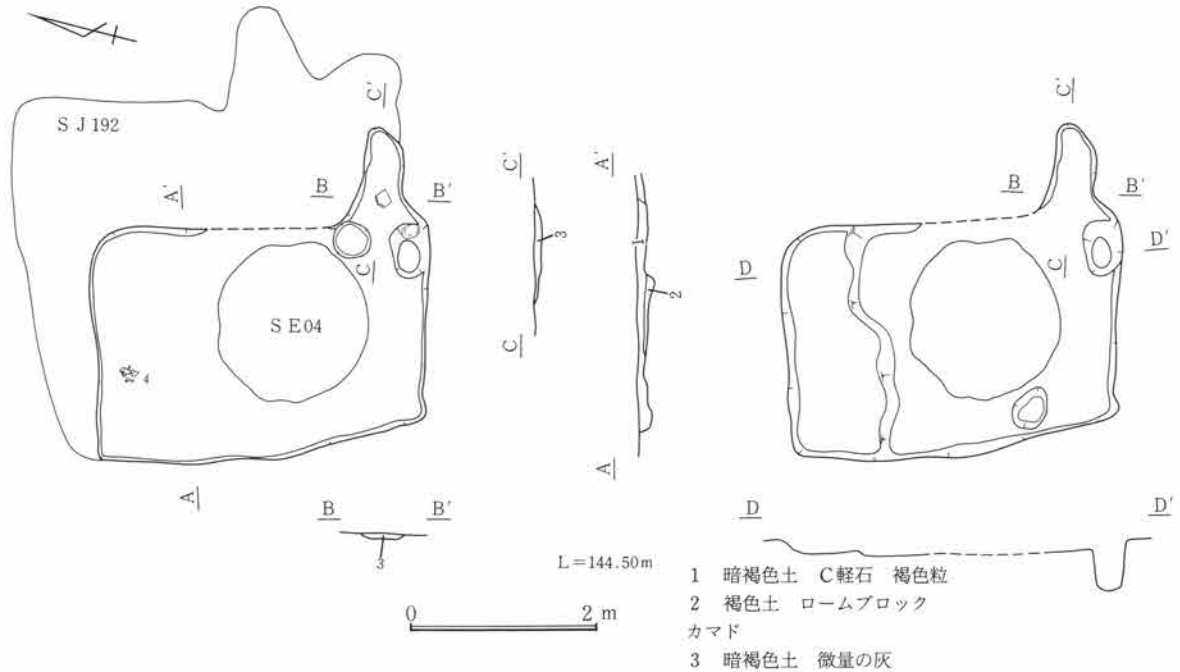
S J 193

本住居跡は、109～111G-38～39グリッドに位置し、SE04、S J 192と重複するが、新旧関係は、SE04より本遺構のほうが古く、S J 192より新しい。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.47m、南北3.60m、面積8.74㎡を測る。主軸方向は、N-74°-Eを指す。

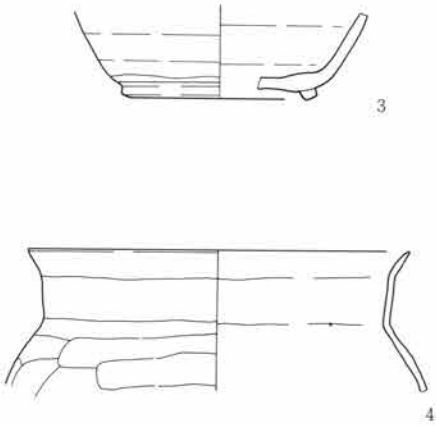
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、2～8cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径58×36cm、深度49cmを測る。

カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、確認面からの残存高が浅いため天井部・袖部等の区分はできなかった。規模は、全長103cm、幅94cmを測り、燃焼部から煙道部にかけての残存部分は全て壁外に位置する。

掘り方は、床面より5～9cmほど掘り込まれており、北壁から3分の1程度の所に2～4cmの段をもつ。掘り方の面は、平坦である。床下の施設は、南壁際よりピットが1基検出され、形態は楕円形で、規模は径48×35cm、深度22cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	11.2・6.0・— 1/5 細砂粒 還元焰 灰色	体部は立ち上がりに丸みをもち、口縁部は直線的に開く。
2	須恵器 碗 覆土	—・8.4・— 1/3 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は立ち上がりに丸みをもち、高台は断面三角形を呈し、やや開く。底部は回転糸切り。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 碗 覆土	—・10.4・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	体部は立ち上がりに丸みをもち、 高台は断面四角形を呈す。底部は 撫で。
4	土師器 甕 床上3cm 覆土	10.2・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横 撫で。胴部は横方向へのへら削り。

S J 195

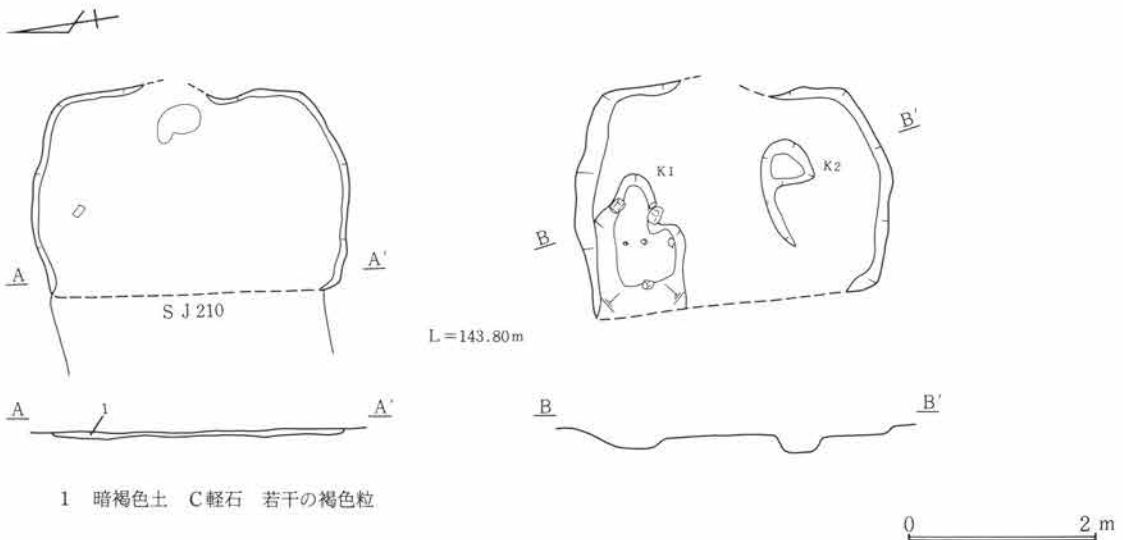
204

本住居跡は、90～91G43～44グリッドに位置し、S J 210と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、西壁はS J 210と重複しているため不明確であるが、南壁と北壁は中央がやや張り出した四角形を呈す。規模は、東西2.17m、南北3.35m、面積は推定で6.77m²を測る。主軸方向は、N—97°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が3～6cmと確認面から床面までが浅いため不明瞭である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は、確認面からの残存高が浅いため、天井部・袖部等の区分はできなかった。規模は、計測できなかった。

掘り方は、床面より4cm前後掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土壇が2基検出され、形態・規模は、K₁が不整形で径148×95cm、深度7cm。K₂は楕円形で径58×50cm、深度16cmを測る。



S J 196

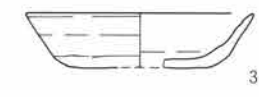
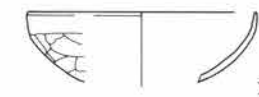
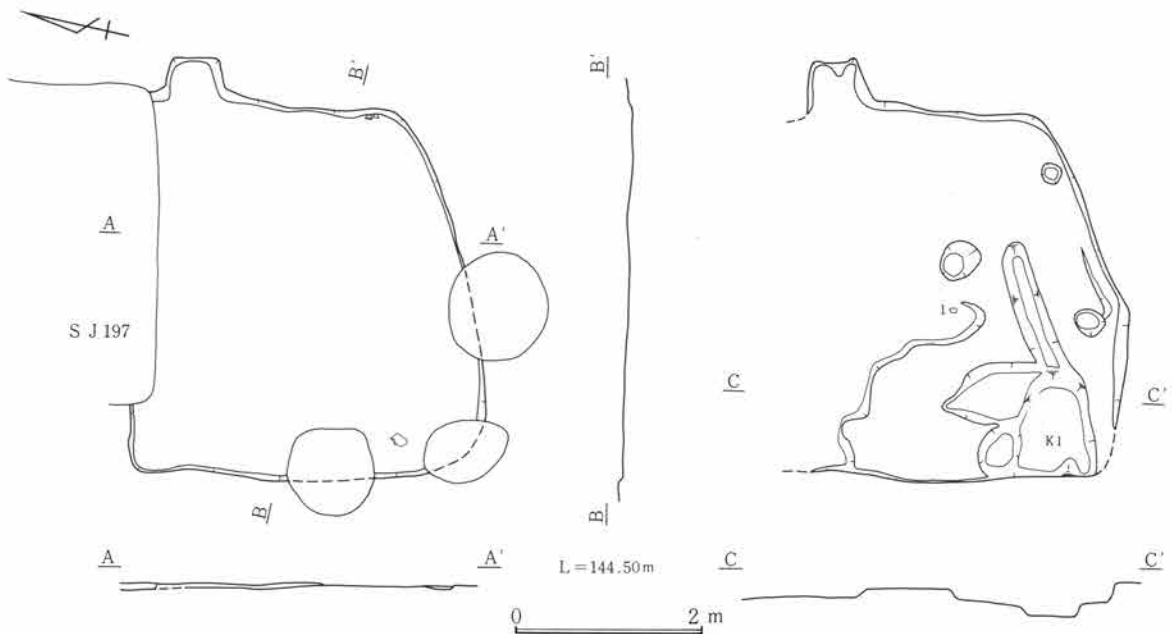
205

本住居跡は、107～108G—44～46グリッドに位置し、S K 263・S K 264・S K 288、S J 197・S J 198と重複するが、新旧関係は、S K 263・S K 264・S K 288、S J 197より本遺構のほうが古く、S J 198より新しい。北壁の大部分は、S J 197によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、東壁の短かい台形状を呈す。規模は、東西3.98m、南北3.25mを測る。主軸方向は、N—81°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が2～6cmと確認面から床面までが浅いため不明瞭である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の北よりに位置し、残存状態は、焼土が僅かに残っている程度であった。規模は、全長約145cmで幅は計測できなかった。

掘り方は、床面より2～15cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、平坦である。床下の施設は、溝状の落ち込みとピット4基、床下土坑1基が検出され、K₁は楕円形を呈し、径115×75cm、深度14cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下8cm	12.0・—・—、小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直立し、体部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	14.0・—・—、小片 粗砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みもち開く。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
3	須恵器 坏 覆土	12.0・7.4・2.8 1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	口縁部は直線的に開く。体部には1段のヘラ削り。底部は回転ヘラ削り。

S J 197

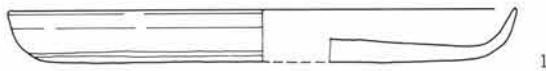
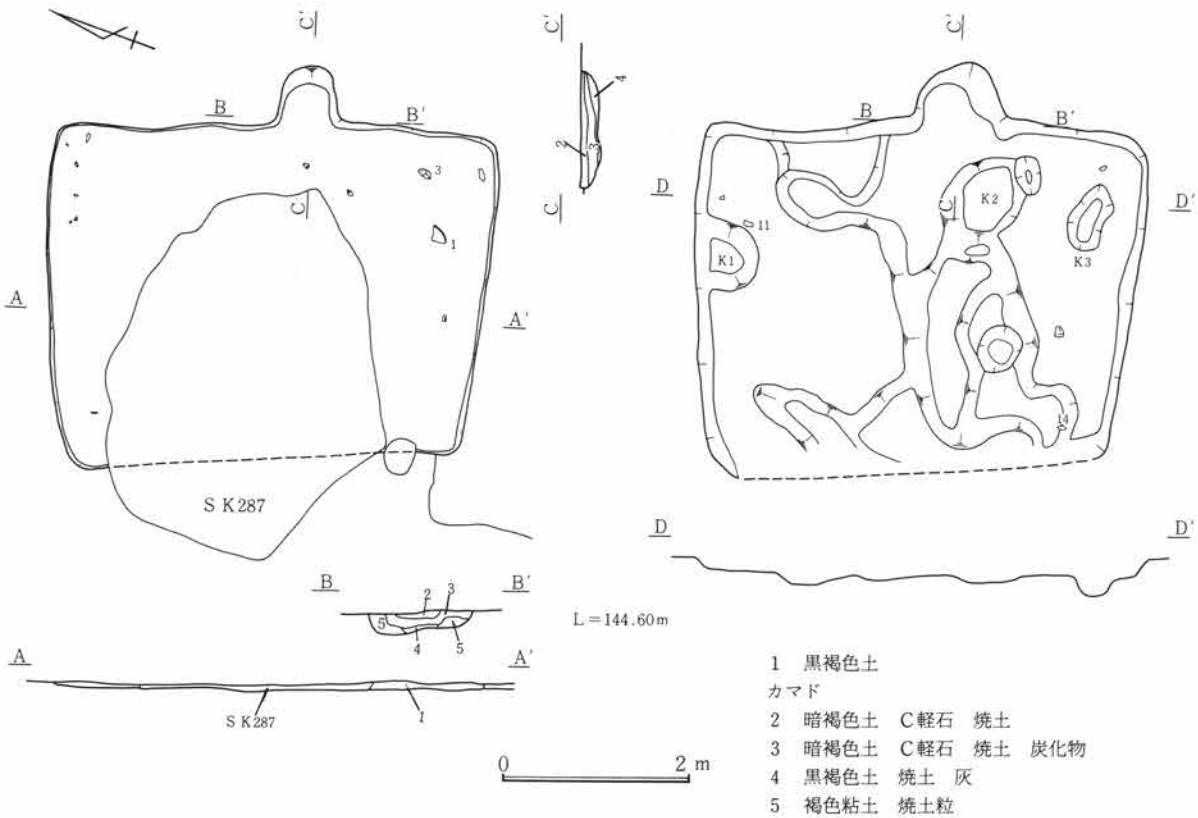
205

本住居跡は、107~109G-45~48グリッドに位置し、S K 287、S J 196・S J 198と重複するが、新旧関係は、S K 287より本遺構のほうが古く、S J 196・S J 198より新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西3.62m、南北4.76m、面積16.29m²を測る。主軸方向は、N-70.5°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が2~6cmと確認面から床面までが浅いため不明瞭である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

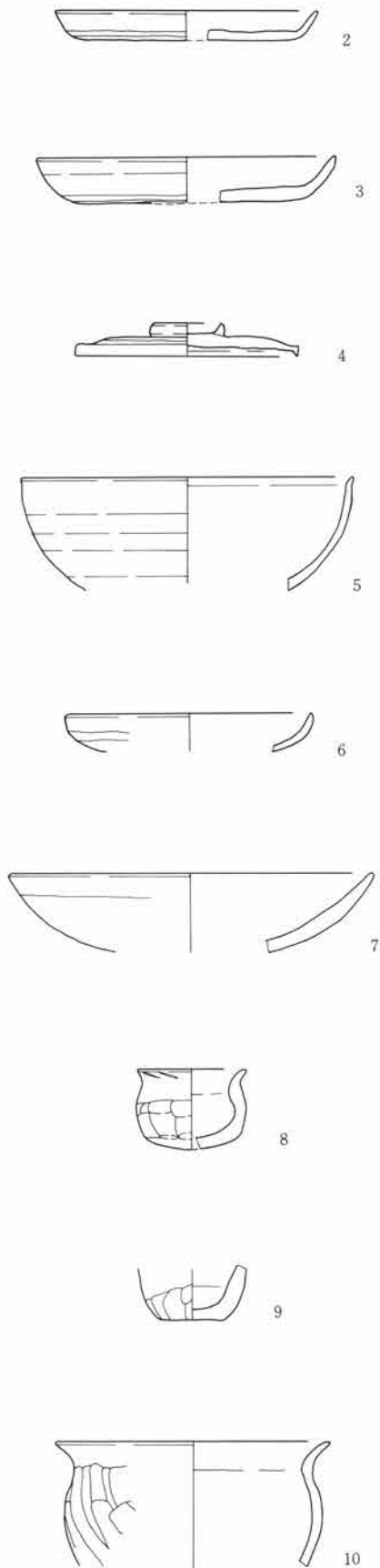
カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は、確認面からの残存高が低いわりには、割合いと良い状態で残っている。規模は、全長97cm、幅92cmを測る。

掘り方は、床面より10~17cmほど掘り込まれ、掘り方の面はほぼ平坦である。床下の施設は、ピットが2基、床下土壇が3基検出され、形態・規模は、K₁が半円形で径75×55cm、深度7cm。K₂は楕円形で径120×75cm、深度7cm。K₃は楕円形で径72×37cm、深度20cmを測る。

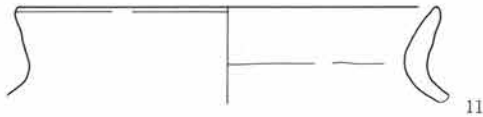


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 盤 床直	26.8・24.2・2.8、1/4 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰白色	ロクロ右回転。口縁部は立ち上がりで丸みもち、やや開く。底部は回転ヘラ削り。

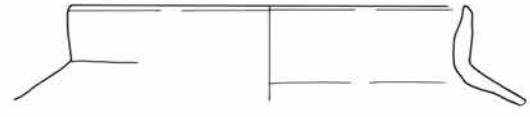
第3章 検出遺構・遺物



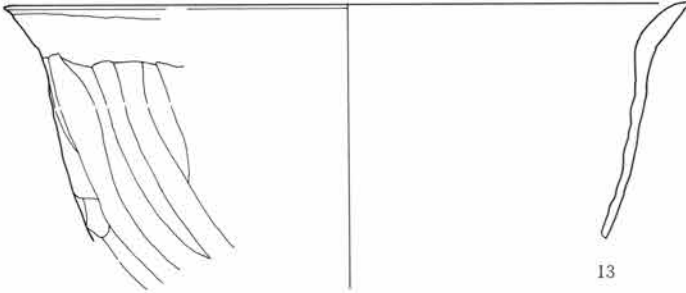
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 皿 覆土	15.2・13.0・1.7 1/4 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は直線的に開く。底部は回転ヘラ削り。
3	須恵器 皿 床直	17.4・13.4・3.6 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒・ 角礫 還元焰 灰色	口縁部はゆるい丸みをもち開く。口縁部の下位には1段の回転ヘラ削り。底部も回転ヘラ削り。
4	須恵器 蓋 覆土	13.0・4.0・1.7 1/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部は平坦で、端部は折り曲げ。天井部は回転ヘラ削り。
5	須恵器 碗 覆土	19.4・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は内湾ぎみで、口唇部は直線的に外傾する。
6	土師器 坏 覆土	14.2・—・— 細砂粒 普通 橙色	口縁部は丸みをもち開く。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
7	土師器 碗 覆土	21.0・—・— 小片 粗砂粒・細砂粒 軟質 橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。
8	土師器 壺 覆土	6.4・5.6・4.8 1/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部は上位でややふくらみ、底部は極ゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。底部もヘラ削り。
9	須恵器 壺 床下 覆土	—・3.6・— 1/6 細砂粒 還元焰 灰色	器壁は厚く、胴部は左方向への手持のヘラ削り。
10	土師器 甕 床下 覆土	16.0・—・— 小片 細砂粒・雲母・褐色鉍 物粒 普通 にぶい褐色	口縁部は外反し、胴部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。



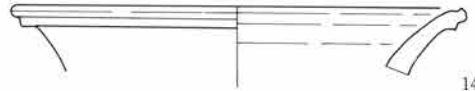
11



12



13



14

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
11	土師器 甕 床下7cm	20.8・一・一、小片、粗砂粒・雲母・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	口縁部は直線的で僅かに開き、横撫で。
12	土師器 甕 カマド、覆土	21.0・一・一、小片細砂粒・褐色鉱物粒・雲母、普通、にぶい橙色	口縁部は直線的で直立し、口唇端部は平坦で外傾する。胴部はヘラ削り。
13	土師器 甕 覆土	一・一・一、小片細砂粒・雲母、普通、橙色	口縁部は直線的に開き、胴部はゆるいふくらみをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
14	須恵器 甕 床下2cm	23.6・一・一、小片細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇端部は丸みをもち外傾する。口唇部には1条の断面三角形の凸帯がまわる。

S J 198

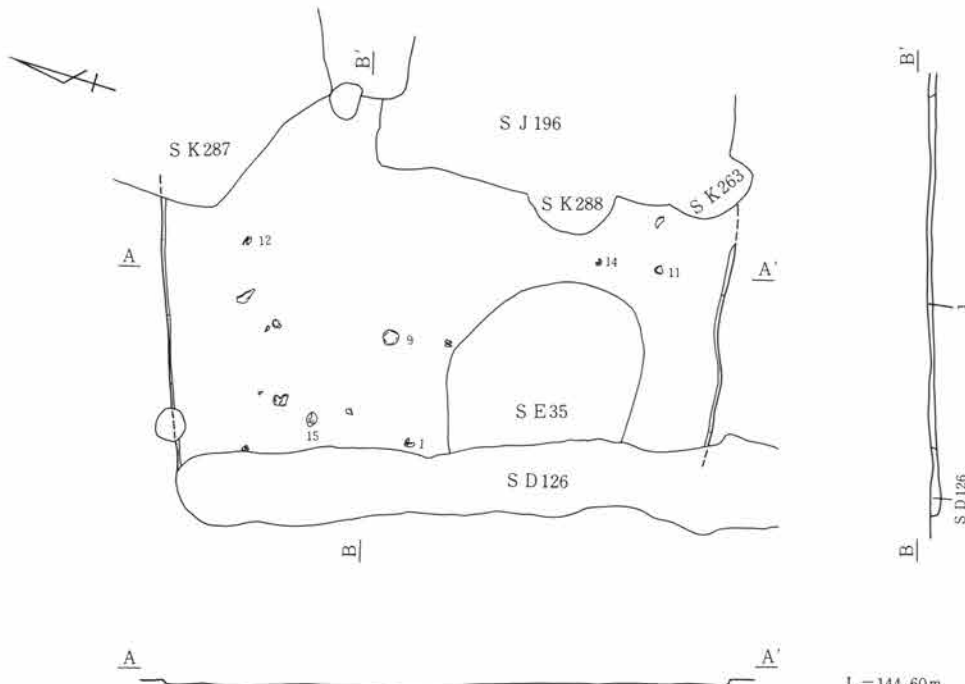
206

本住居跡は、109～111G-43～46グリッドに位置し、SE35、SK287、SD126、SJ197・SJ196と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の東壁は、SJ197・SJ196によって切られているため全貌は不明確であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、南北6.05mを測る。主軸方向は、N-69.5°-Eを指す。

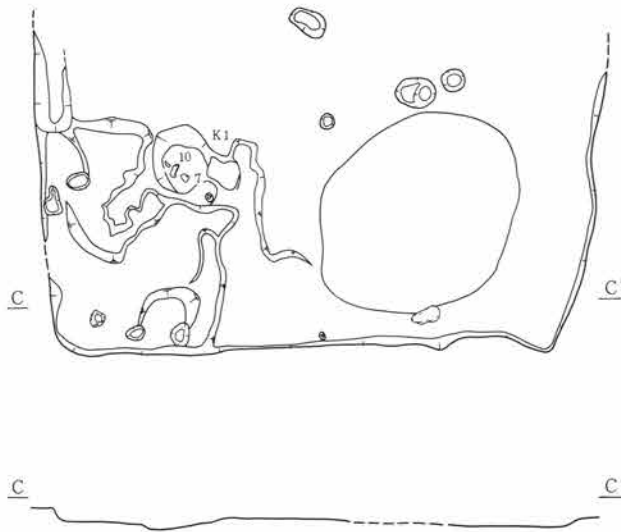
床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が2～4cmと確認面から床面までが浅いため不明瞭である。床面では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

掘り方は、床面より3～12cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、凹凸が多くみられる。床下の施設は、ピットが6基と床下土壇が1基検出された。形態は楕円形で、規模は径72×65cm、深度84cmを測る。

第3章 検出遺構・遺物



1 黒褐色土



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.8・12.2・3.3 1/3 細砂粒・褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。

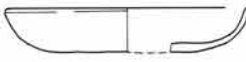
第4節 歴史時代



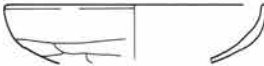
2



3



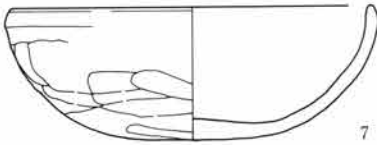
4



5



6



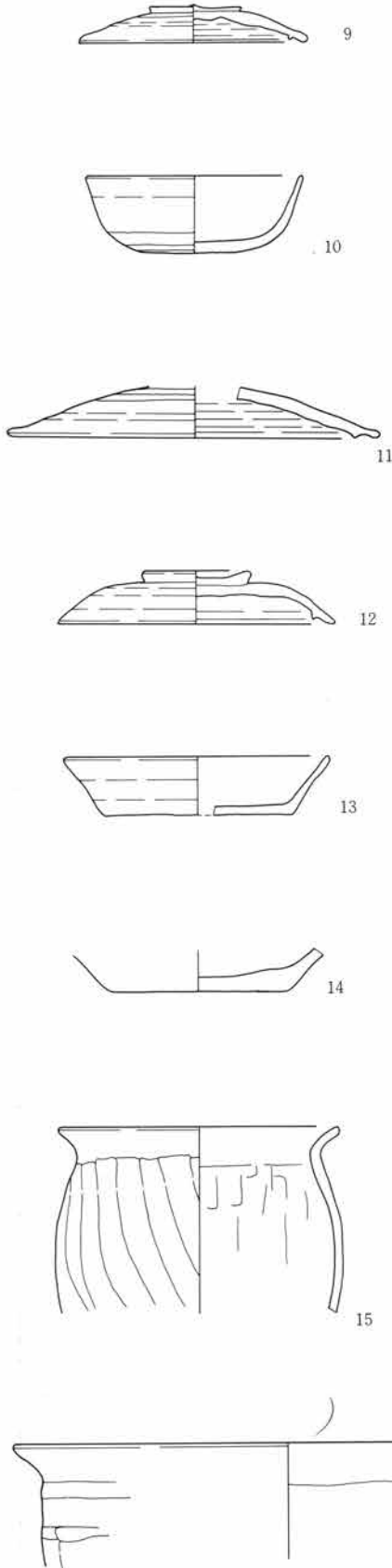
7



8

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 床直	14.2・12.6・— 1/10 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は内灣ぎみ、底部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	12.8・9.2・— 小片 細砂粒 軟質 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 覆土	12.6・7.0・2.3 1/10 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的でやや開く。体部はゆるい丸みをもち、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
5	土師器 坏 覆土	13.6・12.6・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内灣ぎみ、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
6	土師器 坏 覆土	13.6・11.4・— 1/8 細砂粒・褐色鉱物粒 普通 橙色	口縁部は内灣ぎみ、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
7	土師器 碗 床下土壇底部 より10cm	19.2・8.0・7.0 2/5 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内灣ぎみ、体部はゆるい丸みをもち開く。底部は丸みをもち開く。底部は平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、体部は横方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
8	土師器 碗 覆土	19.6・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内灣ぎみで、横撫で。体部はヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物



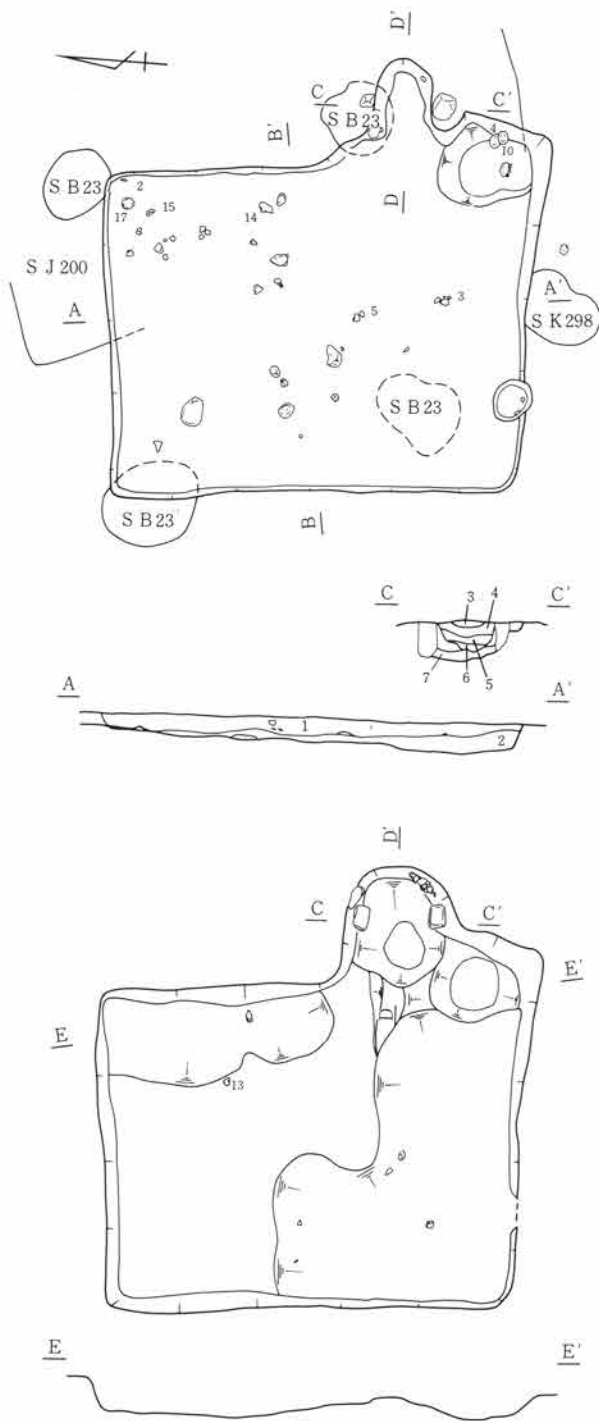
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	須恵器 蓋 床直	12.6・鈕6.0・2.2 完形 黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は偏平状を呈す。天井部は極ゆるい丸みを持ち、内面には身受けのカエリをもつ。天井部は2分の1程度まで回転ヘラ削り。
10	須恵器 坏 床下土壇底部 より47cm	12.4・10.0・4.3 1/4 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色	体部から口縁部にかけては直線的で僅かに開く。底部はゆるい丸底を呈し、回転ヘラ削り。
11	須恵器 蓋 床直	20.4・—・— 1/6 細砂粒 還元焰 灰色	天井部は直線的で、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の3分の1程度までは回転ヘラ削り。
12	須恵器 蓋 床直	15.8・6.2・3.0 1/5 黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は偏平状を呈し、天井部はゆるい丸みを持ち、内面には身受けのカエリをもつ。外面は全面的に自然釉が付着。
13	須恵器 坏 覆土	15.0・10.8・3.3 1/3 細砂粒 還元焰 灰白色	体部から口縁部にかけては外反し、底部は不定方向への撫で。
14	須恵器 坏 床直	—・10.0・— 小片 細砂粒 酸化焰 にぶい橙色	底部は回転糸切り。
15	土師器 甕 床直	16.0・—・— 1/4 粗砂粒・褐色鉱物粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は外反し、胴部は丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で、胴部は縦方向へのヘラ削り。内面は横方向へのヘラ撫でが施されている。
16	土師器 甕 覆土	31.2・—・— 小片 粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部の上位は直線的で、ヘラ削り。

S J 199

208

本住居跡は、106～109G-35～37グリッドに位置し、S K 296・S K 298、S B 23、S J 200・S J 201と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、南壁・北壁が東壁側でやや広がるが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西4.00m、南北4.67m、面積16.49㎡を測る。主軸方向は、N-83.5°-Eを指す。覆土は、自然堆積状態を呈し、暗褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、11～19cmを測り、平均は14cmである。



L=144.40m

壁溝・柱穴は、検出されなかったが、貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径115×91cm、深度24cmを測る。貯蔵穴内からは、3の土師器杯、10の須恵器杯が出土している。

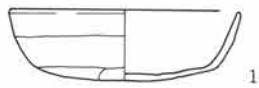
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は良好な状態で残っている。規模は、全長90cm、幅133cmを測る。袖部は両袖部とも柱状に加工した礫を使用して構築されている。

掘り方は、底面より、8～17cmほど掘り込まれ、東壁よりと南壁よりにかけては緩やかに落ち込んでいる。掘り方の面は、ほぼ平坦である。埋土は、ロームブロックを含む褐色土である。床下の施設は検出されなかった。

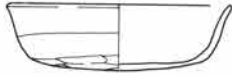
- 1 暗褐色土 C軽石 焼土粒 炭化物
- 2 褐色土 C軽石 焼土 炭化物 ロームブロック (貼床)
- カマド
- 3 暗褐色粘質土 若干のC軽石 焼土
- 4 暗褐色粘質土 焼土 炭化物 褐色粘土ブロック
- 5 暗褐色土 焼土 炭化物
- 6 黒褐色土 焼土粒 灰
- 7 暗褐色土 焼土 ロームブロック

0 2 m

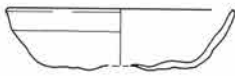
第3章 検出遺構・遺物



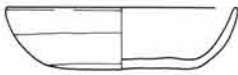
1



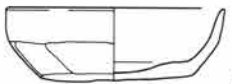
2



3



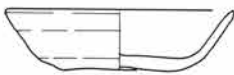
4



5



6



7



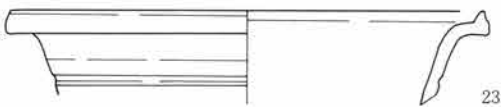
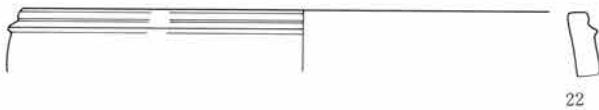
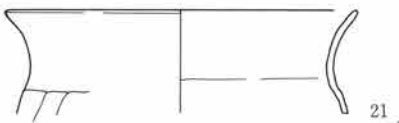
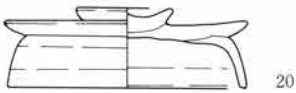
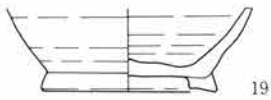
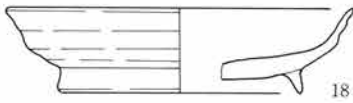
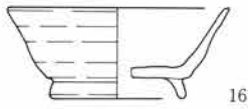
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド 覆土	12.2・9.6・3.7 1/4 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的でやや開く。底部は極ゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 床下 8 cm	11.8・9.4・3.5 完形 細砂粒・雲母・石英 普通 橙色	口縁部はやや外反し、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
3	土師器 坏 床直	12.0・8.0・3.2 1/5 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削りで、指頭痕がみられる。
4	土師器 坏 床下直上 床下 8 cm	12.1・8.2・3.3 完形 細砂粒・粗砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的にやや開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部は大まかなヘラ削り。
5	土師器 坏 床直	11.6・8.2・3.9 3/4 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉱物粒 普通 橙色	口縁部は直線的でほぼ直立し、体部は直線的に開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は横方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
6	須恵器 坏 床下	11.2・5.8・3.7 2/3 黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部の立ち上がりに丸みをもち、口縁部は直線的に開く。底部は回転糸切り。
7	須恵器 坏 覆土	12.0・6.4・3.3 2/3 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部の立ち上がりに丸みをもち、口縁部は直線的に開く。底部は回転糸切り。

第4節 歴史時代

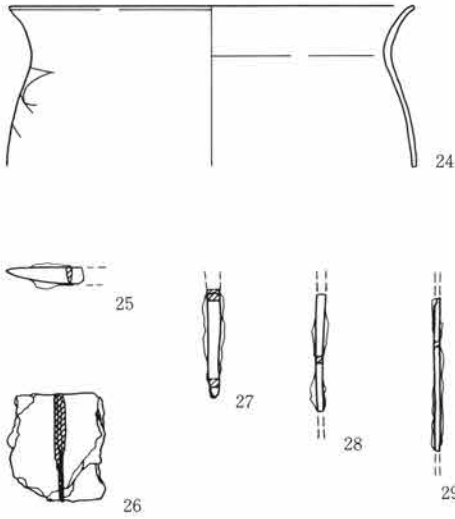


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
8	須恵器 坏 覆土	12.6・6.4・3.2 1/2 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
9	須恵器 坏 覆土	—・7.8・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	底部は回転糸切り。
10	須恵器 坏 床下直上 床下7cm	—・7.8・— 1/3 粗砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。底部はヘラ切り後、不定方向へのヘラ削り。
11	須恵器 坏 覆土	—・7.2・— 1/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。
12	須恵器 蓋 床下直上 床下20cm	16.2・—・— 1/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。鈕は剥離。天井部はゆるい丸みをもち、端部は折り曲げ。天井部の中央部分は回転糸切りで鈕を貼付した後、周辺を撫でている。またその周辺は回転ヘラ削りが施されている。
13	須恵器 蓋 床下7cm	17.6・—・— 1/6 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	天井部は丸みをもち、端部は折り曲げ。天井部の2分の1程までは回転ヘラ削り。
14	須恵器 蓋 床上5cm 覆土	17.6・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。天井部はゆるい丸みをもち、口縁部は外反ぎみ、口唇端部は折り曲げ、天井部の下半までは回転ヘラ削り。内面に重ね焼痕がみられる。
15	須恵器 碗 床直 覆土	17.2・9.5・— 1/3 細砂粒 還元焰軟質 灰色	ロクロ右回転。高台は欠損。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
16	須恵器 碗 覆土	11.6・7.8・4.8 1/5 細砂粒 還元焰 灰白色	体部から口縁部にかけては直線的でやや開く。高台はやや丸みをもちやや開く。底部は回転糸切り。
17	須恵器 碗 床上 6 cm・7 cm・4 cm	—・9.0・— 1/3 粗砂粒・白色鉍物粒 還元焰 灰色	体部はゆるい丸みをもち、やや開く。高台はやや丸みをもち、接地面は広い。底部は回転糸切り。周辺部は高台貼付時の撫で。
18	須恵器 坏 カマド 床下	—・13.0・— 1/4 細砂粒 還元焰 灰白色	口縁部は外反し、体部は大きく開く。高台は細身でやや開く。底部は回転ヘラ削り。
19	須恵器 長頸壺 覆土	—・9.3・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	長頸壺底部、高台は偏平でやや丸みをもつ。内面の底部には自然軸が付着。
20	須恵器 蓋 カマド 床上 5 cm	12.8・鈕4.8・4.2 3/4 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	短頸壺蓋。ロクロ右回転。鈕は偏平状を呈し、天井部は水平で周辺部は鏝状を呈す。口縁部は上位で丸みをもち、口唇端部は平坦で内傾する。
21	土師器 甕 覆土	18.4・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、横撫で。胴部はヘラ削り。
22	須恵器 鉢 床下	30.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口唇端部は平坦で水平。端部下に1条の凸帯がまわる。
23	須恵器 甕 覆土	25.0・—・— 小片 細砂粒・円礫 還元焰軟質 灰白色	口縁部は直線的でやや開く。口唇部は大きく外反し、端部は断面三角形の凸帯が上方を向く。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
24	土師器 甕 覆土	21.4・一・一、小片 細砂粒・雲母、普通 褐色	口縁部は外反し、横撫で。胴 部はへら削り。
No	種 類	観察表掲載頁	
25	鉄製品 刀子	892	
26	用途不明鉄製品	895	
27	棒状不明鉄製品	894	
28	棒状不明鉄製品	894	
29	棒状不明鉄製品	894	

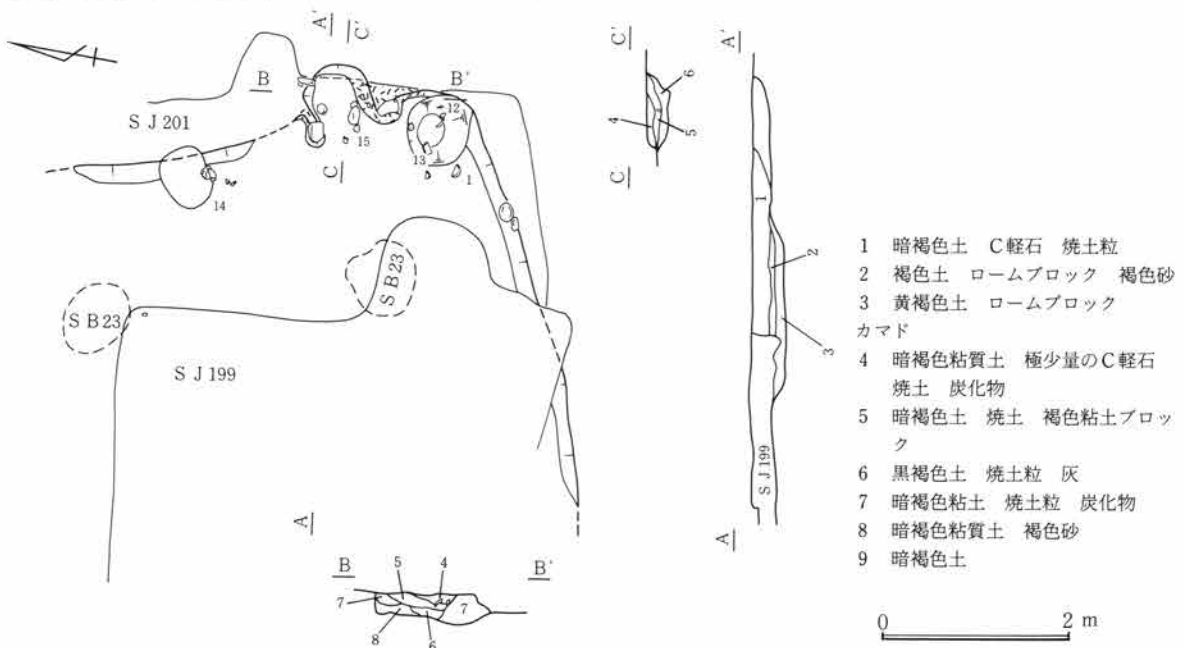
S J 200

210

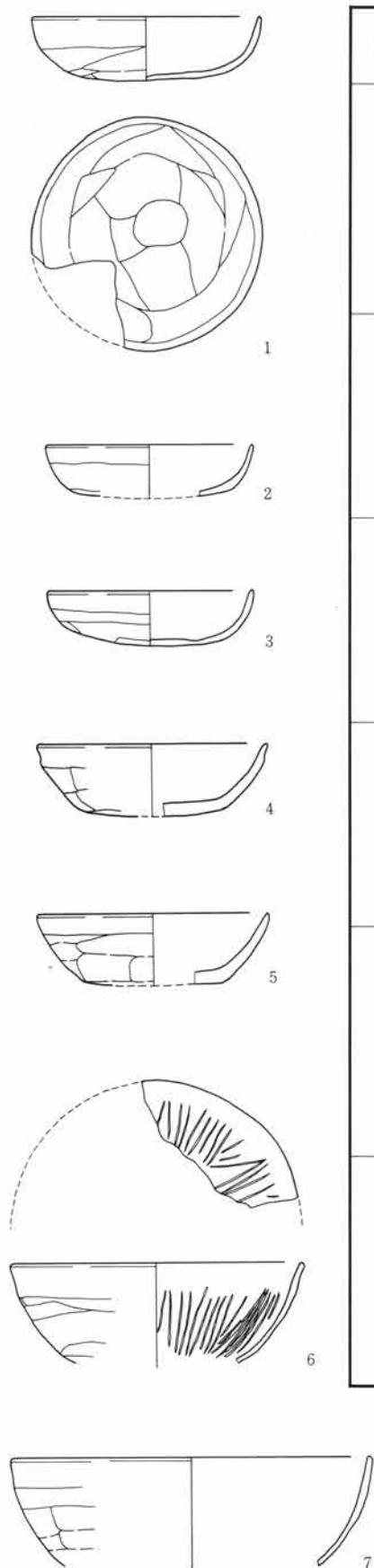
本住居跡は、106～108G—35～38グリッドに位置し、SK296、S J 199・S J 201と重複するが、新旧関係は、SK296、S J 199より本遺構のほうが古く、S J 201より新しい。本遺構の西半分は、S J 199によって切られ、また、北壁側は、確認できなかったため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形に近い形状を呈すと推測される。規模は、計測できなかったが、南北は4.50m以上と推測される。主軸方向は、N—66.5°—Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、7～10cmを測る。床面では、壁溝・柱穴は、検出されなかったが、貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は、楕円形を呈し、規模は、径79×70cm、深度31cmを測る。

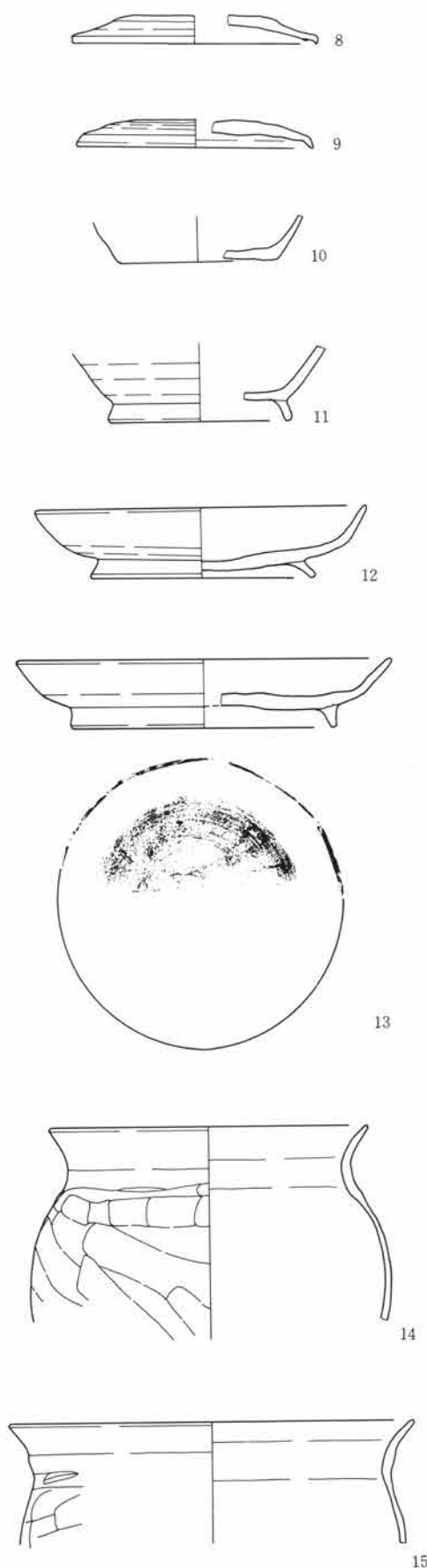
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部の一部は崩れている。規模は、全長82cm、幅121cmを測る。



第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 貯蔵穴底部より2cm	13.4・9.2・3.7 9/10 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的でほとんど開かず、体部はゆるい丸味をもち開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は横方向へのへら削り。底部は不定方向へのへら削りではほぼ中程に指頭痕がみられる。
2	土師器 坏 床下	12.2・9.6・— 1/8 細砂粒・雲母 普通 にぶい褐色	口縁部は内湾ぎみ、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はへら削り。
3	土師器 坏 床下	12.0・10.8・3.3 3/5 粗砂粒・細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部は不定方向へのへら削り。
4	土師器 坏 カマド 覆土	13.6・8.2・4.2 1/8 細砂粒 やや軟質 橙色	口縁部はわずかに外反し、体部はゆるい丸味をもち開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は横方向へのへら削り。底部はへら削り。
5	土師器 坏 カマド覆土 覆土	13.6・8.4・— 1/6 細砂粒・褐色鉱物粒 やや軟質 にぶい橙色	体部から口縁部にかけて、ゆるい丸味をもち開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は2段の左方向へのへら削り。底部へら削り。
6	土師器 碗 床下	17.2・11.2・— 1/6 細砂粒、雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけて、ゆるい丸味をもち開き、外面の口縁部は横撫で。体部は左方向へのへら削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されている。
7	土師器 碗 貯蔵穴底部より10cm 覆土	21.2・—・— 1/10 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直立ぎみ、体部は丸味をもち開く。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。体部は横方向へのへら削り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
8	須恵器 蓋 床下	14.7・—・— 1/8 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	天井部は丸味をもち、端部は折りまげ。外面は自然釉が付着。内面に重ね焼き痕がみられる。
9	須恵器 蓋 覆土	14.2・—・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰色	天井部はゆるい丸味をもち、端部はやや開き気味の折りまげ。天井部の2分の1程は回転ヘラ削り。
10	須恵器 坏 床下	—・9.6・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	底部は不定方向への撫で。
11	須恵器 碗 カマド 覆土	—・10.6・— 1/8 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	体部は直線的に開く。高台は細身で端部は丸みをもつ。底部は回転撫で。
12	須恵器 皿 床直 貯蔵穴より8 cm 覆土	19.8・12.4・4.3 3/4 細砂粒・雲母・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は直線的に大きく開く。高台は細身で「ハ」の字状に開く。底部は回転ヘラ削り。
13	須恵器 皿 床直	22.6・16.0・4.1 1/2 細砂粒・細礫 還元焰 灰色	底部は回転ヘラ削り、高台を貼付する所に2条の沈線を引き高台の貼り付をよくさせている。高台は直立ぎみにつく。
14	土師器 甕 床下7cm 床下4cm	19.0・—・— 1/6 細砂粒 普通 橙色	口縁部は大きく外反し、胴部は上位に最大径をもつ。口縁部は横撫で。外面の胴部は左方向への横・斜めのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
15	土師器 甕 カマド直上 床下 覆土	24.2・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は弱い「コ」の字状で胴部はややふくらむ。口縁部は横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。

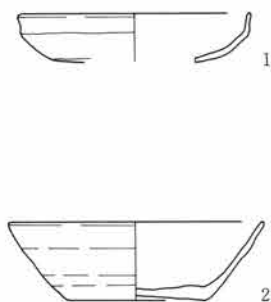
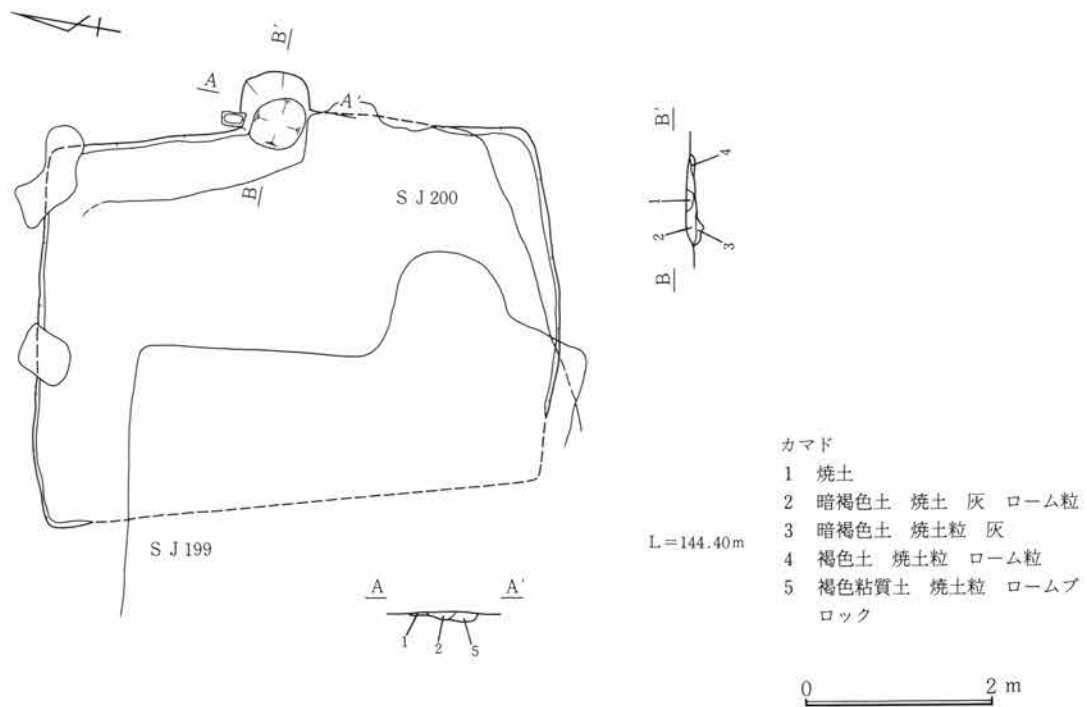
S J 201

210

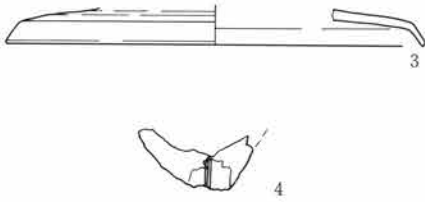
本住居跡は、106～108G—35～38グリッドに位置し、SK296、S J 199・S J 200、S B23と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の大部分は、S J 199・200に切られているため全貌は不明確であるが、平面形態は、長方形を呈すと推定される。規模は、東西3.97m、南北5.53m、面積は推定で21.57m²を測る。主軸方向は、N-76.5°-Eを指す。

床面の残存部分は、壁際の僅かな部分であるが、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が4～7cmと確認面より床面までが浅いため不明瞭である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は、確認面からの残存高が低いため、天井部・袖部等の区別はできず。僅かに焚口部の焼土が残っているだけであった。規模は、全長144cm、幅76cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.2・8.8・— 1/8 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直立、体部は丸味をもち開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で。体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	須恵器 坏 覆土	13.4・7.4・4.1 1/3 細砂粒・粗砂粒・黒色 鈳物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から底部にかけては丸味をもち開く。底部はヘラ切り後撫で。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 蓋 覆土	22.0、一・一・小片 細砂粒、還元焰 灰白色	天井部は直線的で、端部はやや 開きぎみの折り曲げ。
4	鉄製品	観察表は895頁	

S J 202

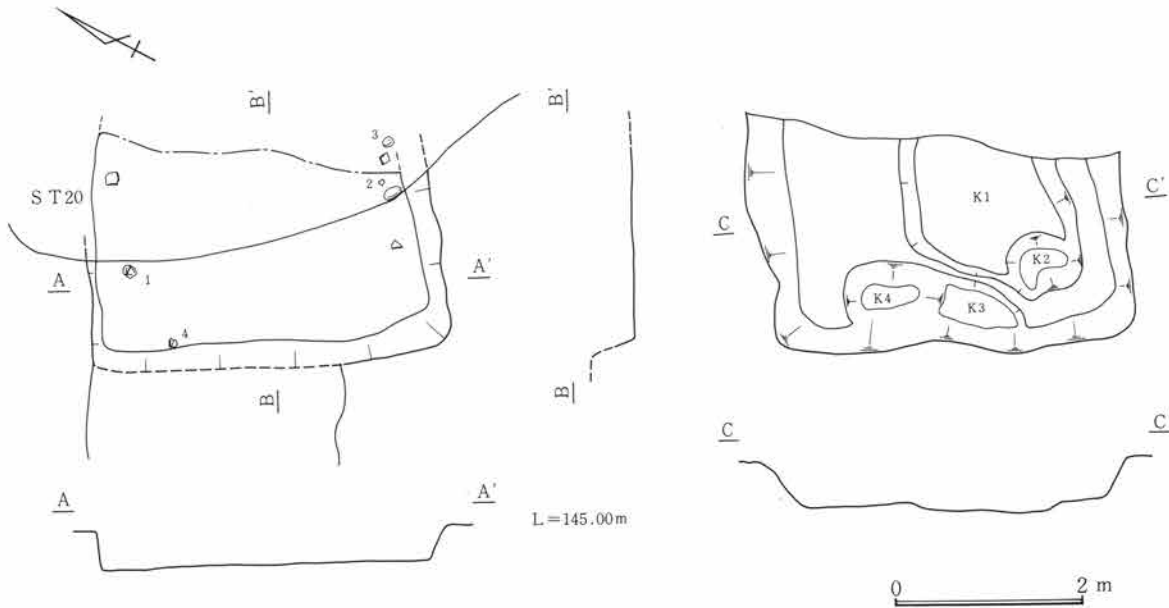
211

本住居跡は、103～105H-11～14グリッドに位置し、SK250、ST22と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の東半分は、SJ22によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、長方形を呈すと推測される。規模は、南北2.81mを測る。主軸方向は、N-60°-Eを指すと推測される。

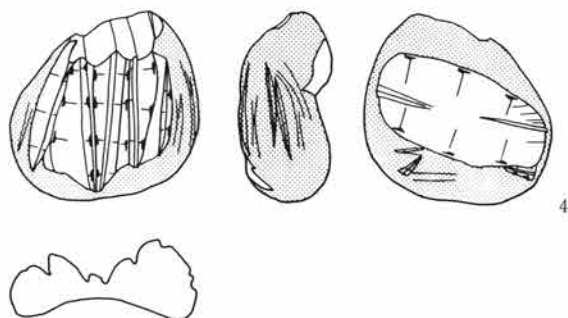
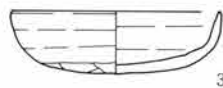
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、37～48cmを測り、平均は42cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、残存部分では確認されなかった。

掘り方は、床面より8～10cmほど掘り込まれ、掘り方の面は、平坦である。床下の施設は、床下土壇が4基検出され、形態・規模は、K₁が楕円形で径230前後×175cm、深度8cm。K₂は楕円形で径82×62cm、深度7cm。K₃は楕円形で径100×65cm、深度8cm。K₄は楕円形で径101×75cm、深度11cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床直	10.8・10.4・3.5 1/3 粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 床上4cm	12.6・12.0・3.8 1/8 粗砂粒・雲母 やや軟質 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
3	須恵器 坏 床直	11.0・8.7・3.2 完形 粗砂粒・石英・亜角礫 還元焰、灰色	ロクロ右回転。口縁部は立ち上がりで丸みをもち、底部は平底を呈す。底部は手持ちのヘラ削り。

No.	種類 器形	出土位置	計測値	石 材	観察表掲載頁
4	石製品 砥石	床直	9.9 10.0 4.9cm	軽石 (二ツ岳) ?	832

S J 203・216

212

S J 203は、116～118H-20～23グリッドに位置し、S K 300、S D 59、S J 216と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の西側4分の3ほどは、S J 216によって切られ全貌は不明であるが、平面形態は、東壁がカマドの両側でくい違いをみせるが、長方形に近い形状を呈すと推測される。規模は、東西・南北とも計測不可能であった。主軸方向は、N-75°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、21～34cmを測り、平均は28cmである。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

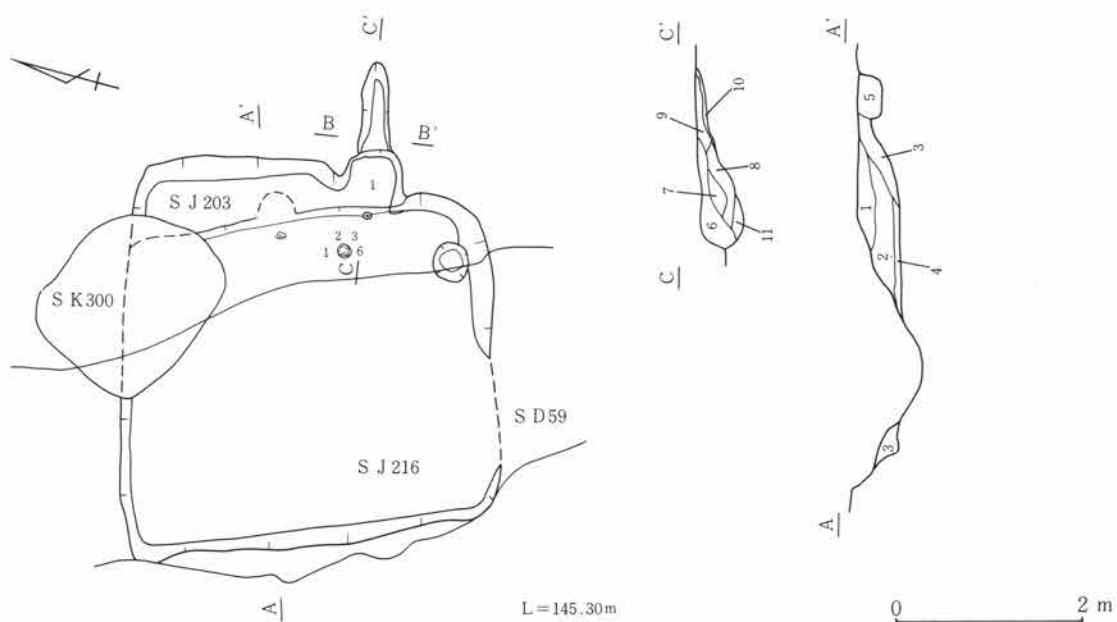
カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部・煙道部等は、良好な状態で残っている。規模は、全長185cm、幅97cmを測り、煙道部は壁外に138cmのびる。

S J 216は、116～118H-20～23グリッドに位置し、S K 300、S D 59、S J 203と重複するが、新旧関係は、S K 300、S D 59より本遺構のほうが古く、S J 203より新しい。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は東西3.45m、南北4.97m、面積は、推定で13.48m²を測る。主軸方向は、N-67°-Eを指す。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、暗茶褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、15～44cmを測り、平均は30cmである。壁溝・柱穴は、検出されなかったが、貯蔵穴は、南壁際の東隅に位置し、形態は楕円形を呈し、規模は径45×37cm、深度39cmを測る。

カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は、僅かに焼土が残り、痕跡がみられるだけであった。

S J 203とS J 216は、土層断面では、明確に新旧関係が確認できたが、出土した遺物を比較すると同時期または、S J 203からS J 216より新しい時期のものが出土している。



L = 145.30 m

0 2 m

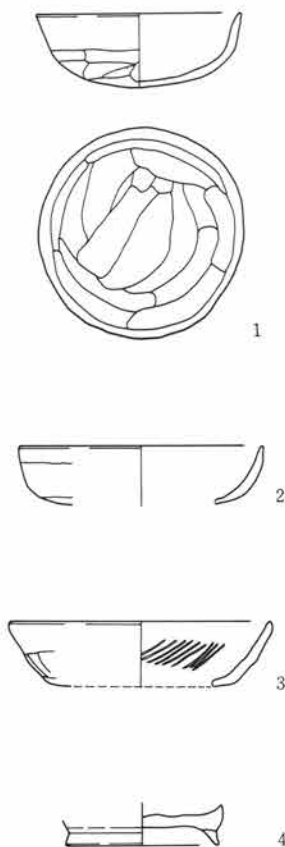
S J 216

- 1 暗茶褐色土 多量のCP
- 2 暗茶褐色粘質土 少量のCP
- 3 褐色土 多量のロームブロック
- 4 茶褐色粘土 床面を構成
- 5 褐色土 若干のCP

S J 203カマド

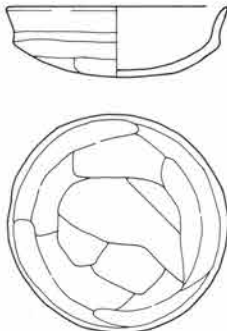
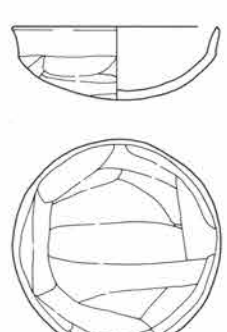
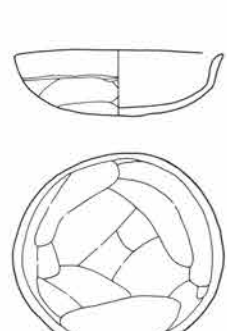
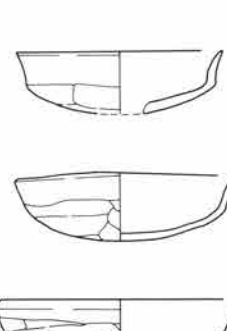

- 6 暗褐色土 C軽石 焼土粒 褐色粒
- 7 暗褐色粘土 焼土粒
- 8 暗茶褐色土 焼土
- 9 暗茶褐色土 若干のC軽石 焼土
- 10 焼土
- 11 黒褐色土 焼土粒 灰

S J 203



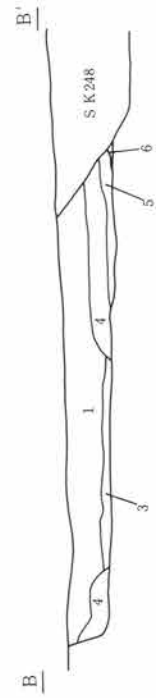
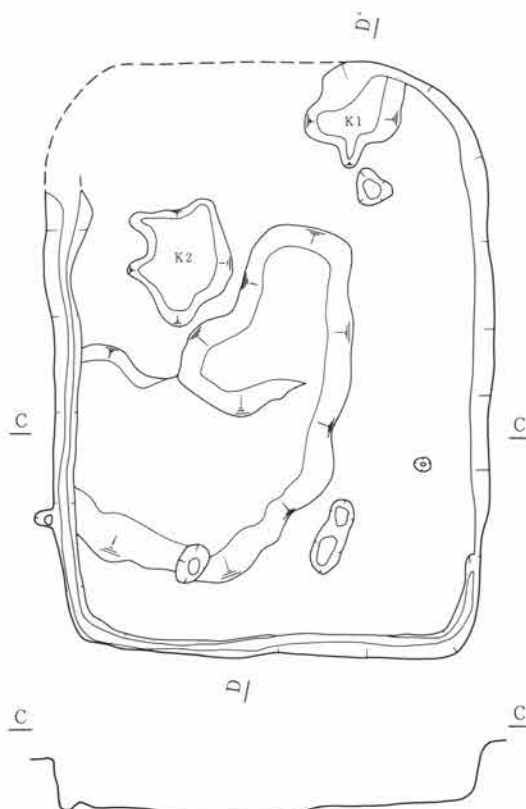
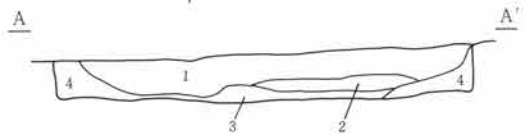
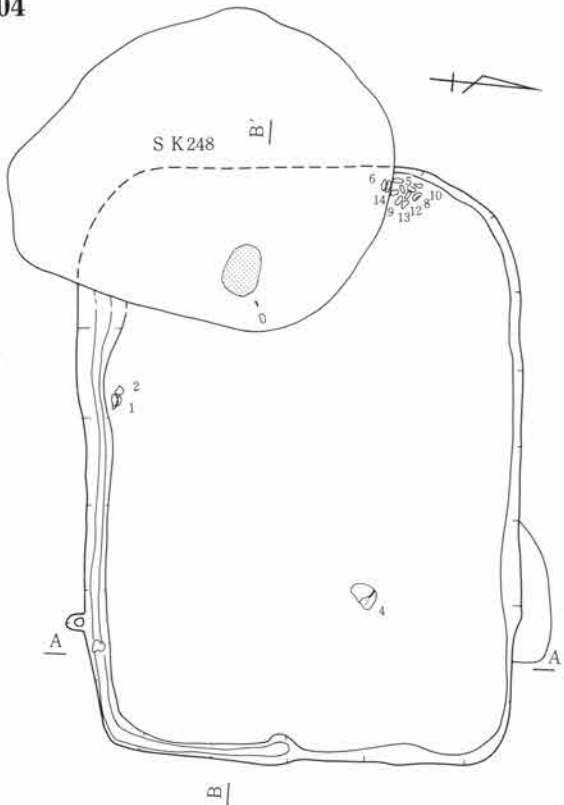
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 カマド内直上	10.8・9.8・3.9 完形 細砂粒 軟質 橙色	口縁部は直線的で僅かに開く。底部は丸底を呈す。 口縁部は横撫で、底部はへら削り。
2	土師器 坏 カマド 覆土	12.8・11.0・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	口縁部は直線的、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の 上半は横撫で、下半は指撫で。底部はへら削り。
3	土師器 坏 カマド 覆土	13.8・9.6・3.5 1/10 細砂粒・雲母 軟質 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は平 底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部は横方向へ のへら削り。底部はへら削り。内面の体部は斜放射 状暗文が施されている。
4	須恵器 埴 カマド 覆土	—・8.0・— 1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈し、やや開く。 底部は撫で。

S J 216

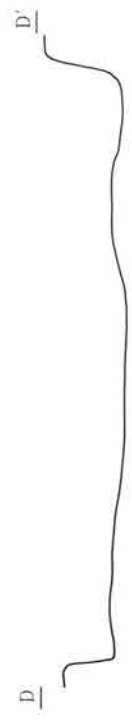
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
 <p>1</p>	土師器 坏 床下1cm	11.8・11.0・3.7 完形 細砂粒・褐色鉾物粒 軟質 橙色	口縁部は直線的で僅かに開き、底部との間に稜をもつ。底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
 <p>2</p>	土師器 坏 床下3cm	11.0・10.4・3.8 完形 細砂粒・粗砂粒 軟質 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に弱い稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
 <p>3</p>	土師器 坏 床下5cm	11.0・10.2・3.5 完形 細砂粒 軟質 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に弱い稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。焼成時の歪みがみられる。
 <p>4</p>	土師器 坏 覆土	10.8・10.0・3.3 1/5 細砂粒 普通 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に弱い稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。
 <p>5</p>	土師器 坏 カマド 覆土	22.8・10.6・3.7 9/10 細砂粒・粗砂粒 やや軟質 橙色	口縁部は僅かに外反し、底部との間に弱い稜をもつ。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部は不定方向へのヘラ削り。焼成時の歪みがみられる。
<p>6</p>	土師器 坏 床下9cm	12.8・10.5・4.6 完形 細砂粒・粗砂粒 普通 にぶい黄橙色	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部から底部にかけては不定方向へのヘラ削り。

SJ204

213



L = 144.90m



- 1 淡黒褐色土 C軽石 ロームブロック
- 2 黒褐色土 C軽石 多量のロームブロック
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック
- 4 茶褐色土 褐色粒
- 5 ロームブロック
- 6 焼土 (カマドの痕跡)



第3章 検出遺構・遺物

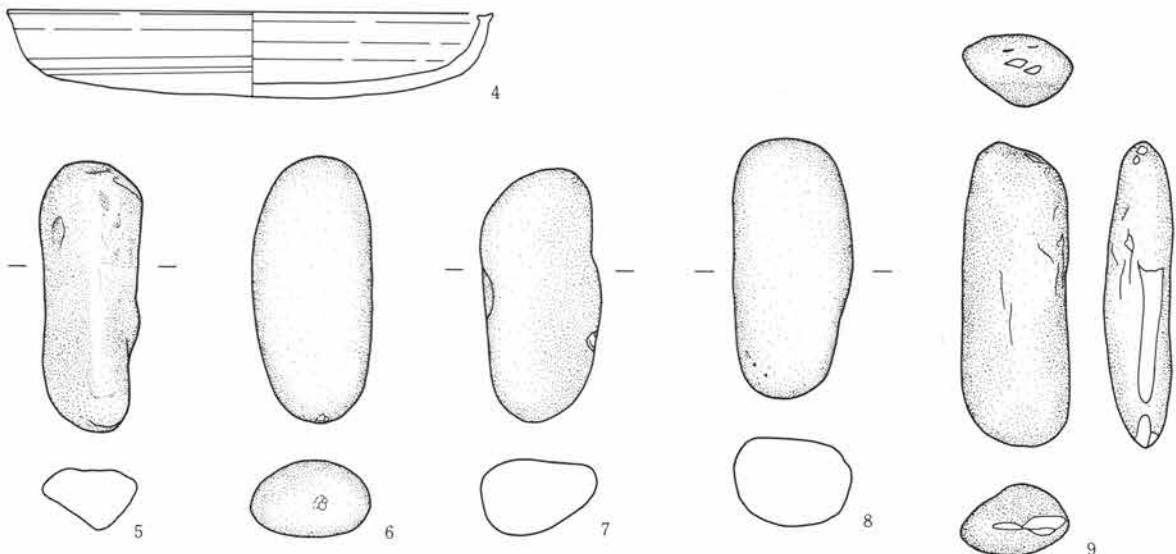
本住居跡は、106～109H-08～10グリッドに位置し、S K248と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、東西6.32m、南北4.67m、面積11.72m²を測る。主軸方向は、N-94.5°-Wを指す。覆土は、人為的な埋戻しがおこなわれており、大部分が淡黒褐色土で覆われている。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、42～77cmを測り、平均は56cmである。壁溝は、床面では南壁と東壁の南半分で検出され、掘り方では、さらに東北コーナーの先までのびることが確認された。幅は24cm前後、深度は、9～12cmを測る。柱穴・貯蔵穴は、検出されなかった。

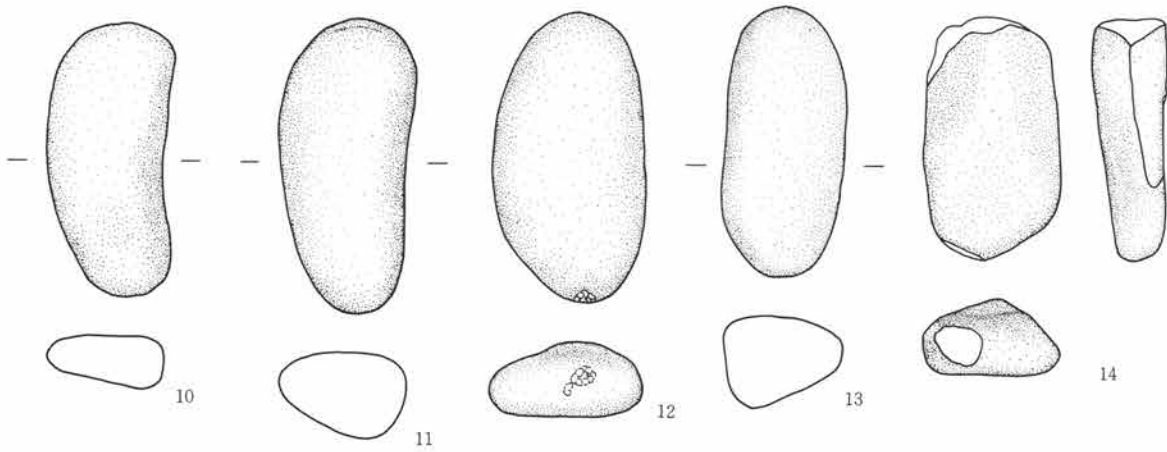
カマドは、西壁の南よりに位置するが、残存状態は、大部分がS K248によって壊され僅かに焚口部分の焼土が確認されただけで、形態・規模は不明である。

掘り方は、床面より3～5cmほど掘り込まれ、平坦であるが、中央から南壁にかけては緩い落ち込みがみられる。床下の施設は、ピットが4基と床下土壇が2基検出され、形態・規模は、K₁は不整形で径116×88cm、深度11cm。K₂も不整形で径138×108m、深度11cmを測る。

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下1cm	11.0・8.0・3.2 3/4 粗砂粒・雲母 普通、 橙色	口縁部は内湾し、体部は丸みをもち開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。体部は横方向へのヘラ削り。底部は大まかなヘラ削りが施されている。
2	土師器 坏 床直	13.6・10.5・4.1 5/6 細砂粒・雲母 普通、 橙色	口縁部は内湾し、体部は丸みをもち開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。体部は横方向へのヘラ削り。底部は大まかなヘラ削りが施されている。
3	土師器 碗 覆土	19.0・9.4・5.6 1/3 細砂粒 普通、 橙色	大型・体部から口縁部にかけては丸みをもち、底部は平底。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。体部内面は雑なヘラ磨きが施されている。
4	須恵器 皿 床直	26.0・24.2・4.5 2/3 粗砂粒・白色鉱物 粒 還元焰、 灰色	ロクロ右回転。内面の口唇部には蓋受けのカエリを持つ。底部はゆるい丸みを呈す。底部は回転ヘラ削り。



第4節 歴史時代



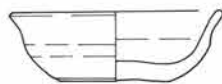
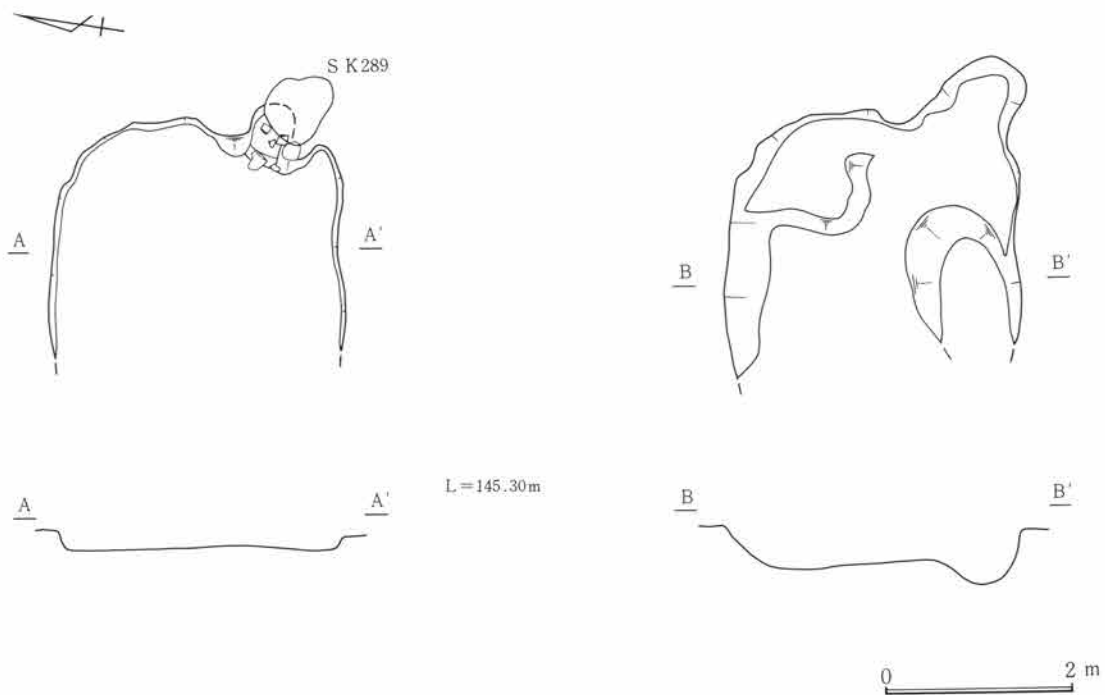
No	種類・器形	出土位置	計測値	石材	特徴
5	石製品 菰編石	床直	14.3・5.4・3.1cm 390g	変質安山岩?	端部・側面に弱い擦痕がみられる。
6	石製品 菰編石	床直	14.0・6.4・4.1cm 540g	輝石安山岩(粗粒)	両端部・側面に敲打痕がみられる。
7	石製品 菰編石	床直	13.3・6.3・4.0cm 520g	石英閃緑岩	側面の一部に擦痕がみられる。
8	石製品 菰編石	床直	13.8・6.3・4.65cm 655g	輝石安山岩(粗粒)	端部に弱い敲打痕がみられる。
9	石製品 菰編石	床直	16.1・3.5・3.8cm 500g	黒色頁岩	両端部に敲打痕がみられ、側面に擦痕がみられる。
10	石製品 菰編石	床直	14.5・6.2・2.8cm 420g	砂岩	両端部に弱い擦痕がみられる。
11	石製品 菰編石	床直	15.6・7.1・4.5cm 710g	輝石安山岩(粗粒)	両端部に弱い敲打痕がみられる。
12	石製品 菰編石	床直	15.3・8.1・4.0cm 690g	砂岩	両端部に弱い敲打痕・擦痕がみられる。
13	石製品 菰編石	床直	14.3・6.4・4.9cm 620g	溶結凝灰岩	両端部に弱い敲打痕・擦痕がみられる。
14	石製品 菰編石	床直	12.8・7.2・4.0cm 515g	礫岩	側面に擦痕がみられる。

S J 205

本住居跡は、117～119H-19～20グリッドに位置し、S K 289と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。西壁部分は、確認できなかったため全貌は不明であるが、平面形態は、隅丸長方形を呈すと推測される。規模は、東西は3.70m前後、南北3.16mを測る。主軸方向は、N-87°-Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。カマドは、東壁の南よりに位置し、残存状態は、S K 289によって燃烧部の半分以上を壊されているため詳細な点は不明である。規模は、全長117cm、幅79cmを測り、燃烧部は壁外に40cm前後のびる。袖部は、両袖部とも自然石を使用して構築されている。

掘り方は、床面より10～20cmほど掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、南壁際より床下土壇が1基検出された。形態は楕円形で、規模は径200前後×115cm、深度27cmを測る。

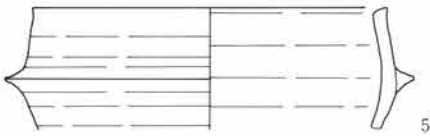
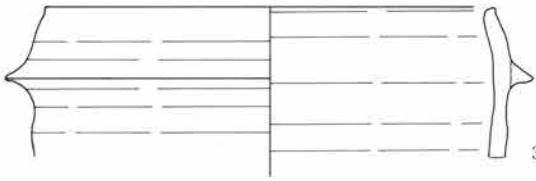


1



2

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 床直	11.0・6.0・3.7 3/5 細砂粒・雲母 酸化焙 にぶい赤褐色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
2	須恵器 碗 床直	11.6・6.6・4.6 完形 細砂粒・雲母 酸化焙 暗灰黄色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部は立ち上がりに丸みをもつ。高台は断面四角形でやや開く。底部は回転糸切り。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 羽釜 覆土	24.0・—・— 小片 細砂粒・垂角礫 還元焰 灰色	口縁部はやや内傾し、 口唇端部はやや丸みを もち、内傾する。鏝は 断面二等辺三角形を呈 し、やや下方を向く。
4	須恵器 羽釜 覆土	22.0・—・— 小片 細砂粒・雲母 酸化焰 黄褐色	口縁部は僅かに内傾 し、口唇端部は平坦で、 内傾する。鏝は断面三 角形を呈し、水平方向 を向く。
5	須恵器 羽釜 覆土	18.8・—・— 小片 粗砂粒・雲母 酸化焰 黄褐色	口縁部は僅かに内傾 し、口唇端部は平坦で、 内傾する。鏝は断面三 角形を呈し、水平方向 を向く。

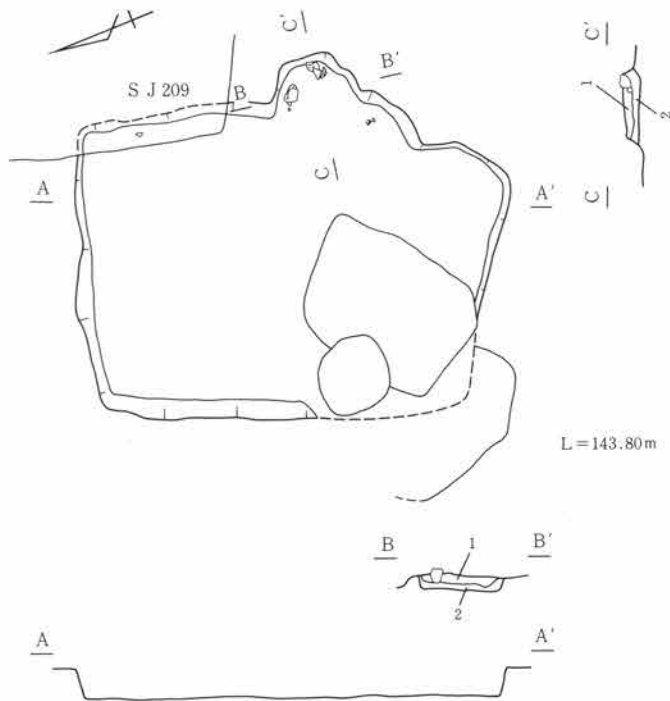
SJ208

本住居跡は、92～94G—46～49グリッドに位置し、S J 209、西南コーナーで土壇と重複するが、新旧関係は、土壇、S J 209より本遺構のほうが古く、平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西3.40m、南北4.54m、面積14.02㎡を測る。主軸方向は、N—118°—Eを指す。

床面は、貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は16～37cmを測り、平均は27cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁の中央よりやや南よりに位置し、残存状態は、天井部・袖部等は確認できなかった。規模は、全長82cm、幅82cmを測る。

216



カマド

- 1 褐色粘土層
- 2 暗褐色土 若干のC軽石



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.6・12.2・一、1/6 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は直線的で僅かに開く。底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はへら削り。
2	須恵器 坏 床直	15.6・一・一、小片 細砂粒 還元焰 灰色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。
3	須恵器 坏 覆土	一・10.0・一、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	底部は回転へら削り。高台は小型の極小規模のもの。
4	須恵器 盤 覆土	25.6・23.6・一、小片 粗砂粒 還元焰 灰色	口縁部はやや丸みをもち、端部は蓋受けをもつ。底部は回転へら削り。

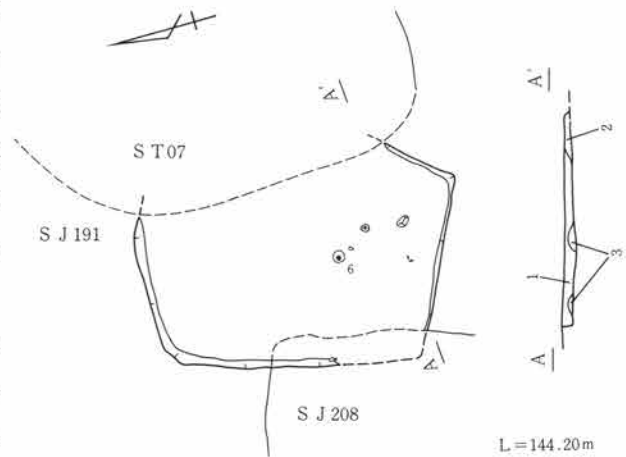
S J 209

216

本住居跡は、91～92G-47～49グリッドに位置し、S T 07、S J 191・S J 208と重複するが、新旧関係は、S T 07、S J 191より本遺構のほうが古く、S J 208より新しい。本遺構の東壁側は、確認できなかったため全貌は不明であるが、平面形態は、台形に近い形態を呈すると推測される。規模は、残存部分の計測では東西2.30m、南北3.30mを測る。

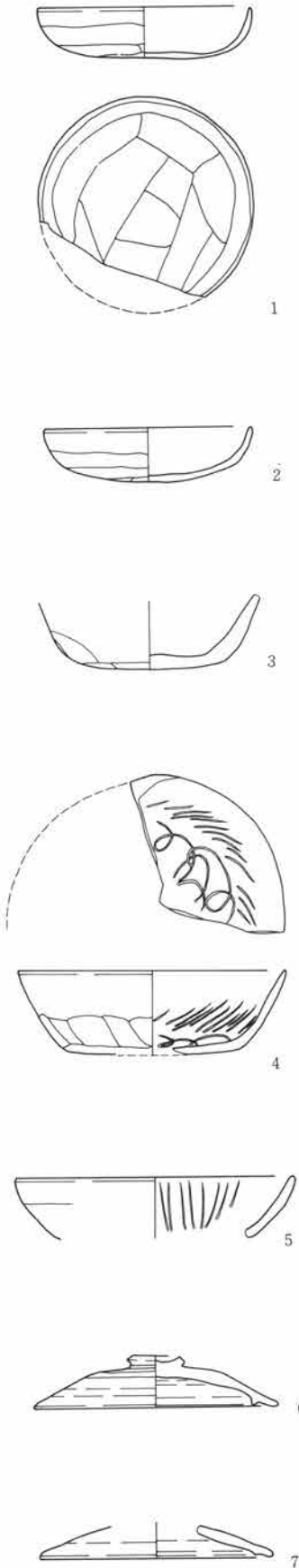
床面は、貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、14～27cmを測り、平均は15cmである。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

カマドは、東壁に位置すると推測されるが、残存部分では痕跡も確認されなかった。



- 1 暗褐色土 極少量のC軽石
- 2 暗褐色土 1層より暗い色調 極少量のC軽石
- 3 ロームブロック

0 2 m

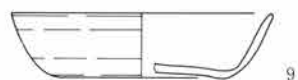


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 床下	12.6・10.6・3.1 7/8 細砂粒・雲母 普通 褐色	口縁部は立ち上がりで丸みをもち、底部は平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で。
2	土師器 坏 床下	12.0・10.3・3.2 2/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 床下	—・9.0・— 1/8 細砂粒・褐色鉾物粒 やや軟質 にぶい橙色	体部は横方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
4	土師器 坏 床下	15.8・10.6・5.0 1/4 粗砂粒 やや軟質 褐色	体部から口縁部にかけては、ゆるい丸みを呈し、僅かに開く。底部はほぼ平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。内面の体部は斜放射状暗文。底部は螺旋状暗文が施されている。
5	土師器 坏 覆土	16.2・—・— 小片 細砂粒 軟質 褐色	外面の口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。内面は放射状暗文。
6	須恵器 蓋 床直	14.4・3.8・3.1 3/4 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ左回転。鈕は輪状に近い。天井部は丸みをもち、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程までは回転ヘラ削り。
7	須恵器 蓋 覆土	13.8・—・— 1/10 黒色鉾物粒 還元焰 灰色	天井部は直線的で、内面には身受けのカエリをもつ。外面は自然釉が付着。

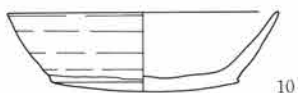
第3章 検出遺構・遺物



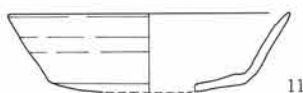
8



9



10



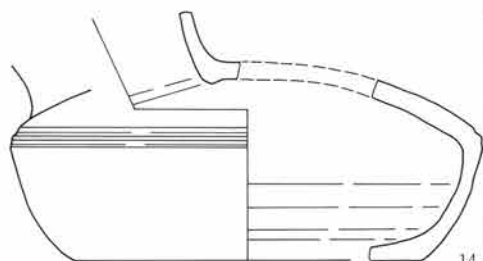
11



12

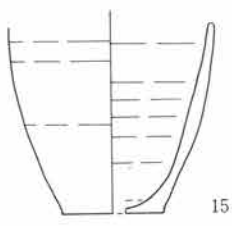

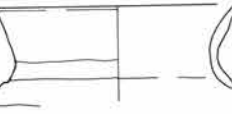


13



14

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
8	須恵器 坏 床下	14.0・10.0・4.2 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転撫で。
9	須恵器 坏 床下	14.0・10.0・3.4 1/2 白色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は立ち上がりに丸みをもつ。底部はヘラ切り。
10	須恵器 坏 床下	14.2・10.0・4.2 2/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。底部は不定方向への撫で。
11	須恵器 坏 床下	15.0・10.6・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部はゆるい丸底を呈し、回転ヘラ削り。
12	須恵器 坏 床下 覆土	—・7.8・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	体部は外反ぎみに開き、下位に1段の回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ削り。
13	須恵器 蓋 床下	20.6・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	天井部は4分の3程度まで回転ヘラ削り。端部は折り曲げ。
14	須恵器 平瓶 床下	—・18.0・— 小片 細砂粒・粗砂粒・黒色 鉍物粒 還元焰 灰色	体部はあまり開かず、肩に2条の凹線がまわる。底部は回転ヘラ削り。外面の体部には自然釉が付着。

 <p>15</p>	No. 種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
 <p>16</p>	15 須恵器 瓶子 床下	—・5.4・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。胴部はややふくらみもち、 下位は回転ヘラ削り。
 <p>17</p>	16 土師器 甕 床下	11.6・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。
	17 土師器 甕 床下	13.0・—・— 1/8 細砂粒・雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。

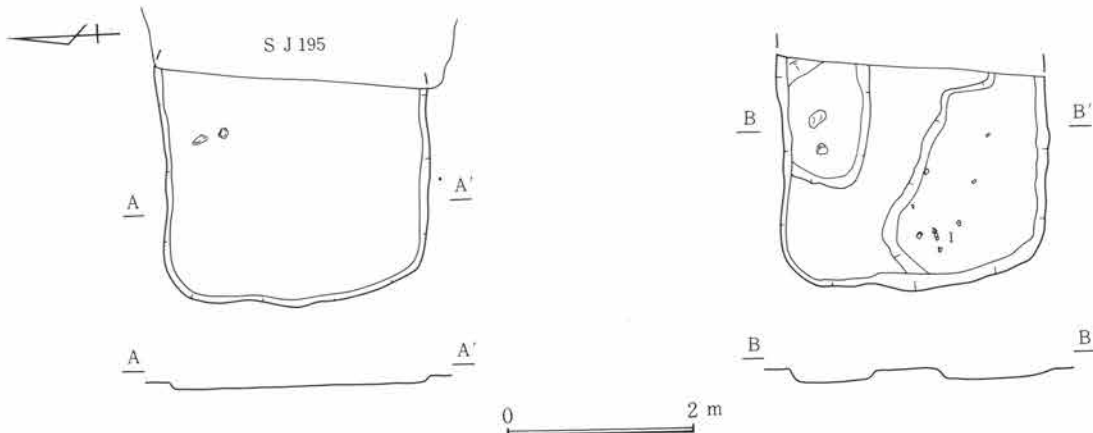
S J 210

217

本住居跡は、91～92G—43～44グリッドに位置し、S J 195と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の西壁側は、S J 195に切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、隅丸長方形を呈すると推測する。規模は、南北2.78mを測る。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。残存部分では、壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。また、カマドは、東壁がS J 195に切られているため確認されなかった。

掘り方は、床面より北半分では3～5cm、南半分は12cm前後掘り込まれている。掘り方の面は、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土壇が1基検出された。形態は楕円形で、規模は径122×86cm、深度6cmを測る。



No.	種 類	観察表掲載頁
1	鉄製品 刀子	891

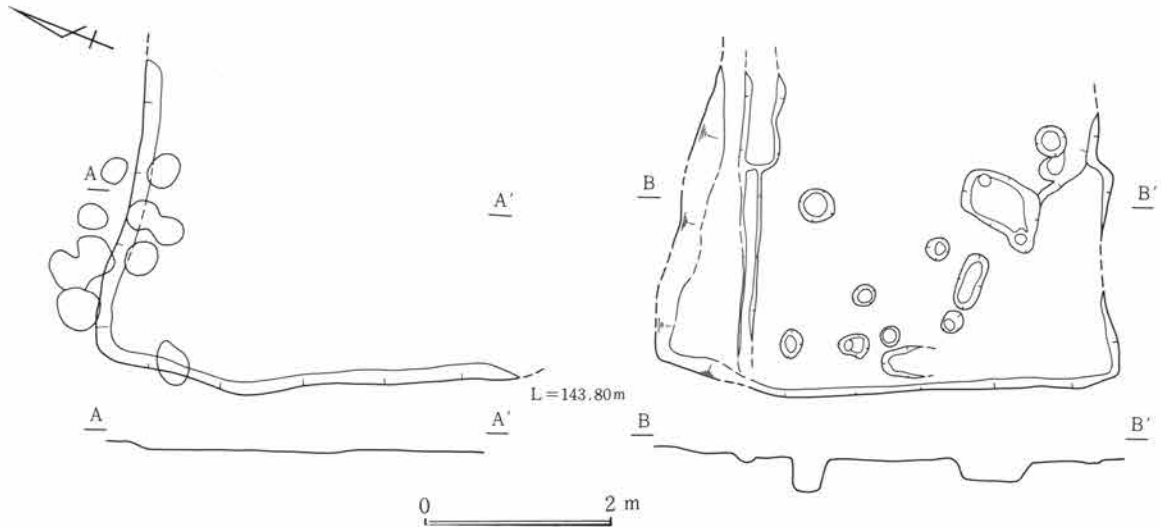
S J 211

218

本住居跡は、89～91G-39～42グリッドに位置し、北壁部分では、多数のピットと重複する。本遺構は、西壁から北壁にかけてしか残存していないため全貌は不明であるが、平面形態は、ほぼ長方形を呈すと推測される。規模は、南北4.90m前後を測る。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、確認面から床面までが浅いため不明である。

掘り方は、床面より2～3cmほど掘り込まれる。床下の施設は、北壁よりに溝状の落ち込みとピット13基と床下土壇が1基検出された。床下土壇は隅丸長方形で、一辺90×53cm、深度26cmを測る。



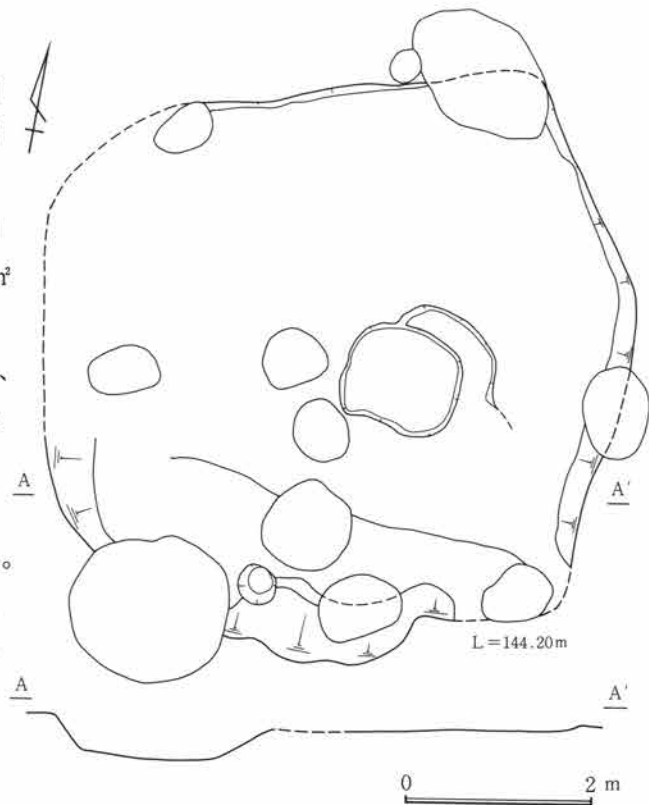
S J 214

218

本住居跡は、101～104G-32～35グリッドに位置し、S K115、S B24と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の西北部分は、確認できなかった。平面形態は、台形状に近い形態を呈す。規模は、東西6.30m・南北6.00m、前後、面積は、推定で15.96m²を測る。

床面は、貼床が施されている。壁の状態は、壁高が5～7cmと確認面から床面までが浅いため不明である。壁溝・柱穴・貯蔵穴等は、検出されなかった。

掘り方は、床面より浅く、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土壇が1基検出され、形態は長方形で、規模は126×12cm、深度86cmを測る。



S J 218

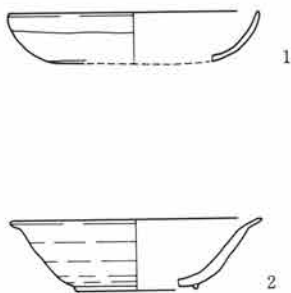
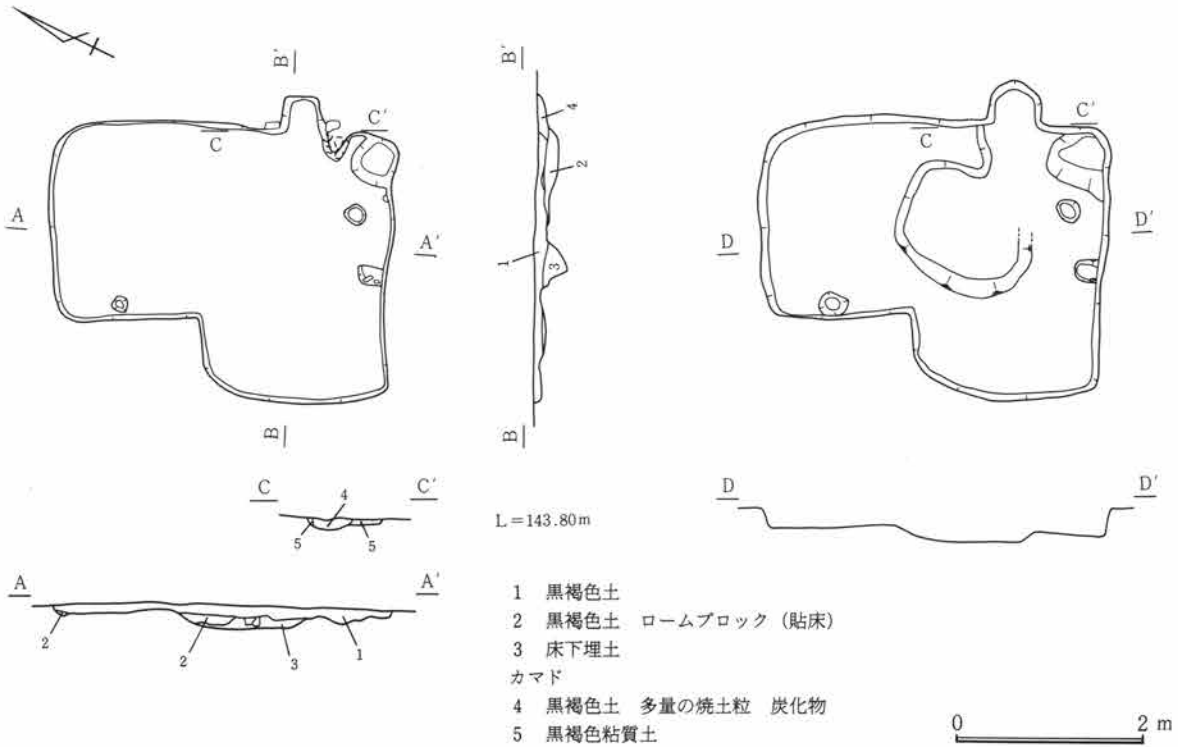
219

本住居跡は、111~112H-03~05グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、L字形を呈す。規模は、東西2.96m、南北3.67m、面積8.99m²を測る。主軸方向は、N-62.5°-Eを指す。

床面は、中央部分と周辺部の一部分に貼床が施されている。壁は、垂直に立ち上がる。壁高は、10cm前後を測る。柱穴は、2本検出され、形態・規模はP₁が円形で径23cm、深度12cm。P₂は円形で径18cm、深度16cmを測る。貯蔵穴は、東南コーナー際に位置し、形態は円形を呈し、規模は径46cm、深度10cmを測る。

カマドは、東壁の中央よりやや南よりに位置し、残存状態は、天井部が崩落し、袖部は左袖部が欠落しているが、右袖部は良好な状態で残っている。規模は、全長66cm、幅135cmを測り、燃烧部は壁外に30cmのびる。袖部は、角柱状の軟砂質の加工石と黒褐色粘土を使用して構築されている。

掘り方は、床面より8~10cmほど掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、ほぼ中央より楕円形で、径150×122cm、深度18cmの床下土壇が1基検出された。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.2・—・— 1/10 細砂粒 普通、橙色	口縁部は横撫で、体部は指撫で。
2	土師器 碗 覆土	13.2・7.6・3.7、1/10 細砂粒・黒色鉍物粒・ 白色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、高台は極小規模である。

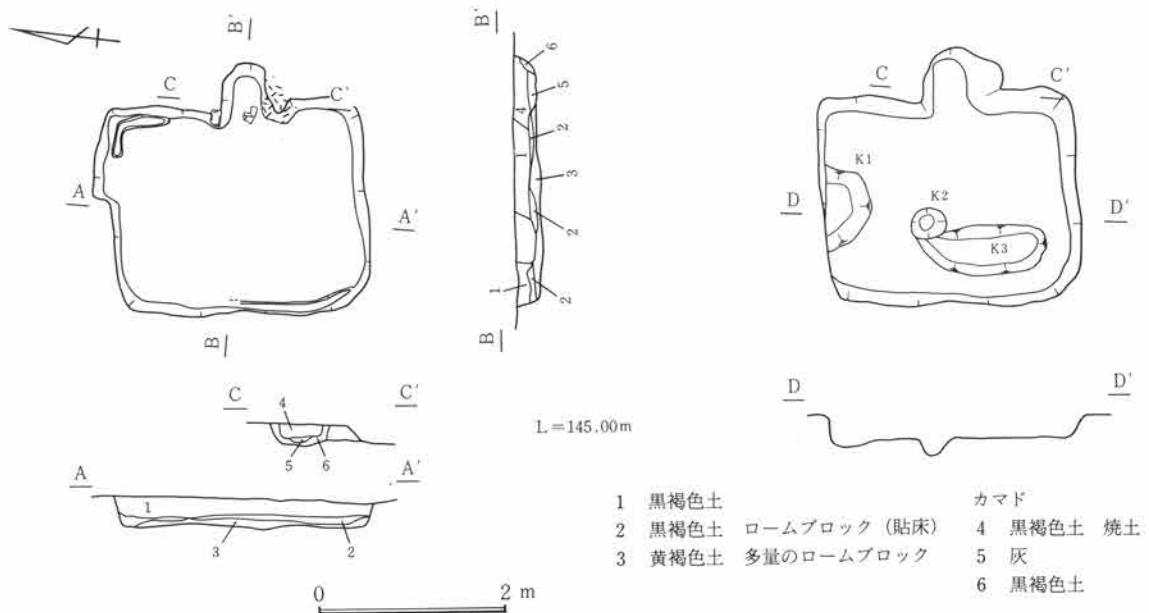
S J 219

本住居跡は、111~112H-03~05グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、北壁の東半分が僅かに張出し状に出るが、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.27m、南北3.67m、面積6.13m²を測る。主軸方向は、N-81°-Eを指す。

床面は、黒色土を使用して貼床が施されている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、12~18cmを測り、平均は15cmである。壁高は、東北コーナーの極一部から検出され、幅10~12cm、深度2~4cmを測る。

カマドは、東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は、天井部が崩落しているが、袖部は良好な状態で残っている。規模は、全長80cm、幅92cmを測り、燃烧部は壁外に34cmのびる。

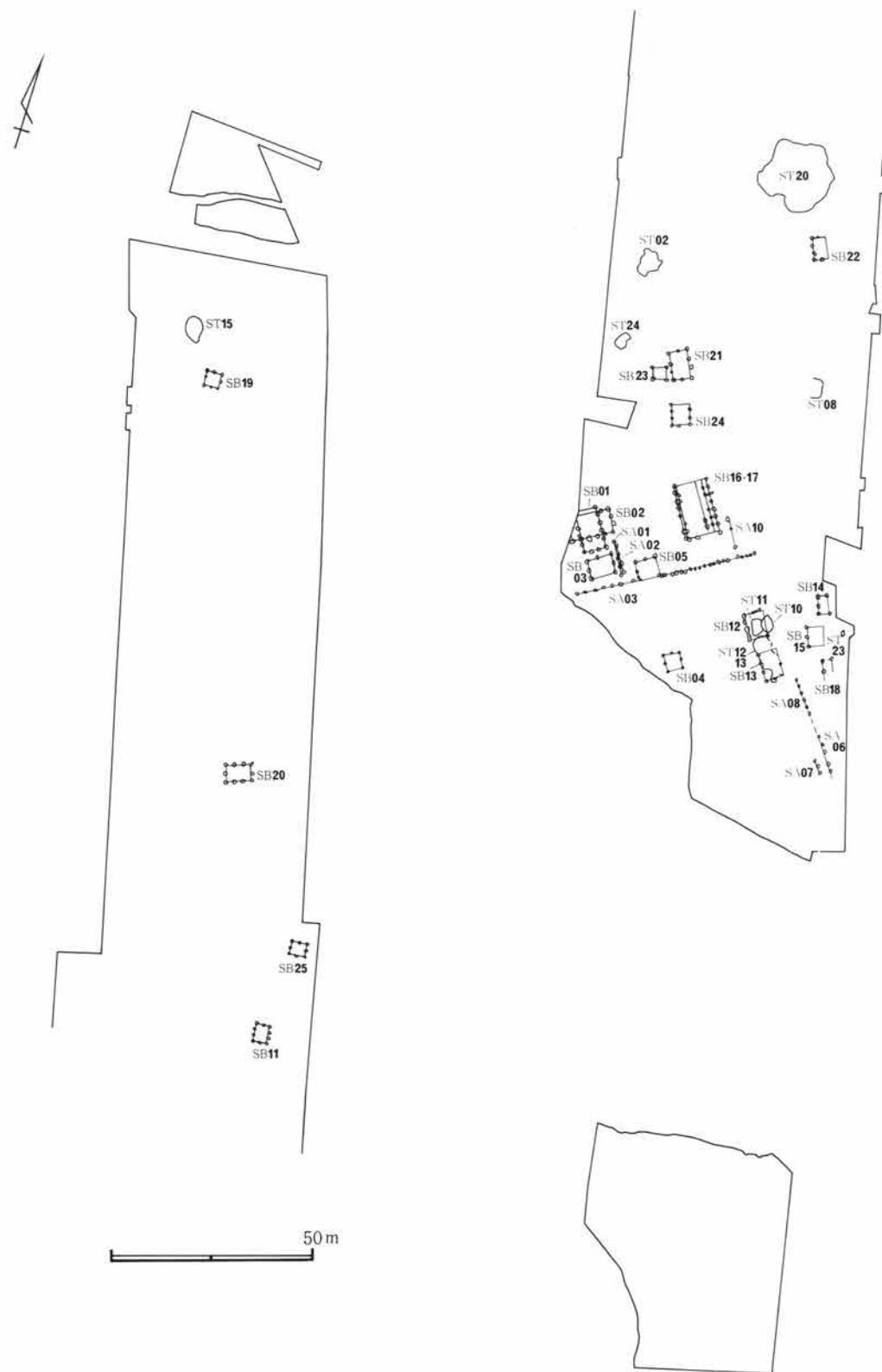
掘り方は、床面より11~21cmほど掘り込まれ、ほぼ平坦である。床下の施設は、床下土壇が3基検出され、形態・規模は、K₁が半円状で、径90×50cm、深度7cm。K₂は円形で径38cm、深度12cm。K₃は長楕円形で径132×54cm、深度6cmを測る。



- | | |
|--------|--------------|
| 1 黒褐色土 | カマド |
| 2 黒褐色土 | ロームブロック (貼床) |
| 3 黄褐色土 | 多量のロームブロック |
| 4 黒褐色土 | 焼土 |
| 5 灰 | |
| 6 黒褐色土 | |



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 床直	13.0・—・— 小片 黒色鉍物粒 還元焰 灰色	天井部はゆるい丸みをもち、内面には 身受けのカエリをもつ。
2	土師器 甕 床直	18.6・—・— 1/6 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるいふくら みをもつ。外面の口縁部は横撫で。胴 部の上位は左方向へのヘラ削り。中位 は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部は ヘラ撫で。



掘立柱建物
柵列
竪穴状遺構

歷史時代(古代) 遺構配置図

2 掘立柱建物跡 (S B)

S B01

221

本建物跡は、107～113G-13～19グリッドに位置し、S J 01・02、S B02と重複するが、新旧関係はS J 01・02より本遺構の方が古く、S B02より新しい。本遺構の西北隅は、調査区域外に伸びるため詳細は不明であるが、規模は桁行5間(10.40m)、梁行3間(5.64m)で、床面積は推定で58.66㎡を測る。主軸方向は、N-32.5°-Wを指す。柱間寸法は、桁行で7尺弱(2.08m)、梁行で6尺2寸(1.88m)を測る。柱穴の形態は、ほぼ方形ないし隅丸方形を呈し規模は、一辺88×72cm～119×100cm、深度77～101cmを測る。P₅～P₇、P₈～P₉、P₁₀～P₁₁、P₁₂～P₁₃、P₁₄～P₁₅の間には幅62～82cm、深さ12～16cmの溝をもつ。P₁₅からは30cm大の自然礫がみられる。

PNo	平面形態	長径	短径	深度
1				
2	隅丸長方形	119	約100	77
3	隅丸長方形	100	80	91
4	隅丸長方形	109	100	101
5	隅丸長方形	110	102	91
6	隅丸方形	93	85	83
7	隅丸長方形	102	86	92
8	隅丸方形	88	88	94
9	隅丸長方形	105	96	95
10	隅丸長方形	105	97	98
11	隅丸長方形	119	97	98
12	方形	86	84	100
13	長方形	106	92	100
14	台形	88	72	87
15	楕円形	118	86	88
16				

S B02

221

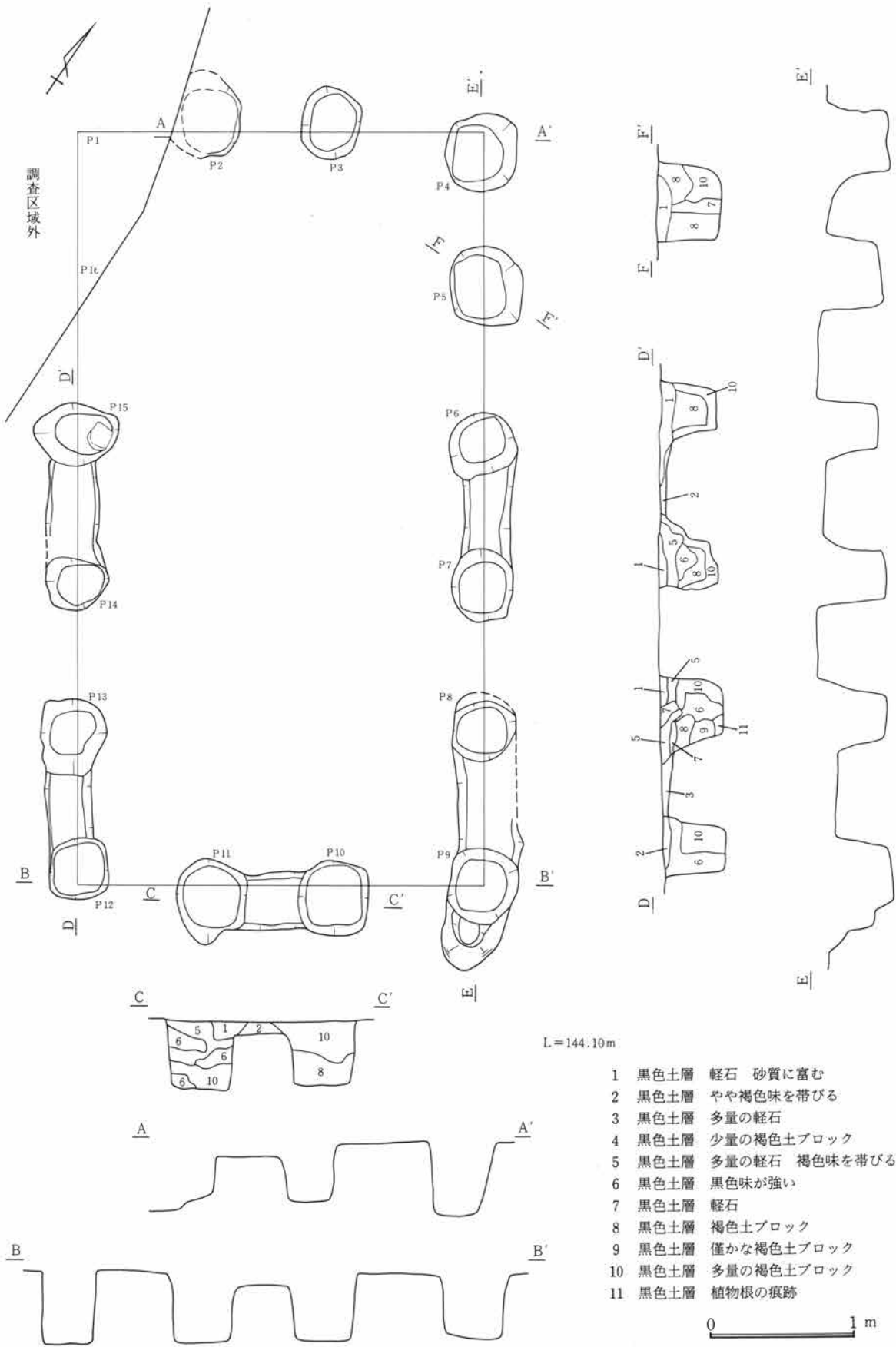
本建物跡は、107～103G-13～20グリッドに位置し、S J 01・02、S B01と重複するが、新旧関係は本遺構の方が古い。本遺構の西北隅は調査区域外に伸びるため詳細は不明であるが、規模は桁行5間(10.64m)、梁行3間(5.80m)で、床面積は推定で61.71㎡を測る。主軸方向は、N-60.5°-Eを指す。柱間寸法は、桁行で7尺(2.13m)、梁行で6尺4寸(1.93m)を測る。柱穴の形態は、方形ないしは、隅丸方形を呈す。規模は、当初では一辺93×66cm～133×100cm、深度98～115cmで、ほとんどの柱穴では柱の抜取りがみられる。P₅、P₆、P₇、P₁₀、P₁₁では、根固めのための小礫が出土している。

PNo	平面形態	長径(※1)	短径(※2)	深度	PNo	平面形態	長径(※1)	短径(※2)	深度
1					9	隅丸方形	106(183)	100(128)	112
2					10	隅丸長方形	120(169)	94(130)	98
3	楕円形	113(187)	100(100)	106	11	隅丸方形	104(194)	104(114)	101
4	方形	91(167)	90(106)	107	12	長方形	93(190)	66(139)	105
5	長方形	93(165)	107(127)	111	13	不整形	125(—)	105(—)	109
6	台形	94(184)	90(163)	115	14	隅丸長方形	119(152)	94(94)	98
7	隅丸長方形	114(146)	96(115)	113	15	不明	—	—	—
8	隅丸方形	94(164)	92(147)	112	16				

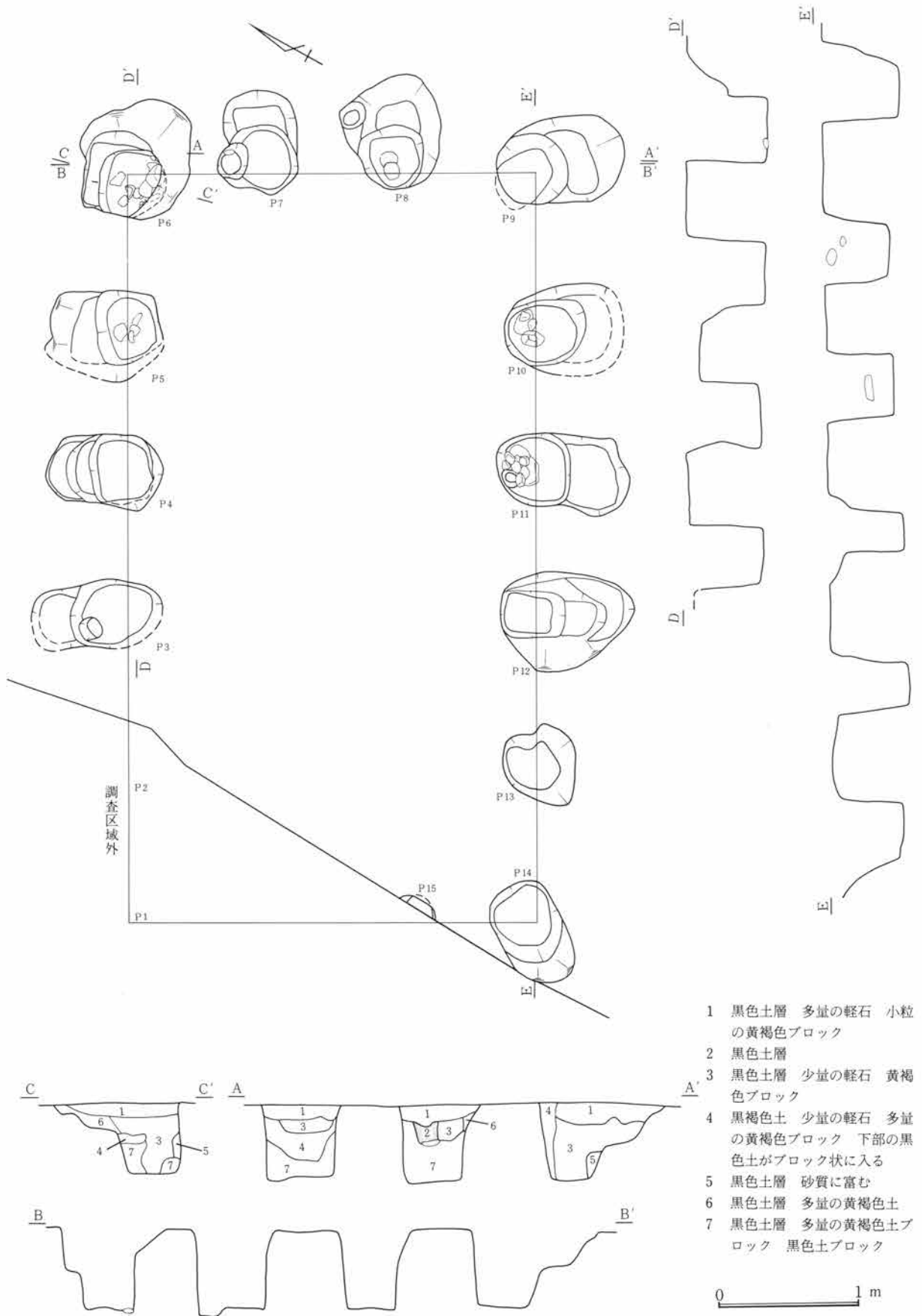
※1 抜き取り痕を含む長径

※2 抜き取り痕を含む短径

第4節 歴史時代



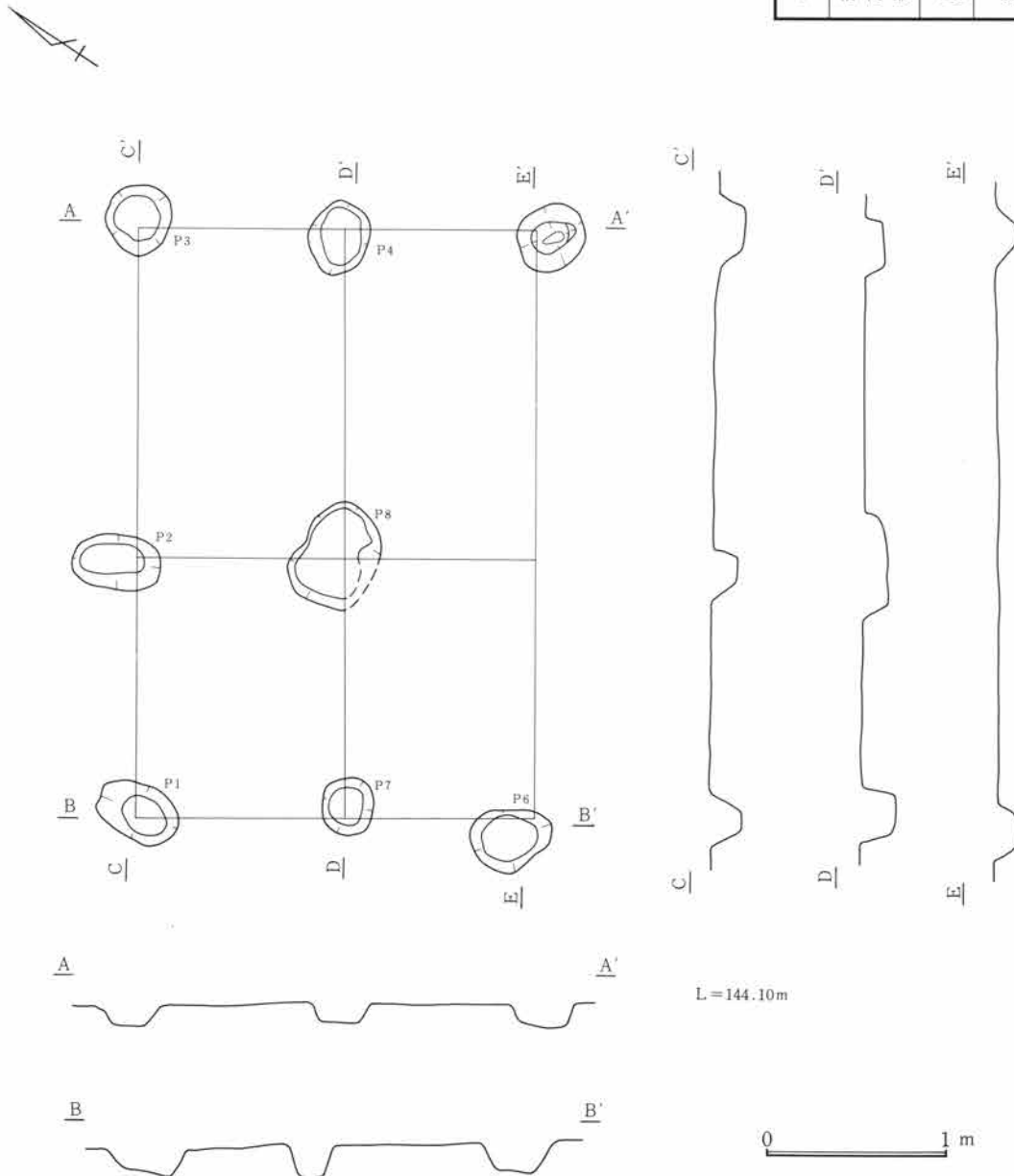
- 1 黒色土層 軽石 砂質に富む
- 2 黒色土層 やや褐色味を帯びる
- 3 黒色土層 多量の軽石
- 4 黒色土層 少量の褐色土ブロック
- 5 黒色土層 多量の軽石 褐色味を帯びる
- 6 黒色土層 黒色味が強い
- 7 黒色土層 軽石
- 8 黒色土層 褐色土ブロック
- 9 黒色土層 僅かな褐色土ブロック
- 10 黒色土層 多量の褐色土ブロック
- 11 黒色土層 植物根の痕跡



S B03

本建物跡は、105～109G-9～14グリッドに位置し、S A03とS B01との間にはさまれるように存在し、重複関係はみられない。規模は、桁行2間(6.50m)、梁行2間(4.42m)で、床面積は28.73㎡を測る。主軸方向は、N-55°-Eを指す。本遺構は、桁間南列の中間の柱穴が検出されなかったが、桁行の中央列の中間にも柱穴が検出された。柱間寸法は、桁行では東側12尺(3.64m)、西側9尺5寸(2.86m)、梁行では南側7尺(2.10m)、北側7尺4寸(2.32m)を測る。柱穴の形態は、楕円形ないしは、円形を呈し、規模はP₈を除きほぼ同じ大きさで、深度は24～40cmを測る。

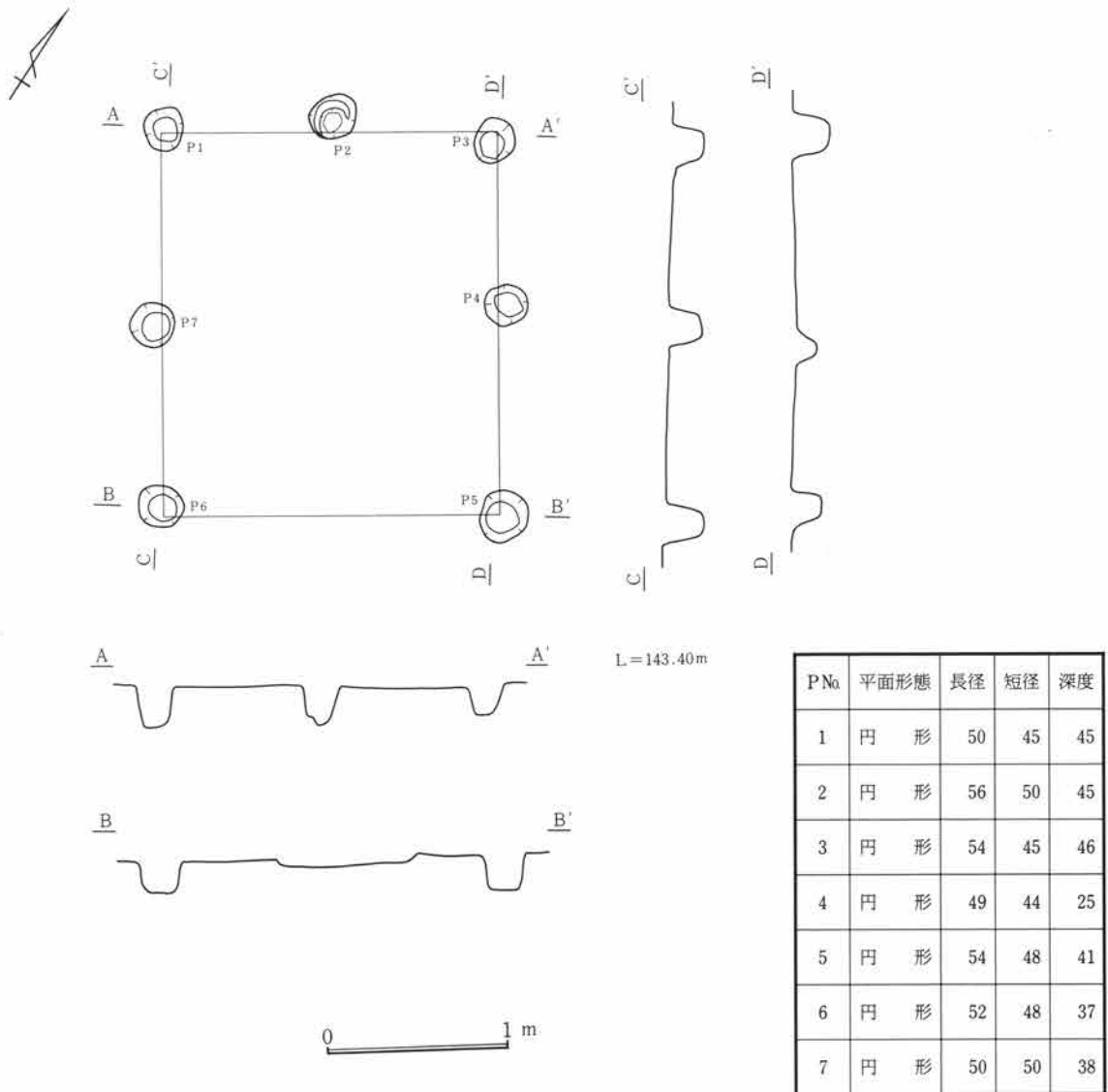
PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	92	60	39
2	楕円形	97	60	33
3	円形	78	75	29
4	円形	84	66	24
5	円形	75	74	34
6	楕円形	92	84	36
7	円形	74	58	40
8	楕円形	118	88	29



S B04

222

本建物跡は、94～97G-03～05グリッドに位置し、S J 24と重複するが、新旧関係は確認できなかった。規模は、桁行2間(4.19m)、梁行2間(3.68m)で、床面積15.42㎡を測る。主軸方向は、N-41°-Wを指す。本遺構は、南列桁行の中間の柱穴は検出されなかったが、当初より設けられていなかったようである。柱間寸法は、桁行では西列が7尺(2.10m)間隔に対して東列では北側6尺(1.86m)、南側8尺(2.33m)、梁行6尺(1.86m)を測る。柱穴の形態は、ほぼ円形を呈し、規模は径45～56cm、深度25～46cmを測る。



S B05

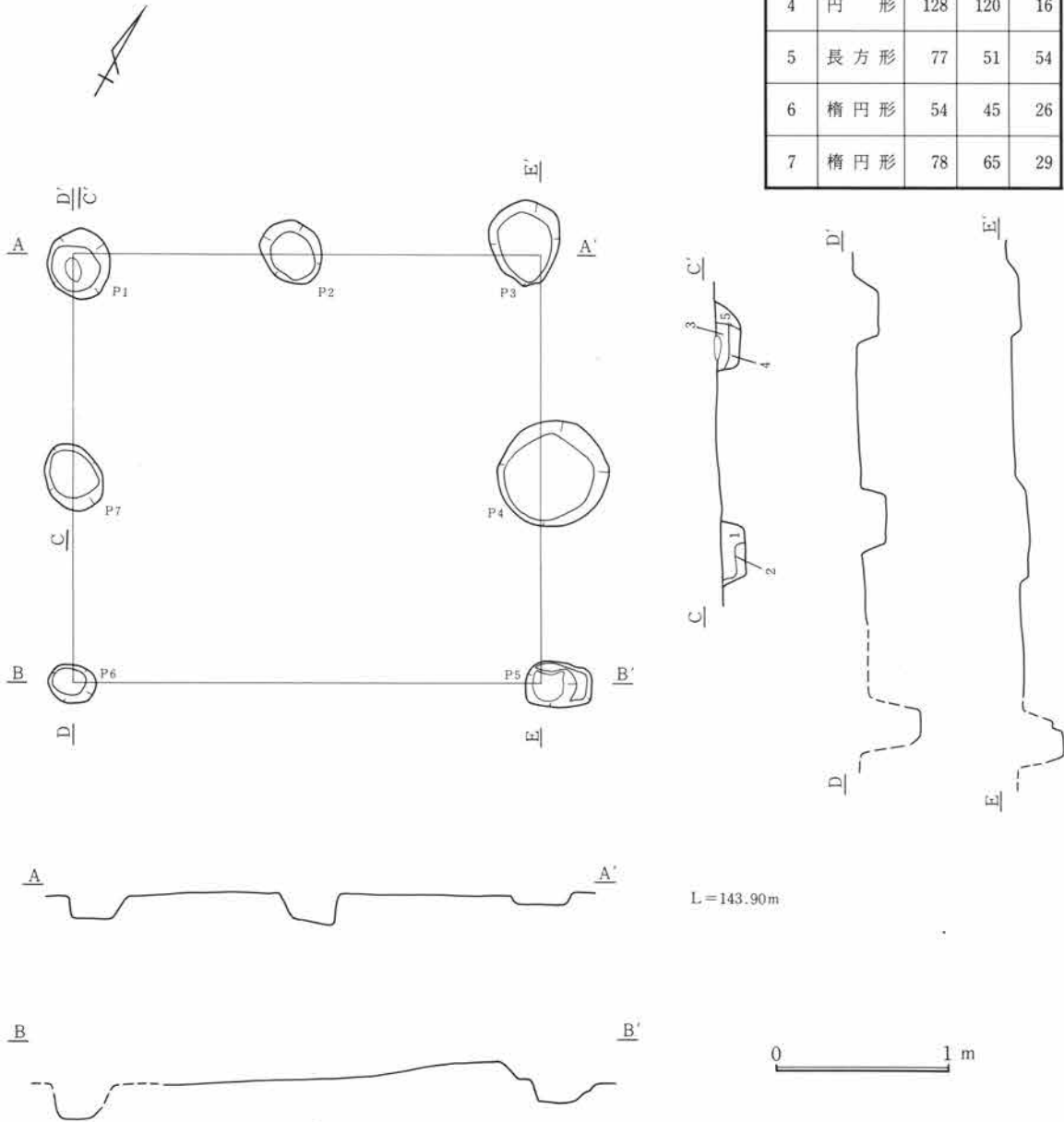
222

本建物跡は、100～104G-12～16グリッドに位置し、S J 20、S D08・S D03と重複するが、新旧関係は、S J 20より本遺構のほうが古い。S D08、S A03との関係は不明である。規模は、桁行2間(5.40m)、梁行2間(2.90m)で、床面積15.66㎡を測る。主軸方向は、N-58-Eを指す。S B04と同様に桁行南列の中

第4節 歴史時代

間の柱穴は、検出されなかった。柱間寸法は、桁行9尺(2.70m)、
梁行8尺(2.45m)を測る。柱穴の形態は、P₃を除き円形、楕円形を
呈し、規模は径54×45cm~128×120cm、深度17~54cmを測る。

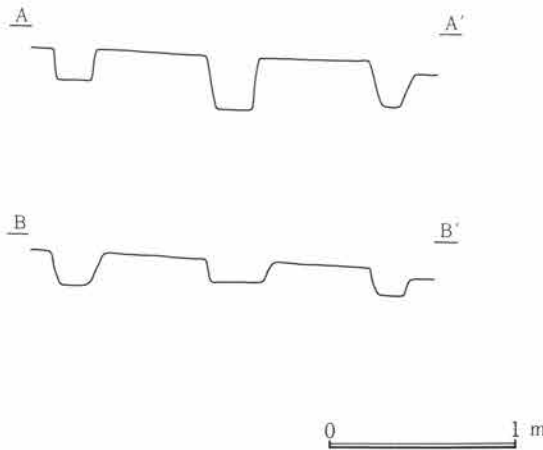
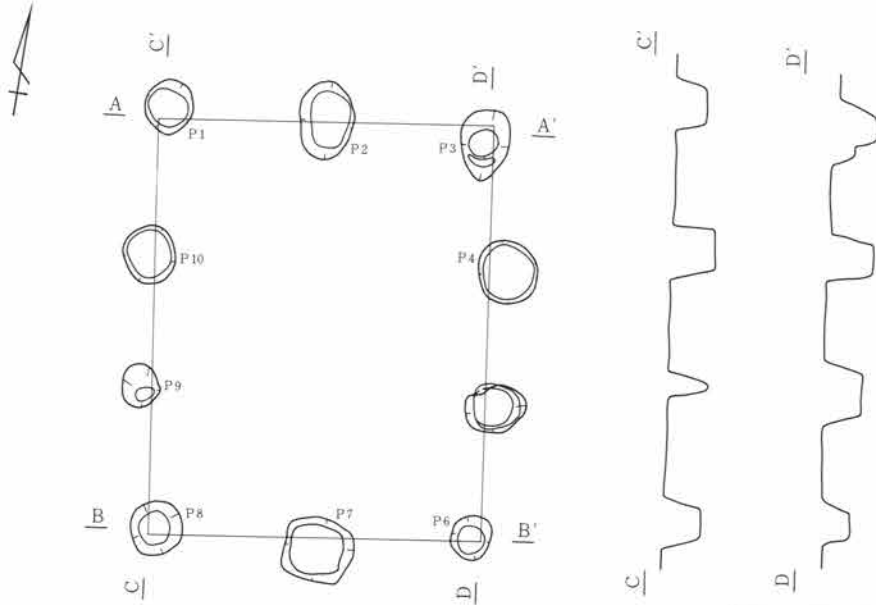
PNo.	平面形態	長径	短径	深度
1	円形	79	75	28
2	楕円形	76	66	37
3	楕円形	98	82	17
4	円形	128	120	16
5	長方形	77	51	54
6	楕円形	54	45	26
7	楕円形	78	65	29



- 1 黒色土層 少量の軽石 小礫 若干赤味がかかる
- 2 黒色土層
- 3 黒色土層 少量の軽石
- 4 黒褐色土 黄褐色土ブロック
- 5 黒褐色土 軽石 黄褐色土ブロック 黒色土ブロック

S B11

本建物跡は、100～102G-33～36グリッドに位置し、東南部分で中世の溝と重複する。規模は、桁行3間(4.40m)、梁行2間(3.55m)で、床面積15.62m²を測る。主軸方向は、N-28.5°-Eを指す。柱間寸法は、桁行5尺(1.46m)、梁行6尺(1.78m)を測る。柱穴の形態は、円形か楕円形を呈し、規模は径47×42cm～73×68cm、深度25～61cmを測る。P₆からは、須恵器壺が出土している。



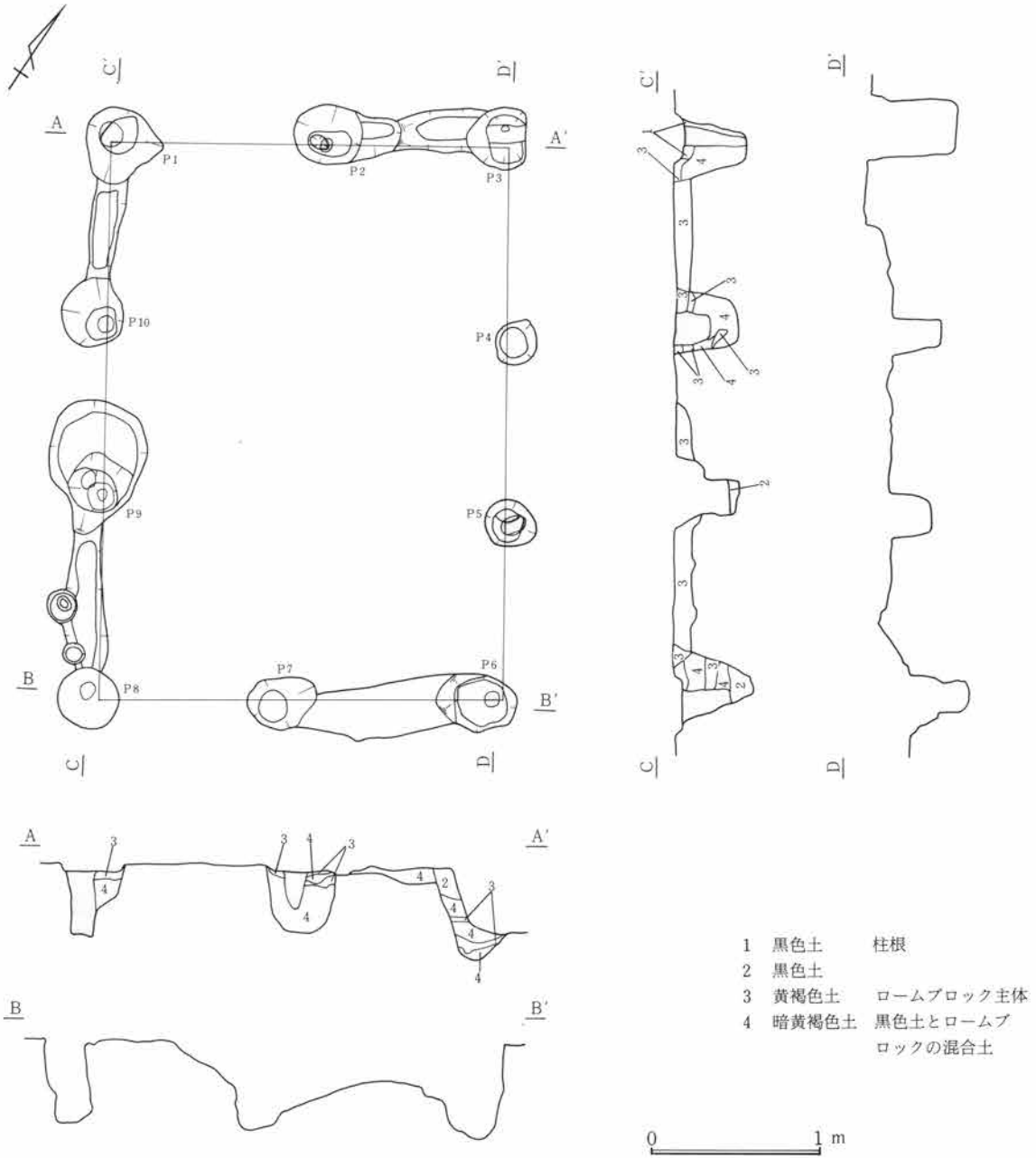
PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	円形	56	52	41
2	楕円形	82	58	29
3	楕円形	72	52	25
4	円形	68	65	41
5	楕円形	65	50	42
6	円形	47	42	48
7	方形	73	68	34
8	円形	58	58	57
9	楕円形	45	39	48
10	円形	61	55	61



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 壺 覆土	12.4・9.2・4.8、完形 細砂粒・褐色鉾物粒 酸化焰、橙色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みもち開き、 口縁部は外反する。底部は回転糸切り。周囲は 高台貼付時の撫でがみられる。

SB12

223

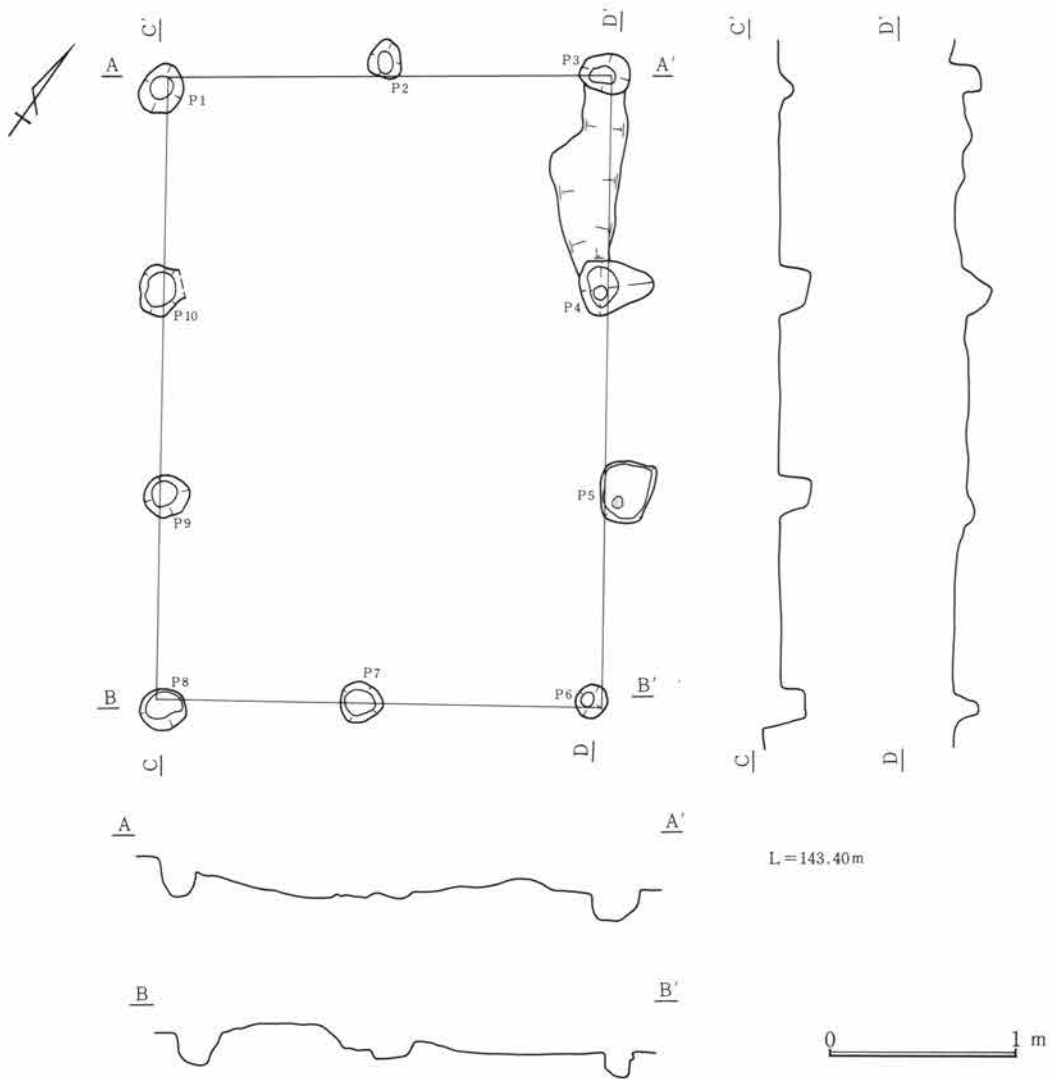


本建物跡は、85～90G-10～13グリッドに位置し、SD46、ST10・11・12と重複しているが、新旧関係は、SD46、ST10・12より本遺構のほうが古いが、ST11との関係は確認できなかった。規模は、桁行3間(6.50m)、梁行2間(4.80m)で、床面積31.20㎡を測る。主軸方向は、N-40°-Wを指す。柱間寸法は、桁行で7尺(2.10～2.20m)、梁行は8尺(2.30～2.80m)を測る。柱穴の形態は、円形または楕円形を呈し、規模は、径50×57cm～96×86cm、深度75～126cmを測る。P₁、P₂、P₅、P₆、P₈、P₉、P₁₀では、柱痕が確認され、柱痕径は17～30cmである。P₂～P₃、P₆～P₇、P₈～P₉、P₁₀～P₁の間には、溝が設けられている。溝の規模はP₂～P₃で幅35～40cm、深度19cm。P₆～P₇で巾47～67cm、深度23cm。P₈～P₉で幅35～56cm、深度28cm。P₁₀～P₁で幅28～40cm、深度47cmである。

PNo	平面形態	長 径	短径	深度	柱痕径	PNo	平面形態	長 径	短径	深度	柱痕径
1	不整形	98	86	86	28	9	楕円形	76	68	82	30
2	楕円形	78	70	77	17	10	楕円形	75	70	92	18
3	楕円形	73	70	105		ピット間溝計測値					
4	楕円形	57	50	77					幅	深	
5	楕円形	63	55	75	32	P 2～P 3		35～40		19	
6	楕円形	96	68	126	18	P 6～P 7		47～67		23	
7	楕円形	82	86	105		P 8～P 9		35～56		28	
8	円形	72	68	98	21	P 10～P 1		28～40		47	

SB13

223

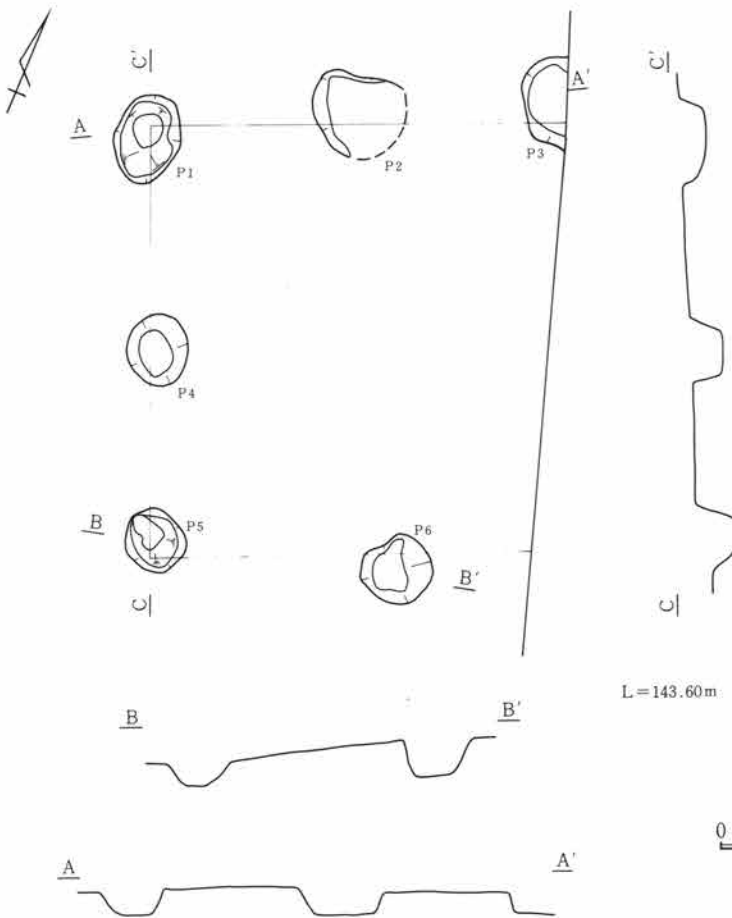


本建物跡は、82～86G-05～09グリッドに位置し、S J 102・107、S T13、S D46と重複するが、新旧関係は、本遺構が一番古い。規模は桁行3間(6.60m)、梁行2間(4.73m)で、床面積31.55m²を測る。主軸方向は、N-32.5°-Wを指す。柱間寸法は、桁行で7尺(2.20m)、梁行で8尺(2.37m)を測る。柱穴の形態は、P₅が長方形を呈する他は楕円形を呈する。規模は、径37×35cm～65×59cm、深度28～43cmを測る。P₃～P₄には、溝が設けられている。溝の規模は、幅28～75cm、深度24cmである。

PNo	平面形態	長径	短径	深度	PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	56	34	31	6	楕円形	37	35	28
2	楕円形	44	36	40	7	楕円形	45	44	35
3	楕円形	54	42	47	8	楕円形	50	45	45
4	楕円形	44	32	43	9	楕円形	50	43	35
5	長方形	65	59	23	10	楕円形	58	48	35

S B14

223



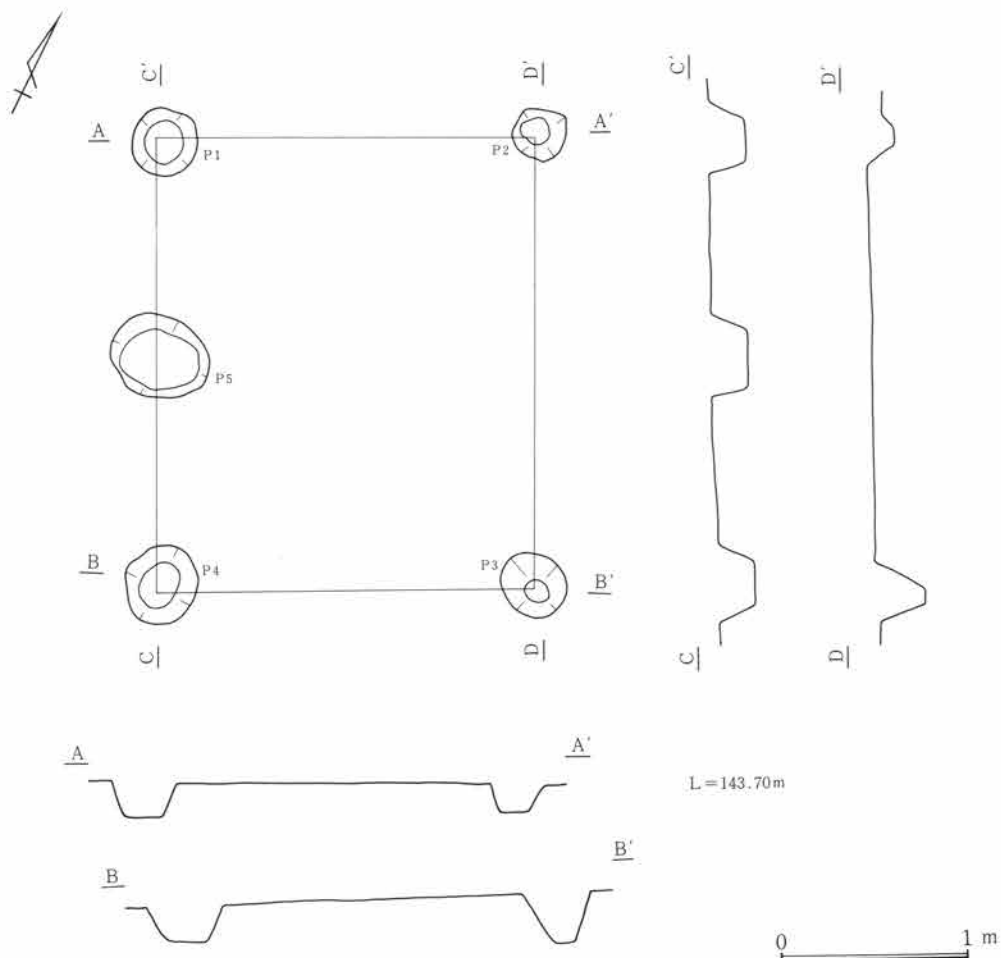
PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	94	65	28
2	楕円形	103	95	32
3	楕円形	95	—	27
4	楕円形	79	69	41
5	楕円形	66	59	44
6	楕円形	75	72	34

本建物跡は、75～81G-15～17グリッドに位置し、S J 111・116・117と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本址の東側は、調査区域外にのびるため全貌は不明である。規模は、桁行2間ないしは2間以上、梁行2間（4.58m）である。主軸方向は、N-35°-Eを指す。柱間寸法は、桁行で7～8尺、梁行で8尺弱（2.30m）を測る。柱穴の形態は、楕円形を呈し、規模は、径66×59cm～103×95cm、深度27～44cmを測る。

S B15

本建物跡は、78～81G-10～14グリッドに位置し、S J 62・63・110・111・112と重複するが、新旧関係はS J 62・63より本遺構のほうが古く、S J 110より新しく、S J 111・112との関係は不明である。規模は、桁行の西列では2間（4.80m）であるが、南列、梁行（4.00m）は1間である。床面積は、19.20m²を測る。主軸方向はN-36°-Wを指す。柱間寸法は、桁行西列で8尺（2.40m）を測る。柱穴の形態は、円形ないしは楕円形を呈し規模は径61×59cm～107×87cm、深度32～57cmを測る。

PNo.	平面形態	長径	短径	深度
1	円形	73	70	41
2	円形	61	59	32
3	楕円形	73	65	57
4	楕円形	87	80	40
5	楕円形	107	87	43



S B16・17

224

S B16は、95～103G-18～27グリッドに位置し、S J 119、S B17と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。規模は、身舎では桁行7間(13.06m)、梁行2間(5.40m)で、東面には孫廂をもつ。廂は、幅2.56mを測る。身舎の床面積は、70.52㎡、廂を含めた建物の総面積は、103.96㎡である。柱間寸法は、桁行で6尺(1.87m)、梁行で9尺(2.70m)、廂4尺5寸(1.38m)、孫廂4尺(1.18m)である。身舎の柱穴の形態は、楕円形か円形を呈し、規模は、径63cm～110×104cm、深度16～49cmを測り、廂の柱穴より規模は大きい。廂の柱穴は、楕円形か円形を呈し、径48×42cm～119×52cm、深度14～62cmである。

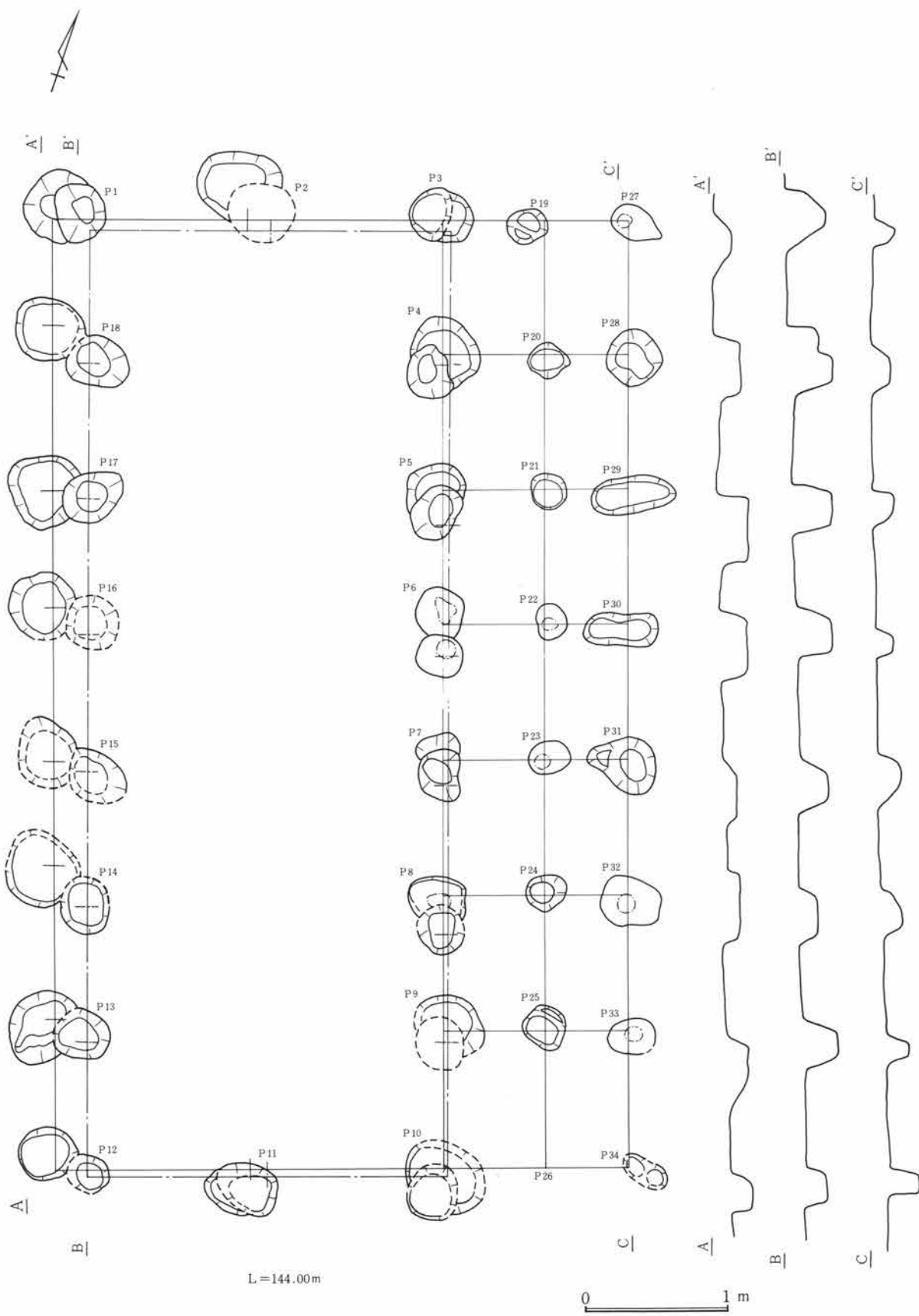
S B17は、S B16と同位置に位置し、S B16の建替えによるものであるが、建替えによって廂は取り除かれている。規模は、桁行7間(13.06m)、梁行2間(5.04m)とS B16より梁行が36cm短かく、全体としてはやや小規模になっている。柱間寸法は、桁行はS B16と同じであるが、梁行は8尺5寸(2.57m)である。柱穴の形態は、楕円形を呈し、規模は、径60×59cm～94×80cm、深度15～60cmを測る。柱痕は、P₆でのみ確認され、径26cmである。

S B16

身 舎						廂 ・ 孫 廂					
PNo	平面形態	長径	短径	深度	柱痕径	PNo	平面形態	長径	短径	深度	柱痕径
1	楕円形	97	—	25		18	楕円形	100	86	43	
2	楕円形	119	—	37		19	楕円形	54	54	26	
3	楕円形	68	—	16		20	楕円形	58	52	22	
4	楕円形	103	—	42		21	円形	50	50	14	
5	楕円形	85	—	49		22	楕円形	48	42	23	22
6	楕円形	78	69	37	26	23	楕円形	57	45	15	22
7	楕円形	63	—	37		24	楕円形	58	50	62	
8	楕円形	88	—	40	36	25	楕円形	58	56	27	
9	楕円形	106	—	44		26	未検出	—	—	—	
10	楕円形	121	—	42		27	楕円形	76	42	26	20
11	楕円形		—	30		28	楕円形	86	84	26	
12	楕円形	86	72	20		29	楕円形	119	52	30	
13	楕円形	110	92	33		30	楕円形	104	42	24	
14	楕円形	110	104	20		31	楕円形	100	75	33	
15	楕円形	104	82	20		32	楕円形	84	68	30	26
16	円形	92	92	40		33	楕円形	66	52	25	24
17	楕円形	106	—	48		34	楕円形	78	33	41	

S B17

PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	80	72	56
2	楕円形	94	80	51
3	楕円形	73	58	15
4	楕円形	75	60	45
5	楕円形	80	62	52
6	楕円形	67	65	36
7	楕円形	73	69	38
8	楕円形	72	65	39
9	楕円形	76	68	44
10	楕円形	78	72	26
11	楕円形	93	64	49
12	楕円形	60	59	29
13	楕円形	80	68	50
14	楕円形	80	78	43
15	楕円形	92	68	40
16	楕円形	78	76	55
17	楕円形	92	68	50
18	楕円形	83	70	60

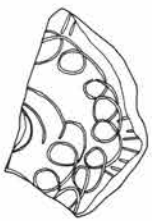
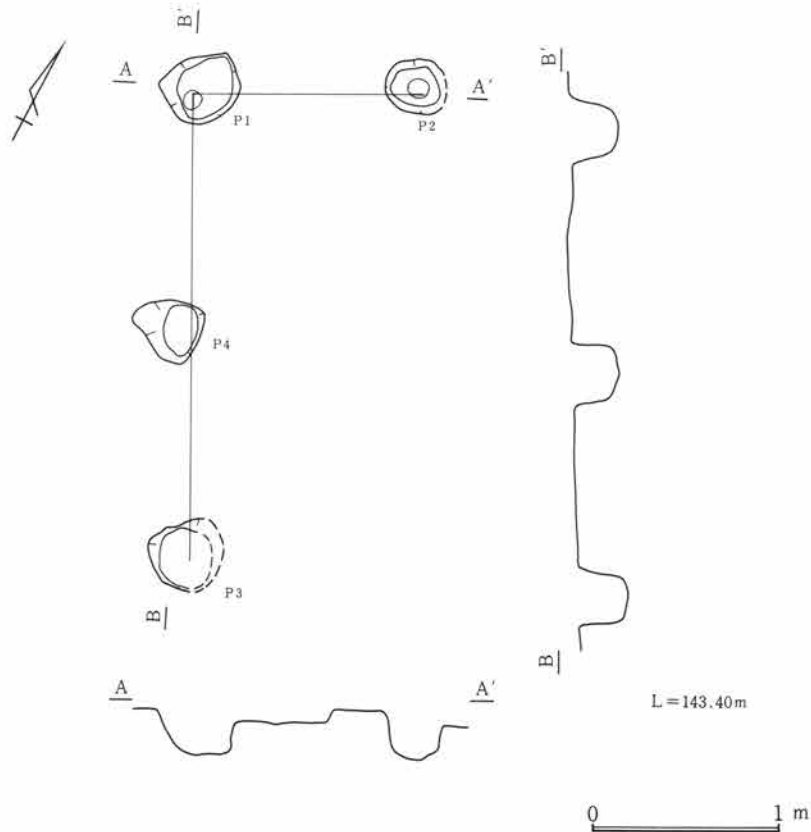


S B18

225

本建物跡は、77~78G-06~11グリッドに位置し、S J 64・66、S D21と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。本遺構の東南半分または半分以上は、S J 64・66、S D21に切られているため不明である。規模は、計測できなかったが、残存部分から東西2.70m以上、南北5.30m以上、の建物と推定されるが、桁行の方向は確認できない。本遺構の主軸方向は、N-25°-WかN-65°-EでS D46などとほぼ同じ方向を指す。柱間寸法は、南北・東西とも8尺(2.40m)を測る。柱穴の形態は、楕円形または円形を呈し、規模は、径67×56cm~88×70cm、深度51~55cmを測る。P₁、P₂では、柱痕が確認され、柱痕の径は21、23cmである。

PNo.	平面形態	長径	短径	深度	柱痕径
1	楕円形	88	70	52	21
2	楕円形	67	56	52	23
3	円形	80	80	55	
4	楕円形	75	65	51	



1

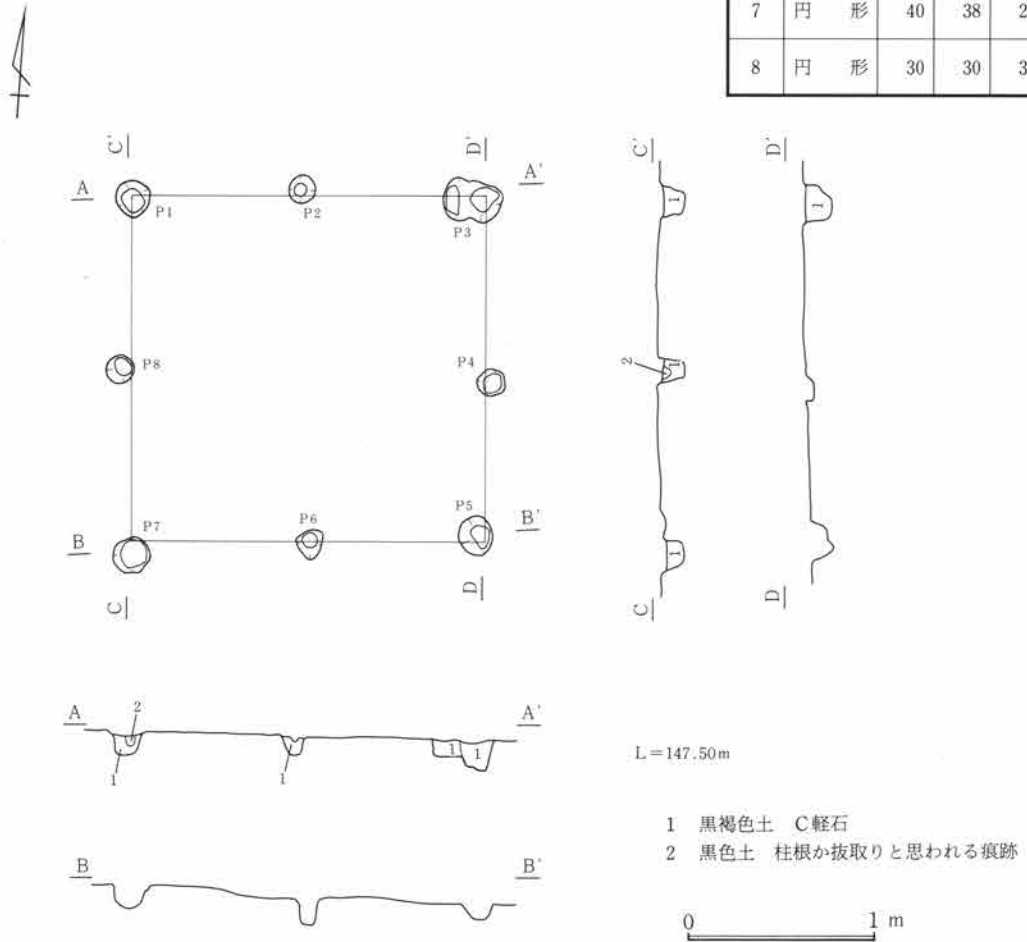
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	—・15.6・—、1/10 細砂粒、普通、橙色	底部はゆるい丸みをもつ。外面は体部・底部ともへら削り。内面の体部には放射状暗文、底部には螺旋状暗文が施されている。

S B19

本建物跡は、131～133 J—07～09グリッドに位置し、単独で占地する。規模は桁行2間(3.78m)、梁行2間(3.66m)で、床面積13.83㎡を測る。主軸方向は、N-86.5°-Eを指す。柱間寸法は、桁行で6尺強(1.89m)、梁行6尺(1.83m)を測る。柱穴の形態は、円形か楕円形を呈し、規模は、径31×27cm～63×47cm、深度10～30cmを測る。

225

PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	円形	38	37	26
2	楕円形	31	27	23
3	楕円形	63	47	31
4	円形	31	30	10
5	楕円形	43	36	25
6	楕円形	30	28	27
7	円形	40	38	24
8	円形	30	30	30

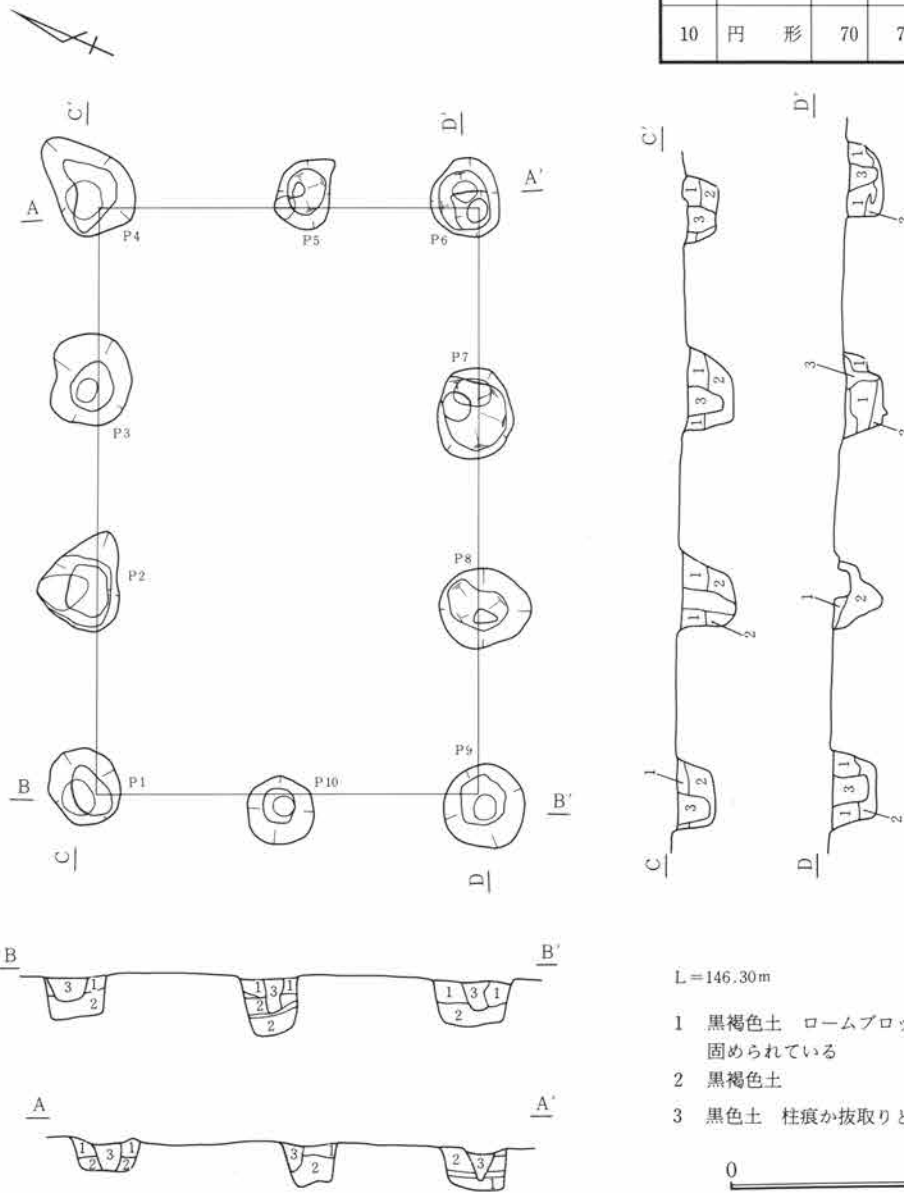


S B20

226

本建物跡は、112～116 I-12～16グリッドに位置し、単独で占地する。規模は、桁行3間(6.30m)、梁行2間(4.20m)で、床面積26.46㎡を測る。主軸方向は、N-51.5°-Wを指す。柱間寸法は、桁行の南列では7尺であるが、北列は西より8尺、7尺、6尺、7尺、6尺。梁行は、西列では7尺に対し、東列では北側8尺、南側6尺とばらつきがみられる。柱穴の形態は、楕円形または円形を呈し、規模は、径70×70cm～123×85cm、深度47～63cmを測る。柱痕は、P₈を除き確認され、柱痕径は22～55cmである。

PNo	平面形態	長径	短径	深度	柱痕径
1	楕円形	74	73	47	38
2	楕円形	105	87	63	55
3	楕円形	99	93	56	25
4	楕円形	123	85	50	39
5	楕円形	82	65	60	23
6	楕円形	85	75	52	27
7	楕円形	95	81	48	40
8	楕円形	99	83	53	
9	円形	90	88	49	27
10	円形	70	70	50	22

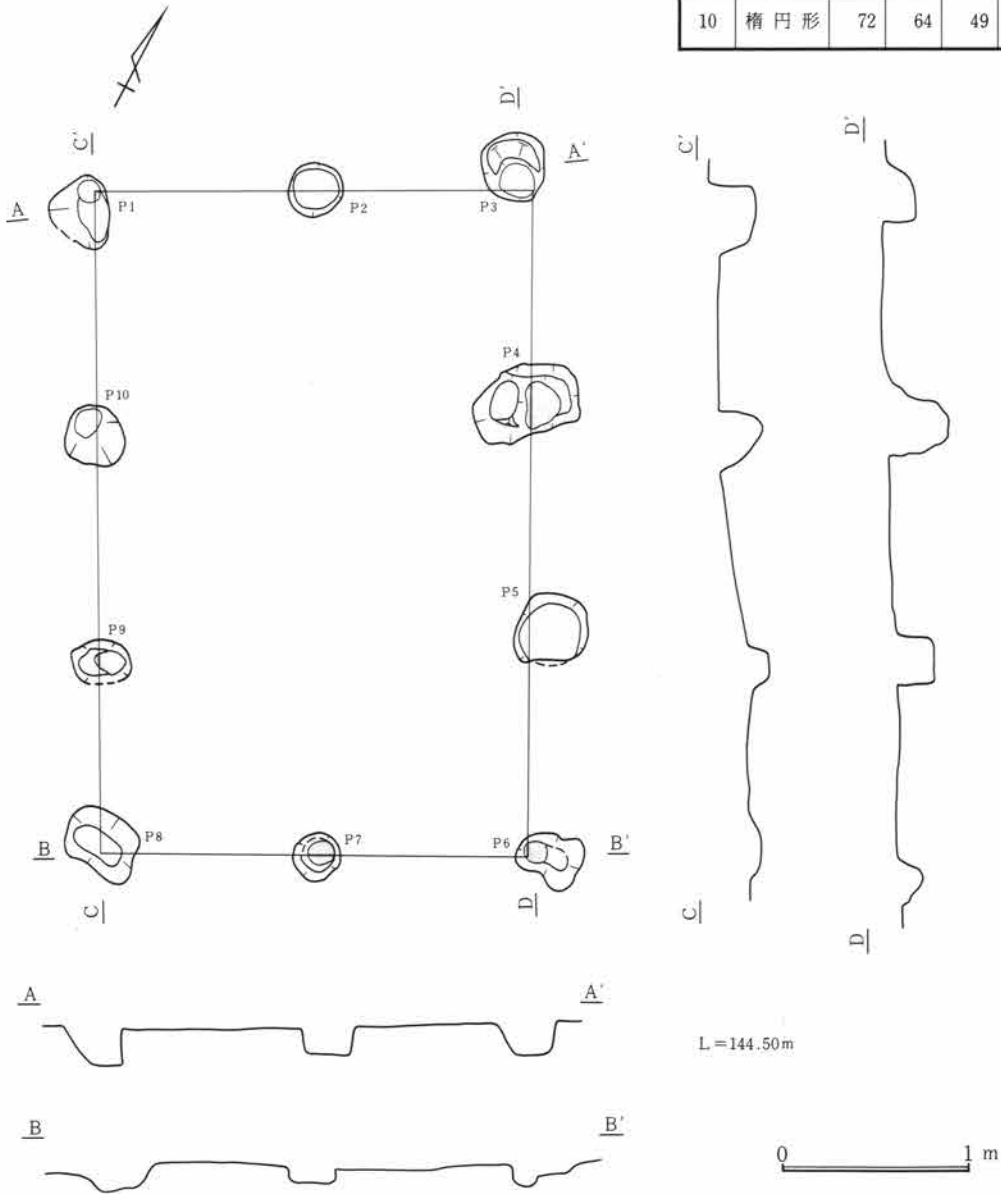


S B21

226

本建物跡は、104～108G-36～41グリッドに位置し、S J 200と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。規模は、桁行3間（東列7.06m、西列7.00m）、梁行2間（南列4.54m、北列4.66m）で、面積32.62m²を測る。主軸方向は、N-27.5°-Wを指す。柱間寸法は、桁行の東列では8尺（2.35m）、西列では北側より8尺、7尺、9尺。梁行では北列、南列とも8尺（2.33m、2.77m）に近い配置になっている。柱穴の形態は、ほぼ楕円形または円形を呈し、規模は、径52×48cm～117×73cm、深度23～71cmを測る。柱痕は、P₁、P₆、P₇、P₉、P₁₀で確認され、柱痕径は、径26～32cmである。

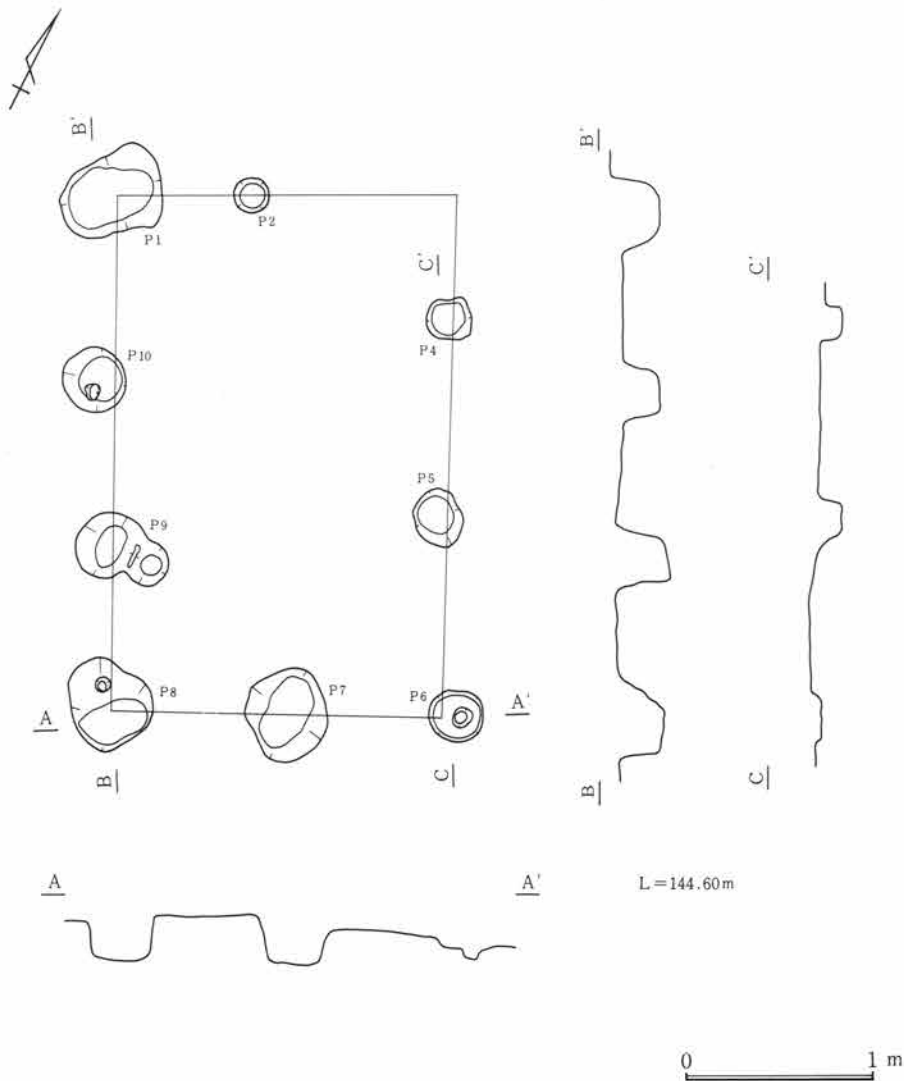
PNo	平面形態	長径	短径	深度	柱痕径
1	楕円形	79	63	52	25
2	円形	58	58	33	
3	円形	73	73	36	
4	楕円形	117	75	71	
5	楕円形	89	79	42	
6	不整形円形	67	67	28	26
7	円形	52	48	22	26
8	楕円形	80	60	34	
9	楕円形	65	45	23	32
10	楕円形	72	64	49	32



S B22

本建物跡は、92～96H-06～09グリッドに位置し、S J 56・207と重複するが、新旧関係は、S J 207より本遺構のほうが新しく、S J 56との関係は不明であった。本遺構の東北部分は、検出できなかったため全貌は不明な点があるが、規模は、桁行3間(5.44m)、梁行2間(3.50m)で、床面積は、推測で19㎡である。主軸方向は、N-35.5°-Eを指す。柱間寸法は、桁行の西列では6尺(1.80m)であるが、東列は、南・中央間が7尺で北側が5尺で、梁行は南列が8尺に対して、北列は西側5尺を測る。柱穴の形態は、ほぼ楕円形か円形を呈し、規模は、径49×43cm～111×90cm、深度26～58cmを測る。

PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	111	90	53
2	円形	37	37	
3				
4	楕円形	49	43	26
5	楕円形	65	50	26
6	楕円形	69	56	26
7	楕円形	102	89	54
8	楕円形	95	87	48
9	瓢箪形	100	72	58
10	円形	68	68	38

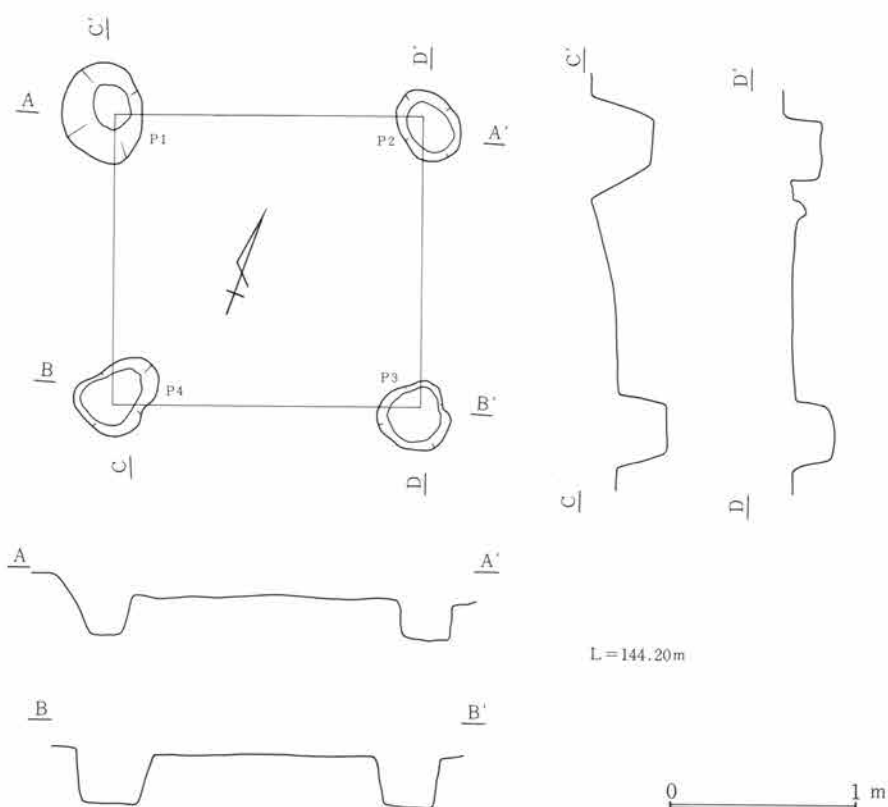


S B23

227

本住居跡は、107～109G-35～37グリッドに位置し、S J 199・200・201と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。規模は、桁行1間(3.28m)、梁行1間(3.08m)で、床面積10.10m²を測る。柱間寸法は、桁行11尺、梁行10尺を測る。柱穴の形態は、楕円形を呈し、規模は、径82×61cm～108×85cm、深度45～68cmを測る。

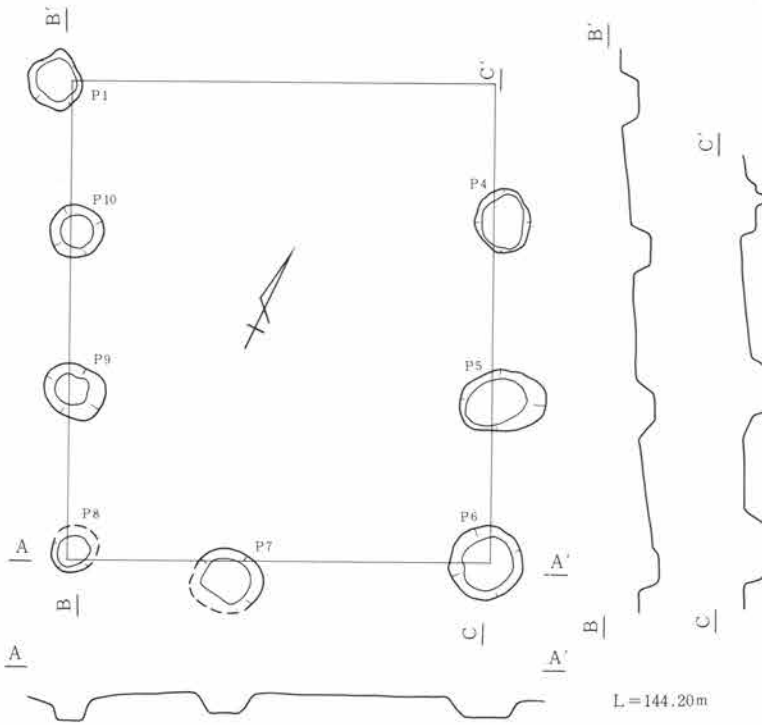
PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	108	85	68
2	楕円形	82	61	45
3	楕円形	78	74	57
4	楕円形	92	70	60



S B24

227

本建物跡は、102～105G-31～35グリッドに位置し、S J 214、S K 115、S D 62と重複するが、新旧関係は、S D 62より本遺構のほうが古く、S J 214、S K 115より新しい。規模は、桁行3間(5.05m)、梁行2間(4.50m)で、床面積は推定22.72m²を測る。主軸方向は、N-52°-Wを指す。柱間寸法は、桁行で6尺(1.08m)、梁行では西側6尺、東側9尺である。柱穴の形態は、楕円形か円形を呈し、規模は径53×46cm～93×64cm、深度19～23cmを測る。

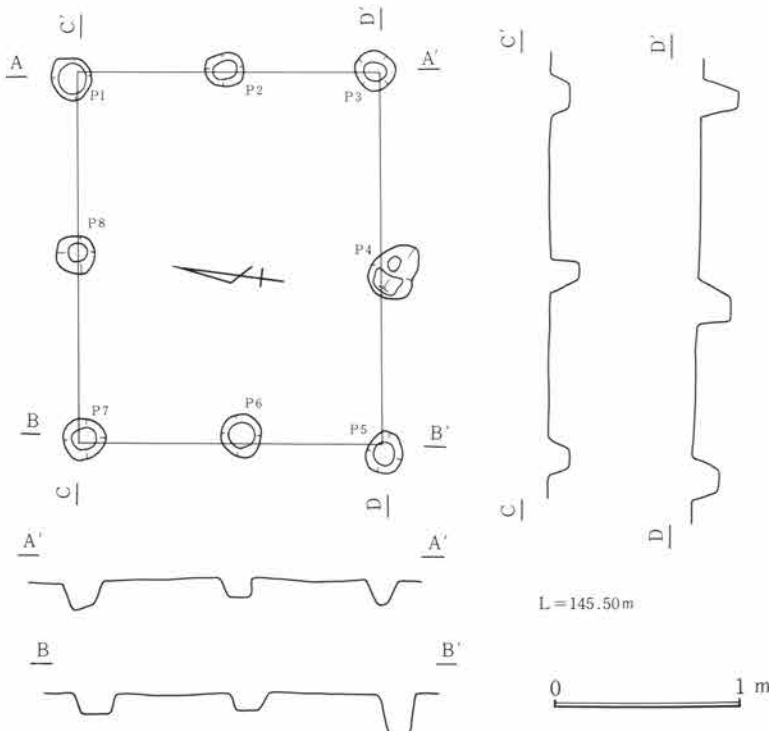


PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	65	58	23
2	—	—	—	—
3	—	—	—	—
4	楕円形	68	60	21
5	楕円形	93	64	19
6	円形	78	78	22
7	楕円形	76	68	23
8	楕円形	53	46	23
9	楕円形	66	59	19
10	円形	58	53	21

S B25

227

本建物跡は、98～100H-42～44グリッドに位置し、単独で占地する。規模は、桁行2間(3.90m)、梁行2間(3.22m)で、床面積12.56㎡を測る。主軸方向は、N-38.5°-Wを指す。柱間寸法は、桁行では約6尺強(1.90～2.00m)、梁行の北列では5尺(1.60m)、南列では東側5尺(1.50m)、西側6尺弱(1.70m)を測る。柱穴の形態は、円形か楕円形を呈し、規模は、径40×37cm～65×60cm、深度19～42cmを測る。



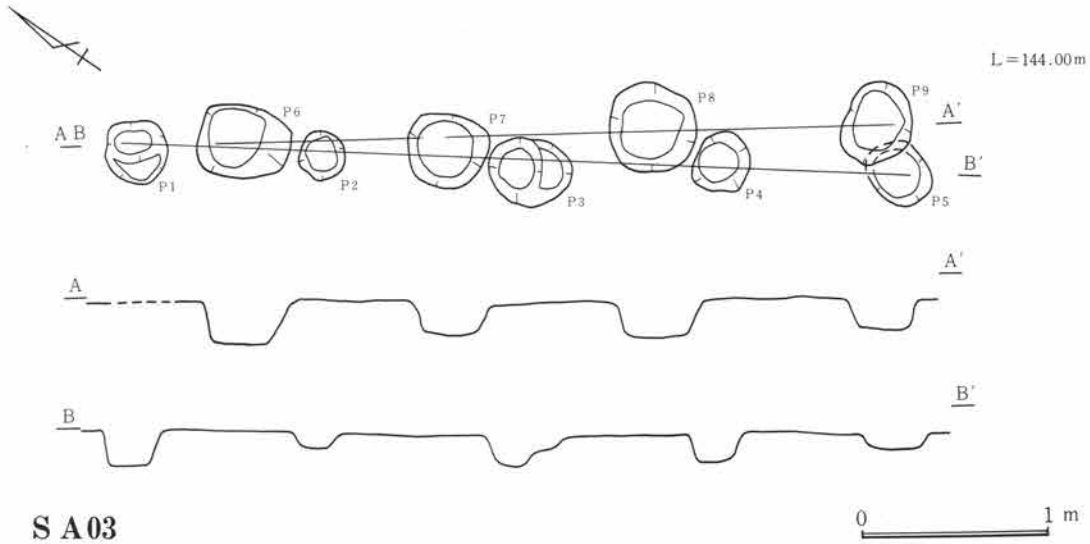
PNo	平面形態	長径	短径	深度
1	楕円形	46	43	21
2	楕円形	40	37	21
3	楕円形	43	43	41
4	楕円形	65	60	37
5	楕円形	44	39	42
6	円形	47	43	19
7	楕円形	45	45	22
8	楕円形	43	41	21

3 柵列 (SA)

SA01・02

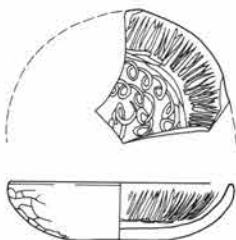
SA01は、105～107G-12～16グリッドに位置し、SA02と重複するが、新旧関係は、SA02のほうが新しい。規模は、4間(8.40m)で、柱間寸法は、7尺(2.10m)を測る。本遺構は、N-29.5°-Wの方向に走り、SB02、03の梁方向と同じ方向で、SA03とは直交する短かい柵列で、内部の小区画のためのものである。柱穴の形態は、円形か楕円形を呈し、規模は、径52×49cm～88×71cm、深度17～39cmを測る。

SA02は、SA01の建替えによるもので、位置は僅かに東へずれる。規模は、3間(7.20m)とSAに比べてやや短かく、柱間寸法は、8尺(2.40m)を測る。柱穴の形態は楕円形を呈し、規模は径85×76cm～94×92cm、深度32～49cmを測り、SA01の柱穴よりやや大きい。

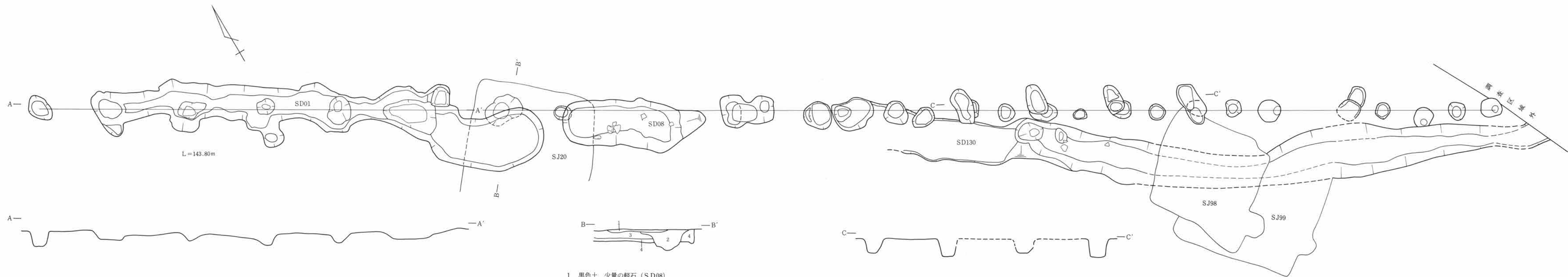


SA03

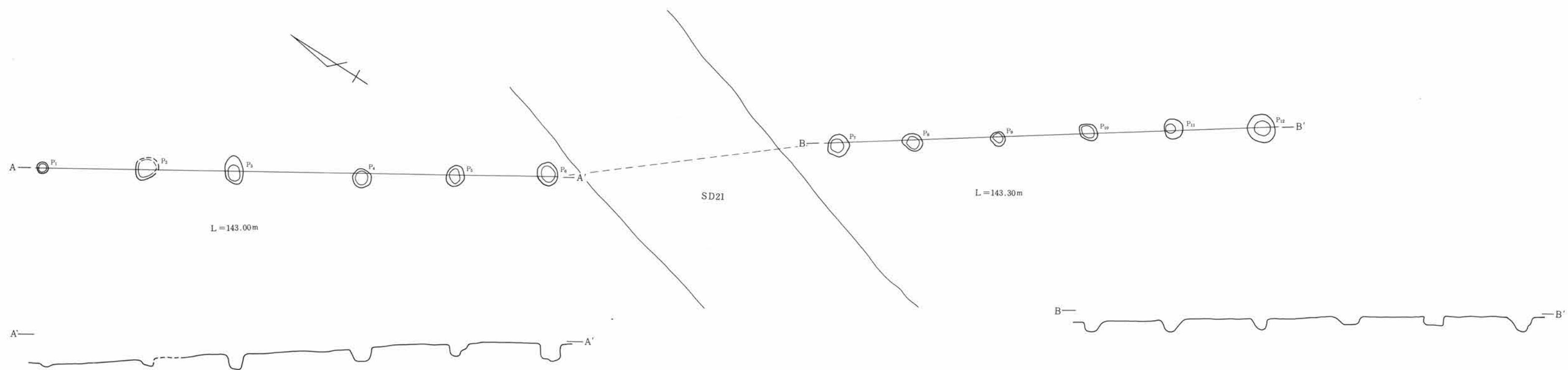
本遺構は、90～110G-08～20グリッドに位置し、SJ20・98・99、SB05、SD01・08・130と重複するが、新旧関係は、SJ98・99、SD08・130より本遺構のほうが古く、SJ20より新しい。SD01との新旧関係は、確認できなかった。本遺構は、調査区よりさらに西側へのびると推測されるため全貌は不明である。調査区内での規模は、全長45.44mで柱穴数26本が残存するが、SD08内にも2本存在していたと推測される。柱間寸法は、大部分が4尺(1.20m)であるが、場所によっては5～9尺とまちまちの間隔がみられる。本遺構は、N-59°-Eの方向を向き、SA01・02・10、SD59などと直交し、SD59・46によって区画された内側をさらに南北に区画する柵列である。柱穴の形態は、円形か楕円形を呈し、規模は、径42×38cm～132×104cm、深度24～52cmを測る。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.0・6.0・3.05、1/4 細砂粒・白色鉱物粒 硬質、橙色	口縁部は内湾し、平底。外面の口縁部横撫で、 体部・底部へラ削り。内面の体部には放射状暗 文、底部には螺旋状暗文が施されている。



- 1 黒色土 少量の軽石 (SD08)
- 2 黒色土 軽石 (SA03)
- 3 黒色土 多量の軽石、大粒の黄褐色ブロック (SJ20)
- 4 黒色土 軽石、黄褐色ブロック (SJ20)



0 1m

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 覆土	11.6・10.4・2.7、1/10 細砂粒、普通、橙色	口縁部はほぼ直立し底部は平底に近い。口縁部は横撫で底部はへら削り。口縁部の立ち上がりは指撫で。
3	須恵器 坏 覆土	13.6・8.0・3.4、5/6 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焙、灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはやや開く。体部の下位は1段の回転へら削り。底部は回転へら削り。

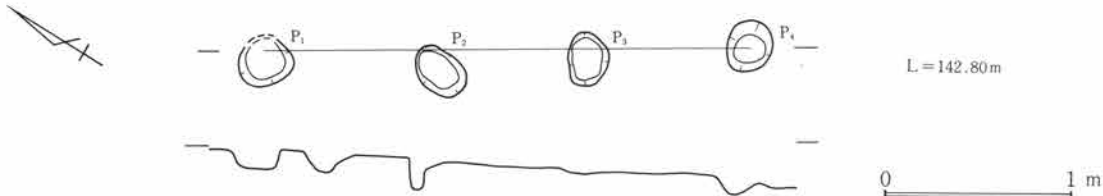
S A06・08

229

A06・08は、73～81F-46～G-06グリッドに位置し、S D21と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。S A06の規模は5間(11.08m)、柱間寸法はP₃～P₄が9尺(2.68m)を除き7尺(2.10m)を測りN-34°-Wの方向を向く。柱穴の規模は、ほぼ円形に近く、規模は、径25×22cm～51×51cm、深度9～38cmを測る。S A08の規模は、5間(9.45m)、柱間寸法はP₂～P₂、P₂、P₅～P₆が6尺(1.80m)、P₃～P₄が6尺5寸(1.95m)、P₁～P₂が7尺(2.10m)を測り、N-37°-Wの方向を向く。柱穴の形態は、ほぼ円形を呈し、規模は、径33×31cm～径60×58cm、深度17～29cmを測る。S A06・08は、方向がややずれる点はあるが、本来連続する全長20.53mの柵列であると推測されるが、中間をS D21によって切られているため確定できない。

S A07

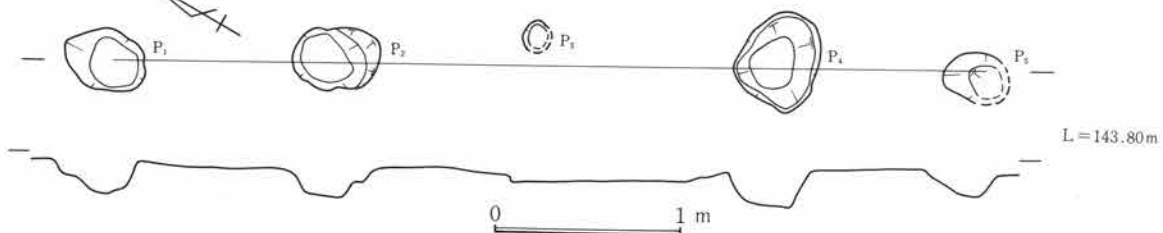
本遺構は、75～76F-46～48グリッドに位置し、残存部分では重複は確認されなかったが、本遺構は、北方向へのびると推測されるため、S D46が掘られる以前のものと推定される。規模は、残存部分で3間分(5.40m)で、柱間寸法は、6尺(1.80m)を測り、N-33.5°-Wの方向に向く。柱穴の形態は、楕円形を呈し、規模は、径55×44cm～62×42cm、深度21～35cmを測る。



S A10

229

本遺構は92～94G-18～23グリッドに位置し、S J 118と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。規模は、4間(9.60m)で、柱間寸法は、ほぼ8尺(2.40m)を測る。本遺構は、N-31.5°-Wの方向を向き、S A03とは、ほぼ直交し、S B16・17とは、ほぼ同じ方向を向く。柱穴の形態は、楕円形を呈し、規模は、径70×54cm～104×89cm、深度25～43cmを測る。P₃は、S J 118によって上部の大半が切られているため詳細は不明である。



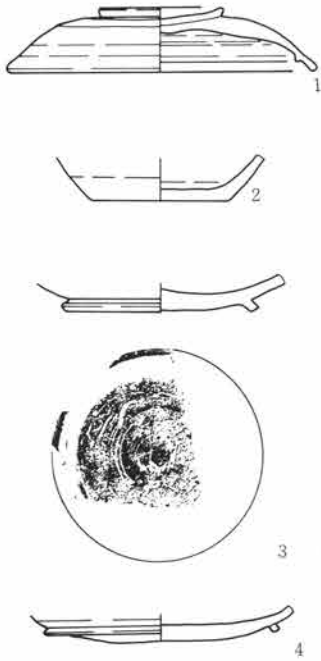
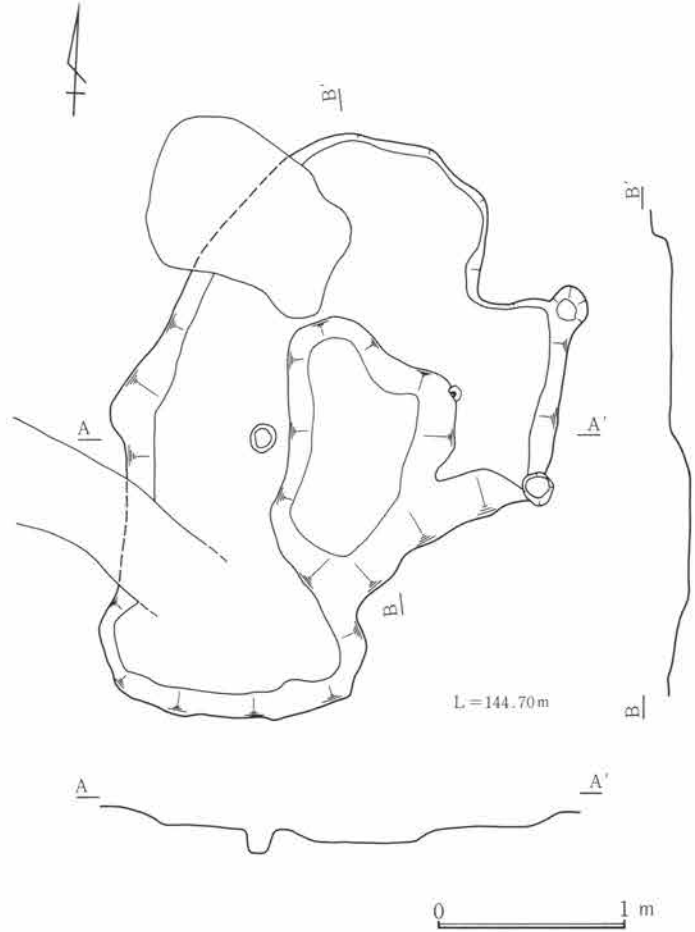
4 竪穴状遺構 (ST)

ST02

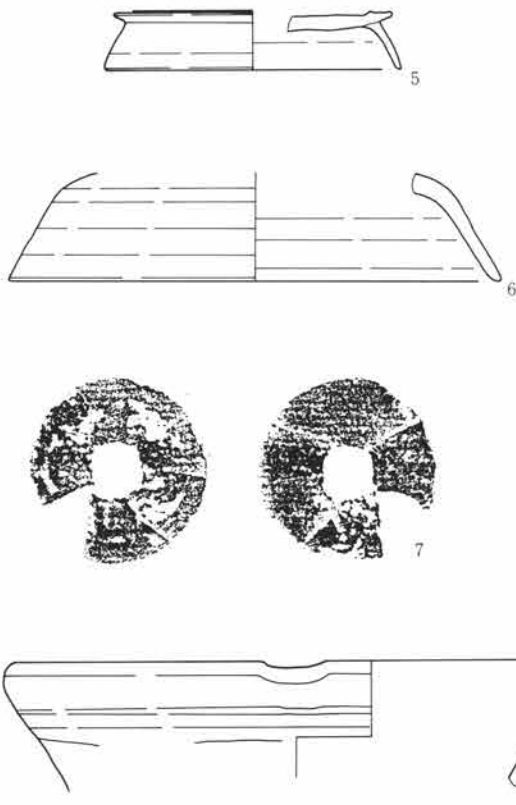
230

本遺構は、112~115G-48~H-00グリッドに位置し、SK13と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、東側が張り出し状に突き出る「凸」字形を呈す。規模は、長軸6.53m、短軸3.46m、張り出し部分では、長軸2.96m、短軸1.14mで総面積20.4m²を測る。

底面は、ゆるい凹凸がみられ、楕円形で径300×243cm、深度22cmの土壇状の落ち込みと円形で径34cm、深度24cmのピットが存在する。張り出し部の東南・東北コーナーには、円形で径37cm、深度51cmと円形で径42cm、深度42cmのピットが存在する。立ち上がりは、張り出しの北側から北側部分にかけては垂直で他の部分は緩やかな状態を呈す。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	16.2・鈕6.6・3.4 1/2 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。鈕は大型の扁平状、天井部は丸みをもつ。内面に身受けのカエリをもつ。天井部の過半までは回転ヘラ削り。
2	須恵器 坏 覆土	—・7.3—、1/8 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。底部は平底を呈し、体部はゆるい丸みもち開く。底部回転ヘラ撫で。
3	須恵器 坏 覆土	—・9.7—、小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ左回転。底部は極ゆるい丸みもち、体部も丸みもち大きく開く。高台は断面四角形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部は回転ヘラ削り。
4	須恵器 坏 覆土	—・12.2—、小片 粗砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰白色	ロクロ左回転。底部はゆるい丸みをもつ。高台は端部に丸みもち「ハ」の字状に開く。底部回転ヘラ削り。

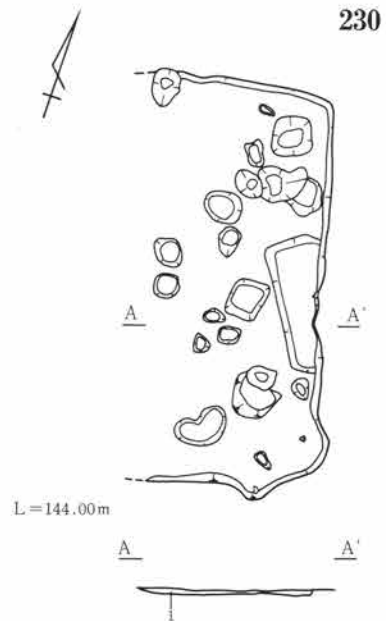


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
5	須恵器 蓋 覆土	15.7・—・— 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	短頸壺蓋。ロクロ回転方向不明。鈕欠損、天井部は水平で口縁部はゆるい丸みをもち開く。天井部と口縁部との間に鏝をもつ。天井部はヘラ撫で。
6	須恵器 蓋 覆土	26.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	大型短頸壺の蓋。ロクロ回転方向不明。口縁部はやや外反し、端部は丸みをもつ。
No	種 類	観察表掲載頁	
7	銅製品 銭	911	
8	軟質陶器 針	815	

S T 08

本遺構は、88～90G—40～42グリッドに位置する。本遺構の調査は、東側道地区とGH地区の二回に分割されて調査がおこなわれたため、GH地区でS J 211と重複しているが、新旧関係は、明確にできなかったため、本遺構の西半分は確認できなかった。平面形態は、長方形を呈すると推測される。規模は、南北軸で4.22mを測る。覆土は、自然堆積を呈し、暗褐色土で覆われている。

底面は、平坦であるが、方形・円形・楕円形の形態を呈し、規模が、径34×15cm～43×42cm、深度9～28cmを測るピットが多数検出された。立ち上がりは、垂直な状態を呈し、高さは、9～15cmを測る。



1 褐色土 B軽石 褐色粘土ブロック

0 1 m



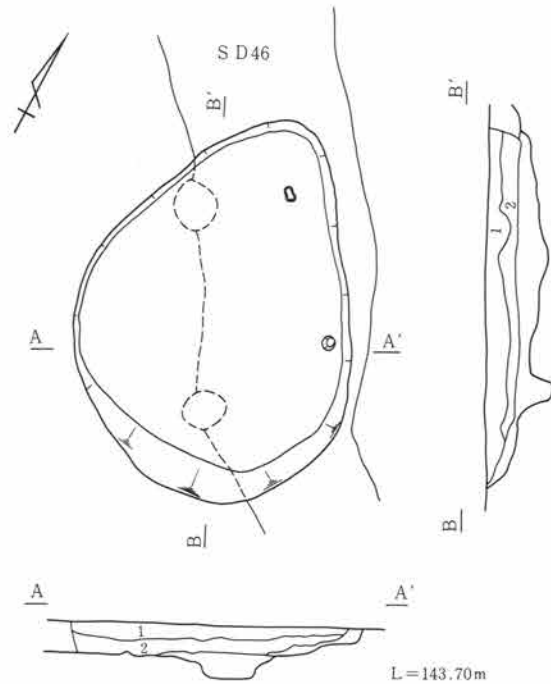
No	種 類	観察表掲載頁
1	銅製品 切羽	897

ST10

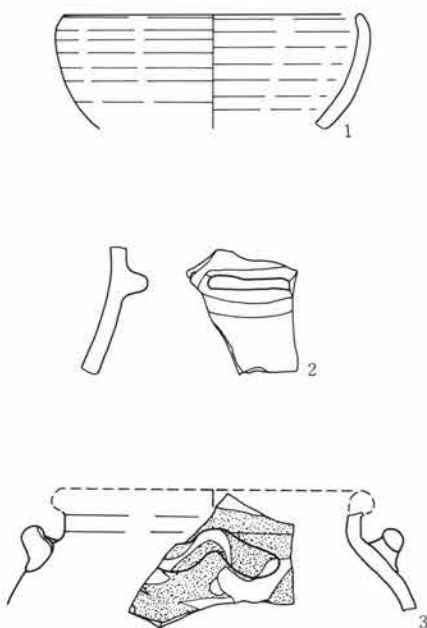
本遺構は、85～87G-11～13グリッドに位置し、SB12、SD46、ST11と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、卵形に近い形状を呈す。規模は、長軸4.06m、短軸3.00mで面積8.9m²を測る。覆土は、レンズ状の自然堆積状態を呈し、大部分が黒色砂質土で覆われている。

底面は、平坦で中央に向けて緩い傾斜がみられる。立ち上がりは、南側がやや緩やかであるが、他の部分では、ほぼ垂直に近い状態で、高さは、23～26cmを測る。

本遺構からは、下記の実測遺物の他、土師器坏・甕片、鉄滓の出土があった。



- 1 黒褐色砂質土
- 2 黒褐色砂質土 1より粘性有り



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	15.6・—・— 1/10 粗砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は内湾する。底部下半は回転ヘラ削り。
2	須恵器 短頸壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	短頸壺把手部分。把手周囲は撫で。
No.	種類	観察表掲載頁	
3	陶器 耳壺	798	

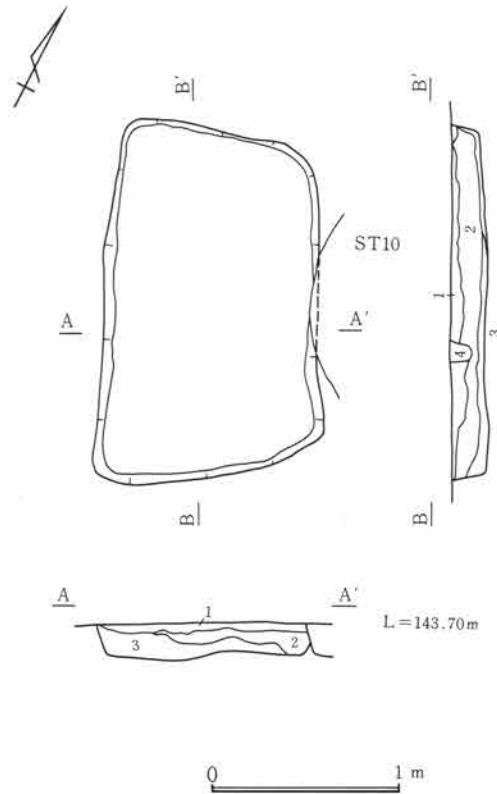
S T 11

231

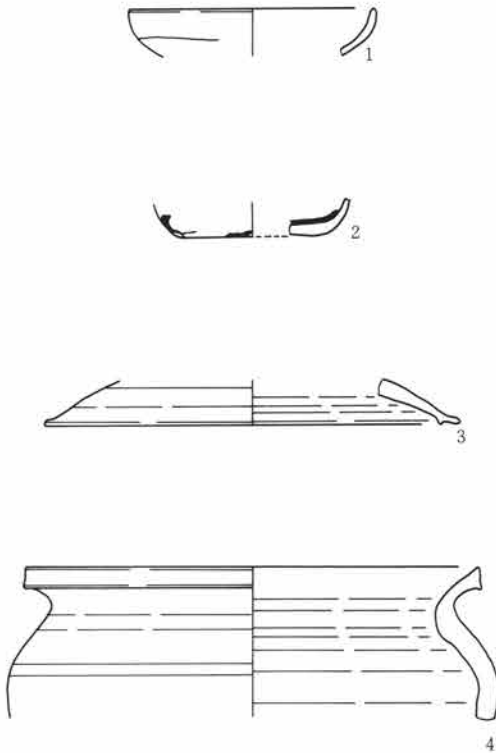
本遺構は、86～88G-10～12グリッドに位置し、S T10、S B12と重複するが、新旧関係は、S T10より本遺構のほうが古く、S B12との新旧関係は確認できなかった。平面形態は、東辺の短かい台形状を呈す。規模は、西辺3.76m、東辺3.06m、南辺2.46m、北辺2.04mで面積8.1m²を測る。覆土は、レンズ状の自然堆積を呈し、黒褐色土で覆われている。

床面は、平坦である。立ち上がりは、垂直な状態で高さは、24～34cmを測る。

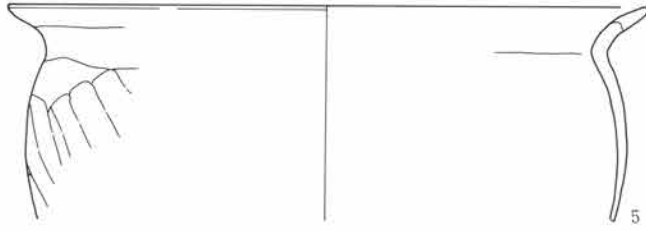
本遺構からは、土師器坏・甕・須恵器坏・蓋・甕の他鉄滓が4点出土している。



- 1 地山ブロックを含まない黒褐色土（自然）
- 2 地山ブロックの多い黒褐色土（人為堆積）
- 3 地山ブロックを主とする黒褐色土
- 4 中世砂質土（BP）



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.8・—・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で。体部はヘラ削り。
2	須恵器 坏 覆土	—・7.6・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。底部は平底、体部はゆるい丸みをもちあまり開かない。底部はヘラ撫で。内外面とも煤の付着がみられる。
3	須恵器 蓋 覆土	21.8・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち口唇部はやや外反する。内面には、身受けのカエリをもつ。
4	須恵器 広口壺 覆土	24.0・—・— 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	口縁部は大きく外反し、口唇端部は上下に引き出されている。胴部は肩部がやや張り、1条の凹線が回る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
5	土師器 甕 覆土	33.8・—・— 小片 粗砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は大きく 開き、胴部はゆる いふくらみをも つ。口縁部は 横撫で。外面の 胴部は斜め方向 へのヘラ削り。

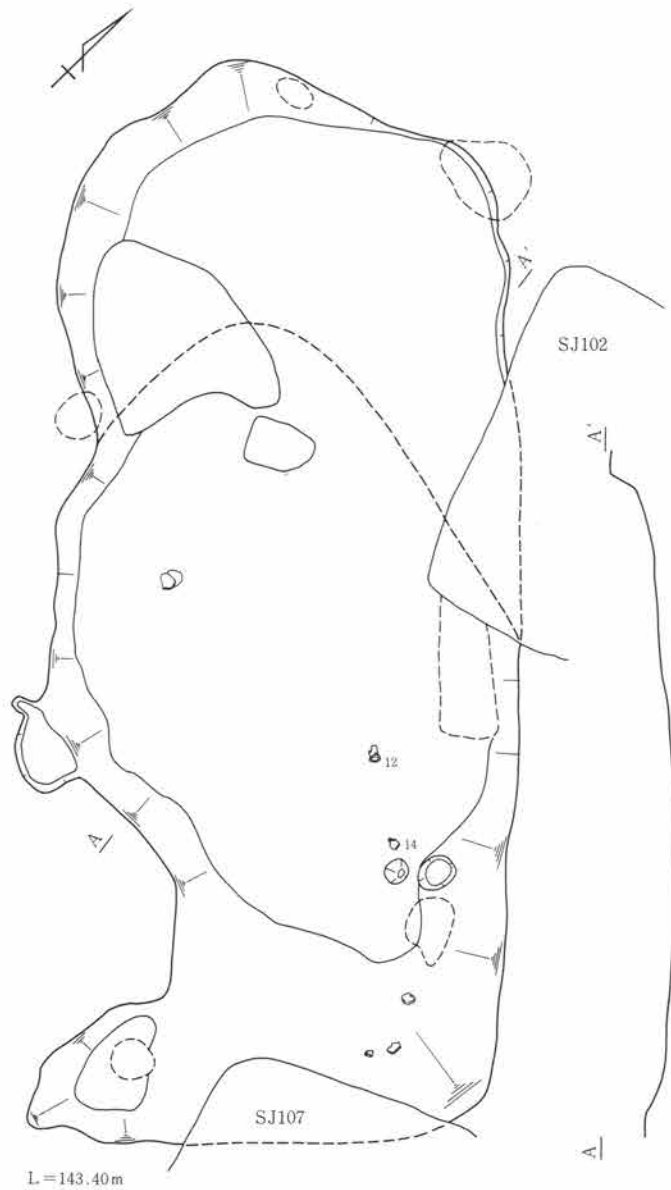
ST12・13

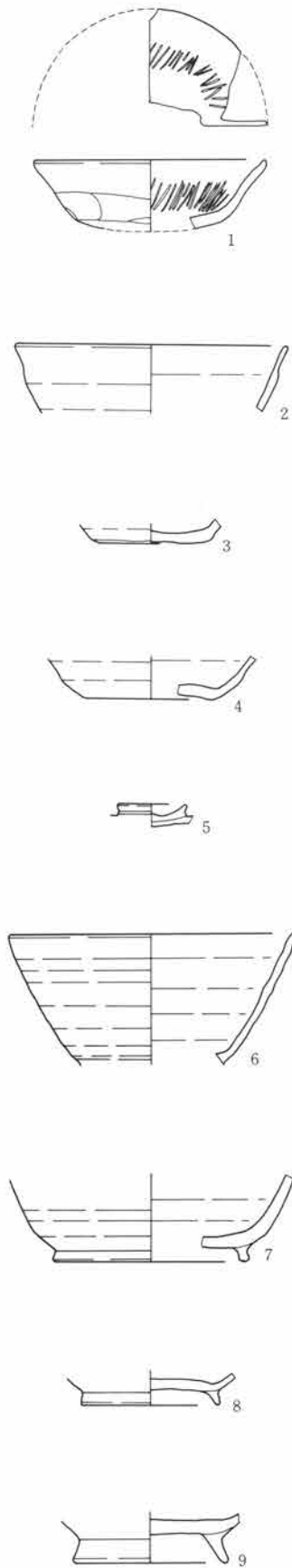
ST12は、84～87G-8～10グリッドに位置し、SB12・13、SJ102、ST13、SD46と重複するが、新旧関係は、SD46より本遺構のほうが新しいが、他の遺構よりは、本遺構のほうが古い。本遺構の南側は、ST13によって切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、円形状を呈すると推測される。規模は、径4.60～4.70mを測ると推測される。

底面は、中央に向けてゆるい傾斜がみられる。立ち上がりは、垂直な状態で、高さは、40～50cmを測る。

ST13は、83～86G-05～09グリッドに位置し、SB13、SJ107・108・102、ST12、SD46と重複するが、新旧関係は、SJ107・108・102より本遺構のほうが古く、SB13、ST12、SD46より新しい。本遺構の南側の一部は、SJ107・102に切られているため全貌は不明であるが、平面形態は、南側が不整形を呈するが、主体は楕円形を呈す。規模は、長軸8.40m、短軸4.70mを測る。

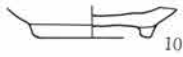
底面は、緩やかな凹凸がみられる。立ち上がりは緩やかで、高さは30cm前後を測る。



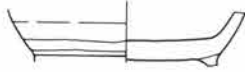


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.6・8.6・— 1/3 細砂粒・褐色鉍物粒 やや軟質 橙色	口縁部は外反し、口唇端部はやや立つ。底部は極ゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は1段の横方向へのヘラ削り。底部もヘラ削り。内面の体部は雑な放射状暗文が施されている。
2	須恵器 碗 覆土	15.8・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ成形、体部から口縁部にかけては直線的でやや開く。
3	須恵器 坏 覆土	—・7.0・— 1/10 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。底部手持ちヘラ削り。
4	須恵器 坏 覆土	—・7.4・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開く。底部は回転糸切り、底部の周辺部に部分的にヘラ削りがみられる。
5	須恵器 蓋 覆土	—・鈕4.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。還状鈕
6	須恵器 碗 覆土	16.6・(8.4)・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。器高は深く、体部から口縁部にかけては直線的に開く。
7	須恵器 碗 覆土	—・12.2・—、小片 細砂粒・3～5mm大の角礫 外面、還元焰 内面、酸化焰 外-灰白色 内-おい黄橙色	ロクロ回転方向不明。体部は直線的であり開かない。高台は断面四角形でやや開く。底部切り離し方法不明。
8	須恵器 碗 覆土	—・8.0・— 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は端部にやや丸みをもち、底部は回転ヘラ切り。
9	須恵器 碗 覆土	—・8.4・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	底部は回転ヘラ削り後、周辺部は高台貼付による回転撫で付がおこなわれている。

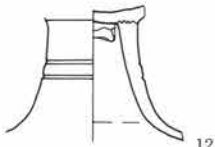
第3章 検出遺構・遺物



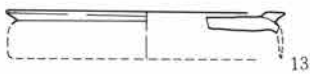
10



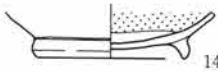
11



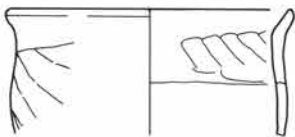
12



13



14



15



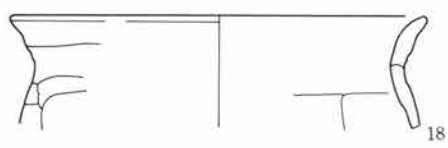
16



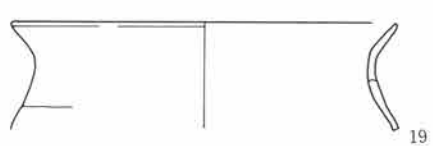
17

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
10	須恵器 碗 覆土	—・6.6・— 1/4 細砂粒・雲母 半還元焰 灰白色	ロクロ右回転。高台は端部に丸みをもち、ほぼ直立する。底部切り離し方法不明。
11	須恵器 碗 覆土	—・10.0・— 1/4 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り、周辺部は高台貼付時の撫で。体部の最下位は1段の回転ヘラ削り。
12	須恵器 高坏 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	高坏脚部のみ。ロクロ回転方向不明。脚部は裾で大きく開き、中に2条の凹線が回る。
13	須恵器 蓋 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	短頸壺の蓋。天井部は水平で口縁部との堺に銚をもつ。
14	灰釉陶器 碗 覆土	—・8.2・— 小片 緻密・黒色鉾物粒 還元焰・焼きしめ 灰色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもち大きく開く。高台は三日月高台を呈す。底部は回転ヘラ撫で。施釉方法は漬け掛け。釉調は不透明な灰色。
15	土師器 甕 覆土	14.8・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は短く直線的にやや開く。胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で。外面の胴部は横方向へのヘラ削り。内面の頸部は縦方向へのヘラ撫で。胴部は横方向のヘラ削り。
16	土師器 甕 覆土	9.6・—・— 1/10 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状の裨化したもの。胴部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、外面の胴部上半は左方向へのヘラ削り。下半は縦方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
17	土師器 台付甕 覆土	—・5.4・— 小片 細砂粒 硬質 にぶい赤褐色	台付甕脚部のみ、脚部は径9.6cmを測り、裾部は大きく開き、横撫で。

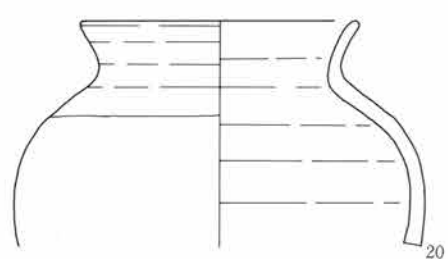
第4節 歴史時代



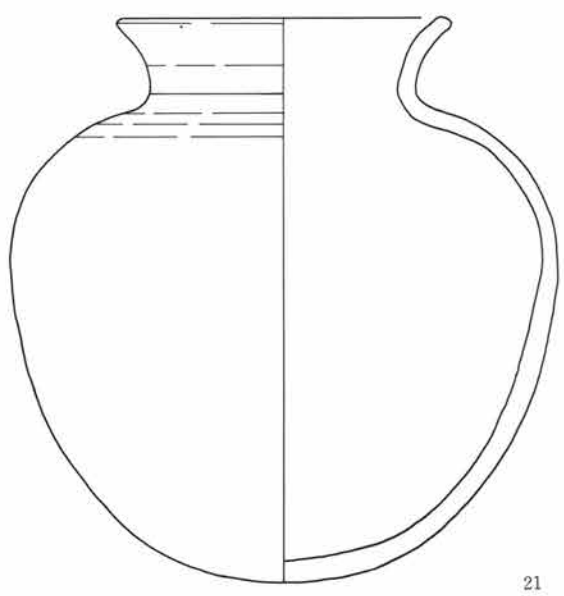
18



19



20



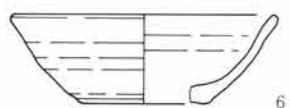
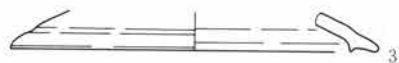
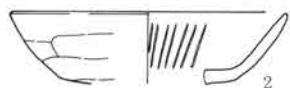
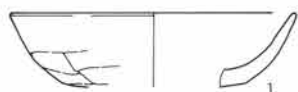
21



22

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
18	土師器 甕 覆土	22.0・—・— 小片 粗砂粒・雲母 普通 暗褐色	器壁はやや厚く、口縁部はやや外反し、横撫で。外面の胴部はヘラ削り、内面はヘラ撫で。
19	土師器 甕 覆土	20.5・—・— 小片 細砂粒・褐色鉾物 粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、横撫で。外面の胴部はヘラ削り。
20	須恵器 広口壺 覆土	14.8・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉾物 粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、胴部は球状の丸みをもつ。
21	須恵器 壺 覆土	17.2・—・29.5 1/2 粗砂粒 還元焰 灰白色	口縁部は外反ぎみに開き、胴部は球状の丸みをもつ。底部は丸底を呈す。外面の胴部は平行叩き、内面はヘラ撫で。
22	須恵器 蓋 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉾物 粒 還元焰 灰色	大型短頸壺蓋。ロクロ回転方向不明。天井部は回転ヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物

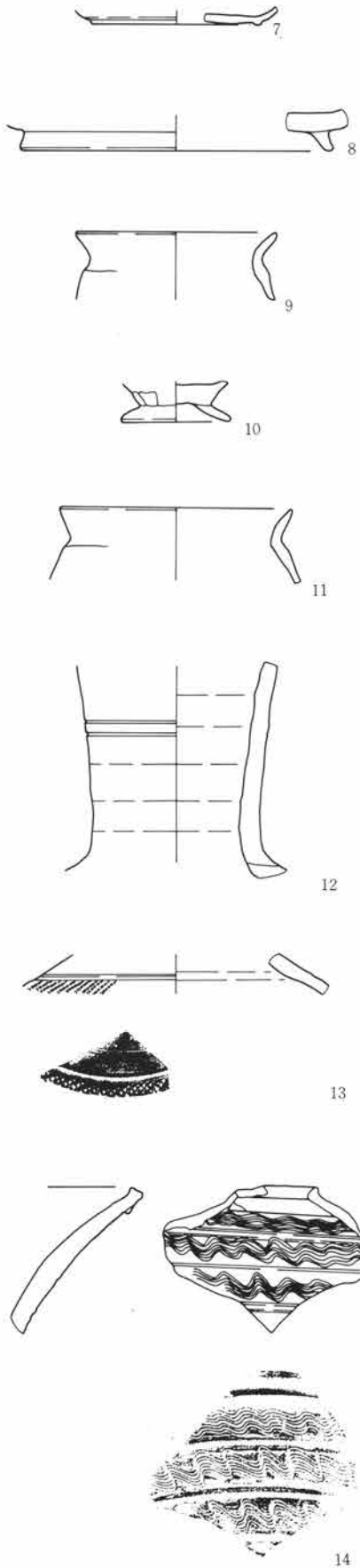


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴	
23	須恵器 短頸壺 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰白色	短頸壺把手部分、把手周辺は撫で。	
No.	種類	出土位置	石材	計測値
24	石製品 敲石	覆土	ひん岩	5.6・4.9・2.5cm 100g

ST13

1	土師器 坏	15.0・10.0・— 1/10 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 にぶい黄橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸み をもち開く。底部はほぼ平底を呈す。 口縁部は横撫で、体部は2段の右方向 へのヘラ削り。底部もヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	14.6・9.5・— 1/8 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に大 きく開く。底部は平底を呈す。口縁部 は横撫で、体部は2段の右方向へのヘ ラ削り。底部もヘラ削り。内面の体部 は放射状暗文が施されている。
3	須恵器 蓋 覆土	19.6・—・— 小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	天井部はやや丸みをもち、内面には身 受けのカエリをもつ。
4	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	口縁部は外反し、端部は直立し、折り 曲げ。
5	須恵器 蓋 覆土	16.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	天井部は大きな丸みをもち、口縁部は 外に開く。内面には身受けのカエリの 痕跡がみられる。
6	須恵器 坏 覆土	13.8・7.2・4.7 1/5 細砂粒・垂角礫 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、 体部は丸みをもち開く。底部は回転糸 切り。

第4節 歴史時代



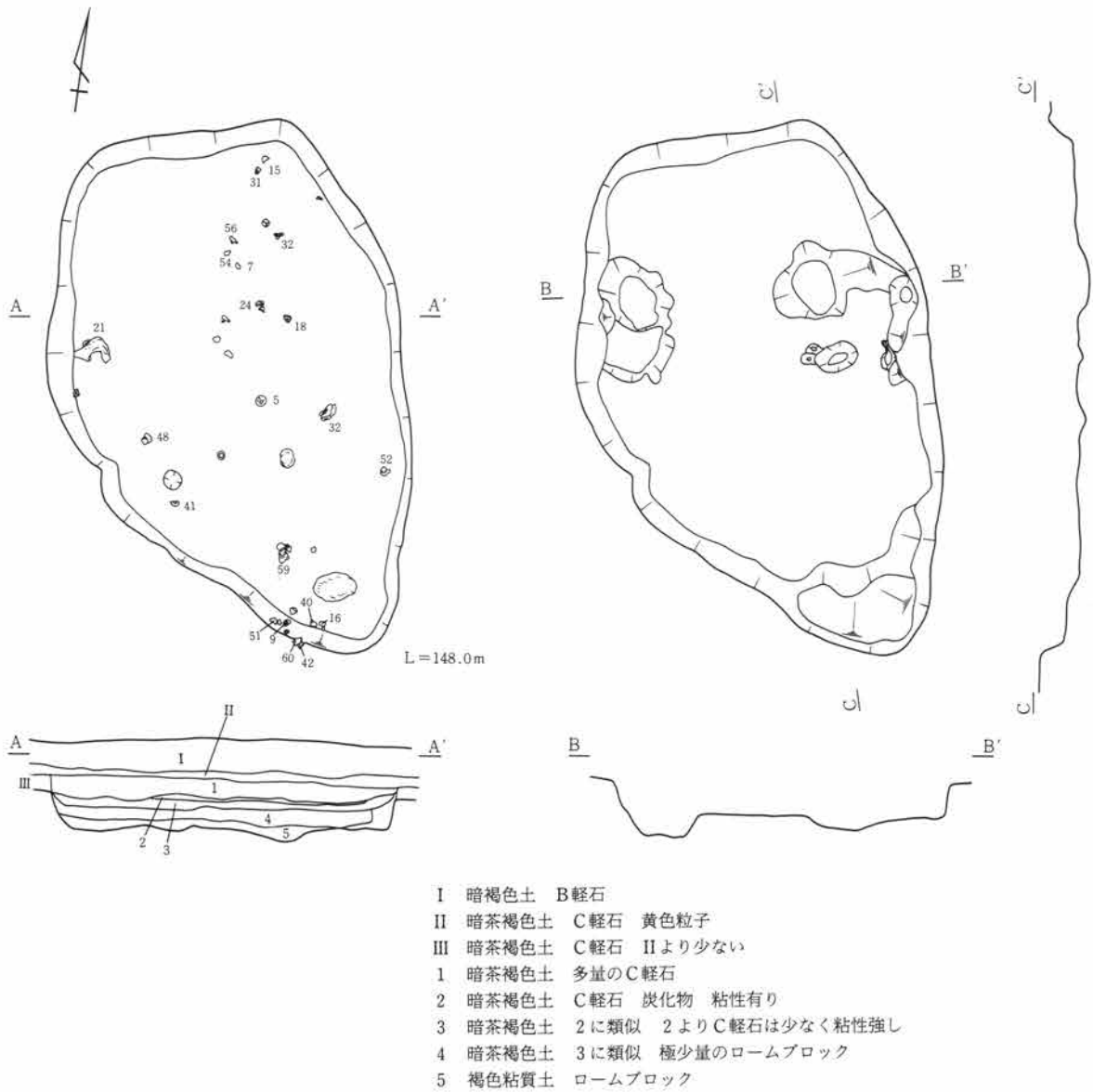
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 坏 覆土	—・10.6・— 小片 細砂粒・粗砂粒・黒色 鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形で削り出しによる。底部は回転ヘラ削り。
8	須恵器 皿 覆土	—・19.4・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	器壁は厚く、高台は端部に丸みをもつ断面三角形を呈し、やや開く。底部切り離し方法不明。体部の下位は回転ヘラ削り。
9	土師器 甕 覆土	12.0・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部は直線的に開き、横撫で。体部はややふくらみ、横方向へのヘラ削り。
10	土師器 台付甕 覆土	—・4.2・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	底部は器壁が厚く、脚部は直線的で「ハ」の字状に開く。脚部は横撫で。胴部下位はヘラ削り。
11	土師器 甕 覆土	13.6・—・— 小片 細砂粒 普通 にふい赤褐色	口縁部は直線的に開き、横撫で。体部はややふくらみ、横方向へのヘラ削り。
12	須恵器 長頸壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	大型長頸壺頸部。頸部径は10.4cm。下位に2条の凹線がまわる。
13	須恵器 長頸壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 暗緑灰色	長頸壺肩部分、肩部の外周部分には刺突文がまわり、その上位に1条の凹線がまわる。
14	須恵器 甕 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、端部は平坦で外傾し、やや上方に引きだされる。端部下には1条の凸帯がまわる。口縁部は凹線で区画され、その間に波状文が施されている。

S T 15

本遺構は、135～137 J -12～15グリッドに位置し、西南部分で浅い落ち込みと重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、卵形に近い形状を呈す。規模は、長軸6.40m、短軸4.16m、面積18.9m²を測る。第II層から掘り込まれ、覆土は、レンズ状の自然堆積状態を呈し、最下部に薄く褐色粘土層がみられる他は、暗茶褐色土で覆われている。

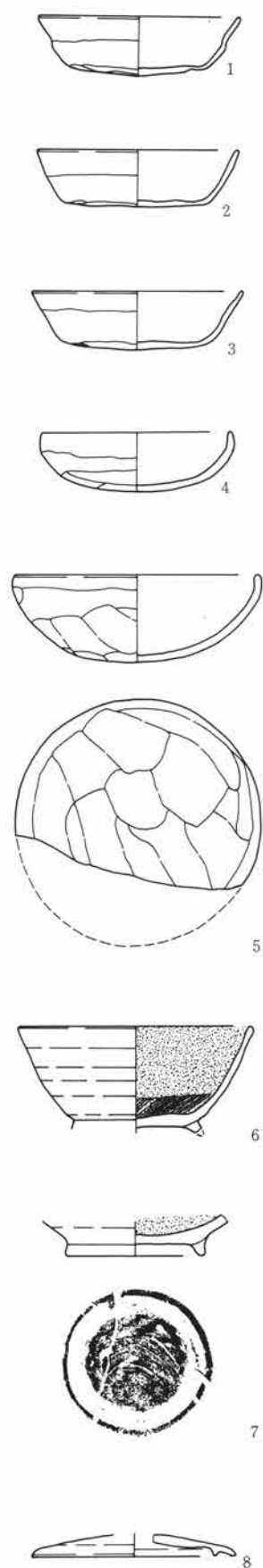
底面は、ゆるい凹や小ピット状の凹凸が多くみられる。立ち上がりは、南側の一部を除いてほぼ垂直に近い状態で高さは34～60cmを測る。

本遺構からは、多くの土師器杯・甕、須恵器杯・埴・蓋・長頸壺・短頸壺が出土しているが、須恵器杯が埴の割合に多い。また、土器の他にカマドの構築材と思われる粘土が出土している。



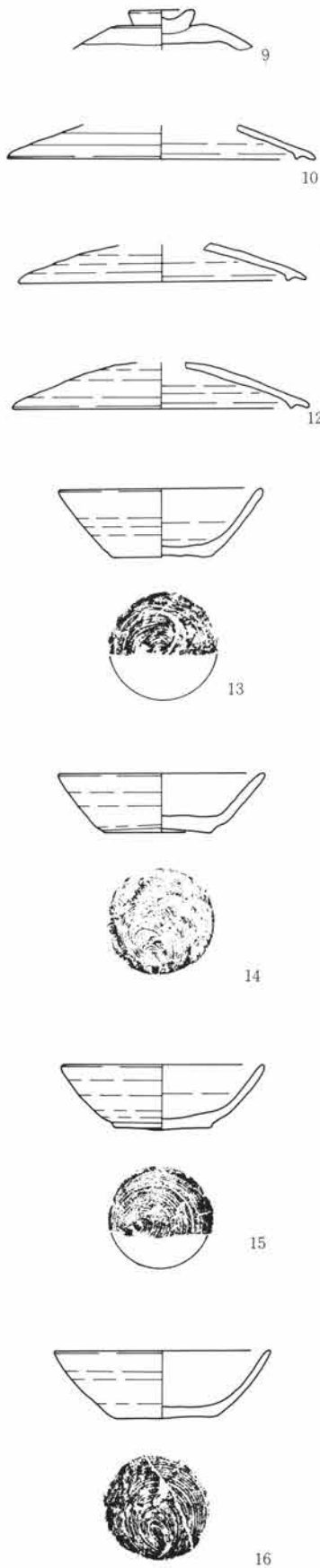
0 1 m

第4節 歴史時代

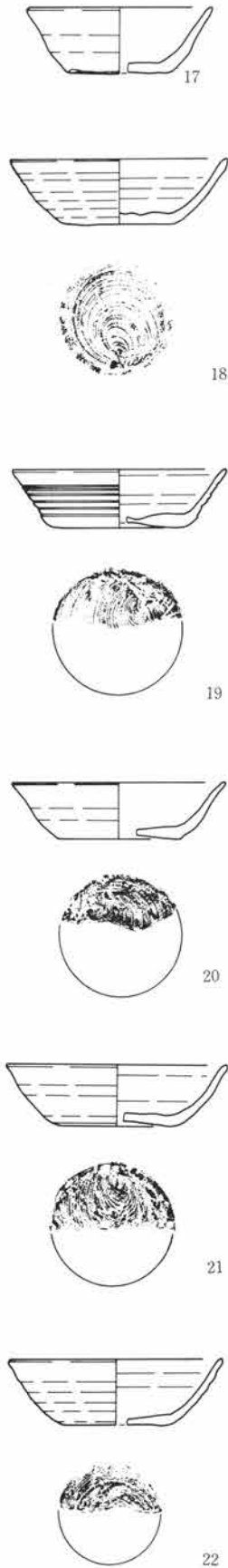


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.8・8.4・3.5 1/4 細砂粒 普通 赤褐色	口縁部は直線的に開き、体部は凹凸をもち開く。底部はほぼ平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	11.8・8.6・3.4 2/3 粗砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は僅かに外反し、体部はほとんど開かない。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	12.5・9.0・3.5 1/3 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、体部はやや開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
4	土師器 坏 覆土	11.2・9.0・3.5 1/2 細砂粒 普通 橙色	口縁部は内湾し、底部はゆるい丸みをもつ。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、底部はヘラ削り。
5	土師器 坏 覆土	14.4・7.4・5.2 3/4 細砂粒 やや軟質 橙色	口縁部は内湾し、体部は丸みをもち開く。底部は平底に近いが、底部と体部との境は明確でない。口縁部の上半は横撫で、下半は指撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
6	土師器 碗 覆土	13.6・7.4・— 3/5 細砂粒 普通 内面黒色処理 (外) 橙色 (内) 黒色	ロクロ形成、体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもちあまり開かない。高台は「ハ」の字状に開くと推測される。底部は回転ヘラ撫で。内面の底部は周辺部から体部下位にかけてはヘラ磨きが施されている。
7	土師器 碗 覆土	—・8.6・— 1/4 細砂粒・褐色鉱物粒 普通、内面黒色処理 (外) にぶい黄橙色 (内) 黒色	ロクロ成形回転方向不明。高台は丸みをもつ断面三角形を呈し直立する。底部は回転糸切り。
8	須恵器 蓋 覆土	12.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 (外) にぶい黄橙色 (内) 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で、内面には身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度までは回転ヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物

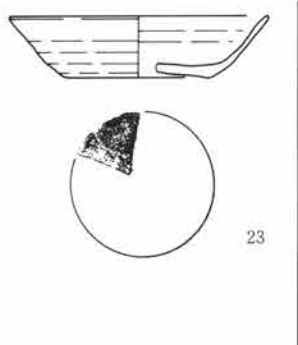
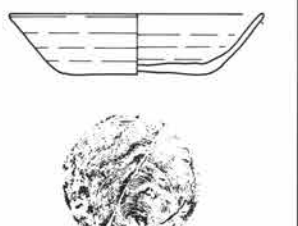
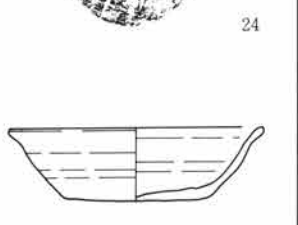
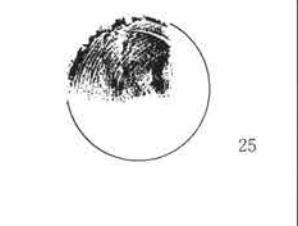
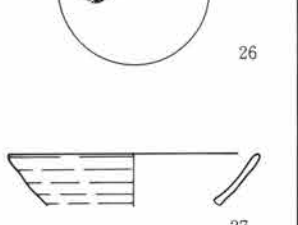
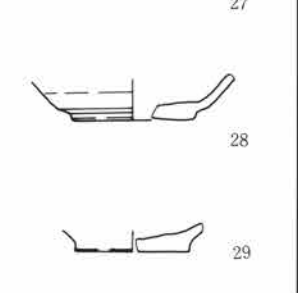


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	須恵器 蓋 覆土	—・鈕3.6・— 1/8 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。器壁は厚く、鈕は輪状に近い形態を呈す。天井部は回転ヘラ削り。
10	須恵器 蓋 覆土	18.2・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面には身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度までは回転ヘラ削り。
11	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で、内面には身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度までは回転ヘラ削り。
12	須恵器 蓋 覆土	17.4・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で回転ヘラ削り、内面には身受けのカエリをもつ。
13	須恵器 坏 覆土	11.8・6.0・4.0 1/5 細砂粒・粗砂粒・ 雲母 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みもち開く。底部は回転糸切り。
14	須恵器 坏 覆土	12.2・6.0・3.5 3/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部はベタ高台状を呈し、回転糸切り。
15	須恵器 坏 覆土	11.8・5.8・3.8 2/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は下位に丸みもち、口縁部は直線的に開く。底部はベタ高台状を呈し、回転糸切り。
16	須恵器 坏 覆土	12.6・6.0・4.0 3/4 細砂粒・粗砂粒・白色 鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みもち開き、底部は回転糸切り。

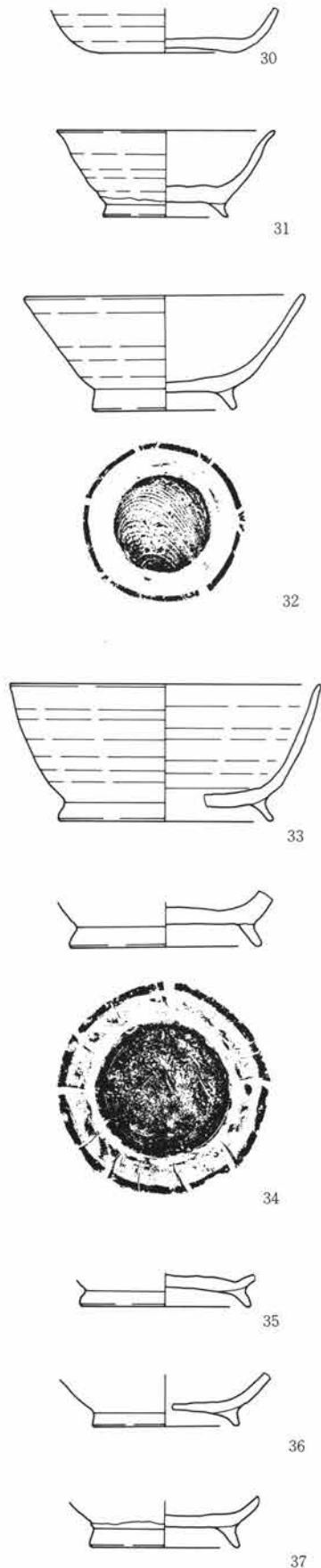


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
17	須恵器 坏 覆土	10.8・6.2・3.9 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的で開く。底部はヘラ撫で。
18	須恵器 坏 覆土	12.6・6.4・3.8 1/2 細砂粒・褐色鉾物粒 還元焰 灰褐色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。
19	須恵器 坏 覆土	12.6・8.2・3.4 1/3 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、体部には凹線がみられる。底部は回転糸切り。
20	須恵器 坏 覆土	12.4・7.2・3.3 1/4 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開き、口縁部は外反する。底部は回転糸切り。
21	須恵器 坏 覆土	13.0・6.4・3.8 1/3 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り。
22	須恵器 坏 覆土	12.4・6.2・3.8 1/4 細砂粒・褐色鉾物粒 還元焰 灰褐色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物

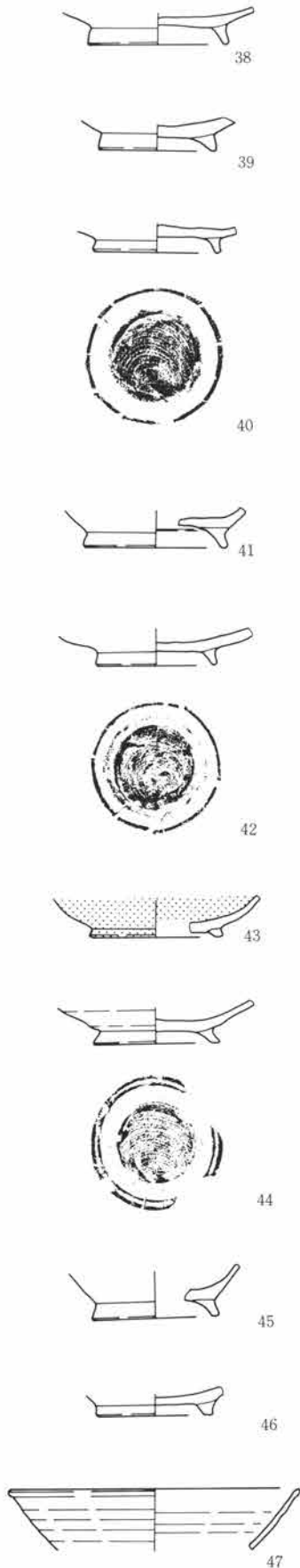
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
 <p>23</p>	須恵器 坏 覆土	13.8・8.0・3.2 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は極ゆるい丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。底部はヘラ撫で。
 <p>24</p>	須恵器 坏 覆土	13.4・8.3・3.2 3/5 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は回転糸切り。
 <p>25</p>	須恵器 坏 覆土	13.4・7.8・3.9 1/5 細砂粒 還元焰 暗灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開き、口縁部は外反する。底部は回転糸切り。
 <p>26</p>	須恵器 坏 覆土	13.0・9.2・3.4 1/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。体部にはロクロ痕が明確にみられる。底部は回転糸切り。
 <p>27</p>	須恵器 坏 覆土	13.4・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。
 <p>28</p>	須恵器 坏 覆土	—・8.0・— 1/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は直線的に開き、底部はベタ高台状をなす。
 <p>29</p>	須恵器 坏 覆土	—・6.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。底部はベタ高台状を呈し、回転糸切り。

第4節 歴史時代

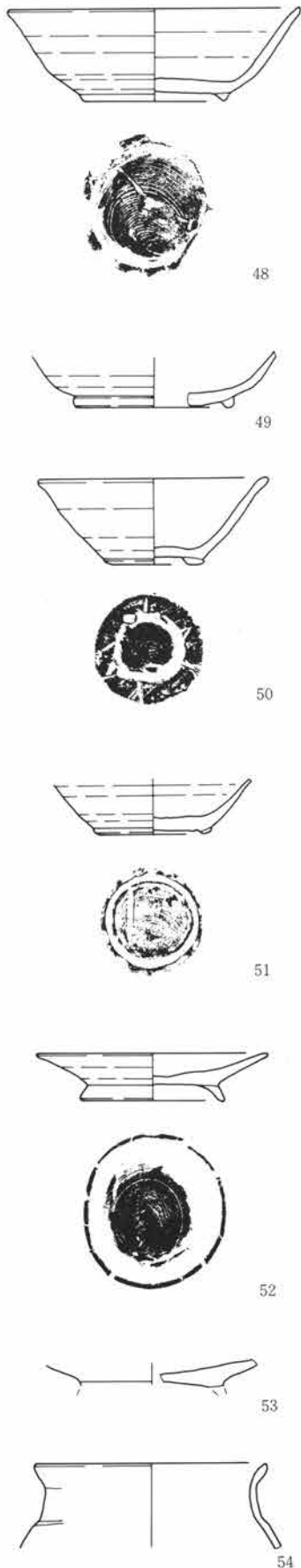


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
30	須恵器 坏 覆土	—・8.4・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち開く。底部は回転糸切り。
31	須恵器 碗 覆土	12.8・7.0・5.1 1/2 細砂粒・褐色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。口縁部は外反し、体部はゆるい丸みをもちやや開く。高台は断面三角形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部切り離し方法不明。
32	須恵器 碗 覆土	16.6・8.2・6.8 7/8 粗砂粒・褐色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部は下位にやや丸みをもち、口縁部にかけては直線的に開く。高台は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
33	須恵器 碗 覆土	18.6・12.0・8.1 1/6 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては僅かに丸みをもちほとんど開かない。高台は細身で「ハ」の字状に開く。底部は回転ヘラ削り。内面の体部と底部との境に1条の凹線がまわる。
34	須恵器 瓶類 覆土	—・10.5・— 小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰色	短頸壺か、長頸壺底部。ロクロ右回転。高台はやや開き、底部は撫で。
35	須恵器 碗 覆土	—・9.6・— 1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。高台はやや丸みをもち「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
36	須恵器 碗 覆土	—・8.8・— 小片 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち、高台はあまり開かない。
37	須恵器 碗 覆土	—・8.8・— 1/8 細砂粒・軽石 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。高台は細身でやや開く。底部は回転糸切り。

第3章 検出遺構・遺物

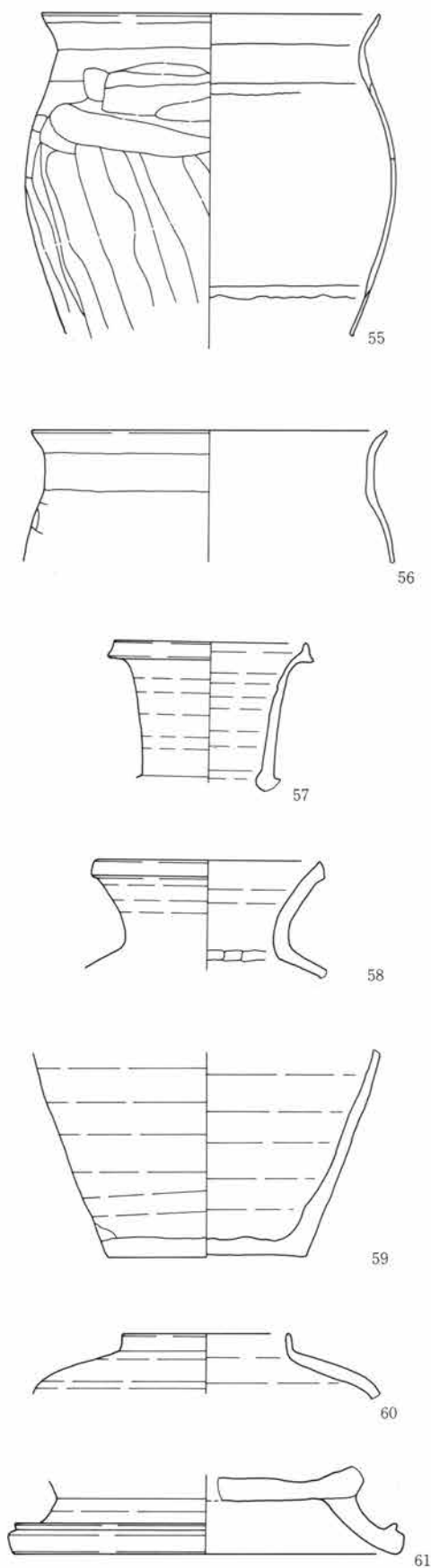


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
38	須恵器 碗 覆土	—・8.4・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は細身でやや開き、端部は丸みをもつ。底部は回転糸切り。
39	須恵器 碗 覆土	—・7.0・—、1/4 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰黄色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈し直立する。底部切り離し方法不明。
40	須恵器 碗 覆土	—・8.0・—、1/4 細砂粒・黒色鋳物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は細身でやや開く。底部は回転糸切り。
41	須恵器 碗 覆土	—・8.6・— 1/10 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は端部に丸みをもち「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
42	須恵器 碗 覆土	—・7.4・— 1/4 粗砂粒・白色鋳物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は大きく開き、高台は端部に丸みをもちやや開く。底部は回転糸切り。
43	灰釉陶器 碗 覆土	—・7.8・— 1/10 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開く。高台は断面四角形でやや開く。底部は回転ヘラ撫で。
44	須恵器 碗 覆土	—・8.0・— 1/4 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は大きく開き、高台は断面四角形を呈し、接地面は広く「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
45	須恵器 碗 覆土	—・7.2・— 1/10 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち、高台は断面四角形を呈しやや開く。
46	須恵器 碗 覆土	—・7.4・— 1/5 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面四角形を呈し、接地面は広くほぼ直立する。底部は回転糸切り。
47	須恵器 坏 覆土	17.4・—・— 1/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。

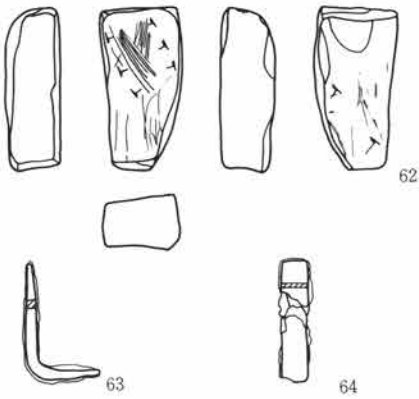


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
48	須恵器 碗 覆土	17.6・9.4・5.5 2/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち開き、口縁部は外反する。高台は丸みをもつ断面三角形で小規模なもの。底部は回転糸切り。
49	須恵器 碗 覆土	—・9.4・— 1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は下位に弱い稜をもち開く。高台は丸みをもつ。底部は回転ヘラ撫で。内面には自然釉の付着がみられる。
50	須恵器 碗 覆土	13.6・6.0・5.1 9/10 粗砂粒・角礫 酸化焰 褐色	ロクロ右回転。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。高台は粘土紐を巻いただけの雑なもので扁平である。底部は回転糸切り。
51	須恵器 碗 覆土	—・7.2・— 1/2 粗砂粒・細砂粒 還元焰 灰色・にぶい褐色	ロクロ右回転。体部は直線的に開く。高台は丸みをもつ小型のもの。底部は回転糸切り。
52	須恵器 皿 覆土	13.8・8.0・2.8 3/4 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては直線的に開き、高台は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
53	須恵器 皿 覆土	—・8.6・— 小片 粗砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は剝離。底部は回転ヘラ削り。内外面の体部に自然釉が付着。
54	土師器 甕 覆土	13.8・—・— 小片 細砂粒・褐色鉱物粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫で。胴部は横方向へのヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
55	土師器 甕 覆土	20.0・—・— 1/2 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	口縁部は、崩れた「コ」の字状を呈し、口唇部外側に弱い稜をもつ。胴部は緩やかな丸みをもち、全体的に薄手である。口縁部は横撫で、胴部上位は左方向へのヘラ削り。胴部中位は縦方向のヘラ削り。
56	土師器 甕 覆土	21.0・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は、弱い「コ」の字状を呈し、胴部はゆるいふくらみをもつ。口縁部は横撫で、外面の胴部は横方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。
57	須恵器 長頸壺 覆土	11.4・—・— 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	長頸壺頸部から口縁部にかけて。口縁部は外反し、口唇部は縁带状に上下に引き出されている。
58	須恵器 甕 覆土	13.2・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、端部はやや丸みもち外傾する。
59	須恵器 甕 覆土	—・11.8・— 小片 粗砂粒・白色鉍物粒 還元焰 灰色	長胴型を呈し、胴部中位はゆるい丸みをもつと推定される。底部は平底。外面の胴部下位は回転ヘラ削り。底部は一定方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
60	須恵器 短頸壺 覆土	9.8・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は垂直に立ち上がり、胴部の肩から中位にかけては稜をもたず丸みをもって移行する。
61	須恵器 瓶類 覆土	—・17.8・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	短頸壺、広口壺脚部。脚部は径23cmで外反し、端部はやや丸みもち、1条の凸線が周わる。



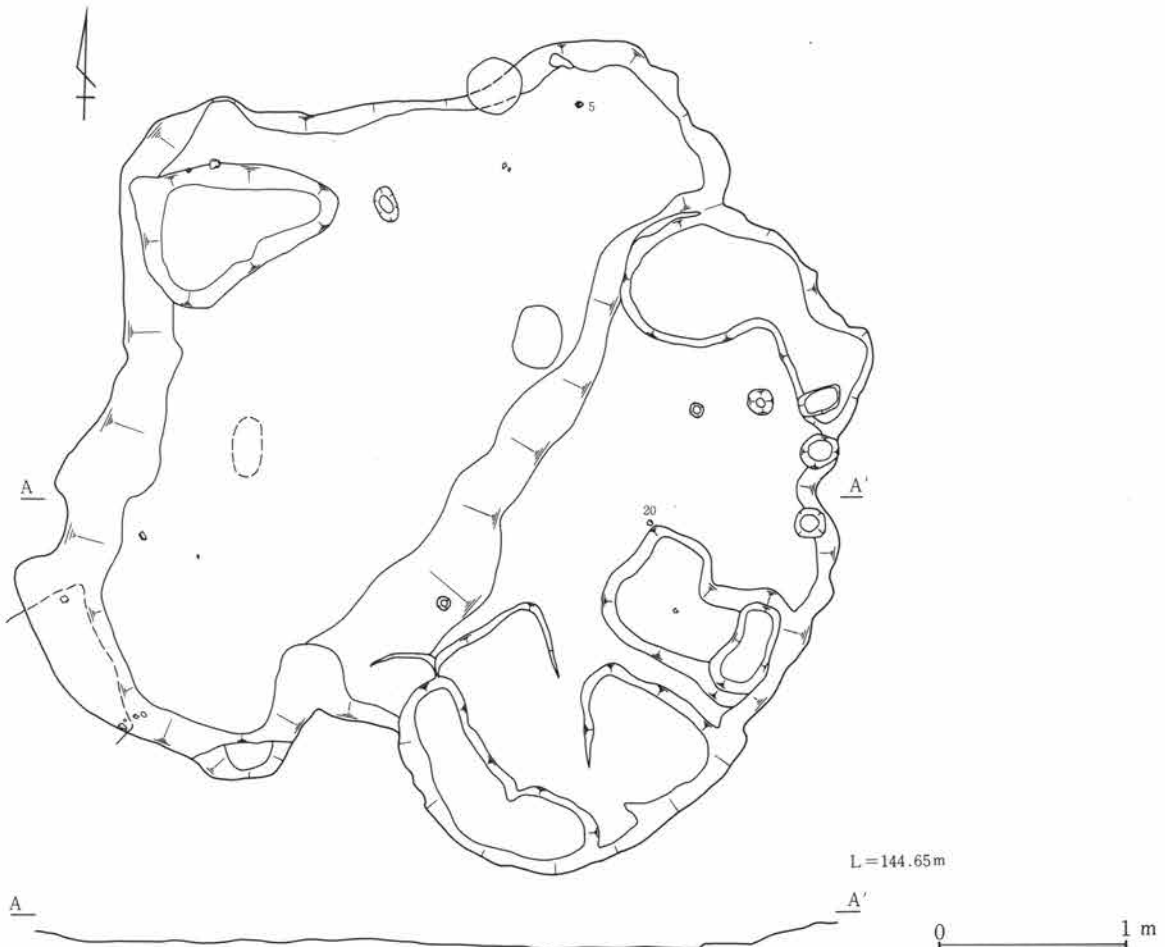
No	種類	観察表掲載頁
62	石製品 砥石	834
63	用途不明鉄製品	897
64	棒状鉄製品	896

S T 20

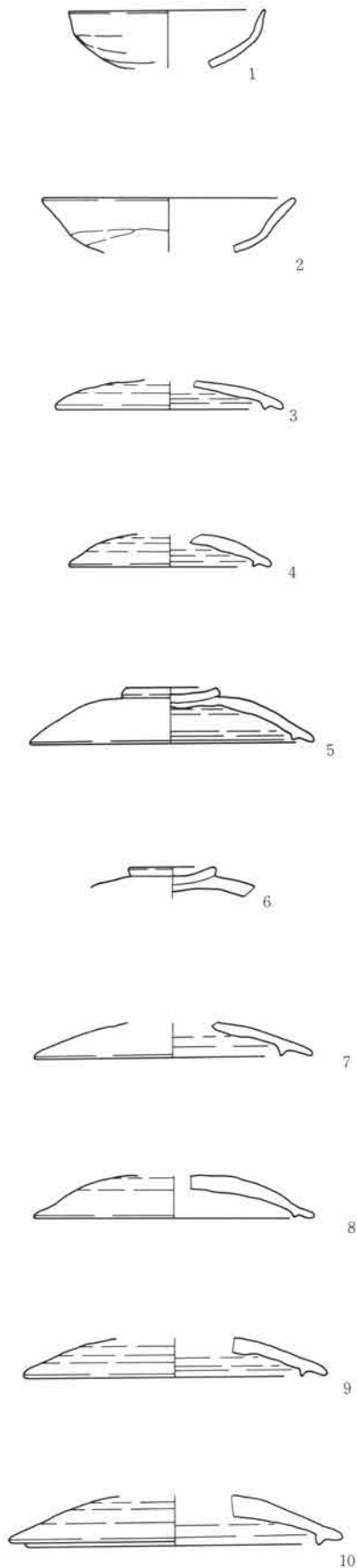
230

本遺構は、96～104G-11～19グリッドに位置し、S D 12・119、S K 261、S E 31、S Z 09、S J 202と重複するが、新旧関係は、S D 12・119、S K 261、S E 31、S Z 09より本遺構のほうが古く、S J 202より新しい。平面形態は、不整形である。規模は、長軸17.80m、短軸17.60mで面積55.56㎡を測る。

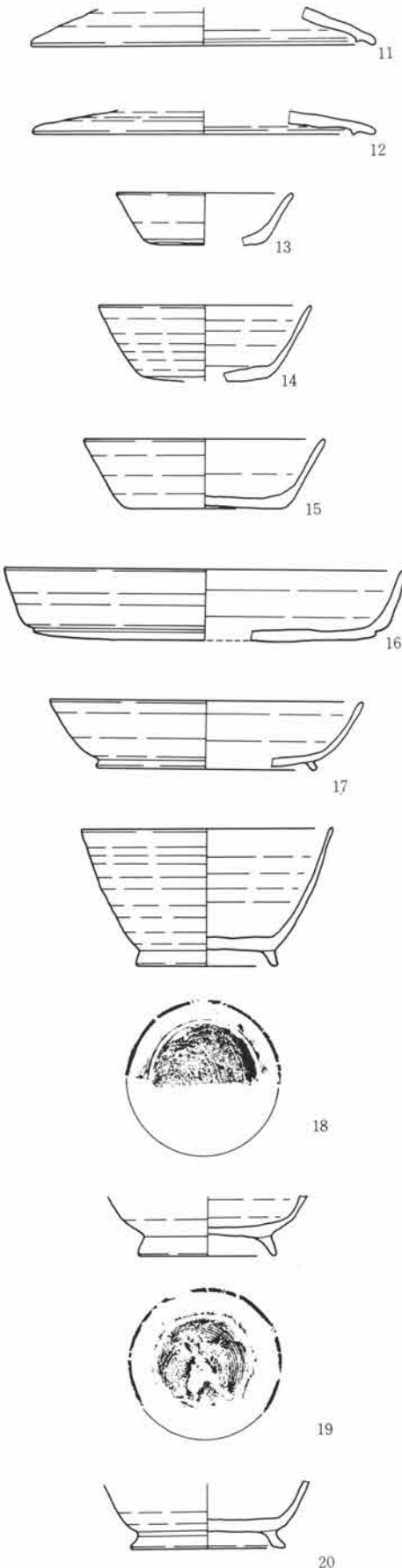
底面は、東北から西南にかけて段差がみられ、内部が二分割できる。北半分は、南側より低く、ほぼ平坦である。南半分は、土壇状・ピット状の落ち込みが多くみられる。立ち上がりは、ほぼ垂直な状態を呈し、高さは、25～55cmを測る。



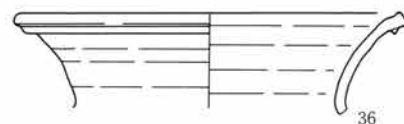
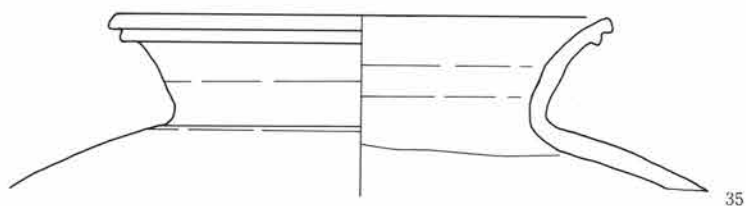
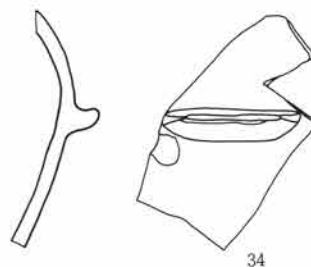
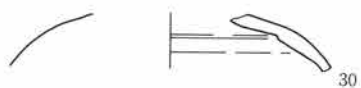
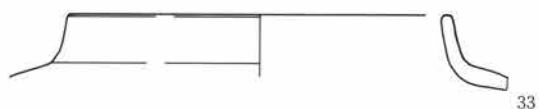
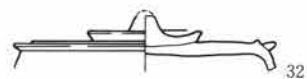
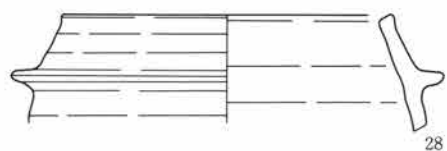
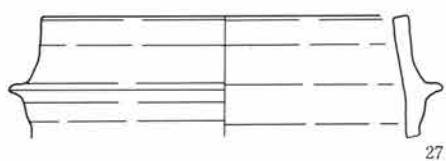
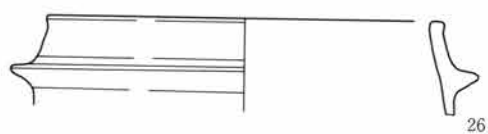
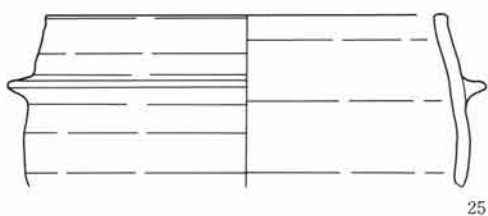
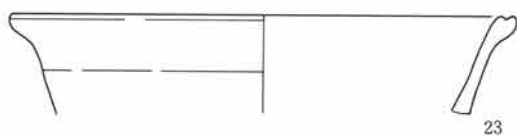
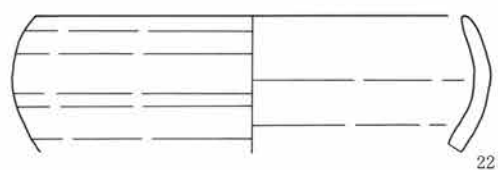
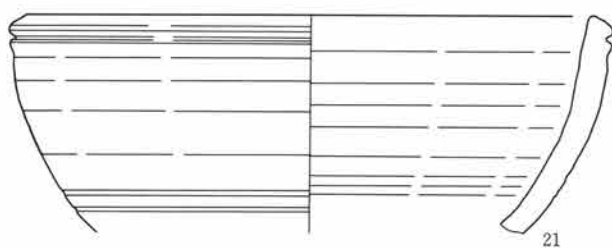
第3章 検出遺構・遺物



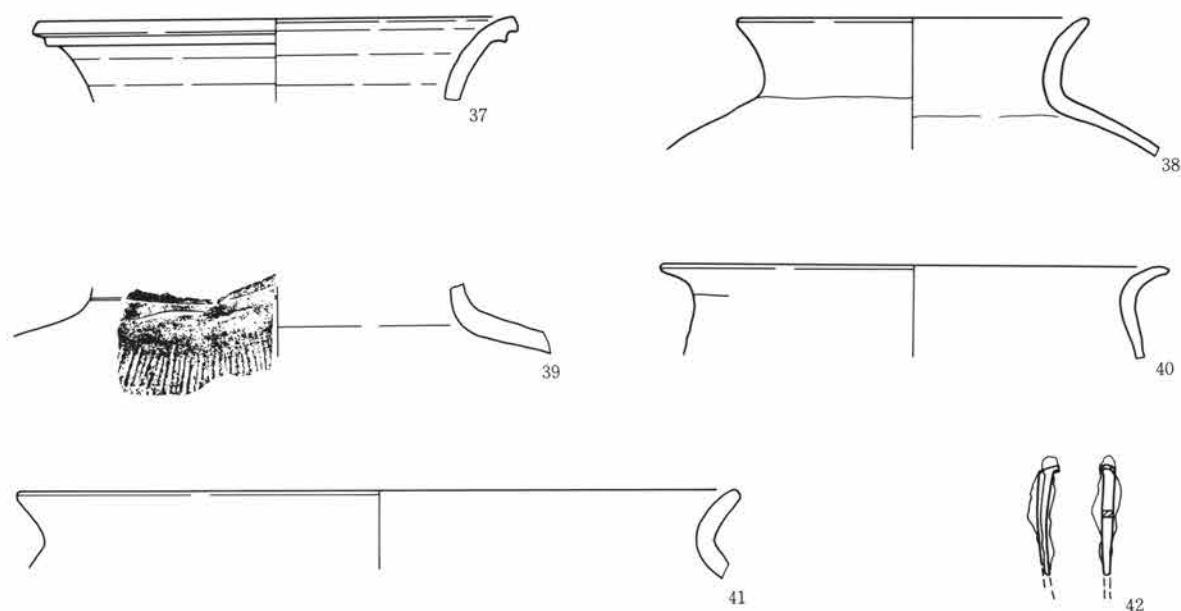
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.6・—・— 1/8 細砂粒 普通 橙色	口縁部は僅かに外反しやや開く。体部から底部にかけては丸底を呈し、口縁部との間に弱い稜をもつ。口縁部は横撫で、体部はへら削り。
2	土師器 坏 覆土	11.6・—・— 1/6 細砂粒・雲母 やや軟質 橙色	口縁部はほぼ直立し、口唇部で僅かに外反する。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で、体部から底部にかけてはへら削り。
3	須恵器 蓋 覆土	13.6・—・— 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みをもち、内面に身受けのカエリをもつ。天井部の3分の2程度までは回転へら削り。
4	須恵器 蓋 覆土	12.0・—・—、1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	小型。天井部はゆるい丸みをもち、内面には身受けのカエリをもつ。
5	須恵器 蓋 覆土	17.0・鈕5.4・3.3 1/2 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は大型の扁平状で、天井部は丸みをもつ。内面には身受けのカエリをもつ。外面には全面的に自然釉が付着し整形痕不明。
6	須恵器 蓋 覆土	—・鈕5.2・—、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は大型の扁平状のもの。
7	須恵器 蓋 覆土	16.4・—・— 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はほぼ直線的で、内面に身受けのカエリをもつ。
8	須恵器 蓋 覆土	16.7・—・— 1/8 細砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みをもち、内面には身受けのカエリをもつ。
9	須恵器 蓋 覆土	18.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で、内面に身受けのカエリをもつ。
10	須恵器 蓋 覆土	19.8・—・— 1/10 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。器壁は厚く、天井部は丸みをもつ。内面には身受けのカエリをもつ。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
11	須恵器 蓋 覆土	20.6・—・—、1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で、内面には身受けのカエリをもつ。
12	須恵器 蓋 覆土	20.6・—・—、1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で、内面に身受けのカエリをもつ。
13	須恵器 坏 覆土	10.6・7.2・—・小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるやかに外反し、底部は極ゆるい丸底を呈す。
14	須恵器 坏 覆土	12.8・7.6・4.6 1/6 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的であり開かず、底部は極ゆるい丸みをもち、ヘラ削り。
15	須恵器 坏 覆土	14.4・10.0・4.2、1/3 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。底部は回転ヘラ削り。
16	須恵器 坏 覆土	24.2・21.6・4.2、1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的で僅かに開く。底部はベタ高台の段差をもち、回転ヘラ撫で。
17	須恵器 坏 覆土	18.8・13.8・4.1 1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもちやや開く。高台は断面四角形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部はゆるい丸みをもち、回転ヘラ削り。
18	須恵器 碗 覆土	15.2・8.2・8.2 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもちあまり開かない。高台は同一の厚みをもち、端部は丸みをもち僅かに開く。
19	須恵器 碗 覆土	—・7.8・—、小片 粗砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ右回転。体部は立ち上がりで丸みをもち開く。高台は細身で「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
20	須恵器 碗 覆土	—・9.4・— 1/3 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部下位は丸みをもちそのまま立ち上がり、あまり開かない。高台は「ハ」の字状に開き接地面は広い。底部はヘラ削り、周辺部は高台貼付時の撫で。



第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
21	須恵器 鉢 覆土	30.2・一・一、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	体部から口縁部にかけては丸みをもち、口唇端部は平坦で外傾するが、口唇端部下には1条の凸帯がまわる。
22	須恵器 鉢 覆土	22.6・一・一、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	口縁部内湾し、体部は丸みをもち大きく開く。
23	須恵器 鉢 覆土	26.6・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は丸みをもち1条の凹線がまわる。
24	須恵器 瓶類 覆土	一・20.2・一 小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰軟質、灰白色	底部は平底を呈し、体部は垂直ぎみに立ち上がり、胴部下位を凹線状に削り出している。底部は無で。
25	須恵器 羽釜 覆土	20.2・一・一 小片 粗砂粒 還元焰、にぶい橙色	口縁部は内傾し、口唇端部は平坦で水平である。胴部はややふくらみ、鐙は断面三角形を呈し、水平方向を指す。
26	須恵器 羽釜 覆土	19.8・一・一 小片、細砂粒 還元焰軟質、灰色	口縁部はやや内傾し、口唇端部は平坦である。鐙は断面三角形を呈し、水平方向を向く。
27	須恵器 羽釜 覆土	19.4・一・一 小片、粗砂粒 酸化焰、浅黄色	口縁部は直立し、口唇端部は平坦でやや内傾する。鐙はやや丸みをもち水平方向を向く。
28	須恵器 羽釜 覆土	17.5・一・一 小片、細砂粒 酸化焰、にぶい橙色	口縁部は内傾し、口唇端部はほぼ平坦で内傾する。鐙は断面三角形を呈し、ほぼ水平方向を指す。

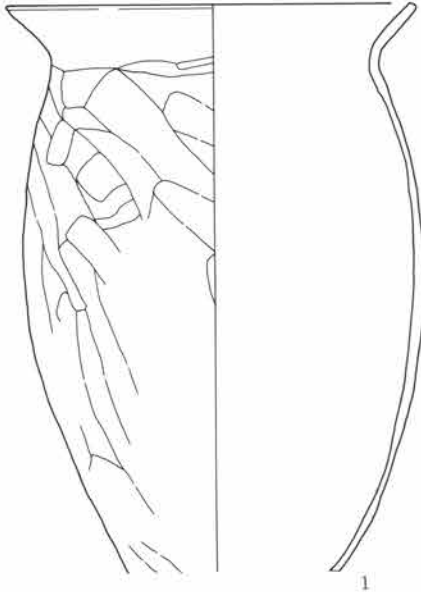
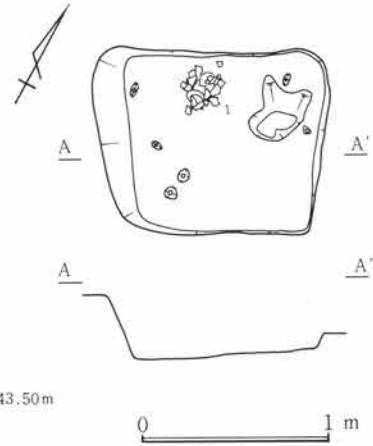
第3章 検出遺構・遺物

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
29	灰釉陶器 長頸壺 覆土	—・—・— 小片 黒色鉍物粒・細砂粒 還元焰、灰白色	長頸壺頸部。頸径6cm。釉調は透明感のある淡緑色。
30	須恵器 長頸壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	長頸壺頸部と胴部との接合部分。
31	須恵器 瓶類 覆土	—・13.2・— 小片・細砂粒・粗砂粒 還元焰、灰色	長頸壺か短頸壺の底部。高台は外面がやや外反し、内面が屈折する端部は平坦で内傾する。底部は回転の撫で。
32	須恵器 蓋 覆土	—・5.8・—・1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	短頸壺蓋。ロクロ回転方向不明。鈕はやや偏平な擬宝珠状を呈す。天井部は水平で口縁部との境に鐙をもつ。また、鈕の内側に小規模な凸帯がまわる。外面には自然釉が附着。
33	須恵器 短頸壺 覆土	—・20.4・— 小片、細砂粒 還元焰、灰色	口縁部はやや内傾し、胴部は大きくふくらむ。
34	須恵器 短頸壺 覆土	—・—・— 小片、細砂粒 還元焰、灰色	短頸壺胴部、胴部中位から肩にかけてはゆるい丸みをもち、把手をもつ。把手は丸みをもちやや上方を向く。内面の肩には同心円状のアテ具痕がみられる。
35	須恵器 壺 覆土	26.2・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は平坦で外傾する。口唇端部下に1条の凸線がまわる。胴部は大きくふくらむ。
36	須恵器 壺 覆土	20.4・—・— 小片、細砂粒・黒色鉍 物粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は平坦で外傾する。外面の口唇部には1条の凸帯がまわる。
37	須恵器 壺 覆土	25.4・—・—、1/8 粗砂粒、黒色鉍物粒、 還元焰、灰色	口縁部は外反し、外面の口唇部には1条の凸帯がまわる。
38	土師器 壺 覆土	18.4・—・—・1/10 細砂粒、普通、橙色	口縁部はやや外反し、胴部は球状の丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
39	須恵器 壺 覆土	—・—・— 小片、細砂粒 還元焰、灰色	外面は平行叩き、内面のあて具痕は撫でによって削られている。
40	土師器 壺 覆土	26.8・—・— 小片、細砂粒・黒色鉍 物粒、普通、橙色	口縁部は大きく外反し、横撫で。胴部はヘラ削り。
41	土師器 壺 覆土	38.4・—・— 小片、粗砂粒 普通、にぶい橙色	口縁部は短かく直線的に開き、横撫で。
No	種 類	計測値(長さ・厚さ)	観 察 表 掲 載 頁
42	鉄製品 釘	5.7・0.4	894

S T23

236

本遺構は、90～92G—47～48グリッドに位置し、S J 113・114と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、東西2.46m、南北1.92m、面積4.4㎡を測る。覆土は黒褐色土である。底部は、小ピット状のものがみられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、16～68cmを測る。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 甕 床直	21.9・—・— 底部～胴部下位を欠く 細砂粒 普通 にふい橙色	胴部は緩やかな丸みをもつが比較的長胴である。口縁部は厚みをもって開く。器肉は全体的に厚手である。口縁部は横撫で、胴部上位は斜め横方向のへら削り、胴部中位～下位は斜め縦方向のへら削り。内面は横方向のへら撫で。

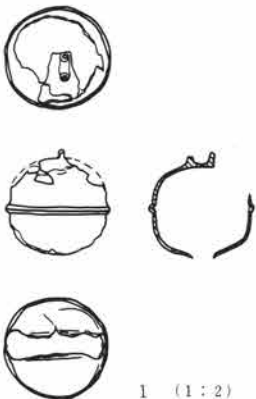
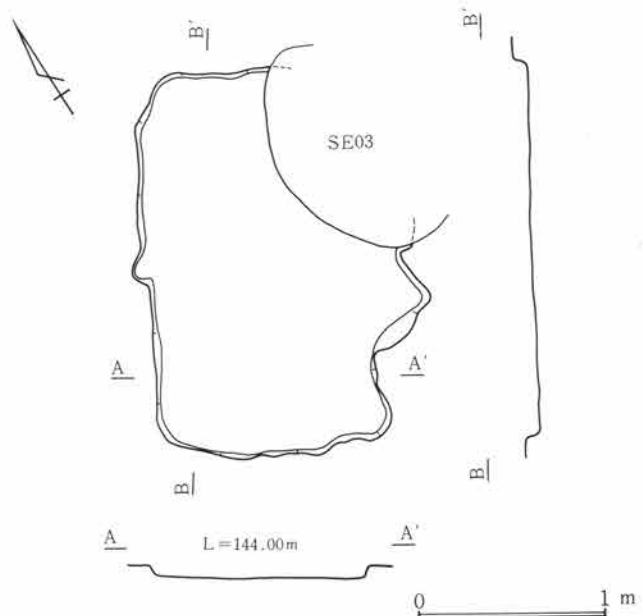
S T24

236

本遺構は、112～114G—38～40グリッドに位置し、S E03と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、隅円長方形を呈す。規模は、長軸4.10m、短軸3.32mで、面積は、推定で10.67㎡を測る。

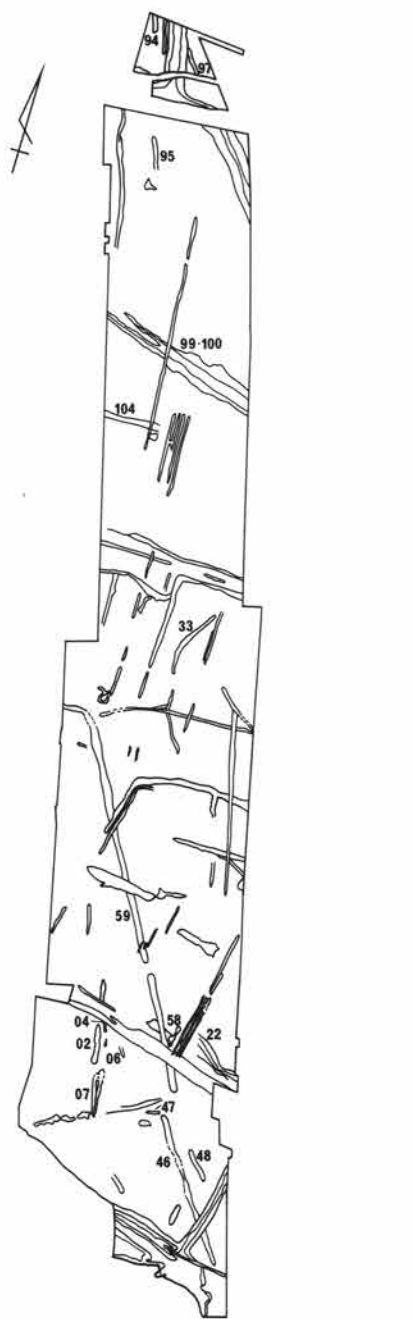
底面は、ほぼ平坦である。立ち上がりは、ほぼ垂直な状態で、高さは13～20cmを測る。

本遺構の東辺際からは、若干の焼土粒がみられた。本遺構からは、金銅製の鈴が出土している。



1 (1:2) 1の観察表掲載頁は897

5 溝 (SD)



0 50m

溝配置図(歴史時代)

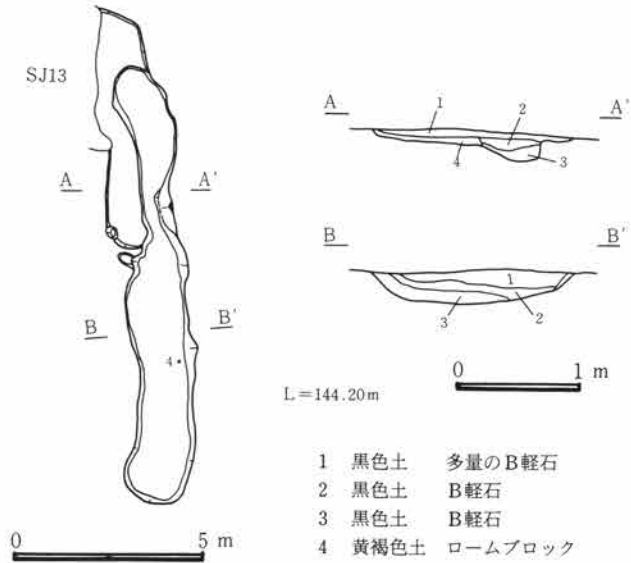
溝時代一覧表

遺構名	時代	遺構名	時代	遺構名	時代
1	古代	55	欠番	109	欠番
2	古代	56	欠番	110	現代
3	古代	57	欠番	111	現代
4	古代	58	古代	112	現代
5	古代	59	古代	113	古代
6	古代	60	欠番	114	不明
7	古代	61	欠番	115	現代
8	古代	62	古代	116	欠番
9	欠番	63	中世	117	古代
10	古代	64	中世	118	中世
11	古代	65	中世	119	中世
12	中世	66	中世	120	中世
13	近世	67	不明	121	近世
14	古代	68	不明	122	近世
15	欠番	69	中世	123	近世
16	中世	70	中世	124	欠番
17	中世	71	不明	125	近世
18	欠番	72	不明	126	中世
19	欠番	73	中世	127	近世
20	中世	74	不明	128	近世
21	中世	75	不明	129	中世
22	古代	76	不明		
23	中世	77	不明		
24	古代	78	近世		
25	欠番	79	不明		
26	現代	80	不明		
27	中世	81	不明		
28	中世	82	不明		
29	中世	83	不明		
30	中世	84	不明		
31	古代	85	不明		
32	中世	86	不明		
33	古代	87	不明		
34	中世	88	不明		
35	中世	89	不明		
36	中世	90	不明		
37	近世	91	近世		
38	近世	92	近世		
39	近世	93	古代		
40	近世	94	古代		
41	近世	95	古代		
42	近世	96	古代		
43	不明	97	古代		
44	不明	98	中世		
45	古代	99	古代		
46	古代	100	古代		
47	古代	101	欠番		
48	古代	102	中世		
49	中世	103	中世		
50	古代	104	古代		
51	欠番	105	現代		
52	中世	106	欠番		
53	中世	107	現代		
54	中世	108	現代		

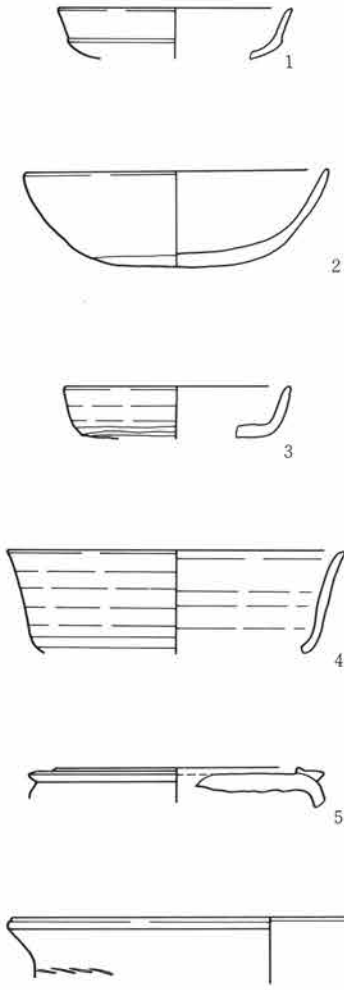
S D02

237

本遺構は、104G-27~102G-21グリッドにかけて直線的に位置し、S J 13・15と重複するが、新旧関係は、S J 13より本遺構のほうが古く、S J 15より新しい。本址の一部は、S J 13に切られ不明な点はあるが、規模は、全長13m、幅1.43~1.77mを測る。深度は、11~52cmで北から南にかけてゆるい傾斜をもつ。走向は、N-8°-Eを指す。底面は、ゆるい弧をえがくがほぼ平坦である。覆土は、自然堆積を呈し、ほぼ類似した黒色土で覆われている。



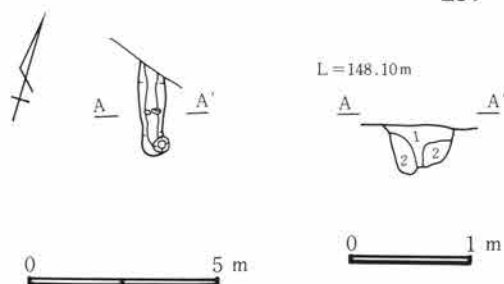
- 1 黒色土 多量のB軽石
- 2 黒色土 B軽石
- 3 黒色土 B軽石
- 4 黄褐色土 ロームブロック



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.4・—・—、小片 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は外反し、底部との間に稜をもつ。底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	16.0・9.6・5.0 1/10 粗砂粒 軟質 橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みを持ち、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削りが施されているが、磨耗のため単位不明。
3	須恵器 坏 覆土	12.0・10.0・— 1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は直線的でほとんど開かない。口縁部の下位は2段の回転ヘラ削り。
4	須恵器 碗 覆土	17.8・—・— 1/10 細砂粒・白色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部はほぼ直立きみで口縁部が外反する。体部下位は回転ヘラ削り。
5	須恵器 蓋 覆土	—・—・—、1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	短頸壺蓋。ロクロ回転方向不明。天井部は水平で鐙をもつ。天井部は回転ヘラ削り後撫で。
6	土師器 甕 覆土	28.0・—・— 小片 粗砂粒 普通、橙色	口縁部は外反し、口唇端部は凹線がまわる。

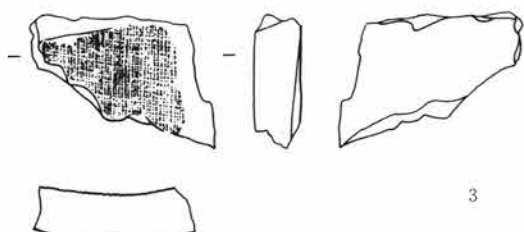
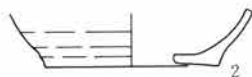
S D04

本遺構は、102G-27~102G-28グリッドにかけて位置し、南端で小ピットと重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。規模は、全長2.30m、幅59~72cmを測る。深度は、30~48cmで南から北にかけて8/100の割合で傾斜し、走向は、S-21°-Wを指す。底面は、ほぼ平坦である。溝壁の立ち上がりは、ほぼ垂直に近い状態である。



237

- 1 黒色土 多量のB軽石
- 2 黒色土 B軽石 ロームブロック

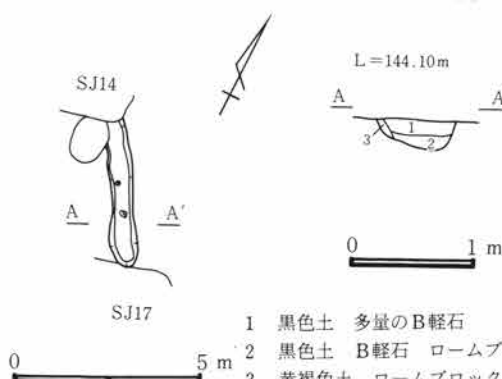


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	12.6・8.3・4.2、1/6 細砂粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち僅かに開く。
2	須恵器 坏 覆土	—・9.2・—・1/10 細砂粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもち開く。底部は不定方向へのヘラ削り。

No.	種類	観察表掲載頁
3	瓦	778

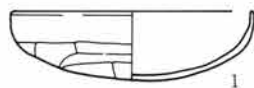
S D06

本遺構は、99G-25~98G-24グリッドにかけて直線的に位置し、S J 14、S B16・17と重複し、S J 17と接する。新旧関係は、S J 14、S B16・17より本遺構のほうが古い。残存部分での規模は、全長3.85m、幅54~72cmを測る。深度は、11~26cmを測り、北から南にかけてゆるい傾斜をもつ。走向は、N-30.5°-Eを走る。底部は、ほぼ平坦である。溝壁は、58°~67°と急な立ち上がりを呈す。



237

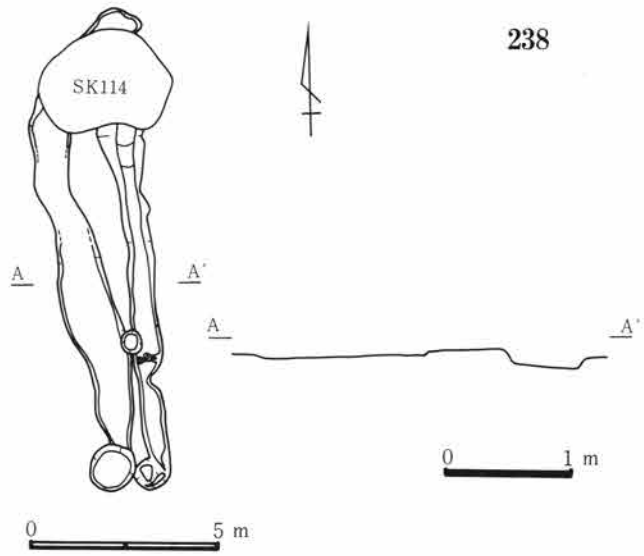
- 1 黒色土 多量のB軽石
- 2 黒色土 B軽石 ロームブロック
- 3 黄褐色土 ロームブロック



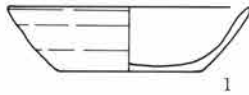
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.6・12.3・3.7 完形 細砂粒 普通、橙色	口縁部は内湾ぎみ、底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。

S D07

本遺構は、101G-19~99G-13と100G-20~99G-13グリッドにかけて2本が平行するように位置する。双方とも南端は、ピットと、また北端でもSK114と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。規模は、全長が東側8.8m、西側8.0mで幅東側48~95cm、西側70~103cmを測る。深度は、東側3~13cm、西側9~10cmを測る。走向は、東側N-5°-E、西側N-12、5°-Eを指す。底部は、双方とも平坦で、溝壁は、急な立ち上がりを呈す。



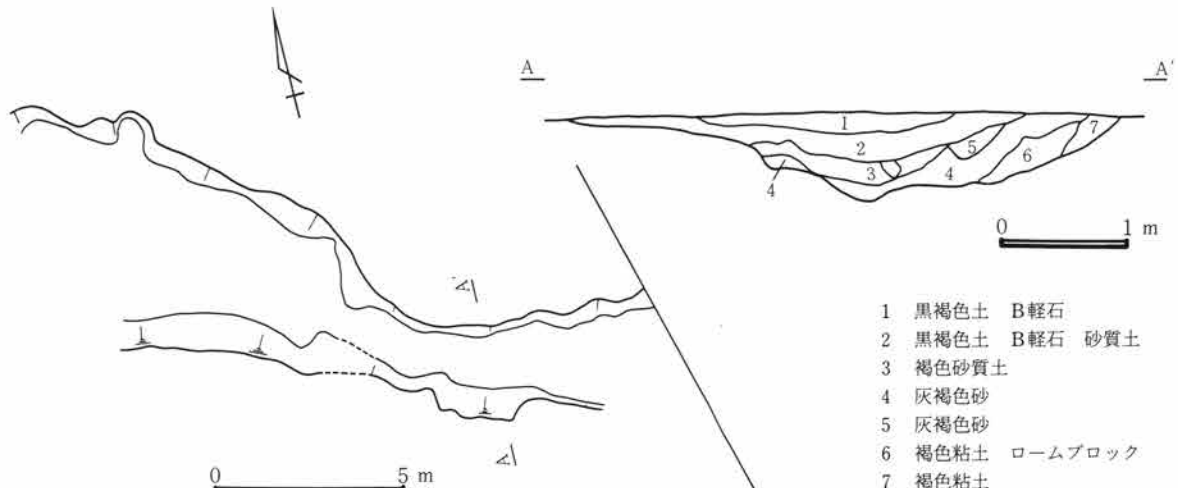
238



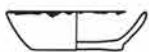
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	12.7・7.9・3.5、1/2 粗砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。体部はやや丸みを持ち、口縁部は直線的に開く。底部はヘラ切り後ヘラ撫で。

S D22

本遺構は、東側道調査区の79G-26から87G-28~32グリッドにかけて位置し、S J 60・61、S K 22・23・24・25と重複するが、新旧関係は、S K 22・23・24・25より古く、S J 60より新しく、S J 61とは確認できなかった。本遺構の大部分は、調査区域外にのびるため全貌は不明であるが、調査区域内での規模は、幅2.5~5.6mを測る。深度は、10~52cmを測る。底面は、ゆるい凹凸がみられ、溝壁は、ゆるい傾斜をもち立ち上がる。覆土は、自然堆積状態を呈す。

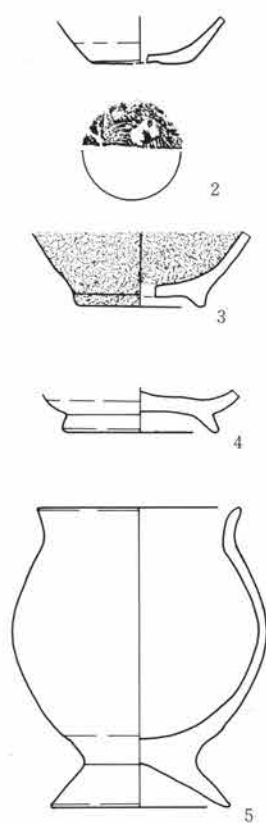


238



No	種類	観察表掲載頁
1	土師質土器 皿	825

第3章 検出遺構・遺物

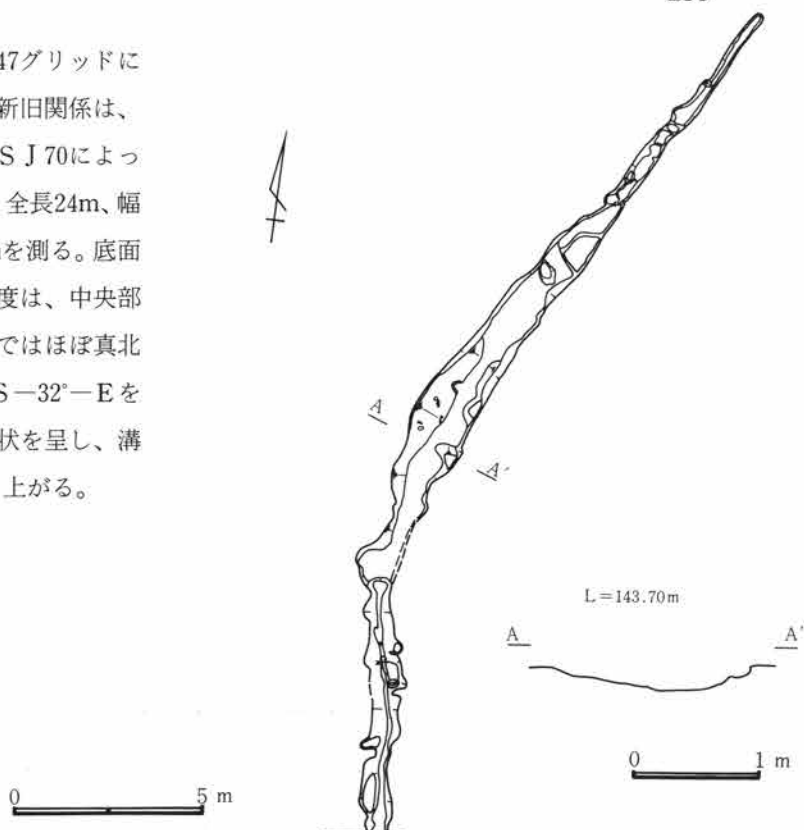


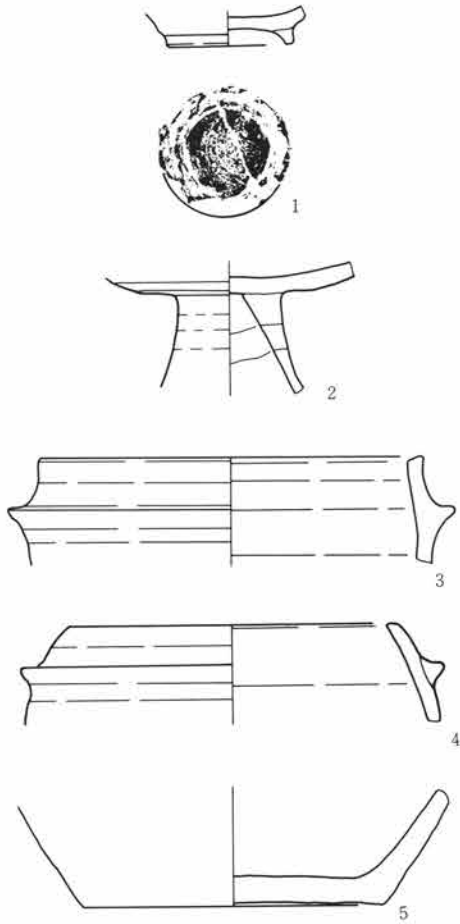
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 覆土	—・5.4・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。底部は回転糸切り。
3	須恵器 碗 覆土	—・6.8・— 小片 粗砂粒・雲母 還元焰燻焼成 黒色	体部は丸みをもち開く。高台は丸みをもった断面三角形を呈し、ほぼ直立する。
4	須恵器 碗 覆土	—・7.8・— 1/3 粗砂粒・褐色鉱物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。高台は「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切り。
5	土師器 台付甕 覆土	10.8・6.0・15.8 2/5 粗砂粒・角礫 普通 にぶい赤褐色	甕部の器面は荒れており、整形痕不明。口縁部は僅かに外反し、胴部は中位に最大径(13.6cm)をもつ。脚部は直線的に開き、横撫で。

S D33

本遺構は、105～109H—36～47グリッドに位置し、S J 70と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。南端部は、S J 70によって切られ不明であるが、規模は、全長24m、幅24～156cmを測る。深度8～25cmを測る。底面は、ゆるい凹凸がみられ、最深度は、中央部分である。走行は、中央付近まではほぼ真北を指すが、中央付近より北は、S—32°—Eを指す。溝の断面は、歪んだ台形状を呈し、溝壁は、45～50°の角度をもち立ち上がる。

238

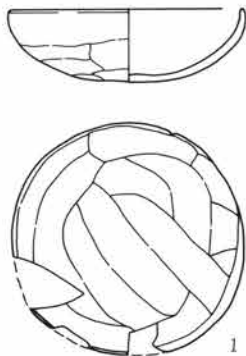
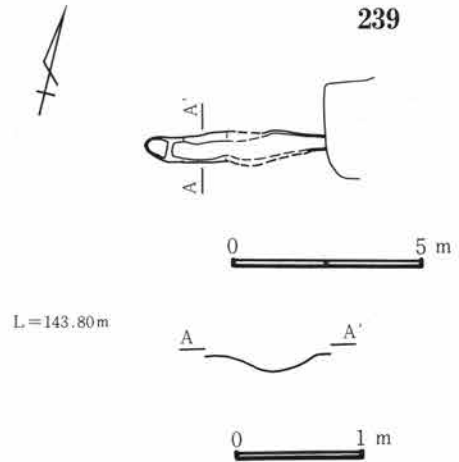




No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	—・7.0・— 1/4 粗砂粒 酸化焰 浅黄色	ロクロ右回転。高台は粘土 紐を貼付して若干の整形を 加えただけの雑なもの。底 部は回転糸切り。
2	須恵器 高坏 覆土	—・—・—、1/4 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ左回転。脚部は粘土 紐まきあげ、坏部底部は回 転ヘラ削り。
3	須恵器 羽釜 覆土	20.4・—・—、小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	口唇部は外反し、口唇端部 は平坦で内傾する。鏝はや や上方を向く。
4	須恵器 羽釜 覆土	17.4・—・—、小片 粗砂粒 酸化焰 褐色	口縁部は内傾し、口唇端部 は平坦で内傾する。鏝は断 面三角形を呈し、やや上方 を向く。
No.	種 類	観察表掲載頁	
5	軟質陶器 鉢	816	

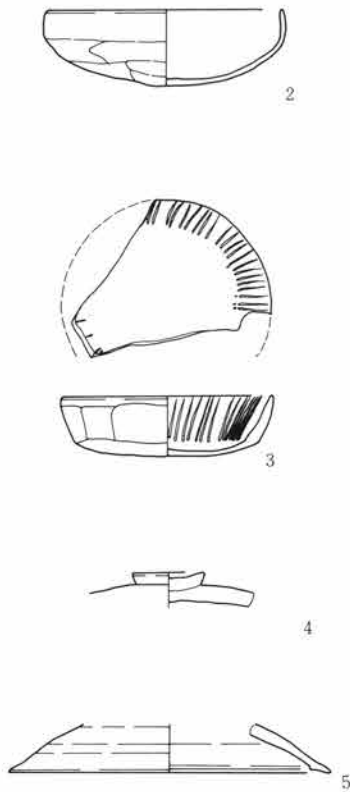
SD47

89~102G-16~17グリッドに位置し、S J 99・104と重
複し、新旧関係は、S J 104より本遺構のほうが古く、S J
99より新しい。東側は、S J 104によって切られているため
全貌は不明であるが、残存部分での規模は、全長4.9m、幅
38~70cmを測る。深度は、11~13cmを測る。底面は、ほぼ
平坦で西から東にかけて極緩い傾斜をもつ。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.2・6~8・3.9 ほぼ完形 粗砂粒 普通、橙色	口縁部は内湾し、体部から底部にかけては丸みをも つ。口縁部は横撫で。体部は左方向へのヘラ削り。 底部は一定方向へのヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物

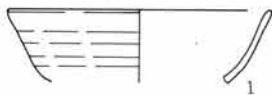
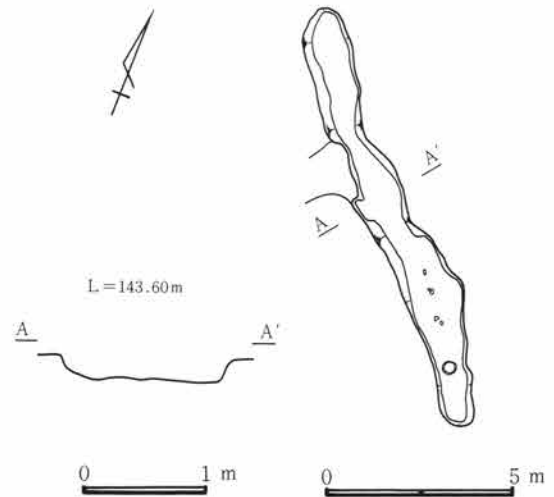


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	土師器 坏 覆土	12.6・7~11・4.0 2/3 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉱物粒 普通 にぶい褐色	口縁部は直線的で内傾し、体部から底部にかけてはゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部は一定方向へのヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	11.2・9.8・3.2 4/5 粗砂粒・褐色鉱物粒 軟質 にぶい橙色	口縁部は直線的であり開かない。底部は極ゆるい丸底を呈す。外面の口唇部は横撫で、口唇部はヘラ削り。底部はヘラ削り。内面の体部は斜放射状暗文が施されている。
4	須恵器 蓋 覆土	—・鈕3.8・—、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は扁平状を呈し、天井部は回転ヘラ削り。
5	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・—、1/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、内側には身受けのカエリをもつ。

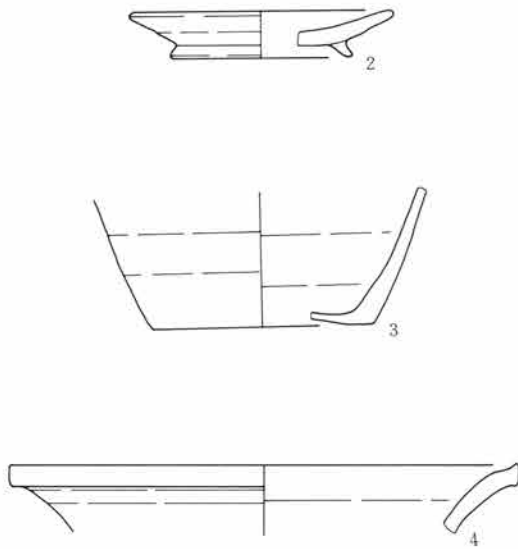
SD48

238

本遺構は、78~82G-08~12グリッドに位置し、単独で占地する。規模は、全長11.9m、幅61~160cmを測る。深度は、8~26cmを測る。底面は、平坦で北から南にかけて緩い傾斜をもつ。走行は、N-50°-Eを指す。溝の断面は、ほぼ台形状を呈す。溝壁は、東側ではほぼ垂直に立ち上がるが、西側の大部分は緩かな立ち上がりを呈す。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	14.0・—・—、小片 細砂粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部は立ち上がりに丸みをもち、口縁部は直線的であり開かない。

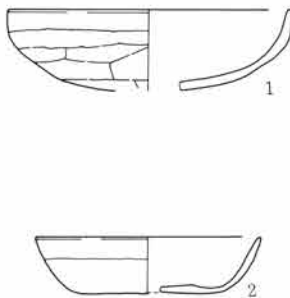
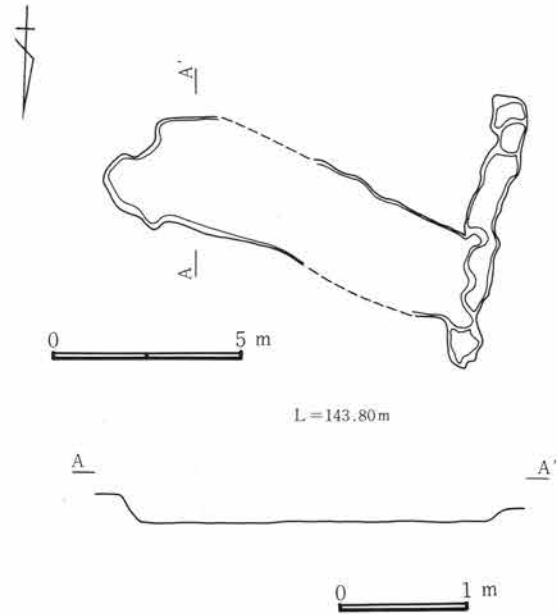


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 皿 覆土	13.8・9.0・2.4 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。 器壁は厚く、高台は 「ハ」の字状に開く。 底部は無で。
3	須恵器 甕 覆土	—・12.0・—・小片 粗砂粒、白色鉱物粒 還元焰 灰色	底部はヘラ削り。
4	須恵器 甕 覆土	26.8・—・— 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 黄灰色	口縁部は外反し、口唇 端部は上方にやや引き だされている。口縁部 の内部は自然釉が付着 している。

S D58

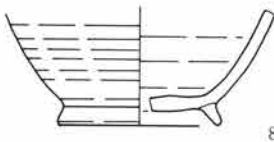
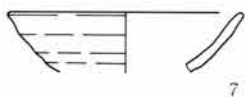
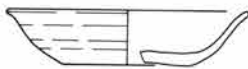
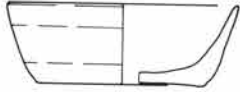
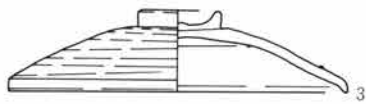
本遺構は、東西に走る幅の広い溝と南北に走る幅の狭い溝がL字形状をなし、90°~96G-28~32グリッドに位置し、S D59と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。規模は、東西方向のものは、4.2m、南北方向は、2.9m、幅は、東西方向が100~120cm、南北方向が、20~24cmを測る。深度は、8~16cmを測る。走向は、東西方向がS-19°-W、南北方向がN-13°-Eを指す。底面は、東西方向がほぼ平坦で、南北方向がやや凹凸がみられる。

240



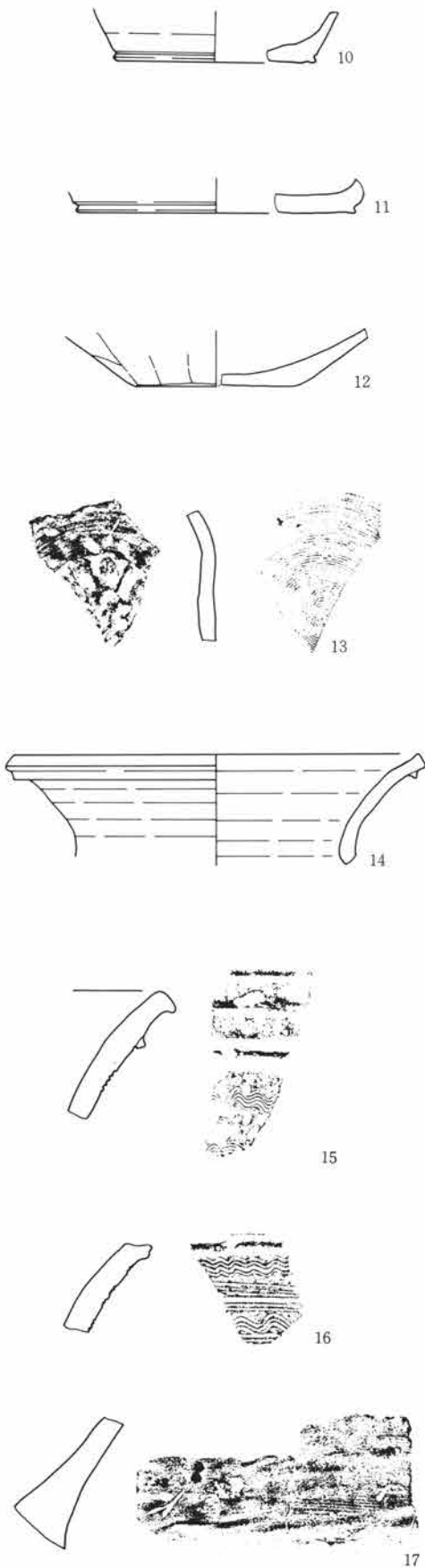
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	15.0・9.0・4.3、1/3 細砂粒・雲母 普通 橙色	口縁部は内湾し、体部から口縁部にかけては丸みをもち、口縁部の上半は横無で、下半は指撫で。体部は3段の左方向へのヘラ削り、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	12.0・8.2・3.0、1/8 細砂粒・雲母 普通、橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち開く。底部は平底を呈し、口縁部は横無で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物



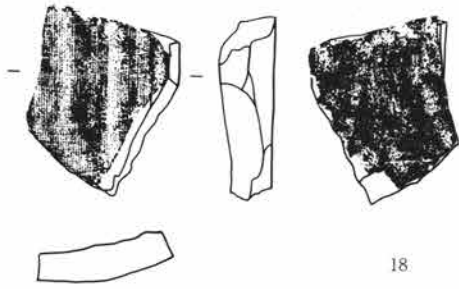
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	須恵器 蓋 覆土	18.0・鈕4.2・4.3 3/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部の中心部はやや丸みを持ち、周辺部は直線的で、口唇部は直立する。内外面に重ね焼き痕がみられ、重ね焼きの外側には自然釉の付着がみられる。
4	須恵器 坏 覆土	12.2・9.0・4.2 1/5 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。器壁は厚く、体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。底部はヘラ撫で。
5	須恵器 坏 覆土	13.8・7.2・3.7 1/4 粗砂粒・褐色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけて直線的に開く。底部は回転糸切り。
6	須恵器 坏 覆土	12.6・7.0・2.9 1/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みを持ち開く。口縁部は外反する。底部は回転糸切り。
7	須恵器 坏 覆土	12.6・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては丸みを持ち開く。
8	須恵器 碗 覆土	—・8.2・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みを持ち、あまり開かない。高台は端部に丸みを持ちやや開く。底部は糸切り。
9	須恵器 碗 覆土	—・7.4・— 1/10 細砂粒・粗砂粒 還元焰軟質 灰白色	ロクロ左回転。高台は丸みを持ち「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。

第4節 歴史時代

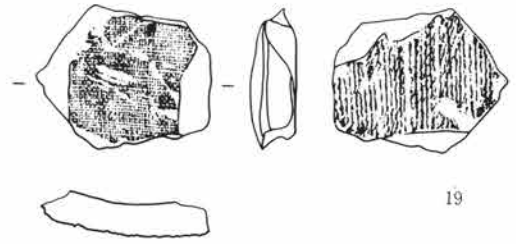


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
10	須恵器 瓶類 覆土	—・12.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	長頸壺底部。ロクロ回転方向不明。高台は削り出し、底部は回転糸切り。
11	須恵器 瓶類 覆土	—・17.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は削り出し、底部は回転糸切り。
12	土師器 甕 覆土	—・9.6・— 小片 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 普通、橙色	胴部下位は大きく開き、ヘラ削り。底部は平底を呈す。
13	須恵器 提瓶 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰色	提瓶胴部。外面はカキ目が施され、内面の中心部は指頭による圧され、周辺部は横撫で。
14	須恵器 甕 覆土	24.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	口縁部は外反し、口唇端部は平坦で外傾し、口唇部端部に1条の凸帯がまわり。内面には自然釉が付着する。
15	須恵器 甕 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇端部は外側に突帯状にのびる。口縁部の上位には1条の凸帯がまわり、その下には波状文が2段施されている。
16	須恵器 甕 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒・亜角礫・白色 鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、残存部分では1条の凸帯がまわり、その下には3本単位の波状文と凹線が交互に施されている。
17	須恵器 甕 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰色	大甕頸部片。器壁は厚く、胴部と頸部との接合部分。

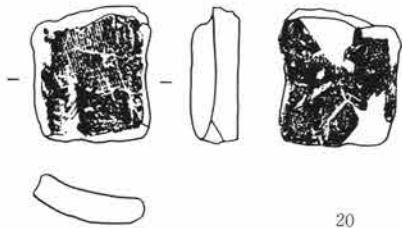
第3章 検出遺構・遺物



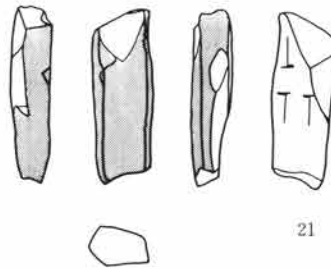
18



19



20



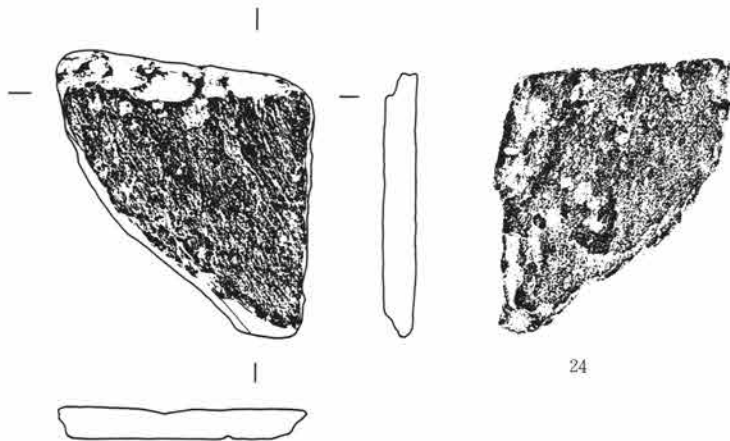
21



22



23



24

No	種類	観察表掲載頁	21	石製品 砥石	835
18	土製品 瓦	778	22	鉄製品 釘	895
19	土製品 瓦	778	23	鉄製品 鏃	896
20	土製品 瓦	778	24	石製品 板碑	878

S D59・46

241

1. 遺 構

S D59・46は、No.7 C・B地区、G・H区を西南から東南に向けて縦断するように位置する。S D59は、120H-25グリッドにかけては東西方向の走行を示し、120H-25グリッドで南北方向へ走行を変え106H-01グリッドで溝幅分だけ東へ平行移動した状態で99G-40グリッドまでと98G-48~88G-21グリッドまで直線的に位置する。発掘調査時点においては、西側道地区に位置する125H-26~120H-25グリッド部分をS D15、G・H地区に位置する119H-24~106H-01グリッド部分を北側部分(N)、105H-02~99G-40グリッド部分を中間部分(M)、98GH-48~88GH-21グリッド部分を南側部分(S D15)と呼称したが、報告書では、S D15を北側部分に併せて記載してある。

重複関係は北側部分でS J 203・216、S D12・117・118とみられるが、新旧関係は溝より本遺構のほうが古く、竪穴住居より新しい。中間部分ではS D118、S K180、S Z08とみられるが、新旧関係は本遺構のほうが古い。南側部分ではS D23・58とみられるが、新旧関係はS D23より本遺構のほうが古く、S D58より新しい。

規模は北側部分では調査区外に延びるが、調査区域内での全長66.2mを測り、東西の走行方向は8.9m・南北57.2mである。幅は確認面で1.50~2.50mを測るが、おもに1.60~1.90mの間である。深度は東西方向の走行方向は調査時の確認面がIV層~V層にかけてでおこなったため15cm前後と浅いが、他の地点は、28~66cmである。中間部分は、全長27.6m、幅1.73~1.87m、深度63~123cmを測る。南側部分は全長39.6m、幅1.65~2.15mを測る。北側部分のコーナー部分から南側部分の南端までの全長は130.4mになる。幅は1.50~2.50mと1m程の差がみられるが、掘削時においては、一間(1.80m)幅で掘られたと推定される。深度は南側・中間部分は80~100cmと割合深く掘られているが、北側部分は南側・中間部分に比較して浅い掘り込みである。走行は南北方向の走行する部分ではすべてN-30°-Wの方向である。北側部分の東西方向に走行する部分は存在する部分が短いため確定できない。

覆土は、土層断面図の通りであるが、大別すると3~4層に分層でき、底部付近には、ロームブロックを主体とする土層が西側から流れ込むようにみられ、この溝が活用されていた当時には、本遺構の西側に土塁が設けられていたと推定される。

本遺構の断面形態は、南側・中間部分では溝壁の崩壊がみられるが本来は土層断面図D-D'にみられるような形態を呈していたと推定される。北側部分は、南側・中間部分とやや異なり立ち上がりが緩やかである。底部は、北側・中間・南側とも幅15~30cmほどで部分的に落ち込みがみられるが、大部分は平坦である。

S D46は、S D59の南延長上に位置し、北端は89G-18グリッド、南端は73F-45グリッドでほぼ直線的に存在する。本遺構は、S J 104・102・107・108、S B12・13、S A07・10・13、S D21と多くの他遺構と重複するが、新旧関係はS A07、S B12・13とは明確ではないが、その他の遺構は、本遺構より新しい。

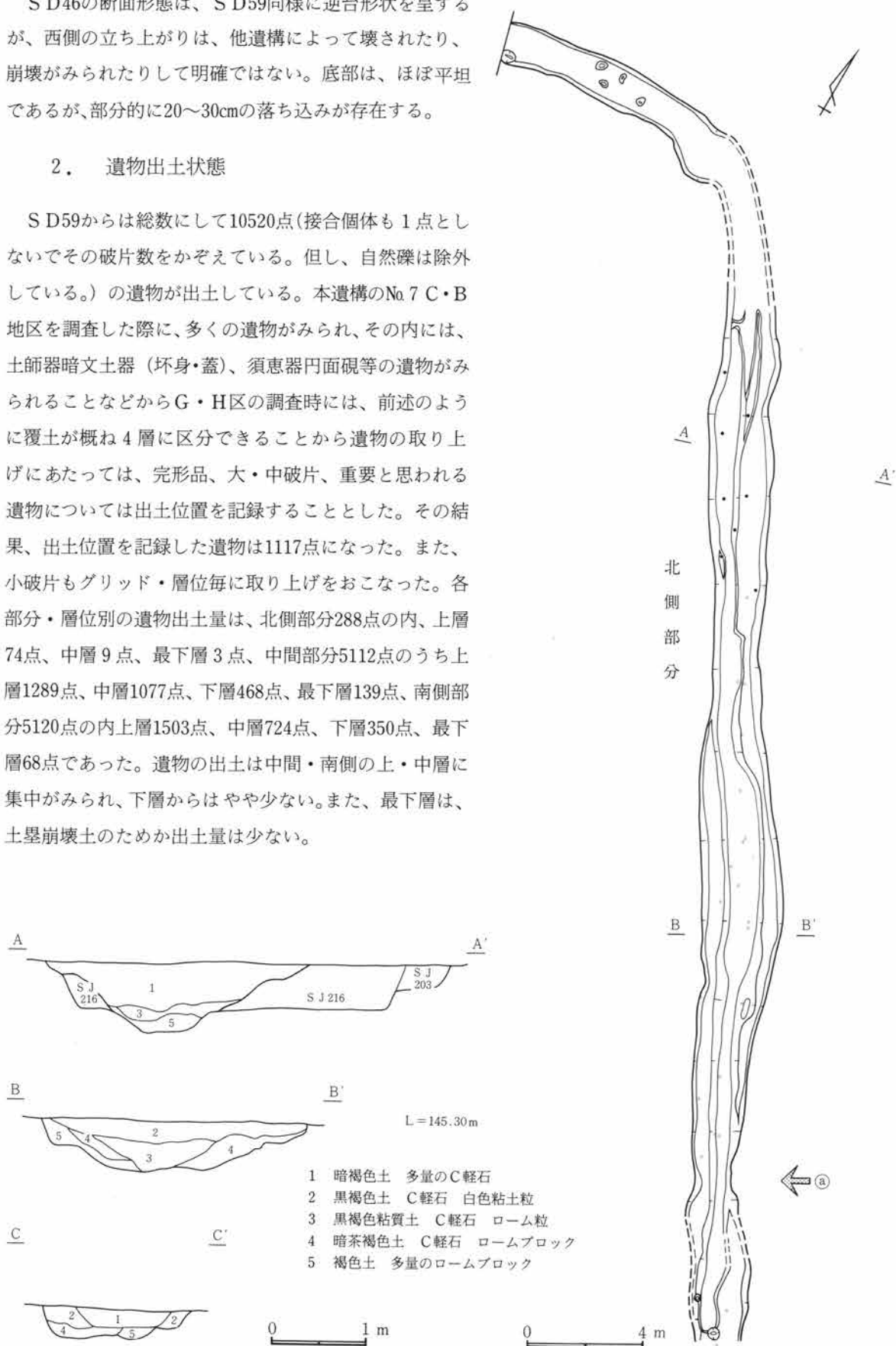
規模は、全長54mほどで、幅は1.04~2.04mを測るが、概ね、1.50~1.70mの間であるが、75F-45グリッド以内では幅1m程と狭くなる。深度は、16~82cmを測るが、大部分の地点では35~50cmである。溝幅同様に75F-48グリッド以南では深度も15~20cmと浅い掘り込みとなる。走行は、S D59よりやや西に傾きN-35°-Wの方向を指す。覆土は、上層より黒褐色土・黒褐色砂質土・黒褐色粘質土の順で堆積がみられる。S D59のような土塁等の崩壊の流れ込みは確認されなかったが、S D46に平行してS A07、S A06・08が確認されており、溝と柵列が設けられた時期があったと推定される。

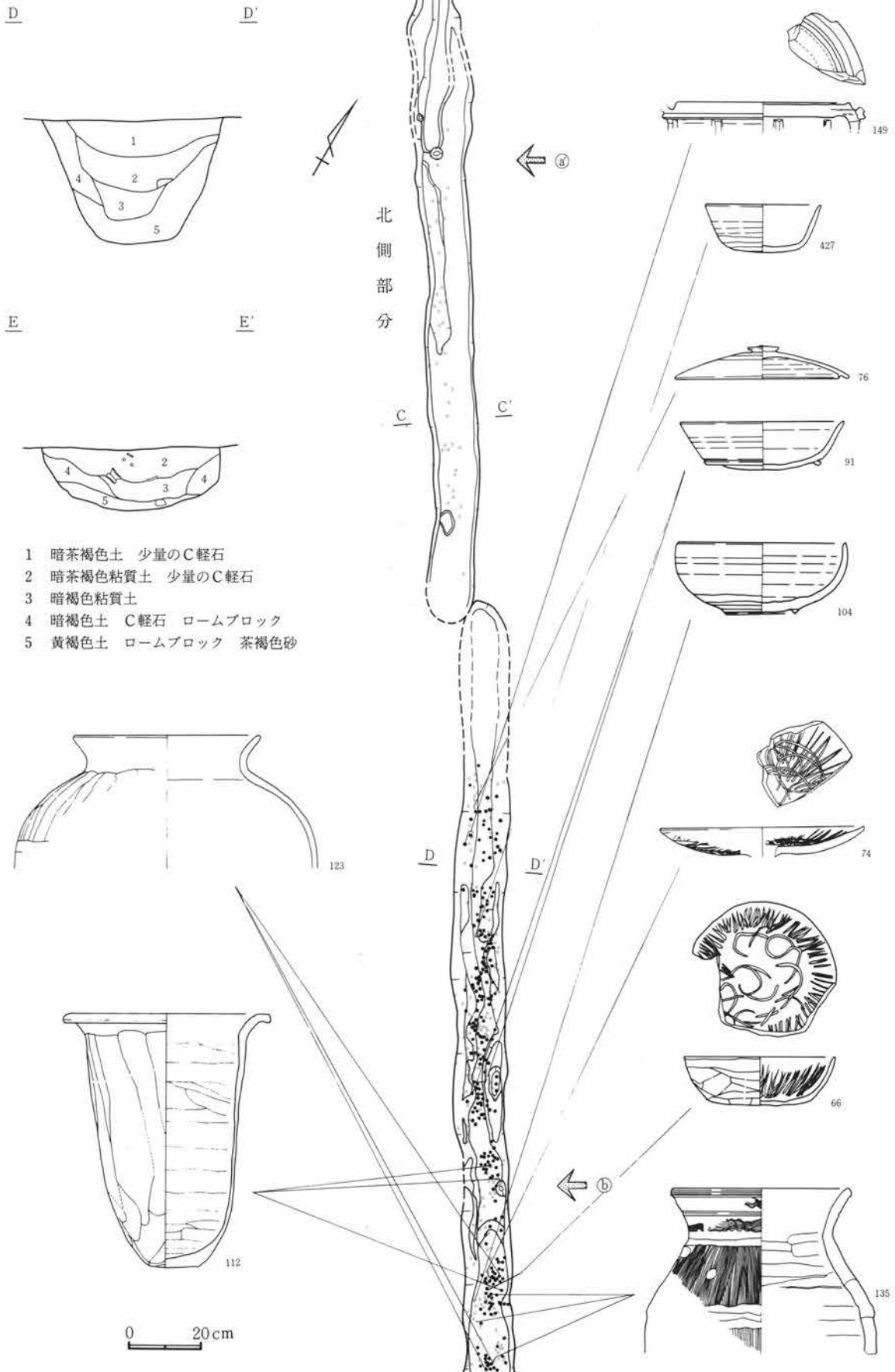
第3章 検出遺構・遺物

S D46の断面形態は、S D59同様に逆台形状を呈するが、西側の立ち上がりは、他遺構によって壊されたり、崩壊がみられたりして明確ではない。底部は、ほぼ平坦であるが、部分的に20~30cmの落ち込みが存在する。

2. 遺物出土状態

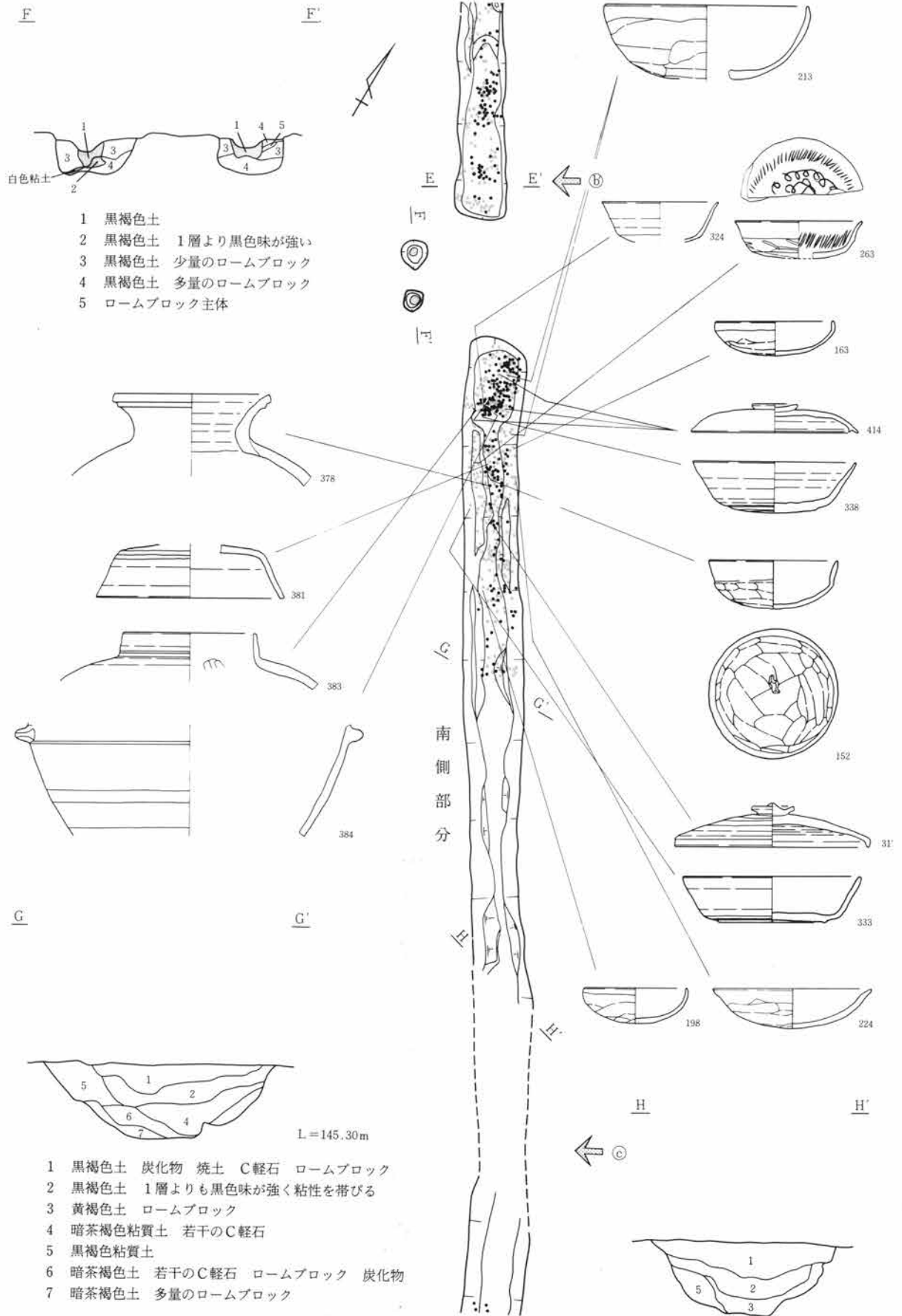
S D59からは総数にして10520点(接合個体も1点としないでその破片数をかぞえている。但し、自然礫は除外している。)の遺物が出土している。本遺構のNo.7 C・B地区を調査した際に、多くの遺物がみられ、その内には、土師器暗文土器(坏身・蓋)、須恵器円面硯等の遺物がみられることなどからG・H区の調査時には、前述のように覆土が概ね4層に区分できることから遺物の取り上げにあたっては、完形品、大・中破片、重要と思われる遺物については出土位置を記録することとした。その結果、出土位置を記録した遺物は1117点になった。また、小破片もグリッド・層位毎に取り上げをおこなった。各部分・層位別の遺物出土量は、北側部分288点の内、上層74点、中層9点、最下層3点、中間部分5112点のうち上層1289点、中層1077点、下層468点、最下層139点、南側部分5120点の内上層1503点、中層724点、下層350点、最下層68点であった。遺物の出土は中間・南側の上・中層に集中がみられ、下層からはやや少ない。また、最下層は、土塁崩壊土のためか出土量は少ない。

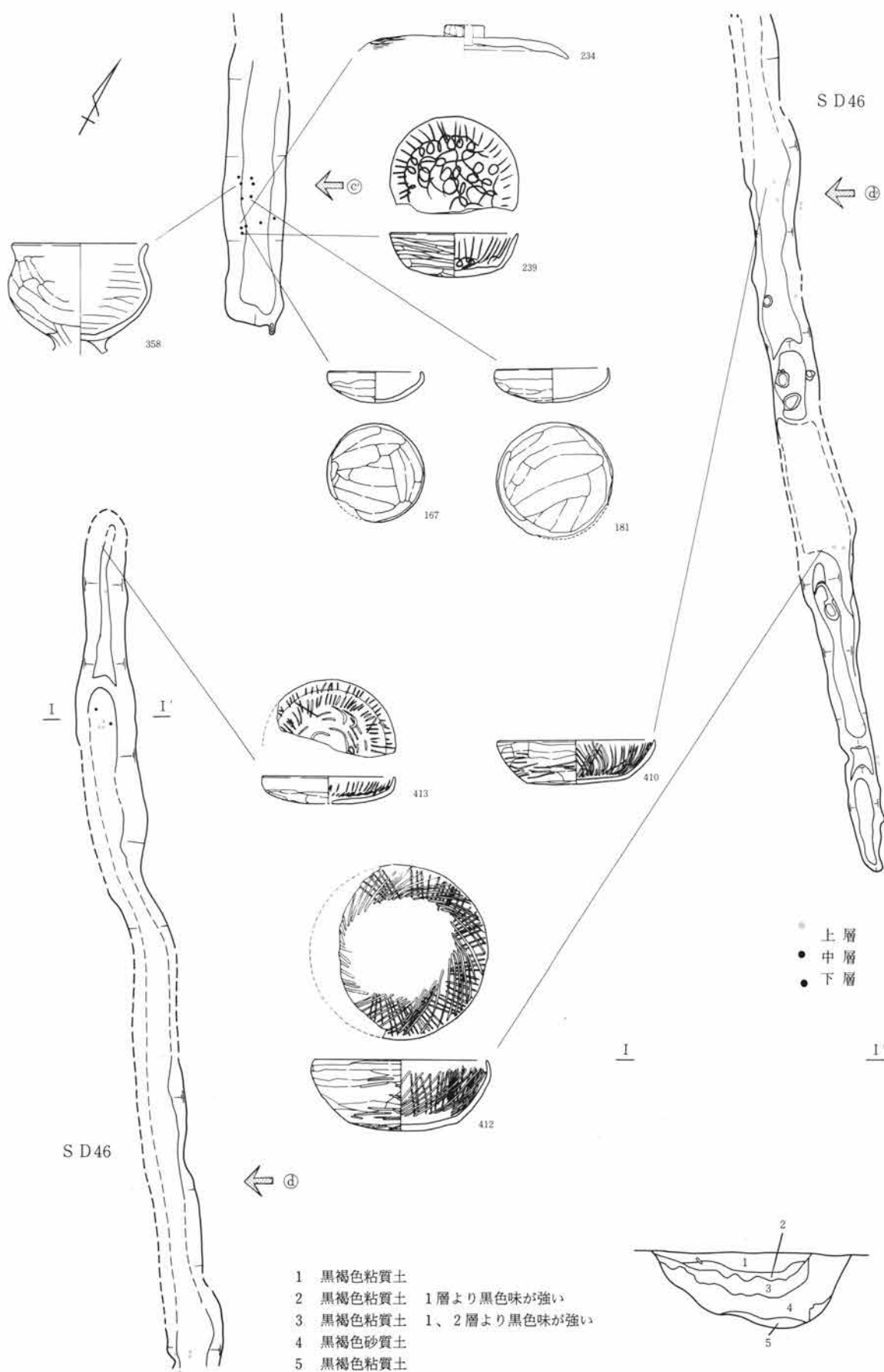




- 1 暗茶褐色土 少量のC軽石
- 2 暗茶褐色粘質土 少量のC軽石
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色土 C軽石 ロームブロック
- 5 黄褐色土 ロームブロック 茶褐色砂

第3章 検出遺構・遺物





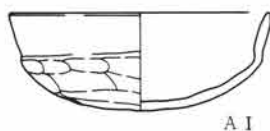
3. 遺物

本溝跡出土遺物のうち、実測した個体は440点である。内容は、土師器坏・埴・皿類131点、暗文土器68点、畿内産土器9点、黒色土器1点、土師器甕類36点、須恵器蓋類57点、坏・埴・皿類72点、瓶・壺・甕類40点、置竈の破片2点、硯4点、羽口4点、砥石1点、鉄製品5点、勾玉1点である。その他、土器の破片は総量10088片であり、分類可能なものについては、溝小ブロック、層別にして数え、分類不可能なものは各器種の部位によって分けて数え一覧表（531～533頁）を作成した。

以上のように遺物の出土量が多く、様相が捉え難いため、出土土器を分類し、型式を設定して掲載することにした。掲載の順序は、溝の小ブロック内で型式別にした。層位については観察表を参照されたい。分類の方法については、第4章第2節で詳述するが、各器種内を形態・整形技法によって分け大文字のアルファベットを与え、さらに細部の形態の相違によってローマ数字を与えた。

1) 土師器坏

坏類には、古墳時代の須恵器模倣坏の系統にある体部外面に稜をもつA、底部から口縁部まで内彎する傾向にあるBとに分かれる。坏Aから坏Bへ単純に変化するものでないことは、両者がかなり長い間併存することからも想定され、坏Bが新たな影響のもとに成立したと考えられる。坏A・B共に口縁部など細部の相違によって細分され、同形態で異なる法量のものも存在する。B類の整形技法は、底部から体部がヘラ削りされ、口縁部が横撫でとなるが、大半が体部上位に僅かな無調整部分を残す。



A I

A I 底部から体部は緩やかな丸みをもち、体部と口縁部の境に明瞭な稜をもつ。口縁部はふくらみをもって僅かに開き、体部は深い。底部から体部は手持ちヘラ削り。口縁部は横撫で、内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。



A II

A II 底部から体部は緩やかな丸みをもち、体部と口縁部の境は弱い稜をなす、口縁部は大きく外反する。底部から体部は手持ちヘラ削り。口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。



A III

A III 底部から体部は緩やかな丸みをもち、体部は浅い。ほとんど稜はみられず、弱く屈曲して口縁部はほぼ直線的に開く。底部から体部は手持ちヘラ削り。口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。



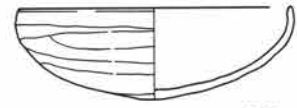
B I-1



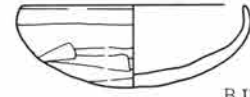
B I-2

B I 底部から体部は緩やかに彎曲し、口縁部は短く僅かに内傾する。底部から口縁部直下まで丁寧にヘラ削りされ、口縁部は横撫でだが、撫での幅は僅かである。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で、B Iは形態を同じくして、法量の異なる2つのまとまりに分れる。B I-1は、口径13cm前後、B I-2は、口径10cm前後を測る。

B II a 中央が多少突出気味の底部から口唇部まで丸みをもって内彎し、体部は比較的深く、半球状を呈する。整形は、底部から体部は手持ちヘラ削り、体部上位に僅かに無調整部分を残す。口縁部は横撫でだが、撫での幅は狭い。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。B IIは、体部から口唇部まで内彎する形態は類似するが、器高の違いによってa～cに分かれ、さらにその中でB II aは、法量の差によって1～3に分かれる。B II a-1は、口径15cm前後、B II a-2は、口径12cm前後、B II a-3は、口径11cm前後を測る。



B II a-1

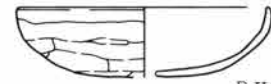


B II a-2



B II a-3

B II b 全体的に口唇部まで内彎するところはB II aに類似するが、体部は浅く、底部は緩やかな丸みをもつ。整形はB II aと同様であり、底部から体部は手持ちヘラ削り、体部上位に僅かに無調整部分を残す。口縁部は横撫で、幅は狭い。B II bは、法量の差によって2つに分れる。B II b-1は口径14cm前後、B II b-2は、口径12cm前後を測る。

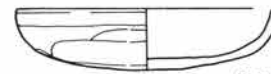


B II b-1



B II b-2

B II c 全体的に口唇部まで内彎するところはB II aに類似するが、B II bよりもさらに体部が浅く、扁平である。整形は、底部から体部は手持ちヘラ削り、体部上位に僅かに無調整部分を残す。口縁部は、幅狭く横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。B II cは、法量の差によって2つに分かれ、B II c-1は、口径14cm前後、B II c-2は、口径12cm前後を測る。



B II c-1

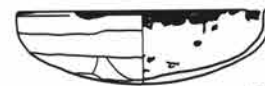


B II c-2

B III 底部から体部は丸みをもち、比較的体部は深い。口縁部は直立気味となる。整形は、底部から体部は手持ちヘラ削り、体部上位に僅かに無調整部分を残す。口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。B IIIは、形態を同じくして、法量の異なる3つのまとまりに分かれる。B III-1は、口径15cm前後、B III-2は、口径13cm前後、B III-3は、口径12cm前後を測る。



B III-1



B III-2

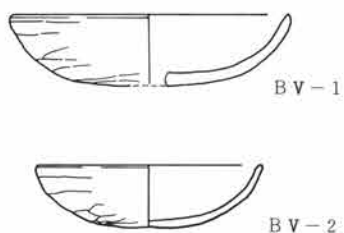


B III-3

B IV 底部は、小さく平底気味の部分をもち、体部は一担開き、上位で内彎し、口縁部は内傾気味もとなる。底部は平底気味に削り出し、体部はヘラ削り。体部上位に無調整部分を残し、口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。



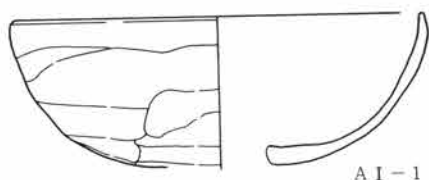
B IV



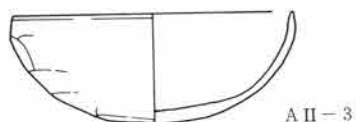
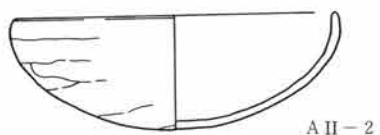
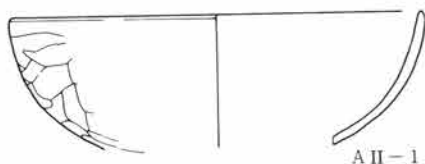
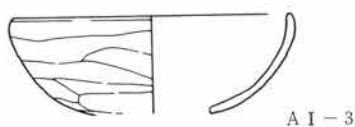
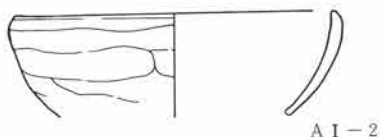
BV 底部から緩やかな丸みをもちながら、口唇部に向って開く。整形は、底部から体部は手持ちヘラ削り、体部上位に無調整部分を残し、口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。BVは法量によって2つに分れ、BV-1は、口径15cm前後、BV-2は、口径12cm前後を測る。

2) 土師器埴

埴類は、体部の深い丸底のものAと、平底のものBとに分れる。畿内では、佐波埋埴の模倣によって重埴が出現するが、埴Aは形態と重埴と考えられる点が似ているのみで、研磨も施されず金属器指向というイメージはない。また、坏類としたものと形態が類似しており、あえて埴の名称を与える必要があるか疑問である。しかし、体部が深く、大型であり、金属器模倣傾向の強い時期に出現することを考えれば、埴と呼称することに妥当性があると思われる。



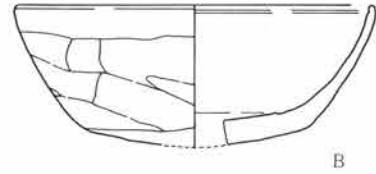
A a 底部から体部は、丸みをもって内彎し、口縁部が短く、内傾気味となる。体部は深く半球状を呈す。底部から体部は手持ちヘラ削り、体部上位に無調整部分を残し、口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。A aは、形態が同じで、法量の異なる3点に分かれる。A a-1は、口径22cm前後、A a-2は、口径17cm前後、A a-3は、口径15cm前後を測る。



A b 底部から口唇部まで丸みをもって内彎する。体部は深く半球状を呈する。整形は、底部から体部は手持ちヘラ削り、体部上位に無調整部分を残す。口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。A bは、形態は同じで、法量の異なる3点に分かれる。A b-1は、口径22cm前後、A b-2は、口径17cm前後、A b-3は、口径15cm前後を測る。

B 底部と体部の境は明瞭であり、平底を意識するが、若干丸みをもつ。体部は僅かにふくらみをもって開き、

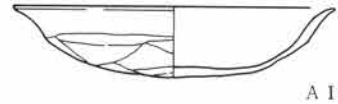
口唇部が内彎する。内面、底部周縁には一条の沈線が巡る。底部は一定方向のヘラ削り、体部は横方向のヘラ削りが口縁部直下まで施され、口縁部は横撫で。出土は一点のみであり、口径は19.2cmを測る。



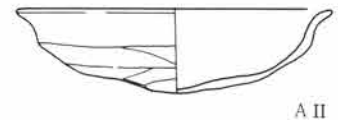
3) 土師器皿

皿類は、体部に稜をもって口縁部は外反し、口縁部の形態によって細分される。この形態のものは器種名が坏・盤・皿のいずれも使われており、皿とする明確な根拠はない。しかし、坏類は、違う形態のものが主体的に存在し、これを上方から見た場合、かなり平らな印象を受けるので、皿としての機能をもつと考えられる。また、盤、皿の相違については、従来大型品を盤、小型品を皿とすることが多いようである。しかし、同形態で大小があり、食器としては皿の方が馴染み深いので、皿として統一した。

A a 底部から体部は、緩やかな丸みをもって開く。体部と口縁部の境には稜をもち、口縁部は大きく外反し、体部は浅い。整形は、底部から体部は手持ちヘラ削り、口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。



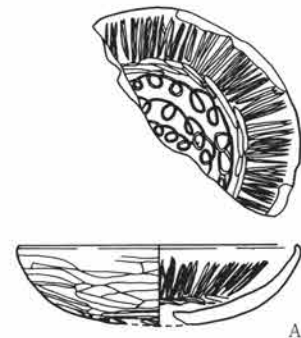
A b 底部から体部は、緩やかな丸みをもって開く。体部と口縁部の境には稜をもち、口縁部は外反するが、口縁部上位がさらに大きく反って開く。整形は、底部から体部は手持ちヘラ削り、口縁部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口縁部は横撫で。

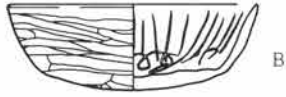
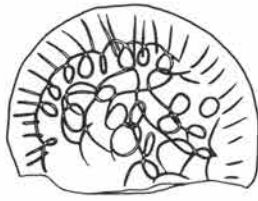


4) 暗文土器

出土している器種には、蓋・坏・碗・皿・高坏がある。これらは畿内の暗文土器の影響を受けて成立したものであるが、形態は異なる。磨きは一部の土器に施されるのみであり、大部分のものがヘラ削りのままである。畿内産の土器は薄手であるが、これらの土器はむしろ一般的土師器よりも器肉が厚い。暗文の幅も太く、全体的に雑な作りである。しかし、一般的な土師器よりも砂粒が少なく、焼成も硬質であり、若干良質の粘土を使用していると思われる。蓋・碗・皿・高坏の出土は、それぞれ1点づつと少ないため、分類は坏類のみとした。坏類の形態は、一般的な土師器と同形態の丸底のものと、平底気味のものとあるが、畿内産暗文土器と形態は著しく相違する。

A 底部から口唇部まで丸みをもって内彎する。器肉は比較的厚い。整形は、最も丁寧な一群で、外面底部から口唇部まで細かいヘラ研磨が施される。内面は横撫での後、細い棒状の工具により、底部には螺



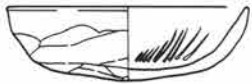


線状暗文、体部には放射状暗文が施される。

B 底部と体部の境は明瞭であり、弱い稜をなす。底部は若干丸みをもつ。体部から口縁部は僅かにふくらみをもって開く。器肉は比較的厚い。整形は、底部は細かくヘラ削りされ、体部から口縁部直下までヘラ削りの後、ヘラ研磨が施される。口縁部は横撫で。内面は横撫での後、底部に螺旋状暗文、体部に放射状暗文が施される。

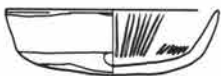
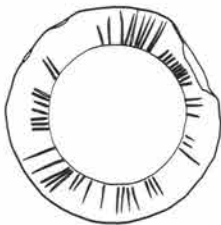


C I 底部は平底だが、僅かに丸みをもつ。体部は、ほぼ直線的に大きく開く。器肉は、底部は比較的厚いが、体部は若干薄手である。整形は、体部に研磨はみられず、横方向にヘラ削りされ、底部もヘラ削りである。内面は横撫での後、底部には螺旋状暗文、体部に放射暗文が施される。



C II

C II 底部と体部の境は、削りによって明瞭な稜をなすが、底部は丸底気味である。体部から口唇部まで全体的に丸みをもって開く。整形は、底部が不定方向ヘラ削り、体部は横方向のヘラ削り。口縁部は横撫で。内面は、横撫での後、底部に螺旋状暗文、体部に放射状暗文が施される。



C III

C III 底部と体部の境は、明瞭で稜をなすが、底部は丸底である。体部から口縁部は短く、直線的で僅かに開く。整形は、底部・体部ともにヘラ削りの後、撫でによって削りの痕跡がほとんど消されている。内面は、横撫での後、体部には放射状暗文が施される。底部の螺旋状暗文は施されない。



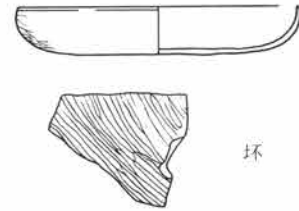
D

D 底部は、僅かにふくらみをもつか、ほとんど平底に近い。体部はほぼ直線的に開き、口縁部との境に弱い稜をもつ。口縁部は直立気味となり、口唇部が外反する。器肉は底部・体部とも厚手であるが口唇部に向って薄くなる。底部はヘラ削り、体部は横方向ヘラ削り、口縁部は横撫で。内面は、横撫での後、底部に螺旋状暗文、体部に放射状暗文が施される。

5) 畿内産土師器*1

出土している器種としては、坏・鉢・把手付の壺・壺と思われるものがある。非常に薄手で精巧な土器であり、外面には細かなヘラ研磨が施される。色調も赤色味を帯び、目立った砂粒を含まない胎土である。出土量は少なく、破片が87点、そのうち実測可能なものが9点であった。

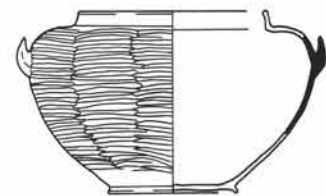
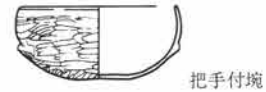
坏 底部は平底、体部から口唇部まで丸く内彎する。体部は浅く、器肉は非常に薄手である。色調は明赤褐色を呈す。整形は、破片のため全体的には不明であるが、底部は一方向の細かいヘラ研磨、体部から口唇部まで横方向の細かいヘラ研磨が施される。内面は丁寧な横撫で。



鉢 底部までは復元し得なかったが、同一個体と思われる平坦な底部片があるので平底と考えられる。体部は丸みをもって開き、口唇部に向けて内彎する。器肉は非常に薄手で、色調は明赤褐色を呈す。整形は、外面体部から口唇部まで細かなヘラ研磨、底部片もヘラ研磨が施される。内面は丁寧な横撫で。この器形は平城宮の鉢Bと類似している。



把手付壺 小さな平底から丸みをもって体部は立ち上り、口唇部まで丸く内彎する。体部は比較的深く、器肉は薄手である。幅2.5cmの把手が付くが、大半が欠けているので形状は不明。色調は、浅黄橙色から橙色を呈し、他の土器と胎土が異なるが、把手部分のみの破片には明赤褐色を呈するものもある。整形は、底部一方向のヘラ研磨、体部から口縁部は横方向のヘラ研磨、口唇部は横撫で。内面底部は撫で、体部から口唇部は横撫でである。



平城宮壺A 1 : 8

壺 把手部分のみの破片であるが、大型品であり、平城宮の壺Aのような葉壺型の把手部分と考えられる。把手も大半が欠け、形状は不明である。色調は明赤褐色を呈し薄手である。整形は、外面横方向のヘラ研磨、把手部分は不明。内面は横撫で。

* 林部 均氏に、色調・胎土・整形からみて畿内産と考えられるとの御教示を頂いた。

6) 須恵器蓋

蓋類は、口径11.0~14.0cm、17.0~20.0cmの2つのグループに分れる。大型品A・B、小型品Aは、それぞれ鈕や、全体的な形態、カエリとの三つの要素に統一があり、明らかに型式として抽出することができる。中でも大型品Aは、高台付坏Aと全体的な特徴・胎土からセットになるものと考えられる。蓋は、鈕が疑宝珠状を呈し、坏身は高台よりも底部の突出する形態であり、それは東海地方、湖西古窯跡の坏蓋に範をもつ。

その形態の要因は明らかではないが、A型式はこの模倣によって成立したと思われる。他の蓋類は、三要素にセット関係がみられず、それぞれの組み合わせによって作られている。そのため、三要素を充すものを型式として取り出すと、個体数が型式の数になることも考えられるので、蓋を三つの要素に分解して、それぞれを細分する方法を採った。



A I

A a 全体的に薄手であり、天井部から口唇部まで僅かなふくらみをもって開く。鈕は偏平な疑宝珠状（鈕AIV）であり、カエリは細い三角形を呈し、シャープなつくりである。整形は、天井部が回転ヘラ削り、体部から口縁部は手持ちヘラ削りの後、回転撫でが施される。内面は回転撫で。この型式の蓋は、色調は灰色を呈し、胎土は白色の細砂粒を少量含むものであり、同様の胎土をもち、薄手に作られた高台付坏Aとセットになるものと考えられる。



A II

A b 全体的に薄手であり、天井部から口唇部までほぼ直線的に開く。鈕は疑宝珠状（鈕A I）であり、カエリは細い三角形を呈し、シャープなつくりである。整形は、天井部から口唇部まで回転ヘラ削り、内面は回転撫で。色調は灰色、胎土は白色の細砂粒を含むものでA aと全体的によく似ている。これも丸底で薄手の坏Bとセットになるものと考えられる。



B

B 口径20cmを超える大型品である。非常に厚手であり、天井部から口唇部まで直線的に開く。鈕は円盤状（鈕C VI）を呈し、上面が僅かに窪む。カエリは口縁部を折り曲げることによって作られ、小さく端部は丸い。内外面ともロクロ整形である。色調は灰白色を呈し、やや軟質な感じがする。胎土は細砂粒と灰色の角粗砂粒を僅かに含む。高台付坏C IVと同じ質感をもち、口径の大きさからもセットをなすものと思われる。

鈕一すべて貼付によってつくられている。成形法は、疑宝珠状・粘土板状・紐状のいずれを貼付するかによって大きく分けられ、さらに形態によって細分した。

A 疑宝珠状鈕



A I

A I 宝珠状に近く、上面の周縁部が僅かに括れ、中央部は高く丸みをもつ。小型品に多い。



A II

A II A Iよりも括れが強く、中央部は若干細くなり、頂部は丸みをもつ。

A III 周縁部にほぼ水平な面をもち、中央部はA IIよりも低く、三角形状を呈し、頂部は丸みをもつ。



A III

A IV ほとんど扁平であり、中央部も僅かに盛り上がるにすぎない。周縁部は外側の線よりも窪む。



A IV

B 扁平で上面は僅かに窪み、端部は丸みをもつ。

B ボタン状鈕



B

C 扁平な丸い粘土板を貼付したものであり、全体の整形の方法により、細かな形態差で分れる。このタイプは、Dに比べ中央部の厚みが天井部の倍近くになるので見分けが容易である

C 扁平鈕



C I

C I 側面が「く」の字状を呈し、両面ともヘラで撫でられ稜はシャープである。上面も鋭い稜をなし、内側は短く括れ、中央部は広い平坦面をもつ。



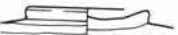
C II

C II 側面は丸みをもち、接合部分はあまり括れない。上面は比較的深く、中央部は広い平坦面をもつ。中央部の高さが天井部と等しく、周縁部が薄手のため一見紐造りにみえるが、内面中央部が突出する。



C III

C III 接合部分は比較的深く括れ、側面は丸みをもって開き、上面は緩やかに窪み、中央部が僅かに突出する。



C IV

C IV 接合部分はあまり括れず、側面は丸みをもつ。上面は緩やかに窪み、中央部が僅かに突出する。



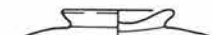
C V

C V 接合部分はほとんど括れず、側面の丸みも少ない。上面は窪む。



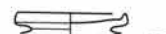
C VI

C VI 側面は直立気味。端部は比較的鋭く、上面はほとんど平坦である。



C VII

C VII 端部が大きく外側に引き出され、上面周縁部は水平面をもち、中央部に向って緩やかに窪む。



C VIII

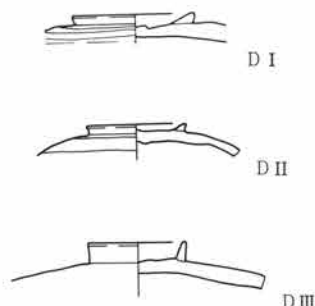
C VIII 端部は外側に大きく張り出し、側面は直立して、周縁部がつまみ上げられ、上面は大きく平坦面をもつ。



C IX

C IX 端部は外側にシャープにつまみ出され、上面は一旦盛り上り、中央に

D 輪状鈕



向って窪む。

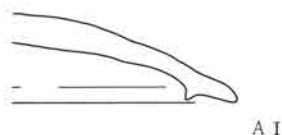
D 粘土紐を輪状にして天井部に貼付したものであり、調整の方法によってCタイプに一見類似するものや、高台状を呈するもの等に分れる。

D I 側面が丸みをもち、上面は緩やかに窪む。C IIIに形態は類似するが中央部の器肉が天井部よりも薄い。

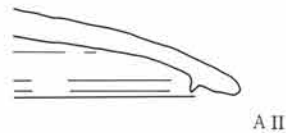
D II 側面は直立するが僅かに反る。断面形は小さな三角形を呈し、上面は広く平坦面をもつ。

D III 細く、高く直立し、高台状を呈する。上面は平坦である。

カエリ カエリの成形法には、つまみ出しと貼付と折り返しがあり、さらに細かい形態差によって細分される。また、カエリを持たずに口縁端部を折り曲げたものも、形態差によって細分される。

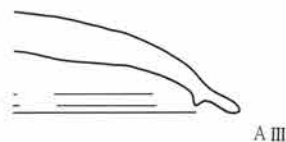


A 内外面とも真直ぐで、長さが等しく、全体的には三角形を呈し、口縁部に対して垂直に貼付される。

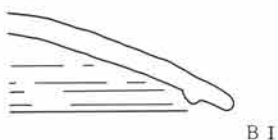


A I 比較的大きめの正三角形を呈し、端部がシャープである。

A II A Iに比べて細みの三角形を呈し、端部はシャープである。

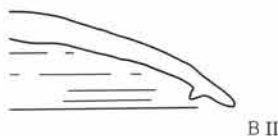


A III 比較的大きめの三角形であるが、端部は若干丸みをもつ。

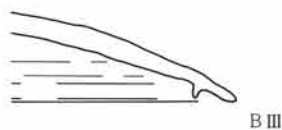


B 内側が丸みをもち、外側が直線的であり、内側の貼付部分はヘラがあてられ、シャープな線をなす。

B I 内側から端部に向って丸みをもち、全体的に太めで、外側は短く直線的に内傾する。

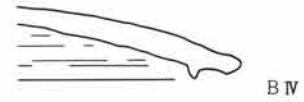


B II 内側は若干丸みをもち、接合部にはヘラがあてられる。端部は鋭角的で、全体的に細みである。外側は直線的に内傾する。



B III B IIに類似するが、内側が外側よりも深く内彎する。

B IV 接合部にはヘラが当てられる。内側から端部まで丸みをもつが、**B I**よりも細みである。外側は短く、若干反る。



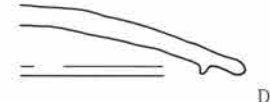
B IV

C 口縁部外面が屈曲し、屈曲部の内面を僅かに突出させた程度の小規模なカエリであり、端部は丸みをもつ。



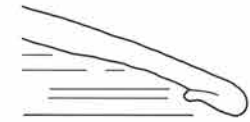
C

D 口縁部に対して垂直であり、全体的に丸みをもち、小規模である。



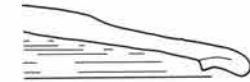
D

E 口縁部を折り返し、端部をカエリとして作るタイプである。



E I

E I 折り返しの線が断面に明瞭であり、カエリは内側に丸みをもち、外側は撫でによって僅かに窪む。



E II

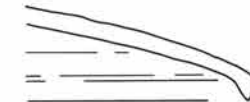
E II 口縁端部は厚く丸みをもち、カエリは僅かにつまみ出した程度の小さい三角形を呈す。



E III

E III 折り返した口縁部の端部を大きく外反させてつくる。内側は丸みをもち比較的細長い。

F 口縁部を折り曲げたものでカエリを持たない。



F I

F I 天井部から体部は丸みをもち、口縁部は内傾する。屈曲部は厚く、短い三角形を呈する。



F II

F II 屈曲部手前が大きく括れ、垂直に折れ曲るが、細く、外側は外反気味である。



F III

F III 天井部から体部は丸みをもち、外形は**F I**に類似するが、屈曲部から全体的に細く、内傾する。



F IV

F IV 内側は天井部から端部まで緩やかな弧を描いて開く。外側は屈曲部から外反する。

外形一天井部から口縁部の形態差によって分類する。カエリの成形法によっては、カエリの形態と外形に関連をもつものもあるが、大半は不明瞭である。整形は、ほとんどが天井部には回転ヘラ削りが施され、体部から口縁部は回転撫であり、全面回転撫でのものもある。



A I

A I 天井部の平坦面は少く、緩やかな丸みをもって下り、口縁部に至る。



A II

A II 天井部の平坦面は広く、体部から口縁部まで丸みをもって下る。



A III

A III 天井部から体部にかけては、大きく丸みをもち、口縁部が外側に引き出される。口唇部は丸みをもつ。



A IV

A IV 天井部から口唇部まで、直線的に開く形態である。



B I

B I カエリをもたず、口縁部折り曲げものであり、天井部から体部は緩やかな丸みをもって下り、口縁部は直立する。

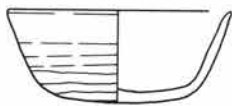


B II

B II 器高が低く、天井部から体部は僅かな丸みをもって開くが、口縁部手前で一旦窪み、口縁部は反り気味に直立する。

7) 須恵器坏

坏身は、口径11.0～13.8cm、17.0～19.0cmに集中し、小型品にはほとんど高台は付かず、大型品の大部分は高台をもつ。同形態・同整形で、胎土も似る類例をもつものは極く少く、大半は細部の相違により煩雑に分れる。須恵器は胎土も考慮し、全体のフォーム、整形法によって分類すべきと考えるが、破片の分類の都合上もあり、全体的なイメージの似ているものは一型式とした。細部の違いが何のような理由によるのかわからないが、同一のものを作成するという意志の中での個々人の手による相違か、また系列の違いによって生じる差であろうか。その背景によっても同一型式として捉えられるか否かは違ってくる。今後、類例や窯跡の資料の増加によって、この分類も淘汰していかなければならないと考えている。



A

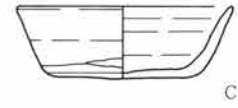
A 底部は僅かに丸底気味、底部から体部下位は丸みをもち、体部から口縁部は直線的に開く。底・体部は器肉が厚く、口縁部は薄くなる。底部から体部下位は回転ヘラ削り。



B

B 底部は丸底であり、体部との境に稜をなす。体部から口縁部は外反して大きく開く。底部は器肉が厚いが、体部から口縁部は薄手である。底部は不定方向のヘラ削り、体部はロクロ整形である。色調は灰色を呈し、胎土は白色の細砂粒を少量含み、最も類例の多い坏である。

C 底部は平底で器肉が厚い。体部立ち上り部分は、やや丸みを持ち、体部から口縁部はほぼ直線的で若干開く。体部の器肉は比較的厚いが、口唇部は薄い。底部は一方向の手持ちヘラ削り。

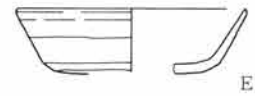


D～Fまでは類似が少なく、細部の相違により型式設定し難い坏類あるが、一応大まかな形態で分類した。

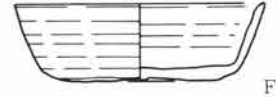
D 平底、体部はほぼ直線的に開く。口縁部から口唇部にかけて器肉が非常に薄くなる。底部は回転ヘラ削りである。



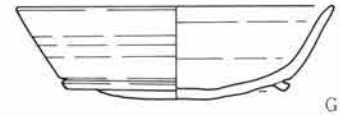
E 平底、体部下位は回転ヘラ削りによって若干段をなし、体部から口縁部まで直線的に開く。器肉は比較的均一で、端は丸みをもつ。底部から体部下位は回転ヘラ削り。



F 平底、体部下位は若干丸みを持ち、口縁部は直線的に若干開く。口唇部は厚みを持ち、多少角張っている。底部は回転ヘラ削り、ヘラ切り後の手持ちヘラ削りとある。



G 底部は丸底で、高台よりも突出し、体部から口唇部まで直線的に外反する。全体的に非常に薄手である。高台は、底径よりも僅かに内側に貼付され、断面形は台形を呈し、外側に大きく開く。底部は回転ヘラ削り、高台外側はヘラによって撫でられる。色調は灰色を呈し、胎土は白色の細砂粒を含む。類例が最も多く、形態・整形・胎土ともに良く類似し、一型式として設定できる。

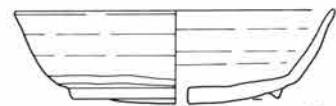


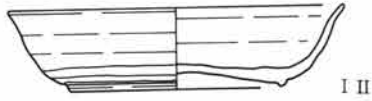
H 平底、体部の立ち上りは丸みを持ち、体部はほぼ直線的に開く。全体的に器肉は厚い。高台は底径よりも内側に位置し、両側を押し撫でて突出させたような小規模なものである。底部は回転ヘラ削り。色調は灰白色を呈し、軟質な感じである。胎土は細砂粒と灰色の角粗砂粒を僅かに含む。Gについて類例が多く、一型式として設定できる。



Iタイプは口縁部の形態に類似点をもつもので、口縁部破片の分類に必要なためIとして一括したが、型式がまったく異なる可能性もある。底部や高台の特徴によってI～IIIに細分した。

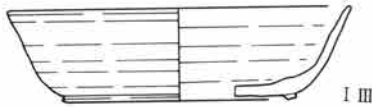
I I 丸底で、底部から体部下位にかけて丸みを持ち、体部中位からやや外反気味になる。底部は回転ヘラ削りである。全体のフォー



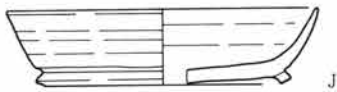


ムは似ているが、高台にバラエティーがあり、僅かにつまみ出したようなもの、比較的大きく断面が三角形を呈すもの、高台がなく底部に小さく、丸く段をなしているものと様々である。

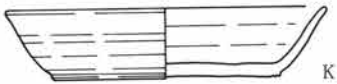
I II 体部から口縁部の形態は **I I** に類似するが、平底である。高台は両側を強く押し撫でて突出させたようであるが、断面形は方形を呈すもの、小さい三角形のもの、平たい角形のものと同様である。底部整形は回転ヘラ削り。



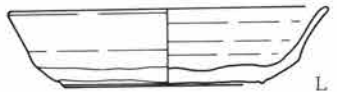
I III 全体の形態は **I II** に類似するが、高台の形態が特徴的であり、類似もいくつか存在する。高台は、断面方形を呈するが、端部中央に1条の沈線が巡る。底部整形は回転ヘラ削りである。



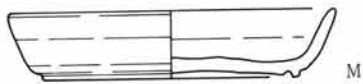
J 底部は平底、体部は僅かに丸みをもって開く。口唇部に向けて若干器肉が薄くなる。高台は大きく、断面台形を呈し内端部が接地する。底部は回転ヘラ削りである。



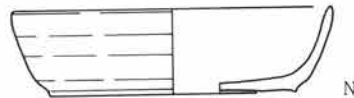
K 底部は平底、体部はほぼ直線的に開く。比較的薄手で口唇部が薄く、シャープである。高台は、底径の上をヘラで押し撫でて突出させた感じの小規模なものである。底部は回転ヘラ削り。



L 底部は平底、体部は $\frac{1}{2}$ をヘラ削りされ、明瞭な稜をなす。体部上位から口縁部は大きく外反する。体部から口縁部は比較的薄手である。高台は両側を押し撫でて突出させた小規模なものであり、底部、体部下位は回転ヘラ削りされる。



M 底部は平底、体部は短く、器肉が厚い。若干丸みをもってあまり開かず立つ。高台は両側を強く押し撫でて突出させた形で断面は方形を呈す。底部は回転ヘラ削りである。

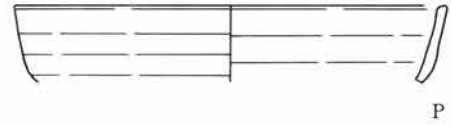


N 底部はやや上げ底気味、体部は全体的に若干丸みをもって開く。体部から口唇部まで比較的厚手で、口唇部が厚く丸みをもつ。高台は小規模で内側にヘラがあてられ、回転のヘラ撫でによって押し出された感じである。底部は回転ヘラ削り。



O 底部は丸底、底部と体部の境はヘラ撫でによって深く括れる。体部はほぼ直線的に開く。口唇部は厚く、丸みをもつ。底部は大きく丸みもち、回転ヘラ削りされる。

P 口径は23cm以上と大きく、底部は欠けているが、体部は真直ぐで特徴的な坏である。口唇部は平坦面をもち、やや内傾する。体部下位が丸みをもって内側に入り、欠け口の端部が外反しているので高台がつく可能性がある。

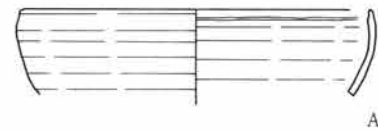


P

8) 須恵器碗

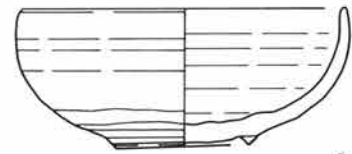
出土量は非常に少ないが、坏類よりも体部が深く、大きく丸みをもつものを碗として口縁部・高台の形態差で細分した。

A 底部を欠く。体部から口縁部は丸みをもち、口縁部上位が内彎する。口唇部は丸みをもち、内側に1条の沈線が巡る。器肉は比較的薄手である。



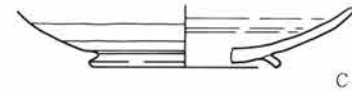
A

B 全体的に丸みをもち、体部は深く半球状を呈する。全体的に厚手で、口唇部は丸みをもつ。高台は中央寄りに貼付され、径が小さい。断面形は三角形を呈す。体部下位から底部にかけて回転ヘラ削りだが、高台の貼付時に底部は回転撫でが施される。



B

C 体部上位から上がなく、全体の器形は不明であるが、底部から体部が丸みをもって大きく広がるため、かなり深く大型の碗と思われる。高台の形態・胎土は坏Gに類似するもので、断面は細い台形を呈し、外側に開いて貼付される。体部下位から底部は回転ヘラ削りが施される。



C

9) 土師器甕

煮沸用の長胴甕は少く、貯蔵用と考えられる胴張りの甕が多い。しかし、全体的に出土量は少く、細部の形態の違いで多様に分れてしまうため、型式分類をせずに器種別に記載することにした。

台付甕—出土量は少く、全体の器形が分るものは一個体のみである。器肉は全体的に厚く、胴部は中位が大きく張り、球状を呈する。口縁部は短く外反し、高台は低く、裾が大きく水平に開く。整形は、胴部は斜め縦方向のヘラ削り、口縁部は横撫で、台部は縦方向の撫で、裾部は横撫でである。

長胴甕—出土量は少く、図示できたものは2点である。一般的な長胴甕よりも小型であり、底部は小さく平らに削られ、胴部には脹らみがなく直線的で、口縁部が少し外反するものと、大きく外反して口唇部が水平気味に開くものとある。胴部の削りは縦方向で単位が幅広く、大雑把に削られている。

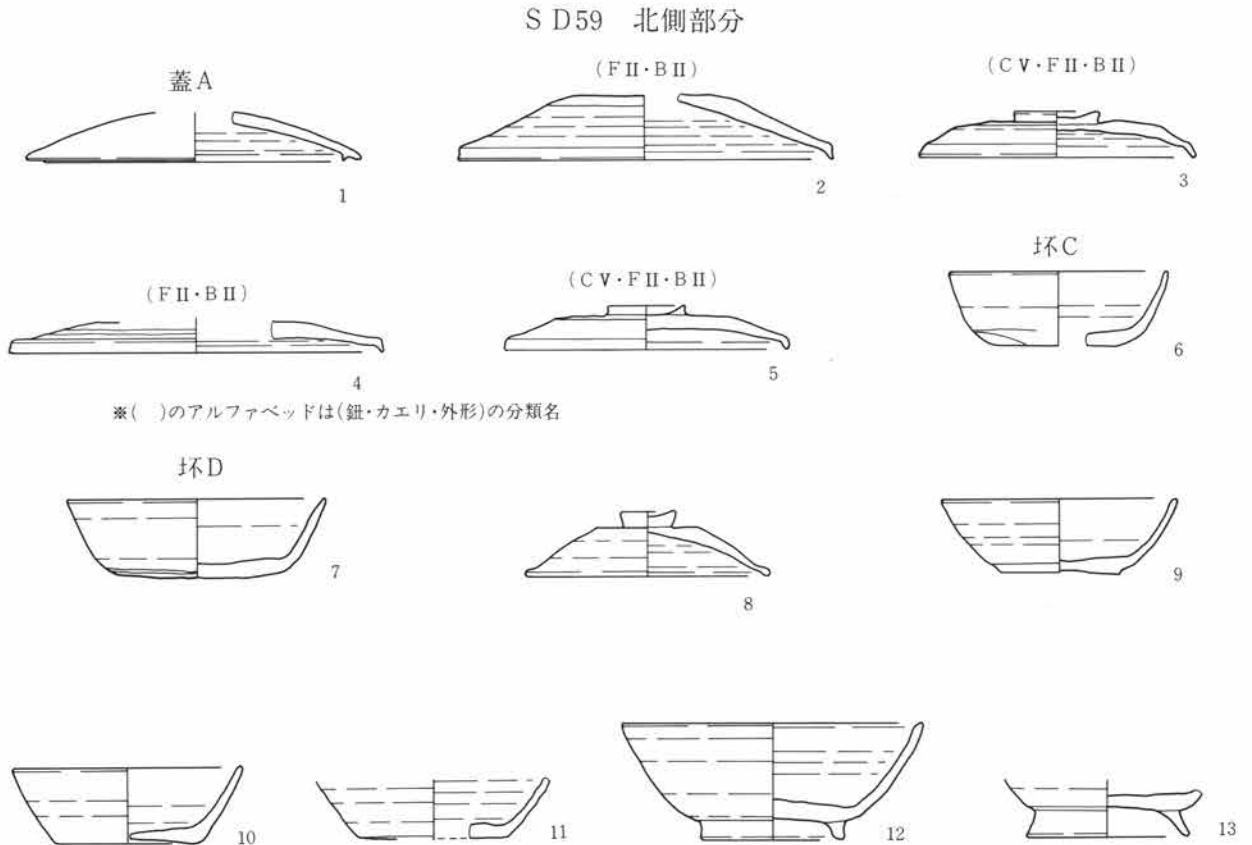
第3章 検出遺構・遺物

小形甕—出土量は比較的多いが、胴部や口縁部の形態が多様である。胴部が大きく張る球胴状のものから脹らみが僅かなもの、口縁部が短く直線的に開くもの、大きく外反するものと様々なものがある。しかし、底部まで接合するものがなく、全体の形態は不明である。整形は、頸部から胴部下位まで縦方向にヘラ削りされるもの、胴部上位は横方向にヘラ削りされるものとある。

甕（胴張り形）—出土量は多いが、底部まで接合するものはなかった。大きく胴部が張る傾向にあることは共通するが、頸部の括れる度合や、口縁部の形態にかなりバラエティーがある。比較的薄手で口縁部が長く直線的に開くもの、厚手で頸部がかなり窄まり、口縁部が短く外反するもの、口縁部が大きく外反するものと直立するものと様々である。整形は胴部が斜め縦方向に削られるもの、横方向の削りのものとある。

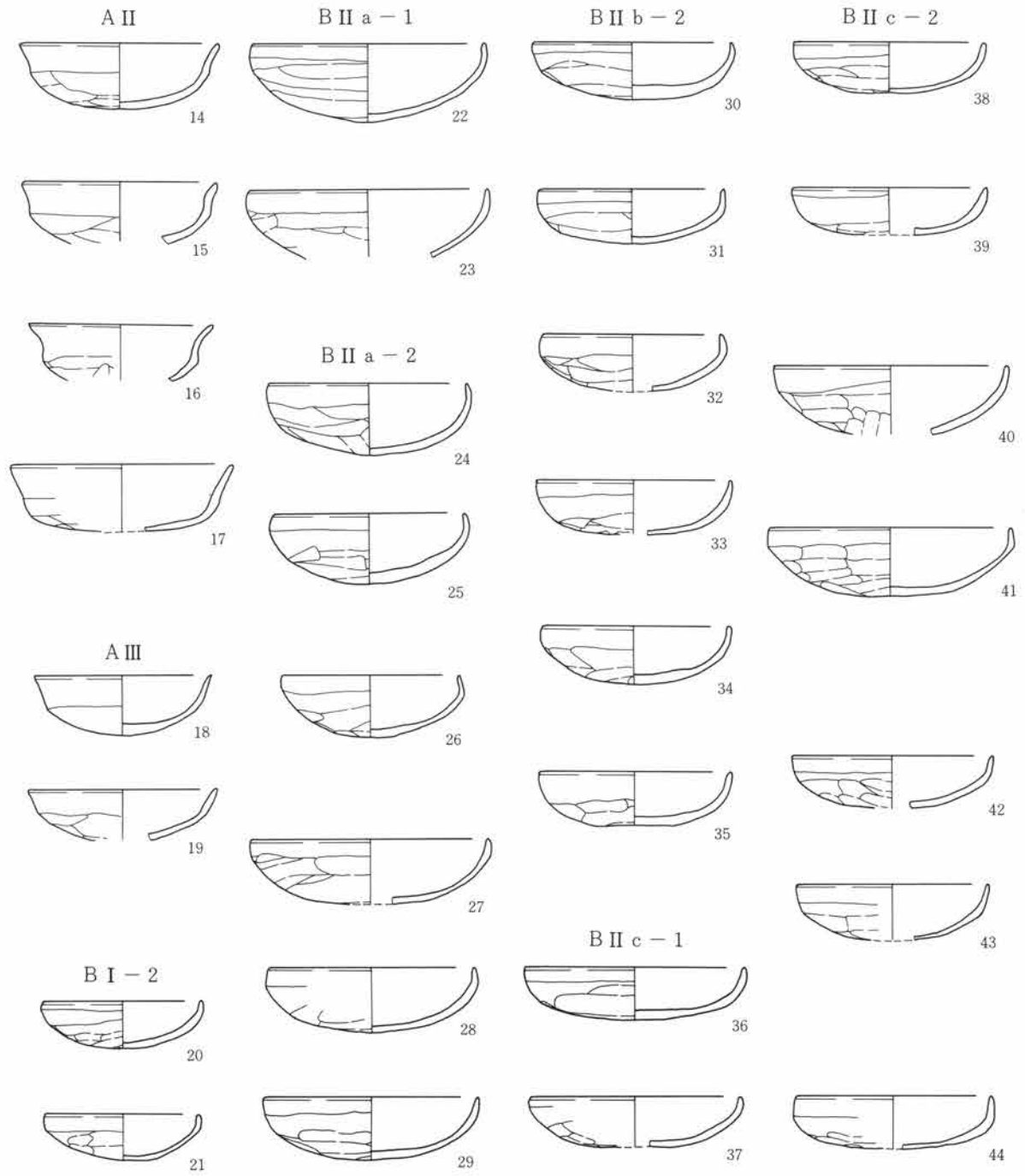
10) 須恵器甕・壺・瓶

これらの器種は完形になる個体がなく、全体的な形態を捉えられるものが少ない。出土量も器種も少く、長頸瓶・広口壺・横瓶・把手付有蓋短頸壺などが数点みられるに過ぎない。甕類は同形態の口縁部が比較的多く出土しているが、胴部以下が接合するものがない。また、大甕の口縁部が一点出土している。

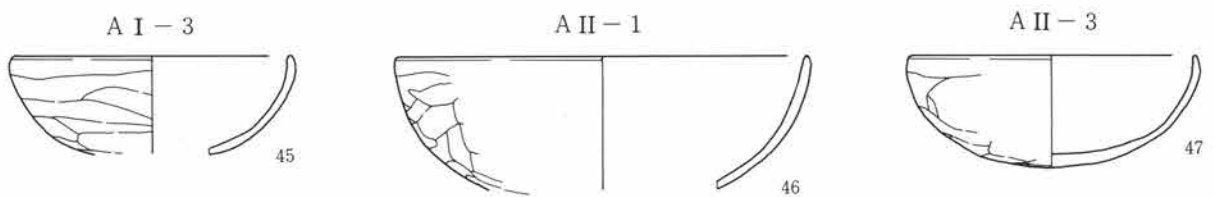


土師器坏

S D 59 中間部分

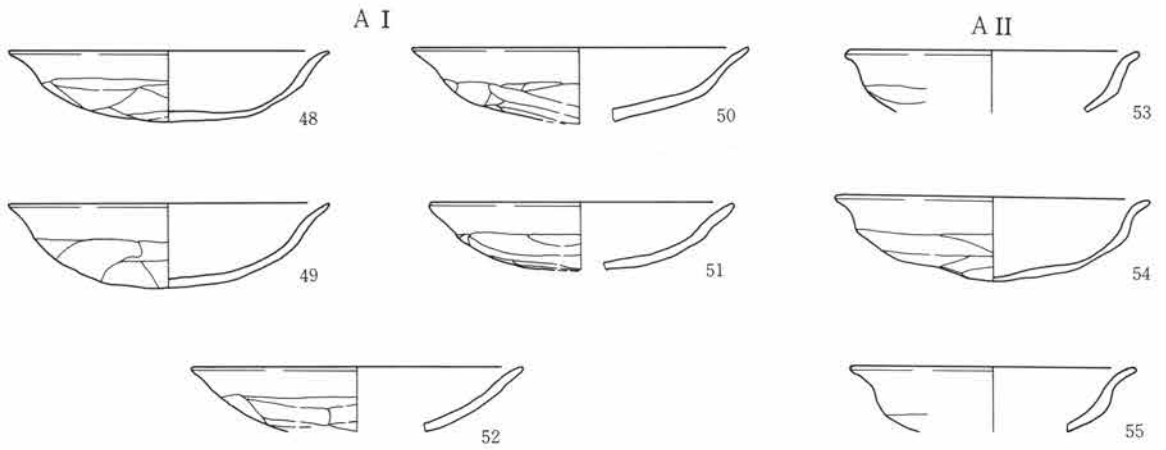


土師器碗

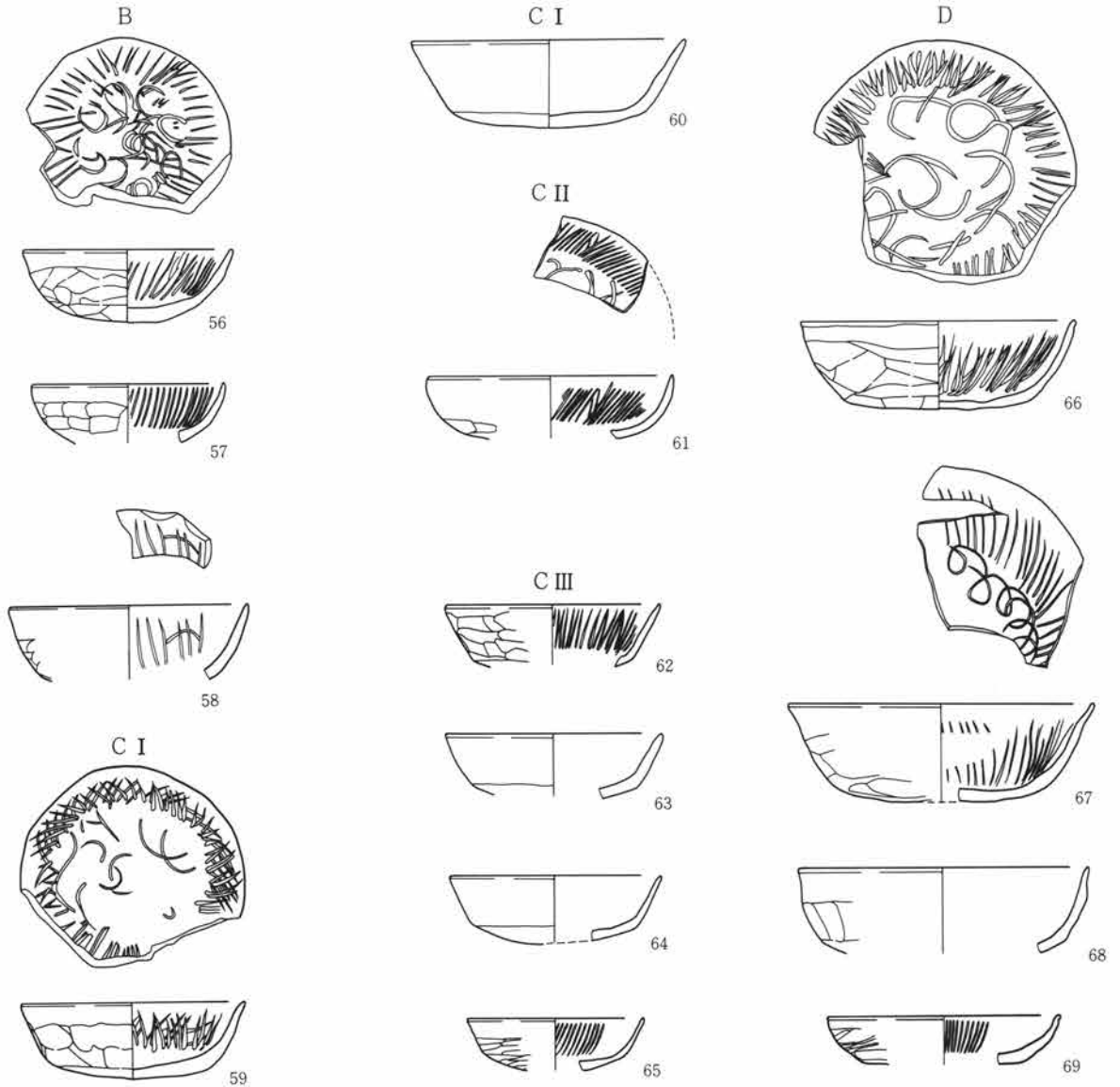


第3章 検出遺構・遺物

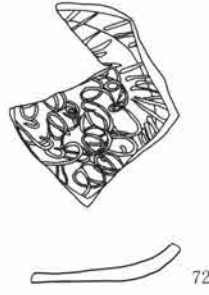
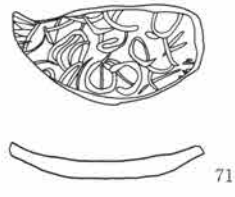
土師器皿



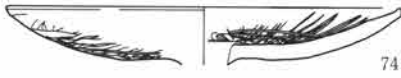
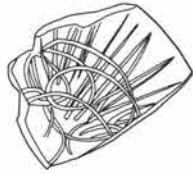
暗文土器坏



未分類



高坏

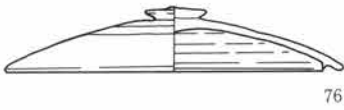


坏

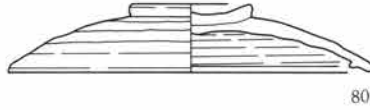


須恵器蓋

A I



(CV・BII・AI)



(CII・AII・AV)



A II



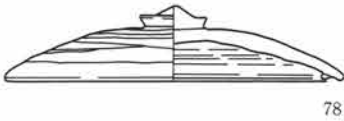
(C・AIII)



(CV)



(AIII・BIV・AI)



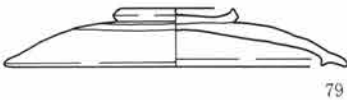
(AV・FIII・BI)



(B)



(CI・AII・AIII)



(CII・C・AIII)



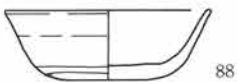
(CIX)



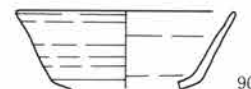
※()のアルファベットは(鈕・カエリ・外形)の分類名

須恵器坏

A



B



第3章 検出遺構・遺物

G



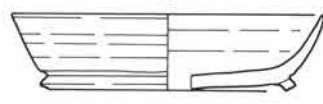
91

I I

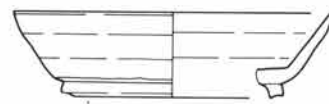


94

J



98



99

K



100



101

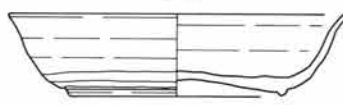


95

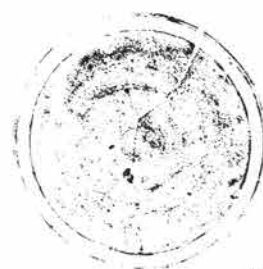
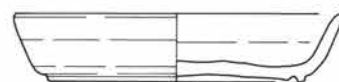


92

I II

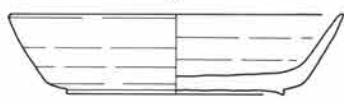


96

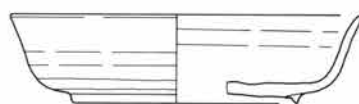


102

H



93



97

未分類

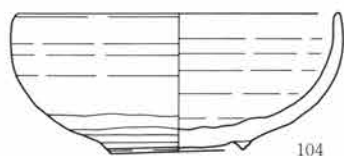


須恵器碗

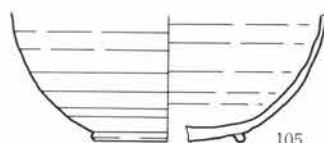


103

碗B



104



105



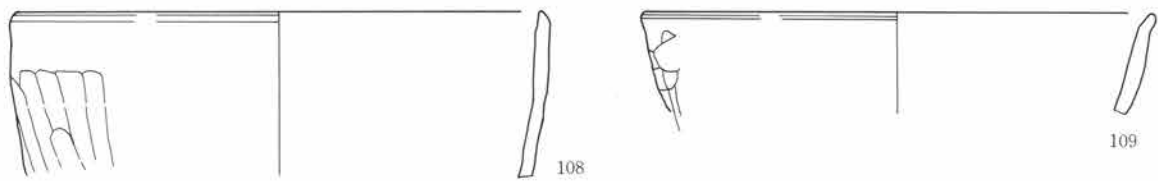
106

碗C

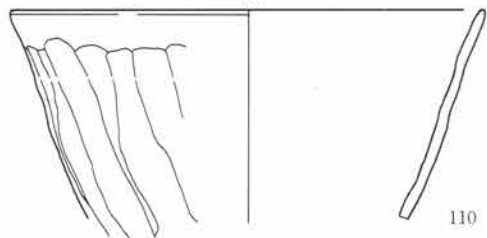


107

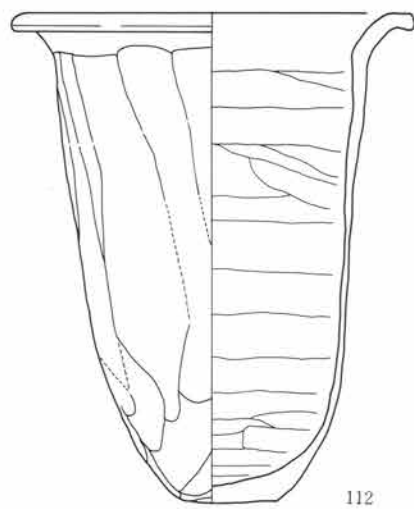
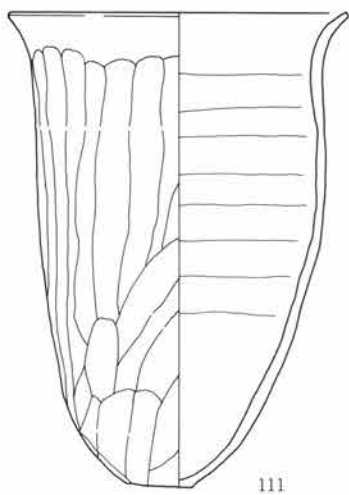
土師器鉢



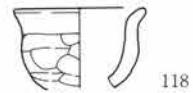
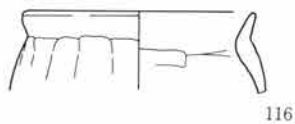
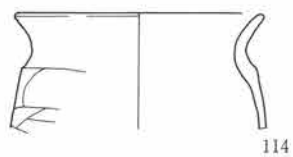
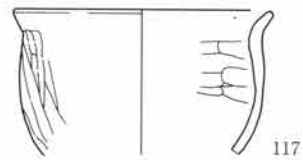
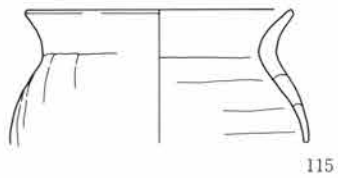
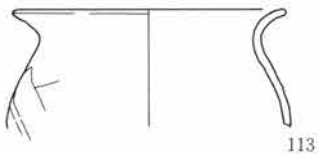
甑



土師器甕

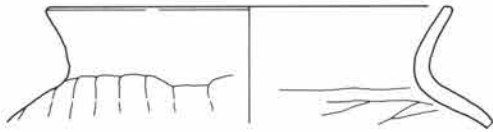


土師器小型甕

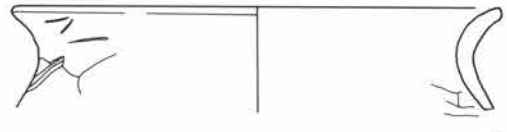


第3章 検出遺構・遺物

土師器甕



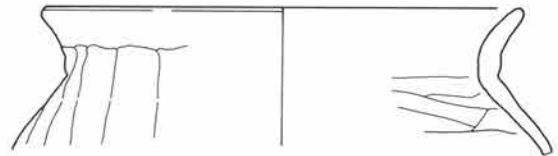
119



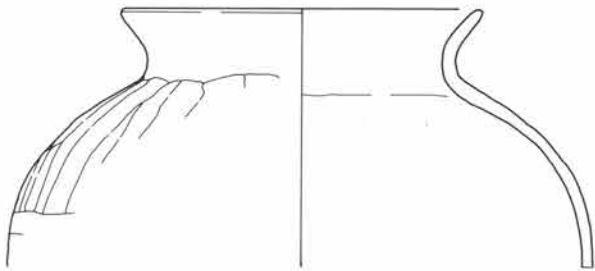
121



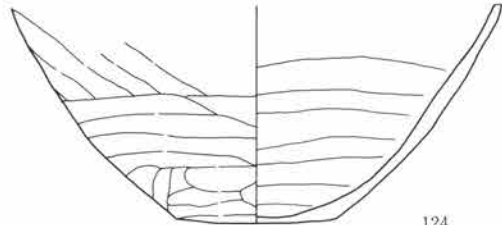
120



122



123

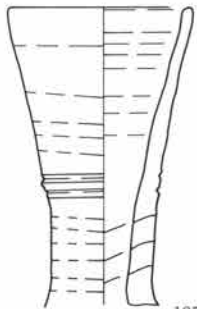


124

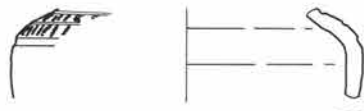
須恵器瓶・壺・甕

長頸壺

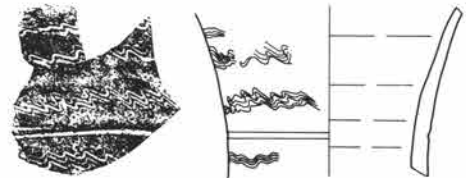
広口壺



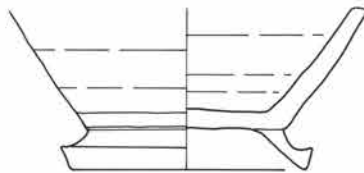
125



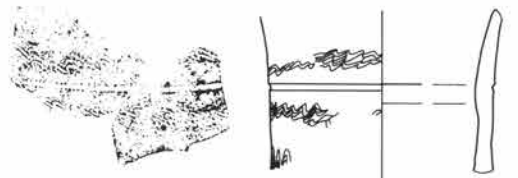
128



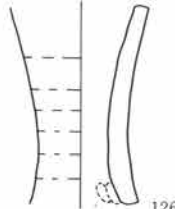
132



129



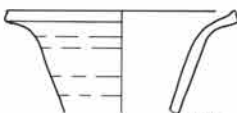
133



126



130



127

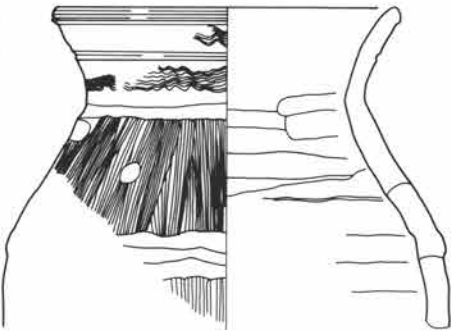


131



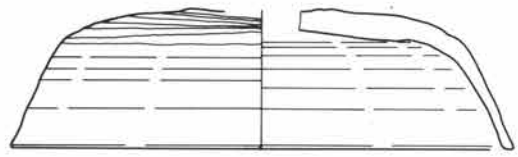
134

壺

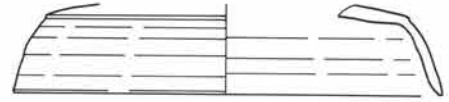


135

短頸壺蓋



136

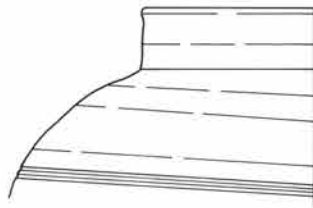


137

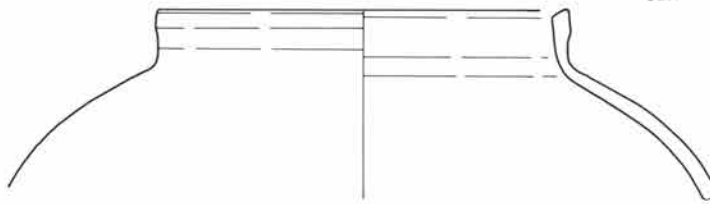


138

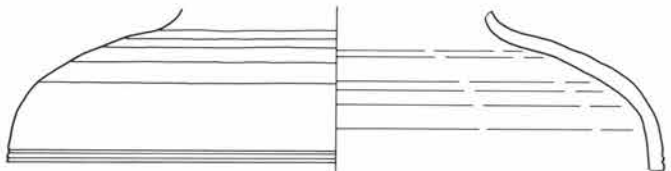
短頸壺



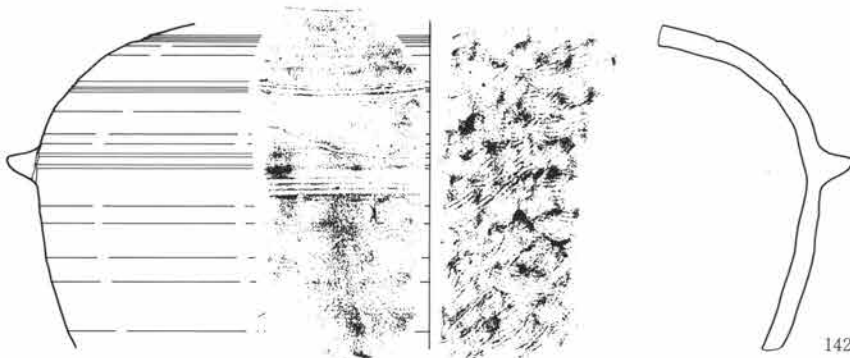
139



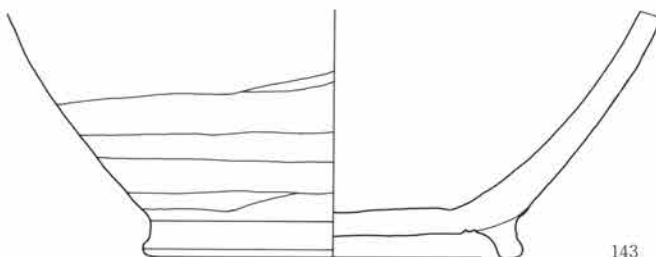
140



141

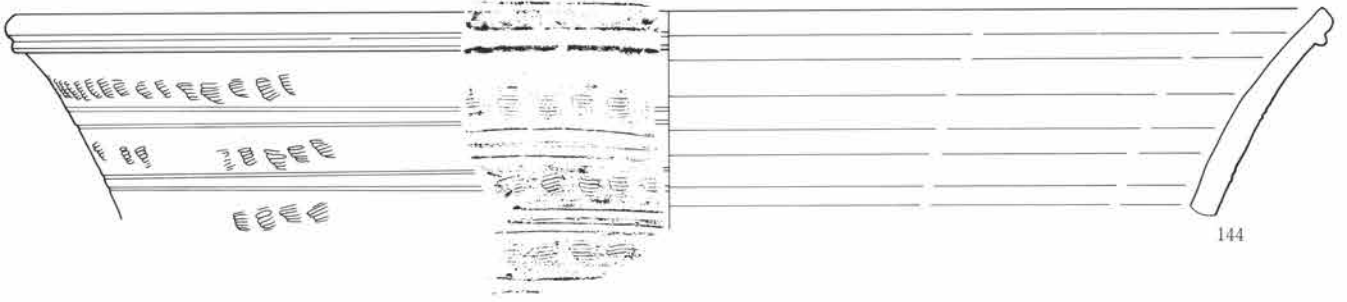


142



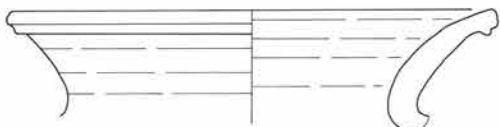
143

大甕



144

甕

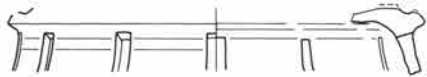


145

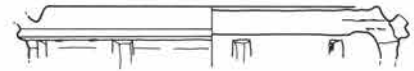
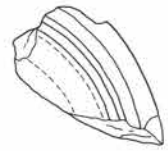


146

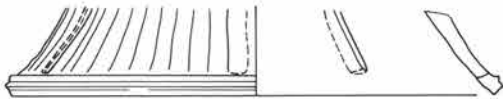
硯



147

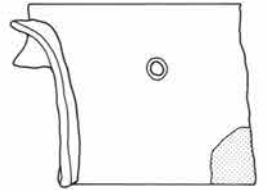
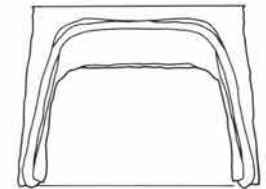


149



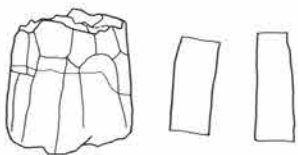
148

土製置籠

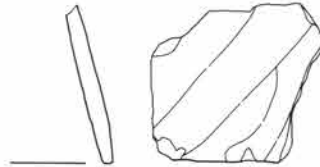


(1 : 10)

土製羽口



151



150

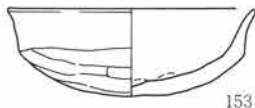
S D 59 南側部分

土師器坏

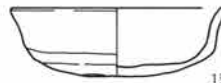
A I



152



153

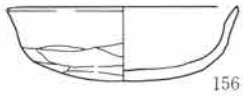


154



155

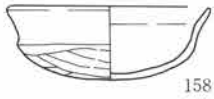
A II



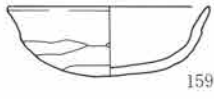
156



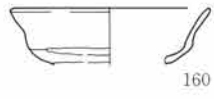
157



158

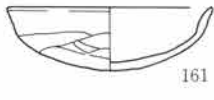


159



160

A III

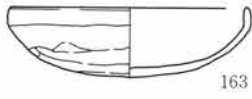


161

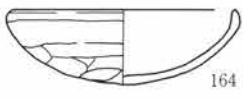


162

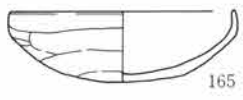
B I - 1



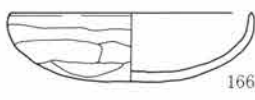
163



164

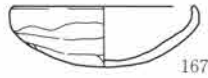


165

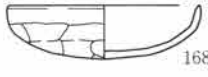


166

B I - 2



167

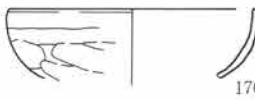


168

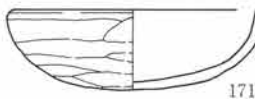
B II b - 1



169



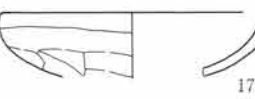
170



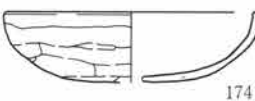
171



172

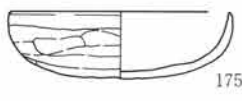


173

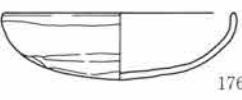


174

B II b - 2



175

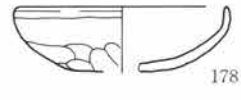


176

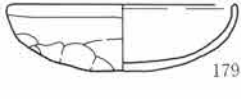
B II b - 2



177



178



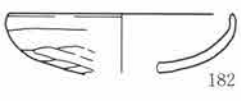
179



180



181



182



183

B II c - 1

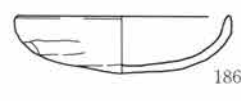


184

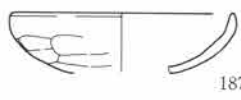


185

B II c - 2

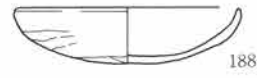


186



187

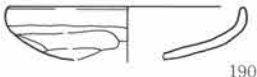
B II c - 2



188

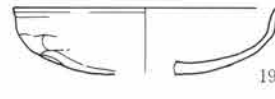


189

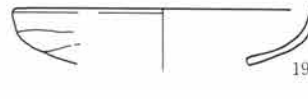


190

B III - 1



191



192

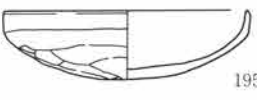


193



194

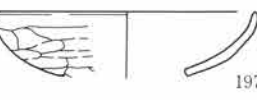
B III - 2



195

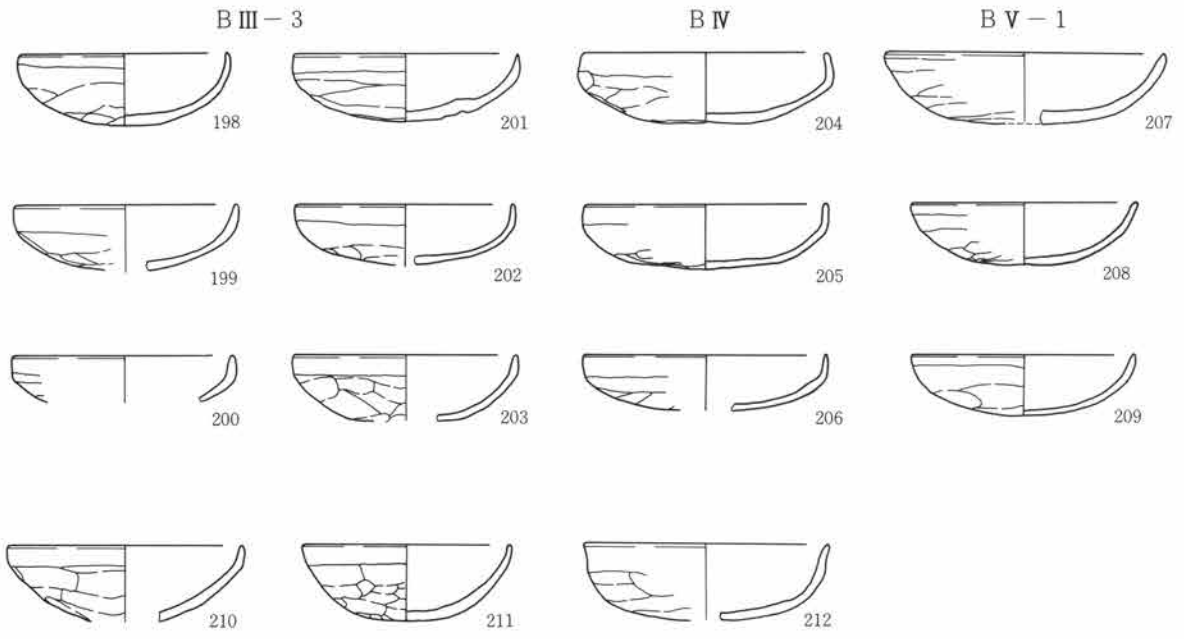


196

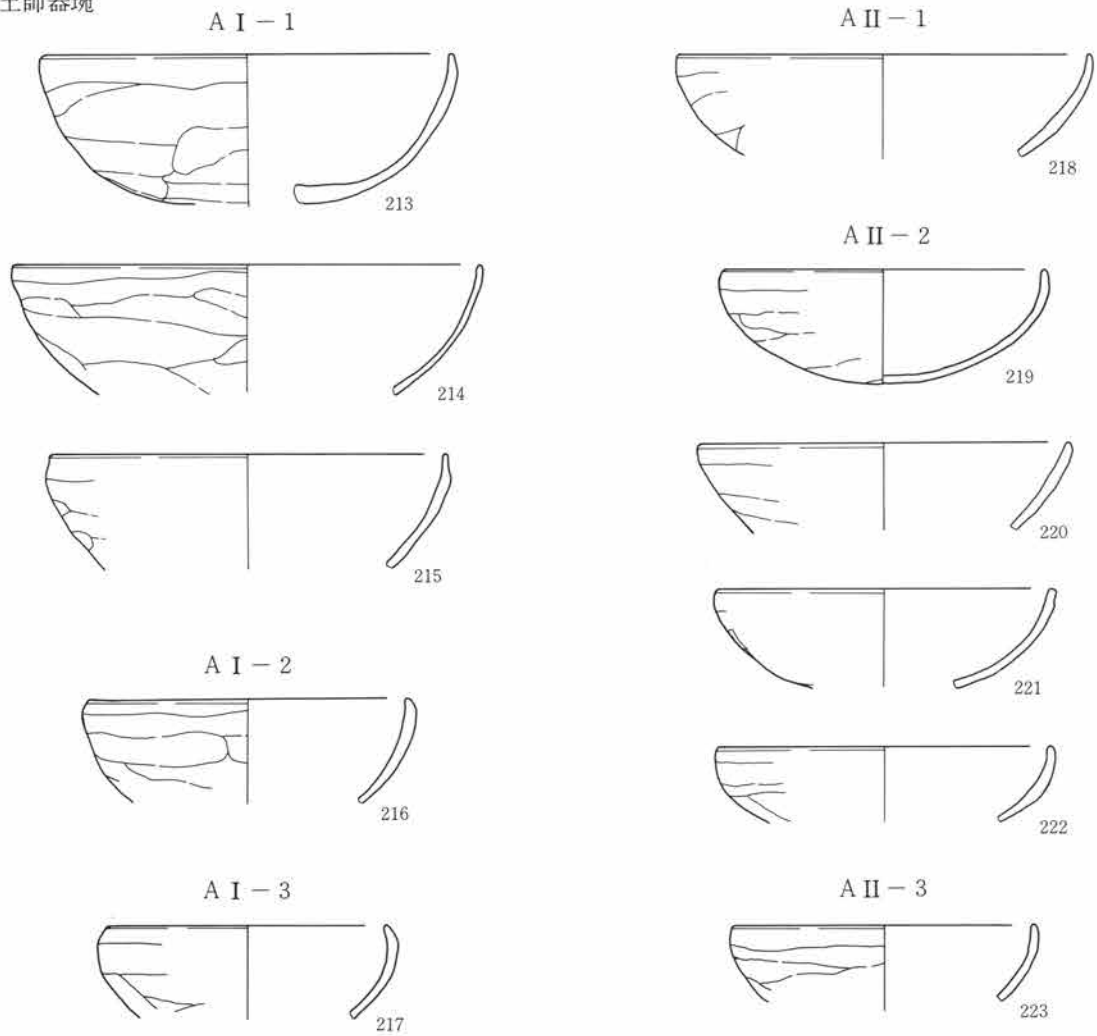


197

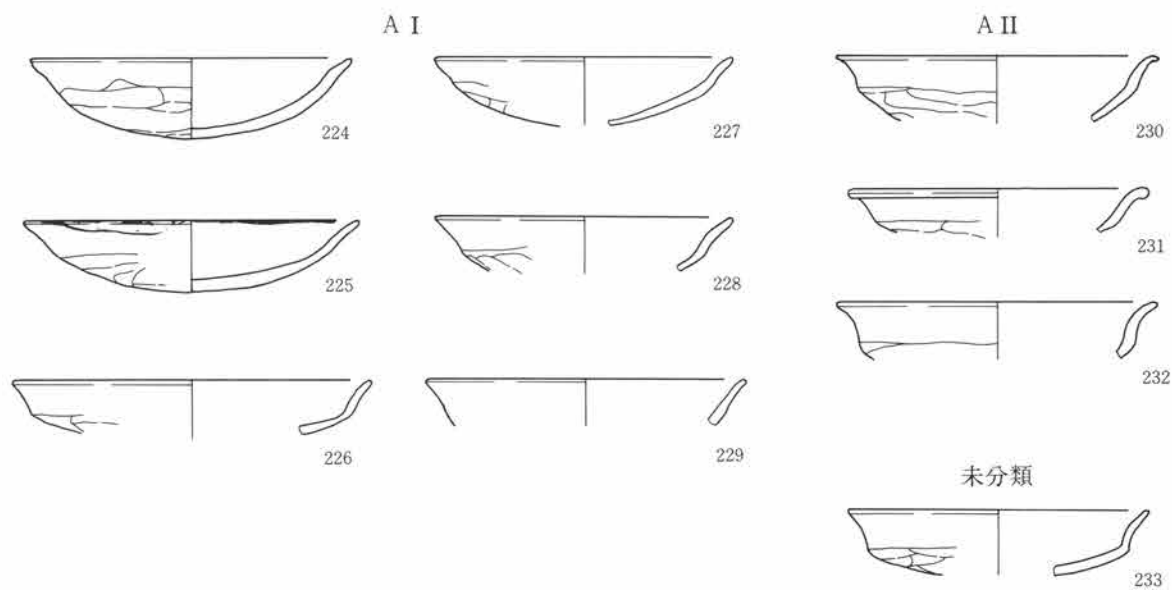
第3章 検出遺構・遺物



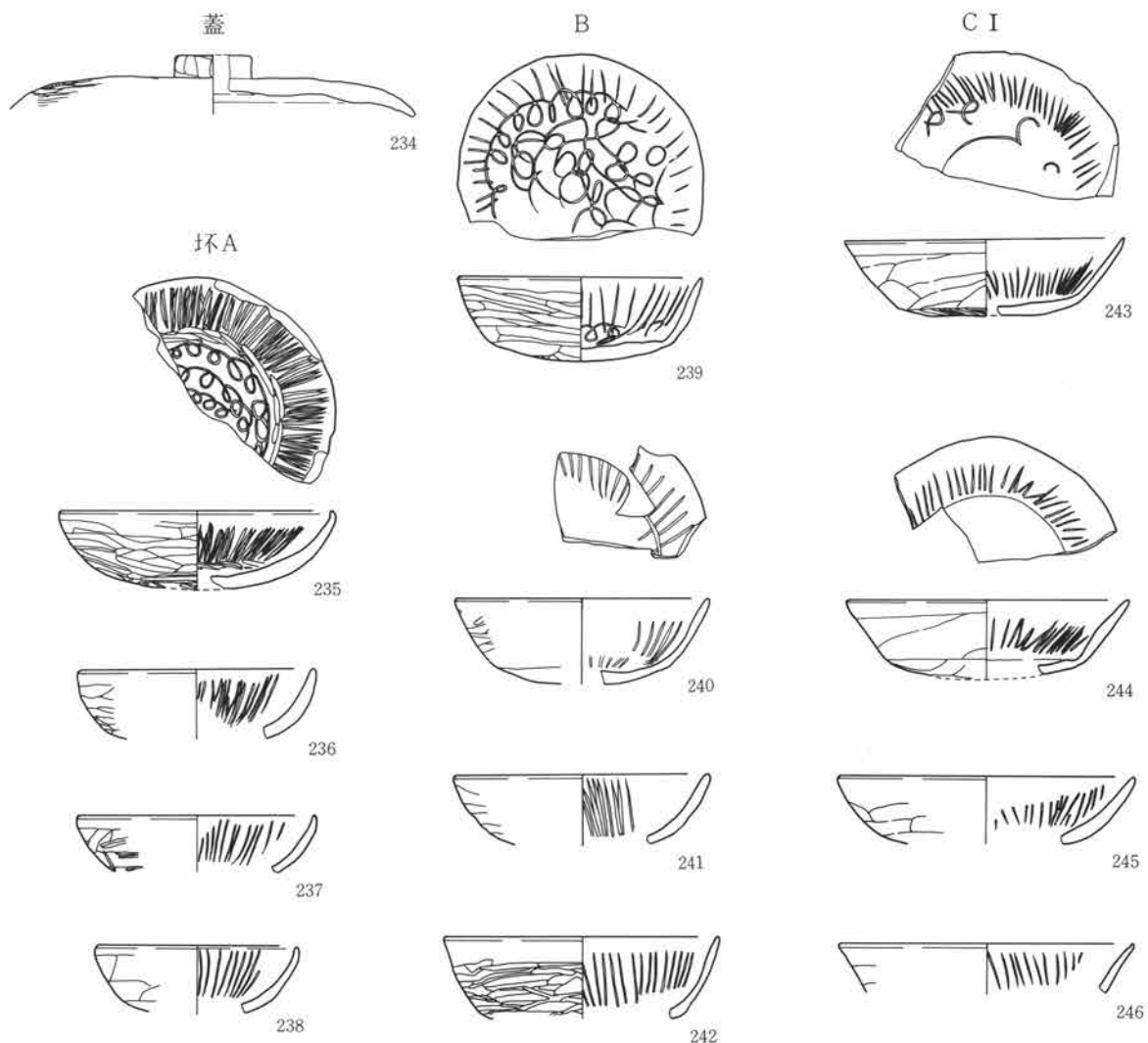
土師器境

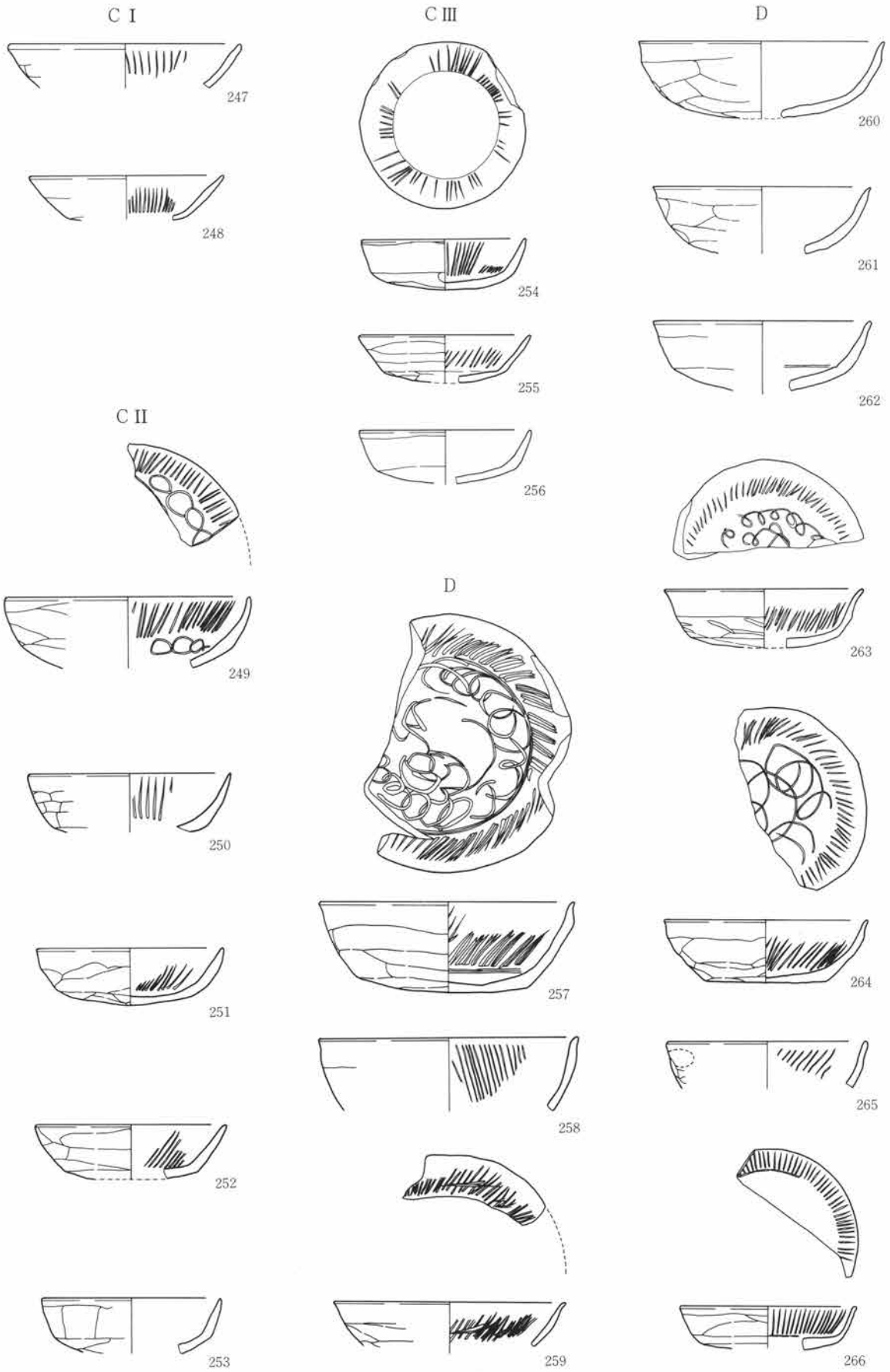


土師器皿

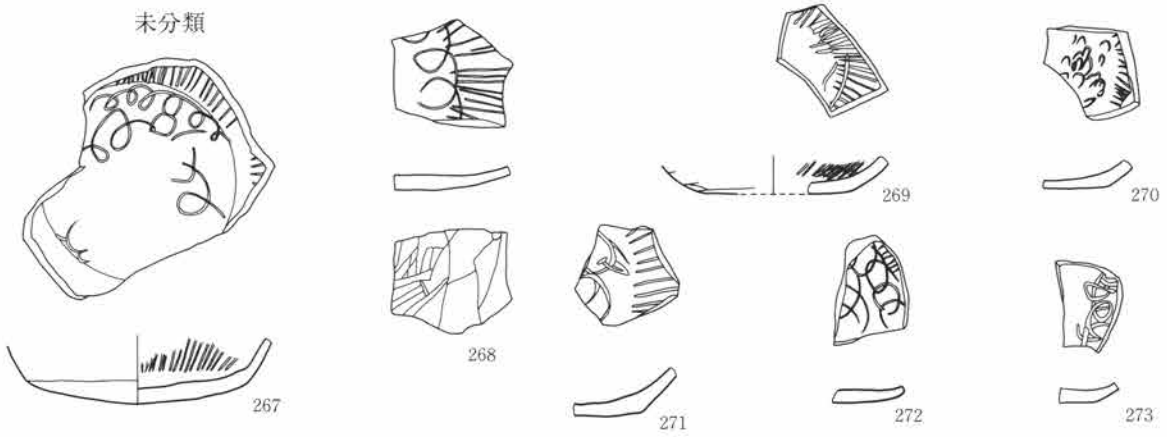


暗文土器

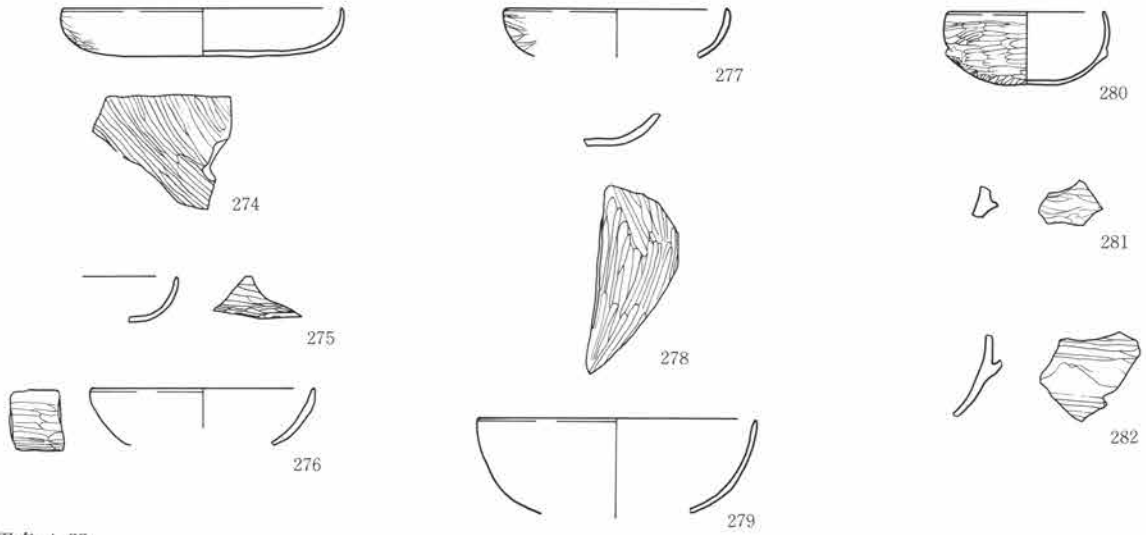




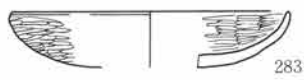
未分類



畿内産土師器



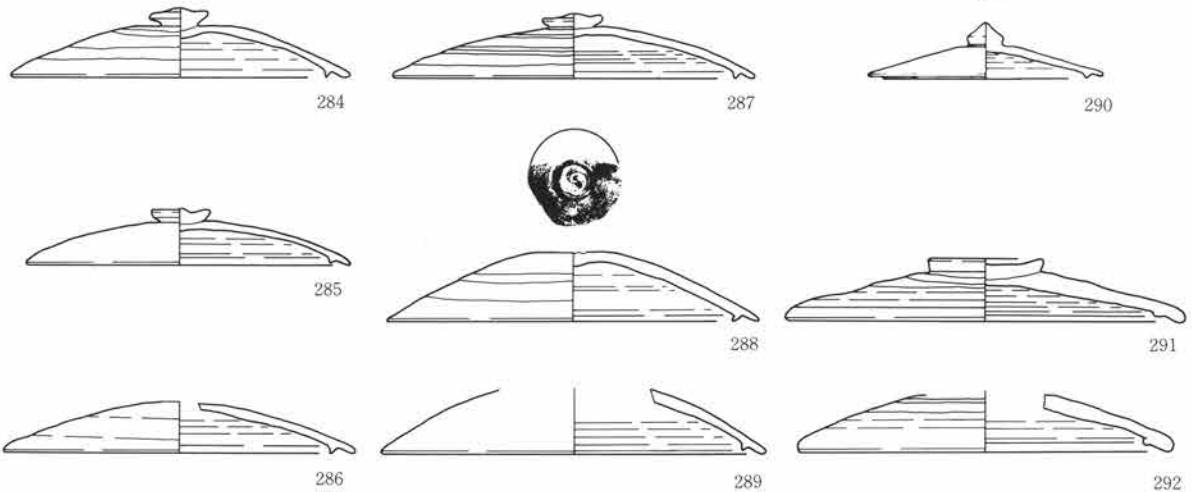
黑色土器



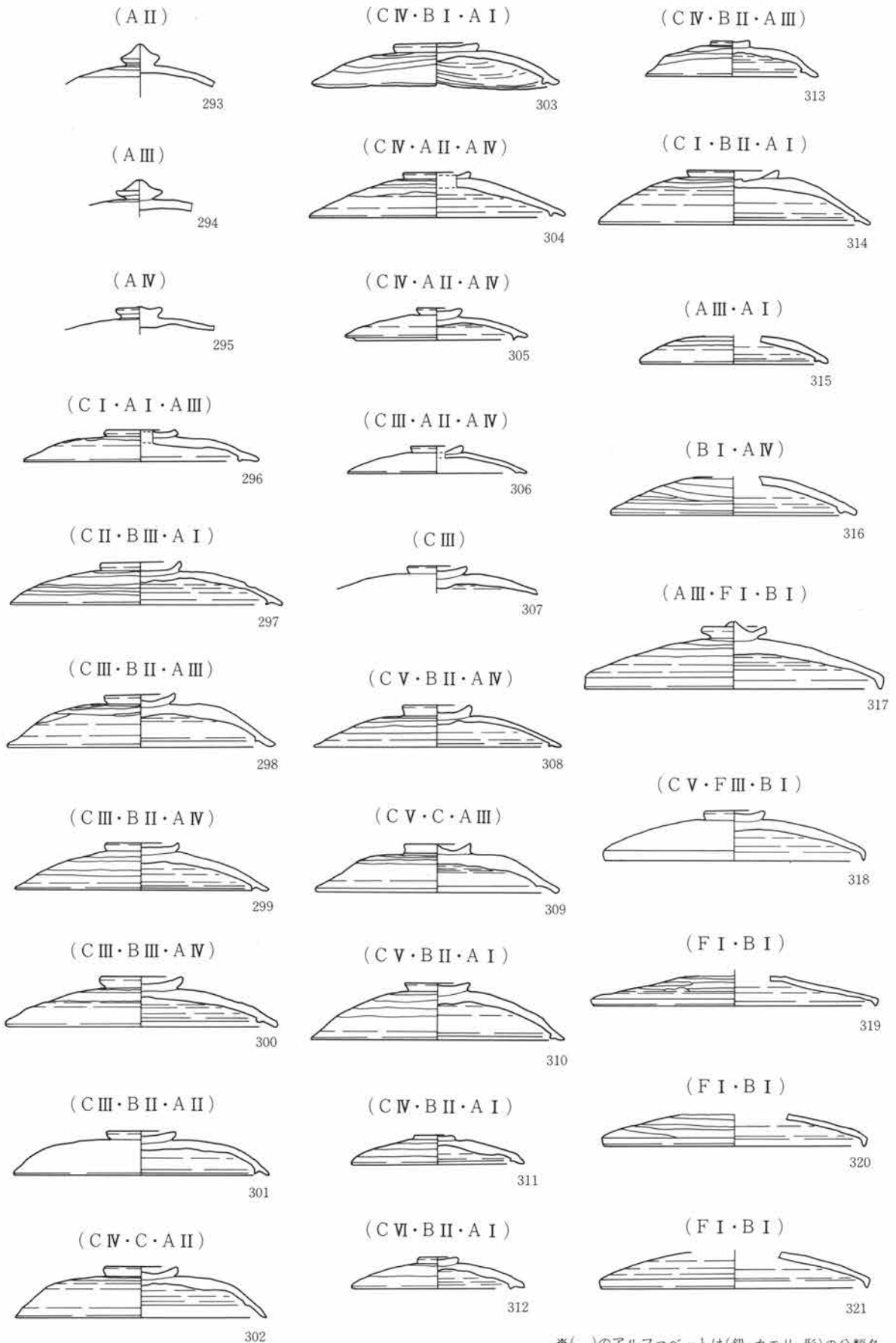
須恵器蓋

A I

A II



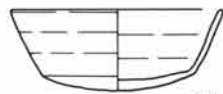
第3章 検出遺構・遺物



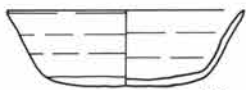
※()のアルファベットは(鈕・カエリ・形)の分類名

須恵器坏

B



322



323



324

C



325



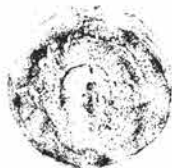
326

E



327

F

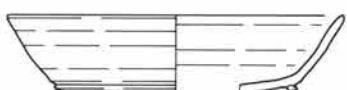


328

G



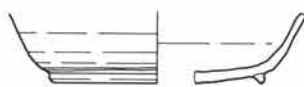
329



330

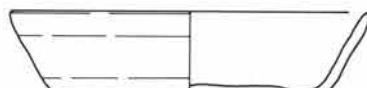


331

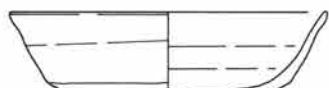


332

H



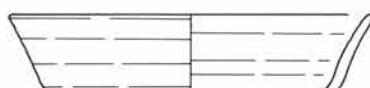
333



334



335

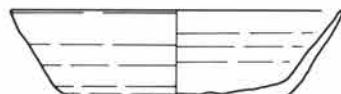


336



337

I I

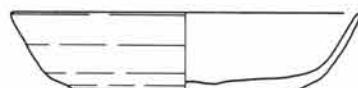


338

I II



339

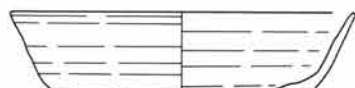


340



341

I III



342



343



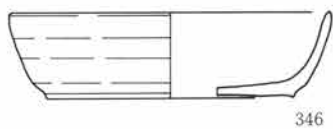
344

J



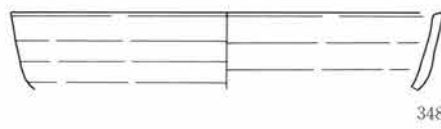
345

N



346

P

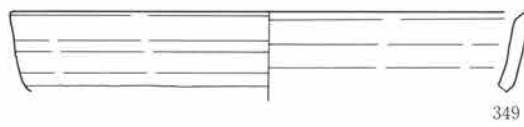


348

O

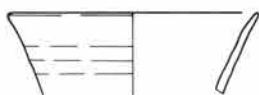


347

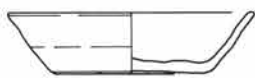


349

未分類



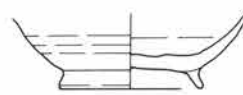
350



351



352



353

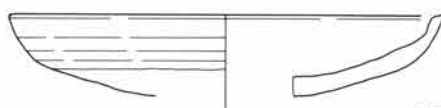


須恵器碗・A



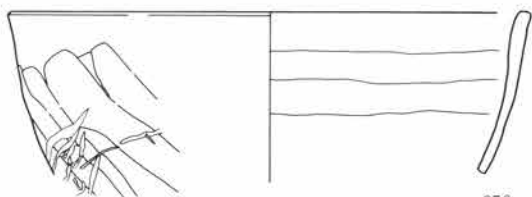
354

須恵器皿

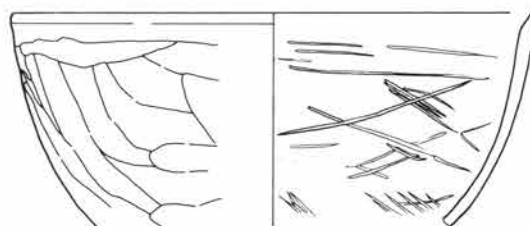


355

土師器鉢

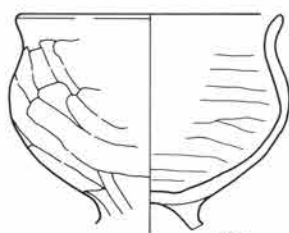


356

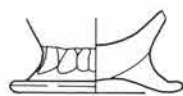


357

土師器小型台付甕

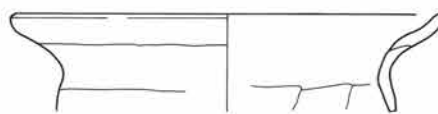


358



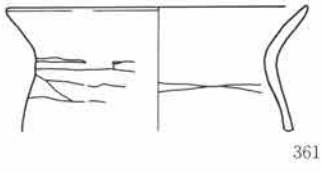
359

土師器長胴甕

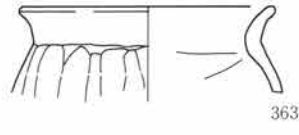


360

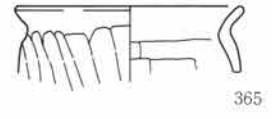
土師器小型甕



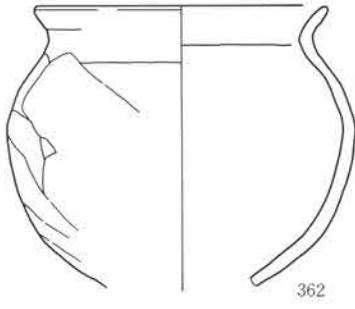
361



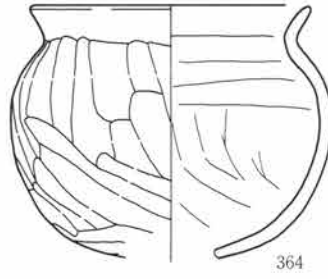
363



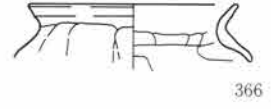
365



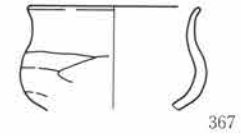
362



364

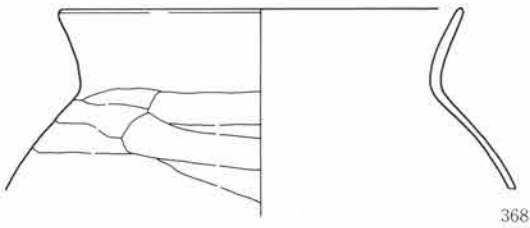


366

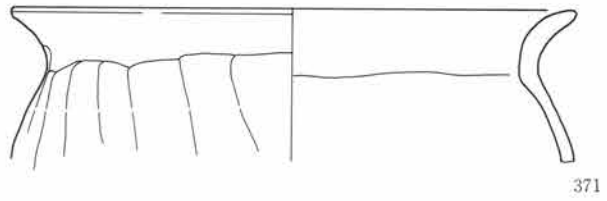


367

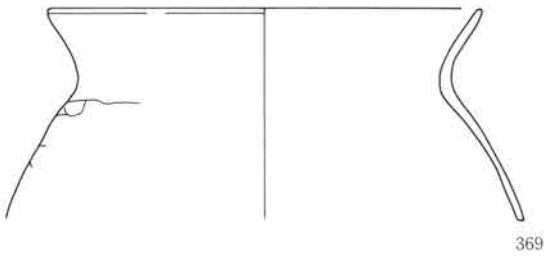
土師器甕



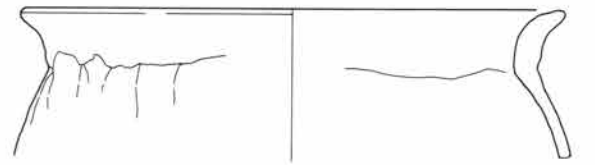
368



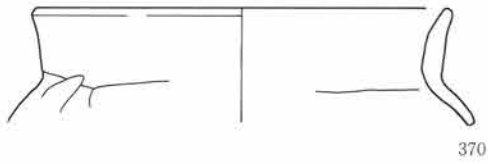
371



369



372

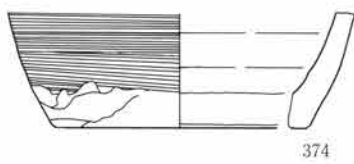


370

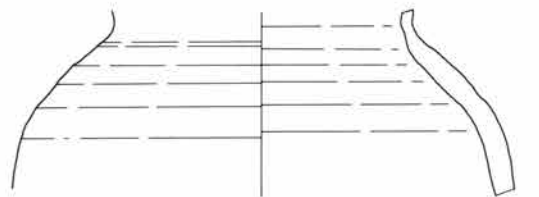


373

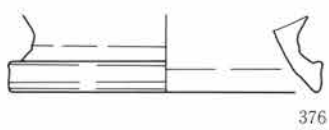
須恵器瓶・壺・甕



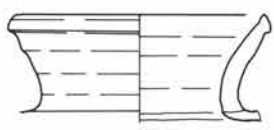
374



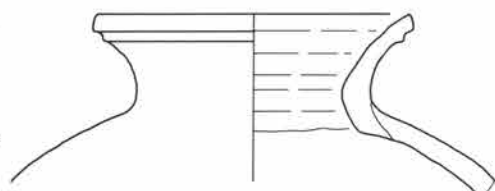
375



376

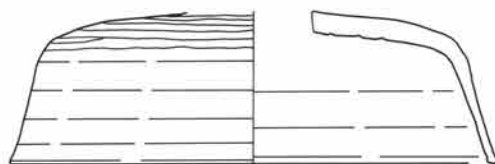


377

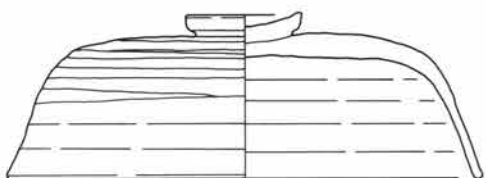


378

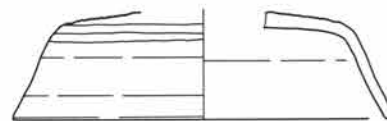
短頸壺



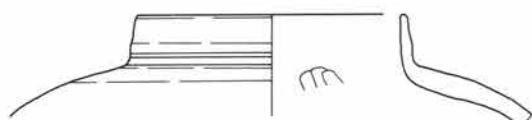
380



379



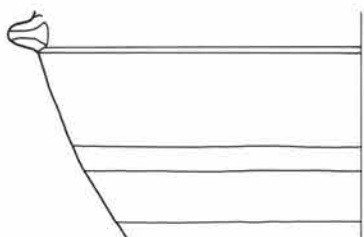
381



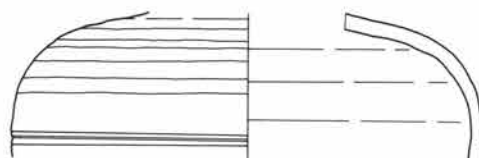
383



382

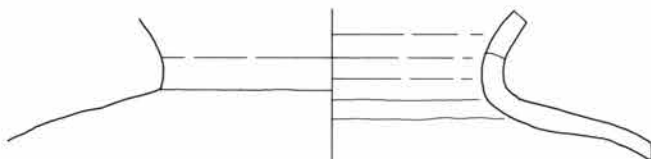


384



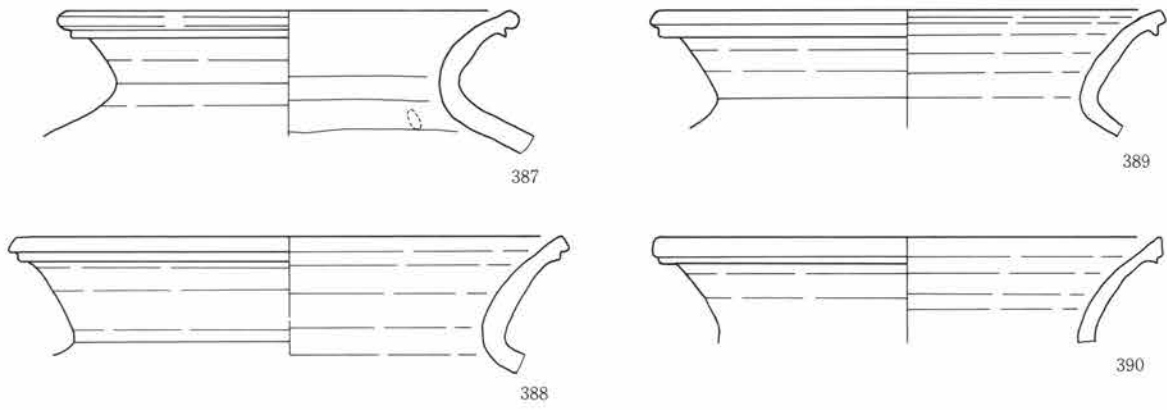
385

甕

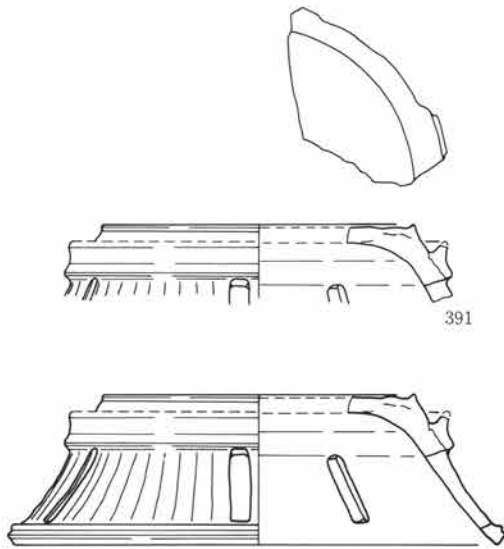


386

甕

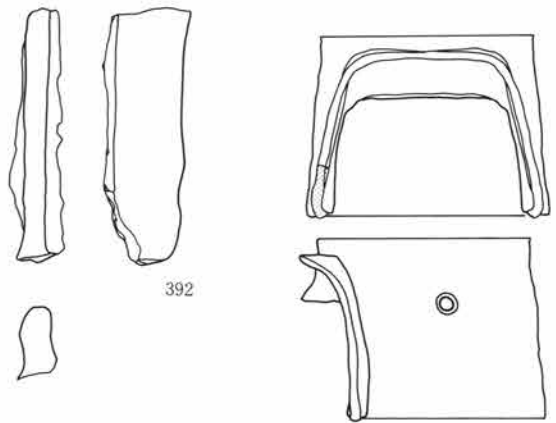


硯



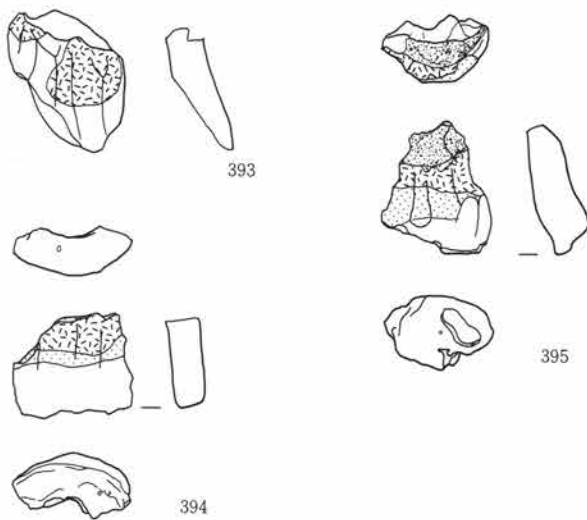
148・391 (同一個体)の復元図

土製竈



スクリーントーン部分(1:10)

羽口

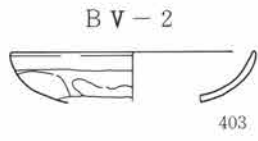
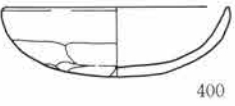
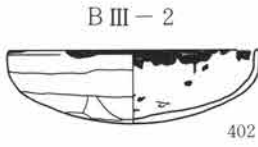
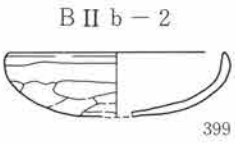
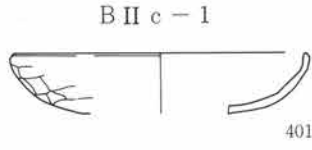
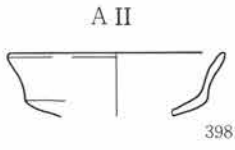


用途不明土製品

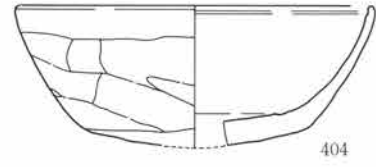


S D 46

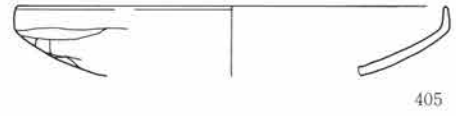
土師器坏



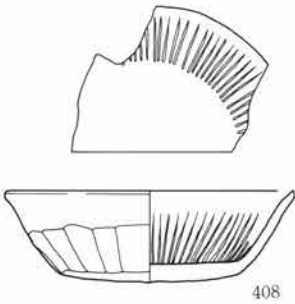
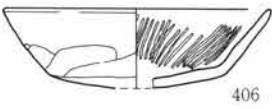
土師器碗 B



土師器皿 未分類



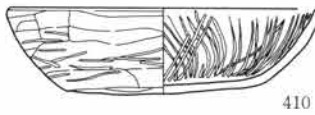
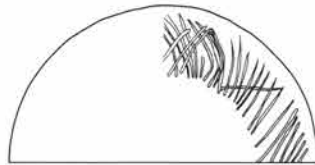
暗文土器坏



C I



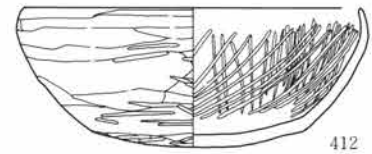
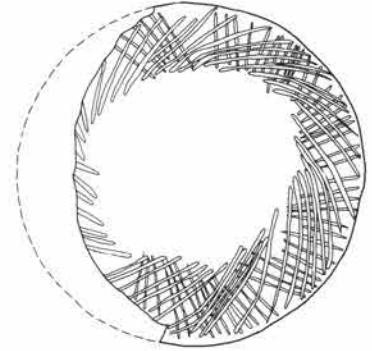
C II



C III



暗文土器碗



暗文土器皿



須恵器蓋

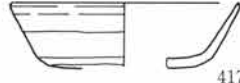


414

D



E



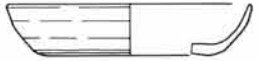
417

F



419

須恵器坏



415



416



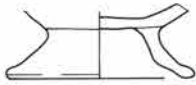
418



420

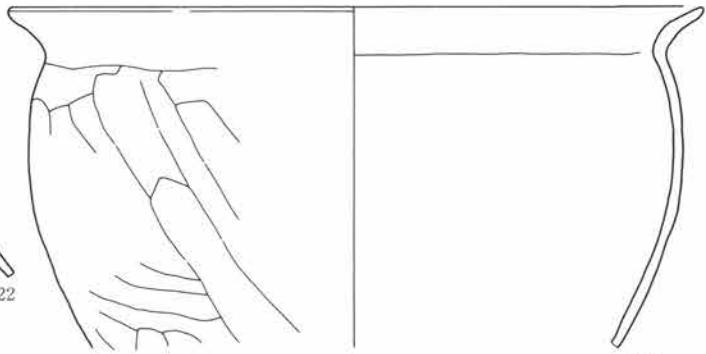
土師器甕

台付甕

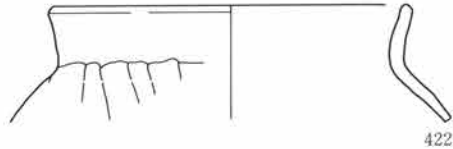


421

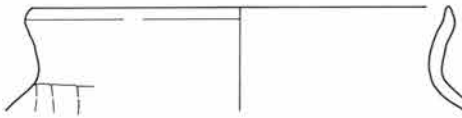
甕



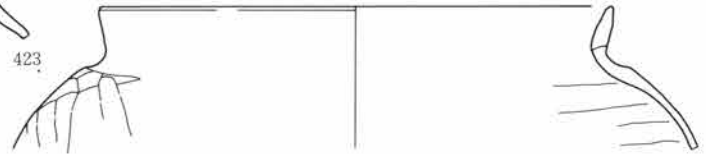
424



422



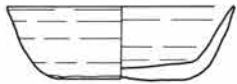
423



425

北側・中間部分接合

須恵器坏 未分類



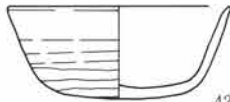
426



中間・南側部分接合

須恵器坏

A

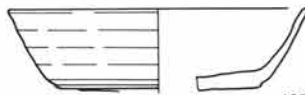


427

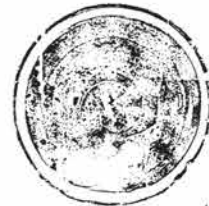
L



I II



428



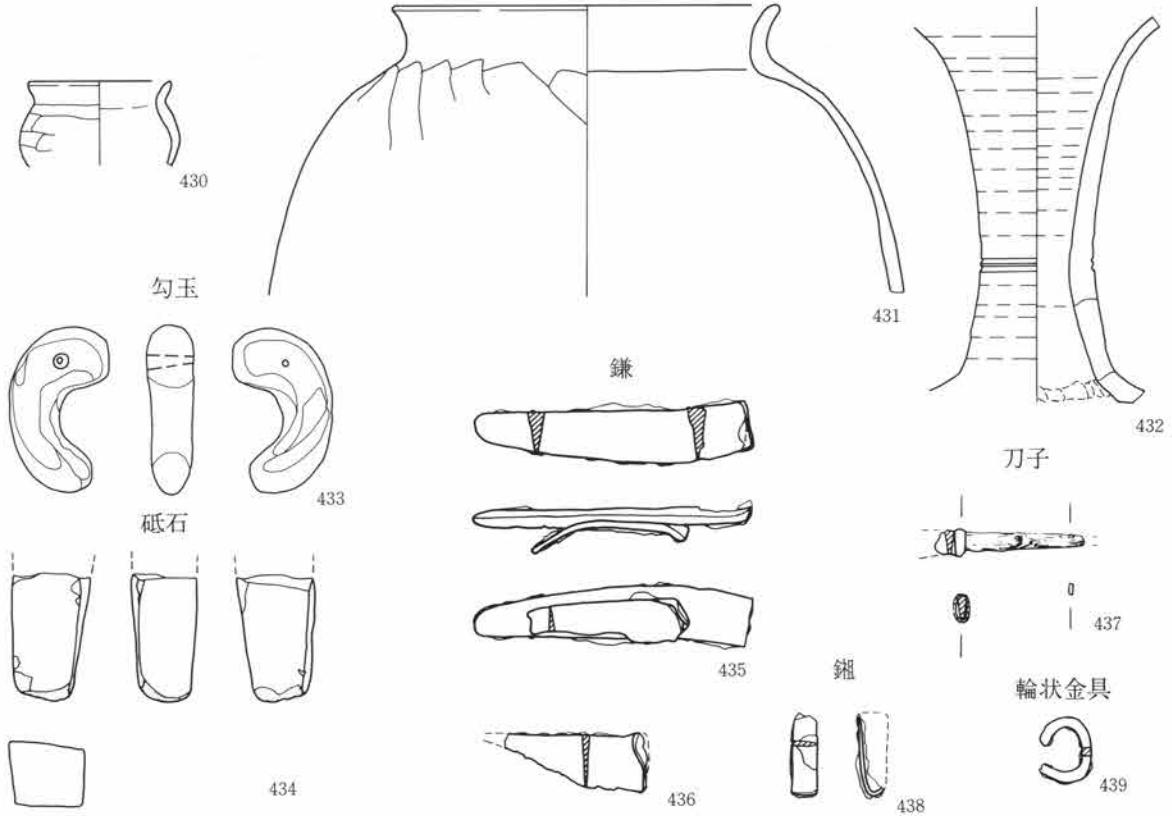
429

第3章 検出遺構・遺物

土師器小形甕

土師器甕

須惠器長頸壺



No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
1	一括	須惠器	蓋	1/8	17.8・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
2	上層	須惠器	蓋	小片	19.8・—・—	粗砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
3	上層	須惠器	蓋	1/4	14.8・4.6・2.4	細砂粒、還元焰、灰白色	
4	上層	須惠器	蓋	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
5	上層	須惠器	蓋	1/3	14.8・4.0・2.3	粗砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
6	上層	須惠器	坏	1/10	11.6・6.5・3.9	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
7	上層	須惠器	坏	1/3	13.8・9.0・4.1	細砂粒・褐色鉱物粒、還元焰、灰白色	
8	上層	須惠器	蓋	1/4	13.0・3.0・3.4	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
9	上層	須惠器	坏	1/4	12.4・6.4・3.9	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰白色	
10	一括	須惠器	坏	1/6	12.0・7.6・4.0	粗砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰白色	
11	一括	須惠器	坏	1/6	—・8.0・—	細砂粒、還元焰軟質、灰色	
12	上層	須惠器	碗	1/4	16.0・8.4・6.2	粗砂粒、還元焰、灰色	
13	一括	須惠器	碗	1/3	—・8.8・—	粗砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
14	上層	土師器	坏	3/5	12.4・11.0・4.0	細砂粒・雲母、普通、におい赤褐色	
15	上層	土師器	坏	1/8	12.0・11.2・—	粗砂粒、普通、橙色	
16	一括	土師器	坏	1/3	11.4・9.6・—	細砂粒、円礫、軟質、橙色	
17	中層	土師器	坏	1/6	13.8・11.0・4.1	細砂粒・雲母、普通、橙色	
18	上層	土師器	坏	1/4	11.0・9.4・3.7	粗砂粒・雲母、普通、橙色	

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
19	上層	土師器	坏	1/6	11.8・10.4・—	細砂粒・雲母、普通、橙色	
20	最下層	土師器	坏	1/3	10.0・9.0・2.9	細砂粒・雲母、硬質、橙色	
21	中層	土師器	坏	完形	9.7・9.4・2.9	粗砂粒、普通、橙色	
22	上・下	土師器	坏	5/6	14.6・14.2・4.9	粗砂粒、普通、橙色	
23	中層	土師器	坏	1/10	15.0・—・—	細砂粒、普通、橙色	
24	上層	土師器	坏	1/2	12.4・11.6・4.4	細砂粒・雲母、普通、橙色	
25	上層	土師器	坏	1/2	11.8・10.2・4.3	細砂粒・雲母、軟質、橙色	
26	一括	土師器	坏	3/4	11.0・10.4・3.8	粗砂粒、普通、橙色	
27	中層	土師器	坏	1/4	14.8・14.6・4.0	細砂粒・雲母、普通、橙色	
28	上層	土師器	坏	1/6	13.0・10.0・4.0	粗砂粒・褐色鉍物粒・雲母、やや軟質、橙色	
29	下層	土師器	坏	2/5	13.4・11.4・3.9	粗砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
30	上層	土師器	坏	5/6	12.4・11.8・3.5	細砂粒、普通、橙色	
31	上層	土師器	坏	2/3	11.4・11.0・3.5	細砂粒、普通、橙色	
32	上層	土師器	坏	1/4	10.9・—・—	砂粒、普通、橙色	
33	中層	土師器	坏	1/3	12.2・9.8・3.3	細砂粒、普通、橙色	
34	下層	土師器	坏	3/5	11.6・11.2・3.6	粗砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
35	中・下・最	土師器	坏	1/4	12.0・10.6・3.3	細砂粒・雲母、普通、橙色	
36	下層	土師器	坏	1/3	13.8・11.8・3.2	細砂粒・雲母、普通、にぶい褐色	
37	上層	土師器	坏	1/5	13.0・11.6・3.1	粗砂粒、普通、橙色	
38	上層	土師器	坏	1/5	11.6・10.8・3.2	粗砂粒・雲母、普通、橙色	
39	中層	土師器	坏	1/6	12.0・11.0・—	粗砂粒、普通、橙色	
40	上層	土師器	坏	1/4	14.6・14.0・—	細砂粒、普通、橙色	
41	中層	土師器	坏	1/4	15.0・6.8・4.2	細砂粒・雲母、硬質、橙色	
42	中層	土師器	坏	1/2	12.4・11.4・3.2	細砂粒・石英、普通、橙色	
43	上層	土師器	坏	1/8	12.0・11.0・—	粗砂粒、普通、橙色	
44	上層	土師器	坏	1/8	12.0・11.0・3.3	細砂粒・雲母、普通、橙色	
45	中層	土師器	坏	1/6	14.8・8.0・—	細砂粒・石英・雲母、普通、橙色	
46	下層	土師器	碗	1/10	22.0・—・—	細砂粒・雲母、硬質、橙色・暗赤褐色	
47	上・中	土師器	坏	1/3	15.0・—・5.8	粗砂粒、普通、橙色	
48	上・中	土師器	坏	完形	17.0・13.6・3.7	細砂粒、普通、橙色	
49	中層	土師器	坏	完形	17.2・14.5・4.5	細砂粒、普通、橙色	
50	下層	土師器	坏	1/3	18.0・14.0・—	粗砂粒、普通、橙色	
51	下層	土師器	坏	2/5	16.2・13.2・—	粗砂粒、普通、橙色	
52	上層	土師器	坏	1/4	17.6・12.4・—	細砂粒、普通、にぶい橙色	
53	上層	土師器	坏	1/10	15.4・13.6・—	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
54	上層	土師器	坏	完形	16.8・14.5・4.5	粗砂粒・雲母、やや軟質、橙色	
55	上層	土師器	坏	1/8	15.2・—・—	細砂粒、普通、橙色	
56	下層	土師器	坏	2/3	11.8・8.8・4.1	細砂粒・褐色鉍物粒、やや軟質、橙色	
57	中層	土師器	坏	1/6	10.8・6.0・—	細砂粒・やや軟質、橙色	
58	下層	土師器	坏	小片	17.0・—・—	細砂粒、普通、橙色	

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
59	下層	土師器	坏	4/5	12.7・8.8・4.3	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、にぶい橙色	
60	上層	土師器	坏	1/2	15.4・11.0・4.9	粗砂粒・褐色鉍物粒、軟質、橙色	
61	中層	土師器	坏	1/10	13.8・12.2・-	細砂粒、普通、橙色	
62	下層	土師器	坏	1/10	16.2・9.0・-	細砂粒、普通、にぶい橙色	
63	中層	土師器	坏	1/3	12.2・9.4・-	粗砂粒、軟質、橙色	
64	上層	土師器	坏	1/2	12.0・9.0・3.7	細砂粒・褐色鉍物粒、軟質、橙色	
65	中層	土師器	坏	1/10	10.0・8.0・-	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
66	下層	土師器	埴	3/4	15.6・10.2・5.0	細砂粒、普通、橙色	
67	下層	土師器	坏	1/5	17.2・12.2・5.5	細砂粒、軟質、橙色	
68	上層	土師器	坏	1/10	16.4・13.8・-	細砂粒・褐色鉍物粒、軟質、橙色	
69	一括	土師器	坏 小片		13.2・9.4・-	細砂粒、やや軟質、橙色	
70	下層	土師器	坏	底部片	-・-・-	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
71	中層	土師器	坏	1/6	-・-・-	細砂粒・雲母、やや軟質、橙色	
72	中層	土師器	坏	1/10	-・12.6・-	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、にぶい橙色	
73	中層	土師器	坏	1/8	-・11.0・-	細砂粒・褐色鉍物粒、やや軟質、橙色	
74	下層	土師器	高坏	坏部%	20.8・-・-	細砂粒・雲母、普通、橙色	坏部は皿状を呈す。外面はヘラ削り後ヘラ磨き。内面は放射状暗文の上に二重の螺旋状暗文が施されている
75	一括	土師器	埴 小片		-・13.2・-	緻密、硬質、橙色	畿内産か？
76	上・下	須恵器	蓋	4/5	18.0・3.3・3.4	細砂粒、還元焰、灰色	
77	上層	須恵器	蓋	2/3	13.2・-・-	粗砂粒、還元焰、灰白色	
78	上層	須恵器	蓋	1/3	18.0・3.6・4.0	細砂粒・黒色鉍物粒、普通、灰色	
79	一括	須恵器	蓋	完形	18.2・鉦6.7・3.1	粗砂粒、還元焰、暗オリーブ色	
80	上・底・下	須恵器	蓋	2/3	19.4・6.4・3.6	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
81	一括	須恵器	蓋	1/5	16.6・-・-	細砂粒、還元焰、灰色	
82	上・中	須恵器	蓋	完形	18.0・3.0・2.6	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
83	中層	須恵器	蓋	小片	14.4・5.8・1.8	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
84	最下層	須恵器	蓋	1/3	12.0・5.0・1.6	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
85	中層	須恵器	蓋	小片	5.8・-・-	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
86	中層	須恵器	蓋	小片	-・-・-	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
87	一括	須恵器	蓋	小片	-・-・-	粗砂粒・白色鉍物粒、還元焰、灰色	
88	上層	須恵器	坏	1/5	11.0・7.8・3.7	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
89	下層	須恵器	坏	2/3	12.2・8.2・3.7	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
90	中層	須恵器	坏	1/6	11.6・8.0・-	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
91	中・下	須恵器	坏	9/10	17.0・12.3・5.0	黒色鉍物粒・細砂粒、還元焰、灰白色	
92	中・下 最下層	須恵器	坏	9/10	19.0・14.4・4.3	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
93	下層	須恵器	坏	1/3	18.0・13.5・4.2	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
94	下・中層	須恵器	坏	1/2	17.0・13.0・5.0	粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	
95	下層	須恵器	坏	1/2	17.0・12.5・5.0	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
96	上層	須恵器	坏	2/5	17.6・13.4・4.2	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
97	最下層	須恵器	坏	1/6	15.0・10.6・4.7	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
98	上層	須恵器	坏	1/5	16.6・13.5・4.0	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	
99	一括	須恵器	坏	1/6	17.0・12.6・4.5	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
100	中層	須恵器	坏	2/5	20.0・13.0・3.7	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	
101	下層	須恵器	坏	2/3	12.0・9.0・3.0	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
102	中層	須恵器	坏	完形	17.5・14.6・3.6	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
103	一括	須恵器	坏	1/3	13.0・6.0・3.5	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
104	上層	須恵器	碗	2/5	17.0・8.0・7.4	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰軟質 灰白色	
105	上層	須恵器	碗	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰白色	
106	中層	須恵器	碗	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰白色	
107	一括	須恵器	坏	1/10	—・10.2・—	細砂粒・粗砂粒、還元焰、灰白色	
108	下層	土師器	鉢	小片	28.0・—・—	粗砂粒・雲母、硬質、にぶい赤褐色	口唇部は平坦で外傾する。 口縁部は横撫で、体部は口縁部に向けてのヘラ削り。
109	中層	土師器	鉢	小片	27.0・—・—	細砂粒・褐色鉍物粒・雲母・円礫、普通 橙色	口縁部は僅かに外反する。 外面は口縁部横撫で、体部はヘラ削り。内面は体部横方向へのヘラ撫で。
110	下層	土師器	鉢	1/6	25.2・—・—	粗砂粒・褐色鉍物粒・雲母、普通、にぶい 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。口縁部は横撫で。体部は口縁部に向けてのヘラ削り。
111	上層	土師器	甕	2/3	18.0・3.3・25.0	細砂粒・褐色鉍物粒・雲母、普通 にぶい黄褐色	口縁部は外反し、最大径を測る。胴部はゆるい丸みを持ち、底部は平底を呈す。外面は口縁部横撫で、胴部は底部から頸部にかけてのヘラ削り。底部もヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。
112	上・中層	土師器	甕	3/4	21.4・4.9・25.9	粗砂粒・雲母、普通、橙色・浅黄色	口縁部は大きく外反し、最大径を測る。胴部は直線的で、底部は平底を呈す。外面は口縁部横撫で、胴部は底部から頸部にかけて幅広のヘラ削りを施している。底部は不定方向へのヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
113	上層	土師器	甕	1/10	14.6・―・―	粗砂粒・褐色鉱物粒・石英、軟質、橙色	口縁部は外反し、胴部は丸みを呈す。外面は口縁部横撫で、胴部はヘラ削り。内面は胴部横方向へのヘラ撫でが施されている。
114	上層	土師器	甕	小片	13.2・―・―	粗砂粒、普通、にぶい赤褐色・橙色	口縁部は外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は左方向へのヘラ撫で。
115	中層	土師器	甕	1/8	14.2・―・―	粗砂粒・褐色鉱物粒・雲母、普通 にぶい赤褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状の丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。
116	上層	土師器	甕	小片	12.2・―・―	粗砂粒、普通、にぶい橙色	口縁部は直線的であり開かない。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。
117	上層	土師器	甕	小片	13.8・―・―	粗砂粒・細砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	口縁部は直線的に開き、胴部はゆるい丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。
118	最下層	土師器	小型甕	小片	7.0・―・―	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	ミニチュア品。口縁部は外反し、胴部から底部にかけては丸みを呈す。口縁部は横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。
119	上層	土師器	甕	小片	21.5・―・―	粗砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	口縁部は直線的に開き、胴部は丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。
120	中・下	土師器	甕	小片	22.0・―・―	細砂粒・雲母・褐色鉱物粒、普通、橙色	口縁部は外反し、胴部は丸みを呈す。外面は口縁部横撫で、胴部上位は左方向へのヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。
121	中層	土師器	甕	小片	26.0・―・―	粗砂粒・褐色鉱物粒・亜角礫 普通 橙色	口縁部は外反。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部へに向けての斜めのヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
122	上層	土師器	甕	1/10	25.4・—・—	粗砂粒・雲母・褐色鉍物粒・亜角礫、普通、にぶい橙色	口縁部は外反する。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてやや口縁部まで及ぶヘラ削り。内面は胴部横方向へのヘラ撫で。
123	上・中	土師器	甕	小片	19.2・—・—	粗砂粒、普通、橙色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状の丸みを呈す。外面は口縁部横撫で、胴部上半は頸部に向けてのヘラ削り、中位で左方向へのヘラ削り。内面は胴部横撫で。
124	中層	土師器	甕	小片	—・8.6・—	粗砂粒・亜角礫・褐色鉍物粒、普通、橙色	胴部は球状の丸みをもち、底部は平底を呈す。外面は胴部下位で左方向、中位では口縁部へに向けての斜めヘラ削り。内面はヘラ撫でが施されている。
125	下層	須恵器	長頸壺	小片	9.7・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、硬質、灰白色	ロクロ右回転。粘土紐重積成形、頸部から口縁部にかけては極僅かに外反するがほとんど開かず、中位に沈線が2条まわる。口唇端部は平坦で内傾する。
126	一括	須恵器	長頸壺	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、硬質、灰色	頸部片。ロクロ回転方向不明。内外面とも自然釉付着
127	下層	須恵器	長頸壺	小片	12.2・—・—	粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は上方へ引き出される。内面は自然釉が付着。
128	中層	須恵器	長頸壺	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	長頸壺胴部片。胴部は肩が張り、肩部では沈線に区画された内を刺突文が施文されている。外面の肩部には自然釉の付着がみられる。
129	上層	須恵器	長頸壺	小片	10.8・—・—	粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、褐灰色	ロクロ右回転。高台は足高で「ハ」の字状に開き、端部は幅広でやや上方に引き出されている。胴部は直線的に開き、下位に回転ヘラ削りが施されている。
130	一括	須恵器	長頸壺	小片	—・—・—	粗砂粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。高台は高足で端部は屈折し上方に大きく引き出されている。外面は胴部下位で回転ヘラ削り。
131	中層	須恵器	長頸壺	底部のみ	—・8.2・—	細砂粒・石英、還元焰、灰白色	高台は幅広で「ハ」の字状に開き、接地面は幅広である。底部外面は回転ヘラ削り。外面と底部内面には自然釉が付着。

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
132	下層	須恵器	広口壺	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	口縁部は僅かに外反し、中位に1条の沈線がまわり、雑な波状文が施文されている。内側とも自然釉付着。
133	中・下	須恵器	広口壺	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	口縁部は僅かに外反し、中位に1条の沈線がまわり、雑な波状文が施文されている。内側とも自然釉付着。
134	中・下	須恵器	瓶類	小片	—・14.0・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰白色	瓶類高台部。高台は外反し、断面三角形を呈す凸帯が1条まわる。内外面とも撫で、底部との接合面にはヘラ書きによる凹線がみられる。
135	上・中	須恵器	広口壺	小片	18.2・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰硬質、灰色	口縁部・胴部とも直線的。口唇部は丸みをもち外傾し、凹線が1条まわる。外面の口縁部は中位に凹線が1条まわり、その上下に波状文が施されている。胴部は肩部、中位と縦方向のカキ目が各部位ごとに施され、各間は凸帯状に残されている。内面は胴部に横方向のヘラ撫でが施されている。
136	中層	須恵器	蓋	小片	26.8・—・—	粗砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、にぶい黄色	短頸壺蓋。ロクロ右回転。天井部はゆるい丸みを呈し、口縁部は僅かに外反し、口唇端部は平坦である。外面は天井部の全面に回転ヘラ削りが施されている。
137	下層	須恵器	蓋	1/6	22.8・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	ロクロ右回転。天井部は丸みを呈し、口縁部は直線的で底部との間に1条の凹線がまわる。外面は天井部全面に回転ヘラ削りが施されている。
138	中層	須恵器	蓋	小片	11.6・鈕2.0・2.0	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は丸みをもった擬宝珠形で、天井部は水平。口縁部は直線的でやや開く。外面は天井部の全面に回転ヘラ削りが施されているが、自然釉の付着により単位等は不明
139	上・中	須恵器	短頸壺	1/10	17.8・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	ロクロ右回転。口縁部は直立し、胴部は球状の丸みをもち、2～3条の凹線がまわる。胴部内面は同心円状のアテ具痕を撫で消している。

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
140	中層	須恵器	短頸壺	小片	22.0・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、硬質、灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は直立し、口唇端部は平坦で内傾する。胴部内面は同心円状アテ具痕を消している。胴部自然釉付着。
141	中層	須恵器	短頸壺	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。胴部は丸みを持ち2条の凹線がまわる。外面は頸部から肩部にかけて回転ヘラ削りが施されている。
142	中・下 最下層	須恵器	短頸壺	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	胴部は大きな丸みを持ち、1対の把手をもつ。胴部下半の3カ所に凹線が各2条ずつまわる。外面はロクロ撫でが施されているが胴部下半の一部に平行叩きの痕が残る。内面は下半に同心円状のアテ具痕がみられる。
143	上・中 下層	須恵器	短頸壺	小片	—・20.0・—	細砂粒・粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	ロクロ右回転。高台は断面四角形を呈し、接地面は広い。外面は胴部下位に回転ヘラ削り、内面は胴部に同心円状のアテ具痕がみられ底部は不定方向への撫でが施されている。
144	一括	須恵器	甕	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、4分割をするように各2条ずつの沈線がまわり、その間に、列点刺突文が施文されている。口唇端部はやや丸みを持ち外傾し、その下に半円状の凸帯が1条まわる。
145	中・下 層	須恵器	甕	小片	25.6・—・—	粗砂粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部はほぼ平坦で外傾し、端部下に1条の凸帯がまわる。胴部内面に同心円状のアテ具痕がみられる。
146	下層	須恵器	甕	小片	26.0・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部はほぼ平坦で外傾し、口唇部下に凸帯が1条まわる。焼成時の歪みあり、口縁部内面には自然釉の付着がみられる。
147	下層	須恵器	円面硯	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰白色	硯面部欠損。脚部は12カ所の長方形の透しが見られる
148	下層	須恵器	円面硯	小片	硯面径21.0・—・—	黒色鉍物粒、還元焰、灰色	脚部は緩やかに開き、端部は平坦で断面三角形の凸帯がまわる。脚部にはヘラ描施文と透しが見られる。391と同一個体と思われる。

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
149	中層	須恵器	円面硯	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	陸部は使い込んだ痕跡がみられない。脚部には12カ所に長方形の透しが見られる
150	下層	土師器	土製甕	小片	—・24.2・—	粗砂粒・雲母、硬質、にぶい褐色	脚部小片。口唇部は平坦。外面は口唇部まで縦方向へラ削り。内面はへラ撫で。
151	下層	土製品	羽口	小片	—・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、酸化焰、淡黄色	両端部欠損。体部へラ削り。先端部附近は一部還元。
152	上層	土師器	坏	完形	13.8・10.4・5.2	細砂粒、やや軟質、橙色	
153	上層	土師器	坏	2/3	13.2・5.7・4.6	粗砂粒、普通、橙色	
154	上層	土師器	坏	4/5	11.3・10.0・3.6	粗砂粒・雲母、普通、橙色	
155	上層	土師器	坏	完形	12.0・7.0・4.2	細砂粒、普通、にぶい褐色	
156	下層	土師器	坏	3/4	12.4・9.4・3.9	粗砂粒、普通、にぶい赤褐色	
157	上層	土師器	坏	3/5	12.2・11.4・4.0	細砂粒、普通、にぶい黄褐色	
158	中層	土師器	坏	9/10	10.7・9.5・3.8	粗砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
159	上層	土師器	坏	9/10	10.7・6.2・3.6	粗砂粒、普通、橙色	
160	上層	土師器	坏	1/8	10.6・8.6・—	細砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
161	上層	土師器	坏	3/5	10.8・10.0・3.3	粗砂粒・石英、普通、橙色	
162	上層	土師器	坏	1/6	12.0・5.0・2.8	砂粒、普通、橙色	
163	上層	土師器	坏	3/5	12.6・10.6・3.7	粗砂粒、普通、にぶい橙色	
164	上層	土師器	坏	1/4	12.0・10.8・3.9	粗砂粒、やや軟質、橙色	
165	上層	土師器	坏	1/2	11.8・6.6・3.7	粗砂粒、普通、にぶい橙色	
166	一括	土師器	坏	2/5	12.8・12.4・3.6	粗砂粒、普通、にぶい橙色	
167	最下層	土師器	坏	完形	9.8・9.5・3.0	細砂粒・石英、硬質、明赤褐色	
168	一括	土師器	坏	2/5	10.2・10.0・2.8	粗砂粒・雲母、硬質、にぶい橙色	
169	上層	土師器	坏	1/3	13.0・7.0・4.1	粗砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
170	上層	土師器	坏	1/8	13.2・—・—	粗砂粒、やや軟質、橙色	
171	中層	土師器	坏	完形	13.2・8.5・4.2	粗砂粒・雲母、普通、橙色	
172	中層	土師器	坏	1/5	14.0・12.6・—	粗砂粒、やや軟質、橙色	
173	中層	土師器	坏	1/5	14.0・13.0・—	粗砂粒、普通、にぶい橙色	
174	下層	土師器	坏	1/3	13.2・7.6・3.7	細砂粒・雲母、普通、橙色	
175	中層	土師器	坏	1/2	11.8・11.6・3.5	粗砂粒、普通、橙色	
176	上層	土師器	坏	1/3	12.2・10.6・3.5	細砂粒・粗砂粒・雲母、普通、橙色	
177	中層	土師器	坏	完形	11.4・7.0・3.3	粗砂粒、やや軟質、橙色	
178	中層	土師器	坏	1/4	11.2・10.6・—	細砂粒、やや軟質、にぶい橙色	
179	下層	土師器	坏	小片	12.2・3.6・3.5	細砂粒・雲母、普通、橙色	
180	下層	土師器	坏	1/3	12.2・9.0・3.5	粗砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
181	最下層	土師器	坏	完形	11.8・10.7・3.5	細砂粒、普通、橙色	
182	下層	土師器	坏	1/5	12.0・10.8・—	細砂粒・雲母、硬質、にぶい橙色	
183	一括	土師器	坏	3/4	11.4・7.6・3.4	粗砂粒、硬質、赤褐色	
184	最下層	土師器	坏	1/8	13.2・12.8・—	細砂粒、普通、にぶい橙色	
185	一括	土師器	坏	1/6	13.4・10.6・3.1	細砂粒・褐色鉱物粒・雲母、普通、橙色	
186	一括	土師器	坏	3/4	11.4・11.1・3.1	粗砂粒、硬質、橙色	
187	一括	土師器	坏	1/8	12.0・—・—	細砂粒、普通、橙色	

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
188	上層	土師器	坏	1/6	12.0・11.0・2.9	粗砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
189	一括	土師器	坏	2/3	12.0・11.0・3.2	粗砂粒、普通、橙色	
190	一括	土師器	坏	1/2	12.6・10.4・—	細砂粒、普通、にぶい赤褐色	
191	上層	土師器	坏	1/5	14.0・6.0・3.5	細砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
192	一括	土師器	坏	1/12	16.0・—・—	砂粒、普通、橙色	
193	上層	土師器	坏	1/6	15.2・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
194	一括	土師器	坏	小片	15.4・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
195	最下層	土師器	坏	小片	13.0・11.4・3.6	粗砂粒、普通、にぶい橙色	
196	上層	土師器	坏	1/6	13.0・10.6・3.1	粗砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
197	中層	土師器	坏	1/6	13.8・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒・雲母、普通、橙色	
198	上層	土師器	坏	1/2	11.2・10.6・3.8	粗砂粒、普通、橙色	
199	上層	土師器	坏	小片	11.8・11.4・—	細砂粒・雲母・褐色鉱物粒、普通、橙色	
200	上層	土師器	坏	小片	16.2・—・—	粗砂粒、普通、橙色	
201	中層	土師器	坏	1/2	11.8・11.8・3.5	細砂粒・雲母、普通、橙色	
202	一括	土師器	坏	1/4	11.6・9.0・3.2	細砂粒、硬質、橙色	
203	中層	土師器	坏	1/4	12.0・6.0・—	細砂粒、普通、橙色	
204	中層	土師器	坏	1/4	13.2・6.6・3.7	粗砂粒・褐色鉱物粒、硬質、明赤褐色	
205	一括	土師器	坏	1/6	13.0・8.0・3.5	細砂粒、硬質、明赤褐色	
206	上層	土師器	坏	1/6	12.8・—・—	細砂粒・雲母・褐色鉱物粒、普通、橙色	
207	上層	土師器	坏	1/6	14.8・8.4・3.7	細砂粒・雲母、普通、橙色	
208	中層	土師器	坏	小片	—・—・—	細砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
209	上層	土師器	坏	1/3	12.0・8.6・3.2	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
210	中層	土師器	坏	1/4	12.6・—・—	粗砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	
211	中層	土師器	坏	1/4	11.2・4.4・4.0	細砂粒、普通、橙色	
212	上層	土師器	坏	1/4	13.0・10.6・4.0	粗砂粒、普通、橙色	
213	上層	土師器	埴 (鉢)	2/5	21.6・9.0・7.8	粗砂粒・細砂粒・褐色鉱物粒、普通、 橙色	
214	一括	土師器	埴	1/6	25.0・—・—	細砂粒、やや硬質、橙色	
215	上層	土師器	埴	1/10	21.2・—・—	粗砂粒・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	
216	上層	土師器	埴	1/8	16.8・—・—	細砂粒、普通、橙色	
217	一括	土師器	坏	1/10	15.0・—・—	細砂粒、硬質、明赤褐色	
218	一括	土師器	埴	小片	22.0・—・—	細砂粒・雲母、軟質、橙色	
219	一括	土師器	坏	1/5	16.8・8.2・6.0	粗砂粒、硬質、明赤褐色	
220	上層	土師器	坏	1/6	20.0・—・—	細砂粒、普通、にぶい橙色	
221	上層	土師器	坏	小片	18.2・—・—	細砂粒・石英・雲母、普通、橙色	
222	一括	土師器	埴	小片	17.6・—・—	細砂粒、硬質、橙色	
223	中層	土師器	坏	小片	11.8・11.8・—	細砂粒・褐色鉱物粒、やや硬質、橙色	
224	上層	土師器	坏	1/2	15.0・11.0・4.2	粗砂粒・円礫(1.0cm)、普通、橙色	
225	一括	土師器	坏	1/4	17.8・12.0・3.7	粗砂粒、普通、にぶい橙色	
226	一括	土師器	坏	1/10	19.2・16.8・—	細砂粒、やや軟質、にぶい橙色	
227	一括	土師器	坏	1/12	16.0・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	
228	一括	土師器	坏	1/10	16.0・12.4・—	細砂粒、普通、にぶい橙色	
229	下層	土師器	坏	小片	17.0・—・—	細砂粒、普通、橙色	

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
230	中層	土師器	坏	1/6	17.0・12.6・—	粗砂粒、普通、橙色	
231	一括	土師器	坏	小片	15.6・—・—	粗砂粒、普通、橙色	
232	一括	土師器	坏	1/8	17.0・14.8・—	細砂粒、普通、橙色	
233	上層	土師器	坏	1/8	16.0・14.0・—	細砂粒・雲母、普通、灰褐色・にぶい橙色	
234	最下層	土師器	蓋	1/5	—・鈕2.2・—	細砂粒・褐色鉱物粒、硬質、橙色	鈕は幅のある扁平状、天井部は周辺部でややゆるい丸みをもち、口唇部に移行すると推定される。天井部はへら磨き、鈕は面取り状のへら削り。内面は横撫で。
235	一括	土師器	坏	1/3	15.0・11.2・4.2	細砂粒・褐色鉱物粒、硬質、橙色	
236	中層	土師器	坏	1/8	13.0・—・—	細砂粒、軟質、橙色	
237	上層	土師器	坏	小片	13.0・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、やや軟質、橙色	
238	一括	土師器	坏	小片	11.0・—・—	細砂粒、普通、橙色	
239	最下層	土師器	坏	2/3	13.4・9.8・4.5	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	
240	上層	土師器	坏	1/8	15.8・11.2・—	粗砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
241	上層	土師器	坏	1/12	14.0・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、軟質、橙色	
242	中層	土師器	坏	1/8	14.8・11.4・—	細砂粒・褐色鉱物粒、やや軟質、橙色	
243	上層	土師器	坏	1/3	15.2・9.8・4.1	細砂粒・雲母、普通、橙色	
244	一括	土師器	坏	1/3	15.4・10.8・—	粗砂粒・3mm大の垂角礫、軟質、橙色	
245	上層	土師器	坏	1/10	16.0・11.4・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	
246	下層	土師器	坏	小片	16.0・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
247	中層	土師器	坏	小片	16.0・—・—	細砂粒、普通、にぶい橙色	
248	一括	土師器	坏	小片	13.2・7.4・—	細砂粒、普通、橙色	
249	一括	土師器	坏	1/8	17.0・14.8・—	細砂粒、普通、橙色	
250	上層	土師器	坏	1/10	14.0・10.8・—	細砂粒・褐色鉱物粒、やや軟質、橙色	
251	上層	土師器	坏	2/5	12.8・10.2・3.9	細砂粒・雲母、普通、橙色	
252	上層	土師器	坏	1/3	13.2・9.2・—	細砂粒、普通、橙色	
253	上層	土師器	坏	1/5	12.4・11.0・—	細砂粒・褐色鉱物粒、やや軟質、橙色	
254	上層	土師器	坏	完形	11.4・9.6・3.4	細砂粒・褐色鉱物粒、軟質、にぶい橙色	
255	中層	土師器	坏	1/5	10.8・8.6・3.3	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
256	上層	土師器	坏	2/5	12.0・10.0・3.7	細砂粒・褐色鉱物粒、軟質、橙色	
257	上・中	土師器	坏(塊)	2/3	17.6・11.9・6.2	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
258	下層	土師器	坏	小片	18.0・—・—	細砂粒・円礫、普通、にぶい橙色	
259	中層	土師器	坏	1/6	16.0・—・—	細砂粒、普通、にぶい橙色	
260	上層	土師器	塊	1/5	16.8・9.8・5.2	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	
261	一括	土師器	塊	1/8	15.0・10.0・—	細砂粒・褐色鉱物粒、軟質、にぶい橙色	
262	上層	土師器	坏	1/4	15.0・12.4・—	粗砂粒、軟質、橙色	
263	上層	土師器	坏	1/2	13.8・10.2・4.1	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
264	上層	土師器	坏	1/2	14.0・8.4・4.3	粗・細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
265	下層	土師器	坏	小片	14.0・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
266	上層	土師器	坏	1/4	12.0・9.4・—	細砂粒・褐色鉱物粒、やや軟質、橙色	
267	中層	土師器	坏	1/3	—・13.8・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	
268	一括	土師器	高坏	小片	—・—・—	細砂粒、普通、橙色	
269	上層	土師器	坏	小片	—・8.4・—	細砂粒・褐色鉱物粒、軟質、橙色	
270	下層	土師器	坏	小片	—・—・—	細砂粒、普通、橙色	
271	一括	土師器	坏	小片	—・—・—	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
272	上層	土師器	坏	小片	—・10.2・—	細砂粒、やや軟質、橙色	
273	中層	土師器	坏	小片	—・—・—	細砂粒、普通、橙色	
274	一括	土師器	坏	小片	—・—・—	緻密・普通、明赤褐色	
275	一括	土師器	坏	小片	—・—・—	微砂粒、普通、明赤褐色	
276	上層	土師器	坏	小片	12.0・—・—	細砂粒、普通、明赤褐色	
277	上層	土師器	坏	小片	12.0・—・—	微砂粒、普通、明赤褐色	
278	上層	土師器	坏	小片	—・—・—	細砂粒、普通、赤褐色	
279	一括	土師器	碗	小片	15.0・—・—	細砂粒、普通、赤褐色	
280	下層	土師器	坏	2/3	8.4・3.6・3.9	細砂粒・雲母、軟質、橙色	
281	中層	土師器	坏	体部片	—・—・—	微砂粒、普通、明赤褐色	
282	上層	土師器	坏	体部片	—・—・—	微砂粒、普通、明赤褐色	
283	下・中	黒色土器	碗	小片	14.8・—・—	細砂粒、硬質（胎土・色調）淡黄色	内外面ともていねいなヘラ磨き。
284	中層	須恵器	蓋	完形	18.1・鈕3.4・3.7	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	歪みがみられる。
285	一括	須恵器	蓋	1/2	17.2・鈕3.1・3.0	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
286	一括	須恵器	蓋	4/5	18.6・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
287	下層	須恵器	蓋	4/5	19.2・鈕3.2・3.4	粗砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
288	一括	須恵器	蓋	小片	20.0・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	
289	上層	須恵器	蓋	1/3	20.6・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
290	上層	須恵器	蓋	1/10	12.6・2.0・3.0	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
291	一括	須恵器	蓋	1/2	21.0・6.0・3.3	細砂粒・粗砂粒・黒色鉱物粒、酸化焰軟質、灰白色	
292	上層	須恵器	蓋	1/4	20.0・—・—	細砂粒、還元焰軟質、灰白色	
293	上層	須恵器	蓋	1/5	—・2.8・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
294	一括	須恵器	蓋	1/8	—・3.2・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
295	上層	須恵器	蓋	1/8	—・3.3・—	細砂粒、還元焰、灰色	
296	一括	須恵器	蓋	1/8	16.6・5.2・2.2	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
297	上層	須恵器	蓋	完形	19.3・5.8・3.0	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰白色	
298	最下層	須恵器	蓋	完形	19.0・鈕5.0・3.6	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
299	中層	須恵器	蓋	1/5	18.0・5.2・3.3	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰白色	
300	中・下	須恵器	蓋	1/4	19.2・鈕5.9・3.5	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
301	上層	須恵器	蓋	2/3	18.0・5.0・3.1	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
302	上層	須恵器	蓋	1/4	17.8・5.2・3.6	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
303	下層	須恵器	蓋	完形	17.5・6.0・3.2	粗砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰白色	歪みが大きい。
304	上層	須恵器	蓋	1/5	18.0・4.8・3.2	粗砂粒、還元焰、灰色	
305	一括	須恵器	蓋	1/2	13.0・3.3・2.3	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰白色	
306	中層	須恵器	蓋	1/3	12.6・3.8・1.9	細砂粒、還元焰、灰色	
307	一括	須恵器	蓋	1/8	—・4.2・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	
308	上層	須恵器	蓋	2/5	17.4・4.8・2.9	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
309	上層	須惠器	蓋	1/2	17.2・4.7・3.4	細砂粒・褐色鉍物粒・雲母、還元焰、灰色	
310	下層	須惠器	蓋	3/5	18.0・4.6・4.0	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	
311	一括	須惠器	蓋	1/3	12.2・2.6・2.1	細砂粒・粗砂粒、還元焰、灰白色	
312	一括	須惠器	蓋	1/5	12.0・2.9・2.2	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
313	上層	須惠器	蓋	3/4	12.2・2.7・2.5	粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	
314	中・下	須惠器	蓋	完形	19.2・6.5・3.8	細砂粒、還元焰、灰白色	
315	一括	須惠器	蓋	1/5	12.2・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
316	上層	須惠器	蓋	1/5	17.5・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
317	中層	須惠器	蓋	1/2	21.0・4.5・4.7	粗砂粒、還元焰、灰色	
318	中・下	須惠器	蓋	4/5	18.4・鈕4.2・3.5	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
319	中層	須惠器	蓋	1/4	20.0・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	
320	上・中	須惠器	蓋	1/3	18.5・—・—	粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
321	一括	須惠器	蓋	小片	18.8・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
322	一括	須惠器	坏	2/3	11.2・8.0・4.3	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
323	一括	須惠器	坏	1/2	12.8・8.5・4.0	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
324	上層	須惠器	坏	1/5	12.6・9.0・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
325	一括	須惠器	坏	完形	11.6・8.2・3.8	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
326	中層	須惠器	坏	完形	11.6・7.9・4.0	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
327	上層	須惠器	坏	1/3	14.0・10.4・3.2	細砂粒、還元焰、灰白色	
328	上層	須惠器	坏	1/2	13.2・10.5・4.1	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
329	一括	須惠器	坏	1/4	18.4・12.8・4.4	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
330	上層	須惠器	坏	1/8	18.0・12.6・3.5	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰赤色	
331	一括	須惠器	坏	1/8	—・12.4・—	細砂粒・黒色鉍物粒、やや軟質、灰白色	
332	一括	須惠器	坏	1/6	—・12.2・—	細砂粒、還元焰、灰色	
333	上層	須惠器	坏	1/2	19.0・11.4・4.9	細砂粒、軟質、暗灰色・灰白色	
334	下層	須惠器	坏	3/5	17.0・10.0・4.7	細砂粒、還元焰、灰白色	
335	一括	須惠器	坏	1/3	18.0・11.0・5.3	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
336	一括	須惠器	坏	1/8	19.0・13.0・—	細砂粒、還元焰軟質、灰白色	
337	上層	須惠器	坏	1/6	—・11.4・—	細砂粒・粗砂粒、還元焰、灰白色	
338	下層	須惠器	坏	1/3	17.6・10.6・5.5	粗砂粒、還元焰、灰色	
339	下層	須惠器	坏	1/4	17.2・11.8・4.0	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
340	下層	須惠器	坏	1/3	—・12.0・—	細砂粒、良好、灰白色	
341	上層	須惠器	坏	1/2	—・12.0・—	粗砂粒・細砂粒、還元焰、灰色	
342	上層	須惠器	坏	1/10	18.4・12.5・4.9	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	
343	上層	須惠器	坏	1/6	—・11.2・—	細砂粒・緻密、還元焰、灰色	
344	一括	須惠器	坏	1/6	—・13.0・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
345	一括	須恵器	坏	1/5	—・13.2・—	細砂粒、還元焰、灰色	
346	下層	須恵器	坏	1/5	17.0・12.0・4.2	細砂粒、還元焰、灰色	
347	上層	須恵器	蓋	1/3	20.2・17.2・—	細砂粒・黒色鈹物粒、還元焰、灰色	
348	下層	須恵器	坏	1/8	23.0・—・—	細砂粒・黒色鈹物粒、還元焰、灰色	
349	一括	須恵器	坏盤	小片	27.6・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	
350	最下層	須恵器	坏	小片	6.7・—・—	粗砂粒、還元焰、灰色	
351	一括	須恵器	坏	1/2	13.2・8.6・3.2	粗砂粒、還元焰軟質、灰色	
352	一括	須恵器	坏	小片	12.4・6.6・3.1	細砂粒・雲母、酸化焰、にぶい黄褐色	
353	一括	須恵器	坏	1/5	—・7.4・—	粗砂粒、還元焰軟質、灰白色	
354	中層	須恵器	坏	小片	18.6・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	
355	下層	須恵器	盤	1/8	23.0・—・—	粗砂粒・円礫、還元焰、黒褐色	ロクロ回転方向不明。器壁は厚く、口唇部は平坦で内傾し、底部は丸みを呈す。底部は不定方向へのヘラ削り。内面は自然釉の付着がみられる。外面は天井部の1/2程度まで回転ヘラ削り。
356	上層	土師器	鉢	1/8	28.0・—・—	粗砂粒・褐色鈹物粒、やや硬質にぶい褐色	口縁部は僅かに外反し、口唇部は平坦。外面の口縁部は横撫で。体部は口縁部に向けてのヘラ削りで部分的にヘラ磨き。内面は体部にヘラ撫でが施されている。
357	上層	土師器	鉢	1/8	28.0・—・—	粗砂粒、やや硬質、にぶい橙色	口縁部は直線的で、口唇部は平坦で大きく内傾する。体部はゆるい丸みを呈す。外面は口縁部横撫で、体部はヘラ削り。内面はヘラ撫でと部分的にヘラ磨きが施されている。
358	最下層	土師器	台付甕	小片	14.2・5.4・—	粗砂粒・雲母・褐色鈹物粒、普通にぶい橙色	口縁部は短くあまり開かず、胴部は上位から中位にかけて大きくふくらむ。脚部欠損。外面は口縁部横撫で。胴部は頸部に向けての縦・斜めのヘラ削り。胴部内面はヘラ撫で。
359	下層	土師器	台付甕	小片	脚部径9.2・—・—	細砂粒・雲母、硬質、にぶい橙色	脚部は「ハ」の字状に大きく開く。外面は底部から脚部上半にかけてはヘラ削り。脚部下半は横撫で。
360	一括	土師器	甕	小片	23.0・—・—	細砂粒・雲母・褐色鈹物粒、普通にぶい橙色	口縁部は外反。外面は口縁部横撫で、胴部はヘラ削り。内面は胴部に横方向へのヘラ撫でが施されている。口縁部外面に粘土紐重ね積みの痕跡がみられる。

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
361	上層	土師器	甕	小片	14.0・―・―	細砂粒・雲母、普通、明赤褐色	口縁部は直線的に開く。外面は口縁部横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。内面胴部はヘラ撫で。
362	上・中	土師器	甕	1/5	15.6・―・―	細砂粒・雲母、普通、にぶい赤褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は上半で左方向へのヘラ削り。下半で頸部方向への斜めのヘラ削り。内面は胴部で横方向ヘラ撫で。
363	上層	土師器	甕	小片	13.6・―・―	細砂粒・雲母、普通、にぶい赤褐色	口縁部は外反する。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部へ向けてのヘラ削り。内面は胴部横方向へのヘラ撫で。
364	中層	土師器	甕	1/4	15.0・―・―	粗砂粒・雲母、普通、灰褐色・にぶい褐色	口縁部は直線的に開き、胴部は球状の丸みをもちそのまま底部に移行する。外面は口縁部横撫で、胴部は上半で頸部に向けてのヘラ削り。下半は斜め方向でのヘラ削り。底部は横方向へのヘラ削り。内面は胴部上半で横方向。下半で縦方向ヘラ撫でが施されている。
365	中層	土師器	甕	小片	12.0・―・―	細砂粒、普通、橙色	口縁部は直線的に開き、胴部はゆるい丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面は胴部に横方向のヘラ撫でが施されている。
366	上層	土師器	甕	小片	10.8・―・―	粗砂粒・雲母、やや硬質、にぶい赤褐色	口縁部は中位に弱い稜をもち、口唇部は僅かに外反し端部はやや肥厚する。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面は頸部以下に横方向ヘラ撫でが施されている。
367	上層	土師器	小型甕	1/4	9.0・―・―	細砂粒・雲母、普通、にぶい橙色	口縁部は外反し、胴部は球状の丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。
368	上層	土師器	甕	小片	21.5・―・―	細砂粒・褐色鉱物粒、普通、橙色	口縁部は直線的に開き、胴部は大きな丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。内面は胴部ヘラ撫で。

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
369	上層	土師器	甕	小片	23.0・—・—	粗砂粒・雲母、普通、橙色	口縁部は僅かに外反し、胴部は丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部上半は左方向へのヘラ削り。
370	下層	土師器	甕	小片	22.0・—・—	粗砂粒・褐色鉍物粒、やや硬質、にぶい橙色	口縁部は僅かに外反。外面は口縁部横撫で。胴部は頸部に向けてのヘラ削り。
371	中・上	土師器	甕	小片	30.0・—・—	粗砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	口縁部は外反し、胴部は大きな丸みをもつ。外面は口縁部横撫で。胴部は頸部に向けてのヘラ削り。
372	最下層	土師器	甕	小片	29.0・—・—	粗砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	口縁部は外反し、胴部は大きな丸みをもつ。外面は口縁部横撫で。胴部は頸部に向けてのヘラ削り。
373	中層	土師器	鉢	小片	—・—・—	細砂粒、硬質、橙色	底部ヘラ削り。
374	上層	須恵器	甗	小片	—・13.6・—	細砂粒、還元焰、灰色	底部回転ヘラ削り。胴部は回転ヘラ削りとかき目。内面は回転ヘラ削りと横撫で。
375	中層	須恵器	甕	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。外面は肩部ロクロ撫で、胴部中位は平行叩き目。内面胴部には同心円アテ具痕がみられる。
376	上層	須恵器	長頸壺	小片	—・14.0・—	細砂粒、還元焰、灰白色	長頸壺の高台部のみ残存。高台は「ハ」の字状に開き、端部は幅広上方に引き出されている。
377	一括	須恵器	瓶類	小片	13.4・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	横瓶または提瓶の口縁部と推定される。口縁部はやや外反し、口唇端部はゆるい丸みをもち外傾する。
378	中層	須恵器	横瓶?	小片	16.6・—・—	粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	口縁部は外反し、口唇端部はやや丸みをもち外傾し、端部下には1条の凸帯がまわる。胴部内面には同心円状のアテ具痕がみられる。胴部の丸みは均一ではないため横瓶と推定される。口縁部内面・外面の大部分に自然釉が付着。
379	下層	須恵器	蓋	7/8	25.4・鈕6.0・8.6	粗砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	短頸壺蓋。ロクロ右回転。鈕は扁平状で天井部はゆるい丸みを呈し、口縁部は僅かに外反し、口唇端部は平坦である。外面は鈕の周辺は撫で、天井部から口縁部中位まで回転ヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
380	上層	須恵器	盤	1/4	26.0・—・—	粗砂粒・黒色鉱物粒、灰白色	短頸壺蓋。ロクロ右回転。天井部はゆるい丸みを呈し、口縁部は僅かに外反し、口唇端部は平坦である。外面は天井部の全面に回転ヘラ削りが施されている。
381	上層	須恵器	蓋	1/4	20.2・—・—	細砂粒・粗砂粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸みを呈し、口縁部は僅かに外反し、口唇端部は平坦である。外面は天井部にかき目痕がみられる。内面は天井部に不定方向の撫でが施されている。
382	中層	土師器	蓋	1/10	21.2・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	短頸壺蓋。ロクロ右回転。天井部はゆるい丸みをもち、口縁部は直線的にやや開く。外面は天井部に回転ヘラ削りが施されている。
383	上層	須恵器	短頸壺	小片	14.4・—・—	細砂粒、還元焰、灰白色	口縁部は直立し、口唇端部は幅は狭いが平坦で水平な面をもつ。胴部は球状の丸みをもつ。
384	上層	須恵器	短頸壺	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰白色	ロクロ左回転。胴部には一对の把手をもち、把手の位置する所に1条の沈線がまわる。外面は下位で回転ヘラ削り。
385	中層	須恵器	短頸壺	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰白色	頸部から肩部にかけてはゆるい丸みをもち胴部中に2条の沈線がまわる。
386	一括	須恵器	甕	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、胴部の肩部は存在しないが、大きくふくらむ。外面は胴部に縦方向のヘラ撫で。内面は頸部に横方向ヘラ撫で。胴部には同心円状のアテ具痕がみられる。
387	一括	須恵器	甕	小片	23.4・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は丸みをもち外傾し、その下に1条の凸帯がまわる。内面胴部は横方向へのヘラ撫で。
388	一括	須恵器	甕	小片	—・—・—	粗砂粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇部は平坦で外傾し、口唇部下に1条の凸帯がまわる。

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
389	中層	須恵器	甕	小片	27.0・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰色	口縁部は外反し、口唇端部は平坦で外傾する。端部下には1条の凸帯がまわる。
390	上・中	須恵器	甕	小片	27.0・—・—	細砂粒・黒色鉍物粒、還元焰、灰白色	口縁部は外反し、口唇端部は平坦で垂直きみで、端部下には1条の凸帯がまわる。
391	一括	須恵器	円面硯	小片	硯面径21.0・—・—	黒色鉍物粒、還元焰、灰色	大型円面硯。脚部には6カ所に隅丸長方形の透し、ヘラ描施文が入る。陸部には墨をあてた滑面光沢あり。裏面には朱書きを表わした痕跡がみられる赤色顔料が付着する。148と同一個体と思われる。
392	下層	土師器	土製竈	小片	—・—・—	粗砂粒・褐色鉍物粒、普通、暗褐色	土製竈庇部分。庇は横撫で。
393	一括	土製品	羽口	小片	—・—・—	細砂粒・雲母・褐色鉍物粒、普通、淡黄色	外面は磨耗のため整形不明。一部還元。
394	一括	土製品	羽口	小片	—・—・—	細砂粒・雲母・褐色鉍物粒、普通、淡黄色	外面ヘラ削り。端部に鉄分の付着がみられる。
395	一括	土製品	羽口	小片	—・—・—	細砂粒・雲母・褐色鉍物粒、普通、赤褐色	外面ヘラ削り。端部に鉄分の付着がみられる。
396	一括	須恵器	風字硯	小片	—・—・—	細砂粒、還元焰、灰色	風字硯の破片か？。内面に自然釉付着。側面は2段に竹管文が施されている。脚部・裏面はヘラ削りか。
397	上層	土製品	不明	小片	—・—・—	細砂粒、普通、にぶい橙色	脚部。
398	一括	土師器	坏	小片	11.6・9.8・—	褐色鉍物粒、軟質、橙色	
399	一括	土師器	坏	2/5	11.6・11.4・3.4	細砂粒、普通、橙色	
400	一括	土師器	坏	9/10	12.0・11.2・3.7	細砂粒・雲母、普通、橙色	
401	一括	土師器	坏	1/10	15.6・—・—	細砂粒、普通、橙色	
402	一括	土師器	坏	3/5	13.4・12.0・3.9	細砂粒・雲母、普通、橙色	
403	一括	土師器	坏	1/6	13.0・8.0・—	細砂粒、橙色	
404	一括	土師器	埴	1/2	18.6・12.0・7.5	粗砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
405	一括	土師器	盤(坏)	1/8	23.0・—・—	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
406	一括	土師器	坏	1/4	14.2・9.4・4.1	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、橙色	
407	一括	土師器	坏	小片	14.6・10.0・—	細砂粒、やや軟質、橙色	
408	一括	土師器	坏	1/3	15.4・10.0・4.9	細砂粒・褐色鉍物粒、やや軟質、橙色	
409	一括	土師器	坏	1/10	14.7・—・—	細砂粒・褐色鉍物粒、普通、にぶい橙色	
410	一括	土師器	坏	9/10	16.2・10.3・4.6	細砂粒・雲母・褐色鉍物粒、普通、にぶい橙色	

第3章 検出遺構・遺物

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考
411	一括	土師器	坏	1/8	12.8・9.6・—	細砂粒・褐色鈹物粒・普通、橙色	
412	一括	土師器	坏	4/5	17.8・11.2・7.5	細砂粒・粗砂粒・褐色鈹物粒、普通、橙色	
413	一括	土師器	皿	1/2	19.6・19.0・2.8	細砂粒・粗砂粒、褐色鈹物粒、普通、橙色	
414	一括	須恵器	蓋	1/6	13.6・—・—	細砂粒・黒色鈹物粒・還元焰、灰色	
415	一括	須恵器	坏	小片	13.0・10.1・2.7	細砂粒、還元焰軟質、灰色	
416	一括	須恵器	坏	小片	12.6・9.0・3.6	細砂粒・粗砂粒・還元焰、暗緑灰色	
417	一括	須恵器	坏	1/4	12.2・8.0・3.5	粗砂粒、還元焰軟質、灰色	
418	一括	須恵器	坏	1/8	12.4・7.8・3.4	細砂粒、還元焰軟質、灰白色	
419	一括	須恵器	坏	1/4	12.5・9.2・3.7	細砂粒・黒色鈹物粒、還元焰、暗灰色	
420	一括	須恵器	碗	小片	—・17.4・—	粗砂粒、還元焰、灰白色	
421	一括	土師器	台付甕	小片	—・6.8・—	細砂粒・雲母、普通、橙色	脚部は「ハ」の字状に開き、横撫で。
422	一括	土師器	甕	小片	19.0・—・—	細砂粒・雲母・褐色鈹物粒、普通、にぶい橙色	口縁部は直線的でほとんど開かず、胴部は丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。
423	一括	土師器	甕	小片	22.0・—・—	粗砂粒、普通、橙色	口縁部は僅かに外反し、口唇端部はゆるい丸みを持ち、外傾する。口縁部は横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。
424	一括	土師器	甕	小片	37.0・—・—	粗砂粒・褐色鈹物粒、普通、橙色	口縁部は外反し、胴部は大きな丸みを呈す。外面は口縁部横撫で、胴部は上位で頸部に向けてのヘラ削り。中位では縦方向、横方向のヘラ削りが施され、内面は胴部で横方向ヘラ撫でが施されている。
425	一括	土師器	甕	小片	27.4・—・—	粗砂粒・褐色鈹物粒・円礫、普通、褐色	口縁部は直線的にやや開き、胴部は丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。内面は胴部に横方向のヘラ撫でが施されている。
426	上層	須恵器	坏	2/3	12.0・8.0・3.8	細砂粒、軟質、灰白色	
427	下層	須恵器	坏	完形	11.9・7.0・4.8	細砂粒・黒色鈹物粒、還元焰、灰色	
428	中層	須恵器	坏	1/8	—・13.0・—	細砂粒・粗砂粒・黒色鈹物粒、還元焰、灰色	
429	上層	須恵器	坏	3/5	17.0・11.0・4.1	細砂粒・黒色鈹物粒、還元焰、灰色	

第4節 歴史時代

No	層位	種類	器種	残存率	計測値 cm 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	備考	
430	下・中	土師器	小型甕	小片	7.6・—・—	細砂粒、普通、橙色	ミニチュア品。口縁部は直線的に開き、胴部は球状の丸みを呈す。口縁部は横撫で、胴部は左方向へのヘラ削り。	
431	下層	土師器	甕	1/5	20.6・—・—	粗砂粒・褐色鉱物粒、普通、にぶい橙色	口縁部はやや外反し、胴部は球状の丸みをもつ。外面は口縁部横撫で、胴部は頸部に向けてのヘラ削り。	
432	上層	須恵器	長頸壺	小片	—・—・—	細砂粒・黒色鉱物粒、還元焰、灰色	大型長頸壺頸部から口縁部にかけて、頸部は粘土紐輪積成形。頸部中に凹線が2条まわる。頸部と胴部の接合部分是指頭圧痕がみられる。	
No	層位	種類	器種	残存率	石 材	計 測 値 cm 長さ・幅・厚さ・重さ g	備 考	
433	一括	石製品	勾玉	完形	碧玉	4.3・ 1.5・1.1 17.8	部分的に研磨が施されておらず未製品。	
434	一括	石製品	砥石	2/3		6.7・ 4.2・— 141	小口を除いて、4面使用。手前小口は原石面。4面とも丁寧に使い込まれている	
No	層位	種類	器種	残存率	計測値cm、長さ・巾・厚さ			観察表掲載頁
435	下層	鉄製品	鎌	完形	14.7・2.8・0.8			892
			鎌	3/4	8.3・2.3・0.4			
436	上層	鉄製品	鎌	2/3	7.5・2.8・0.3			892
437	下層	鉄製品	刀子	3/4	身	1.1・1.2・0.4		893
					茎	6.5・0.6・0.2		
438	上層	鉄製品	繩	完形	4.4・最大巾推定1.5・0.2			896
439	下層	鉄製品	不明		径3.5 (2.7)・—・0.5			897

SD59 出土土器片分類別数量一覧表

器種	溝部分名称		SD59 北側部分				SD59 中間部分					SD59 南側部分					SD46
	分類名	層名	上層	下層	最下層	一括	上層	中層	下層	最下層	一括	上層	中層	下層	最下層	一括	一括
土師器 坏	A I					2	4	3	1		5	4	5	1		11	32
	A II						2	9	2		10	7	5	2		11	
	A III					2	19	10	5	5	41	33	13	6	1	46	
	B I	1					3	13	4	4	16	17	7	5		32	23
	B II					8	74	71	29	3	168	193	84	39		180	19
	B III					1	5	11	1	2	28	25	11	5		29	5
	B IV	7	1			4	4	9	2		18	18	10	2		30	105
	B V	2				6	8	14	4	9	35	41	16	6		50	16
口縁部					3	20	20	6	1	61	51	10	11		75		
底・体部					13	45	512	331	85	24	579	409	288	82	2	441	

第3章 検出遺構・遺物

器種	溝部分名称		SD59 北側部分				SD59 中間部分					SD59 南側部分					SD46
	分類名	層名	上層	下層	最下層	一括	上層	中層	下層	最下層	一括	上層	中層	下層	最下層	一括	一括
土師器碗	A					1	15	24	3	2	12	24	12	3		29	
	B		1			1	3		2	1	2	10	2	1	10		
	口底	縁部	1			1	29	29	8	2	57	75	25	20		120	
土師器皿	A I					1	11	6	1		13	15	12	6	1	31	
	B II						8	7	1		13	13	6	4	1	13	
暗文土器坏	A					1		1	2		5	4	1			9	2
	B					1	3	7	5		10	4	5	2		14	
	C					2	8	4	2		14	8	2	2		16	5
	D							1			9	4				5	17
	口底	縁部	1			2	2	2		1	1	7	2	4		8	1
	底	蓋				2	14	7	8		33	11	12	3		40	5
						1											皿 1
土師器 織内産	口縁部										1	4	1			4	
	体底部										3	23				20	
	把手										1	13		1		6	
須恵器蓋	鈕	A							3		2	2				3	
		B									1	2					
		C					3										
	カエリ	A I	5		2	18	10	10	8	3	24	16	6	3		13	
		A II					8	7	2	1	11	6	2	1		16	
		A III					6	4	4	2	9	10	6		1	10	
		B I						3	2		8	1				9	
		B II					2	4	5		6	8	2	3		11	
		B III					1				1	1		1		6	
		B IV					6	4	2		7	2		1		11	
		C					1	2			2	3	1			8	
		D										1	1	1	2	2	
		E I									1	3	5	1		11	
		E II										5	3	1		1	
		E III					1					1				3	
		F I					4	7	3		6	1	1	2		13	
		F II					1	1			1			1		1	
	F III				1	1	2			3					3	1	
	F IV						1			5					3		
	分類不可能な破片					4	2	2	2	6	4				7	6	
	天井部															9	
須恵器坏	A						2	4	1	1	8	7	3	5		1	
	B						1				1					10	
	C						1									5	
	D						1	1			1	1				1	
	E							1			1					1	
	F										3	4		1			
	G						9	5	2		22	7	3	1		44	
	H						13	9	2	1	34				1		
	I					1	6	7	2	1	20	3	2	1		13	
	J						2	5	2		13	1	3	1		7	
	K						1	4			4	4		1		7	
	L						2				1		1	1		2	

第4節 歴史時代

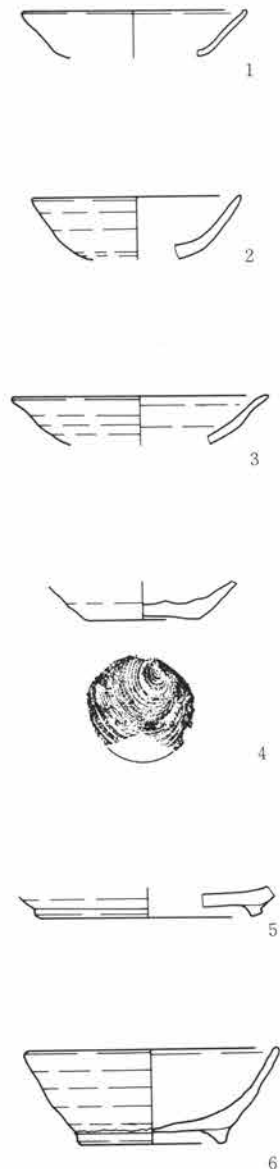
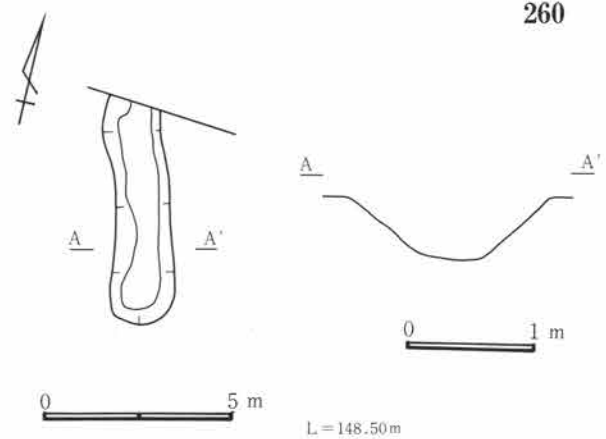
器種	溝部分名称		SD59 北側部分				SD59 中間部分					SD59 南側部分					SD46	
	分類名	層名	上層	下層	最下層	一括	上層	中層	下層	最下層	一括	上層	中層	下層	最下層	一括	一括	
須惠器 坏	M N O P 縁 口 体 底	部 部 部				1	3	1	2		5	2		1		16		
						4	3	1		2		2		1		3		
						5	18	30	7	3	84	26	3	8		39		19
			1	7		3	8	11	1	1	34	2	3	4	1	9		10
須惠器 碗	A B C						1	1		3	5	3	1		7			
長胴甕 土師器	縁 口 頸 胴 底	部 部 部					23	6			6				1	1		
									59								19	
小型甕 土師器	縁 口 頸 胴 底 脚	部 部 部									3	1	2	1	6	1		
						1		1	1		6	4	2		1	1	1	
(胴張型) 土師器 甕	縁 口 頸 胴 底	部 部 部				9	15	14	6		1	11	3	5		17	28	
						3	7	13	1	1	12	4		1		7	31	
						55	198	178	52	40	476	16				548	242	
						1	7	2	3		6					3	1	
長頸壺 須惠器	縁 口 頸 胴 底 台	部 部 部	1								1	1	2		2	3		
											1				2	1		
瓶 須惠器	胴	部				1		1		8								
壺・甕 須惠器	縁 口 頸 胴 底	部 部 部	1				2	3	3	3	15	21	8	6	1	49		
			2				3				3	3			7	1		
			8		1	2	37	28	18	6	44	38	18	13	1	69	31	
短頸壺 須惠器	縁 口 頸 胴 底	部 部 部																
			1				7	2	3		2	2	3		3	2		

分類不可能な破片については、部位によって分けた。

土師器台付甕は、口縁部へ胴部の形態・整形が他の小型甕と区別し難いため一括した。

S D94

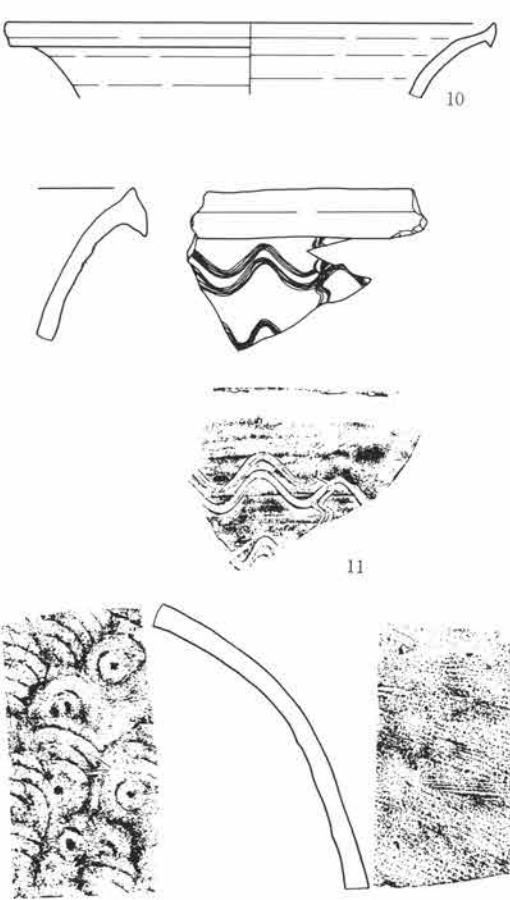
本遺構は、143~144 J-37~39グリッドに位置し、単独で占地する。本遺構の北端は、調査区域外にのびるため一部不明な点があるが、全長は5.9m、幅142~154cmを測る。深度は、15~45cmを測る。底面は、ほぼ平坦で北から南にかけて緩い傾斜をもつ。溝の走向は、N-17°-Eを指す。溝壁は、両壁とも40°前後の角度で緩やかに立ち上がる。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	8.4・4.2・— 小片 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はへら削り。
2	須恵器 坏 覆土	11.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部は立ち上がりで丸みをもち、口縁部は直線的に開く。
3	須恵器 坏 覆土	13.6・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもち大きく開く。口縁部は外反する。
4	須恵器 坏 覆土	—・6.0・— 1/8 細砂粒・白色鈹物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。底部は回転糸切り。
5	須恵器 盤 覆土	—・12.6・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形を呈し開く。
6	須恵器 碗 覆土	13.4・8.2・5.0 1/8 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもつ。高台は断面三角形を呈し直立する。



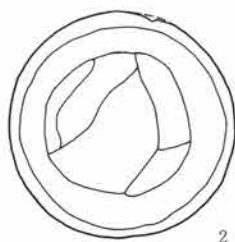
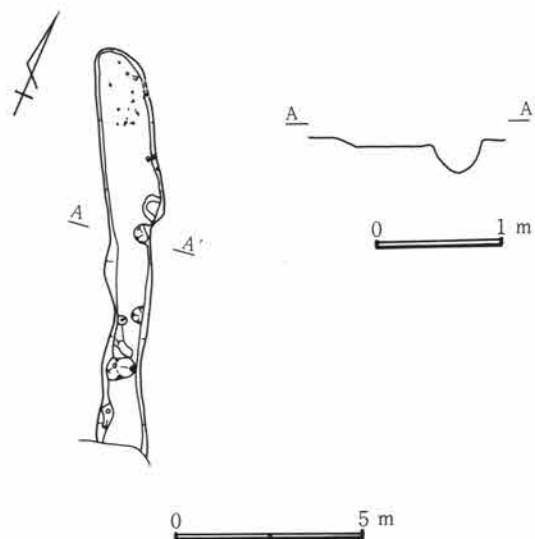
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 碗 覆土	—・7.2・— 1/8 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は断面三角形を呈しやや開く。底部は回転糸切り。
8	須恵器 碗 覆土	—・7.0・— 1/4 細砂粒 還元焰 灰黄色	ロクロ右回転。高台は直立し、底部は回転糸切り。
9	須恵器 甕 覆土	—・6.0・— 1/5 粗砂粒 半酸化焰 にぶい褐色	ロクロ右回転。高台は剥離、底部は回転糸切り。



10	須恵器 甕 覆土	26.0・—・— 小片 粗砂粒 還元焰 暗灰色	口縁部は外反し、口唇端部は上下に引き出され縁帯をなす。
11	須恵器 甕 覆土	—・—・— 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇端部は上下に引き出され縁帯状をなす。口縁部は波状文が施されている。
12	須恵器 甕 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	甕胴部片。外面は平行叩き、内面には同心円状のアテ具痕がみられる。

S D95

本遺構は、136～138 J-15～20グリッドに位置し、S T15、S J 138・139と重複するが、新旧関係は、S T15より本遺構のほうが古く、S J 138・139より新しい。本遺構の南側は、S T15によって切られているため全貌は不明であるが、残存部分での規模は、全長10.3m、幅89～145cmを測る。深度は、6～10cmと全体的に浅い。底面は、ほぼ平坦であるが、数ヶ所にピット状の落ち込みがみられる。溝の走行は、S-12.5°-Wを指す。



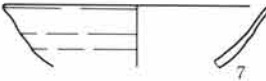
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.0・9.8・3.6 1/2 細砂粒・雲母 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。底部は極ゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で。体部は横方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	11.8・7.8・3.4 完形 細砂粒・雲母 普通 褐色	体部から口縁部にかけては直線的であり開かない。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は指撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	13.8・—・— 1/10 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部は指撫で。
4	土師器 坏 覆土	—・3.8・— 小片 細砂粒 普通 橙色	台付甕脚部。脚部は径8.8cmで裾部で大きく開き、横撫で。



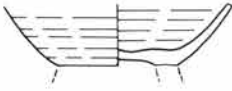
5



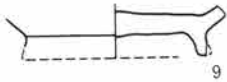
6



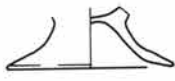
7



8



9



10



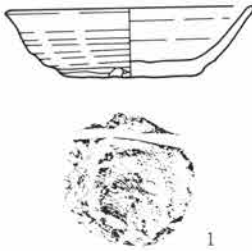
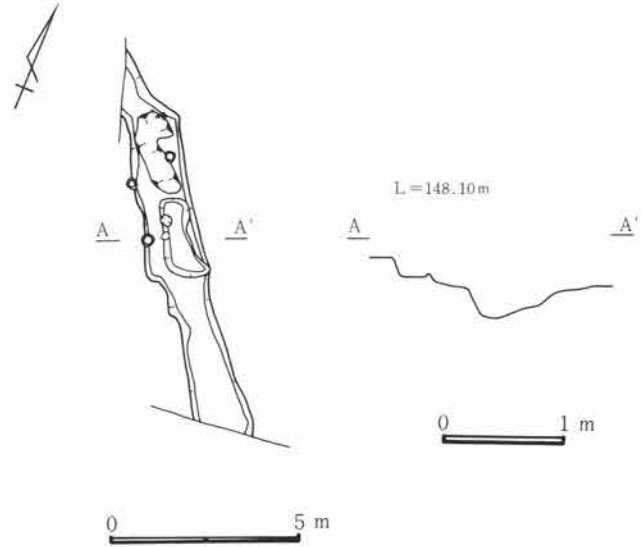
11

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
5	須恵器 坏 覆土	13.0・7.8・3.3 3/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部から口縁部にかけては外反し、底部は回転糸切り。
6	須恵器 坏 覆土	13.8・6.2・4.2 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち、口唇部はやや外反する。底部は回転糸切り。
7	須恵器 坏 覆土	14.0・ - ・ - 1/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開く。
8	須恵器 碗 覆土	- ・ 6.4 ・ - 1/3 粗砂粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部は丸みをもちやや開く。高台は剝離。底部は回転糸切り。
9	須恵器 瓶 覆土	- ・ 9.6 ・ - 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	長頸壺底部。ロクロ右回転。高台は断面四角形でやや開き、底部は撫で。
10	土師器 台付甕 覆土	- ・ 3.8 ・ - 小片 細砂粒 普通 橙色	台付甕脚部。脚部は径8.8cmで裾部で大きく開き、横撫で。
11	須恵器 甕 覆土	- ・ - ・ - 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇端部は上下に引きだされ縁帯状をなす。口縁部は波状文が施されている。

S D97

261

本遺構は、134～137 J—32～36グリッドに位置し、S D98、S J 137と重複するが、新旧関係は、S D98より本遺構のほうが古く、S J 137より新しい。本遺構の北側は、S D98によって切られ、端側は調査区域外にのびるため全貌は不明であるが、残存部分での規模は、全長10.2m、幅94～147cmを測る。深度は、11～61cmを測る。底面は、若干の凹凸と土坑状の落ち込みがみられ、北から南にかけて緩やかな傾斜がみられる。

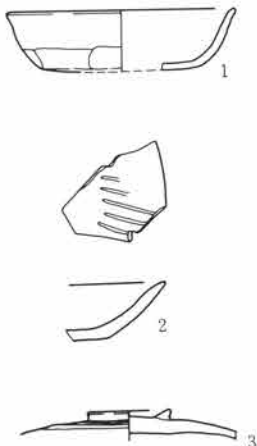


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	13.0・7.4・3.6、2/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち開き、口縁部は外反する。体部は底部粘土板上に粘土紐を巻き上げて形成し、底部は回転糸切り。

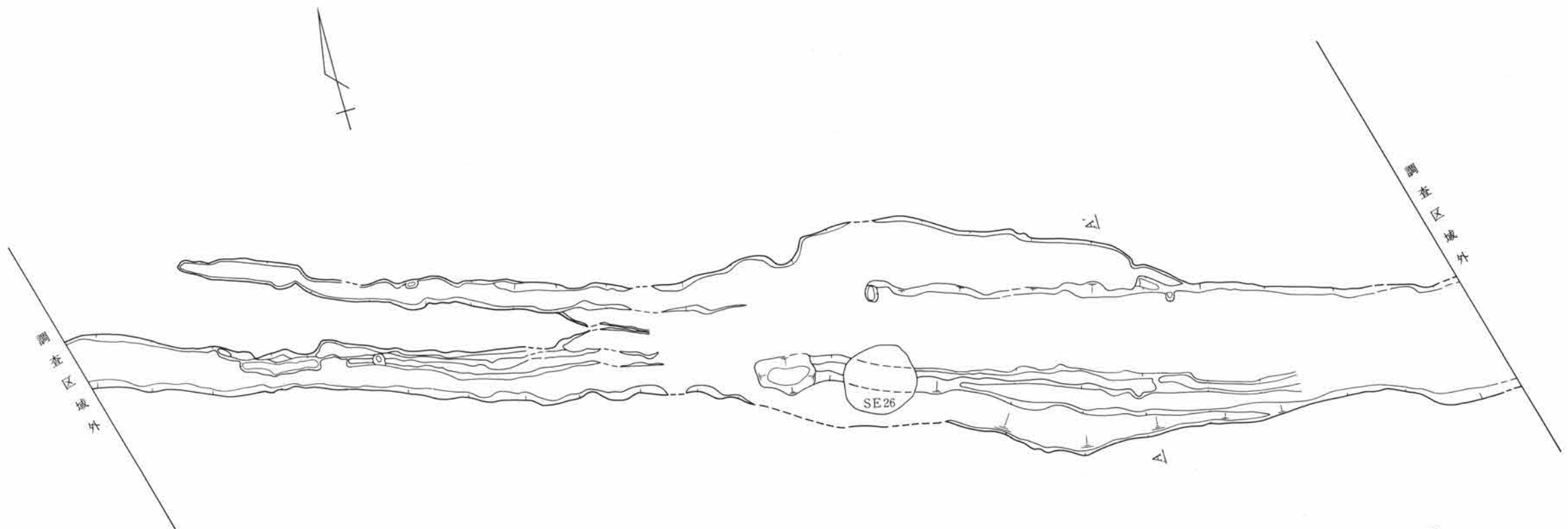
S D99・100

261

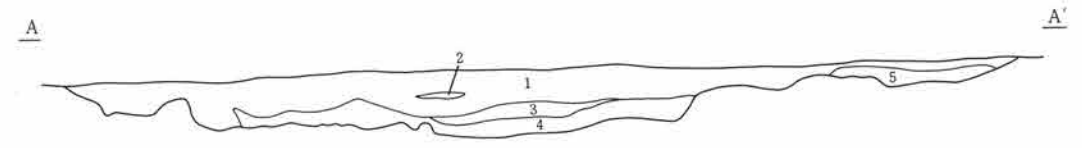
本遺構は、110～137 I—31～42グリッドに位置し、S E 26と重複するが、新旧関係は、明確にできなかった。また、S D99・100についても新旧関係は、土層断面等においても明確ではなく、同時期に存在したと推定される。本遺構は、調査区を横断するかたちで位置するため全貌は不明であるが、規模は、幅37～210cmを測る。深度は、7～43cmを測る。底面は、多少の凹凸がみられ西から東にかけて傾斜している。溝の走向は、おおむねN—75°—Wを指す。溝壁は、だらだらとした緩やかな立ち上りを呈す。覆土は、自然堆積状態を呈し、大部分が黒褐色土で覆われている。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.0・8.0・3.2、1/5 細砂粒 普通、にぶい褐色	口縁部は直線的で口縁部は僅かに外反する。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。底部は平底を呈す。外面の口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り。内面の体部は放射状暗文が施されている。
3	須恵器 蓋 覆土	—・鈕4.4・—、小片 粗砂粒 還元焰、灰白色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、天井部は丸みを持ち、中心部は回転ヘラ削り。



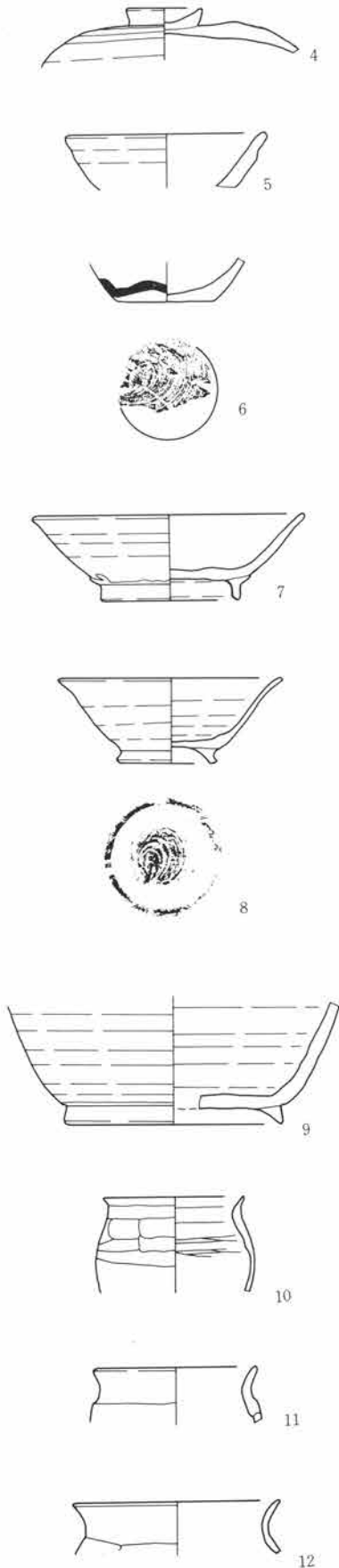
L=146.80m



- 1 黒褐色土 C軽石を含む 部分的に酸化による水平の縞が生じる
- 2 黒褐色土 地山ブロックを主とする
- 3 黒褐色土 地山ブロックをわずかにまじえ粘性あり
- 4 黒褐色粘質土 3よりも黄色味が強い
- 5 黒色土

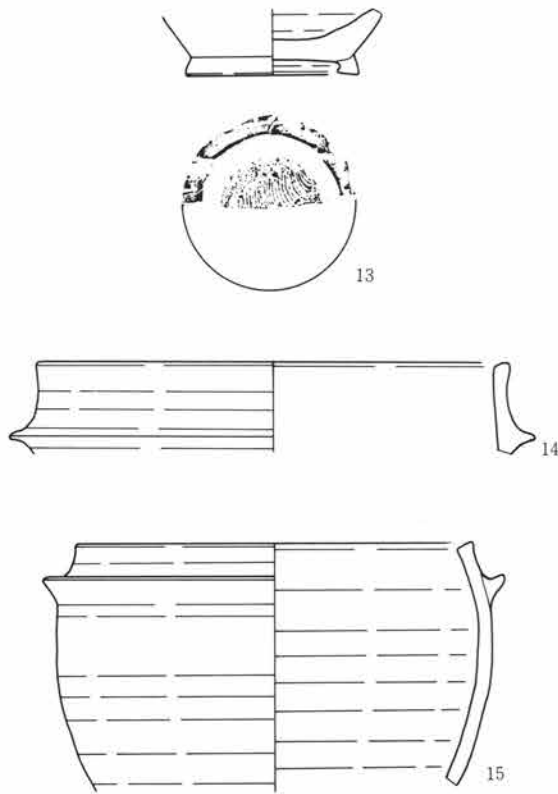


第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 蓋 覆土	—・紐4.4・— 2/5 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。器壁は厚く紐は輪状に形態を呈し、天井部はゆるい丸みをもつ。天井部の中心部には僅かに糸切痕がみられる。
5	須恵器 坏 覆土	—・11.6・—、小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけてはやや丸みをもち開く。
6	須恵器 坏 覆土	—・5.4・— 1/6 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち開く。底部は回転糸切り。体部に煤の付着がみられる。
7	須恵器 碗 覆土	16.0・8.2・5.1 小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち開く。口縁部はやや外反する。高台は直立し、底部は回転糸切り。
8	須恵器 碗 覆土	13.2・6.2・5.0 1/2 粗砂粒 酸化焰 灰オリーブ色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち開き、口縁部は外反する。高台はやや反りながら開く。底部は回転糸切り。
9	須恵器 碗 覆土	—・13.0・— 1/8 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。器壁は厚く、体部はゆるい丸みをもちやや開く。高台は断面三角形でやや開く。
10	土師器 甕 覆土	8.3・—・— 1/10 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部はゆるい「コ」の字状を呈し、胴部はゆるい丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で。胴部は左方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。
11	土師器 甕 覆土	9.6・—・— 小片 粗砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部は外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、胴部はヘラ削り。
12	土師器 甕 覆土	12.2・—・— 小片 細砂粒 普通 にぶい褐色	口縁部はゆるい「コ」の字状を呈し、胴部はゆるい丸みをもつ。外面の口縁部は横撫で。胴部は左方向へのヘラ削り。内面の胴部はヘラ撫で。

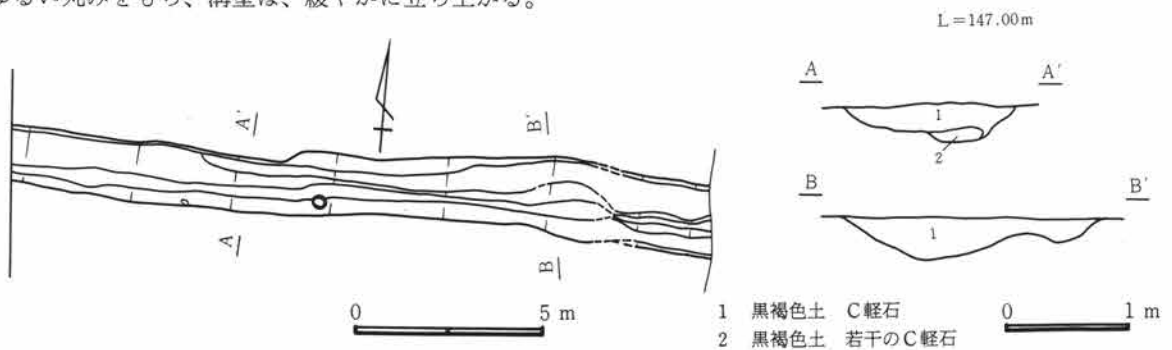
第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
13	須恵器 長頸壺 覆土	—・8.8・— 小片 粗砂粒・亜角礫 還元焰 灰色	長頸壺底部。ロクロ右回 転。器壁は厚く、高台は 断面台形状を呈し、接地 面は広い。底部は回転糸 切り。
14	須恵器 羽釜 覆土	25.0・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉾物 粒 酸化焰 明赤褐色	口縁部はほぼ直立し、口 唇端部は平坦でやや内傾 し、銜は断面三角形で水 平方向を向く。
15	須恵器 羽釜 覆土	21.0・—・— 1/8 粗砂粒・褐色鉾物 粒 酸化焰 にぶい黄橙色	口縁部は内傾し、口唇部 は平坦。胴部はゆるい丸 みをもち銜は断面三角形 を呈し、やや上方を向く。

S D104

本遺構は、121～132 I-24～25グリッドに位置し、S K105・196、S J 164と重複するが、新旧関係は、S K105・196より本遺構のほうが古く、S J 164より新しい。本遺構の東側は、調査区域外にのび、西端はS K 196に切られているため全貌は不明である。規模は、幅152～200cmを測る。深度は、45～56cmを測る。底面は、ゆるい丸みをもち、溝壁は、緩やかに立ち上がる。

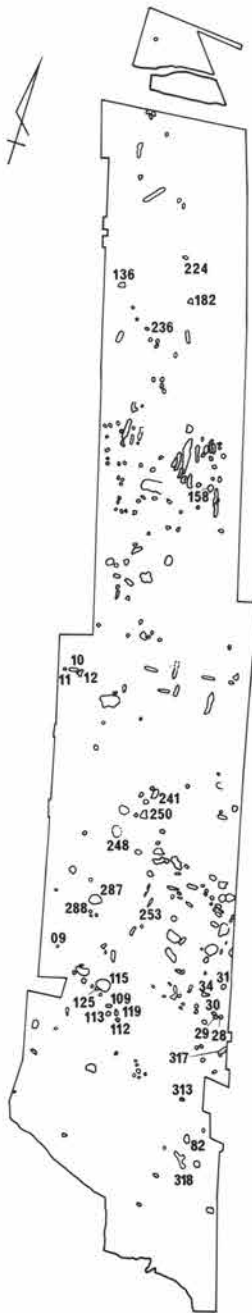


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 埴 覆土	—・6.8・—・1/8 細砂粒・褐色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形を呈し、 底部は回転糸切り。



6 土壇 (SK)

土壇 時代一覽表



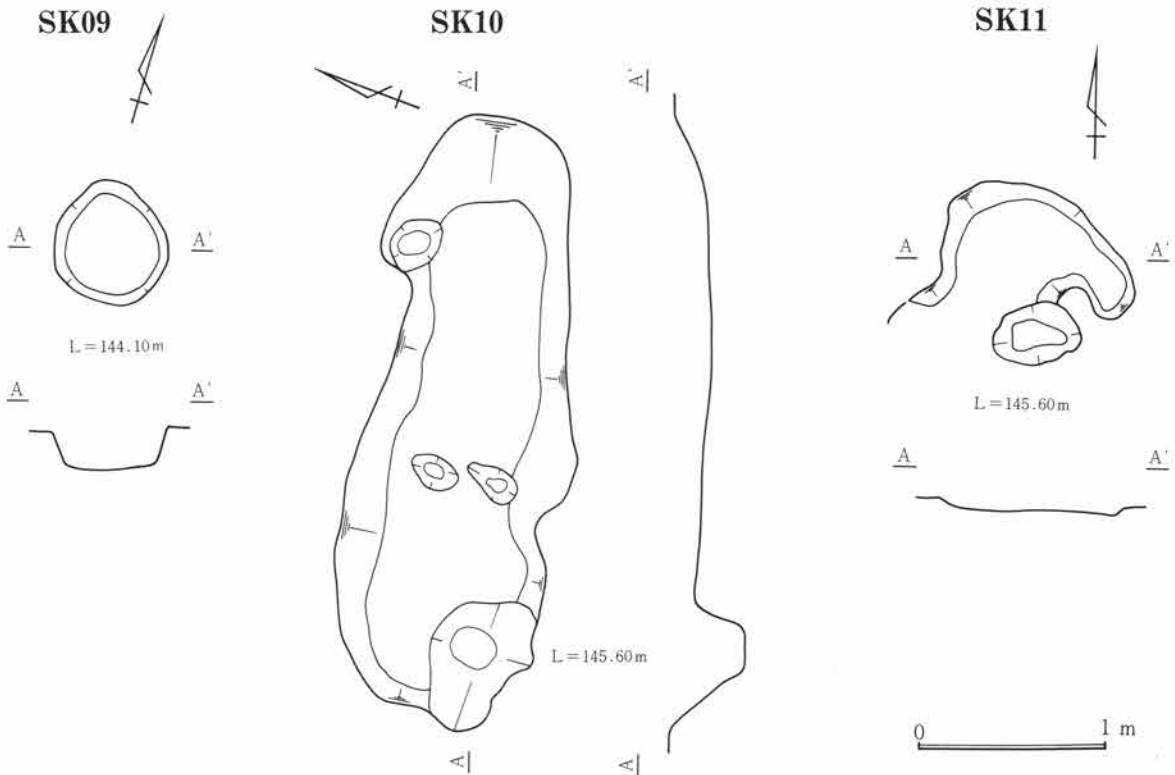
土壇配置図(歴史時代)

0 50m

遺構名	時代	遺構名	時代	遺構名	時代
1	欠番	56	中世	111	明代
2	欠番	57	不欠	112	古代
3	欠番	58	不明	113	明代
4	欠番	59	不明	114	明代
5	中世	60	不明	115	古代
6	不明	61	欠番	116	欠番
7	不明	62	中世	117	不明
8	欠番	63	不明	118	明代
9	古代	64	不明	119	古代
10	古代	65	不明	120	欠番
11	古代	66	中世	121	欠番
12	古代	67	欠番	122	中世
13	中世	68	欠番	123	中世
14	不明	69	欠番	124	欠番
15	不明	70	不明	125	古代
16	不明	71	不明	126	中世
17	中世	72	現代	127	中世
18	中世	73	欠番	128	中世
19	不明	74	欠番	129	不明
20	中世	75	欠番	130	不明
21	中世	76	不明	131	不明
22	不明	77	不明	132	不明
23	不明	78	不明	133	不明
24	不明	79	不明	134	現代
25	不明	80	不明	135	欠番
26	不明	81	不明	136	古代
27	不明	82	古代	137	中世
28	古代	83	不明	138	中世
29	古代	84	不明	139	中世
30	古代	85	欠番	140	中世
31	古代	86	欠番	141	中世
32	欠番	87	欠番	142	中世
33	不明	88	欠番	143	欠番
34	古代	89	欠番	144	欠番
35	欠番	90	欠番	145	欠番
36	欠番	91	欠番	146	中世
37	不明	92	欠番	147	中世
38	不明	93	欠番	148	中世
39	不明	94	欠番	149	中世
40	不明	95	不明	150	不明
41	不明	96	不明	151	中世
42	中世	97	不明	152	中世
43	不明	98	不明	153	中世
44	中世	99	不明	154	中世
45	中世	100	不明	155	近世
46	中世	101	不明	156	中世
47	中世	102	不明	157	不明
48	中世	103	不明	158	古代
49	中世	104	不明	159	中世
50	不明	105	欠番	160	中世
51	不明	106	欠番	161	不明
52	中世	107	不明	162	中世
53	中世	108	欠番	163	明代
54	不明	109	古代	164	古代
55	中世	110	不明	165	中世

第3章 検出遺構・遺物

遺構名	時代	遺構名	時代	遺構名	時代	遺構名	時代	遺構名	時代	遺構名	時代
166	中世	195	現代	224	古代	253	古代	282	欠番	311	欠番
167	中世	196	現代	225	欠番	254	中世	283	欠番	312	中世
168	中世	197	中世	226	欠番	255	欠番	284	不明	313	欠番
169	中世	198	欠番	227	欠番	256	中世	285	欠番	314	欠番
170	中世	199	欠番	228	欠番	257	欠番	286	欠番	315	欠番
171	中世	200	欠番	229	中世	258	中世	287	古代	316	欠番
172	中世	201	不明	230	古代	259	不明	288	古代	317	欠番
173	中世	202	不明	231	中世	260	不明	289	欠番	318	欠
174	欠番	203	不明	232	欠番	261	現代	290	欠番		
175	欠番	204	不明	233	欠番	262	不明	291	不明		
176	欠番	205	中世	234	中世	263	不明	292	不明		
177	中世	206	中世	235	欠番	264	中世	293	不明		
178	中世	207	中世	236	古代	265	欠番	294	不明		
179	中世	208	現代	237	欠番	266	中世	295	不明		
180	中世	209	不明	238	不明	267	中世	296	不明		
181	欠番	210	欠番	239	中世	268	中世	297	不明		
182	古代	211	中世	240	中世	269	不明	298	不明		
183	不明	212	不明	241	古代	270	欠番	299	中世		
184	近世	213	不明	242	欠番	271	不明	300	不明		
185	近世	214	中世	243	中世	272	不明	301	欠番		
186	近世	215	中世	244	中世	273	不明	302	欠番		
187	不明	216	不明	245	中世	274	中世	303	不明		
188	近世	217	中世	246	中世	275	欠番	304	不明		
189	中世	218	中世	247	不明	276	中世	305	欠番		
190	不明	219	中世	248	古代	277	中世	306	中世		
191	中世	220	中世	249	不明	278	欠番	307	欠番		
192	不明	221	欠番	250	古代	279	欠番	308	欠番		
193	不明	222	中世	251	欠番	280	欠	309	欠		



第4節 歴史時代



SK 09

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	—・12.6・—、小片 細砂粒 還元焰、灰白色	ロクロ右回転。底部は不定方向への ヘラ削り。



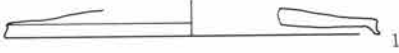
SK 10

1	須恵器 碗 覆土	—・10.0・—、1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。高台は細身で 「ハ」の字状に開く。底部は回転糸 切り。
---	----------------	--	---

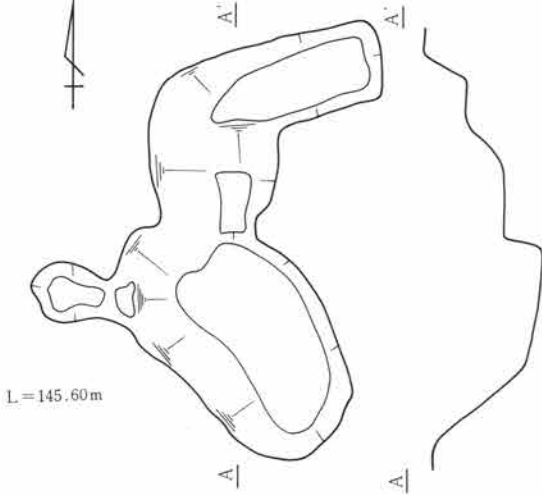


SK 11

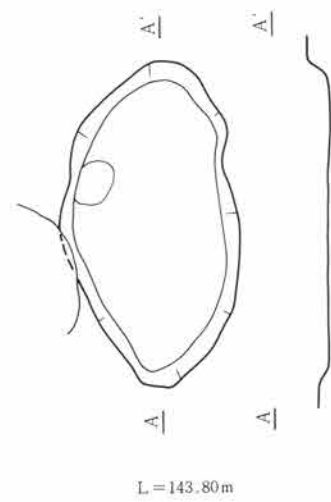
1	須恵器 蓋 覆土	19.8・—・—、小片 粗砂粒・細砂粒・黒色 鉱物粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線 的、口唇部は折り曲げてやや外反す る。
---	----------------	---	--



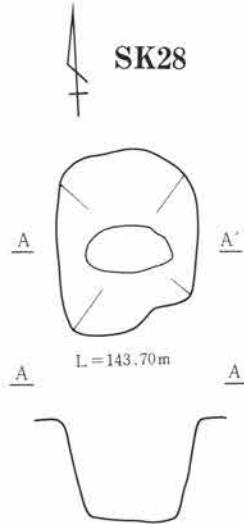
SK12



SK29



SK28



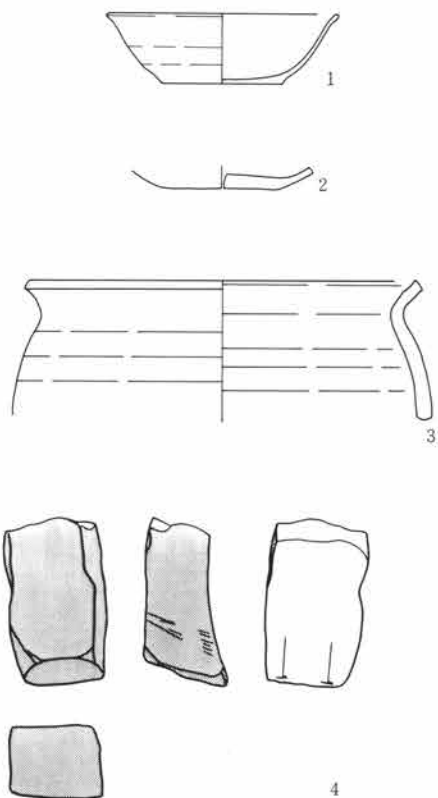
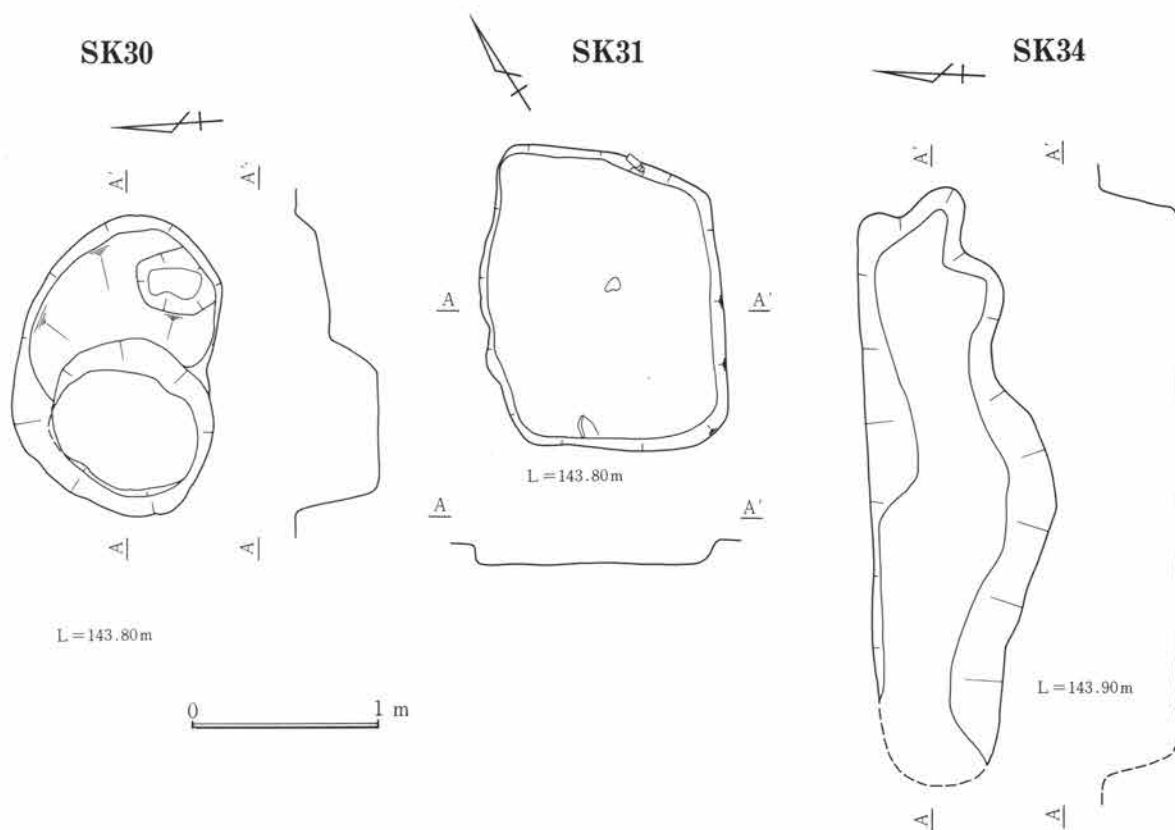
0 1 m



SK 28

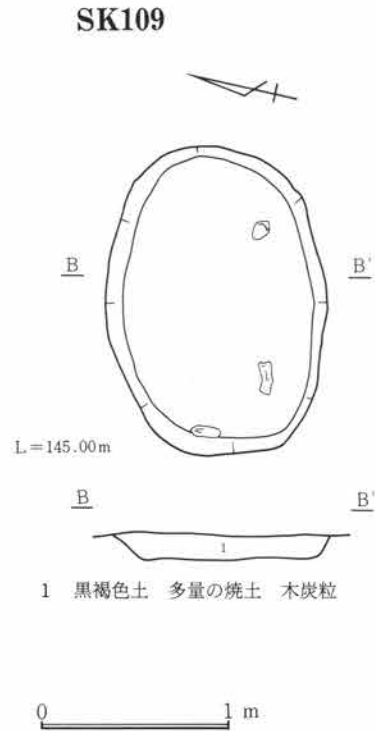
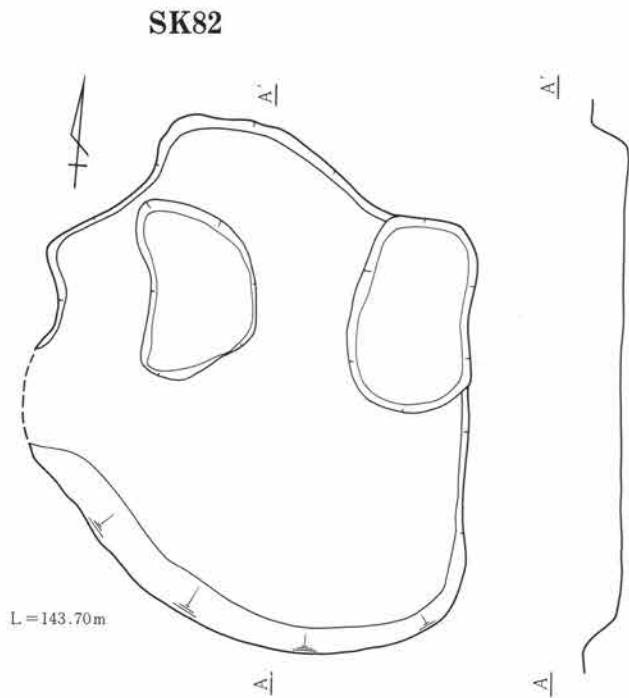
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	10.4・7.5・4.2、2/5 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。体部は直線的でほとんど開かず、口縁部は やや外反する。底部はヘラ切り後、回転ヘラ削り。体部下 位は1～2段の回転ヘラ削り。





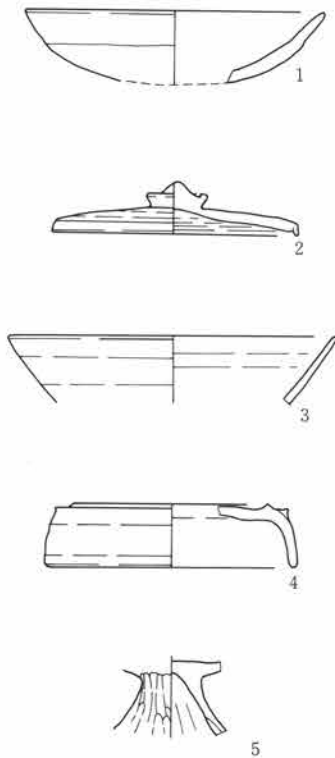
SK34

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	12.0・8.4・3.7、1/6 細砂粒・粗砂粒・褐色 鉍物粒 酸化焰 にぶい橙色	ロクロ回転方向不明。体部は丸 みをもち大きく開く。口縁部は 外反する。底部は回転糸切り。
2	須恵器 坏 覆土	—・6.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。底部は回転糸切 り。
3	須恵器 甕 覆土	26.0・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	口縁部は短く直線的に開く。胴 部はゆるい丸みをもつ。
No	種 類	観察表掲載頁	
4	土製品 瓦	778	



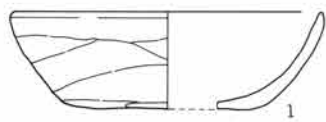
1 黒褐色土 多量の焼土 木炭粒

S K 82

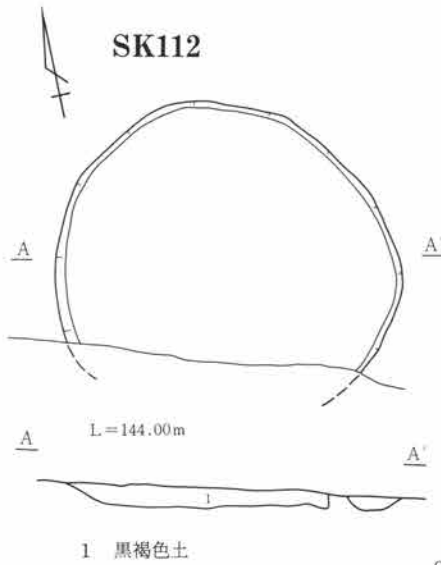


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	15.8・—・—、小片 細砂粒・雲母・褐色鉍 物粒 普通、橙色	体部から底部にかけては丸みもち、口縁部 は直線的に開き、体部との間に弱い稜をもつ。 口縁部は横撫で、体部から底部にかけてはへ ら削り。
2	須恵器 蓋 覆土	13.0・鈕3.2・2.8、4/5 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。鈕は擬宝珠形を呈し、天井部 は直線的。口縁部は折り曲げ、外面は自然釉 が付着。
3	須恵器 壺 覆土	17.2・—・—、小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰、灰色	口縁部は直線的に大きく開く。
4	須恵器 蓋 覆土	12.2・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	短頸壺蓋。ロクロ回転方向不明。天井部はほ ぼ平坦で周辺部は1条の凸帯がまわる。口縁 部はほとんど開かない。天井部と口縁部の間 に断面三角形の小規模の鐔が貼付されてい る。外面には自然釉が付着。
5	土師器 高坏 覆土	—・—・—、小片 細砂粒 やや軟質、橙色	脚部は大きく開き、細かいへら削りが施され ている。

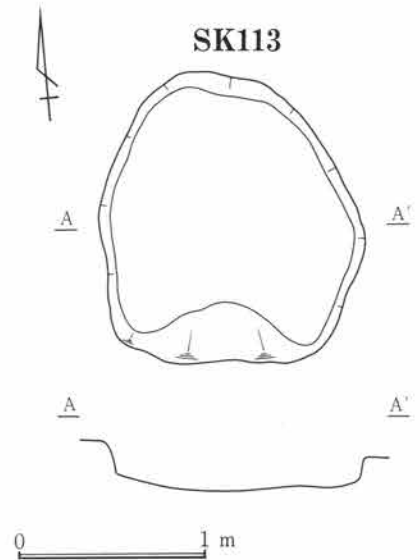
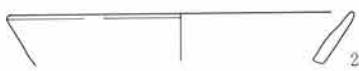
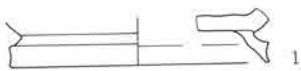
S K 109



1	土師器 高坏 覆土	16.2・11.0・5.2、1/3 粗砂粒 普通 橙色	体部は直線的に大きく開き、口縁部は内湾す る。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体 部は2～3段の左方向へのへら削り。底部は 不定方向へのへら削り。
---	-----------------	--------------------------------------	---



1 黒褐色土



S K 112

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 長頸壺 覆土	—・16.2・—、小片 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰色	高台は大きく開き、端部は帯状に上下に 引き出されている。

S K 113

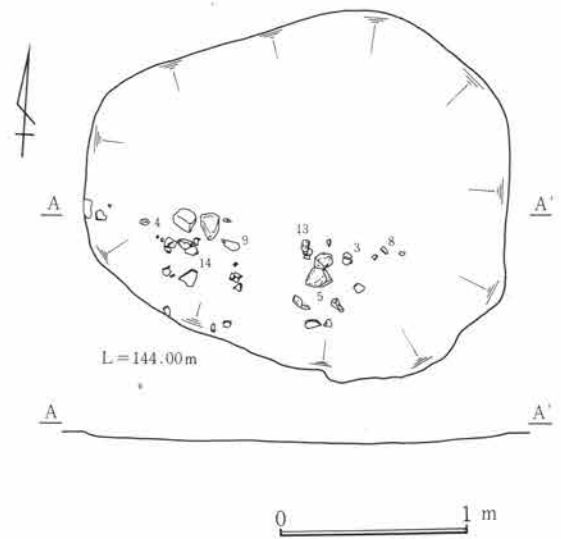
1	須恵器 坏 覆土	14.2・10.2・3.6、1/10 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にか かけては直線的に開く。底部は回転ヘラ 削り。体部は下位に1段のヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	18.4・—・—、小片 細砂粒・褐色鉾物粒 やや軟質、橙色	口縁部は直線的に開き、整形等は不明。

S K 115

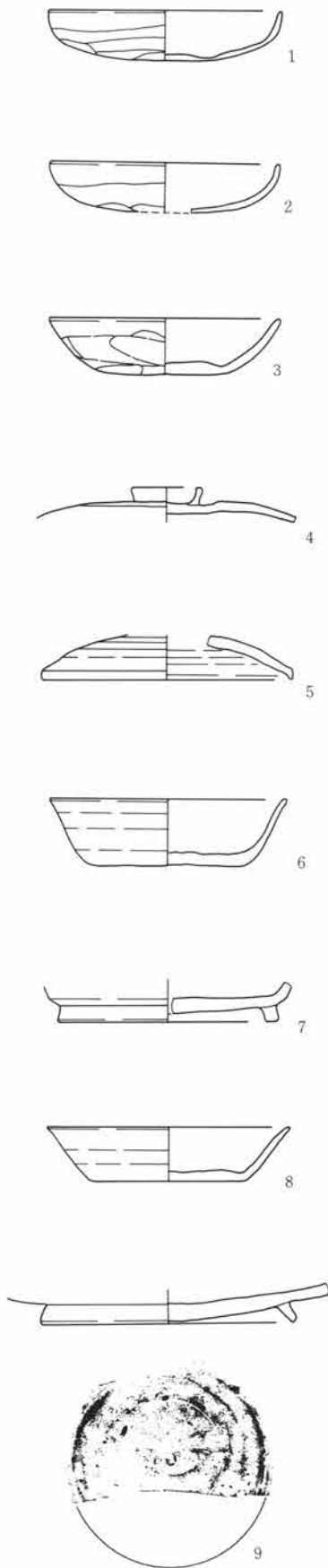
本遺構は、102~105G-33~35グリッドに位置し、S K125、S B24と重複するが、新旧関係は、S K125より本遺構のほうが古く、S B24とは確認できなかった。平面形態は、隅丸六角形状を呈す。規模は、長軸4.50m、短軸3.86m、面積13.74m²を測る。確認面からの深度は、14cmと浅く、立ち上がりは緩やかで底部との境は不明確である。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・鉢・短頸壺、刀子の他に30cm前後の自然礫が出土している。なお、出土遺物は、南半分集中している。

264

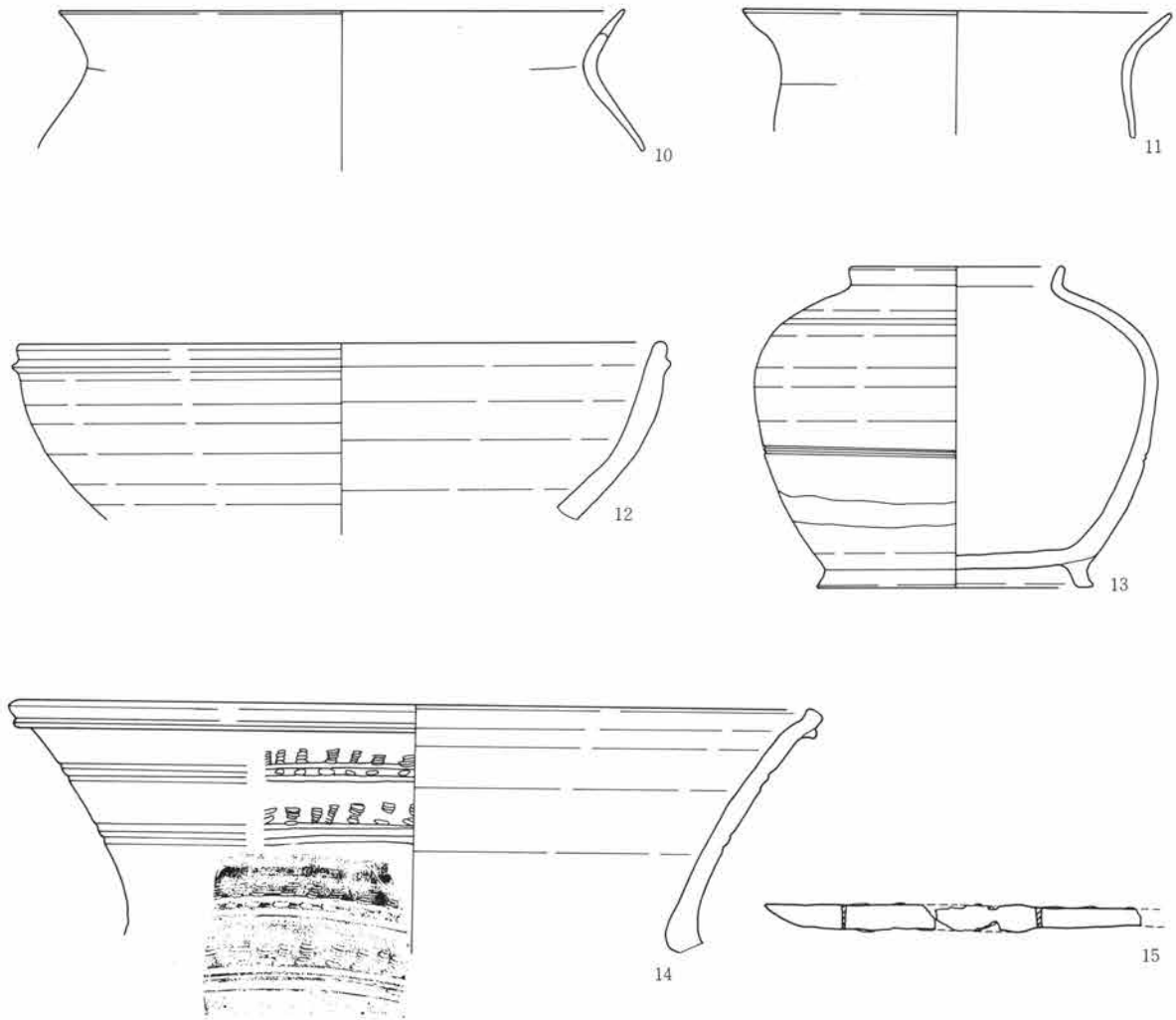


第4節 歴史時代



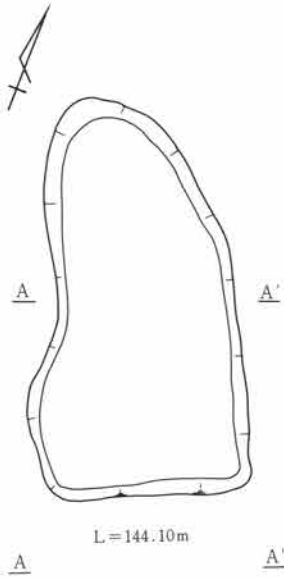
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.6・12.4・33.0 1/2 細砂粒・粗砂粒・雲母 褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	口縁部はゆるい丸みをもち開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 坏 覆土	13.4・8.2・2.9 1/4 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部はゆるい丸みをもち開き、底部はほぼ平底を呈す。口縁部の上半は横撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	13.6・8.4・3.3 3/5 粗砂粒・角礫 普通 にぶい橙色	体部から縁部はゆるい丸みをもち開く。底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部は1段の左方向へのヘラ削り。底部はヘラ削り。
4	須恵器 蓋 覆土	—・鈕5.0・— 1/2 粗砂粒・白色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は輪状を呈し、鈕端部に凹線が回る。天井部は、ほぼ平坦で回転ヘラ削り。
5	須恵器 蓋 覆土	14.8・—・—、1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち3分の2程度まで回転ヘラ削り。
6	須恵器 坏 覆土	13.8・9.0・3.9 1/2 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。体部はゆるい丸みをもち僅かに開く。口縁部は外反する。底部はヘラ切り後、不定方向へのヘラ削りが施されている。
7	須恵器 坏 覆土	—・13.0・— 1/8 細砂粒・亜角礫 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。高台は断面四角形を呈し、接地面は広い。底部は回転ヘラ削り。
8	須恵器 坏 覆土	14.4・9.2・3.2、1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	体部は直線的に開き口縁部は僅かに外反する。底部はヘラ切り。
9	須恵器 盤 覆土	—・—・— 1/4 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は細身で「ハ」の字状に開く。高台径は15.0cmを測る。底部の高台の内側は回転ヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物

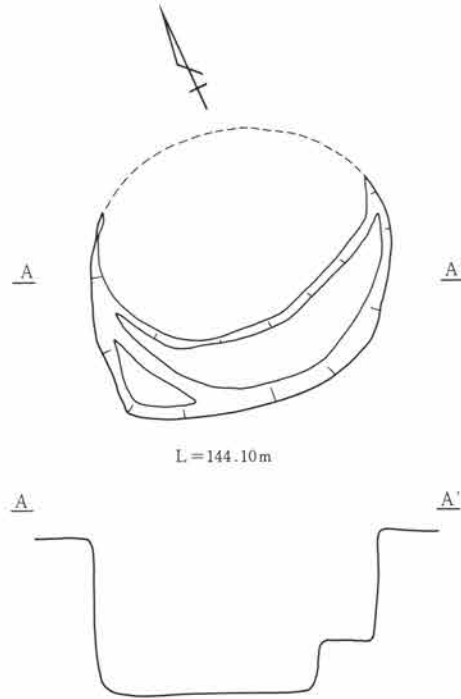


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
10	土師器 甕 覆土	30.0・—・—、小片 細砂粒・雲母、普通、橙色	器壁は薄く、口縁部は「く」の字状に開く。胴部上位は横方向へのヘラ削り。
11	土師器 甕 覆土	22.6・—・—、小片 細砂粒・雲母、普通、橙色	器壁は薄く口縁部は直線的に開き、横撫で。胴部は横方向のヘラ削り。
12	土師器 甕 覆土	22.6・—・—、小片 細砂粒・雲母、普通、橙色	器壁は薄く口縁部は直線的に開き、横撫で。胴部は横方向のヘラ削り。
13	須恵器 短頸壺 覆土	11.4・14.2・16.9、4/5 細砂粒・白色鉾物粒・黒色 鉾物粒 還元焰 灰赤色	ロクロ右回転。口縁部は直線的でやや開く。胴部は肩から上位にかけて大きく張り、中・下位にかけてゆるい丸みをもち、胴部中頃に2～3条の凹線が施されている。高台はやや丸みをもつ、断面四角形を呈し、接地面はやや広い。胴部は下位に2～3段の回転ヘラ削り。底部は剥離のため不鮮明であるが回転ヘラ削りが施されている。
14	須恵器 甕 覆土	—・—・—、小片 細砂粒、還元焰、灰色	口縁部はやや外反し、各2条の沈線により区画され上2段に刺突文が施されている。口唇部には1条の凸帯が回り、端部は上下に引き出され平坦で外傾する。
No	種類	出土位置	観察表掲載頁
15	鉄製品 刀子	覆土	893

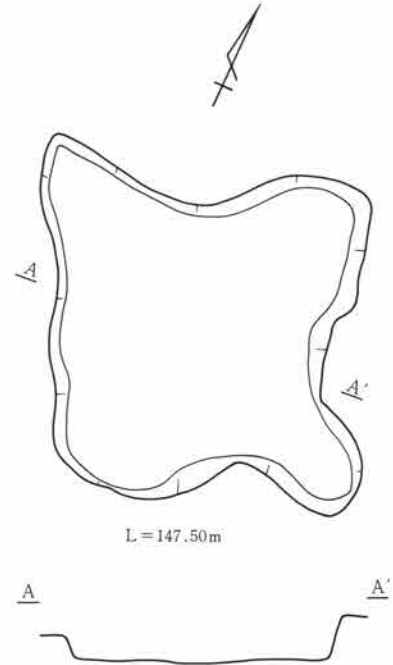
SK119



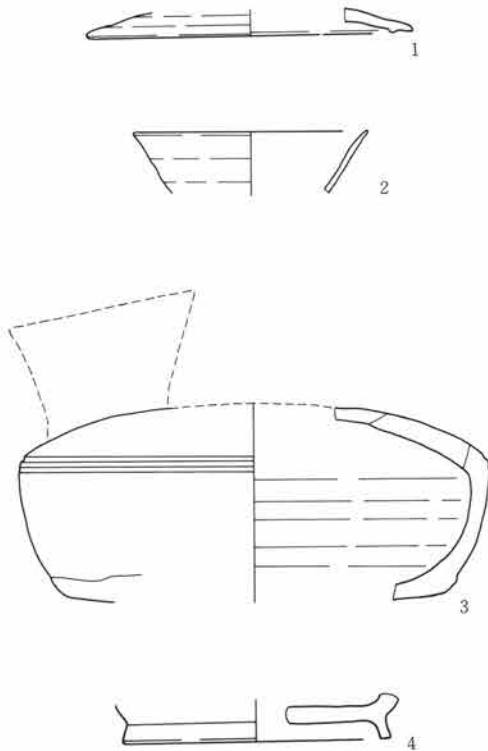
SK125



SK136

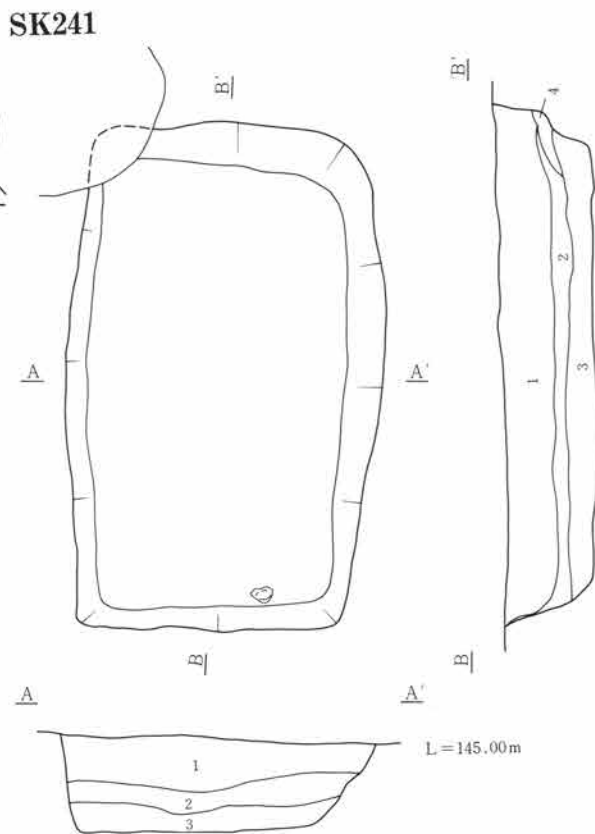
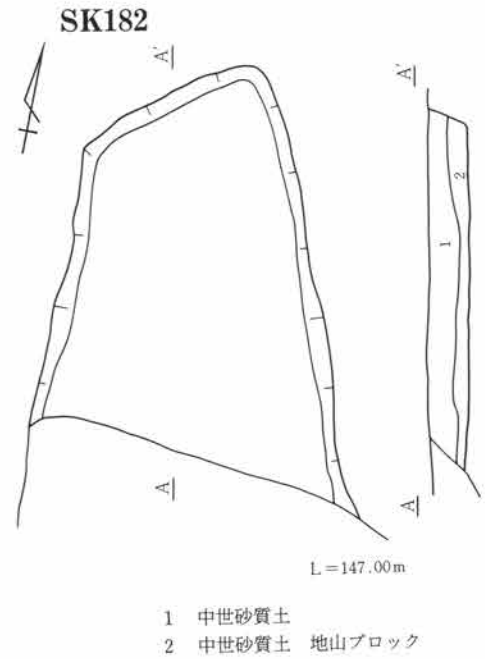
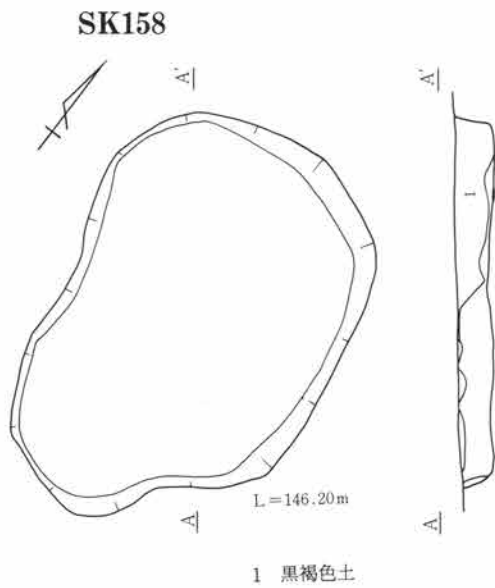


0 1 m



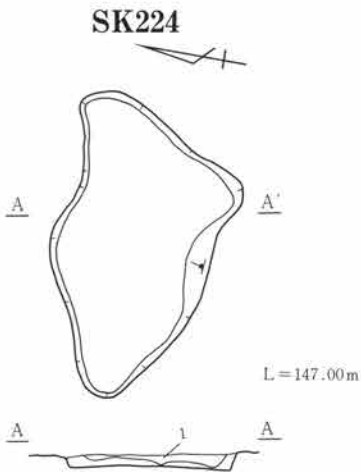
SK125

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	17.2・一・一・一、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	天井部はゆるい丸みをも ち内面に身受けのカエリ をもつ。
2	須恵器 坏 覆土	12.4・一・一・一、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	口縁部はやや外反し体部 は大きく開く。
3	須恵器 平瓶 覆土	一・一・一・一 小片 粗砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	最大径25.0cm、天井部は ゆるい丸みをもち、胴部 との間に2条の沈線が回 る。胴部の下位には1段 のヘラ削り。底部ヘラ削 り。外面の天井部には自 然釉が附着している。
4	須恵器 短頸壺 覆土	一・14.2・一 底部1/2 白色鉱物粒、還元焰 灰赤色	高台は長方形を呈し、接 地面は平坦である。底部 外面は回転ヘラ削り。S K115-13と同一個体。



SK241

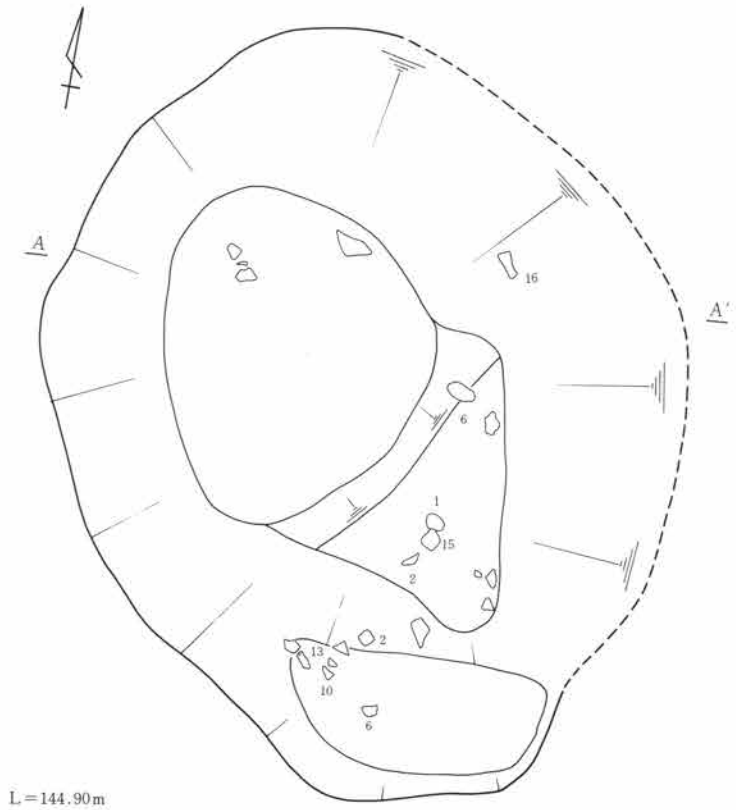
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土・焼成 色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	—・10.6・—、1/10 粗砂粒・白色鉱物粒・還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部は大きく開き、底部は回転ヘラ削り。



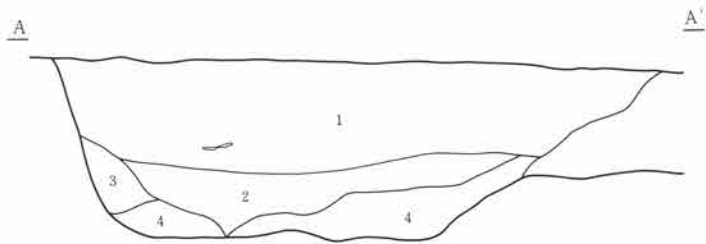
S K 248

266

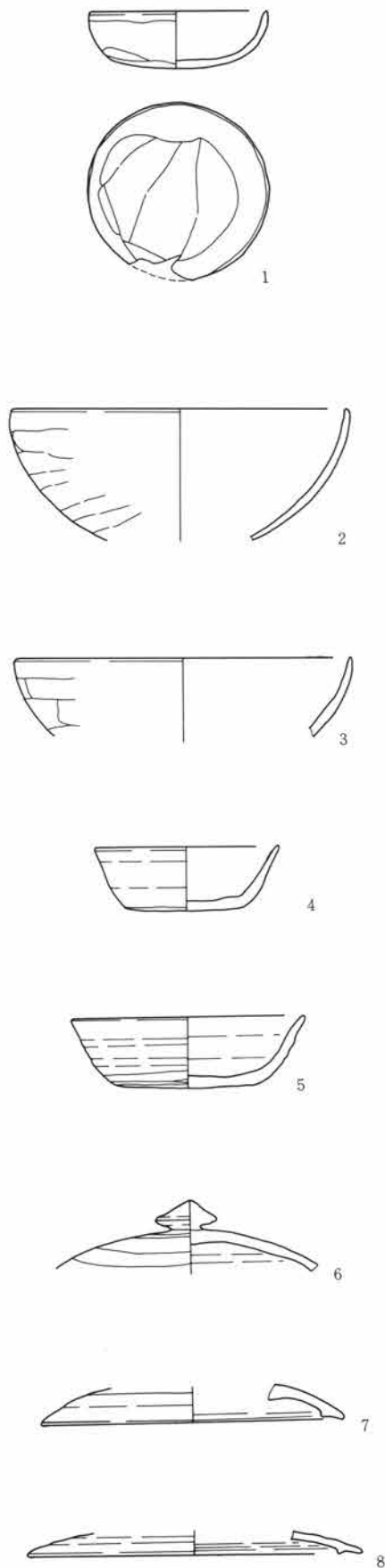
本遺構は、108～110H-07～09
グリッドに位置し、S J 204と重複
するが、新旧関係は、本遺構のほ
うが新しい。平面形態は、楕円形
を呈す。規模は、長軸4.10m、短軸
3.38m、面積10.28㎡を測る。覆土
は、レンズ状の自然堆積状態を呈
し、上層は黒褐色土、下層は暗褐
色土で覆われている。深度は、97
cmで、立ち上がりは、西側ではほ
ぼ垂直、東側は緩やかな状態で、
南側には一段のテラスが設けられ
ている。底部は、中程で低い段を
もつが、ほぼ平坦である。



- 1 黒褐色土 C軽石 褐色粒
- 2 暗褐色土 ロームブロック
- 3 暗褐色土 2に類似 2よりロームブロック多い
- 4 暗褐色土 若干のロームブロック

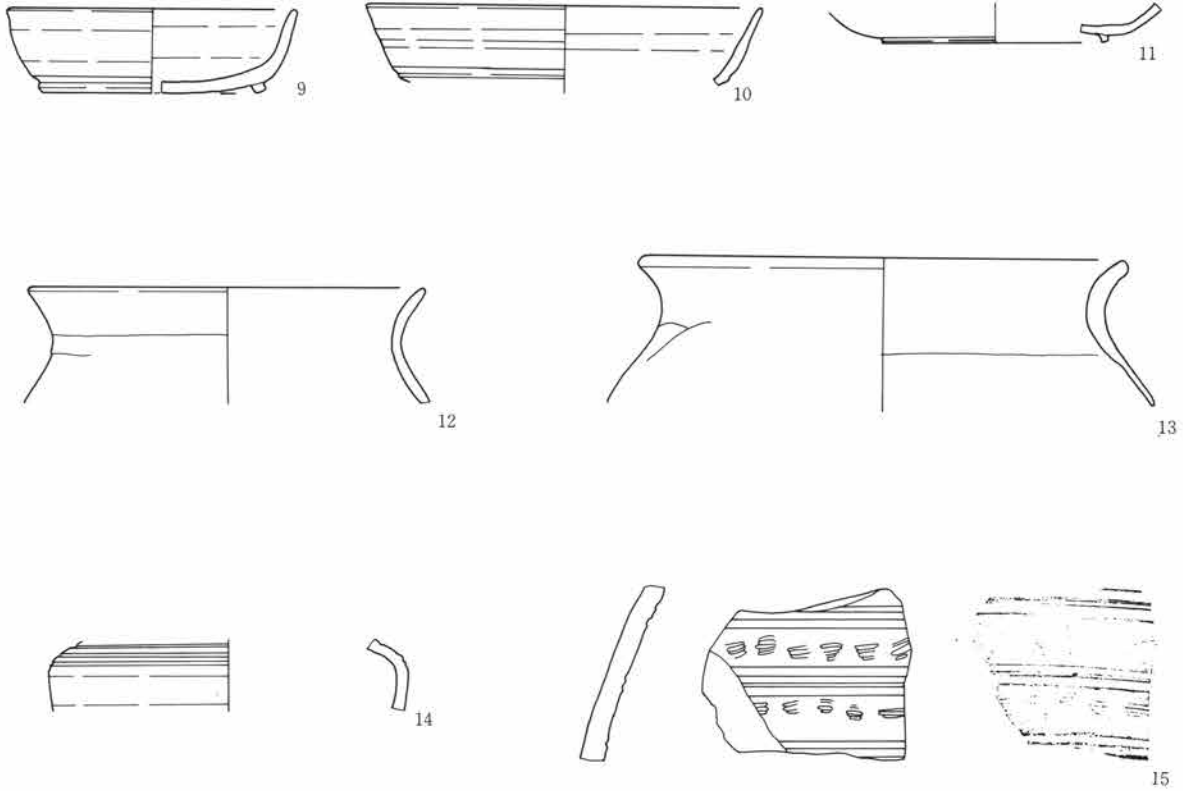


第3章 検出遺構・遺物

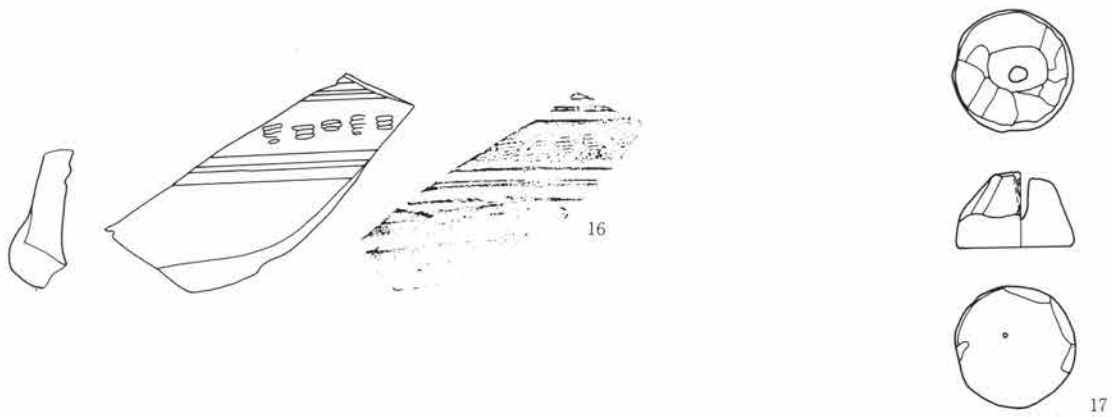


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	10.4・8.4・3.3 ほぼ完形 細砂粒・褐色鉱物粒 普通 にぶい橙色	口縁部はゆるい丸みをもち開き、 底部は平底を呈す。口唇部は横撫 で。口縁部から体部にかけては指 撫で、底部はヘラ削り。
2	土師器 鉢 覆土	19.6・—・— 1/10 細砂粒 雲母 普通 橙色	口縁部は内湾ぎみ、体部から底部 にかけて丸みをもつ。口縁部は横 撫で、体部は左方向へのヘラ削り。
3	土師器 碗 覆土	19.8・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	口縁部は内湾し体部は丸みをもち 開く。口縁部横撫で。体部は左方 向へのヘラ削り。
4	須恵器 坏 覆土	10.8・7.0・3.8 1/6 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。体部から口 縁部にかけては直線的に開く。底 部はヘラ切り後、不定方向のヘラ 削りが施されている。
5	須恵器 坏 覆土	13.8・8.2・4.2 1/4 粗砂粒 白色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。器壁はやや厚く口 縁部はやや外反し、底部から体部 にかけてはゆるい丸みをもち、移 行する。底部は回転ヘラ削り。体 部下位にも1・2段のヘラ削りが 施されている。
6	須恵器 蓋 覆土	—・鈕3.5・— 3/4 細砂粒 黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ左回転。鈕は宝珠形を呈し 天井部は丸みを呈す。天井部と鈕 との接合部分はヘラによる凹線が 施されている。天井部は回転ヘラ 削り。
7	須恵器 蓋 覆土	17.6・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	器壁はやや厚く天井部は丸みをも ち内面に身受けのカエリをもつ。 外面には自然釉が付着している。
8	須恵器 蓋 覆土	19.8・—・— 1/10 粗砂粒 還元焰 灰色	天井部は直線的で内面に身受けの カエリをもつ。

第4節 歴史時代



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	須恵器 坏 覆土	15.2・12.8・4.4、1/8 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部はゆるい丸みをもち僅かに開く。高台はやや丸みをもつ断面四角形を呈す。底部はゆるい丸みをもち高台より僅かに突出し回転ヘラ削り。
10	須恵器 坏 覆土	21.0・—・—、1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	体部から口縁部にかけては直線的で僅かに開く。体部と底部の間には凹線状のくぼみが見られる。
11	須恵器 碗 覆土	—・14.6・—、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部は大きく開き、高台は断面方形を呈し接地面は広い。底部回転ヘラ削り。
12	土師器 甕 覆土	20.8・—・—、小片 細砂粒・褐色鉱物粒・雲母 やや軟質、にぶい橙色	口縁部は直線的に開き横撫で、胴部は横方向へのヘラ削り。
13	土師器 甕 覆土	25.4・—・—、小片 粗砂粒・褐色鉱物粒・雲母、 普通、橙色	頸部から口縁部にかけて器壁厚く、胴部は薄い。頸部は明確な括れが見られず、口縁部は外反する。口唇端部は丸みをもち外傾する。口縁部は横撫で、外面の胴部は斜め方向へのヘラ削り。内面はヘラ撫で。
14	須恵器 長頸壺 覆土	—・—・—、小片 細砂粒、還元焰、灰色	胴部は肩部で大きく張り、胴部中位以下はゆるい丸みをもつ。
15	須恵器 甕 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、灰色	口縁部は2条の凹線によって区画されその間に刺突文が施されている。内外面とも自然釉が付着している。



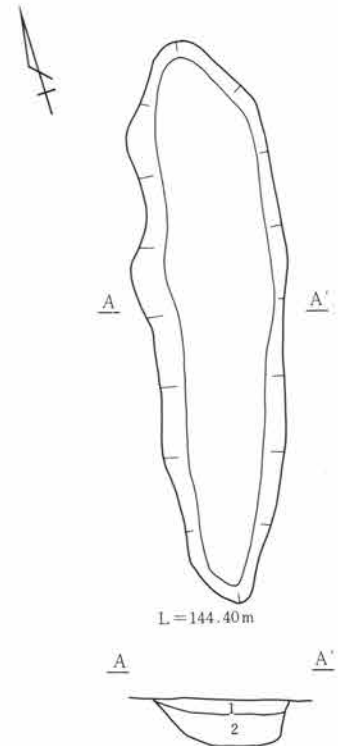
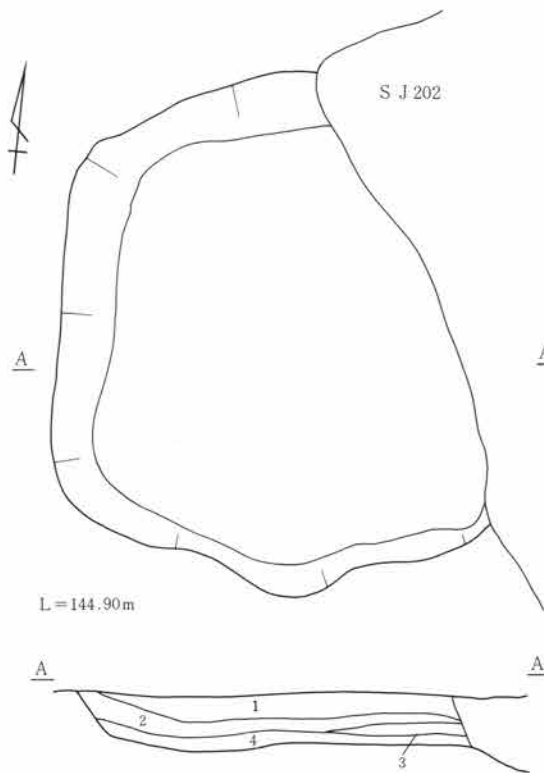
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴	
16	須恵器 甕 覆土	—・—・—、小片 細砂粒・黒色鈹物粒 還元焰、灰色	口縁部は2条の凹線によって区画され、その間に刺突文が施されている。	
No	種類	出土位置・石材	計測値(直径・厚さ)	特徴
17	石製紡錘車	覆土 流紋岩(砥沢?)	4.7・4.0	孔が貫通していず、側面の整形も雑で未製品と思われる。

SK250

266

SK253

267



- 1 暗褐色土 C軽石 若干の褐色粒
- 2 暗褐色土 多量のC軽石 1層に類似
- 3 黒褐色土 C軽石 若干の褐色粒
- 4 黒褐色土 C軽石 褐色粒 ローム粒

0 1 m

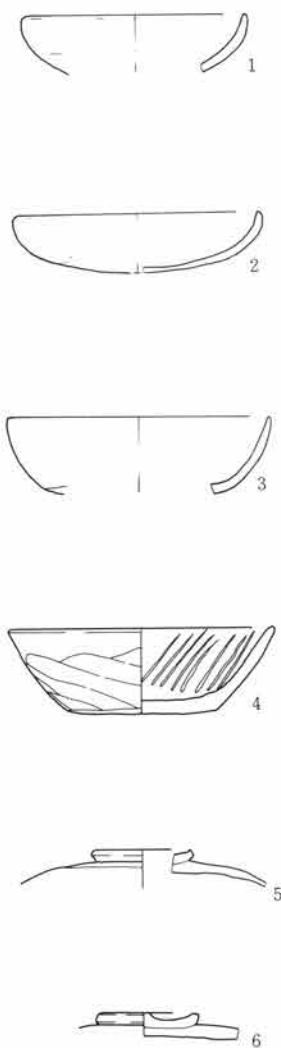
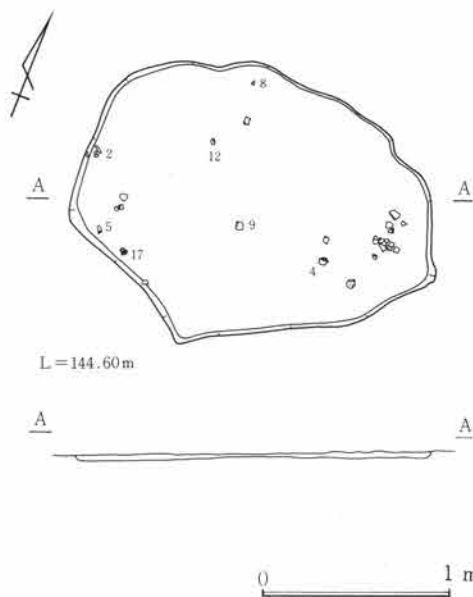
- 1 中世砂質土
- 2 中世砂質土 木炭粒

S K287

267

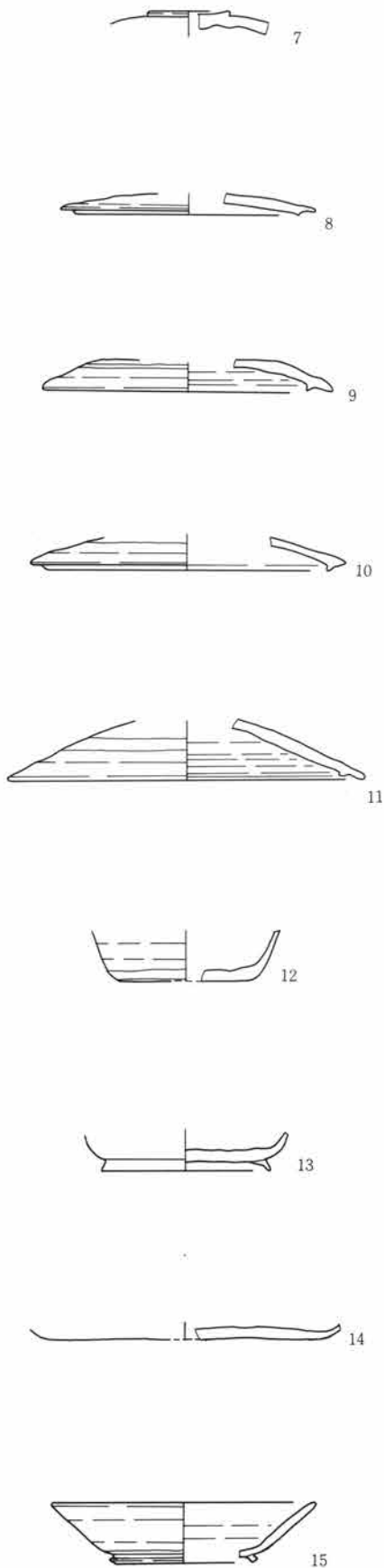
本遺構は、108～110G-46～47グリッドに位置し、S J 197・198と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形に近い形状を呈す。規模は、長軸1.94m、短軸1.52m、面積8.50m²を測る。覆土の堆積状態は、確認面から底部までが浅いため不明であるが、底部付近はロームブロック混りの黒褐色土である。深度は、5 cmと浅いため、立ち上がりの状態は不明である。底部は、緩やかな凹凸が若干みられるがほぼ平坦である。

出土遺物は、深度が浅いわりには多くの遺物が出土しているが、出土状態は、全体にちらばっている。



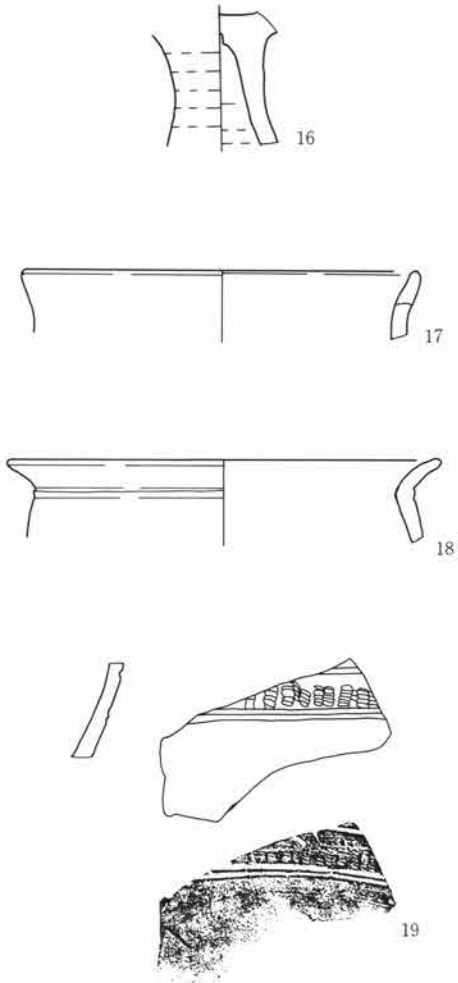
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.6・10.6・一、1/10 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	口縁部内湾気味。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で。底部はへら削り。
2	土師器 坏 覆土	12.6・12.0・3.1、1/4 細砂粒 普通 橙色	口縁部内湾気味。底部は丸底を呈す。口縁部は横撫で。底部はへら削り。
3	土師器 坏 覆土	13.8・10.0・一 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけてはゆるい丸みをもち、やや開く。底部はほぼ平底を呈す。口唇部横撫で。口縁部から体部にかけてはへら削り。
4	土師器 坏 覆土	14.0・8.0・4.5、1/5 細砂粒 褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。外面の口縁部横撫で。底部へら削り。内面の体部には斜放射状暗文が施されている。
5	須恵器 蓋 覆土	一・鈕5.0・一 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。鈕は扁平状で周辺部がやや上方に引き上げられている。天井部はゆるい丸みをもち回転へら削り。
6	須恵器 蓋 覆土	一・鈕5.4・一 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。鈕は扁平状で周辺部がやや上方に引き上げられている。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
7	須恵器 蓋 覆土	—・鈕4.8・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。鈕は扁平状を呈し、天井部は回転ヘラ削り。
8	須恵器 蓋 覆土	14.8・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面に身受けのカエリをもつ。外面は全面的に回転ヘラ削りが施されている。
9	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は中程で屈折し内面に身受けのカエリをもつ。
10	須恵器 蓋 覆土	18.6・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面に身受けのカエリをもつ。外面の中程まで回転ヘラ削りが施されている。
11	須恵器 蓋 覆土	21.6・—・— 1/6 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面に身受けのカエリをもつ。外面の中程まで回転ヘラ削りが施されている。
12	須恵器 坏 覆土	—・8.0・— 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもちやや開く。底部は回転ヘラ削り。
13	須恵器 碗 覆土	—・9.4・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもちやや開く。高台は断面三角形で「ハ」の字状に開く。
14	須恵器 坏 覆土	—・16.2・— 1/10 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ右回転。底部は回転ヘラ削り。
15	須恵器 碗 覆土	15.6・9.6・3.5 1/10 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的で大きく開く。高台は断面四角形を呈し、「ハ」の字状に開く。

第4節 歴史時代



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
16	須恵器 高坏 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ左回転。器壁は厚く脚 部上位は筒状を呈し、下半は やや開く。
17	土師器 甕 覆土	20.8・—・— 小片 細砂粒・褐色鉱物粒・ 雲母 普通 にぶい赤褐色	器壁はやや厚く、口縁部は上 半でやや丸みをもち極僅かに 開き横撫で。
18	土師器 甕 覆土	22.6・—・— 小片 細砂粒・褐色鉱物粒・ 雲母 普通 にぶい赤褐色	口縁部は外反し胴部はゆるい 丸みをもつ。口縁部は横撫で、 胴部は横方向へのヘラ削り。
19	須恵器 壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	器種不明。胴部片。外面は2 条の凹線によって区画された 内を刺突文が施されている。 凹線の下はヘラ削り。内面は ヘラ撫で。

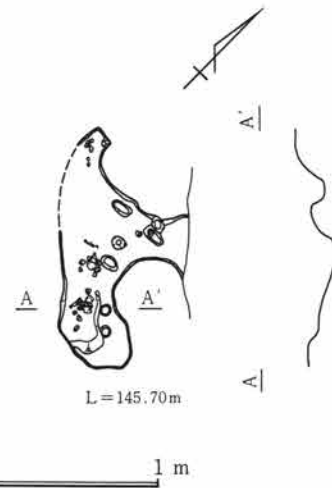
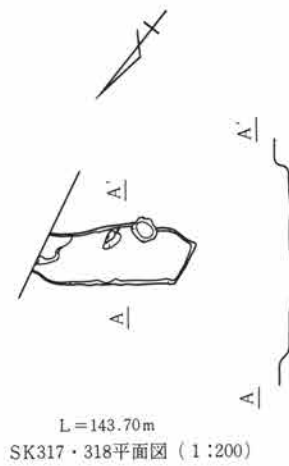
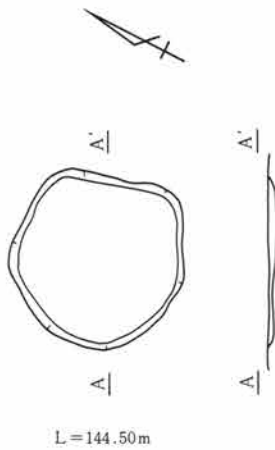
SK288

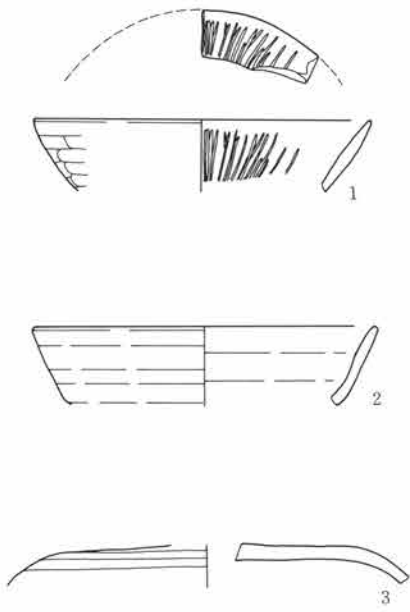
SK317

267

SK318

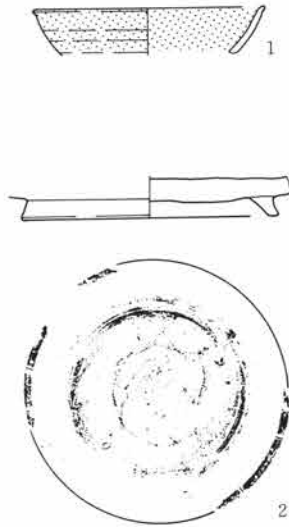
268





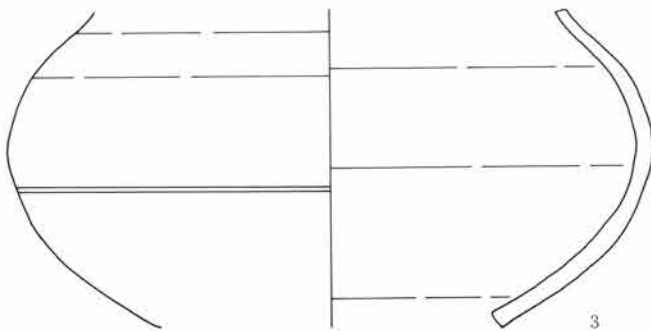
S K 317

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	17.8・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては直線的に開く。外面の口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。内面は斜放射状暗文が施されている。
2	須恵器 坏 覆土	12.6・—・— 小片 細砂粒・黒色鈹物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては直線的に開く。
3	須恵器 蓋 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色	大型短頸壺の蓋。天井部は水平で、口縁部はやや丸みをもつ。天井部は回転ヘラ削り。



S K 318

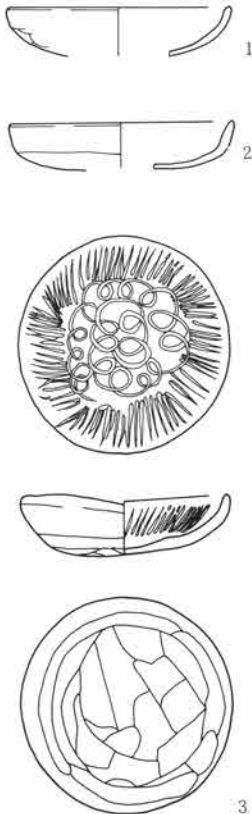
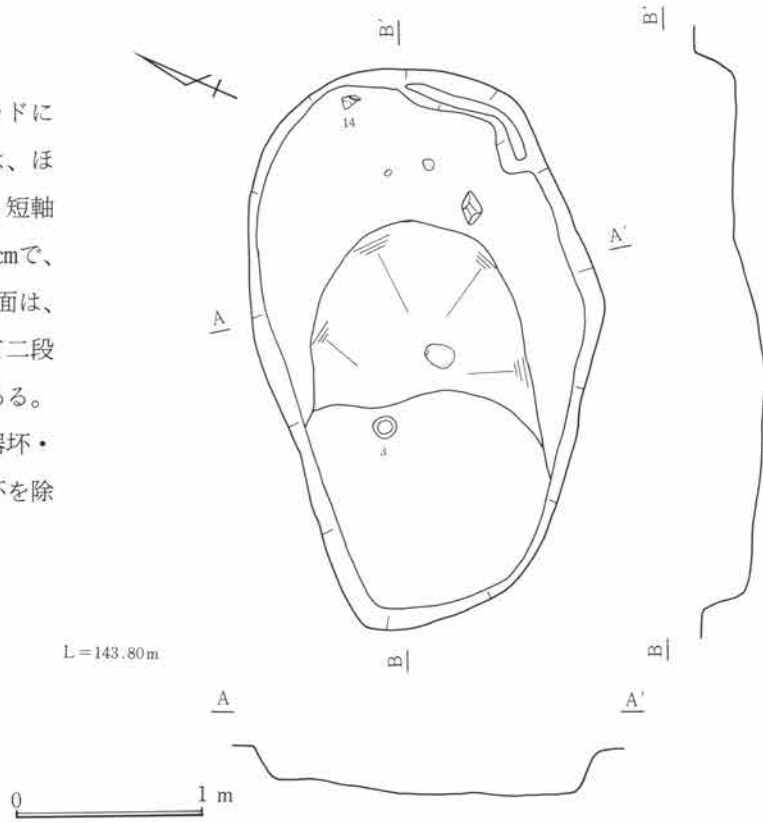
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	灰釉陶器 埴 覆土	12.2・—・— 1/10 緻密 還元焰焼きしめ 灰白色	体部はゆるい丸みをもち開く。口唇部はやや外反する。施釉方法は刷毛塗り、釉調は不透明な灰褐色。
2	須恵器 皿 覆土	—・13.0・— 1/8 粗砂粒・黒色鈹物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。高台は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り後、周辺部に回転ヘラ削りが施されている。
3	須恵器 短頸壺 覆土	—・—・—、1/10 細砂粒 還元焰・灰白色	短頸壺胴部。胴部は上位で大きくふくらむ。内外面をヘラ撫で。



S K313

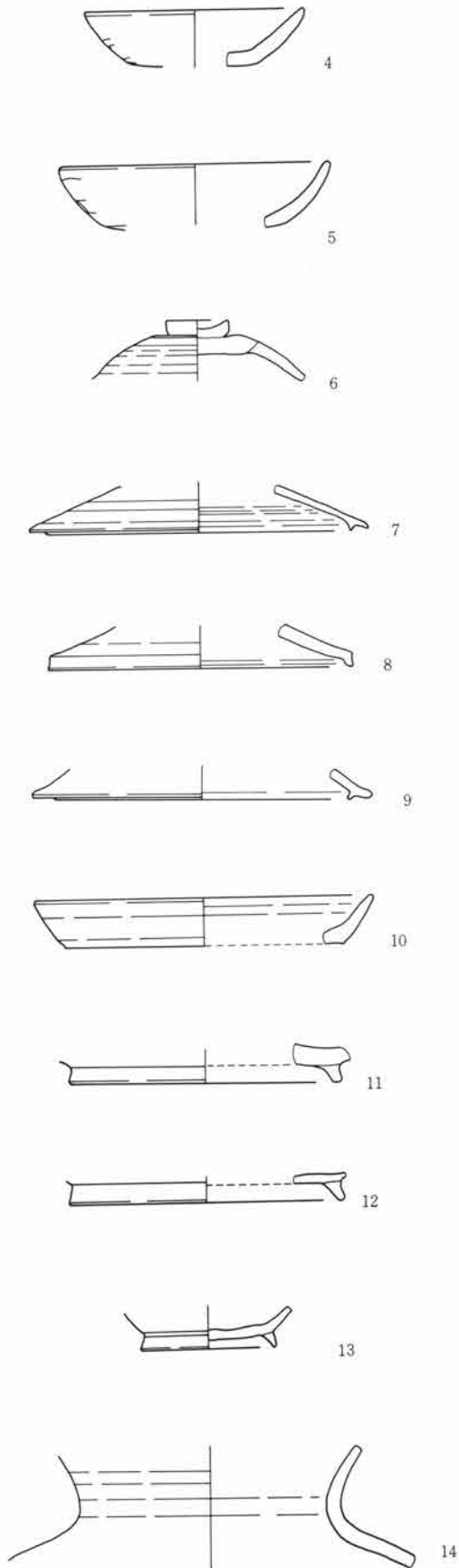
本遺構は、83~85G-19~20グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、ほぼ楕円形を呈す。規模は、長軸2.98m、短軸1.89m、面積4.08m²を測る。深度は、35cmで、立ち上がりは、垂直な状態である。底面は、中央部に緩やかな傾斜の段差によって二段になっており、両方ともほぼ平坦である。

出土遺物は、土師器坏・甕・須恵器坏・蓋・甕等がみられるが、3の土師器坏を除いて全て小破片である。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.8・—・— 1/10 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部は丸みをもち開き、底部は小径で平底を呈すと思われる。口縁部は横撫で。
2	土師器 坏 覆土	11.8・11.2・2.5 1/8 細砂粒 普通 にぶい橙色	口縁部は直線的でやや開く。底部はゆるい丸底を呈す。口縁部は横撫で、底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 覆土	11.0・7.8・3.2 完形 細砂粒・褐色鉾物粒 普通 橙色	器壁はやや厚く、口縁部は丸みをもち開き、口唇部は内湾さみである。底部はほぼ平底を呈す。外面の口縁部の上半は横撫で、下半は左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。内面の体部は放射状暗文、底部には螺旋状暗文が施されている。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
4	土師器 坏 覆土	12.6・7.6・3.3 1/10 細砂粒・褐色鉾物 粒 普通、橙色	器壁は厚く、体部から口縁部にかけては直線的に開き、底部は平底を呈す。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り。底部もヘラ削り。
5	土師器 坏 覆土	15.8・10.8・一、1/10 細砂粒・褐色鉾物 粒、軟質、橙色	口縁部はゆるい丸みをもち開く。口唇部は横撫で、口縁部から体部にかけてはヘラ削り。
6	須恵器 蓋 覆土	一・3.5・一、1/4 粗砂粒・亜角礫 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は周辺部がやや高まる扁平状を呈す。天井部は丸みをもち、中心部周辺は回転ヘラ削り。
7	須恵器 蓋 覆土	20.0・一・一、1/10 細砂粒・黒色鉾物 粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。天井部は直線的で内面に身受けのカエリをもつ。
8	須恵器 蓋 覆土	17.8・一・一、小片 細砂粒・黒色鉾物 粒 還元焰 灰黄色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、端部は折り曲げでやや開く。
9	須恵器 蓋 覆土	20.0・一・一 小片 細砂粒・黒色鉾物 粒 還元焰、灰白色	ロクロ回転方向不明。天井部は丸みをもち、端部はやや外反し、内面に身受けのカエリをもつ。
10	須恵器 坏 覆土	19.6・16.4・一 小片 細砂粒・黒色鉾物 粒 還元焰・灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては極ゆるい丸みをもち僅かに開く。高台は削り出しによる小規模なもの。
11	須恵器 瓶類 覆土	一・16.0・一 小片 細砂粒・黒色鉾物 粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。底部器壁は厚く、高台はやや開き接地面は平坦である。
12	須恵器 碗 覆土	一・15.8・一 小片 細砂粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。高台は端部に丸みをもち、やや開く。底部内側に回転糸切り痕がみられる。
13	須恵器 碗 覆土	一・7.6・一 1/10 黒色鉾物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。高台は断面三角形を呈し、「ハ」の字状に開く。底部はヘラ切り後ヘラ撫で。
14	須恵器 甕 覆土	一・一・一 小片 細砂粒・黒色鉾物 粒 還元焰、灰色	口縁部は外反ぎみに開き、胴部は大きな丸みをもつ。内面の頸部は横方向への撫で。

7 土 塚 墓 (SZ)

SZ05

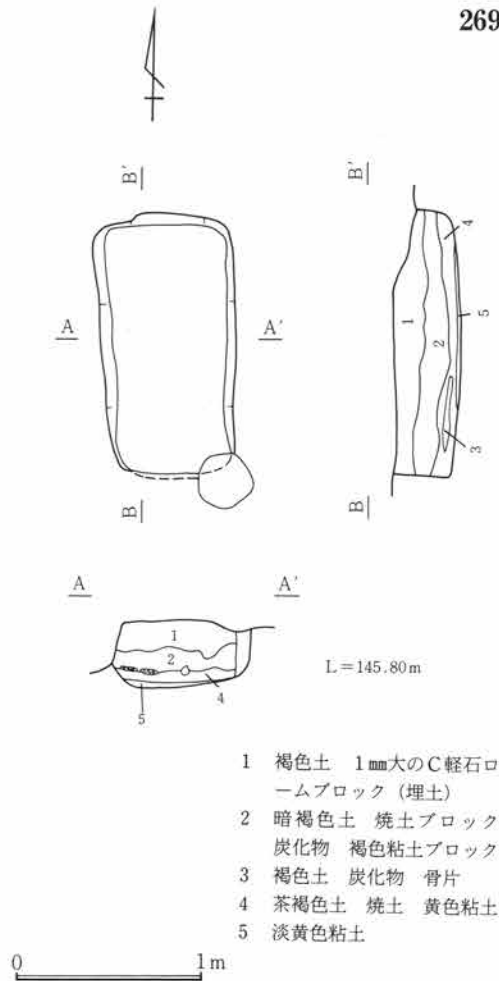
269

本遺構は、122～123H-46～47グリッドに位置し、SD31と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、長方形を呈す。規模は、長軸1.38m、短軸0.76m、深度は、確認面より33cmを測る。覆土は、上半が褐色土、下半が焼土ブロック・炭化物・褐色粘土ブロックを含む暗褐色土、底部付近は、焼土・黄色粘土混りの茶褐色土で覆われている。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、24～26cmを測る。底面は、ほぼ平坦である。

本遺構の壁は、黄褐色粘土による貼壁が施されており、表面が表土化している。また、底面には木炭が薄く層状をなしていることから、長方形の土塚を掘り込み、粘土壁を造り、そのなかで火葬をおこなったと推定される。火葬によるためか骨片は、底部の茶褐色土上に僅かにみられるだけであった。また、木炭のなかには、少量であったが竹材がみられた。

本遺構は、出土遺物が全ったくみられなかったが、重複するSD31が平安時代末に位置づけられた点や覆土から平安時代後半と推定される。



SZ16

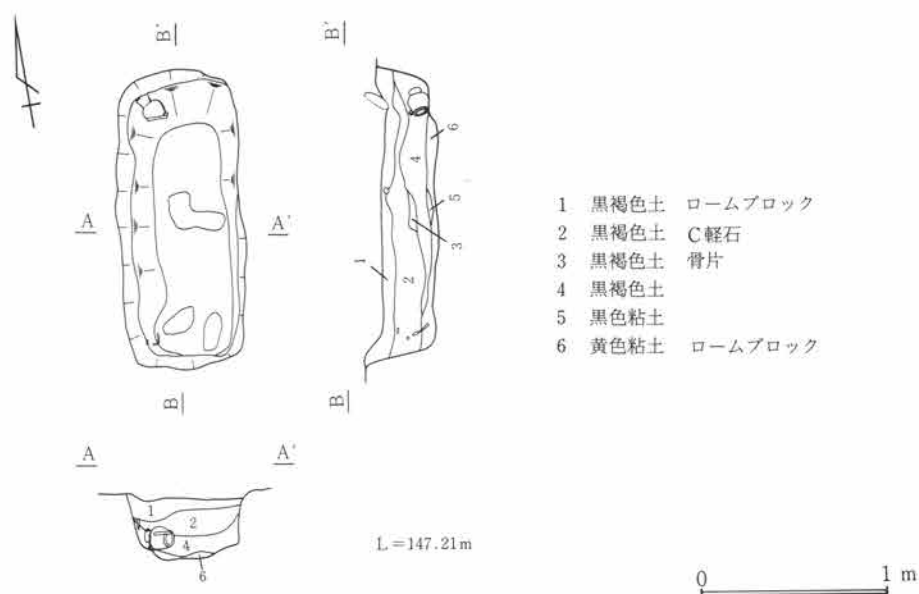
269

本遺構は、133I-36～37グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、やや丸みをもった長方形を呈す。長軸1.58m、短軸0.67m、深度39cmを測る。覆土は、大部分が黒褐色土で覆われており、上半にはロームブロックが混入している。

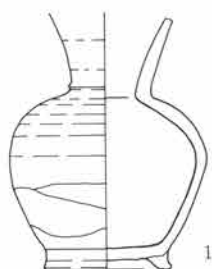
壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、27～30cmを測る。底面は、中央部がやや低い「V」の字形を呈し、部分的に粘土ブロックが埋め込まれ、底面を平坦にしようとしている。

出土遺物には、大量の鉄釘がみられることから埋葬に際しては、木棺に入れられておこなわれたと考えられる。木棺の規模は、鉄釘の出土位置より、長さ1.10～1.20m、幅0.35m前後、高さは棺上に置かれたと思われる土器までの高さより20cm強と推定される。棺の外側には、副葬品として須恵器小型の長頸壺と碗・皿が供に埋葬されていた。碗・皿は、発掘調査中に盗難のため現存しないが、その形態より9世紀後半のものと考えられる。なお、棺の規模より埋葬されたのは、幼児であったと推定される。

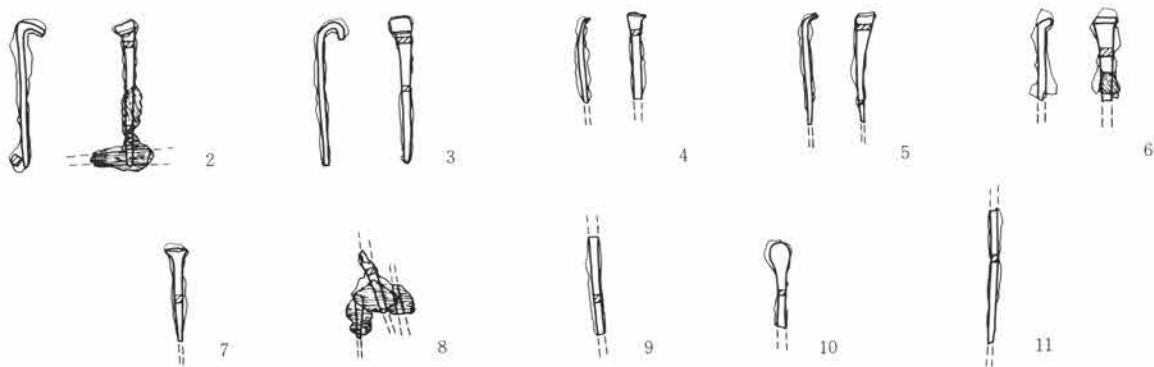
第3章 検出遺構・遺物



- 1 黒褐色土 ロームブロック
- 2 黒褐色土 C軽石
- 3 黒褐色土 骨片
- 4 黒褐色土
- 5 黒色粘土
- 6 黄色粘土 ロームブロック



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 長頸壺	—・6.5・— 口唇部欠 細砂粒の角礫 還元焰	ロクロ右回転・口縁部は外反し胴部はやや歪みがみられるが上位で大きく膨らむ。胴部最大径は10.5cm。高台は逆台形状を呈しやや開き、接地面は広い。内面に紐作り痕が残る。胴部下半は大まかなヘラ削り。底部は撫で。



No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
2	鉄製品 釘	892	7	鉄製品 釘	895
3	鉄製品 釘	892	8	鉄製品 釘	895
4	鉄製品 釘	892	9	鉄製品 釘	895
5	鉄製品 釘	893	10	鉄製品 釘	895
6	鉄製品 釘	893	11	鉄製品 釘	895

8 井 戸 (SE)

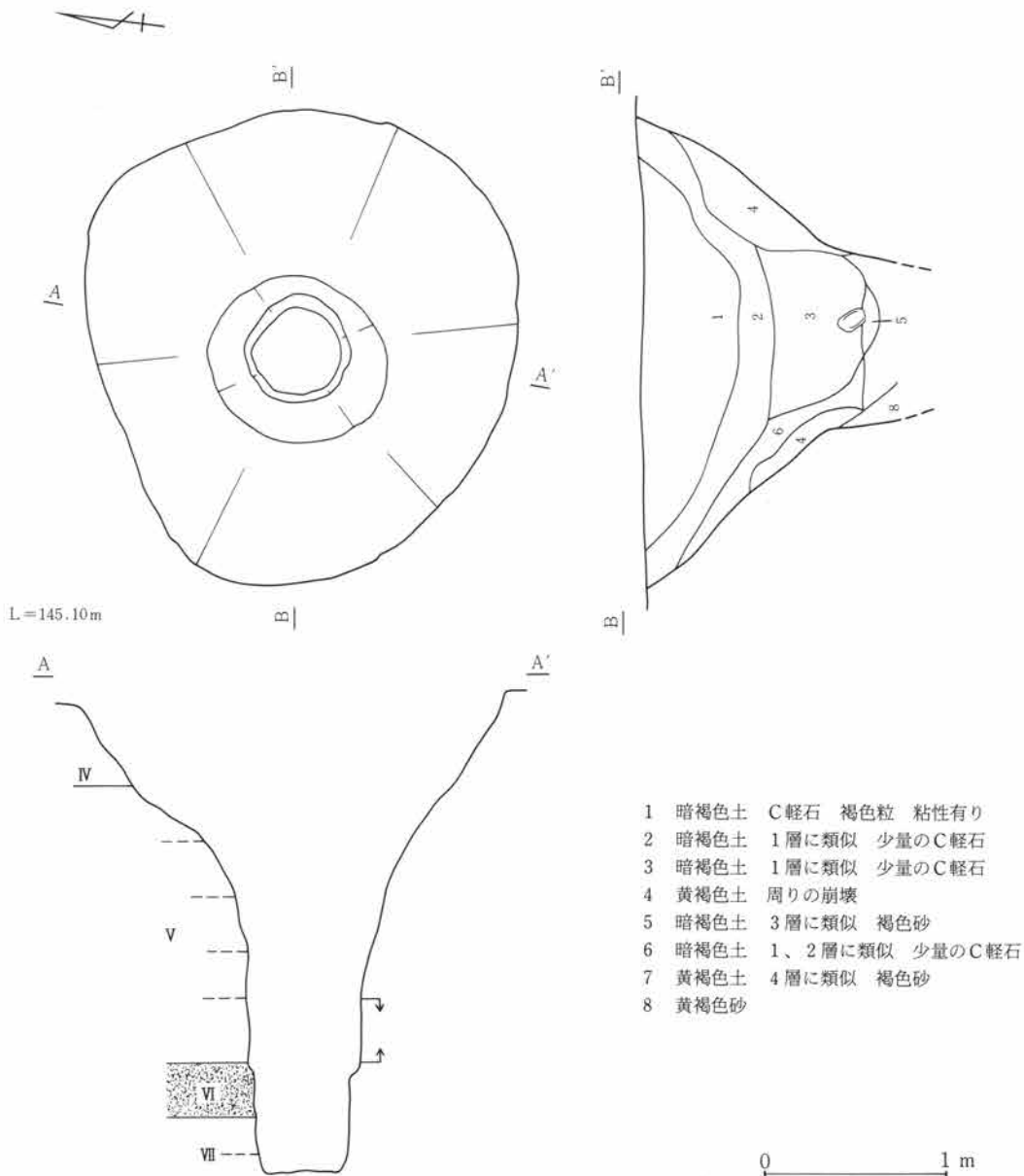
SE11

270

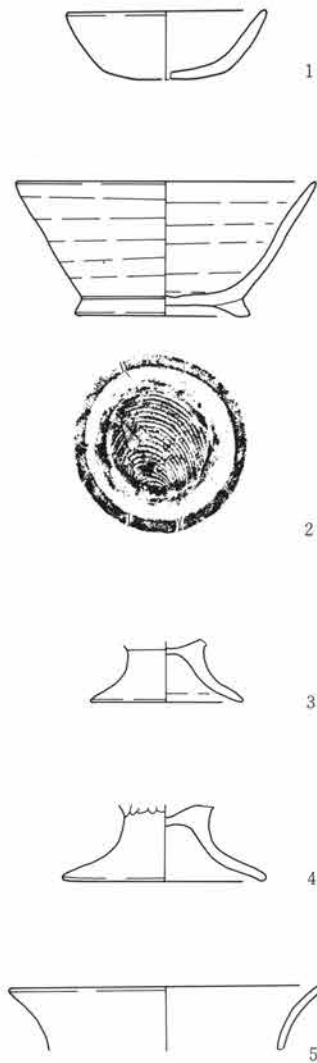
本遺構は、97～98H-36～37グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、丸みをもった三角形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒朝顔形と推定される。平面の規模は、長軸2.58m、短軸2.37mを測る。確認面からの深度は、2.56mを測る。覆土は、自然堆積状態を呈し、上半ではC軽石混りの暗茶褐色土と黄褐色土、黄褐色砂、下半は黒褐色粘性土で覆われている。

本遺構からは、井戸枠等の施設は確認されなかった。

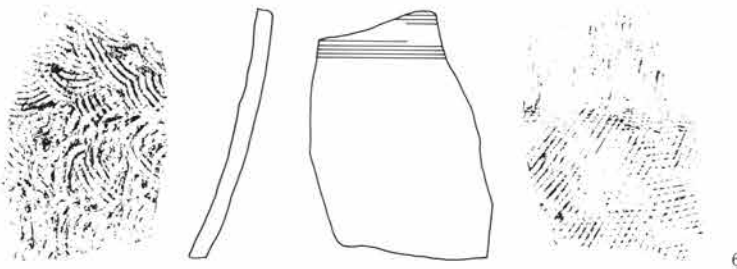
調査は、1983年7月に実施され、自然湧水水位は、確認面より1.65～2.00m間のV層中の粗砂層からで、湧水量は、毎分10ℓであった。



第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	10.6・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	体部から口縁部にかけては丸みを持ち開く。 底部は平底を呈す。
2	須恵器 碗 覆土	16.0・8.6・7.1 2/3 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 青灰色	ロクロ右回転。体部から底部にかけては直線的 であり開かない。底部は回転糸切り。
3	土師器 台付甕 覆土	—・4.0・— 小片 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	脚部は下半で大きく開き、脚部径が8.0cm、横 撫で。
4	土師器 台付甕 覆土	—・4.5・— 小片 細砂粒・雲母 普通 赤褐色	脚部は下半で大きく開き、脚部径が10.3cm、 横撫で。
5	土師器 甕 覆土	16.4・—・— 小片 細砂粒・雲母 普通 褐色	口縁部は外反ぎみに開き、横撫で。
6	須恵器 甕 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・白色鉍物粒 還元焰 灰色	外面は平行叩きの後、櫛描き状工具による撫 で。内面は同心円状アテ具痕がみられる。

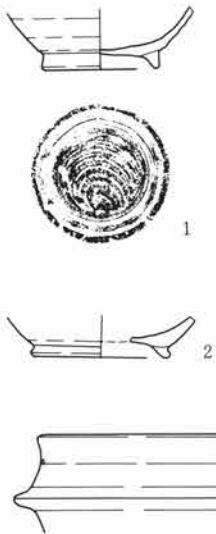
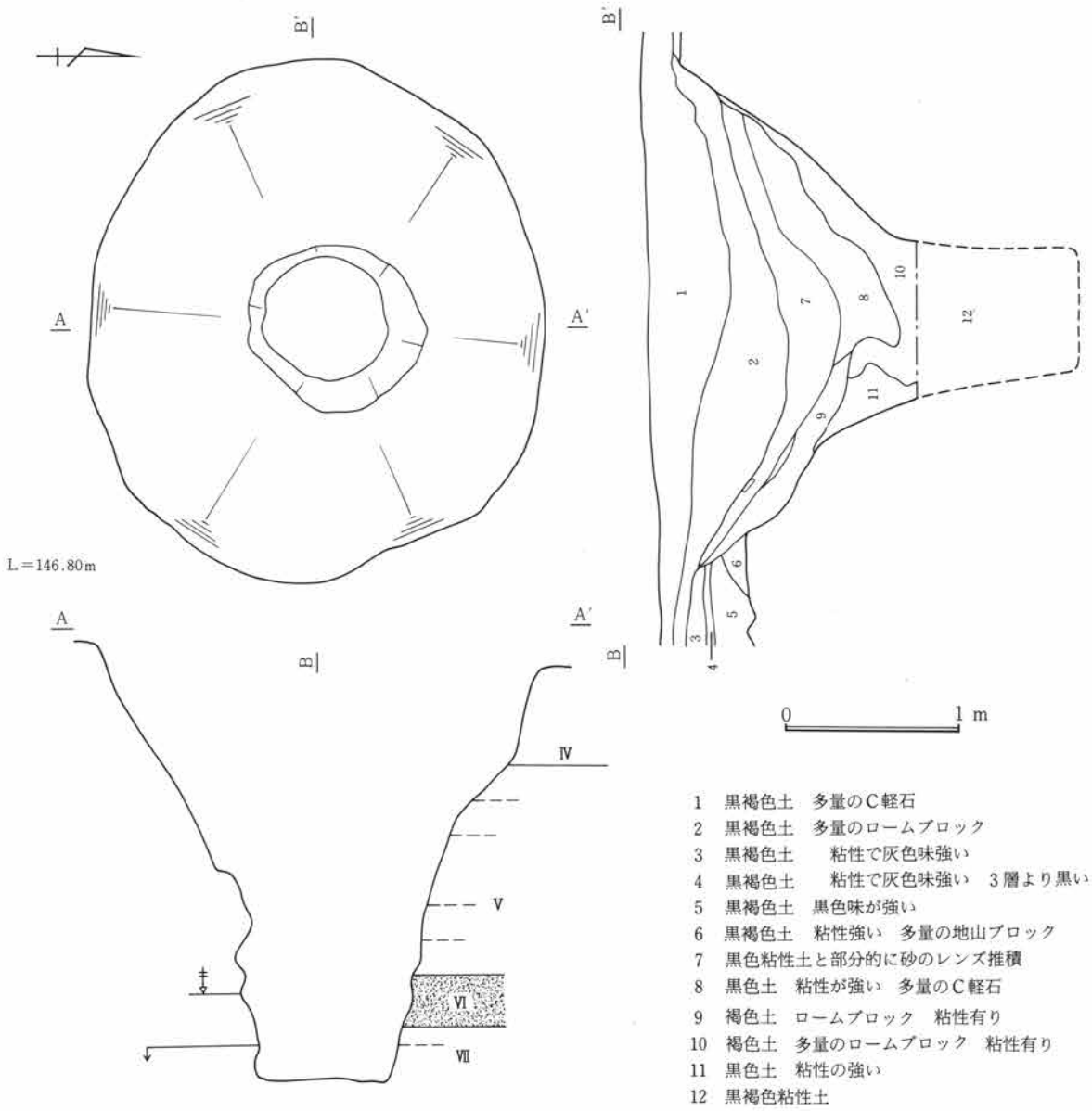


S E 26

270

本遺構は、121～122 I - 34～35グリッドに位置する。本遺構は、S D99・100の調査中に溝内より検出され、新旧関係は、明確ではないが同時期の可能性もある。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒朝顔形と推定される。平面の規模は、長軸2.96m、短軸2.58mを測る。深度は、2.51mを測る。

調査は、1983年12月に実施され、自然湧水水位は、確認面から2.40mから底面間のVII層中の灰褐色砂層からで、湧水量は、毎分2.5lであった。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	— 6.6 —、小片 細砂粒・黒色鋳物粒 還元焰、灰白色	ロクロ右回転。体部は丸みをもち開く。高台は端部に丸みをもつ断面三角形を呈し直立する。底部へら削り。
2	須恵器 碗 覆土	— 7.2 —、小片 粗砂粒・白色鋳物粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開き、高台は外反気味に開く。
3	須恵器 羽釜 覆土	19.0 — — — 小片 粗砂粒 酸化焰、橙色	口縁部は直立し、口唇端部は平坦で水平。鐙は断面三角形を呈しほぼ水平方向を向く。

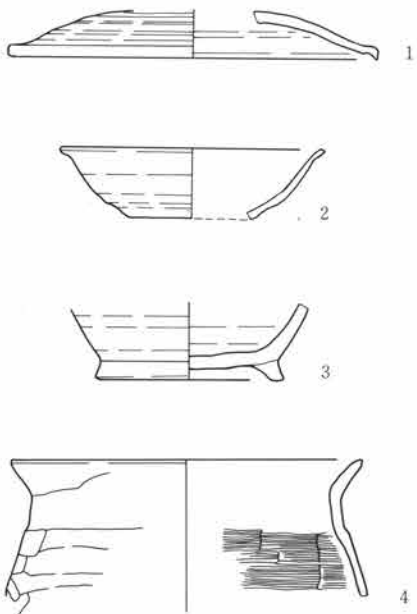
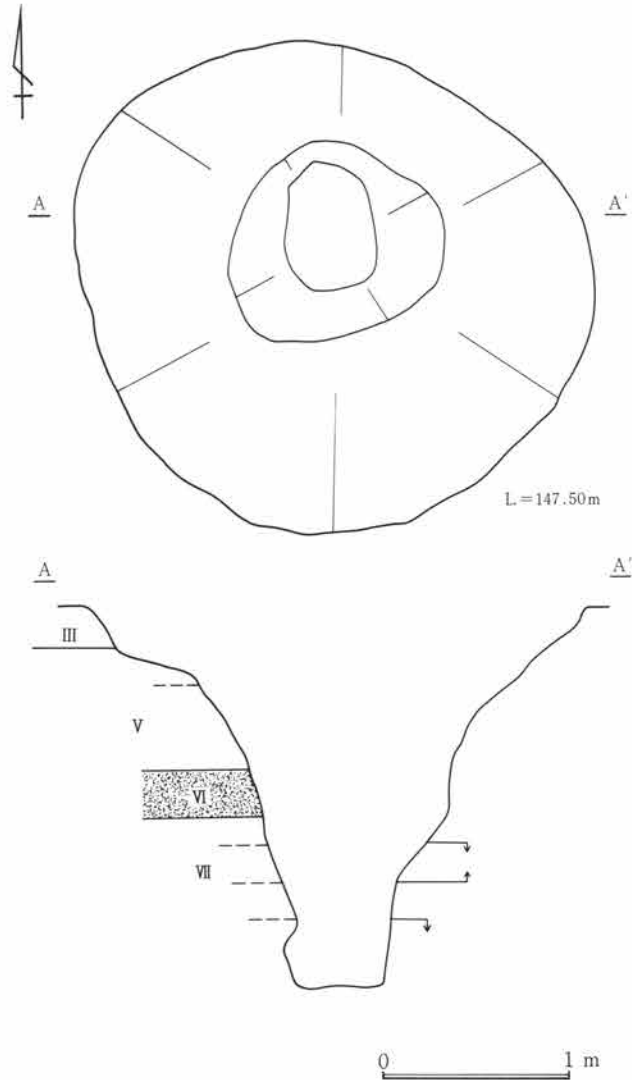
SE20

270

本遺構は、130～131 J—19～20グリッドに位置し、単独で占地する。平面の形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒朝顔形と推定される。平面の規模は、長軸2.83m、短軸2.56mを測る。深度は、2.09mを測る。覆土は、上半では自然堆積状態でB軽石を含む黒褐色土で覆われている。下半は、人為的な埋没が認められ、黒褐色土・ロームブロックで埋められている。底部付近は、自然堆積状態で黒色粘性土で覆われている。

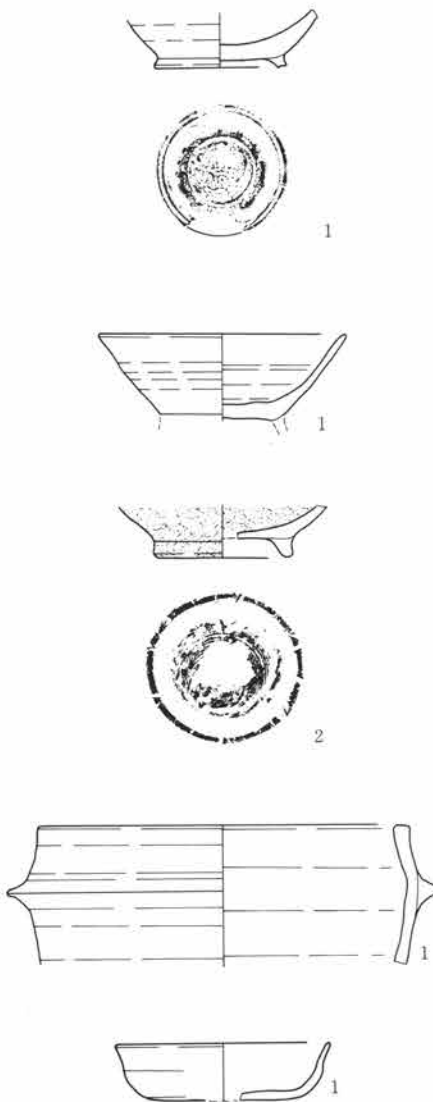
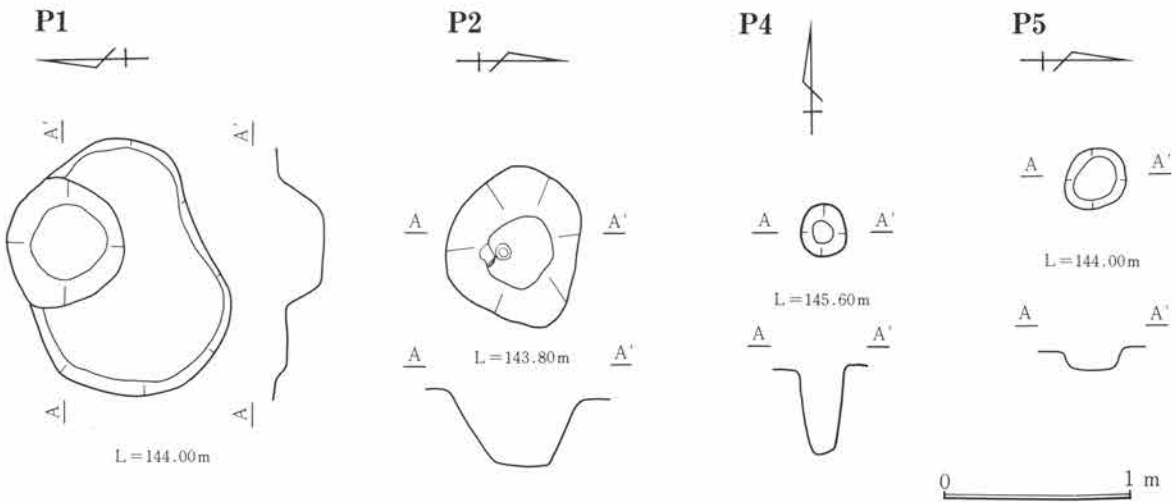
本遺構からは、井戸枠等の施設は確認されなかった。井戸壁は、中段と底部の一部に崩壊が見られ、北側中段のヘコミ、南側の朝顔状の部分からハネツルベ痕がみられる。

調査は、1983年9月に実施され、自然湧水水位は、確認面より1.27～1.48m間のVII層中の灰褐色砂層と1.67m以下の灰褐色粗砂層からで、湧水量は、毎分15ℓであった。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	19.6・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物 粒、還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。天井部はゆるい丸み をもち、周辺部はやや外反する。口唇端部 は折り曲げ、天井部の中程まで回転ヘラ削 り。内面には重ね焼き痕がみられる。
2	須恵器 坏 覆土	—・—・—、小片 細砂粒 還元焰、灰色	ロクロ回転方向不明。体部は丸みをもち開 き、口縁部は外反する。
3	須恵器 碗 覆土	—・9.4・—、小片 粗砂粒 還元焰、灰色	ロクロ右回転。体部は丸みをもちやや開く。 高台は断面逆台形を呈し接地面は広い。底 部は撫で。
4	土師器 甕 覆土	18.6・—・—、小片 細砂粒・褐色鉍物 粒・雲母 普通、橙色	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、胴部は ゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で。外面 の胴部は左方向へのヘラ削り。内面は刷毛 目が施されている。

9 ピット (P)



pit 1

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	—・6.8・高台径7.0 1/2 細砂粒 還元焰やや軟質 褐灰色	体部は丸みをもって開き、高台は断面四角形を呈し、接地面に凹線が巡る。底部は回転糸切り。周辺部は高台貼付による回転撫で調整。ロクロ整形。

pit 2

1	須恵器 碗 覆土	13.2・5.5・—、1/3 灰色粗砂粒・角中礫 還元焰 灰白色	体部から口縁部にかけて直線的に開く。高台部は欠損。底部は回転糸切り。周辺部は高台貼付による撫で。ロクロ整形。
2	須恵器 碗 覆土	—・7.2・高台径7.4、 1/4 黄白色粗砂粒、 還元焰燻焼成 褐灰色・黒褐色	体部は一旦直線的に開き、下位に丸みをもつ。高台は厚く、端部は丸い。底部は回転糸切り。

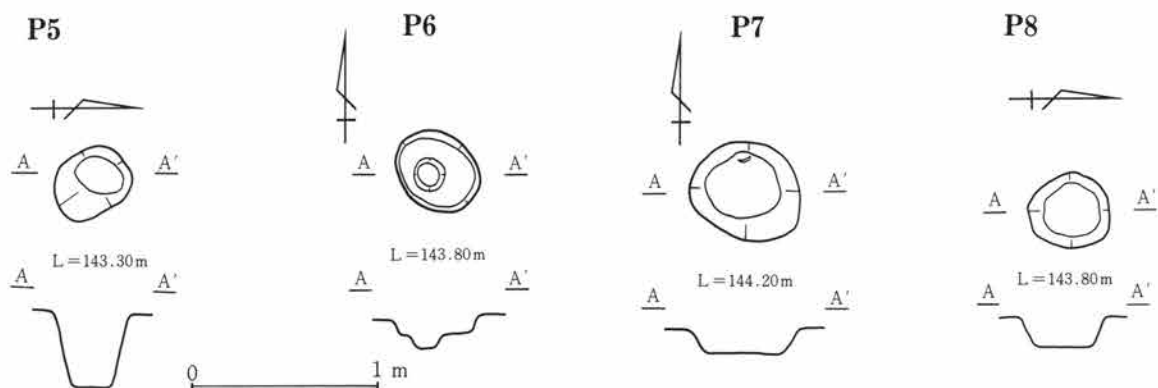
pit 3

1	須恵器 羽釜 覆土	19.6・—・—、小片 細砂粒・白色粗砂粒 酸化焰・硬質 にぶい黄橙色	口縁部は内傾し、口唇部は平坦面をもち水平。鏝は断面三角形を呈し、貼付される。成形は紐作り、ロクロ整形である。
---	-----------------	--	--

pit 4

1	土師器 坏 覆土	11.4・8.4・3.0、1/6 粗砂粒 普通 明赤褐色	底部は平底。体部は緩やかな丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。底部は撫で調整。口縁部内外面、体部内面は横撫で。
---	----------------	---------------------------------------	---

第3章 検出遺構・遺物



pit 5

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	11.6・8.6・3.2、 $\frac{2}{5}$ 黄白色細砂粒・黒色鉱 物粒 還元焰、灰色	体部から口縁部にかけて直線的で、 僅かに開く。底部は右回転ヘラ削り。 底部から体部下位に右回転ヘラ削り。



pit 6

1	須恵器 蓋 覆土	19.7・—・— 小片 細砂粒 還元焰 黄灰色	天井部は緩やかな丸みをもち、口縁部が僅かに開く。カエリは断面三角形で貼付される。天井部は回転ヘラ削り後、回転撫で調整。
2	土師器 皿 覆土	18.9・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 普通 橙色	底部から体部にかけて緩やかな丸みをもち、体部と口縁部の境は僅かに段をなし、口縁部は外反する。体部は外面ヘラ削り。口縁部は横撫で。



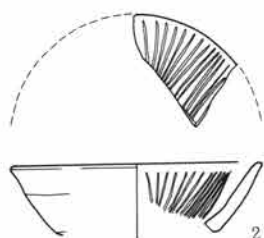
pit 7

1	須恵器 碗 覆土	—・高台径8.4・— $\frac{1}{3}$ 粗砂粒 小礫 還元焰 灰色	体部下位から高台部までの残存。体部は開く傾向にある。高台はやや高く、僅かに開き、端部は若干平坦部をもつ。付け方は丁寧である。底部は右回転糸切り。
---	----------------	---	--

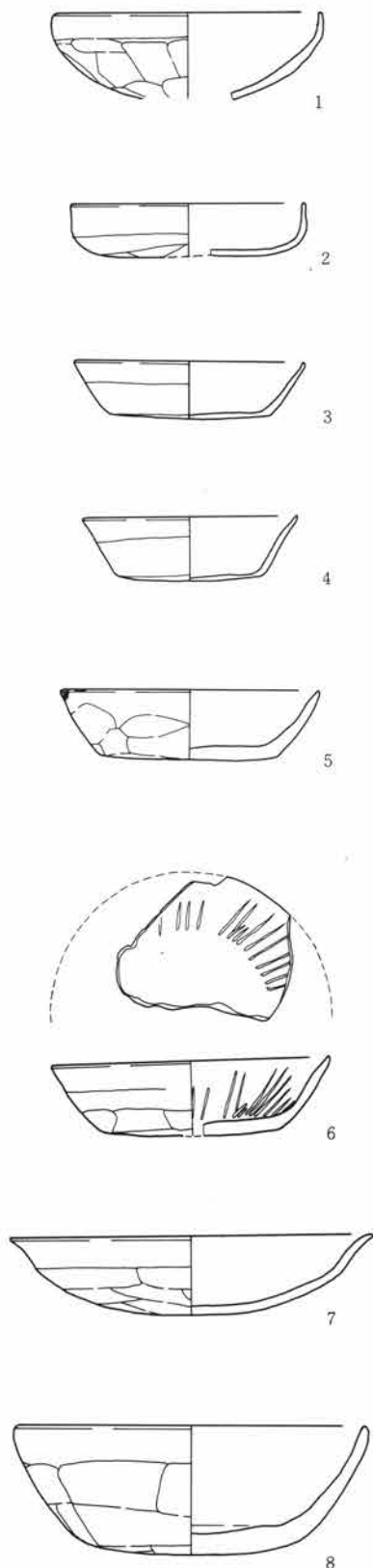


pit 8

1	土師器 坏 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒 普通 にぶい橙色	小片のため形状は不明だが、底部は緩やかな丸みをもつと推定される。体部内面に放射状暗文、底部内面に螺旋状暗文が施される。
2	土師器 坏 覆土	14.0・—・— 小片 粗砂粒 普通 にぶい橙色	体部は直線的に開き、口縁部上位が若干括れる。体部内面に放射暗文が施される。

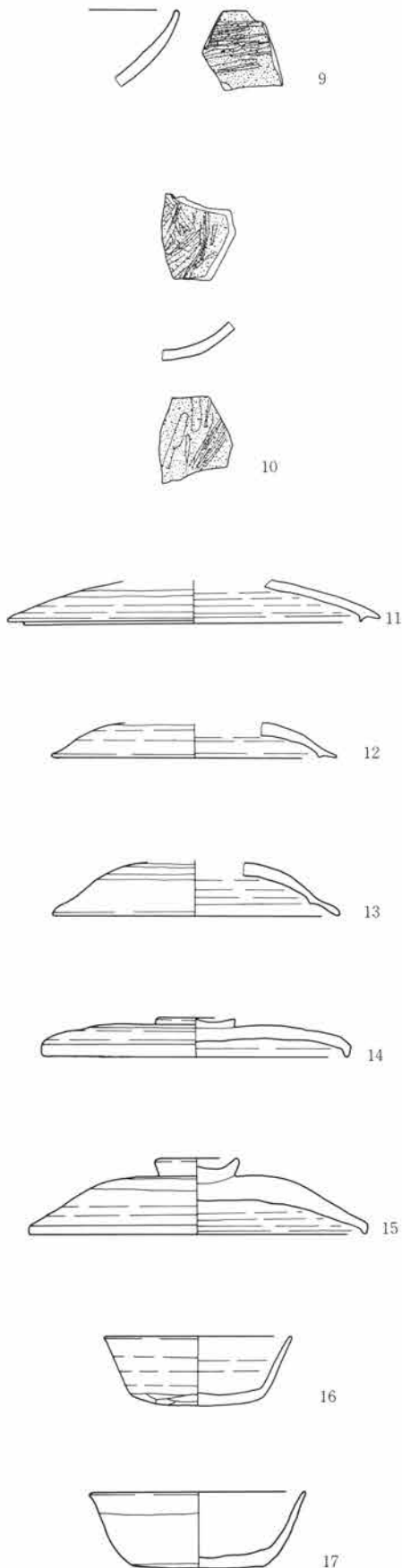


10 遺構外出土遺物

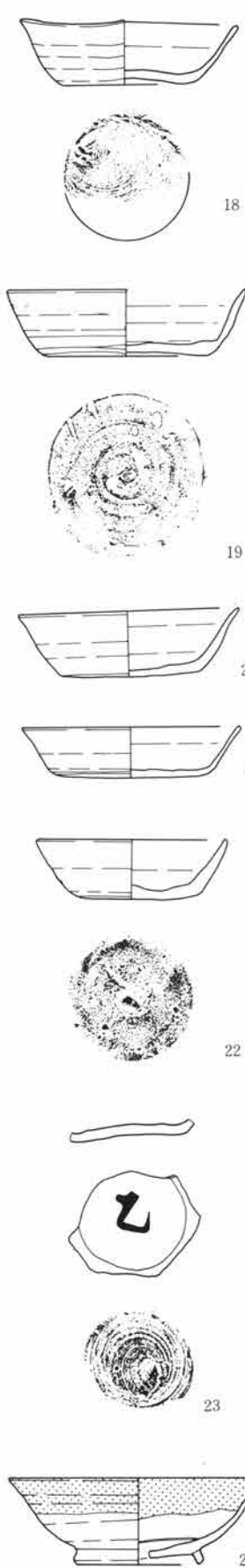


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 表土	14.6・—・—、 $\frac{1}{4}$ 粗砂粒 普通 明褐色	口縁部は内湾し、体部から底部にかけては丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部から底部にかけてはヘラ削り。
2	土師器 坏 表土	13.0・8.8・2.9 $\frac{2}{5}$ 細砂粒 普通 橙色	口縁部は垂直ぎみに立ち、底部は平底。口縁部は横撫で。体部はヘラ削り後撫で付け。底部はヘラ削り。
3	土師器 坏 表土	12.6・8.6・3.1 $\frac{1}{4}$ 細砂粒 普通 明褐色	器壁は薄く、体部から口縁部にかけては直線的に開き、口唇部は内側に肥厚する。底部は平底。口縁部は横撫で。体部はヘラ削り後撫で付け。底部は不定方向へのヘラ削り。
4	土師器 坏 表土	11.8・8.2・3.5 $\frac{2}{5}$ 粗砂粒 普通 にぶい褐色	器壁は薄く、口縁部は外反し、底部はほぼ平底。口縁部は横撫で、体部はヘラ削り後撫で付け。底部はヘラ削り。
5	土師器 坏 112 I - 06	14.2・9.7・3.8 $\frac{7}{8}$ 細砂粒・褐色鉱物粒 やや軟質 にぶい黄橙色	口縁部は横撫で。体部は雑な2段の左方向へのヘラ削り。底部は平底でヘラ削り。
6	土師器 坏 104 G - 35	15.4・9.8・4.1 $\frac{1}{4}$ 細砂粒 普通 にぶい橙色	底部はほぼ平底。体部から口縁部にかけては僅かに丸みをもち開く。口縁部は横撫で、体部は2段の左方向へのヘラ削り。底部は不定方向へのヘラ削り。
7	土師器 坏 表土	20.0・—・4.3 $\frac{1}{3}$ 粗砂粒 普通 橙色	口縁部は大きく外反し、底部は丸みをもち、口縁部との境には稜をもつ。口縁部は横撫で、ヘラ削り。
8	土師器 碗 表土	19.0・11.6・7.1 $\frac{2}{5}$ 細砂粒 普通 にぶい橙色	大型の器形を呈す。口縁部は内湾ぎみで、底部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で、体部は2段の左方向へのヘラ削り。底部もヘラ削り。

第3章 検出遺構・遺物

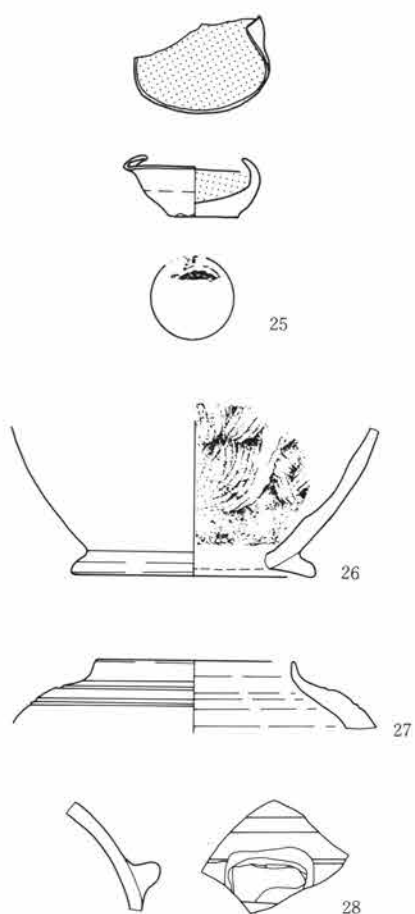


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
9	黒色土器 坏 93G-49	—・—・— 小片 細砂粒、還元焰 内外面とも黒色処理 灰色	内外面ともヘラ研磨が施されている。
10	黒色土器 坏 93G-49	—・—・— 小片 細砂粒、還元焰 内外面とも黒色処理 灰色	内外面ともヘラ研磨が施されている。
11	須恵器 蓋 表土	22.2・—・— 1/10 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ成形。天井部の中央は回転ヘラ削り。内面にカエリをもつ。
12	須恵器 蓋 表土	17.0・—・— 1/10 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ成形。天井部は丸みをもち口縁部は外反し、カエリをもつ。天井部中央は回転ヘラ削り。
13	須恵器 蓋 97G-45	17.0・—・— 細砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ成形。口縁部は外反し、内面にカエリをもつ。天井部の中央は回転ヘラ削り。
14	須恵器 蓋 101G-44	18.4・鈕4.6・2.3 1/3 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰 灰色	ロクロ成形。回転右廻り。鈕は大型の扁平鈕。口縁端部は折り曲げ、天井部の中央は回転ヘラ削り。
15	須恵器 蓋 103G-38	20.0・鈕4.6・4.5 7/8 粗砂粒 還元焰 灰白色	ロクロ成形。回転右廻り。鈕は周辺部がやや高まる扁平鈕。口縁端部は折り曲げ、天井部の中央は回転ヘラ削り。
16	須恵器 坏 表土	12.0・8.2・3.0 1/5 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ成形。底部は丸みをもち、手持によるヘラ削り。口縁部は僅かに外反する。
17	土師器 坏 135J-23	12.8・8.0・4.5 1/3 粗砂粒・褐色鉱物粒 やや軟質 にぶい橙色	口縁部は僅かに外反し、横撫で。体部、底部はヘラ削りが施されているが、磨耗のため単位不明。

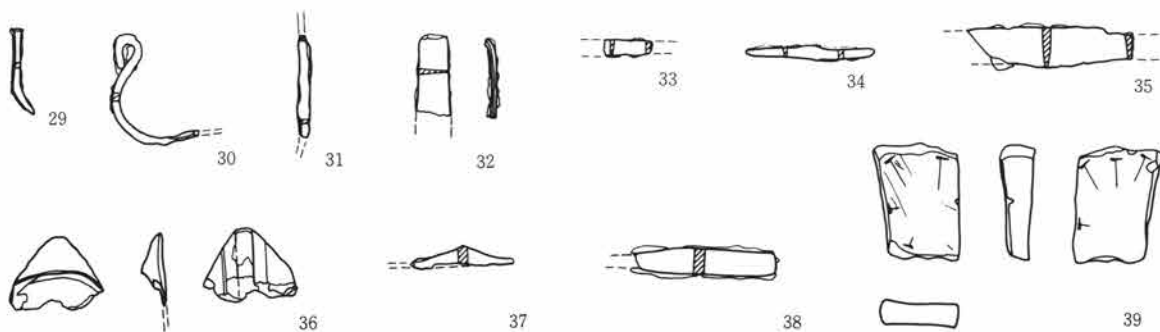


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
18	須恵器 坏 82G-18	13.0・7.2・4.0 3/5 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ成形。回転右廻り。底部は回転糸切り。体部は丸みをもち、口縁部は外反する。焼成時の歪みがみられる。
19	須恵器 坏 111 I-05	14.3・9.8・4.0 7/8 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ成形。回転右廻り。底部は回転ヘラ削り。体部はあまり開かず、下位は3段のヘラ削り。内外面に火襷痕がみられる。
20	須恵器 坏 132 J-24	13.2・8.2・3.8 1/4 細砂粒・角礫(2~3mm大) 還元焰 灰色	ロクロ成形。回転右廻り。底部は回転糸切り。口縁部は外反する。
21	須恵器 坏 表土	13.2・9.4・3.0 2/5 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰色	ロクロ成形。回転右廻り。底部は回転ヘラ削りが施され、体部との境に弱い段をもつ。口縁部は僅かに外反し、口唇部で僅かに肥厚する。
22	須恵器 坏 表土	11.5・7.8・3.6 5/6 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ成形。回転左廻り。底部は回転ヘラ削り。体部から口縁部にかけては直線的に開く。
23	須恵器 坏 126 I-07	—・6.8・— 底部のみ 細砂粒・黒色鉾物粒 還元焰 灰白色	ロクロ成形。回転左廻り。底部は回転糸切り。
24	灰釉陶器 碗 表土	15.6・7.5・5.2 1/3 緻密・少量の黒色鉾物粒 還元焰焼き締め 灰色	ロクロ成形。底部は回転糸切りで周辺は高台貼付による撫で。高台は断面四角形で稜をもつ。体部はゆるい丸みをもち大きく開き、口縁部は外反する。内面底部に重ね焼き痕がみられる。施釉は漬け掛けで釉調は不透明な灰白色を呈す。

第3章 検出遺構・遺物



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
25	灰釉陶器 耳皿 92G-19	9.2・4.6・3.1 1/2 細砂粒・黒色鉍物 粒 還元焰 灰白色	底部は静止糸切り。内面はほ ぼ全面的に降灰が付着してい る。釉調は、オリーブ灰色。
26	須恵器 壺 112H-04	—・11.4・— 小片 粗砂粒 還元焰 灰白色	高台は断面三角形を呈し、大 きく開く。胴部の内面は同心 円状のアテ具痕がみられる。
27	須恵器 短頸壺 表土	10.4・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	ロクロ成形。口縁部は垂直に 立ち、肩から胴部にかけては 球状の丸みをもち、肩部には 3条の凹線がまわる。
28	須恵器 短頸壺 表土	—・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物 粒 還元焰 灰白色	短頸壺胴部把手部分。



No.	種 類	観察表掲載頁	No.	種 類	観察表掲載頁
29	鉄製品 釘	895	35	鉄製品 刀子	893
30	棒状鉄製品	896	36	用途不明鉄製品	897
31	棒状鉄製品	896	37	用途不明鉄製品	897
32	用途不明鉄製品	897	38	用途不明鉄製品	897
33	鉄製品 刀子	894	39	石製品 砥石	835
34	鉄製品 刀子	894			

第5節 中世以降

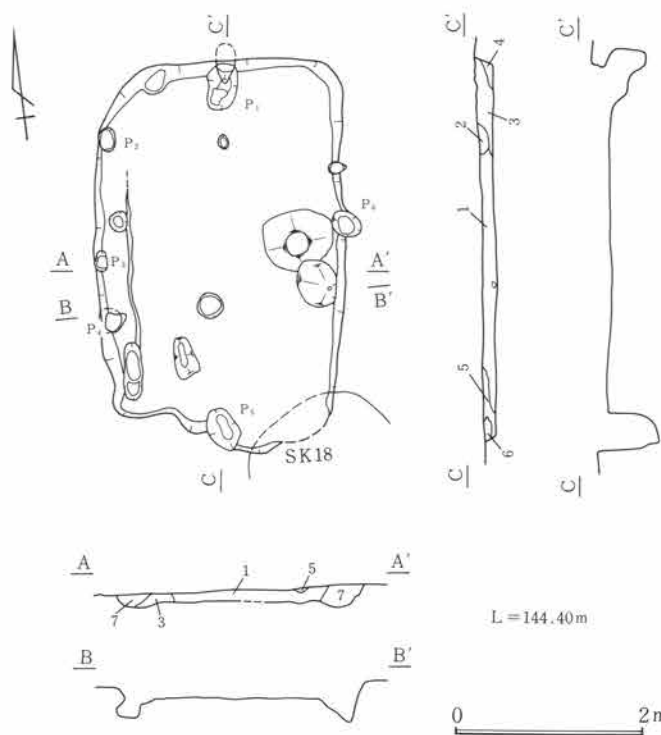
1 竪穴状遺構 (ST)

ST01

273

本遺構は、91~93H-06~09グリッドに位置し、SK18と重複するが新旧関係は、確認できなかった。平面形態は、西南コーナーがやや欠けるがほぼ長方形を呈す。規模は、南北4.15m、東西2.63m、面積9.80m²を測る。主軸方向は、N-7.5°-Eを指す。

床は、地山をそのまま踏み固めておりほぼ平坦である。壁は、垂直に立ち上がり壁高は、7~18cmで平均13cmを測る。床面の東壁中央よりには、径60×70cm、高さ6cmの台状の高まりがみられる。柱穴は、東壁、北壁、南壁の壁際に各1本づつ、西壁の壁際に3本みられる。柱穴の形態は、楕円形を呈し、規模は、径20×13cm~48×30cm、深度14~43cmを測る。

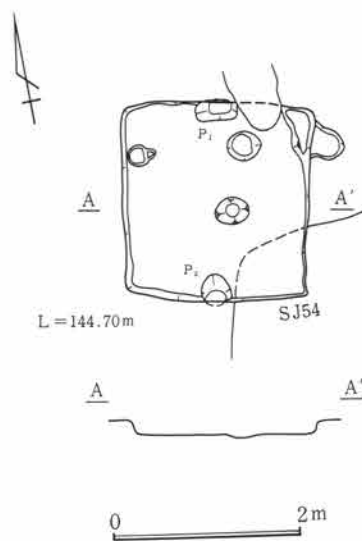


- | | |
|------------------------------|---------------|
| 1 暗茶褐色土 ロームの小ブロック
褐色砂 軽石粒 | 4 黒褐色土 褐色砂 |
| 2 暗茶褐色土 1層に類似 ロームブロックをあまり含まず | 5 茶褐色粘質土 |
| 3 茶褐色土 ロームブロック 焼土粒 | 6 暗茶褐色土 1層に類似 |
| | 7 暗褐色砂質土 |

ST03

本遺構は、89~91H-03~05グリッドに位置し、近代用水溝とSJ54と重複するが、新旧関係は、SJ54より本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ方形を呈す。規模は、南北2.10m、東西2.00m、面積4.05m²を測る。主軸方向は、N-7.5°-Wを指す。

床面は、地山をそのまま踏み固めており、ほぼ平坦である。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、9~17cmを測り、平均13cmである。柱穴は、北壁と南壁のほぼ中央の壁際に各1本づつみられ、形態は、P₁が長方形、P₂が楕円形を呈し、規模は、P₁が44×21cm、深度45cm、P₂が径38×30cm、深度33cmを測る。

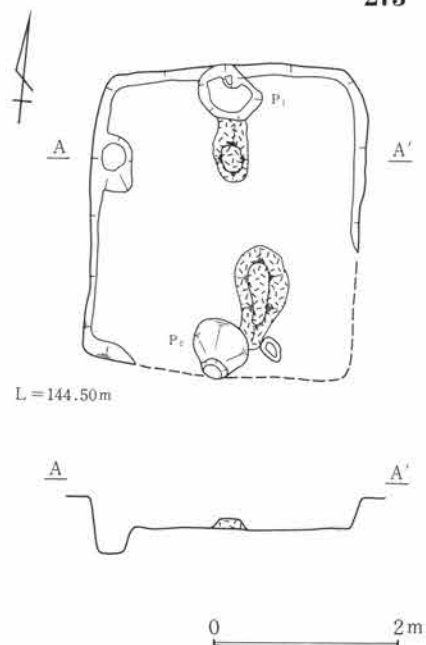


S T04

273

本遺構は、89～91H-07～09グリッドに位置し、S J 49と重複し、S D17と接する。新旧関係は、S J 49より本遺構のほうが新しい。平面形態は、長方形を呈す。規模は、南北3.32m、東西2.87m、面積9.11m²を測る。主軸方向は、W-6.5°-Eを指す。

床は、地山を踏み固めており、ほぼ平坦である。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、26～36cmを測り、平均30cmである。床面には、柱穴の内側に粘土で台状の高まりが設けられている。形態は、楕円形を呈し、規模は、北側が径68×40cm、高さ10cm、南側が110×52cm、高さ10cmを測る。柱穴は、北壁と南壁のほぼ中央の壁際に位置し、形態は、ともに楕円形を呈し、規模は、P₁が径65×52cm、深度53cm、P₂が径62×60cm、深度57cmを測る。

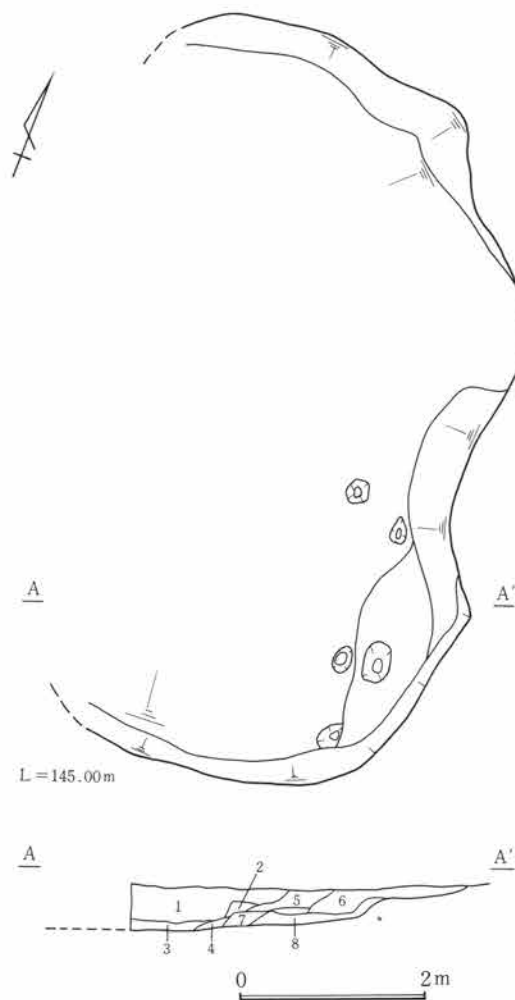


S T07

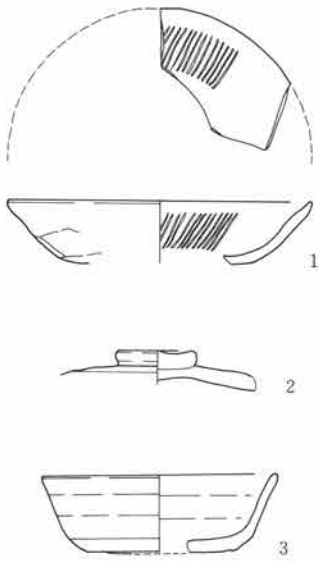
274

本遺構は、89～92G-47～50グリッドに位置し、S T09、S J 208・209等と重複するが、新旧関係は、S T09より本遺構のほうが古い。S J 208・209等とは、明確にはできなかったものの本遺構のほうが新しいと推測される。平面形態は、本遺構の西半分が検出できなかったため全貌は不明であるが、楕円形を呈すると推測される。規模は、南北4.00mを測る。

床は、地山をそのまま利用し、踏み固められては、中央部に向けてゆるい傾斜をもつ。壁は、緩やかに立ち上がり、壁高は、18cm前後を測り、中央部の最深度では、26cmである。



- 1 暗茶褐色土 多量のC軽石 黄褐色粘土ブロック
- 2 暗茶褐色土 1層に類似 1層より黄褐色粘土ブロックを多く含む
- 3 暗茶褐色土 極多量のC軽石
- 4 暗茶褐色土 若干のC軽石
- 5 暗褐色土 若干のC軽石 多量の黄褐色粘土ブロック
- 6 暗褐色土 若干のC軽石
- 7 黄褐色粘土ブロック
- 8 黄褐色粘土ブロック 若干の軽石



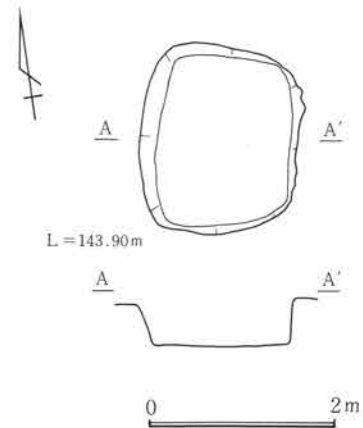
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	16.0・10.2・—、1/8 粗砂粒・褐色鉍物粒・ 雲母 普通 橙色	口縁部はやや外反し、体部は開く。口縁部は横撫で。体部は左方向への1段のヘラ削り。
2	須恵器 蓋 覆土	—・鈕4.0・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。鈕は厚みのある扁平状を呈し、天井部は回転ヘラ削り。
3	須恵器 坏 覆土	12.2・8.4・4.1 1/8 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。体部から口縁部にかけては僅かに外反し、高台は削り出しによる小型のもの。底部は回転ヘラ削り。

ST09

本遺構は、89～90G-47～48グリッドに位置し、ST07と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、ほぼ長方形を呈す。規模は、南北2.00m、東西1.66m、面積2.96m²を測る。主軸方向は、N-19.5°-Eを指す。

床は、地山をそのまま使用しており、平坦である。壁は、垂直に立ち上がり、壁高は、40～49cmを測り、平均44cmである。

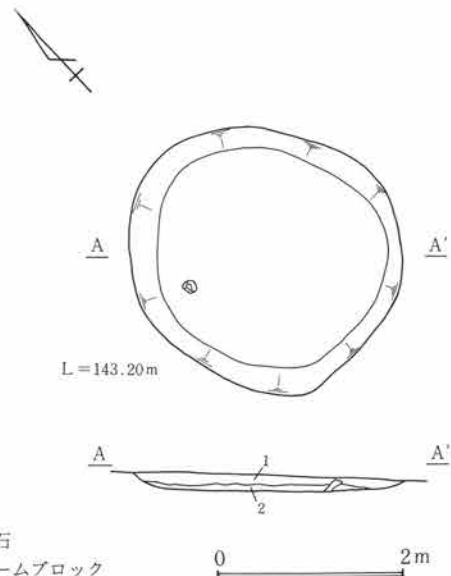
本遺構では、柱穴等の施設は検出されなかった。



ST14

本遺構は、79～81F-49～G-01グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈す。規模は、長軸2.93m、短軸2.75m、面積6.37m²を測る。主軸方向は、N-1.5°-Wを指す。覆土は、自然堆積状態を呈し、黒褐色土で覆われている。

床は、地山をそのまま使用しており、床面は中央部にかけてゆるい傾斜をもち壁際より6～8cmほど低い。壁は、緩やかに立ち上がり、壁高は、5～18cmを測り、平均13cmである。

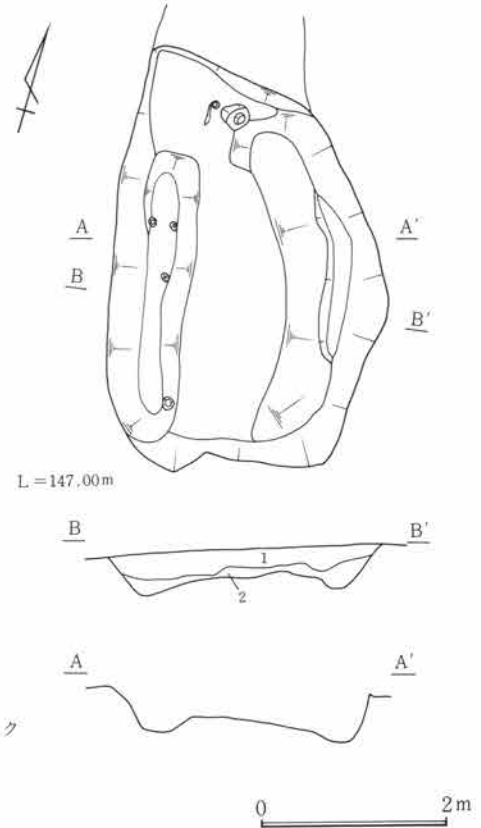


- 1 黒褐色土 多量のC軽石
- 2 黒褐色土 C軽石 ロームブロック

S T 16

本遺構は、122～123 I—43～45グリッドに位置し、SK182と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、不整形を呈す。規模は、長軸4.26m、短軸3.04m、面積10.09m²を測る。主軸方向は、N—43.5°—Wを指す。覆土は、自然堆積状態を呈し、黒褐色の砂質土で覆われている。

床は、地山をそのまま使用しており、床面は、東壁際と西壁際に溝状の落ち込みがみられ、その間は平坦である。溝状の落ち込みは、ともに緩やかな立ち上がりで深度4～5cmを測る。壁は、全体的に緩やかに立ち上がり、壁高は、18～20cmを測る。また、北壁よりには、楕円形で径30×25cm、深度17cmの小ピットが検出された。

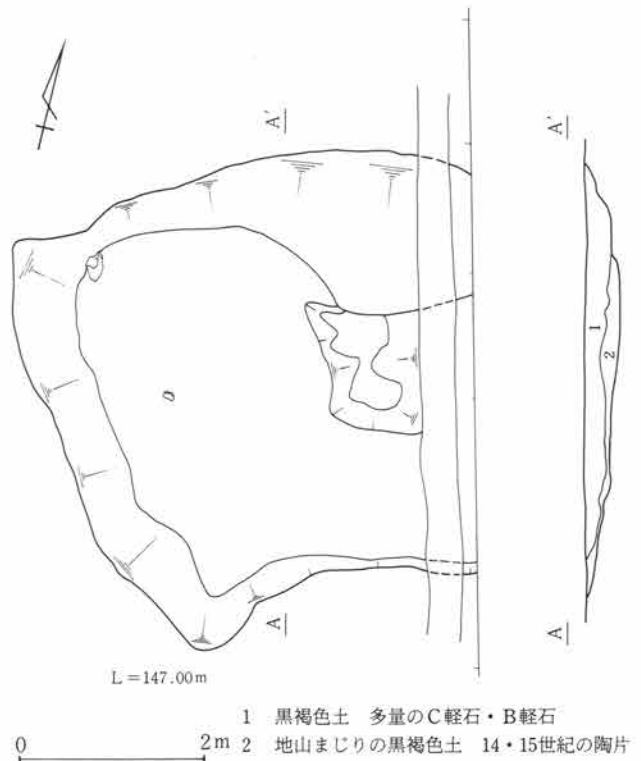


- 1 中世砂質土
- 2 中世砂質土 地山ブロック

S T 17

本遺構は、108～111 I—25～28グリッドに位置し、東側に近代の耕作溝がみられる。本遺構の東側は、調査区域外にのびるため全貌は不明であるが、平面形態は、歪んだ長方形を呈すると推測される。規模は、南北4.56m、東西は、調査区域内で4.85mを測る。覆土は、レンズ状の自然堆積状態を呈し、黒褐色土で覆われている。

床は、地山をそのまま使用し、床面は、南から北にかけてゆるい傾斜をもち、北壁際に長方形を呈し、規模が、110×100cm、深度29cmの土壇状の落ち込みがみられる。壁は、緩やかに立ち上がり、壁高は、7～51cmを測り、平均28cmである。



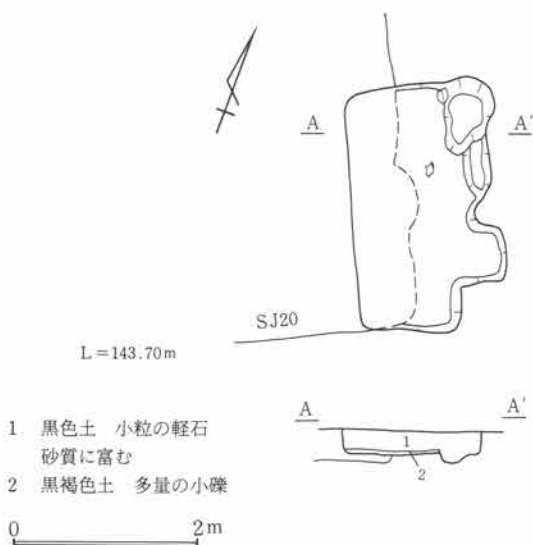
- 1 黒褐色土 多量のC軽石・B軽石
- 2 地山まじりの黒褐色土 14・15世紀の陶片

S T 21

274

本遺構は、101~102G-10~12グリッドに位置し、S J 20と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、凸字形を呈す。規模は、南北2.63m、東西1.97m、面積4.32m²を測る。主軸方向は、N-30°-Wを指す。覆土は、自然堆積状態を呈し、黒色の砂質土で覆われている。

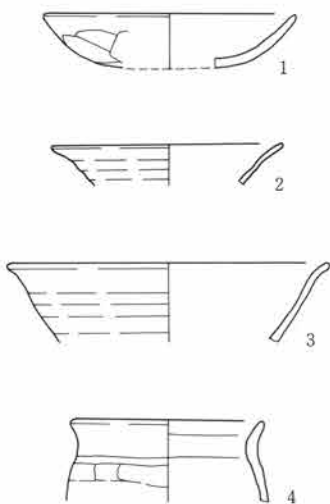
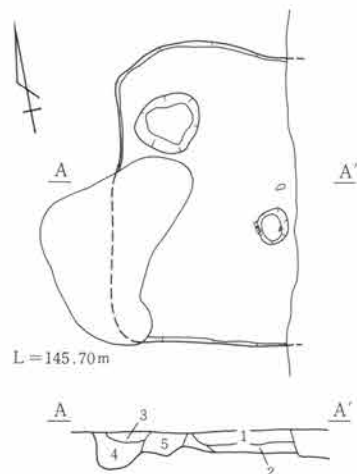
床は、地山をそのまま使用し、床面は、平坦である。東壁際の北半分には、溝状の落ち込みと東北コーナーには、楕円形で径77×50cm、深度17cmの土壇がみられる。壁は、垂直に立ちあがり、壁高は、10~14cmである。



S T 22

本遺構は、88~90G-34~36グリッドに位置する。本遺構の東半分は、確認できなかった。本遺構は、西南部を攪乱によって壊され、中央部から東側でS D 63~66と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形は、長方形または方形を呈すると推測される。規模は、東西3.20mを測る。覆土は、自然堆積状態（土層断面図における3~5は、攪乱の土層である。）を呈し、黒褐色の粘質土で覆われている。

- 1 黒褐色土 粘性有り
- 2 黒褐色土 粘性有り
ロームブロック
- 3 黒褐色砂質土 ロームブロック
- 4 黒褐色砂質土
- 5 黒褐色砂質土 ロームブロック



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.2・—・—、1/10 細砂粒・褐色鉱物粒 還元焰、橙色	体部から口縁部にかけては丸みをもち大きく開く。口縁部は横撫で、体部・底部はヘラ削り。
2	須恵器 碗 覆土	13.4・—・—、小片 細砂粒・雲母 半酸化焰、灰黄色	ロクロ回転方向不明。口縁部は僅かに外反する。
3	須恵器 碗 覆土	16.8・—・—、1/8 粗砂粒・亜角礫 還元焰 灰色	ロクロ回転方向不明。口縁部は外反し、体部は丸みをもち開く。
4	土師器 甕 覆土	10.0・—・—、小片 細砂粒・雲母 普通、暗赤褐色	口縁部はやや外反し、胴部はゆるい丸みをもつ。口縁部はゆるい丸みをもつ。口縁部は横撫で。外面の胴部は横方向へのヘラ削り。

2 溝 (SD)



溝配置図



SD12

275

本遺構の東側は、調査区内では、90H-19グリッドから西へ延び、109H-18グリッドでN-16°-Wの方向へ曲がり、111H-10グリッドまで達する。また、98H-20グリッドの地点から南へ分岐するが、ST20と重複し、ST20内では確認できなかった。本遺構は、SK20、SD117、SJ181・186、ST20と重複するが、新旧関係は、SK20より古く、他の遺構より新しい。調査区内での規模は、全長17.2m、幅0.90~2.72m、深度0.12~0.72mを測る。

断面形態は、ほぼ逆台形に近い形状を呈し、溝壁は急な立ち上がりである。底部は、ゆるい丸底で、コーナー部分よりやや東の地点から両側に緩い傾斜をもち、東側は途中で段をもつ。高低差は、53cmである。

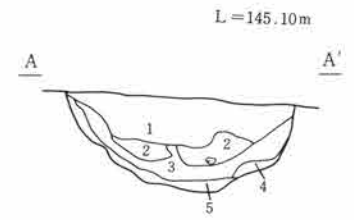
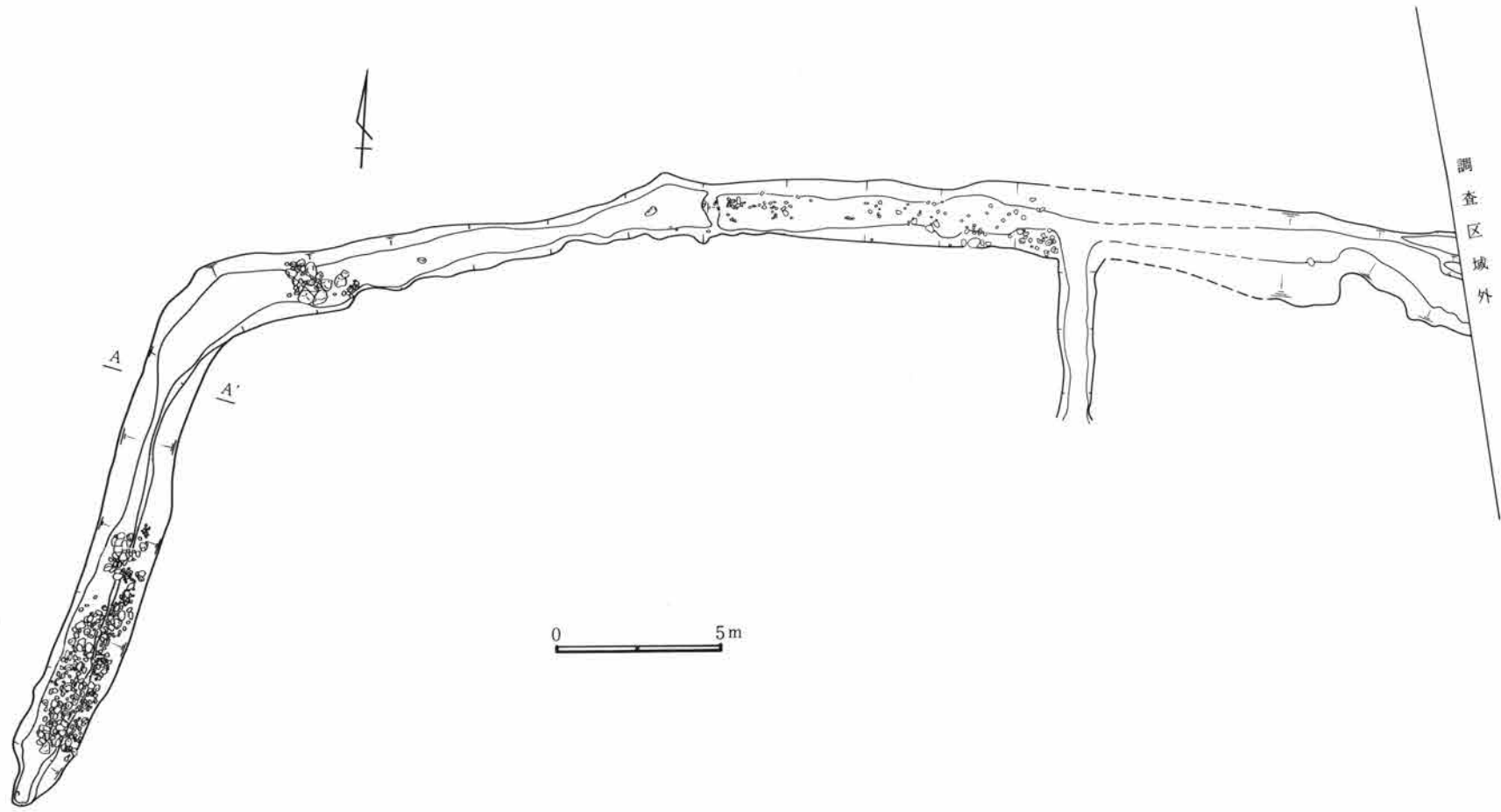
本遺構からは、多量の礫が西南端部やコーナー部分に集中して投棄されており、そのなかから石臼・板碑・砥石・陶器等が出土している。

SD23

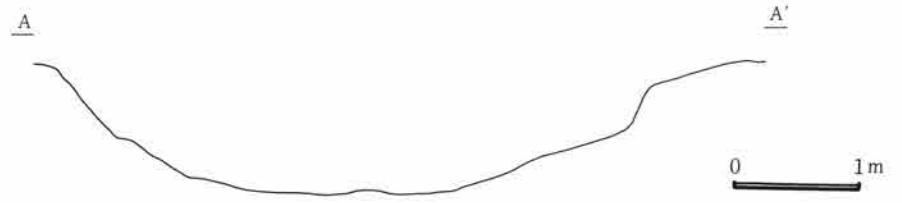
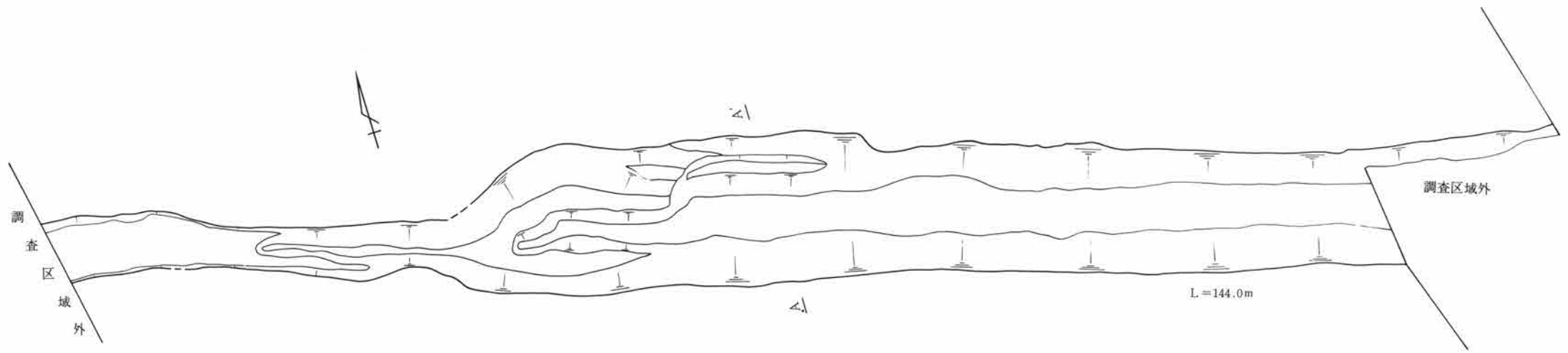
276

本遺構は、調査区を横断するように位置し、調査区内では、78G-22~24グリッドから107G-29~30グリッドである。本遺構は、調査区内の西側4分の1では規模が小さくなる。大規模な部分での規模は、幅4.24~5.50m、深度0.80~1.11m、小規模な部分では、幅1.64~2.30m、深度0.15~1.15mを測る。走向は、N-75°-Wを指す。

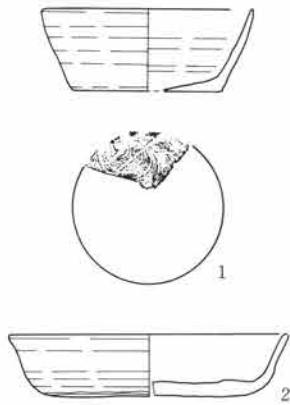
溝壁は、緩やかに立ち上がる。底部は、ゆるい丸底で西から緩い傾斜をもち、途中の段をへるごとに深くなり、高低差は、1.00mである。



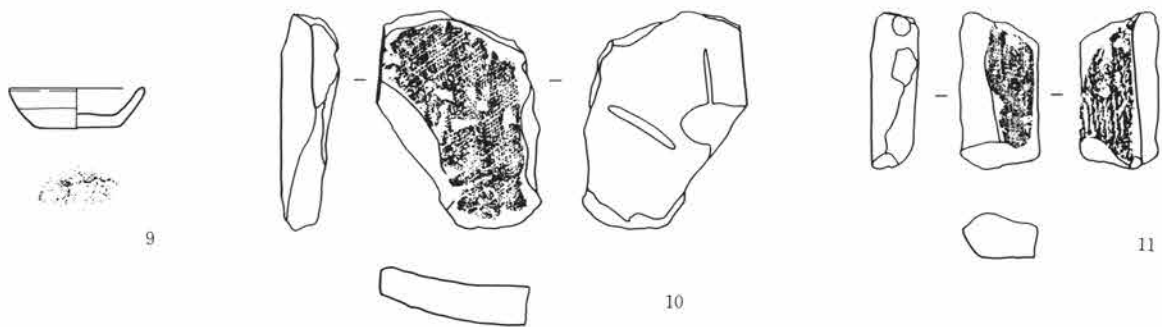
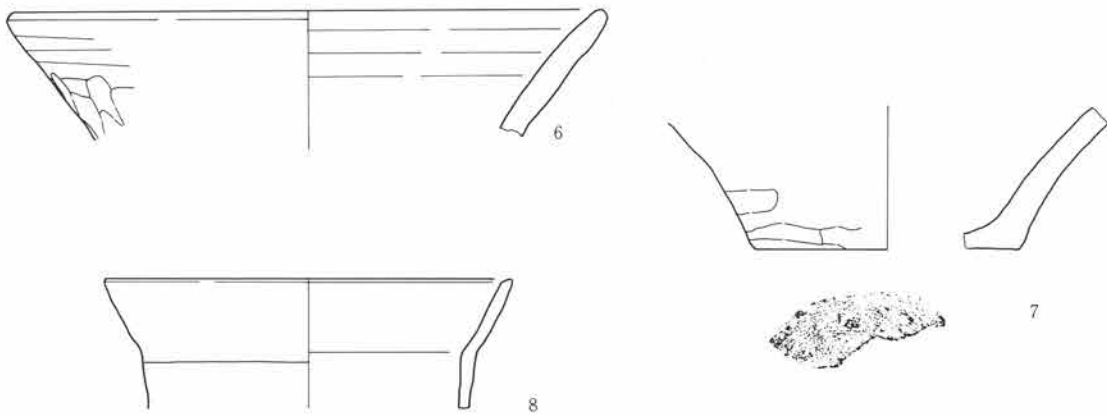
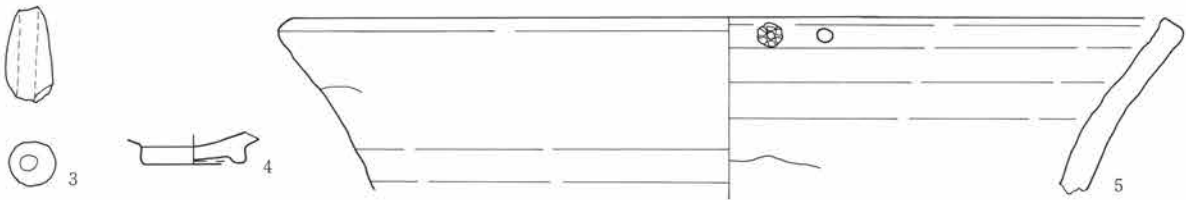
- 1 暗褐色土 褐色砂
- 2 暗褐色土 ローム粒 褐色砂
- 3 暗褐色土 ロームブロック
- 4 褐色土 砂礫 (2~3cm大) ロームブロック
- 5 黄褐色土 溝の壁のロームの崩壊、流れこみ

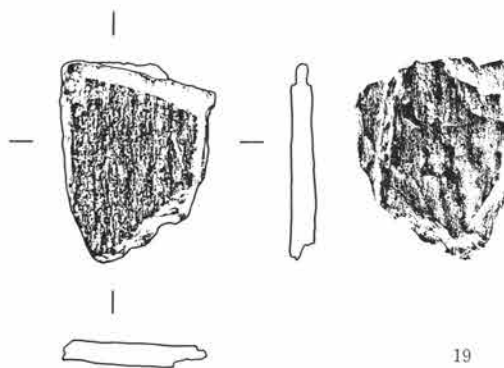
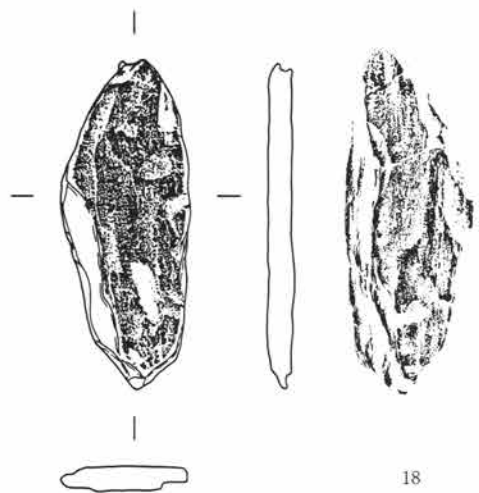
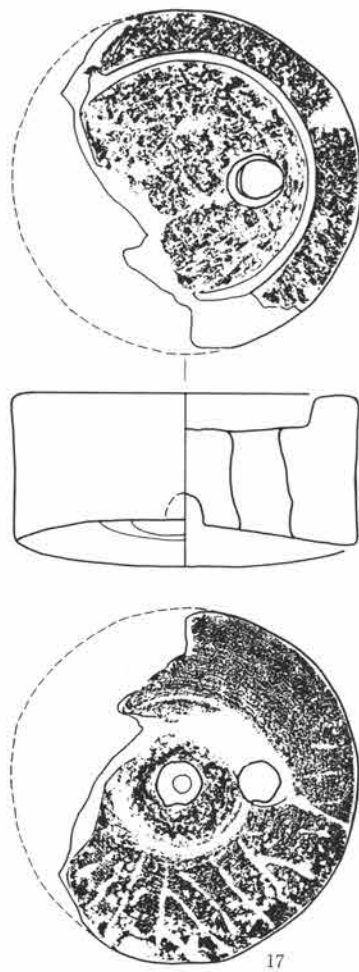
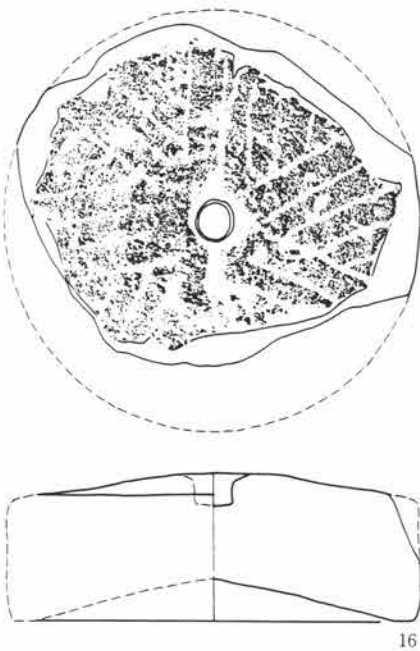
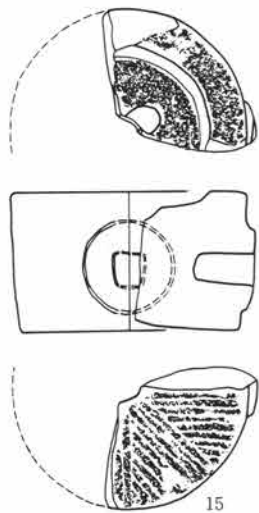
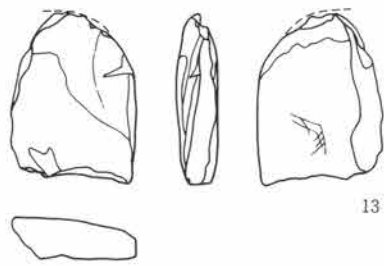
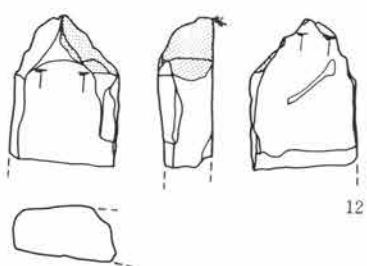


SD12



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	11.2・8.0・5.3 1/6 白色・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	体部上位から口縁部にかけて緩やかな丸味をもつ。底部は右回転糸切り未調整。ロクロ整形。
2	須恵器 坏 覆土	14.8・11.2・3.2 1/3 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	ロクロ右回転。口縁部は僅かに外反する。底部はヘラ切り後回転ヘラ削り。

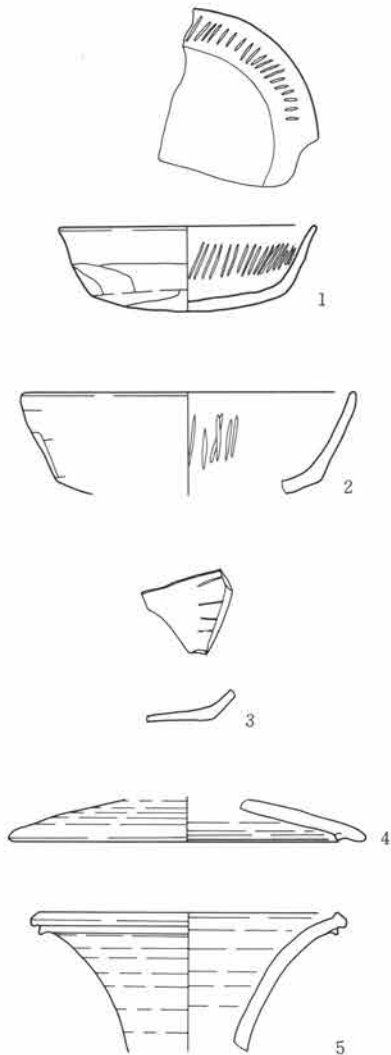




第5節 中世以降

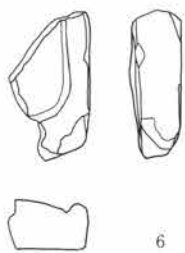
No	種類	計測値	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	
3	土製品 土 鉢	長さ 1.0cm 幅 2.3cm 孔径 1.0cm 残存率 1/2	細砂粒・褐色鉍物粒 酸化焰・にぶい橙色	外面はへら削りが施されているが、磨耗のため単位不明。	
No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
5	鉢	811	13	砥石	835
6	鉢	812	14	石 鉢	838
7	鉢	812	15	石 白	845
8	内 耳	819	16	石 白	845
9	皿	823	17	石 白	846
10	瓦	778	18	板 碑	879
11	瓦	778	19	板 碑	879
12	砥石	835			

S D23

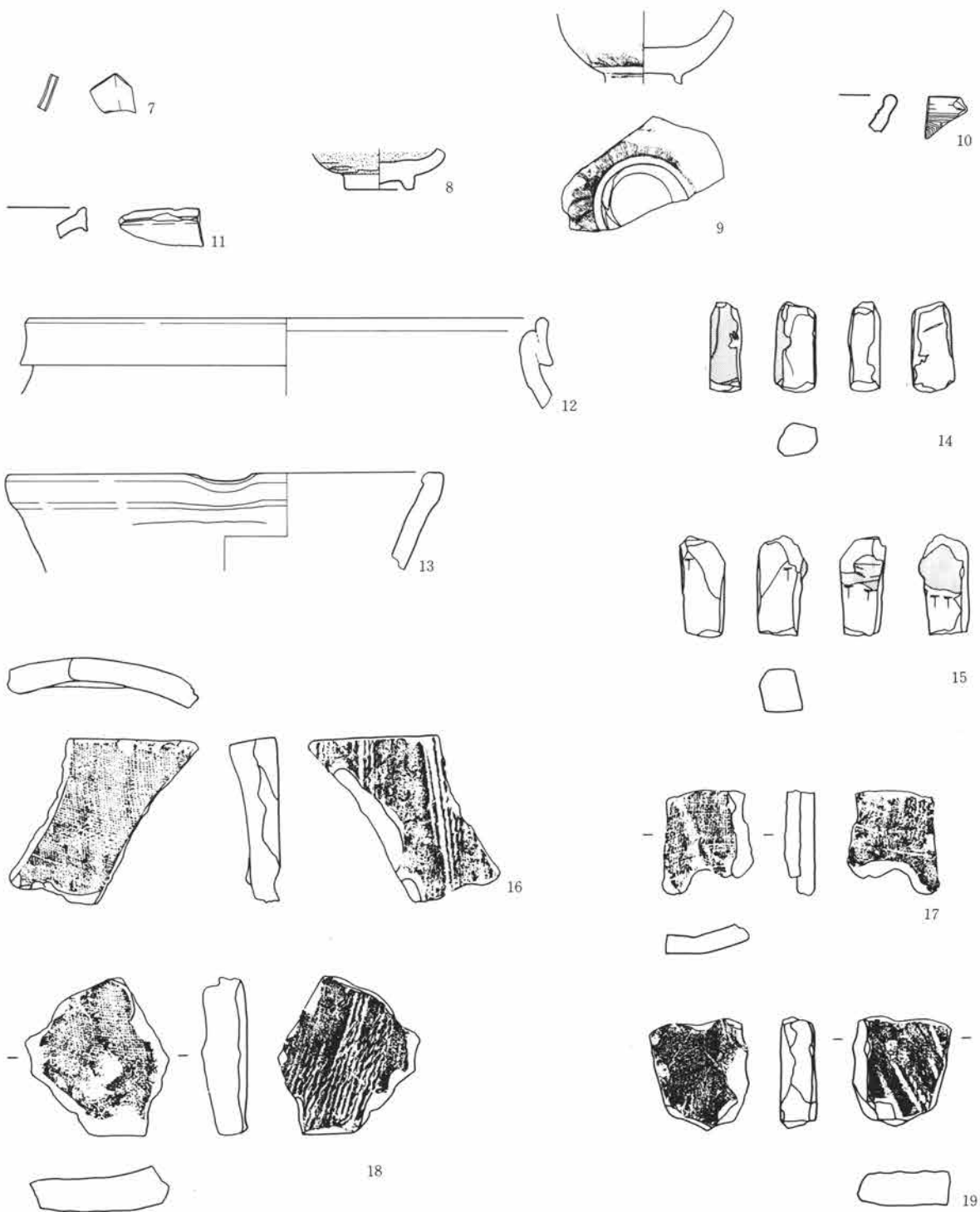


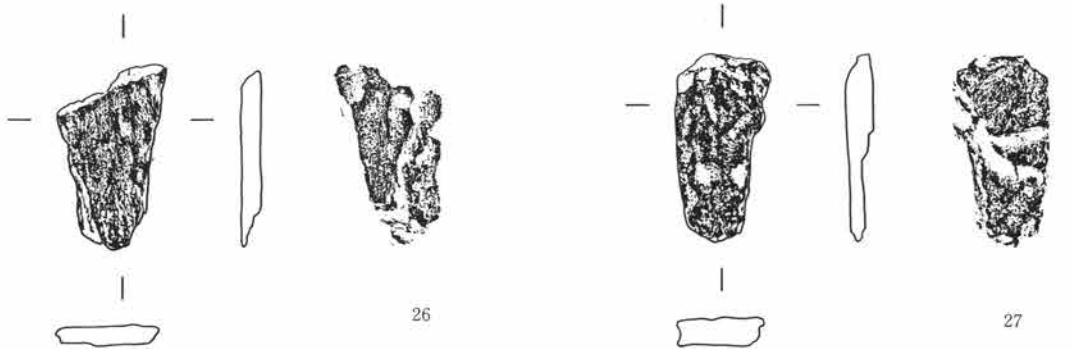
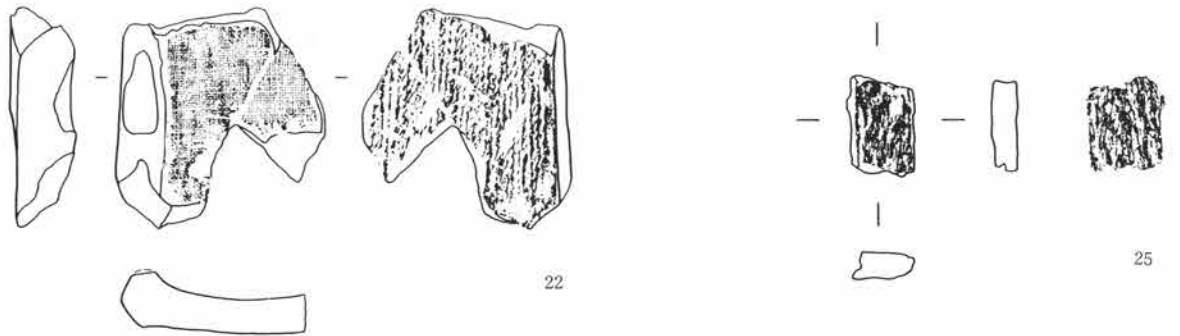
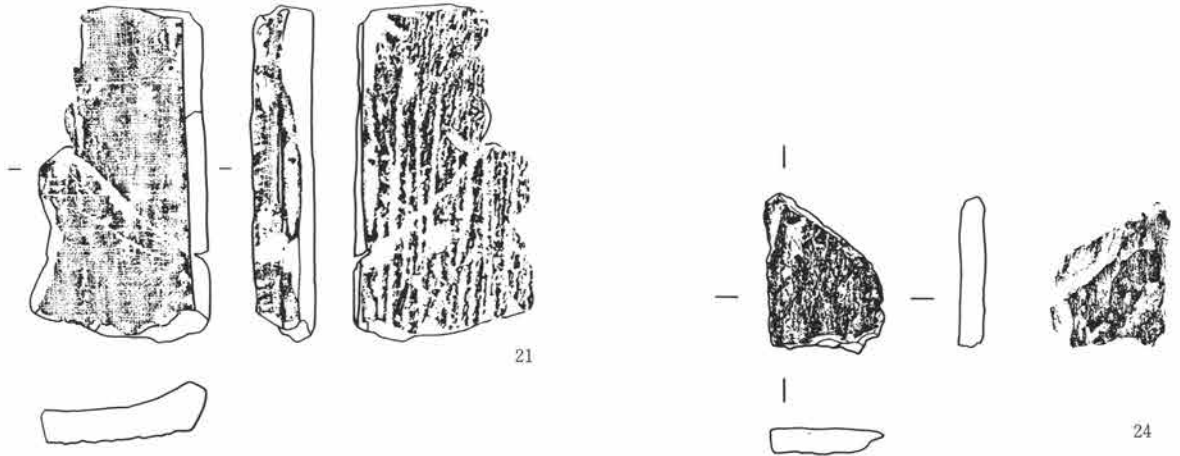
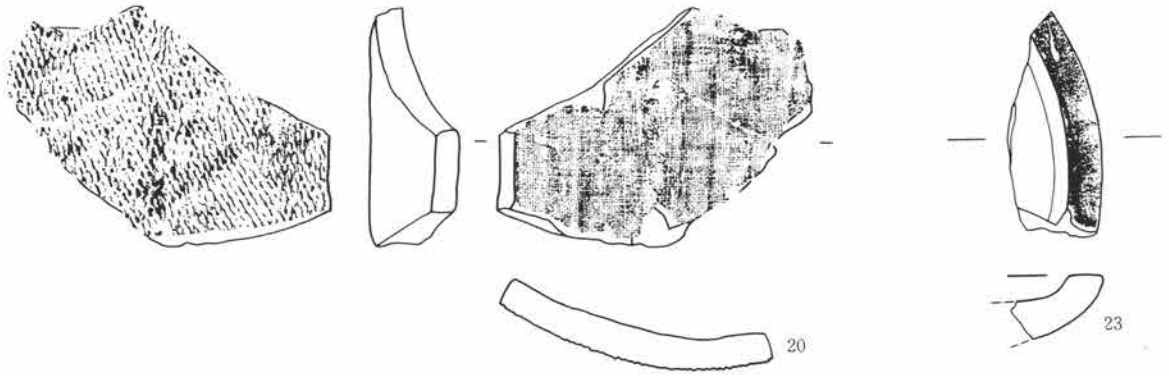
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.8・10.6・4.5 小片 粗砂粒・少量の褐色鉍物粒 普通 橙色	底部は若干丸みをもち、体部は僅かに外反する。底部は不定方向へのへら削り。体部は1段の左方向へのへら削り、口縁部は横撫で、撫での幅は広い。体部内面は放射状暗文が施される。
2	土師器 坏 覆土	— ・ — ・ — 小片 粗砂粒・褐色鉍物粒 普通 にぶい橙色	底部は若干丸みをもち、体部は外反し、口縁部は短く内湾気味となる。体部は幅広く1段の左方向へら削り、口縁部は横撫で。体部内面は放射状暗文が施されている。
3	土師器 坏 覆土	— ・ — ・ — 小片 粗砂粒 やや軟質 橙色	若干丸底になると思われる。外面はへら削り。体部内面は放射状暗文が施される。
4	須恵器 蓋 覆土	19.0・— ・ — 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	全体的に器肉は厚く、体部は比較的偏平で直線的に端部に至り、先端は丸味をもつ。カエリは小さく折り返され、丸味をもつ。
5	須恵器 長頸壺 覆土	15.8・— ・ — 小片 白色細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は大きく開くように外反し、口唇部は上端がつまみ上げられるように立ち、外面に1条の凸帯が巡る。ロクロ整形。内面に自然釉が付着する。

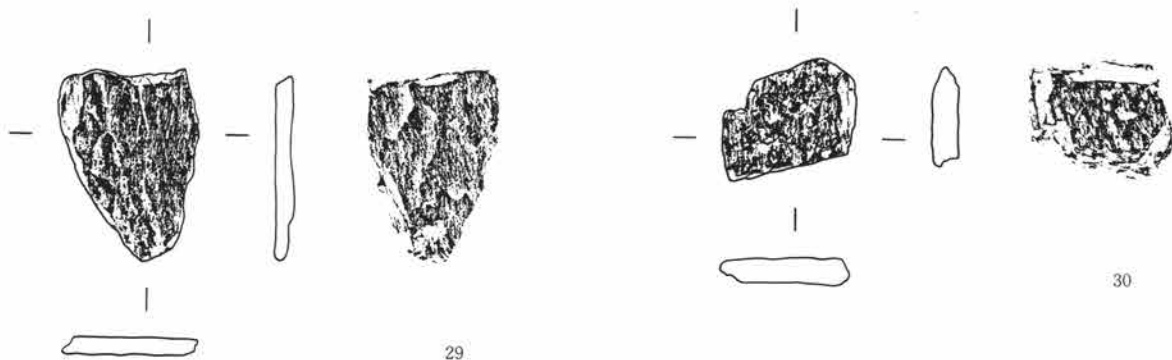
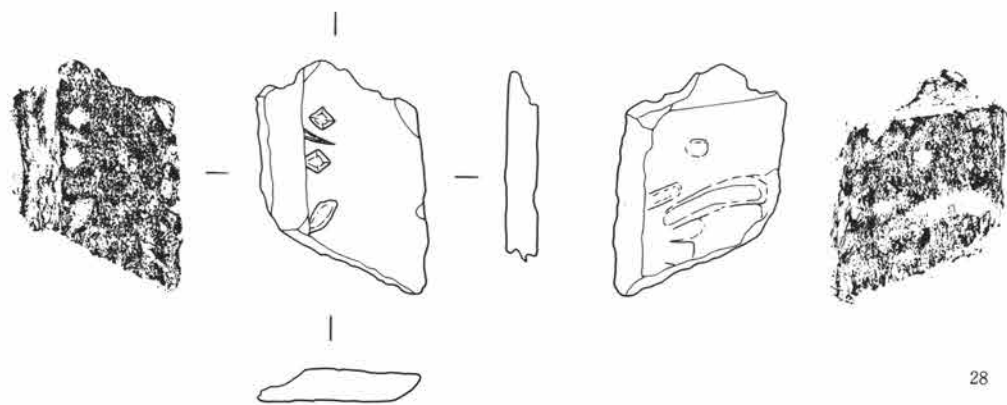
第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値	石材	特徴
6	石製品 石硯 覆土	長さ 一 幅 一 厚さ 2.5cm	流紋岩（砥沢？）	石硯の小片、陰面は使い込まれて光沢がある。







No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
7	青磁 碗	797	19	瓦	778
8	陶器 碗	801	20	瓦	778
9	磁器 碗	801	21	瓦	778
10	陶器 皿	801	22	瓦	778
11	焼きしめ陶器壺	800	23	石 臼	846
12	焼き締め陶器壺	800	24	板 碑	878
13	軟質陶器 鉢	813	25	板 碑	878
14	砥 石	835	26	板 碑	878
15	砥 石	835	27	板 碑	878
16	瓦	778	28	板 碑	879
17	瓦	778	29	板 碑	879
18	瓦	778	30	板 碑	879

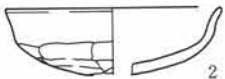
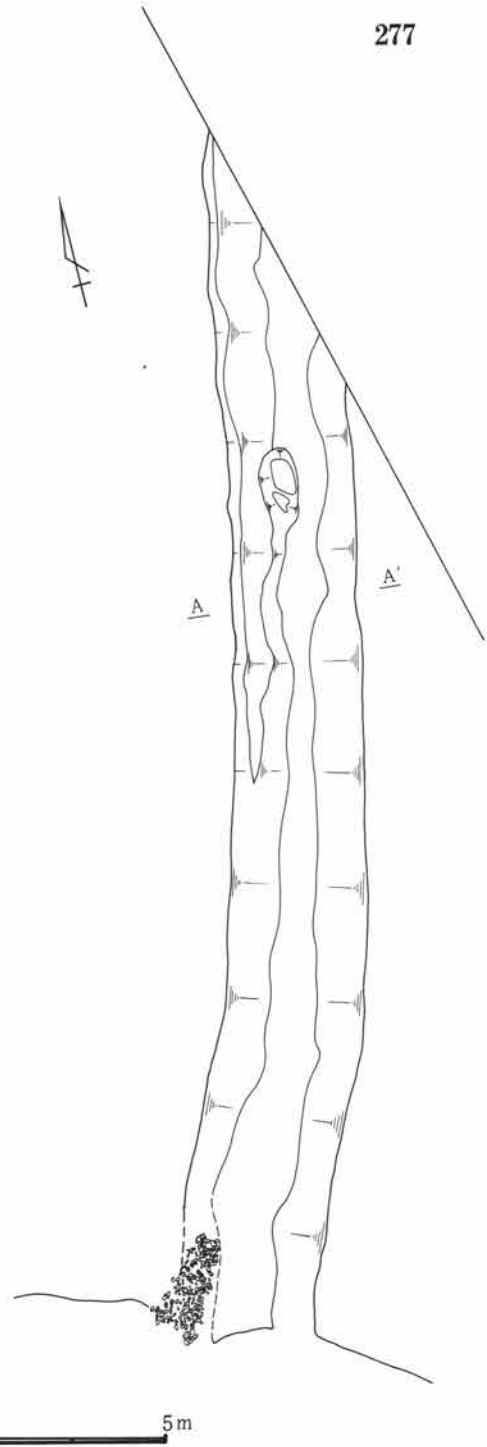
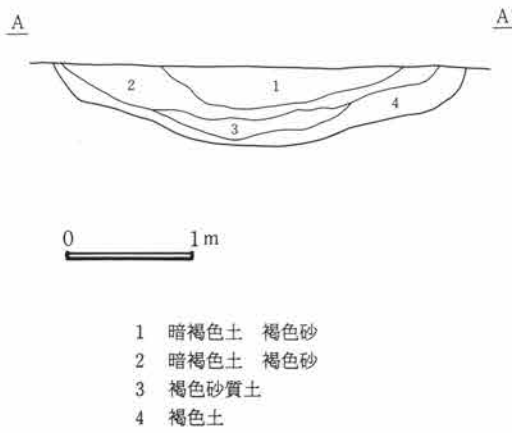
S D21

277

本遺構は、75G-10グリッドから79F-46グリッドにかけて位置し、調査区の東側へ北北東に向けて延び、南端は、本遺跡のE区とNo.7 C・B区の間の開析谷へ流れ込む様に位置する。本遺構は、S D46、S J 64・65・66、S A06・07・08と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。調査区内での規模は、幅3.35~3.60m、深度0.61~0.82mを測る。走向は、N-16°-Wを指す。

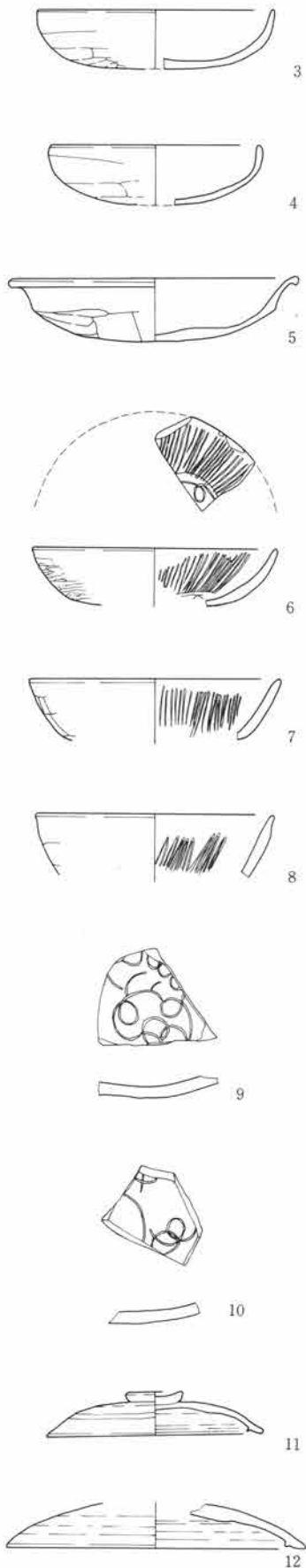
溝壁は、両側とも緩やかに立ち上がる。底部は、ゆるい丸底で、北から南にかけて緩い傾斜をもつ。高低差は、40cmである。

本遺構は、調査区の東側に延び、南北に通る農道にそって北に向い、1980年に前橋市教育委員会によって発掘が実施された下東西遺跡L区の溝4につながり、さらに本遺跡のS D94につながると推測される。



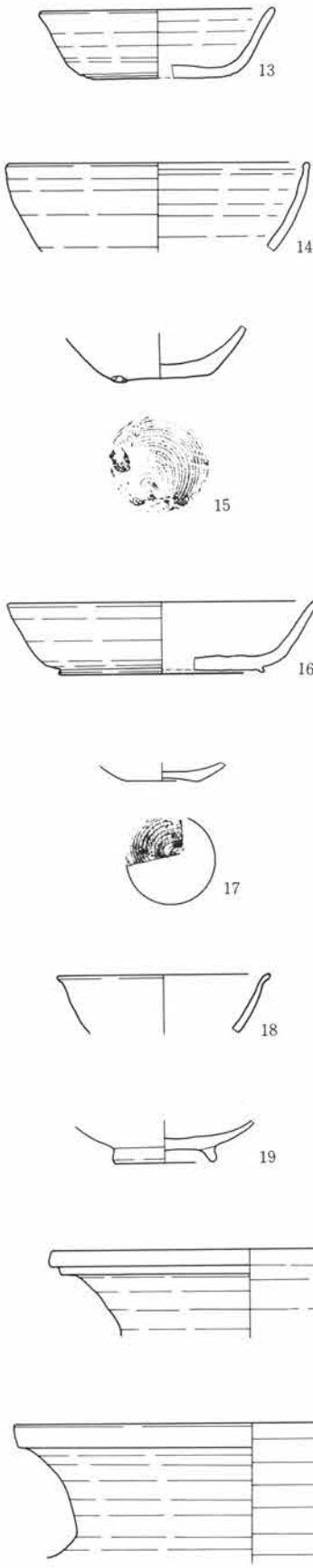
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏、覆土	11.2・9.4・3.3、1/2 細砂粒、普通、橙色	底部は若干丸みを持ち、体部~口縁部は短く外反する。底部は不定方向へラ削り、体部~口縁部は横撫で。
2	土師器 坏 覆土	11.4・ - ・ -、1/3 細砂粒 普通、にぶい橙色	底部から体部にかけて丸味をもつ。口縁部は内湾気味となる。体部は指頭による凹凸が残る。口縁部は横撫で。

第3章 検出遺構・遺物



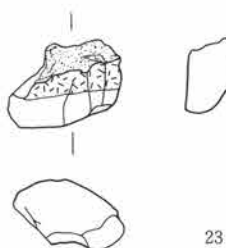
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
3	土師器 坏 覆土	14.2・—・3.5 1/3 細砂粒 普通 にぶい橙色	底部から体部は丸味をもち、口縁部はあまり開かない。底部は不定方向へら削り。体部は無で。口縁部は横撫で。
4	土師器 坏 覆土	12.4・7.6・3.6 1/6 細砂粒・白色粗砂粒 普通 橙色	底部から体部は丸味をもち、口唇部に向かって緩やかに内湾する。底部不定方向へら削り、体部は無で。口縁部横撫で。
5	土師器 皿 覆土	17.4・—・3.8 1/5 細砂粒・粗砂粒 普通 外面—橙色 内面—にぶい橙色	底部から体部は丸味をもち、口縁部は外反、口唇部は肥厚し、外側に水平に引き出される。端部は丸い。体部と口縁部の境には稜をもつ。底部不定方向へら削り。口縁部横撫で。
6	土師器 坏 覆土	14.8・—・— 小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	体部から口縁部は丸味をもつて開く。体部は2段のへら削り後、へら磨き。口縁部は短く横撫で。体部内面に放射状暗文、底部に螺旋状暗文が施される。
7	土師器 坏 覆土	15.2・—・— 小片 細砂粒・微量の褐色鉍物粒 普通、橙色	体部から口縁部は丸味をもつて外反する。体部はへら削り、口縁部は横撫で。体部内面には放射状暗文が施される。
8	土師器 坏 覆土	14.4・—・— 小片 細砂粒 普通 橙色	口縁部は外反し、横撫で。外面の体部は左方向へのへら削り。内面の体部には斜放射状暗文が施されている。
9	土師器 坏 覆土	—・—・— 底部小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通 橙色	底部外面へら削り。底部内面に螺旋状暗文が施される。
10	土師器 坏 覆土	—・—・— 底部小片 細砂粒・褐色鉍物粒 普通、橙色	底部外面へら磨き、底部内面に螺旋状暗文が施される。
11	須恵器 蓋 覆土	13.0・鈕3.2・2.6 小片 粗砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	扁平な鈕を有す。天井部は丸味をもち、口縁部はやや開く。つまみ出しによる小規模なカエリをもつ。天井部中位は回転へら削り。ロクロ整形。
12	須恵器 蓋 覆土	18.0・—・—、小片 白色細砂粒・白色粗砂粒 還元焰、赤灰色	天井部は緩やかな丸味をもつて口唇部に至り、つまみ出しによるカエリをもつ。ロクロ整形。

第5節 中世以降

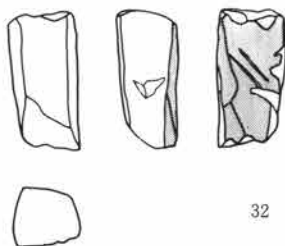
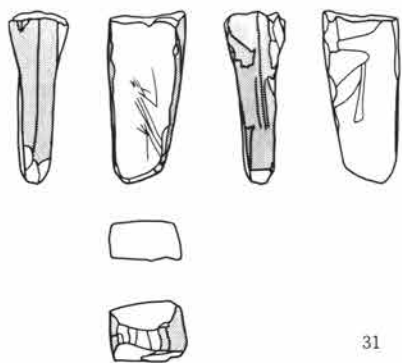
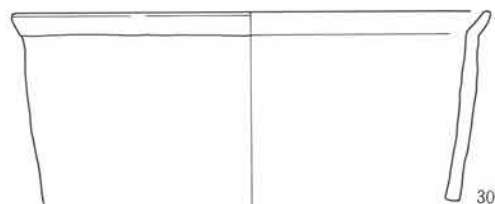
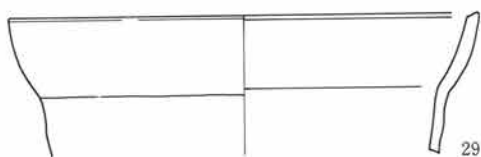
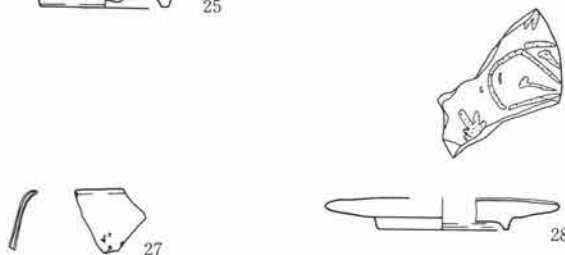
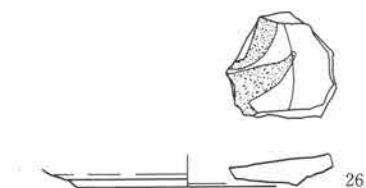
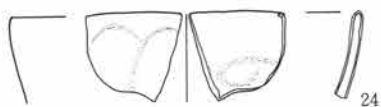


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
13	須恵器 坏 覆土	13.6・8.0・4.0、小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	平底で、体部立ち上がり部分は丸味をもち、口縁部は外反する。底部はヘラ削り。ロクロ整形。
14	須恵器 碗 覆土	17.6・—・—、小片 細砂粒 還元焰 灰色	体部は丸味をもち、直立気味に口唇部に至る。口縁部内側に1条の沈線が入る。ロクロ整形。
15	須恵器 坏 覆土	—・—・5.6、小片 細砂粒 還元焰 灰白色	体部は丸味をもって開く。底部は回転糸切り未調整。
16	須恵器 坏 覆土	18.0・13.8(高台12.0) 4.1、1/8 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰色	小さな高台が造り出され、体部立ち上がり部分は丸味をもち、口縁部まで直線的に開く。ロクロ整形、底部は回転ヘラ調整。
17	灰釉陶器 耳皿 覆土	—・6.0・— 小片 黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	底部右回転糸切り未調整。釉調は不透明な緑灰色。
18	灰釉陶器 碗 覆土	13.0・—・— 小片 細砂粒 堅緻 灰色	口縁部は外反する。釉調は不透明な緑灰色を呈す。
19	灰釉陶器 碗 覆土	—・—・高台径5.4 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰白色	底部は回転撫で調整。高台の器肉は厚く、外面に弱い稜をもち、接地面は丸味をもつ。漬け掛けによる施釉。
20	須恵器 甕 覆土	23.6・—・— 小片 細砂粒・黒色鉍物粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部は肥厚し、端部はほぼ平坦。口唇部下に1条の凸帯が貼付される。成形は紐作りによる。ロクロ整形。
21	土師器 甕 覆土	27.8・—・— 小片 黄白色粗砂粒 黒褐色円細礫 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部に幅1.5cmの縁帯をもつ。成形は紐作りによる。外面はロクロ整形、頸部内面は上方向への撫で。

第3章 検出遺構・遺物



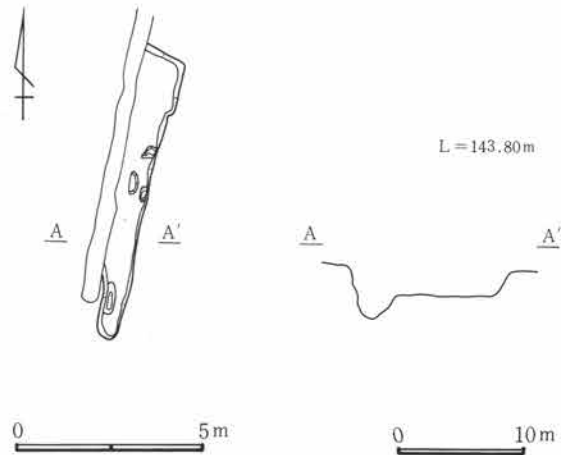
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
22	須恵器 円面硯 覆土	—・10.6・— 小片 細砂粒・黒色鉱物 粒 還元焰 灰色	円面硯脚部。脚部は裾でやや開き、下位に断面三角形の凸帯がまわる。中位には2段の透しが12ヶ所に施けられたと推定される。
23	土製品 羽口 覆土	—・—・— 小片 粗砂粒・褐色鉱物 粒 普通 淡黄色	羽口先端部。端部には鉄分が付着、その下には二次的な還元焰がみられる。



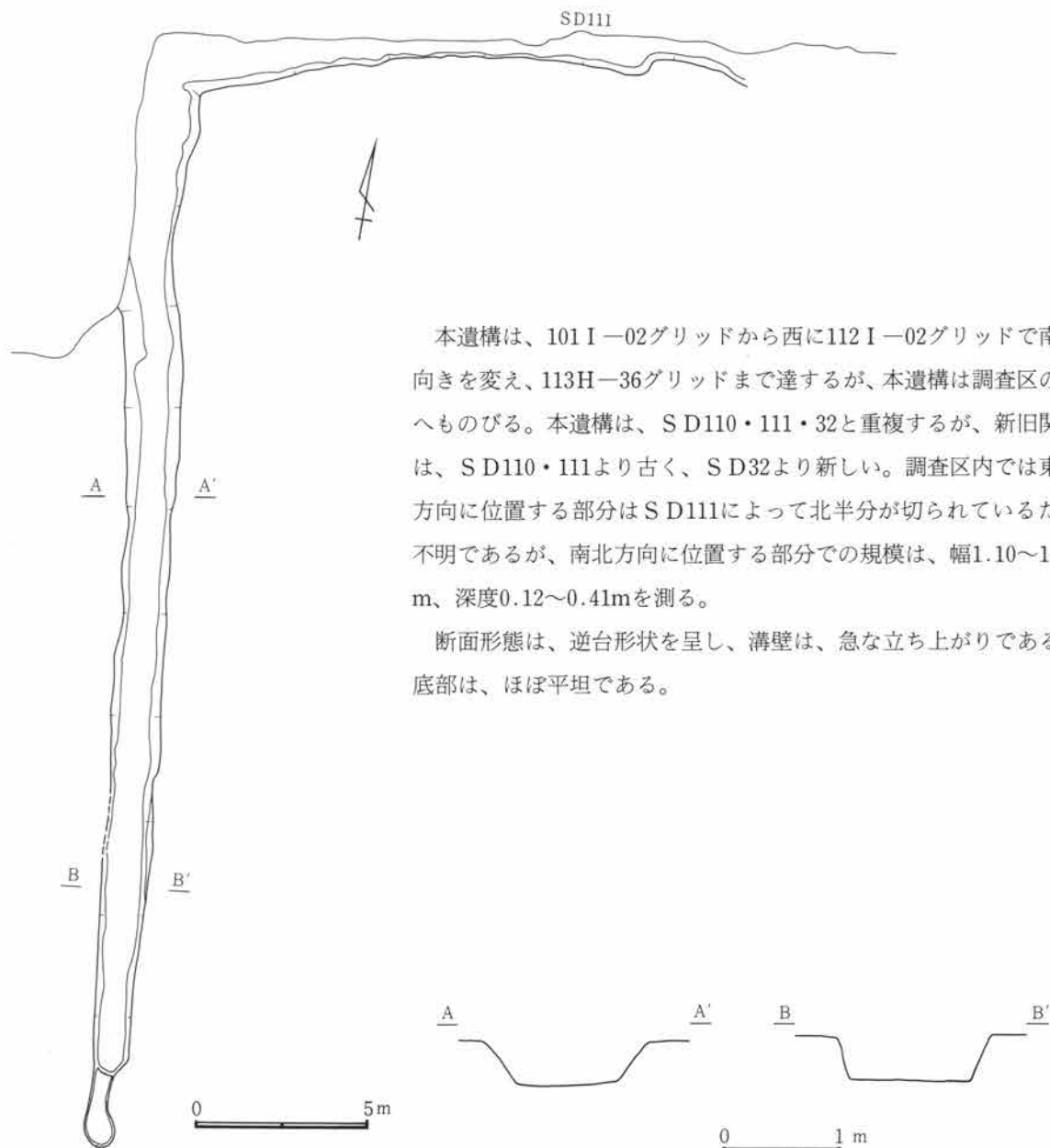
No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
24	青磁 碗	797	29	内 耳	812
25	陶器 碗	801	30	内 耳	813
26	陶器 皿	801	31	砥 石	835
27	磁器 碗	801	32	砥 石	835
28	陶器 皿	801	33	板 碑	879

S D27

本遺構は、86G-36グリッドから88G-38グリッドにかけて位置し、S D26、S J 67・81・92と重複するが、新旧関係は、S D26より古く、他より新しい。規模は、全長7.76m、幅0.54~1.18m、深度0.10~0.49mを測る。断面形態は、逆台形を呈し、溝壁は急な立ち上がりである。底部は、ほぼ平坦であるが、小ピット状の凹凸がみられる。

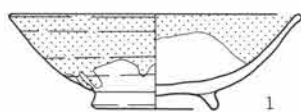


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	14.3・一・4.2、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、明赤褐色	底部から体部にかけて緩やかな丸味をもって開き、口縁部は直立気味に立つ。底部へら削り、体部は横方向へのへら削り。口縁部は横撫で。
2	土師器 坏 覆土	13.8・一・4.2、小片 細砂粒・粗砂粒 白色角細礫 普通、暗褐色	底部から体部にかけて緩やかな丸味をもって開き、口縁部は直立気味に立つ。底部は不定方向へら削り。体部横方向へのへら削り、口縁部は横撫で。
3	須恵器 蓋 覆土	16.0・一・一、小片 細砂粒・黒色円細 礫、還元焰 オリーブ灰色	天井部は浅く、僅かな丸みをもち、口縁部が開く。カエリは口縁部の折り返しによって作られ端部は丸い。天井部は回転へら削り。ロクロ整形。
4	土師器 甔 覆土	一・7.2・一 小片 粗砂粒・雲母 普通 暗褐色	胴部は大きく球状の丸みをもつ。底部は平底で中央に径3.6cmの孔をもつ。胴部は平削りが施されているが体位は不明である。

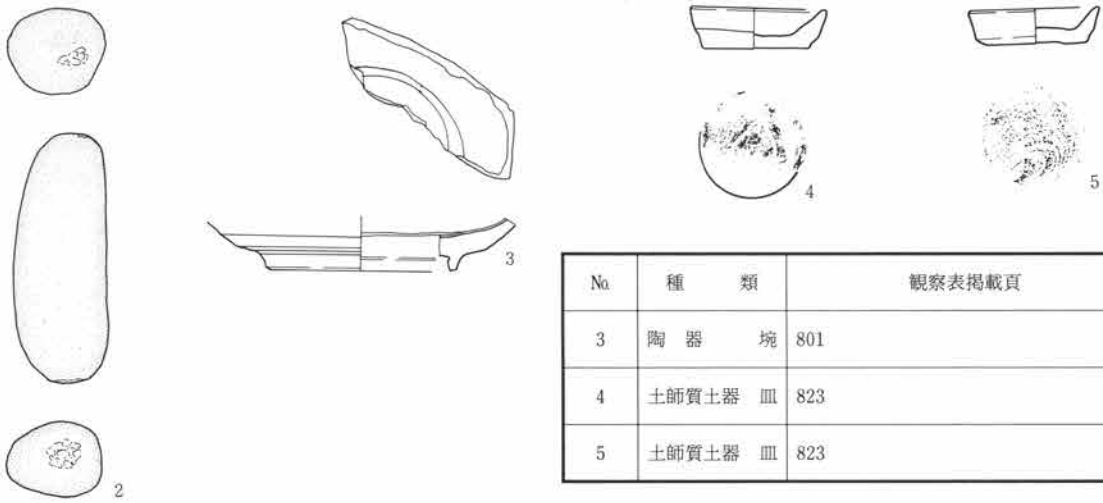


本遺構は、101 I-02グリッドから西に112 I-02グリッドで南に向きを変え、113H-36グリッドまで達するが、本遺構は調査区の東へものびる。本遺構は、S D110・111・32と重複するが、新旧関係は、S D110・111より古く、S D32より新しい。調査区内では東西方向に位置する部分はS D111によって北半分が切られているため不明であるが、南北方向に位置する部分での規模は、幅1.10~1.70 m、深度0.12~0.41mを測る。

断面形態は、逆台形状を呈し、溝壁は、急な立ち上がりである。底部は、ほぼ平坦である。



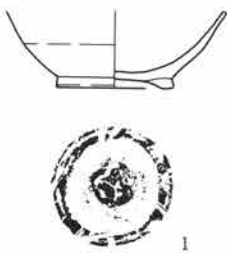
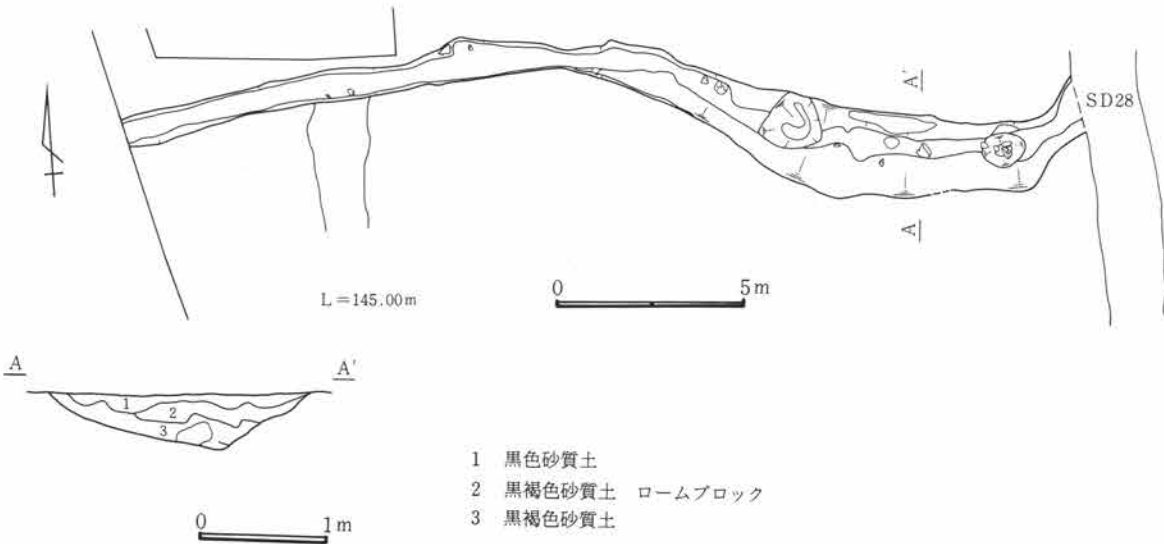
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴		
1	灰釉陶器 碗 S D28・21の 覆土接合	15.4・6.4(高台径6.0)・5.0、1/2 黒色鉱物粒・緻密・還元 焰焼きしめ、灰白色	体部から口縁部にかけて緩やかな丸みをもって開き、口唇部が僅かに外反する。高台は「ハ」の字状に開き、弱い稜をもつ。底部は回転ヘラ調整。釉調は不透明な灰オリーブ色		
No	器種	出土位置	計測値(長さ・幅・厚さ)	重量	石 材
2	敲石	覆土	23.2cm、5.0cm、4.0cm	440g	輝石安山岩(粗粒)



SD32

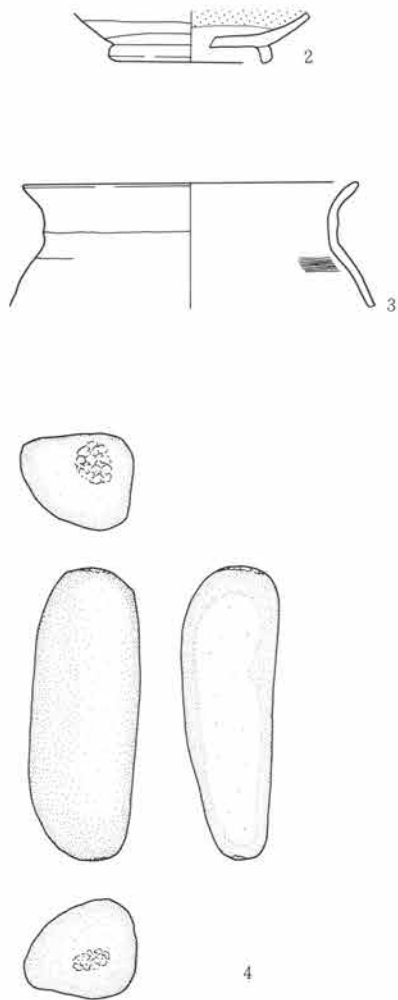
279

本遺構は、東端をSD28によって切られ、西側は調査区外にのび、調査内では、113H-48グリッドから126H-49グリッドまで位置し、SD28、SK44と重複するが、新旧関係は、SD28より古く、SK44より新しい。規模は、幅0.48~2.44m、深度0.20~0.57mを測る。断面形態は、溝壁が大きく開く「V」字型を呈す。底部は、ゆるい丸底で、東から西にかけて緩い傾斜がみられる。高低差は、37cmである。

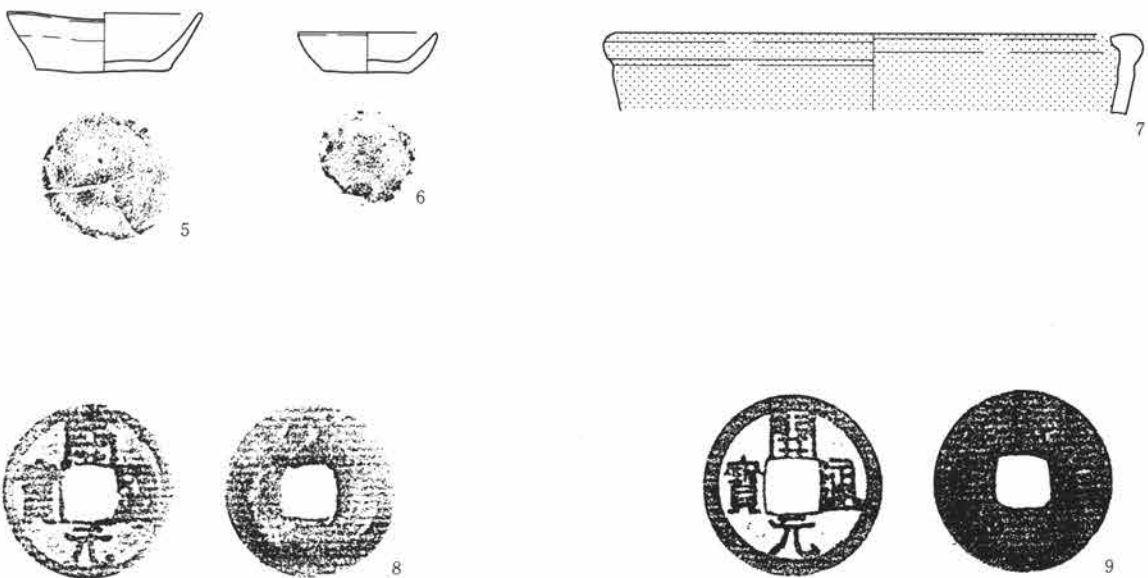


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 埴 覆土	—・6.0・高台径6.2 小片、粗砂粒・褐色鉍 物粒、還元焰、軟質、 にぶい黄橙色	体部は僅かに脹らみをもって開く。高台は低く、付け 方は雑で、接地面にはヘラを当てた痕跡がある。底部 は高台貼付時に全面撫で調整。

第3章 検出遺構・遺物



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴	
2	灰釉陶器 碗 覆土	—・8.2・高台径7.8 小片 少量の細砂粒・緻密、 やや酸化焙気味 灰黄色 釉は灰白色	体部は僅かに脹らみをもって開き、 高台は付け高台、断面四角形を呈し、 外面に稜をもつ。体部下位に回転ヘ ラ削り。底部は回転ヘラ調整。	
3	土師器 甕 覆土	17.8・—・— 小片 細砂粒 普通 淡黄色	口縁部は「コ」の字状を呈し、横撫 で。胴部外面はヘラ削り、内面は横 撫で。	
No	種類・器種 出土位置	計測値	石材	特 徴
4	石器 石 敲 覆土	長さ 15.3cm 幅 5.8cm 厚さ 5.2cm 重さ 680g	輝石安山岩 (粗粒)	端部両側に敲打痕がみられる。
No	種 類	観察表掲載頁		
5	土師質土器 皿	823		
6	土師質土器 皿	823		
7	陶器 鉢	801		





10



16



11



17



12



18



13



19



14



20



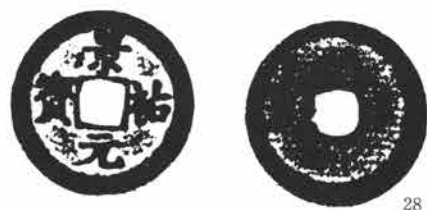
15



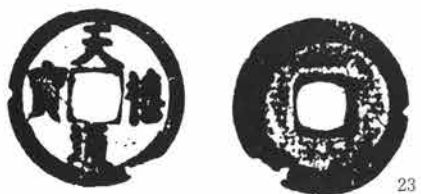
21



22



28



23



29



24



30



25



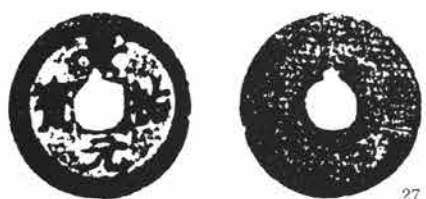
31



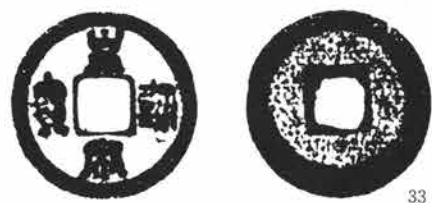
26



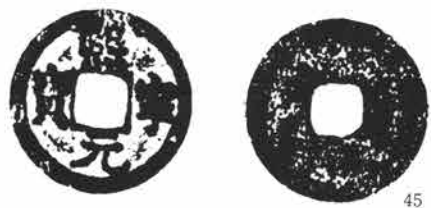
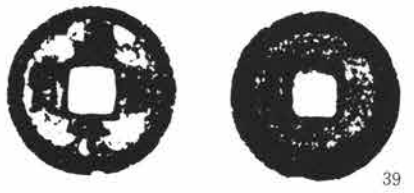
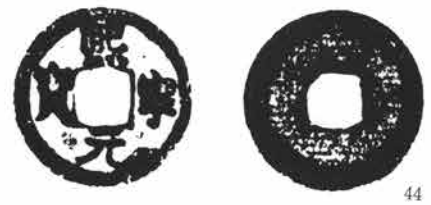
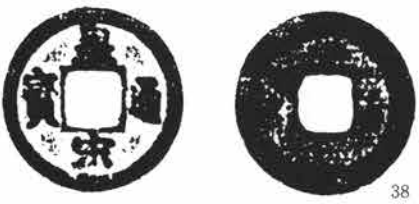
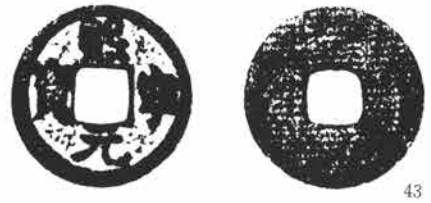
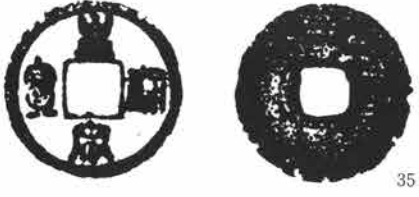
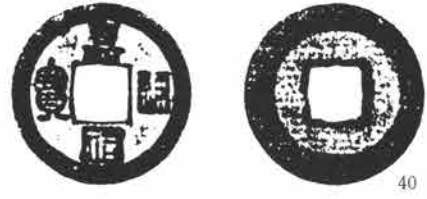
32

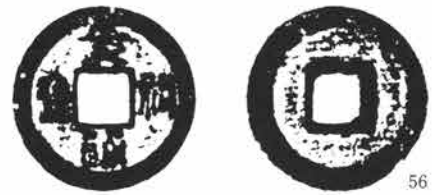
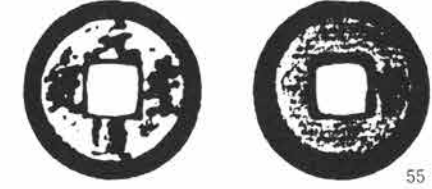
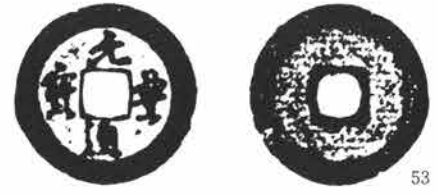
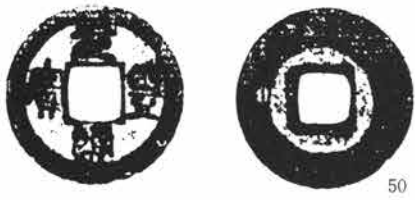


27



33







70



76



71



77



72



78



73



79



74



80



75



81

第5節 中世以降

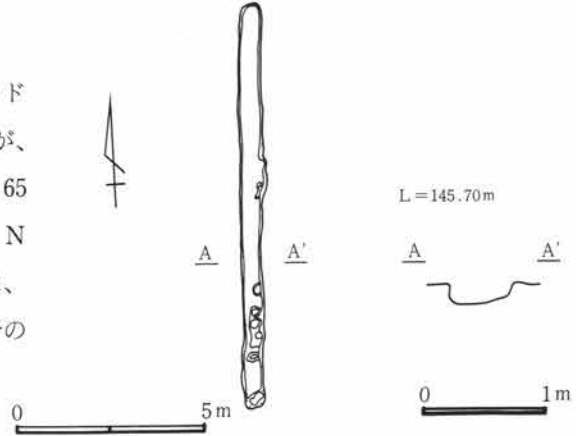
NO	錢名	出土位置	時代	初鑄年代	西曆	外輪徑 cm	內輪徑 cm	重量 g	穿形	書體	背文
8	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.36	2.03	2.4	方穿	隸書	上仰月
9	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.45	1.97	3.3	方穿	隸書	
10	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.46	2.02	3.3	方穿	隸書	
11	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.4	2.0	3.1	方穿	隸書	
12	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.41	2.1	2.8	方穿	隸書	
13	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.4	2.08	3.8	方穿	隸書	
14	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.37	2.09	2.8	方穿	隸書	
15	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.51	2.16	3.4	方穿	隸書	
16	開元通寶	底部直	唐	武德四年	621年	2.46	2.03	3.2	方穿	隸書	
17	至道元寶	底部直	北宋	至道元年	995年	2.45	1.91	3.0	方穿	真書	
18	景德元寶	底部直	北宋	景德二年	1005年	2.47	2.09	3.7	方穿	真書	
19	祥符元寶	底部直	北宋	大中祥符元年	1008年	2.46	1.81	3.8	方穿	真書	
20	祥符元寶	底部直	北宋	大中祥符元年	1008年	2.48	1.92	4.0	方穿	真書	
21	祥符通寶	底部直	北宋	大中祥符元年	1008年	2.5	1.95	3.8	方穿	真書	
22	天禧通寶	底部直	北宋	天禧元年	1017年	2.48	2.02	3.0	方穿	真書	
23	天禧通寶	底部直	北宋	天禧元年	1017年	2.43	1.96	3.4	方穿	真書	
24	天禧通寶	底部直	北宋	天禧元年	1017年	2.49	2.04	3.7	方穿	真書	
25	天禧通寶	底部直	北宋	天禧元年	1017年	2.4	1.92	2.3	方穿	真書	
26	天聖元寶	底部直	北宋	天聖元年	1023年	2.5	2.0	3.5	方穿	真書	
27	景祐元寶	底部直	北宋	景祐元年	1034年	2.47	1.95	2.7	方穿	真書	
28	景祐元寶	底部直	北宋	景祐元年	1034年	2.48	1.92	3.5	北宋	真書	
29	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.46	2.06	3.2	方穿	篆書	
30	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.41	1.9	3.3	方穿	篆書	
31	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.4	2.0	3.7	方穿	隸書	
32	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.45	1.72	3.4	方穿	真書	
33	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.53	2.1	4.1	方穿	篆書	
34	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.45	1.98	2.6	○	隸書	
35	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.42	2.01	2.9	方穿	篆書	
36	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.38	1.84	3.2	方穿	真書	
37	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.46	2.0	3.6	方穿	篆書	
38	皇宋通寶	底部直	北宋	寶元二年	1039年	2.48	2.04	3.2	方穿	真書	
39	嘉祐元寶	底部直	北宋	嘉祐元年	1056年	2.34	1.83	3.6	方穿	真書	
40	嘉祐通寶	底部直	北宋	嘉祐元年	1056年	2.46	1.9	3.1	方穿	篆書	
41	嘉祐通寶	底部直	北宋	嘉祐元年	1056年	2.44	2.02	3.8	方穿	篆書	
42	治平元寶	底部直	北宋	治平元年	1064年	2.38	1.77	3.6	方穿	真書	
43	熙寧元寶	底部直	北宋	熙寧元年	1068年	2.45	2.06	3.2	方穿	真書	
44	熙寧元寶	底部直	北宋	熙寧元年	1068年	2.44	2.01	3.5	方穿	真書	
45	熙寧元寶	底部直	北宋	熙寧元年	1068年	2.48	2.11	3.3	方穿	真書	
46	熙寧元寶	底部直	北宋	熙寧元年	1068年	2.43	1.97	3.2	方穿	篆書	
47	熙寧元寶	底部直	北宋	熙寧元年	1068年	2.4	2.08	4.1	方穿	篆書	
48	熙寧元寶	底部直	北宋	熙寧元年	1068年	2.43	2.01	3.6	方穿	篆書	
49	元豐通寶	底部直	北宋	元豐元年	1078年	2.44	1.91	3.5	方穿	行書	
50	元豐通寶	底部直	北宋	元豐元年	1078年	2.41	1.92	3.1	方穿	篆書	
51	元豐通寶	底部直	北宋	元豐元年	1078年	2.38	1.9	3.5	方穿	行書	
52	元豐通寶	底部直	北宋	元豐元年	1078年	2.45	1.85	3.2	方穿	行書	
53	元豐通寶	底部直	北宋	元豐元年	1078年	2.42	1.79	3.3	方穿	行書	
54	元豐通寶	底部直	北宋	元豐元年	1078年	2.4	1.9	3.6	方穿	行書	
55	元豐通寶	底部直	北宋	元豐元年	1078年	2.41	1.86	3.4	方穿	行書	
56	元祐通寶	底部直	北宋	元祐八年	1093年	2.48	1.99	3.7	方穿	篆書	
57	元祐通寶	底部直	北宋	元祐八年	1093年	2.4	1.94	3.7	方穿	行書	
58	元祐通寶	底部直	北宋	元祐八年	1093年	2.47	2.03	3.8	方穿	行書	
59	元祐通寶	底部直	北宋	元祐八年	1093年	2.46	1.93	3.7	方穿	行書	
60	元祐通寶	底部直	北宋	元祐八年	1093年	2.43	1.7	3.7	方穿	篆書	
61	元祐通寶	底部直	北宋	元祐八年	1093年	2.42	1.95	3.3	方穿	篆書	
62	元祐通寶	底部直	北宋	元祐八年	1093年	2.49	1.83	3.8	○	篆書	
63	紹聖元寶	底部直	北宋	紹聖元年	1094年	2.47	1.8	3.9	方穿	行書	
64	紹聖元寶	底部直	北宋	紹聖元年	1094年	2.43	1.85	3.3	方穿	行書	
65	紹聖元寶	底部直	北宋	紹聖元年	1094年	2.5	2.0	4.3	方穿	篆書	
66	紹聖元寶	底部直	北宋	紹聖元年	1094年	2.37	1.9	3.5	方穿	篆書	
67	紹聖元寶	底部直	北宋	紹聖元年	1094年	2.4	1.85	3.8	方穿	篆書	
											下月文
											上仰月

第3章 検出遺構・遺物

NO	銭名	出土位置	時代	初鑄年代	西 曆	外輪径 cm	内輪径 cm	重 量 g	穿 形	書 体	背 文
68	元符通寶	底部直	北 宋	元符元年	1098年	2.36	1.79	3.8	方 穿	行書	
69	聖宋元寶	底部直	北 宋	建中靖国元年	1101年	2.42	1.82	2.8	方 穿	行書	
70	大觀通寶	底部直	北 宋	大觀元年	1107年	2.56	2.225	3.6	方 穿	真書	
71	政和通寶	底部直	北 宋	政和元年	1111年	2.44	2.1	3.3	方 穿	隸書	
72	政和通寶	底部直	北 宋	政和元年	1111年	2.47	2.11	4.1	方 穿	篆書	
73	嘉泰通寶	底部直	北 宋	嘉泰元年	1201年	2.43	2.04	3.0	方 穿	真書	二
74	開禧通寶	底部直	南 宋	開禧元年	1205年	2.43	2.05	3.1	方 穿	真書	二
75	咸淳元寶	底部直	南 宋	咸淳元年	1265年	2.39	1.9	3.4	方 穿	真書	二
76	洪武通寶	底部直	明	洪武元年	1368年	2.3	1.77	3.2	方 穿	真書	
77	永樂通寶	底部直	明	永樂六年	1408年	2.5	2.02	3.1	方 穿	真書	
78	永樂通寶	底部直	明	永樂六年	1408年	2.49	2.07	3.9	方 穿	真書	
79	永樂通寶	底部直	明	永樂六年	1408年	2.48	2.1	3.6	方 穿	真書	
80	不 明	底部直				2.34	1.79	3.0	円 穿		
81	不 明	底部直				2.36	1.8	2.2	方 穿		

S D36

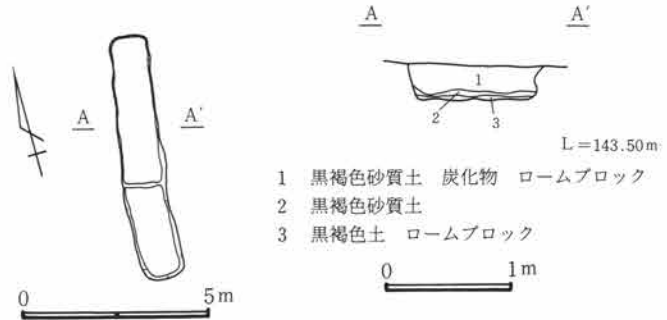
本遺構は、118H-30グリッドから118H-45グリッドにかけて直線的に位置し、S D43、S J 77と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。規模は、全長10.65m、幅0.44~0.72m、深度8~25cmを測る。走向は、N-3°-Wを指す。断面形態は、長方形を呈し、溝壁は、垂直に立ち上がる。底部は、ほぼ平坦であるが、若干のピット状の落ち込みがみられる。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 甕 覆土	17.8・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、明褐色	口縁部は「コ」の字状の退化したもので、一旦外反気味に立ち上がり口縁上部が外反する。胴部は横方向へ削り、口縁部横撫で。

S D49

本遺構は、81G-03グリッドから82G-00グリッドに位置し、単独で占地する。規模は、全長6.56m、幅0.96~1.20m、深度22~29cmを測る。断面形態は、長方形を呈し、溝壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底部は、平坦であるが中程に段をもつ。



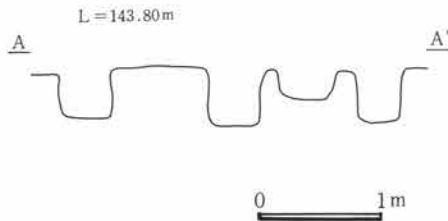
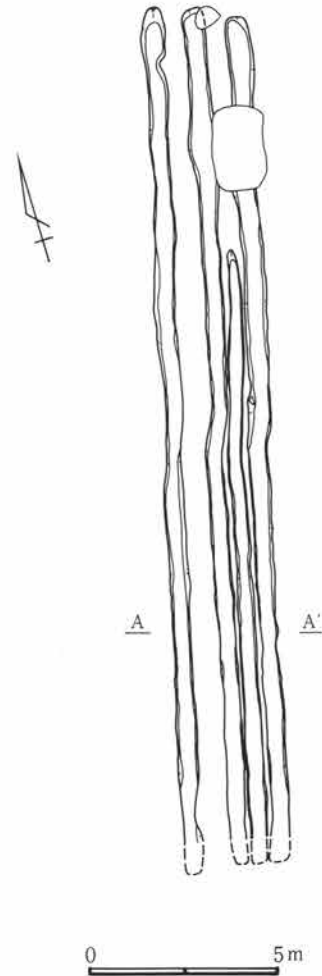
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	12.4・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰、灰白色	天井部は僅かに丸みをもち、口縁部が開く。カエリは貼付。ロクロ整形。

S D63・64・65・66

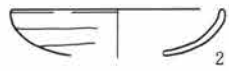
S D63・64・65・66は、87～90G-30～38グリッド内に4基とも直線的でほぼ平行に位置する。4基とも南端でS D23とS D64はS E42とS D63はS J64と重複するが新旧関係は、S D23より古い、他の遺構よりは新しい。走向は、ともにN-10°-Eを指す。

規模は、S D63では全長22.74m、幅0.36～0.56m、深度38～42cm、S D64では22.62m、幅0.40～0.60m、深度45～50cm、S D65では全長16.24m、幅0.30～0.56m、深度24～32cm、S D66では全長22.34m、幅0.38～0.66m、深度44～53cmを測る。

断面形態は、ともに長方形を呈し、溝壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底部もともに平坦で、若干の傾斜はみられるが一定方向への傾斜ではなく溝の内ゆるい波状をなす。

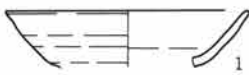


S D63



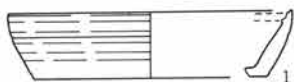
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.6・一・一、小片 細砂粒 普通、にぶい橙色	底部から口縁部まで緩やかな丸みをもつ。底部はへら削り、口縁部横撫で。
2	土師器 坏 覆土	11.2・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、にぶい赤褐色	体部は浅く、底部から緩やかな丸みをもって、内湾気味の口唇部に至る。底部はへら削り、口縁部は横撫で。

S D64



1	須恵器 坏 覆土	12.8・一・一、小片 白色細砂粒 還元焰、灰色	体部から口縁部に向かっては、ほぼ直線的に大きく開き、体部下位は底部に向かってすぼまる形となる。ロクロ整形。
2	須恵器 坏 覆土	一・7.0・一、小片 細・粗砂粒・白色中礫 褐色円礫、還元焰、灰色	体部下半は丸みをもつ。底部は回転糸切り。ロクロ整形。

S D66

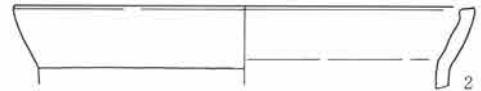
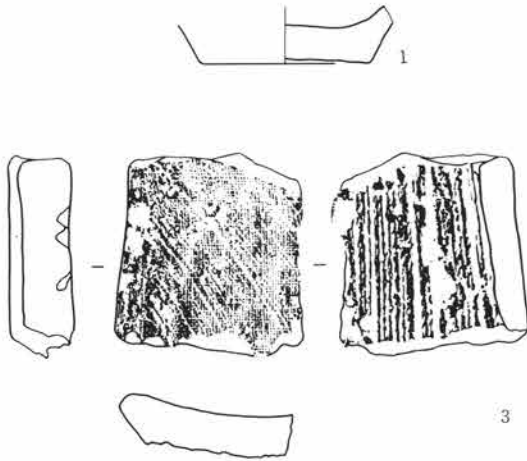


1	須恵器 円面碗 覆土	15.5・12.4・3.5、小片 細砂粒・黒色鉱物粒 還元焰、オリーブ黒色	体部上位から口縁部にかけて丸みもち、口唇部に天井部が貼付される。底部はへら撫で。ロクロ整形。
---	------------------	---	--

S D98

283

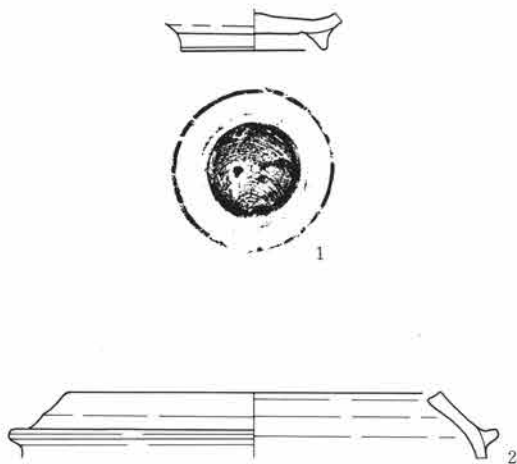
本遺構は、No 9 C・B調査区に位置し、120 J-15グリッドから北西に走り、139 J-29グリッドで北北西方向と西方向の二方向に分岐する。規模は、幅5.80~7.30m、深度0.50~1.21mを測る。断面形態は、「V」字形を呈する部分と緩い弧を描く部分がみられる。掘削当時は、「V」字形に掘られたものと推測される。本遺構は、前出のS D21 (P589) で述べたように本遺跡の調査区東側を走りS D21につながると推測される。



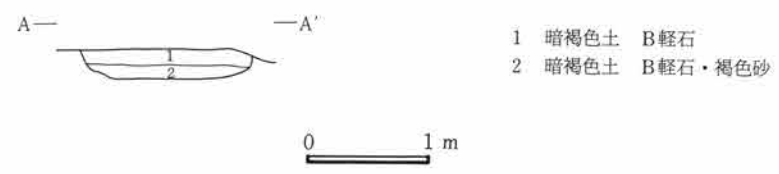
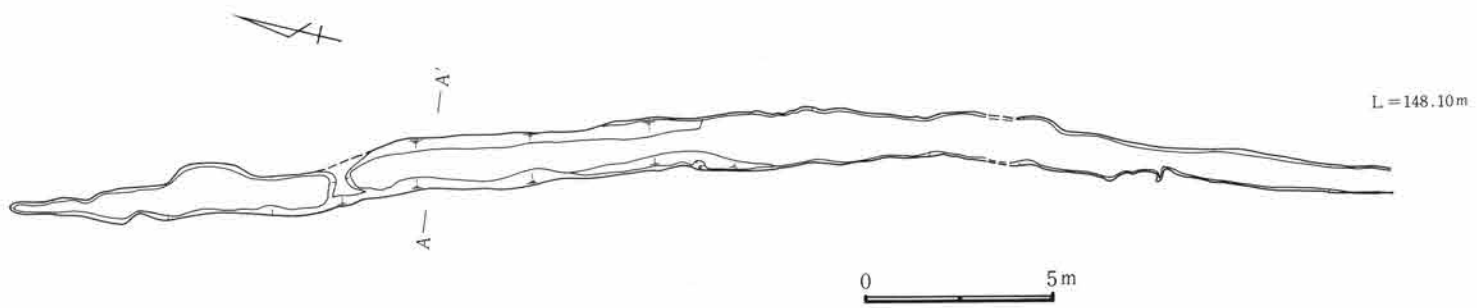
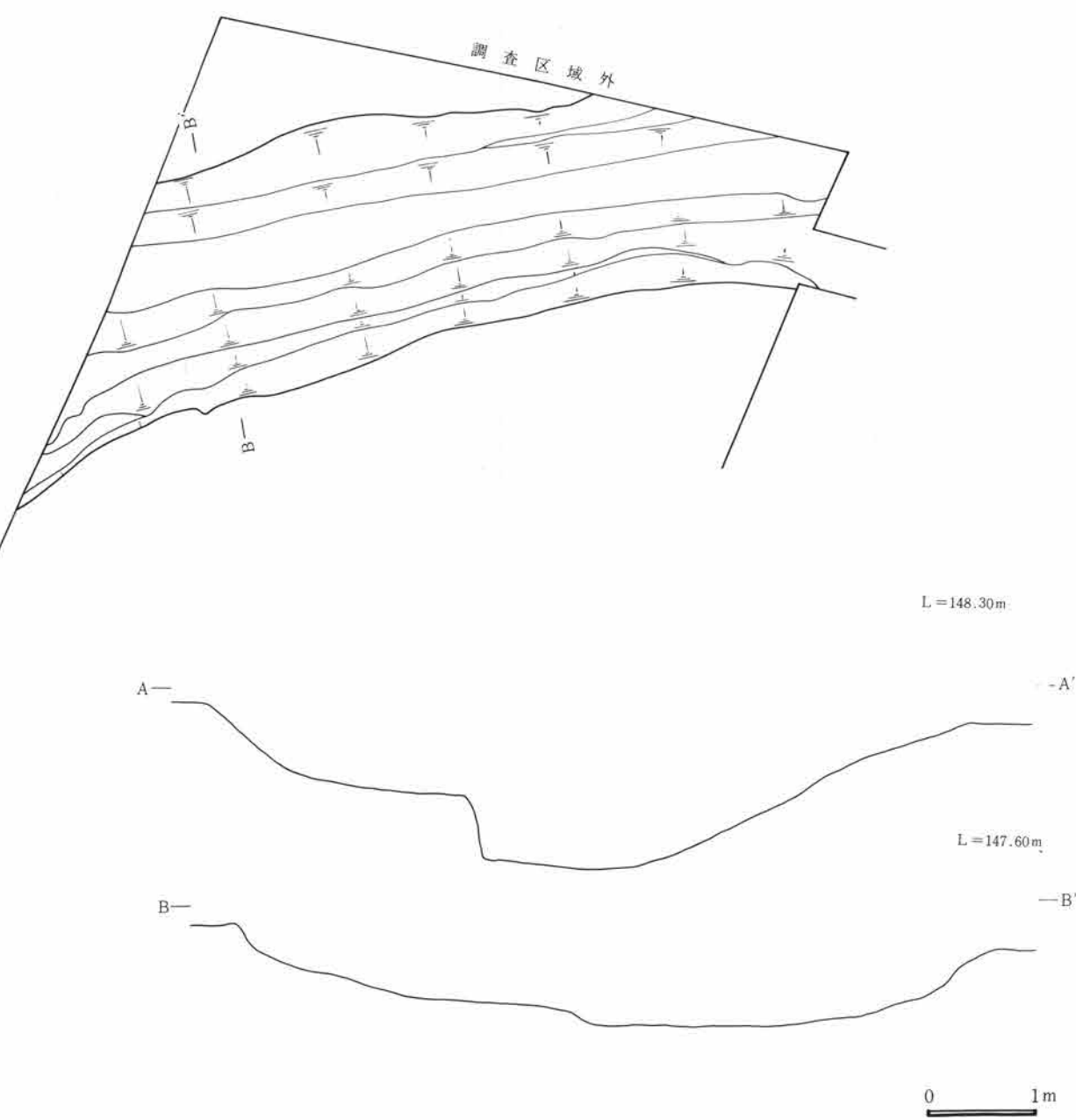
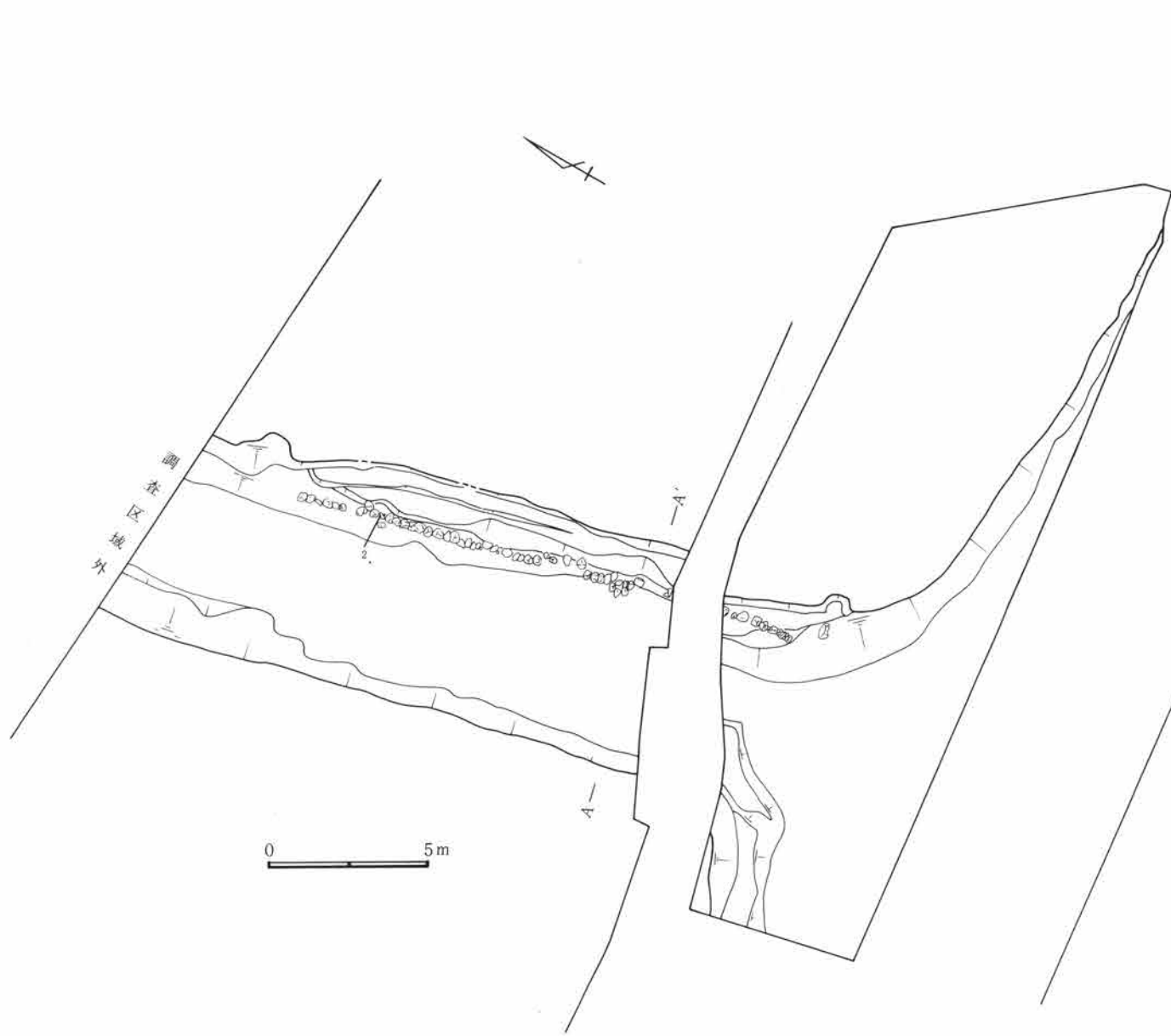
No	種類	観察表掲載頁
1	軟質陶器 鉢	812
2	軟質陶器 内耳	819
3	瓦	778

S D102

本遺構は、139 J-00グリッドから143 J-18グリッドにかけてゆるい弧を描きながら位置するが、南端は確認できなかった。本遺構は、S J 142・143・146と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。規模は、幅0.58~1.56m、深度2~18cmを測る。溝壁はJ-08~15にかけては緩やかな立ち上がりであるが、他の部分は急な立ち上がりである。底部は、ほぼ平坦で、北から南にかけて緩い傾斜をしている。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 碗 覆土	高台径7.8・— — 小片 細砂粒・粗砂粒 白色角小礫 褐色鉱物粒 還元焰 灰色	高台は直立し、端部は丸みをもつ。底部は回転糸切り未調整。
2	須恵器 羽釜 覆土	20.0・— — 小片 粗砂粒・小礫 酸化焰 灰黄色	口縁部は内傾し、口唇部は平坦面をもち内傾する。鏝は上面が水平、断面形は台形を呈す。

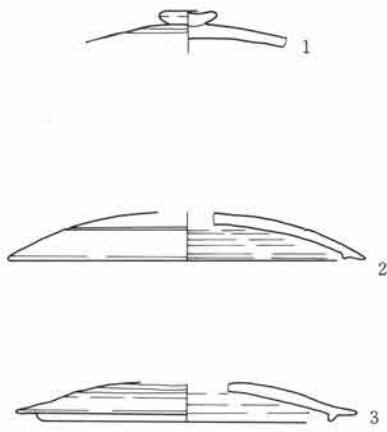
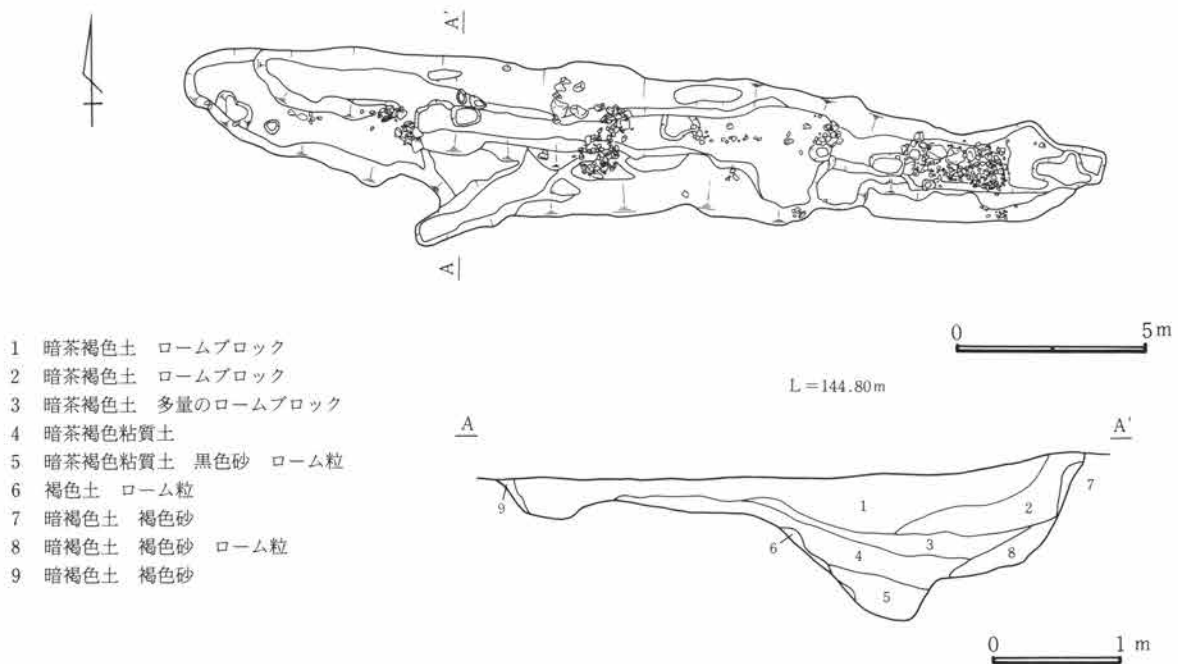


S D118

283

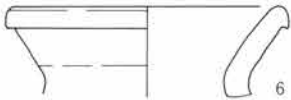
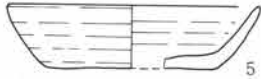
本遺構は、101H-00グリッドから110H-02グリッドにかけて位置し、S D59、S K256、S J 179と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。規模は、全長24.50m、幅4.54~8.36m、深度0.23~1.03mを測る。

断面の形態は、やや丸みをもった逆台形の底部にさらに逆三角形の掘り込みがみられ、溝壁は、北側ではやや急な立ち上がりであるが、南側は比較的緩やかな立ち上がりである。底部は、ゆるい丸みを持ち、底部の内の掘り込みに移行し、ピット状の落ち込みが数ヶ所みられ、溝の中程に最下部がみられる。高低差は48cmである。本遺構からは、多量の陶器・石臼等の破片が投棄されていた。

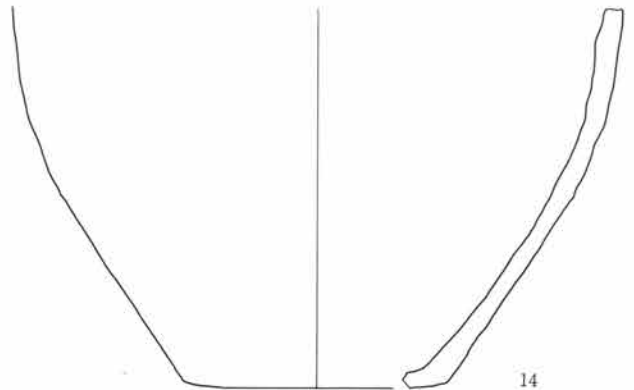
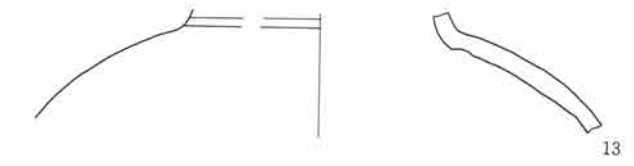
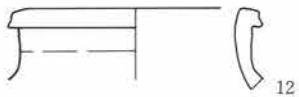
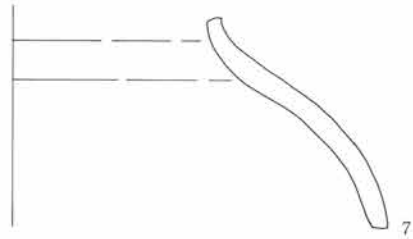


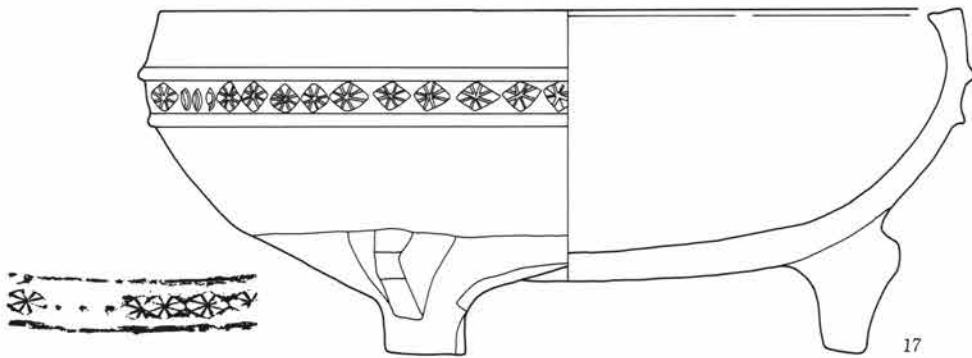
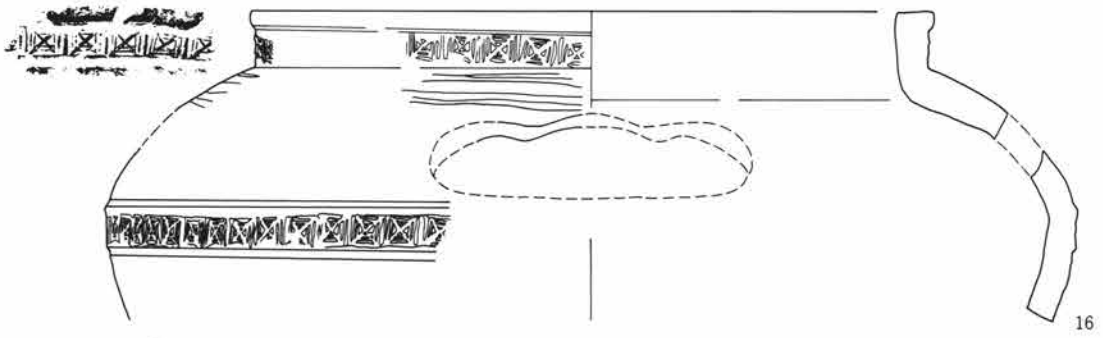
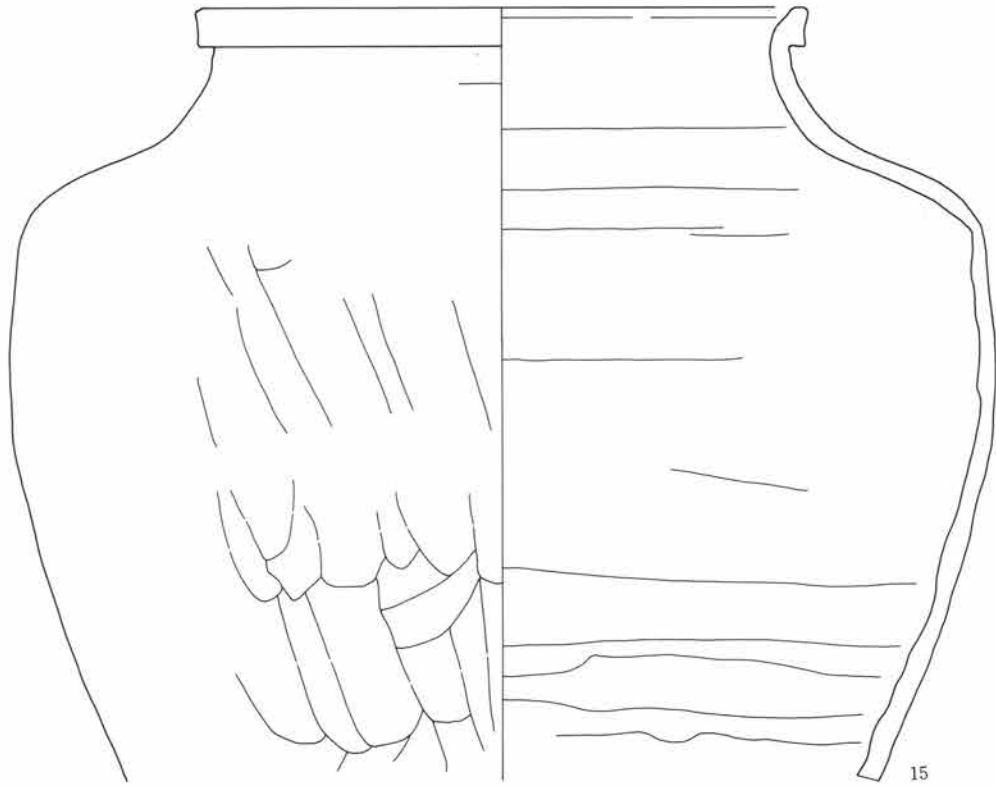
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	—・鈕径3.0・— 小片 白色細砂粒・粗砂 粒・少量の黒色鉍 物粒、還元焰、灰色	天井部は緩やかな丸みをもつ。鈕は扁平なボタン状。天井部は回転ヘラ削り。内面ロクロ整形。
2	須恵器 蓋 覆土	19.0・—・— 小片 白色細砂粒 還元焰 灰色	天井部から口唇部まで緩やかな丸みを持ち、カエリは断面三角形を呈し、貼付される。天井部は回転ヘラ削り、外面は自然釉がかかる。
3	須恵器 蓋 覆土	17.0・—・—、小片 細砂粒・少量の粗 砂粒 還元焰 にぶい黄橙色	天井部は緩やかに丸みを持ち、口縁部は開く。カエリは内湾し、口縁部の線よりも外に出る。外面は自然釉がかかる。ロクロ整形。

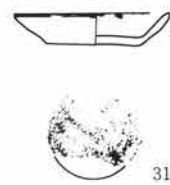
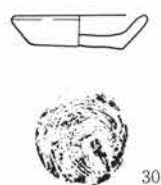
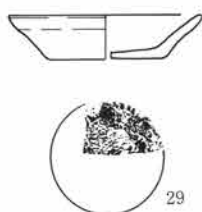
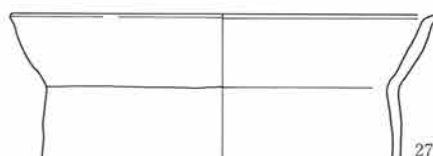
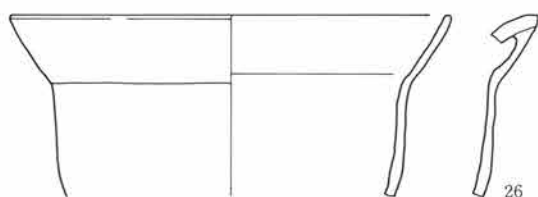
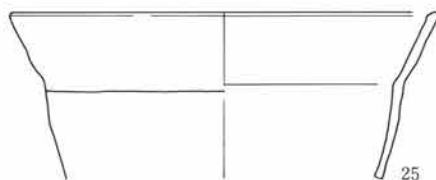
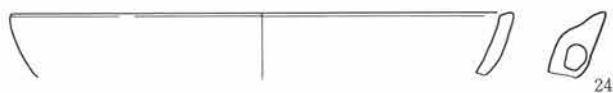
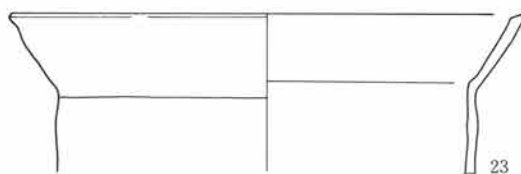
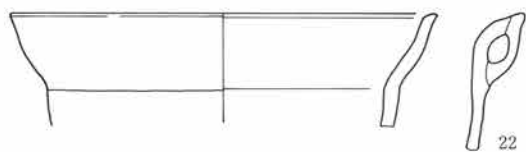
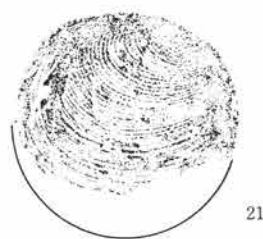
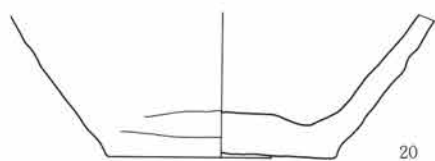
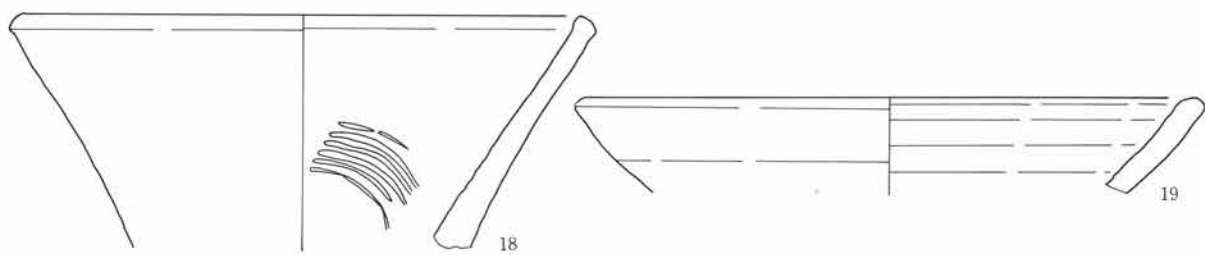
第3章 検出遺構・遺物

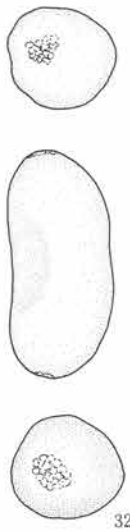


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 蓋 覆土	24.0・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	体部は扁平で、ほぼ直線的に口縁部に至り、端部が直に折れる。内面は口唇部手前に1条の沈線が巡る。外面は手持ちヘラ削り後、口縁部のみ軽い撫で。
5	須恵器 坏 覆土	14.0・10.0・— 小片、細砂粒、還元焰、灰白色	体部は僅かに脹らみをもって開く。ロクロ整形。底部は不定方向の撫で。
6	須恵器 広口壺 覆土	14.4・—・— 小片、細砂粒・粗砂粒、還元焰、灰色	口縁部は短く外反し、口唇部に向かって定まるが、口唇部外面に幅1cmの縁帯をもつ。ロクロ整形。
7	須恵器 甕 覆土	—・—・— 小片、白色細砂粒 還元焰、灰色	胴部外面は叩きのあとを丁寧に撫で消している。内面はヘラ撫でだが、当て具による凹凸が残る。

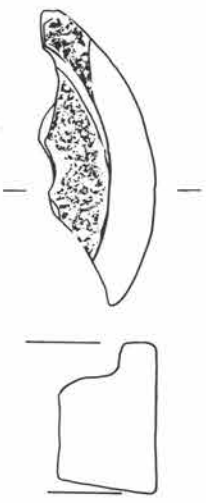




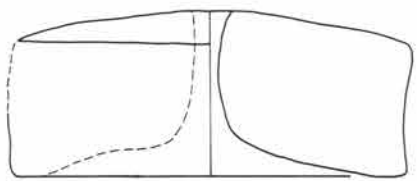
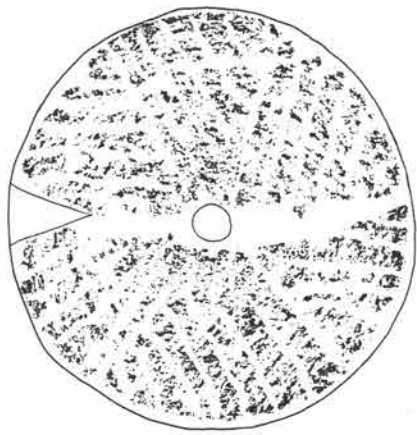




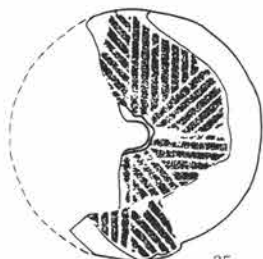
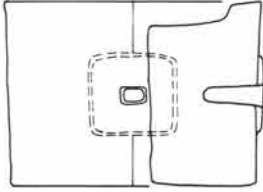
32



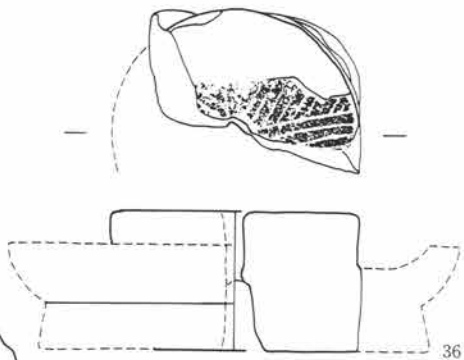
33



34



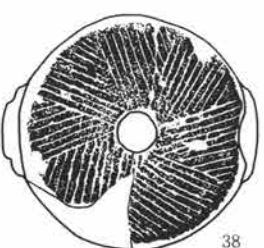
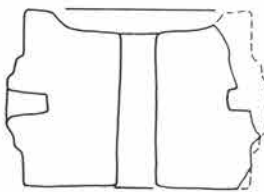
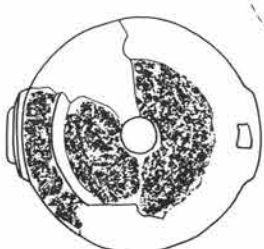
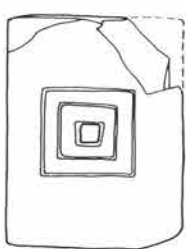
35



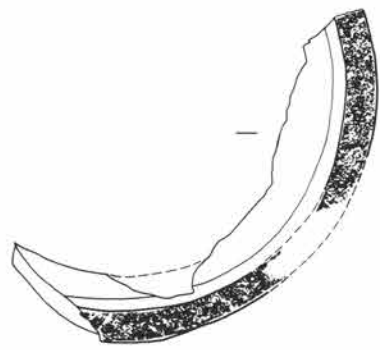
36



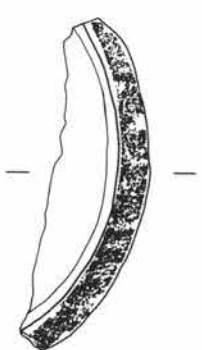
37



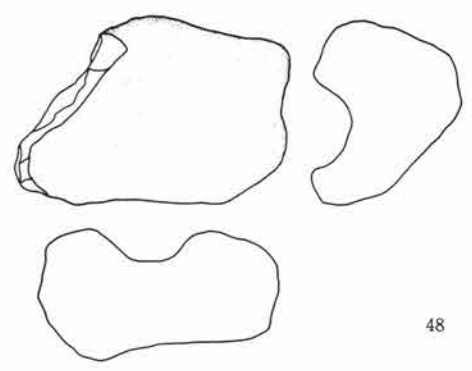
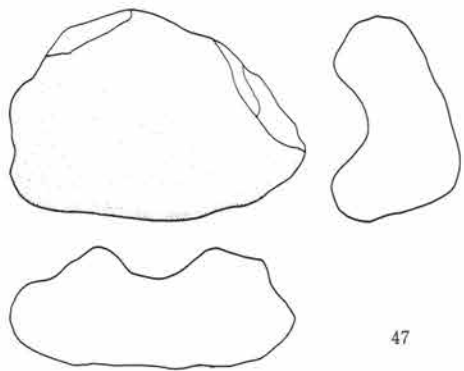
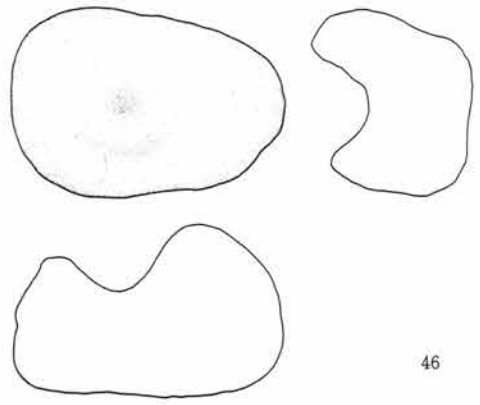
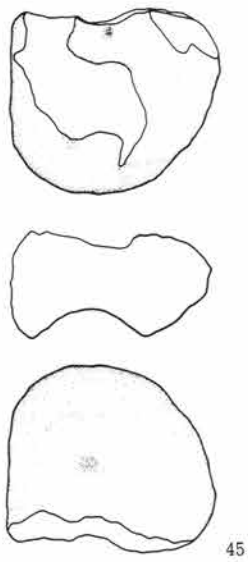
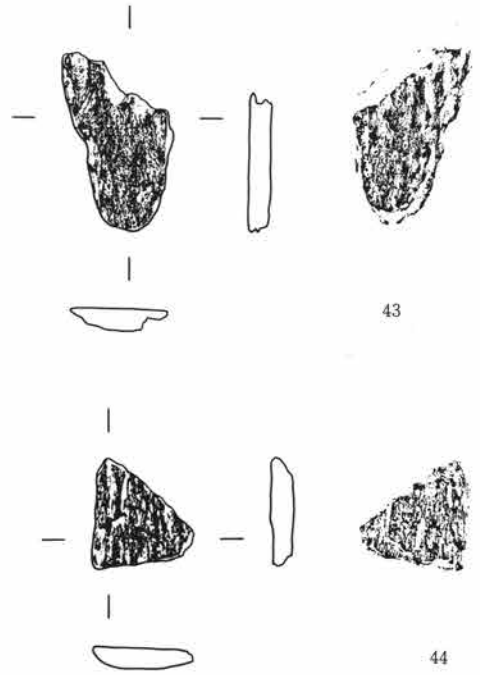
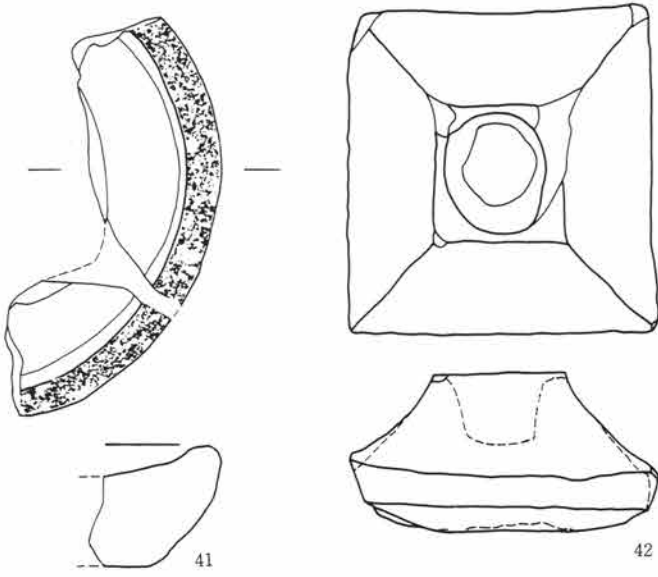
38



39



40



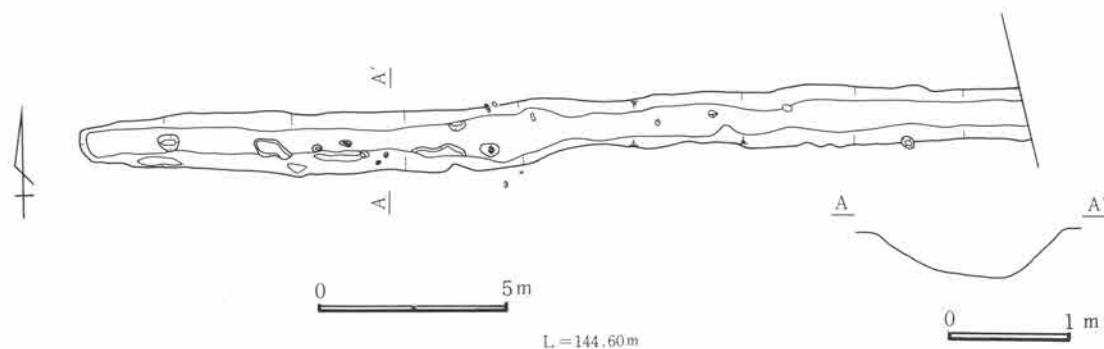
No.	種類・器種・出土位置	計測値(cm) 長さ・幅・厚さ・重さ	石 材	特 徴	
32	石製品 敲石 覆土	12.0・5.3・5.5・500 g	輝石安山岩(粗粒)	両端部に敲打痕がみられる。	
No.	種 類	観 察 表 掲 載 頁	No.	種 類	観 察 表 掲 載 頁
8	青磁 碗	797	28	土師質土器 香炉	823
9	青磁 香炉	797	29	土師質土器 皿	823
10	白磁 皿	798	30	土師質土器 皿	823
11	陶器 皿	798	31	土師質土器 皿	823
12	焼き締め陶器甕	800	33	石 白	845
13	焼き締め陶器甕	800	34	石 白	845
14	焼き締め陶器甕	800	35	石 白	846
15	焼き締め陶器大甕	800	36	石 白	846
16	軟質陶器 火鉢	811	37	石 白	845
17	軟質陶器 火鉢	811	38	石 白	846
18	軟質陶器 鉢	813	39	石 白	846
19	軟質陶器 鉢	813	40	石 白	846
20	軟質陶器 鉢	813	41	石 白	846
21	軟質陶器 鉢	813	42	火 輪	883
22	軟質陶器 内耳	819	43	板 碑	879
23	軟質陶器 内耳	819	44	板 碑	879
24	軟質陶器 内耳	819	45	用途不明石製品	888
25	軟質陶器 内耳	819	46	用途不明石製品	888
26	軟質陶器 内耳	819	47	用途不明石製品	888
27	軟質陶器 内耳	819	48	用途不明石製品	888

S D119

280

本遺構は、88H-11グリッドから101H-11グリッドにかけて直線的に位置し、S J 40・50・38・55・175、S T 20と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。本遺構は、調査区の東へものびるため全貌は不明であるが、調査区内での規模は、幅1.18~1.68m、深度0.14~0.40mを測る。走向は、ほぼ西を指す。

断面形態は、逆台形状を呈し、溝壁は、緩やかに立ち上がる。底部は、ほぼ平坦であるが、小ピット状の落ち込みが数ヶ所にみられ、西から東にかけて緩い傾斜がみられる。高低差は、27cmである。



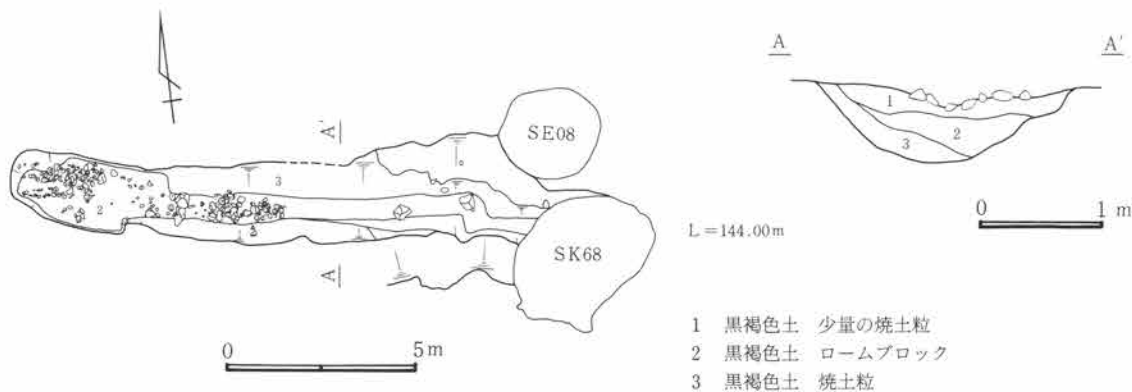
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	13.0・—・—、小片 多量の細砂粒・粗砂粒 還元焰、灰白色	体部から口縁部まで丸みをもって大きく開く。口 クロ整形。

S D120

286

本遺構は、88G-44グリッドから95G-47グリッドにかけて位置し、SE08・12と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。規模は、全長約16m、幅1.50~2.90m、深度17~52cmを測る。

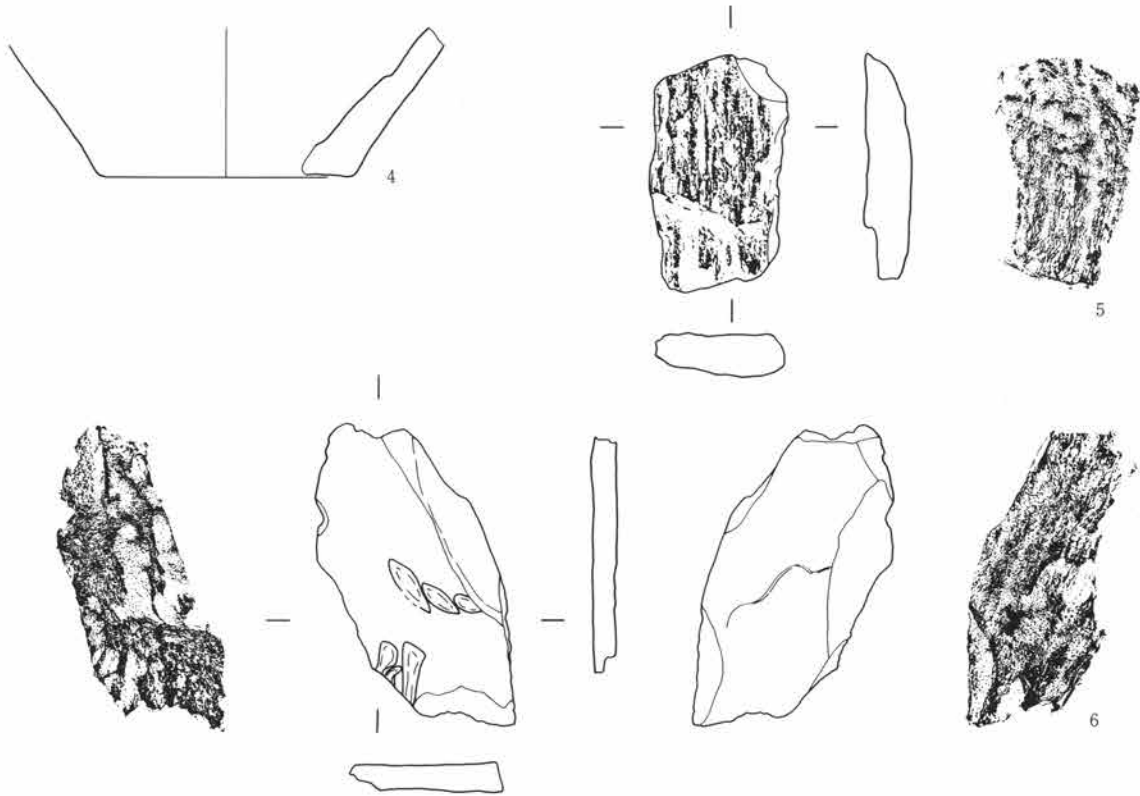
断面の形態は、ゆるい弧状を呈し、溝壁は、緩やかな立ち上がりであるが、東側の壁の方が西側よりも緩やかである。底部は、ゆるい丸みをもち、ほとんど傾斜はみられない。本遺構の西半分には、多量の緑泥片岩の破片が出土している。



- 1 黒褐色土 少量の焼土粒
- 2 黒褐色土 ロームブロック
- 3 黒褐色土 焼土粒



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	14.8・—・—、小片 細砂粒 還元焰、灰色	天井部は丸みをもち、口縁部手前が一旦窪む。 カエリは小さく、端部が丸い。貼付される。
2	須恵器 坏 覆土	—・8.0・—、小片 少量の細砂粒・白色粗 砂粒、還元焰、灰白色	体部はほぼ直線的に開く。底部へラ切り後へ ラ撫で。
3	須恵器 埴 覆土	14.2・11.2(高台径10.2) 4.1、1/5、細砂粒・褐 色鉱物粒、還元焰、灰色	体部はやや開き、高台は断面が四角形で、内 端部が接地する。底部は回転へラ削り。

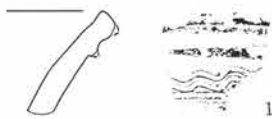
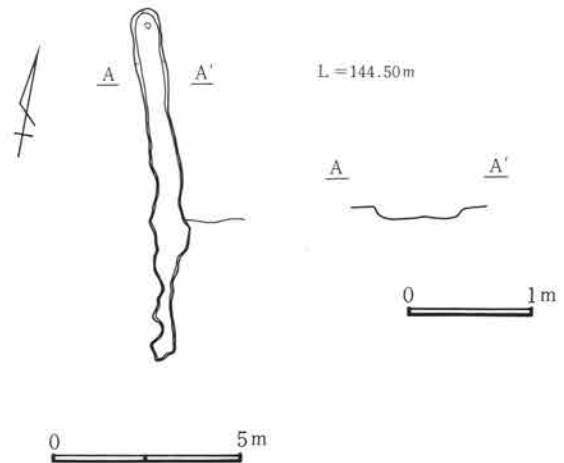


No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
4	軟質陶器 鉢	813	6	板碑	879
5	板碑	879			

S D 126

本遺構は、110G-41グリッドから111G-46グリッドにかけて位置し、SE35、SJ198、1号屋外埋甕と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。規模は、全長9.68m、幅0.28~0.95m、深度6~10cmを測る。走向は、N-72°-Eを指す。

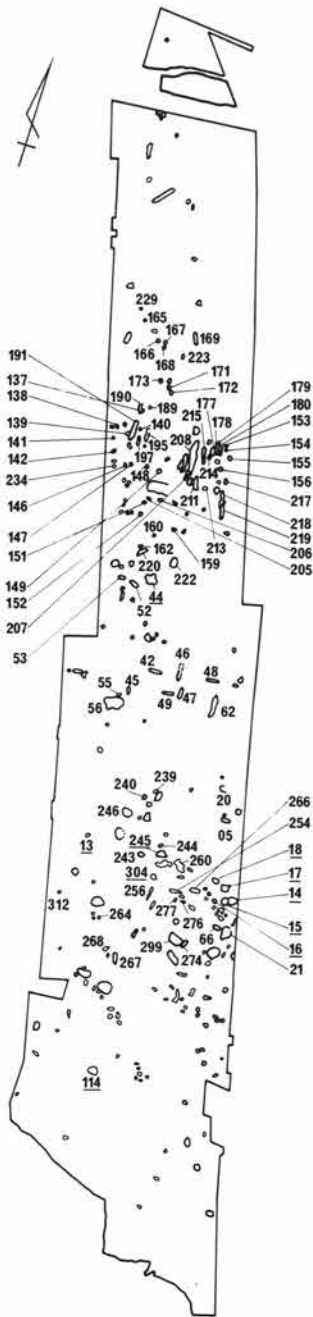
断面形態は、逆台形状を呈し、溝壁は、急な立ち上がりである。底部は、ほぼ平坦である。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 甕 覆土	— · — · —、小片 多量の粗砂粒・小礫 還元焰、灰色	口唇部は縁帯を有し、口縁部には、1本の凸帯が巡る。凸帯の下に波状文、3条の沈線が巡る。

3 地下式塚・土塚

(1) 地下式塚



S K13

287

本遺構は、114～115H-00～01グリッドに位置し、S T02と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。残存状態は、天井部が崩落し、その上に黒褐色土が堆積している。平面形態は、入口部では長方形、主室部では不整形を呈する。全体の規模は、主軸方向2.70m、幅2.10mを測る。

入口部は、主室部の床面より52cmほどの高さで段をもち、確認面より88cmの深さである。入口部の底面の規模は、一辺80×64cmである。

主室部は、床面の規模1.90×2.00mで、確認面からの深度は1.65mを測る。天井部は、崩落しているが、床面から天井までの高さは推定1.16mである。また、天井部の崩落土と床面の間には、薄く黒褐色土の堆積がみられる。

S K15

287

本遺構は、88-89H-03～04グリッドに位置し、S J 53・54と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。残存状態は、天井部が崩落し、その上に焼土混りの黒褐色粘土等がみられることから天井部の崩落とともに上部に築かれていたS J 53のカマドもいっしょに崩落したと思われる。平面形態は、入口部では長方形、主室部では楕円形を呈する。全体の規模は、主軸方向2.30m、幅2.28mを測る。

入口部は、主室部の床面より一段高くなっており、底面の規模は、一辺86×56cmを測る。

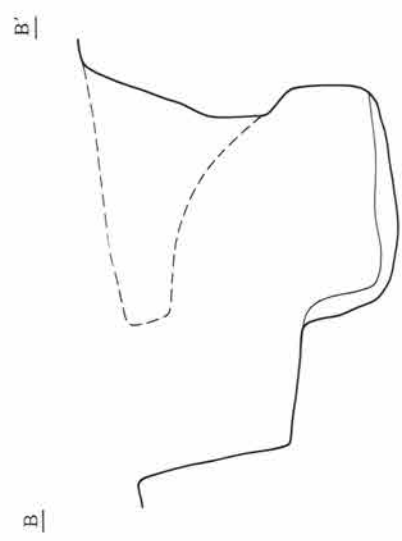
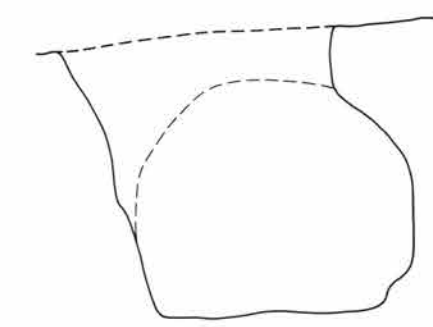
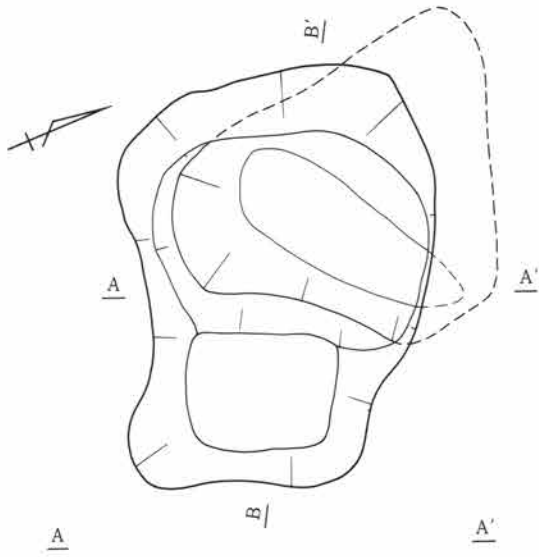
主室部は、床面の規模1.30×1.35mである。天井部は全体的に崩落しているため高さを推定するのは不可能であった。



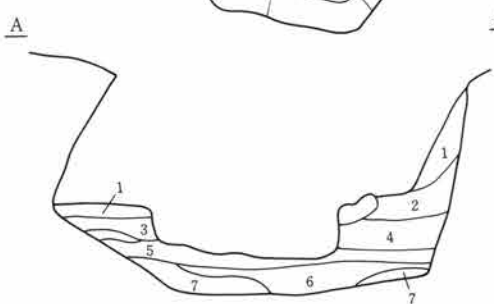
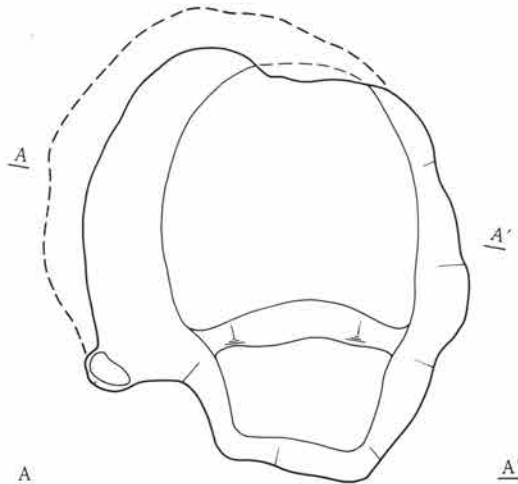
土塚配置図(中世)



アンダーライン付は地下式塚



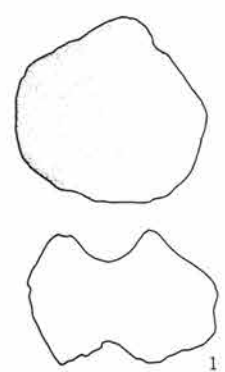
L = 144.90m



- 1 黒褐色粘土 多量の焼土粒
- 2 黄褐色砂
- 3 暗褐色粘土
- 4 黒褐色粘土 多量の焼土 1層に類似
- 5 明褐色砂質土 2層に類似
- 6 暗褐色粘質土
- 7 黄褐色砂 ラミナ状



L = 144.00m

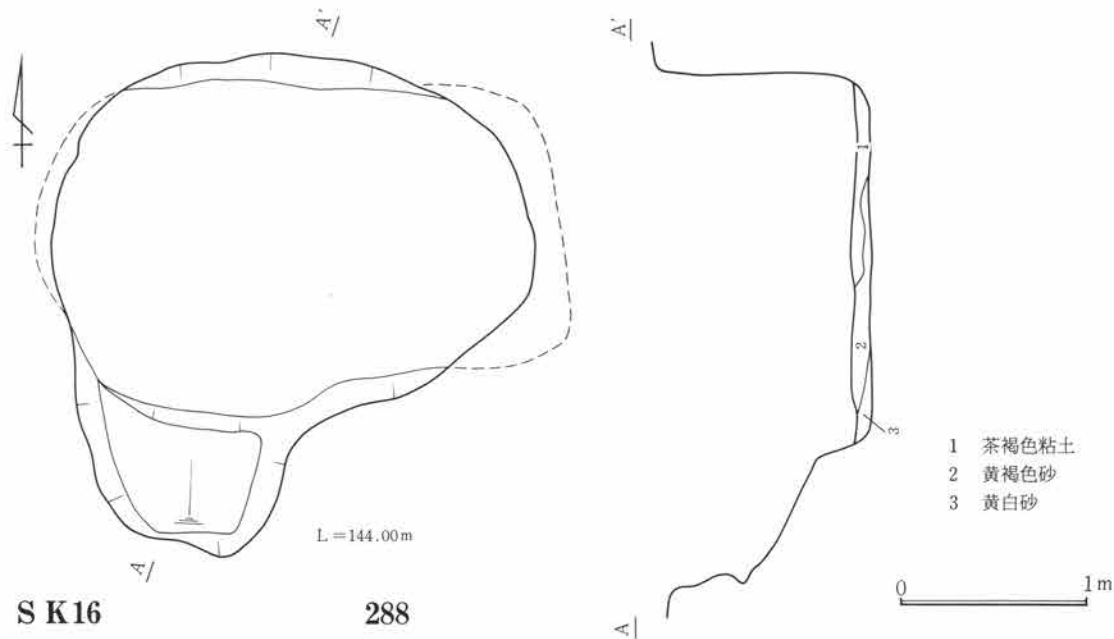


No.	種類	観察表掲載頁
1	用途不明石製品	888

S K14

287

本遺構は、87～88G-03～04グリッドに位置し、S J 52・53と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。残存状態は、天井部が全体的に崩落している。平面形態は、入口部ではほぼ方形、主室部では長方形を呈するが、入口部は、主室部南側の西よりに設けられている。全体の規模は、主軸方向2.68m、幅2.84mを測る。入口部は、主室部の床面より26～70cmほどの高さで段をもち主室部に向って傾斜し、規模は、56×78cmである。主室部は、床面の規模1.76×2.84mで、床面は確認面よりの深さ1.16mでほぼ平坦である。



S K16

288

本遺構は、89～91H-03～04グリッドに位置し、S J 54と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。残存状態は、天井部が全体的に崩落している。平面形態は、入口部では長方形、主室部では鍵穴状を呈する。全体の規模は、主軸方向2.86m、幅1.36mを測る。

入口部は、主室部の床面より40cmほどの高さをもち平坦である。規模は、1.06×1.26mである。

主室部は、床面の規模1.70×1.18mで、確認面からの深さ1.17mで、床面は平坦であるが、入口部に向けて緩い傾斜をもつ。

- 1 茶褐色粘土
- 2 黒褐色土
- 3 茶褐色粘質土 茶褐色砂
- 4 黒褐色土 黒色砂

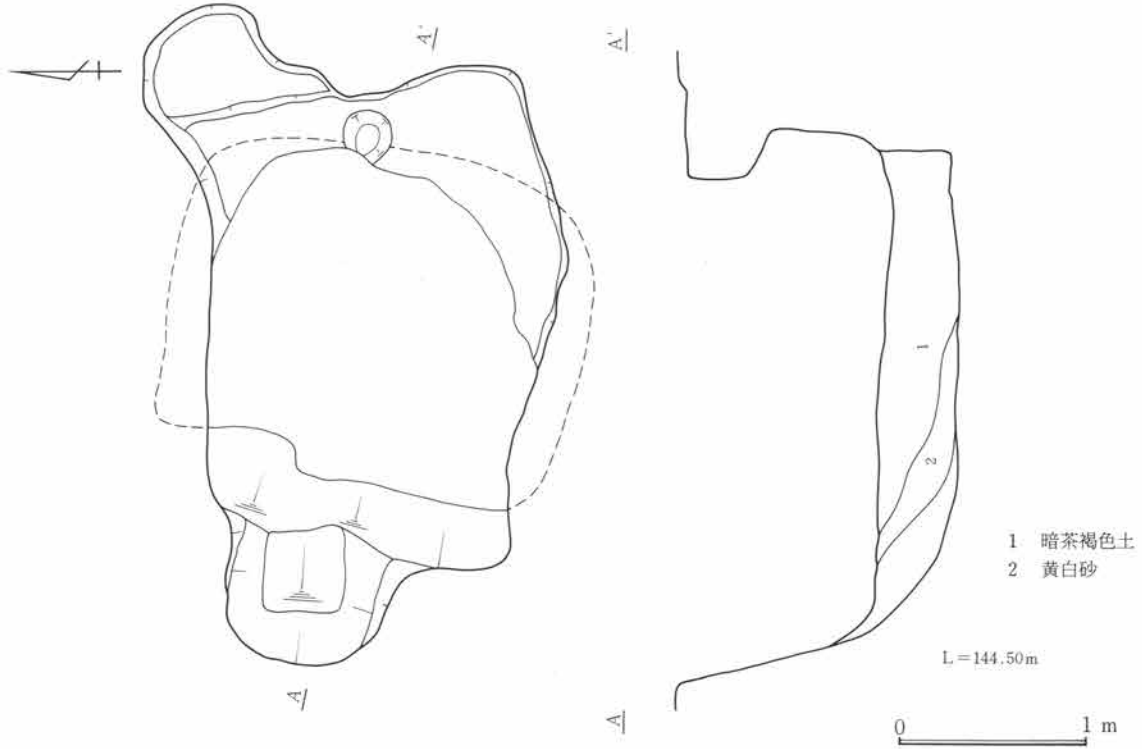


SK17

288

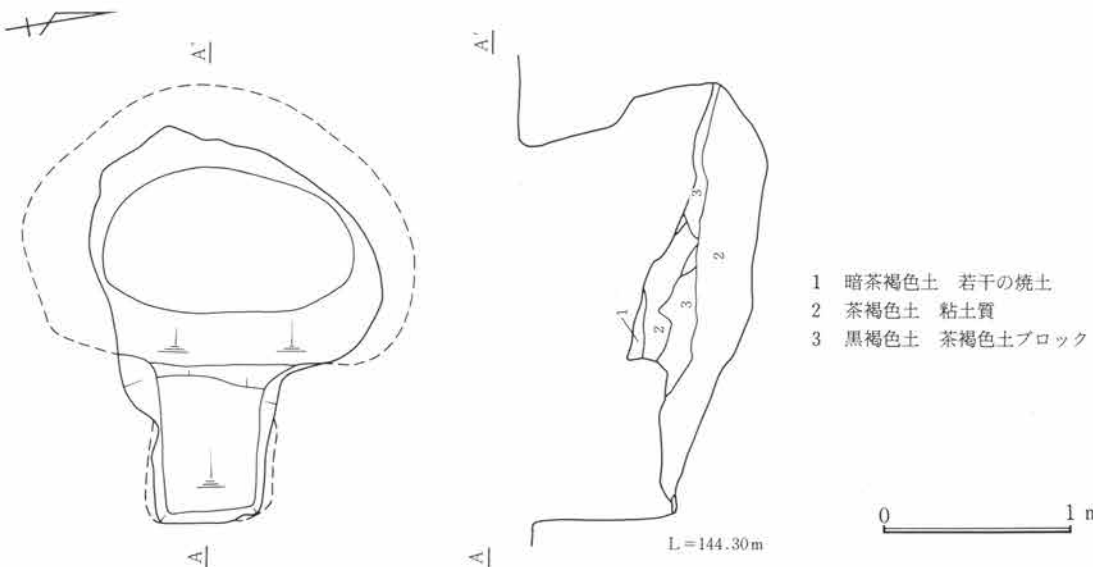
本遺構は、89～90H-05～06グリッドに位置し、入口部で近代の溝と重複し、主室部の上部には、竪穴状遺構が存在したと推測されるが、天井部の崩壊によって遺構の性格については確認できなかった。平面形態は、入口部で方形、主室部では長方形を呈する。全体の規模は、主軸方向2.77m、幅2.24mを測る。

入口部は、主室部の床面よりやや高い段をもち、床面は主室部へ向って傾斜する。主室部は、床面の規模が1.79×2.24m、床面から天井部までの高さは、推定で1.17mである。床面は、ほぼ平坦である。



SK18

288



第3章 検出遺構・遺物

本址は、91G-05~06グリッドに位置し、ST01と接するが、天井部の崩落によってST01の壁の一部が崩壊しているが、新旧関係について不明である。平面形態は、入口部では長方形、主室部では楕円形を呈する。全体の規模は、主軸方向2.32m、幅2.06mを測る。入口部は、主室部の床面より22~50cmほどの高さで段をもち主室部方向へ傾斜する。主室部は、床面の規模は0.77×1.34mと小さいが、壁面のふくらみは、1.40×2.24mを測る。床面から天井部までの高さは、推定で92~98cmである。床面は、ほぼ平坦である。

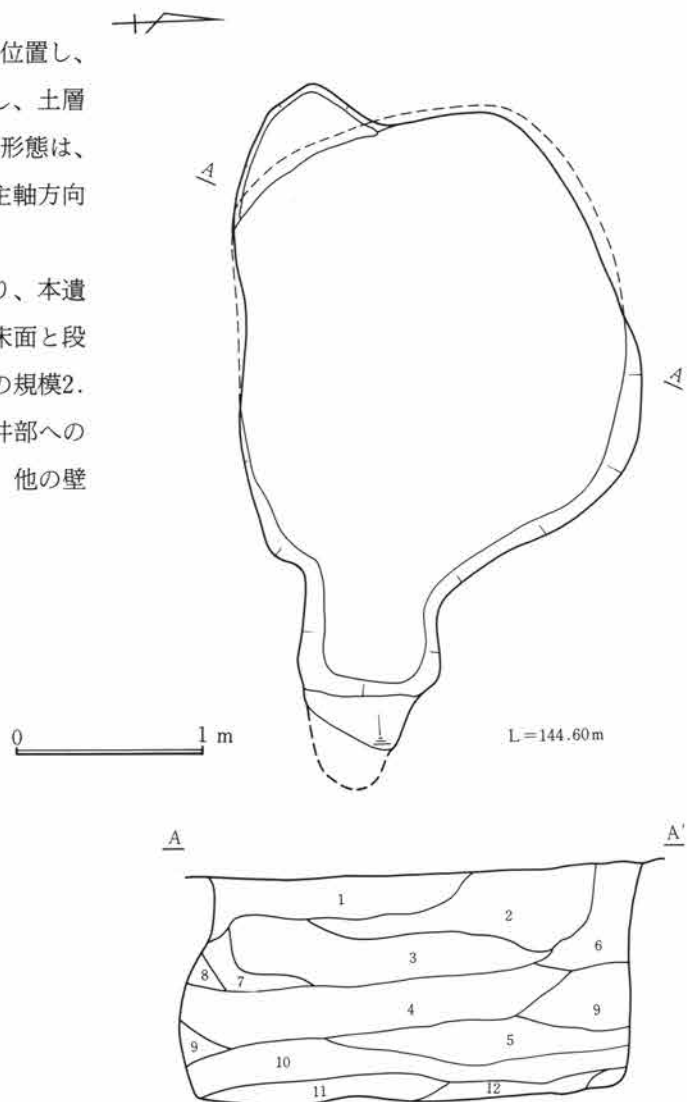
SK245

289

本遺構は、100~102H-07~08グリッドに位置し、単独で占地する。天井部は、全体的に崩落し、土層断面図の4・5・8~10層が相当する。平面形態は、全体では鍵穴状を呈する。全体の規模は、主軸方向3.56m、幅2.15mを測る。

入口部は、ほぼ方形で規模49×55cmを測り、本遺跡でみられる他の地下式壇と違い主室部の床面と段をもたない。主室部は、ほぼ楕円形で床面の規模2.62×1.96mである。床面は、ほぼ平坦で、天井部への立ち上がりは、東壁ではほぼ垂直であるが、他の壁では緩いふくらみをもつ。

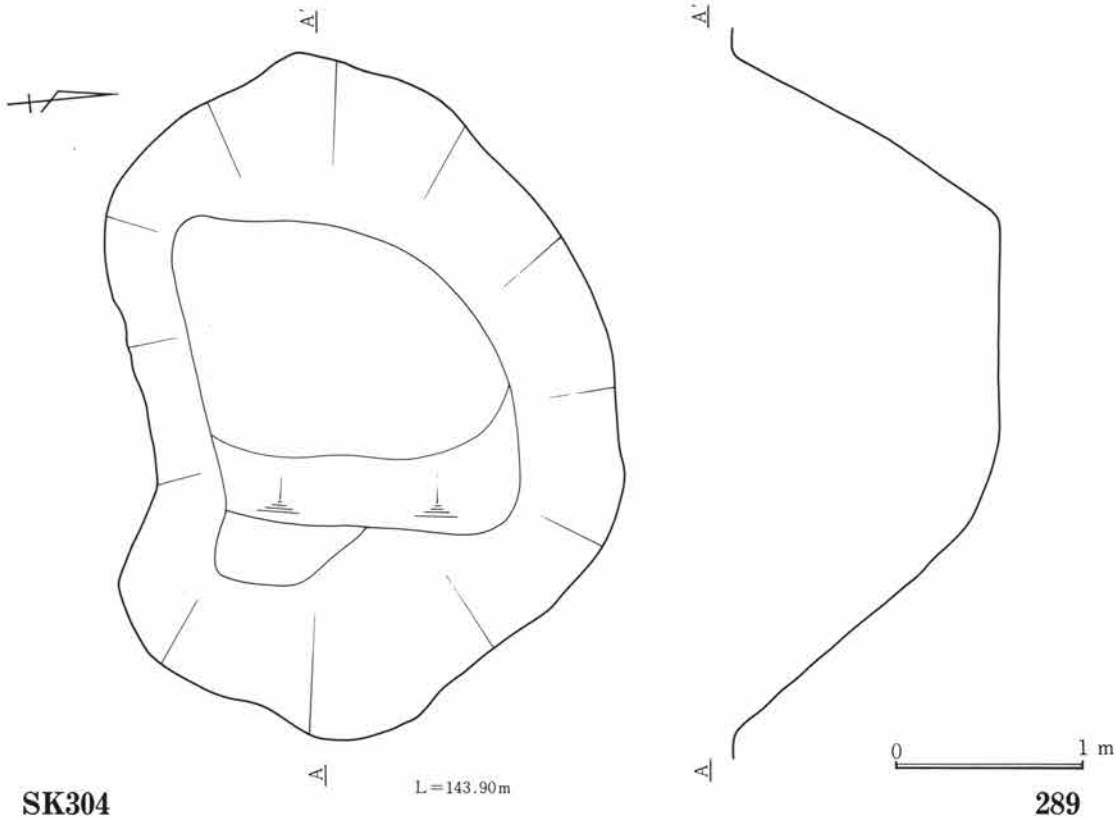
- 1 白色粘土 ブロック状の土 若干の礫
- 2 暗褐色土 白色粘土ブロック 褐色粒
- 3 黒褐色土 ロームブロック 黒色砂
- 4 黒褐色土 ロームブロック 黒色砂
- 5 黒褐色土 ローム粒 黒色砂
- 6 暗褐色土 ロームブロック
- 7 暗褐色土 若干のC軽石
- 8 ロームブロック
- 9 黒色土 ロームブロック
- 10 褐色土 ロームブロック 暗褐色土ブロック
- 11 褐色土 ロームブロック
- 12 褐色土 ロームブロック 丸礫(1~2cm)



SK114

本遺構は、100~101G-19~20グリッドに位置し、SD07と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。残存状態は、天井部は全体的に崩落し、入口部の壁、主室部の壁等も崩壊している。平面形態は、崩壊のため全体的に楕円形を呈している。全体の規模は、主軸方向3.62m、幅2.49mを測る。

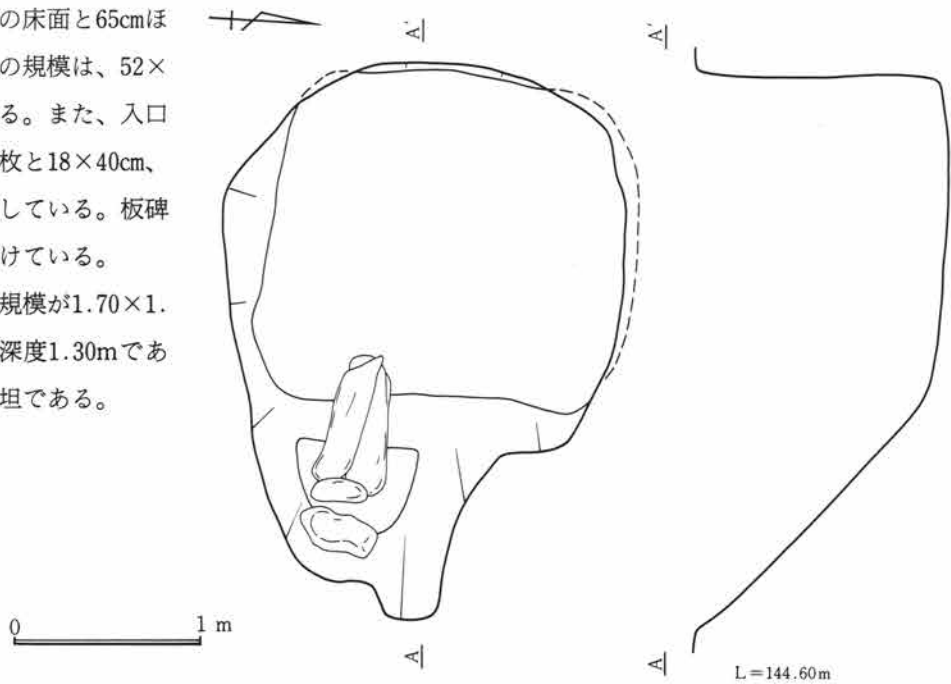
入口部は、若干の高低差をもつ段をもち、底面の規模は、30×65cmである。主室部は、床面の規模が1.12×1.17mで、床面は、ほぼ平坦である。

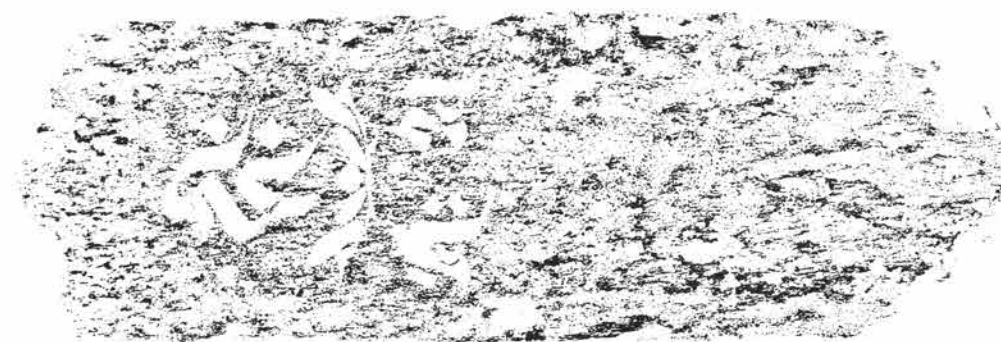
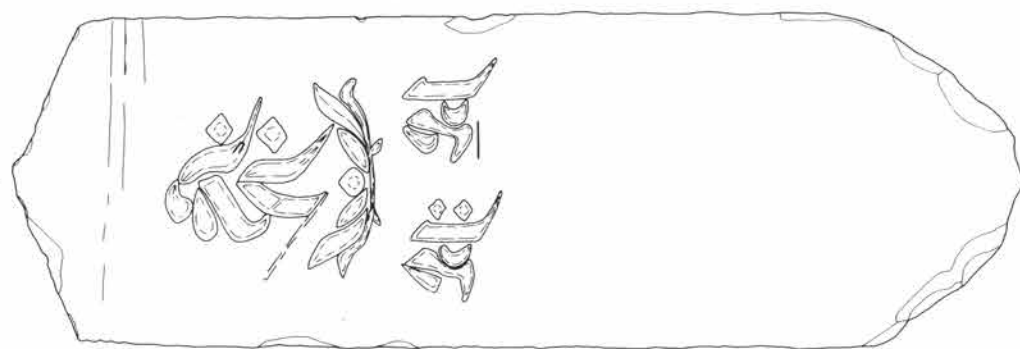
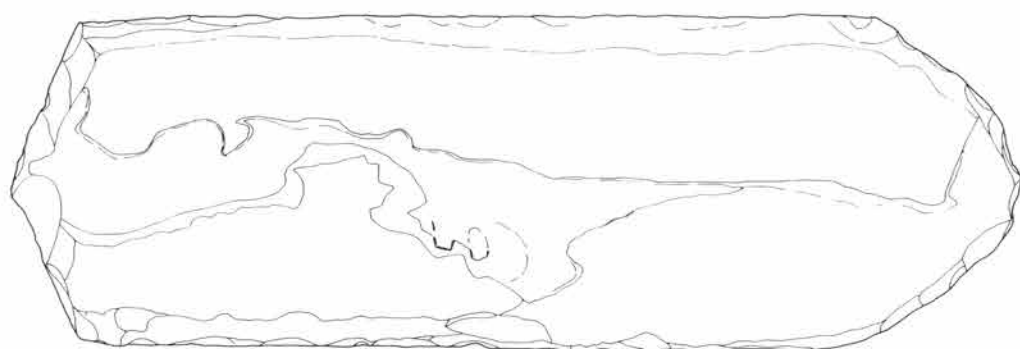
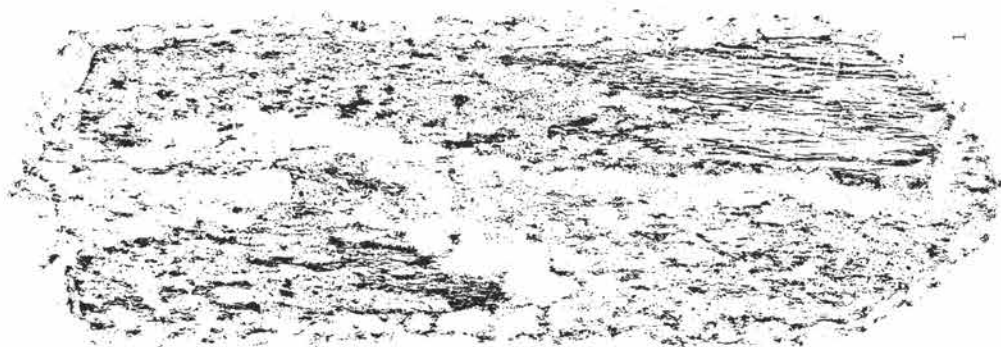


本遺構は、100～101H-03グリッドに位置し、S J 177・178グリッドと重複するが、新旧関係は本遺構のほうが新しい。残存状態は、天井部は全体的に崩落して割合いと短期間に埋没したのか壁の崩壊はほとんどみられない。平面形態は、入口部・主室部ともにほぼ方形を呈する。全体の規模は、主軸方向2.94m、幅2.23mを測る。

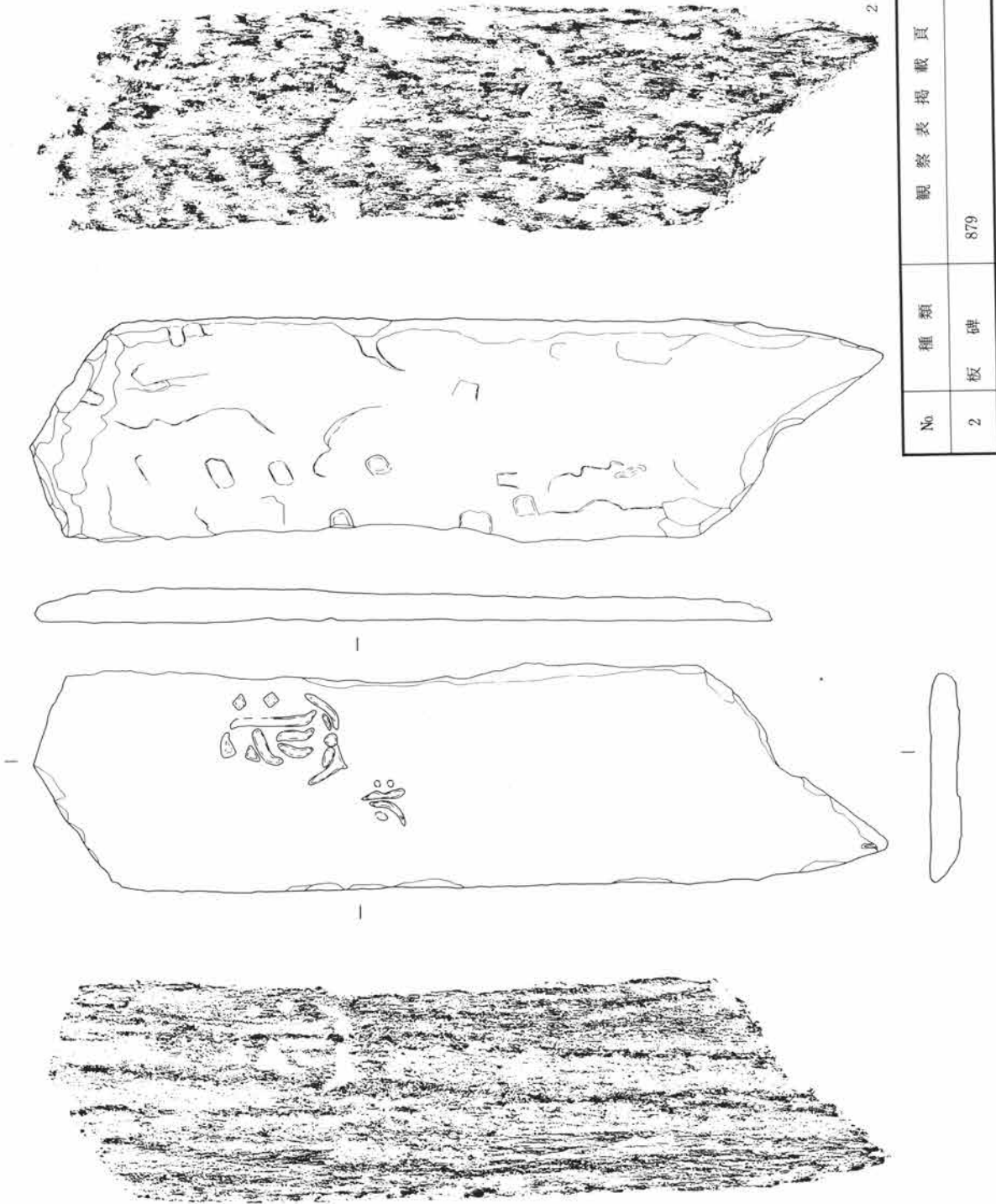
入口部は、主室部の床面と65cmほどの段をもつ。底面の規模は、52×60cmでほぼ平坦である。また、入口部からは、板碑が2枚と18×40cm、14×30cmの礫が出土している。板碑は頂角を入口部に向けている。

主室部は、床面の規模が1.70×1.86m、確認面からの深度1.30mである。床面は、ほぼ平坦である。





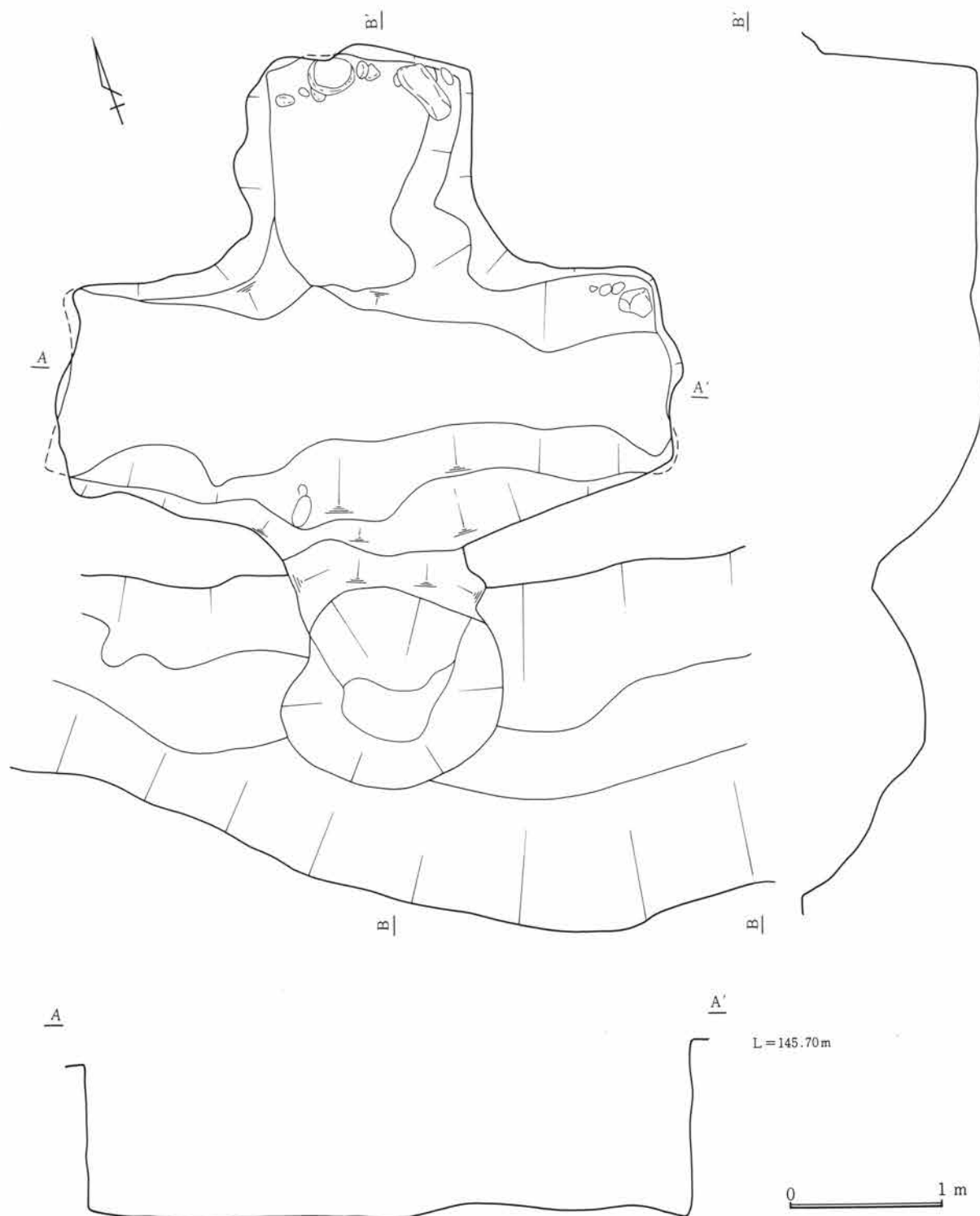
No	種類	観察表掲載頁
1	板碑	879



No.	種類	觀察表掲載頁
2	板 碑	879

SK44





291

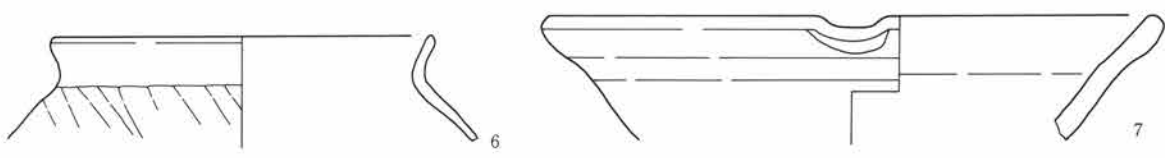


本遺構は、115~117H-47~I-00グリッドに位置し、SD32、SJ80と重複するが、新旧関係は、SD32より本遺構のほうが古く、SJ80より新しい。残存状態は、天井部は全体的に崩落し、主室部内を区分す

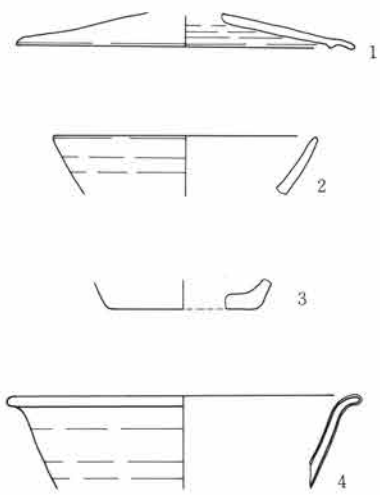
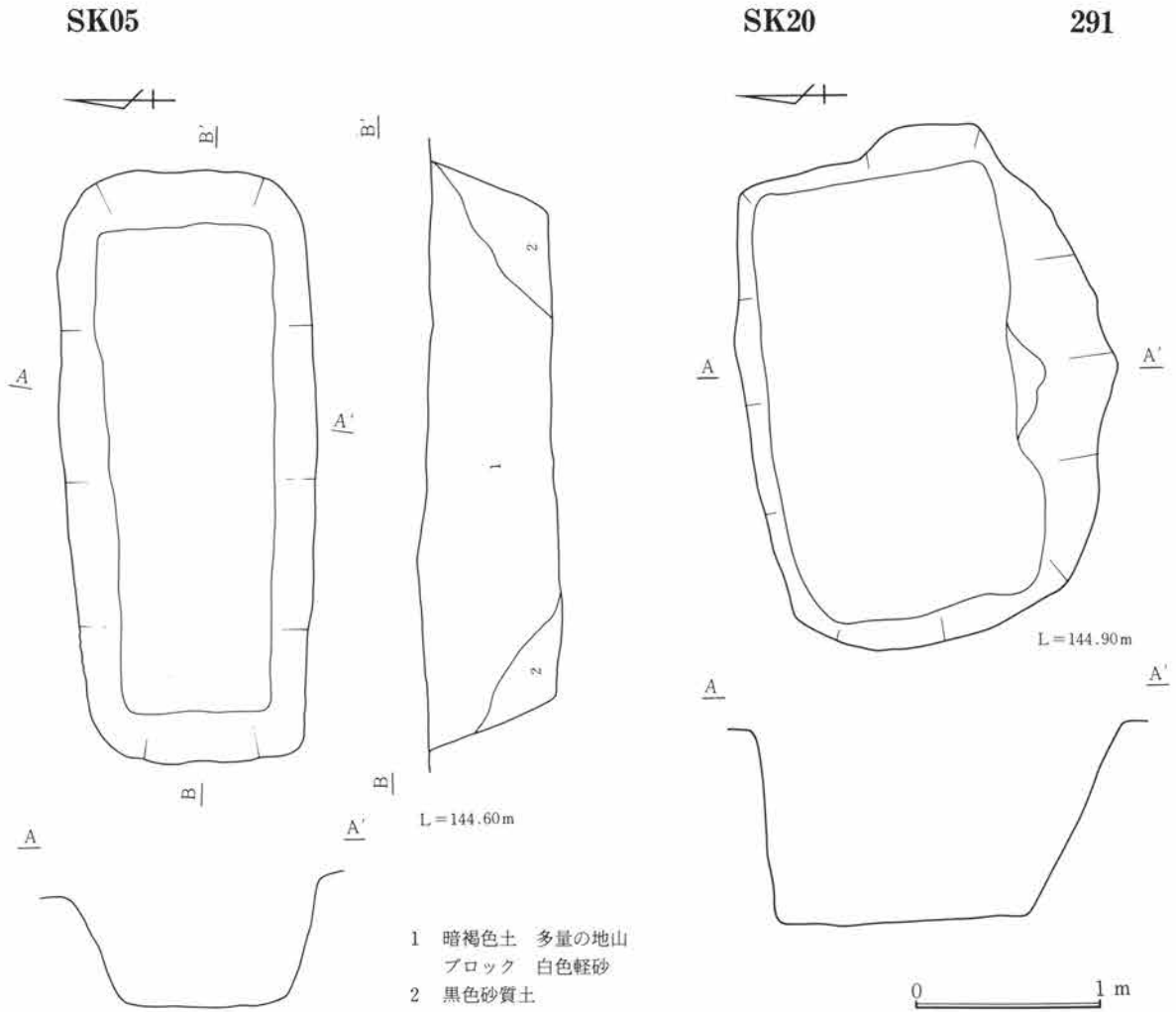
るために壁が設けられていたようであるがその壁は大部分崩壊し、痕跡が僅かにみられる程度である。本遺構は、入口部とその奥に東西に長い室前室とその奥に南北に長い室後室からなる。全体の規模は、主軸方向4.82m、幅4.00mを測る。

入口部は、S D32によって切られているため詳細は不明であるが、方形または隅丸方形を呈すると思われ、主室部との間に壁が設けられていたようである。主室部は、前室で0.85×4.00m、後室で1.52×1.12m、確認面からの深さ1.22mを測る。床面は、ほぼ平坦である。

	No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
	1	土師器 坏 覆土	11.0・—・3.2 小片 細砂粒・粗砂粒 普通 明赤褐色	底部は僅かに丸みをもつ。体部との境は削りによって弱い稜ができる。体部から口縁部は丸みをもって若干開く。底部はへら削り、体部は撫で、口縁部横撫で。
	2	土師器 坏 覆土	12.0・5.0・4.7 小片 細砂粒・粗砂粒 普通 にぶい赤褐色	底径が口径の1/2以下と小さく、平底である。体部は若干脹らみをもって大きく開き、口唇部が内湾気味となる。底部はへら削り。体部は横方向のへら削り。口縁部横撫で。
	3	須恵器 坏 覆土	12.8・8.0・4.0 小片 白色細砂粒・白色 粗砂粒・角細礫、 還元焰、灰色	体部はやや脹らみをもって開く。底部回転糸切り未調整。
	4	須恵器 高台付碗 覆土	—・—・高台 径6.0、小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰色	高台は低く、断面は台形を呈す。底部は回転糸切り未調整。
	5	須恵器 高台付碗 覆土	—・9.2・高台径 9.0、小片 細砂粒 還元焰 灰色	体部はほぼ直線的に開き、器肉は薄手。高台は細くやや高めで「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り未調整。
	6	土師器 甕 覆土	21.0・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 小礫 普通 にぶい橙色	胴部は球状と推定される。口縁部は短く、僅かに外傾する。胴部外面へら削り、内面へら撫で。口縁部横撫で。
	No.	種	類	観察表掲載頁
	7	軟質陶器	鉢	812

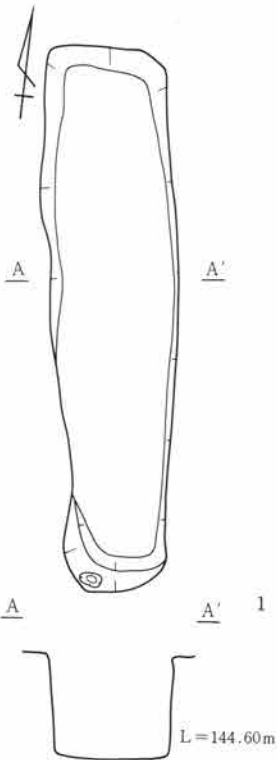


(2) 土 塚



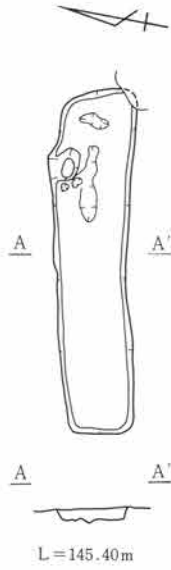
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 蓋 覆土	18.0・一・一、小片 細砂粒 還元焰、灰色	天井部から口縁部に向かって直線的に開く。 カエリは三角形を呈し、貼付される。天井部 は不定方向へのヘラ削り後撫で。
2	須恵器 坏 覆土	14.0・一・一、小片 細砂粒 還元焰、灰色	体部は僅かに丸みをもって開く。ロクロ整形。
3	須恵器 坏 覆土	一・7.6・一、小片 細砂粒 還元焰、軟質 灰白色	体部は直線的であり開かない。底部は回転 糸切り未調整。
No	種 類	観 察 表 掲 載 頁	
4	青 磁 塊	797	

SK45



L=144.60m

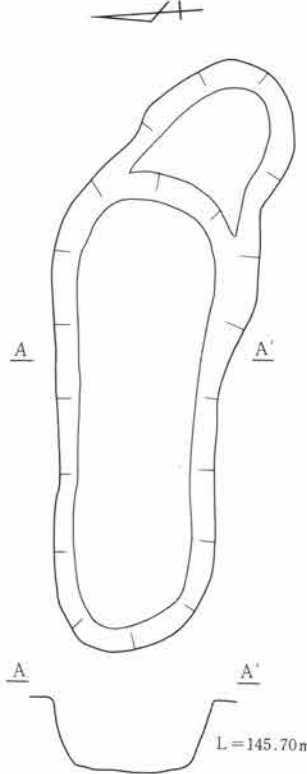
SK48



L=145.40m

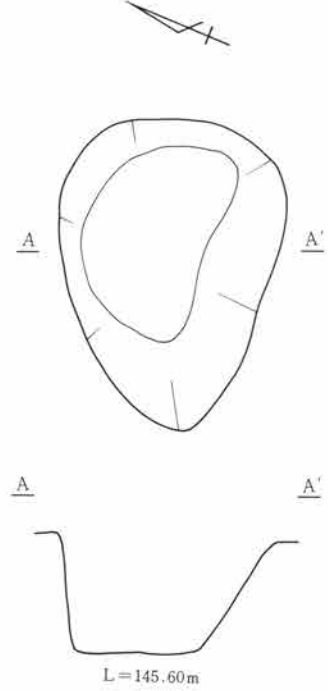
1 中世長方土壇 埋土砂質

SK52



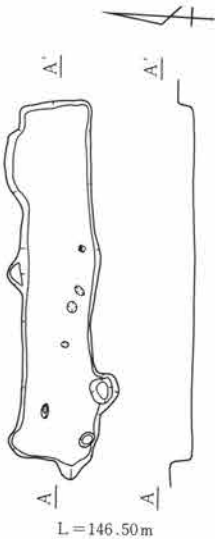
L=145.70m

SK55



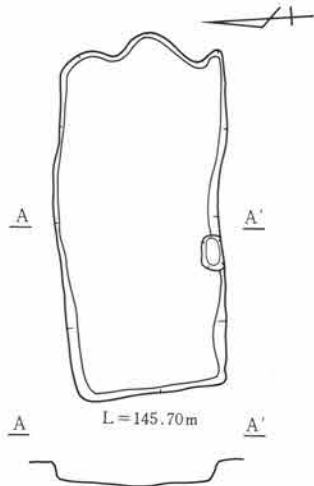
L=145.60m

SK49



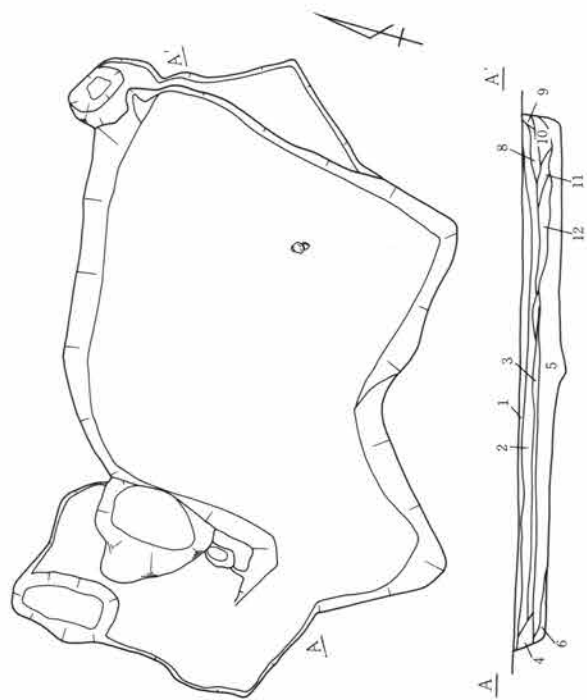
L=146.50m

SK53



L=145.70m

SK56

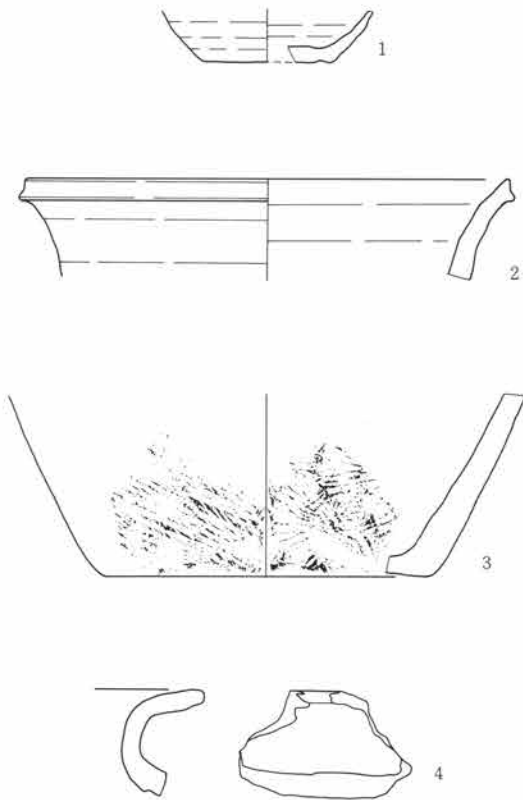


L=144.60m

0 1 m

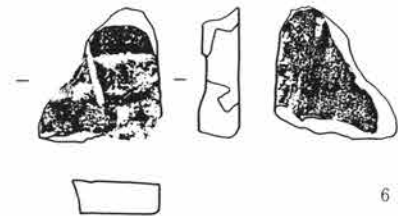
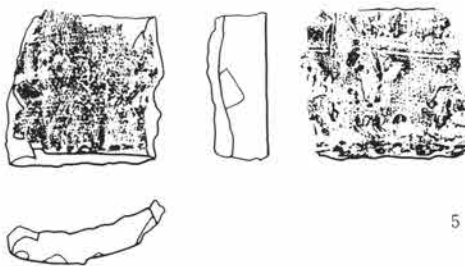
- | | |
|-----------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 多量のB軽石 | 7 褐色土 B軽石 褐色砂 |
| 2 暗褐色土 1層に類似
1層よりB軽石は少ない | 8 黒褐色土 B軽石 黒色砂 |
| 3 暗茶褐色土 若干のB軽石 暗褐色砂 | 9 褐色土 ロームブロック |
| 4 暗茶褐色土 B軽石 | 10 暗茶褐色土 B軽石 ロームブロック |
| 5 茶褐色土 茶褐色砂 丸礫(2~3cm大) | 11 暗茶褐色土 10層に類似 多量のロームブロック |
| 6 茶褐色土 活性有り | 12 暗茶褐色土 10層に類似 |

第3章 検出遺構・遺物

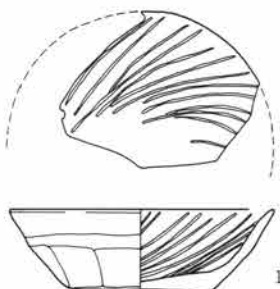


S K55

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	—・6.8・— 小片 細砂粒 細礫 還元焰 灰白色	体部はやや丸みをもって開く。底部回転糸切り未調整。
2	須恵器 甕 覆土	25.6・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部は外反し、口唇部下に1条の凸帯が巡る。ロクロ整形。
3	須恵器 甕 覆土	—・17.0・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	平底。胴部下位はほぼ直線的に開く。胴部外面は平行叩目文。自然釉がかかる。内面は放射状文。



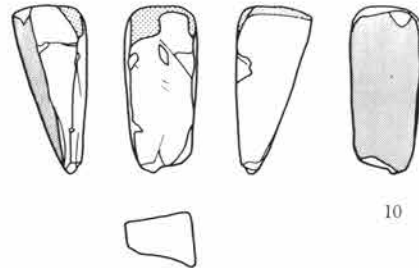
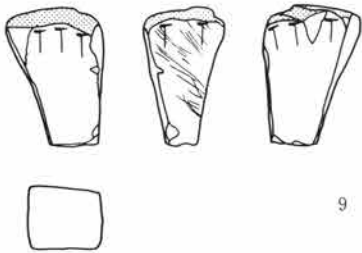
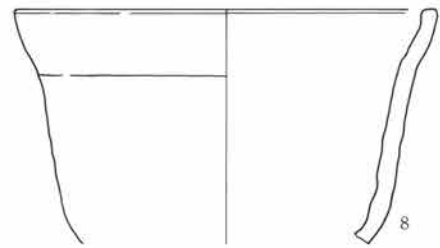
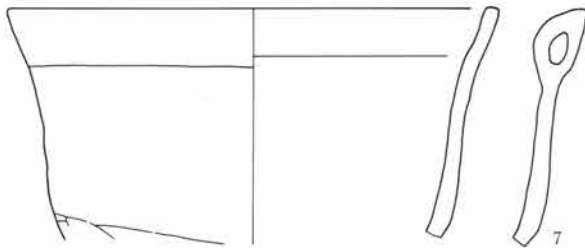
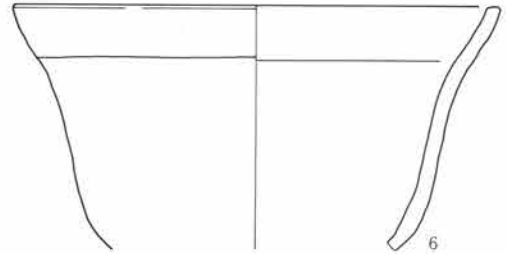
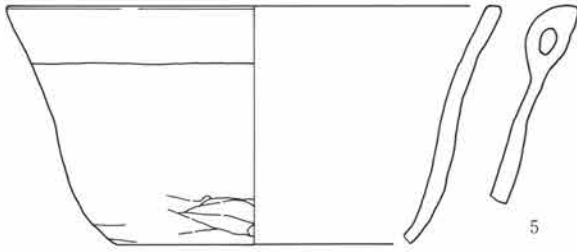
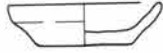
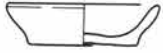
No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
4	焼き締め陶器甕	799	6	瓦	778
5	瓦	778			



S K56

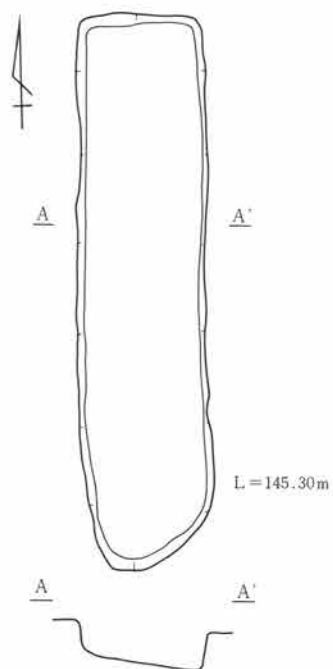
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.8・8.0・4.2 小片 細砂粒・粗砂粒・ 細礫、普通、橙色	平底。体部は直線的に外反し、体部上位が若干脹らみをもち、口唇部に向かって器肉が薄くなる。底部へら削り、体部外面横方向へら削り、口縁部横撫で。体部内面は放射状暗文が施される。

No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
2	須恵器 坏 覆土	—・7.0—、小片 細砂粒 還元焰、灰色	体部は直線的に開く。底部は回転 糸切り未調整。

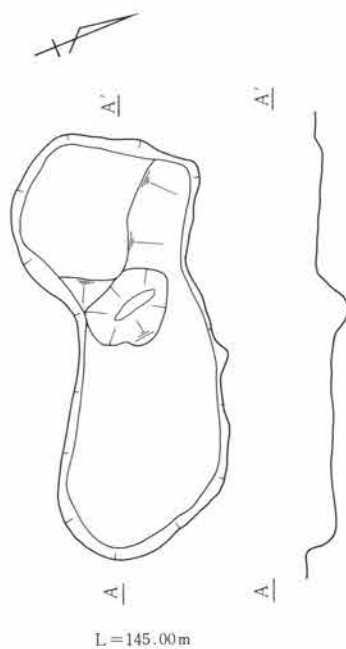


No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
3	土師質土器皿	824	7	軟質陶器内耳	813
4	土師質土器皿	824	8	軟質陶器内耳	813
5	軟質陶器内耳	813	9	砥石	835
6	軟質陶器内耳	813	10	砥石	835

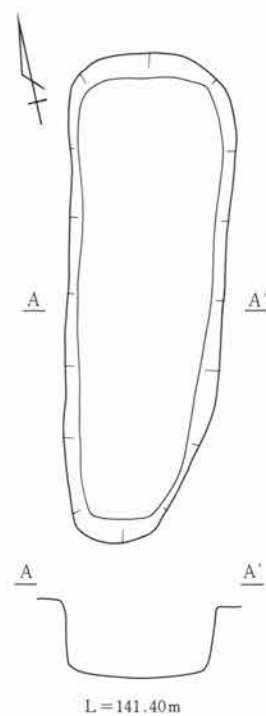
SK62



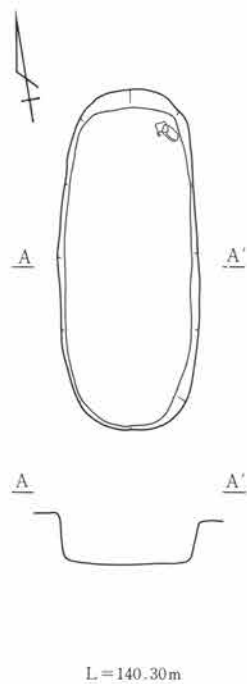
SK66



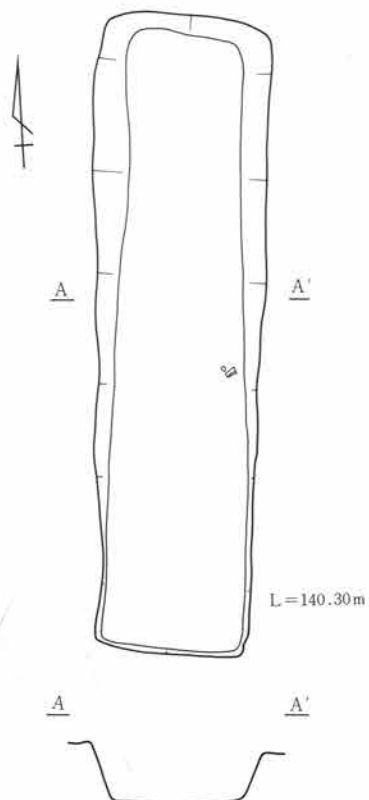
SK112



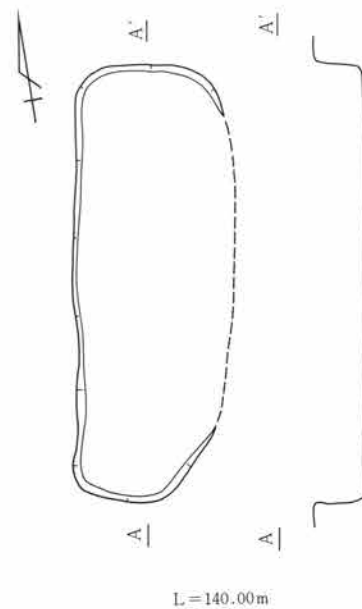
SK126



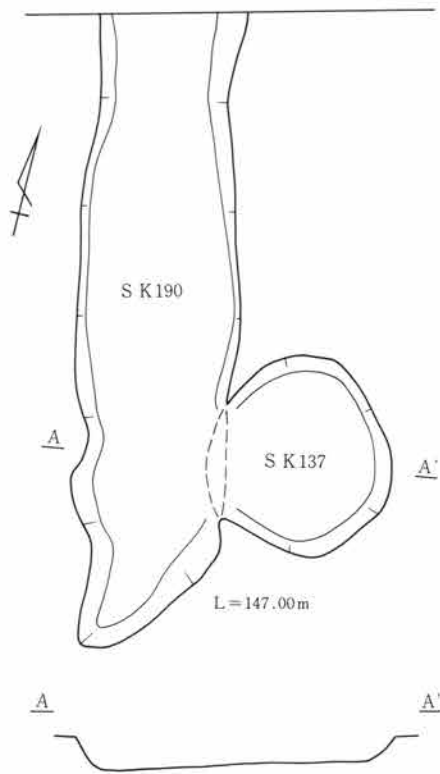
SK127



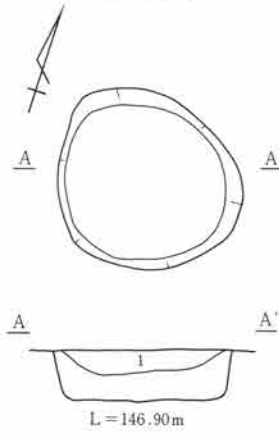
SK128



SK137・190

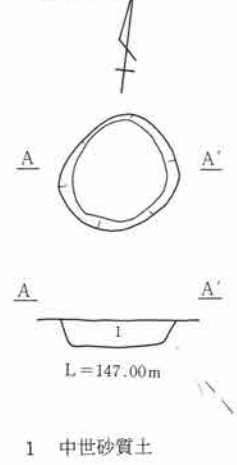


SK138



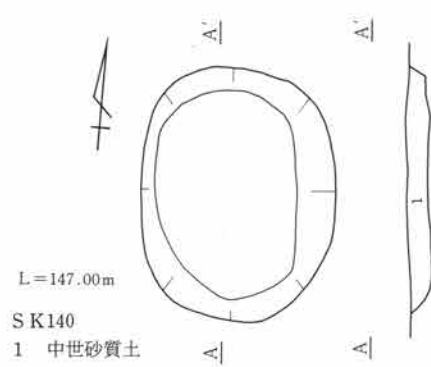
1 黒褐色 中世砂質土

SK139

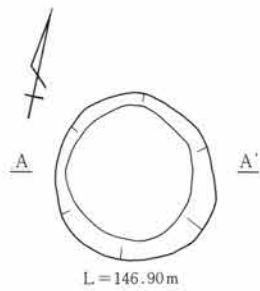


1 中世砂質土

SK140

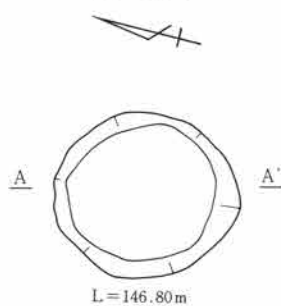


SK141



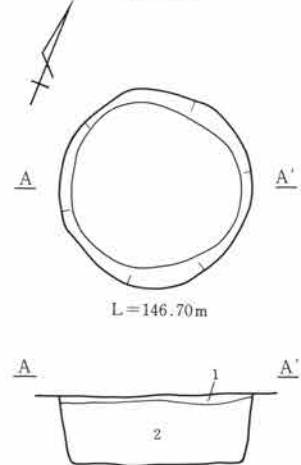
1 中世砂質土

SK142



1 中世砂質土

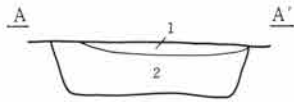
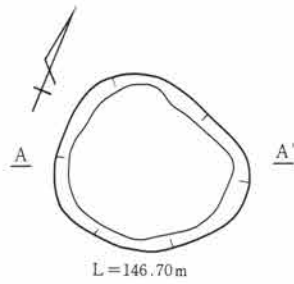
SK146



1 中世砂質の黒褐色土
2 小ブロック (5mm大)

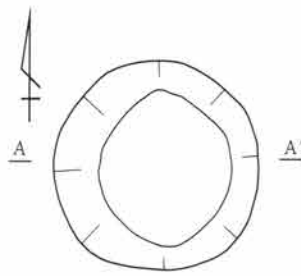
0 1 m

SK147



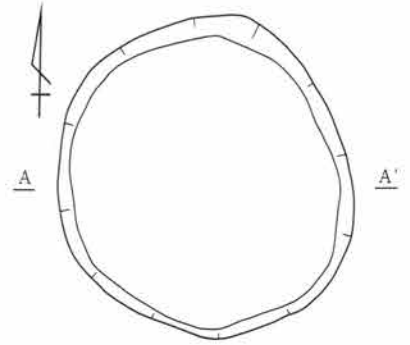
- 1 中世砂質の黒褐色土
- 2 小ブロック (5mm大)

SK148



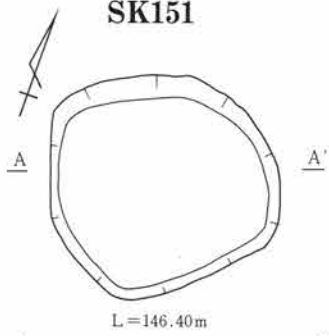
L=146.60m

SK149



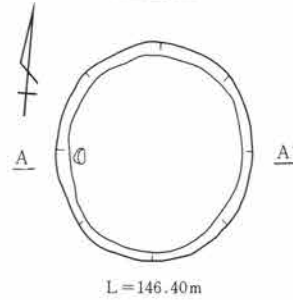
L=146.60m

SK151



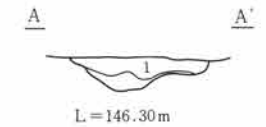
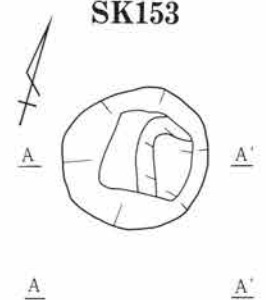
- 1 中世黒褐色砂質土

SK152



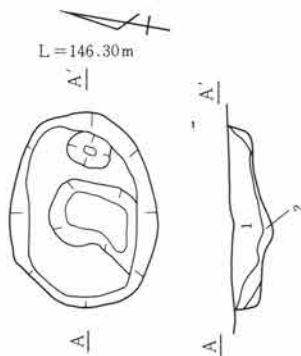
- 1 中世砂質土

SK153



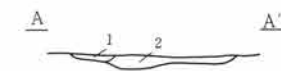
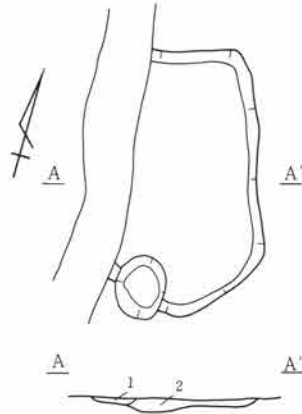
- 1 黒褐色土

SK154



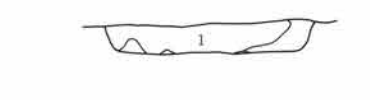
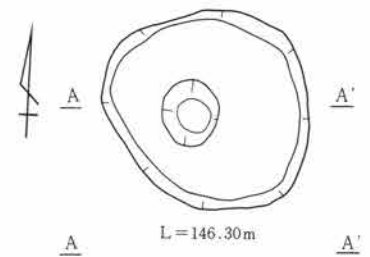
- 1 黒褐色土 多量のC軽石・B軽石
- 2 黒褐色土 多量の黒色のC軽石

SK155



- 1 近世溝で砂質土
- 2 近世ビットで褐色味強い

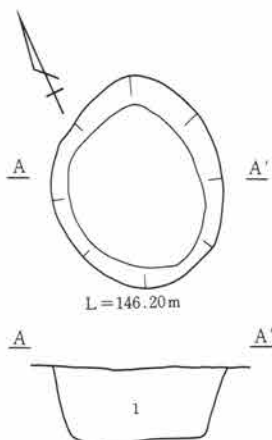
SK156



- 1 中世砂質土

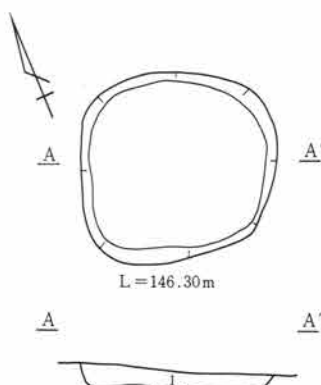
0 1 m

SK159



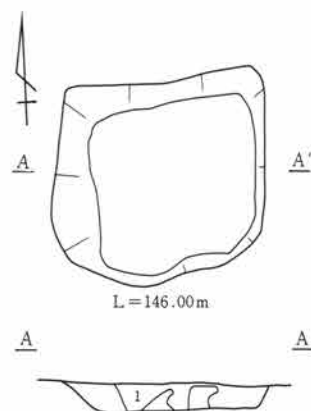
1 中世砂質土

SK160



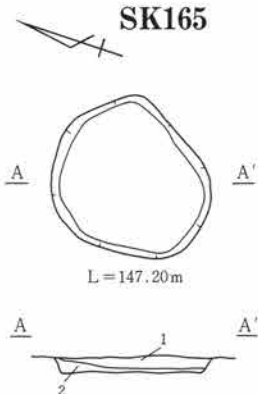
1 中世砂質土

SK162



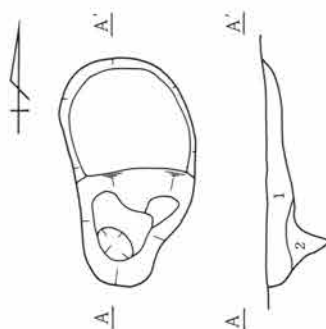
1 中世砂質土

SK165



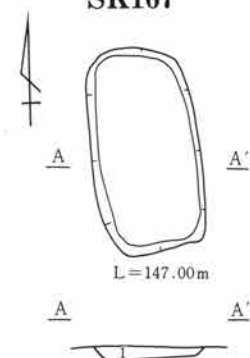
1 褐色土 C軽石 褐色砂
2 褐色土 C軽石 褐色粒

SK166



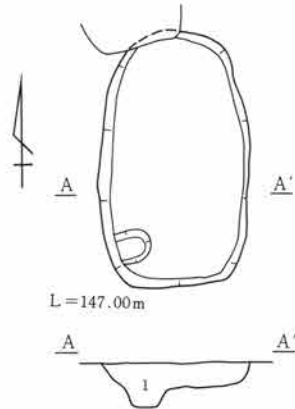
1 褐色土 多量のC軽石 褐色粒
2 暗褐色土 小礫 褐色粒

SK167



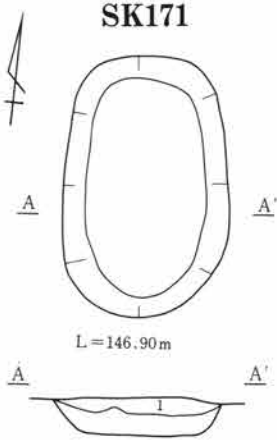
1 褐色土 C軽石 炭化物

SK168



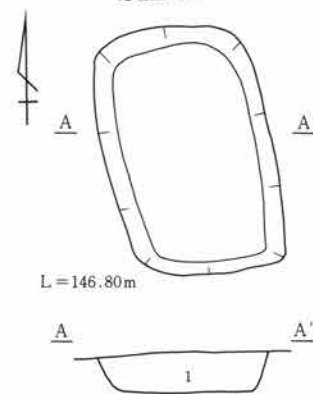
1 褐色土 多量のC軽石 炭化物

SK171



1 中世砂質土

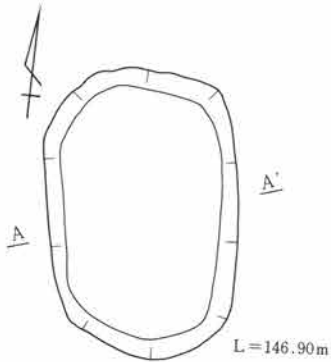
SK172



1 中世砂質土

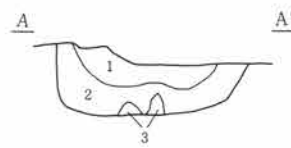
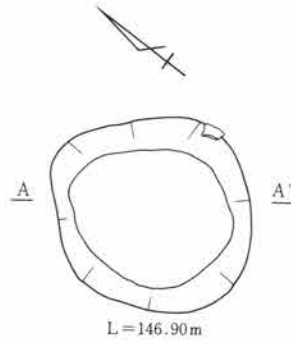


SK173



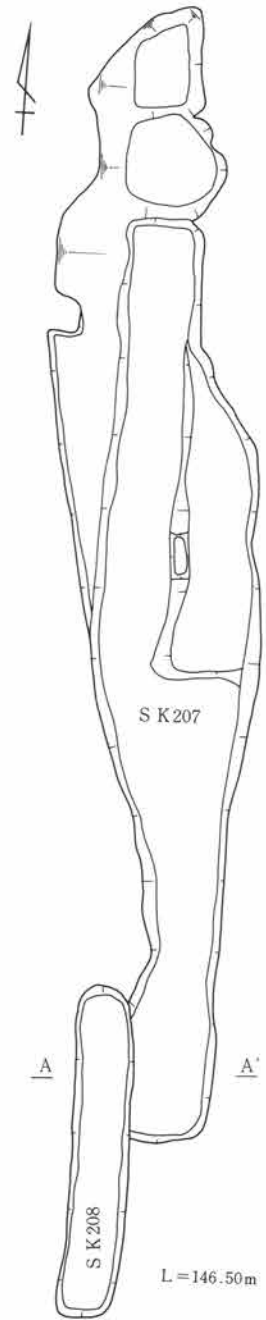
1 中世砂質土

SK189



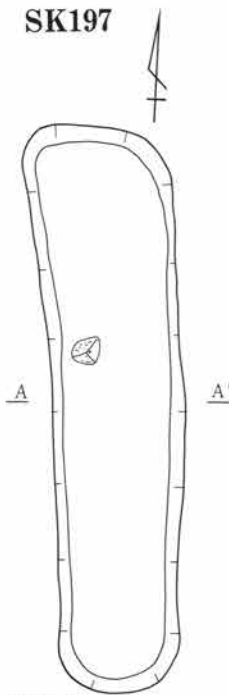
- 1 暗褐色土 C軽石 褐色粒子
- 2 黒褐色土 C軽石 ローム粒
- 3 ロームブロック

SK207・208



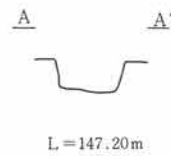
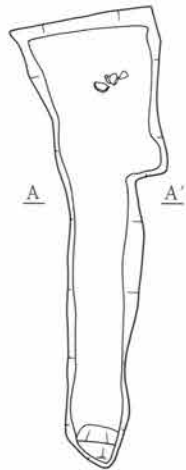
- 1 暗茶褐色砂質土
- 2 暗茶褐色土 C軽石

SK197



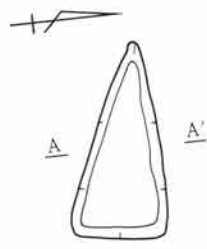
1 暗褐色砂質土 若干のC軽石

SK195



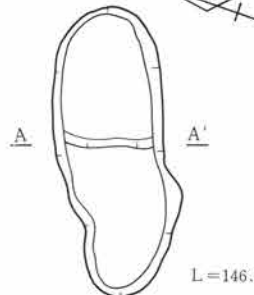
- 1 暗褐色土 C軽石
- 2 褐色土 細かいC軽石 礫

SK205



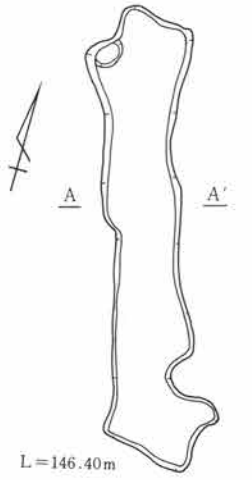
1 褐色

SK206



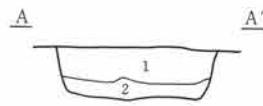
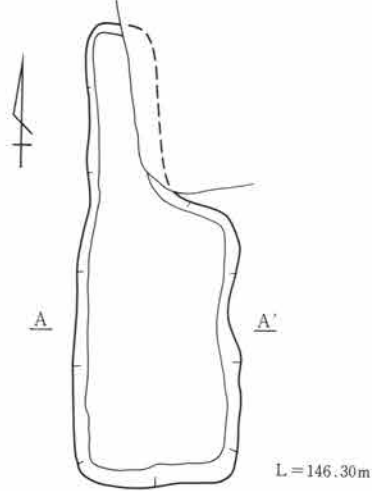
0 1 m

SK211



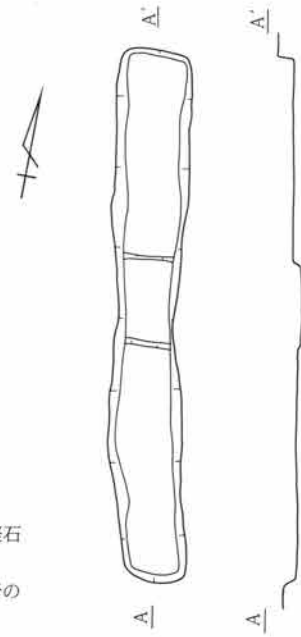
1 暗茶褐色土 C軽石
褐色粒子 小礫

SK214



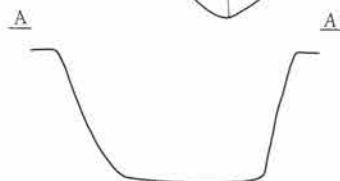
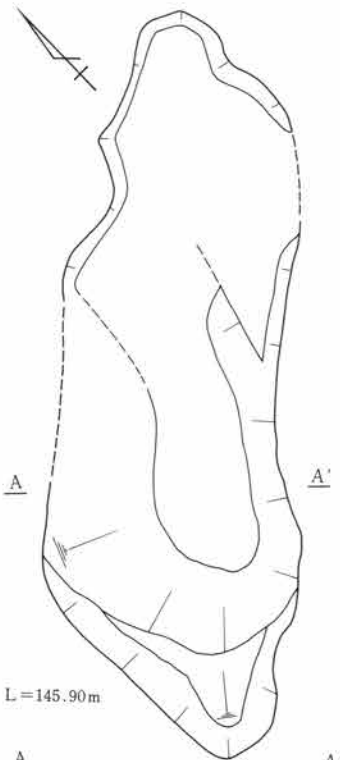
1 暗茶褐色土 C軽石
ローム粒
2 暗茶褐色土 若干の
C軽石 褐色粒

SK215

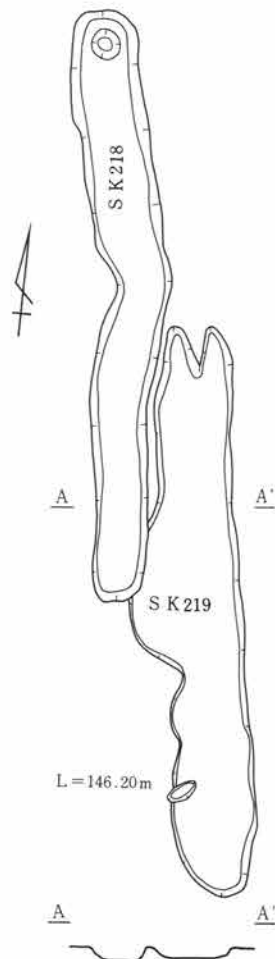


L=146.40m

SK220

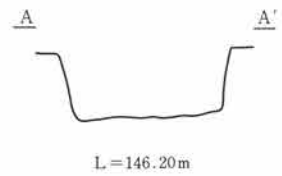
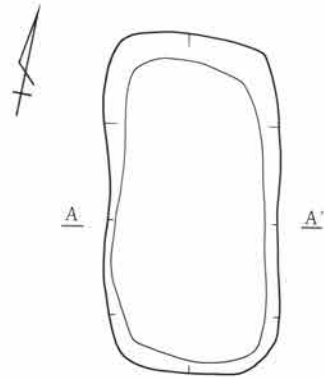


SK218・219



L=146.20m

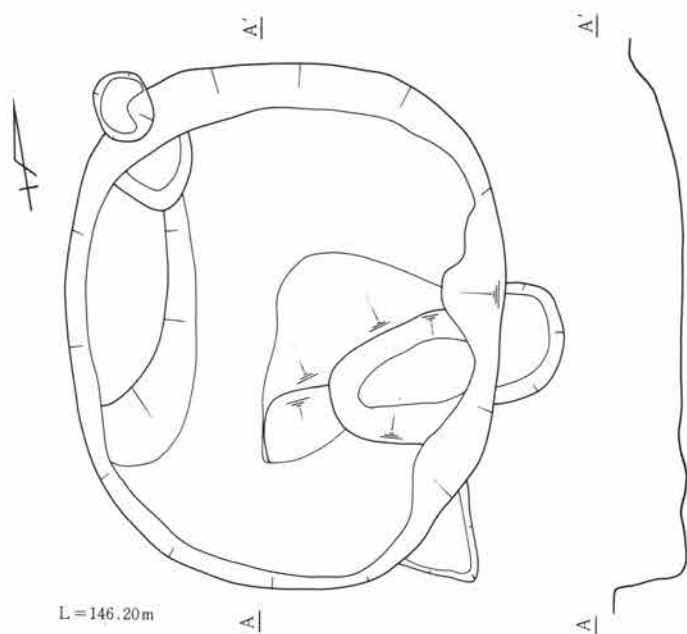
SK217



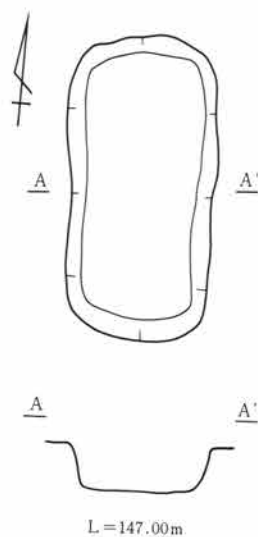
L=146.20m



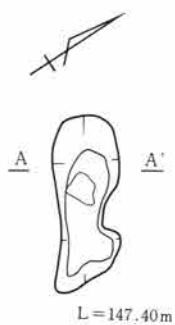
SK222



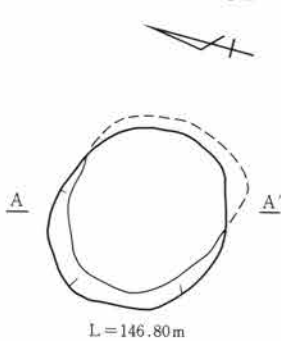
SK223



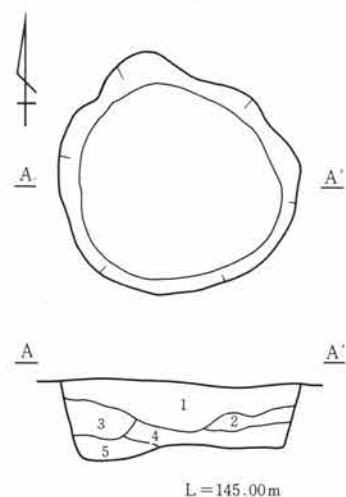
SK229



SK234



SK239

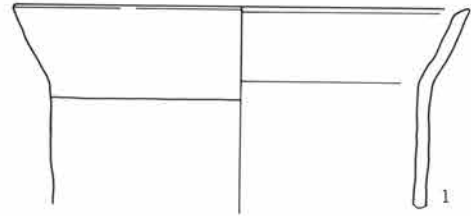
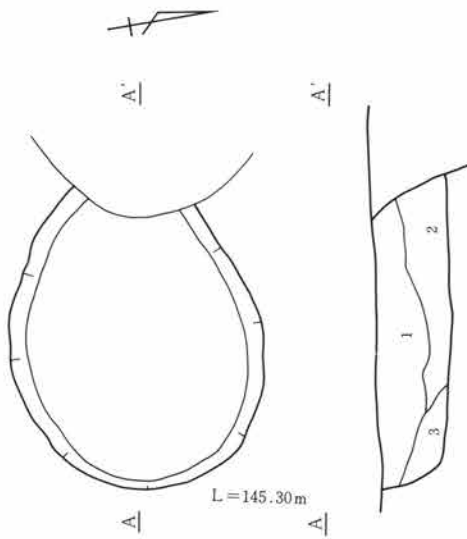


- 1 中世砂質土
- 2 黒褐色土 地山ブロック

- 1 暗褐色土 多量のC軽石
- 2 黒褐色土 若干のC軽石 褐色砂
- 3 暗褐色土 1層に類似 細かいC軽石
- 4 黒褐色粘土 若干のC軽石
- 5 黒褐色土 若干の粘性有り

0 1 m

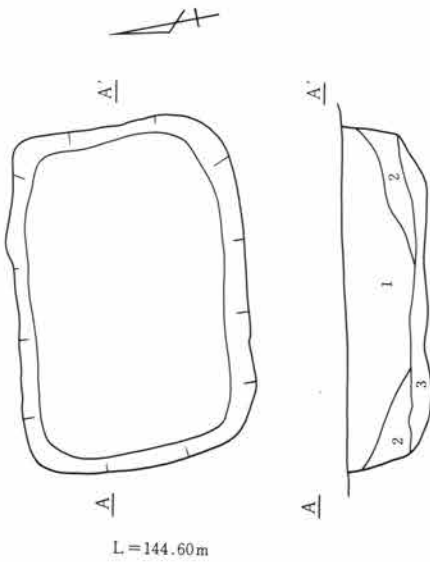
SK240



No.	種類	観察表掲載頁
1	軟質陶器内耳	813

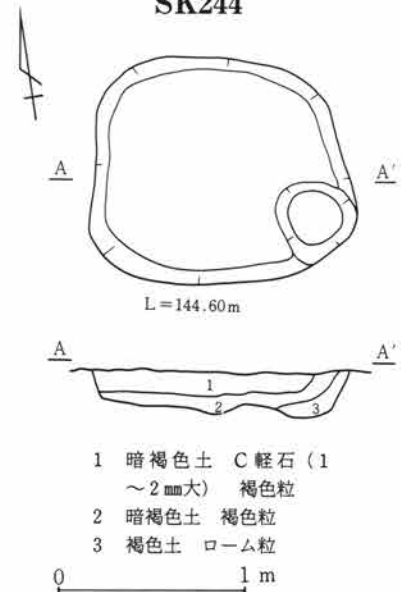
- 1 暗褐色土 C軽石 ローム粒 褐色粒
- 2 暗褐色土 1層に類似 C軽石は少ない
- 3 黒褐色土 若干のC軽石

SK243



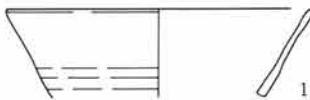
- 1 黒褐色土 若干のC軽石 多量の褐色粒
- 2 茶褐色土 褐色粒
- 3 茶褐色土 丸礫(5~10mm大) 褐色砂

SK244



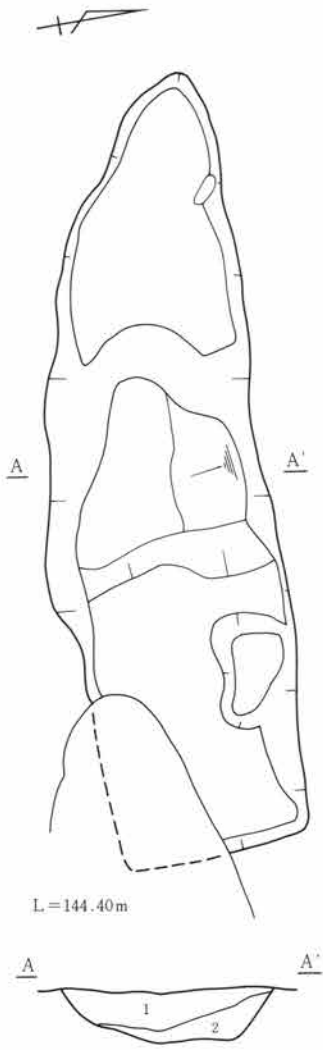
- 1 暗褐色土 C軽石(1~2mm大) 褐色粒
- 2 暗褐色土 褐色粒
- 3 褐色土 ローム粒

SK243



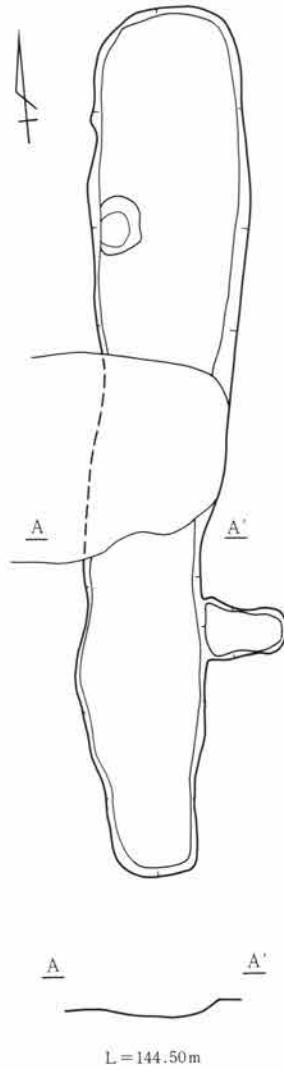
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	16.0・一・一、小片 細砂粒 還元焰、灰色	体部下位に僅かに脹らみをもって外反する。 ロクロ整形。

SK254



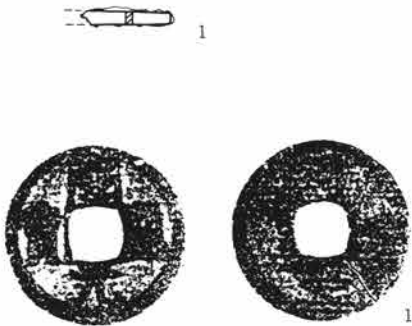
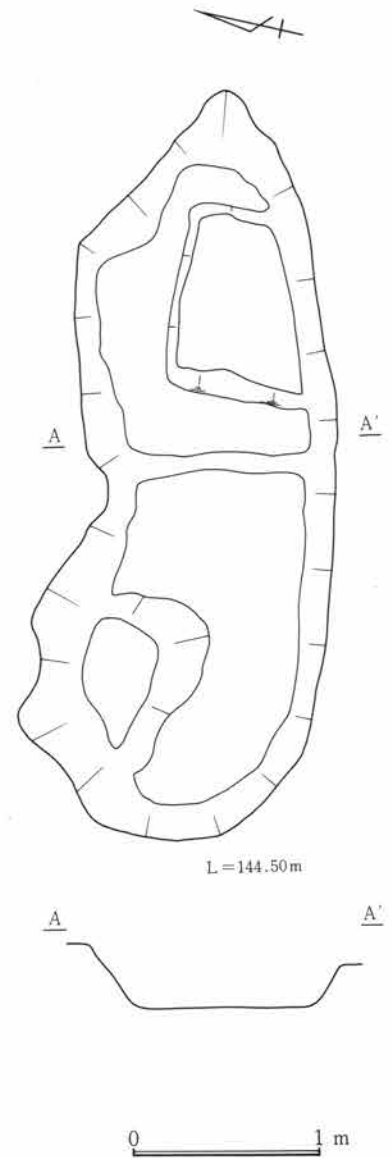
- 1 中世砂質土
- 2 中世砂質土 1層より粘性おびる

SK256



SK266

293



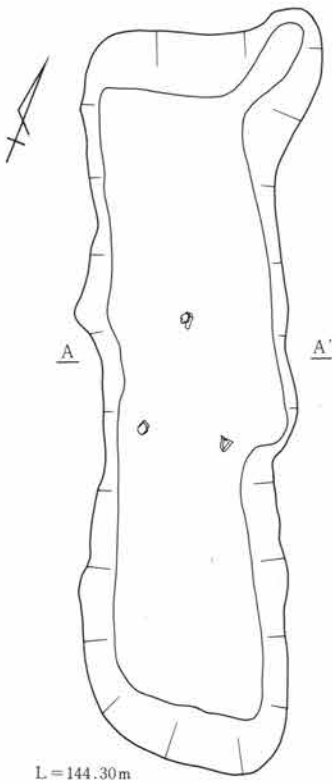
SK254

No	種類	観察表掲載頁
1	鉄製品 刀子	894

SK266

No	銭名	観察表掲載頁
1	開元通寶	910

SK267 294

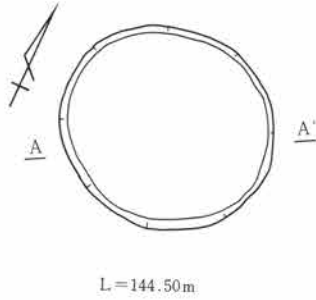


L=144.30m



0 1 m

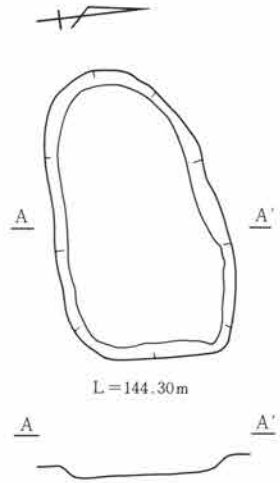
SK264 293



L=144.50m



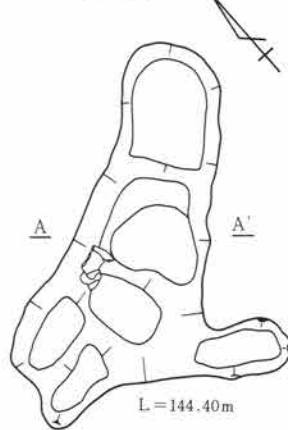
SK276



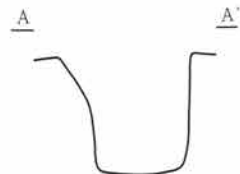
L=144.30m



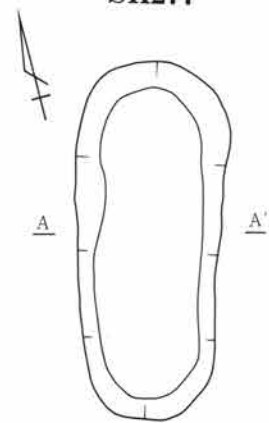
SK268



L=144.40m



SK277



L=144.30m

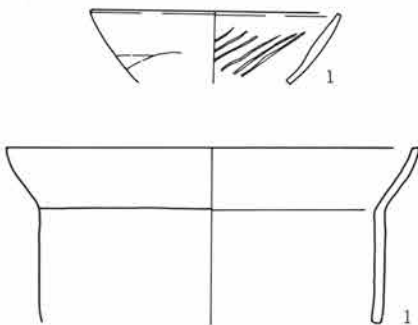


SK267

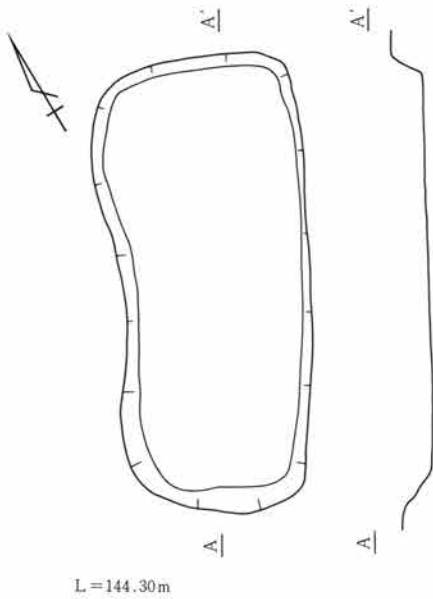
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.2・一・一、小片 細砂粒・褐色鉾物 粒、普通、橙色	体部は直線的に開き、口唇部が僅かに内湾する。体部内面には放射状暗文が施される。

SK268

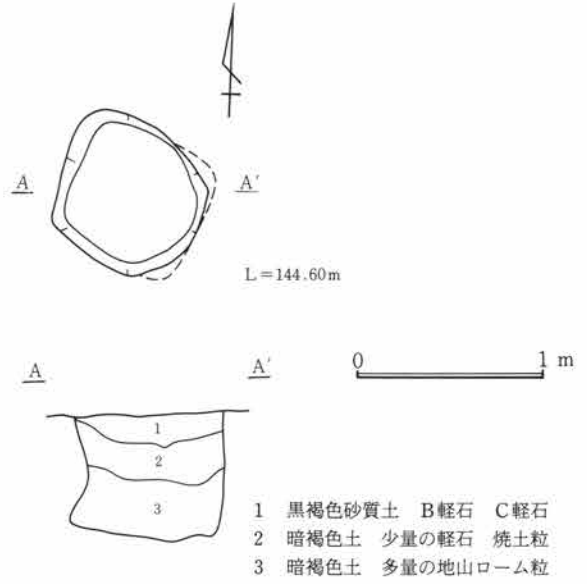
No.	種類	観察表掲載頁
1	軟質陶器 内耳	814



SK274



SK312



- 1 黒褐色砂質土 B軽石 C軽石
- 2 暗褐色土 少量の軽石 焼土粒
- 3 暗褐色土 多量の地山ローム粒

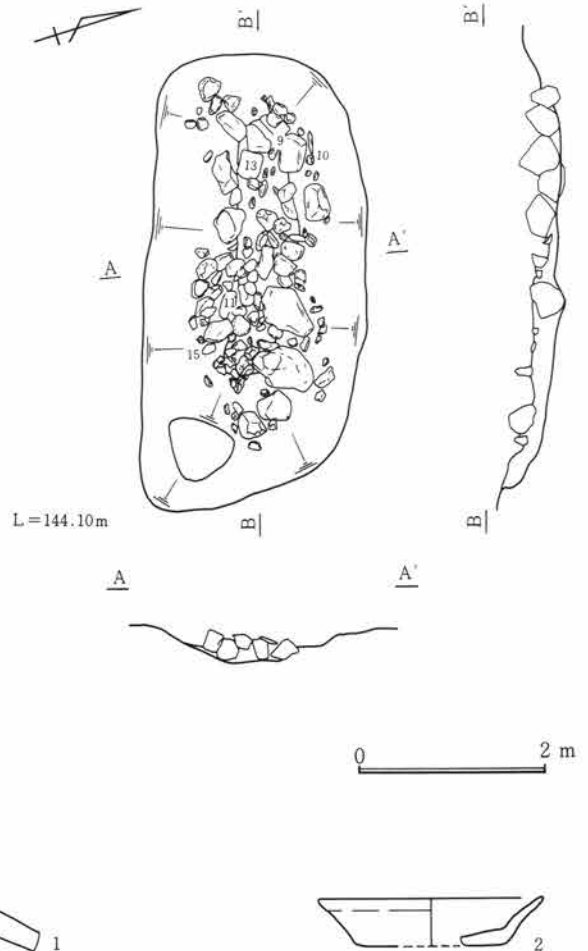
S K 299

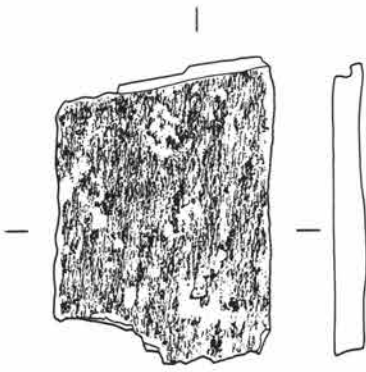
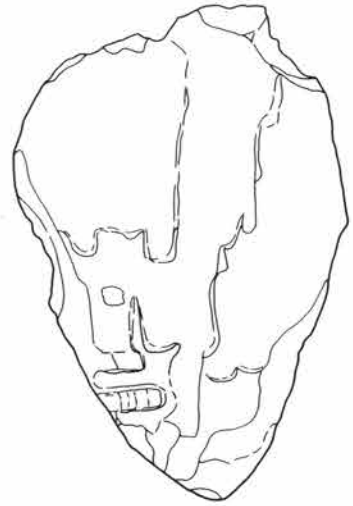
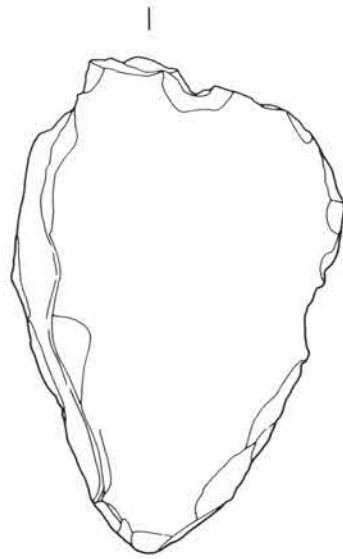
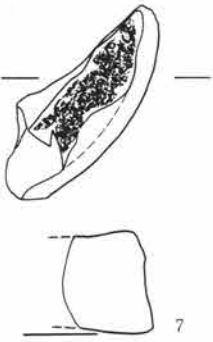
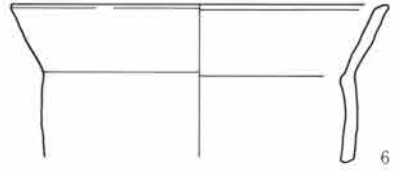
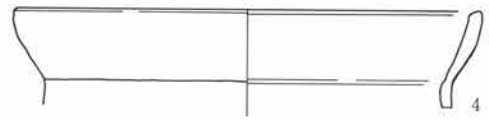
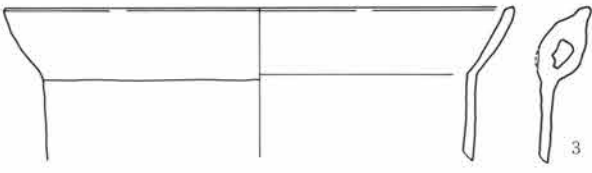
本遺構は、93～95G-44～45グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、長楕円形を呈する。規模は、長軸2.82m、短軸2.43m、深度は0.55～0.80mを測る。

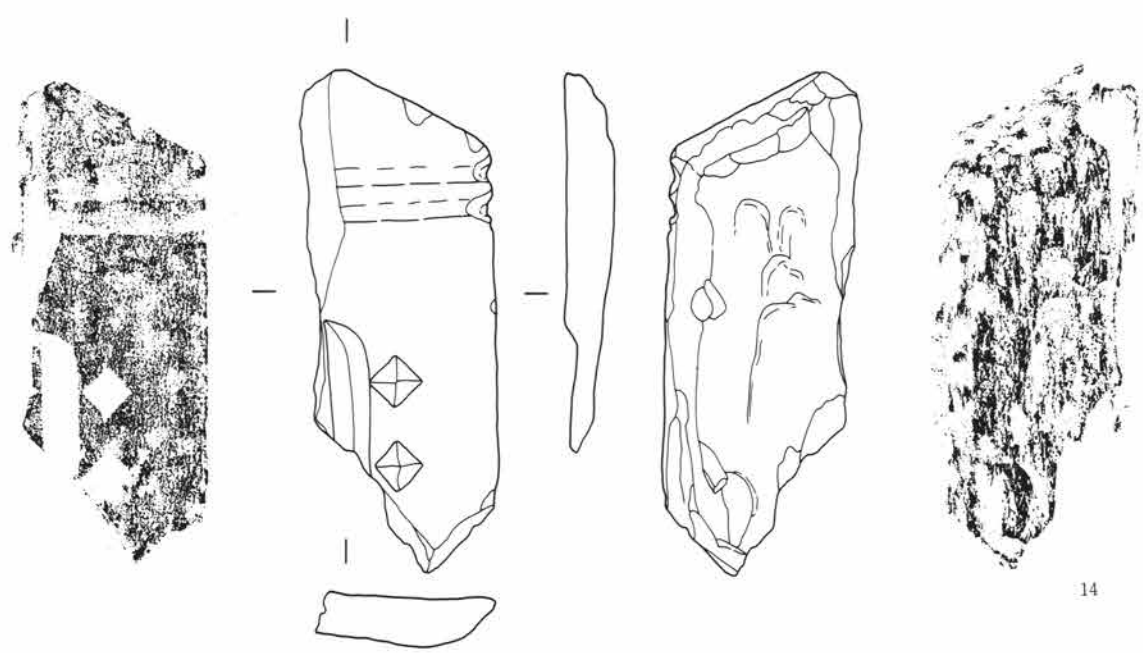
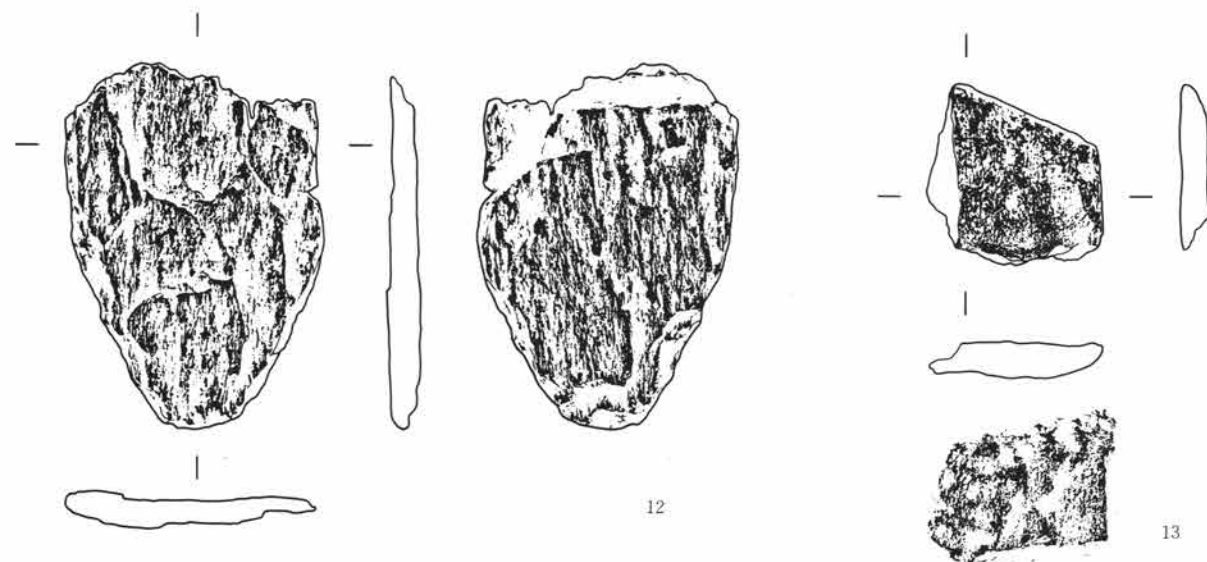
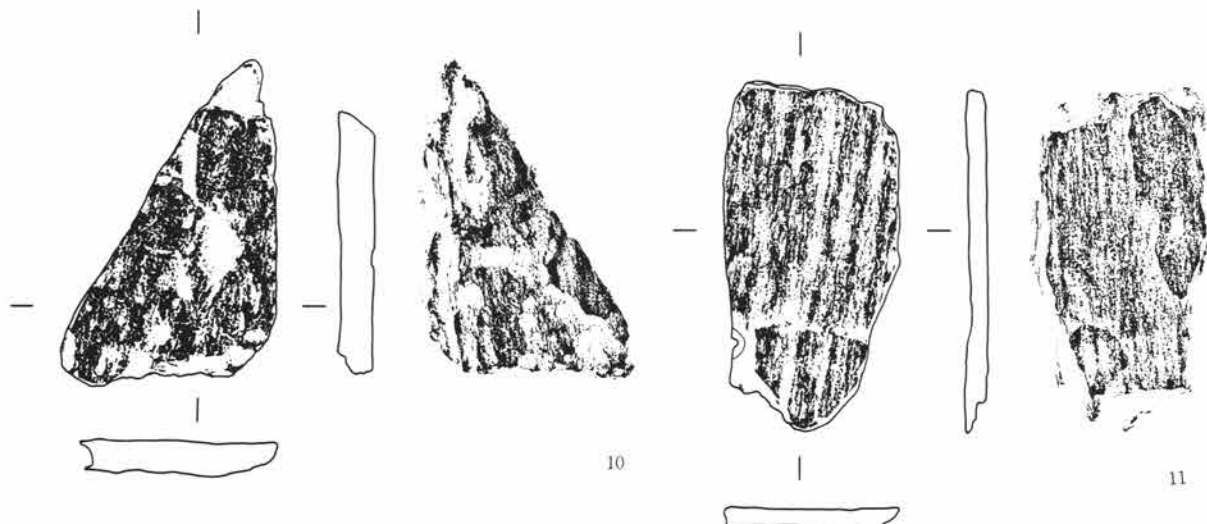
底部は、多少の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。立ち上がりは、非常になだらかで東南隅には小三角形のテラスがみられる。

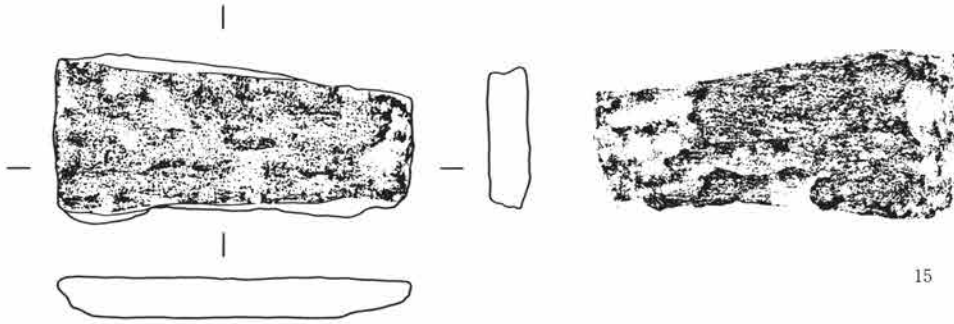
本址からは、10～40cm大の垂角礫とともに板碑片、陶器片が多量に投棄されている。

294







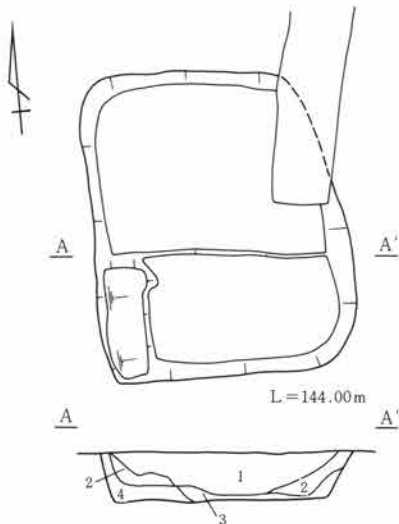


15

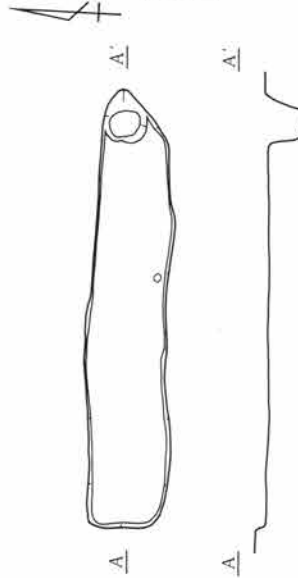
No	種類・器種 出土位置	計測値 口径・底径・器高・残存率	胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴
1	須恵器・甕 覆土	—・—・—、小片	細砂粒 黒色鉍物粒	還元焰	灰色	口縁部は外反ぎみに開き、胴部は大きくふくらむ。 胴部は平行叩き。
No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁	
2	土師質土器 皿	824	9	板 碑	879	
3	軟質陶器 内耳	814	10	板 碑	879	
4	軟質陶器 内耳	814	11	板 碑	879	
5	軟質陶器 内耳	814	12	板 碑	879	
6	軟質陶器 内耳	814	13	板 碑	879	
7	石 白	845	14	板 碑	879	
8	板 碑	879	15	板 碑	879	

SK21

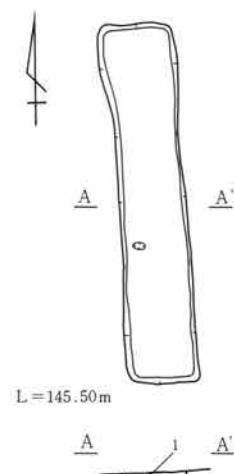
295



SK42



SK47



SK47

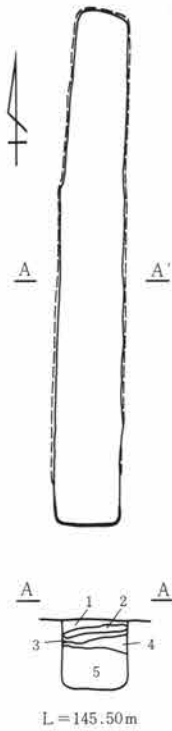
1 中世砂質土

- 1 暗茶褐色土 軽石 橙色粒子 褐色粘土ブロック
- 2 暗茶褐色土 多量の褐色粘土ブロック
- 3 暗褐色土 粘土ブロック
- 4 暗褐色土 多量の黄褐色粘土ブロック

L=145.70m

0 2 m

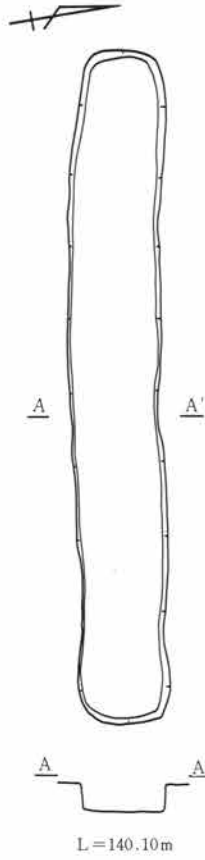
SK46



L=145.50m

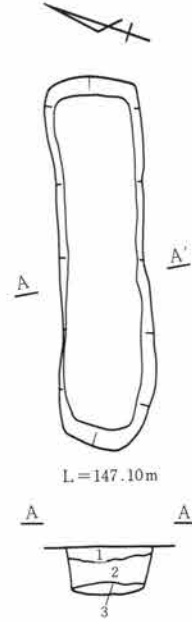
- 1 中世砂質土
- 2 黄色味おびる砂質土
- 3 1層と同じ
- 4 2層と同じ
- 5 1、3層と同じ

SK123



L=140.10m

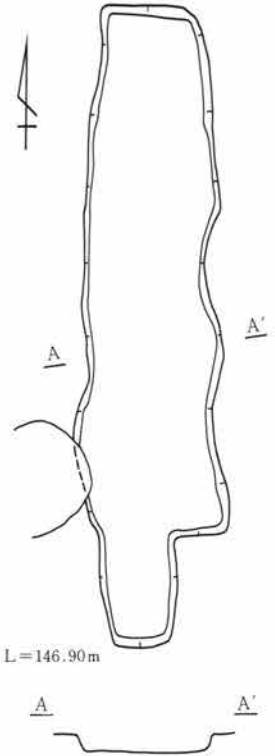
SK169



L=147.10m

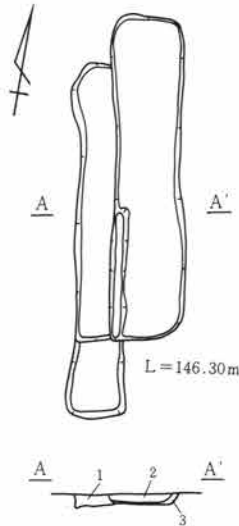
- 1 褐色土 極少量のC軽石
ロームブロック
- 2 褐色土 ロームブロック
- 3 暗黄褐色土 多量のローム
ブロック

SK191



L=146.90m

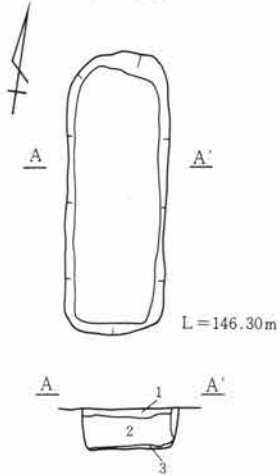
SK178・179



L=146.30m

- 1 中世砂質土
- 2 中世砂質土
- 3 黒色気味の黒褐色土

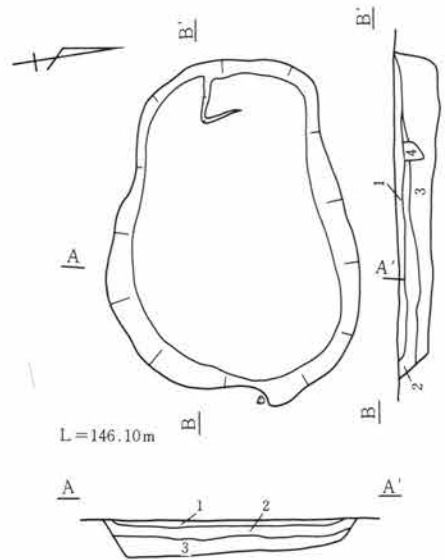
SK177



L=146.30m

- 1 中世砂質土
- 2 黒褐色砂質土 少量の
地山ブロック
- 3 黒色気味の黒褐色土

SK246

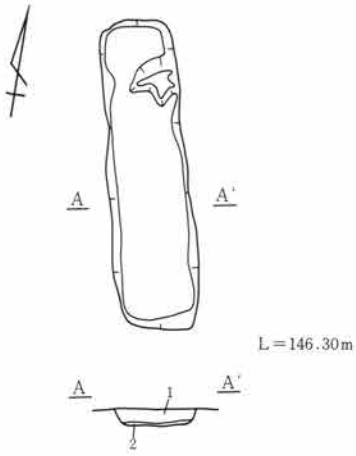


L=146.10m

- 1 暗褐色土 褐色粒 橙色粒
- 2 暗褐色土 1層に類似 C軽石(1mm大)
- 3 褐色土 1、2層に類似 ローム
- 4 黒褐色土 ローム 褐色粒

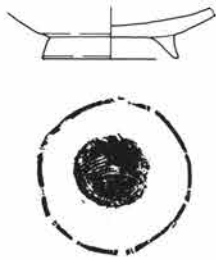
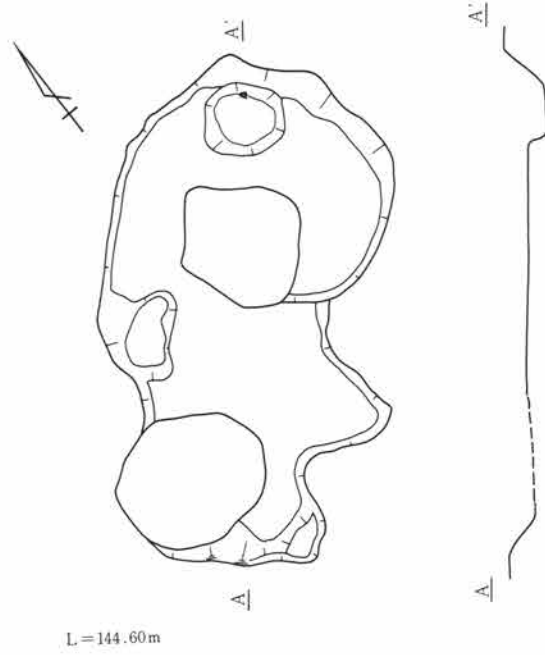
0 2 m

SK180



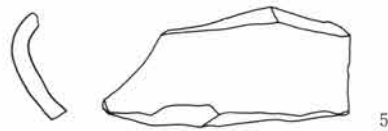
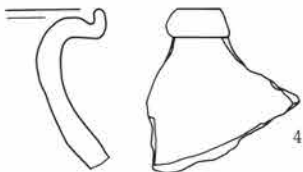
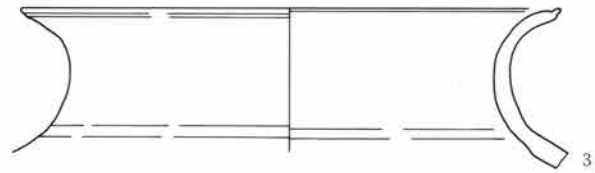
- 1 中世砂質土
- 2 黒色気味の黒褐色土

SK260



SK260

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 皿 覆土	—・—・高台径7.2 小片、細砂粒、還元焰、 やや軟質、灰色	体部は大きく開く。高台は細く、「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り、周辺部は高台貼付時の撫で。底部内面に直径6.7cmの重ね焼き。



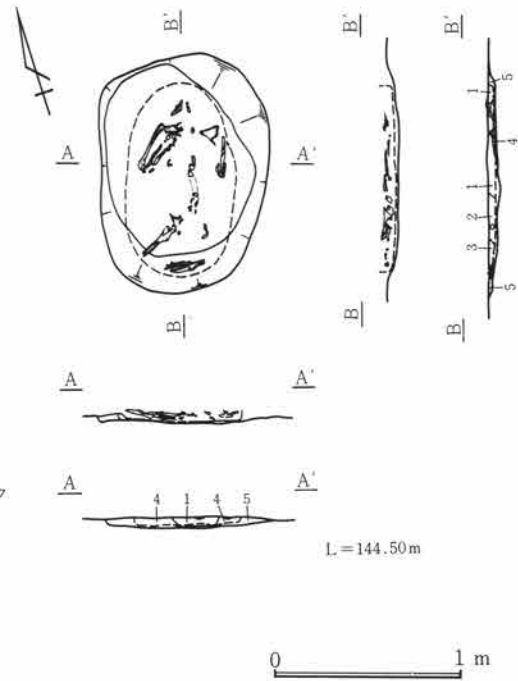
No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
2	青磁 碗	796	4	陶器 大甕	800
3	陶器 大甕	799	5	陶器 大甕	799

S Z01

本遺構は、S J 16・17の西側に位置し、単独で占地する。平面形態は、隅丸長方形に近い形状を呈する。規模は、長軸1.25m、短軸0.9m、深度6cmを測る。覆土は、棺の外側では埋葬時の黒褐色土、内側では二次堆積による茶褐色・暗褐色土で覆われている。

本遺構からは、成人男性1体分の骨片が出土しているが、埋葬方法は、凡そ径100×60cmの曲物（破線の範囲）に腕と足を組ませて遺体を埋葬したと推定される。

- 1 茶褐色粘質土 B軽石 多量のロームブロック 暗茶褐色ブロック
- 2 暗茶褐色土 B軽石 ローム小ブロック 暗茶褐色小ブロック
- 3 暗褐色粘質土 B軽石 ロームブロック 暗茶褐色ブロック
- 4 暗茶褐色土 B軽石 ローム小ブロック 暗茶褐色小ブロック
- 1～4は埋葬後、棺に入り込んだ土と考えられる
- 5 黒色土、暗茶褐色土の混土 B軽石 ロームブロック（堀方埋土）

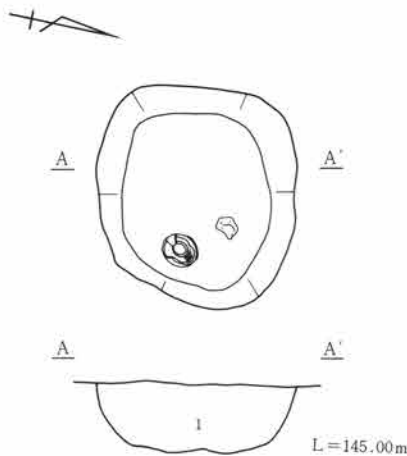


S Z02

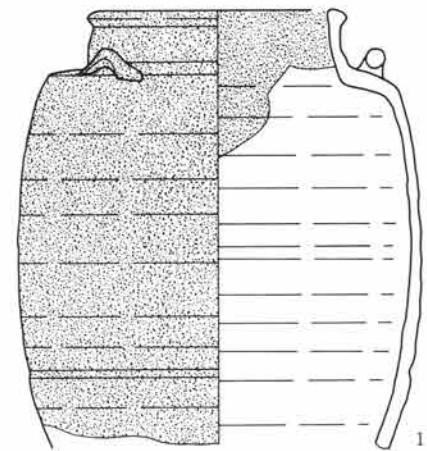
296

本遺構は、91～92H-17～18グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、方形に近い形状を呈する。規模は、1.15×1.07m、深度37cmを測る。覆土は、褐色土で覆われている。

本遺構からは、人骨の出土はみられなかったが、覆土中に骨片が若干混じっていた。出土遺物には、三耳壺と角礫が各1点ずつみられる。



- 1 褐色土 軽石粒 黄色粒



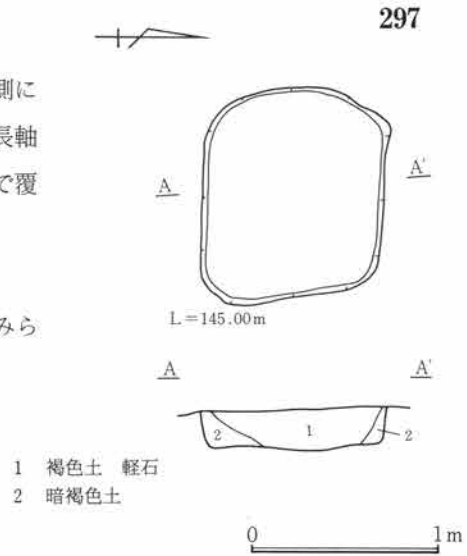
No	種類	観察表掲載頁
1	陶器 三耳壺	799

S Z03

本遺構は、91～92H-16～17グリッドに位置し、S Z02の南側に単独で占地する。平面形態は、ほぼ長方形を呈する。規模は、長軸1.10m、短軸0.97m、深度22cmを測る。覆土は、大部分が褐色土で覆われている。

壁は、垂直に立ち上がり、底部は、平坦である。

本遺構からは、少量の骨片が出土しただけでその他の遺物はみられなかった。

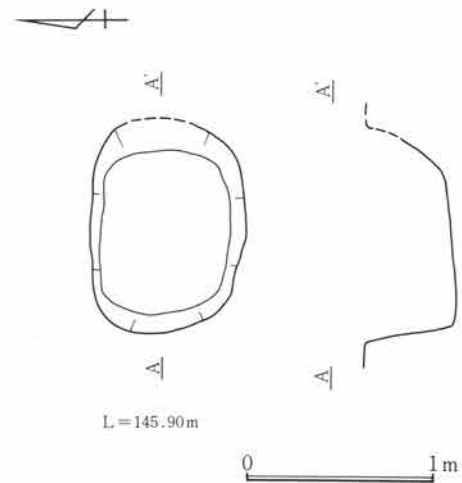


S Z04

本遺構は、118～119H-45グリッドに位置し、S K40、S D30と重複するが、新旧関係は、S D30より本遺構のほうが古く、S K40より新しい。平面形態は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸1.15m、短軸0.82m、深度47cmを測る。

壁は、東壁がやや斜めの立ち上がりであるが、他の壁はほぼ垂直な立ち上がりである。底部は、平坦である。

本遺構からは、少量の骨片が出土しただけでその他の遺物はみられなかった。

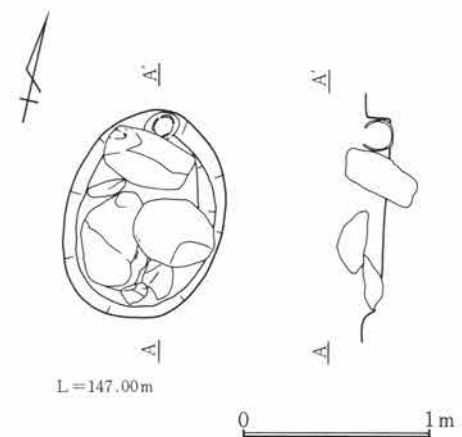


S Z06

本遺構は、121H37～38グリッドに位置し、S D99・100と重複するが、新旧関係は、本址のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈する。規模は、長軸1.11m、短軸0.88m、深度14cmを測る。

壁は、垂直に立ち上がり、底部は、平坦である。

本遺構の上面は、7×20cm～38×50cm大の礫によって覆われており、北側の礫の下より壮年期の女性の頭蓋骨片が出土している。



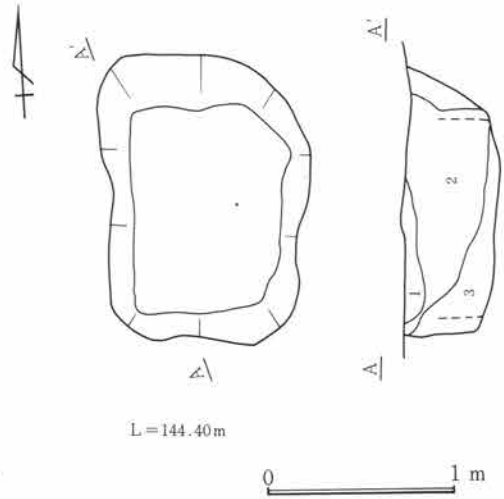
S Z07

本遺構は、106～107G—42グリッドに位置し、溝と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、ほぼ長方形を呈する。規模は、長軸1.50m、短軸0.9m、深度50cmを測る。覆土は、大部分が黒褐色砂質土で覆われている。

本遺構からは、少量の骨片が出土しただけである。また、土層断面では、棺の痕跡が僅かにみられ、長さは1.05mである。



- 1 砂質の黒褐色土
- 2 砂質の黒褐色土 多量のロームブロック
- 3 黒褐色土 2層より多量のロームブロック



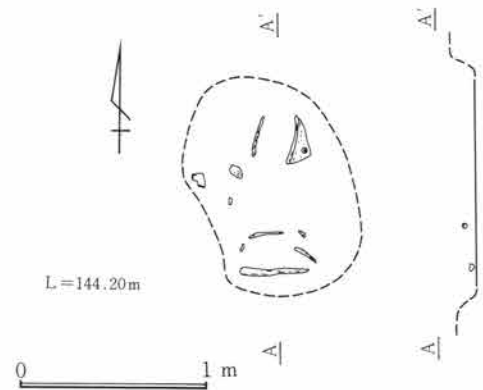
No	種類	観察表掲載頁
1	土師質土器 皿	822

S Z08

本遺構は、S D59内の99G—40グリッドに位置し、平面プランの確認ができなかった。本遺構の存在はS D59の調査中に確認されたため、明確な形態・規模は、不明であるが、平面形態は、楕円形を呈し、規模は、径1.2×0.8m、深度15～16cmを測る。覆土は、黒褐色砂質土である。

壁の状態は、確認できなかったが、底部は、平坦である。

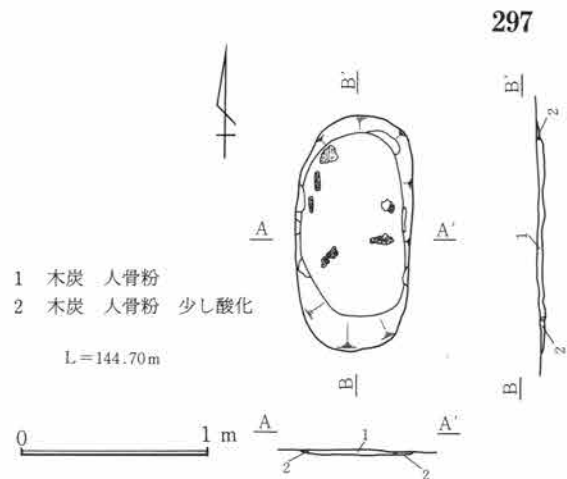
本遺構からは、壮年期の男性骨の出土がみられた。



S Z09

本遺構は、102H—15～16グリッドに位置し、S T20と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈する。規模は、長軸1.53m、短軸0.61m、深度5cmを測る。

本遺構からは、少量の人骨片の出土と炭化材、焼土がみられることから、浅い土壇が掘られ、火葬がおこなわれたと推定される。



- 1 木炭 人骨粉
- 2 木炭 人骨粉 少し酸化

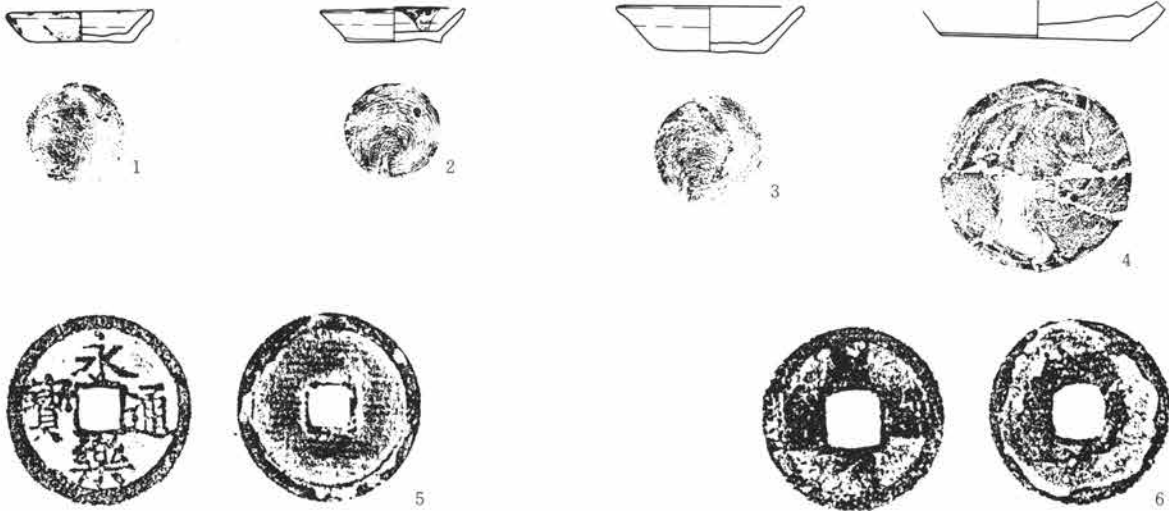
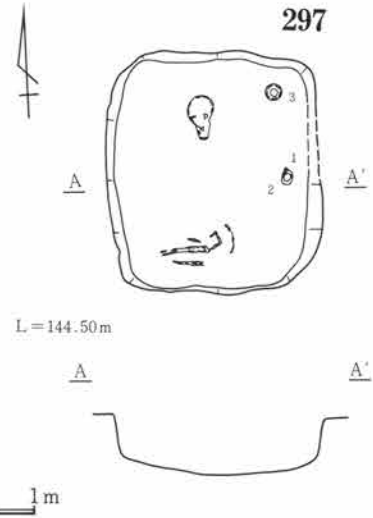
297

S Z 10

本遺構は、103～104G-44～45グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸1.27m、短軸1.12m、深度31cmを測る。覆土は、黒褐色土で覆われている。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底部は、平坦である。

本遺構からは、壮年期の女性骨が頭部を北に向けて埋葬され、副葬品として土師質土器の皿4点と「永楽通寶」・「皇宋通寶」が各1点ずつ出土している。



No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
1	土師質土器 皿	822	4	土師質土器 皿	822
2	土師質土器 皿	822	5	永楽通寶	909
3	土師質土器 皿	822	6	皇宋通寶	909

S Z 12

298

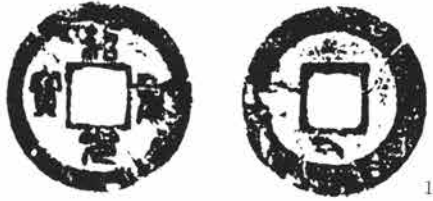
本遺構は、107～108G-47に位置し、S J 197と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕丸形を呈する。規模は、長軸1.86m、短軸1.36m、深度26cmを測る。覆土は、黒褐色土である。

壁は、東壁が割合と垂直に近い立ち上がりであるが、他の壁は緩やかな立ち上がりである。底部は、ほぼ

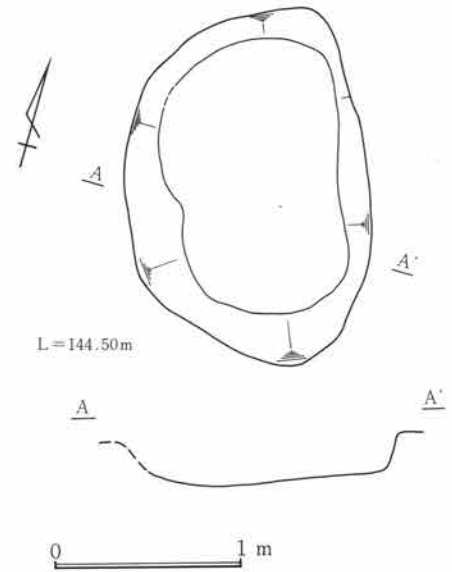
第3章 検出遺構・遺物

平坦である。

本遺構からは、少量の骨片の出土がみられただけであるが、副葬品として「紹興元寶」が出土している。



No.	銭名	観察表掲載頁
1	紹興元寶	909

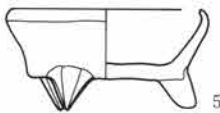
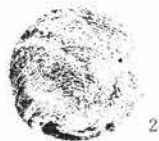
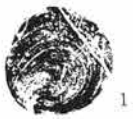
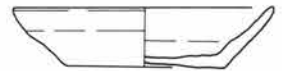
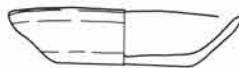
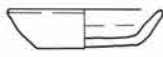
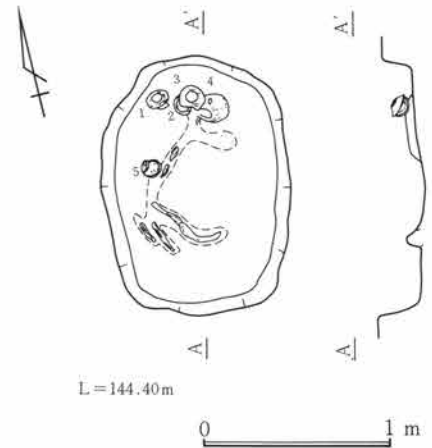


S Z 13

本遺構は、106～107G-41～43グリッドに位置し、単独に占地する。平面形態は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸2.37m、短軸2.01m、深度25cmを測る。覆土は、黒褐色砂質土である。

本遺構からは、熟年期の男性骨が頭部を北に向けて東側を向いて手・足を折り曲げた状態で埋葬されていた。副葬品としては、土師質土器の皿・香炉、唐銭1枚、北宋銭2種類2枚、明銭1枚が出土している。

298





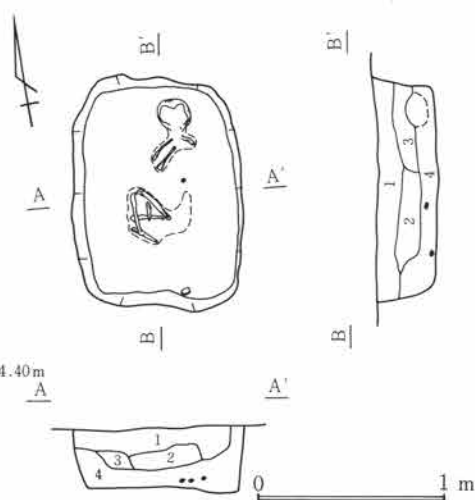
No	種類	観察表掲載頁	No	銭名	観察表掲載頁
1	土師質土器 皿	822	6	開元通寶	909
2	土師質土器 皿	823	7	皇宋通寶	909
3	土師質土器 皿	822	8	大觀通寶	909
4	土師質土器 皿	823	9	洪武通寶	909
5	土師質土器香炉	823			

S Z14

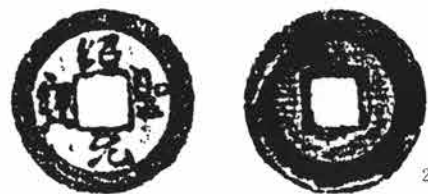
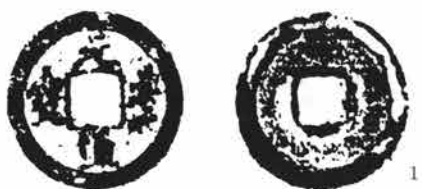
299

本遺構は、108~109G-49~H-00グリッドに位置し、S Z15と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態はほぼ長方形を呈する。規模は、長軸1.22m、短軸0.91m、深度32cmを測る。覆土は、黒褐色土である。

本遺構からは、熟年期の男性骨が頭部を北に向けて西側を向いて手・足を折り曲げた状態で埋葬されていた。本遺構では男性骨の他に壮年期の女性の左大腿骨体中央部片が混在している。



- 1 黒褐色土 C軽石 褐色粒 ロームブロック
- 2 暗茶褐色土 ロームブロック 1層に類似
- 3 黒色土 粘性有り
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック



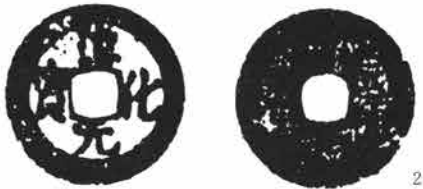
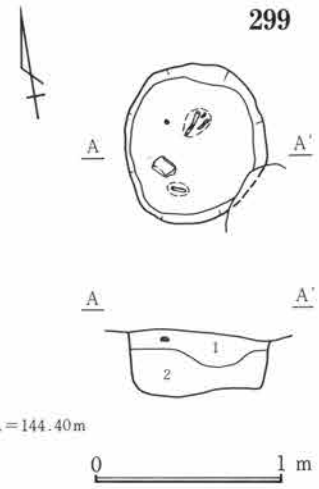
No	銭名	観察表掲載頁
1	元豊通寶	909
2	紹聖元寶	910
3	永樂通寶	910

S Z 15

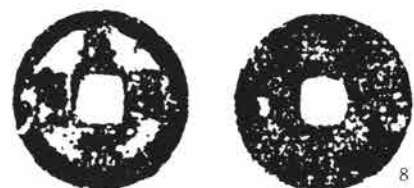
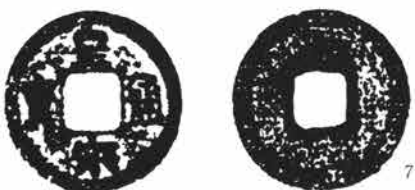
本遺構は、109G-49グリッドに位置し、S Z 14と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、楕円形を呈する。規模は、径88×78cm、深度35cmを測る。覆土は、黒褐色土である。

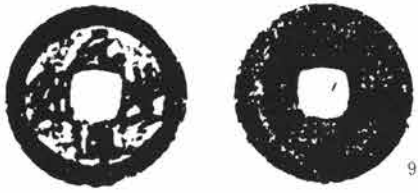
壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底部は、やや波打った状態であるがほぼ平坦である。

本遺構からは、壮年期の女性の頭蓋骨、左右大腿骨、右脛骨などの出土がみられた。なお、この他に異遺体と思われる女性骨の出土がみられた。また、出土遺物の内に釘がみられることから棺に入られて埋葬されたと思われる。

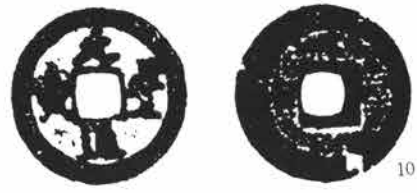


- 1 黒褐色土 C軽石（1～2mm大）ロームブロック
- 2 黒褐色土 多量のロームブロック
1層より淡い色調





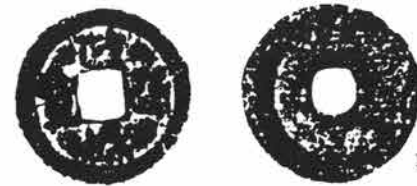
9



10



11



12



13



14



15



16

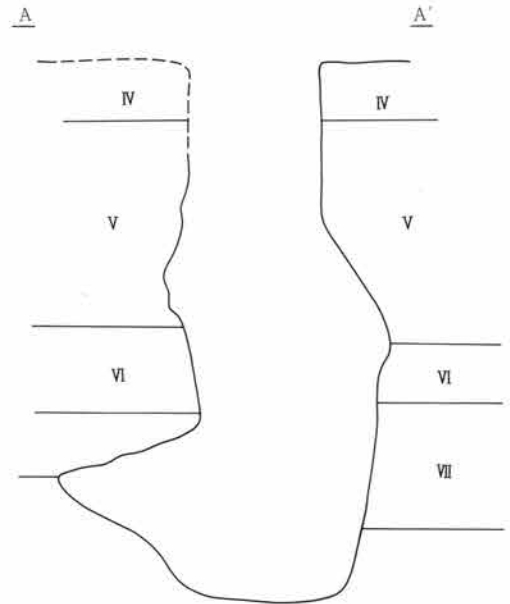
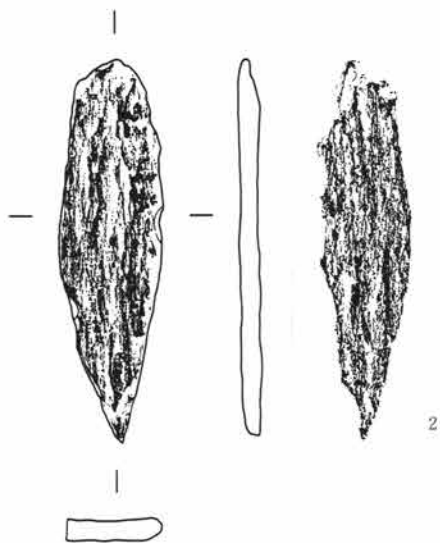
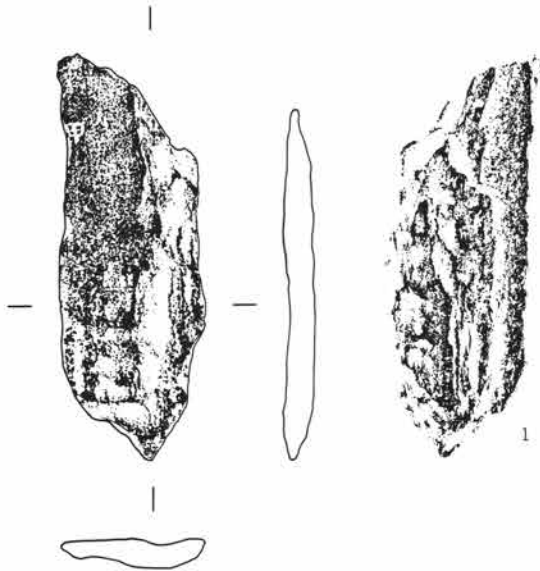
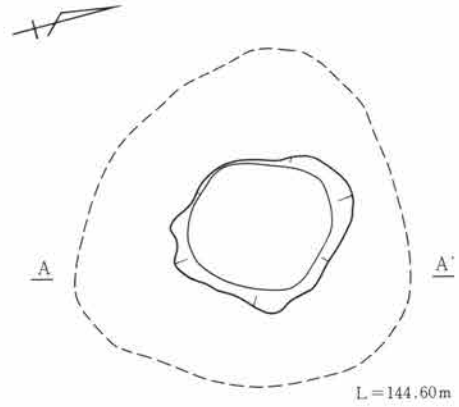
No.	種類	觀察表掲載頁	No.	種類	觀察表掲載頁
1	鉄製品 釘	895	9	元豐通寶	910
2	淳化元寶	910	10	元豐通寶	910
3	祥符元寶	910	11	元符通寶	910
4	祥符元寶	910	12	政和通寶	910
5	天聖元寶	910	13	紹興元寶	910
6	天聖元寶	910	14	洪武通寶	910
7	皇宋通寶	910	15	永樂通寶	910
8	皇宋通寶	910	16	永樂通寶	910

5 井 戸 (SE)

SE01

本遺構は、115G-47グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形である。規模は、確認面では1.10×0.80mである。確認面からの深度は、2.84mを測る。断面では、確認面より0.9mの深さよりアグリがみられ、湧水点であるVII層中（確認面より1.95m）では、径が、1.70mほどでアグリがみられる。

SE01



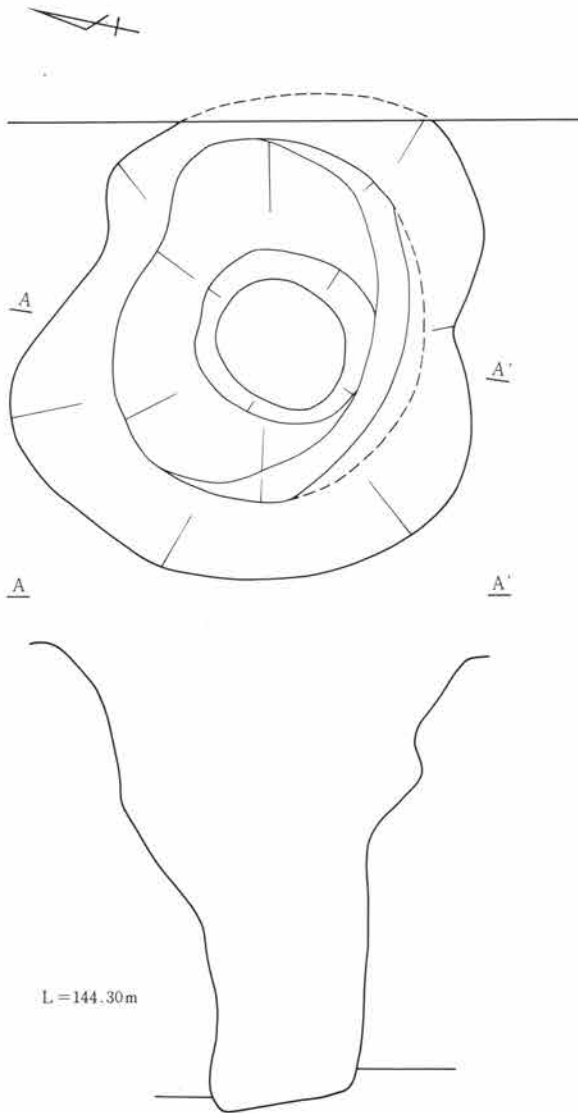
No.	種 類
観察表掲載頁	
1	板 碑
877	
2	板 碑
877	

S E03

本遺構は、112～113G-38～39グリッドに位置し、ST24と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、確認面より深度1.45mまでは緩やかに開き、それ以下は径0.9mの円筒状を呈す地山井筒円筒形である。規模は、確認面では径2.80×1.90m、深度は2.40mを測る。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられない。

調査は、1983年3月に実施され、自然湧水水位は、確認面より2.18m～底面にかけてのVII層中の粗砂層からである。

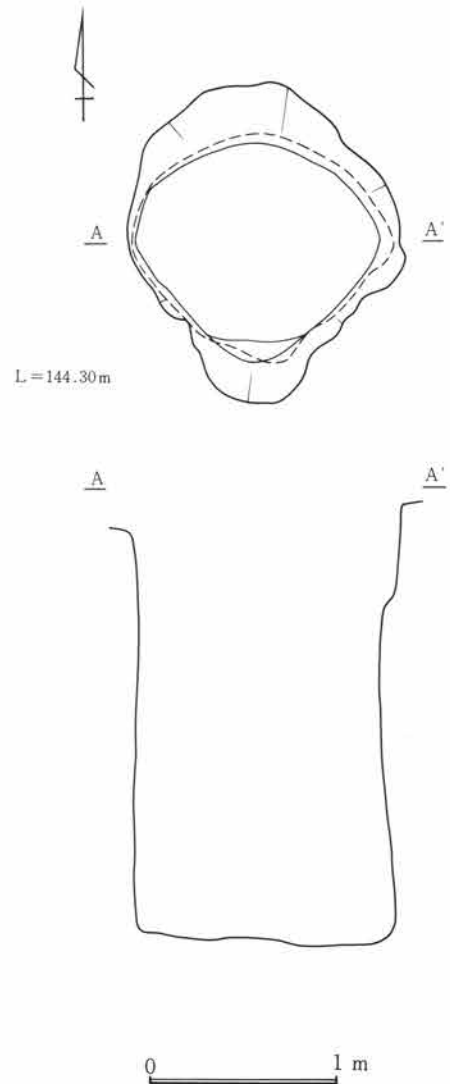


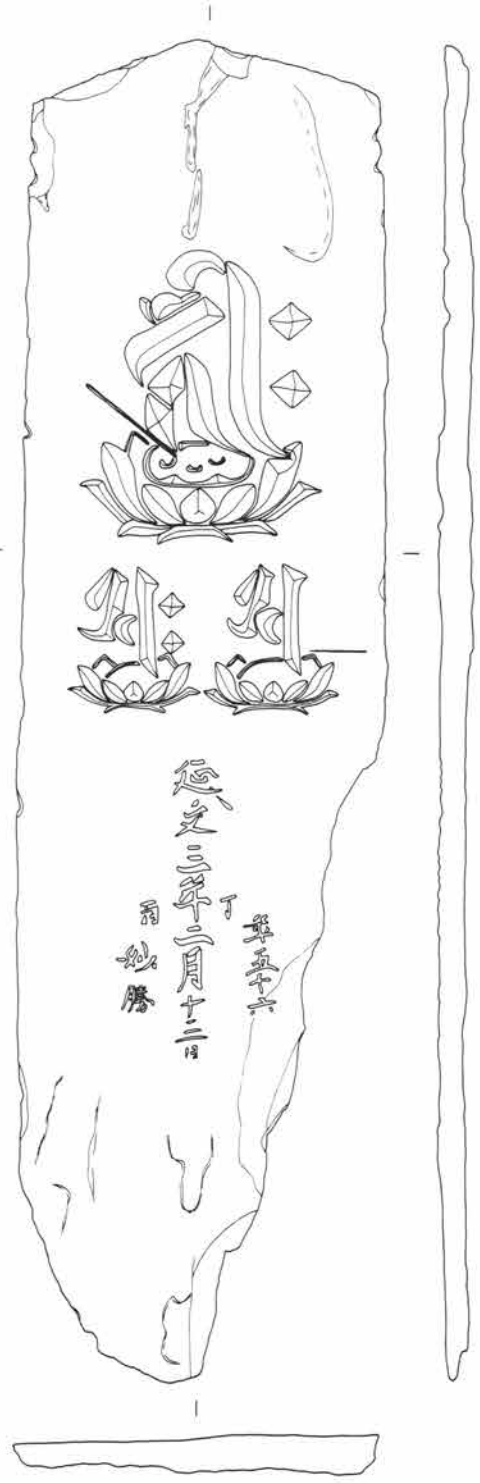
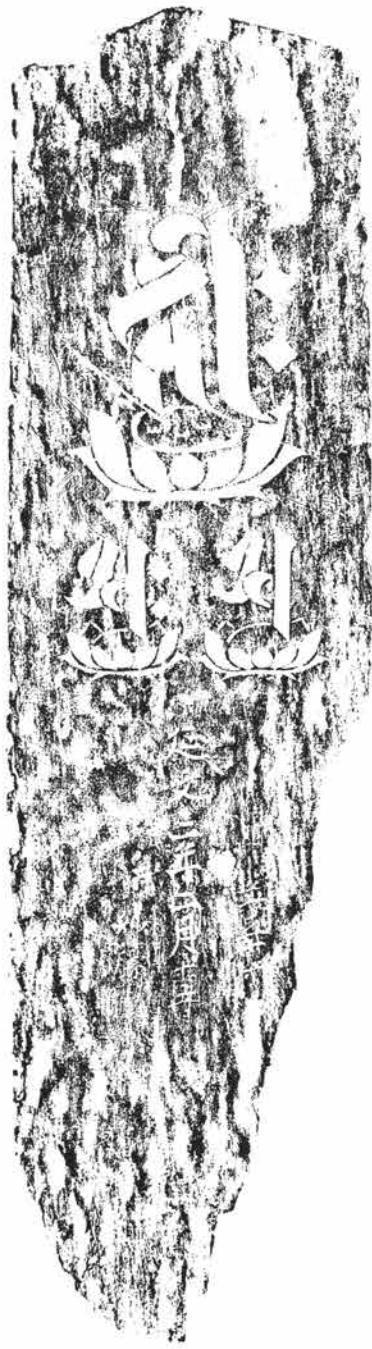
S E04

301

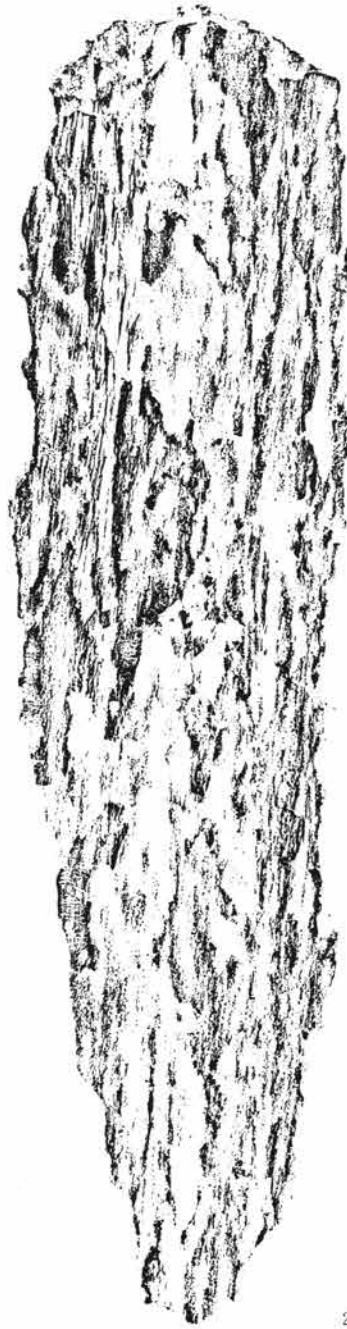
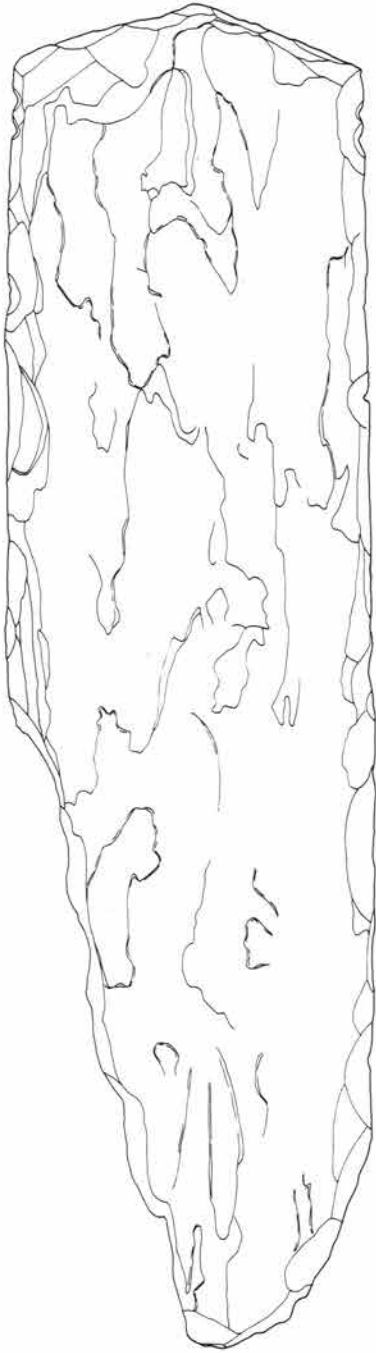
本遺構は、93H-9～10グリッドに位置し、SJ55と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、ほぼ円形を呈し、掘り方の形態は、確認面から底面まで同径の地山井筒円筒形である。規模は、確認面では径1.66×1.48m、底面では径1.24×1.20mで、深度は2.32mを測る。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられない。





No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 甕 覆土	—・5.0・—、小片 細砂粒・少量の細礫 普通、赤褐色	器肉は非常に薄く、底部は平底。胴部は開く。 底部へら削り、胴部斜め縦方向のへら削り。内 面はへら撫で。



2

No	種類	観察表掲載頁
2	板碑	876

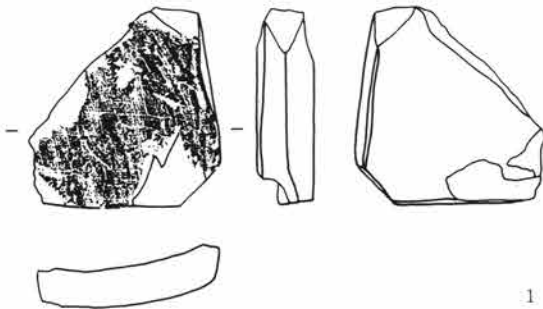
S E05

本遺構は、86～87G—45～46グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、断面形態は、中傾がややアグリでふくらむものが地山井筒円筒形である。規模は、平面で径1.45×1.38m、底面で径0.6×0.55mで、深度2.63mを測る。覆土は、確認面から2.30m位までは浅間“B”を多量に含む黒褐色土で、それ以下は井壁等の崩壊によるもので堆積状態は、自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられない。

調査は、1983年7月に実施され、自然湧水水位は、確認面より1.10mのV層中の褐灰色砂層下位からで、湧水量は、毎分20ℓである。

本遺構は、近辺に位置するS E08・12と比較し、深度が浅いことなどから夏期に掘削されたものと推測され



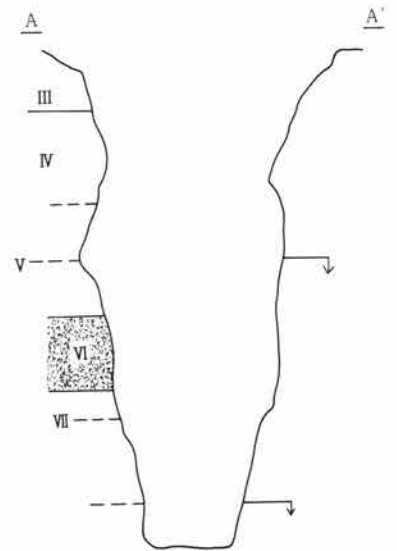
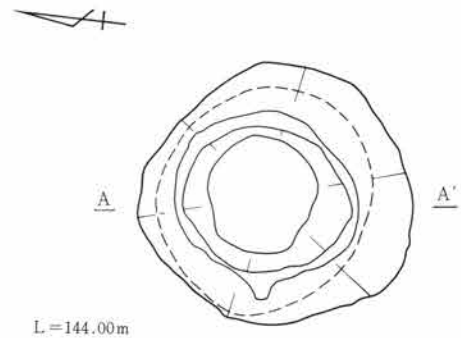
No	種類	観察表掲載頁
1	平瓦	778

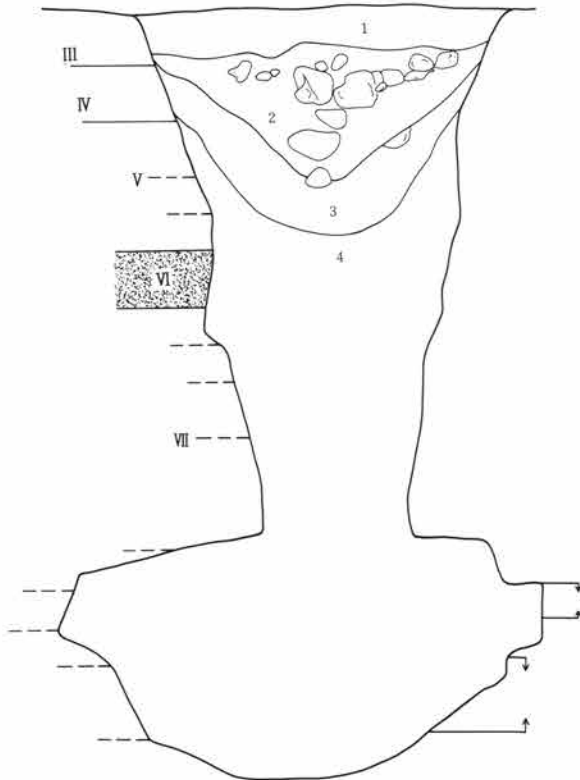
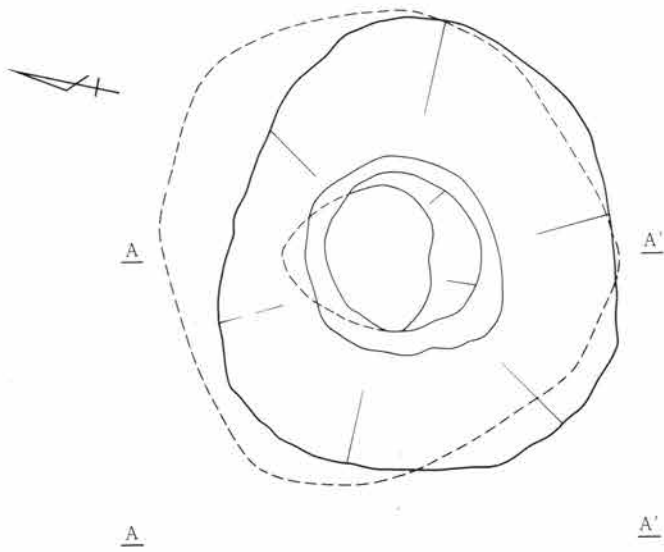
S E06

本遺構は、84G—43～44グリッドに位置し、S J 68と接している。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、確認面から2.80～3.80mまで湧水の影響を受けて、固結した砂層が大きく「タナ落」しているが、地山井筒朝顔形である。規模は、平面では径2.38×2.12m、深度は、4.06mを測る。覆土は、自然堆積と人為的堆積が交互にみられ、人為的な埋め戻しは2回おこなわれ、10～30cm大の円礫を投げ込んでいる。

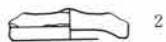
本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

調査は、1983年7月に実施され、自然湧水水位は、確認面より1.10mのV層中の灰褐色砂からで、毎分35ℓである。調査が夏期であったため湧水層が上位にみられたが、冬期は、3.0～3.2と3.4～3.8のVII層中の砂層が湧水層と推測される。



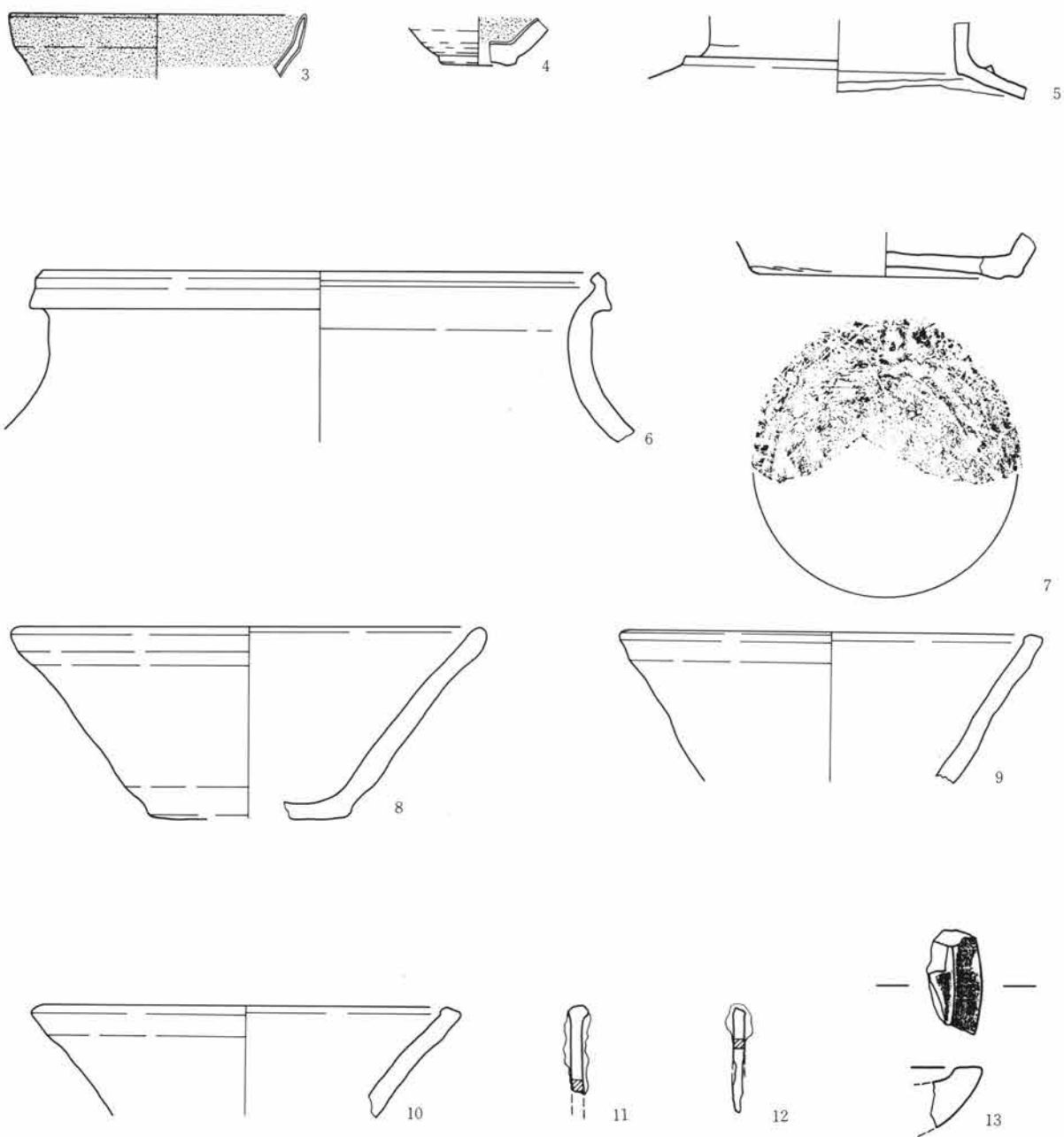


- 1 中世砂質土
- 2 中世砂質土 ロームブロック (人為)
- 3 石なしで他は2層と同じ (人為)
- 4 1層と同じ (人為か自然か不詳)



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	—・8.0—、小片 細砂粒、還元焰・軟質 灰白色	底部と体部の境は丸みをもつ。底部は回転糸切り未調整。
2	須恵器 高台付碗 覆土	—・高台径6.0— 細砂粒 還元焰 灰色	高台から底部の破片。底部の周辺部は打ち欠いて、円板状に仕上げている。

第3章 検出遺構・遺物



No.	種 類	観 察 表 掲 載 頁	No.	種 類	観 察 表 掲 載 頁
3	天 目 茶 碗	798	9	軟質陶器 鉢	811
4	天 目 茶 碗	798	10	軟質陶器 鉢	811
5	焼き締め陶器 甕	799	11	鉄 製 品 釘	894
6	焼き締め陶器 大甕	800	12	鉄 製 品 釘	896
7	焼き締め陶器 甕	799	13	石 白	846
8	軟質陶器 鉢	811			

S E07

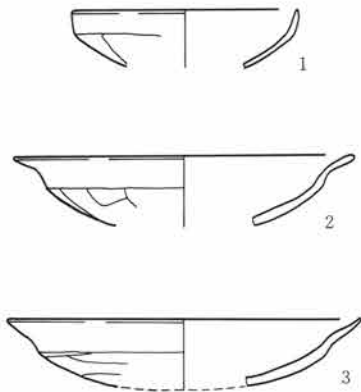
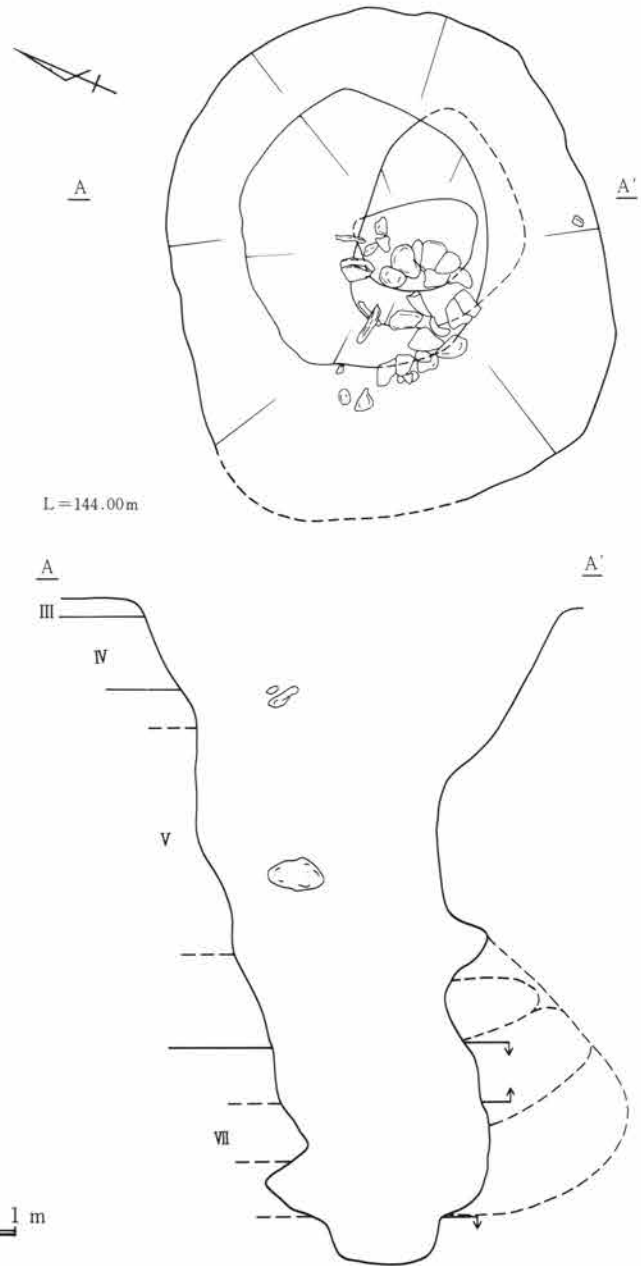
本遺構は、87～89G-38～40グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、隅丸長方形を呈し、掘り方の形態は、確認面から3.0m以下で湧水の影響による「アグリ」がみられるが、地山井筒朝顔形を呈す。規模は、平面で2.65×2.25m、底面で0.65×0.49mで、深度は3.50mを測る。覆土は、底面より0.2m位までは、暗灰色砂による自然堆積であるが、それ以上は、黒褐色土を主体とした人為的堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられない。

調査は、1983年7月に実施され、自然湧水水位は、確認面より1.30mのV層中の砂礫層中からで、湧水量は、毎分40ℓである。

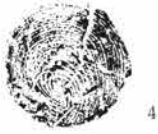
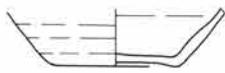
本遺構の調査は、夏期であったため上位より湧水がみられたが、冬期では、2.4～2.7m、3.5m以下の砂層が湧水層であったと推測される。

本遺構の上部0.7～1.0m位の間からは、人骨の出土がみられる。

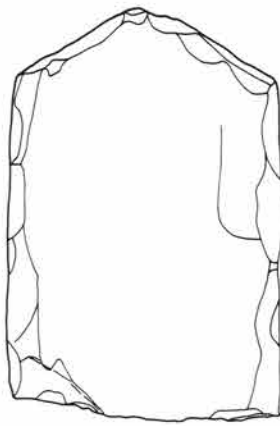
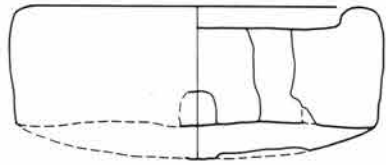
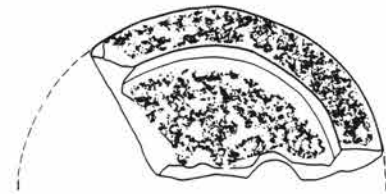
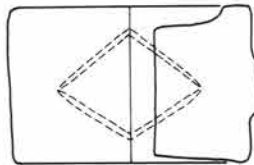
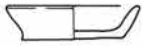
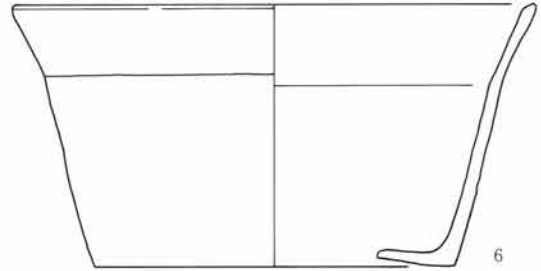
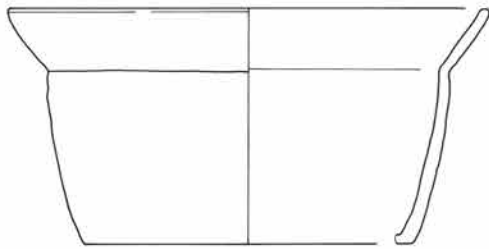


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	11.8・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、橙色	体部は緩やかな丸みをもち、口縁部は直立気味となる。体部は横方向へのヘラ削り。口縁部横撫で。
2	土師器 皿 覆土	17.6・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、橙色	底部から体部は緩やかな丸みをもち、口縁部との境に弱い稜をもち口縁部は大きく外反する。
3	土師器 皿 覆土	16.4・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、橙色	底部から体部は緩やかな丸みをもって開き、口縁部との境に弱い稜をもつ。底部から体部はヘラ削り。口縁部は横撫で。

第3章 検出遺構・遺物



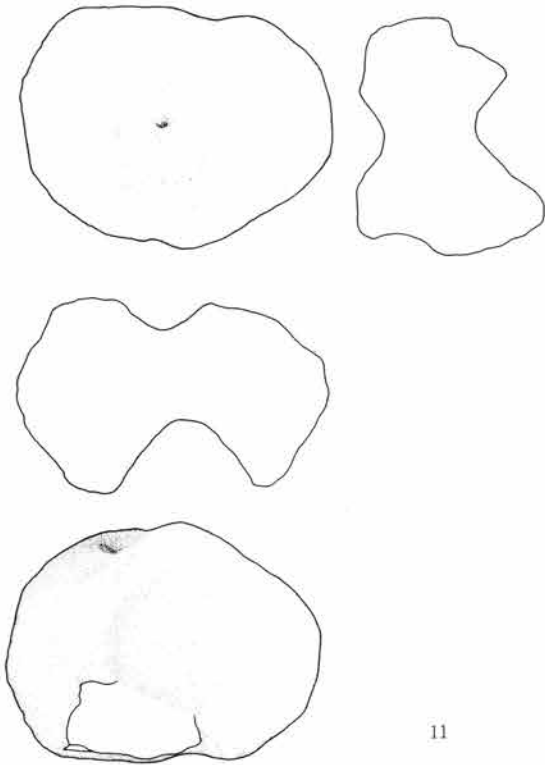
No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
4	須恵器 坏 覆土	—・7.0—、小片 細砂粒・少量の中礫、 還元焰、灰色	体部は直線的に開く。ロクロ整形。底部は回転糸切り未調整。



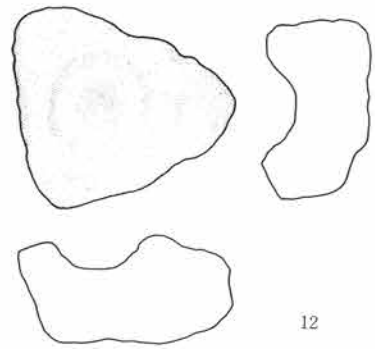
10



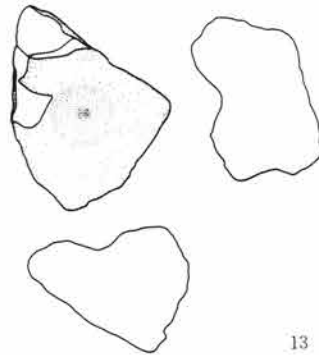
10



11



12



13

No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
5	軟質陶器 内耳	814	10	板 碑	877
6	軟質陶器 内耳	814	11	用途不明石製品	888
7	土師質土器 皿	823	12	用途不明石製品	888
8	石 白	846	13	用途不明石製品	888
9	石 白	845			

S E 08

304

本遺構は、87～88G-46～47グリッドに位置し、S D 20と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、底部付近で小規模のアグリがみられるが比較的安定した地山井筒朝顔形である。規模は、平面で径2.72×2.34 m、深度は、3.53mを測る。覆土は、確認面から0.5m位までは浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積、0.5～3.0m位の間は、黒褐色土と黄褐色土による人為的堆積、3.0m以下は黒灰色砂質土による自然堆積である。

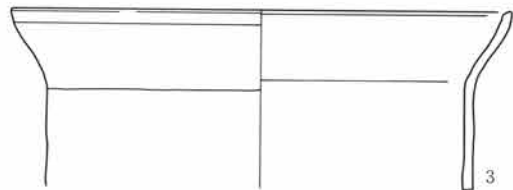
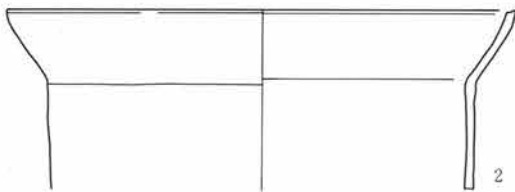
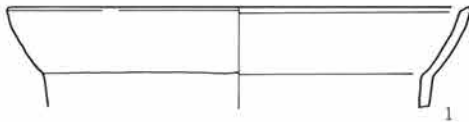
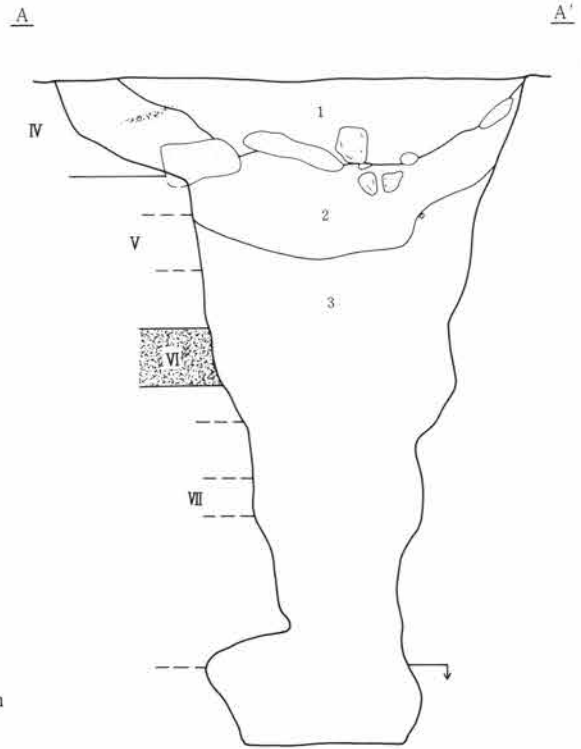
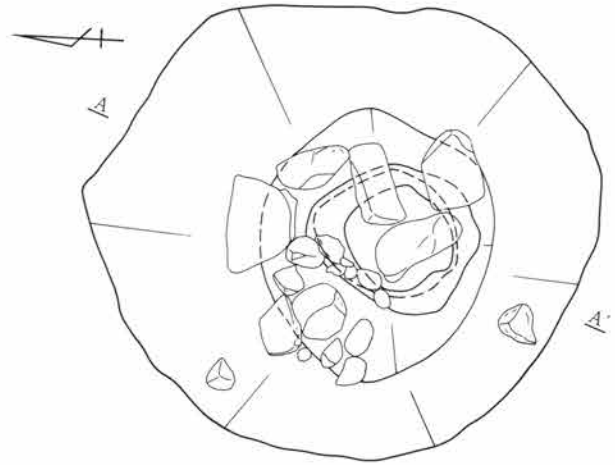
本遺構では、井戸枠等の施設はみられない。

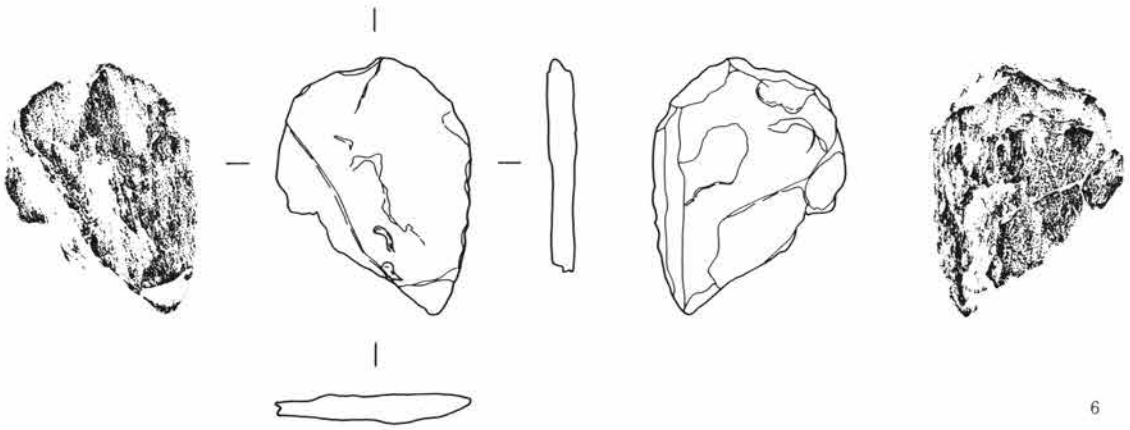
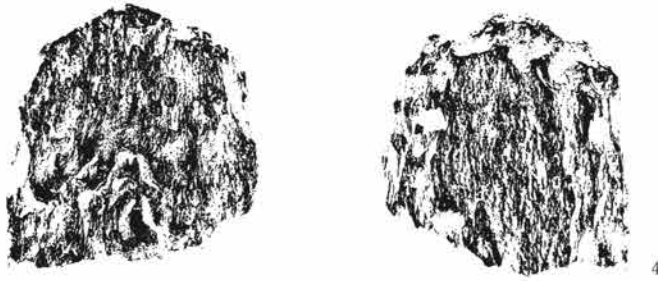
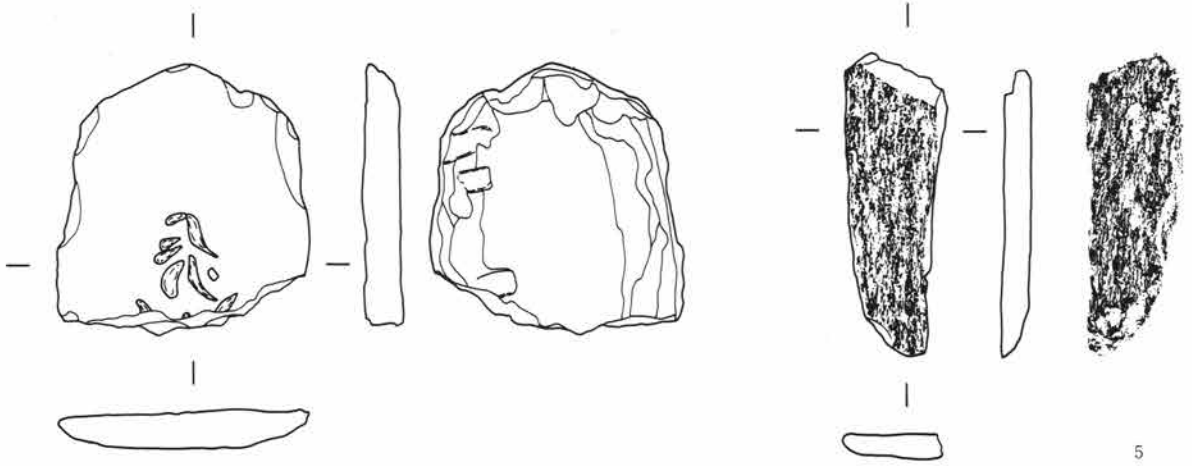
調査は、1983年7月に実施され、自然湧水水位は、確認面より1.10mのV層中の灰色土（水成ローム）層中からで、湧水量は、毎分20ℓであった。

本遺構の調査は、夏期であったため湧水層が上位にみられたが、冬期には、3.10m以下のVII層中の灰色砂であると推測される。

- 1 砂質の黒褐色土（自然）
 - 2 砂質の黒褐色土 多量の地山ロームブロック粒（人為埋没）
 - 3 地山の黄褐色土（人為埋没）
- L = 144.00m

0 1 m





No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
1	軟質陶器 内耳	814	4	板 碑	877
2	軟質陶器 内耳	814	5	板 碑	877
3	軟質陶器 内耳	814	6	板 碑	877

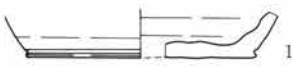
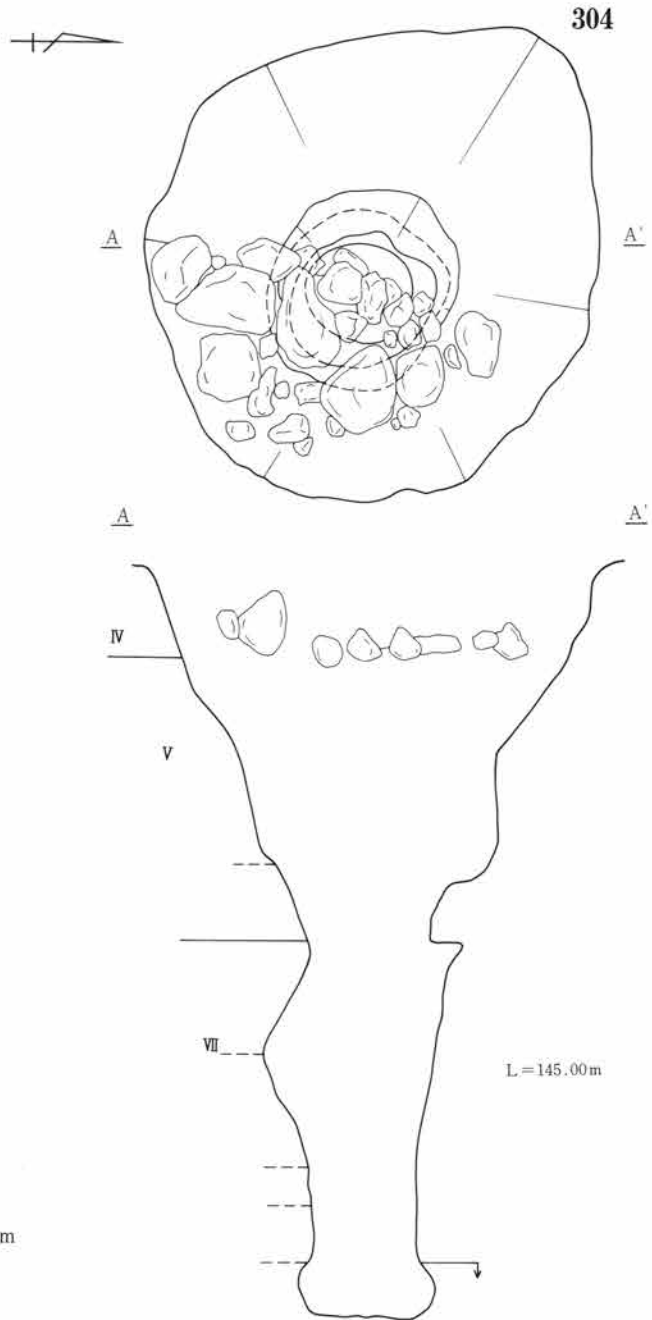
S E09

本遺構は、121~122H-33~34グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、中位にアグリがみられるが、上部半分が開く地山井筒朝顔形である。規模は、平面で径2.75×2.36m、底面で径0.56×0.52m、深度は3.96mを測る。覆土は、確認面から0.5m位までは浅間「B」を含む黒褐色土の自然堆積、0.5~0.8m位までは10~30cm大の円礫が多量に投げられている。0.8~3.5m位までは黒褐色土、ロームブロックの混入で人為的堆積、3.5m~底面にかけては井壁の崩壊による砂質土である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられない。

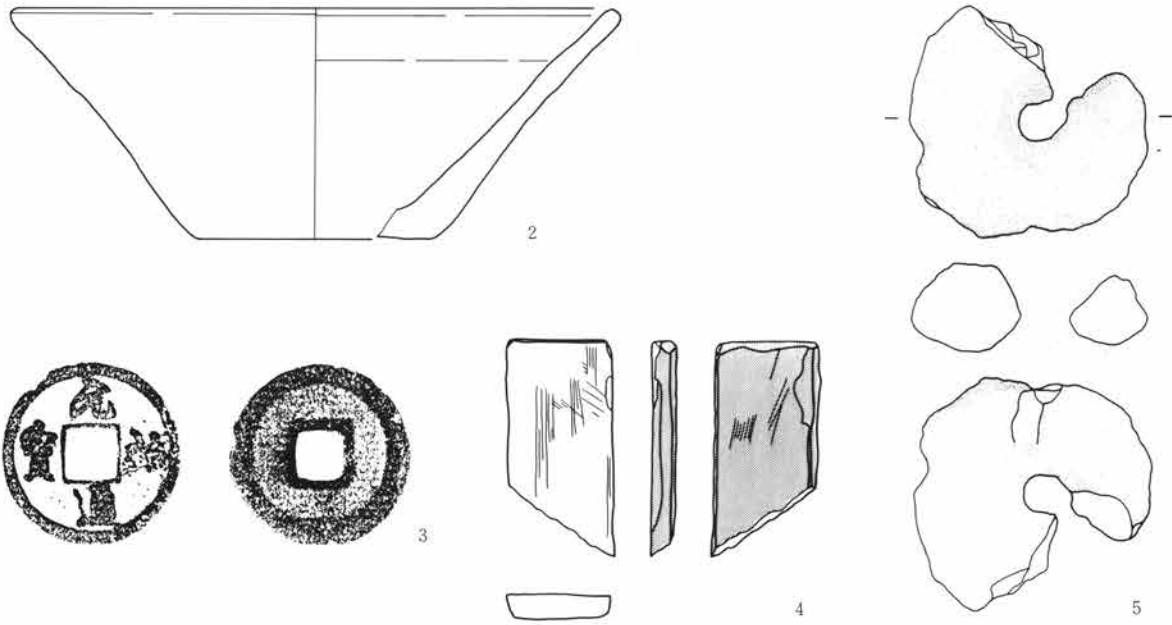
調査は、1983年6月に実施され、自然湧水水位は、V層中のシルト質層から湧水量は、毎分10ℓである。

本遺構の調査は、初夏であったため湧水層が上位にみられたが、冬期は底部付近のVII層中の灰褐色砂であると推測される。



No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	灰釉陶器 器瓶 覆土	—・11.0—、小片 微量の黒色鉍物粒 緻密、良好、灰白色	底部から体部下位の小片。底部はヘラ撫で。体部下位は回転ヘラ削り。体部と底部との境に沈線が1条巡る。

No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
2	軟質陶器 鉢	811	4	砥石	834
3	元祐通寶	910	5	用途不明石製品	888



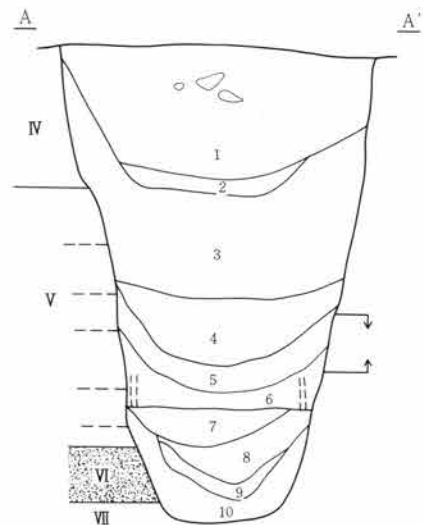
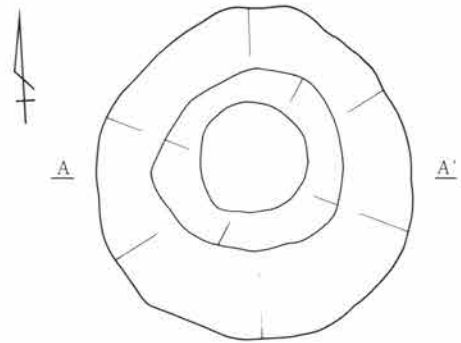
S E 10

305

本遺構は、105～106H-37～38グリッドに位置し、S J 86と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、ほぼ円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形である。規模は、平面で径1.65～1.70m、整地面で径0.9m、底面で0.55～0.6m、深度は、2.53mを測る。覆土は、1層は自然堆積土、2層～6層にかけては人為的堆積、7層～10層にかけても人為的堆積であるが、7層の上面には一度埋戻して整地した痕跡がみられる。

本遺構では、土層断面で7層上面の整地面上に径3尺(94cm)の井筒痕が確認された。

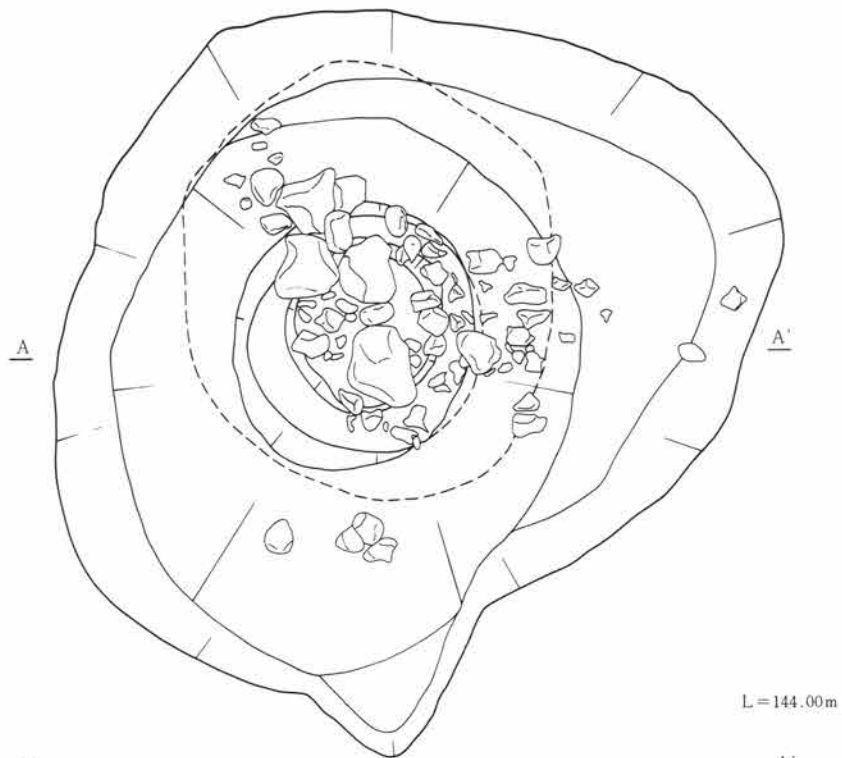
調査は、1983年7月に実施されたが、自然湧水水位は、確認面より1m位のV層中の褐色砂礫層からで、湧水量は、毎分8ℓであった。



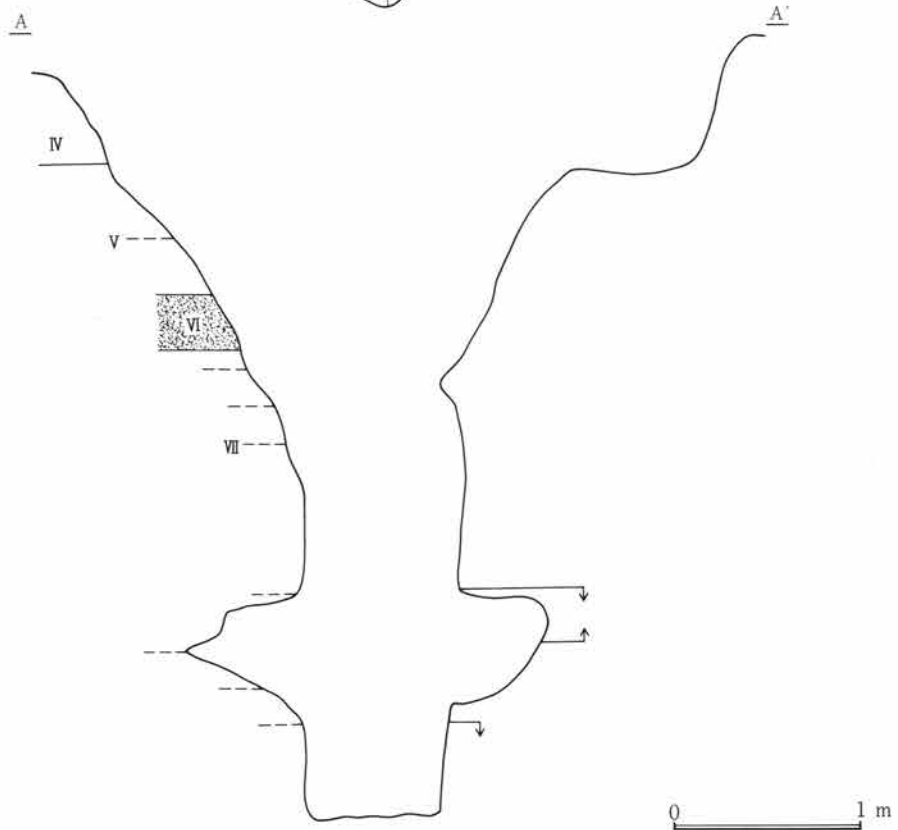
- 1 黒褐色土 軽石 褐色粒子 粘性有り
- 2 黒褐色土 多量の黄褐色砂ブロック
- 3 黒褐色土 黒色砂
- 4 暗褐色土 ロームブロック 黒褐色砂
- 5 暗褐色土 ロームブロック 黒褐色砂
- 6 暗褐色土 ロームブロック 黒褐色砂
- 7 地山 黄灰色砂質土
- 8 地山 黄灰色砂質土と黒褐色土の混土
- 9 7層に類似 黒褐色ブロック
- 10 黒褐色粘性土

0 1 m

S E 12

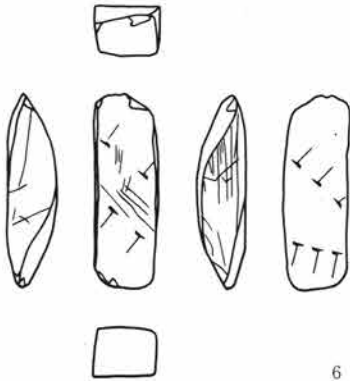
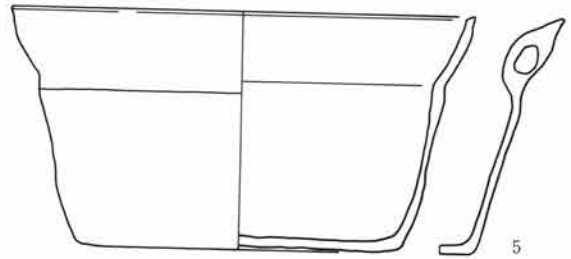
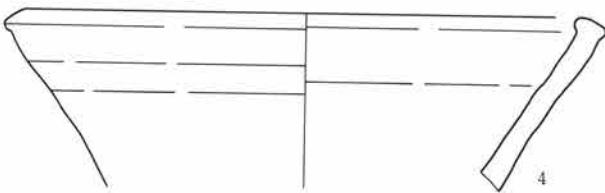
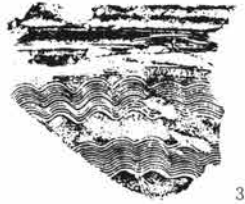
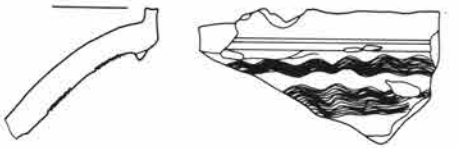
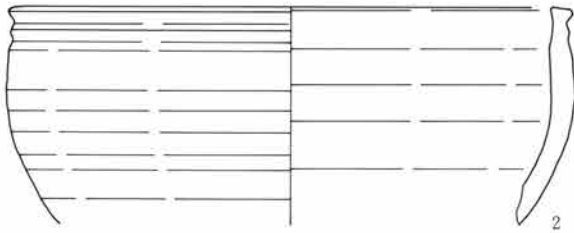


L = 144.00m



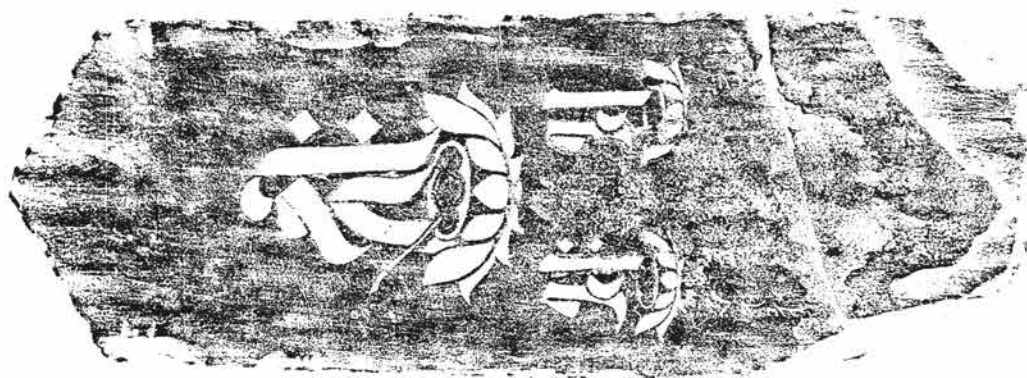
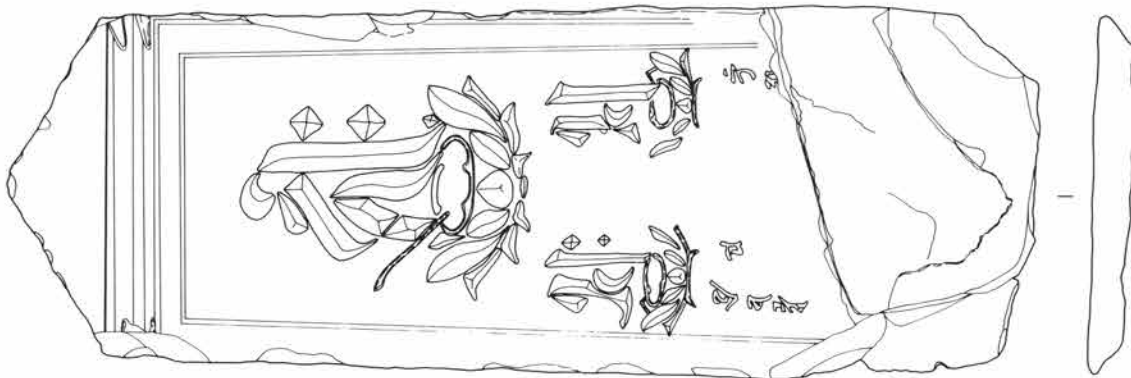
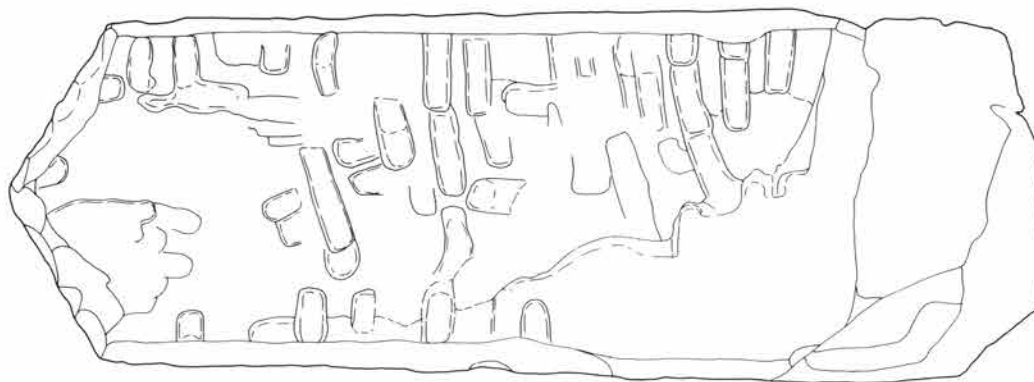
本遺構は、86～88G-44～45グリッドに位置し、SD20と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、下位の砂層にアグリがみられるが上半が開く地山井筒朝

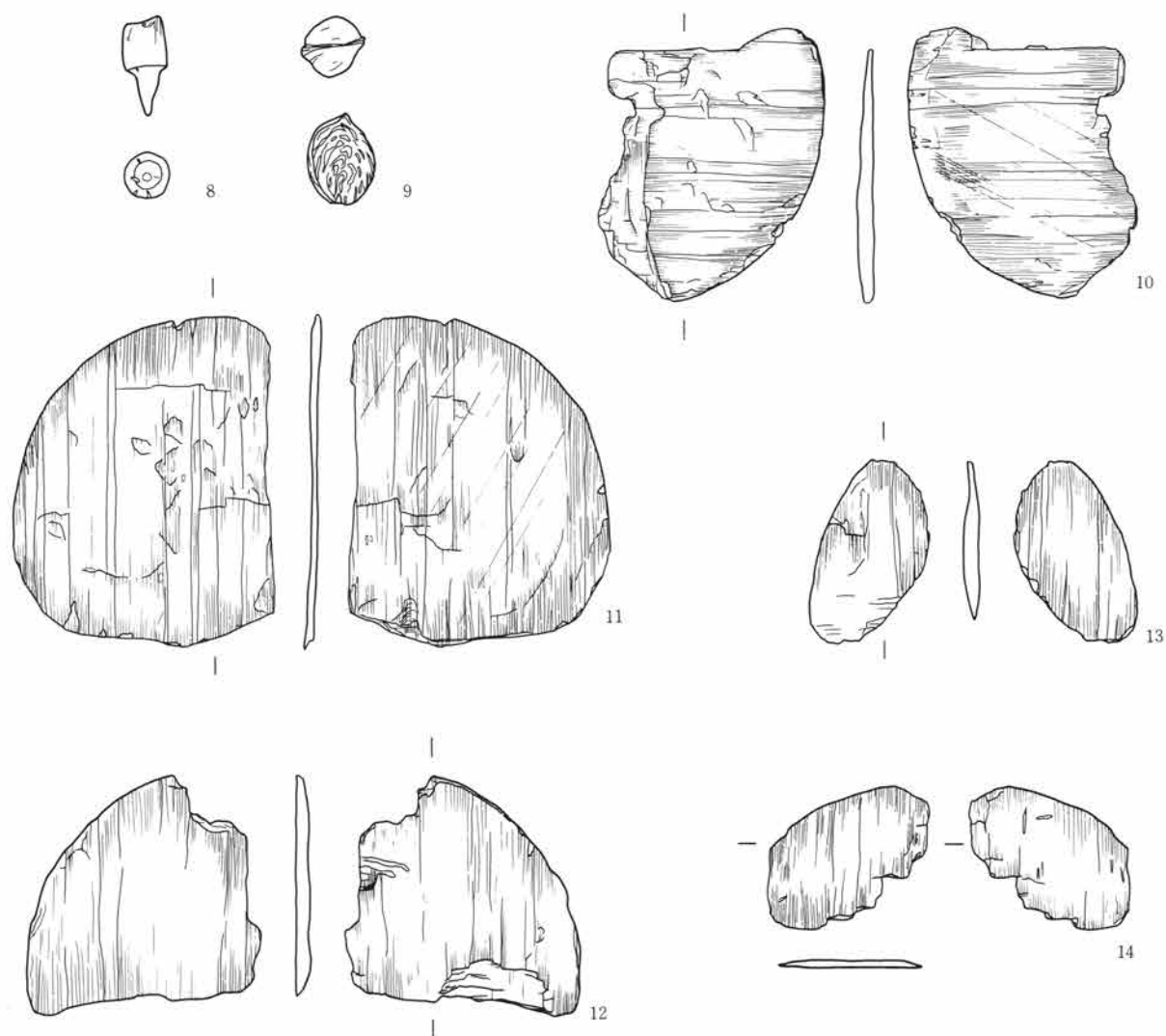
顔形である。規模は、平面で径4.20×3.35m、底面で径0.86×0.72m、深度は、4.05mを測る。覆土は、確認面から3.3m位までは黒色土を主体とした人為的堆積。3.3~3.8m位までは暗灰色砂質土による自然堆積、3.8~底面にかけては灰色砂による自然堆積である。また、確認面から1m位までの間には、10~50cm大の角礫、円礫が多量に投げ込まれていた。



No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	—・7.0・— 小片 細砂粒 還元焰 軟質、にぶい黄橙 色	体部は直線的に開く。底部は回転撫で。
2	須恵器 鉢 覆土	29.6・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰黄色	体部は丸みをもって開き、体部上位に最大幅をもつ。口縁部が僅かに窄まり、2条の沈線が巡る。口唇部は水平な平坦面をもつ。
3	須恵器 壺 覆土	—・—・— 小片 細砂粒・粗砂粒・ 細礫・中礫 還元焰 灰色	口縁部は大きく外反し、最上位に1条の凸帯をもつ。口唇部は内側に断面方形の凸帯が巡る。外面には2段の波状文が施される。

No.	種類	観察表掲載頁
4	軟質陶器 鉢	812
5	軟質陶器 内耳	814
6	砥石	834
7	板碑	876

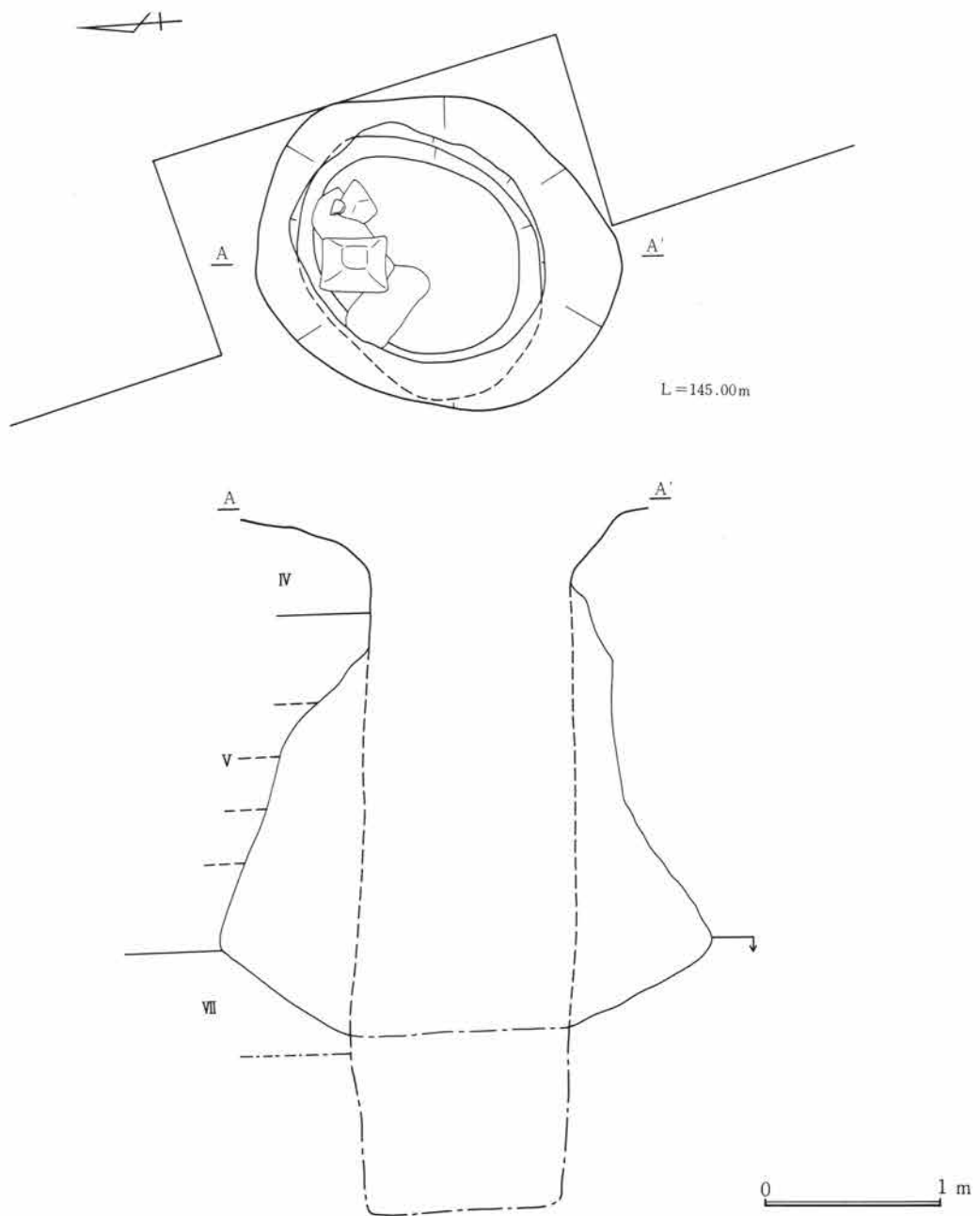


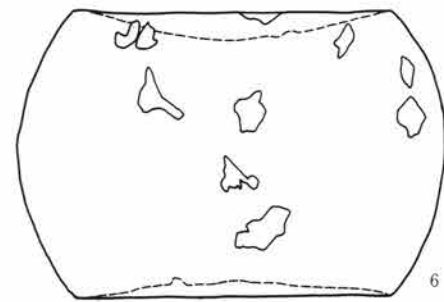
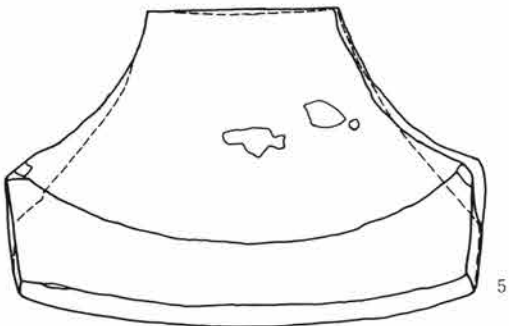
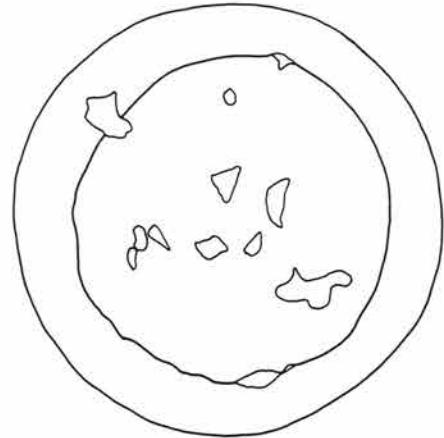
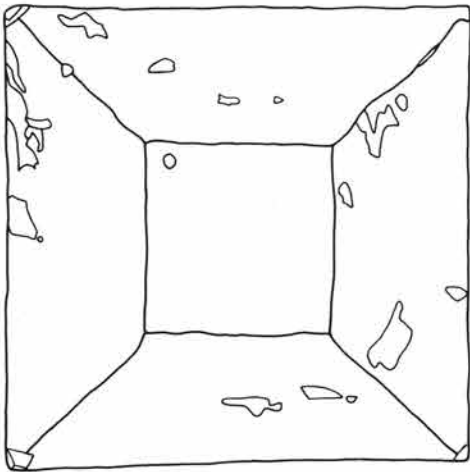
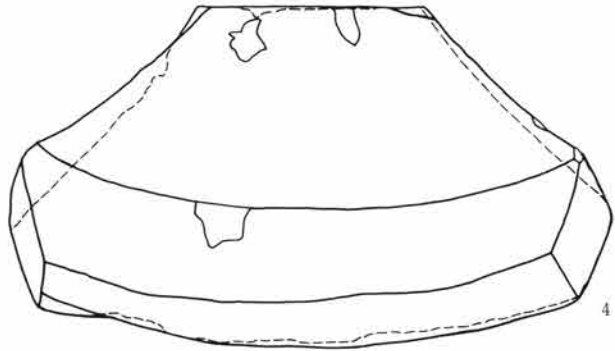
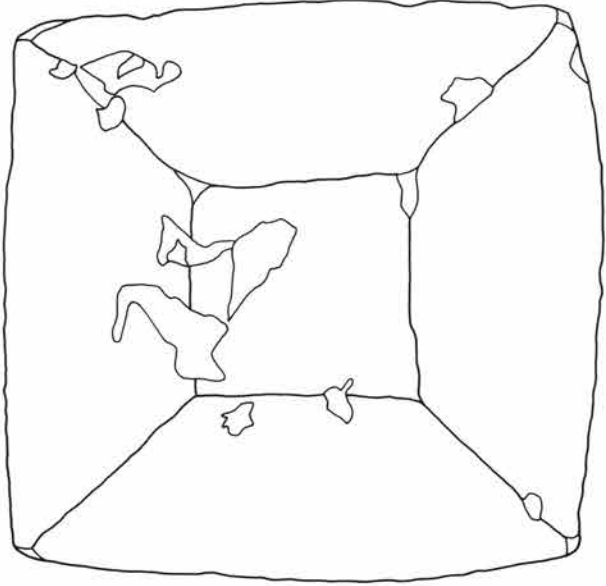
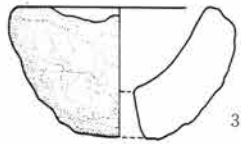
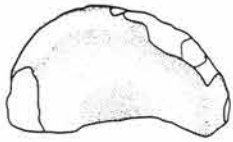
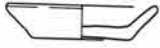
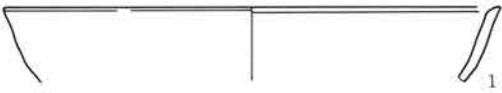


No	種類・器種・出土位置	計測値	樹種	特徴
8	木製品 用途不明品 覆土	残存長 5.4cm 厚さ 2.4cm	エゴノキ属	用途不明品、第5章第5節を参照。
9	自然遺物 種子 覆土	長さ 2.6cm、幅 1.9cm 厚さ 1.1cm	モモ	
10	木製品 曲物 覆土	径 約20cm、厚さ 0.9cm 残存率 底部の1/4	ヒノキ属類似種	曲物の底板片、木目に対して斜めの鋸目がみられる。
11	木製品 曲物 覆土	径 約23cm、厚さ 0.5cm 残存率 底部の2/3	ヒノキ属類似種	曲物の底板片、木目に対して斜めの鋸目がみられる。
12	木製品 曲物 覆土	径 約19cm、厚さ 0.8cm 残存率 底部の1/4	ヒノキ属類似種	曲物の底板片
13	木製品 曲物 覆土	径 一、厚さ 0.8cm 残存率 小片	ヒノキ属類似種	曲物の底板片
14	木製品 曲物 覆土	径 一、厚さ 0.5cm 残存率 小片	ヒノキ属類似種	曲物の底板片

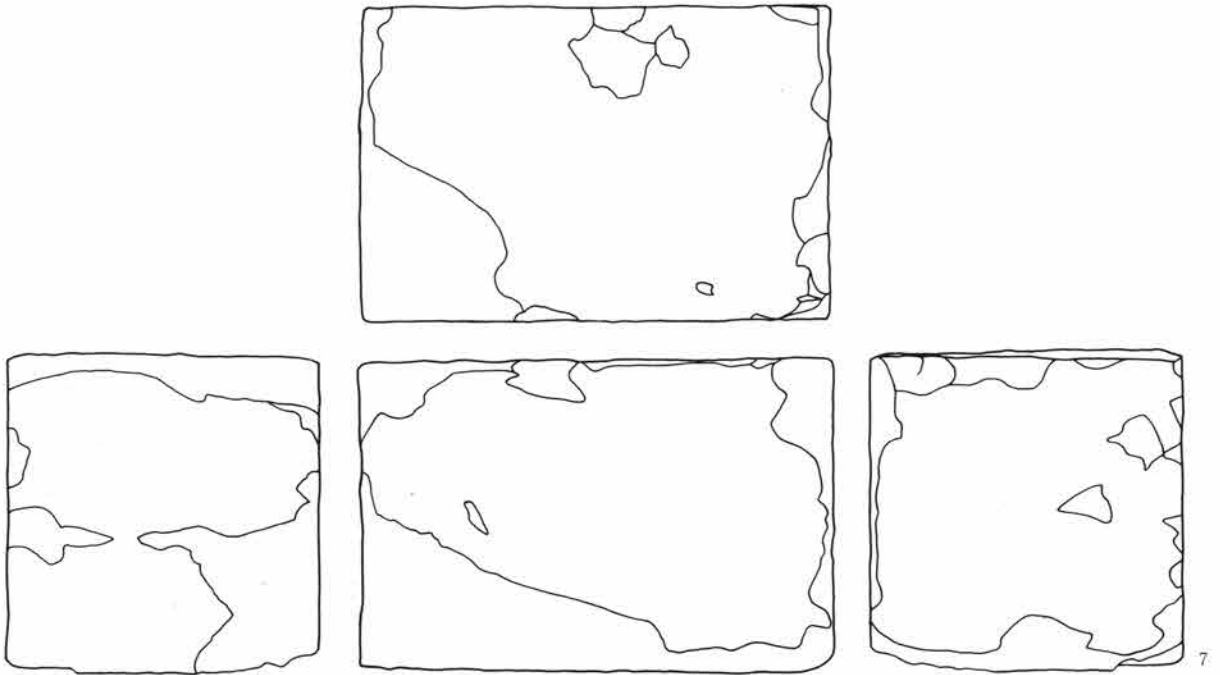
S E14

本遺構は、80～81G-31～32グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、中傾が大きく崩壊しているが地山井筒円筒形である。規模は、平面で径4.03×1.72m、深度は、下位の基本土層が砂・砂質土のため崩壊の危険性があったため確認面より2.80mの地点で調査を中止したため明確な点は不明であるが、3.90～4.00m位と推測される。覆土は、調査ができた深さまで黒褐色土にロームブロックの混入した人為的堆積に一度に埋め戻されたと推測される。また、埋め戻しの際には、板碑、五輪塔、10～30cm大の同礫が多量に投げ入れられている。

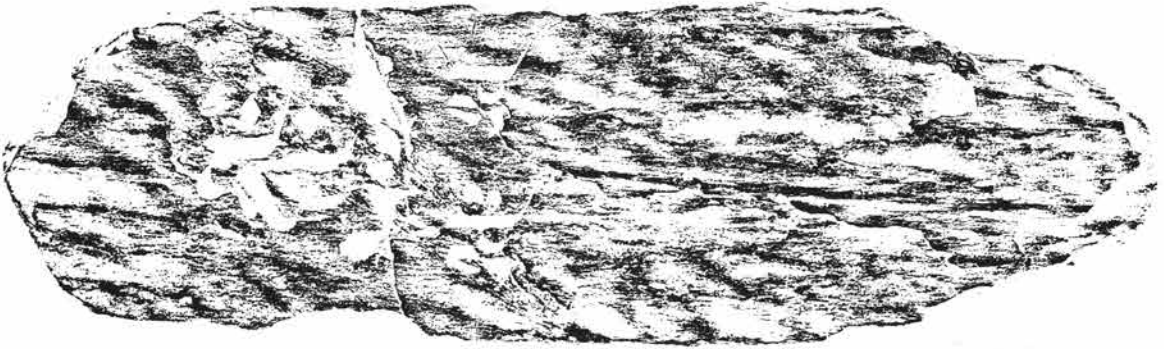
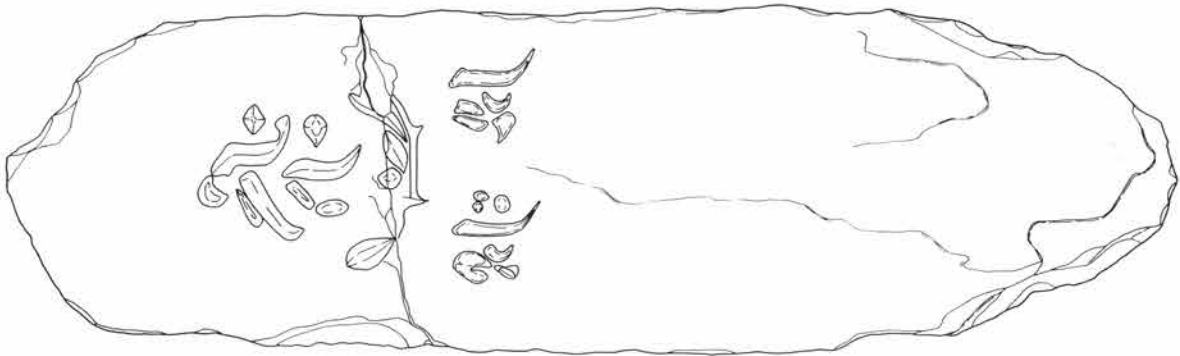
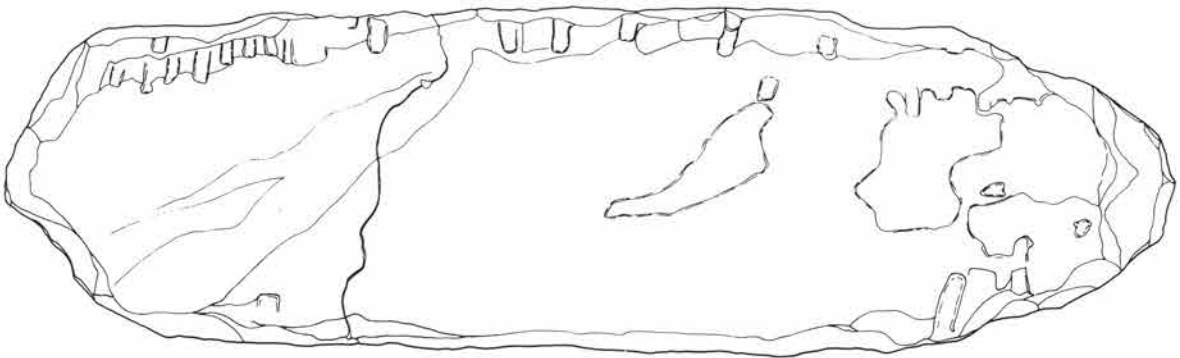
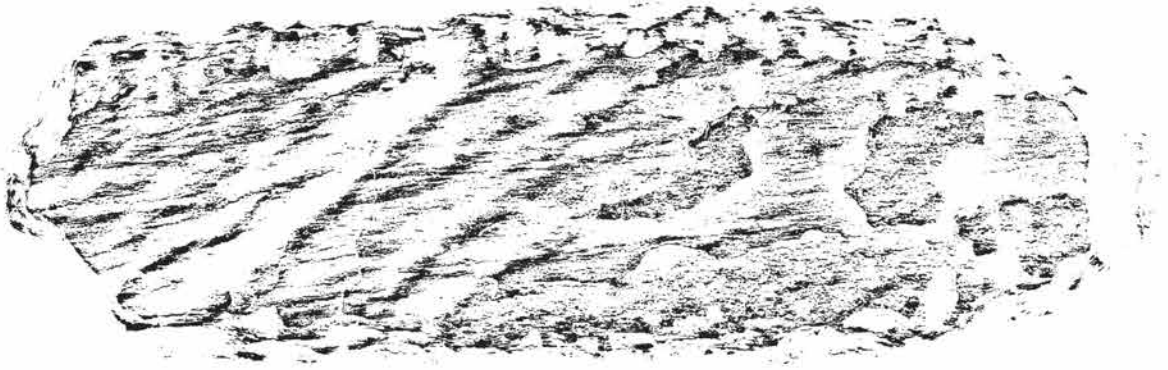


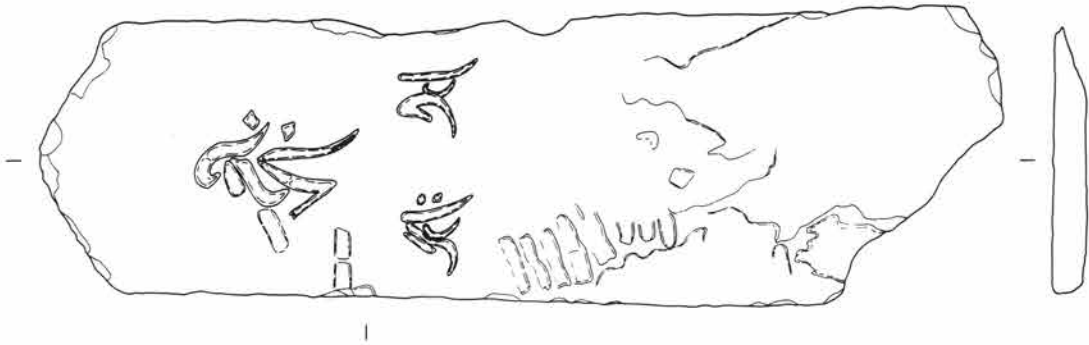
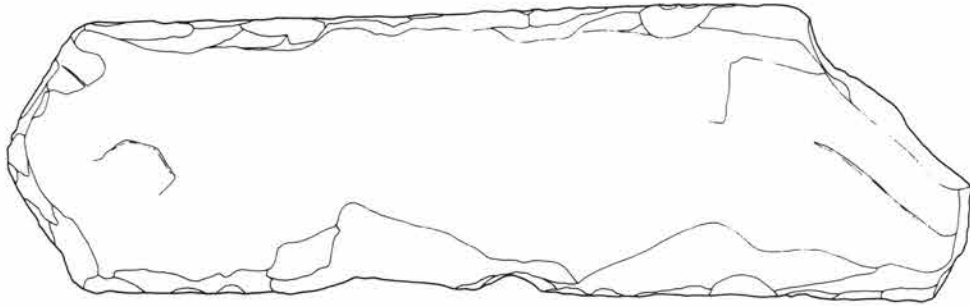
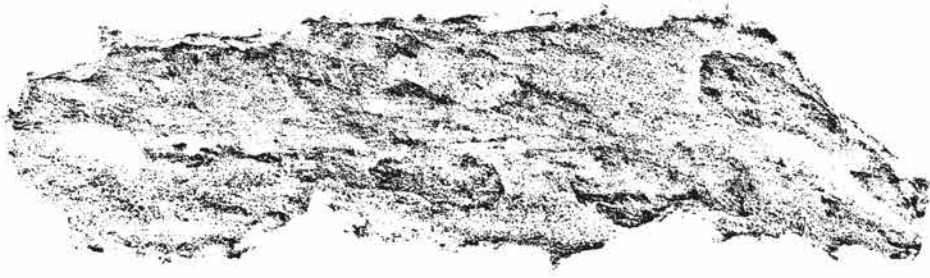


第3章 検出遺構・遺物

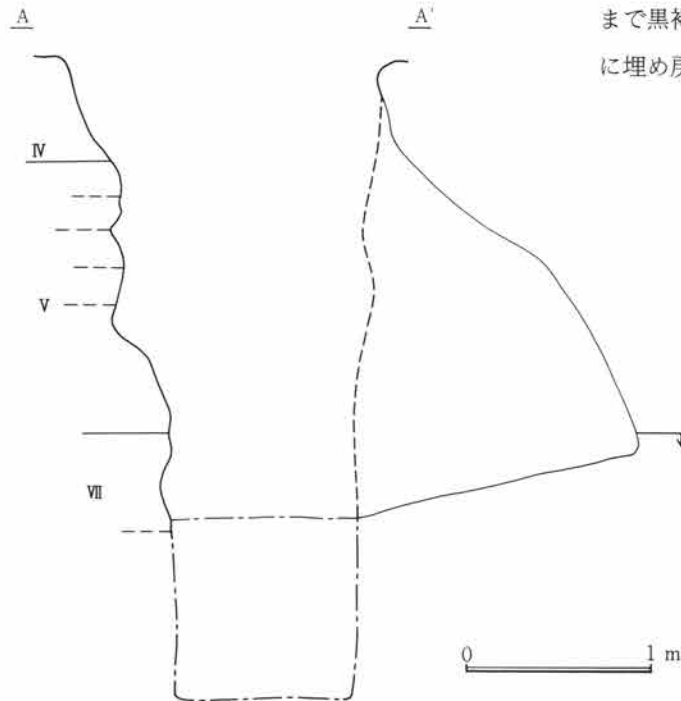
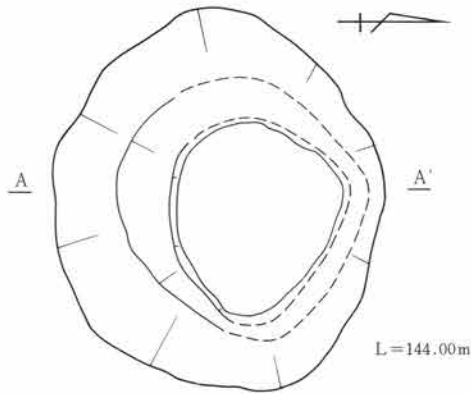


No	種 類	観 察 表 掲 載 頁
1	軟質陶器 内耳	814
2	土師質土器 皿	824
3	石 鉢	838
4	五輪塔 火 輪	883
5	五輪塔 火 輪	883
6	五輪塔 水 輪	883
7	五輪塔 地 輪	883
8	板 碑	877
9	板 碑	877





S E15



本遺構は、81～82G-28～29グリッドに位置し、SD24、S J 59・84と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形である。規模は、平面で径2.06×1.77m、深度は、確認面より2.50mの深さまで調査したところ井壁の崩壊のためそれ以下の調査は出来なかったが、3.5m前後と推測される。覆土は、調査地点まで黒褐色土を主体とした人為的堆積で、一度に埋め戻されたものと推測される。

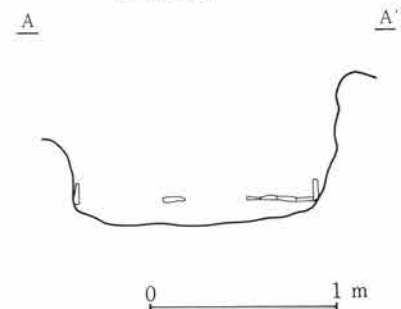
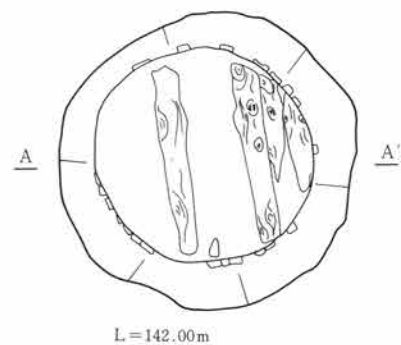
S E16

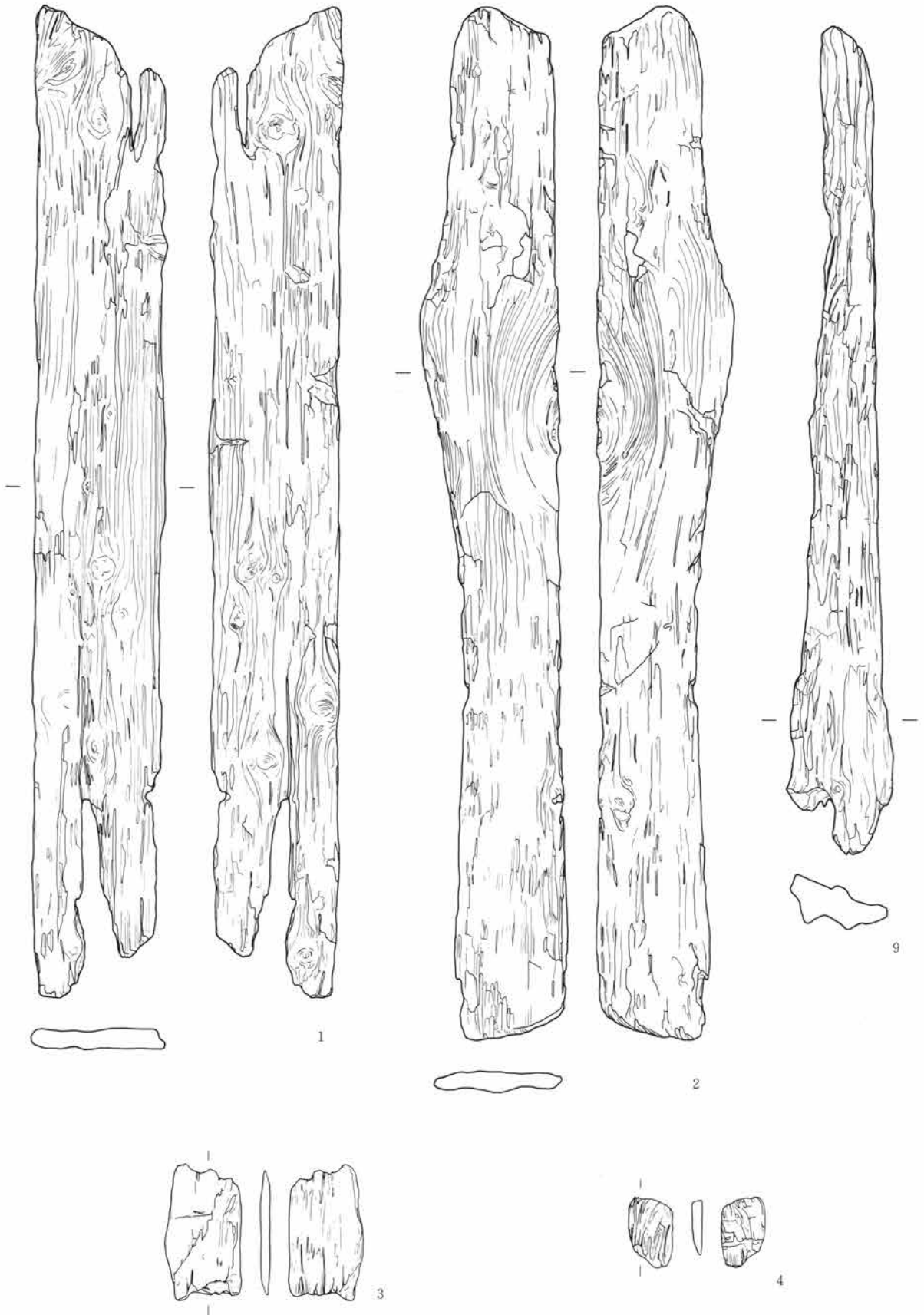
311

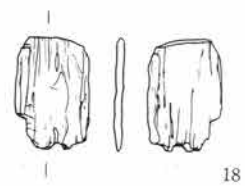
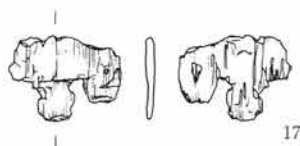
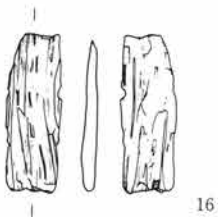
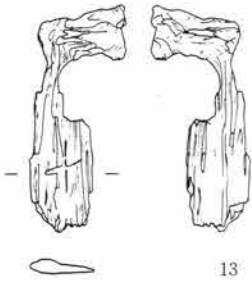
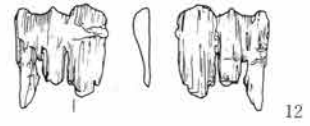
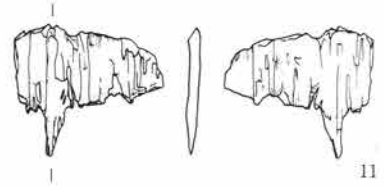
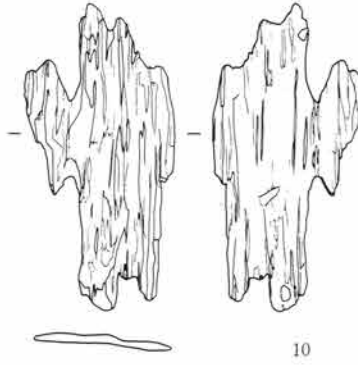
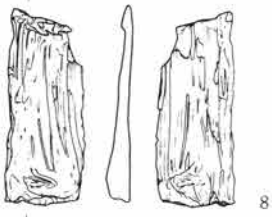
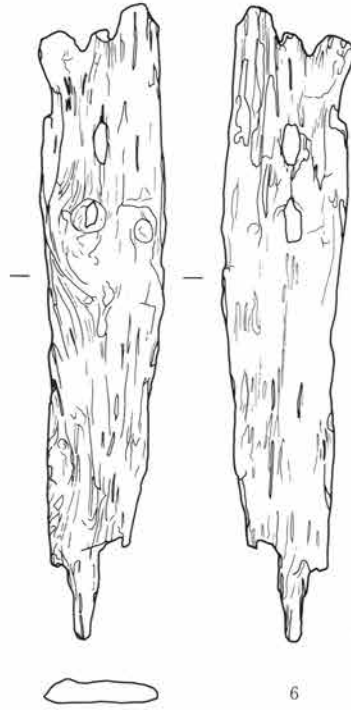
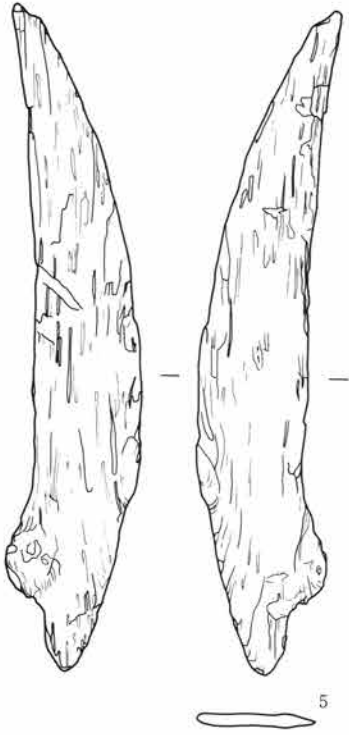
本遺構は、81～82F-39～40グリッド、No.7 C・B調査地区南端の低地帯に位置し、標高は、141.500mである。平面形態は、円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形である。規模は、径1.52～1.62m、深度は、0.8mを測る。覆土は、ロームブロックが混じった黒褐色土による人為的堆積である。

本遺構の底部には、桶が設置されており、桶材の一部が残存している。桶は、杉板で作られており、径1.3m前後で高さは不明である。

調査は、1983年7月に実施されたが、調査時の湧水水位は、確認面より高い地点からであった。







第5節 中世以降

No	種類・器種	出土位置	計測値 (cm) 長さ・幅・厚さ	残存率 ※1	樹種 ※2	適要
1	木製品 井戸桶材	底部	102.3・13.2・2.0		スギ	桶底部材
2	木製品 井戸桶材	底部	106.5・14.3・2.1		スギ	桶底部材
3	木製品 井戸桶材	底部	—・11.0・1.5		スギ	桶側面材
4	木製品 井戸桶材	底部	—・7.1・1.8		スギ	桶側面材
5	木製品 井戸桶材	底部	53.0・8.9・1.1		スギ	桶底部材
6	木製品 井戸桶材	底部	—・6.3・1.2		スギ	桶底部材
7	木製品 井戸桶材	底部	—・8.7・2.3		スギ	桶底部材
8	木製品 井戸桶材	底部	—・9.3・3.0		スギ	桶側面材
9	自然遺物 木片	覆土	85.7・11.1・5.7	—	ヤマグワ	
10	木製品 井戸桶材	底部	—・17.6・1.2		スギ	桶側面材
11	木製品 井戸桶材	底部	—・17.6・1.2		スギ	桶側面材
12	木製品 井戸桶材	底部	—・11.0・2.0		スギ	桶側面材
13	木製品 井戸桶材	底部	—・9.9・1.7		スギ	桶側面材
14	木製品 井戸桶材	底部	—・9.6・3.2		スギ	桶側面材
15	木製品 井戸桶材	底部	—・6.8・1.8		ヒノキ属類似種	桶側面材
16	木製品 井戸桶材	底部	—・6.5・1.8		スギ	桶側面材
17	木製品 井戸桶材	底部	—・13.4・1.2		スギ	桶側面材
18	木製品 井戸桶材	底部	—・10.2・0.9		ヒノキ属類似種	桶側面材

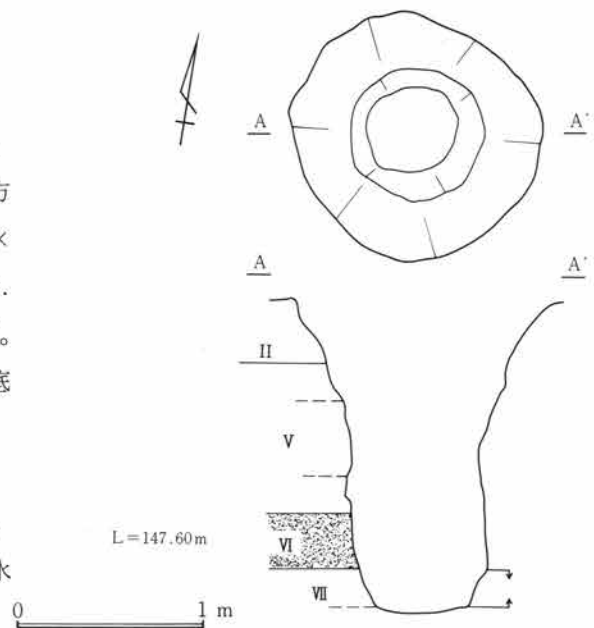
SE17

314

本遺構は、134～135 J-14～15グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形である。規模は、径1.30×1.22m、深度は、1.65mを測る。覆土は、確認面から0.5mまでは、浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積。0.5m以下は、ロームブロックが混じる人為的堆積。底部付近は、黒褐色砂による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

調査は、1983年9月に実施され、自然湧水水位は、確認面より0.4m位のV層中の灰褐色砂層からで、湧水量は、毎分20ℓであった。



S E18

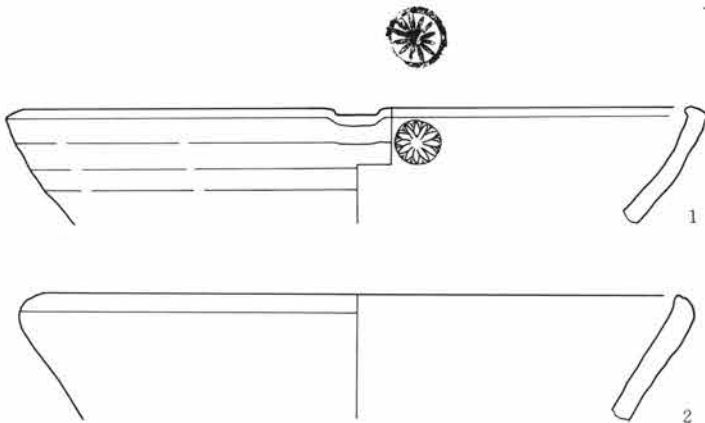
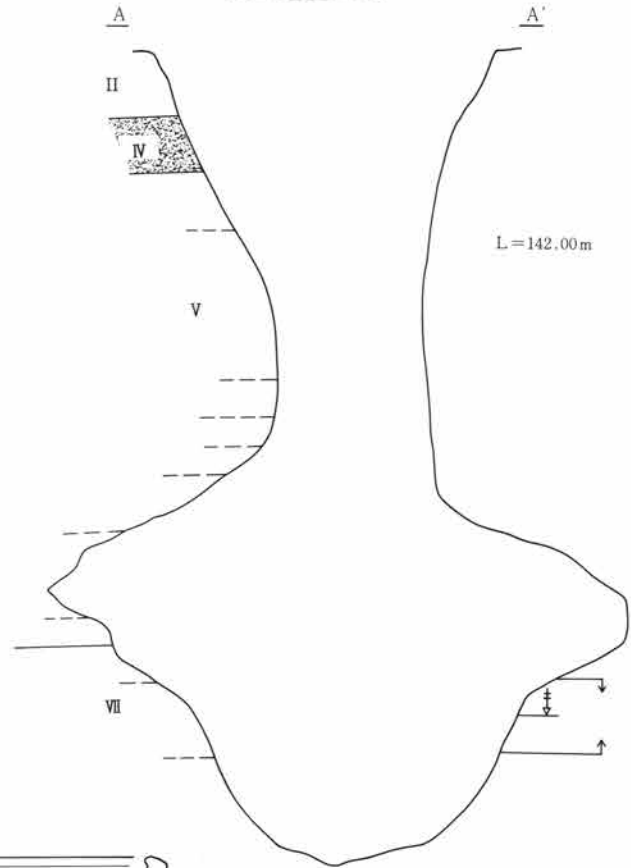
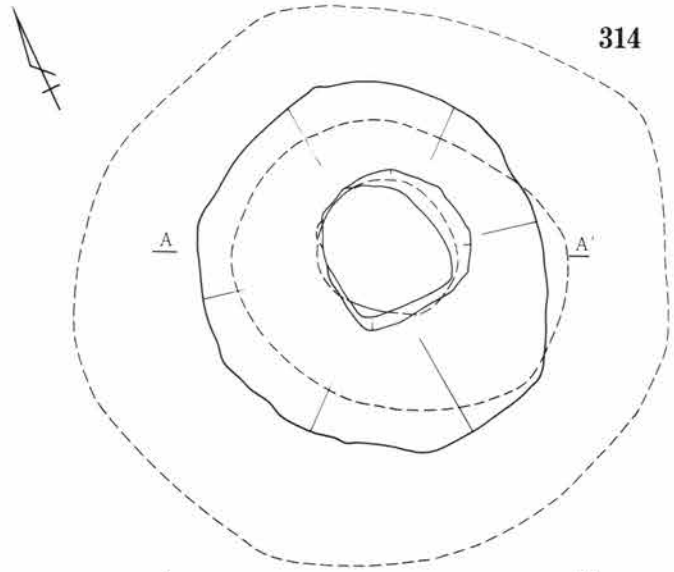
本遺構は、76E-38グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、下半で大規模なアグリがみられるが、地山井筒円筒形である。規模は、径1.97×1.82m、深度は4.32mを測る。覆土は、確認面より2.8m位までは、黒褐色土・砂・シルト質土・灰・炭・10~30cm大の円礫を含む人為的堆積。2.8~4.0m位までは、黒褐色土、4.0~底部までは砂による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

調査は、1983年9月に実施され、自然湧水水位は、確認面より3.8m位のVII層中の灰色砂層からで、湧水量は、毎分1.5ℓであった。

本遺構は、埋め戻しと掘り直しが数回おこなわれた痕跡がみられる。

314



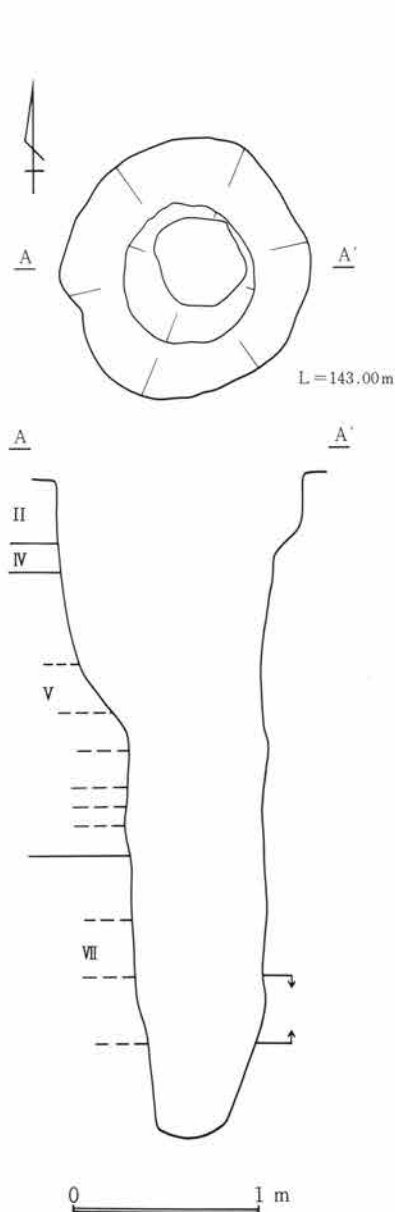
0 1 m

No.	種類	観察表掲載頁
1	軟質陶器 火鉢	811
2	軟質陶器 鉢	811

SE19

本遺構は、90G-30~31グリッドに位置し、SD 58と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、ほぼ円形を呈し、掘り方の形態は、残存状態の良い地山井筒円筒形である。規模は、径1.30m前後、深度は3.49mを測る。覆土は、確認面から1.6m位までが浅間“B”を含む黒褐色土、1.6~3.3m位までは砂・ロームブロック・褐色土の混りあった人為的堆積。3.3m~底面までは褐色砂による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

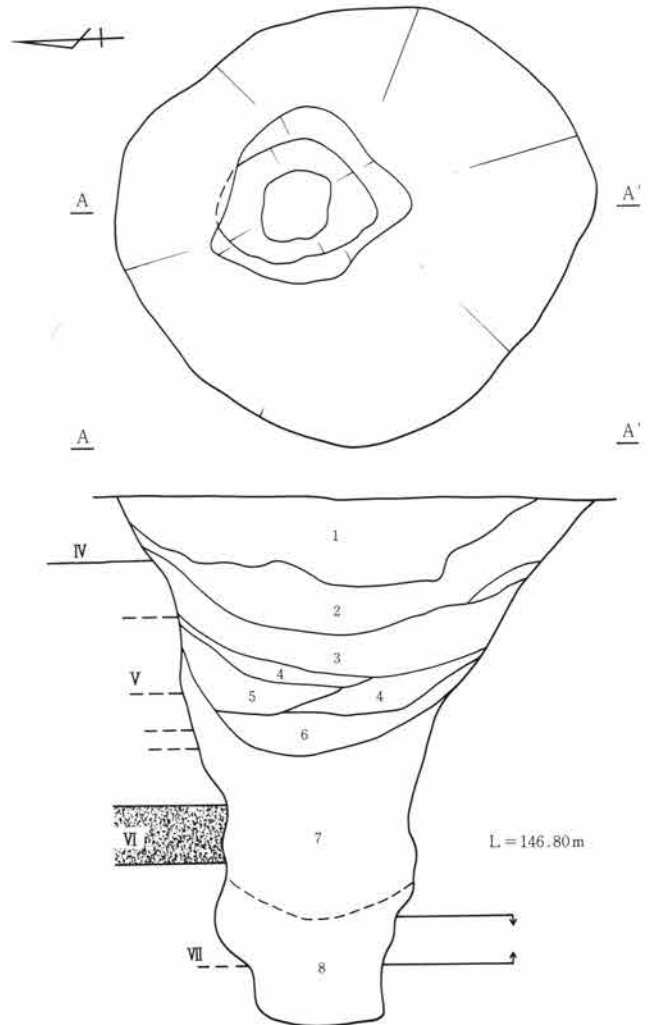


SE21

315

本遺構は、122~123 I-32~33グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、下位で小さなアグリがみられるが、比較的残存状態の良い地山井筒朝顔形である。規模は、径2.57×2.28m、深度は2.26mを測る。覆土は、確認面から2.2m位までは、黒褐色土を主体とした人為的堆積。2.2m~底面までは黒色砂質土による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。



- 1 黒褐色砂質土 少量の地山ブロック
- 2 黒褐色砂質土 多量の黄色地山ブロック
- 3 黒褐色土 地山ブロックが主(人為)
- 4 ブロックなし 1層に類似
- 5 黒褐色土 地山ブロックが主
- 6 黒褐色土 地山ブロックが主
- 7 黒褐色土 ロームブロック
- 8 黒色砂質土

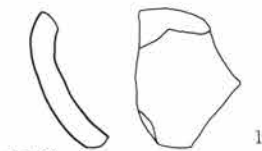
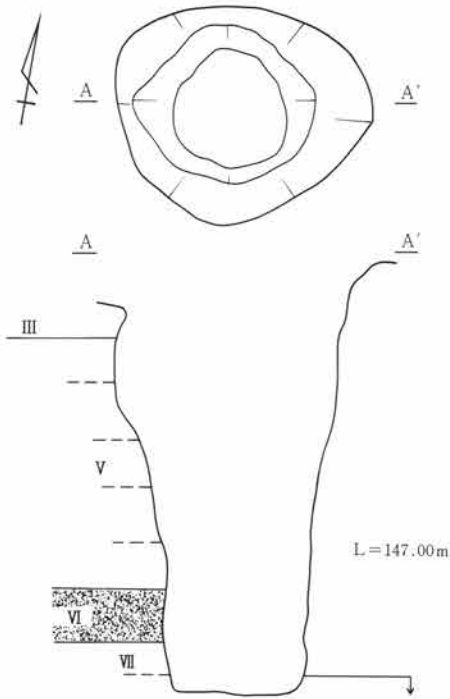
S E 22

315

本遺構は、133 I-29~30グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、井壁の崩壊がみられない。残存状態の良好な地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.39×1.14m、底面は径0.60~0.62m、深度は2.22mを測る。覆土は、確認面から1.1m位までは黒褐色土による自然堆積。1.1~2.1m位までは円礫を含む黒褐色土を主体とした人為的堆積。2.1mから底面までは黒褐色砂質土による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

調査は、1983年11月に実施され、自然湧水水位は2.1m位のVII層中の褐色砂からで、湧水量は、毎分1.5lであった。

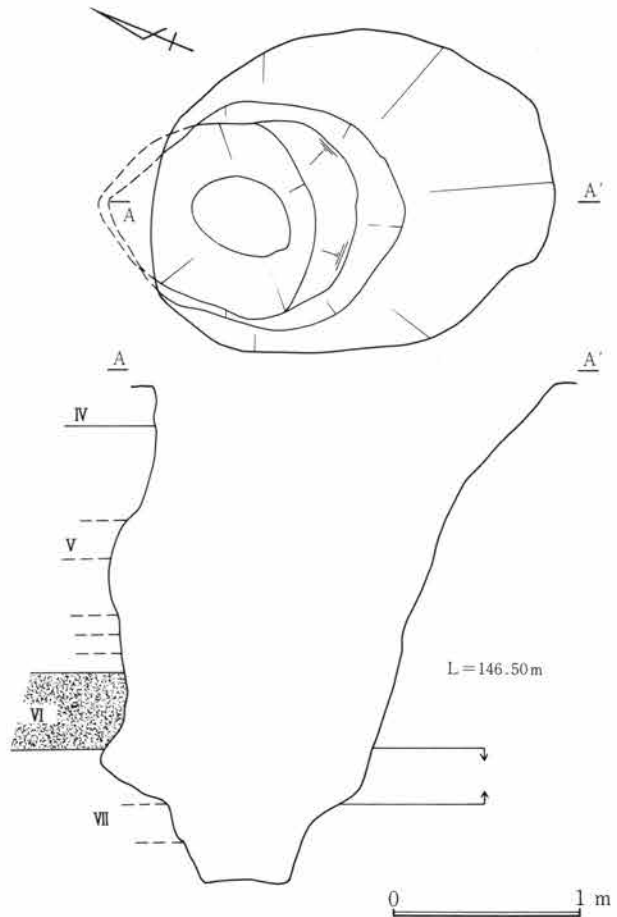


S E 23

S E 23

316

本遺構は、118~119 I-28~29グリッドに位置する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、北壁側に小さなアグリがみられるが、割合いと残存状態の良好な地山井筒朝顔形である。規模は、確認面で径2.12×1.67m、底面で径0.54×0.34m、深度は、2.60mを測る。覆土は、確認面から1.2m位までは浅間“B”を含む自然堆積、1.2~2.2m位まではロームブロック・円礫を含む黒褐色土による人為的堆積、2.2m~底面にかけては灰黒色砂による自然堆積である。



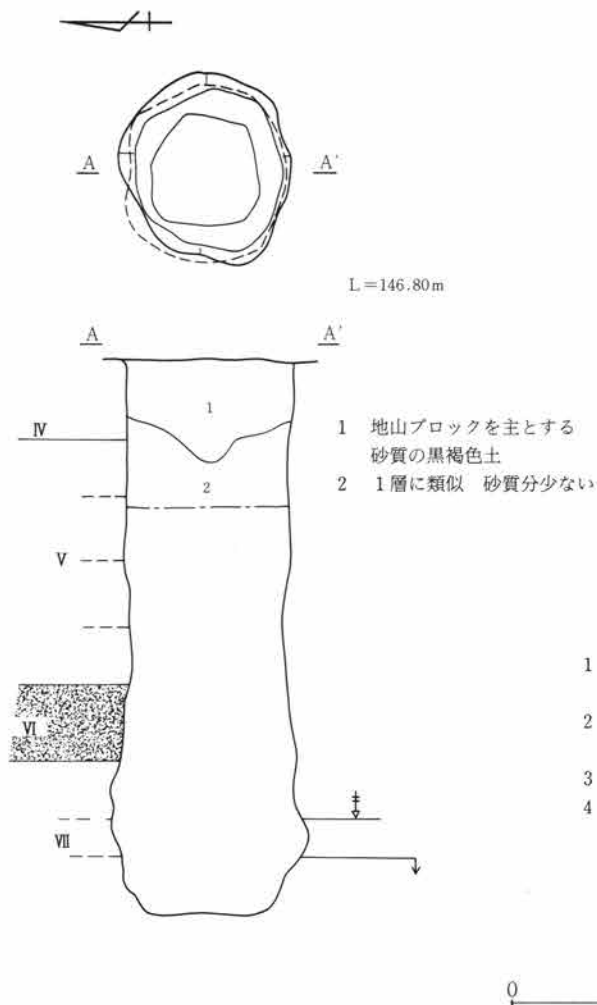
No.	種類	観察表掲載頁	2	焼き締め陶器 甕	799
1	焼き締め陶器 甕	799	3	焼き締め陶器 鉢	800

S E24

316

本遺構は、120～121 I-34グリッドに位置し、S D99・100と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、下位で極小規模なアグリがみられるが、残存状態は良好な地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.02×0.88m、底面で0.65×0.60m、深度は2.91mを測る。覆土は、確認面から1.5m位までは浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積、1.5～2.4m位まではロームブロックが混った黒褐色土による人為的堆積。2.4mから底面までは黒色砂による自然堆積である。

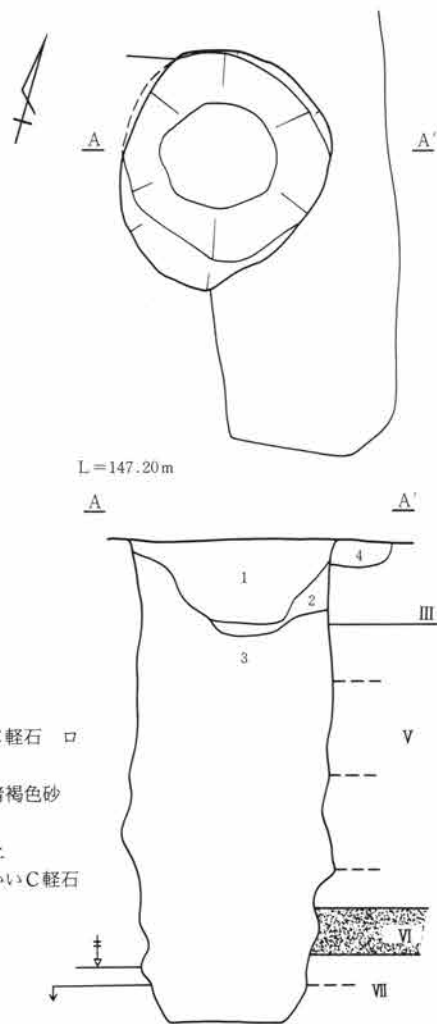
本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

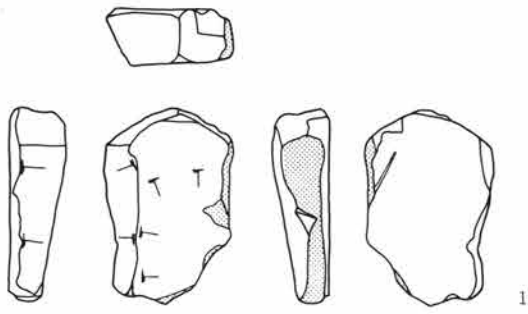


S E25

318

本遺構は、134～135 I-36グリッドに位置し、S K162と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、中位で小規模なアグリがみられるが比較的残存状態の良好な地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.25×1.04m、底面で0.62×0.56m、深度は2.53mを測る。覆土は、確認面から0.6m位までは浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積。0.6～2.2m位まではロームブロック混りの黒褐色土による人為的堆積。2.2m～底面までは井壁の崩壊した黒褐色砂礫土による自然堆積である。





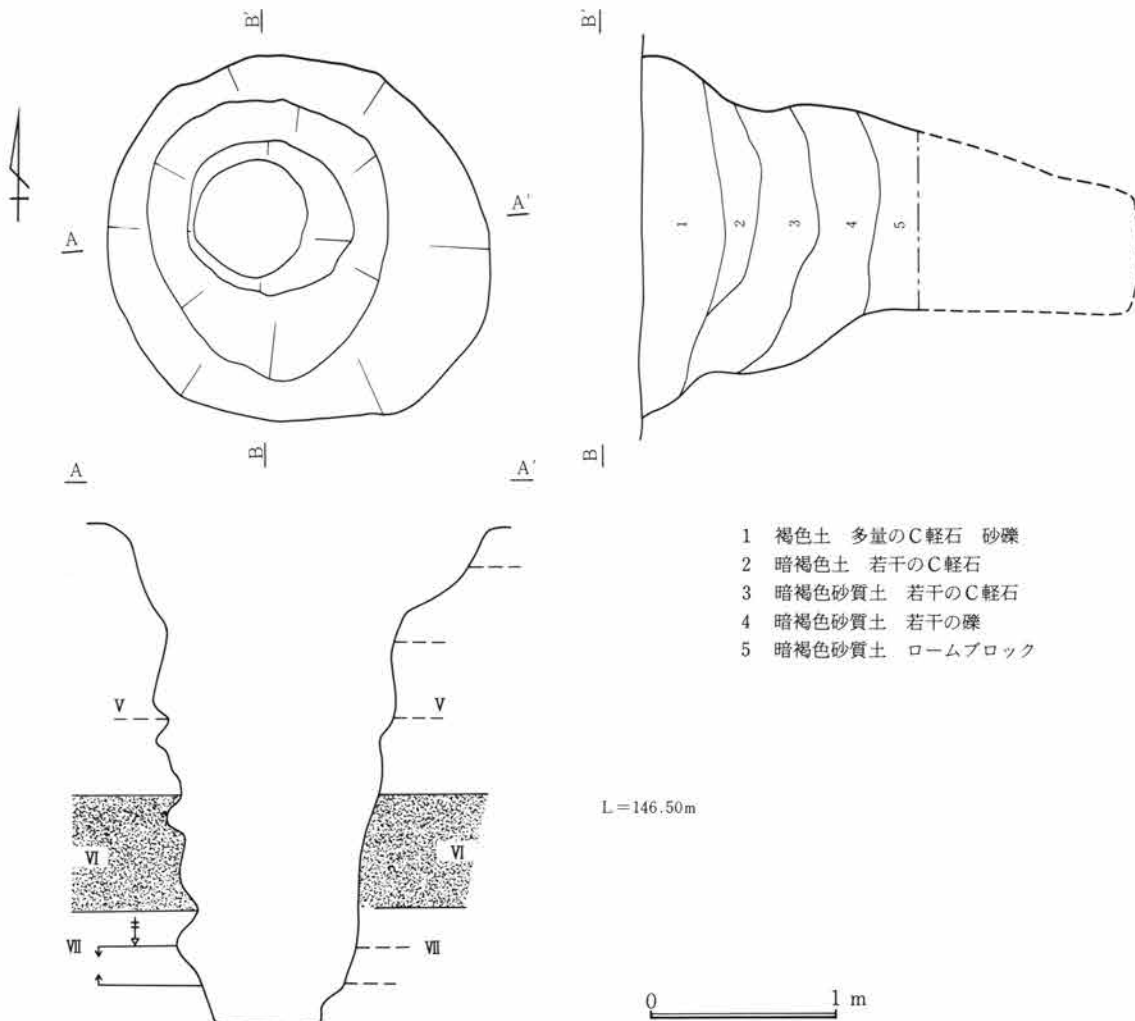
S E 24

No.	種類	観察表掲載頁
1	砥石	834

S E 27

317

本遺構は、118～119 I-26～27グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、円形を呈し、掘り方の形態は、湧水層で小規模なアグリがみられ、上位の0.6m位で開きはじめる地山井筒朝顔形である。規模は、径1.97～2.07m、底面で0.60～0.62m、深度は、2.62mを測る。覆土は、確認面から1.2m位までは浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積。1.2～2.2m位までは井壁崩壊による礫を多量に含む褐色砂による自然堆積。2.2m～底面にかけては黒褐色砂による自然堆積である。本遺構では井戸枠等の施設はみられなかった。調査は、1983年12月に実施され、自然湧水水位は、確認面から2.2～2.4m位のVII層中の灰褐色シルト質土からであった。

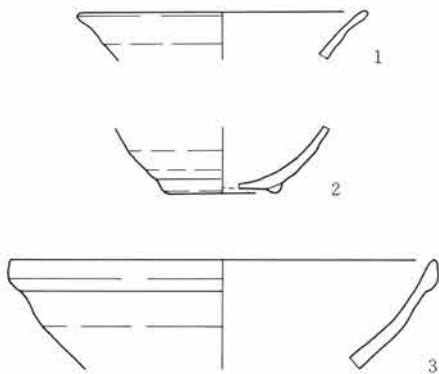
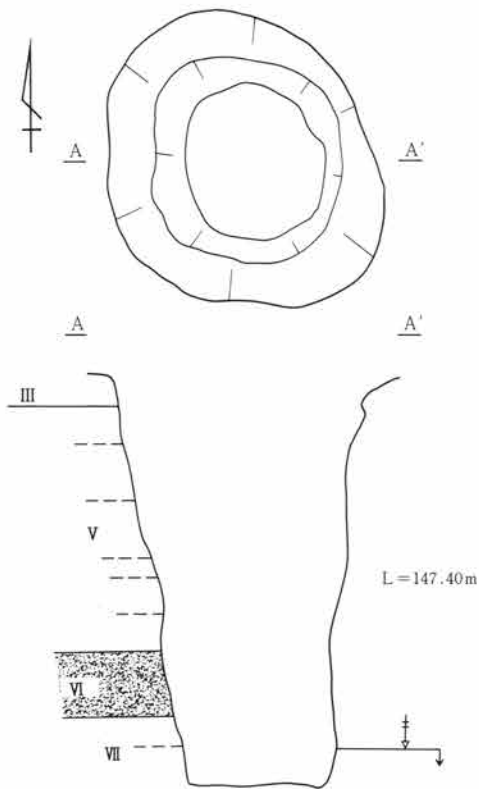


S E 28

317

本遺構は、131～132 I-32～33グリッドに位置し、S J 149と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、残存状態の良好な地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.68×1.46m、底面で径0.84×0.78m、深度は2.16mを測る。覆土は、確認面から1.7m位は浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積。1.7m～底面までは黒褐色砂による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

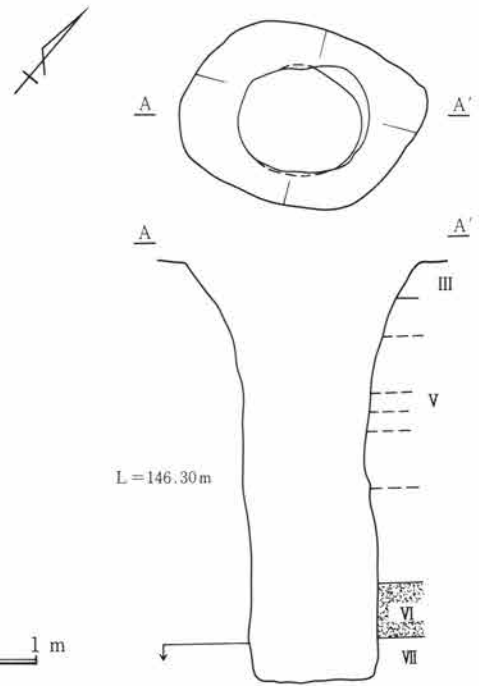


S E 29

318

124 I-39～40グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、井壁の崩壊もなく残存状態の良好な地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.32×0.99m、底面で径0.64×0.56m、深度は2.22mを測る。覆土は、確認面から2.0m位までは浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積、2.0m～底面までは黒褐色砂による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。調査は、1983年12月に実施され、自然湧水水位は、底部付近のVII層中の褐色シルト質からである。

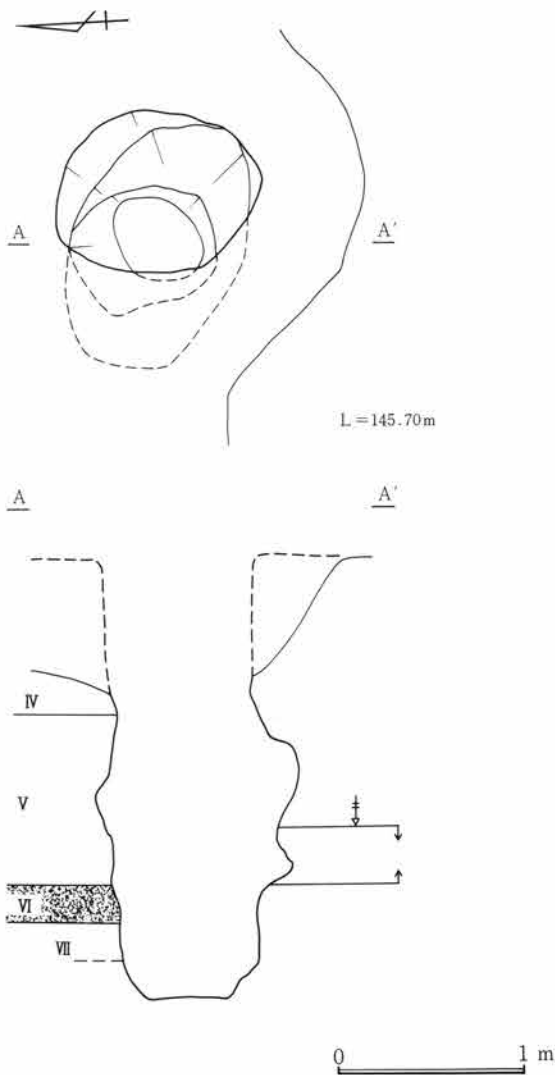


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴		
1	須恵器 埵 覆土	15.2・—・—、小片 細・粗砂粒、還元焰 軟質、にぶい黄橙色	口縁部が大きく外反する。体部にはロクロ目が強く残る。		
2	須恵器 埵 覆土	—・—・高台径6.0 小片 細・粗砂粒、還元焰 軟質、にぶい黄橙色	体部にはロクロ目が強く残る。高台は低く、不整形であり雑に付けられる。底部は回転糸切り未調整。		
No.	種類	観察表掲載頁	3	白磁 埵	797

S E30

本遺構は、120H-49グリッドに位置し、S D32と重複するが、新旧関係は、S D32のほうが新しいと推測される。平面形態は、確認面で楕円形を呈し、掘り方の形態は、小規模なアグリがみられるが地山井筒円筒形である。規模は、確認面では径1.13×0.87m、底面で径0.57×0.43m、深度は2.4m位である。覆土は、底部から0.7m位までは井壁崩壊による砂礫土の自然堆積。その上1m位までは円礫を含む黒褐色土による人為的堆積。さらに上層は、浅間“B”軽石を含む自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

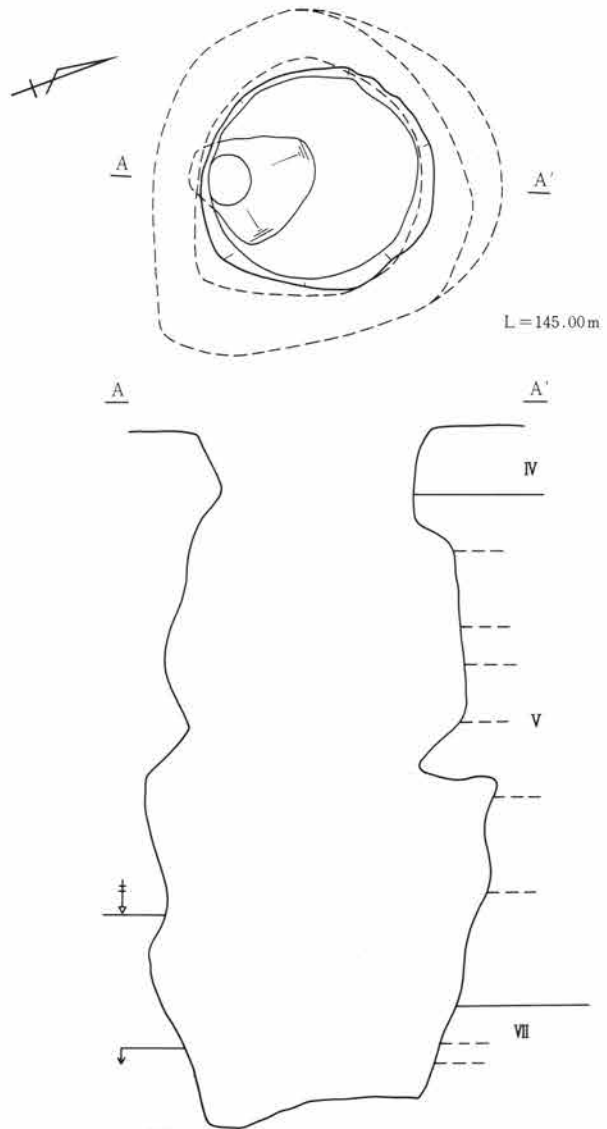


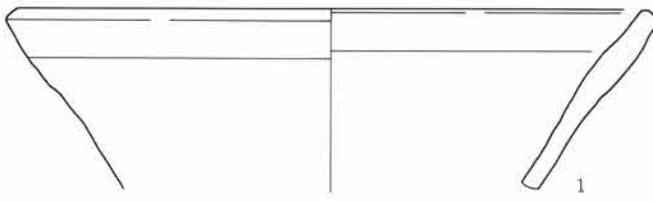
S E31

318

本遺構は、99H-16グリッドに位置し、S T21と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、ほぼ円形を呈し、掘り方の形態は、中位から底部にかけてアグリ、タナ落ちがみられるが、地山井筒円筒形である。規模は、確認面では径1.14~1.22m、底面で径0.99~1.04m、深度は3.67mであるが確認面がS T22の底部であったため実際には4m前後あったと推測される。覆土は、底部から1.4m位までは黒褐色砂、黒褐色砂礫土、それ以上は、黒褐色土からなり自然堆積である。

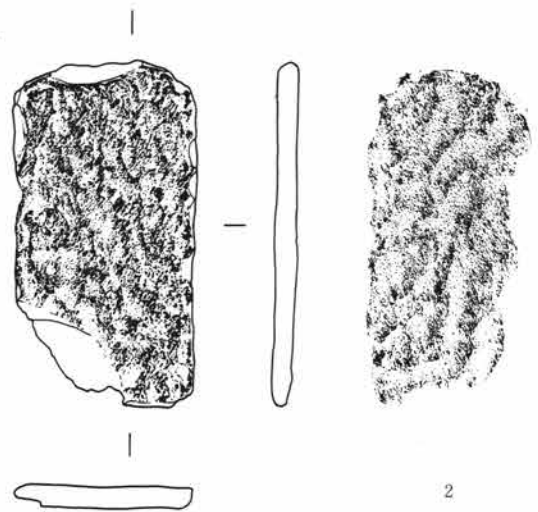
本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。





SE31

No.	種類	観察表掲載頁
1	軟質陶器 鉢	812
2	板 碑	876



SE32・34

319

SE32は、98～100H-03～05グリッドに位置し、SE34と接する。新旧関係は、明確にできなかった。平面形態は、確認面で不整形、底面で中程に頸れをもち瓢箪形に近い楕円形を呈す。掘り方の形態は、上位と下位に大規模なアグリがみられる地山井筒円筒形を呈す。規模は、確認面で長軸6.10m、短軸3.42m、底面で径1.23×0.77m、深度は4.36mを測る。下位から底面では、平面形が瓢箪形を呈することから掘り替えかと思われたが土層断面では確認されなかったことから、複数での使用のために拡大されたと推測される。

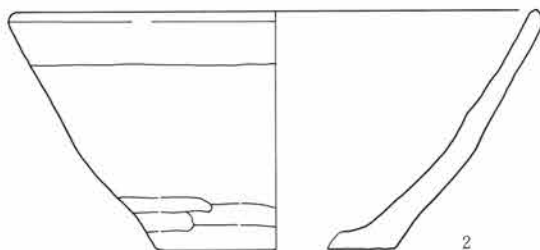
SE34は、SE32の南側に位置する。平面形態は、ほぼ円形を呈し、掘り方の形態は、上半部に小規模のアグリがみられるが、地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.20～1.30m、底面で径0.50m、深度は、2.88mを測る。

SE32・33では、共に井戸枠等の施設はみられなかった。

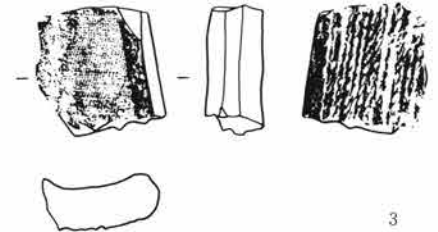


SE32

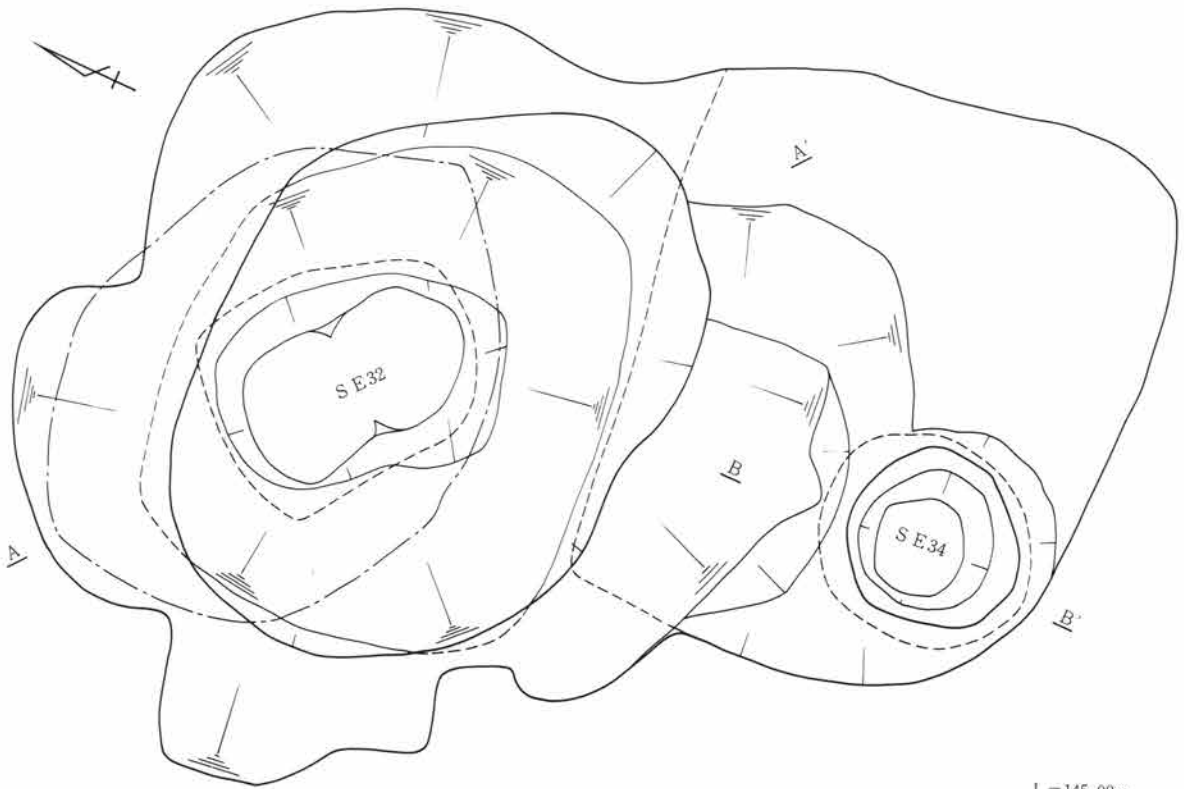
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 甕 覆土	19.6・一・一、小片 細砂粒、普通 にぶい橙色	口縁部は「コ」の字状を呈す。胴部上位は横方向へのヘラ削り。口縁部は横撫で。胴部内面は横方向のヘラ撫で。



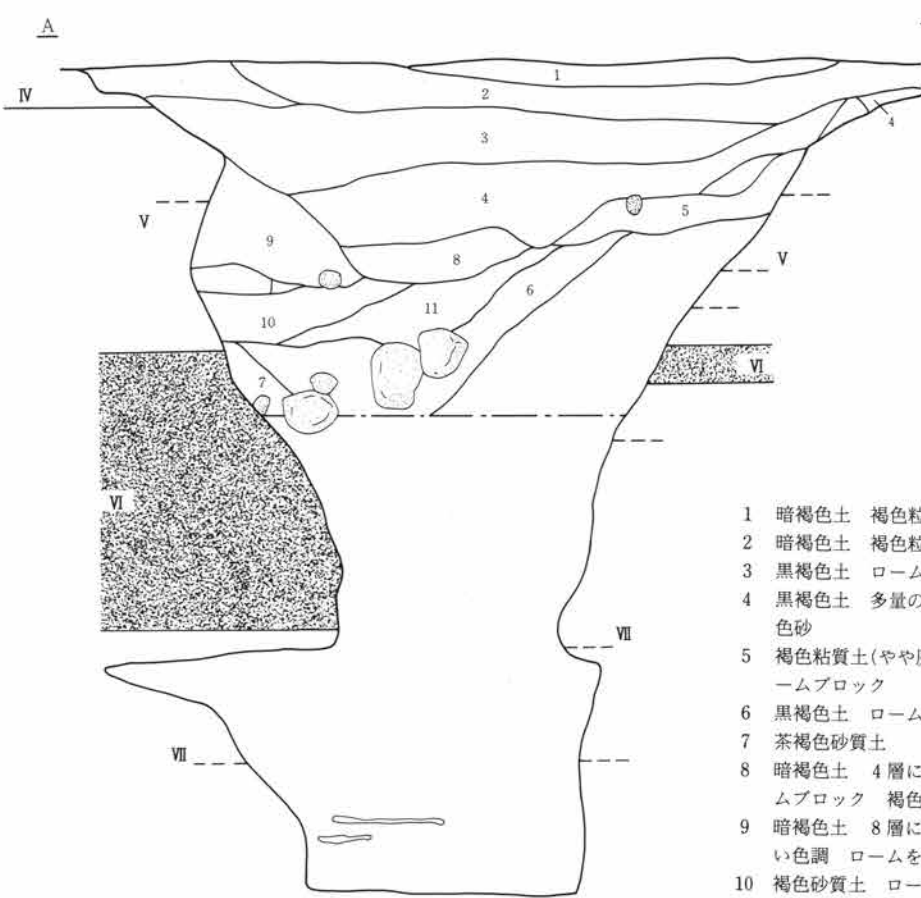
SE32



No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
2	軟質陶器 鉢	811	3	瓦	778



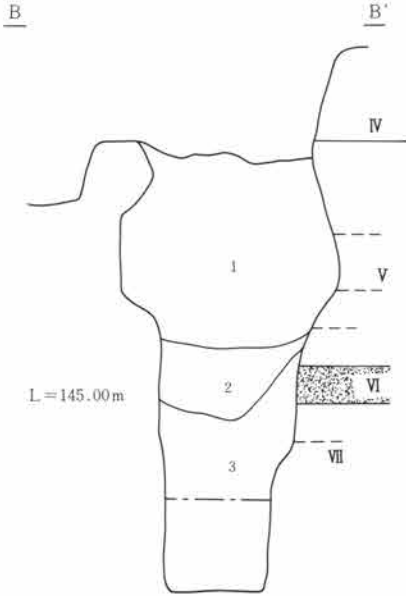
L=145.00m



0 1 m

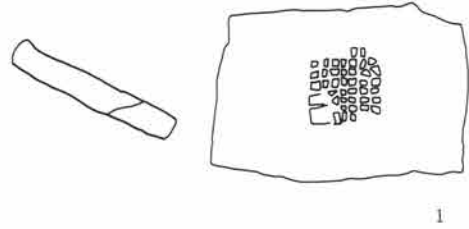
- 1 暗褐色土 褐色粒 若干のC軽石
- 2 暗褐色土 褐色粒 C軽石 ローム粒
- 3 黒褐色土 ロームブロック C軽石
- 4 黒褐色土 多量のロームブロック 褐色砂
- 5 褐色粘質土(やや灰色味を帯びる) ロームブロック
- 6 黒褐色土 ロームブロック 黒褐色砂
- 7 茶褐色砂質土
- 8 暗褐色土 4層に類似 C軽石 ロームブロック 褐色砂
- 9 暗褐色土 8層に類似 8層より茶色い色調 ロームを全体的に含む
- 10 褐色砂質土 ロームブロック
- 11 褐色砂質土 10層に類似

第3章 検出遺構・遺物



SE34

- 1 中世砂質の黒褐色土 地山ブロックなし (自然)
- 2 砂質の黒色土 多量の地山ブロック 1層より黒色味強い (人為)
- 3 黄色味強い褐色土 地山ブロック (人為)



SE34

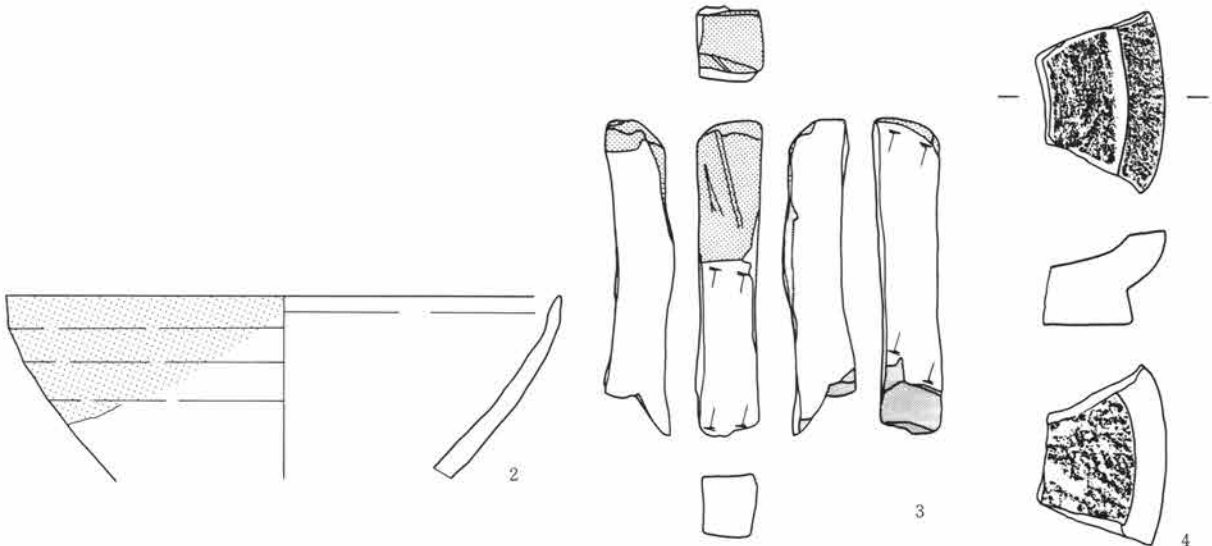
No	種類	観察表掲載頁
1	焼き締め陶器 大甕	800

SE33

320

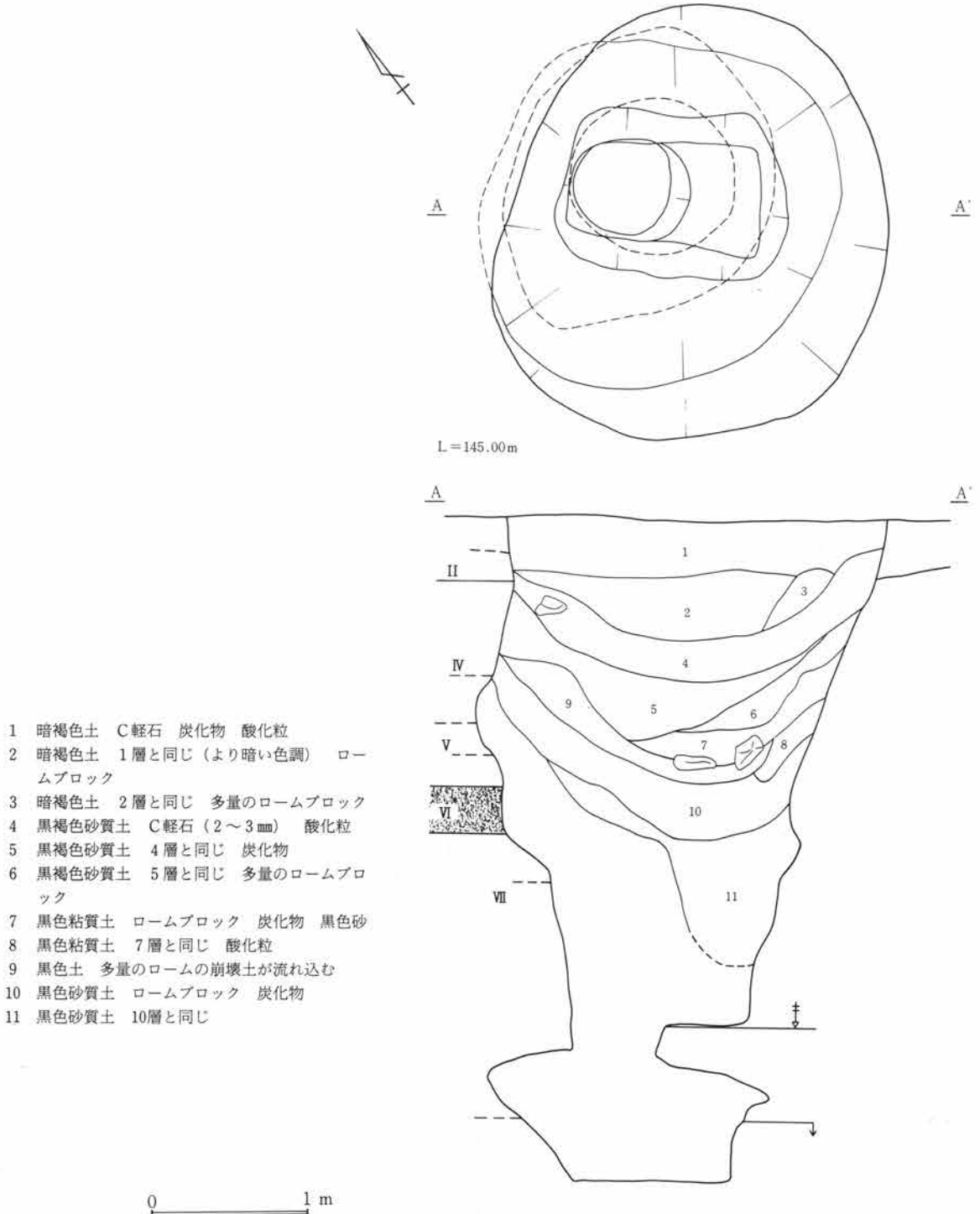


No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・胎土 焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 台付甕 覆土	—・—・—、小片 細・粗砂粒・少量の細 礫・褐色鉱物粒 普通・にぶい橙色	台頭部の小片。胴部へら削り。台頭部横撫で。底部内面はへら撫で。



No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
2	陶器 平茶碗	798	4	石 白	846
3	砥 石	834			

本遺構は、95～97H-03～05グリッドに位置し、S J 182・184と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、下位にテラス状の平坦面をもち、一端頸れ小径になり底面でやや広がる。また底部で小規模なアグリがみられる地山井筒朝顔形である。規模は、確認面で径2.82×2.40m、頸れ部分の径0.75×0.60m、底面での径1.03×1.00m、深度3.95mを測る。覆土は、確認面から頸れ部分までは人為的に埋め戻されている。それ以下は、暗灰色砂による自然堆積である。

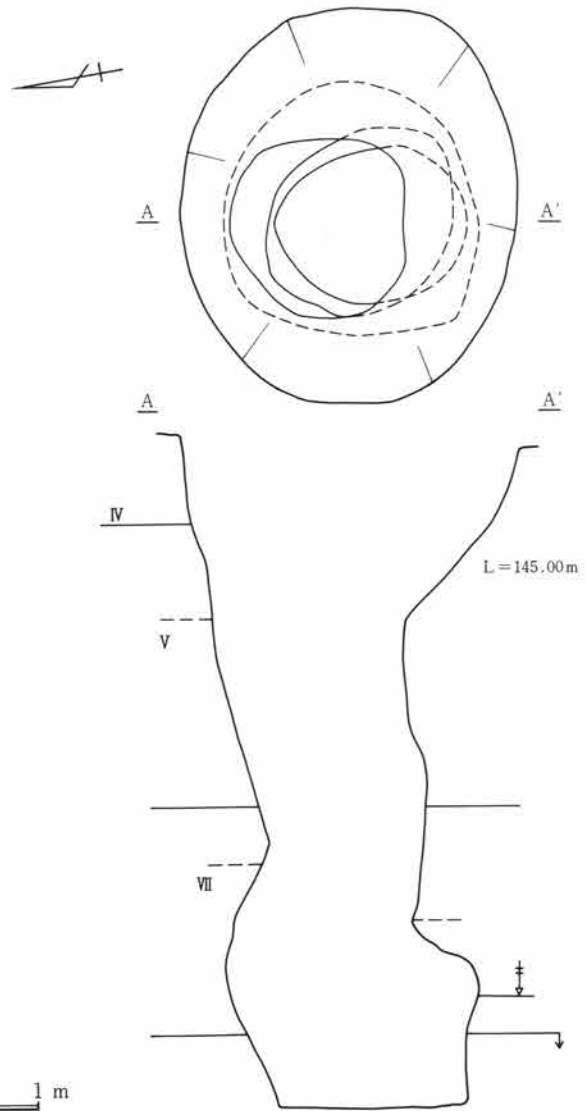
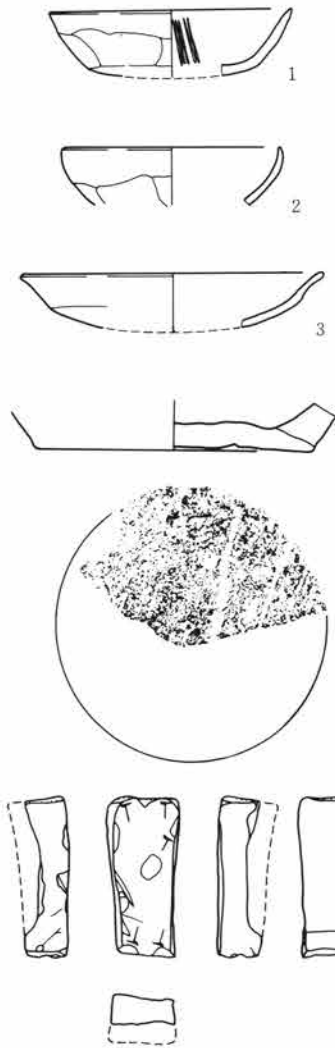


S E35

320

本遺構は、109～110グリッドに位置し、S D126、S J 198と重複するが、新旧関係は、S D126より本遺構のほうが古く、S J 198より新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、中位から下位にかけて小規模なアグリがみられる地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径2.14×1.86m、底部で径1.07×0.87m、深度は3.56mを測る。覆土は、確認面から0.6m位までは浅間“B”を含む黒褐色土による自然堆積、0.6～2.6m位まではロームブロック・黒褐色土の混合土による人為的堆積。2.6m～底面にかけては井壁の崩壊による砂・シルト質土による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった

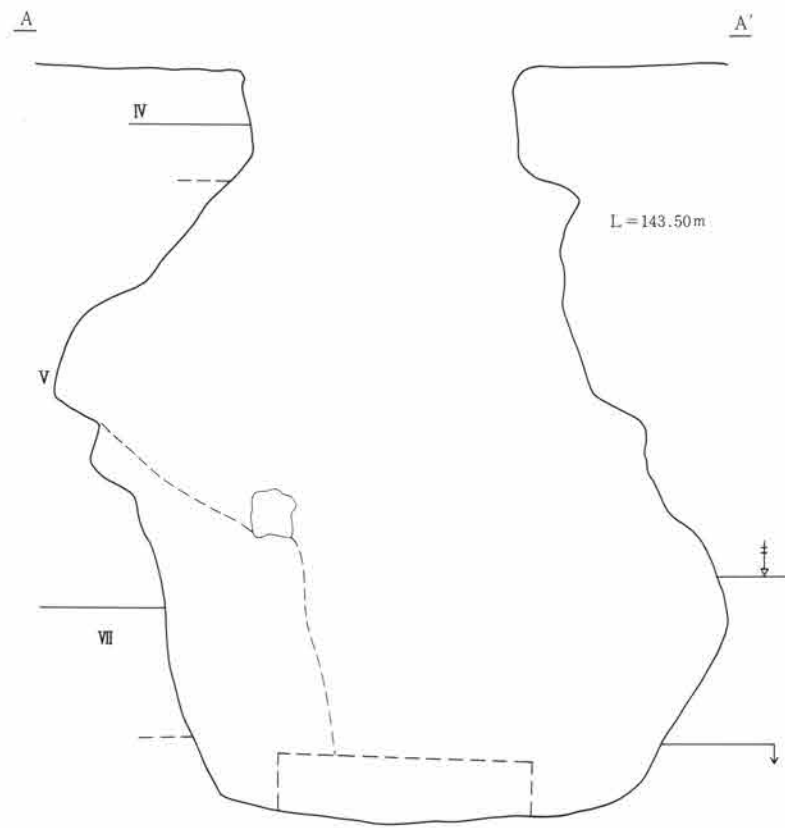
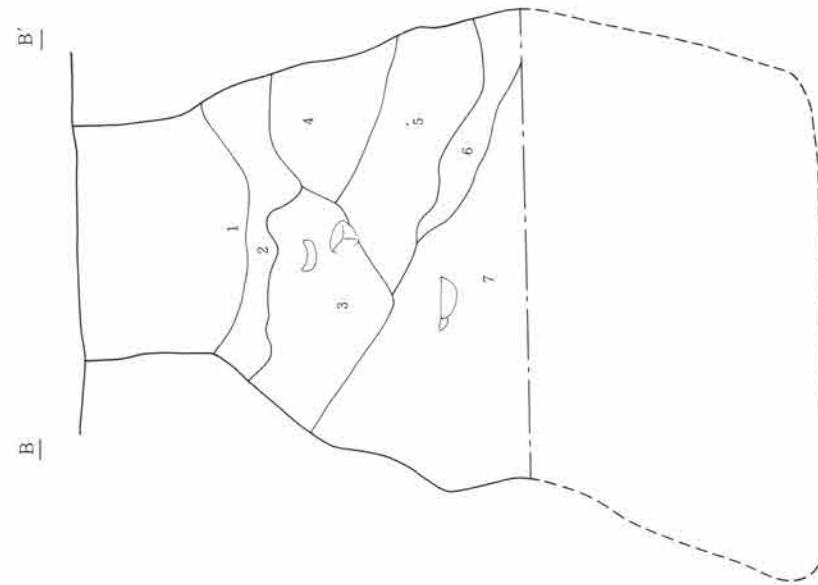
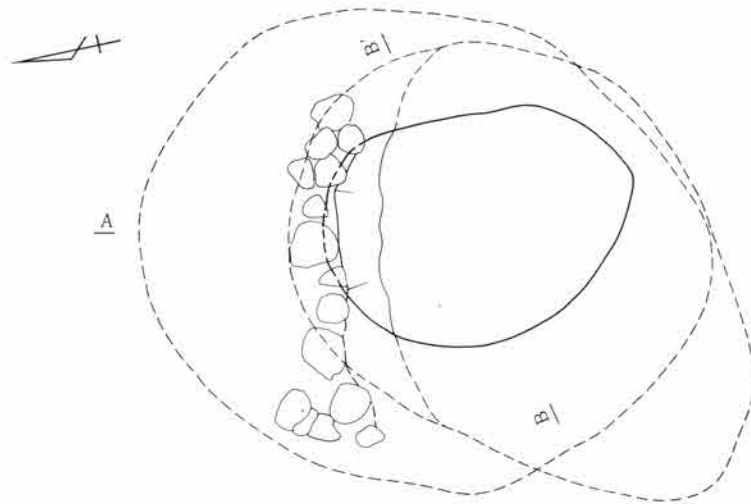


No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	12.6・一・一、小片 細砂粒・細礫 普通、橙色	底部は緩やかな丸みをもつ。体部は僅かにふくらみをもって開く。体部内面は放射状暗文をもつ。
2	土師器 坏 覆土	11.4・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、にぶい橙色	丸底。体部から口唇部まで緩やかに内湾する。体部は横方向へのヘラ削り。口縁部横撫で。
3	土師器 皿 覆土	15.8・一・一、小片 細砂粒・粗砂粒 普通、にぶい橙色	底部から体部は緩やかな丸みをもって開き、口縁部は外反する。体部はヘラ削り、口縁部は横撫で。
No.	種類	観察表掲載頁	
4	焼き締め陶器 大甕	800	
5	砥石	834	

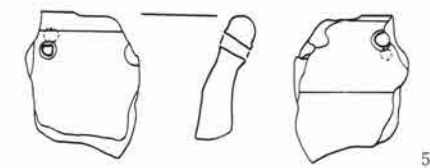
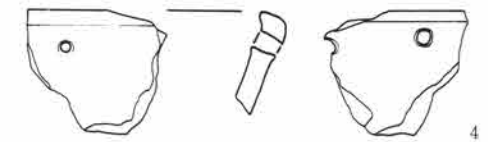
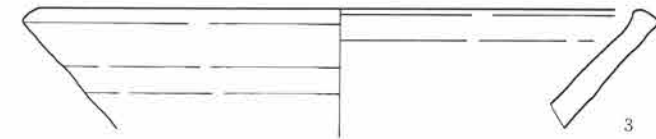
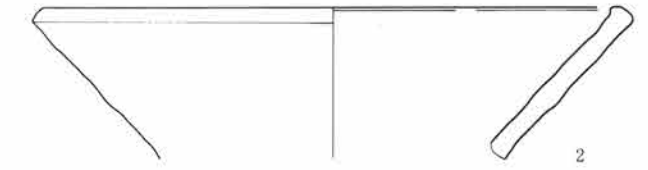
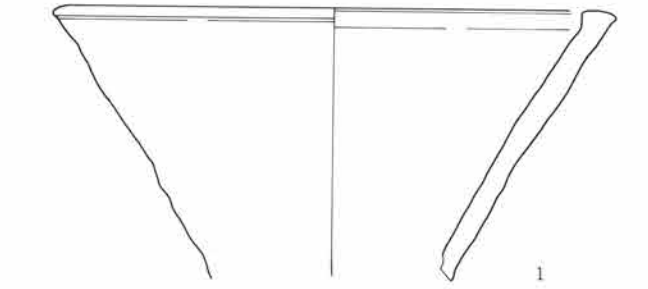
S E 36

321

本遺構は、93～94G-38～39グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形である。本遺構の井壁は、一度大規模な崩壊がみられ、修復して再利用されている。修復の際北側に土留めのために石組をおこなっている。なお、石組をおこなう際底面を固めて実施している。規模は、径1.70×1.20m、深度は4.03mを測る。覆土は、下半部は井壁の崩壊によるもので、上半部は使用不可能になったため人為的に埋め戻されたものである。



- 1 暗褐色土 若干のC軽石 褐色粒
- 2 暗褐色土 多量のロームブロック
- 3 暗褐色土 ロームブロック 暗褐色砂 丸礫(1~2cm大)
- 4 暗褐色土 若干の褐色砂
- 5 暗褐色土 4層に類似 4層より褐色砂多い
- 6 暗褐色砂質土 若干の礫(1~2cm大)
- 7 暗褐色砂礫土



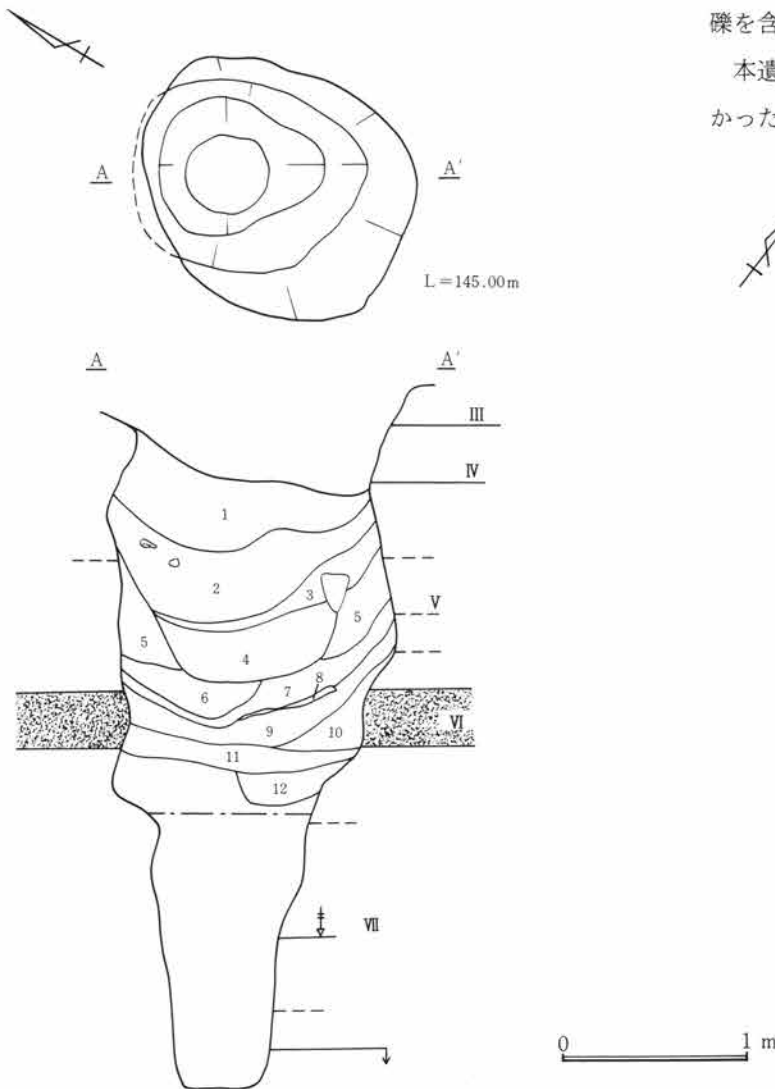
No	種類	観察表掲載頁
1	軟質陶器 鉢	812
2	軟質陶器 鉢	812
3	軟質陶器 鉢	812
4	軟質陶器 火鉢	811
5	軟質陶器 火鉢	811

S E 37

321

本遺構は、97H-05~06グリッドに位置し、S K 260と重複し、S E 38とは近接する。新旧関係は、確認できなかった。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、上半部でアグリがみられるが地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.60×1.35m、底径0.46×0.42m、深度は3.68mを測る。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。



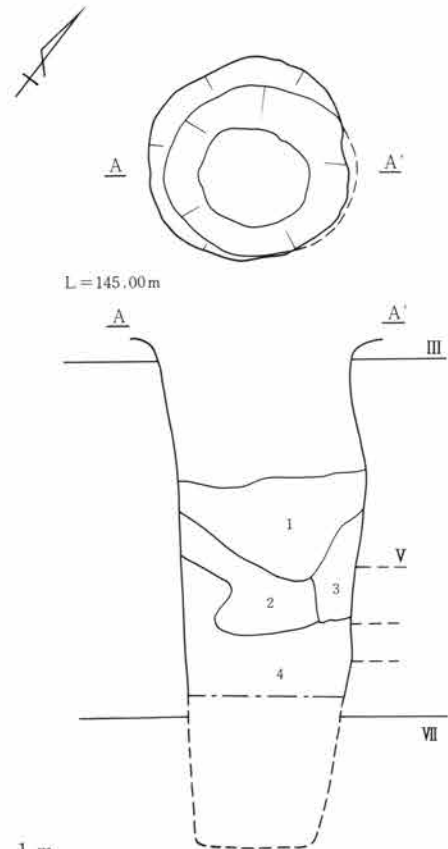
- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1 黄褐色土 ロームブロック | 7 黒褐色土 ロームブロック |
| 2 暗茶褐色土 白色粘土 ロームブロック | 8 黒色土 |
| 3 黒色土 | 9 淡暗茶褐色土 |
| 4 暗茶褐色土 ロームブロック | 10 淡黒褐色土 黒褐色砂 |
| 5 暗褐色土 ロームブロック | 11 黒褐色土 |
| 6 暗茶褐色土 ロームブロック | 12 黒褐色土 ロームブロック |

S E 38

322

本遺構は、97~98H-06~07グリッドに位置し、S K 260と重複するが、新旧関係は、S E 37と同様に確認できなかった。平面形態はほぼ円形を呈し、掘り方の形態は、残存状態の良好な地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.08~1.11m、底面で0.50×0.58m、深度は、2.84mを測る。覆土は、中程で人為的の堆積がみられるが、底部は円礫を含む黒褐色土による自然堆積である。

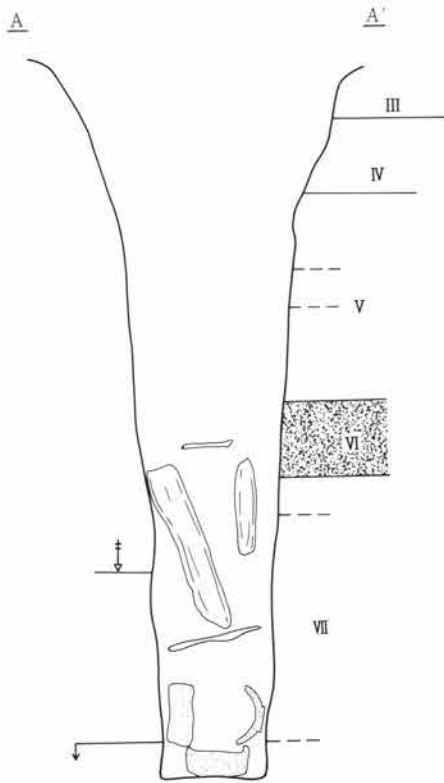
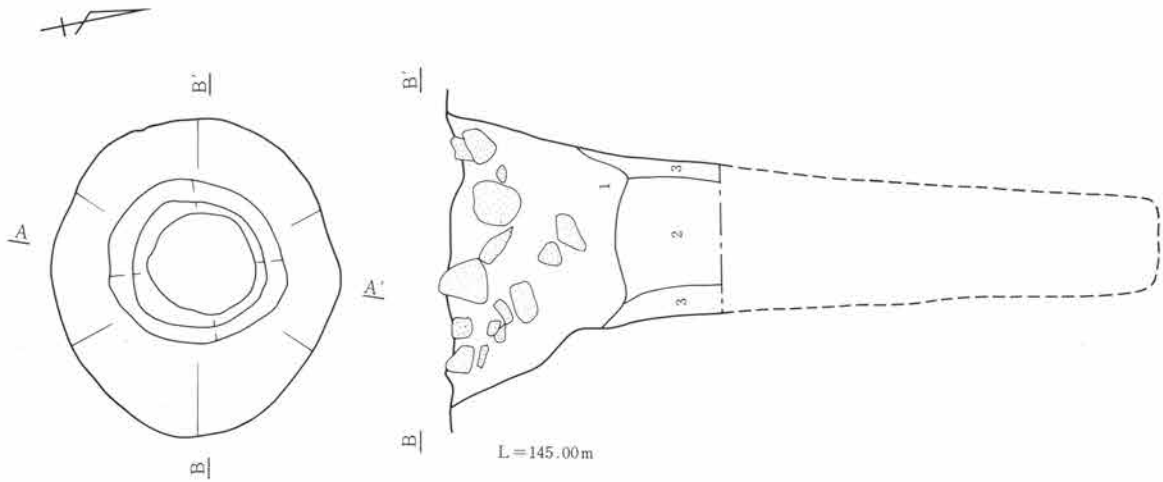
本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。



- | |
|--------------------------|
| 1 暗褐色土 褐色砂 若干の礫 (1~2cm) |
| 2 灰黒褐色砂礫土 |
| 3 灰黒褐色砂礫土 2層に類似 2層より礫が多い |
| 4 褐色砂礫土 |

SE39

322



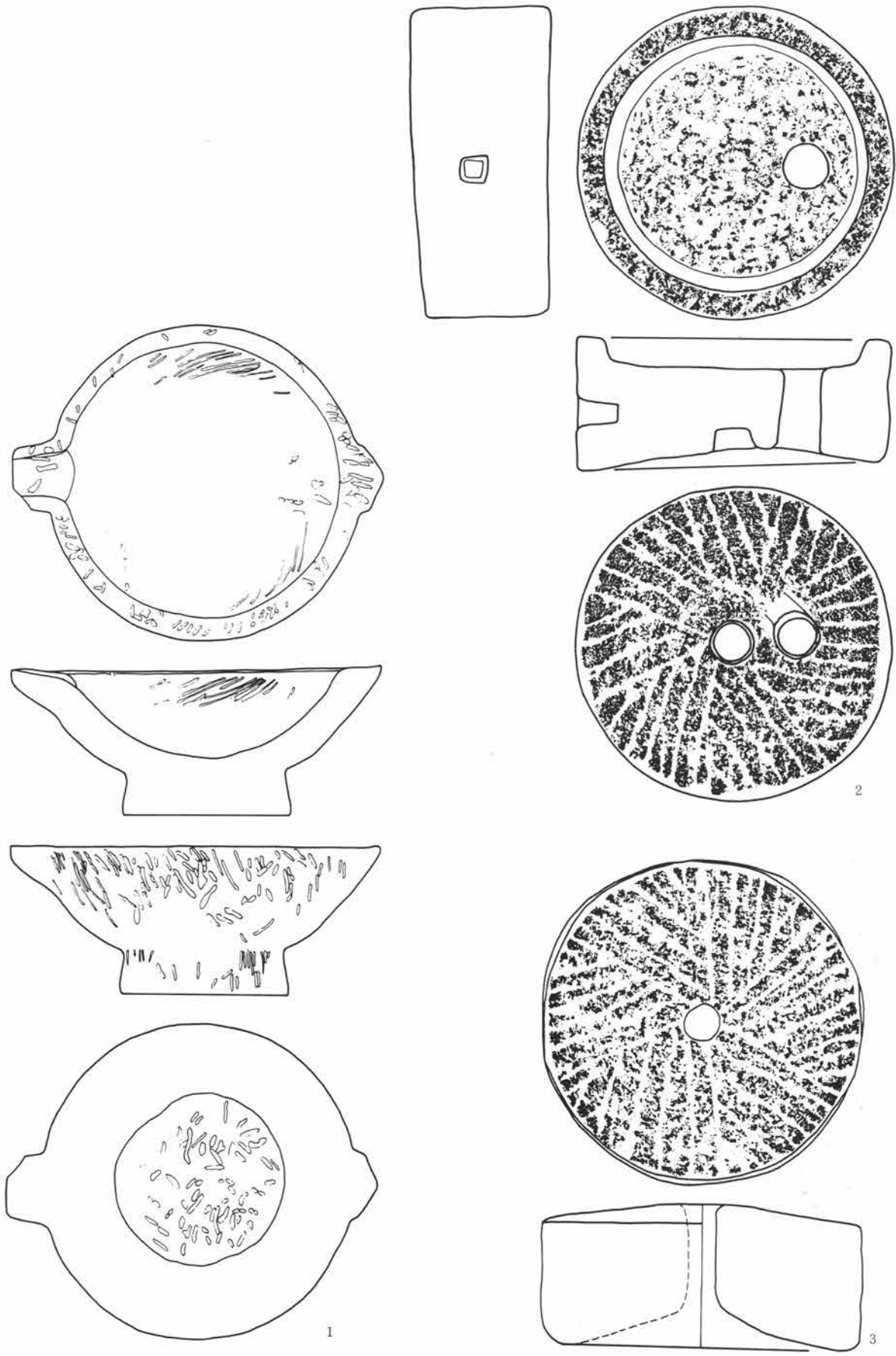
本遺構は、107～108H-15～16グリッドに位置し、S D204、S J 174と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、残存状態の良い地山井筒円筒形である。規模は、確認面で径1.77×1.57m、底面で径0.58×0.55m、深度は3.79mを測る。覆土は、一度に人為的に埋め戻されており、多量の10～60cm大の円礫、石鉢・石臼・板碑・土器等が埋め戻しの際に投棄されている。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

調査は、1984年1月に実施され、自然湧水水位は、確認面より2.7m位のVII層中の灰褐色シルト質土からで、湧水量は、毎分20ℓであった。

- 1 暗褐色土 礫 ロームブロック
- 2 暗褐色土 砂礫混り
- 3 褐色土 ロームブロック

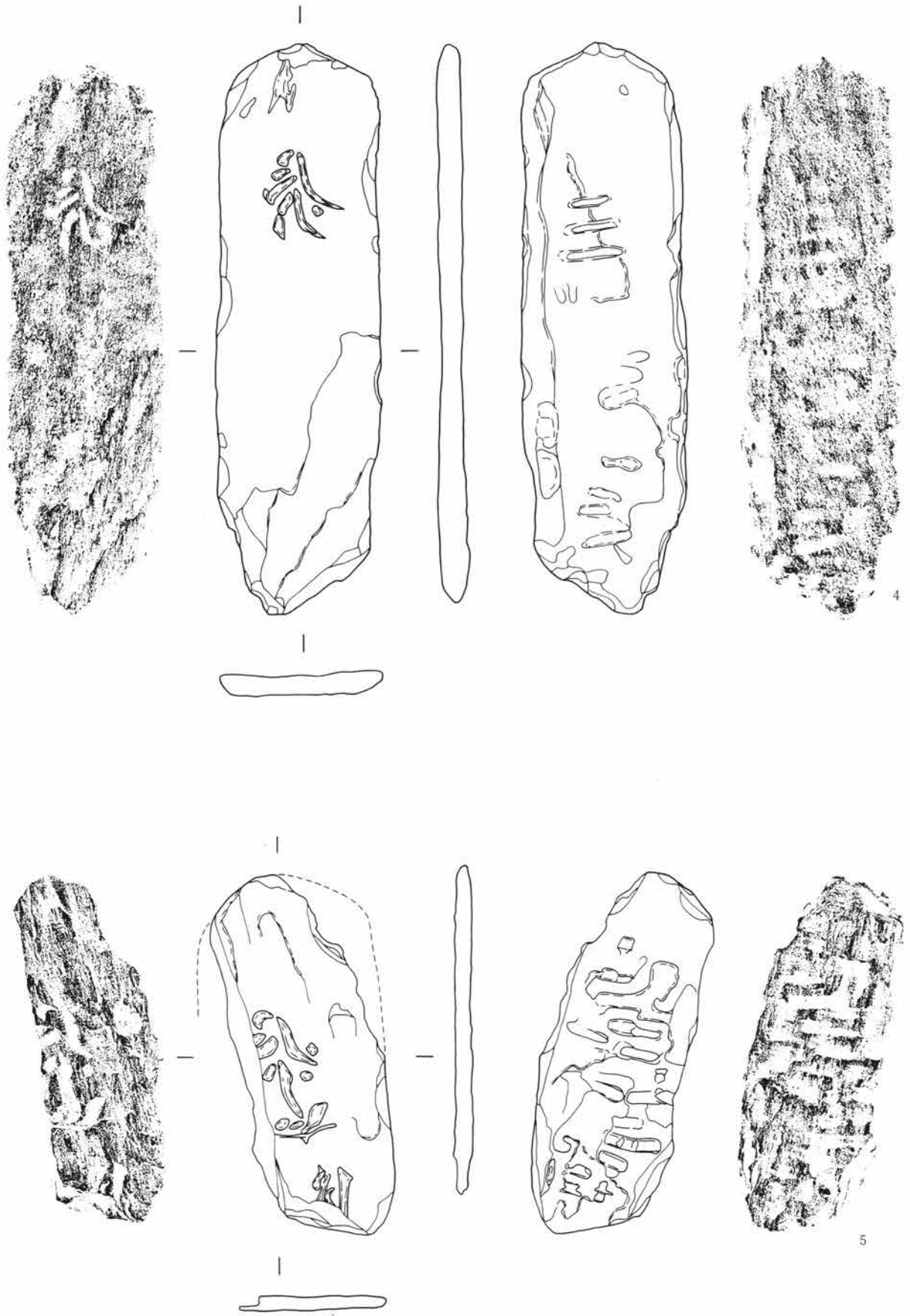
No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
1	石鉢	838	4	板碑	877
2	石臼	845	5	板碑	877
3	石臼	845	6	板碑	877

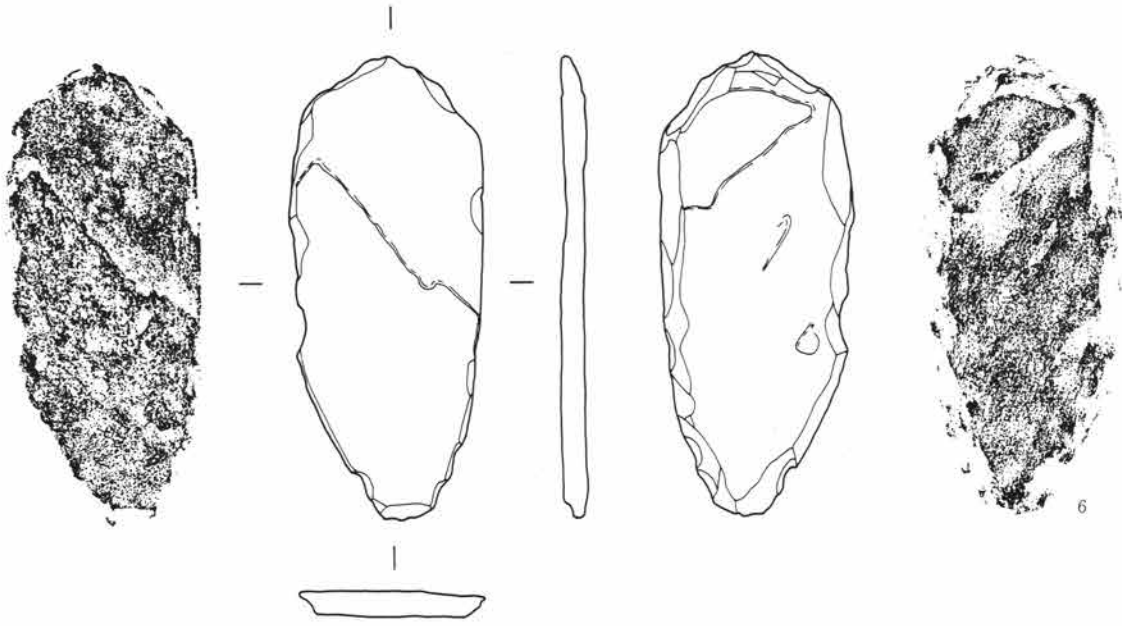


1

2

3



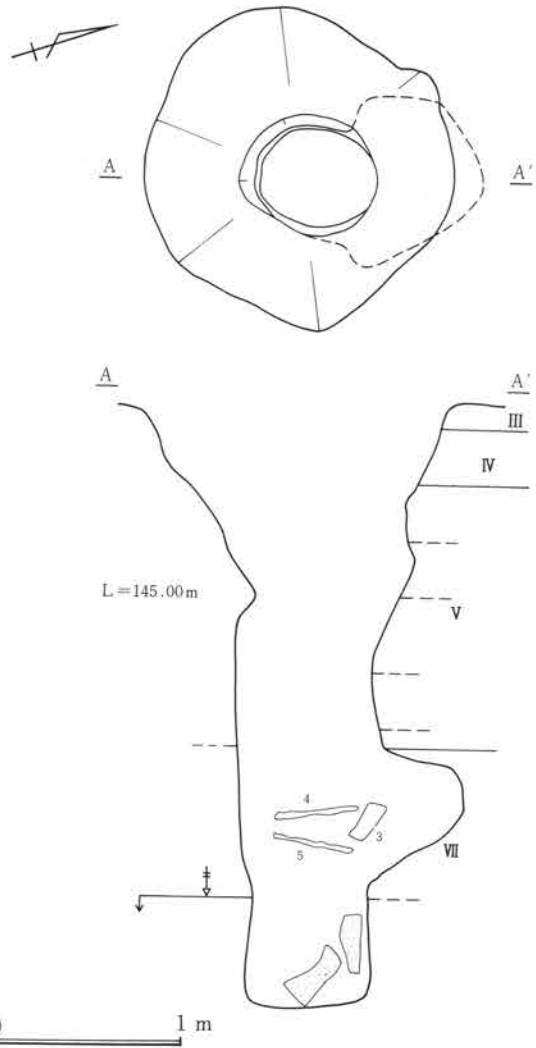


S E 40

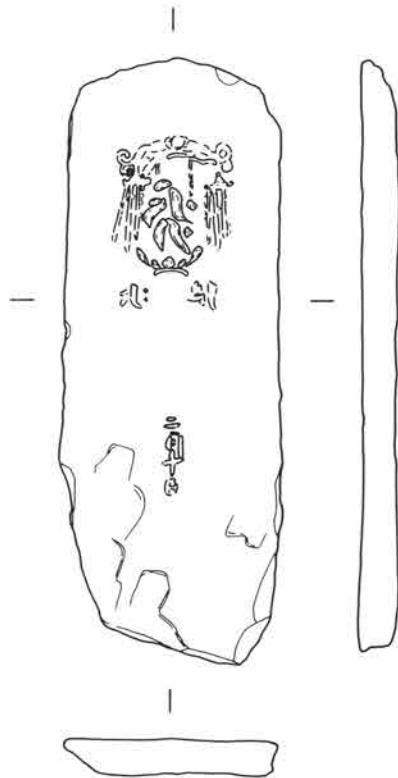
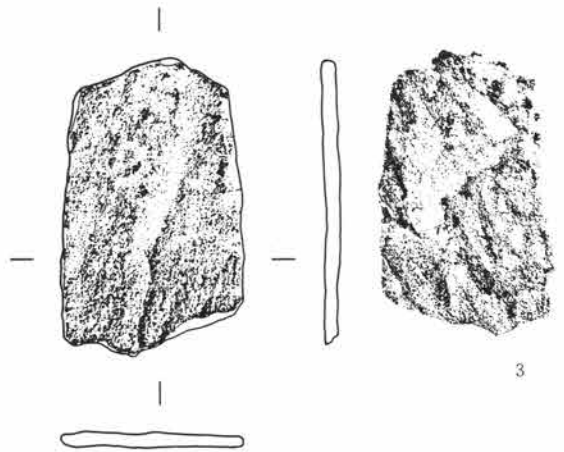
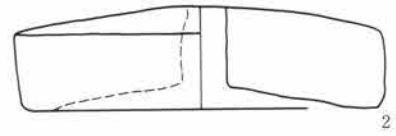
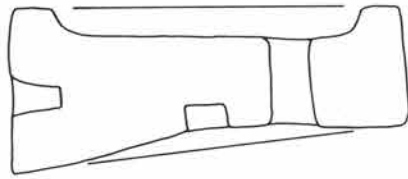
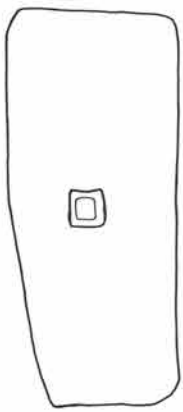
本遺構は、110～111G-38～39グリッドに位置し、S J 193と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが新しい。平面形態は、隅丸方形に近い形態を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形であるが、北側の井壁では確認面より4.00～4.70mの位置に横穴状の掘り込みがみられる。規模は、確認面では1.64×1.52m、底面で0.57×0.52m、深度3.19mを測る。覆土は、2.8m位まではロームブロックを含んだ黒褐色土による人為的堆積、それ以下は灰黒色砂礫土による自然堆積である。

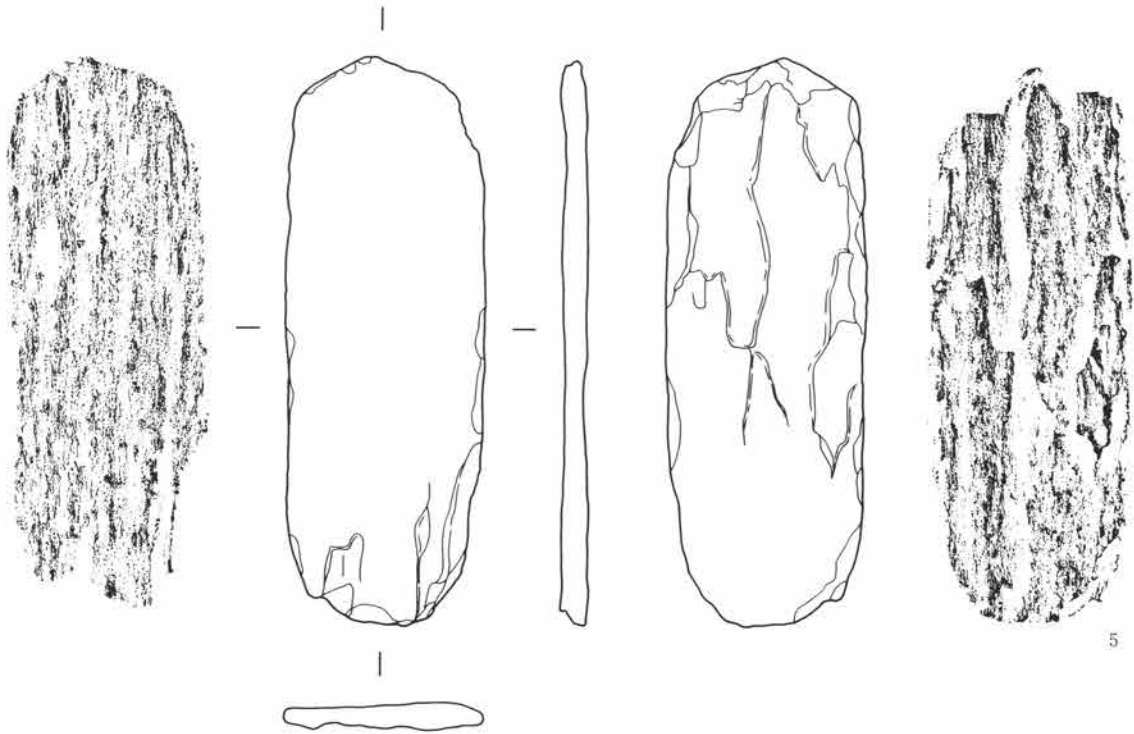
本遺構では、井戸枠等の施設はみられない。

調査は、1984年1月に実施され、自然湧水水位は確認面より2.6m位のVII層中の暗灰色砂からであった。



No.	種類	観察表掲載頁
1	石 白	845
2	石 白	845
3	板 碑	877
4	板 碑	877
5	板 碑	877

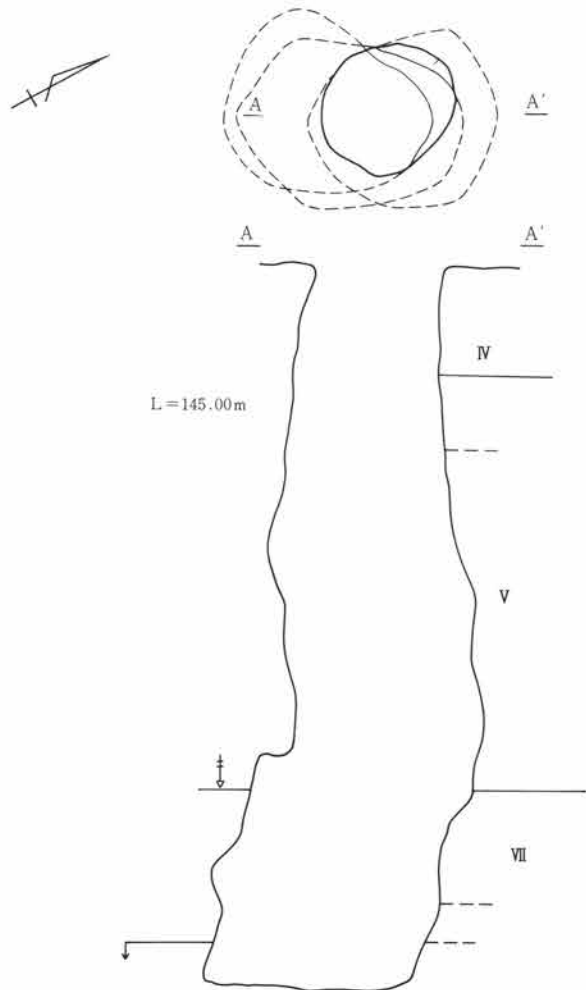




S E 41

本遺構は、97G-39グリッドに位置し、単独で占地する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、小規模なアグリがみられるが、地山井筒円筒形である。規模は、確認面で0.73×0.73m、底面はアグリによって拡大しているため掘削時の規模は不明である。調査時では径1.25×0.92mであった。深度は3.82mを測る。覆土は、2.6m位までロームブロックを含む暗褐色土による人為的堆積、それ以下は黒褐色砂による自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。調査は、1984年2月に実施され、自然湧水水位は確認面より2.7m位のVII層中の灰褐色砂からで、湧水層の井壁は、マンガン凝集が固く付着していた。湧水量は、毎分10ℓであった。

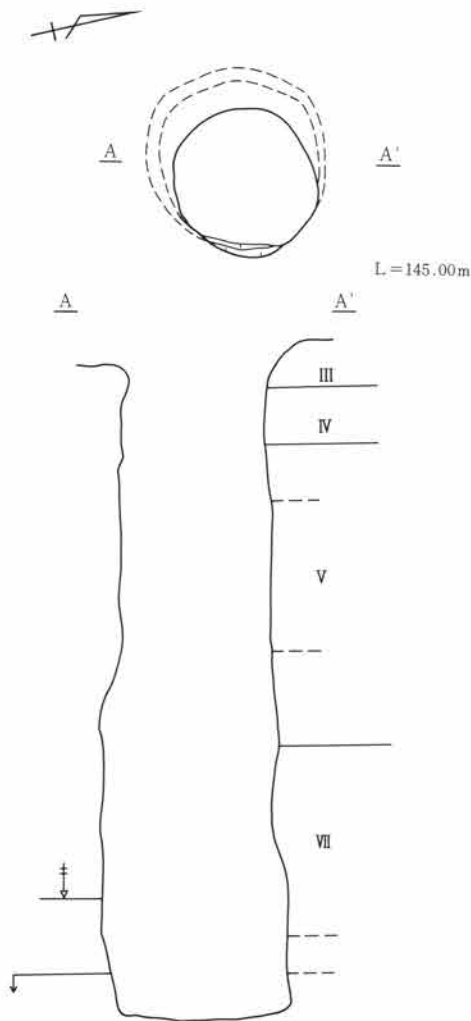


S E 42

326

本遺構は、88G-34グリッドに位置し、S D 64・65と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、ほぼ円形を呈し、掘り方の形態は、残存状態の良好な地山井筒円筒形である。規模は、径0.78×0.73m、底面で1.00×0.95m、深度は、3.57mを測る。覆土は、確認面より1.9m位まで浅間“B”を含む黒褐色土、1.9~2.4m位までは井壁崩壊土、2.4~3.2m位までは黒褐色土、3.2~3.5m位までは黒褐色粘性土とともに自然堆積である。

本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。調査は、1984年2月に実施され、確認面より2.9m位のVII層中の灰褐色砂からである。



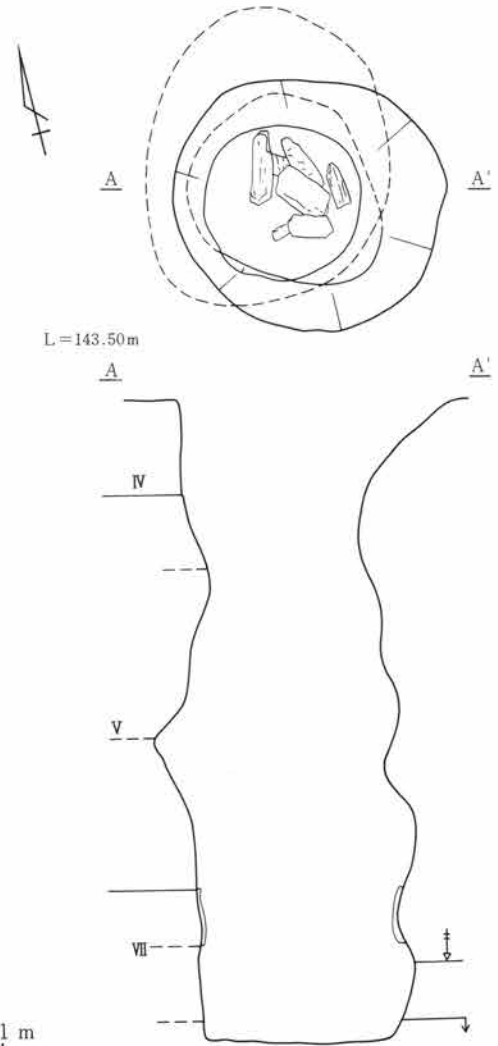
704

S E 43

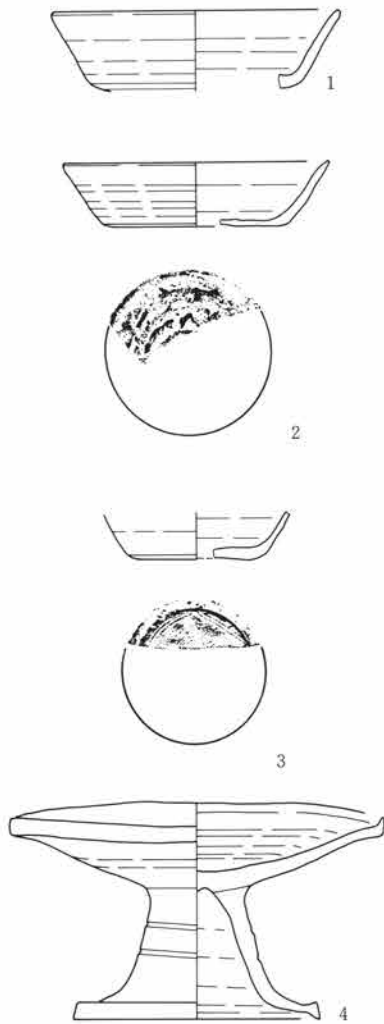
327

本遺構は、102G-36~37グリッドに位置し、単独で位置する。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、小規模なアグリがみられるが、地山井筒円筒形である規模は、確認面で径1.42×1.34m、底面で径1.60×1.30m、深度は3.38mを測る。覆土は、確認面から2m位までは円礫、ロームブロックを多量に含む暗褐色土による人為的堆積。2.0~2.8m位までは井壁の崩壊による暗褐色シルト質土。2.8~3.2m位までは黒褐色土による人為的堆積で板碑の投棄がみられる。3.2mから底面にかけては灰黒色砂による自然堆積である。

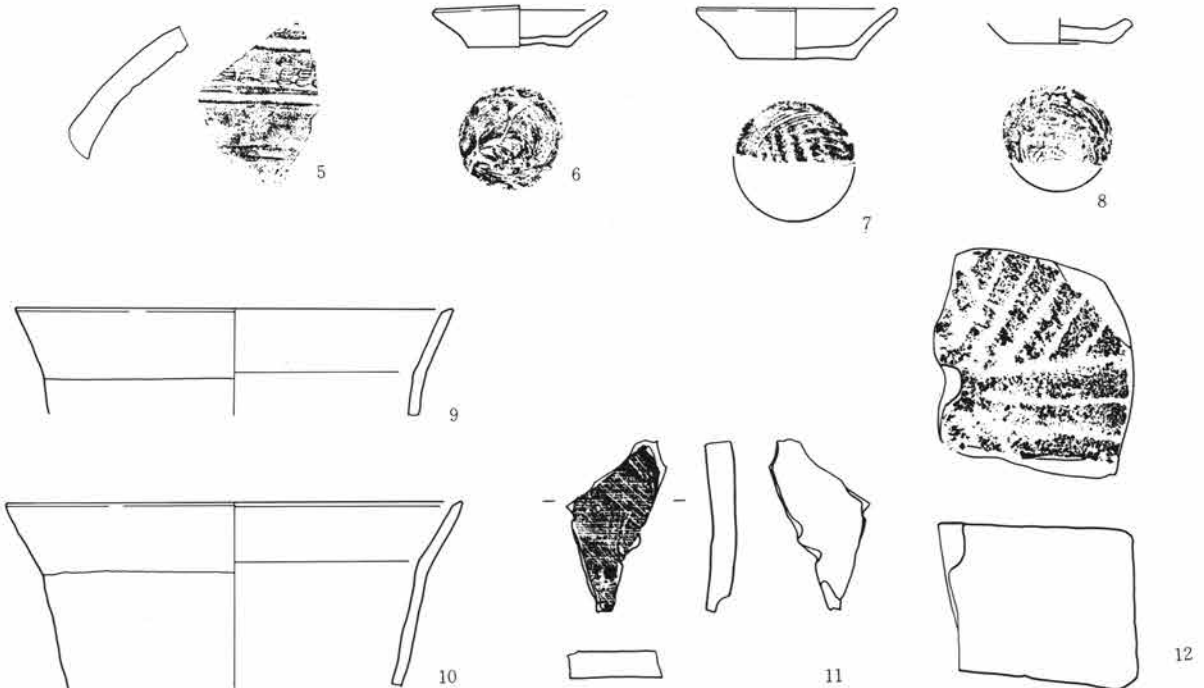
本遺構では、井戸枠等の施設はみられなかった。

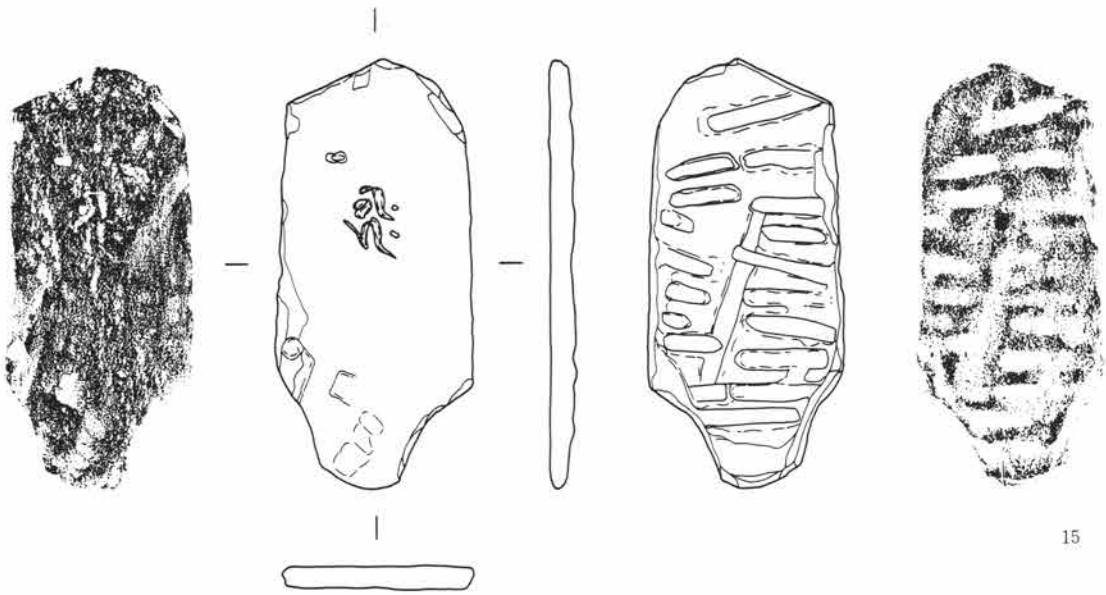
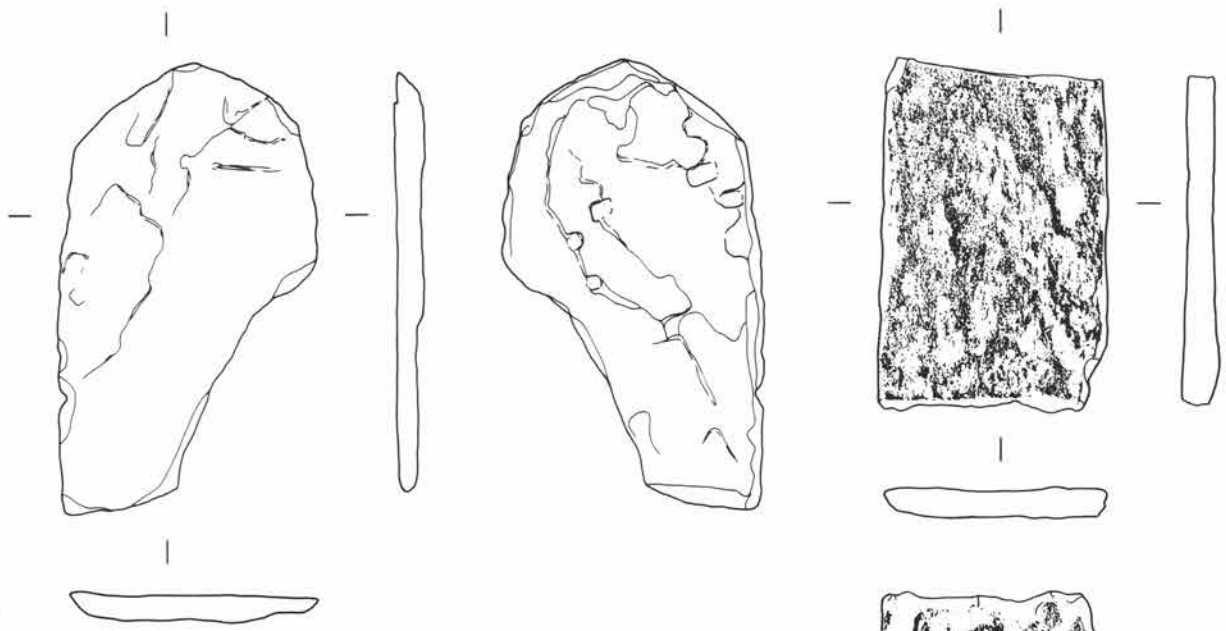


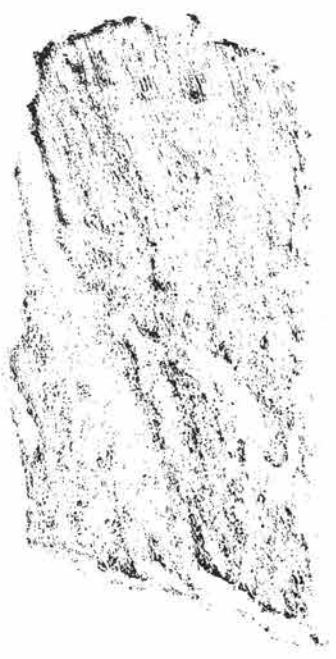
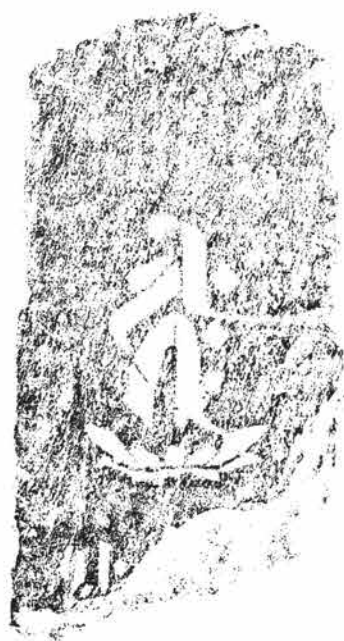
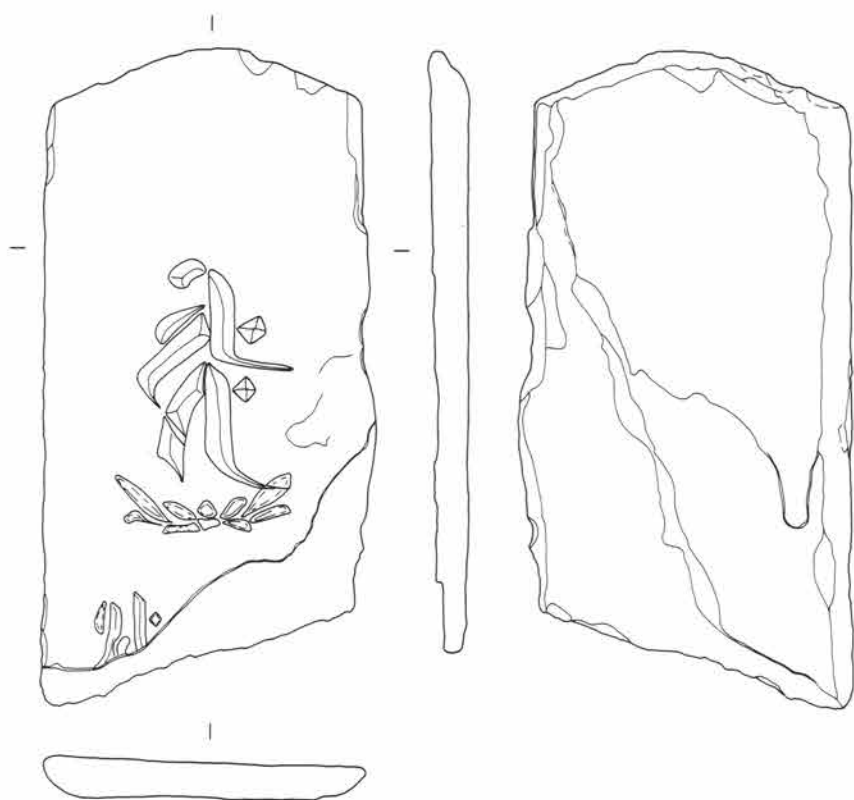
第5節 中世以降



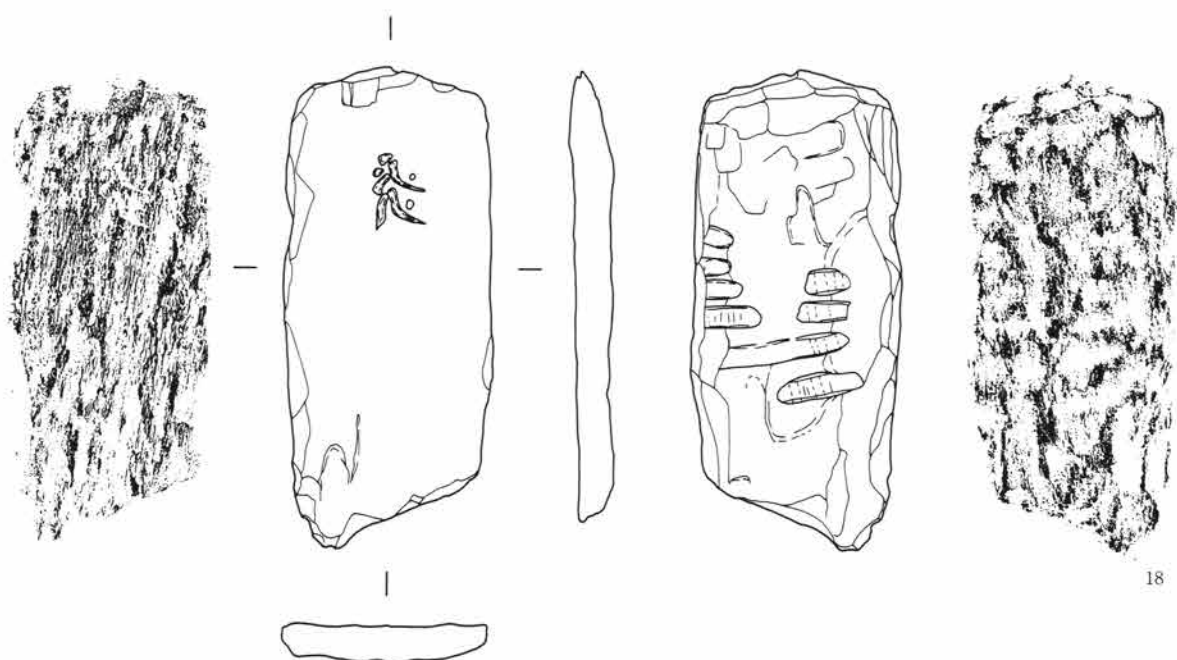
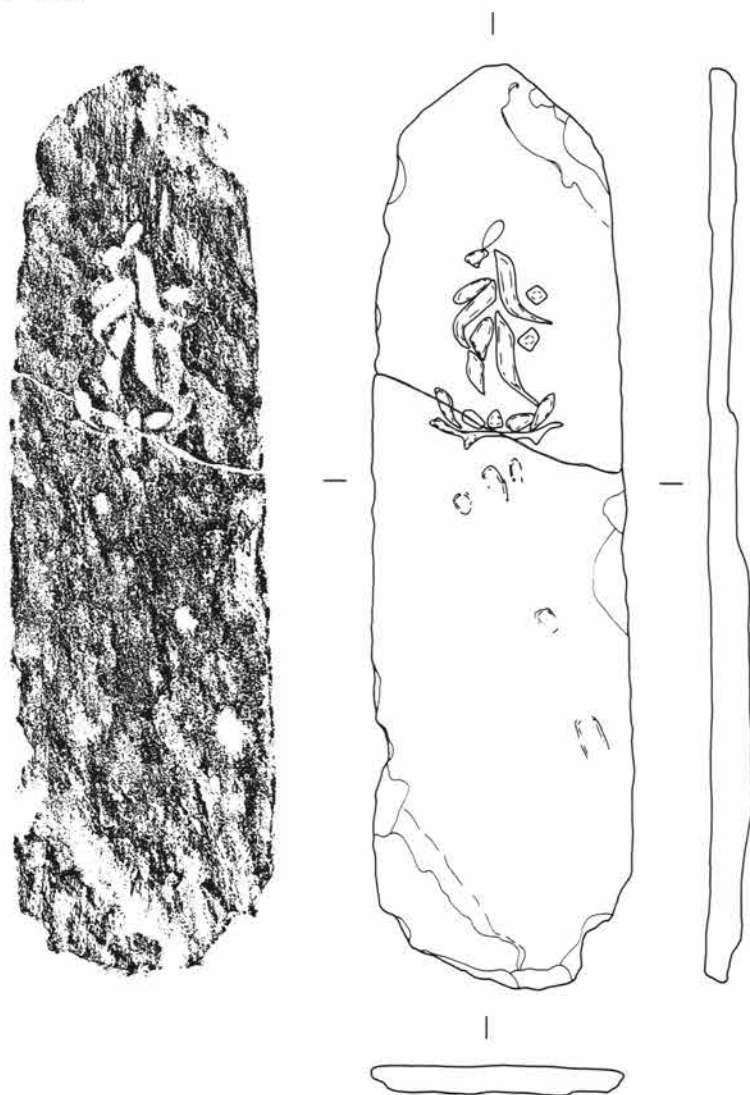
No.	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 坏 覆土	15.2・10.0・4.1 1/6 細砂粒・粗砂粒 還元焰 灰白色	体部下位は丸味をもち、体部から口縁部まで外反する。体部下位は回転ヘラ削り。
2	須恵器 坏 覆土	14.2・9.8・3.4 1/5 細砂粒 還元焰 灰色	平底。体部から口唇部まで直線的に開く。底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ撫で。
3	須恵器 坏 覆土	—・6.2・—、1/8 細砂粒・黒色鉱物 粒 還元焰 灰色	体部は直線的に外反する。底部は回転糸切り未調整。
4	須恵器 高坏 覆土	39.8・13.0・10.6 3/4 細砂粒 還元焰 灰色	坏部は、口唇部が垂直に折り曲げられ、坏蓋と同様の形態を示す。脚部は2条の沈線が巡り、裾部は大きく開き、端部が垂直ぎみに折れ曲がる。坏部は下位に右方向の回転ヘラ削りが施される。ロクロ整形。
5	須恵器 甃 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰色	口縁部小片。数条の沈線が巡り、沈線の間には櫛状工具による列点刺突文が施される。

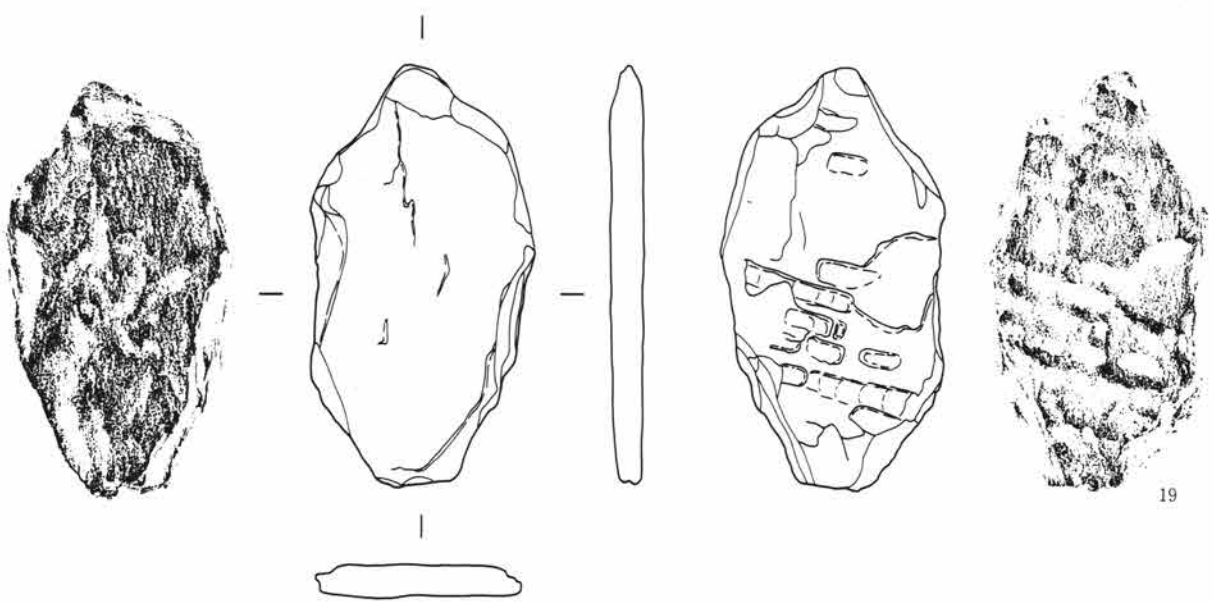
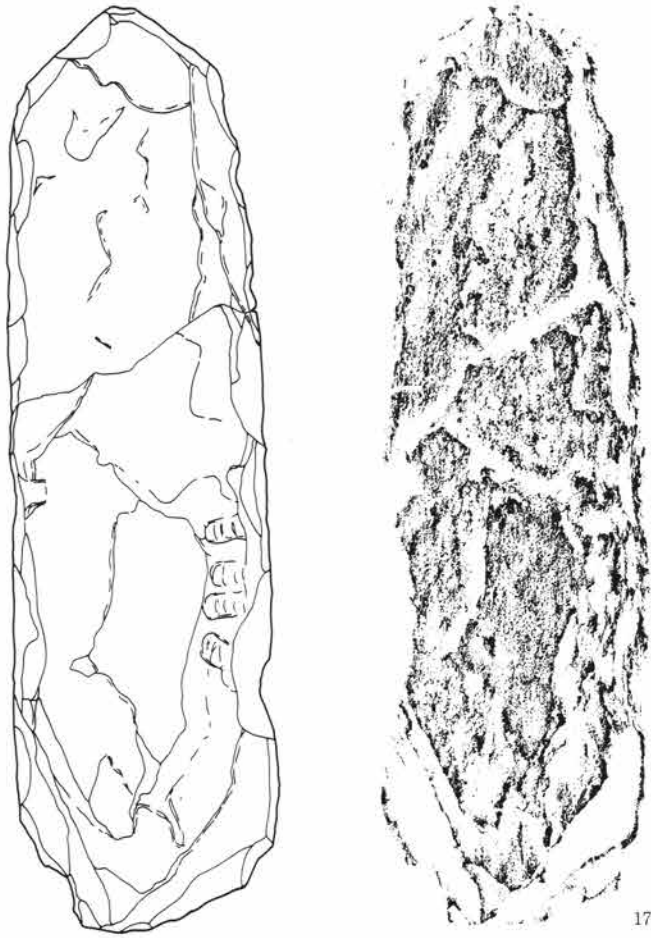


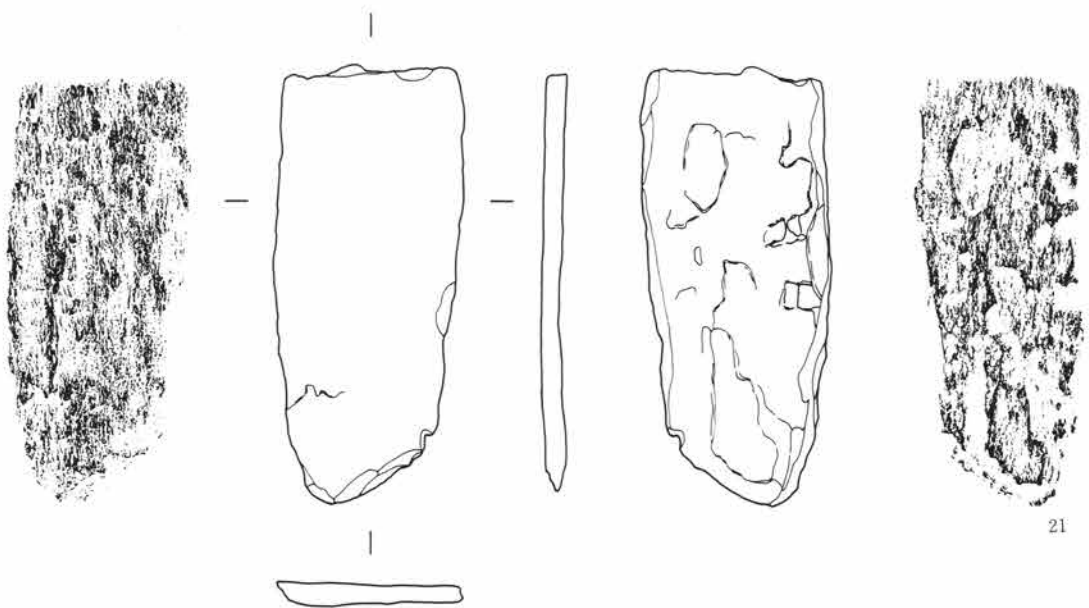
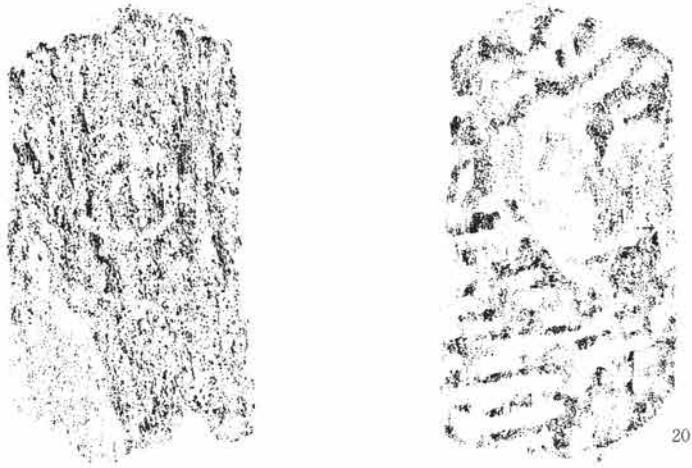
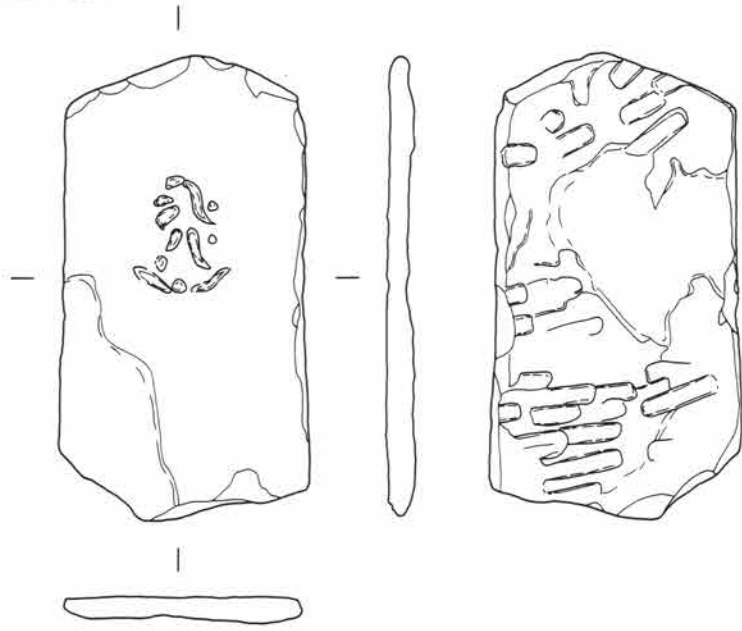


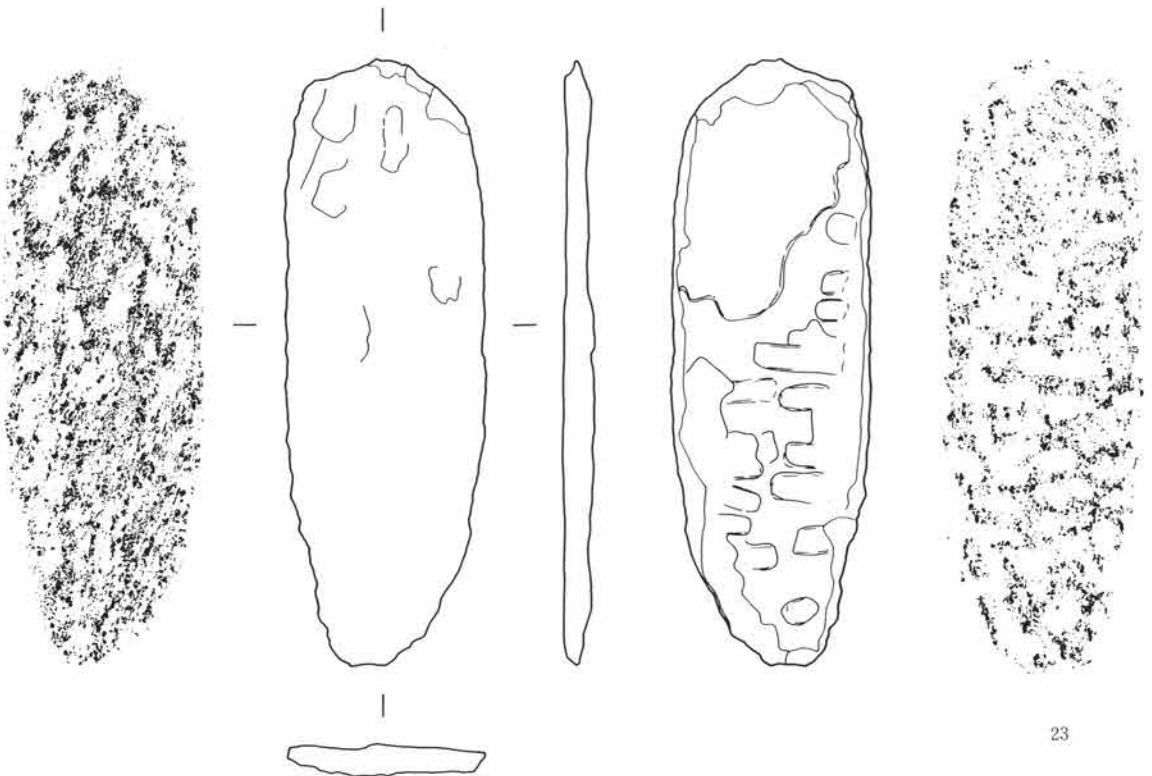
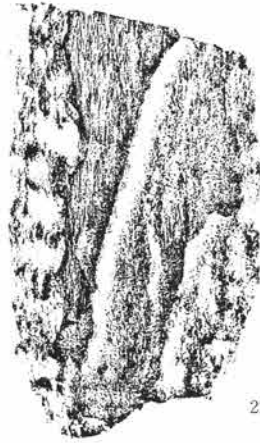
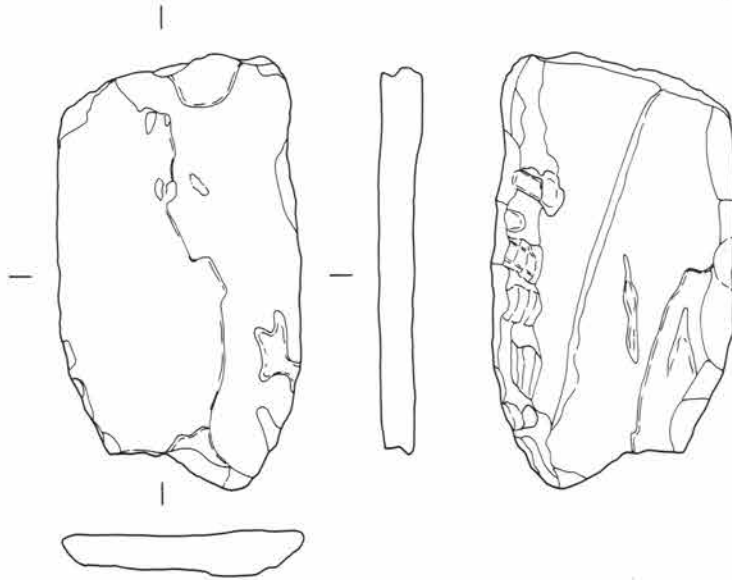


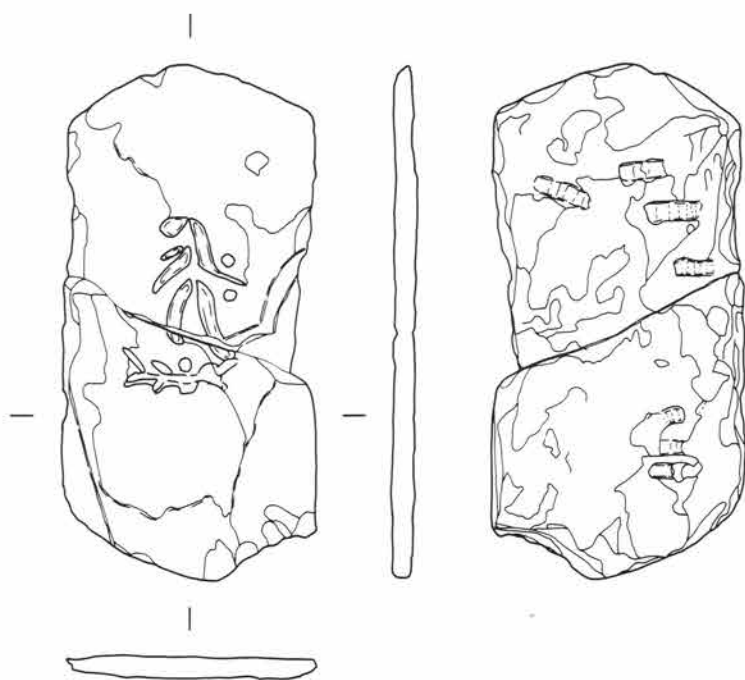
16



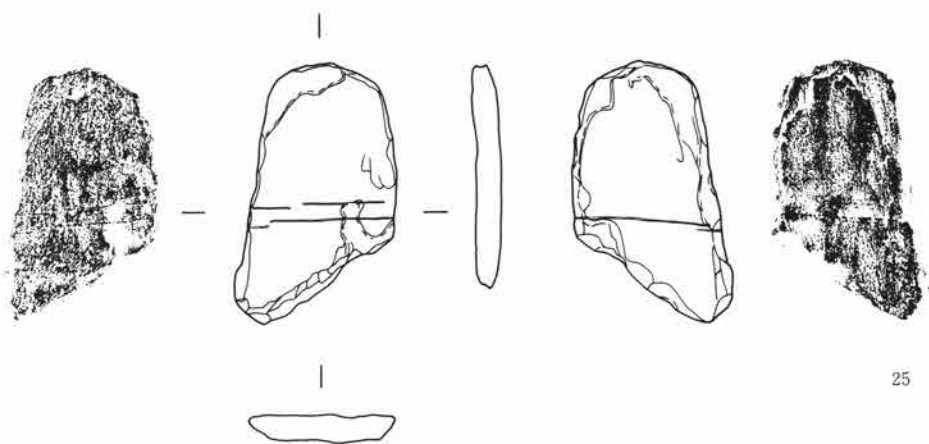




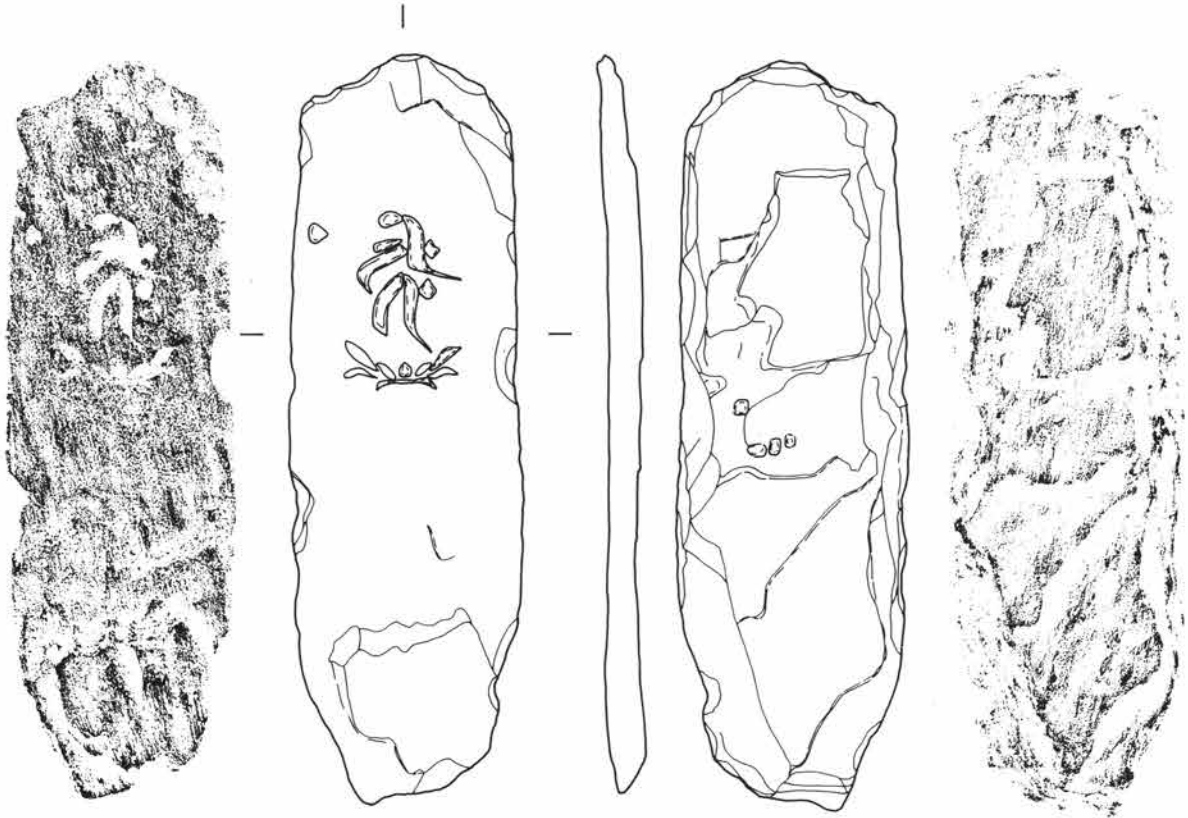




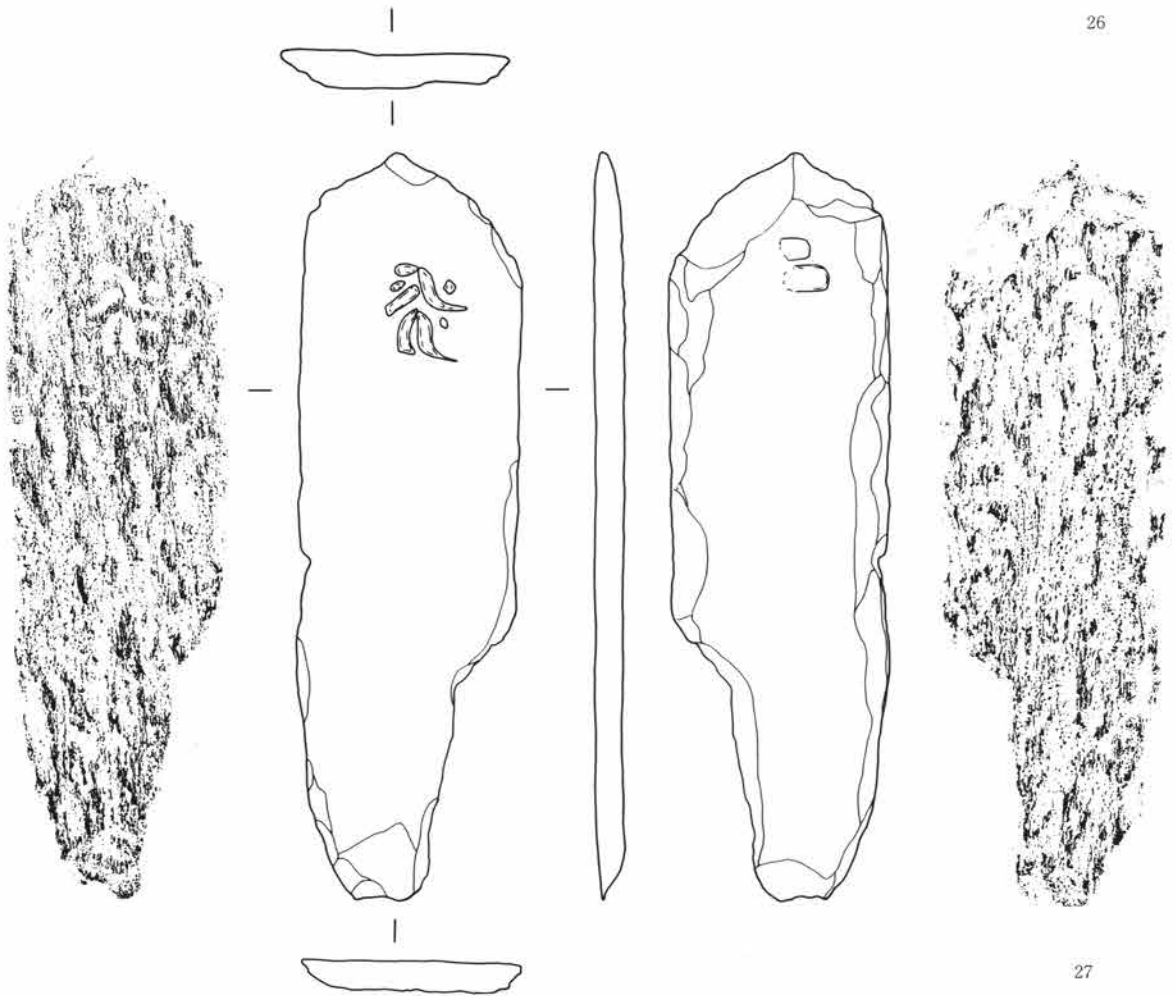
24



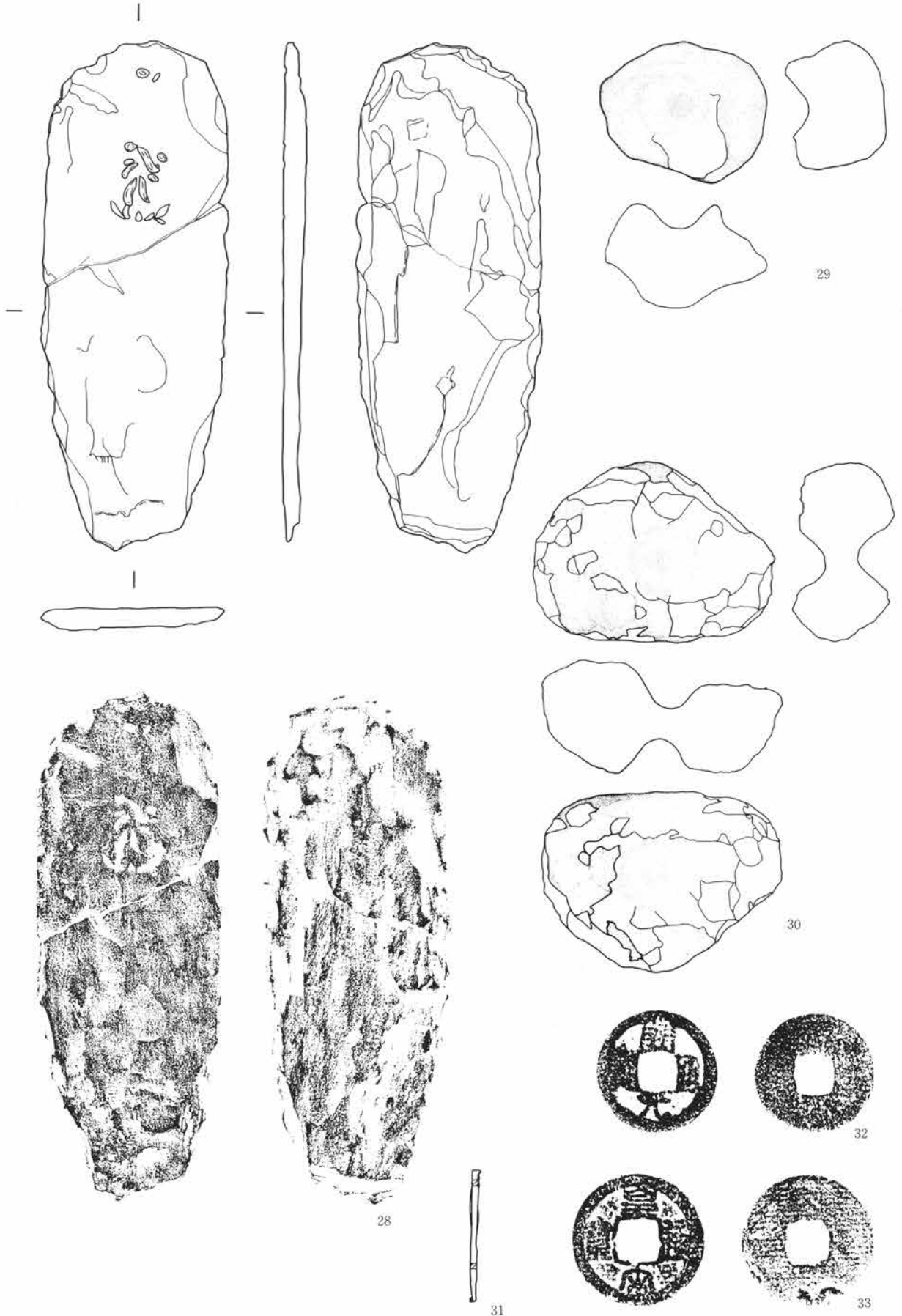
25

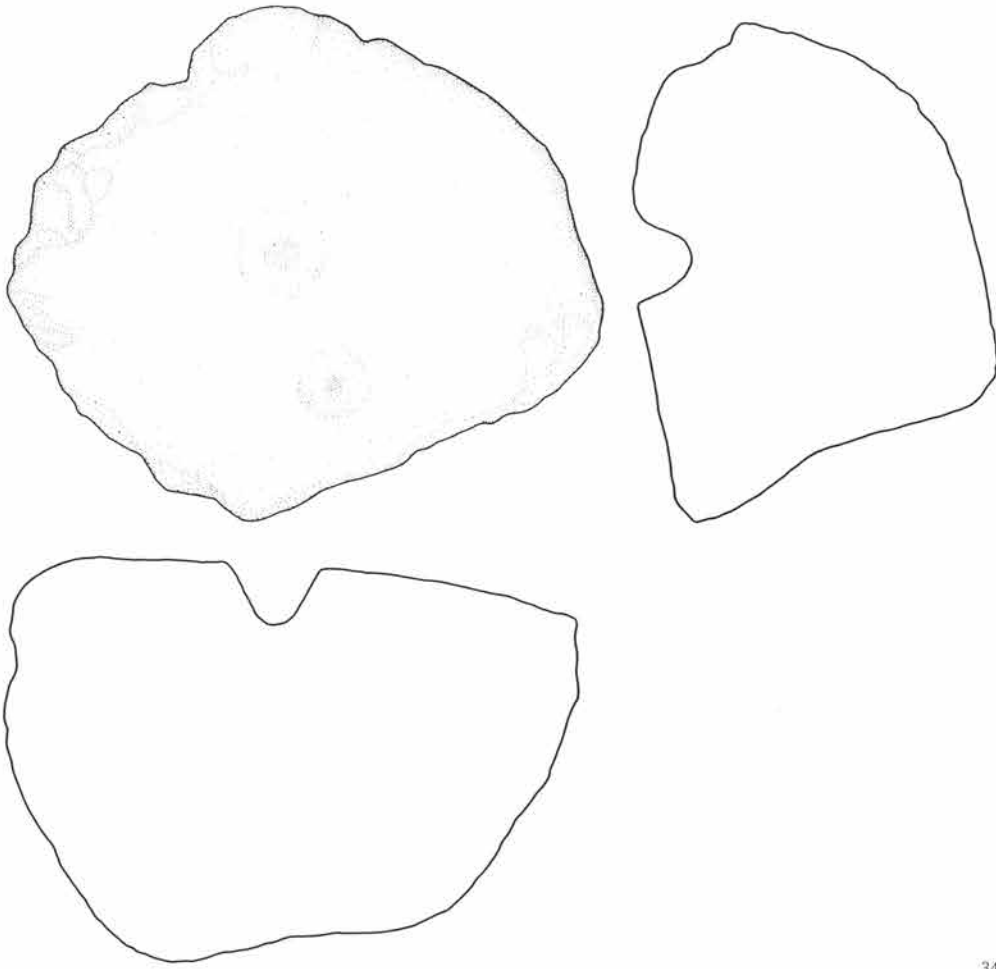


26



27



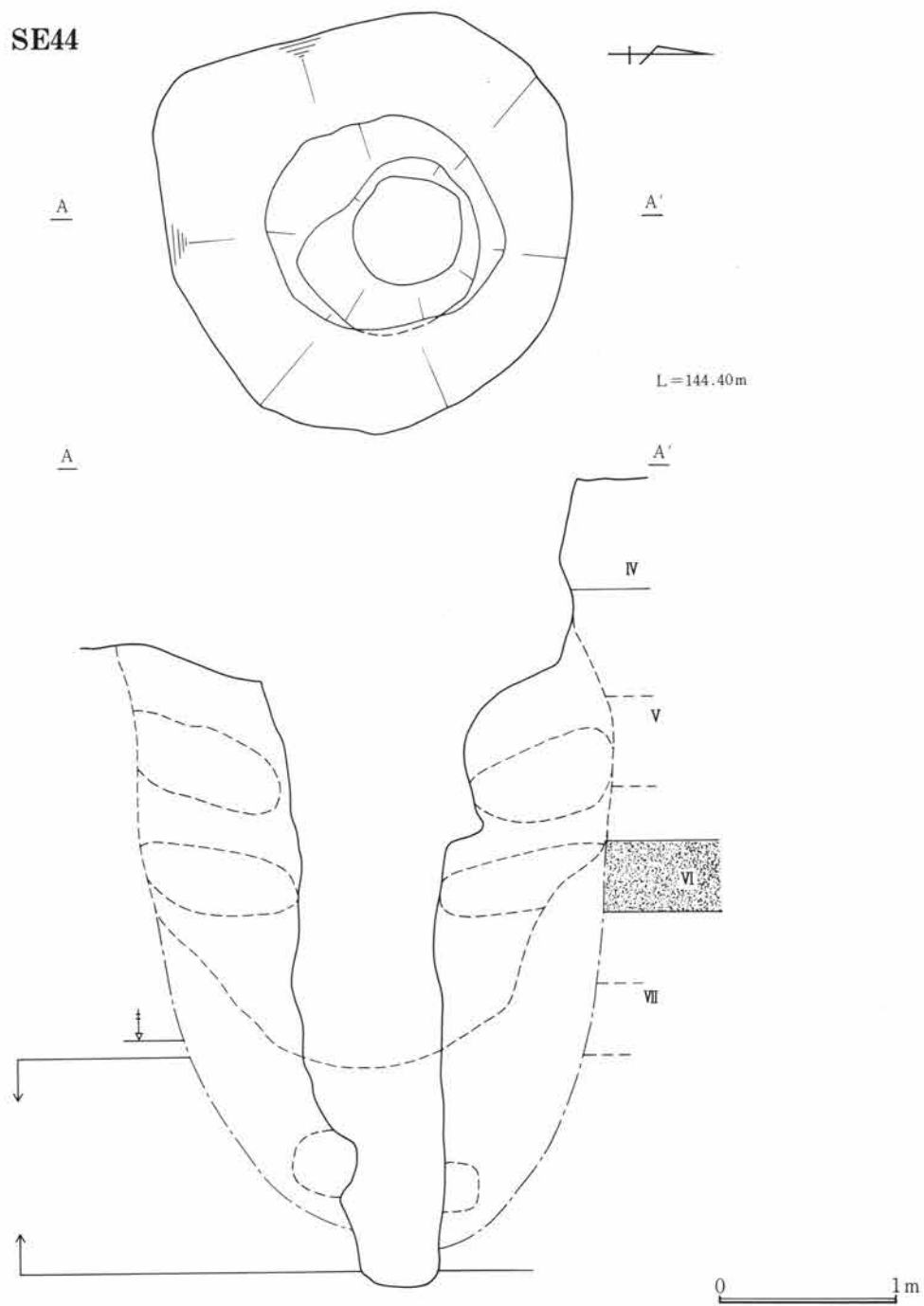


34

No	種 類	観 察 表 掲 載 頁	No	種 類	観 察 表 掲 載 頁
6	土師質土器 皿	824	17	板 碑	878
7	土師質土器 皿	824	18	板 碑	878
8	土師質土器 皿	824	19	板 碑	878
9	軟質陶器 内耳	814	20	板 碑	878
10	軟質陶器 内耳	814	21	板 碑	878
11	瓦	778	22	板 碑	878
12	石 白	846	23	板 碑	878
13	板 碑	877	24	板 碑	878
14	板 碑	877	25	板 碑	878
15	板 碑	877	26	板 碑	878
16	板 碑	878	27	板 碑	878

第3章 検出遺構・遺物

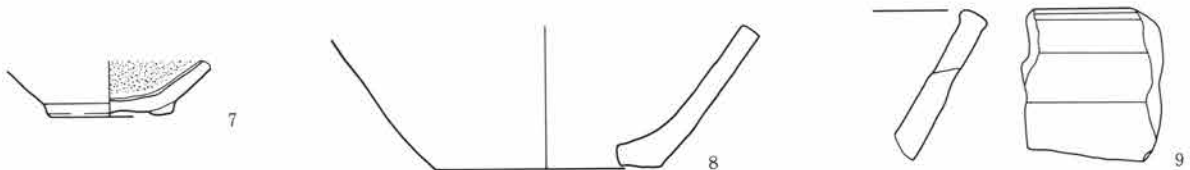
No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
28	板 碑	878	32	開元通寶	910
29	用途不明石製品	888	33	皇宋通寶	910
30	用途不明石製品	888	34	用途不明石製品	888
31	鉄製品 釘	895			



本遺構は、112~113G-44~45グリッドに位置し、S K306と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、地山井筒円筒形であるが、本遺構は一度崩壊したものを再び掘り直して再利用している。規模は、確認面で径2.38×2.25m、底面で径0.64×0.60m、深度は4.48mを測る。覆土は、確認面から3.0m以下は一次・二次の井壁の崩壊によるもので、3.0m以上は黒褐色土による自然堆積である。

本遺構は、一次崩壊時に落ちた上部の固結した砂を掘り直しており、その痕跡がみられる。また一次崩壊は最初の掘削からあまり使用されずにのこったことが湧水層や井壁から推察される。

No	種類・器種 出土位置	計測値・残存率・ 胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
1	土師器 坏 覆土	13.0・—・— 1/6 細砂粒 普通 橙色	底部から体部は僅かに丸みをもち、口縁部は直立する。体部は浅い。体部へラ削り、口縁部横撫で。
2	須恵器 蓋 覆土	19.6・鈕径3.4・ 2.3、1/4 細砂粒・黒色鉍物 粒 還元焰、灰色	焼成時の歪みが大きく、また天井部は自然釉が付着し、鈕には粘土の発泡がみられる。鈕は扁平。
3	須恵器 蓋 覆土	—・鈕3.2・ —、小片 細砂粒 還元焰 灰白色	天井部は水平に開き、器肉が厚い。鈕は輪状を呈す。ロクロ整形。
4	須恵器 蓋 覆土	17.8・—・—、小片 細砂粒・黒色鉍物 粒 還元焰 灰白色	天井部から口縁部まで緩やかな丸みをもって開く。天井部は器肉が厚く口唇部に向かって薄くなる。断面三角形のカエリがつく。
5	須恵器 高台付坏 覆土	—・12.6・高台径 12.2、小片 細砂粒 還元焰 灰白色	体部下位は丸みをもつ。底部は回転へラ削り。高台は小規模で内湾して貼付される。
6	須恵器 高坏 覆土	—・—・— 小片 細砂粒 還元焰 灰白色	坏部は皿状を呈すと推定される。脚部が接合される部分には、溝を数条つけて接着しやすいようにしている。ロクロ整形。



No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
7	天目茶碗	798	9	軟質陶器鉢	812

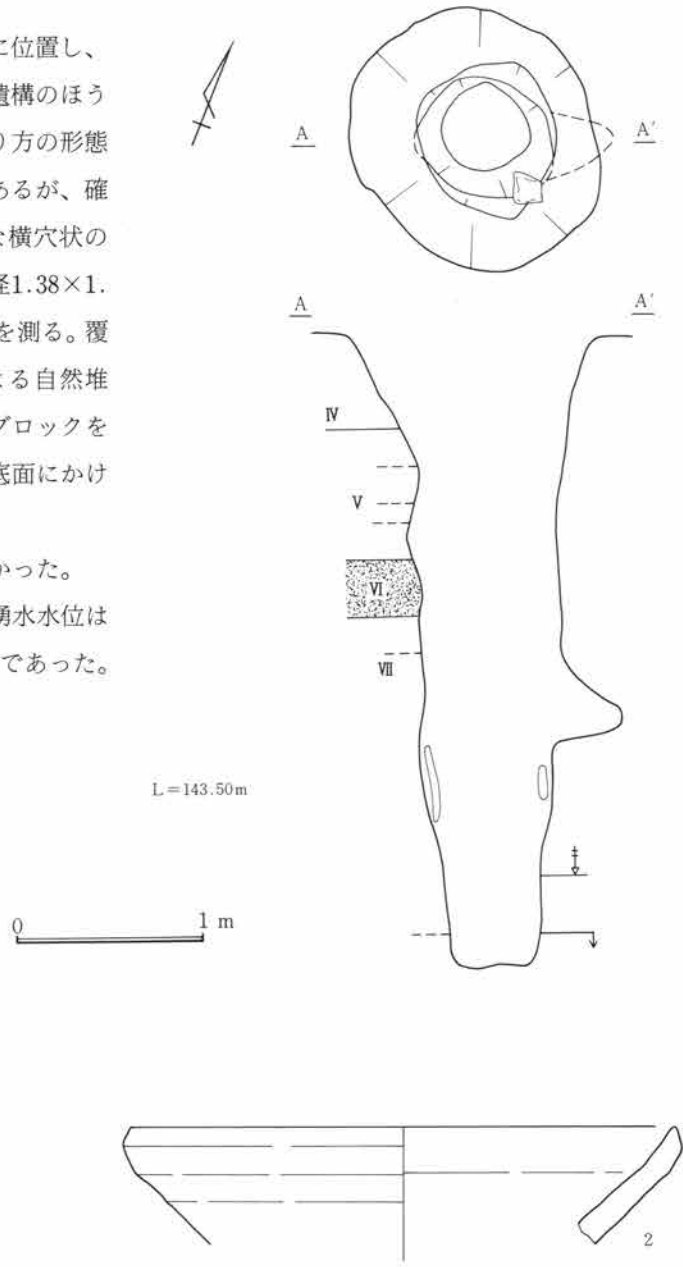
S E45

331

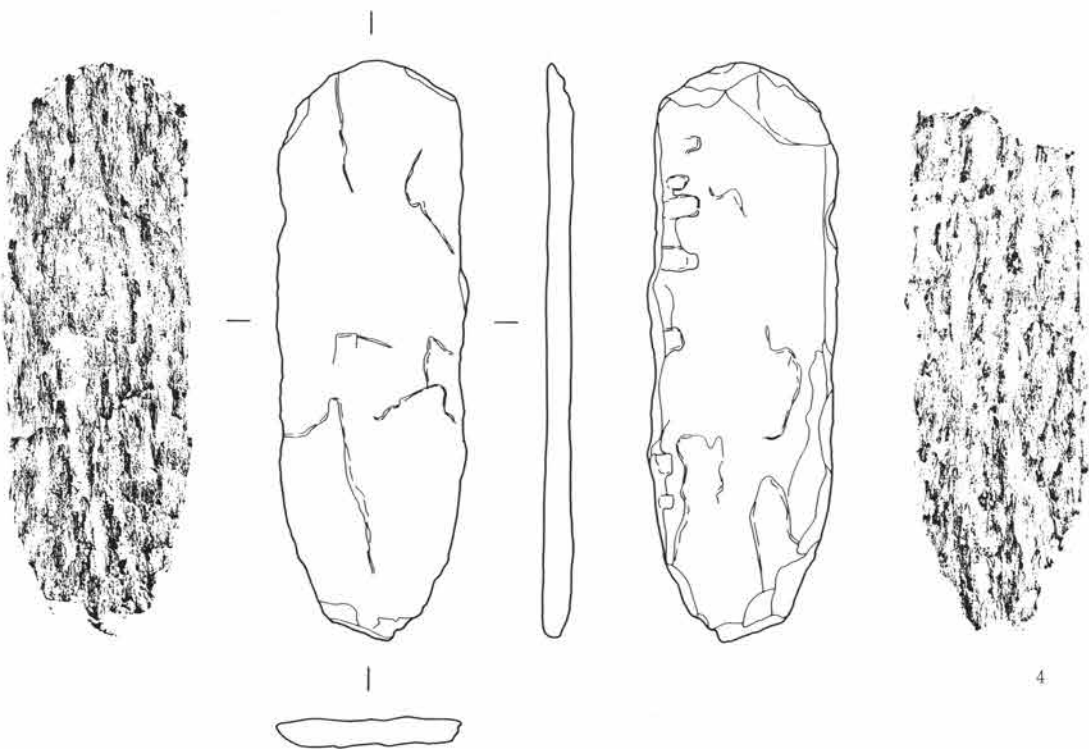
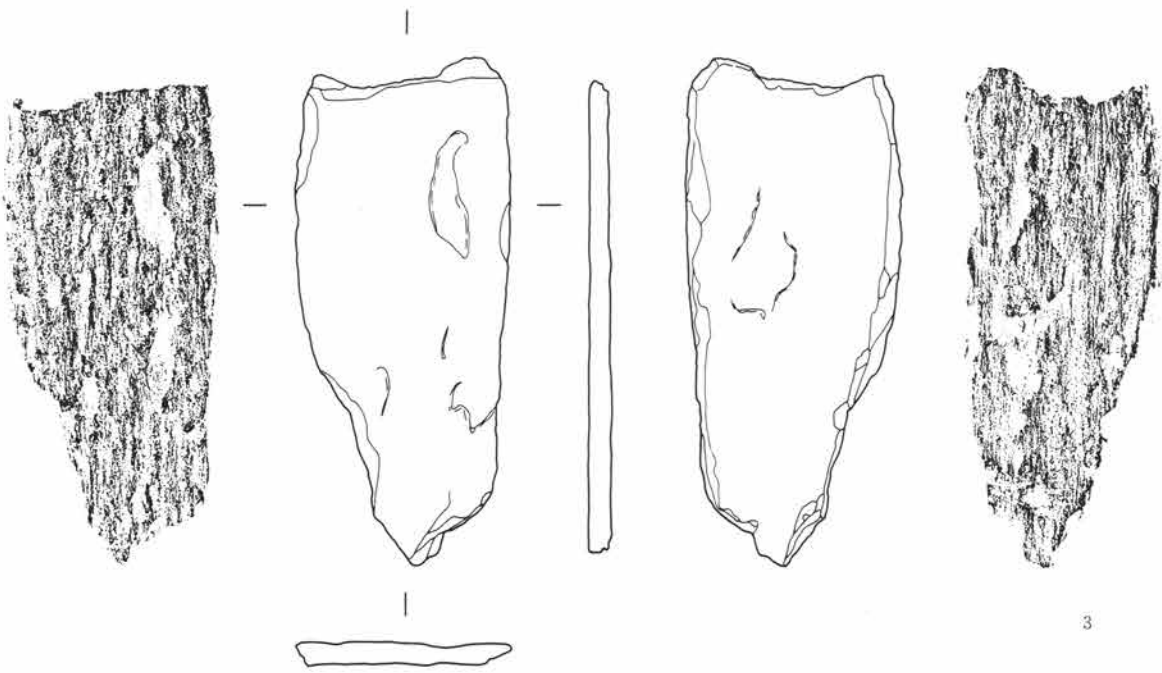
本遺構は、97～98G-47～48グリッドに位置し、畠状遺構と重複するが、新旧関係は、本遺構のほうが古い。平面形態は、楕円形を呈し、掘り方の形態は、残存状態の良好な地山井筒円筒形であるが、確認面から2.0m位の位置にS E40と同様な横穴状の掘り込みがみられる。規模は、確認面で径1.38×1.26m、底面で0.47×0.46m、深度は3.38mを測る。覆土は確認面から0.8m位まで黒褐色土による自然堆積、0.8～3.2m位まで円礫・板碑、ロームブロックを含む黒褐色土による人為的堆積。3.2m～底面にかけては灰黒色砂による自然堆積である。

本址では、井戸枠等の施設はみられなかった。

調査は、1984年2月に実施され、自然湧水水位は確認面より2.9m位のVII層中の灰色砂からであった。



No	種類	観察表掲載頁	No	種類	観察表掲載頁
1	石 臼	846	2	軟質陶器鉢	812



No.	種類	観察表掲載頁	No.	種類	観察表掲載頁
3	板碑	877	4	板碑	876

第4章 調査成果

第1節 遺構について

歴史時代（古代）の遺構について

1. はじめに

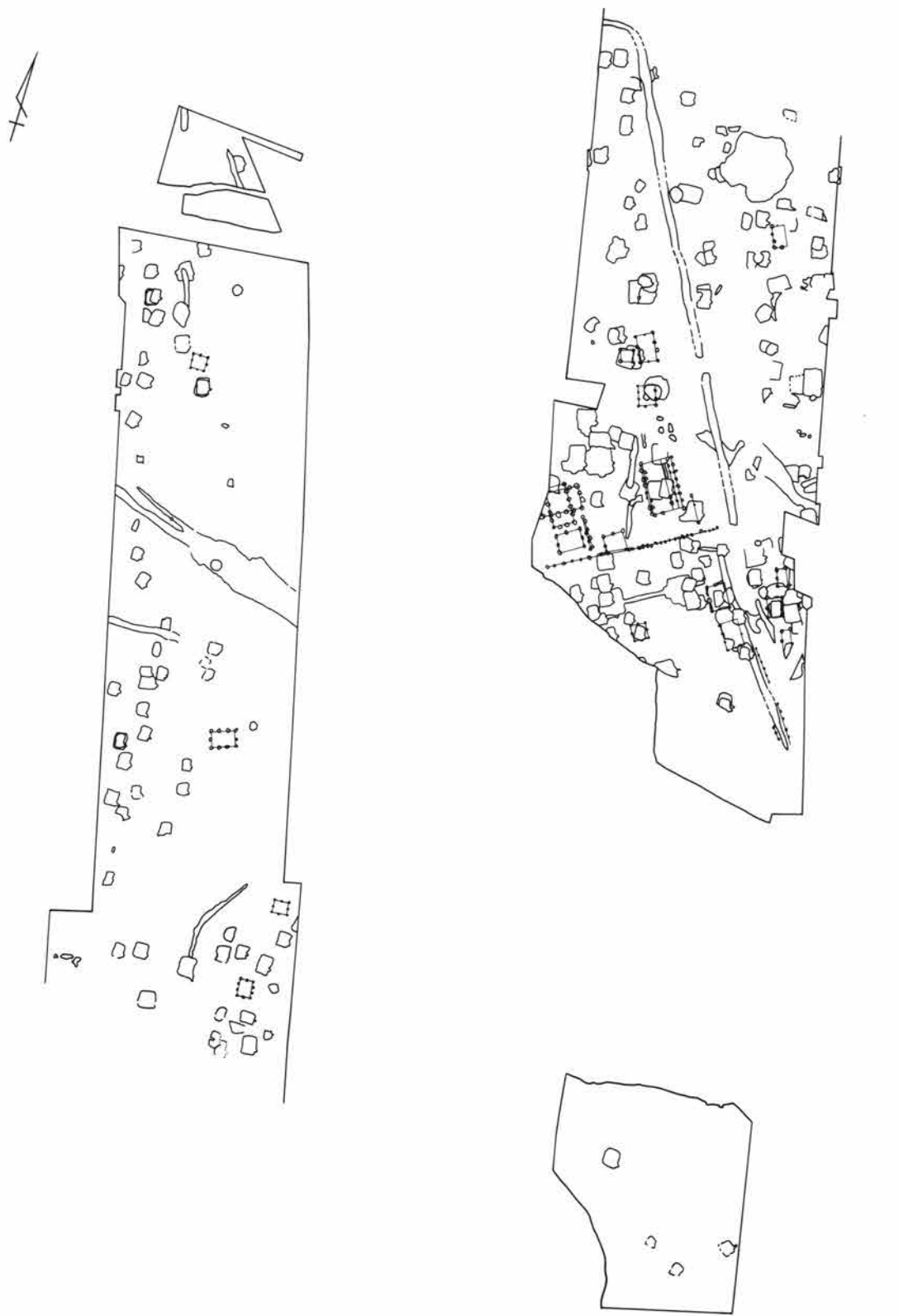
畿内においては、壬申の乱（672年）以後、大陸の政治制度を取り入れ、天皇集権による国家体制への整備がなされ、「飛鳥浄御原令」（689年）、「大宝律令」（701年）が完成され、律令による政治体制の確立により地方においても国一評（郡）一里（郷）からなる行政区画が設定され、地方にも律令制による中央支配が確立された。地方の支配は、評（郡）に旧来からの豪族を任命し、公民（一般農民層）を直接支配させ、さらにその監督に中央より国司を派遣して中央の頂点に立つ天皇をはじめとする貴族、その下の下級官人達の財政的基盤である地方の管理をおこなった。

下東西遺跡の歴史時代（古代）の遺構は、7世紀後半から11世紀にかけての遺構がほぼ継続的に検出され、律令制の確立期から崩壊期にかけての集落が存在していた。歴史時代（古代）の遺構は、竪穴住居（S J）197軒、掘立柱建物（S B）20棟、柵列（S A）7列、溝（S D）16条、竪穴状遺構（S T）10基、土塚墓（S Z）2基、土塚（S K）27基、井戸（S E）3基が検出された。遺構の分布を概観すると歴史時代（古代）の遺構分布図のようにNo.7 C・B地区からG・H地区にかけては竪穴住居同志の重複も多く密な状態であるが、No.8 C・B地区、H・I地区、No.9 C・B地区では、遺構の重複も少なく、分布は粗い状態である。また、H・I地区では、38軒の竪穴住居が検出されているが、その分布は調査区の西半分には片寄っている。E区では、竪穴住居が3軒検出されただけで閑散とした状態である。

下東西遺跡では、上記のような遺構がみられ、遺構の分布にもまとまりがみられる。歴史時代（古代）の竪穴住居から出土した土器は、後述の「第4章第2節 出土土器について『住居跡出土土器の変遷』」のように13段階の変遷がみられる。各段階の竪穴住居の様相をみると第III段階を除き一般的な集落、閑村的な様相を呈していたと想像される。第III段階は、S J 27・40・41・68・117・198が該当するが、特にS J 27は、二軒の竪穴住居を廊下で連結させた他に類例がみられない特殊形態の竪穴住居である。また、第III段階の他遺構には、S D 59・46がみられる。S D 59・46からは、多量の土器の他に陶硯などが出土している。S D 59・46に囲まれた内側には、孫廂をもつ大型掘立柱建物や柵列等の一般集落ではみられない遺構が存在しており官衙的な施設としての様相を呈している。このS D 59・46の区画内の施設が官衙であるか否か、またどのような性格をもつものであったか検討を簡単ではあるがおこなってみた。

2. 下東西遺跡の官衙的施設について

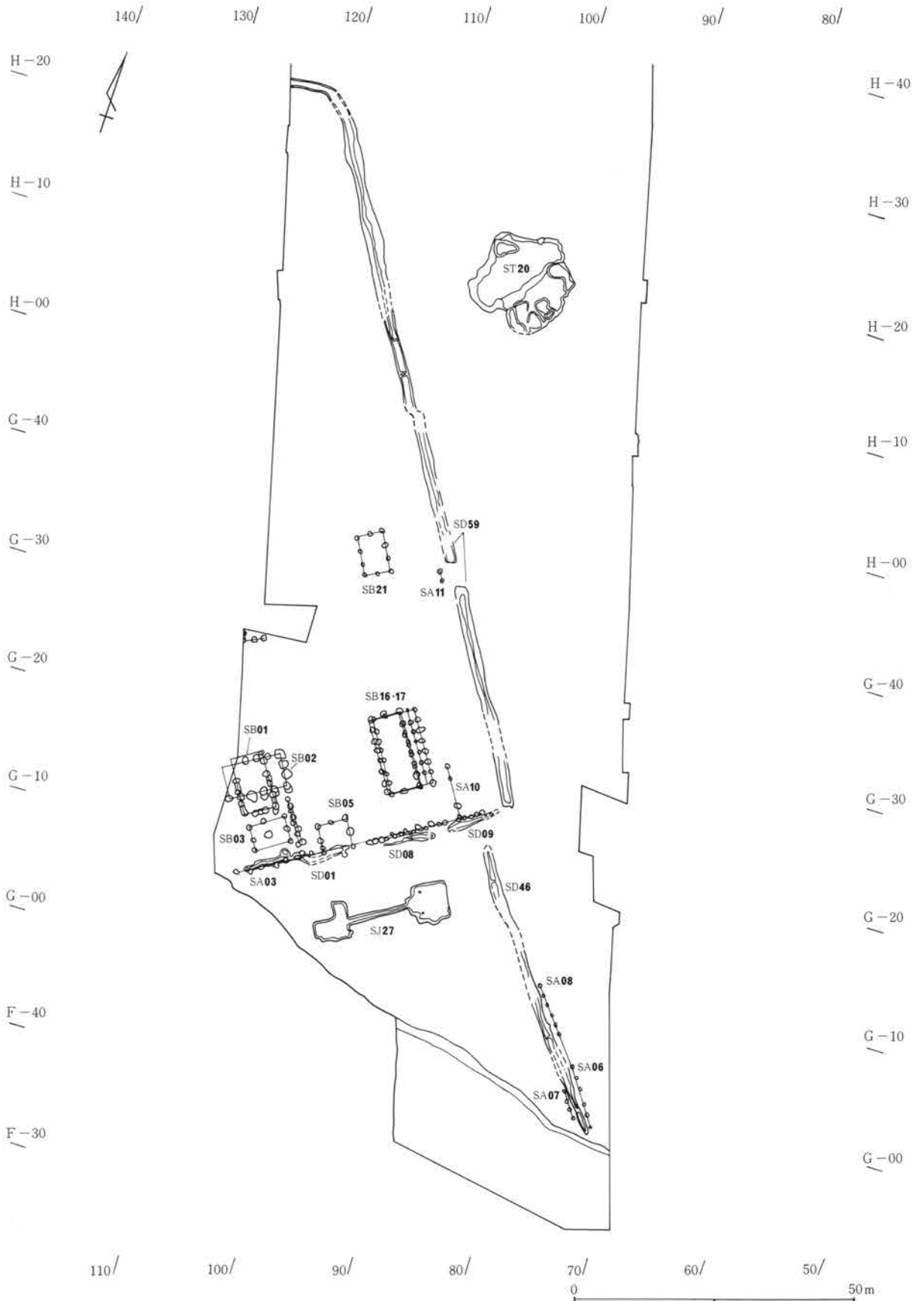
S D 59・46の内側には、竪穴住居57軒、掘立柱建物11棟、柵列5列が存在するが、そのうち第III段階の竪穴住居は、S J 27がみられるだけである。掘立柱建物・柵列は、出土遺物が少なかったり、全くみられなかったりして遺物からの時期の断定はおこなえなかったが、その規模・方向等を検討すると方向に規則性がみられ、施設に伴う建物はその建築にあたっては統制があったと考えられる。掘立柱建物は、S D 59・46の内外に20棟がみられるが、その方向は、N-86.5°-EからN-52°-Wの間の138.5°の角度の幅をもっているが、S D 59・46と同じ方向（S D 59の南北方向の走向をもつ部分は、N-30°-W、S D 46は、N-35°-Wである。）、または直行する方向をもつ掘立柱建物は、S B 01・02・03・05・11・13・15・16・17・21・24・25の12棟がみられるが、そのうちでS D 59・46の内側に位置するものはS B 01・02・03・05・13・16・17・21の8棟で



歴史時代(古代)遺構配置図

0 50m

第4章 調査成果



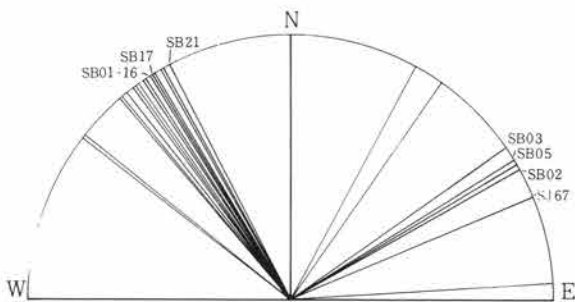
歴史時代(古代)初期の遺構

第1節 遺構について

ある。しかし、SB13は、SD46と重複し、SD46より古いためこの施設からは除くとSD59・46に囲まれた施設内には、竪穴住居としてSJ27、掘立柱建物としてSB01・02・03・05・16・17・21の7棟と柵列にSA01・02・03・06・08・07・10の7列の遺構がみられる。

各建物・設備等についてみてみると大きく施設の内外とを区別するための遺構としてSD59・46がある。SD59は、内側に土塁をもつことが覆土より観察される。また、本施設の東南東に位置するST20は、土塁構築の際の土量不足を補うための採土跡と考えられる。なお、SD59の南側部分と中間部分には、3mほどの溝の存在しない空白部分が存在するが、この部分からはSA11が検出されており、本施設への出入口が設置されていたと推定される。SD59の南側区画の区別には、SD46が検出されているが、SD46ではSD59のような土塁はみられないが、SA07が検出されていることから土塁の替りに柵列が設置されていた。しかし、SD46の東側にSA06・08が検出されていることから単に柵列だけの時期があったと推定される。

遺構No	内外 ※1	規 模	面 積 (㎡)	方 向
SB01	内	5間 (10.40)×3間 (5.64)	58.66	32.5°-W
SB02	内	5間 (10.64)×3間 (5.80)	61.71	60.5°-E
SB03	内	2間 (6.50)×2間 (4.42)	28.73	55.0°-E
SB04	内	2間 (4.19)×2間 (3.68)	15.42	41.0°-W
SB05	内	2間 (5.40)×2間 (2.90)	15.66	58.0°-E
SB11	外	3間 (4.40)×2間 (3.55)	15.62	28.5°-E
SB12	内	3間 (6.50)×2間 (4.80)	31.20	40.0°-W
SB13	内	3間 (6.60)×2間 (4.73)	31.55	32.5°-W
SB14	外	2間 (4.58)×		
SB15	外	2間 (4.80)×1間 (4.00)	19.20	36.0°-W
SB16	内	身舎 7間 (13.06)×2間 (5.40) 廂 孫廂 (13.06)×(2.56)	70.52 103.96 ※2	32.5°-W
SB17	内	7間 (13.06)×2間 (5.04)	65.82	32.0°-W
SB18	外			
SB19	外	2間 (3.78)×2間 (3.66)	13.83	86.5°-E
SB20	外	3間 (6.30)×2間 (4.20)	26.46	51.5°-W
SB21	内	3間 (7.06)×2間 (4.66)	32.62	27.5°-W
SB22	外	3間 (5.44)×2間 (3.50)	19.04	35.5°-W
SB23	外	1間 (3.28)×1間 (3.08)	10.10	52.0°-W
SB24	内	3間 (5.05)×2間 (4.50)	22.72	38.5°-W
SB25	外	2間 (3.90)×2間 (3.22)	12.56	38.5°-W



掘立柱建物・柵列方向

遺構No	柱間	規模(m)	方 向
SA01	4間	8.40	29.5°-W
SA02	3間	7.20	29.0°-W
SA03		45.44 ※2	59.0°-E
SA06・08		20.53 ※2	34~37°-W
SA07		5.40	33.5°-W
SA10	4間	2.40	31.5°-W

※1 SD59・46の内・外側のどちらに位置するか。

※2 残存部分での規模

第4章 調査成果

施設の内と外とを区画するものは、以上のようなものが存在するが、内部を大きく区画するものとしてS A03が検出されている。S A03の北側と南側では、存在する建物に大きな差がみられる。まず、南側には、廊下で連結された竪穴住居であるS J27が存在するだけで掘立柱建物は検出されていない。北側では、S B16・17をはじめとする掘立柱建物群が存在しており、S A03の北側と南側では、その様相に大きな差がみられることから本施設の主体はS D59とS A03の区画内部に存在していたと考えられる。内部の建物の配置等は、調査範囲が関越自動車道の路線巾内であるため不明であるが、S B16→S B17、S B01・02、S A01・02の重複から建替えがみられる。なお、本施設の規模・範囲は、調査が路線内ということもあり全貌は明確ではないが、本遺跡の西約150mの地点を1980年に前橋市教育委員会が「清水上遺跡」として発掘調査を実施しているが、その際には官衙的遺構は検出されていないことから本施設は東側をS D59・46によって区分され、北側はS D59が調査区域内の西端でほぼ直角に曲がりそのまま直線的に延びると推定される。西・南側は、八幡川の旧河道による開折谷を利用していると推定される。主施設の存在したS D59・S A03の区画は、S A11の存在や開折谷の利用から考え、東側を正面としていたと推定され、S D59の南北走向部分は長さ150mを測り、東北走向部分も開折谷まで150mであることから約1町半の方形区画を意識して構築されている。

本施設は、出土遺物から7世紀末から8世紀第I四半期にかけての限定された時期に存在したものであるが、本施設の前段階一住居跡出土土器の変遷の第II段階一の竪穴住居にはS J20・204がみられるが、本施設構築にあたりS J204はその覆土より短期間に埋め戻されたと推定される。

以上のように土塁をもつ区画溝、内部区画のための柵列、孫廂をもつ大型掘立柱建物、部分的な遮幣施設などの官衙的要素をもつ遺構の存在、S J27にみられる他に類似をみない特殊な形態の竪穴住居が存在しており、律令制の確立した同時期においてこのような特殊な形態の竪穴住居を一般農民層が所有できたかは疑問であり、このような特殊な形態の竪穴住居の所有には、律令体制の規制の枠から除外されるような特権をもった階層の人間であったと推定される点や本施設構築の際にみられる前段階の竪穴住居の撤去など権力を伺い知ることができる点などから本施設は官衙・官衙に準ずるものであったと推定される。

3. 本施設の性格について

前記のように下東西遺跡におけるS D59・46の区画内部は、遺構の在り方、遺物の様相から官衙的施設と推定されるが、地方官衙としては、国衙・郡(評)衙・駅家・官衙的施設・在地有力豪族の私邸等の推定がなされる。しかし、国衙にしては、規模が小規模であり、また今までの研究から国衙は概ね前橋市元総社町に存在したことが知られている。また、駅家としては、東山道よりはずれており、延喜式では「坂本・野後・群馬・佐位・新田」の各駅が記載されており、下東西遺跡に駅家が設置されていたとは考えられない。なお、官衙的施設と在地有力豪族の私邸等については、今まで調査例もなく実態が不明であり、下東西遺跡における調査も一部分であることから可能性はあるものの現状では検討には至らない。残る可能性としては郡衙があげられ、全国的にも郡衙の調査は多く、下東西遺跡との比較・検討が可能である。

まず、群馬県内における官衙遺跡・官衙的遺跡としては、現在まで国衙の調査が部分的に実施されている他、十三宝塚遺跡(佐波郡境町伊与久)、上西原遺跡(前橋市下大屋町)、新保遺跡(高崎市新保町他)、上野国分僧寺・尼寺中間地域(群馬郡群馬町東国分他)、入谷遺跡(新田郡新田町村田)の5遺跡がみられる。十三宝塚遺跡は、溝・柵列で区画された台形状の区画内部に版築基壇が2ヶ所と50棟以上に及ぶ掘立柱建物群が3ヶ所で検出され、佐位郡郷名刻字瓦・多量の墨書土器・奈良三彩陶片(火舎脚部・鉢・盤・壺・小壺)などが出土しており、佐位郡衙としての可能性が考えられている。上西原遺跡は、十三宝塚遺跡に酷似しており、溝・柵列による区画内部に版築基壇をもち、勢多郡名の刻印瓦が出土していることから勢多郡衙では

ないかと推定される。しかし二遺跡とも瓦塔・塑像残片など仏教的要素をもつ遺物が出土していることから寺院としての考え方もみられ、今後の整理・分析がまたれる。新保遺跡は、大型掘立柱建物・総柱の倉庫的掘立柱建物群とその建物の配置から官衙的遺構と推察されている。上野国分僧寺・尼寺中間地域においてもⅠ区における掘立柱建物・総柱の倉庫的掘立柱建物群の存在とその配置から官衙的遺構と推察されている。入谷遺跡は、版築基壇有礎瓦葺の総柱の建物等が検出されていることから、東山道新田駅としての可能性が考えられている。遺跡・遺構では、以上のようなものがみられるが、上野国の郡衙については、「上野国交替実録帳」に各郡衙の内部施設についての記載がみられる。「上野国交替実録帳」の郡衙の項については前沢和之氏の論考(『上野国交替実録帳郡衙項についての覚書』群馬県史跡7 1978年)により、その内容は明らかであるが、「上野国交替実録帳」は、11世紀の国司交替の際に作成された文書であり、下東西遺跡の施設が存在した8世紀初頭とではそのまま比較はできないと思われる。下東西遺跡は、古代上野国では「群馬郡」に位置するが、群馬郡内では、「上野国交替実録帳」に記載された建物群をもつ遺跡、または、郡衙と推定されるような遺跡・遺構の検出は現在まで発見されていない。

郡衙の研究・発掘調査は、全国的には多くおこなわれているが、そのなかでも山中敏史氏の一連の研究(「国府・郡衙跡調査の歴史」『仏教藝術124』1979年、「評・郡衙の成立とその意義」『文化財論叢』1983年、「国衙、郡衙の構と変遷」『講座日本歴史 2』1984年等)は高い評価を得ている。山中氏の研究のなかで提示された郡衙としての条件と下東西遺跡とを比較してみると、次のようになる。

下東西遺跡にみられる郡衙的要素

- (1) 外部との区画のための土塁・柵列をもった溝が存在する。
- (2) 孫廂をもった大型掘立柱建物が存在し、その建物の方向が一定で規則性がみられる。
- (3) S D59より多量に出土した土器は、供膳形態のものが圧倒的に多く、そのなかでも暗文を有する土器(坏)が多く含まれている。
- (4) 円面硯の出土がみられ、さらに朱書の痕跡をもつものが一点みられる。
- (5) 周辺遺跡には、山王廃寺跡(放光寺)、宝塔山古墳、蛇穴山古墳等当時でも高度な文化を有する遺跡がみられ、進んだ地域であった。

郡衙と断定するには不足する要素。(発掘調査が全域に及んでいないことが原因となる点が多い。)

- (1) 建物の配列形態が不鮮明である。
- (2) 倉庫施設と判断される総柱の掘立柱建物群が検出されていない。
- (3) 瓦葺きの建物がみられず、周辺においても瓦の分布がみられない。
- (4) 郡衙の適地は、周辺でも多くみられるのにわざわざ開析谷を背にして設置している。
- (5) 墨書土器の出土が全くみられない。
- (6) 特殊な形態ではあるが堅穴住居が存在する。

以上のように郡衙としての肯定的・否定的要素がみられるが、本施設の発掘調査が一部分であり、大部分は未調査であることや本施設が郡(評)衙成立の画期より若干の遅れはあるものの今まで調査された郡衙遺跡での設立期と近時していることや短期間しか施設されなかった郡衙例として陸奥国磐城郡衙と推定される根岸遺跡、常陸国河内郡衙と推定される西坪遺跡などがみられることや駿河国志太郡衙とされる御子ヶ谷遺跡のように必ずしも平坦な好条件の立地での設置だけでない郡衙が存在することから下東西遺跡も古代群馬郡の郡衙としての可能性はあると考えられるが、断定するにはまだ諸条件が不足しており、また在地有力豪族等私的な館などの可能もある。

中世遺構について

1. はじめに

下東西遺跡では、第4章第5節で述べたように中世に相当する遺構(P727、中世遺構配置図(1))が、竪穴状遺構(ST)10基、溝(SD)17条、地下式壇(SK)10基、土壇墓(SZ)13基、土壇(SK)88基、井戸(SE)40基が検出された。出土遺物も陶磁器・軟質陶器・土師質土器・砥石・石臼・石鉢・五輪塔・板碑・古銭・金属製品井戸杵・曲物等の生活用具や墓製にかかわるものが多数みられる。検出された遺構の配置を概観してみるとSD23からSD12の間とH・I区南半分に集中した配置がみられ、本遺跡における中世の様相をうかがい知ることができる。

2. 中世遺構の概略

各遺構別の配置等をみると竪穴状遺構は、G-45からH-10の間の調査区東よりにまとまりがみられ、ST01・03・04にみられる方形ないしは長方形を呈する形状で竪穴住居状に床面をもち、壁際に柱穴をもつ形態のものは接近して位置している。

溝は、特に集中した状態ではないが、E区を除いた調査区の南半分に大半が位置する。その走向は、SD23・118・119等にみられるN-90°~110°-Eの角度をもったものが多い。SD21及びSD98は、規模の大きなもので断面は近似している点からも同一のものと推定される。

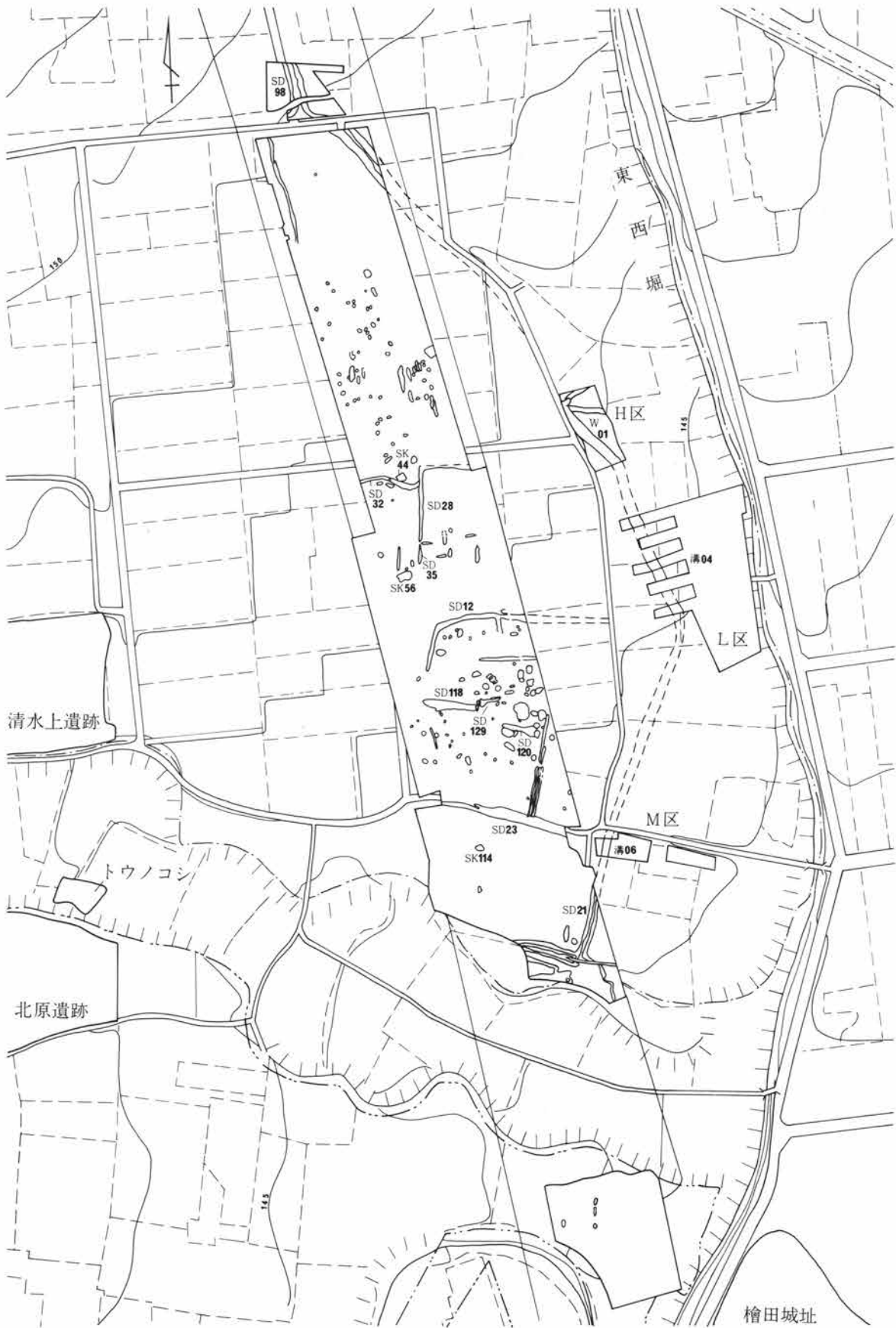
地下式壇は、SK44・144がややはずれているが、他のSK13~18・245・304は、H-00~10の間の東半分にまとまりがみられるが、入口の位置、主軸方向には統一性がみられない。

土壇墓は、SZ01・04・06がやや離れて位置するが、SZ02・03が近接し、SZ07・08・10・13~15のまとまりがみられるが、密集した状態ではない。

土壇は、SD23とSD12に囲まれた内とH・I区南半部に集中した分布がみられるが、多くの土壇は、出土遺物もみられず、性格も不明である。

井戸は、E区に1基、No.7C・B地区に1基、SD23とSD12に囲まれた内に24基、No.8C・B地区に3基、H・I区10に基、No.9C・B地区に1基がみられるが、H・I区とSD23・12に囲まれた内にまとまりがみられるが、SD23・12に囲まれた内に集中している。

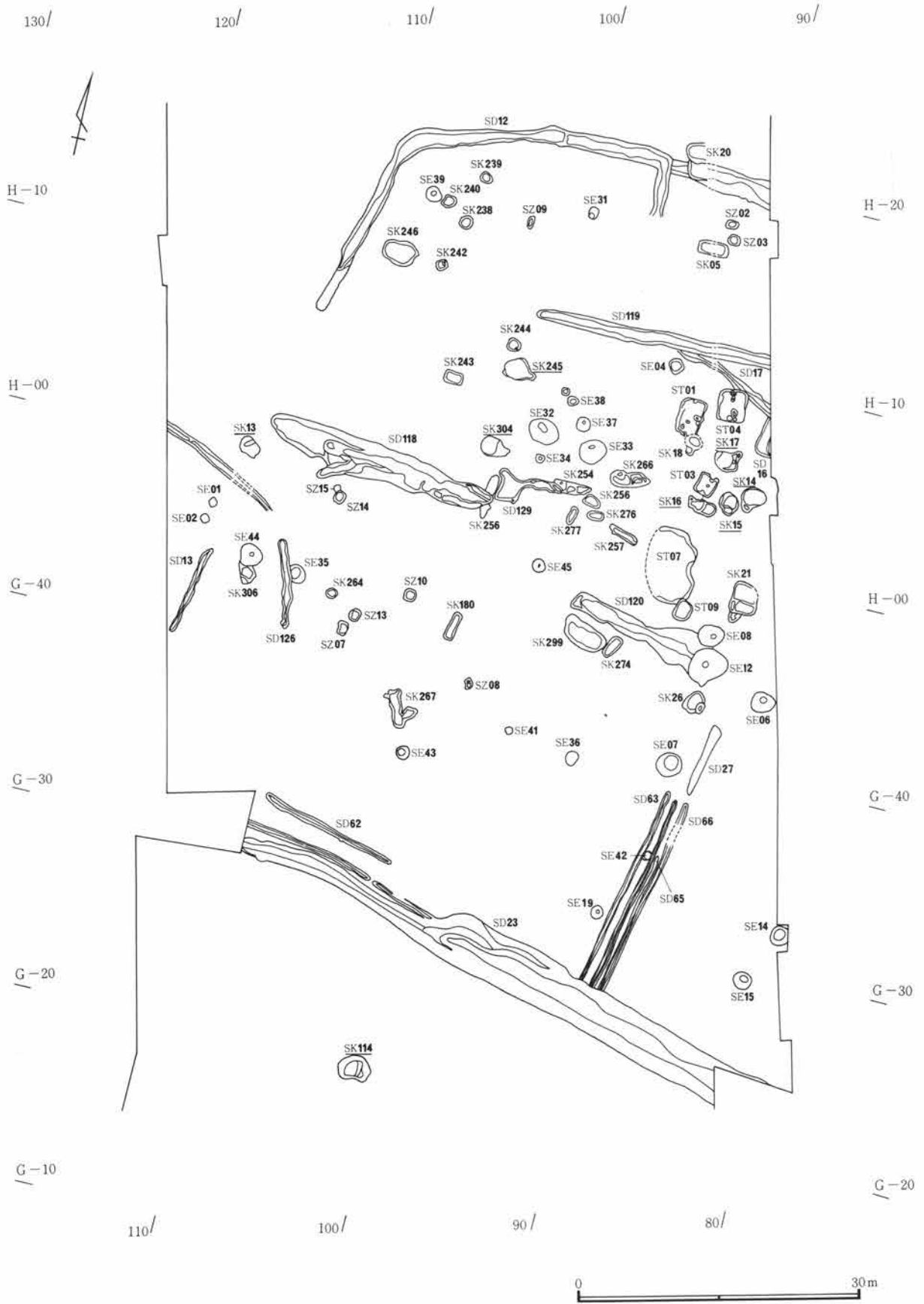
以上のように中世の遺構は、G-25からH-20までの間のSD23・12に囲まれた範囲に集中がみられる。また、SD23・12をみるとその走向は、SD23がN-105°-Eを指し、東西を直線的に位置し、途中で急激に規模が縮少する。SD12は、調査区の中程で東西方向の走向から南北方向へと方向を変えており、SD12は区画のための溝と推定できる。また、発掘調査前には、SD23上に農道が設けられており、中世の溝が埋没していく過程で道になったと考えることが可能であることから調査区の東側は圃場整備が実施されていないことから南北に通る農道は、古くから存在すると考えられ、南はSD23、西・北はSD12、東はSD12を東へ延長した交点から南側の農道による東西87m、南北85mの方形に近い形状の範囲は周囲との区分がなされた区画であると推定される。また、No.9C・B地区のSD98とNo.7C・B地区のSD21は、走向は全く反対ではあるが、規模・断面形態は類似している点とSD98は、前橋市教育委員会によって1979年度に発掘調査が実施された下東西遺跡H区の溝W-1⁽¹⁾と同じく1980年度に発掘調査が実施されたL区の溝4⁽²⁾に同一遺構と推定され、SD21は、同じく1980年度に発掘調査が実施されたM区の溝6⁽³⁾と同一遺構と推定されることから、SD98、H区W-1、L区溝4、M区溝6、SD21は同一の溝であると推定される。この溝の走向をみるとNo.9C・B地区でやや東よりに走向を変え、SD23・21による区画を迂回して設けられている。この溝は、



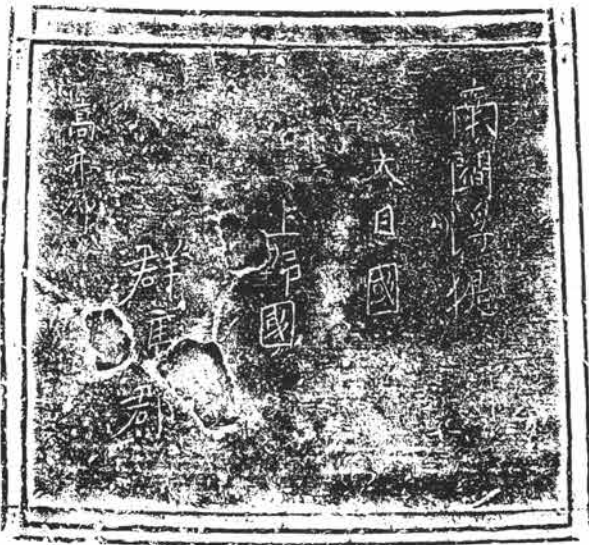
中世遺構配置図(1)

0 100m

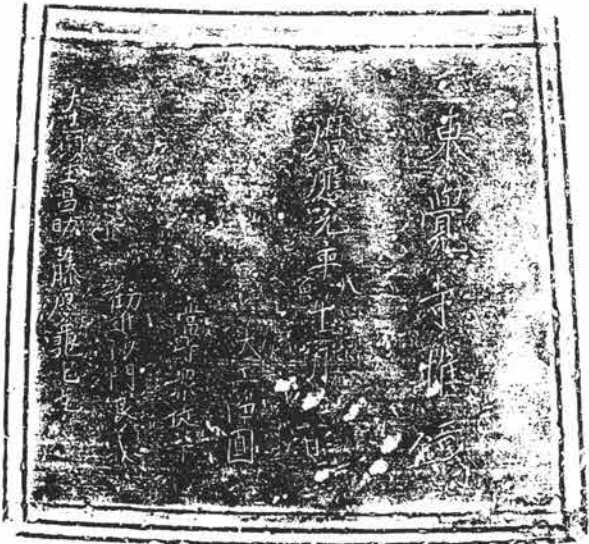
第4章 調査成果



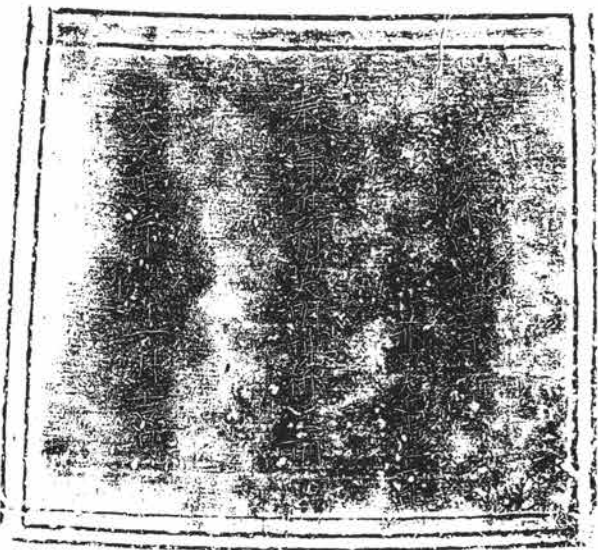
中世 遺構配置図 (2)



南 閻 浮 提
 大 日 國
 上 野 國
 群 馬 郡
 高 井 郷



東 覺 寺 推 鐘
 曆 應 元 年 戊 寅 十 二 月 廿 一 日
 大 工 淨 圓
 當 寺 衆 徒 等
 勸 進 沙 門 良 義
 本 願 主 昌 助 藤 原 龜 之 丸



信 州 佐 久 郡 田 口 神 宮 寺
 且 那 田 口 左 近 將 監 長 能
 奉 寄 進 神 海 大 明 神 御 宝 前
 天 文 十 二 年 癸 卯 十 一 月 吉 日

東覺寺梵鐘拓影図(長野県佐久郡白田町上宮寺蔵)に4

第4章 調査成果

土層断面、底部の様相から用水としての機能をもっていたと考えられる。

下東西遺跡では、中世においてS D23・12に囲まれた範囲の区画の内に各種の遺構群が存在しているがその区画がどのような性格をもつか推察してみたい。S D23・12の溝に囲まれた区画の内には、竪穴状遺構4基、溝7基、地下式塚7基、土塚墓10基、土塚24基、井戸24基が検出され、中世遺物の大部分がこの区画の内より出土している。出土遺物は各遺構ごとに出土量に差がみられ、出土遺物の全くみられない遺構もあり性格も明確でないものもある。各遺構別にその性格と時期について概観してみたい。

竪穴状遺構は、S T01・03・04にみられる方形、長方形の平面形態を呈し、床、壁際の柱穴をもつ竪穴住居状のものとS T07等の大型の土塚状のものがみられる。S T01・03・04からは、遺物が全く出土していないため覆土から時期を推定したが、近年の発掘調査においても同様の遺構が、渋川市中村遺跡⁽⁴⁾、群馬町上野国分僧寺・尼寺中間地域⁽⁵⁾、栃木県国分寺町下古館館跡⁽⁶⁾、東京都町田市小山田遺跡群No.1遺跡⁽⁷⁾等で検出されている。中村遺跡では、カワラケ・青磁器・瀬戸・美濃系・渥美・常滑等の陶器、宋銭等が出土し⁽⁴⁾、下古館館跡では14世紀代の遺物の出土⁽⁸⁾、小山田遺跡では15世紀末の天目茶碗が出土していることから各遺跡において中世に位置づけられており下東西遺跡のものも同じ時期と推定される。

地下式塚は、全て天井部が崩落し、良好な残存状態を呈するものはみられない。出土遺物もS K304の入口部で板碑が2基みられるだけである。S K304出土の板碑は、概そ15世紀前半の年代観があたえられる。地下式塚は、近年県内でも調査例が増えているが、出土遺物は少なくその性格を明確にできるものはなかったが、群馬町国分境遺跡で検出された地下式塚は、出土した遺物の出土位置や覆土の状況から平安時代の墓塚⁽⁹⁾と考えられている。最近の中田 英氏⁽¹⁰⁾、半田堅三氏⁽¹¹⁾、池上 悟氏⁽¹²⁾の論考によっても地下式塚が中世における埋葬施設とされた点からも下東西遺跡における地下式塚も中世墓と推定される。

土塚墓は、S Z09において火葬がおこなわれた可能性がある他は、直葬と考えられる。出土遺物は、S Z02より16世紀代の陶器三耳壺、S Z07・10・13より土師質土器の皿・香炉が出土しており15世紀後半から16世紀前半の年代観があたえられる。その他、唐銭・宋銭・明銭などの渡来銭の出土がみられる。

井戸は、S D23・12の区画の内に24基と多くみられるが、下東西遺跡における基本的土層が水性火山灰・砂礫による互層でほとんどの井戸壁でアグリがみられることから、その使用期間は割合短期間であったことが推定される。井戸からの出土遺物は、陶磁器・板碑・五輪塔・石臼・石鉢など多数みられ、各遺物の年代観も概そ14世紀前葉から16世紀中葉に位置する。しかし、井戸からの出土遺物は、井戸の廃棄による不用品の投げ込みが大多数であると考えられ、遺物の年代観と井戸の時期とは一致できないが、2～3基の井戸が同時に存在していたと推定される。

土塚は、数多く検出されているが、遺物の出土しているものは少なく、S K240・254・260・268・299だけで概そ15世紀後半から16世紀前半にかけての遺物が主体であるが、S K299からは、陶器甕片、15世紀後葉から16世紀前葉の内耳鍋片、15世紀後半の土師質土器皿、多量の板碑破片及び緑泥片岩片が出土している。板碑の内には14世紀代のものもみられる。

各遺構の年代観を概観してみると以上のようなようである。遺物についての詳細な検討は、後述の陶磁器、石製品の項にておこなわれているので参照して下さい。

3. 周辺遺跡の様相

下東西遺跡における中世の遺構・遺物はおおよそ以上のようなようであるが、周辺遺跡においても多くの遺構・遺物が検出・出土されている。南側の北原遺跡⁽¹³⁾では、中世の遺構は存在しないが、五輪塔・板碑の出土がみられる。薬師前遺跡では、地下式塚が2基検出されている。また、No.7 C・B地区の西約150mに位置する通

称「トウノゴシ」⁽¹⁴⁾は、前橋市教育委員会によって1980年に発掘調査が実施され、遺構の検出はみられなかった。遺物も五輪塔空風輪、宝篋印塔笠部片・板碑片・石臼片・陶磁器⁽¹⁵⁾が出土しただけであるが、伝承によれば、現在、前橋市総社町光巖寺境内に現存する「伝東覚寺層塔」の故地とされ「トウノゴシ（塔残し、塔の腰）」の名の由緒となっている。

「東覚寺」については、文献では確認されていないが、長野県佐久郡臼田町上宮寺に現存する梵鐘（P729東覚寺梵鐘拓影図）に「南間浮提大日國上野國群馬郡高井郷 東覚寺推鐘曆應元年戊寅十二月廿一日大工淨圓當寺衆徒等勸進沙門良義本願主昌助藤原龜之丸 信州佐久郡田口神宮寺旦那田口左近將監長能奉寄進大明神御宝前天文十二年癸卯十一月吉日」の銘がみられ、東覚寺の存在は、曆應元年（1338年）には存在していたとことがわかる。その後、明治10年調整の町村誌、群馬郡高井村分の冷泉の項⁽¹⁷⁾に「冷泉 金剛泉又神護水ト称ス、本村ノ西字塔残シト云フ地ヨリ湧出スル清泉ナリ、此処會テ神護景雲中ノ古石塔アリシガ今ハ本郡総社町光巖寺ニ納メテ現存セリ、上野名跡志ニ上野群馬郡高井村東覚寺アリテ其鐘ニ曆應元年の銘アル者今信州田野口村ニアリ、天正年間武田氏の携へ行ク所也ト、塔モ亦該寺ノ物ナリシヲ寺滅ビテ後ニ総社村へ移セシナルベシ」とあるが、梵鐘には天文12年（1543年）とあり、天文12年は武田氏の上州進攻以前であり、また、田口長能は反武田方の武将で天文17年（1548年）上田原合戦⁽¹⁸⁾で戦死している。東覚寺の梵鐘は、戦国時代の混乱期にこの地より持ち去られたと考えられ、東覚寺は、永禄9年（1566年）の武田信玄による箕輪城攻撃の混乱で消失したものと考えられる。

4. 当時の様相

下東西遺跡における中世遺構・遺物が多くみられる14～16世紀におけるこの地域での社会情勢の概略は、南北朝期から戦国時代にかけてであるが、南北朝期には上野国では守護上杉憲房等によって南朝方の勢力が一扫され、憲房死後（1336年）子憲顕によって守護代長尾氏が総社・白井などに配置され支配を強めているその後、観応二年（1351年）観応の擾乱によって一時守護が宇都宮氏綱に移る。貞治二年（1363年）に再び守護が上杉氏へ代わるか、上杉氏の関東入部を宇都宮氏や上野守護代芳賀高貞等が陥止しようとするがこれを打ち破り、さらに小山義政の反乱を鎮圧し、関東10国中の5国の守護となり関東を勢力下におく。

15世紀になると上野の在地領主は、上州一揆として、あるいは守護上杉氏の被官として守護領国体制に組み込まれていくが、後半になると山内上杉氏と扇谷上杉氏の対立、上杉氏と長尾氏の対立分裂がおり、それに関東公方からみ内乱化がみられる。

16世紀になると上州一揆の有力武将は、周りの小勢力を組み入れ「～衆」として結集をとげ、前からの勢力である総社長尾氏、白井長尾氏、足利長尾氏と平立して箕輪長野氏、金山横瀬氏が台頭してくる。箕輪長野氏は、勢力範囲を東は大胡付近まで拡大し、総社長尾氏を脅かす存在になっている。下東西遺跡の周辺も長野氏の永禄元年（1558年）戊午正月廿九日の改軍評定着致帳⁽¹⁸⁾に青梨伝蔵、勝山源右衛門、高井直八といった周辺地域の地名を姓にもつ武土の名がみえることや青梨子中内出（青梨子砦、P15の周辺遺跡地図上No282）が支配地域内であることから長野氏の勢力下におかれていたと考えられる。そして元禄九年（1696年）の武田信玄の箕輪城攻略に際して長野氏の勢力下であるこの地も戦乱に巻き込まれ、住民の離散、武田勢の奮略等により一時的に荒廃したと推定される。

5. 中世遺構の性格

以上のように下東西遺跡におけるS D23・12に囲まれた区画は、出土遺物や当時の社会情勢からみて14世紀から16世紀中葉にかけて存在したと推定される。では、この区画がどのような性格をもった遺構群であるかを推定すると、この区画の内では、土壇墓・地下式壇や板碑が多量に出土している点などから墓域のため

第4章 調査成果

の区画であるかと推定されるが、掘立柱建物などの居住施設はみられないものの、井戸の存在や石臼・石鉢・陶磁器大甕・軟質陶器火鉢・鉢・内耳鍋など副葬品としてふさわしくない生活用具の遺物が多量に出土している点や、中世における館跡の内には地下式塚や土塚墓等の墓をもつ例も少なくない点などからして単に墓域区画とするのには疑問視される。また、陶磁器の内には、青白磁梅瓶・龍泉窯系青磁素文碗・同青磁鉢・口禿白磁皿・青磁劃花文碗・白磁小皿等の中国陶磁器、葉茶壺である耳壺、灰釉、鉄釉碗等の知識人層の存在をうかがわせる陶磁器の出土がみられる。

下東西遺跡にみられるような中世における溝による区画される例は、環濠屋敷・寺院などにもとめられ、環濠屋敷は、畿内にみられる垣内に類似したもので、その分布は、前橋の西南部から高崎の東部にかけてと前橋東部の平野部に多くみられ、その構造は濠による区画の連結がみられたり、濠は、巾数m、深さ1.5～2mで濠の内側には土塁が設けられている。その機能は、自衛のための防禦施設だけでなく、用水施設等の役目ももっていたと考えられている。しかし、下東西遺跡では、現地表面から確認面までが浅いこともあるが、土塁等の痕跡はみられなかった。また溝の覆土においても土塁等の崩壊の様子はなく、溝の規模もS D23の東半分では巾も深度も割合と大規模であるのに対してS D23の西半分やS D12では小規模である点やS D12は西側区画の北半分しかみられない点などからして防禦的機能は非常に乏しい。出土遺物中の中国陶磁器は、他遺跡からの出土例をみると長楽寺遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡等の寺院址及び関連遺跡にみられる点や三耳壺・灰釉・鉄釉等の出土から当時の知識層の存在がうかがえること、また周辺に残る東覚寺伝承などから推定し、下東西遺跡における区画は、寺院に付随する施設の一角であったと考えられる。

註

- (1) 前橋市教育委員会より資料の提供を受けた。
- (2) 「清里南部遺跡群(III)」 前橋市教育委員会 1981年
- (3) 「清里南部遺跡群(III)」 前橋市教育委員会 1981年
- (4) 「中村遺跡」 渋川市教育委員会 1986年
- (5) 「上野国分僧寺・尼寺中間地域一小見地区・村前地区一」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年
- (6) 「自治医科大学周辺地区、昭和58年度埋蔵文化財発掘調査概報」 財団法人 栃木県埋蔵文化振興事業団 1984年
- (7) 浅川利一 「大形堅穴遺構をともなう居館址一町田市域の中世史解明の重要遺構一」 「小山田遺跡群VI」 小山田遺跡調査会 1984年
- (8) 調査担当者より御教示を受けた。
- (9) 麻生敏隆 「国分境遺跡」 「年報1」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年
- (10) 中田 英 「地下式塚研究の現状について」 「神奈川考古2号」 1977年
- (11) 半田堅三 「本地下式塚の類型学的研究」 「伊知波良2号」 1979年
- (12) 池上 悟 「地下式塚瞥見」 「立正史学第59号」 1986年
- (13) 「北原遺跡」 群馬町教育委員会 1986年
- (14) 「清里南部遺跡群」 「富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群」 前橋市教育委員会 1980年
- (15) 「清里南部遺跡群」 前橋市教育委員会 1981年
- (16) 当事業団木津博明調査研究員より提供を受けた。
- (17) 尾崎喜佐雄 「中世」 「前橋市史 第1巻」 前橋市史編さん室 1961年
- (18) 湯本軍一他 「田口城」 「日本城郭大系8」 新人物往来社 1980年

参考文献

- 峰岸純夫 「中世」 「群馬の歴史」 山川出版社 1974年
広瀬和雄 「中世への胎動」 「日本考古学 6」 岩波書店 1986年
図録「戦国の上州武将」 群馬県立歴史博物館 1985年
近藤義雄 「図説 前橋の歴史」 あかぎ出版 1986年

第2節 出土土器について

- 1 住居跡出土土器の変遷
- 2 S D59・46出土土器の様相
- 3 暗文土器

1 住居跡出土土器の変遷

はじめに

下東西遺跡において検出された住居跡は、弥生時代後期後半が3軒、古墳時代中期に2軒と隔絶して存在したあと、当遺跡に集落が営まれるのは7世紀に入ってからである。その後も途中で断絶があり、安定して存在するのは8世紀後半から10世紀前半までといえる。その後、住居は11世紀まで僅かに残存すると考えられ、この間、住居跡数は195軒を数える。この節では、7世紀から11世紀までを対象として13段階に分け、各土器群の変遷を示した。段階の設定については、「奈良・平安時代の土器の編年⁽¹⁾」において示した、土師器坏・甕の変遷を基軸として行った。

第I段階

この段階に属する住居跡は、S J 33・36・51・61・72・202がある。

土師器坏は、大半が体部に稜をもつ形態であり、僅かに底部から体部に丸みを持ち、口縁部の短く直立する坏が存在する。この段階に甕はあまり見られないが、小形の甕が1点出土している。底部から体部に丸みを持って大きく開き、口縁部が若干外反する。整形は外面斜め縦方向の篔削り、口縁部は横撫で、内面は篔撫でである。土師器長胴甕は、胴部が直線的で頸部はほとんど括れずに口縁部が外反し、大雑把に縦方向に篔削りされるものが主体を占める。しかし、僅かに胴部がふくらみを持ち、胴部上位が斜め横方向に篔削りされる甕も存在する。土師器甕(胴張り形)⁽²⁾25は、出土数は多くないが、普遍的にみられる器種である。三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡の第4～8分類期に示されている胴部の張る甕と同系統と考えられる。⁽³⁾

須恵器蓋坏では、坏に蓋受けのカエリをもつものと、その逆転した坏との両者が存在する。前者はかなり扁平になっており、カエリも短い。後者は、平底が底部周辺から体部に丸みを持つ。底部の器肉が厚く、整形は不定方向篔削りである。これら須恵器蓋坏は、陶邑のTK217型式の蓋坏に類似している。この第I段階と第II段階の土器群には格差があり、間に土師器・須恵器とも口径10cm以下のものが主体となる極端に法量の減少する段階を想定しているが、当遺跡には該当する遺構は存在しなかった。

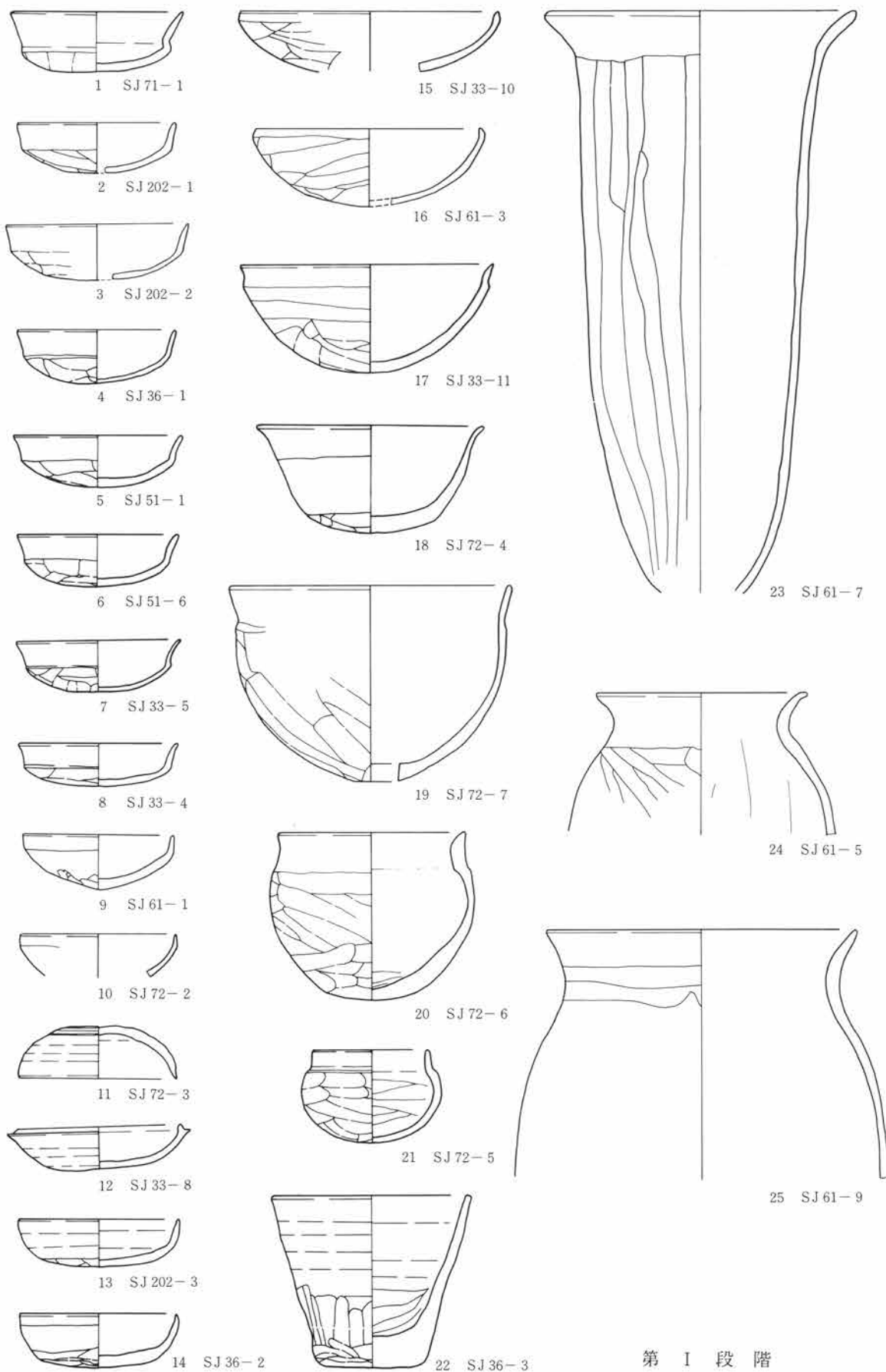
第II段階

この段階も住居跡数は少なく、S J 20・204のみである。器種も土師器坏・甕が数点、須恵器大形の皿が1点と少ない。

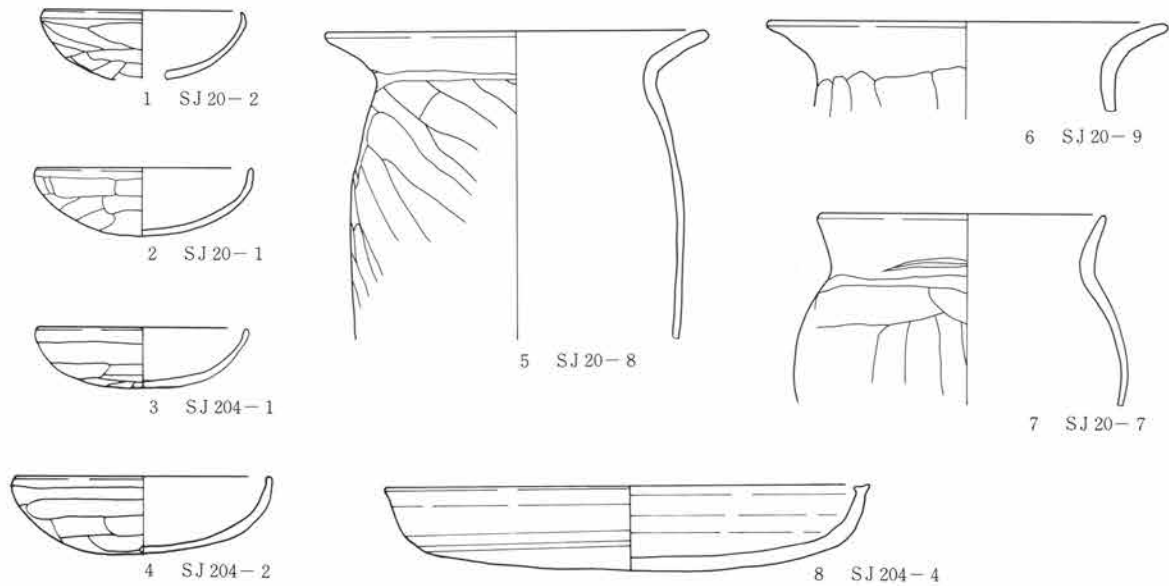
土師器坏は、底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内彎する。整形は口縁部下まで篔削りされ、口縁部は横撫でとなる。口径は11cm前後と13.6cmの二種類がみられる。土師器甕は長胴であるが、胴部上位にふくらみを持ち、口縁部が大きく開く。整形は胴部上位が斜め横方向の篔削りである。

須恵器皿は、口唇部に小さなカエリを持つが、蓋受けの機能を果たせるとは思えない小規模なものである。底部整形は回転篔削りとなる。類例は、埼玉県立野遺跡2号住居跡、グリッド出土土器に多くみられる。⁽⁴⁾

第4章 調査成果



第 I 段階



第 II 段階

第III段階

この段階に属する住居跡は、S J 27・40・41・68・110・111・117・198で、他にS D59・46区画遺構群があり、比較的充実した段階である。この前後の段階は、遺構が少なく隔絶した感がある。

土師器坏は、僅かに体部に稜をもつ坏がこの段階まで存在するが、主流は底部から口縁部まで内彎する坏であり、S D59・46分類（以下分類とする）のB IIに相当する。口径は11cm前後、12cm前後、15cm前後に分かれ、住居跡出土土器についても器種分化が認められる。土師器碗は、分類のA IとBが見られる。土師器皿は、分類のA Iであり、前段階には余り出土例がなく、この段階になって急激に増える傾向にあると思われる。土師器甕は、比較的小形甕が多く出土している。S J 110-10は、第I段階の20などの系統にあるものか口縁部の形態が類似している。その他の小形甕はS D59・46にも多く出土しており、平底で胴部中位が「くの字」状に張り、口縁部が短く外反する。整形は、胴部上位が頸部から縦方向に篋削りされ、中位から下位は斜め縦方向の篋削りである。長胴甕は、口縁部の器肉が厚く、頸部には段をなす程、胴部は薄く削り込んでいる。第II段階よりも胴部の張りが増す。甕（胴張り形）は、出土数が少なく変遷の概要が捉え難いが、確実に存在している。

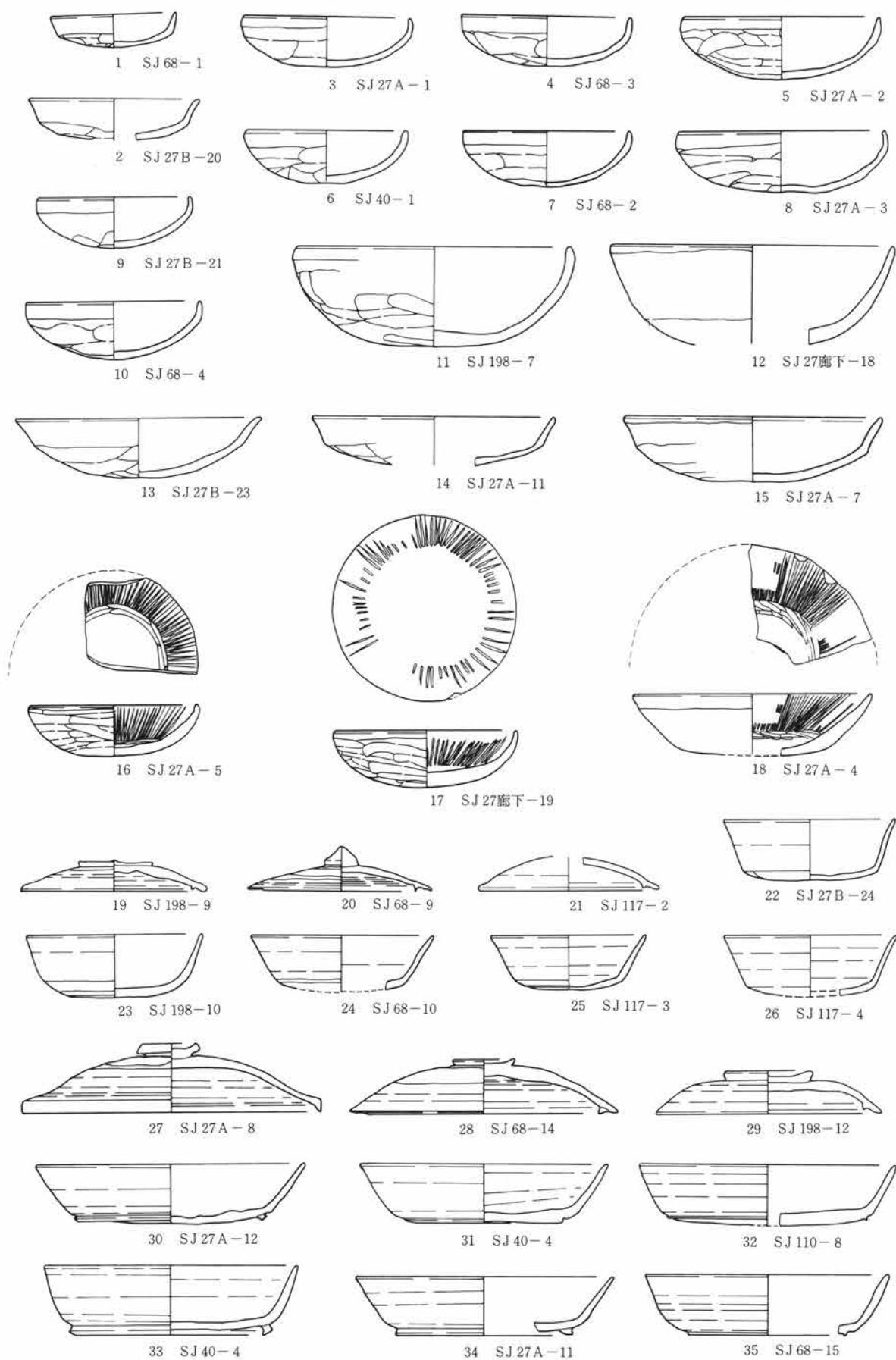
暗文土器坏では、ここに図示した坏はS D59・46区画内のS J 27のもので、分類のAとC Iに相当する。

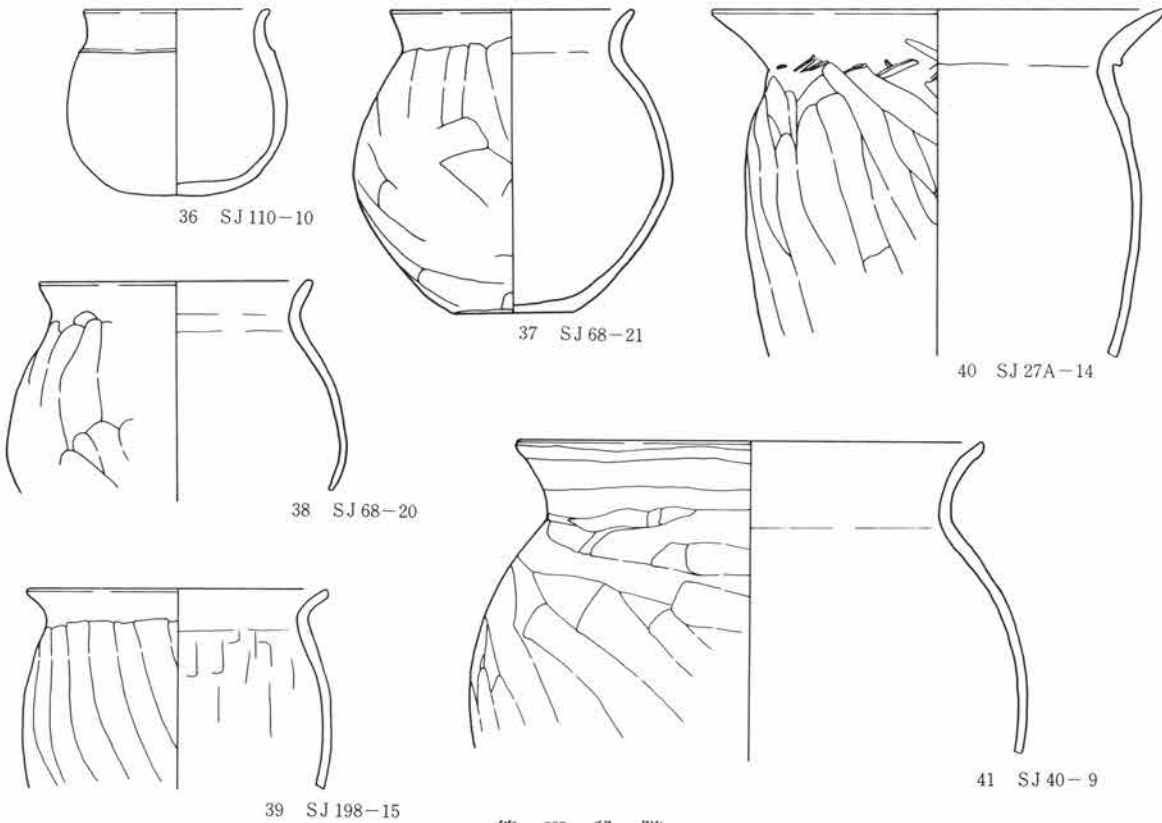
須恵器坏は口径10.8~12cm、17.2~19.2cmに分かれ、小形品はすべて無台坏身であり、分類のBが大半を占める。この坏は、薄手で底部の篋削りにより体部との境に稜をなし、丸底で口縁部の外反する形態であり、第I段階の須恵器坏とは異なる系列にあると考えられる。小形坏に伴う蓋は分類のA IIと、全体的に厚手で小さな端部の鋭いカエリが貼付され、円盤状の扁平鈕が付く形態のものもある。大形坏はすべて有台坏身であり、分類のG・H・J・N等が見られる。すべて底部整形は丁寧に回転篋削りされている。この坏の蓋は、カエリのあるものと無いものが存在し、鈕は円盤状の扁平鈕が多い。

第IV段階

この段階に属する住居は当遺跡では検出されなかった。しかし、第III段階と第IV段階の土器群の形態差がかなりあるため、中間に1段階を設定した。

第4章 調査成果





第 III 段階

第V段階

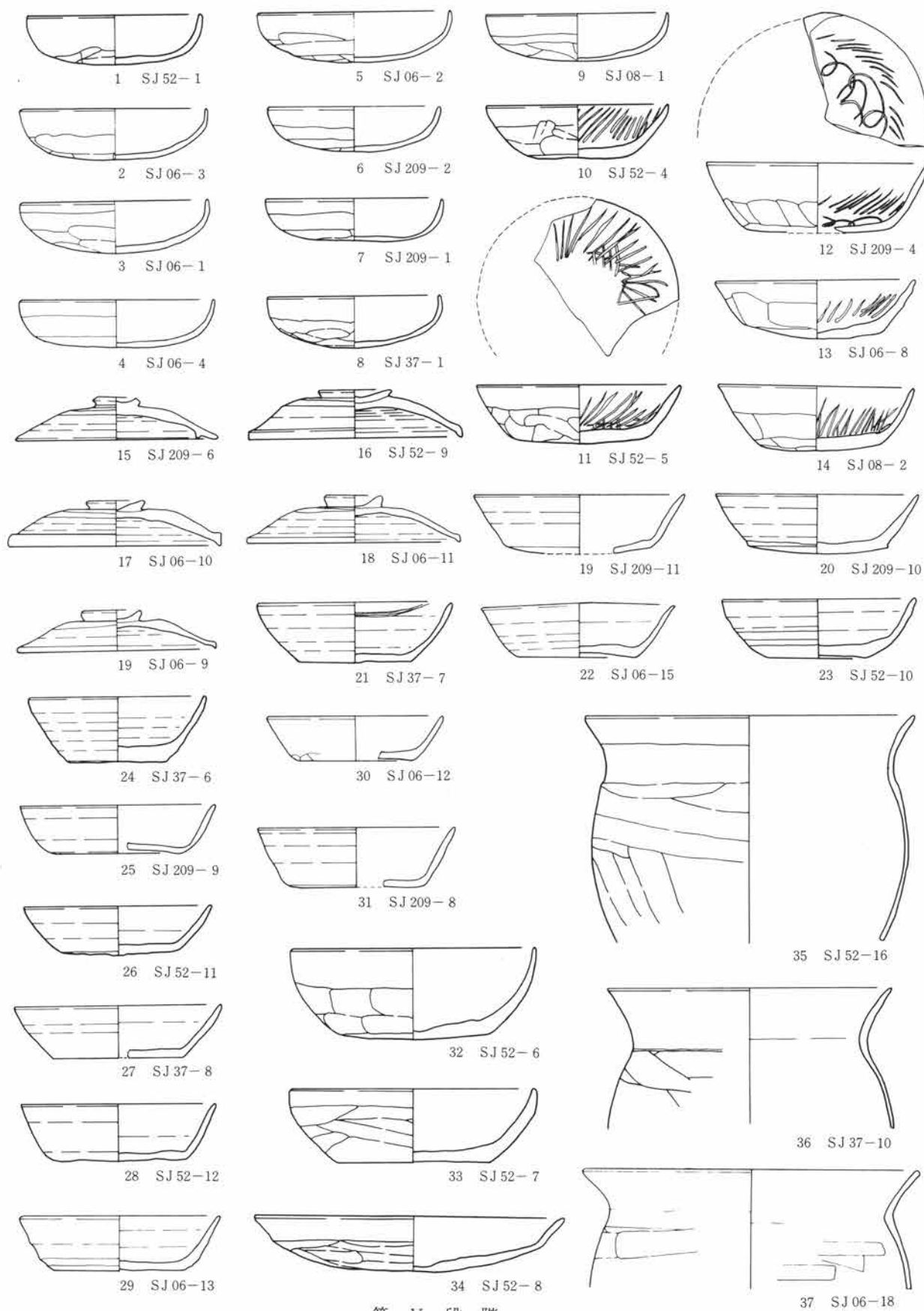
この段階に属する住居跡は、S J 06・08・37・52・209がある。

土師器坏は、口径12.0~13.6cmに分布し、法量に差はあるものの分化する傾向はない。形態は、第III段階のものより薄手であるが、若干平底気味になる。体部は丸味を持ち口縁部は直立気味である。整形は、底部から体部は篋削りであるが、体部上位の無調整帯が第III段階の一部に見られたものより広がる。土師器埴32は、第III段階の埴の系列にあるものか資料が少なく不明であるが、胎土は他の土師器よりも砂粒が少なく、分類の埴Bに類似している。また、双方とも底部内面に一条の沈線が巡る特徴がある。土師器甕は、長胴甕の系列にあるものがかなり短胴化が進んでおり、器肉も非常に薄手になっている。胴部は緩やかな丸みを持ち、口縁部は大きく、器肉は胴部よりやや厚手であり外反する。土師器皿は、形態としては第III段階のものと殆ど変わらないが、口径は20cmを越す大形品である。この段階には皿の出土例が余りなく、詳細は不明である。

暗文土器坏は、第III段階のものよりも若干器肉の薄くなる傾向が見られる。底部は平底で、口縁部は直線的に外反する。体部は1段ないし2段の篋削り、口縁部は横撫で、内面底部には螺線状暗文、体部には放射状暗文が施される。

須恵器蓋坏であるが、蓋にはカエリの付くものが僅かに残るが、既にカエリの無いものが主体となっている。鈕の形態は、第III段階の円盤状の扁平鈕の系統にあると思われるものが主流であり、小形になり中央部にむかって緩やかに窪む。天井部は水平、体部は直線的に開き、口縁部が垂直に折れ曲がるが、内面は中央部から口唇部まで緩やかに開き、口唇部はシャープである。坏は形態が3種類程見られる。24~31は、平底

第4章 調査成果



第 V 段階

で体部から口縁部は直線的もしくは僅かに丸みをもって開く。21～24は、平底で体部は開き、口縁部が僅かに内彎気味となる。19・20は、丸底気味で体部は直線的に開く形態である。底部は回転篋削り、回転撫で、不定方向篋撫で、回転篋切り未調整、回転糸切り未調整とある。これらは口径12.4～14.8cmの間に分布し、第IV段階の坏よりもやや大形のものが多い。

第VI段階

この段階に属する住居跡は、S J 03・86・138である。

土師器坏は、さらに平底化が進み、器高も低くなる。整形は、底部が不定方向篋削り、体部は指頭による成形のあと若干撫でているのみで削りは見られない。横撫でではなく、成形時の撫であり、基本的には無調整と考えられる。土師器甕は、口縁部の破片しか図示し得なかったが、長胴甕の短胴化はこの段階でほぼ終わっており、この後の形態変化は口縁部に求められる。前段階よりも口縁部が短くなる傾向にある。その他の器種は出土していないが、土師器埴・小型台付甕等は続いて存在している。暗文土器坏は、体部から口縁部の小片が一点出土しているのみであるが、前段階よりもさらに薄手になっていると思われる。形態は前段階と大差ないが、胎土は砂粒を多く含むようになる。

須恵器蓋坏では、蓋は前段階よりも天井が低くなり、口唇部のシャープさがなくなる。坏は、平底もしくはやや上げ底気味のものであり、丸底気味のものも存在しない。18～24は、体部が直線的に外反し、25・26は、体部下位が丸みを持ち口縁部の外反するもので、27～30は、体部の立ち上がりが丸みを持ち、口唇部まで僅かに丸みを持って開くものである。底部は回転篋削り後周辺篋削り、回転篋切り未調整、回転糸切り未調整が混在する。これらの口径は12.0～13.0cmにまとまり、前段階よりも総じて小形になっている。この段階に須恵器大形の埴が出現する。口径16cm前後で体部が深く、形態は大きく分けて2種類ある。33・34は、体部が僅かな丸みを持つが、ほぼ直線的であり余り開かない。高台は細長く、端部が丸みを持つ。35は、前者よりも体部が開き、高台が断面長方形を呈し内端部が接地する。底部は回転糸切り未調整である。口径18cmの蓋が出土しており、これらの埴とセットになる蓋と考えられる。その他、小形の高台付埴も見られる。

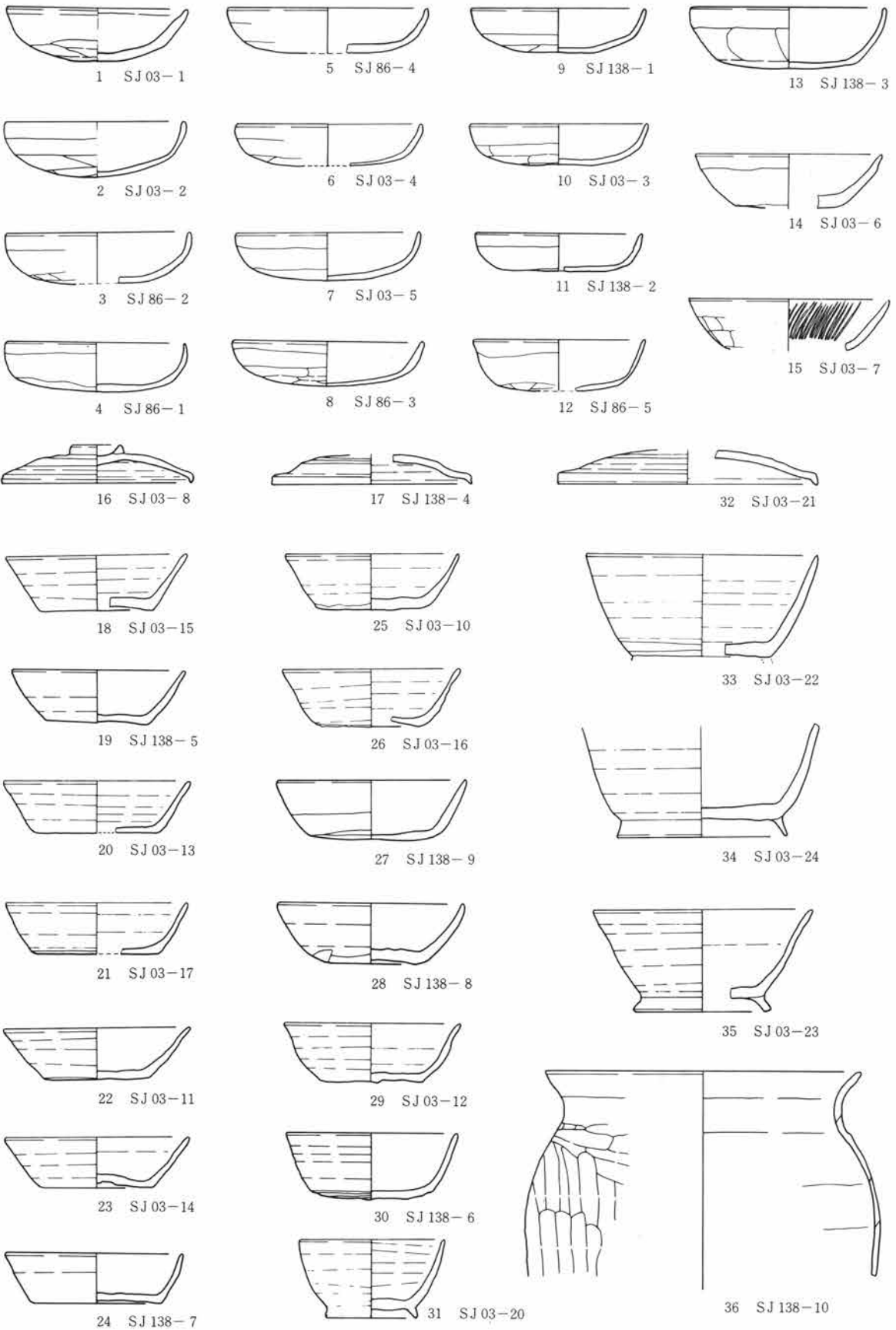
第VII段階

この段階に属する住居跡は、S J 05・22・42・75・200である。この段階から住居跡は増え始め、第XI段階まで安定して存在する。

土師器坏は、完全に平底となる。体部から口縁部は丸みを持って開き、器高は低い。底部は手持ち篋削り、体部は成形後若干撫でている。12・13は、平底で底部が厚く、体部が直線的で一段の篋削りにより稜を成し、口縁部が直線的に開く形態である。この坏は、前後の段階に類例が求められず、客体的な存在と思われる。この段階の土師器皿は、平底で体部から口縁部が短く直線的に開く形態が見られる。第III段階の皿の形態変化の中で捉えられるのか、中間の出土例が無いため不明である。土師器甕は、第VI段階のものと余り差は見られない。

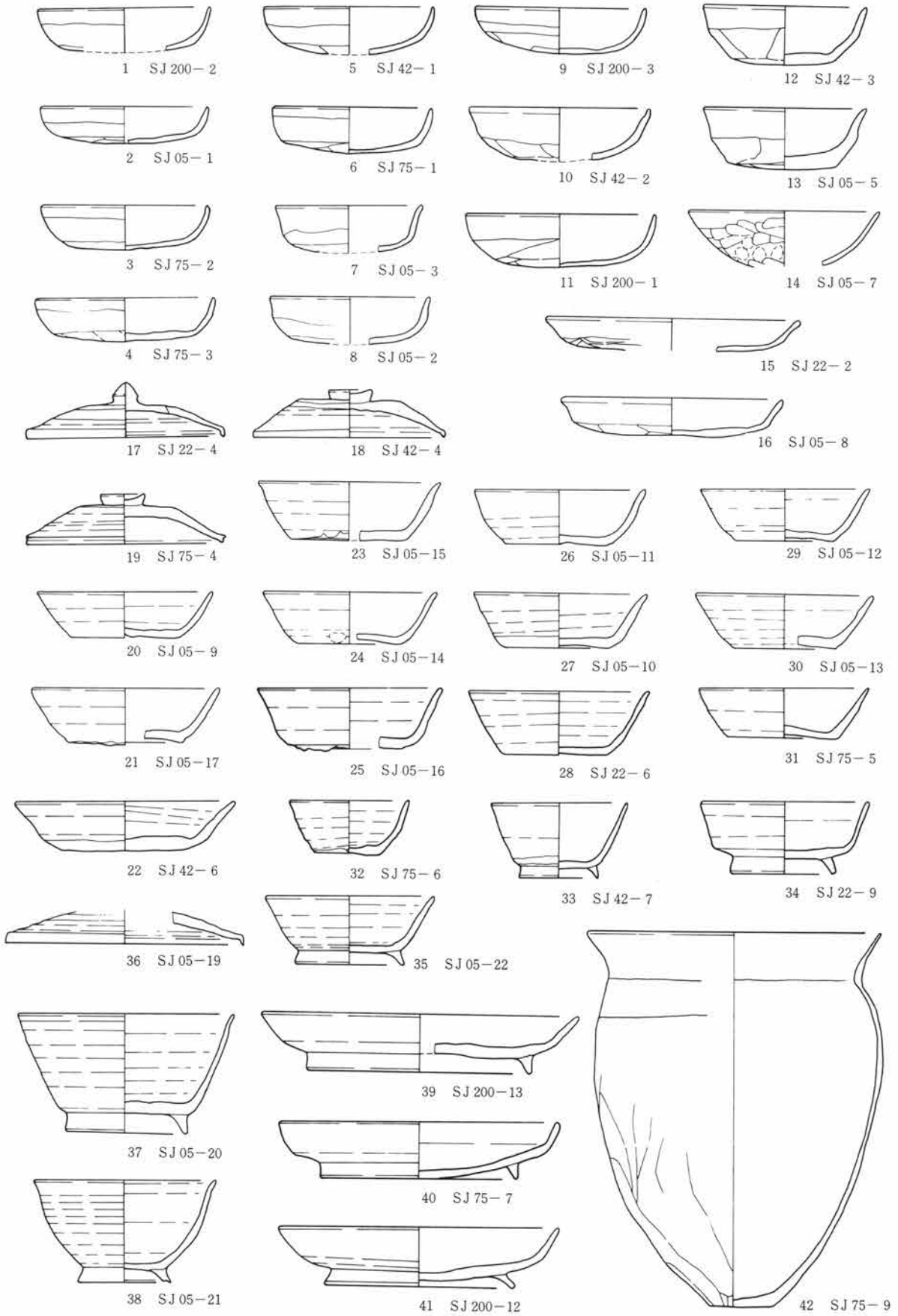
須恵器蓋坏では、蓋は天井部が平坦で体部への屈曲部は角張るものが多い。口縁部は垂直に折れ曲がる。坏は、前段階と比較して形態の変化は余り見られない。口径も12.0～13.5cmの間であり、これ以降主体となる坏に小形化する傾向はなく主な器としては最小限必要な大きさのためであろうか。底部は、回転篋削り、篋撫で、回転篋削り、回転糸切り等があるが、切り離し後の調整を行わないものが大半を占める。その他、口径8.6cmの小形の坏も存在している。須恵器高台付埴は、出土数が少なく傾向が捉え難いが、若干小形になると考えられる。37は、体部が直線的で、高台は、細長く端部が丸い。38は、前後の段階に類似するものがない。体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。高台は断面方形だが、端部中央が窪み外端部が接地する。こ

第4章 調査成果



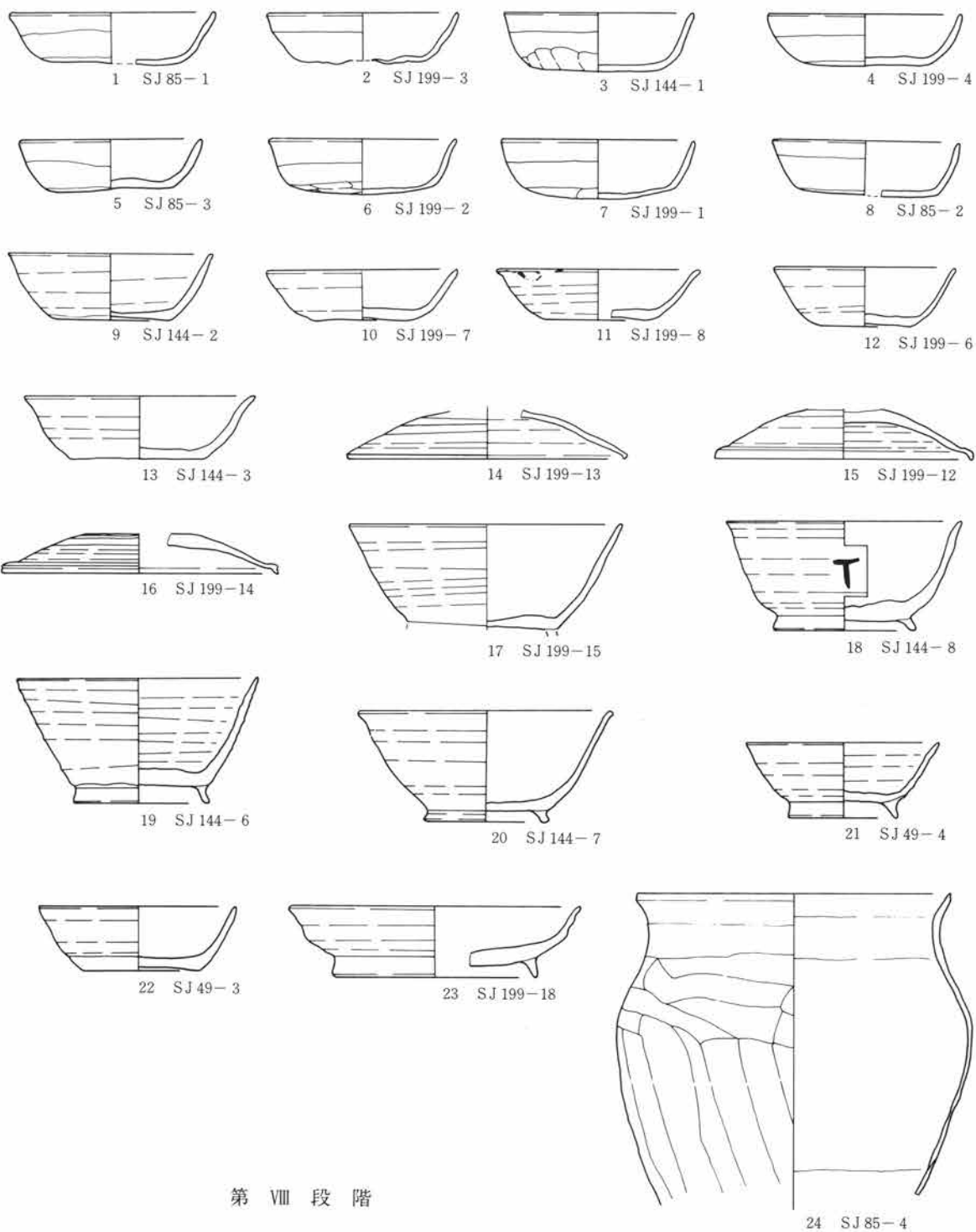
第VI段階

第2節 出土土器について



第 VII 段階

第4章 調査成果



第 VIII 段階

の他、須恵器皿がみられる。当遺跡ではVII・VIII段階のみに見られるが、美濃須恵古窯跡では8世紀前半から存在している。しかし、県内では8世紀代のこの形態の皿は余り類例を見ないが、9世紀代の皿は藪田遺跡⁽⁵⁾に変遷が見られる。

第VIII段階

この段階に属する住居跡は、S J 21・49・85・144・199である。

土師器坏は、平底で前段階に比べて器高が増し、体部は立ち上がり部分に若干丸みを持ち、口縁部はほぼ直線的に開く。底部は篋削り体部は成形後撫で、口縁部は横撫でである。この段階になるとほとんど同一法量になる。土師器甕は、頸部が余り締まらず口縁部は直立気味に立ち上がり上位が外反する。「コの字」状口縁の前段階の形態である。

須恵器坏では、この段階に存在する蓋は口径が大きく、壺とセットになるものであり、坏の蓋はこの段階以降出土せず消滅すると思われる。坏は前段階と比べて口径に変化はないが、底径が小さくなり、器高の低いものが多くなる。体部は直線的か若干丸みをもって開く。底部は殆ど回転糸切り未調整である。須恵器高台付壺の蓋は、比較的器肉が薄くロクロ目が顕著である。天井部から体部へ緩やかな丸みを持って開き、口縁部は中位が殆ど接地する位に括びれ、端部が垂直に折れる。焼成はやや軟質で灰白色のものが多い。須恵器高台付壺の形態はかなり多様であるが、大きく分けると、第IV段階に見られた2種類になると考えられる。17・19は、体部がほぼ直線的で、高台が細長く端部の丸い形態であり、第VI段階の33・34にその系列が求められると考えられる。20は、体部が僅かに丸みを持ち口縁部が外反、高台の形が角形で内端部が接地し、第VI段階の35の系列にあると思われる。高台付壺は、その出現の段階から細長い高台と、角形の高台の2種類が存在していたと考えられ、第IX・第X段階でも丁寧な細い高台と、雑に付けられた角形の高台が供伴していることから推定できる。

第IX段階

この段階に属する住居は、S J 44・76・88・133・134・135・137・163である。

土師器坏は、出土数が多く、3種類の特徴的な形態が抽出できる。1～3は、平底で底部から体部の立ち上がりに丸みを持ち口縁部の開くもの、4～6は、平底の底部から体部は直線的に立ち上がり、口縁部に到るもの、7～10は、平底で体部下位が丸みを持ち、口縁部が外反、口唇部が内彎するものである。整形は前段階と変わらないが、体部に指頭による成形時の凹凸が多く残る。土師器甕は完全な「コの字」状口縁を呈す。

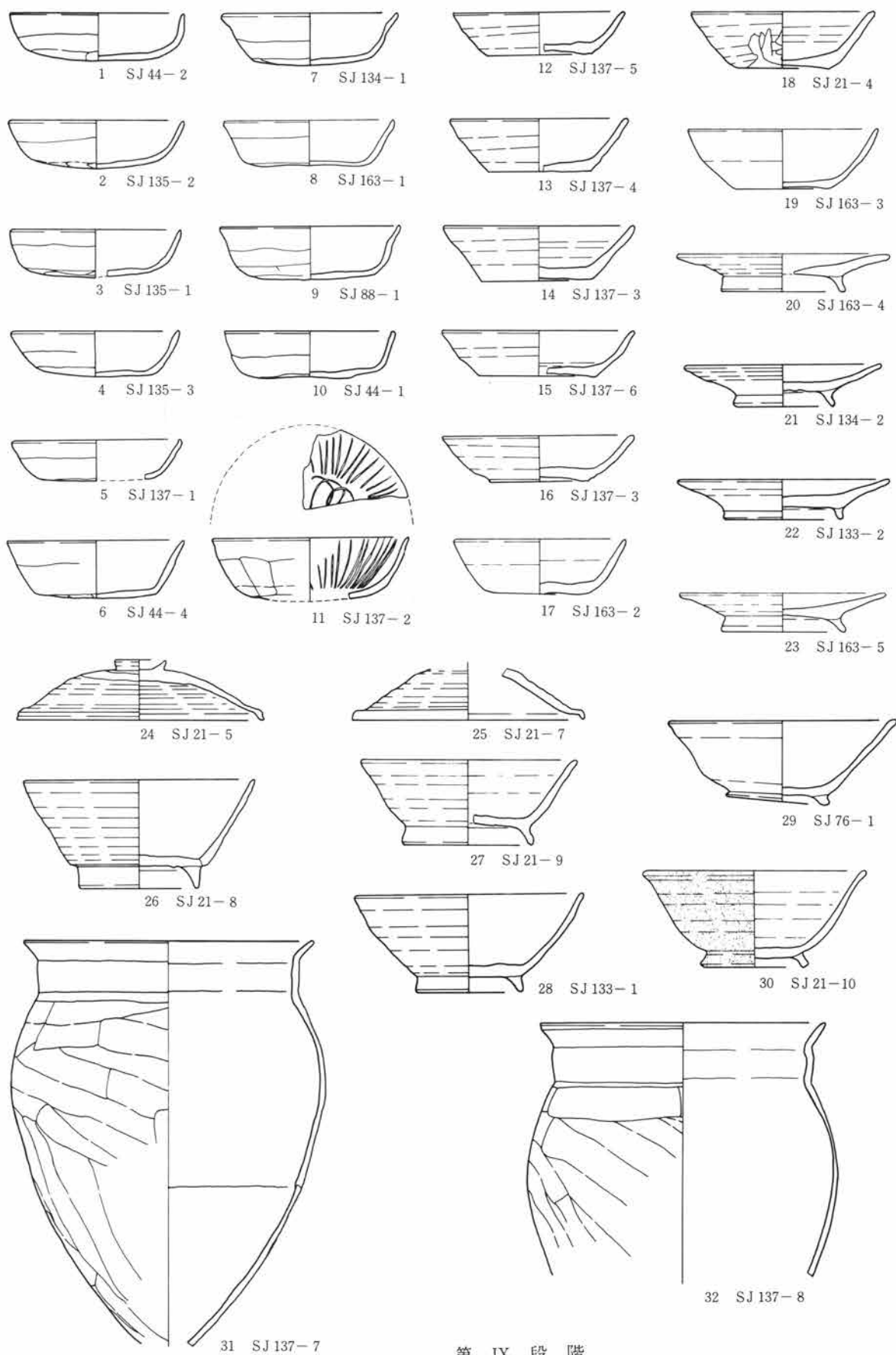
暗文土器坏は1点出土している。「コの字」状口縁の甕と供伴する例は、下佐野遺跡3区1号住居跡・4区41号住居跡⁽⁶⁾、分郷八崎遺跡50号住居跡⁽⁷⁾に類例があり、この段階までは存在している。器形・整形・胎土は他の土師器坏と変わるところはなくなるが、放射状暗文・螺線状暗文が施されている。

須恵器坏は、前段階より器高が低く、底径が口径の $\frac{1}{2}$ 程度のものが現れる。形態は、平底もしくは上げ底気味で、体部が直線的か若干丸みを持って開くものと、体部がやや丸みを持って大きく開く扁平もののが存在する。須恵器高台付壺についても前段階と同様に2種類見られる。前段階よりも器高が低くなり、高台の細い方は還元焼成であるが、角形の方はやや軟質な焼成のもの、高台の雑な作りのものも現れる。須恵器皿は、この段階に出現する。体部から口縁部は水平に近く扁平に開き、高台は細長く外反するが、端部外側に若干張りを持つ。焼成は還元であり丁寧な作りである。

第X段階

この段階に属する住居跡は、S J 15・23・24・69・77・87・99・148・181・220である。

第4章 調査成果



第 IX 段階

土師器坏は、前段階のような多様性は無くなり、若干底径が小さくなって、体部から口縁部は直線的に開くものが主である。供膳形態の中では、須恵器坏・高台付碗が増加し、土師器坏は減少していく傾向にある。土師器甕は、「コの字」状口縁の形態が崩れる段階にある。

須恵器坏は、前段階よりさらに底径が小さくなり、口径の $\frac{1}{2}$ 以下のものが存在する。小さな底部から、体部は丸みを持って大きく開き、口縁部が外反する形態、比較的底径が大きくて器高が低く、体部の直線的な形態の2種類が見られる。底部は総て回転糸切り未調整である。須恵器高台付碗は、全体的に器高が低くなり底径も小さくなる。第IX段階の26～28の系列にあると思われるものに13・17がある。その他、角高台のものは形態が多様であり、高台の潰れたような雑なものもある。須恵器皿は、前段階より若干小形になり、高台も低く厚手になる。口縁部が水平に引き出されるように外反する。須恵器の焼成は全体的に軟質であり、酸化焰焼成のものもある。

この段階から灰釉陶器が出現する。碗は浅く体部に若干丸みを持って開き、口唇部が薄く引き出され、高台は三ヶ月状を呈す。施釉は内面のみ刷け塗りである。長頸瓶は、頸部から胴部上位は緩やかな丸みを持つ。口縁部上位は外反し、口唇部が垂直面を持つ。高台は低く中央が窪む。美濃・田口編年の光ヶ丘1号窯式⁽⁸⁾に相当する。

第XI段階

この段階に属する住居跡は、S J 02・14・16・17・71・74・102・103・118・145・152・154である。

土師器坏は、前段階より一層底径が小さくなり、器肉が厚手のものが増える。体部はほぼ直線的に外反するもの、口唇部の直立するものとあり、整形は、底部と体部下位は大雑把な篋削りで凹凸が著しい。土師器甕は、口縁部に「コの字」状を残し、形態としては余り変わらないが、器肉が厚くなる。

この段階では内黒土師器が僅かに出土している。10・11は、かなり胎土が異なり、10は、軟らかみのある胎土であり、土師器に近似し、11は、粗砂粒を含み、酸化焰焼成の須恵器に近い。11は、体部下位に丸みを持ち、高台は細く丁寧な作りであり、12は、高台を欠くが体部は丸みを持ち、10の大形の形態である。

その他、13・14のように、体部が直線的に開き、口縁部に一条の沈線が巡り、高台の付くものがある。体部は篋削りされており、質感は酸化焰焼成の須恵器に類似するが、余り類例を見ない。

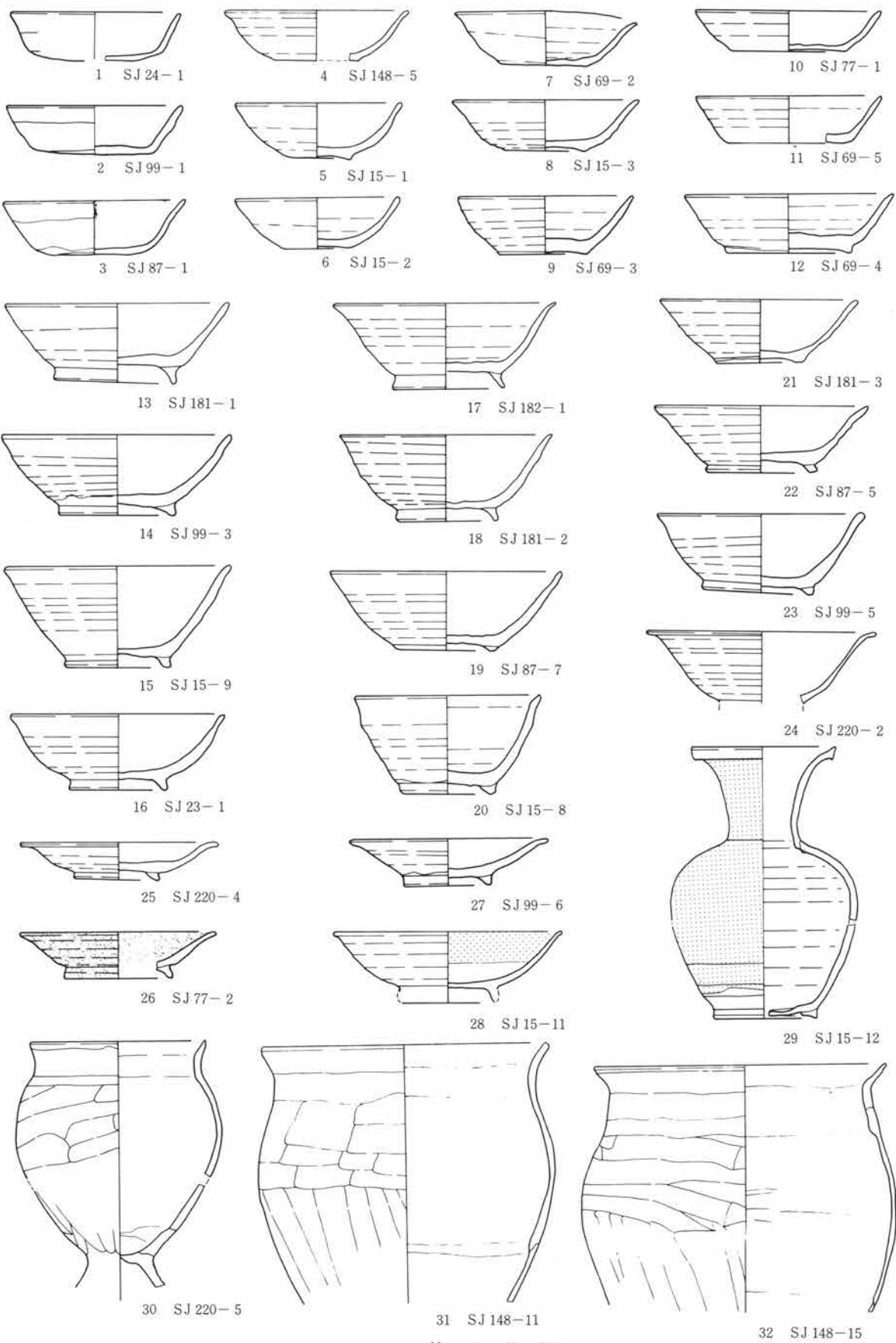
須恵器坏は、殆ど酸化焰焼成である。形態は前段階と同じく、体部の直線的なもの(15・16)と、体部が丸みを持ち口縁部の外反するもの(17～24)があり、後者は前段階よりも器高が高く、大形品も現れる。高台付碗は、全体的に小形になり、高台は低く、断面が台形を呈すか、潰れたような雑なものである。形態は6種類程見られる。29・30は、器高は低く体部下位に丸みを持ち、口縁部は余り開かない。31・32は、薄手で体部はほぼ直線的に開き、口縁部は強く引き出される。33～38は、31・32に類似するが、体部の開きは少なく、口縁部の引き出され方も弱い。39は、体部が若干丸みを持って開き、口縁部は若干引き出される。42は、高台が底径の内側に付き、体部は直線的に開き口縁部が僅かに外反する。43は、体部が大きく丸みを持ち、口縁部は外反する。この段階から羽釜が出現するが、還元焰・酸化焰焼成と双方が存在する。また、この羽釜と類似する胎土と焼成のものに56の甕があり、酸化焰焼成で、丁寧にロクロ整形されている。

灰釉陶器碗は、器高が低く、体部は僅かな丸みを持って開き、口唇部が若干引き出され、高台は細い。皿も口唇部が薄く若干引き出される形で、施釉はすべて漬け掛けによる。美濃・田口編年の大原2号窯式に相当する。

第XII段階

この段階に属する住居跡は、S J 173・175・205であり、この段階から住居跡数は減少し、出土遺物も少な

第4章 調査成果



第 X 段 階

く、一部の器種しか見られない。

この段階になると、殆ど土師器坏壺は出土しなくなる。12は、土師器坏であり、平底で体部から口縁部は内彎し、口唇部は水平な平坦面を持つ。器肉はほぼ均一で、整形は底部・体部とも篋削り、口縁部は横撫で、内面は篋撫である。土師器は、普遍的に出土する器種はなくなり、このような鉢や、当遺跡では出土していないが、いわゆる土釜などが僅かに存続していると思われる。

須恵器は、すべて酸化焰焼成となる。器種は坏・高台付碗・羽釜が出土しているが、足高高台付碗・皿は見られない。坏は口径10cm程度の小形品が多く、この段階から再び小形化の傾向が現れる。平底で、体部から口縁部まで丸みを持つもの、体部が丸みを持ち口縁部の外反するもの、体部の直線的なものがあり、前段階と器形は類似しているが、総じて小形になっている。高台付碗も小形になり、形態は坏と類似している。羽釜は、胴部が丸みを持ち、鏝は断面三角形と台形を呈すものがある。口唇部は水平面を持つが、角が丸みを持つ。整形はロクロによるが、胴部下位は篋削りである。

第Ⅲ段階

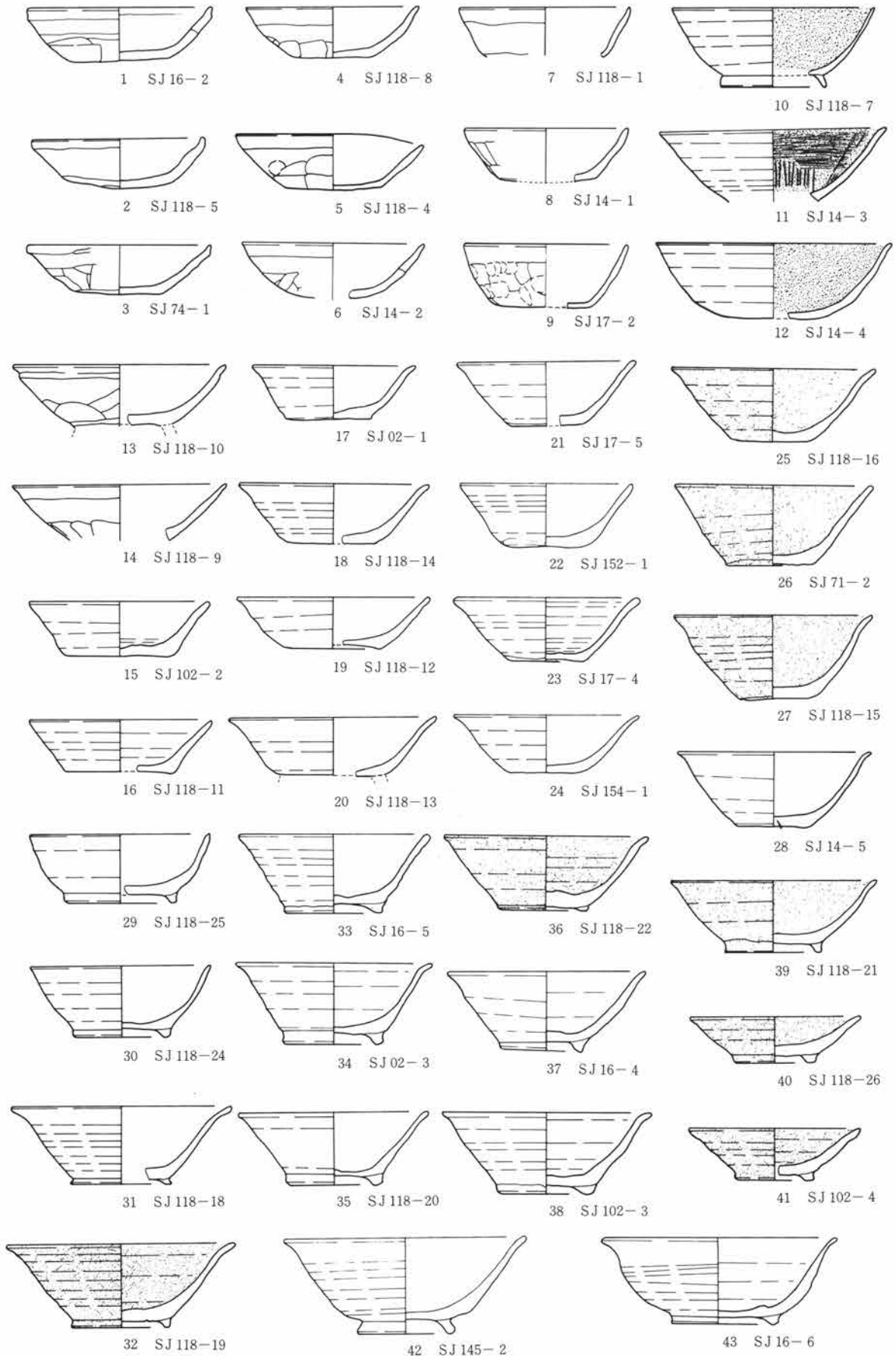
この段階に属する住居跡は、S J 13・93である。第Ⅱ段階の土器群とは形態上に格差があり、中間に1段階さらに須恵器坏が扁平で小形化する段階を想定している。

この段階で得られた資料は、須恵器坏と羽釜のみである。1～4は、第Ⅱ段階の坏よりも小形で器高が低くなり皿状を呈す。5は、大形であるが器形は小形のものに類似している。6の羽釜は、前段階までの羽釜と質感が異なり、系統を別にするものと考えられる。

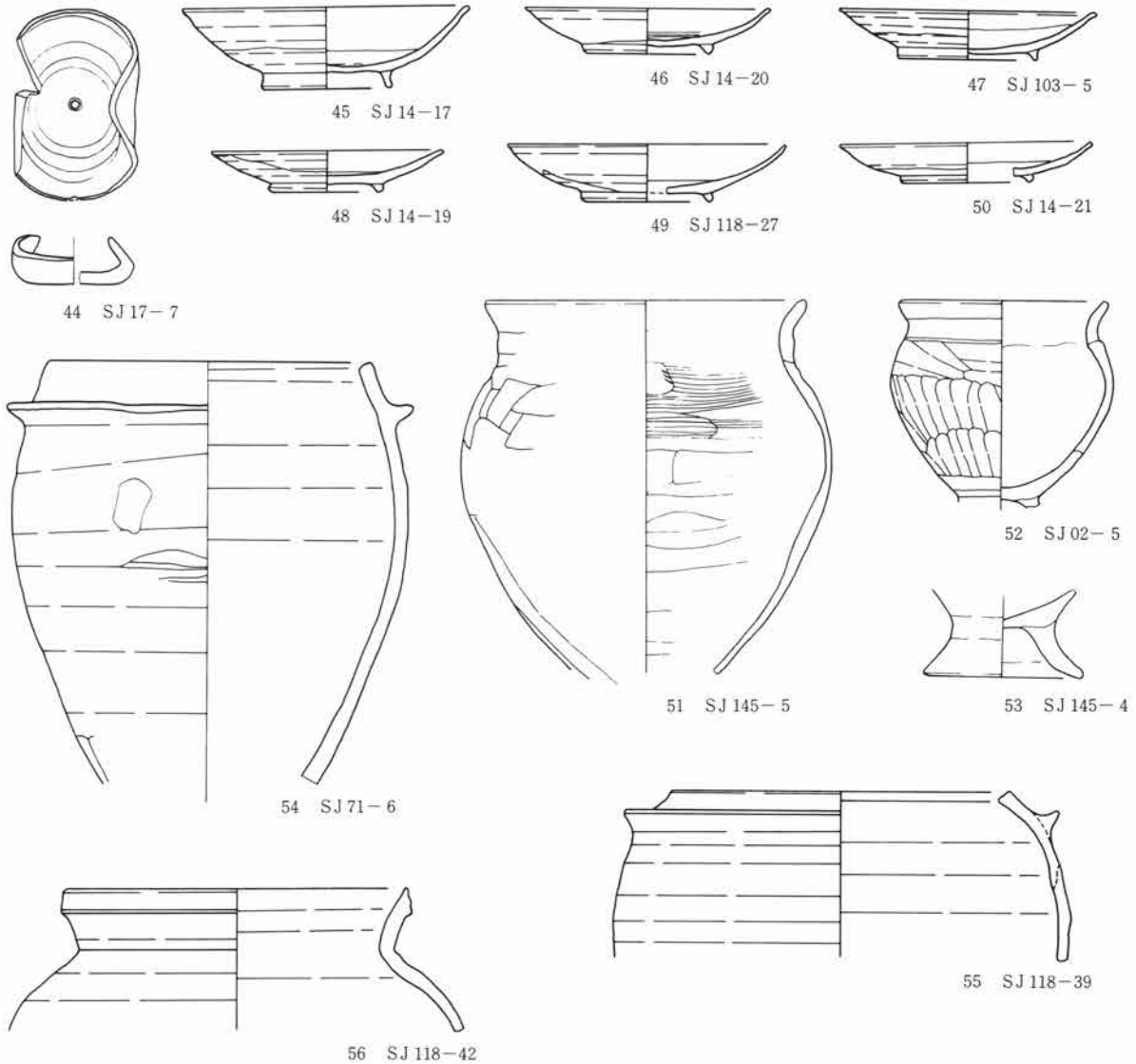
須恵器坏の変遷について

当遺跡では比較的須恵器坏が多く出土したので、得られた資料のなかでの変遷の概要を示しておきたい。先ず、豊富な資料のある第Ⅲ段階では、口径10.8～14.0cm、口径16.7～19.0cmに二分され、小形品は無台坏身、大形品は有台坏身が多く、双方とも有蓋であると考えられる。第Ⅳ段階の土器群は出土していないが、この段階は平城宮Ⅱに相当する時期と推定され、器種分化が進み上記の口径の中間の坏も存在すると思われる。第Ⅴ段階では、既に大形品は存在せず、口径12.4～14.8cmにまとまる。また、高台の付く坏も見られない。胎土については、752頁で挙げた4種類の胎土のうち、第3群の灰白色の細礫を多量に含む坏は殆ど見られないが、その他3種類の胎土は、第Ⅱ段階で大半の坏が軟質で酸化焰焼成気味になるまで観察できる。しかし、胎土と形態の関連性はどの段階でも余り見られない。第Ⅵ段階では、第Ⅴ段階よりもさらに小形になり、口径12.0～13.0cmにまとまる。この段階以降、第Ⅷ段階まで口径に余り変化はなく、第Ⅷ段階で若干底径が小さくなる傾向にある。形態にも大きな変化はなく、第Ⅵ～Ⅷ段階を通じて、平底で体部の立ち上がりが角張り、体部が直線的なもの、平底で体部の立ち上がり部分が丸みを持ち、口縁部まで僅かな丸みを持ったまま開くか、口縁部が僅かに外反するものとの2種類が主体となっている。この各段階の変化は底部調整に求められ、第Ⅵ段階では切り離し後篋削り、篋撫で等の調整が施されるものが主流であり、第Ⅶ段階では回転篋削り、回転糸切りで未調整のものが多くなり、第Ⅷ段階以降では、殆ど回転糸切り未調整となり、坏蓋の出土はなくなる。第Ⅸ段階になると、底径が口径の $\frac{1}{2}$ 程度のもので多くなり、前段階に比べて器高が低く扁平なものも現れる。しかし、形態は大きく見れば前段階と同様に2種類に分かれている。第Ⅹ段階では、殆どの坏は軟質で、酸化焰焼成のもので多くなる。形態は体部に丸みを持つ方の坏は口径が小さくなり、さらに底径は口径の $\frac{1}{2}$ 以下となる。第Ⅹ段階でも形態は2種類見られ、体部の直線的なものは若干器肉が厚手になる。体部に丸みを持つ坏は、口縁部が大きく外反するようになる。また、口径12.0～13.2cm・器高4.0～4.4cm、口径14.0～14.4cm・器高5.2～5.8cmの二者が存在する。これ以降は出土数が激減するため、変遷は不明

第4章 調査成果



第2節 出土土器について



第 XI 段階

である。

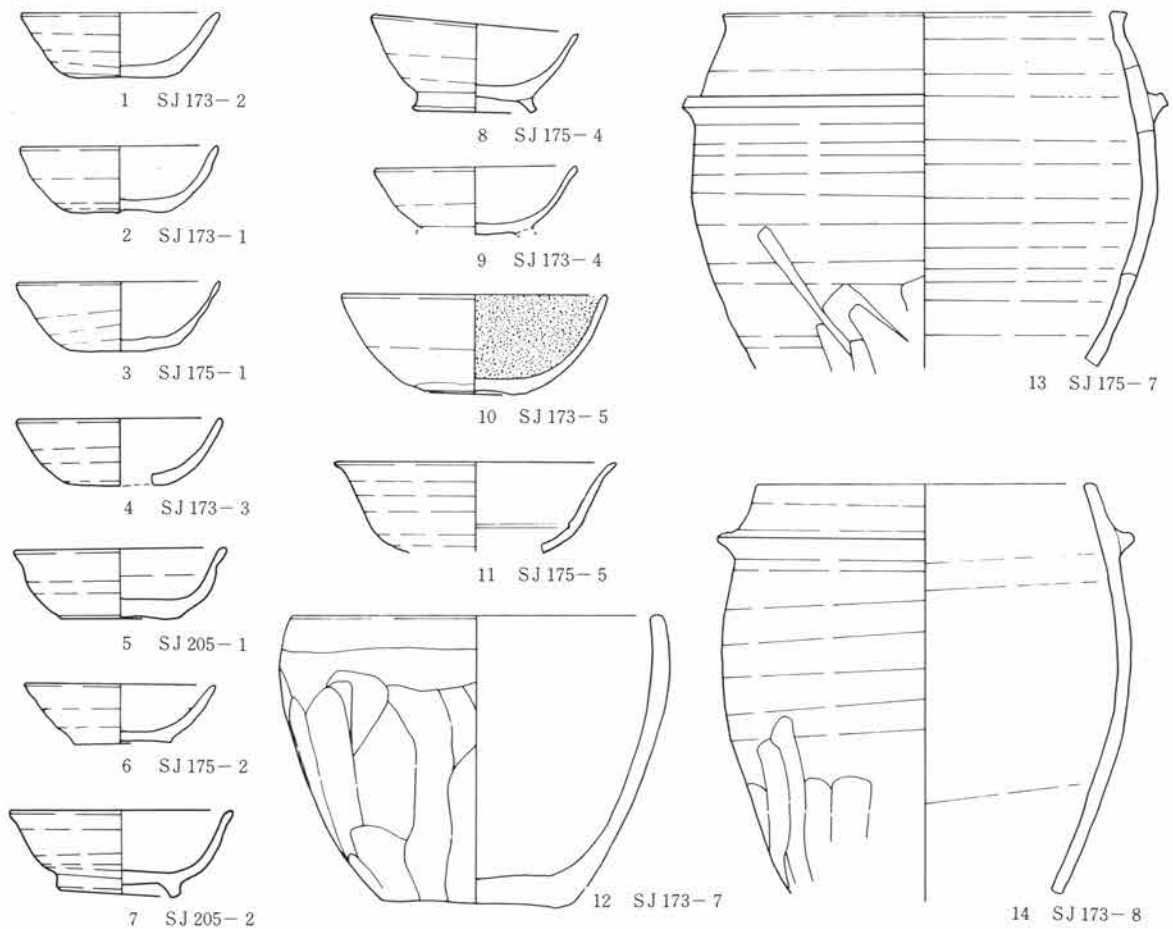
実年代について

当遺跡では、実年代を推定し得る資料は検出されていない。また、「奈良・平安時代の土器の変遷」において示した実年代の推定根拠以外に新たな資料を持たないが、7世紀代の資料の年代について陶邑古窯跡群や飛鳥・藤原宮の須恵器の編年によって補足しておきたい。第I段階は、前述したように須恵器蓋坏が陶邑のTK217型式の蓋坏(9)に類似し、7世紀第2四半期を中心とした時期と推定される。第III段階は、「2 S D 59・46出土土器の様相」の中で記したように7世紀末から8世紀第1四半期を想定しており、第II段階は、第III段階と余り時を経ない7世紀の第4四半期に相当すると考えられる。第IV段階から第VII段階までは、「奈良・平安時代の土器の編年」に示したIV段階からVII段階に相当し、第IV段階～第VI段階はそれぞれ8世紀第2～4四半期に相当し、第VII段階～第IX段階は9世紀第1～4四半期に相当する。第XI段階は10世紀前半、第XII段階は10世紀後半、第XIII段階は11世紀後半を想定している。

まとめ

以上、各段階の土器群についての変遷を記してきたが、一つの器種の変遷をとっても、坏や埴のように1

第4章 調査成果

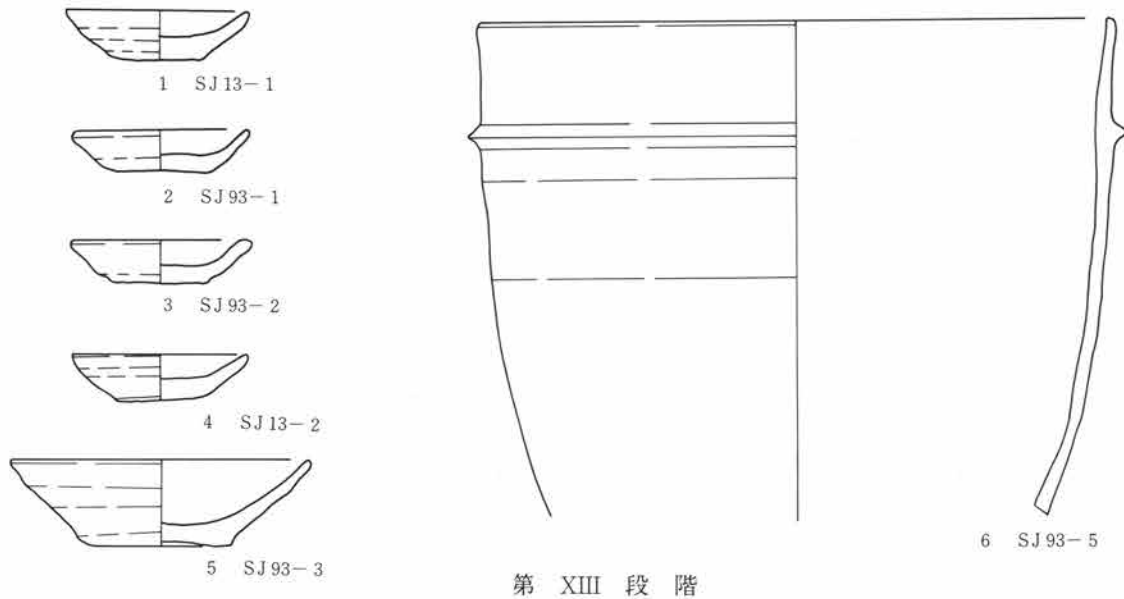


第 XII 段階

段階の中でも形態の多様なものは、単純に型式の変化を追うことができない。前段階のものが変化するのか、別系列のものかを判断するのは難しく、また住居跡出土の土器にたいしては余り意味のないこととも思える。

大きな流れを見るならば、7世紀後半から律令制的支配の波及に付随して須恵器の生産が増加し、土師器を主体としていた器種構成の中に須恵器の供給が多くなる。その後、徐々に須恵器は増え続け、9世紀に入ると土師器を凌駕するようになる。この間の変化は漸移的であり、大きな変化を予測させるような動きではない。しかし、9世紀後半になると須恵器の焼成方法は、還元焰の焼き締めがなくなり、酸化焰焼成へと転換していく。そして10世紀前半には煮沸用土器として須恵器羽釜が出現し、土師器甕を駆逐していくようになる。また、羽釜とともに出土量は少ないが、羽釜と胎土が類似し、酸化焰焼成で丁寧にロクロ整形されるS J 118-42や、下佐野遺跡5区6号住居跡に見られる甑・甕・瓶も生産されている。この後、土師器は供膳形態からは姿を消し、鉢や土釜に僅かに命脈を保つようになる。

その他、9世紀以降の変化現象の一つとして、鬼高期以降途絶えていた内黒土師器が再び現われるが、この内黒土師器は鬼高期の系統にあるとは考えられず、畿内の黒色土器との関係の中で出現してくるものと思われる。畿内の黒色土器は8世紀中頃から生産が始められ、9世紀中頃には輪状の高台を持つ黒色土器碗の生産量が増加し、10世紀前半には土師器を遙かに凌ぐ量になっていく。この形態の基調となるものは、緑釉・⁽¹⁰⁾灰釉陶器・輸入陶磁器であった。当遺跡では、余り内黒土師器は見られないが、近接する北原遺跡では9世



紀前半から出土している。北原遺跡42・54・60号住居跡に見られる内黒土師器は、須恵器坏と形態が類似し、平底で体部は直線的に開き、底径は口径の $\frac{1}{2}$ 程度のものである。9世紀後半以降になると高台の付く碗・皿が多くなる。碗の形態は体部が丸みを持ち、高台は細く、同時期の須恵器碗の器形よりも、灰釉陶器に近いものである。しかし、須恵器に於いても、体部に大きく丸みを持つものがあることや、口縁部のつくりには灰釉陶器の模倣と考えられるところもあり、土師器、須恵器共に緑釉・灰釉陶器の影響が及んだ結果と思われる。また、煮沸用土器においても9世紀以降畿内では、鉄釜の形態を模した鍔釜が主流になるとされており、⁽¹¹⁾ 県内に於ける羽釜の出現とも無関係ではないと考えられる。

これら9世紀中頃以降、須恵器の酸化焰焼成への転換、畿内の黒色土器との関連の考えられる内黒土師器の出現、灰釉陶器の供給、また灰釉陶器の影響の窺える須恵器の形態変化や、新たな器種の出現、土師器の衰退、煮沸用土器の変革等、土器に見られる変化は、現れる形は地域によって異なるものの全国的な規模で起こっているといえる。今後、これらの変革の意味するところを探る上でも、他地域の資料等と比較し検討していくことを課題としたい。

注

- (1) 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24 1986年
- (2) 6世紀代から8世紀前半頃まで、長胴甕に対し胴部にふくらみを持つ甕が存在するが、出土量が少く、また形態も多様であり、1つの型式として促え難い。しかし、他の甕類と区別する必要があるため、便宜上(胴張り形)の名称を与え使用した。
- (3) 井川達雄「古墳時代・奈良時代の土器について」『三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (4) 『埋蔵文化財発掘調査報告IV 児沢・立野・大塚原』埼玉県教育委員会 1980年
- (5) 『藪田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
- (6) 『下佐野遺跡II地区』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
- (7) 『分郷八崎遺跡』群馬県北橘村教育委員会 1986年
- (8) 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』No211 1982年
- (9) 田辺昭三『須恵器大成』1981
- (10) 『北原遺跡』群馬町教育委員会 1986
- (11) 西 弘海「西日本の土師器」『世界陶磁全集2 日本古代』1979年

2 S D59・46出土土器の様相

S D59・46区画内で、当該時期と考えられる土器を出土しているのは、S D59・46を除くと、S J27と遺構外出土遺物6・15・26の数点に過ぎない。S D59・46出土土器は476～512頁に分類し掲載したが、分類際には、当遺構から出土した土器を一括遺物として扱い形態分類を行った。しかし、合わせて破片の数量処理も行いたかったため、できる限り、形態・整形・胎土によって分類したが、口縁部の形態のみで大きく分類したものもあり、底部の形態や整形を考慮していないものもある。多量の土器の様相を捉えるためであり、型式組列の抽出を意識していないため、住居跡出土の土器とは別扱いである。土師器坏・埴・皿に関しては、器種分化が予測されたので、形態分類した上、同一形態の中で器高による違い、法量による違いによって分類している。この分類を中心に、全体的な様相を法量の規格性の検討や、器種の量的な比較を加えて把握していきたい。

畿内に於ける7～8世紀の土器様式については、西弘海氏の優れた一連の論文がある。⁽¹⁾6世紀末葉以降、朝鮮三国から導入された文物により、7世紀初頭の食器類に「金属器指向型」ともいべき方向・性格を持った大きな様式変化が起こる。その後、律令制を基軸とする支配体制の確立による官僚制の発展と、それにかかる大量の官人層の出現とその特殊な生活形態を背景として、食器類に法量の規格性を前提とする多様な器種分化が現れるのである。このような宮都に於ける土器様式は、当遺跡の官衙的遺構であるS D59・46の出土土器の中にどのように反映しているであろうか。

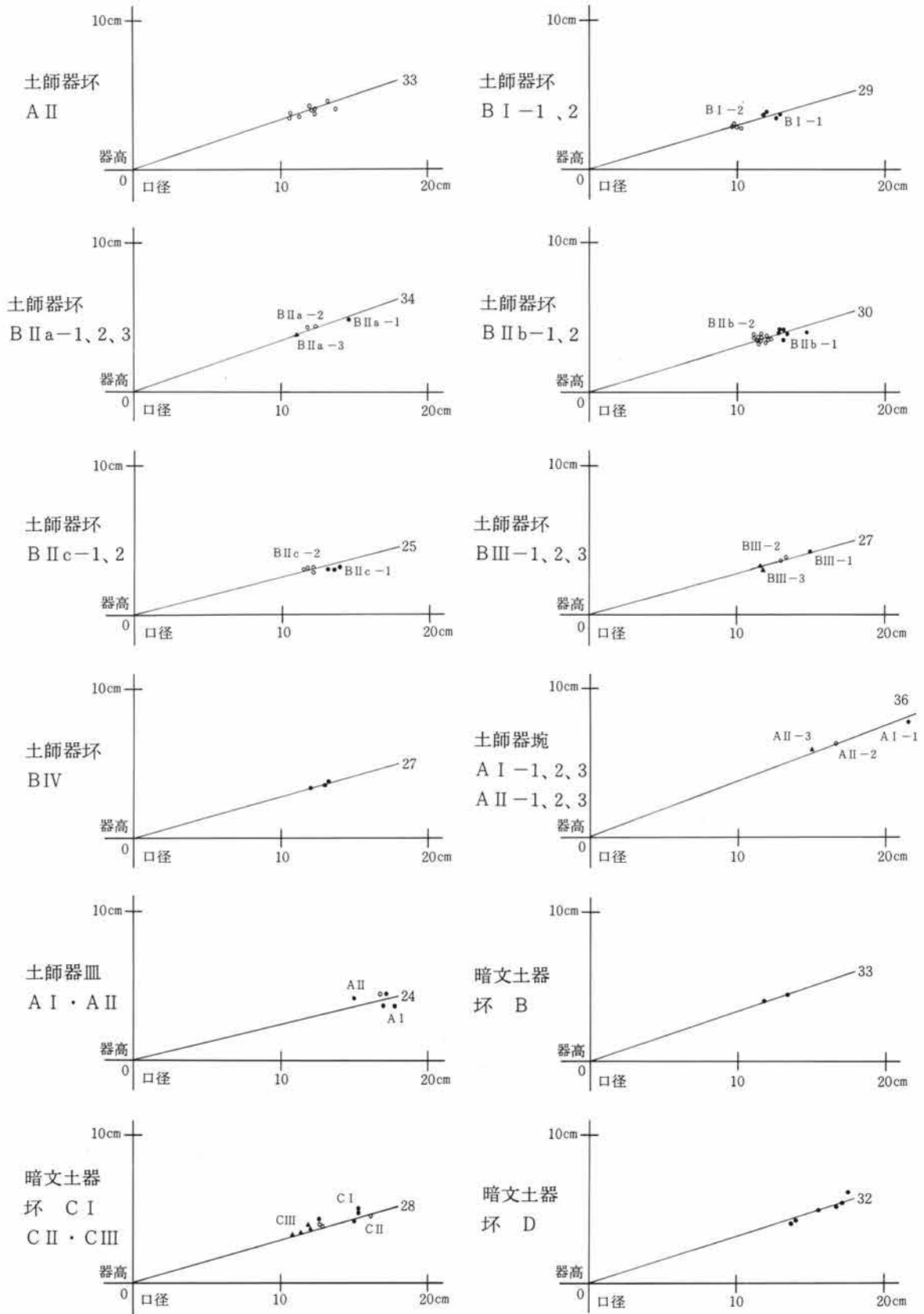
土師器

土師器は、色調・胎土・整形からみて3種類ある。最も多いのは、一般的な住居跡から出土する土師器と同様のものであり、実測した土師器全体の76%を占める。器種は、坏・埴・皿・小形甕・長胴甕・甕がある。次に多いのは、20%を占める暗文土器である。畿内では、金属器の光沢を出すために体部内外面を篋研磨し、内面に暗文を施す坏Cが飛鳥Iに出現し、以後、多様な器種分化を遂げる。この畿内産土師器を模倣し、在地で製作されたと思われるものが当遺跡の暗文土器であるが、一般的な集落では余り出土せず、県内でもまとも出土する遺跡は、鳥羽遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域など、官衙・寺社、もしくはそれらに近接する遺跡に限られている。器種には、蓋・坏・埴・皿・高坏とあるが、大半は坏であった。もう一つは、4%と極く僅かであるが、畿内産と考えられる土師器が出土している。精選された胎土を用い、薄手で細かい篋研磨が、全面もしくは外面に施されている。

土師器の中では坏類が圧倒的に多く、59%を占める。坏は古墳時代の須恵器模倣坏の系統にある体部に稜を持つ坏Aと、畿内の土器様式の影響を受けて出現した底部から口縁部まで丸みを持つ坏Bとに分かれる。⁽²⁾実測個体は坏Aが18点、坏Bが80点である。同時期の一般的な住居跡と同様に、坏Aが僅かで坏Bが主体を占める傾向にある。坏の分類は、細部の形態の違いによって分け(I、II…)、さらに器高の差(a、b…)、法量の違い(1、2…)によって分けた。この分類の妥当性を検討し、これらの坏にも規格の規制があるかを検証するため、径高指数による図を作成した。

さて坏Aであるが、出土量が少ないため比較的数の多いAIIの図を作成してみた。径高指数33近辺に、各法量毎にまとまる傾向が窺われる。BIは、口縁部の内傾する形態であり、法量によりBI-1・BI-2に分かれる。径高指数29の線に集中し、口径10.0cm前後、12.0cm前後にまとまりが見られる。BIIは、器高によってa～cに分かれ、それぞれaは指数34、bは30、cは25の線付近にまとまりを持つ。さらに法量によって細分され、BII b-1は口径13.2cm前後、BII b-2は口径12.0cm前後に集まることがわかる。BII

第2節 出土土器について



SD59・46 出土土師器法量比較表

第4章 調査成果

a・BⅢは、口径・器高の測定し得る資料が少ないが、1～3の法量に分かれる傾向は見られる。BⅣ・BⅤは、共に資料が少なく検討し得なかった。以上のことから、特に坏BⅡに同一形態の中で器高を異にする、また法量による器種分化の存在は明瞭であり、土師器坏の中に規格性のあることが確認できた。その他、土師器碗は出土数も少なく、口径・器高の測定できるものが僅かであるが、径高指数36の線上に乗り、口径15.0cm・17.0cm・22.0cmと重碗の様相を呈す。土師器皿は、口径17.0cm前後のみに集まり、法量分化の傾向は見られない。さらに、土師器暗文土器こそ規格に規制されていると考えられるが、口径・器高の測定できる資料が少なく、明瞭な規格は不明である。しかし、比較的資料のある坏C・Dについては、法量の違いが見られ、特に坏Dは径高指数32の線上に集まり、規格の存在が示唆される。

次に、これらの坏に前後関係が存在するかを検討してみる。BⅠには、口径10.0cm前後の小形品を含むが、BⅡにはない。BⅠよりも口縁部の内傾度が強い口径10.0cm前後の坏は、当遺跡よりも古い様相を持つと考えられる三ツ寺Ⅲ遺跡42・91号住居跡⁽³⁾などに多く出土しており、BⅡの坏類よりも古い様相と考えられる。当遺跡に於いては、BⅡが主体を占めるが、このことは破片の数量も、BⅡが圧倒的に多数であることから窺える。BⅡを主体とする時期ではあるが、BⅠの存在によって多少の時間幅を持つことが想定される。

その他の器種であるが、小形甕や甕（胴張り形）は一型式に括れる固体数が少なく、様相が捉え難いが、一部の甕、胴部がふくらみを持ち、口縁部の直線的に外反する形態368・369の甕は、古墳時代からの形態変化の中で捉えられるであろう。例えば、これに先行する形態にS J 78-5、さらに前段階のものに、三ツ寺Ⅲ遺跡94号住居跡出土土器1が考えられる。その他、須恵器との器形の関連性を思わせるものもある。370・422・423・425は、口縁部が短く直立するタイプであり、胴部は上位に最大幅を持って大きく球状を呈し、底部は丸底である。全体の形状のわかるものには、S J 52-17、S J 191-45があり、胴部の上位が大きく張り、口縁部の直立する甕は、須恵器の大形短頸壺に類似する。この模倣と考えられるが、整形は他の甕と同様篋削りであり、把手、高台も付かない。また蓋の模倣も見られない。口縁部も短い外反気味のものもあるのは、蓋がないために直立する機能上の必要性がないためであろうか。煮沸形態の土器であるが、長胴甕は非常に少なく、実測したものは3固体であり、破片も極く少ない。官衙から出土する土器は食器類が優勢であるとは言え、ほとんど煮沸用土器がないのは何故か。検出した遺構に、煮沸用土器を使用するような厨に相当する遺構が含まれていない為であろうか。

須恵器

須恵器も蓋坏が圧倒的に多く、須恵器全体の82%を占める。色調・胎土を観察すると、4種類に分けられ、1、秋間窯跡群の特徴とされている黒色鉱物粒を含む土器群。2、白色の細砂粒を含み灰白色を呈す土器群。3、白色の細礫を多量に含む土器群。4、灰白色を呈し軟質な焼成の土器群である。分類型式と胎土との関係を見ると、蓋AⅠ・坏Gは第2群の胎土を使用しており、蓋B・坏Hは第4群の胎土を使用している。その他の型式は、固体数も少なく、胎土との関係は捉え難い。

次に、須恵器蓋坏についても法量の検討をしてみたい。坏は口径11.0～14.0cm・器高3.2～4.8cm、口径16.7～19.0cm・器高3.5～5.5cmの2グループに明瞭に分かれ、中間形態は存在しない。蓋についても口径11.6～14.8cm、口径17.2～21.0cmに集中し坏身の口径に対応している。しかし、小形品と大形品に器形の類似は見られず、小形品は大半が無台坏身であり、大形品は、数点を除いて例え小規模ながらも高台が貼付されている。畿内では、須恵器の食器類も飛鳥Ⅳ以降、土師器と密接な関係を持って器種分化しており、形態・法量が土師器に近似している⁽⁴⁾。だが当遺構の土器群には、土師器は前述したように法量による分化を認められるが、須恵器は2グループに分かれるものの双方の器形は類似せず、器種分化とは言い難い。また、土師器

と須恵器の坏類には類似点がなく、畿内のような互換性は見られない。しかし、この段階では双方に形態の類似が無いとは言え、土師器坏B、皿Aは須恵器の器形の模倣と考えられ、土師器と須恵器は密接な関わりを持っていることは確かである。

小形の坏では、比較的数量のある坏Bは、全体的に薄手で底部は丸底気味、底部と体部の境に明瞭な稜を持って外反する。底部は不定方向篋削りであり、蓋A IIとセットになると思われる。その他、底部整形には、回転篋削り、回転篋切り後回転篋撫で、回転篋切り未調整のものがある。大形の坏は、坏G・I I・Oが底部が丸底のもので、Oは無台坏身であるが、G・I Iは高台よりも底部が突出するタイプである。高台の形態は様々であり、これら須恵器の模範となったと思われる湖西古窯跡群・美濃須衛古窯跡群の坏の高台に類似するものもあるが、有るか無きかの小規模なものも多い。高台は付け高台が多いが、一部に削り出しと思われるものもある。しかし、篋削りによって高台を形作ると言うよりも、つまみ出しか、もしくは両側を強く押し撫でることによって高台部を突出させていると言う方が適確である。だが、これらの中にも、断面の観察できるものは粘土紐を貼り付けて小規模な高台を突出させている例が見受けられる。このことから、これら坏の高台は基本的には削り出しではなく、貼り付けによって作られるものであり、一部のものに関して削り出しの可能性があるとと言える。大形品は、底部は総て丁寧な回転篋削りで整形され、体部下位に及ぶものもある。小形と大形は1:2の比率で大形品が多いが、破片の数量を見ると分類し得たものだけでも小形品は68片、大形品は313片であり、大形品が主体となっている。蓋は、鈕の形態は大多数のものが、県内に主体的な円盤状の粘土板を貼り付け押し撫でて整形したものである。蓋A I・A IIのみが、畿内・東海地方の主流である扁平な疑宝珠状を呈すが、全体的な形態は類似せず、カエリも存在する。飛鳥Vには完全に姿を消す蓋のカエリが、これらの蓋では85%に残っており、主流を占めている。

碗は、Aは口縁部が内彎し、内面に一条の沈線が巡るものであるが、口縁部だけの破片であり、底部が平底になるのか、尖頭になるのか不明である。その他の碗B・Cは、いまのところ類例は見当たらないが、全体的に丸く半球状を呈し、底部中央寄りに小さな高台が付き、丸底で高台よりも底部が突出気味である。

皿は、土師器が主流であり、須恵器の皿は殆ど出土していないが、唯一の破片(355)は、その形態が陶邑窯のMT21号窯跡、地獄洞古窯跡・須恵9号窯跡出土の皿に類似している。

その他の器種で形態のわかるものは、長頸壺・短頸壺のみである。長頸壺は部分の破片で接合はしないが、口縁部は頸部から口唇部まで比較的直ぐに開く。肩部は張りを持ち、台部は外反、端部は平坦面を持ち内端部が接地する。短頸壺は、最大幅が35.0cm前後、42.0cm前後のものがある。蓋は天井部が水平に広がり、屈曲して口縁部が直線的に開く。鈕は坏蓋と同様に円盤状の扁平鈕である。壺には一対の小規模な把手が付けられ、肩部に二条の沈線の巡るものが多い。台部は断面長方形を呈し、接地面は平坦である。

出土傾向

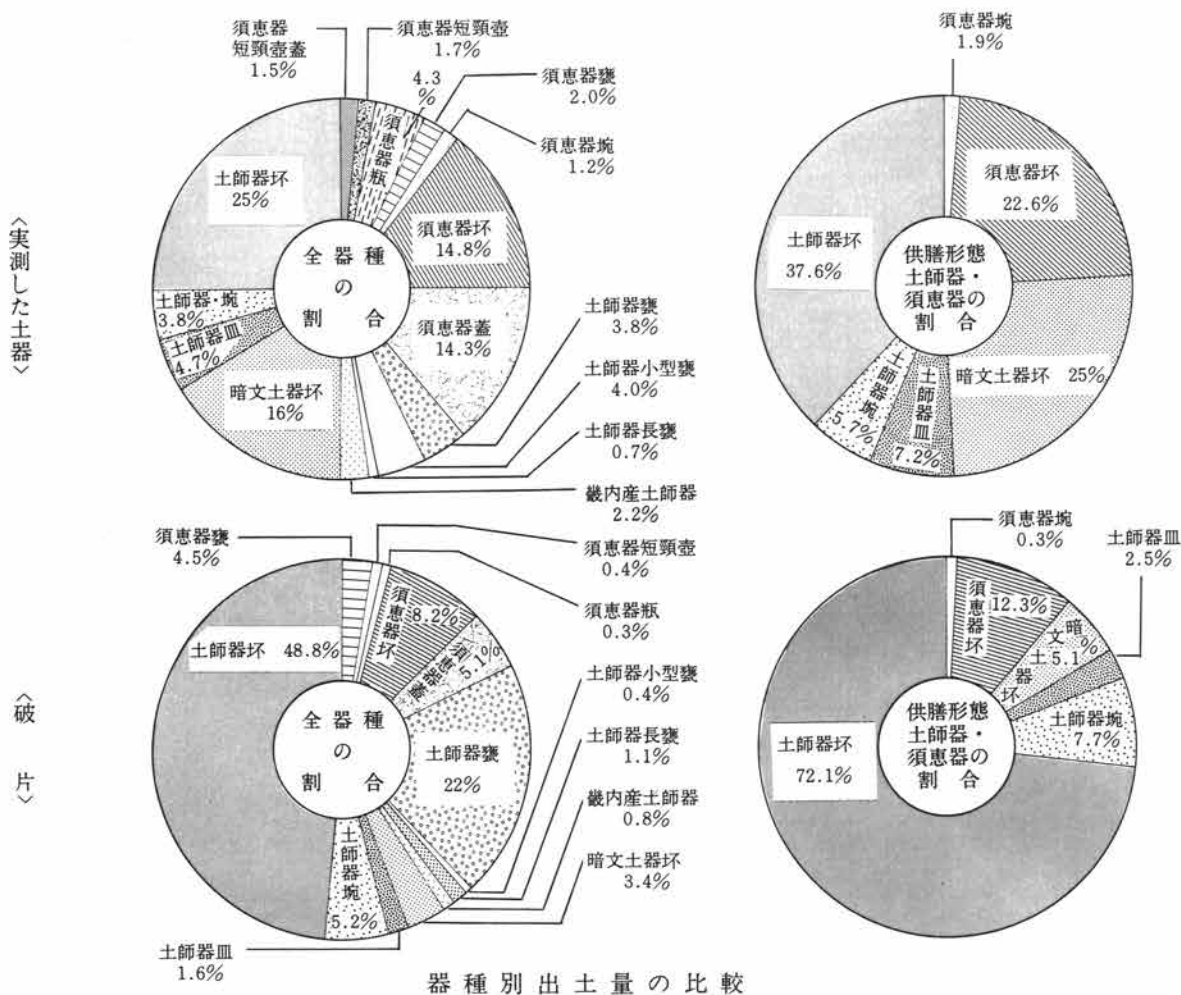
本来、溝から出土した器種の総ての数量比に較べて、実測した器種間の比率に偏りがあるので、それを修正するためと、出土器種の割合を比較し、土器の様相を量的に把握するために円グラフを作成した。さて、全器種の実測した固体数で見ると土師器が6割、須恵器が4割と、須恵器の割合がかなり多く感じられるが、破片も加味すれば、全体としての須恵器は2割程度になるのか。この時期の一般的な住居跡の出土土器と比較すると、須恵器の量は決して卓越しているとは言えない状況である。また、土師器の中で暗文土器の占める割合が27%と多数であったが、これは土師器坏に較べ、小片も実測したためであって、残りの破片で比較すれば暗文土器は極く僅かであり、土師器の中では2割弱の存在であろう。その他、破片の中での土師器壺の割合が非常に多くなっているが、このことで固体数が多い傾向にあるとは言えず、単に大形であるため、

第4章 調査成果

小片に破損した場合、坏一個に較べ甕の破片の量が多くなるからで、実測した土器の数量比にそれ程齟齬があるとは思えない。全器種の中では、供膳形態の割合は82%を占めている。次に、これら供膳形態の中で、土師器・須恵器の割合を見ると、須恵器の蓋と坏は1セットで機能しているため蓋を除外すれば、須恵器は25%程度であるが、破片の割合で見るとさらに少なくなる。破片の中では土師器坏の割合が圧倒的に多いが、体部片等は器種の見極めが難しく、碗・皿も含んでいる可能性がある。しかし、碗・皿は実測数と破片数にそれ程差はなく、暗文土器・須恵器が実測固体よりは少ないと考えられるので、土師器坏が50%以上を占めることは確実と思われる。参考に、実測固体と破片を平均して食器類の構成を見ると、須恵器坏を1とする と土師器坏3、暗文土器0.9、土師器碗0.4、土師器皿0.3の比率となる。

実年代について

実年代を推定する前に当遺構の土器が、一括遺物として捉えられるかを検討することにする。まず、覆土の堆積状態に関しては、471頁に記してあるが、3～4層に分層でき、遺物はそれぞれ上層・中層・下層・最下層と各層出土遺物の接合状況を見ると、1固体の中の接合が一層に収まるものが圧倒的である。二層に跨がって接合したものは9%、上層と最下層というように層を飛び越して接合したものは1%に過ぎない。このことは、土器の廃棄が層毎にかなりのまとまりを以て行われたことを示している。しかし半面、先に分類した土器型式のうち、類例の多い土師器坏B、須恵器坏B・Gの出土層位を見ると、上層から最下層まで総ての層に分布しており、覆土の堆積に型式が替わる程の時間差がないことを示唆していると言える。次に、



一括遺物として捉えられる S D59・46区画内の S J 27出土土器を見ると、20は体部に弱い稜を持つ坏であり、土師器坏 A III に分類され、1～3・21は底部から口縁部まで内彎するタイプで B II に分類される。18は、土師器碗 B、6・7・23は土師器皿 A I に相当する。5・19は暗文土器 A、4は暗文土器 C I に分類される。須恵器蓋は、カエリのあるもの、端部を折り曲げたものと双方とも出土しており、総て口径18cmを超え、蓋 A I の破片も存在する。坏は、24が坏 B、12・26・27が坏 G に分類される。以上のように、S D59・46で分類したもののうち約2割が S J 27の中で供伴していることになる。その他の分類型式についても、当遺跡で検出された住居跡の中で、土器様相の類似するものを参考に検討したい。S J 40では、7の長胴甕が S J 27-14と類似しており、その他の土器も当遺構と同じ様相を持つ。例えば、1・2は土師器坏 B I、4は須恵器坏 K、5は須恵器坏 J に相当する。S J 68では、2・4が土師器坏 B II、3・6が土師器坏 B III、8が暗文土器坏 C I、9は須恵器蓋 A II、10は須恵器坏 B、15は須恵器坏 K、16は須恵器坏 J に相当する。土師器小形甕・長胴甕・甕・須恵器瓶類も S D59・46出土土器とよく類似している。これらを加えると約3割の分類型式の一括性が確認される。しかし、3割とはいえ、当遺構において、これらの分類型式は皆固体数の多いものであり、分類して実測したものの中で50%を占めている。

遺構の重複を見ると、当遺構と同時期に機能していたと考えられる S A 03・S D 01の下に S J 20が存在している⁽⁵⁾。S J 20の出土土器は、当遺構の土器よりも古い様相を持つが、土師器坏・長胴甕の形態は当遺構の土器と形式的に連続している。下限については、当遺跡の住居跡出土土器を13段階に分け変遷を示したが、第IV段階の良好な一括遺物が住居跡では検出されず、当遺構の土器群も第V段階の土器とは連続的な様相は見られないため、第IV段階の遺物を含むことはないと思われる。以上のことから、当遺構の土器群は、第III段階に相当し、一つの段階の中で収まるものと考えられる。

さて、実年代であるが、下東西遺跡では実年代を推定し得る資料は検出されなかった。そこで、須恵器を美濃須衛古窯跡、湖西古窯跡の須恵器に対比させつつ、最も実年代研究の進んでいる飛鳥・藤原宮、平城宮で与えられている実年代によって、当遺構の土器群の実年代を推定することとしたい。

当遺構出土土器の様相は、直接的には飛鳥・藤原宮、平城宮に類似しない。例えば土師器坏にしても、器種分化は捉えられるが、類似する形態はなく、口径も対応しない。須恵器坏に於いても、当遺構の無台坏身と、飛鳥V期に盛行する坏 A IV では、法量の類似するものはあるが、形態は相違する。だが、当遺構の須恵器に類似するものは、美濃須衛古窯跡、湖西古窯跡に存在している。美濃須衛古窯跡⁽⁶⁾では I～V 期に編年された中の、IV 期第1小期前半の様相が類似する。「有台坏身は、大ぶりのものが大部分を占めて、底部が丸みをもつものが多く中には高台よりも下がるものがみられる。底部の調整は丁寧回転ヘラ削りであり、高台は器形に較べて細身のものが多いが、整形に鋭さはみられない。」とあり、IV 期第1小期後半では、「有台坏身の法量における分化が前半期に較べて進んでいる。それは、全体的にみて小型の器形が増えつつあるという変化である。」とされ、第1小期前半は8世紀初頭に、第1小期後半は8世紀第1四半期後半から第2四半期初頭に比定している。しかし、当遺構の大形有台坏身には法量による分化は見られず、その意味では第1小期前半に納まることになる。この実年代は、IV 期第1小期の基準資料である地獄洞古窯跡・老洞古窯跡1・2号窯の大形無台坏身が、飛鳥V期に盛行する坏 A IV と形態・法量が類似すること。また平城宮では、平城宮 I の坏身法量の分布形態と、IV 期第1小期の坏身法量の数値とが殆ど一致していることから導き出されている。

⁽⁷⁾湖西古窯跡では、類似する様相がV期第1小期・第2小期に見られる。第1小期は、「坏身 A₁ I・A₁ II である。全体を半円形とし、底部へ回転ヘラ削り調整を同心円形に2段施す。高台は、外周の削り面に接着

第4章 調査成果

させる。削る角度や接着の位置により、底部が高台よりも突出する場合もある。」とあり、坏身A₁Iは口径15.5~18.0cm、A₁IIは口径13.0~15.0cmに法量分化している。この坏身A₁Iに当遺構のI Iが形態・法量とも類似している。第2小期の有台坏身はA₂I・A₂IIであり、底部の高台よりも突出する坏身が多くなるとある。続けて第3小期には、第2小期に出現した無台坏身C₃が主体となるが、当遺構では坏身C₃のように、体部の大きく開く形態、篋切り未調整のものは余り多くないことから、第3小期までは下らないと考えられる。これらの実年代は、伊場遺跡の干支年号を持った木簡と伴出する坏身、城山遺跡の「竹田里」と表記された坏身によって推定され、第1小期は7世紀末、第2小期は7世紀末から8世紀第1四半期中頃に比定されている。「竹田里」と表記された坏身から、霊亀元年(715年)以前の里制に基づくものであり、また後続する型式の坏身が、神亀四年(727年)・天平七年(735年)の木簡と伴出することから、715年から727年の間に型式変換が起こったとしており、下限は限定できるが上限については確定し得ない。しかし、以上のことから、一応幅を持たせてS D59・46出土土器は、7世紀末から8世紀第1四半期の実年代を想定しておきたい。

まとめ

S D59・46出土土器には、畿内の宮都に於ける土器様式がどのように反映しているであろうか。まず、多量の食器類が存在すること、7~8世紀の土器様式の基調となった暗文土器が出土していること、土師器坏類には法量の規格性が存在し器種分化が見られる。これらのことから、宮都の土器様式の本質的な要素は顕現していると考えられるが、それらは皆、搬入もしくは完璧な模倣ではなく、それぞれ規制・規格性の緩んだ状態、また、在地的な特色を持った形で見られる。これらの格差が言い換えれば、支配体制・経済の充実の度合い、土器生産体制の地域差や工人の系統の違い、またそれぞれの地域への伝わり方の相違、つまり分布によって受容する側の様々な情報を含んでいると考えられるが、残念ながら浅学のためそこまで検討するに至らなかった。今後これらの問題を踏まえて考えていきたい。最後にS D59・46区画遺構群の官衙としての可能性を遺物の面から見ると、多量の食器類が出土していること、暗文土器が存在すること、墨書土器は1点も検出されなかったが、須恵器円面硯が出土していることから、官衙としてのかかなりの条件を満たしていると思われる。

尚、本稿をまとめるにあたり、大江正行氏、外山政子氏に多大なる御教示を頂いた。文末ながら記して感謝の意を表す次第である。

註

- (1) 西 弘海「土器様式の成立とその背景」 小林行雄博士古稀記念論文集『考古学論考』 1974年
「平城宮出土土器の編年とその性格」 『平城宮発掘調査報告VII』 奈良国立文化財研究所 1976年
「藤原宮西方官衙出土土器の編年と西方官衙についての考察」 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』 奈良国立文化財研究所 1978年
「奈良時代の食器類の器名とその用途」 『研究論集V』
- (2) 畿内の土器様式の影響は、土師器坏の形態変化、新たな碗・皿形態の出現という食器類の充実ともいべき変化に求められる。坏Bが古墳時代からの模倣坏と系統を異にすることは、分類の項でも前述したように両者が長い間共存することからも考えられる。この坏の形態変化は須恵器坏の模倣になるものと思われるが、体部から底部に丸味をもつ須恵器坏はあるものの、細部まで類似しているとは言い難い。また土師器皿は、その形態をやはり須恵器皿に範をとったものと考えられる。須恵器皿で類似する形態は、保渡田遺跡21・33号住居址、陶邑窯TK217号窯跡にみられるが、違う形態の皿もある中で、何故土師器皿Aの形態が多いのか疑問である。
- (3) 井川達雄「三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1976年
- (4) 西 弘海「平城宮出土土器の編年とその性格」 『平城宮発掘調査報告VII』 奈良国立文化財研究所 1976年
- (5) S D59・46区画内の遺構で、方位・出土土器からみて同時に存在していたとみられる遺構は、掘立柱建物7棟・柵列7列・溝3条・堅穴住居1軒である。これらの中で重複がみられるのはS B01・02、S B16・17、S D46・S A06・08・10の最高1回の重複のみであり、同じ機態を持つものの造り替えと推定され、S A03、S D01に重複するS J20は、この遺構群よりも以前に存在していたと考えられる。
- (6) 渡辺博人「美濃須衛古窯跡群資料調査報告書」 各務原市教育委員会 1984年
- (7) 後藤建一「東笠子遺跡群発掘調査概報」 静岡県湖西市教育委員会 1983年

3 暗文土器

はじめに

下東西遺跡では本報告書に掲載した暗文土器だけでも128点を数え、破片を含めた総数は約500点になる。暗文土器を出土した遺構は竪穴住居17軒、掘立柱建物1棟、柵列1列、竪穴状遺構2基、溝3条、土壇2基、ピット1基（本報告書に掲載した暗文土器出土遺構であるが中世遺構から出土したものは除いてある。）からである。そのうちS D59・46（官衙的遺構の区画溝）からは、実測個体66点、破片（未実測個体）128点に及び、下東西遺跡出土暗文土器の実測個体の2分の1、破片を含めた全体量では3分の1以上を占める。またS D59・46からは、畿内産と推定される、器壁が非常に薄く、内外面とも丁寧な篋研磨が施された土師器の一群が出土しており、暗文土器とともに注目される。

今まで群馬県内では、暗文土器を出土する遺跡の報告例は27遺跡が知られているが、それも近年の上越新幹線、関越自動車道新潟線等の開発に伴う発掘調査によるもので、それ以前は、富岡市本宿・郷土遺跡、富岡市内匠遺跡を除いては一遺跡からの出土数は数個体にすぎず、本宿・郷土遺跡でも18点、内匠遺跡では7点であり、下東西遺跡における暗文土器の出土量の多さは他に例をみないものである。下東西遺跡出土暗文土器は遺跡の性格をみるうえでも注目すべき資料であるため、下東西遺跡出土の暗文土器、群馬県内出土の暗文土器の様相を概観した。

暗文土器の概要

暗文土器は、畿内において金属容器特有の光沢をもつ平滑な器面とその質感を模倣して内面に放射状、螺旋状の文様が篋磨きによって施されたもので、その発生と盛衰をみると飛鳥・藤原宮における7世紀初頭の飛鳥Ⅰより坏・皿に出現し、飛鳥Ⅱから平城宮Ⅰにかけて坏Aの底部内面に螺旋状暗文、口縁部に斜放射状暗文が二段に施されている。平城宮Ⅱでは、坏Aの口縁部内面の暗文が斜放射状暗文一段と連弧文（内面上段）との構成に変化する。平城宮Ⅲでは、螺旋状暗文が省略され、斜放射状暗文一段のみとなり、放射状暗文の間隔は荒くなる。平城宮Ⅳでは、暗文技法は急激に衰え、坏類からは消え、皿・高坏の底部内面に螺旋状暗文をもつものが残る程度になる⁽¹⁾。以上のように飛鳥・藤原宮、平城宮では、暗文土器は7世紀初頭に出現し、7世紀～8世紀前葉に最盛期を向かえ、8世紀中葉には衰退する。

上記のように律令制の萌芽期から確立期にかけて使用された暗文土器は、律令制の地方への浸透がなされ、国司の派遣によって地方政治においても中央への追従がみられるようになる。それにもなって当然官衙及び関連施設で提供される食事の器も中央指向がみられ、畿内産のものがそのまま持ち込まれたり、暗文技法の模倣によってその地方の在地産の土器に施されるようになった。

関東地方でも各地で畿内産の暗文土器の出土がみられる⁽²⁾。畿内産の土師器は、飛鳥Ⅱから平城宮Ⅲにかけてのものが相模・武蔵・上総・下総安房の各国から出土している。その出土地域は、相模湾から下総にかけて多くみられ、特に印旛沼・手賀沼周辺では出土遺跡の集中がみられる。内陸部では、武蔵国の八幡大神南遺跡（埼玉県児玉郡上里町）、立野南遺跡（埼玉県児玉郡上里町）の2遺跡だけである。上野国においては、いままで出土例は知られていなかったが、1979年度に発掘調査が実施された荒砥天之宮遺跡（県内暗文土器出土遺跡図No.17、以後出土遺跡図と略す）において竪穴住居より平城宮Ⅰの坏⁽³⁾（県内暗文土器図・表No.151、以後暗文土器図・表と略す）が1点出土している。

関東地方における暗文土器出土遺跡は、畿内産土師器を出土する遺跡の地域と重複する地域であるが、北武蔵においては、畿内産土師器出土遺跡は2遺跡にすぎないが、暗文土器出土遺跡は21遺跡と多くの遺跡か

第4章 調査成果

らの出土がみられる。下野国では薬師寺南遺跡（栃木県河内郡河内町）で報告されているだけである。また、常陸国からは、今まで暗文土器出土の報告例は知られていない。上野国内では、今まで出土例も少なくあまり知られていなかったが、近年の大規模開発に伴う発掘調査によって後述の県内暗文土器出土遺跡図にみられる35遺跡からの出土例が知られている。

関東地方の暗文土器は、畿内から搬入された畿内産土師器の暗文の影響によって模倣されて製作されたと考えられる。畿内産土師器の搬入、在地産土師器への模倣は、地方官衙・寺院等を中心におこなわれたと考えられ、関東地方を含む東国における地方官衙の設置は、7世紀後半と⁽⁵⁾考えられ、畿内産土師器の搬入品は飛鳥II（7世紀第II四半期）以後のもので数量とも多くなるのは飛鳥III（7世紀第III四半期）であることから、関東地方における暗文の模倣は7世紀後半と推定される。暗文の施文方法は、概ね畿内産のものと同様であるが、7世紀末以降に上総国内の中心に下野国薬師寺南遺跡、武蔵国森戸原遺跡（神奈川県横浜市港北区）でみられる斜格子状文や相模国・甲斐国でみられる花卉状暗文など畿内産のもと若干異なるものがみられ、その衰退は畿内では平城宮IV（8世紀中頃）であるのに対して関東地方の多くの地域では、9世紀第I～II四半期までみられ、花卉状暗文にいたっては10世紀前半くらいまで残っている。

下東西遺跡出土の暗文土器

下東西遺跡では、前述のように27基の遺構から暗文土器の出土がみられるが、暗文が施されている器形は、坏・椀・皿・高坏がみられる。暗文の施文方法は、放射・斜放射状・螺線状・斜格子状とその組合せがみられる。外面の整形もS D59-235にみられるような口縁部まで篋磨きが施されているものや、他の土師器坏と同様に口縁部は横撫で、体部・底部は篋削りが施されているものがみられる。

下東西遺跡出土の暗文土器は、S D59・46出土遺物の項でおこなった分類に他遺構出土の暗文土器も時間的な前後関係はみられるが、概ね一致する。S D59・46では、暗文土器坏の分類を暗文土器坏A・B・C・D類の4つに分類し、暗文土器C類をさらに3つに細分をおこなった。その他の暗文が施されている椀・皿・高坏については、出土例も少ないこともあるが、暗文の施されていない形態と同一で坏のように暗文の施文による形態差は認められない。暗文土器坏の分類については479～480頁に記載してあるが、その概要は以下のとおりである。

暗文土器坏A類： 口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。整形は、外面の体部から底部にかけて丁寧な篋研磨が施されているものがみられる。口縁部の横撫では、幅が狭く、口唇部だけのものもみられる。

暗文土器坏B類： 底部と体部の境は、明確で弱い稜をもち、底部はゆるい丸みをもつ。体部から口縁部にかけては、僅かにふくらみをもち開く。

暗文土器坏C類： 底部は、平底が僅かにゆるい丸みをもつ。体部から口縁部にかけては、ほぼ直線的に開く。暗文土器坏C類は、量目・体部の形態の違いにより3つに細分できる。

暗文土器坏D類： 底部は、ほぼ平底を呈す。体部は直線的に開き、口縁部との間に弱い稜をもつ。口縁部は、体部に比べて短く僅かに外反する。

S D59・46でおこなった暗文土器坏の分類の概要は、以上のようなものである。上記の分類に基づき他遺構出土の暗文土器についてその施文方法・整形等をみると以下のとおりである。なお、暗文土器の残存状態は、完形品にいたっては僅かで、底部から口縁部にかけての破片も少なく、口縁部片・体部片・底部片といった破片が主体であるため、暗文土器全体についての様相については不明な点もみられる。

暗文土器坏A類

- (1) 外面の口縁部から体部・底部にかけては丁寧な篋削りか篋磨き。内面の体部は放射状暗文、底部は螺線状暗文、底部と体部との間には帯び状の篋磨きが施されている。

S A 03—1、S D 59—235

- (2) 外面は、(1)と同様であるが、内面の体部に放射状暗文が施されている。なお体部片だけの出土のものも本項に含んでいる。

S J 27—5（底部と体部の間に帯状の篋磨きが施されている）、S J 27—19、S D 59—236・237・238

- (3) 外面の体部・底部は篋削り。内面の体部は放射状暗文が施されている。

S J 111—3

暗文土器坏B

- (1) 外面の体部から底部にかけては放射状暗文、底部は螺線状暗文が施されている。

S D 59—56・239、S B 18—1

- (2) 外面は(1)と同様であるが、内面の体部は放射状暗文が施されている。なお、体部片だけの出土のものも本項に含んでいる。

S D 59—57・58・240・241・242、S J 107—1、S J 161—12、S D 21—6

- (3) 外面の体部・底部は篋削り。内面の体部は放射状暗文が施されている。

S J 53—3、S J 209—5

暗文土器坏C

- (1) 外面の体部・底部は篋削り。内面の体部は放射状・斜格子状暗文、底部は螺線状暗文が施されている。

S D 59—61・243・249、S J 209—4

- (2) 外面の体部・底部は篋削り。内面の体部は斜格子状暗文、底部は螺線状暗文が施されている。

S D 59—59（底部に孤状暗文がみられる）、S D 46—410（斜格子状は一部）

- (3) 外面の体部・底部は篋削り。内面の体部は放射状・斜放射状暗文が施されている。

S J 203—3、S J 27—4（底部と体部の間に帯状の篋磨きが施されている。）S J 171—1、S J 191—13・14・16、S J 06—8、S J 08—2、S J 187—1、S J 209—4、S J 03—7、S J 53—7、S D 59—60～65・243～256、S D 46—406～409・411、S K 287—4、S T 13—2、S T 07—1、S D 23—1、S E 35—1、グリット(G)—6

暗文土器坏D

- (1) 外面の体部・底部は篋削り。内面の体部は斜放射状暗文、底部は螺線状暗文が施されている。

S J 137—2、S J 191—11（体部の一部は斜格子状暗文）、S D 59—66（体部の一部は斜格子状暗文）
S D 59—67・257・263・264

- (2) 外面の体部・底部は篋削り。内面の体部は放射状・斜放射状暗文が施されている。

S J 37—2、S J 191—17、S D 59—69・258・259・265・266

以上の他に暗文の施文状態が摩耗等で不鮮明なものにS D 59—68・260～262がある。

暗文土器坏A～Dは、以上のとおりであるが、この他に暗文土器坏A～Dの分類に一致しないものや破片のため分類できないものに次のものがある。

S J 191—15・19、S J 200—11、S D 59—70～73・267～273、S D 99・100—6、P 8—2、S K 56—1

暗文土器坏は、以上であるが、この他に高坏、碗、皿が出土している。高坏は、S D 59—74の一点だけであるが、外面は篋磨きが施され、内面の底部は螺線状暗文、体部は放射状暗文が施され、体部の一部にも螺

第4章 調査成果

下東西遺跡出土暗文土器分類・時期表⁽⁷⁾

段階	坏 A	坏 B	坏 C	坏 D	坏 未分類	碗	皿
II			S J 203-3			S J 20-6	
III				S J 68-7			
官 衙 構 的 群	S J 27A-5 S J 27B-19 S A 03-1		S J 27A-4				
	S D 59 ・ 46	(中間部分)	(中間部分)	(中間部分)	(中間部分)	(中間部分)	
		56	59 63	66	70		
		57	60 64	67	71		
		58	61 65	68	72		
			62	69	73		
					高坏 74		
(南側部分)		(南側部分)	(南側部分)	(南側部分)	(南側部分)		
235		239	243 250	257 264	267		
236		240	244 251	258 265	268		
237		241	245 252	259 266	269		
238		242	246 253	260	270		
			247 254	261	271		
			248 255	262	272		
			249 256	263	273		
			(S D 46)				(S D 46)
		406 409				412	413
		407 410					
		408 411					
IV		S J 107-1 S J 191-12	S J 171-1 S J 191-13 -14 -16 S K 287-4	S J 191-11 -17	S J 191-15 -19	S J 191-18	
V	S J 111-3	S J 209-5	S J 06-8 S J 08-2 S J 187-1 S J 209-4 S T 13-2	S J 37-2	S T 12-1		S K 313-1
VI			S J 03-7	S J 137-2			
VII					S J 200-11		
不明		S J 53-3 S B 18-1	S J 53-2 G-6		S D 99・100-6 P 191-5		
中世遺構		S D 21-6	S T 07-1 S D 21-7 S D 23-1 S E 35-1		S K-1		

線状暗文が施され、放射状暗文と重複する。埴は、S J 20-6、S J 191-18、S D 46-412がみられ、S D 46-412は外面の口縁部から体部・底部にかけて篋削りで部分的に篋磨きが施され、内面の体部は斜格子状暗文が施されている。皿はS D 46-413、S K 313-1からの二点だけで外面はともに口縁部横撫で・底部は篋削りである。内面の暗文は、S D 46-413が口縁部と底部の周辺部に二段の放射状暗文・底部にはほぼ同心円の孤状暗文が施されている。S K 313-1は、口縁部に放射状暗文・底部には螺線状暗文が施されている。

暗文土器の整形・暗文の施文方法についてみると以上のとおりであるが、これを前項の「住居跡出土土器の変遷」にあてはめ暗文土器の変遷についてみると762頁の「下東西遺跡出土暗文土器分類・時期表」のようになる。

下東西遺跡出土の暗文土器は、「住居跡出土土器の変遷」の第II段階（以後「住居跡出土土器の変遷」を略し、第I段階と記す。）から出土がみられ、第VII段階まで連続的にみられる。暗文土器の整形・暗文の施文方法について器形・分類ごとにその変化をみると次のようになる。

暗文土器坏Aは全体的に出土量が少ないが、第III段階に集中しており、第III段階以外では第V段階にS J 111-3から出土している。S J 111-3のものは、第III段階に比べ、体部の篋削りがやや荒いが他のものよりは丁寧である。暗文の施文方法も細かく、第III段階のものとはあまり差がみられず、全体的に丁寧な整形・施文が施されている。

暗文土器坏Bも出土量はそれほど多くないが、第III段階から第V段階までみられる。暗文土器坏Bも暗文土器坏Aと同様に前段階のものほど外面の整形は丁寧である。暗文の施文状態は、第III段階から第V段階までを比べても差はみられず、全体的に丁寧な整形・施文が施されている。

暗文土器坏Cは、下東西遺跡出土の暗文土器のなかではもっとも数の多い形態で、第II段階から第V段階までみられる。外面の整形は、暗文土器坏A・Bに比べると細くないが、暗文土器以外の形態と比べると比較的丁寧な整形である。暗文の施文状態も新しい段階での粗雑化はみられず、第II段階から第V段階まで大きな差はみられない。第III段階での一部には斜格子状暗文が施されたものがみられる。

暗文土器坏Dは、第III段階から第IV段階にかけてみられ、口縁部が外反する点はこの暗文土器と様相が異なる。外面の整形は、第III段階で部分的に篋磨きや篋削りが施されているが、その他は暗文土器坏Cの整形と同様である。暗文の施文状態も特に新旧で差はみられない。

暗文土器の外面の整形・暗文の施文状態についての段階における変化は、飛鳥・平城宮にみられるような簡素化・粗雑化はみられず、各形態においては各段階とも同様な整形・暗文の施文状態である。また、外面の整形、特に体部の篋削りの状態などは、他の形態の坏と比較すると丁寧な削りが施されている。暗文の施文では、上総地方に多くみられる斜格子状暗文をもつものが暗文土器坏CのS D 59-59、埴のS D 46-413にみられ、ともに第III段階である。また、一部が斜格子状になるものが暗文土器坏Cと坏Dより各一点ずつ出土している。

下東西遺跡における暗文土器の搬入・技法の伝播は第II段階においてみられるが、下東西遺跡の第II段階は、集落規模も小さく散村的な様相で、暗文土器の出土もS J 20から一点みられるだけである。下東西遺跡で暗文土器が本格的にみられるのは、第III段階であるが、特にS D 59・46に囲まれた官衙的施設が設置され、ここで提供される食事の器として多量の土器・須恵器が使用された内に暗文土器も多量に用いられている。官衙的施設は長期間には存続しなかったため、下東西遺跡における暗文土器の出土は、第III段階に集中している。第IV段階では、暗文土器出土遺構は、堅穴住居3軒・土坑1基からで出土量こそ第III段階に比べて大幅に少ないが、S J 191からは9個体の出土がみられ、これは下東西遺跡の住居跡出土の暗文土器としては

第4章 調査成果

もっとも多い。第V段階では、竪穴住居6軒・竪穴状遺構2基・土壇1基からの出土がみられるが、各遺構からの出土量は1～2個体と少なく、第VI・VII段階では出土遺構・出土量とも少なく、下東西遺跡における暗文土器は、消滅していく。

下東西遺跡における暗文土器の各段階における様相は、以上のとおりであるが、竪穴住居での食器の主流は土師器であり暗文土器の占める割合は微々たるもので、暗文土器は特別な食器であったと推定される。暗文土器の使用の主体は、S D59・46に囲まれた官衙的施設であったと考えられる。

群馬県内の暗文土器

群馬県内で暗文土器を出土した遺跡は、下東西遺跡を含め、766～767頁の県内暗文土器出土遺跡一覧表に掲載した34遺跡である。その遺跡の分布を概観すると下東西遺跡をはじめとする県中央部の上野国府・上野国分僧寺・国分尼寺といった古代上野中枢地域周辺に新保遺跡（県内暗文土器出土遺跡一覧表No.19、以降（No.19）と表記する。）、鳥羽遺跡（No.4）、上野国分僧寺・尼寺中間地域（No.9）、北原遺跡（No.8）、七日市遺跡（No.28）、大久保A遺跡（No.27）、上野国分寺跡（No.10）、松ノ木遺跡（No.3）、清里・陣場遺跡（No.5）熊野堂遺跡（No.15）三ツ寺III遺跡（No.14）、保渡田遺跡（No.13）、保渡田IV遺跡（No.12）、保渡田東遺跡（No.11）の14ヶ所と多くの遺跡がみられる。また、鳥羽遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、北原遺跡からは、暗文土器の出土例も多い。県西部では、鎭川流域に本宿・郷土遺跡（No.20）、内匠遺跡（No.21）、上田篠遺跡（No.22）、原田篠遺跡（No.23）、川内遺跡（No.24）、黒熊遺跡（No.25）、株木遺跡（No.26）の7遺跡がみられる。暗文土器の出土量は、本宿・郷土遺跡、川内遺跡、原田篠遺跡では多くみられるが、他の遺跡では1～2点である。県西部では、この他に下佐野遺跡（No.18）、綿貫遺跡（No.17）、下斉田遺跡（No.16）がみられるが、いずれも2～3点の出土である。県北部は、西浦遺跡（No.29）、分郷八崎遺跡（No.30）、師A地域（後田遺跡）（No.31）の3遺跡で5点の出土しかみられない。県東部では、発掘調査の事例が多い割には暗文土器を出土する遺跡は数少ない。赤城山南麓の芳賀東部遺跡群（No.6）、荒砥天の宮遺跡（No.7）。平野部では、八寸B遺跡（No.32）、十三宝塚遺跡（No.33）、三ツ木遺跡（No.34）、御正作遺跡（No.35）の6遺跡がみられるだけである。暗文の出土量は、芳賀東部遺跡群、八寸B遺跡からは、多くみられるが、その他の遺跡では1～2点である。以上のように暗文土器を出土する遺跡は、県中央部の上野国府、上野国分僧寺・尼寺周辺地域と鎭川流域に集中がみられる。上野国府、上野国分僧寺・尼寺周辺地域は、国府・国分寺の存在によって畿内との交渉が多く、上野国内でもっとも畿内の影響を受ける地域であるため、暗文土器を出土する遺跡、出土量が多いと推定される。鎭川流域は、多胡碑（多野郡吉井町大字池字御門内所在）でみられるように渡来人の存在が知られており、大陸より伝わった金属器の模倣のための技法である暗文技法を容易に受け入れる下地のある地域であったと推定される。

暗文土器出土遺跡の分布は、以上のとおりであるが、出土遺跡・出土遺構の性格をみてみると官衙・官衙関連施設及びそれに類する遺跡・遺構、寺院及び神社遺跡・遺構、集落遺跡、その他となる。官衙・官衙関連施設及びそれに類する遺跡・遺構では、十三宝塚遺跡、新保遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域がみられる。十三宝塚遺跡は、区画大溝、柵列で台形状に区画された内に基壇をもつ建物が三棟の他、掘立柱建物群がみられ、基壇をもつ建物の内の二棟は瓦葺であった。出土遺物には、瓦塔・郷名を示す刻字瓦、奈良三彩火舎体部・獣足部、埴、鉢、小壺の出土がみられる。十三宝塚遺跡は、発掘調査結果から9世紀初頭から10世紀にかけての佐位郡衙と推定されたが、現在では、正倉群の未発見などから郡衙と断定するには至っていない。新保遺跡は、2間×5間の掘立柱建物、総柱で掘り方も深い倉庫的な建物がみられることから官衙的な性格が強いと考えられている。上野国分僧寺・尼寺中間地域は、I区で大型掘立柱建物群が整然と「コ」

の字状に配置されており、国分寺造営時の官衙ではないかと推定され、その周辺に位置する竪穴住居群は国分寺の造営及び維持等に駆りだされた人員の住居と考えられ、暗文土器は、竪穴住居からの出土である。寺院・神社遺跡・遺構には、鳥羽遺跡の神社跡がみられ、8世紀前半に比定される。寺院遺跡としては、上野国分寺がみられるが、暗文土器を出土した遺構は、国分寺造営以前の竪穴住居で国分寺に伴う遺構からの暗文土器は現在のところみられない。順序は前後するが、その他の遺跡として清里・陣馬遺跡、上田篠遺跡、株木遺跡があげられる。清里・陣馬遺跡は、9世紀後半から10世紀にかけての集落で暗文土器は溝の内より1点（県内出土暗文土器図9、以後暗文土器図と略す。）出土している。上田篠遺跡・株木遺跡は、遺構外からの出土である。以上の7遺跡以外は、集落遺跡（鳥羽遺跡では神社跡以外からも暗文土器が出土しており集落遺跡にも含まれる。）である。

暗文土器の出土量をみてみると鳥羽遺跡の神社跡は、掲載個体量は10点であるが、破片等を含めると相当の数量にのぼり、一遺構の出土量としては下東西遺跡S D59について多い。その他は、竪穴住居からの出土で出土量は少なく、3点以上の暗文土器を出土した住居は芳賀東部団地遺跡群H-440号住居跡（6点）、上野国分僧寺・尼寺中間地域G-17号住居跡・G-47号住居跡・H-33号住居跡（各3点）、保渡田東遺跡6区7号住居跡（3点）、本宿・郷土遺跡MT34号住居跡（3点）・G D68号住居跡（8点）、内匠遺跡10号住居跡・16号住居跡（各3点）、原田篠11号住居跡（4点）がみられ。下東西遺跡でもS J 27（3点）・S J 191（9点）である。竪穴住居で使用されていた暗文土器の固体量が一概に出土個体数に近い個体数であったとは考えにくい。多くの竪穴住居の出土状態からみて竪穴住居での使用量はそれほど多いものとは考えられず暗文土器を多く使用・所有していたのは、官衙・官衙関連施設、寺院・神社といった畿内一宮都和直接な結び付きをもった遺構であったと考えられる。

各遺跡出土の暗文土器の形態を下東西遺跡での分類にあてはめて分類してみると暗文土器坏Aは全くみられず、暗文土器坏Bは、暗文土器図19・40・45・50・64・66・71・82・105・143の10点。暗文土器坏Cは、暗文土器図1・3・5・6・9・11・13・14・16・18・20・24・27・31・33・34・36・39・41・42・44・46・49・54・57・59・62・63・65・67・69・72・74・77・80・81・84・86・88・101・104・108・115・117・119・121・129・133・139・141・142・145・146・149の81点。暗文土器坏Dは、暗文土器図7・8・12・17・43・56・61・70・78・79・83・102・116・130・140・147の16点。下東西遺跡の暗文土器坏にみられない形態のものに暗文土器図4・25・52・87・148がみられ、この5点の形態はほぼ同一で平底を呈し、体部は開き、口縁部は直立ぎみで口唇部はやや外反ぎみになる。この形態は、下東西遺跡では暗文をもたない土師器坏のなかではみられたが暗文が施されたものは出土していなかった。坏のなかで分類できなかったものに暗文土器図15・51・131・150の4点がある。埴には、暗文土器図32・73・103・120、皿には、暗文土器図26・36・144、高坏には、暗文土器図60・（107は、暗文が施されていないが、同一形態のため掲載。）がみられる。

暗文の施文方法には、一般的な放射状・斜放射状暗文及び螺線状暗文との組み合わせの他、斜格子状暗文（暗文土器図102・103）や鳥羽遺跡から出土している蓮弁状暗文（暗文土器図17・24・25・28・32・35）や蓮弁状暗文との組み合わせで底部に輪状暗文（暗文土器図17・28）の今まで類例のみみられない暗文を施したものが出土している。この蓮弁状・輪状暗文が施文された暗文は、鳥羽遺跡においても神社跡に集中しており、この暗文が神社に関連した施文方法であったかどうか、神社遺構が群馬県内では、最初の発見例であり、関東地方及び近隣でも類例をみないため断定できないが、この神社跡が8世紀前半のものであり、律令体制が確立した時代のなかでもっとも安定した時期に畿内にみられない例外的な暗文の施文方法が存在することは、この神社跡のおかれていた地位なり、権威が高かったものであるとも考えられるが神社遺構、蓮弁状・輪状

第4章 調査成果

暗文の類例の出現を待ちたい。上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の高坏（暗文土器図60）の坏身部は、下東西遺跡の暗文土器坏Aと同様の形態を示しており、外面の整形も口縁部から体部にかけて篋磨きが施されている点も同様である。また、暗文が施文された土器の形態が時期的な面での相違はあるものの、同一と考えられる時期においては、ほとんど類似しており、暗文土器の生産地が限定されているか、何らかの規制がおこなわれていた可能性があったと考えられ、暗文土器の使用なり、所有に特別な意識が存在したとも推定される。

本稿作成後、前橋市大室町に所在する荒砥上川久保遺跡⁽⁸⁾3区10号住居址より暗文土器坏が2点出土していることを知った。2点は共に暗文土器坏C類に属する。

注

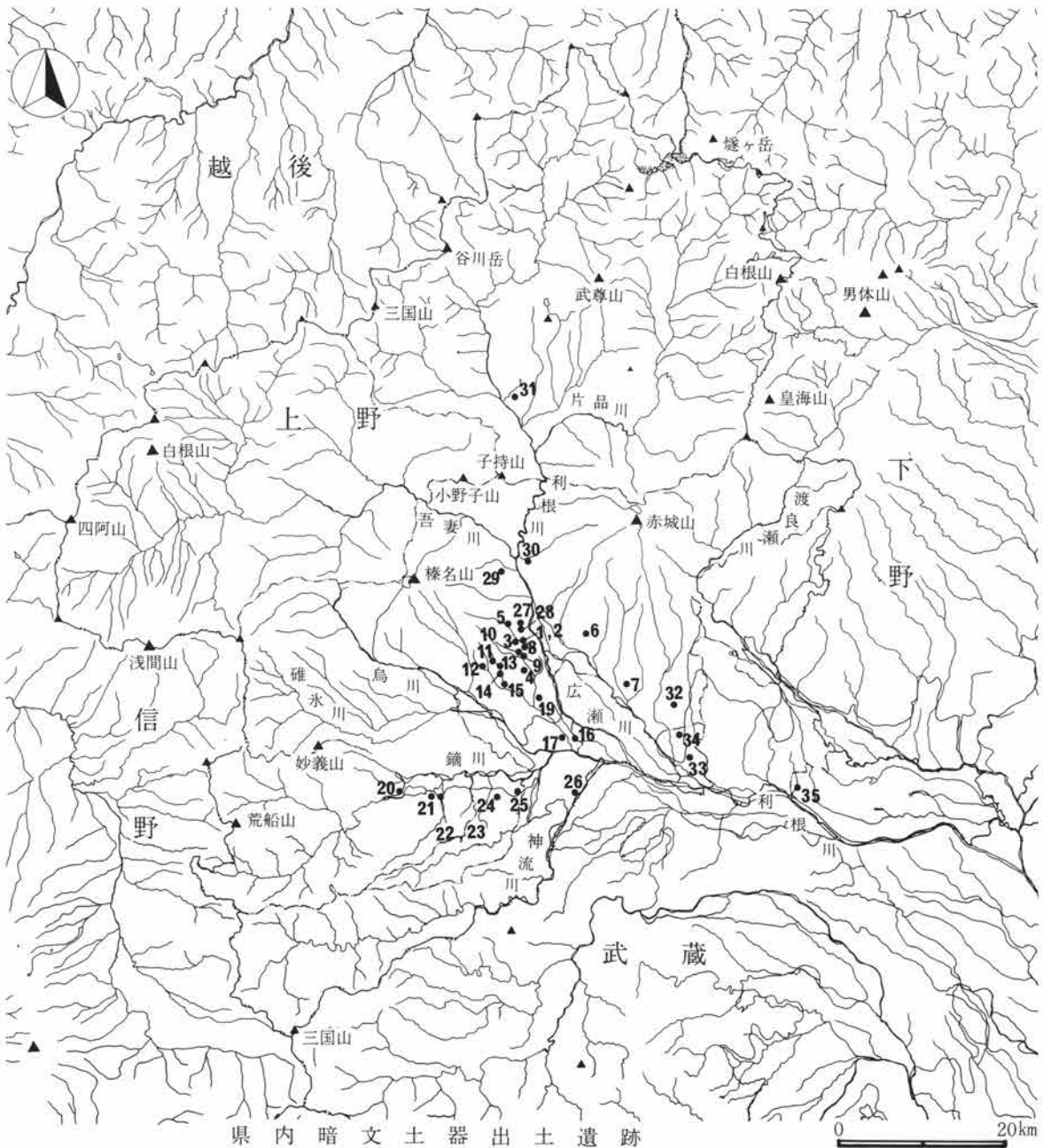
- (1) 「土器」『平城宮発掘調査報告書 VII』 国立奈良文化財研究所 1978年
- (2) 林部 均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」 考古学雑誌第72巻第1号 1986年
- (3) 林部 均氏が当事業団へ来訪した際に御教示を受けた。
- (4) 西山克己「東国出土の暗文を有する土器(上)・(下)」 史館第17・18号 1984・86年、石戸啓夫「東国における暗文を有する土師器について」 史友18 青山学院大学史学会 1986年
- (5) 山史敏史「評・郡衙の成立とその意義」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集刊行会編 1983年、「国衙・郡衙の構造と変遷」『講座日本歴史 2』 歴史学研究会・日本史研究会編集 1984年
- (6) 佐久間豊「斜格子状暗文を有する土師器坏について」 史館第15号 1983年
- (7) 本表は、基本的には「住居跡出土土器の変遷」に基づいているが、第IV段階における住居跡は、変遷の基軸になる土師器坏の出土がみられず、土師器甕も第III段階と差がみられないが、土師器皿の出土に第III段階との様相の違いがみられるため第IV段階に相当すると思われる。住居跡以外の遺構は、出土遺物のうち土師器坏の出土がみられるものは、各段階に組み込んでいるが、出土遺物そのものが少なかつたため確定したものではない。
- (8) 「荒砥上川久保遺跡」 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年

県内暗文土器出土遺跡一覧表

No	遺 跡 名	所 在 地	文 献 等
1	下東西遺跡(関越道分)	前橋市青梨町	本報告書
2	下東西遺跡(L、M区)	前橋市青梨子町	「清里南部遺跡群(III)発掘調査概報」前橋市教育委員会 1976年
3	松ノ木遺跡	前橋市青梨子町	「清里南部遺跡群(III)発掘調査概報」前橋市教育委員会 1976年
4	鳥羽遺跡	前橋市鳥羽町、群馬町稻荷台	「鳥羽遺跡I」(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年
5	清里・陣馬遺跡	前橋市池端町、吉岡村陣馬	「清里・陣馬遺跡」(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984年
6	芳賀東部団地遺跡群	前橋市鳥取町・小坂子町・五代町	「芳賀団地遺跡群I」 第1巻 芳賀東部団地遺跡I 前橋市教育委員会 1984年
7	荒砥二之宮遺跡	前橋市二之宮町	整理中であるが、担当者の御好意により実見させていただいた。
8	北原遺跡	群馬町北原	「北原遺跡」群馬町教育委員会 1986年
9	上野国分僧寺・尼寺中間地域	群馬町東国分、前橋市元総社町	整理中ではあるが、担当者の御好意により実測図等の提供を受けた。
10	上野国分寺跡	群馬町東国分・引馬、前橋市元総社町	「史跡 上野国分寺跡発掘調査概報6」群馬県教育委員会 1986年
11	保渡田東遺跡	群馬町保渡田	「保渡田東遺跡」群馬町教育委員会 1986年
12	保渡田IV遺跡	群馬町保渡田	「保渡田IV遺跡調査概報」群馬町教育委員会 1984年
13	保渡田遺跡	群馬町保渡田	「三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
14	三ツ寺III遺跡	群馬町三ツ寺	「三ツ寺III遺跡・保渡田遺跡・中里天神塚古墳」(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
15	熊野堂遺跡	群馬町井出・福島	「熊野堂遺跡(1)」(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984年
16	下斉田遺跡	高崎市下斉田町	整理中ではあるが、担当者の御好意により実測図の提供を受けた。
17	綿貫遺跡	高崎市綿貫町	「綿貫遺跡」高崎市教育委員会 1985年
18	下佐野遺跡	高崎市下佐野町	「下佐野遺跡II地区」(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年
19	新保遺跡	高崎市新保町・新保田中町	整理中ではあるが、担当者の御好意により資料等の提供を受けた。
20	本宿・郷土遺跡	富岡市一の宮・田島	「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」富岡市教育委員会 1981年
21	内匠遺跡	富岡市内匠	「内匠遺跡発掘調査報告書」富岡市教育委員会 1982年
22	上田篠古墳群	富岡市田篠	「上田篠古墳群・原田篠遺跡」富岡市教育委員会 1984年
23	原田篠遺跡	富岡市田篠	「上田篠古墳群・原田篠遺跡」富岡市教育委員会 1984年

第2節 出土土器について

No.	遺跡名	所在地	文献等
24	川内遺跡	吉井町大字吉井	「川内遺跡発掘調査報告書」吉井町教育委員会 1982年
25	黒熊遺跡群	吉井町大字宮原	「黒熊遺跡群発掘調査報告書(5)」吉井町教育委員会 1985年
26	株木遺跡	藤岡市上戸塚	「B4 株木遺跡」藤岡市教育委員会
27	大久保A遺跡	吉岡村大字大久保	「大久保A遺跡・七日市遺跡・滝沢遺跡・女塚遺跡」吉岡村教育委員会 1986年
28	七日市遺跡	吉岡村大字大久保	「大久保A遺跡・七日市遺跡・滝沢遺跡・女塚遺跡」吉岡村教育委員会 1986年
29	西浦遺跡	渋川市石原	「西浦遺跡」渋川市教育委員会 1986年
30	分郷八崎遺跡	北橋村大字分郷八崎	「分郷八崎遺跡」北橋村教育委員会 1986年
31	師A地域(後田遺跡)	月夜野町大字師	整理中ではあるが、担当者の御好意により実測図等の提供を受けた。
32	八寸B遺跡	伊勢崎市豊城町	整理中ではあるが、担当者の御好意により実測図等の提供を受けた。
33	十三宝塚遺跡	境町大字伊与久	「十三宝塚遺跡発掘調査概報」群馬県教育委員会 1976年
34	三ツ木遺跡	境町大字三ツ木	「三ツ木遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984年
35	御正作遺跡	大泉町大字下大泉	「御正作遺跡」大泉町教育委員会

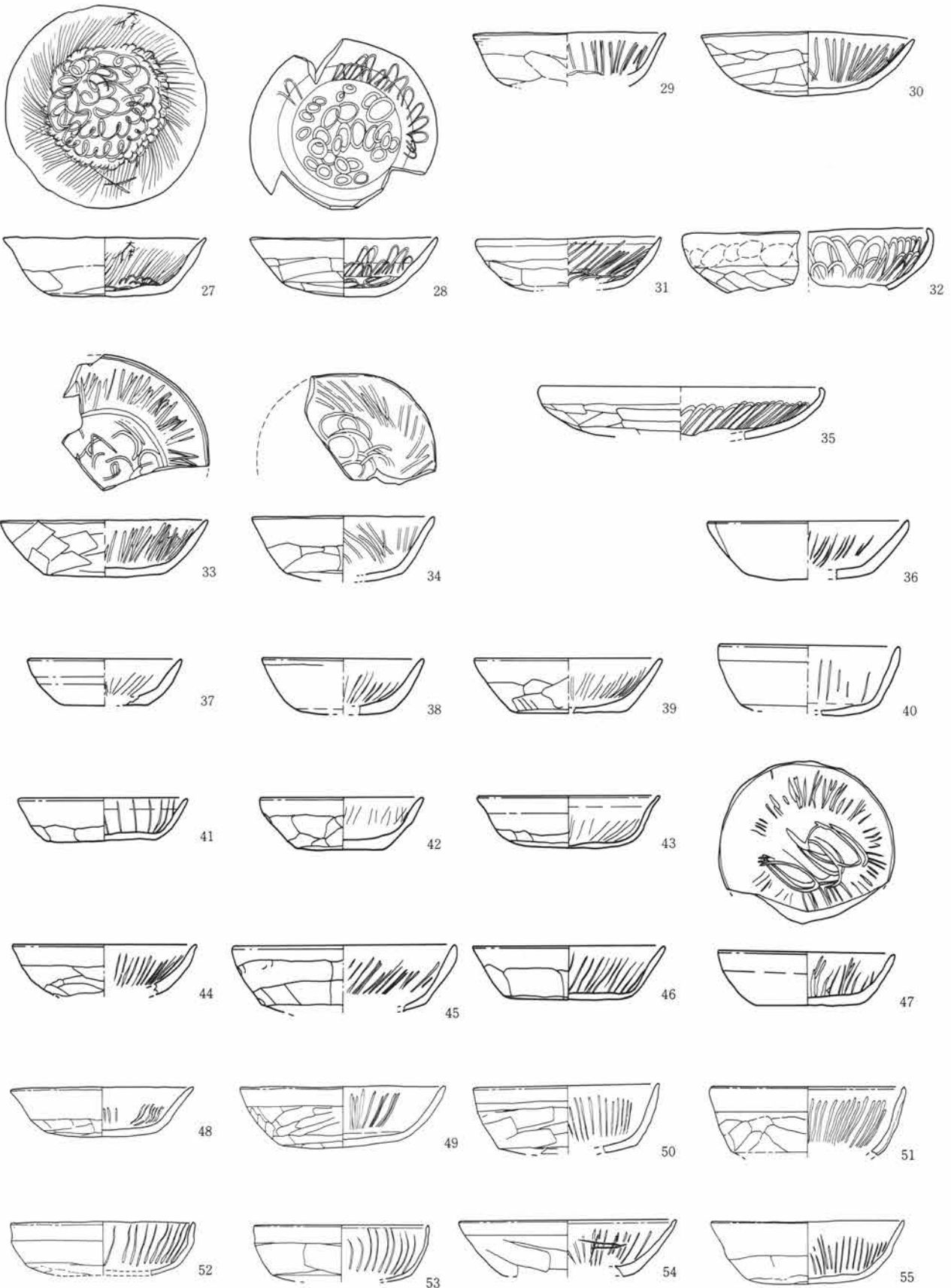


県内暗文土器出土遺跡

第4章 調査成果

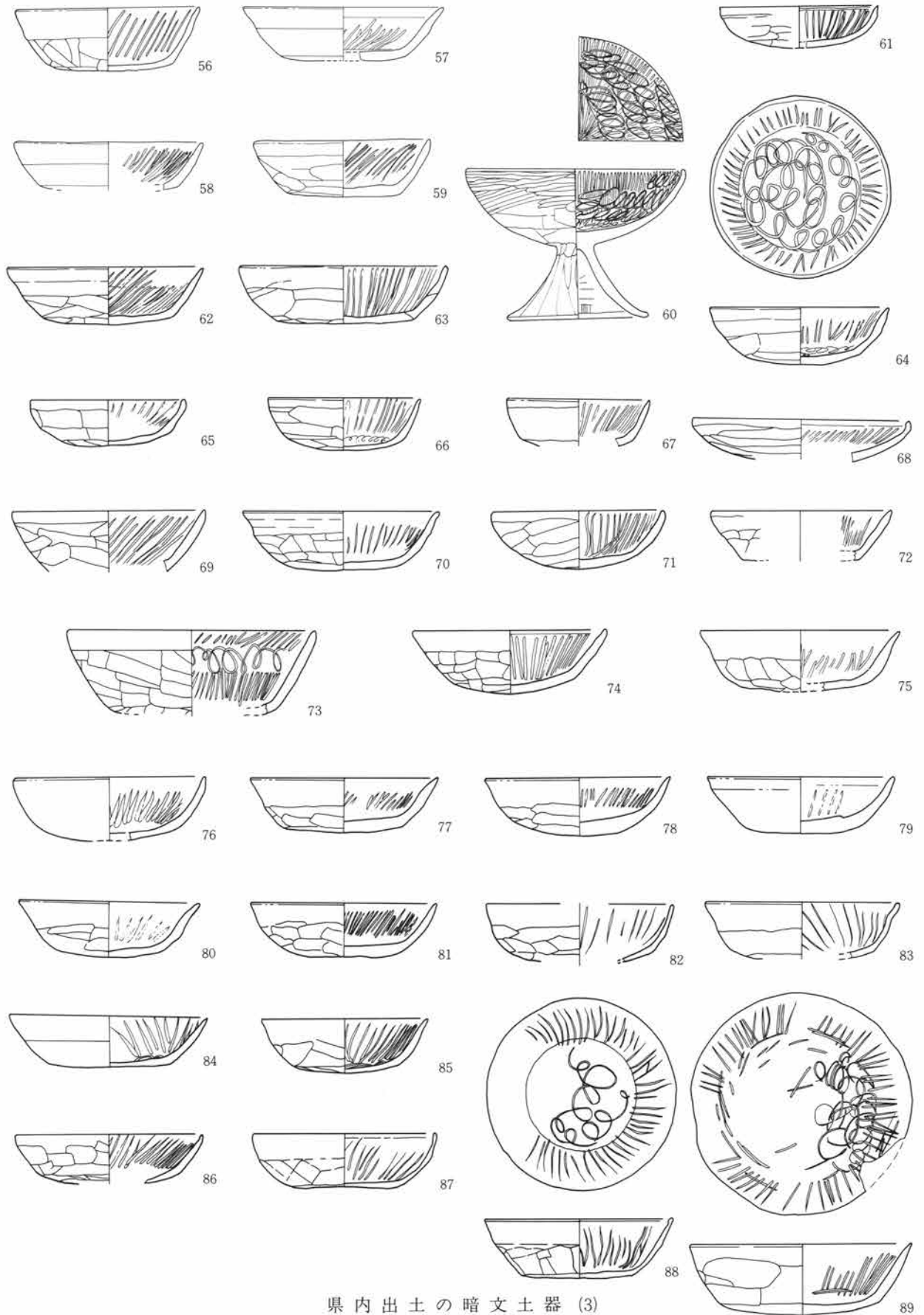


県内出土の暗文土器 (1)



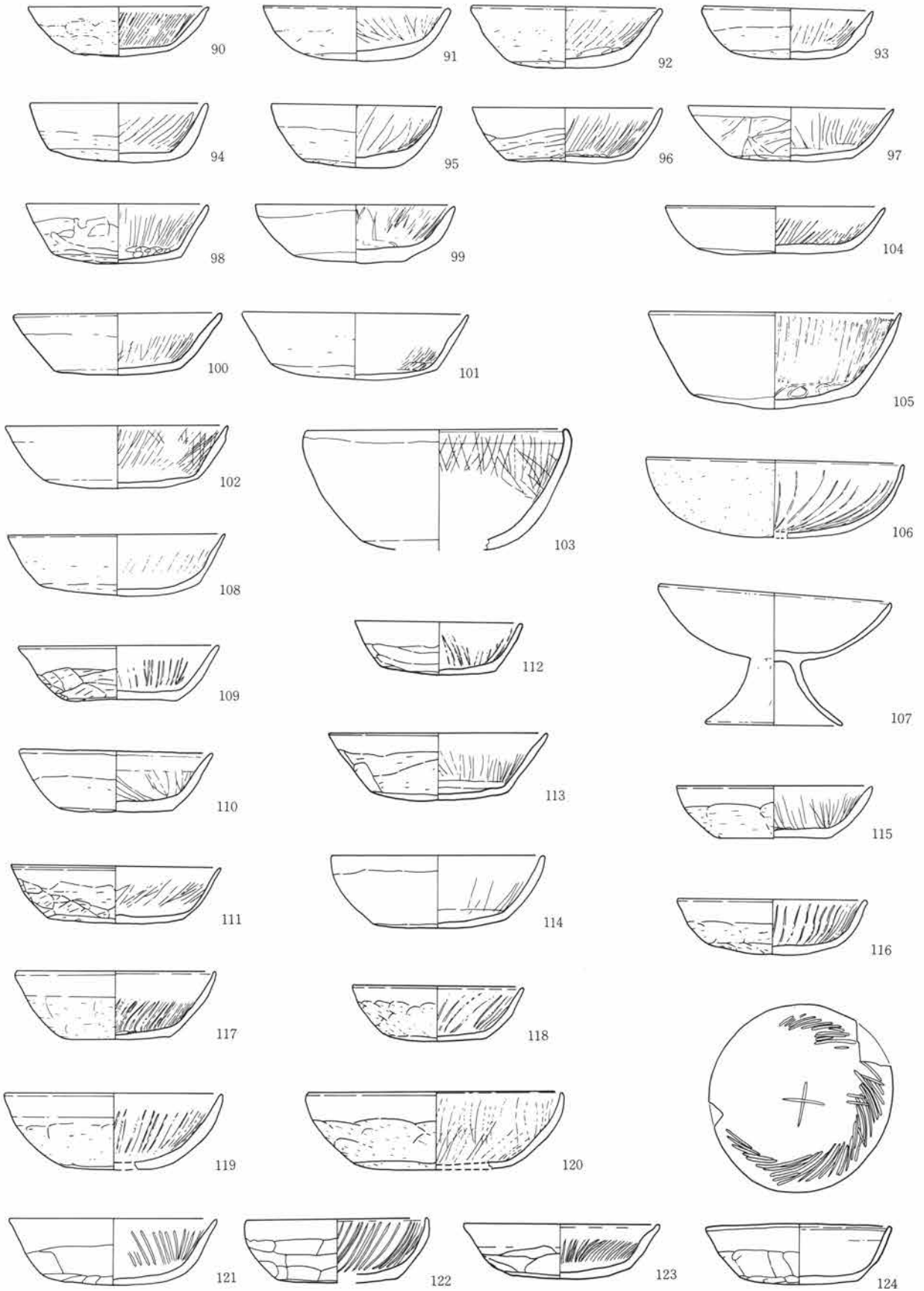
県内出土の暗文土器 (2)

第4章 調査成果



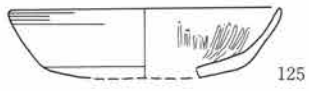
県内出土の暗文土器 (3)

第2節 出土土器について



1 県内出土の暗文土器 (4)

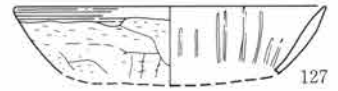
第4章 調査成果



125



126



127



128



129



130



131



132



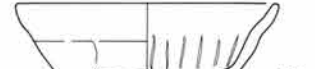
133



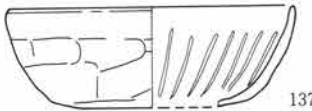
134



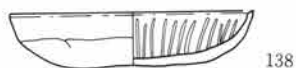
135



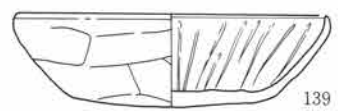
136



137



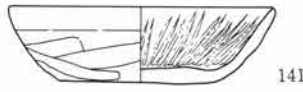
138



139



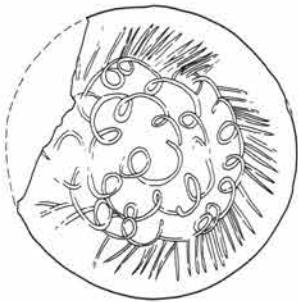
140



141



142



143



144



146



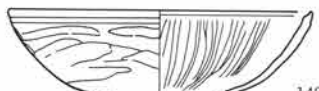
145



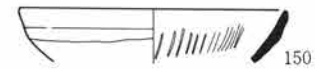
147



148



149



150

県内出土の暗文土器 (5)

第4章 調査成果

遺物 No	遺跡 No	出土遺構	施文状態	外面の整形
52	9	G-47住居跡	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
53		G-47住居跡	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
54		G-47住居跡	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
55		G-49住居跡	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
56		G-60住居跡	(体)斜放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
57		H-33住居跡	(体)斜放射状暗文	(口~体)横撫で (底)ヘラ削り
58		H-33住居跡	(体)斜放射状暗文	(口~体)横撫で (底)ヘラ削り
59		H-33住居跡	(体)斜放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
60		H-93住居跡	放射状暗文が底部中央から体部にかけて、螺線状暗文が底部と体部に施されている	(口唇~体部)ヘラ削り (脚部)ヘラ削り
61	10	S J 25	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
62	11	5区 5号住居址	(体)斜放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
63		5区 5号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
64		5区 6号住居址	(体)放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
65		6区 1号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
66		6区 7 A号住居址	(体)放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
67		6区 7 A号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
68		6区 7 A号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
69		6区 11 A号住居址	(体)斜放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
70	12	6号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
71		26号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)
72	13	4号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
73	14	25号住居址	(体)二段の放射状暗文・連弧文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
74		25号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
75		33号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
76	15	27号住居址	(体)放射状暗文	(口~体)横撫で (底)ヘラ削り
77		31号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
78		33号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
79		66号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
80		66号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
81		73号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
82	16	6号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
83		6号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
84	17	S 10703	(体)斜放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口~体)横撫で (体・底)ヘラ削り
85		S 10704	(体)放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
86		S 10707	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
87	18	3区 1号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
88		4区 41号住居址	(体)放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
89	19	4号溝	(体)放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
90	20	MT II 7号住居址	(体)斜放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
91		MT 34号住居址	(体)斜放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
92		MT 34号住居址	(体)斜放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
93		MT 34号住居跡	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
94		MT 40号住居址	(体)斜放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
95		MT 40号住居址	(体)斜放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
96		G D 68号住居址	(体)放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
97		G D 68号住居址	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り

第4章 調査成果

遺物 No	遺跡 No	出土遺構	施文状態	外面の整形
144 145	34	S J 56 S J 121	(体)放射状暗文 (底)螺線状暗文 (体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り (口)横撫で (体・底)ヘラ削り
146	32	IV区19住居跡	(体)斜放射状暗文 (底)螺線状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
147	33	南限大溝	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
148 148	34	83号住居址 233号住居址	(体)放射状暗文 (体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り (口唇)横撫で (体・底)ヘラ削り
150	35	S J 40	(体)放射状暗文	(口)横撫で (体・底)ヘラ削り
151 152		堅穴住居跡 堅穴住居跡	畿内産土師器(平城I期)、体部は、二階の斜放射状暗文 底部は、螺線状暗文が施されている。 内面口唇部に凹線が一条まわる。 体部は斜放射状暗文、底部は螺線状暗文が施されている。	体部から口縁部は、直線的に開き、底部 は平底。口縁部は横撫で。体部は三段の ヘラ削り。底部はヘラ削り。

参考文献

- 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II」 奈良国立文化財研究所 1978年
『伊場遺跡 遺物編2』 浜松市教育委員会 1980年
『各務原市史』 考古・民族編 考古 各務原市教育委員会 1983年
『郡山遺跡 I』 仙台市教育委員会 1981年
『郡山遺跡 IV』 仙台市教育委員会 1983年
『郡山遺跡 V』 仙台市教育委員会 1985年
『郡山遺跡 VI』 仙台市教育委員会 1986年
金子真土「北武蔵の須恵器—7・8世紀の様相について—」『研究紀要』4 埼玉県立歴史資料館 1982年
酒井清治「北武蔵における7・8世紀の須恵器の系譜について」『研究紀要』8 埼玉県立歴史資料館 1986年
佐久間 豊「斜格子状暗文を有する土師器坏について」 史館第15号 1983年
『城山遺跡調査報告書』 可美村文化協会 1982年
『新編埼玉県史』資料編3 古代1 奈良・平安 埼玉県 1984年
相武古代研究会・東洋大学未来考古学研究会 「シンポジウム盤状坏—奈良時代土器の様相」 1981年
西山克己「東国出土の暗文を有する土器(上)—資料紹介—」 史館第17号 1984年
西山克己「東国出土の暗文を有する土器(下)—東国出土の暗文土器—」 史館第18号 1985年
林部 均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」 考古学雑誌72—1 1986年
「平城宮発掘調査報告 II」 奈良国立文化財研究所 1968年
「平城宮発掘調査報告 VI」 奈良国立文化財研究所 1975年
「平城宮発掘調査報告 VII」 奈良国立文化財研究所 1976年
「平城宮発掘調査報告 IX」 奈良国立文化財研究所 1978年
『房総における歴史時代土器の研究』 房総歴史考古学研究会 1987年
山中敏史「評・郡衙の成立とその意義」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、文化財論叢』 同朋舎 1983年
山中敏史「国衙・郡衙の構造と変遷」『講座日本歴史 2』 東京大学出版会 1984年
「薬師寺南遺跡」 栃木県教育委員会 1979年
「横浜市港北区森戸原遺跡調査概報」『横浜市埋蔵文化財調査報告書』 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1972年

第3節 瓦 類

1 瓦類の観察

本遺跡から63片の瓦片が出土し、接合後の総数で46点を数える。本書では細片の4点を除き、42点の実測拓影図を掲げた。

観察については共通の観察視点を設け一覧表を作成した。第1表のとおり遺物番号、出土地、瓦種類、胎土、色調、焼成、製作技法などについて項目を設けた。

まず種類は平・丸に分け、量目は厚さのみを記入した。厚さは同一個体であっても均一ではないので平均的な部分を測定した。

胎土は主体を占める素地と含まれる夾雑物とに分けて観察した。素地は密な質と粗な質のいずれかを意識して記入した。夾雑物は含まれる鉱物と鉱物様の粘土物質がどのくらい含まれているかを見た。多い方から多、含、微である。

焼き上がりについては、焼締り、焼割れを生じている瓦片を硬質、水洗いした時に摩耗してしまうような瓦を軟質、その中間を普通と考え大きく三大別した。

色調は還元・酸化気味と明言できれば良いのであるが、橙色の中に灰色の斑文が生じたり、多少くすぶり外面が黒灰色となった場合など変化が多いため瓦表面の色調をとらえた。

成形技法については一般的にいわれる作瓦技法にのっとり、作瓦の工程が量産されたとみなし粘土板剥ぎ取りの有・無、一枚作りの可能性の有・無、桶巻作りの可能性の有・無、粘土板の合せ目の有・無、生地の叩き締めの方法の6項目を設けた。

粘土板剥ぎ取りは布圧痕下に残る静止糸切状の条痕を粘土板剥ぎ取り痕と見なした。一枚作り、桶巻作りは桶の寄木状の単位が認められる場合は○を記入し、無い場合には一枚作りの可能性ありとして一枚作りの項目に○を記入した。寄木状の単位が不明瞭な際に、一枚作り、桶寄木痕の項の両者に？を付した。粘土板の合せ目は桶巻作りの作瓦技法に通有のはずであり、それを証左するために項目を設けた。布の合せ目についても同様である。叩き締めについては平行叩、縄目叩後の擦り消し、素文とがあり、このうち素文は主として手による押圧成形によるものである。

整形技法については轆轤痕、篋削、布の擦り消し、側部面取りの4項目を設定した。

轆轤痕は模骨桶上に粘土板が貼り付けられている時、回転台の回転に伴う砂の移動によりできた条痕を轆轤ないしは回転台痕ありと考え横撫と記入した。布の擦り消しは男瓦で裏面に、女瓦では表面上に残る布の圧痕を意識的に擦り消しているように見える場合に有りとして○を記入した。側部面取りは側面に見られる篋仕立ての単位を数えた。しかし瓦の夾端部側には補足の面取りがなされる例も多く、その際の面取りの単位も含まれる。

摘要には製作地である窯跡群の推定を肉眼観察して記入した。この製作地域は各窯跡群で採集した資料の胎土と当遺跡出土瓦の胎土とを肉眼観察した結果であり、近年実施して来ている胎土分析成果も踏まえている。たとえば秋間と記入してあれば秋間層群を擁する地域をさしてあり、各窯跡群を含む広域であると理解していただきたい。さらに苜根窯跡とあれば共通技法の瓦が出土していることからのほぼ同定に近い推定である。

また類別した類形名称も併せて記入した。

第4章 調査成果

第1表 瓦観察表(瓦Noは、瓦類型別実測図Noに一致する)

整理番号	出土地	瓦の種類	厚さ cm	胎土		焼成		成形技法						整形技法				摘要	
				素地	夾雑物	焼き	色調	粘土板刺取		一板作り	稀寄木痕	粘土板目	布の合せ目	叩目	繩目	鏡削	布の擦消		側部面取
								凹面	凸面										
1	SJ159-10	女	1.8	密	多い	硬質	灰色	○	×	/	○	なし	なし	素文	横撫	なし	ヘラ	2	秋間 1 A類
2	SJ158-7	〃	1.8	〃	並	〃	〃	○	×	/	○	〃	〃	〃	〃	〃	なし	〃	面戸瓦秋間 1 A類
3	表採	〃	2.6	〃	多い	並	〃	なし	×	?	?	〃	〃	〃	なし	〃	〃	3	秋間 1 A類
4	SE43-11	〃	1.3	〃	微	焼締	黒灰色	○	×	/	○	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
5	SD58-18	〃	1.8	〃	含	硬質	灰色	なし	×	/	○	〃	〃	〃	〃	〃	〃	2	〃
6	SD23-17	〃	1.1	〃	微	〃	〃	〃	×	/	○	〃	○	〃	横撫	〃	〃	1	〃
7	SJ173-16	男	1.3	〃	〃	〃	黒灰色	〃	×	/	/	〃	○	〃	〃	〃	〃	1	秋間 1 A類 SJ178-3接合
8	SJ173-13	〃	1.1	〃	含	〃	灰色	〃	×	/	/	〃	○	〃	〃	〃	〃	2	秋間 1 A類 SK240-6接合
9	SJ173-14	〃	1.5	〃	〃	〃	〃	〃	×	/	/	〃	なし	〃	なし	〃	〃	2	秋間 1 A類
10	96H-04	〃	1.5	〃	〃	〃	〃	〃	×	/	/	〃	〃	〃	横撫	〃	〃	2	〃
11	SJ173-15	〃	1.6	〃	〃	〃	〃	〃	×	/	/	〃	○	〃	〃	〃	〃	2	〃
12	SJ173-12	〃	1.6	〃	微	〃	〃	〃	×	/	/	〃	〃	〃	なし	〃	〃	×	〃
13	表採	〃	1.2	〃	含	〃	〃	〃	×	/	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
14	表採	女	1.7	〃	〃	〃	〃	〃	×	/	○	〃	〃	〃	〃	〃	ヘラ	×	〃
15	表採	〃	1.6	〃	〃	〃	〃	〃	×	?	?	〃	〃	〃	〃	〃	なし	×	〃
16	SK55-5	男	1.4	〃	微	並	淡褐色	〃	×	/	/	〃	〃	繩消	〃	〃	〃	×	秋間 1 B類
17	127 I-06	〃	1.3	〃	〃	硬質	灰色	〃	×	/	/	〃	〃	〃	横撫	〃	〃	×	〃
18	SD12-11	女	1.6	〃	含	〃	〃	〃	×	/	○	〃	〃	繩	なし	〃	〃	2	秋間 1 C類女A
19	SD98-3	〃	2.1	〃	微	〃	〃	○	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	4	秋間 1 C類女B
20	SD23-20	〃	1.8	〃	含	〃	〃	なし	×	/	○	〃	〃	〃	〃	〃	〃	1	秋間 1 C類女A
21	SD23-21	〃	1.7	〃	微	軟質	淡黄色	〃	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	1	秋間 1 C類女B SD23-37接合
22	110G-35	〃	2.1	〃	〃	〃	淡灰色	○	×	/	○	〃	〃	〃	〃	〃	〃	3	秋間 1 C類女A
23	表採	〃	1.9	〃	〃	〃	淡黄色	○	×	?	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	秋間 1 C類
24	SE32-3	男	2.0	〃	含	硬質	黒灰色	×	×	/	/	〃	○	〃	〃	〃	〃	3	〃
25	SD23-22	女	1.9	〃	微	軟質	淡黄色	なし	×	○	/	〃	なし	〃	〃	〃	〃	3	秋間 1 D類
26	SD23	〃	1.1	〃	〃	硬質	灰色	〃	×	?	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
27	SD58-19	〃	1.7	〃	〃	軟質	淡黄色	〃	×	?	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
28	SJ159-9	男	1.5	粗	〃	〃	灰色	〃	×	/	/	〃	〃	素文	〃	〃	〃	1	(不詳) 2類
29	SD82-2	〃	1.5	〃	〃	〃	淡黄色	〃	×	/	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
30	123 I-07	〃	2.7	〃	〃	硬質	灰色	〃	×	/	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
31	SD58-20	〃	1.5	〃	〃	軟質	〃	〃	×	/	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
32	SK55-6	女	1.5	〃	〃	〃	黄灰色	〃	×	?	?	〃	〃	〃	〃	〃	○	×	〃
33	126 I-07	〃	1.6	密	含	〃	〃	〃	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	なし	×	〃
34	117 I-09	〃	1.5	〃	微	〃	淡黄色	〃	×	?	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
35	SD23-19	〃	1.9	〃	〃	〃	淡灰色	?	×	?	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	1	〃
36	SJ159-7	〃	1.7	〃	含	〃	淡黄色	なし	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	1	〃
37	SE05-1	〃	1.8	〃	〃	〃	〃	○	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	2	吉井隅落 3 A類
38	SD12-10	〃	1.5	〃	〃	並	〃	○	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	1	吉井 3 A類
39	SJ159-8	〃	1.9	〃	多	〃	灰色	×	×	/	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
40	ST04-3	〃	2.2	〃	〃	硬質	〃	×	×	/	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
41	121 I-06	〃	1.3	〃	〃	並	〃	○	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
42	SD23-16	〃	1.5	〃	含	硬質	〃	○	×	○	/	〃	〃	繩	〃	〃	〃	×	吉井 3 B類
43	85 F-49	〃	2.3	〃	多	〃	黄灰色	○	×	/	/	〃	〃	繩消	〃	〃	〃	×	〃
44	SD23-18	〃	2.0	〃	含	並	淡黄色	○	×	○	/	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃
45	ST20	〃	1.4	〃	多	硬質	灰色	なし	×	/	○	〃	〃	不詳	〃	〃	〃	×	吉井 3類
46	SJ97-11	〃	2.3	〃	〃	〃	〃	○	×	○	/	〃	〃	平行	〃	〃	〃	1	吉井 3 C類

第3節 瓦 類



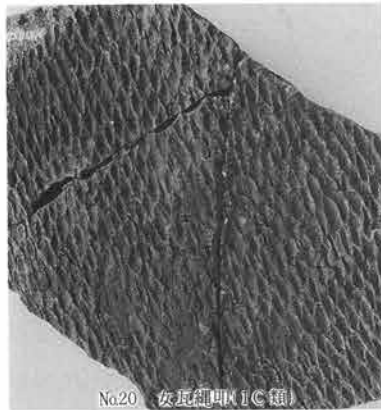
No. 1 女瓦回添条痕(1A類)



No. 7 男瓦回添条痕(1A類)



No. 25 女瓦平行繩目(1D類)



No. 20 女瓦繩目(1C類)



No. 42 女瓦繩目(3B類)



No. 17 男瓦繩目擦消(1B類)



No. 46 男瓦平行目(3C類)



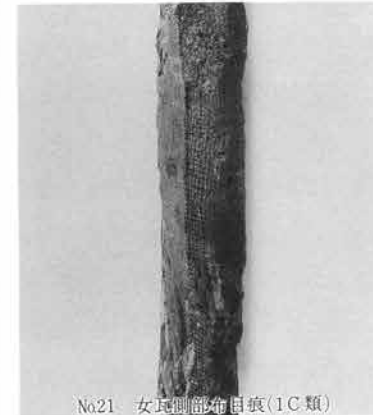
No. 1 女瓦布目花紋(1A類)



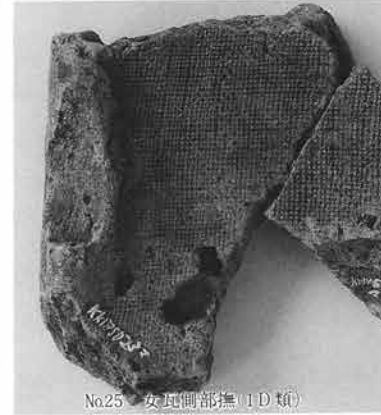
No. 19 女瓦糸切条痕(1B類)



No. 24 男瓦布合せ目(1B類)



No. 21 女瓦側部布目痕(1C類)



No. 25 女瓦側部撫(1D類)

瓦類技法痕細部写真 およそ1:2

第4章 調査成果

2 瓦の観察結果

同一観察は上野国分寺築地跡⁽¹⁾、金井廃寺遺跡⁽²⁾、天代瓦窯遺跡⁽³⁾、日高遺跡⁽⁴⁾で試みられ、その集合が第1図である。

国分寺例は南縁築地跡に設けたA・Bトレンチから出土した瓦片のうち173点の大形破片を任意抽出して作成し、その主体年代は8世紀中頃から9世紀である。金井例は金堂址⁽²⁾と考えられる中枢地域に散布していた122点の資料が供され、主体年代は7世紀後半から8世紀である。天代例は発掘調査で得られた51点を扱い主体年代は8世紀中頃である。日高例は9世紀後半に埋没した154号溝から主に出土した瓦で、隣接地に瓦葺建築址が想定でき、廃棄か故意による投棄瓦46点で主体年代は9世紀に置かれる。これらと当遺跡例とを比較したい。なお下東西遺跡の出土瓦は、カマド材、住居内転用など機能からすれば二次的な在り方であった。このため観察表を用いて集計した場合に、建築址に伴う瓦と共通した結果にはならない点に注意されたい。また集計の読み取り作業は各遺跡出土瓦の全体像把握とその理解のために行ったものである。

女瓦と男瓦の割合は女瓦32に対し男瓦14 (2.28 : 1) である。瓦葺建築址に直結しない日高例では女瓦10に対し男瓦36 (0.28 : 1) であり、瓦葺建築址に直結する女瓦・男瓦の関係では国分寺例で120対53 (2.26 : 1) 金井例で81対41 (1.97 : 1)、瓦窯跡の天代例で32対19 (1.68 : 1) であり、当遺跡例の割合は偶然にも瓦葺建築址に近い値が得られる。

瓦の厚さは女瓦では製作年代が遡るにつれ厚くなる傾向があり、詳しくは前掲報告内容を参照していただきたい。当遺跡では頂点1.8cm、平均値1.74cm、国分寺例で1.9cm、平均値1.96cm、金井例で2.1cm、平均値2.04cm、天代例で1.8~2.0cm、平均値2.00cm、日高例で1.1cm、平均値1.45cmである。男瓦の製作年代と厚さの関係は女瓦ほど濃厚ではないが、8世紀後半以降濃くなる傾向にある。当遺跡例では頂点1.5cm、平均値1.55cm、国分寺例で2.0cm、平均値1.88cm、金井例で1.3cm、平均値1.59cm、天代例で1.0~2.0cm、平均値1.48cm、日高例で1.0~1.4cm、平均値1.4cmであり当遺跡の男瓦がやや薄い傾向は、9世紀代の瓦が幾分多く含まれるので値が小さくなっている。

粘土板剥ぎ取り痕については、一枚作りで製作されたと考えられる女瓦11例のうち7例に見られ、桶巻作りと考えられる10例のうち5例に剥ぎ取り痕が認められ、男瓦には観察できなかった。また粘土紐作りも認められなかった。

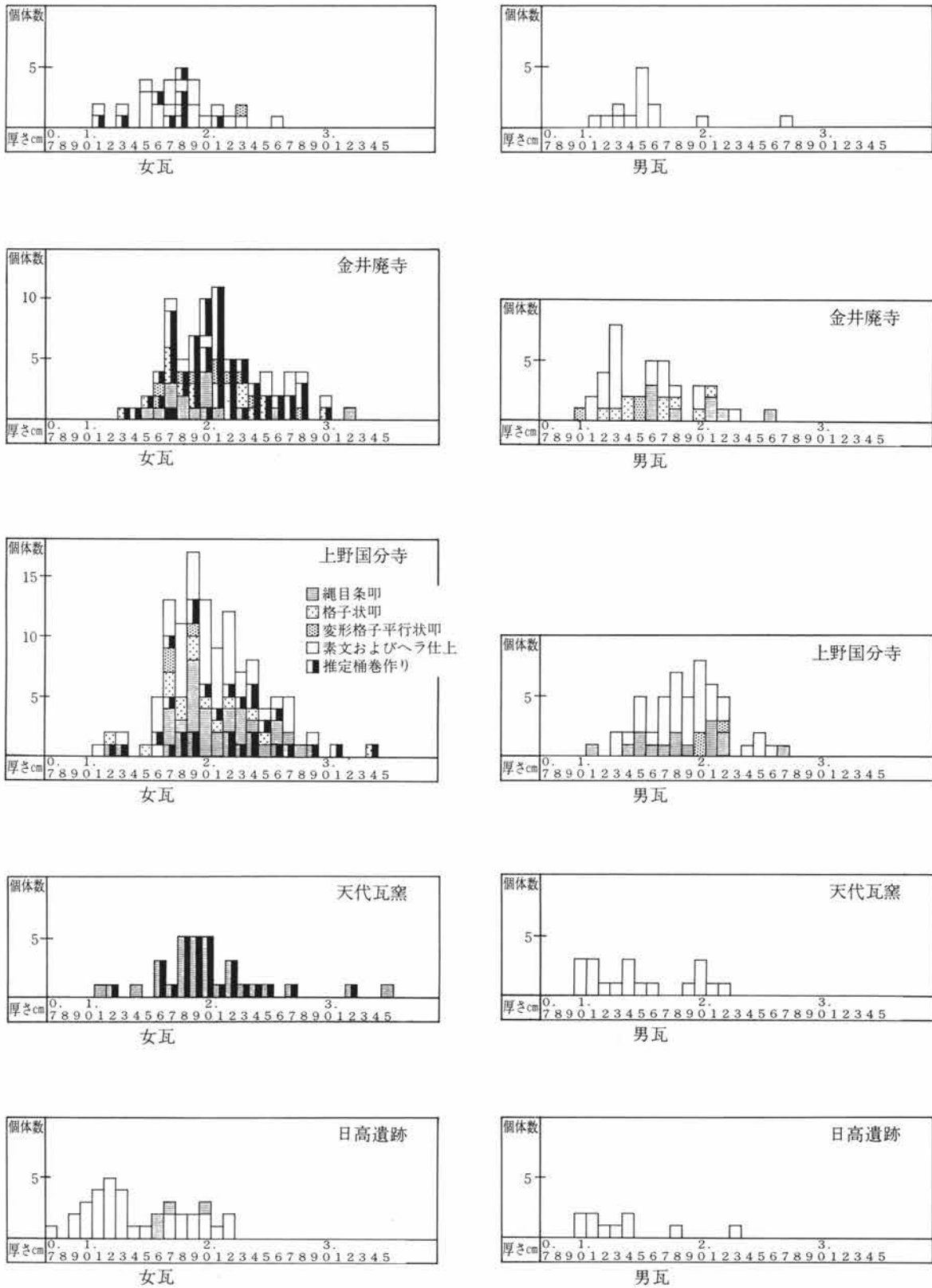
女瓦の製作技法では女瓦32点のうち桶巻作りの際に生じる寄木圧痕⁽⁵⁾の見られる例が10 (31%) 点あり、一枚作りと類推される例が11 (34%) 点あり、他の11点については製作技法が明瞭でない。桶巻作りと見られる例のうち粘土板の合せ目のある例は1点もなく、男瓦も同様であった。しかし布の合せ目痕を認める例は1 (9%) 点あり、男瓦では4 (28%) 点存在した。女瓦の桶巻作りと見られる例は国分寺例で25%以上、金井例で73%以上、天代例で88%以上 (推定100%)、日高例で0%あり、当遺跡の割合は国分寺例に近接し二次利用前の瓦様相を示唆している。

叩については女瓦では素文が18 (56%) 点あり、うち桶巻作りと見られる例が6 (33%) 点、一枚作りと類推される例が5 (28%) 点ある。縄叩は12 (38%) 点あり、うち桶巻作りと見られる例が3 (25%) 点、一枚作りと類推される例が5 (42%) 点ある。平行叩は1例のみで一枚作りによる。男瓦については素文が11 (79%) 点あり、縄叩が3 (21%) 点ある。

轆轤痕ないし回転台痕は素文の女瓦に3例、男瓦に4例、縄叩を擦り消した男瓦に1例認められ、大片の女瓦であるP783-1について回転方向を仔細に観察すれば、轆轤ないし回転台方向左廻りであった。

なお次項の分類結果をふまえ観察表・統計図を再検討すれば値に変更をきたすが、以前の観察法をそのま

ま踏襲したため、あえて行わなかった。検討基準に差が生じ既資料が使用できなくなるたである。



第1図 瓦観察統計図

第4章 調査成果

3 瓦の分類

製作地別と諸技法の特徴と差異をもって次のように分類を行った。

- 1 A類
 - 男瓦 素文の整形で回転台に伴う横撫痕がある。
 - 女瓦 素文の整形で回転台に伴う横撫痕がある。模骨桶による寄木痕が多くに見られる。

- B類
 - 男瓦 太い縄叩が施された後に擦消されている。
 - 女瓦 未詳。

- C類
 - 男瓦 太い縄叩が瓦長軸と一致して施される。
 - 女瓦
 - A 太い縄叩が瓦長軸と一致して施され、模骨桶による寄木痕が見られる。
 - B 太い縄叩が瓦長軸と一致して施され、模骨桶寄木痕が見られず一枚作りか。

- D類
 - 男瓦 未詳。
 - 女瓦 細い縄叩が瓦長軸に対し斜に施され、模骨桶寄木が見られず一枚作りか。

- 2類
 - 男瓦 素文の整形である。
 - 女瓦 素文の整形で模骨桶寄木の単位が見られず主体は一枚作りと考えられる。

- 3 A類
 - 男瓦 未詳。
 - 女瓦 素文の整形で模骨桶に伴う寄木の単位が見られず主体は一枚作りと考えられる。

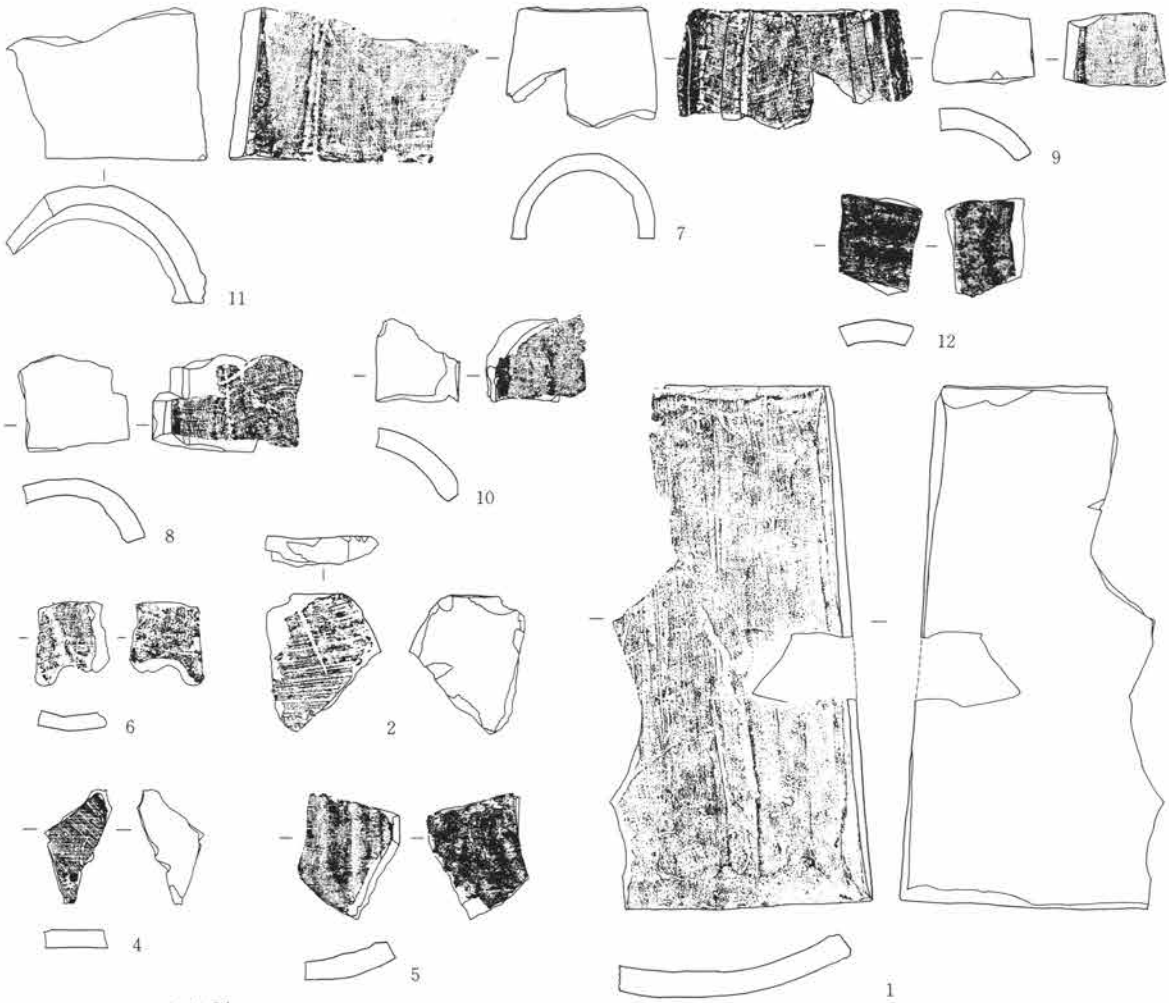
- B類
 - 男瓦 未詳。
 - 女瓦 縄叩後擦消される。模骨桶に伴う寄木の単位が見られず主体は一枚作りか。

- C類
 - 男瓦 未詳。
 - 女瓦 刻みの浅い平行叩を施す。模骨桶寄木の単位が見られず主体は一枚作りか。

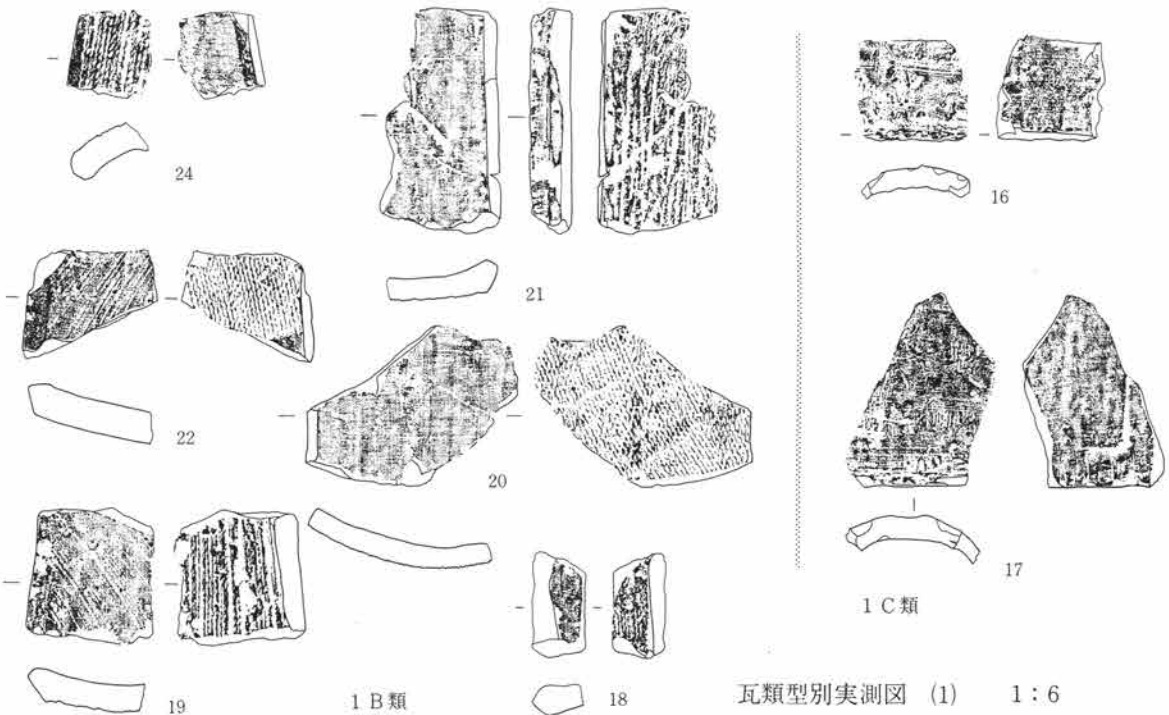
以上、大きく1～3に類別したがそれぞれ胎土別の区分で、1が黒色粘土物質を含み、白色鉍物粒の少ない安中市秋間古窯跡群および秋間層群の陶土地帯の製品、2は白・灰・黒色鉍物を僅かに含む製作地がやや不明瞭な製品で、しいて言えば素地が層状をなしている。特徴から多野郡吉井窯跡群の可能性がいく分ある。3は白・灰・黒色の鉍物、物質の夾雑物、素地が層状をなしている点から吉井窯跡群の可能性がある。

さらに1の中で秋間窯跡群中の各支群から表採した資料と一致する製作技法、焼成技法、質感が一致し、製作地をほぼ類推しうる一群がある。1 A類は八重巻支群を中心とした地域、1 C類が苜根支群を中心とした地域、1 A類の女瓦の中に側端部に布目がおよぶ例(19)、同側部を撫などを用いて丸める例(21)、縄叩を施す際全体を縦方向に施し、小口側に近い部分を横方向に叩く例などは苜根支群の製作上の特徴であるが、秋間窯跡群内の別支群で同一技法を用いた可能性は高いため苜根支群を中心とする広域と考えられたい。

第3節 瓦 類



1 A類

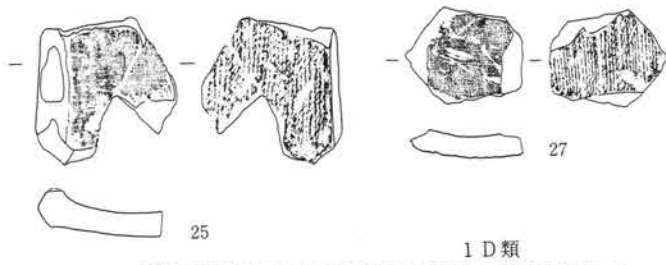


1 B類

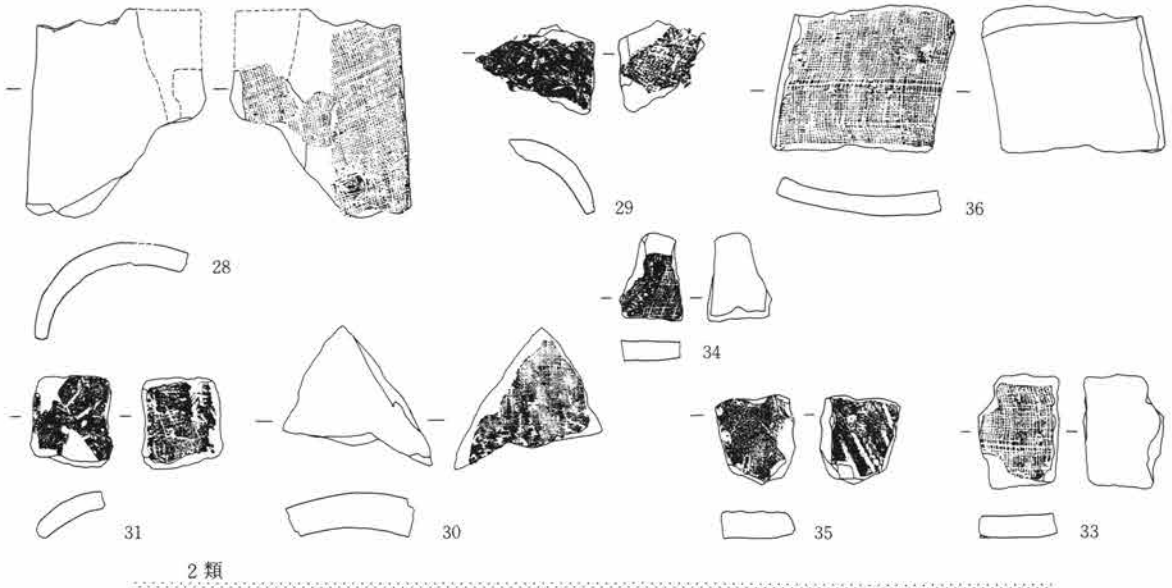
1 C類

瓦類型別実測図 (1) 1:6

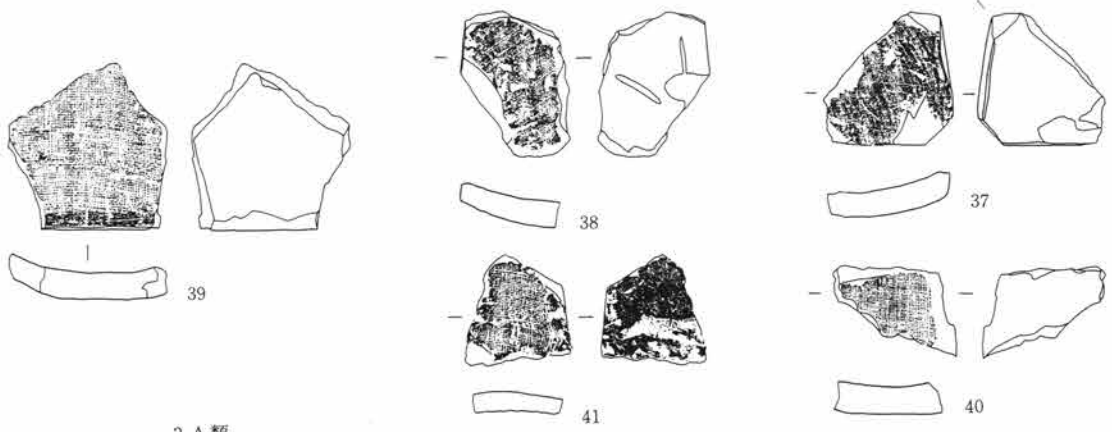
第4章 調査成果



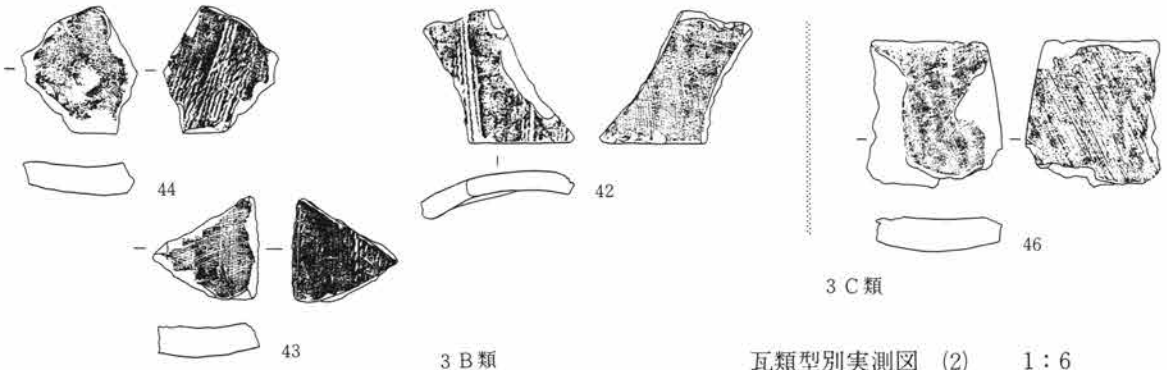
1 D類



2類



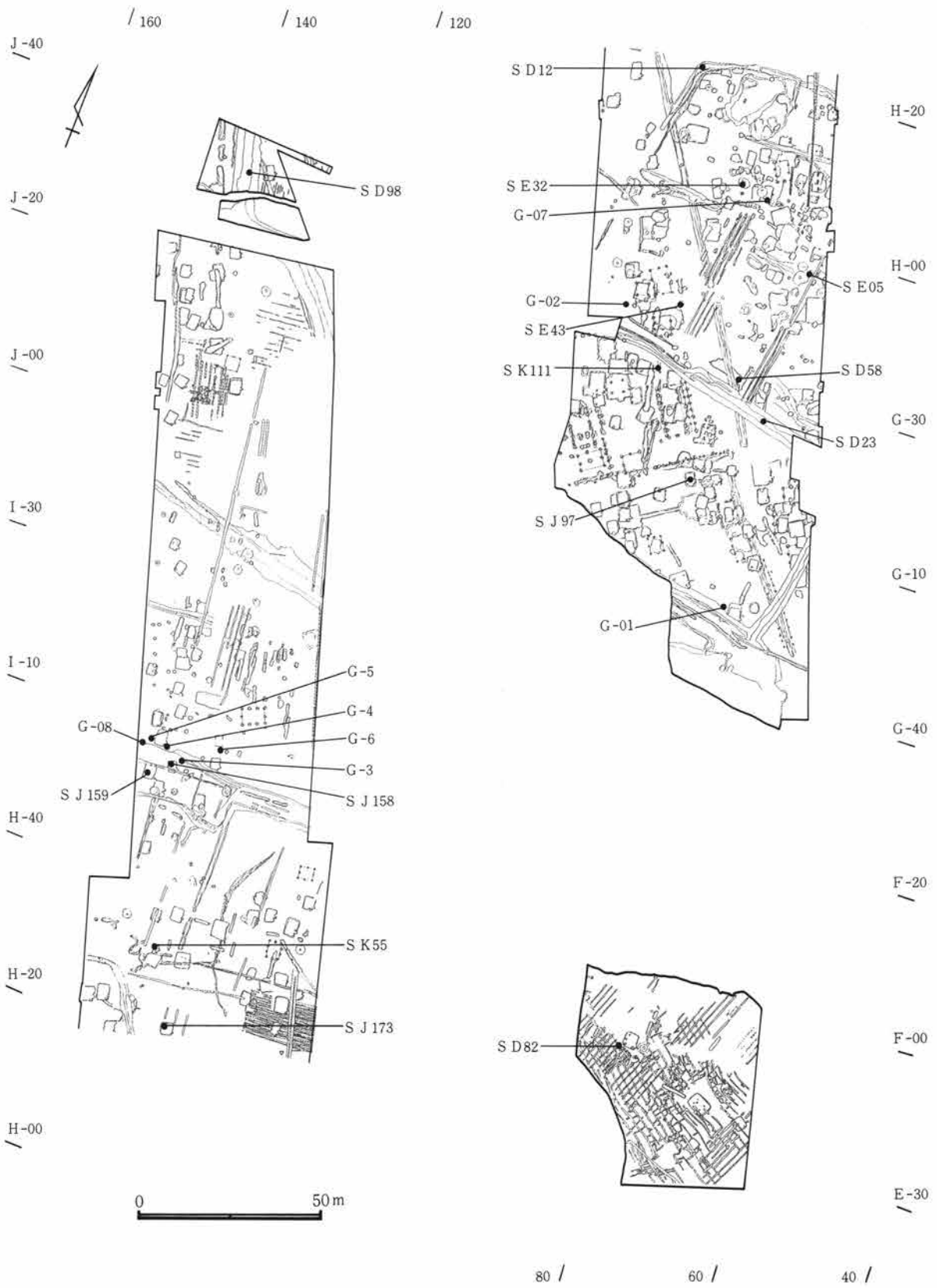
3 A類



3 B類

3 C類

瓦類型別実測図 (2) 1:6



瓦出土分布図

第4章 調査成果

4 考 察

ここでは下東西遺跡から出土した二次利用瓦が、どの瓦葺建築址から運ばれたかを考えたい。まず類別に従い年代観を推定すれば次のとおりである。

- 1 A類 技法、胎土、全体的な質感から考えて秋間古窯跡群、八重巻支群^{やえまき}で製作されたものと見なされ
主体供給は前橋市山王廃寺である。同廃寺の創建種である複弁七葉鏡瓦、重孤文軒瓦に取付く女・
男瓦は1 A類とまったく同巧であると見なされる。よって本類は7世紀終末の製作と考えられる。
- 同 B・C・D類 秋間窯跡群製と見られる瓦で、いずれも縄叩が施される。このうち苧根支群で製作さ
れた可能性が高いC類は、女瓦に桶巻作りによるAと一枚作りの可能性の高いBとに分れ、両者
に若干の年代差があったとしても継続した中での製作が考えられる。前項の上野国分寺における
模骨桶に伴う寄木痕の存在率は25%で、建立を契機とした段階に製作技法の変換が序々になされ
たと解釈しうるため、C類は8世紀中頃から後半にかけての製作と考えられる。
B類・D類も同様に縄叩が施されている。縄叩は日高遺跡から出土した46片中4片に認められ
主な出土地であった154号溝は9世紀後半に埋没しているため、9世紀中頃以前に西毛北半の地域
での縄叩技法は終りに近づいていると類推され、B・D類に対し8世紀後半から9世紀中頃以前
の製作年代が考えられる。
- 2類 女瓦は一枚作りと考えられ、厚さは薄くなり男瓦も薄作りである。日高遺跡154号溝中の瓦は2
類および3 A・C類が主体を占めているため、本類も前述したように9世紀中頃以前の製作が考
えられるが、上限を8世紀後半とするには余りにも粗雑である。
- 3類 3 A・C類は2類で解れたとおり9世紀代の製作と考えられる。3 B類は1 B・C・D類で触
れたとおりの理由から8世紀中頃から9世紀中頃までの間の所産と考えられる。

さて、周辺で瓦が出土する遺跡を掲げれば上野国分二寺と山王廃寺とがある。前者は南方2 km、後者は南
南東1.5 kmに存在し、前者とは榛名山系からの牛池川、八幡川の二水系と台地を一つ挟み、後者とは八幡川を
挟んだ隣接関係にあり地理的な条件からは山王廃寺に近い訳である。また当遺跡出土瓦の中で1 A類は7世
紀の所産であり、山王廃寺の創建瓦と同巧であることを考え併せれば山王廃寺と直接的な関係が得られる。
さらに山王廃寺発掘調査から得られた古瓦類に2・3類も多出している⁽⁶⁾のでこのことと矛盾は生じないため
当遺跡出土瓦は山王廃寺から運ばれたものと考えられる。したがって本遺跡は山王廃寺（放光寺）が私寺で
ある山王廃寺の掌握者の影響下にあったとすることができる。

註

- (1) (群馬町教育委員会)『上野国分寺縁辺地域の調査』 1975
- (2) (吾妻町教育委員会)『金井廃寺遺跡』 1979
- (3) (中之条町教育委員会)『天代瓦窯遺跡』 1982
- (4) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『日高遺跡』 1982
- (5) 佐原 真 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌 第58巻2号』 1972
- (6) (前橋市教育委員会)『山王廃寺跡第3次発掘調査概報』 1977 (同前)『山王廃寺跡第4次発掘調査概報』1978 (同前)『山王廃寺跡第5次発掘調査概報』 1979

第4節 中世土・陶・磁器

1 陶・磁器

1 陶・磁器の選択について

本稿は当遺跡出土の中世～近代陶・磁器を扱ったもので、その出土総量は接合後で609点となった。これらは調査区内から出土したものを主体とし、排土中の表採資料も含んでいる。その年代幅は平安時代末期の舶載陶・磁器から近世・現代の長きに亘るものであった。

これらの破片すべてを掲載することは紙面と整理労力の都合上できず、選択を行った。その際、中世舶載陶・磁器と考えられる破片は漏らさず掲載し、中世国産陶器のうち施釉陶器については総てを、焼締陶器については存在個体の明らかな口縁部片、底部片を主体とし、格子叩部分、各遺構に伴う破片や一括性において組合せが得られる破片などについて抽出した。近世・近代の陶器の選択は各遺構に伴い年代観を得る必要性のある破片、稀少性の高い個体に限定した。このため近世以降の現象解釈はされていない。選択抽出した総数は全体の約13.5%に当たる82点であり、このほか中世を主体とする焼締陶器数164点、近世以降の施釉陶器数146点、近世以降の磁器点数140点がある。

2 観察について

観察については一率、均等な意識で観察する意図から一覧表（796～801頁）を作成した。項目立ては出土陶・磁器の特徴が現われるよう配慮したつもりである。番号は図版内の実測図番号と観察一覧番号に一致し、中世・近世以降を2分した中での通番とした。種別・器種のうち種別は磁器・陶器という焼物種名称を現わし、器種とを併記した。出土位置は遺構名称、出土層位などである。量目の項に記入された数値の大半は復元測値で、単位はcmである。胎土は陶・磁胎の夾雑物粒子を観察したが、磁胎の場合、胎土中の鉍物粒子が目立つのは黒色～灰色の鉍物粒であり、白色鉍物粒の確実な観察はできていない。白色の長石・石英などは磁胎中に隔着してしまうためである。陶胎の場合は白・灰・黒色の鉍物粒をさしている。その量についてはなし、微・少ない・含む・多いの順である。次に焼成がある。焼成は見ての胎土の色調をさし、それぞれの製作地製品の質を示したつもりである。磁器の場合、胎土の定義は純白でなくてはならないが、舶載磁器の中には灰色気味のものもあり、それらを含めて磁器とした。舶載の天目茶碗については白色の磁器質例はないので陶器で扱った。色調は、焼締陶器は除き施釉の基調をなす釉の色調や釉調を記入したが、器形・技法の特徴の項でも一部、表現法を変えて記入した。それは若葉色・オリーブ色・砧手色など伝統的に呼称されている名称で、一般理解のために用いた。釉調も同様に前項目で細かい説明がなされていない場合に補足を加えた。特徴の項は釉調の細かい説明が前項目でなされていない場合や、文様、技法も併せて記入した。

3 観察の結果について

舶載陶・磁器や国産焼締陶器で最古の一群は12世紀にある。中国製口縁部折り返しの白磁碗15、12世紀前半の常滑焼Ⅰ期甕⁽¹⁾41・46、渥美焼甕43・44・45が存在し、本格的な量産に先だつ段階ながら稀有な例である。

13世紀代の舶載陶・磁器のうち中国青磁は1・2・3・4・5・6・9・12に龍泉窯か、同系と考えられる鎗手蓮弁文碗片が、14に景德鎮窯の青白磁梅瓶がある。このうち5・6・14は発色が良く、出来がすぐれ

第4章 調査成果

中国南宋代の所産と考えられる。このほか青磁では劃花文・描掻文碗など一般的に存在しても良い時期にありながら認められない。国産陶器のうち施釉陶器は生産段階にありながら見られず、替ってか焼締陶器が存在する。常滑焼には40・48・49・51・54の甕類があり、38の鉢がある。渥美焼は量産が行われているはずであるが見られない。

14世紀は、8・10の龍泉窯系青磁碗片、11の龍泉窯系で発色のよい青磁口折れ小鉢片、16の口禿の白磁皿などが中国製で、元代の所産と考えられ、量的には前代に近似する。国産陶器は量産期に入っているはずの施釉陶器が存在せず、替ってか焼締陶器に常滑焼がある。常滑焼はⅢ期後半とⅣ期前半の段階に相当し、後者に類される例に35・55の鉢片があるほか特徴的な破片は少なく、かろうじて叩文様の特徴から両者の段階と思われる例に39・50・54・56・57・58の大甕・甕片がある。出土量は前代に近似する。

15世紀は、7の龍泉窯系劃花蓮弁文碗片、20の龍泉窯系香炉、16の印花文白磁皿などが中国製で明代の製品と考えられるが全体的に量は少なく、一般傾向である。国産陶器は、この時期から施釉陶器が存在し、瀬戸に29・30の灰釉卸皿片、26・27の鉄釉碗片があり、美濃焼に21・22・23・24の灰釉平碗などがある。焼締陶器は常滑焼のⅣ期後半・Ⅴ期前半に相当する段階で、47・63とがあるが、両例の胎土は東海地方の製品と思われるが、白色鉍物の夾雑が少なく耐火度の高そうな常滑・渥美ともつかない質感にあり、製作地不詳とした。

16世紀は、景德鎮窯系と考えられる青花皿片18があり、このほか伊万里青磁か、中国であれば明代に相当する青磁と考えられながらも区分の困難な例に19・20がある。いずれにしても招来の陶・磁器は少なく一般傾向が表われている。国産の施釉陶器は瀬戸焼に31・32・34の鉄釉耳壺片が、美濃焼ではあるが15・16世紀の区分が困難な例に、28の鉄釉碗・25の灰釉碗があるが大窯の量産期に入っていながらも量は微弱である。焼締陶器では時期不明の36を除くと常滑焼に顕著な例は少ないが中世焼締陶器の接合後の破片総数は164点であるから、16世紀に含まれる例もあるのかもしれない。

4 出土陶・磁器から見た遺跡の消長

当遺跡の消長を知る必要から第1図のグラフと分布図を作成した。年代軸を上・下に、出土量を左・右に取った。グラフの作成にあたり配慮した点は次のとおりである。扱った幅は中世に限定し、16・17世紀の2世紀の幅の中で考えざるを得ない資料もあるため、一部が17世紀にもおよんだが17世紀を表わす実数ではない。さらに世紀を前後に区分し、2世紀にまたがることを避けた。Naは各図観察表で用いた番号に一致している。記入の方法は、中国青磁⁽²⁾・同白磁⁽³⁾・同青花⁽⁴⁾・瀬戸⁽⁵⁾・美濃⁽⁶⁾・常滑⁽¹⁾など編年観が明らかなものについてはそれを拠所とした。判断に苦しい個体は0.5個体づつ2世紀にまたがせ、大まかな年代観とならざるを得なかった個体については各世紀の中央に置き配分した。世紀の過度的な個体は2世紀区分の目盛上に置かざるを得ず、またがせて記入した。なお、年代観の得難い体部片については記入していないが、分布図中には加えてある。そのつもりで参照して頂きたい。

12世紀の一群の器種は白磁碗⁽⁷⁾・渥美甕⁽⁷⁾・常滑甕である。そのうち白磁碗15は、群馬県では、前橋市上野国府推定地、上野国分寺中間地域遺跡など存在するが、小数例に留まり、同じ段階に置かれた初源期の渥美甕類も同様に稀少性が極めて高い。出土地点は白磁碗15がS E 28、渥美焼の42がS K 56、43がS D 111、同一個体である。44・45がS E 06常滑焼のそれぞれ覆土から出土している。S E 06に伴う陶器・軟質陶器類は15世紀後半の瀬戸鉄釉碗片が最も新しい所産として、13世紀後半の常滑甕片48、それと同一個体と思われる破片9、14世紀の軟質陶器鉢片(軟9・11・14)など前代の遺物を多く含んでおり、特に埋土中の遺物は井戸址

の下限である15世紀後半に先だつ14世紀にも盛期があるため渥美甕44・45は、それまで伝世していた可能性が高く、またS K56出土の渥美甕片42も後出の常滑甕片を伴ない伝世されたと類推される。14世紀に伝世していた場合14世紀と15世紀の因果関係は、14世紀の軟質陶器鉢片が摩耗しているため薄いと考えられる。入手の初源は他にも白磁碗15、渥美甕41・45、常滑甕44・46など同期の製品が複数であるので12世紀に遡って存在した可能性が高いが、生活の場所が当遺跡が近接した場所かは判断がつかない。

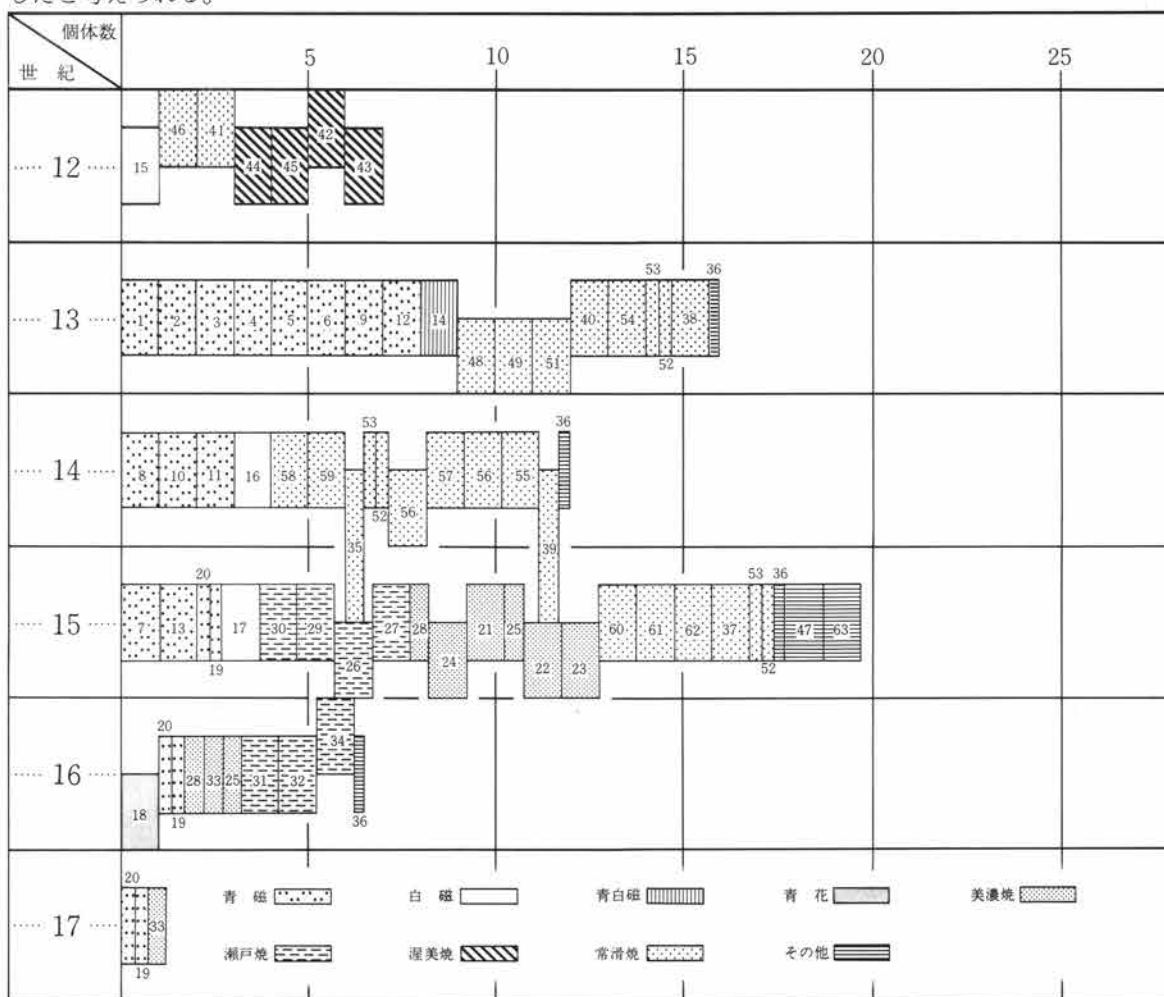
13世紀に至って遺物量は増加しているものの遺構量は少ない。日常的に用いられた在地製の軟質陶器鉢も比較的多く、ある程度の組合せが得られるので、当遺跡に生活はあったとしてよく、第1図もそのことを示し、本格的な生活がはじまる。出土陶・磁器の器種は青白磁梅瓶、青磁碗、常滑甕である。中国磁器に14の青白磁梅瓶片がある。県内では富岡市稻荷森遺跡⁽⁸⁾、歌舞伎遺跡⁽⁹⁾、吹屋遺跡⁽¹⁰⁾など稀少例である。青磁鎚手蓮弁文碗では、5・6が発色もよく出来がすぐれているが、同安窯系の猫掻文碗が見られないのは、出土青磁碗が13世紀代でも後出した可能性がある。焼締陶器は常滑焼が主体で大甕が少なく甕主体である。遺構としてはS K260から12世紀前半の常滑I期に類される41・46の甕片、13世紀の龍泉窯系青磁碗片、13世紀後半の常滑焼甕片などが出土しており、群馬県地域では数少ない13世紀代の一括遺物と思われるが、S K260を除くと、13世紀代の遺物の出土した遺構はほとんどが後代の遺物をまじえている。S K260も、あるいは後代の遺構の可能性もある。

14世紀代は第1図を見ると前代よりも減少傾向にある。しかし軟質陶器の摺鉢の多くはこの段階にあり、生活が失われた訳ではないと考えられる。また第1図については前代より常滑が増加し、中国青磁が減少している。この傾向はかつて検討した太田市浜町屋敷内遺跡⁽¹¹⁾、月夜野藪田遺跡⁽¹²⁾、前橋市・群馬郡国分寺中間地域遺跡⁽¹³⁾、月夜野町洞遺跡などでも同様の傾向があり、我国と中国元との貿易陶磁の応需に係わる現象と考えられる。出土陶・磁器の器種は龍泉窯系青磁素文碗、同青磁鉢、口禿白磁皿などがある。元代陶・磁器の特色として大器製品があるが当遺跡では見られない。国産陶器はこの段階に至っても施釉陶器が皆無で、前4遺跡でも同様の傾向であった。焼締陶器には常滑焼があり、大甕の割合が甕をしのぎ鉢が僅かながら存在する。鉢は県内でもそう多くは出土しないが、替って在地の軟質陶器鉢が多く製作されている。遺構としてはS E34、S E36などから14世紀代の常滑甕片が出土しているが、遺物の出土量が少なく14世紀代の構築と断言はできない。しかし13・14世紀代の生活が遺物の上から推測される以上は、それらの井戸跡が14世紀である可能性を捨てる訳にはゆかない。また軟質陶器から得た所見に、14世紀後半から15世紀前半にかけての衰退状況は陶・磁器からは窺えなかった。

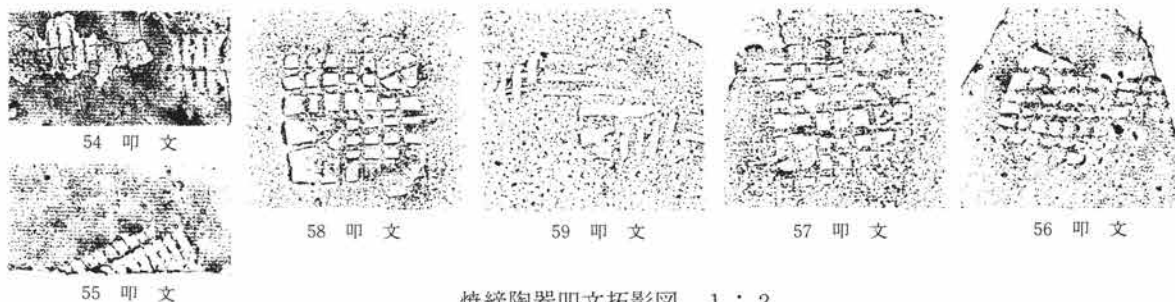
15世紀は第1図を見ると前代より向上傾向にあり、軟質陶器も内耳鍋が多く、その反映を示し生活の拡大が認められる。第1図については中国陶・磁器類、焼締陶器類も前代とほぼ同様であるが施釉陶器の瀬戸美濃が急増する。それらを器種別に見ると中国青磁は劃花文碗、白磁に17の小皿がある。17は削り込みのある高台で類例が上野国分寺中間地域遺跡にあるものの稀少例である。瀬戸には灰釉卸皿、鉄釉碗、美濃に灰釉平碗、16世紀におよぶかも知れないが鉄釉碗がある。焼締陶器に製作地不詳の甕、常滑甕がある。この段階で注目されるのは前4遺跡例などよりも、国産施釉陶器類が多いのが特色で量および使用者に知識層の存在が示唆され、その状態は16世紀へと続いてゆく。また国産の碗類が多く出土していた例には長楽寺遺跡⁽¹⁴⁾、上野国分二寺中間地域遺跡がある。両者ともに中世寺院・同関連遺跡であり、当遺跡における15・16世紀の陶・磁器類についても同様の性格が存続したのと考えても良いのではないだろうか。遺構としてはS E06・33、S D12・23・118などがある。それぞれ同期として良い陶・磁器片の出土がある。つまり伝世も含めた上での一括の組合せが得られる。

第4章 調査成果

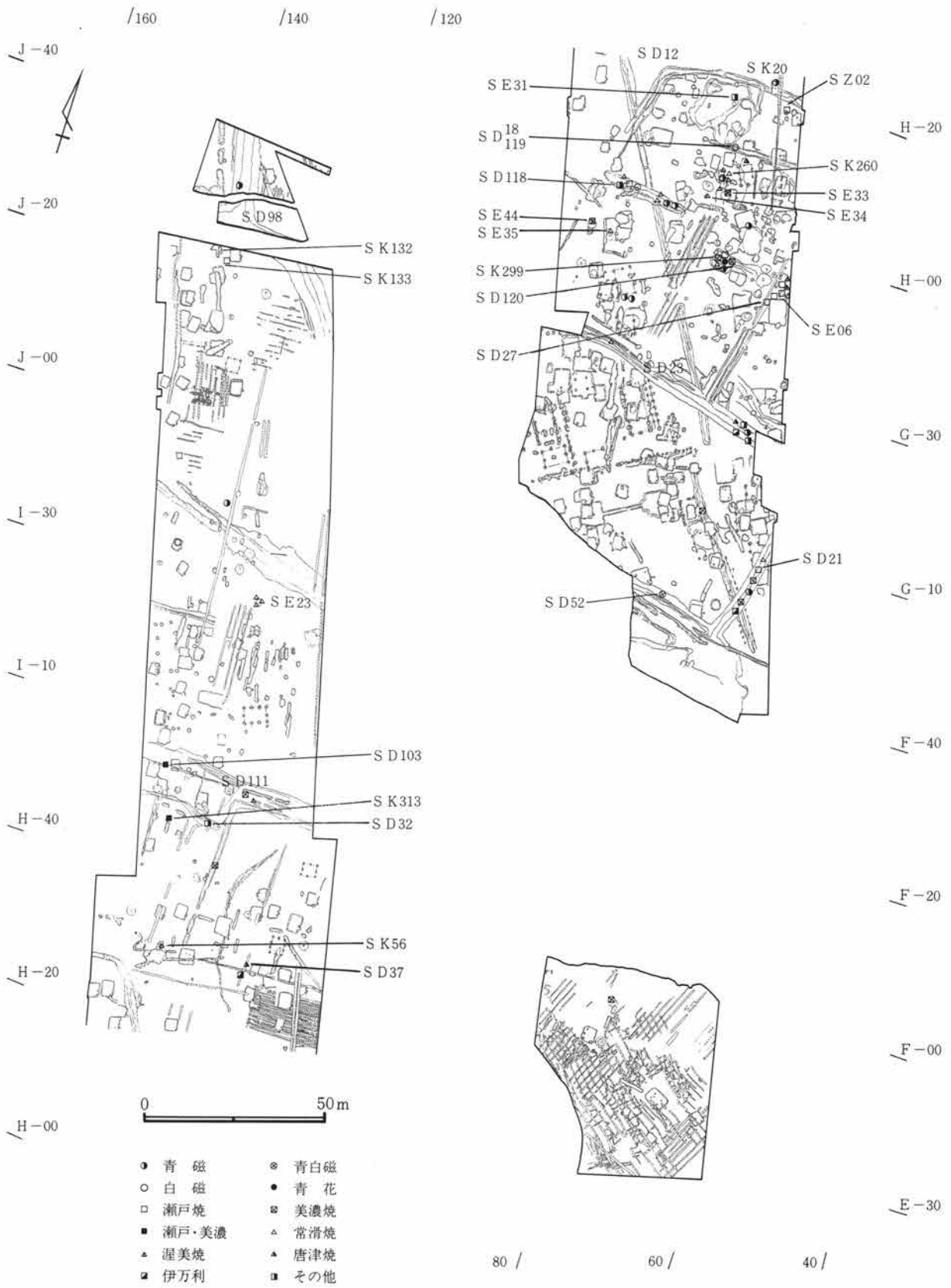
16世紀代は第1図を見ると、前代よりも縮少傾向にある。軟質陶器では前代から続いていた内耳鍋が16世紀中頃以降激減し、生活の大半はこの時点で失われたと判断されるので、陶・磁器類が少ないのはそうした状況を反映しての結果と考えられる。舶載陶・磁器で明確なのは18の青花皿があり、国産施釉陶器、瀬戸焼に耳壺、美濃焼に灰釉碗・鉄釉碗とがある。焼締陶器の存在は微弱である。陶・磁器の傾向は複数個体の葉茶壺である耳壺や、碗類の存在から前代の知識人層の存在は続いている。遺構としてはSE06、SD20、SD299など軟質陶器で判った遺構年代より遥かに少ない。それだけ良好な組合せが得られないのである。16世紀代は美濃焼において大窯の量産段階に入っており、富岡市本郷元宿遺跡⁽¹⁵⁾、太田市浜町屋敷内遺跡⁽¹¹⁾、月夜野町藪田遺跡⁽¹²⁾などにおいて製品に確実な反映を見ているが、当遺跡においてはその段階の反映が顕著に認められず、また17世紀の陶器も同様に少なく、16世紀の前半のある時に15世紀から続く知識層を伴う段階は終息したと考えられる。



第1図 中世陶磁器の世紀別出土量 数字は個体番号を示す

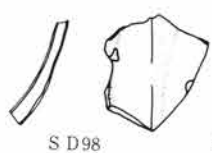


焼締陶器叩文拓影図 1:2



中世近世陶磁器分布図

第4章 調査成果



S D98 3



S D120 · S K299 4



S K260-2 1



S D23-7 5



107G-37 6



表採 2



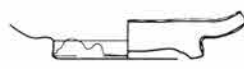
表採 9



E区表採 10



S D21-24 7



92H-01 12



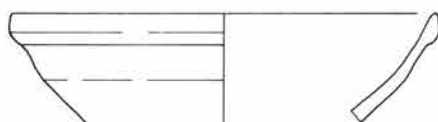
S K20-4 8



S D118-8 11



S D118-9 13



S E28-3 15



S D52 14



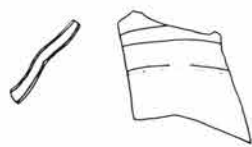
S D118-10 16



S D18 · S D119 17



S D120 · S K299 18

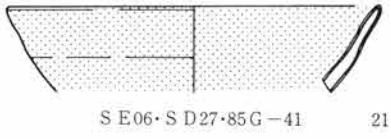


126 I-40 19

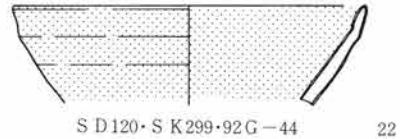


107G-37 20

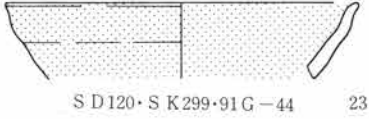
舶載陶磁器



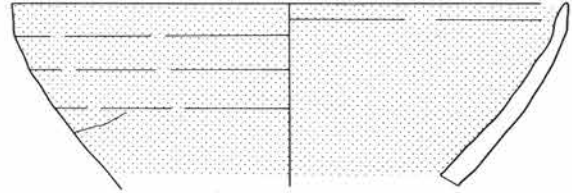
S E06・S D27・85G-41 21



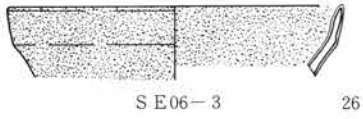
S D120・S K299・92G-44 22



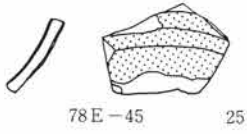
S D120・S K299・91G-44 23



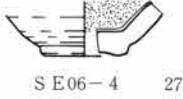
S E33-2 24



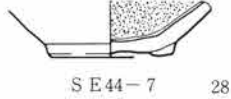
S E06-3 26



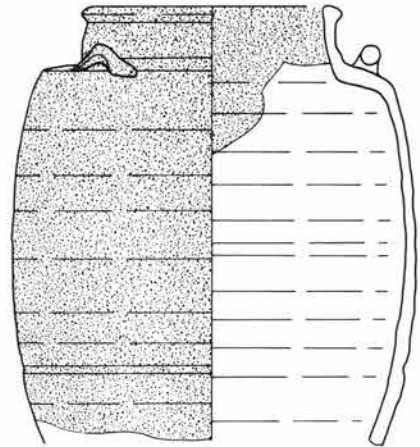
78E-45 25



S E06-4 27



S E44-7 28



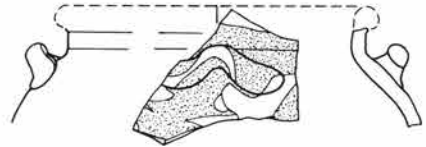
S Z02-1 31



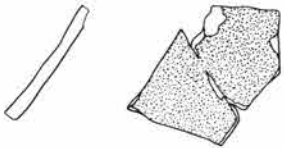
S K132・S K133 29



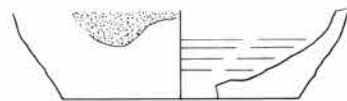
S D118-11 30



S J10-3 33



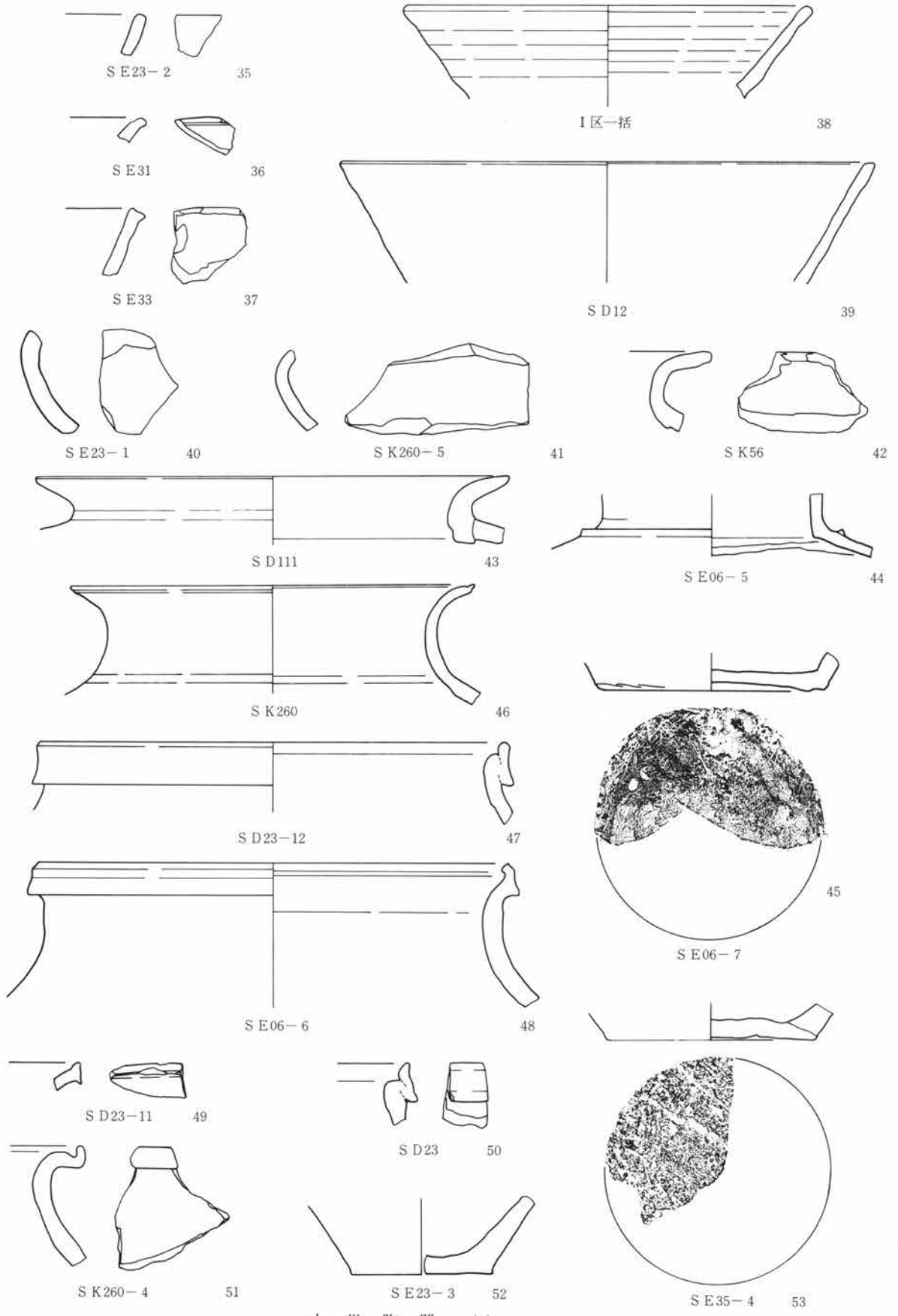
S D120・S K299・91G-44 32



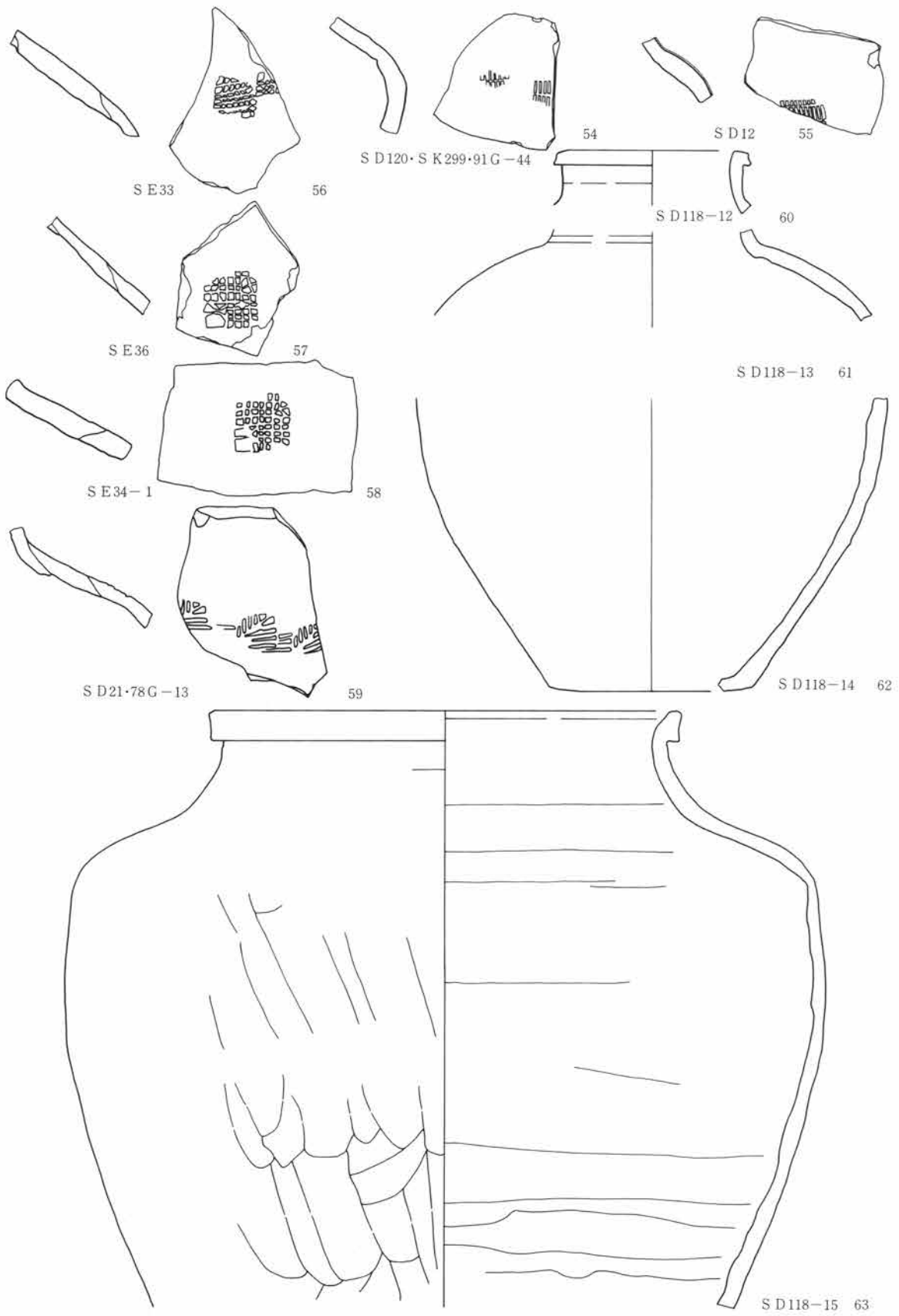
S E06・S D27・85G-41 34

中世陶磁器

第4章 調査成果

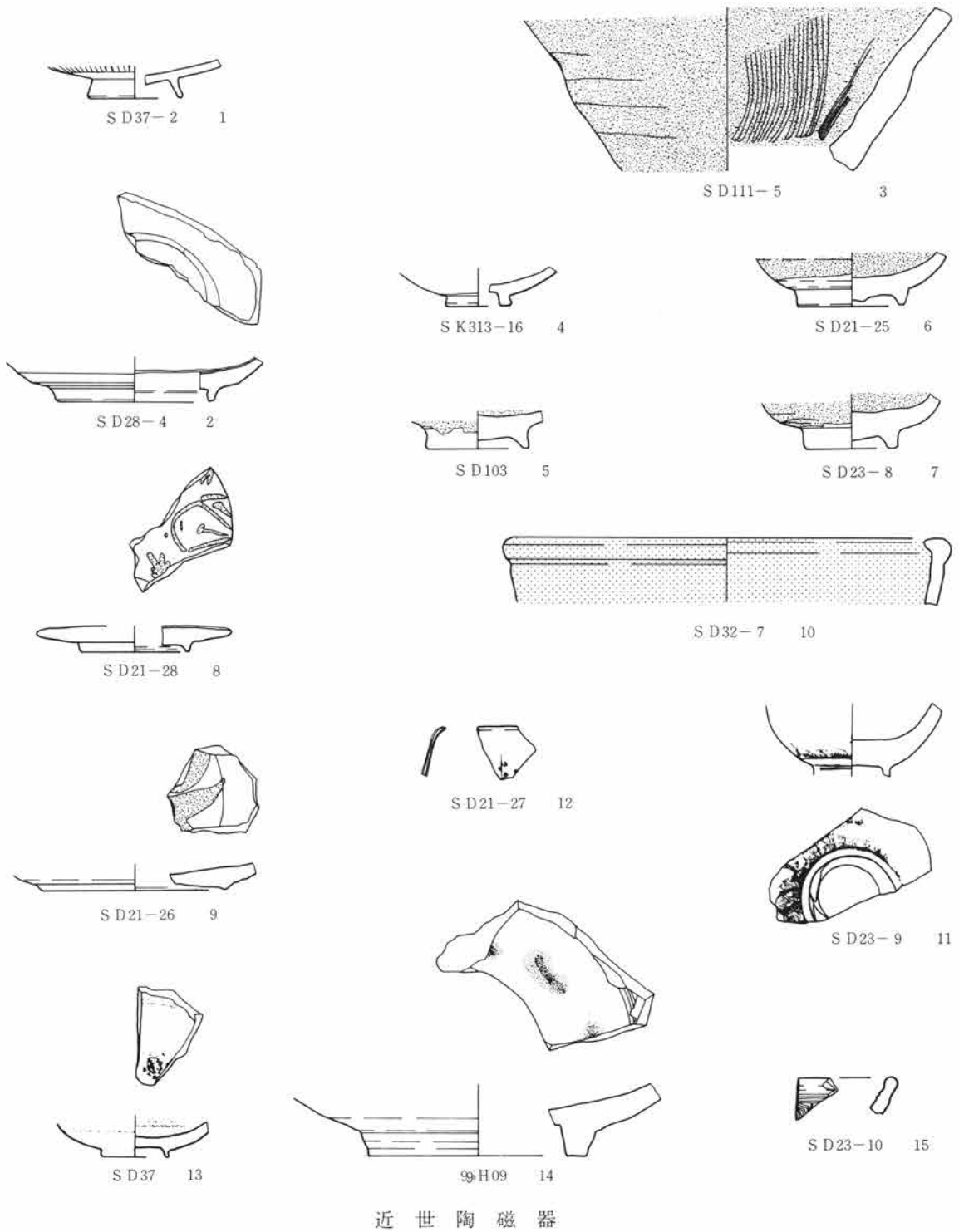


中世陶器 (1)



中世陶器 (2)

第4章 調査成果



中世陶磁器

No.	土器種	出土位置	量 目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
1	磁器 (青磁碗)	SK260 -2 覆土	口径約 16.4 口縁部片	夾雑物なし。 灰色。釉は灰 オリーブ色。	鎗手蓮弁文碗で外面に片切彫による蓮弁と間弁がある。蓮弁は幅が広く先端は鋭く尖っている。鎗は不明瞭である。内面は滑らかで施文はない。釉は厚く気泡が少なく透明感が強い。内外面に貫入が入る。外面の貫入は右上り。	龍泉窯系 13世紀

第4節 中世土・陶・磁器

No	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特徴	適要
2	磁器 (青磁碗)	表採	口径17.0 口縁部片	黒色鉍物粒微 淡灰色。釉は 淡緑青色。	鎬手蓮弁文碗で外面に片切彫による蓮弁がある。間弁は持たない。蓮弁は先端が鋭く尖り、盛り上っている。内面は無文。細かな気泡を多く含む乳濁する。	龍泉窯 13世紀
3	磁器 (青磁碗)	S D 98 覆土	体部小片	夾雑鉍物なし。 灰黄色。釉は 黄色味のある 緑灰色。	鎬手蓮弁文碗で外面に片切彫による蓮弁がある。蓮弁は同じ向きに重なり合うと思われる。鎬が明瞭である。内面は無文。比較的大きな気泡を少し含むが透明感は強い。外面の貫入は右上り。	龍泉窯系 13世紀
4	磁器 (青磁碗)	S D 120 S K 299 覆土	体部小片	夾雑鉍物なし。 灰色、釉は灰オ リーブ色。	鎬手蓮弁文碗で外面は片切彫による幅の広い蓮弁がある。鎬は明瞭。内面は滑らかで無文。釉は気泡が非常に少なく透明感が強い。	龍泉窯系 13世紀
5	磁器 (青磁碗)	S D 23-7 覆土	体部小片	夾雑鉍物なし。 淡灰色。釉は青 味のある緑灰色。	鎬手蓮弁文碗で外面に鎬状の盛り上りがみられるが、釉が不透明で厚いため施文の方法は判然としない。内面は無文。微気泡を多く含む、柔らかく乳濁する。発色は砧手で、出来すぐれる。	龍泉窯 13世紀
6	磁器 (青磁碗)	107G-37	体部小片	夾雑鉍物なし。 淡灰色。釉は淡 緑灰色。	鎬手蓮弁文碗。外面に鎬状の盛り上りがあるが、文様の部分までは残っておらず幅の広い蓮弁と思われる。釉は厚く、細かな気泡を含み乳濁する。発色は砧手で出来すぐれる。	龍泉窯 13世紀
7	磁器 (青磁碗)	S D 21-24 覆土	口径14.0 口縁部片	黒色鉍物粒微。 淡灰色。釉は緑 灰色。	劃花蓮弁文碗。外面に丸彫による蓮弁と間弁がある。蓮弁は幅が広く、先端が丸い。鎬はみられない。内面には丸彫による劃文有り。釉は厚く、細かな気泡を多く含む乳濁する。発色極めて良い。	龍泉窯 15世紀
8	磁器 (青磁碗)	S K 20-4 覆土	口径約14 口縁部片	夾雑鉍物なし。 淡灰色。釉は緑 灰色。	内外面とも施文なし。釉は細かな気泡を多く含む乳濁する。口縁部は強く外反する。	龍泉窯 14世紀
9	磁器 (青磁碗)	表採	体部小片	夾雑鉍物なし。 灰色。釉は緑灰色。	劃花文碗で外面は無文。内面には片切彫による劃文がある。釉は気泡が少なく透明感が強い。	龍泉窯系 13世紀
10	磁器 (青磁碗)	E区表採	体部小片	夾雑鉍物なし。 淡灰白色。釉は 淡緑灰色。	内外面とも施文なし。外面は釉が荒れてカサカサしている。内面の釉は気泡が少なく透明感が強い。細い貫入が入る。	龍泉窯系? 14世紀
11	磁器 (青磁鉢)	S D 118-8 覆土	口縁部小 片	夾雑鉍物なし。 淡灰色。釉は淡 緑青色。	内外面とも施文は見られないが、外面体部に蓮弁をもつ可能性が高い。釉は厚く、砧手を呈する。口唇部と口縁屈曲部は薄い。釉の表面は荒れてカサカサしている。細かい気泡を多く含む乳濁する。	龍泉窯 14世紀
12	磁器 (青磁碗)	92H-01	高台部～ 体部下位 片	夾雑鉍物なし。 暗灰色。釉はオ リーブ灰色。	内外面とも施文なし。釉は薄く掛り、細かな気泡を多く含む不透明。細かい貫入が多く入る。高台は断面四角で高台部疊付及びその内部は露胎となる。底部の器肉は極めて厚い。高台部には素地との境が鉄足状に酸化する。鎬手蓮弁文碗か。	龍泉窯系 13世紀
13	磁器 (青磁香 炉)	S D 118-9 覆土	高台部～ 体部下位 片	夾雑鉍物なし。 淡灰色。釉は淡 緑灰色。	外面体部下位に沈線が1条入る。釉は細かい気泡を多く含む乳濁する。天竜寺手色を呈する。内面には施釉されず整形もあまり丁寧ではなく陶土がぬた状に所々残る。高台は厚く、断面は三角形に近く外面が内傾する。鉄足は見られない。	龍泉窯 15世紀
14	青白磁 (梅瓶)	S D 52覆土	体部	黒色鉍物粒B 淡灰色。釉は淡 青色。	劃花流水文梅瓶体部片で、内面に轆轤目有り。劃文は片切施文である。釉は薄く細かい貫入が入る。	景德鎮 13世紀
15	磁器 (白磁碗)	S E 28-3 覆土	口径17.0 口縁部～ 体部	夾雑物なし。 白色。釉は灰白 色	折り返し口縁の白磁碗。口縁部から体部片である。内面は平滑であるが、外面体部下半に篋削り目がある。内外面に使用のための擦り傷を負い、釉はやや厚く釉掛けされる。	中国 12世紀

第4章 調査成果

No.	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
16	磁器 (白磁皿)	S D118-10 覆土	口縁部片	黒色鉍物粒B 淡灰色。釉は淡 灰白色。	口禿白磁の口縁部片である。口縁端部を除いて内外に施釉。釉境は酸化せず露胎となる。	中国 14世紀
17	磁器 (白磁皿)	S D18 S D119 覆土	口径8.8 底径4.0 高さ2.2	気泡を多く含む 乳白色。釉は淡 黄灰色	割り込み高台の白磁小皿の底部から口縁部片である。体部外面下方を除いて白磁釉を施釉。体部外面下方は篋削りとなる。内面に重ね焼痕あり。釉は薄く再貫入あり。	中国 15世紀
18	磁器 (青花皿)	S D120 S K299	底部片	夾雑物なし。 白色。釉は淡灰 白色。	青花皿の底部片である。内面に「福」と考えられる呉須の染め付けあり。白磁釉は厚く内外面に施釉される。呉須の発色は新橋色で景德鎮特有の発色。	景德鎮 16世紀後半
19	磁器 (青磁鉢)	126 I-40	体部片	夾雑物なし。 白色。釉は淡 緑青色。	端折れの鉢の体部片である。外面に工具による轆轤目あり。釉は七官青磁色を呈し、鮮かであるが乳濁しているため、伊万里青磁の可能性もある。	伊万里か龍 泉窯 15~17世紀
20	磁器 (青磁香 炉)	107G-37	口径10.0 口縁部~ 頸部	夾雑物なし。 白色。釉は淡 緑青色。	袴腰香炉の口縁部片である。外面・口縁部に青磁釉が施釉され内面は露台となる。外面に大きな貫入が左上りに入るので轆轤の回転方向は右回りか。このため伊万里焼の可能性あり。発色は七官青磁色。	伊万里か龍 泉窯 15世紀~17 世紀
21	陶器 (灰釉碗)	S E06 S D27 85G-41	口径14.8 口縁部	夾雑物なし。 淡黄灰色。釉 は淡暗褐色。	平碗の口縁部片。内外面に施釉。外面下方を除いて施釉。釉は薄く再貫入が入る。釉境は発色に酸化。	美濃 15世紀
22	陶器 (灰釉碗)	S D120 S K299 92G-44	口径13.8 口縁部	気泡多い。淡黄 灰色。釉は淡緑 灰色。	24・23と同一個体か。	美濃 15世紀後半
23	陶器 (灰釉碗)	S D120 S K299 91G-44	口径13.8 口縁部	気泡多い。淡黄 灰色。釉は淡緑 灰色。	22・24と同一個体か。	美濃 15世紀後半
24	陶器 (灰釉碗)	S E33-2 覆土	口径22.0 口縁部~ 体部	気泡多い。淡黄 灰色。釉は淡緑 灰色。	灰釉平碗の口縁から体部片で外面体部下半を除いて灰釉が施釉される。露胎部には篋削り目が残る。内面にトチンと思われる溶着物を剝した痕跡あり。22・23と同一個体か。	美濃 15世紀後半
25	陶器 (灰釉碗)	78E-45	体部片	気泡入る。淡灰 色。釉は淡灰緑 色。	平碗の体部片で、外面下方を除いて施釉。釉は薄く再貫入が入る。釉境は発色に酸化。	美濃 15・16世紀
26	陶器 (黒釉碗)	S E06-3 覆土	口径14.0 口縁部片	夾雑物なし。 灰色。釉は黒色。	鉄釉天目茶碗の口縁部片である。釉はやや厚めに掛けられているが火中のため部分的に発泡している。	瀬戸 15世紀後半
27	陶器 (黒釉碗)	S E06-4 覆土	底径3.5 高台部~ 体部下位	白色鉍物粒B 灰色。釉は黒 色。	鉄釉天目茶碗の底部片で内面に施釉。外面は露胎となる。高台は削り出し高台。釉は厚く施釉され、結晶状態が生じ租天目となる。体部外面は篋削りされており、砂粒の移動は轆轤右回りである。	瀬戸 15世紀
28	陶器 (黒釉碗)	S E44-7 覆土	底径5.0 高台部~ 体部下位	黒色鉍物粒B 灰色。釉は黒 色。	鉄釉天目碗底部片で内面に鉄釉が施されている。外面は露胎となり篋削りが見える。高台は削り出し高台である。削り目の砂粒の移動は轆轤右回りを示す。	美濃 15・16世紀
29	陶器 (灰釉卸 皿)	S K132 S K133 覆土	底部小片	黒色鉍物粒B 灰色。釉は淡灰 緑色。	下ろし皿の底部片である。内面に下ろし目が刻まれている。底面は糸切による切りはなしである。	瀬戸 15世紀
30	陶器 (灰釉皿)	S D118-11 覆土	底径5.9 底部	黒色鉍物粒B 淡灰色。釉は暗 緑色。	灰釉皿底部片で内面体部側に釉掛けされている。内面見込みに削り塗り痕あり。底面は轆轤右回りの糸切り痕あり。内面にトチン痕あり。	瀬戸 15世紀中

第4節 中世土・陶・磁器

No	土器種	出土位置	量 目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
31	陶器 (褐釉三耳壺)	S Z 02-1 底面から 3 cm	口径9.6 口縁部～ 体部	黒色鉍物粒B 灰色。釉は茶褐色。	玉縁口縁の三耳壺で外面及び口縁部に鉄釉の茶褐色釉が浸し掛け施釉される。外面には轆轤目が走り、内面には発達した轆轤目が見られる。轆轤目は主に右上りとなり、轆轤の回転方向右回りの可能性あり。	瀬戸 16世紀
32	陶器 (黒褐釉耳壺)	S D 120 S K 299 91G-44 覆土	体部片	黒色鉍物粒B 灰色。釉は茶褐色。	大型耳壺の体部片で外面に茶褐色が施される。内面には発達した轆轤目がある。器肉は極めて薄く精品である。	瀬戸 16世紀
33	陶器 (黒褐釉耳壺)	S T 10-3 覆土	体部上位 ～頸部	黒色鉍物粒B 黄灰色。釉は黒褐色。	外面に耳がはり付けられる。外面と内面上方に施釉される。釉は黒褐色を呈し、部分的に白土釉が掛る。わずかに残る口縁下からすると、玉縁口縁と考えられる。	美濃 16世紀・17 世紀
34	陶器 (褐釉耳壺)	S E 06 S D 27 85G-41	底径9.4 底部～体 部下位	白色・黒色鉍物 粒B。灰色。釉 は茶褐色。	耳壺の底部片で体部外面上方に褐釉が見られる。内面は発達した工具による轆轤目が見られ、底面は糸切りによる切りはなしである。出土地点及び胎土から32と同一個体かもしれない。	瀬戸 16世紀前半
35	焼締の陶器 (鉢)	S E 23-2 覆土	口縁部	黒色・白色鉍物 粒B。灰色。	鉢の口縁部片で端部はやや丸味をおびる。外面下方にわずかながら上下方向の寛削り目が見られる。	常滑 14世紀後半 ～15世紀前
36	焼締め陶器 (鉢)	S E 31 覆土	口縁部	黒色鉍物粒B 灰色。	鉢の口縁部片である。内面に自然釉がかかり、外面口縁部は擦れている。胎土の質は白色鉍物粒の多い常滑焼や砂粒状の渥美焼とは異なる異質の胎土である。	不詳 13～16世紀
37	焼締め陶器 (鉢)	S E 33 97H-04 覆土	口縁部	白色・灰色鉍物 粒多い。暗褐色	鉢の口縁部片である。外面に紐作り痕と撫で痕あり。器面は全体的に酸化している。	常滑 15世紀
38	焼締め陶器 (鉢)	I区一括	口径28.0 口縁部	白色鉍物粒多い。 灰色。	鉢の口縁部片である。口縁端部は肥厚し、外面に轆轤目がある。内面はやや平滑である。器面の色調は還元気味である。	常滑 13世紀
39	焼締め陶器 (鉢)	S D 12 覆土	口縁部	白色・灰色鉍物 多い。灰色。	鉢の口縁部で全体に酸化気味。茶褐色を呈する。内面に自然釉が及ぶ。外面に撫で痕あり。	常滑 14世紀後～ 15世紀前半
40	焼締め陶器 (甕)	S E 23-1 覆土	体部	白色鉍物粒多 い。灰色。	甕の頸部片である。外面に自然釉、内面に紐作痕と指圧痕あり。51と同一個体である。	常滑 13世紀
41	焼締め陶器 (甕)	S K 260-5 覆土	頸部片	白色・黒色鉍物 粒多い。灰色。	頸部片で外面に自然釉が及び、内面に紐作痕と指圧痕あり。46と同一個体。	常滑 12世紀前半
42	焼締め陶器 (甕)	S K 56 覆土	口縁部～ 頸部	夾雑物B。灰色。	口縁部から頸部にかけての破片。外面に紐作痕が認められ、内面体部側に紐作痕あり。全体に還元気味である。	渥美 12世紀前半
43	焼締め陶器 (甕)	S D 111 覆土	頸部	夾雑物B。灰色。	甕の口縁部片である。全体的に焼成が甘く、やや酸化気味。軟質である。体部内面に頸部との接合を示す紐痕あり。口縁周辺は内外ともに横撫でがきされている。	渥美 12世紀
44	焼締め陶器 (甕)	S E 06-5 覆土	頸部片	夾雑物なし。 灰色。	甕の首部片で頸部に1条の突帯が巡り、自然釉が及ぶ。内面には紐作単位が3条。及び指圧痕が見られる。内面頸部と体部との境のくびれ目は明瞭に区分される。45と同一個体か	渥美 12世紀
45	焼締め陶器 (甕)	S E 06-7 覆土	底径16.0 底部	夾雑物なし。 灰色。	甕の底部片で体部片がわずかに残る。内面に自然釉が及ぶ。底面には繊維の圧痕が多く見られる。44と同一個体か。	渥美 12世紀
46	焼締め陶器 (甕)	S K 260-3 覆土	口径28.8 口縁部片	白色・黒色鉍物 粒多い。灰色。	甕の口縁部片である。外面と口縁部内面に自然釉が及ぶ。口縁部内面に1条の沈線あり。頸部下方に紐作痕と指圧痕あり。41と同一個体。	常滑 12世紀前半

第4章 調査成果

No	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特徴	適要
47	焼締め陶器(大甕)	S D23-12 覆土	口径33.0 口縁部	黒色鉱物。灰色 鉱物粒含む。	大甕の口縁部片である。全体に黒灰色の自然釉が及ぶ。内面に紐作痕と指圧痕あり。胎土は常滑焼・渥美焼とも異なるが在地ではないようである。	不詳 15世紀
48	焼締め陶器(甕)	S E06-6 覆土	口径33.6 口縁部	白色鉱物多い 黒灰色。	甕の頸部から口縁部片である。外面に自然釉が及ぶ。口縁端部が内側にうつむく特殊な口作りである。	常滑 13世紀後半
49	焼締め陶器(甕)	S D23-11 覆土	口縁部	黒色・白色鉱物 含む。灰色。	甕の口縁部片である。内面に自然釉が及ぶ。外面口縁下端部など端正に作られている。	常滑 13世紀後半
50	焼締め陶器(大甕)	S D23 覆土	口縁部小 片	白色・黒色鉱物 多い。灰色。	甕の口縁部片である。外面に自然釉が及ぶ。口縁部の端部は、やや丸味をおびる。口縁部の形態はN字型である。	常滑 14世紀後半
51	焼締め陶器(甕)	S K260-4 覆土	口縁部	白色鉱物粒多い 灰色。	甕の口縁部から頸部片である。外面に自然釉が及ぶ。内面に紐作痕と指圧痕あり。口作は全体的に丸味をおびる。40と同一個体。	常滑 13世紀後半
52	焼締め陶器(甕)	S E23-3 覆土	底径10.0 底部	灰色鉱物粒多い 灰色。	底部から体部にかけての破片。内面に自然釉が及び、板状工具の擦痕が残る。体部外面に筥状工具による上下方向の削りあり。全体にやや酸化気味。	常滑 13~15世紀
53	焼締め陶器(甕)	S E35-4 覆土	底径24.8 底部	白色鉱物粒多い 灰色。	底部の破片である。体部片がわずかに残り、底部との間に接合面がみられる。底面に白色鉱物を多く含む砂粒が付着。	常滑 13~15世紀
54	焼締め陶器(甕)	S O120 S K299 91G-44	肩部	白色鉱物。灰色。 白色。	外面に自然釉が及び、短冊型格子が施され、内面には紐作痕と撫での擦痕あり。	常滑 13世紀
55	焼締め陶器(甕)	S D12 覆土	頸部~体 部	白色鉱物多い。 灰色。	甕の頸部から体部にかけての破片である。外面に格子たたきが施され、自然釉が及ぶ。内面に紐作痕と撫で痕あり。	常滑 14世紀
56	焼締め陶器(甕)	S E33 覆土	体部	白色。灰色鉱物 多い。	甕の体部片である。外面に格子たたきがあり、自然釉が及ぶ。内面に紐作痕と指撫で痕。	常滑 14世紀
57	焼締め陶器(甕)	S E36 覆土	体部	白色鉱物含む。 灰色。	甕の体部片である。外面に格子の叩あり。内面に紐作痕と指圧痕あり。たたきは36と同関係にあるが別個体か。	常滑 14世紀
58	焼締め陶器(大甕)	S E34-1 覆土	体部	白色鉱物粒多い 灰色。	体部の破片。外面に細い格子のたたきあり。内面に紐作痕と指圧痕あり。	常滑 14世紀
59	焼締め陶器(甕)	S D21 覆土78G-13	肩部	黒色粒多く 白色粒B。	頸部から体部の破片。外面に自然釉が及び、矢羽状の叩き目あり。内面に紐作痕と指頭圧痕あり。	常滑 14世紀
60	焼締め陶器(甕)	S D118-12 覆土	口径13.1			
61	焼締め陶器(甕)	S D118-13 覆土	口縁部~ 底部	白色鉱物粒多い 黒灰色。	口縁部から底部にかけて18片存在するが、体部中途が欠失するため復元できず。外面には自然釉が及び、露胎部分は赤褐色に酸化し鉄足状となる。内面の体部上半には紐作痕と指圧痕が残る、下半はそれらの痕跡が板状工具と撫でによって平滑にされている。	常滑 15世紀
62	焼締め陶器(甕)	S D118-14 覆土	底径14.0		底部は全体的に薄く、焼成のための白色鉱物粒を多く含んだ細砂が付着。60・62も同一個体。	
63	焼締め陶器(大甕)	S D118-15 覆土	口径32.0 口縁部~ 体部	白色鉱物B。 灰色。	74片から成る大甕の口縁~体部下半個体である。外面全体に黒灰色の自然釉が及ぶ。内面には多くの紐作痕と指頭圧痕が残され、外面に筥削り痕あり。胎土は59と同様に常滑焼、渥美焼とも異なる。	不詳 15世紀

第4節 中世土・陶・磁器

近世陶磁器

No.	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特徴	適要
1	陶器 褐碗	S D37 覆土	底径4.4 高台部～体部	夾雑物なし。 灰色。釉は茶褐色。	碗の高台から体部片である。器面に鉄釉が掛けられる。高台内面、体部外面は露胎となる。体部外面にトビガンナ施文あり。	唐津系 19世紀以降
2	陶器 淡灰色皿	S D28-3 覆土	底径7.4 高台部～体部	細かな気泡含む。淡黄灰色、淡灰色。	皿の高台から体部にかけての破片である。体部外面下半と高台を除いて、志野釉を施釉、内面に重ね焼痕あり。高台は削り出し高台。	美濃 17世紀
3	陶器 黒褐釉播鉢	S D111 覆土	体部	気泡含む。淡黄灰色、暗褐色。	播鉢の体部下半片である。内外底面に鉄釉を刷毛ぬりする。内面に17条を1単位とするおろし目があり、外面の体部上半には指頭圧痕と紐作痕がある。体部外面下半に篋けずり痕あり。	美濃 17世紀～18世紀
4	陶器 淡暗緑色小碗	S K313 覆土	底径3.0 高台部～体部	夾雑物なし。 灰色。	高台部を除いて透明釉を施釉、内面にハリ目あり、高台は貼り付け後削る。	京焼 17～18世紀
5	陶器 褐釉碗	S D103 覆土	底径4.9 高台部	夾雑物B。 淡黄灰色。釉は飴釉。	碗の高台部片である。釉は高台部を除いて飴釉が施釉される。高台は貼り付け高台。	美濃 17世紀～18世紀
6	陶器 黒褐色釉碗	S D21-25 覆土	底径5.0 高台部～体部	夾雑物なし。 灰色。黒褐釉。	碗の高台部片である。釉は高台部を除いて飴釉より強い鉄釉が施釉される。	瀬戸 17世紀～18世紀
7	陶器 黒褐釉碗	S D23-8 覆土	底径4.4 高台部～体部	夾雑物なし。 灰色。黒褐釉。	碗の高台部片である。釉は高台部を除いて飴釉より強い鉄釉が施釉される。	不詳 17世紀～18世紀
8	陶器 淡灰色蓋	S D21-28 覆土	口径9.2 底径5.2 器高1.2	夾雑物なし。 淡黄灰色。釉は淡灰色。	蓋片であり、摘み部は欠失している。表面に梅・松の意匠が鉄絵で描かれ志野釉が施されている。裏面は露胎となる。受け部分は削り出し。	美濃 17世紀前半
9	陶器 淡灰色皿	S D21-26 覆土	底径9.6 高台部	気泡を含む。 淡黄灰色。釉は淡灰色。	皿の高台部片である。内面に鉄絵が描かれ志野釉が表裏に施される。高台は削り出し。	美濃 16世紀後半
10	陶器 淡褐色鉢	S D32-7 覆土	口径20.6 口縁部	夾雑物なし。 灰色。釉は淡褐色。	鉢の口縁部の内外面に灰釉が施釉されている。内面口縁端部はやや尖るが、外面側は丸味をおびる。	不詳 18世紀～19世紀
11	磁器 染め付け碗	S D23-9 覆土	底部～体部	夾雑物B。淡灰色。釉は淡緑色。	碗の底から体部にかけての破片。呉須により梅樹文が染めつけされる。白磁釉は青磁色をややおび、呉須は淡い青色をおびる。	伊万里 18世紀前半
12	磁器 染めつけ小坏	S D21-27 覆土	口縁部	夾雑物なし。 白色。	小坏の口縁部片。内外に透明釉が掛けられる。外面に樹花と思われる意匠が染め付けされる。呉須は濃い青色を呈し、精製呉須である。	伊万里 19世紀
13	磁器 染めつけ小碗	S D37 覆土	高台部～体部	夾雑物なし。 白色。	小碗の高台部片である。内面中央に花文、体部に2条の圏線、外面に3条の圏線が染めつけされる。	伊万里 18世紀後半
14	陶器 淡褐色皿	95H-09	高台径10.2 高台部～体部	白色磁物B 暗褐色、白色 淡褐色。	尺皿の底部片である。内面に淡褐釉と白土掛けされ、三島手を呈す。外面は高台端部を除き、淡褐釉が施釉されている。	唐津系 17世紀～18世紀
15	陶器 淡褐色皿	S D23-10 覆土	口縁部	白色磁物B 暗褐色、白色 淡褐色。	尺皿の口縁部片である。内面に剣頭文が印文され白土が入る。その上に淡褐釉が外面にも及ぶ。	唐津系 17世紀～18世紀

2 軟質陶器・土師質土器

1 軟質陶器、土師質土器の選択について

軟質陶器の接合後の総個体数は272片であった。これらは調査区内から出土したものを主体とし、排土中の表採資料も含んでいる。その製作年代幅は、鎌倉時代から焙烙と称された近世までの長きに亘っている。

土師質土器の接合後の総個体数は48片であった。これらは軟質陶器と同様に排土中の表採資料を含んでいる。その製作年代は中世に限定される。

これらの破片すべてを掲載することは紙面と整理の都合上できず、軟質陶器は全体の26%に当たる71点を、土師質土器は77%に当たる37点を扱った。軟質陶器は遺構外を2点掲載したが、他は遺構覆土⁽¹⁶⁾からの出土である。選択方法は火鉢は体部・底部を除き、有孔の盤形火鉢および鉢は口縁部の総てと、鉢の底部遺存の良好な例を、内耳鍋は遺構出土のうち口縁部を主体にしたが、量が多いので耳の破片であるとか口縁の小片は除いた。また底部と体部に接する個体のうち大形破片は選んで掲げた。軟質陶器に限ってみれば中世の各時代の消長が反映するように作意したつもりである。

土師質土器は墓址に伴う例は総てを、遺構に伴う例は口縁部を残存するものを限定して掲げた。したがって中世の消長は反映されているものと考えられる。

2 観察について

観察については、前節の陶・磁器とほぼ同じ内容であるが、異なる点を加えると、焼物種名称の「軟質陶器」⁽¹⁷⁾に関しては1980年に提唱したのでそれを参照されたい。土師質土器については中世においては「土器」と書いてかわらけと訓じ、⁽¹⁸⁾基本的には皿形の器種ばかりでなく焼物種名称を指し、現代に至っては皿形の器種のみをかわらけと呼び、器種を呼称するうえで語義を忘れた明らかな誤解が生じている。ここでは従来の先学が用いたとおり、見た目が古代の土師器とほぼ同様の焼物質という意味で土師質土器という名称を用いた。土師器とは歴史的意味合いが異なる。胎土・色調・焼成の項は、胎土は主に夾雑物を観察し、焼成は基調をなす胎土の色調をとらえた。

3 観察の結果について

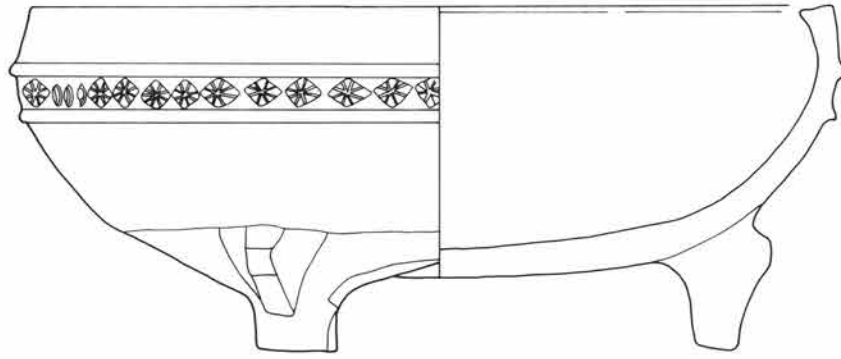
軟質陶器は3を除く70点、土師質土器は総てが中世の所産であるが、軟質陶器・土師質土器の地域における編年観が確立していないので便宜的に作成した第2図、および1981年に作成した軟質陶器⁽¹⁹⁾の変遷観、1981年に作成した土師質土器皿⁽²⁰⁾の変遷観を用いて製作年代を推定したい。第2図の序列については1981年に作成した軟質陶器の変遷観を基に新資料を追加したもので、基本的には変わっていないが、年代の拠所や区分根拠がやや明確になってきているので近年中に稿を改めたい。

軟質陶器

軟質陶器の器種には火鉢・盤形火鉢・鉢・内耳鍋が存在する。

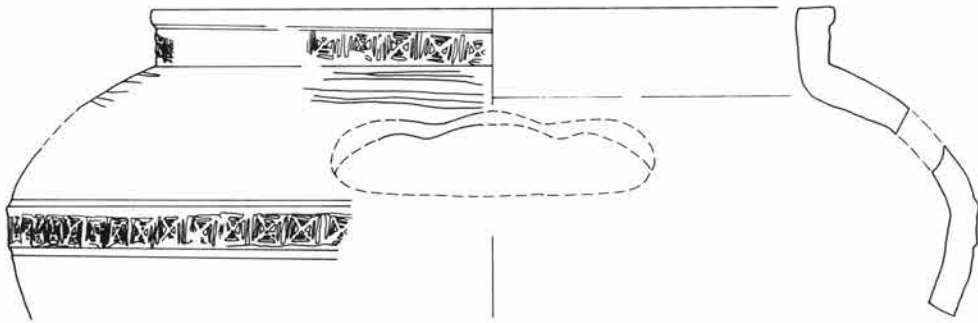
13世紀代は地域における鎌倉時代の遺構確認が困難なため、実態把握がなされていない。このため実態の知れる14世紀からの類推によって、鉢類の8・19・21・23・32の存在が類推される。特に印花文装飾帯を除く印花の盛行は器種の組合わせ観から14世紀以前に盛期があると捉えることができ、8の鉢などはその好例である。

第4章 調査成果



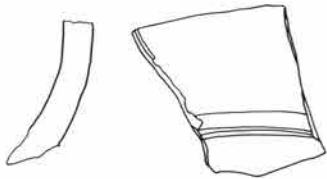
S D118-17

1



S D118-16

2



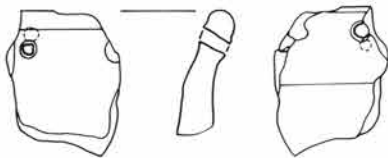
127-I 20

3



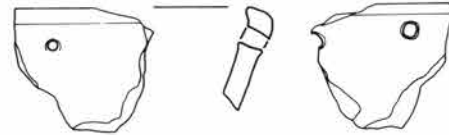
91G-44

4



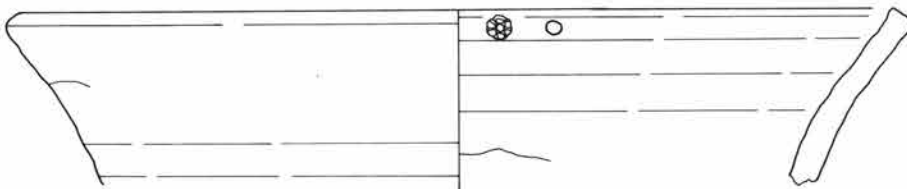
S E36-5

5



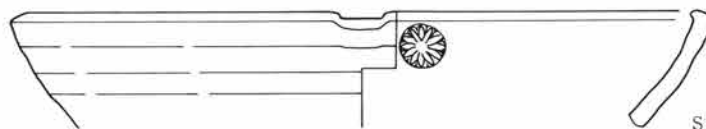
S E36-4

6



S D12-5

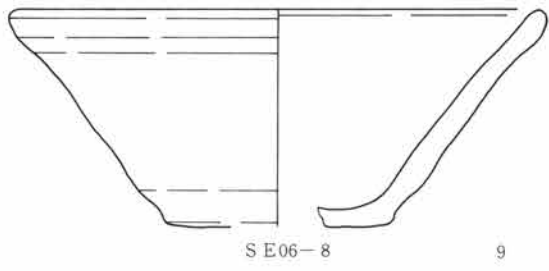
7



S E18-1

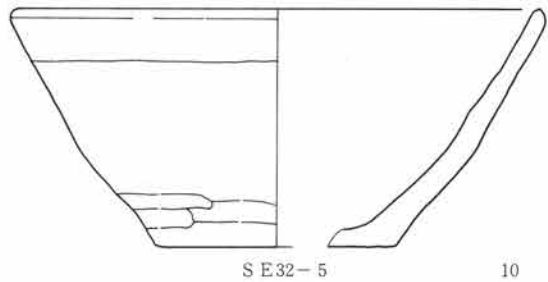
8

軟質陶器 火鉢



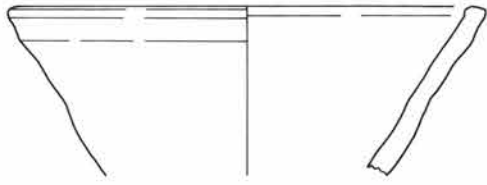
S E06-8

9



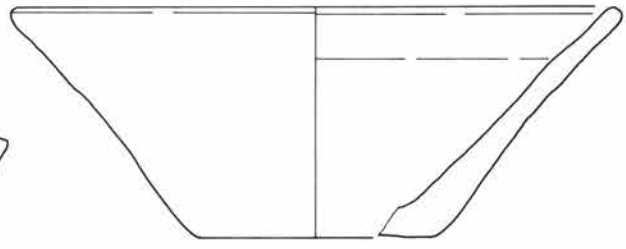
S E32-5

10



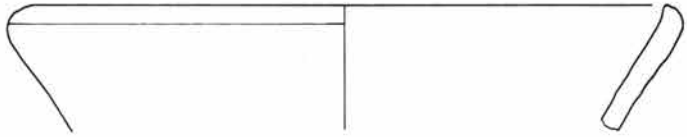
S E06-9

11



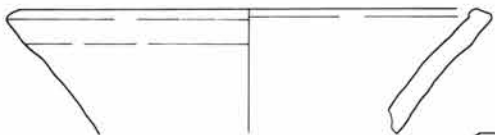
S E09-2

12



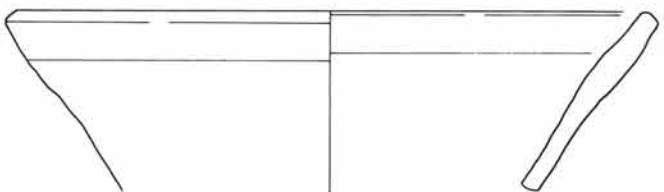
S E18-2

13



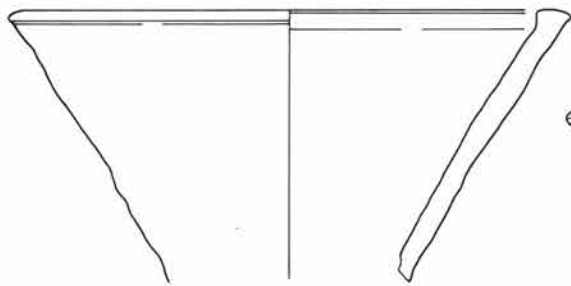
S E06-10

14



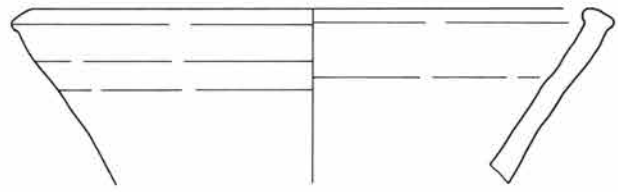
S E31-1

15



S E36-1

16

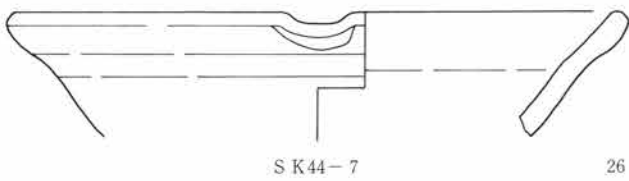
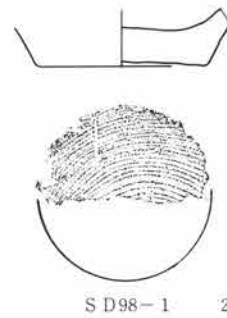
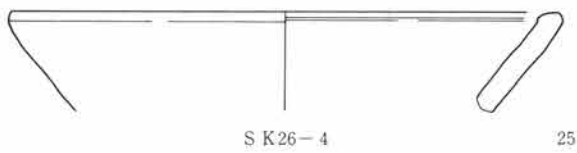
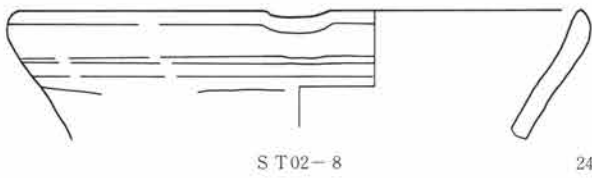
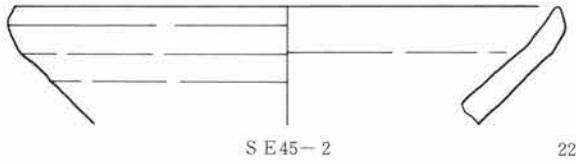
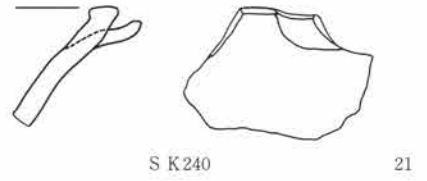
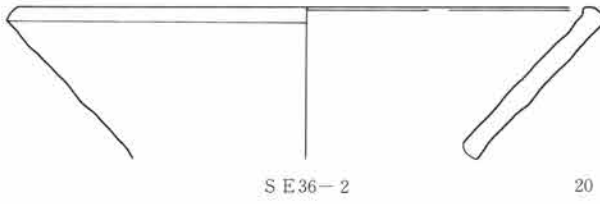
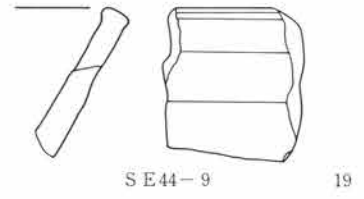
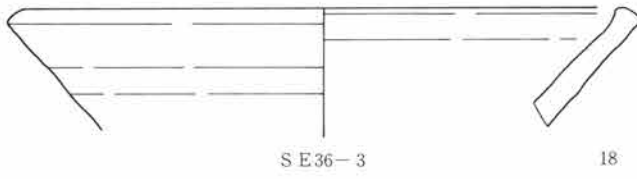


S E12-4

17

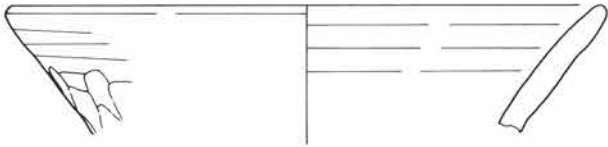
軟質陶磁器 鉢 (1)

第4章 調査成果



軟質陶器 鉢 (2)

第4節 中世土・陶・磁器



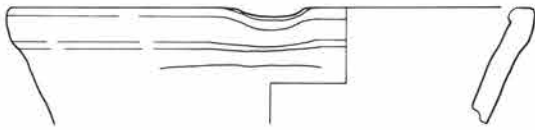
S D12-16

28



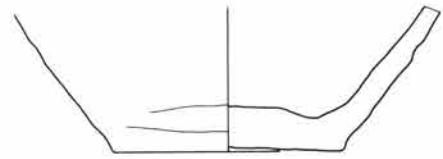
S D120-4

29



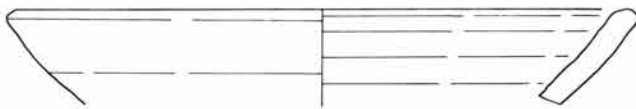
S D23-13

30



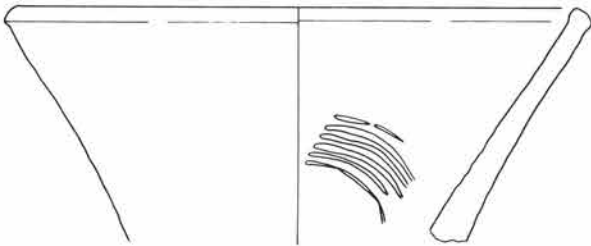
S D118-20

31



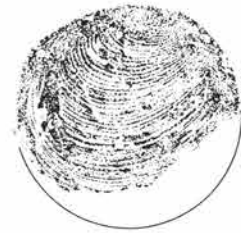
S D118-19

32



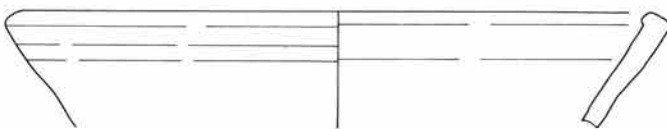
S D118-18

33



S D118-21

34



116 I -00

35

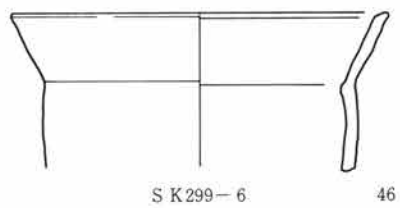
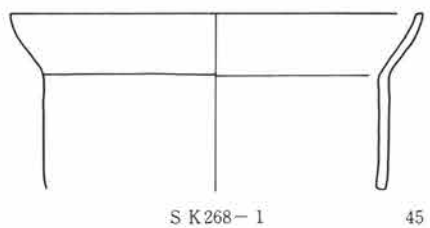
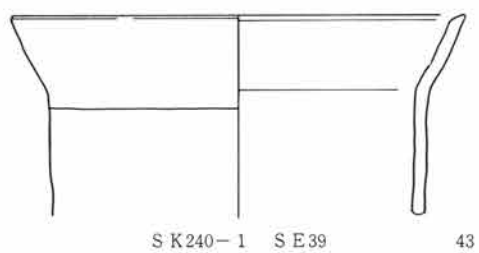
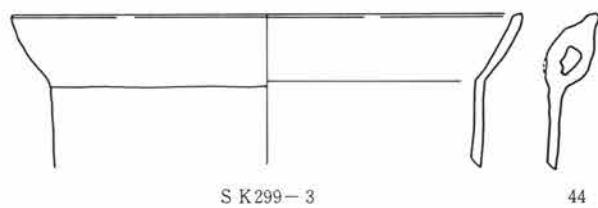
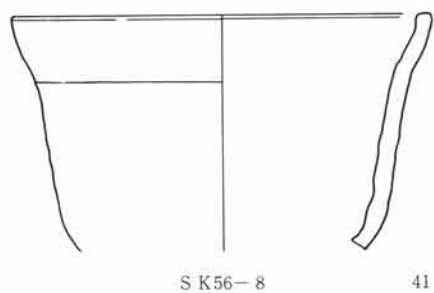
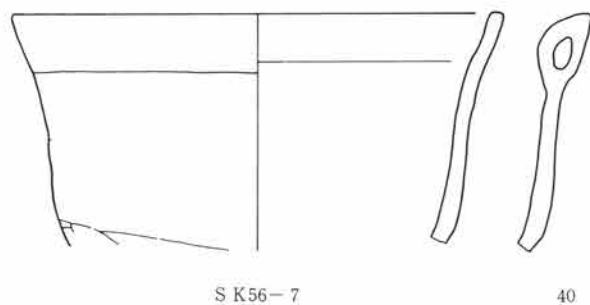
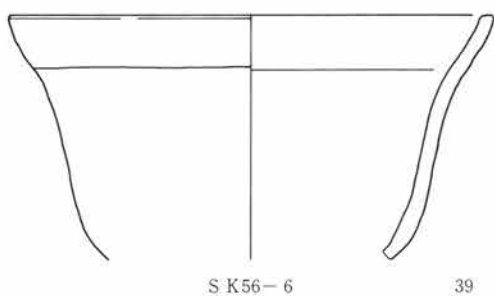
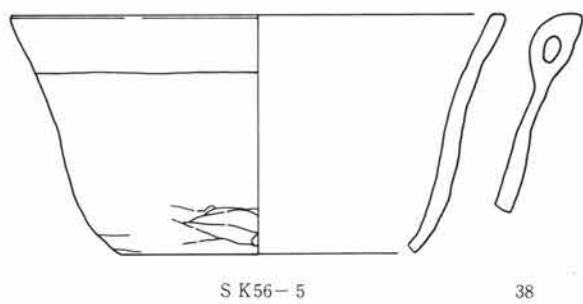
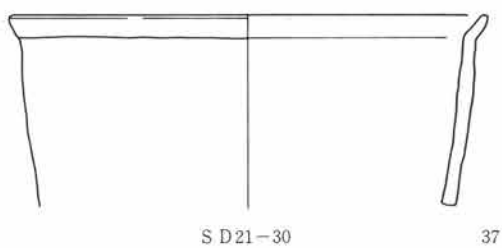


123 I -05

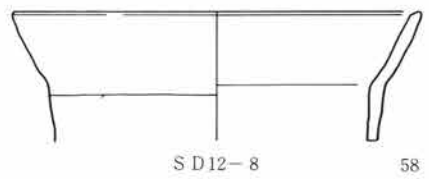
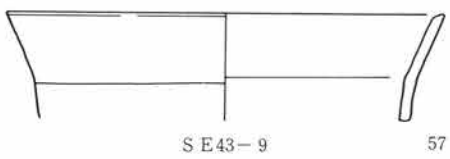
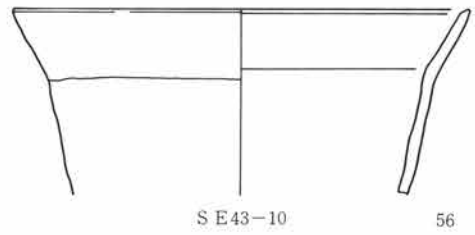
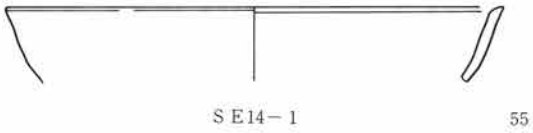
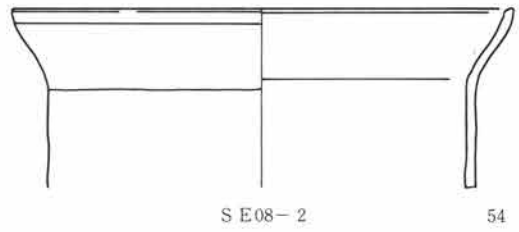
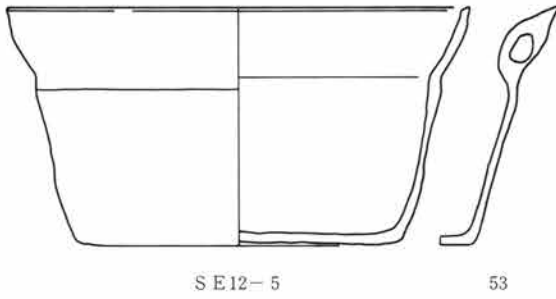
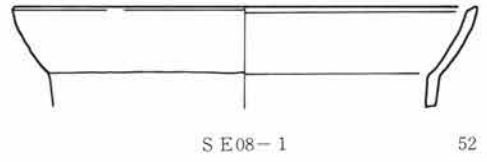
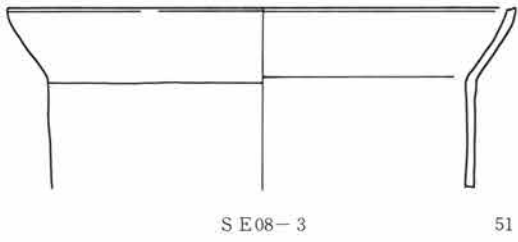
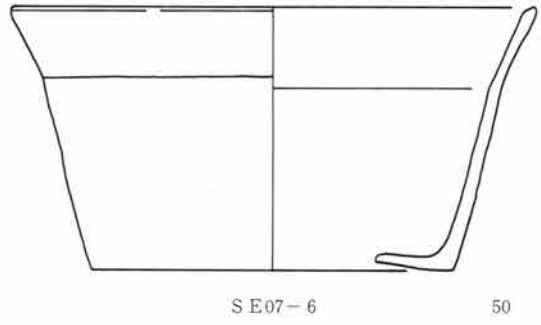
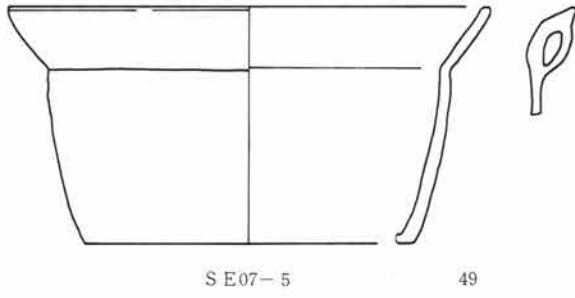
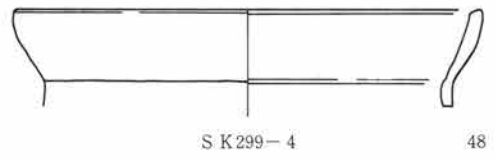
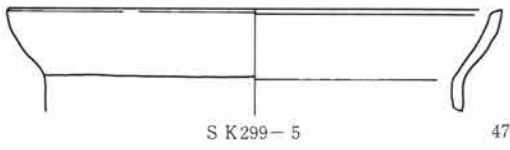
36

軟質陶器 鉢 (3)

第4章 調査成果

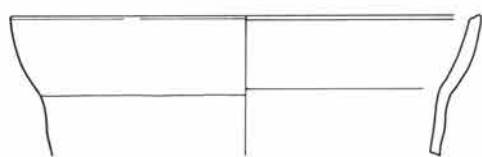


軟質陶磁器 内耳鍋形 (1)



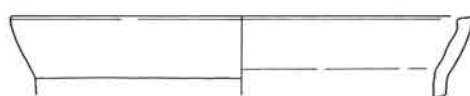
軟質陶器 内耳鍋形(2)

第4章 調査成果



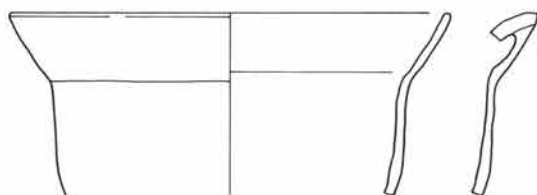
S D21-29

59



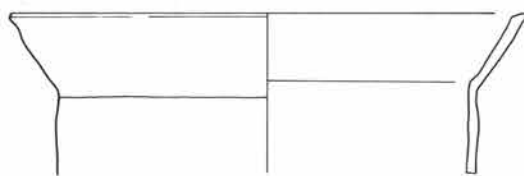
S D98-2

60



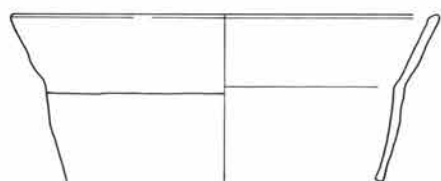
S D118-26

61



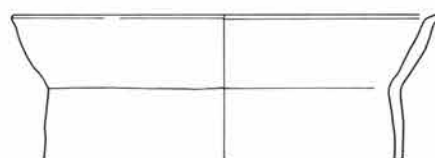
S D118-23

62



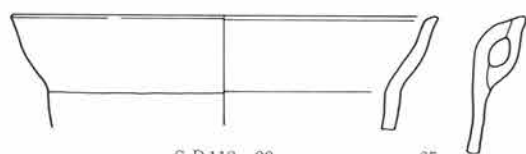
S D118-25

63



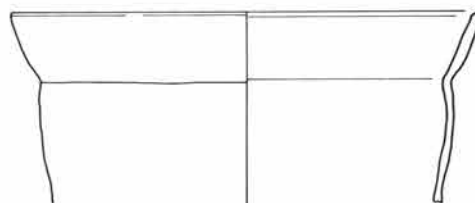
S D118-27

64



S D118-22

65



82-G30

66



S D118-24

67



82-G30

68

軟質陶器 内耳鍋形 (3)

第4節 中世土・陶・磁器

No	土器種	出土位置	量 目 cm	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
1	火鉢 軟質陶器	S D118-17 覆土	口径42.8 高 18.2	褐色多。白色鉱物粒微。並。褐色。	鉢形三つ足火鉢片。39片で半個体。足1残存。内面、撫痕明瞭。外面は篋研磨、体部に隆線2条に挟まれて菱形印文13個乳頭文3個一単位の施文あり。全体に回転台の回転の利き弱し。酸化気味で若干、燻かかる。	在地 14世紀
2	火鉢 軟質陶器	S D118-16	口径36.4	赤褐色多。砂質含。並。褐色。	壺形火鉢の口縁から体部片である。口縁、平縁内面に撫痕あり。外面は篋研磨痕が発達し、口縁部下体部に10+αの変形雷文帯あり。体部上方に引手穴あり。酸化気味で若干、燻かかる。	在地 14世紀
3	火鉢 軟質陶器	127 I-20		白色微。砂無し。並。暗灰色。	火鉢と考えられる個体の体部下半片である。外面には、菱形印文を全面的に施す。内面に撫であり。還元気味で燻が及ぶ。	在地 近世
4	火鉢 軟質陶器	91G-44	底径24.4	褐色微。砂無し。金雲母微粒含。並。褐色。	火鉢の底部片である。底と体部、立ち上がり一条の隆線あり。内面は一方の指撫、板状圧痕あり。体部外面はヘラ削り。酸化気味で、稀かに燻かかる。	在地 14世紀
5	火鉢 軟質陶器	S E36-5 覆土		褐色微。砂無し。軟。褐色。	盤形火鉢の口縁部片である。口縁下に紐通しの小穴2個あり。口縁部の内外面に横撫あり。酸化気味で若干燻かかる。	在地 14世紀
6	火鉢 軟質陶器	S E36-4		褐色含。砂質微。軟。褐色。	盤形火鉢の口縁部片である。口縁部下に2穴の紐通し穴あり。内面は横撫、外面はハゼの為剥落。酸化気味で若干燻かかる。	在地 14世紀
7	火鉢 軟質陶器	S D12-5 覆土	口径48.0	褐色含。砂質微。並。褐色。	盤形火鉢の口縁部片から体部片である。口縁部に紐通し穴が1穴みられるが白色粘土で外方から埋め込まれている。穴に近接して6弁の印花文あり。内面に撫で成形。体部外面下方は回転ヘラ削り。酸化気味で若干燻かかる。	在地 14世紀
8	鉢 軟質陶器	S E18-1 覆土	口径37.2	褐色含。砂質微。並。褐色。	片口鉢の口縁部から体部片である。口縁部外面及び内面に横撫あり。片口部際12弁を単位とする印花文あり。酸化気味で燻かかり吸炭する。	在地 13世紀後半 ~14世紀前半
9	鉢 軟質陶器	S E06-8 覆土	口径28.0 底径12.0 器高11.2	褐色多。砂無し。並。褐色。	播鉢の3分の1個体片である。内面に使用の磨耗あり。口縁部内面に擦痕あり。口縁部の内外面は横撫。体部に指の圧痕。体部下外面に、横撫痕あり。底面に糸切り痕あり。酸化気味で燻かかり吸炭している。	在地 14世紀
10	鉢 軟質陶器	S E32-5 覆土	口径28.0 底径12.8 器高12.4	褐色多。砂無し。並。褐色。	播鉢の4分の1個体である。内面に磨耗痕あり。口縁部の内外面は横撫。体部に指の圧痕。体部下方に横撫あり。底面は糸切り。酸化気味で燻により吸炭されている。	在地 14世紀
11	鉢 軟質陶器	S E06-9 覆土	口径25.6	黒色含。砂無し。硬。黒灰色。	播鉢の口縁から体部片である。内面に擦痕は、ほとんどみられない。口縁部及び内面は横撫。外面体部外半に指の圧痕あり。還元気味で燻及ぶ。	在地 14世紀
12	鉢 軟質陶器	S E09-2 覆土	口径32.0 底径12.8 器高12.2	黒色微。砂無し。並。灰色。	播鉢の5分の1個体である。内面と外面の底部に擦痕あり。口縁部の内外面に横撫あり。還元気味で燻及ぶ。外面体部外半に指の圧痕あり。	在地 14世紀
13	鉢 軟質陶器	S E18-2 覆土	口径36.0	褐色微。砂無し。並。灰色。	播鉢の口縁部片で片口部分が遺存。内面に稀か擦痕がみられる。口縁部の内外面は横撫。外面体部上方に刷毛目の成形痕あり。その下方に横撫痕あり。やや酸化し外面に燻がかかる。	在地 14世紀
14	鉢 軟質陶器	S E06-10 覆土	口径26.0	黒色微。砂無し。硬。黒灰色。	播鉢の口縁部片である。内面に擦痕あり。口縁部の内外面は横撫、体部外面上方に撫で成形痕あり。還元気味で吸炭する。	在地 14世紀

第4章 調査成果

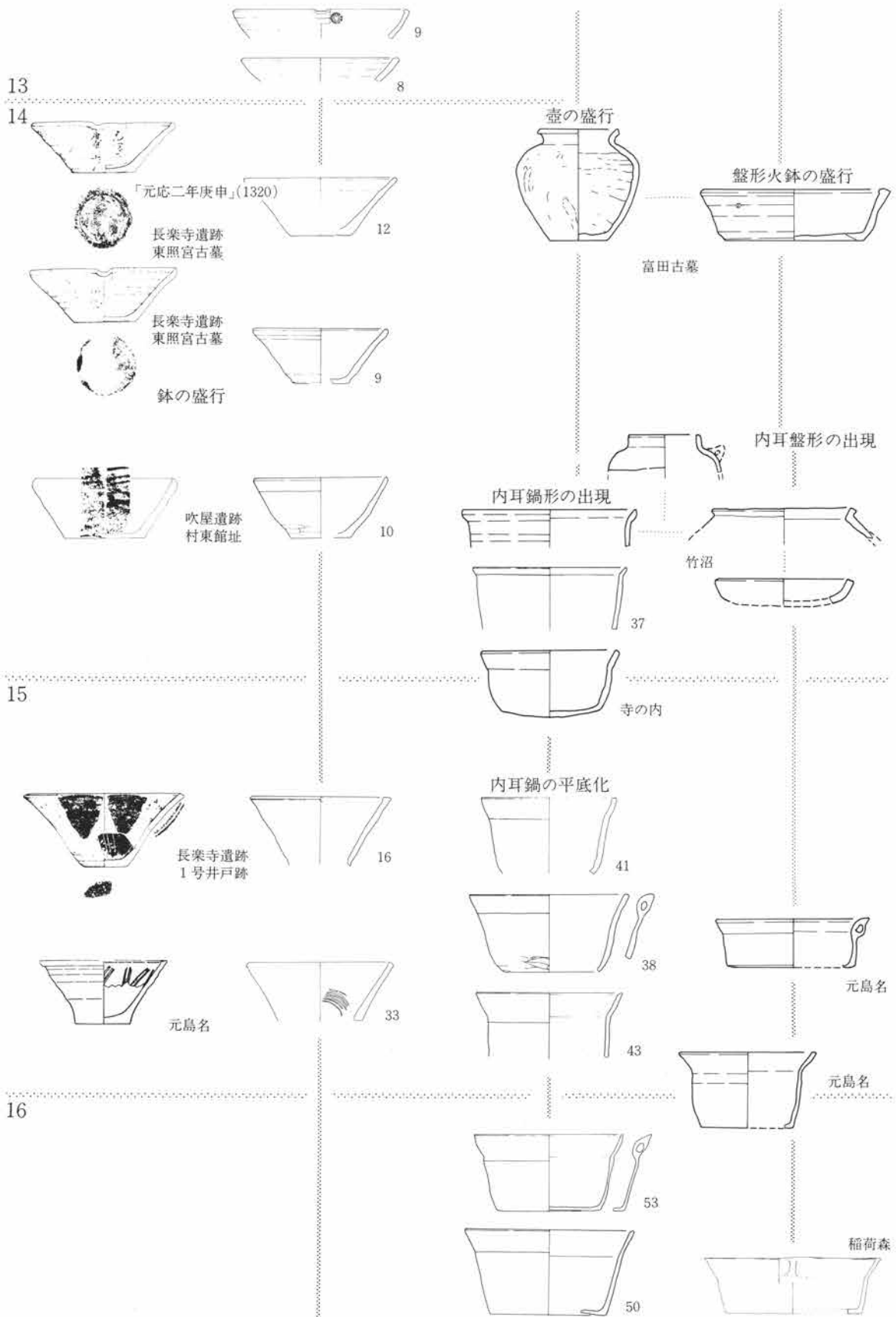
No	土器種	出土位置	量 目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
15	鉢 軟質陶器	S E 31-1 覆土	口径34.8	褐色微。砂無し。 並。暗褐色。	擂鉢の口縁から体部片である。内面に使用の擦痕。口縁部横撫あり。体部外面に指の圧痕あり。やや酸化気味で吸炭あり。	在地 14世紀
16	鉢 軟質陶器	S E 36-1 覆土	口径30.0	褐色含。砂無し。 並。褐色。	鉢の口縁から体部片である。内面に磨耗痕あり。口縁部の内外面は横撫。体部外面に指の圧痕あり。やや酸化気味で外面のみ吸炭する。	在地 15世紀
17	鉢 軟質陶器	S E 12-4 覆土	口径32.0	黒色含。砂微。 硬。灰色。	擂鉢の口部片で片口部が稀かに残る。内面に使用の磨耗稀かにあり。口縁部の周辺は横撫で、外面体部下半に指の圧痕と撫であり。還元気味である。	在地 14世紀
18	鉢 軟質陶器	S E 36-3 覆土	口径33.6	褐色多。砂無し。 並。暗褐色。	擂鉢の口縁部片である。内面に使用の擦痕稀かにあり。内外面に横撫あり。外面体部下半に指の圧痕あり。酸化気味で燻の吸炭が及ぶ。	在地 14世紀
19	鉢 軟質陶器	S E 44-9 覆土		黒色含。砂質微。 並。淡褐色。	擂鉢の口縁部片である。内面に横撫、外面上半に横撫痕あり。体部外面上方に明瞭な指頭圧痕あり。還元気味であり燻弱い。	在地 14世紀
20	鉢 軟質陶器	S E 36-2 覆土	口径32.0	褐色多。砂無し。 並。褐色。	擂鉢の口縁部から体部片。内面に使用の擦痕あり。内面及び口縁部に横撫あり。体部外面上方に指の圧痕あり。酸化気味で燻の吸炭あり。	在地 14世紀
21	鉢 軟質陶器	S K 240 覆土		黒色含。砂無し。 硬。黒灰色。	擂鉢の口縁部片で、片口部分を半分だけ残す。片口部は押し出し、内面に横撫、体部外面に横撫、体部外面上方に指による擦痕あり。還元気味である。	在地 14世紀
22	鉢 軟質陶器	S E 45-2 覆土	口径29.2	黒色微。砂無し。 並。灰色。	擂鉢の口縁部片である。内面に擦痕あり。内面及び外面上方に撫で痕あり。口縁部外面に回転へら削りあり。体部外面上方に手掌痕あり。還元気味である。	在地 14世紀
23	鉢 軟質陶器	S D 12-7 覆土	底径14.0	黒色含。砂微。 硬。赤褐色。	鉢の底部と体部片である。内面に擦痕あり。外面体部下半に横撫、指の圧痕あり。底面に糸切あり。酸化気味で、内面のみ吸炭する。外面体部上半に煤付着。	在地 14～15世紀
24	鉢 軟質陶器	S T 02-8 覆土	口径30.0	褐色含。砂無し。 軟。褐色。	擂鉢の口縁部片で、片口が設けられる。片口は指の押し出しによる。内面に擦痕あり。口縁部の内外面に横撫あり。外面体部上半に指による圧痕あり。酸化気味で燻による吸炭あり。	在地 14世紀
25	鉢 軟質陶器	S K 26-4 覆土	口径29.2	黒色微。砂無し。 並。灰色。	擂鉢の口縁部片である。口縁部に磨耗あり。口縁部外面側にわずかに横撫あり。体部外面上方に指の圧痕あり。還元気味でわずかに燻及ぶ。	在地 14世紀
26	鉢 軟質陶器	S K 44-7 覆土	口径32.0	褐色含。砂無し。 硬。褐色。	擂鉢の口縁部片で、片口部が遺存する。片口部は、指の押し出しによる。口縁部の内外面に横撫あり。体部外面に指の圧痕あり。内面上方に手・指などによる擦痕あり。酸化気味でやや燻が及ぶ。	在地 14世紀
27	鉢 軟質陶器	S D 98-1 覆土	底径9.2	褐色多。砂微。 並。褐色。	擂鉢の底部片である。内面に顕著な擦痕あり。体部外面は、篋による削りが若干施されて部分的に指の圧痕あり。酸化気味で燻がやや及ぶ。	在地 14～15世紀
28	鉢 軟質陶器	S D 12-6 覆土	口径31.2	褐色多。砂微。 並。褐色。	擂鉢の口縁部片である。内面に使用による擦痕あり。口縁部の内外面に横撫あり。体部外面上方に指の擦痕と圧痕あり。酸化気味。	在地 14世紀

第4節 中世土・陶・磁器

No	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
29	鉢 軟質陶器	S D120-4 覆土	底径13.6	黒色微。砂無。 軟。灰色。	摺鉢の体部下方片である。内面に使用の擦痕あり。外面に指による圧痕と、撫痕あり。底部に糸切り痕あり。	在地 13・14世紀
30	鉢 軟質陶器	S D23-13 覆土	口径28.0	赤色微。砂無。 並。褐色。	摺鉢の口縁部片で片口が設けられる。片口は指による押し。内面に使用の擦痕あり。口縁部の内外面に横撫あり。体部上方に指の圧痕あり。酸化気味で、内面のみ燻が及ぶ。	在地 14世紀後半
31	鉢 軟質陶器	S D118-20 覆土	底径12.2	黒色含。砂無。 並。灰色。	摺鉢の底部から体部片である。内面に使用による磨耗あり。体部外面に指の圧痕あり。下方に篋削りあり。底面は糸切。還元気味で、わずかに燻が及ぶ。底部に煤付着。	在地 13・14世紀
32	鉢 軟質陶器	S D118-19 覆土	口径32.8	黒色微。砂含。 並。炭褐色。	摺鉢の口縁部片である。口縁端部は使用により磨耗。内面に横撫あり。外面は上方が横撫、下方に指の圧痕あり。酸化気味で、若干の燻がかかる。外面に煤付着	在地 13世紀後半 14世紀前半
33	鉢 軟質陶器	S D118-18 覆土	口径30.0	褐色含。砂微。 並。褐色。	摺鉢の口縁片から体部である。内面に六条の荒い卸目があり、磨耗している。口縁部にも磨耗あり。口縁部周辺に横撫であり。体部外面上方は、指による圧痕と撫痕あり。酸化気味で、燻が及ぶ。	在地 15世紀前半
34	鉢 軟質陶器	S D118-21 覆土	底径12.0	黒色多。砂無。 並。暗褐色。	摺鉢の底部片である。内面に使用による磨耗あり。体部外面に指による圧痕と撫がある。底面は糸切、還元気味で、燻が及ぶ。	在地 13・14世紀
35	鉢 軟質陶器	グリッド 116 I-00	口径33.6	褐色微。砂含。 軟。褐色。	摺鉢の口縁部片である。口縁端部に使用の磨耗あり。内面及び外面口縁部下に横撫あり。外面体部上半に、指による圧痕あり、酸化還元気味である。	在地 14世紀
36	鉢 軟質陶器	123 I-05	底径12.0	黒色含。砂含。 並。灰色。	摺鉢の底部片である。内面に使用による磨耗あり。体部外面は篋削と指撫がある。底面に糸切りあり。	在地 14・15世紀
37	内耳鍋 軟質陶器	S D21-30 覆土	口径32.0	褐色含。砂無。 並。灰色。	古風な内耳鍋の口縁部片である。口縁端部は隅丸平縁口縁端部と内面折り口部に磨耗あり。内面は横撫、外面体部上方は横撫が、下方に指の圧痕が見られる。	在地 14世紀後半
38	内耳鍋 軟質陶器	S K56-5 覆土	口径33.0	黒色少。砂含。 硬。灰色。	18片からなる $\frac{2}{3}$ 個体の内耳鍋である。口縁は平縁でやや丸みを帯びる。底面は平底気味である。底部下半に篋削目あり。	15世紀前半
39	内耳鍋 軟質陶器	S K56-6 覆土	口径32.5	黒色多。砂無。 硬。灰色。	五片からなる丸底の内耳鍋片である。口縁端部は平縁。全体的に肉厚で、小型である。内面に横撫、外面の最下部に篋削、それより上方に指の圧痕。口縁部内黒、口縁部下に横撫あり。口縁部は平縁。還元気味で全体に燻が及ぶ。	在地 15世紀前半
40	内耳鍋 軟質陶器	S K56-7 覆土	口径32.5	黒色多。砂含。 硬。灰色。	五片からなる $\frac{1}{2}$ 個体の内耳鍋である。口縁部は平縁で全体的に肉厚である。体部下半に篋削があり底に接する部分が丸みを帯びる。	15世紀前半
41	内耳鍋 軟質陶器	S K56-8 覆土	口径28.0	黒色含。砂微。 並。灰色。	底部丸底の内耳鍋口縁部から体部片である。口縁部は平縁となり、端折れは短く元に凹みあり。内面に横撫痕があり、外面体部最下端に篋削目あり。体部に手の擦痕と指の圧痕あり。口縁部周辺は横撫。還元気味で若干燻が及ぶ、外面に煤付着。	在地 15世紀前半
43	内耳鍋 軟質陶器	S K240-1 S E39 覆土	口径30.0	黒色含。砂微。 並。灰色	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁部はやや内斜する。内面及び口縁部周辺は横撫。体部外面には指による擦痕と圧痕あり。酸化気味で若干燻がおよび外面が煤ける。S E39が5片、S K240が4片。	在地 15世紀後半 ～ 16世紀

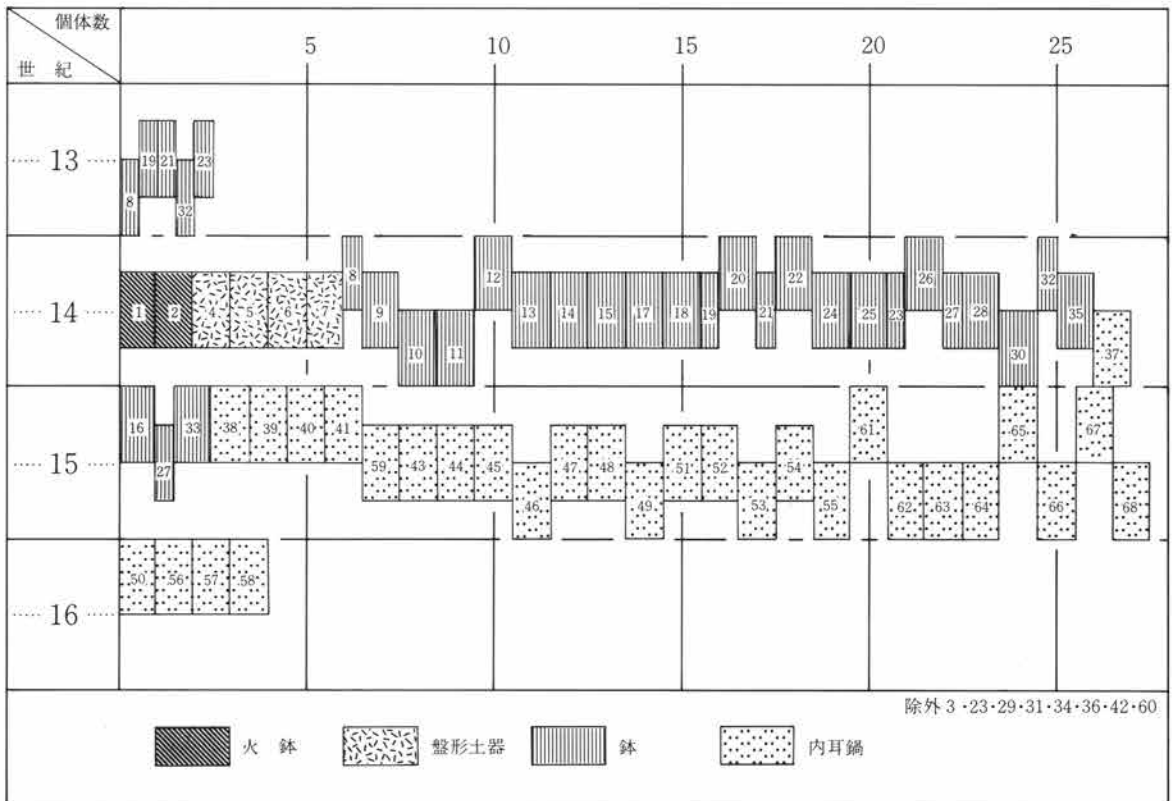
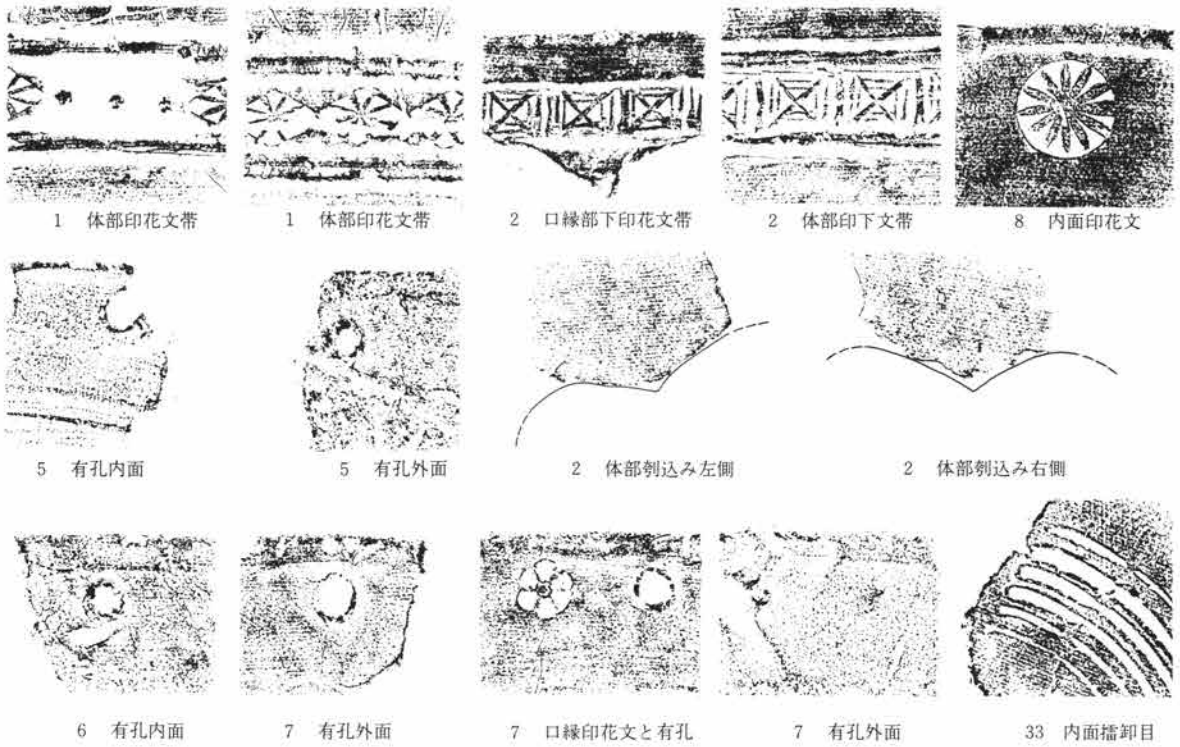
第4章 調査成果

No	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特徴	適要
44	内耳鍋 軟質陶器	S K 299— 3 覆土	口径34.0	黒色含。砂無。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部と体部片である。口縁端部は平縁一耳が付く。内面と口縁部周辺は横撫。体部外面は手による撫と指の圧痕あり。	在地 15世紀
45	内耳鍋 軟質陶器	S K 268— 1 覆土	口径27.5	褐色微。砂含。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁端部は平縁となる。内面と口縁部周辺は横撫。外面体部は毘当てと手・指による擦痕あり。酸化気味で燻がかかり外面に煤付着。	在地 15世紀
46	内耳鍋 軟質陶器	S K 299— 6 覆土	口径25.0	褐色微。砂含。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁部はやや内斜。端折れ元に段あり。内面及び口縁部周辺は横撫。体部外面に指による擦痕と指の圧痕あり。酸化気味で燻が及ぶ。	在地 15世紀後半
47	内耳鍋 軟質陶器	S K 299— 5 覆土	口径33.0	褐色含。砂含。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部片である。口縁端部は内斜。内外面は横撫。僅かに残る体部外面に手の擦痕が見られる。酸化気味で燻がかかり外面に煤付着。	在地 15世紀
48	内耳鍋 軟質陶器	S K 299— 4 覆土	口径31.0	褐色微。砂無。 並。褐色。	内耳鍋の口縁片である。口縁端部はやや内斜。内外面は横撫。酸化気味で燻がかかり煤付着。	在地 15世紀
49	内耳鍋 軟質陶器	S E 07—5 覆土	口径32.0 底径22.0 器高15.5	褐色微。砂無。 軟。褐色。	％個体の内耳鍋片で、一耳一対の内耳が設けられる。口縁端部は平縁。端折元に段わずあり。内面に撫。外面に撫と指の圧痕が残り、部分的に紐作痕が見られる。底面は平底で石の目状の微凸凹がある。酸化気味で、外面のみ煤け、内面に燻が及ぶ。	在地 15世紀後半
50	内耳鍋 軟質陶器	S E 07—6 覆土	口径35.0 底径24.0 器高17.2	褐色微。砂無。 軟。褐色。	5片からなる内耳鍋で、口縁部は平縁となり、体部は直線的である。底部は平底。体部下半に篋削が施される。	在地 16世紀前半
51	内耳鍋 軟質陶器	S E 08—3 覆土	口径33.5	黒色微。砂無。 並。灰色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁端部はわずかに内斜となる。外面口縁部周辺及び内面は横撫。体部外面は手による擦痕と指の圧痕あり。還元気味で燻が及ぶ。	在地 15世紀
52	内耳鍋 軟質陶器	S E 08—1 覆土	口径30.5	褐色含。砂含。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部片である。口縁端部は平縁。端折れ元に段あり。内外面横撫あり。酸化気味で若干燻がおよぶ。	在地 15世紀
53	内耳鍋 軟質陶器	S E 12—5 覆土	口径30.7 底径21.5 器高15.7	褐色含。砂無。 並。褐色。	％個体の内耳鍋片で、一耳一対の内耳が設けられる。口縁端部は平縁。端折元に段あり。内面に撫、外面に撫と指の圧痕が残り、部分的に紐作痕が見られる。底面は平底で、石の目状の微凸凹がある。酸化気味で、外面のみ煤け内面に燻が及ぶ。	在地 15世紀後半
54	内耳鍋 軟質陶器	S E 08—2 覆土	口径33.0	黒色含。砂含。 並。灰色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁は平縁となる。内部と口縁部周辺外面に横撫あり。体部外面手指による撫痕と指の圧痕あり。還元気味で燻が及ぶ。	在地 15世紀
55	内耳鍋 軟質陶器	S E 14—1 覆土	口径33.0	褐色微。砂無。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部片で、口縁端部は顕著な内斜である。内外面横撫。やや酸化気味で燻がかかり外面に煤がみえる。	在地 15世紀後半
56	内耳鍋 軟質陶器	S E 43—10 覆土	口径30.2	褐色微。砂無。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁部は内斜する。内面と外面口縁部に横撫あり。外面体部下方に篋削と手掌による撫と指の圧痕あり。酸化気味で燻がかかり外面に煤が及ぶ。	在地 16世紀前半
57	内耳鍋 軟質陶器	S E 43—9 覆土	口径29.0	褐色含。砂微。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部片である。口縁端部は内斜。内外面に横撫有り。体部外面に指の圧痕と撫痕あり。酸化気味で燻がかかり煤付着。	在地 16世紀前半



第2図 群馬県における軟質陶器変遷図 1:2

第4章 調査成果



数字は個体番号を示す

第11図 中世軟質陶器の世紀別出土量

14世紀は印花文裝飾帯の盛期であり、1・2火鉢が該当するが、両例ともに印花文の丁寧さや区画隆線の高さなどにおいて後出様相が認められ、14世紀でも後半の所産であろう。さらに1の脚部は脚端の作込が甘く、後出様相である。5・6・7は14世紀に製作主体が置かれる有孔の盤形火鉢で、3点ともに有孔が見られ5・6には2孔一対の吊手孔が残される。7内面には印花文が施されているが、小単位となり13世紀の印花文より後出する。盤形火鉢は時おり外面に火を受けた痕跡が見られ、別機能に用いられた場合もあったと考えられるが、今回の資料中にそうした例は認められなかった。鉢類は新田郡長楽寺遺跡東照宮古墓群から出土した元応二年庚申(1320)墨書銘の鉢、高崎市吹屋遺跡村東館址出土の鉢を14世紀初頭から14世紀後半までの類例としたら、8・9・22・28・30・32・35の計23個体がこの間の形態に含まれる。鉢類の全体に関し、14世紀に大半が集中してしまうのは鉢類の生産状況を反映しているものであるが、後代の内耳鍋は接合率が高く、鉢類の接合率は極めて低いのも両者が異次元に基づくものである点を示唆し、その場合内耳鍋の主体製作期を15世紀に置くならば、鉢の主体製作期を14世紀と見るのも当遺跡の内的傾向から妥当と云える。14世紀後半から内耳鍋が新たな器種として加わり、37の1点だけであるが口縁部から頸部までの立ち上がり極端に短く、15世紀前半の一群と形状を異にする例がある。内耳を付す器種は鍋形ばかりでなく盤形が存在し、当地域における出現は盤形が先行する点がかつて触れたとおりであるが、当遺跡から鍋形に先行する盤形の内耳は出土していない。

15世紀は鉢類の生産が減少し、替って内耳鍋が多用されている。当遺跡においても村東館址例以降に見る深さを増した鉢は16・27・33の3点と少なく、一方で15世紀前半の内耳鍋が7点あり前代より増加している。15世紀における内耳鍋の形態変化は、器肉があり、口縁部立ち上がりの短い38~40などの段階(15世紀前半)、平底化し、口縁部立ち上がりが長くなる59・43~45・47・48・51・52・54などの段階(15世紀中頃)、体部が直線的に外傾し、口縁部立ち上がりも長く、頸部がわずかに頸れる46・55・62・64などの段階(15世紀後半)、46・55・62・64などと同様の特徴を持つが、体部下方に発達した削りを持つ49・53・61・63の一群(15世紀後半)などが15世紀代の総体であり、15世紀の初頭から15世紀後半に至る間の特徴が出揃っている。しかしこの特徴は、前橋・高崎市を中心に確認している特徴であって群馬県下一円に共通するものではない。15世紀代の内耳鍋は計25点を数え、時勢の傾向にも共通している。火鉢・盤形火鉢にも15・16世紀と考えられる例はなく、14・15世紀との間の物質的な転換は別器種からも窺える。

16世紀代は軟質陶器自体の存在が地域でも極端に減少し、内耳鍋が4個体存在するに過ぎない。そのことは17・18世紀の近世遺構に伴い、内耳鍋が高い接合率をもって出土しない点から、内耳鍋の生産は16世紀後半には終了したものと推測され、16世紀に軟質陶器が減少する主因がここにある。

土師質土器

土師質土器は35点を掲げた。35点は形態上15・16世紀の所産であるが、中世後半における世紀毎の土師質土器皿の判別は器形変化が少ないため困難であるので、その前に出土の一括性および他の種との共伴関係について触れておきたい。S Z 10出土2~5、S Z 13出土6~10はそれぞれ墓塚から出土した完器で、一括性は極めて高く共伴関係もよい。S D 28出土の13・14は、S D 28が中世から近世に至るまで使用された溝であるため一括性は薄い。S D 32出土の15・16についても同様である。S D 118出土17~20は出土内耳鍋の下限が15世紀後半にあり、内耳鍋の接合率は低いのである年代幅を持たせたうえで一括性なら認めうる。そうした認め方が必要なのはS D 07出土の22で、S D 07からは接合率の高い内耳鍋が2点出土している。49・50である。49は15世紀後半、50は16世紀前半の所産で双方に年代的なひきがあり、ある程度の幅の中で土師質土器皿23の一括性を考える必要がある。S E 14出土の23についても同様で、同出土の15世紀後半の内耳鍋55

第4章 調査成果

は接合率が低い。共伴関係のうえから一括性が高いと認められるのはS E 43出土の土師質土器皿である。ただし破片個体である24を除く。S E 43からは16世紀前半の内耳鍋56・57があり、56は接合率が高く内耳鍋双方の年代的なひらきも少ないため、皿2点を含めた一括性は高いとしてよいであろう。S K 56出土の27・28も15世紀前半の内耳鍋4点が高い接合率をもって存在し、一括性と共伴関係は良い。

続いて土師質土器皿の年代について触れるが、当遺跡出土の共伴関係から製作年代が類推される例があるので触れたい。まず15世紀前半の例としてS K 56から出土した27・28があり、15世紀前半の内耳鍋を伴っている。15世紀後半の例として同時代所産の内耳鍋を伴いS E 14の23、S D 12の11、S D 118の18～20がある。16世紀前半の例として同時代所産の内耳鍋を伴いS E 07の22、S E 43の25・26の例がある。S E 43の場合、24は破片個体であり形態上からは14世紀末から15世紀前半の所産なので除外される。以上を序列の基本とし出土の土師質土器にあてはめれば製作年代はおおよそ次のとおりとなる。

15世紀前半 1 (S Z 07)、33 (S T 21)、16 (S D 32)、24 (S E 43)、27・28 (S K 56)、35 (82G—30)

15世紀後半 2～5 (S Z 10)、6～10 (S Z 13)、11 (S D 12)、12 (S D 22)、13・14 (S D 28)、15 (S D 32)、17～20 (S D 118)、23 (S E 14)、29 (S K 89)、30 (S K 227)、31 (S K 299)、34 (92G—35)

15世紀後半～16世紀前半 31 (S K 299)、32 (S K 306)

16世紀前半 22 (S E 07)、25・26 (S E 43)

技法については、いくつかの特徴がみられる。

成形技法は、粘土塊からの水挽であったようで、揭示の全個体に糸切痕が見られる。しかし轆轤目が弱い点から見て製作台は自走力の高い轆轤ではなく、回転台が想定される。そのうち底面が欠損したり、摩耗したりして回転方向が不明確な例9点を除くと、左回転が^(93%)26例、右回転^(7%)2例で圧倒的に左回転が多く、15・16世紀土師質土器皿の前橋・高崎地域の傾向に一致している。右回転の2例は15世紀前半の所産で当遺跡では最も古い一群である。

整形段階の技法痕に、板状圧痕・内面の一方向の撫・内面の体部と底部に接する凹みの段などがある。板状圧痕と内面一方向の撫とは、一方向で撫を施す際に板上に置いて整えたために底面に板状圧痕が生ずるとの見解がある。そのことが裏付けられた例はないが板状圧痕は8・24に認められ、8が15世紀後半、24が15世紀前半である。一方向の撫は5・30に見られ、ともに15世紀後半の所産である。内面の体部と底部に接する凹みの段は回転による指おさえの場合と、体部成形の際に生じた場合とがあるが、当遺跡においてはその両者が出土している。この段を持つ例は5・16・26・34などで15世紀前半から16世紀前半までの各時代を通じて存在する。

土師質土器の機能は2・11・12・17・27・29の口縁部に油煙が付着し、灯火皿として機能したと考えられる。またS Z 07、S Z 10、S Z 13から出土した計10点は墓塚からの出土であり、送葬儀礼に供した土器群である。このうちS Z 10から出土した2・3は油煙が付着し、さらに儀礼時か儀礼前に灯火皿として機能した時点があったものと考えられる。

4 軟質陶器と土師質土器から見た遺跡の消長

当遺跡の中世遺構の性格付けは、遺構様相・時期が単一でないため理解しがたい側面をもっている。本項は整理担当から軟質陶器と土師質土器のアプローチをもって、特に中世における性格付に寄与せよとの申し入れがあったのでそれを目的とし以下に触れたい。

第4節 中世土・陶・磁器

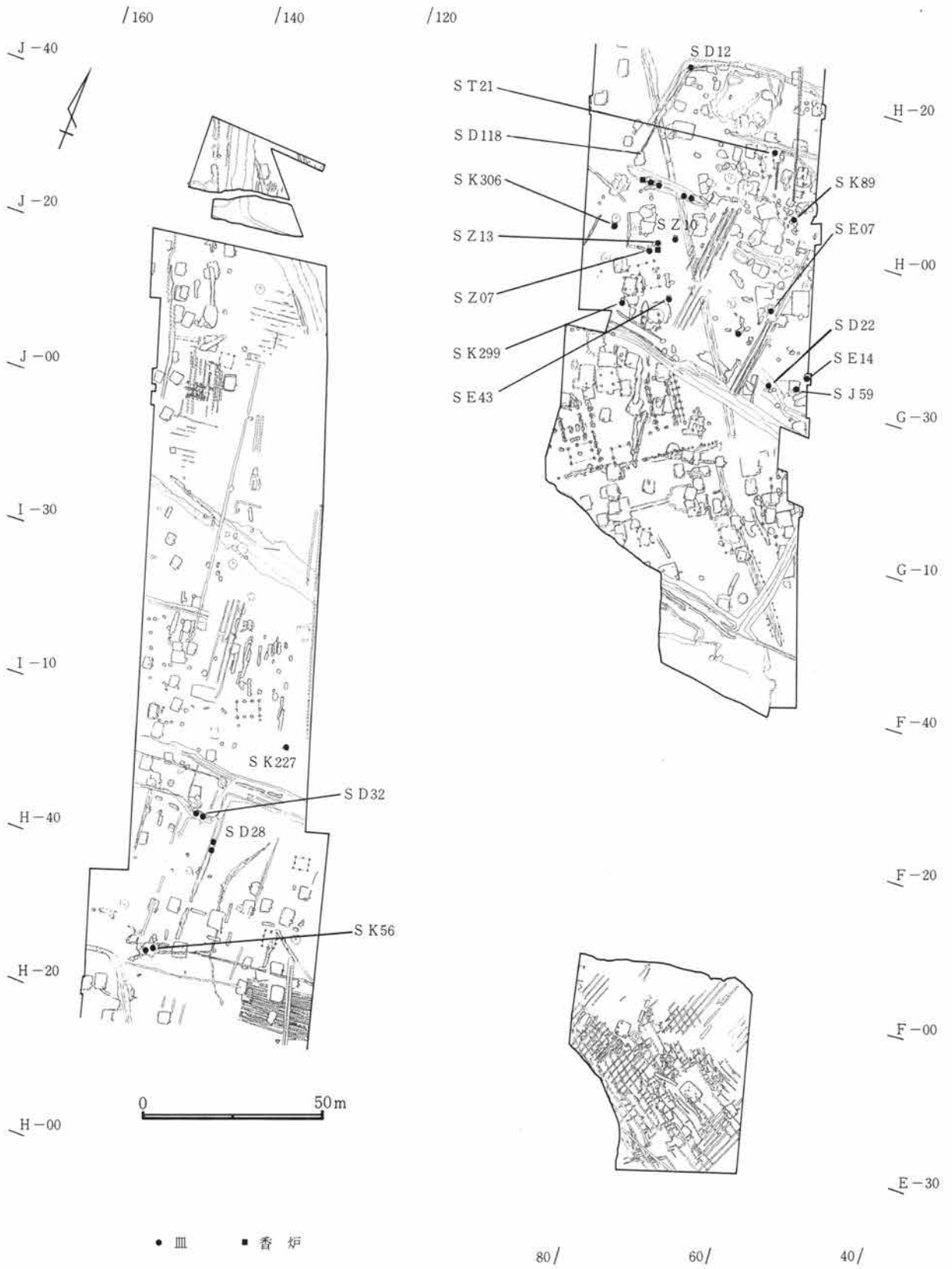
No	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
58	内耳鍋 軟質陶器	S D12-8 覆土	口径27.0	褐色含。砂微。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部片である。口縁端部は内斜。内外面に横撫痕あり。酸化気味でやや燻及ぶ。	在地 16世紀前半
59	内耳鍋 軟質陶器	S D21-29 覆土	口径31.0	褐色含。砂微。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部片である。口縁部は内斜気味となる。内外面に横撫痕あり。外面体部下半に指の圧痕あり。酸化気味で燻及ぶ。	在地 15世紀
60	内耳鍋 軟質陶器	S D98-2 覆土	口径30.5	褐色微。砂無。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部片である。口縁部は平縁。内外面に横撫痕あり。体部外面下方に擦痕あり。酸化気味で燻がかかり外面に煤及ぶ。	在地 15世紀
61	内耳鍋 軟質陶器	S D118-26 覆土	口径29.0	褐色含。砂含。 並。褐色。	内耳鍋の1/4個体片で底部を欠く。半欠の一耳が付く。口縁は平縁。端折れ元部に段を設ける。外面口縁部周辺から内面にかけて横撫。	在地 15世紀前半
62	内耳鍋 軟質陶器	S D118-23 覆土	口径34.0	褐色微。砂無。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁は平縁となる。口縁部外面と内面に横撫痕あり。外面体部下半に指の圧痕と擦痕あり。酸化気味で燻が及び外面に煤及ぶ。	在地 15世紀後半
63	内耳鍋 軟質陶器	S D118-25 覆土	口径28.5	褐色含。砂微。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁部は平縁。口縁部外面と内面に横撫。体部下方外面に手掌による撫痕と指の圧痕あり。酸化気味で燻が及び、外面が煤ける。	在地 15世紀後半
64	内耳鍋 軟質陶器	S D118-27 覆土	口径28.5	褐色含。砂微。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁端部は内斜。外面下方に指の擦痕と圧痕あり。その他は内外ともに横撫。酸化気味で燻が及び外面に煤がかかる。	在地 15世紀後半 ～16世紀
65	内耳鍋 軟質陶器	S D118-22 覆土	口径28.5	褐色多。砂含。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。内耳が一耳付く。口縁端部は平縁。体部外面下方に指による擦痕あり。その他内外は横撫。酸化気味で燻が及び煤が付着。	在地 15世紀前半
66	内耳鍋 軟質陶器	82G-30	口径31.0	褐色含。砂微。 並。褐色。	内耳鍋の口縁部から体部片である。口縁端部は内斜気味。端折の元に段が付く。体部下半に指の圧痕と擦痕箇所があり、それを除いて内外面に横撫有り。横撫のさい使ったと考えられる布の圧痕あり。酸化気味で燻が及び、外面が煤ける。	在地 15世紀後半
67	内耳鍋 軟質陶器	S D118-24 覆土	口径33.0	黒色含。砂無。 並。灰色。	内耳鍋の口縁部片で内耳が一耳付される。口縁端部はやや内斜する。内外面ともに横撫あり。還元気味である。	在地 15世紀前半
68	内耳鍋 軟質陶器	82G-30	底径22.5	褐色微。砂粒微。 並。褐色。	内耳鍋の底部から体部にかけての破片で平底である。外面体部下半に箇所あり。体部上方に指の撫と指の圧痕が認められる。内面に横撫あり。酸化気味でやや燻あり、外面に煤が付着。	在地 15世紀後半

遺跡の消長を知るために付表の軟質陶器の消長グラフを作成した。年代軸を上・下に置き、出土量を左・右に取った。グラフの判読について注意点は次のとおりである。扱った幅は主体を中世に置き、世紀区分としさらに各世紀を前半・後半に細分して記入した。17世紀は便宜のために加えたものであり実態ではない。しかし全般的な傾向が出るよう努めたつもりであるが、軟質陶器では変遷観の不明確な13世紀代、さらに鉢類に関してもいま一つ明らかでなく、区分可能な内耳鍋との間に差が生じてしまっている。このほか記入の細点については前項を参照されたい。

また出土位置分布図を作成した。ベースは当遺跡全体図で関連遺構名称のみを抽出した。

12世紀の一群は明瞭でなく、当地域の遺物観からすると在地製品は、土師質土器皿を中心としたわずかな土器生産しか考え得ない。このほか日常什器では木器生産の多用が考えられ、搬入の陶器では常滑焼・渥美

第4章 調査成果



土師質土器分布図



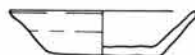
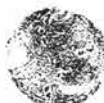
S Z07-1 1



S Z10-2 2



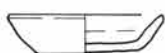
S Z10-1 3



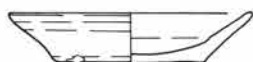
S Z10-3 4



S Z10-4 5



S Z13-1 6



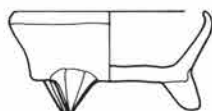
S Z13-3 7



S Z13-2 8



S Z13-4 9



S Z13-5 10



S D12-9 11



S D22-1 12



S D28-4 13



S Z28-5 14



S D32-6 15



S D32-5 16



S D118-31 17



S D118-30 18



S D118 19



S D118-29 20



S D118-30 21



S E07-7 22



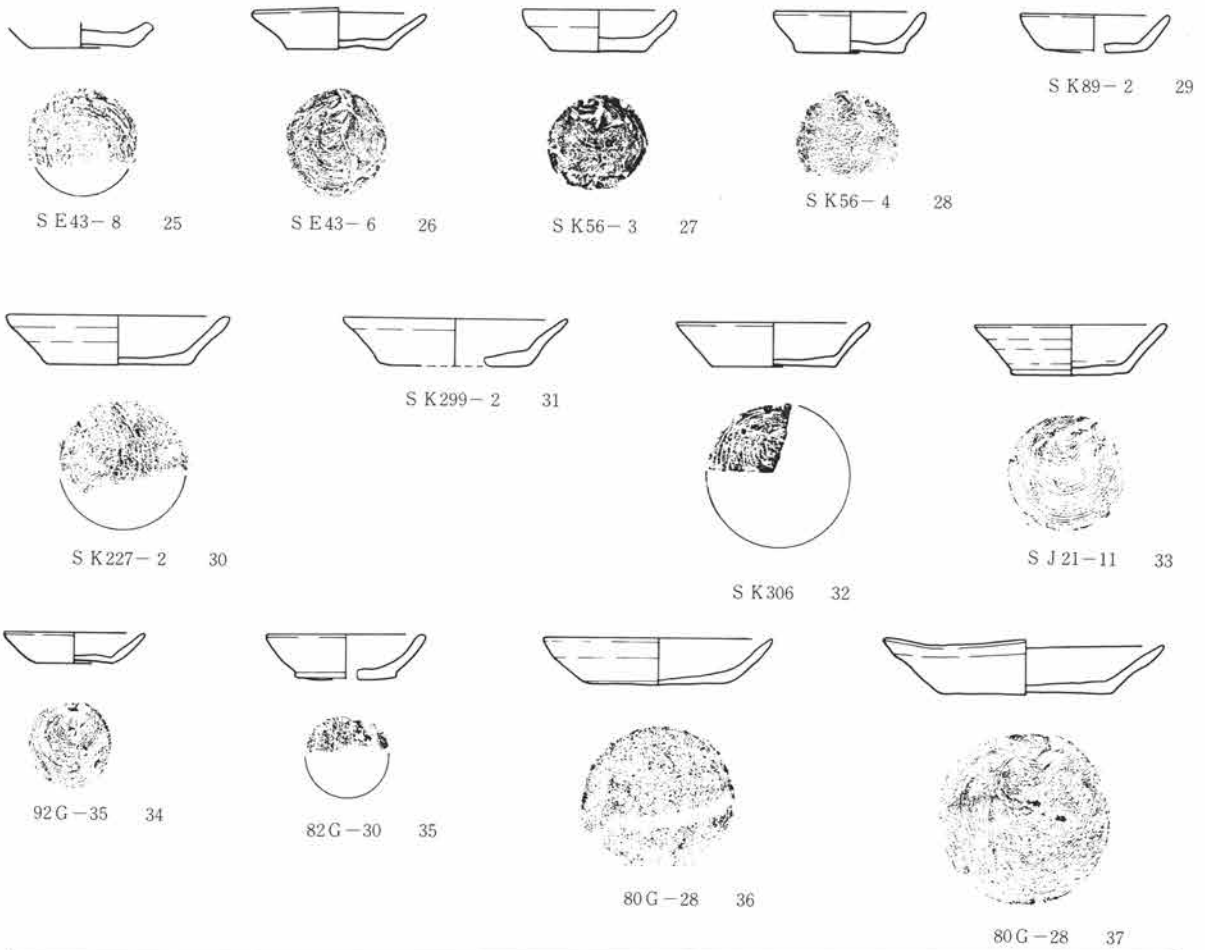
S E14-2 23



S E43-7 24



第4章 調査成果



No.	土器種	出土位置	量目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特徴	適要
1	土師質土器 皿	S Z 07-1 覆土	1/2個体 口径8.1 器高2.3	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部は轆轤左回転の糸切で板状圧痕あり。内面、それと一致し不定方向撫。酸化気味。	
2	土師質土器 皿	S Z 10-2 床直	口径5.7 底径3.8 器高1.4	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	口に欠損あり。底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。酸化気味。口縁に油煙付着	灯火皿
3	土師質土器 皿	S Z 10-1 床直	口径5.7 底径4.2 器高1.2	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。酸化気味。油煙付着。	灯火皿
4	土師質土器 皿	S Z 10-3 床直	口径7.4 底径4.5 器高1.8	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕なし。内面に不定方向撫なし。酸化気味。	
5	土師質土器 皿	S Z 10-4 床直	底部残存 底径7.5	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	大皿で、口縁部欠損。底部に轆轤左回転の糸切あり。内面に不定方向撫あり。内面に段あり。酸化気味。	
6	土師質土器 皿	S Z 13-1 床直	口径6.2 底径4.0 器高1.6	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	口縁一部欠損。底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。酸化気味。	
7	土師質土器 皿	S Z 13-3 床直	口径9.6 底径5.7 器高2.0	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	大皿。底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。内面に段あり。酸化気味。	

第4節 中世土・陶・磁器

No	土器種	出土位置	量目 cm	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
8	土器質土 器 皿	S Z 13-2 床直	口径9.2 底径4.8 器高2.2	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部は轆轤左回転の糸切で板状圧痕あり。不定方向撫なし。 酸化気味。	
9	土師質土 器 皿	S Z 13-4 床直	口径10.4 底径6.3 器高2.4	褐色微。砂撫。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。 内面に段あり。酸化気味。	
10	土器質土 器 香炉	S Z 13-5 床直	口径7.5 底径6.2 器高4.1	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。三ッ足あり。板状圧痕・不定 方向撫は確認できず。酸化気味。	
11	土器質土 器 皿	S D 12-9 覆土	1/2個体 口径4.6 器高1.6	褐色微。砂無。 並。淡灰色。	底部は磨耗が顕著。焼成は酸化が弱い。口縁部に油煙付着。	灯火皿
12	土師質土 器 皿	S D 22-1 覆土	口径5.6 底径3.7 器高1.6	褐色微。砂含。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。酸化気味。口縁部に油煙付着。	
13	土師質土 器 皿	S D 28-4 覆土	1/2個体 口径5.3 器高1.7	褐色微。砂含。 並。黄色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。酸化気味。	
14	土師質土 器 皿	S D 28-5 覆土	口径5.1 底径4.0 器高1.4	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。酸化気味。	
15	土師質土 器 皿	S D 32-6 覆土	口径5.5 底径3.5 器高1.7	褐色微。砂含。 並。淡黄色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。酸化気味。	
16	土師質土 器 皿	S D 32-5 覆土	3/4個体 口径7.7 器高2.3	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。内面に段あり。燻あり。酸化 気味。	
17	土師質土 器 皿	S D 118- 31 覆土	口径6.2 底径3.6 器高1.3	褐色多。砂含。 並。淡褐色	底部に轆轤左回転の糸切あり。口縁部に油煙付着。酸化気味。	灯火皿
18	土師質土 器 皿	S D 118- 30 覆土	3/4個体 口径5.3 器高1.3	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。燻あり。酸化気味。	
19	土師質土 器 皿	S D 118 覆土	1/2個体 口径6.0 器高1.3	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に糸切あり。酸化気味。	
20	土師質土 器 皿	S D 118- 29 覆土	1/2個体 口径7.7 器高1.8	褐色微。砂無。 並。淡褐色	底部に糸切あり。酸化気味。	
21	土師質土 器 香炉	S D 118- 28 覆土	1/2個体	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	内面に回転痕あり。外面に篋研磨あり。体部外面上方に菊状 の印花文あり。酸化気味。	皿群と胎土 異なるが在地
22	土師質土 器 皿	S E 07-7 覆土	口径5.3 底径4.0 器高1.4	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。 酸化気味。	

第4章 調査成果

No	土器種	出土位置	量 目 _{cm}	胎土・焼成・色調	特 徴	適 要
23	土師質土器 皿	SE14-2 覆土	1/2個体 口径6.0 器高1.4	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。酸化気味。	
24	土師質土器 皿	SE43-7 覆土	口径8.0 底径4.6 器高2.0	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部は轆轤左回転の糸切で板状圧痕あり。内面撫不明瞭。	
25	土師質土器 皿	SE43-8 覆土	底部片 底径4.0	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	細片のため委細不詳。酸化気味。	
26	土師質土器 皿	SE43-6 覆土	口径6.8 底径4.1 器高1.7	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕なし。内面に強い段あり。酸化気味。	
27	土師質土器 皿	SK56-3 覆土	2/3個体 口径6.1 器高1.7	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤右回転の糸切あり。全体的に黒色燻が極めて強く及ぶ。	
28	土師質土器 皿	SK56-4 覆土	1/2個体 口径6.0 器高1.7	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤右回転の糸切あり。酸化気味。口縁部に油煙付着。	灯火皿
29	土師質土器 皿	SK89-2 覆土	口縁部片 口径6.0 器高1.6	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	細片のため委細不詳。底部は回転糸切。酸化気味。口縁部に油煙付着。	
30	土師質土器 皿	SK227-2 覆土	1/2個体 口径8.7 器高2.0	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕不明瞭。内面不定方向撫あり。酸化気味。	
31	土師質土器 皿	SK299-2 覆土	1/4個体 口径9.0 器高2.0	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部は回転糸切。板状圧痕・内面不定方向撫不明瞭。酸化気味。	
32	土師質土器 皿	SK306 覆土	1/4個体 口径7.7 器高1.8	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・内面不定方向撫不明瞭。酸化気味。	
33	土師質土器 皿	SJ21-11 覆土	1/2個体 口径7.6 器高2.0	褐色微。砂含。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫なし。酸化気味。	
34	土師質土器 皿	92G-35	口径5.6 底径3.2 器高1.3	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。内面に段あり。板状圧痕・不定方向撫不明瞭。酸化気味。	
35	土師質土器 皿	82G-30	1/2個体 口径6.2 器高1.9	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	細片のため委細不詳。底部は糸切。酸化気味。	
36	土師質土器 皿	80G-28	2/3個体 口径9.1 器高2.0	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・不定方向撫不明瞭。酸化気味。	
37	土師質土器 皿	80G-28	口径11.1 底径6.9 器高2.3	褐色微。砂無。 並。淡褐色。	底部に轆轤左回転の糸切あり。板状圧痕・内面不定方向撫なし。酸化気味。	

焼が数点出土し、舶載の白磁1点がある。これらは陶・磁器の項の検討によって遺構に直結せず14世紀代まで伝世した可能性が示されている。

13世紀代は、在地では軟質陶器の生産が開始され、後半に至って量産段階に入ったものと地域における土器生産の類推から考えられる。出土陶・磁器は13世紀に生活の本格的な開始を示唆する量の出土を見ているが、軟質陶器が急増していないのでその開始は13世紀でも終末に近い頃と考えられる。土師質土器はこの時代は見られない。かつて指摘したA・B・C系が見られないためである。

14世紀代は軟質陶器鉢が普及していった段階である。出土の軟質陶器、陶・磁器とが共通の生活地および同様の生活目的に沿って使用されたことが分布図から明らかである。前代からあった生活の延長は14世紀にも受け継がれたと考えられる。しかし14世紀代の軟質陶器の主体をなす鉢類は個体が細片で、接合度合も極めて低く、15世紀の内耳鍋が高い接合率をもって土塚、井戸跡から出土するのとは対照的であった。このため生活してゆくための基盤面が中世前半と後半とは異っていたためと考えられた。土師質土器はこの段階に至っても当遺跡では見られない。

15世紀代は軟質陶器内耳鍋の量産・普及の段階であり、鉢は減少する。出土の軟質陶器、陶・磁器との分布域はほぼ共通し前代からあった。生活は確実に受け継がれている。この段階は15世紀代の井戸が廃棄に合せて、それとともに高い接合率で内耳鍋が出土している。井戸を多用し始めた段階はこの頃からと考えられる。またH区における生活中での変異はH区内の溝で区画された中世遺構の西半に土塚墓群が現われS Z 07、S Z 10、S Z 13などから15世紀代の土師質土器皿・香炉が出土している。この土塚墓形成がいつの時点から始まるかは明瞭ではないが、さらに前代の周辺に存在したと考えられる石製板碑群との間に時代的なひらきが感じられ、ひいては土師質土器皿の年代と板碑との年代は一致しないであろう。

16世紀代は陶・磁器、軟質陶器、土師質土器皿ともに出土個体が減少し、初頭に近い段階でH区内の溝で区画された中世遺構もおそらくは終末をむかえたものと推測される。しかしその間までの土師質土器は存在しておりS E 07、S E 43出土例などがそれに当る。両井戸址から出土した土師質土器は井戸埋土中位から人骨を伴って出土しており、埋葬に質的低下を感じさせるものがある。

以上、従来知られなかった群馬県での中世土器文化の一側面を窺えた意義は大きいといえるであろう。

注

- (1) 赤羽一郎 「常滑」『世界陶磁全集 3 日本中世』 1977
- (2) 亀井明德 「九州出土の宋、元代陶・磁器の分析」『考古学雑誌58巻4号』 1973
上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No.2』(日本貿易陶磁研究会) 1982
- (3) 森田 勉 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』(日本貿易陶磁研究会) 1982
- (4) 小野正敏 「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』(日本貿易陶磁研究会) 1982
- (5) 井上喜久雄 「瀬戸」『世界陶磁全集 3 日本中世』 1977
- (6) 檜崎彰一 「美濃古陶のながれ」『美濃古陶』 1980
- (7) 大江正行 「中・近世の陶・磁器について」『上野国分僧寺・国分尼寺中間地域』((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1986
- (8) (富岡市教育委員会)『稻荷森遺跡』 1982
- (9) ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)『歌舞伎遺跡』 1982
- (10) ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)『元島名B・吹屋遺跡』 1982
- (11) ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)『太田浜町屋敷内遺跡C地点』 1985
- (12) ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)『藪田遺跡』 1985
- (13) ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)『洞I・II・III遺跡』 1986
- (14) (尾島町教育委員会)『長楽寺遺跡』 1978
- (15) (富岡市教育委員会)『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』 1981
- (16) 遺構上方を埋めた土を指すのではなく、本報告では埋没土全体をさしている。
- (17) 大江正行 「軟質陶器について」『月報鳥羽遺跡No.5』
- (18) 黒川真頼 「神記」『古事類苑』
- (19) 大江正行 「中世」『清里・陣馬遺跡』 1981
- (20) 大江正行 「群馬県と周辺地域の中世土師質土器皿」『群馬考古通信 第7号』(群馬考古学談話会) 1980
- (21) 飯田陽一 「かわらけ」『太田浜町屋敷内遺跡C地点』((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1985にその指摘がある。

第5節 石製品について

1 砥石

(1) 砥石の選択について

当遺跡における砥石の出土総量は27点である。少量であったので作為的な選択は行わず、総てを扱った。これらは調査区内から出土したもので、7世紀代から16世紀代の長きにわたるものであった。このうち17は滑石加工の未成品でしかも15世紀の軟質陶器内耳鍋片を伴うSD12覆土中の出土であった。中世の所産であることを考慮すれば、温石転用の可能性が持たれ、ここでは除外しておきたい。

(2) 観察について

観察については一率、均等な意識で観察する意図から、観察一覧表を作成した。それが表砥石一覧表である。項目立ては出土砥石の特徴が現われるよう配慮したつもりである。Noは集成図版内の実測図番号に一致している。出土遺構と集成図各個体を対照とする場合は、表中の出土Noを基にして検索していただきたい。種・器形の項目は、自然石利用・定形・長身形・変形・木葉砥石の5種に種区分した。自然石利用は自然石を利用し、No.7のように自然石面を多く残す例について自然石利用砥とした。しかし、自然石を利用したと見られる例であっても、側部・表・裏の四面に面成りが生じている場合には定形砥とした。定形は砥石として一般的な長方形の形を呈したものをさし、長身形は細長い砥石をさしている。たとえばNo.10である。変形砥石は、異形な形態の砥石をさし、たとえばNo.4・12のように側面が菱形を呈している時に使用した。木葉砥石は、本来の形以下の単位の大きさおよび、もともとの砥石を分割して生じた砥石をさし、たとえばNo.8は研磨減りによって極めて小形になったとも考えられ、そうした場合も含めた。量目は、単位cmで、長さ、幅を主に記入してあるが欠損は含んでいない。重量は1g単位までを測定した。欠損の長さ・幅・重量については+αして考える必要がある。特徴の項目は、自然面の有・無面拵えの面、使用の面、刃ならし傷の有無などを内容とした。備考欄には砥石の原材である岩石名称を飯島氏の鑑定結果に基づき記入し、さらに現在、流布している砥石に置き替えた場合の一般名称を用いた。⁽¹⁾その中で名倉級とは名倉砥のことであるが、実際にはそれより荒い伊予砥と名倉砥の間の性質に相当すると考えていただきたい。区分の中で伊予砥は用いなかったが区分が困難なためである。^{おおむら}大村級は大村砥に起因するが、き目がそれに相当している。大村砥と言ってもある程度の幅の広さがあり、それに含まれると考えられるものをさしている。

実測図は、整理班によるが、加えてトーン貼と研磨による傾斜面の方向をさらに加えたのと、別に出土分布図を一般理解のために作成した。トーン貼は、2つの文様を用い、一つは原石面か自然面を表わし、いま一つは、砥石として山出しの際か、その後の調整による面取りの部分を示した。研磨による傾斜面方向は、マークのヒゲを砥面の傾斜に対して直角方向に記入してある。

(3) 観察の結果について

古代の砥石の出土は主に住居跡からである。特に本報告でいう覆土は埋土をさしており、住居の発見面から上方を意味している訳ではないので留意していただきたい。住居に伴う例は5・6・7・9がある。1・2・3・8・10が覆土から、また溝、土壇の覆土から23・24が出土している。形状は、自然石利用砥の3・

7を除外すれば4面の面成しがなされ定形砥に属す。3には2面の面成しがあり他は自然面に近く、7は自然面が丸石状態を呈する。石材は7の軽石を除き流紋岩である。見てでは同一原材に映り、総じて青砥で、名倉級の軟質に相当する。7は榛名山二ツ岳に起因すると見られる軽石を利用し、中に深い条痕があって主に可成り長身の刃ならしか類似した研磨主体(研出される主体物)⁽²⁾に用いたと考えられる。

古代の砥石の特色は、営まれた遺構が7世紀から10世紀であり、覆土としたものの中に中世以降は含まれていないことを前提とすれば、以下のとおりである。

- ① 重量は6が最大で352gあり、8が最小で15gしかなく、全体的に見れば150～200g前後が多い。そのことは研磨主体がそれ程大きくないことの左証である。たとえば鎌や刀子など小形製品である。7は刃ならしなどが推定でき、生じた条痕は長く、深さも均等であるため、長身・大形の研磨主体が想定される。
- ② 形状は、3・7を除き定形砥であるが、部分的であっても糸巻き状凹面状態のある1・2・6・24は手持砥として使用された場合も考えられる。手持砥と置砥とを比較した場合、手持砥の方は長軸に対し、左上がり、右下がり(右利)の凹みとの成す角が鋭角になり、置砥は鈍角になるので前例は手持砥の可能性が高い。置砥または無意識のうちに糸巻き状凹面にならないように使用したのは、9・10・23などで、他は使用の面が浅く、判断し難い。大きさから9・10・23を置砥とするには困難が予想できるので、使用者の扱いが丁寧なのかもしれない。8の木葉砥は大きさからして手持砥である。手持砥の一群で2・23は凹面の曲率が高く小形の研磨主体が想定されるが他は使い込みが浅いのか、砥石の使用が丁寧なのか、研磨主体が大形なのか区別が困難である。

ここでいう手持置砥の区別は、手持砥であっても置いて用いた場合もあるので砥面の総体判断である。刃ならしの多くは喰い込み傷にならず、数条の条痕がおつとりと傷になっているので置砥として用いた場合が多かったと判断でき、10の深い傷は別として1・2・6・9・24などがそうした例である。

- ③ 砥出し速度は極めて遅く、砥石面の角は後世の例より極端なほど丸みをおび、自然面で凹凸に変化があっても、平均的に、やや凸凹成りに磨耗した個所も部分的に見られる。力の入れ方は砥石が小さいためか強くない。強く入れる場合は勢い、速度が早くなり、そのため砥石当りの面積を加減して狭く用いるのが常であることからすれば、使用の面積は、砥石の大きさからして広く取っており、速度は遅く、力を抜いて加減しながら砥いでいることになる。その意味で、せっかちであったのは24の砥石を使用した人間である。表面に凹み成りの曲率が高く、側部との間に生じた角立ちはややシャープである。丁寧な人柄が偶ばれるのは5の砥石を用いた人間である。5は本来、倍の長さのある大形砥石で中折れして小形砥石となったものと、割れ口、全体形状から推測でき、面成りの平らさ、側面の平衡状態の維持、薄くなるまで、余り癖を付けずに用いた点などに人柄が現れている。利グセは、総べて右利である。
- ④ 研磨主体は、余り大きくはないと考えられるが、中世以降の砥石ほど顕著な現象は現われてはいない。手持砥と考えられる1・2・6・24は、その凹み成りの曲率の高さ、長軸に対して鋭角になる砥石面からそのことが窺えるが7を除く他は、際立って明瞭でない。しかし、他を置砥とした場合、力の入れ方が弱い研減り、凹成の角度から主体物は小形・短身であって、手持減りの癖は生じていない。研磨主体が長身・大形である場合、力の入れ方は両手で押え付けて研ぐので手に力が入り、砥石も伴って、それ成りに減るのである。研磨主体が小形・短身である場合には力の入れ方を加減しないと、砥石から研磨主体が落ちたり、当りムラなどの不合理が生じてしまうので、力の入れ方は弱いとしうる。要約すれば置砥とした多くの砥石は、砥石面と側部が際立って角ばっておらず、力の入れ方は弱いと判断され、伴う研磨主体は、全般的に小形・短身であったと想定される。あえて大きさを示せば鎌より小形であった

第4章 調査成果

であろう。

やや大き目で長身の研磨主体が想定できる砥石に5・7があり、理由は前述のとおりである。5の場合は、砥石の曲率が割れた個所に一致していないため改めて面拵がなされたことの左証である。また、砥石面は平で研磨主体がやや大きいと想定できる。5の出土した74住からは鉄製直刃の才状の両刃切先鎌の出土があり、それが研磨されても不思議ではなく、むしろ対応関係にある大きさと考えられる。

- ⑤ 古代砥石の印象は、砥石としての各面拵整形がほとんどなされていない時点から使用が始まる点に強い印象を覚える。中世以降の砥石に^{はっ}祈りのような所作がなく、あったとしても、打ち欠くか、工具による突き込みか、打ち込みによる各面ならしが考えられ、実際に6の奥小口に敲打痕（別利用によるためか）が、1の奥小口、9の両小口、10・24の手前小口にそれらしき痕跡を見る。しかし、石材が軟質のため明瞭でないが、中世以降の砥石と比較すれば大きな相違点である。想像をたくましくすれば、山出しに当っては、手頃な形状の自然石を砥山から選んだかあるいは砥山から下流に流出した川原石を利用したのではないだろうか。
- ⑥ 砥ぎ場との関連では、南低地の水場が砥場として考えられるほか、南低地から水汲みを行い、生活地の近辺でも砥ぎを行ったと考えられる。
- ⑦ 古代の砥石の分布は竪穴住居跡に集中しているが、作成したP830の分布図では際立った傾向は抽出できなかった。

中世の砥石は、15点ある。出土は11・12・13・14・15が井戸址から、16・17・18・19・20・21・22が溝跡から、25・26が土塚から出土し、各遺構との供伴関係は強いと言える。出土遺構は発掘段階で古代・中世・近世以降の区分を行っており、それらについて中世として良い裏付けがある。形状は自然石利用砥の13と、先と尻の尖った変形砥4・12、長身形14を除き定形砥に属す。石材は13が多孔質の輝石安山岩であるほか流紋岩との鑑定結果で、古代の流紋岩砥石とまったく同じ質に見える。質は青砥で大半が伊与砥と名倉砥との間の性質で本稿では名倉級として扱った。

中世の砥石の特色は、以下のとおりである。

- ① 重量は、長身砥石14が最大で289gあり、定形砥石の19が46gである。定形砥の最大は160gで、全体的に見れば100g前後が多く、研磨主体はそれ程大きくないと考えられるが、古代よりも研磨主体に変化があると想定される。
- ② 形状は、11・14が長身砥、13が自然石利用砥で、4・12が変形砥であるほか他は定形砥である。11は薄く、使い込みが顕著であるが、砥石面は平滑でたえず面ならしを行ったことを窺わせる丁寧な使用である。背が丸みをおびているが、それだけの平滑さを保つためには砥石台の存在が必要であって、本例は確実に明言しうる置砥である。14も置砥と考えられるもので、11ほど丁寧な作為性はなく、平のならしが左側部に見られるが他の面は浅く、糸巻き状の凹みが生ずる。13も面成りに置砥として用いた平らな状態を見ることができる。手持砥は、砥石面の高い曲率から4・12・15・21・25が、大きさから20・21が考えられる。そのほか16・18・22・26・27については曲率にクセが付いていないので判然としない。それは使い込みが浅いためと、16では面ならしがなされているから判別が困難なのである。
- ③ 砥出し速度は、4・11・12・14・27などについて砥石面と側部との角立ちが^{みど}しっかりしており、ある一定リズムと一定速度で砥いた証左が認められる。その場合、他の砥石と比較すれば早かったと考えられる。この一群は古代の砥石から見れば、可成り早そうである。他の砥石も古代の例より、角立ちが明瞭であるので速度は早いと判断される。それだけ、時代が忙しくなったのであろう。

- ④ 研磨主体は、様々な感が強い。11は平滑で癖取りのならしが行われたと考えられ、長身・大形の、たとえば、刀剣、武具などの面拵えに用いられ、雑用物の砥石としては扱いが丁寧過ぎる。その点14は11よりも扱いが雑で、砥石の面に凹成りの癖が生じている。その曲率は高くはないのと、長身の砥石であることから長身・大形の研磨主体が考えられ、雑用の研磨主体かもしれない。13・16の砥石面も長身の主体が考えられるが、13は多孔質安山岩であるので、研磨主体は、鉄器ではなく他の金属や木などあるいはその他の物質であったかもしれない。その際の面ならしは砥石であったであろう。手持砥と考えられる15・21・25などは鎌など小形の研磨主体が考えられる。鯉ブシ状の4・12は中世遺跡、遺構からしばしば出土し、手持砥として用いたらしく、主な使用面には極めて強い利癖が生じている。砥石面は軸に対して斜面角度が強く、鋭角になる。この形態の砥石に言える点は砥石先端を用いていることで、機能を想像すれば研磨主体の面仕立、刃作りなどに使用したのではないだろうか。中世砥石の当りの利きは総じて右利である。
- ⑤ 中世砥石の印象は、①～④の中で触れてあるが、古代と比較した場合、山出しに際して整形された研りの面拵えが目につく、古代の砥石との大きな相違点である。18表・裏・右側部、20表・裏、21左側部・22表・西側部、27奥小口などにその整形痕が見られる。
- ⑥ 砥ぎ場との関連では、南低地の水場、それぞれの井戸跡周辺、水汲みを行い生活址の近辺でも行っただと考えられる。
- ⑦ 中世の砥石の分布(第1図)は、井戸址と溝址からの出土が多かったが、井戸址からの出土を見ると、底面に直結する例はなく、埋土からの出土であった。埋土の出土は、井戸中への落し物ではなく、二次的に埋没したものようである。

(4) 問題点

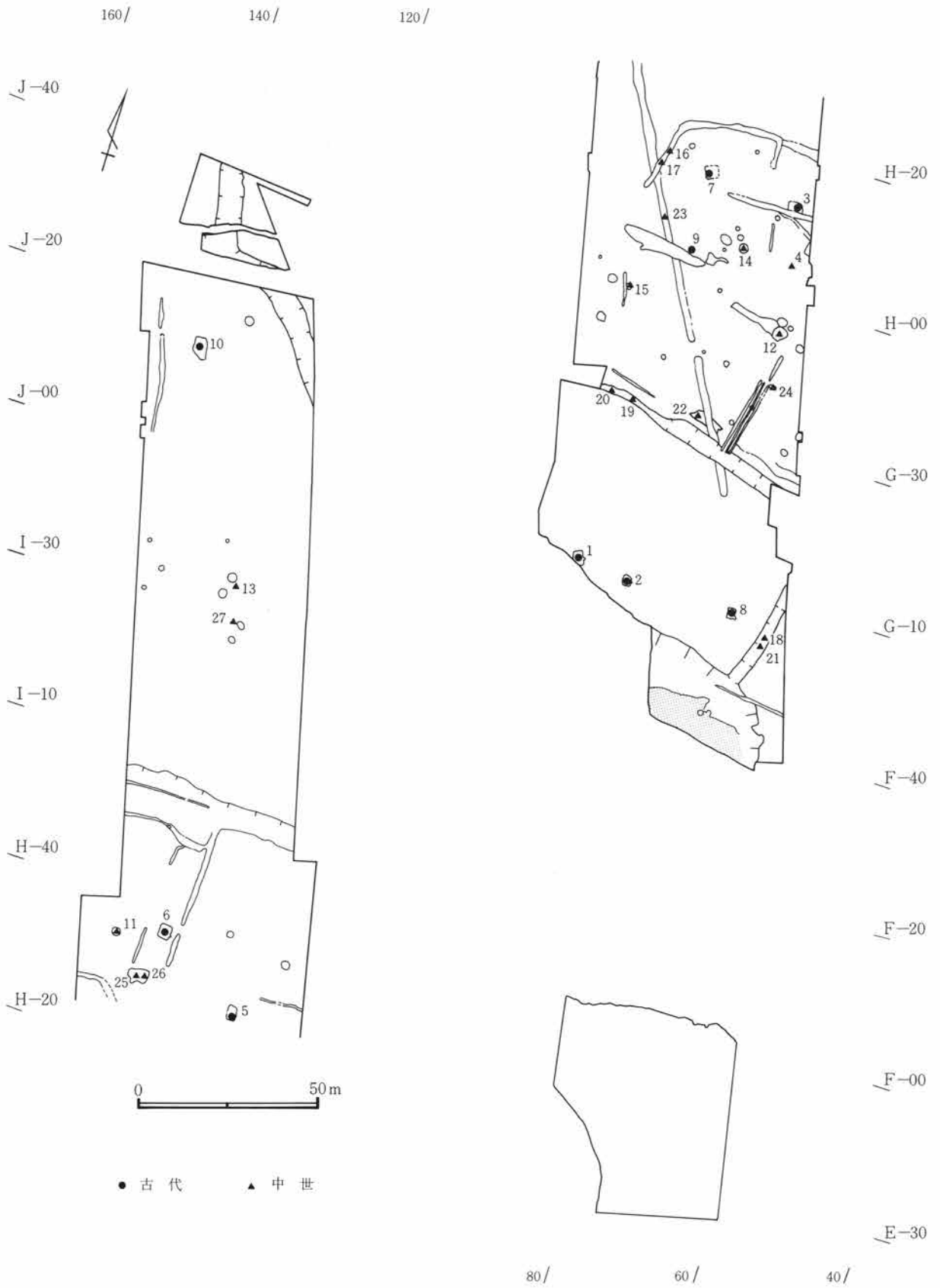
砥石の多くは鉄生産に伴う各種製品の普及に対応して存在しているが、鉄は再生され次期に受継がれる場合が多く、それに対して砥石は腐蝕、再生されるがなく、旧時にあった鉄の普及状況を反映しているのである。この意味から出土砥石と鉄のかかわりは大きいとしなければならないであろう。

今回、実見した砥石の多くは流紋岩で、石材の鑑定を行った飯島氏は現在の南牧村砥沢から産出する砥沢砥(下仁田)と類似しているとの所見を下された。氏の指摘を裏付けするかのよう⁽³⁾にNo27の虎砥が存在する。虎砥は類例が多くなく産出は砥沢からである。これら流紋岩の砥石は、東・西毛地区で発掘された古代の住居跡から多く出土し、古代からの使用が明らかであるが、それらがすべて砥沢砥であるかは、今後、大いに問題となる点で、化学分析等による同定作業も必要となってきた。また、上野産の砥石でしばしば問題となってきた沼田砥については、村松貞治郎⁽³⁾氏の指摘や、岡部温古館⁽⁴⁾の砥石展で示されたとおり商標沼田砥⁽⁵⁾であって、実態は砥沢砥であるが、沼田砥の名称由来はいま一つ明確でなく、上野の砥石研究の課題的内容である。このほか、数箇所⁽⁵⁾に所在する産出地、伝承で砥を冠する地名の由来と砥石との関連など、今後、同定作業と同時に並行追求する必要がある。

注

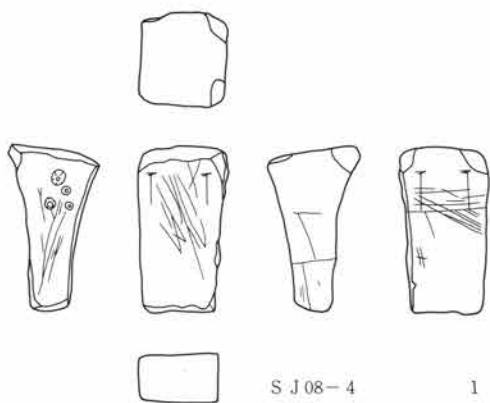
- (1) 注3や大村邦太郎『日本刀の鑑定と研磨』1979年などに詳しい。
- (2) 大江正行「砥石」『八幡原A・B、上滝、元島名A』1981年(群馬県教育委員会ほか)の中で造語した。
- (3) 村松貞治郎「砥石」『大工道具の歴史』(岩波新書)1973年
- (4) 岩根承成「幕末期の上州砥石業史」『まほそNo.3』(岡部温古館)1986年
- (5) 上州の砥石

第4章 調査成果

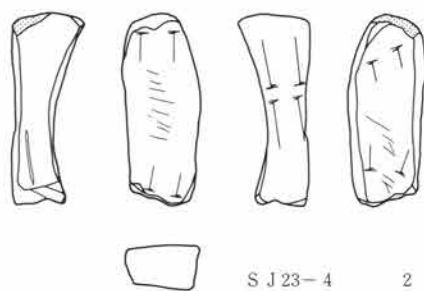


砥石分布図

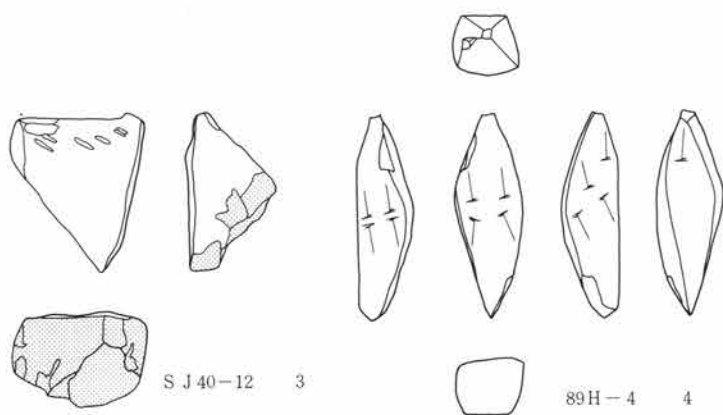
第5節 石製品について



S J 08-4 1

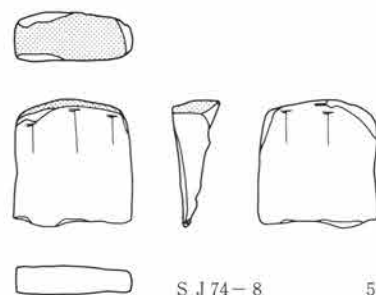


S J 23-4 2

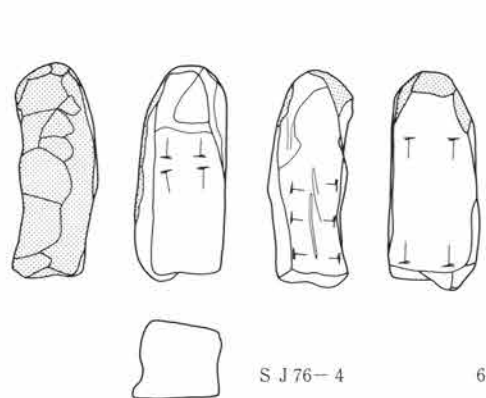


S J 40-12 3

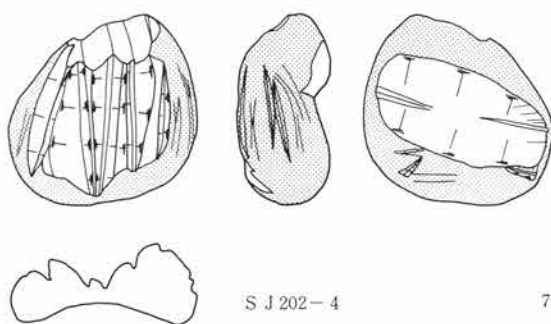
89H-4 4



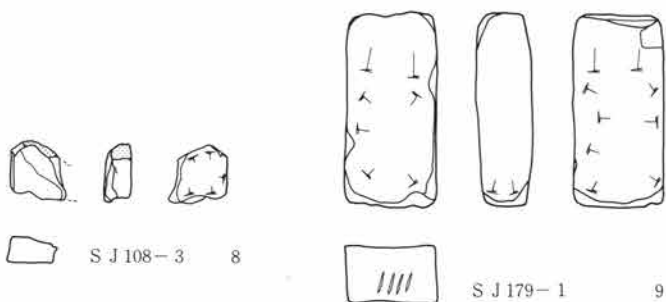
S J 74-8 5



S J 76-4 6

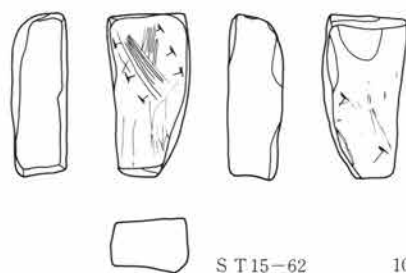


S J 202-4 7



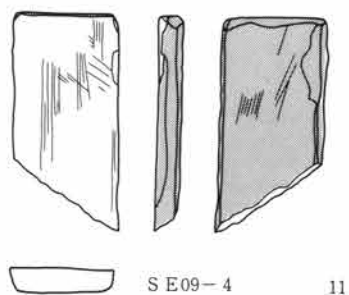
S J 108-3 8

S J 179-1 9

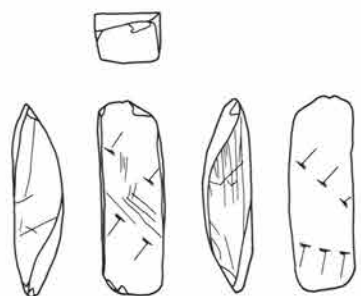


S T 15-62 10

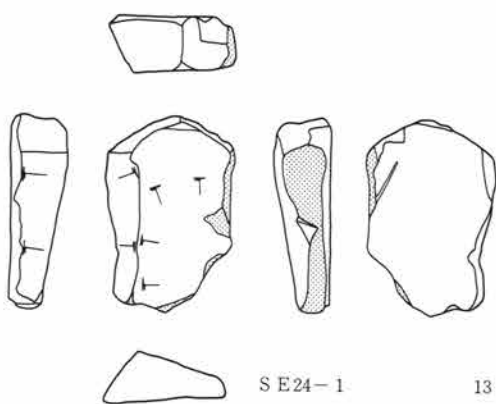
第4章 調査成果



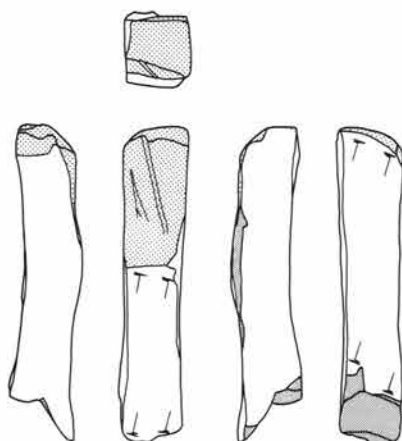
SE09-4 11



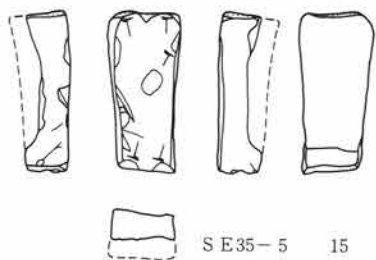
SE12-6 12



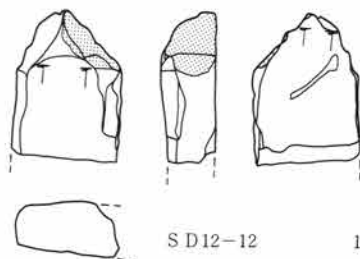
SE24-1 13



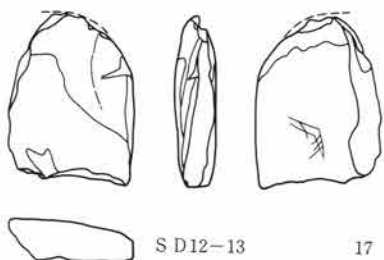
SE33-3 14



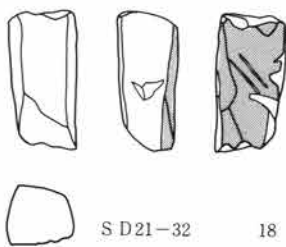
SE35-5 15



SD12-12 16



SD12-13 17



SD21-32 18

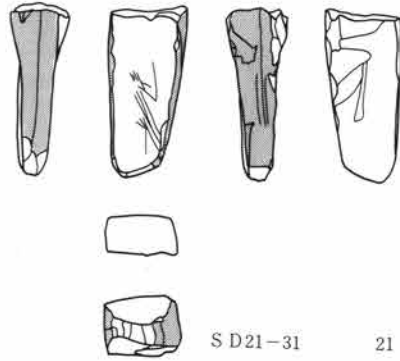


SD23-14 19

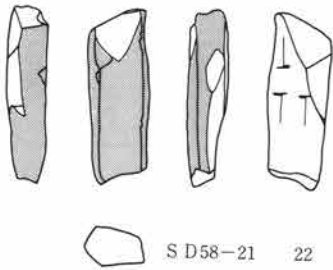
第5節 石製品について



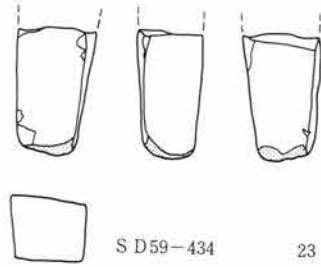
S D23-15 20



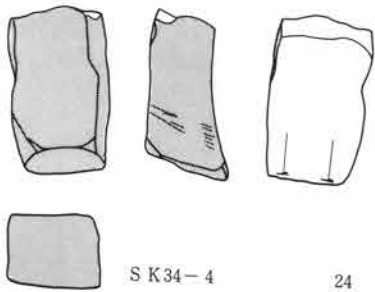
S D21-31 21



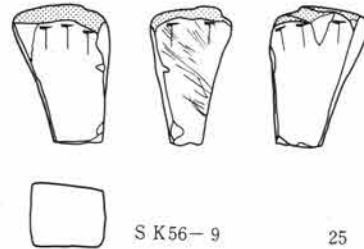
S D58-21 22



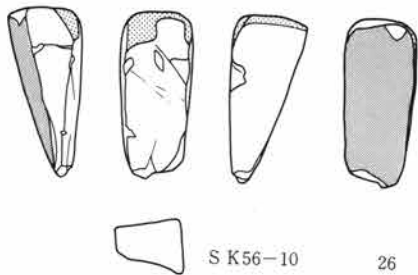
S D59-434 23



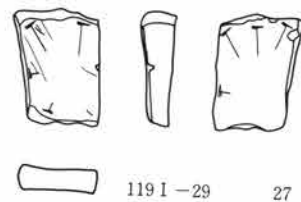
S K34-4 24



S K56-9 25



S K56-10 26



119 I-29 27

第4章 調査成果

No	種類	出土位置	計測値	特徴	備考
1	砥石	S J 08-4	長 8.7cm 幅 4.9cm 重 217g	平・表・裏・側部の4面使用。それぞれの面に刃ならしの条痕あり。片側部に雑もみ痕が4ヶ所に認められる。	名倉級。軟質。流紋岩
2	砥石	S J 23-4	長 9.7cm 幅 3.9cm 重 152g	表・裏・側部使用。表裏に刃ならしの条痕あり。奥小口は自然面である。	名倉級。軟質。流紋岩
3	砥石	S J 40-12	長 8.3cm 幅 7.2cm 重 231g	自然石利用の砥石。図に示した表面、側部が利用され、他は原石面。表面に刃ならしの条痕あり。	名倉級。硬質。流紋岩
4	砥石	89-H 4	長 10.7cm 幅 3.6cm 重 120g	欠損小口を除いて全面使用。全体的に小口尖りになっているため、特殊調整に使用された可能性がある。	名倉級。軟質。流紋岩
5	砥石	S J 74-8	長 5.7cm 幅 6.1cm 重 119g	手前小口欠損、奥小口原石面。平・表・裏・側部の4面使用。火中の為か、吸炭している。	名倉級。軟質。流紋岩
6	砥石	S J 76-4	長 11.4cm 幅 4.8cm 重 352g	奥小口に打痕有り。平・表・裏・左側部に使用面有り。左側部に刃ならしの条痕有り。	名倉級。硬質。流紋岩
7	砥石	S J 202-4	長 9.4cm 幅 10.1cm 重 174g	自然石を利用した砥石で、表面に刃ならし状の大きな条線が5本認められる。裏面は、大きな平行凹条をなす。側部の自然面には、それぞれ刃物条痕有り。	軽石。
8	砥石	S J 108-3	長 3.0cm 幅 3.0cm 重 15g	小形砥石で、表・裏・左側部を使用。裏面の使用面は、中凹みになる。	名倉級。軟質。流紋岩
9	砥石	S J 179-1	長 10.2cm 幅 4.8cm 重 269g	表・裏・側部の4面を使用。表・裏ともに中凹みの状態となる。両小口面に刃ならし傷有り。	名倉級。硬質。流紋岩
10	砥石	S T 15-62	長 8.5cm 幅 5.1cm 重 153g	小口を除き、4面使用。表面のみ、中凹み状態を呈す。表・裏に刃ならしの刃物傷有り。	名倉級。硬質。流紋岩
11	砥石	S E 09-4	長 11.3cm 幅 5.7cm 重 133g	表面のみ使用。裏面、側部、小口は、砥石の面寄せ面。手前の小口は欠損。表面の傷は、研ぎによる擦痕。裏面にならしの研り痕有り。裏の研り痕は近世か。	大村級。硬質。
12	砥石	S E 12-6	長 10.1cm 幅 3.4cm 重 126g	4面が使用されている。各面に刃ならしの、刃物傷あり。両端が尖っている為、特殊な砥石である。	名倉級。軟質。流紋岩
13	砥石	S E 24-1	長 10.3cm 幅 6.5cm 重 175g	多孔質安山岩を使用している。手前小口、右側部を除いて使用されている。	きわめて軟質。輝石安山岩。
14	砥石	S E 33-3	長 16.5cm 幅 3.4cm 重 289g	長身の砥石であるため、大形製品の研磨に使用。表・裏・側部ともに使用。手前の小口は欠損。奥の小口は原石面の一部に刃ならしの傷が有り。	名倉級。軟質。流紋岩
15	砥石	S E 35-5	長 8.2cm 幅 3.9cm 重 89g	裏面、両小口を除いて使用。手前小口は欠損。奥の小口は原石面。表面は、火中による剥落あり、吸炭している。	名倉級。軟質。流紋岩

第5節 石製品について

No	種類	出土位置	計測値	特徴	備考
16	砥石	S D12-12	長 7.8cm 幅 5.5cm 重 160g	表・裏・左側面のみ使用。手前小口は欠損。右側部、奥の小口は原石面。	名倉級。軟質。流紋岩
17	砥石	S D12-13	長 10.0cm 幅 6.6cm 重 192g	大形滑石で、 ^{おんじやく} 温石と考えられる。手前小口に、刃物による整形。表・裏・右側部に平滑面と面取りがある。	滑石。
18	砥石	S D21-32	長 7.3cm 幅 3.6cm 重 117g	手前小口、奥小口、裏面を除いて、3面使用。裏面は研りによる調整痕有り。	名倉級。軟質。流紋岩
19	砥石	S D23-14	長 5.6cm 幅 2.7cm 重 46g	小口を除いて4面使用。表面を除いて、使い込みは浅い。左側面に調整痕あり。	名倉級。軟質。流紋岩
20	砥石	S D23-15	長 6.3cm 幅 2.8cm 重 71g	小口を除いて4面使用。裏面に、研りによるならしの調整痕あり。	名倉級。軟質。流紋岩
21	砥石	S D21-31	長 9.0cm 幅 4.1cm 重 127g	奥の小口を除いて全面使用。側部、手前小口が、火中によって生じたと考えられる吸炭あり。表・裏は研磨により吸炭部はない。表面のみ、刃ならしによる刃物傷あり。	名倉級。軟質。流紋岩
22	砥石	S D58-21	長 8.6cm 幅 3.7cm 重 84g	小口を除いて、4面使用。左右側部、表面は、研りによる調整痕あり。	名倉級。軟質。流紋岩
23	砥石	S D59-434	長 6.7cm 幅 4.2cm 重 141g	小口を除いて、4面使用。手前小口は原石面。4面とも丁寧に使込まれている。	名倉級。軟質。流紋岩
24	砥石	S K34-4	長 8.8cm 幅 5.0cm 重 257g	奥の小口を除いて使用される。裏面の使用が、最も高く、その他の使用頻度は低い。左側部に刃ならしの刃物傷あり。	名倉級。軟質。流紋岩
25	砥石	S K56-9	長 7.3cm 幅 5.0cm 重 180g	小口を除いて4面使用。右側部に、刃ならしの刃物傷あり。各面の使用頻度は高い。	名倉級。軟質。流紋岩
26	砥石	S K56-10	長 8.8cm 幅 3.8cm 重 138g	奥の小口を除いて使用。全面的に火中のためか、吸炭している。表面のみ、刃ならし傷あり。	名倉級。軟質。流紋岩
27	砥石	遺構外39 119 I-29	長 6.1cm 幅 4.6cm 重 60g	両小口を除いて使用。原石に茶褐色の縞が入り、一見、虎砥風。4面の使用頻度は高い。	細名倉。流紋岩。

2 石 鉢

石製の石鉢は、完形品1点と破片2点が井戸と溝からそれぞれ出土している。1号石鉢は安定した大きな高台を持ち口縁に方形の片口と反対面に三角形の把手が付いている。石鉢全体は棒状の丸ノミによるノミ切り成形の後、平行小叩き仕上げと、口縁部上面の1部に削り整形が加えられている。高台底面は不定方向からのノミ切りで、中央部がやや窪み気味に仕上げられている。本石鉢は、SE39底に1組の石臼と重なり合い、更に被り重なるように3枚の板碑とともに検出された。2号石鉢は、底部付近の破片で、SE14から、また、3号石鉢はSD12からの出土である。

これらの石鉢の石材は、石臼と同種の輝石安山岩を使用している。1号石鉢の内面、特に下半分には著しい擦痕が観察され、使用の頻繁であったことが窺える。2・3号石鉢も同種の擦痕が認められる。この2・3号石鉢は、底部付近の破片であるが形態は1号石鉢と異なり高台は付かないものである。

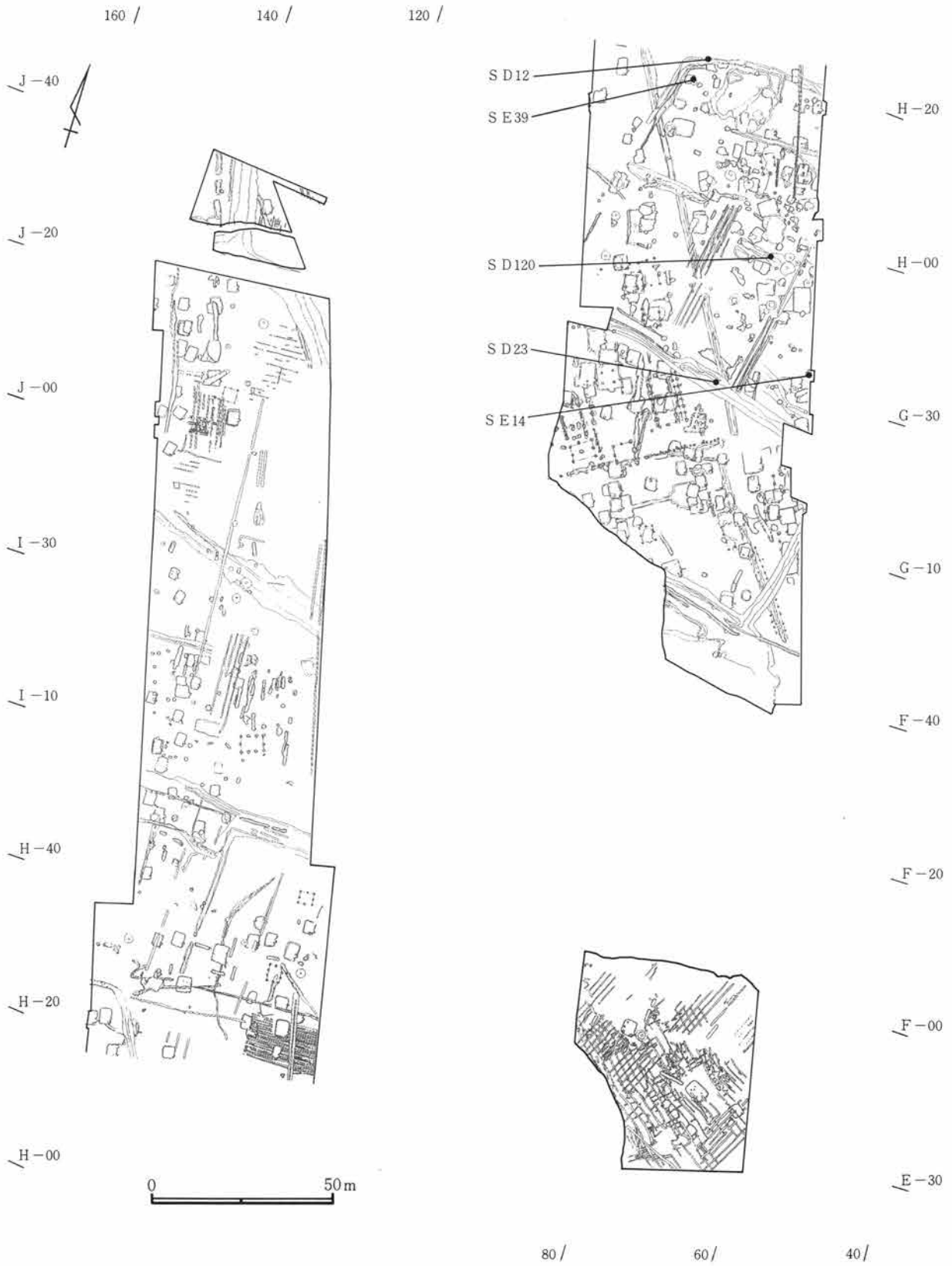
この種の石製の石鉢は、用途的には陶製の播鉢と同様であり機能的にも遜色の無いものであろう。陶製の播鉢に比べ異なる点は、重量の面だけで、使用に当っては安定性に富み破損の確率も低い利点すら有していたと考えられる。これまでに同種の石鉢の県内出土例に、尾島町長楽寺遺跡^(注1)、太田市浜町屋敷内遺跡C地点^(注2)、前橋市県立文書館遺跡^(注3)が知られている。この種の石鉢には片口部が伴うのを標準とするであろうが、把手状突帯を付す例は現在までのところ、文書館遺跡と本遺跡1号石鉢を知るのみである。また、明瞭な形で高台部を作り出している例は報告されていないことや造作の丁寧なことから、限定された人々に所属する石器の可能性を含んでいる。

1号石鉢の廃棄に関しては、SE39実測図を参考にされたいが、石臼1組と接して石鉢の検出されていることから、故意による投棄であろうし、石臼と石鉢が接した状態であるのに両者に破損の認められないことから、ある程度井戸内に水の有した時期の行為と考えられる。石臼、石鉢の廃棄後、わずかの間層を置いて板碑の投棄が行なわれているが、両者が一時期に行なわれたかどうかは確認できなかった。しかし、井戸上部での一時期の埋土、投石が窺える状況から、意図的にSE39が埋戻されている可能性も含んでいる。同様な状況は、SE40でも認められたが、詳細は判明し得なかった。これらの一連の遺物投棄が本遺跡で一斉に行なわれたかどうかについては、仮に不用となった石製品を処分するとしても複数の井戸に分けて投棄する必要は感じられず、もし処分を目的としたならば1本の井戸にすべて投棄すれば良かったのではないかと考える。このようなことから、板碑の項でも述べたように必要に応じ周辺の遺物を処分していった結果と考えたい。

石鉢の使用年代は不明である。共伴する板碑にも、廃棄の規則性が認めがたい部分を含んでいるが、1号鉢に共伴する板碑本来の持つ年代観から推測すれば14～15世紀頃の所産と考えたい。

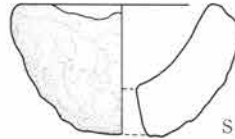
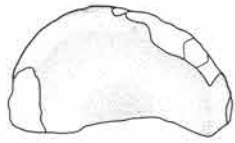
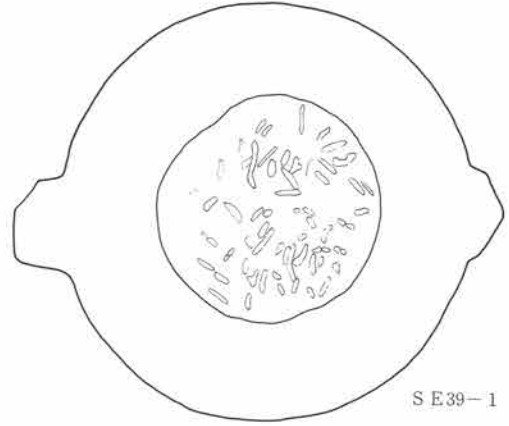
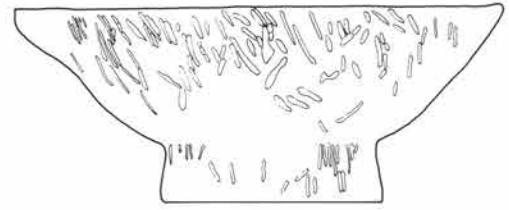
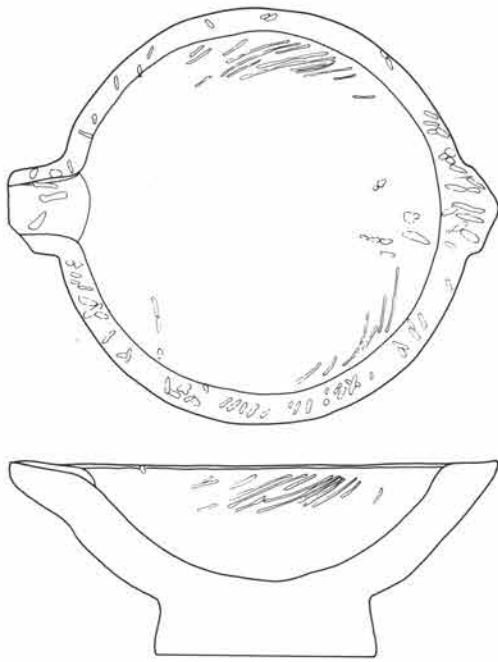
注

- (1) 「長楽寺遺跡」 尾島町教育委員会 1978年
- (2) 「浜町屋敷内遺跡C地点」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
- (3) 「県立文書館遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984年
- (4) 石材の鑑定は、飯島静男氏による。

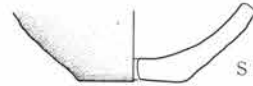


石 鉢

第4章 調査成果



SE14-3 2



SD12-14 3

番号	出土遺構	石材	計測値(cm)			備考
			上面積 最大幅	底面積	高さ 径	
1	SE39-1	輝石安山岩 (粗粒)	32.5・17.5・15.0 39.0			平面プラン正円形の縁に小さい長方形の片口部が、反対側にも小さな三角形の把手が付く。側面プランは、ふっくらした丸い胴部にしっかりと安定した台部が付く。胴の丸味は平面プランの正円形の弧とほぼ同じで、器高は面径の約1/2を有す。石鉢成形の基本加工は棒状丸ノミによる「ノミ切り」で、ほぼ全面に加工痕が認められ、特に台部底面に顕著である。「ノミ切り」の後、胴の上内外縁面部の一帯には平ノミあるいは小斧で、刃方向を一定にし叩き仕上げる「平行叩き」整形が確認される。また上縁部の一部には削り整形も認められる。鉢内面の胴中部から底部にかけては強い磨滅が認められ、この石鉢の使用頻度の高さを窺わせる。1、2の石臼と井戸底部より出土。17、18、19の板碑も井戸中部より共伴。
2	SE14-3	輝石安山岩 (粗粒)	17.5・9.5・9.0			石鉢底部残片。工具刃幅0.8cm程の平ノミ状工具による加工痕が内外面に残り、内面は良くスレている。6、16の板碑、2、3、4、5の五輪塔と共伴。
3	SD12-14	輝石安山岩 (粗粒)	9.0・8.5・9.0			石鉢底部残片。高台の付かない平底状の石鉢で、外面には敲打加工痕が認められる。内面は強く磨滅している。4の石臼、43、44の板碑などと共伴。

3 石 臼

本遺跡における石臼の出土総数は29点で、出土遺構は井戸10点、溝14点、2次的な流入と考えられる竪穴住居内出土1点、グリッド取上げ3点であった。形態的には、粉引臼13点茶臼16点で完形品から小破片まで含まれている。

粉挽き臼は、破損しているものも認められるが、完形品で且、上臼、下臼組のものもあり、内には上臼の著しい片減りなど長期間での使用が窺えるものも含んでいる他、破片でも比較的大きな破片が多い。

上臼は、13点中5点で、上縁の高さも2～2.5cm前後、径も30cm前後のもので、供給口と挽き手穴の位置は、軸線上で反対方向に付く。挽き手穴の残っている2点は、平面形がほぼ方形で、供給穴は上下方向から穿孔されているのが常で、時に、上下の穿孔に、わずかなくい違いの生じている場合もある。上臼には、片減りが目立ち、当然のことながら、負荷の加わる供給口側が磨滅し薄くなっている。特に3では、供給口側の目が削失している。すり合せ部の分画数は、4～7と幅があり、割付けに不均等なものが多く、5の分割は、円の半分を1分画とし、残りを3分画しているなど、不規則である。このことは、石臼磨滅による部分的な再目立てなどが原因と考えられる。1の1ヶ所には、こぼれ目状の溝も認められるが、意図的なものとは考えがたい。副溝の数は、分画に規則性が認められないことを反映して、同一石臼の内で5本から15本まで、あるいは、4～10本とバラツキが目立つ。

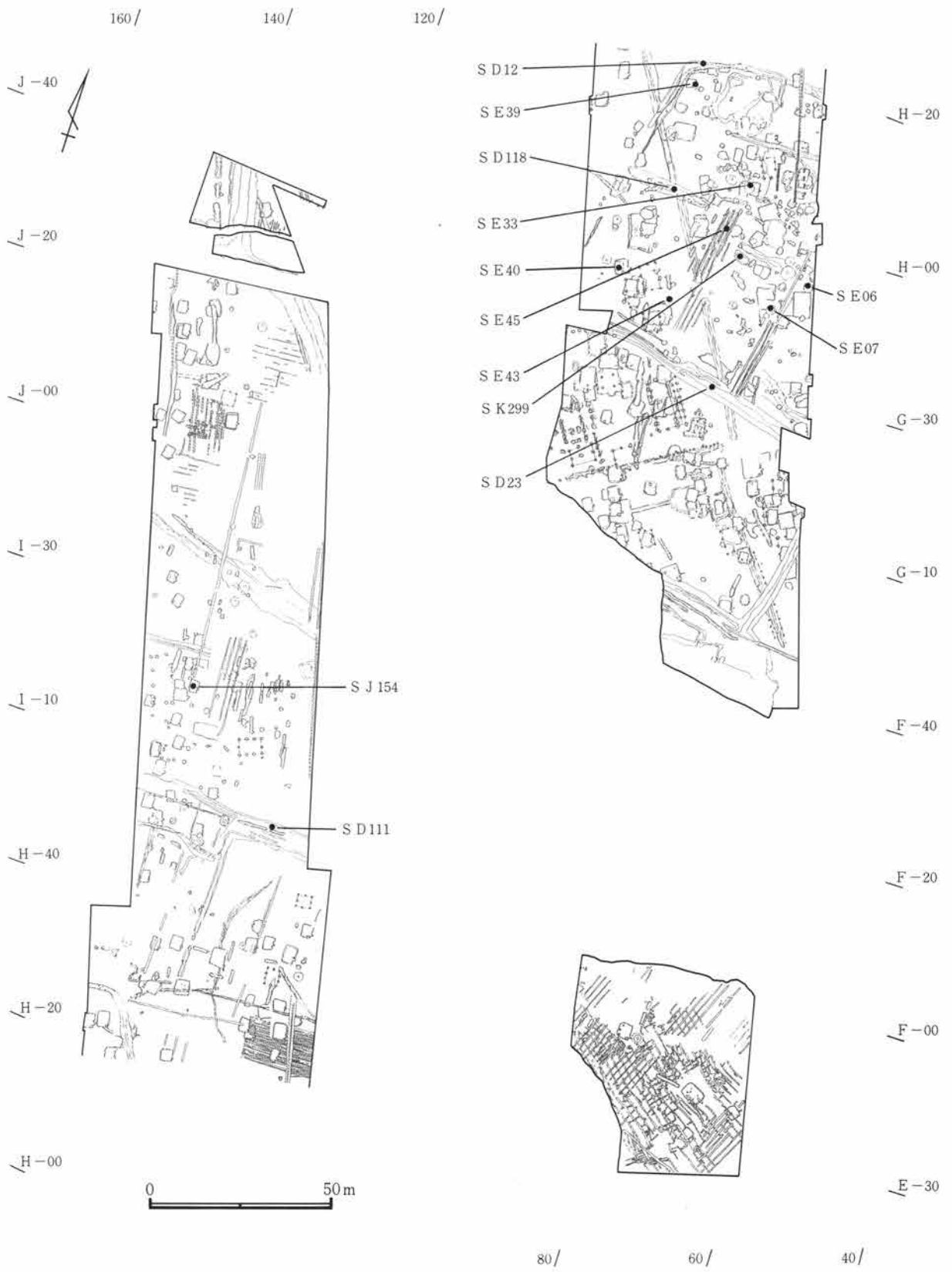
下臼は、13点中8点で、上臼に比べやや破片数が多い。芯棒穴には、2や6のように貫通するものと、4のように途中までの穿孔で済ますものも認められるが、いずれも平面形は円形である。すり合せ部の分画数は、概ね6分画であるが、6のように著しい磨滅で、目無しのものも認められる。底面は、芯棒穴の貫通有無にかかわらず、大きなえぐりが施されている。14はやや特殊なもので、上下面に目を持つ。上下兼用の機能を整えていたと考えられる。

茶臼は、粉挽き臼に比べ破損が進んでいて、16点中で $\frac{1}{2}$ 以上の形を残すものは3点のみであった。上臼は、16点中5点で、上縁高1.2～1.5cm、直径20cm前後と大きさに規格性があり、上面窪みは中央に向い深くなり、供給口を兼ねた芯棒穴へ通じている。挽き手穴は残存状態の良好なものから推測すれば、軸を中心に左右1対の装飾性の強い、平面形が1段あるいは2段の方形座、菱形座、円形座などが存在したようである。茶臼の加工は、側面及び上面窪み面に平行小叩を加え、この面全体に水磨きが施されている。分画は概ね等分画に施され、副溝については16のように7～13本と自由である。

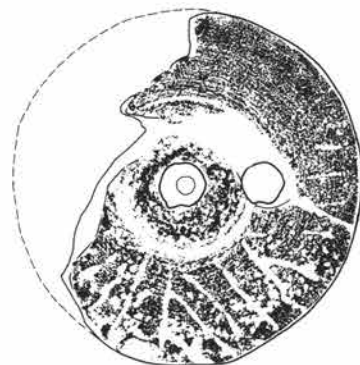
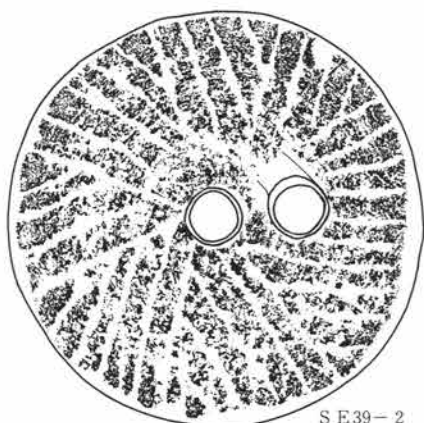
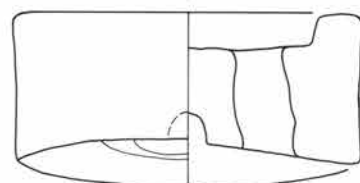
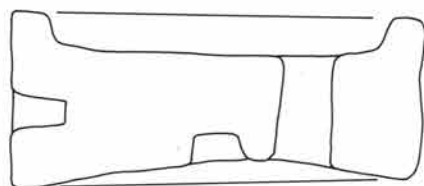
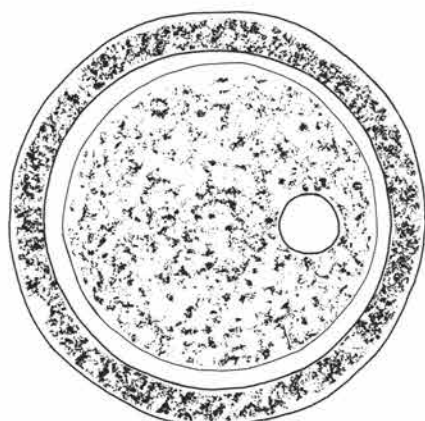
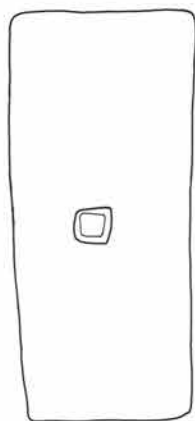
下臼及びはんぎりの破片は、下臼部16点中3点、はんぎり部16点中8点で、上臼に比べ更に破損が進んでいる。下臼は小破片が主であり、分画等詳細は不明であるが残存部から推定すると、上臼のそれに共通するものと考えられる。はんぎりの径は、8点とも大差はなく20cm前後で、側面及び、はんぎり上面には平行小叩後、水磨き加工が施されている。25は、他の下臼と異なり臼の上側面に著しいスレが認められることから、被せ蓋式の上臼の存在を推定させるが定かでない。2次に火を受けている。

石臼に使用している石材は、粉挽き臼、茶臼を問わず粗粒の輝石安山岩を使用しているが、両者では加工に明瞭な差が認められ、前者は実用本意で全体をノミ切り仕上げという荒仕上げで済しているのに対し、後者は更に平行小叩、水磨きまで施している。このことは、明らかに使用する場所の違いが反映されているもので、一方は屋外あるいは土間や厨房で、もう一方は厨房や座敷などでの使用を考慮しているものであろう。石臼、茶臼とも固体間での形式差は認めがたく、ほぼ同年代のものと考えられる。これらの使用年代は共伴する板碑から14～15世紀頃の所産と考えたい。

第4章 調査成果

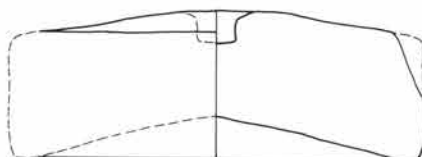
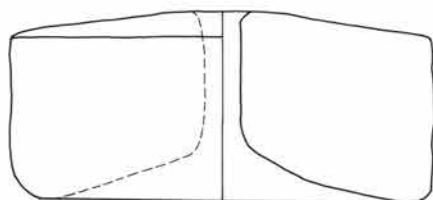


石 臼



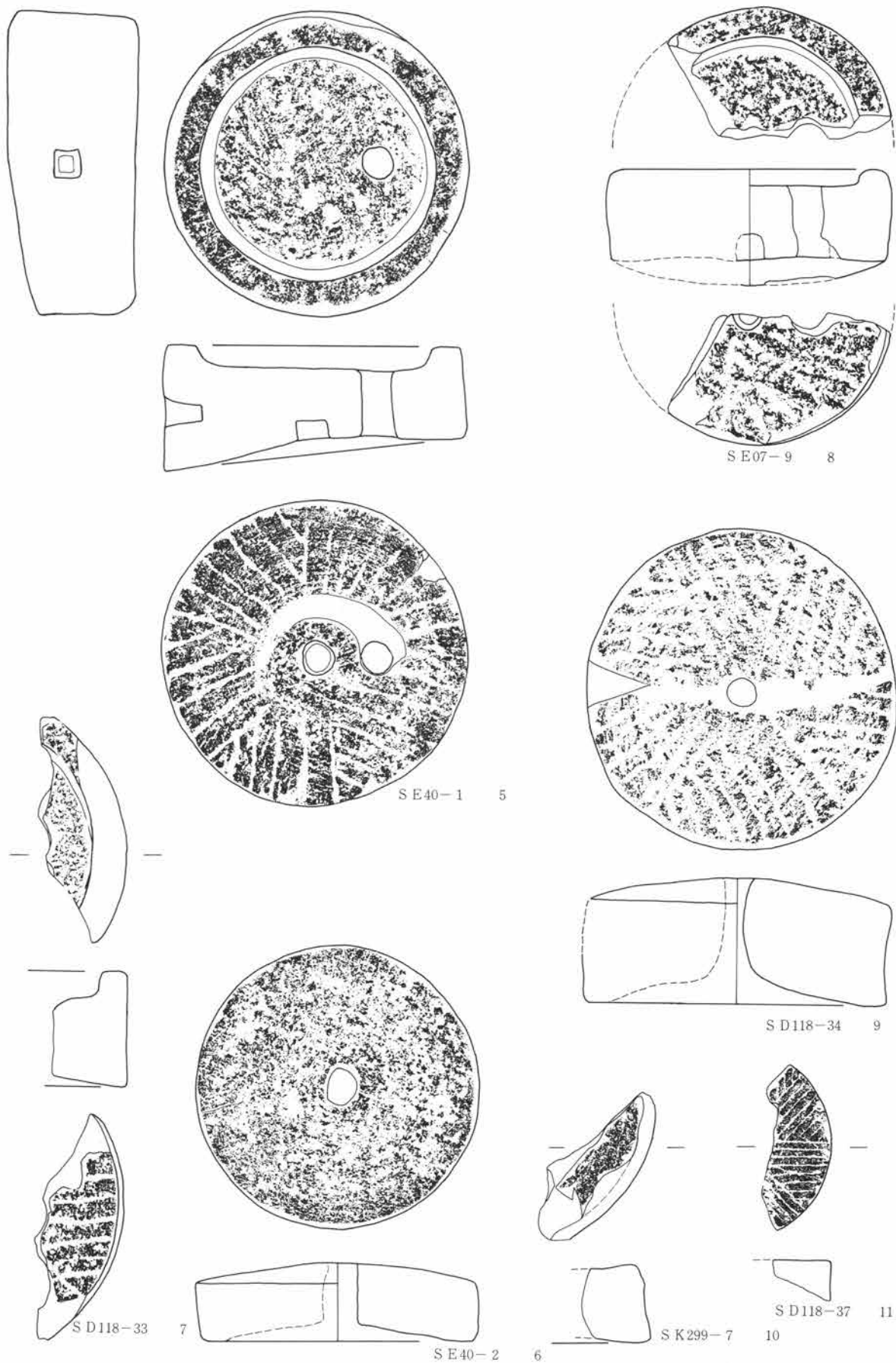
S E39-2 1

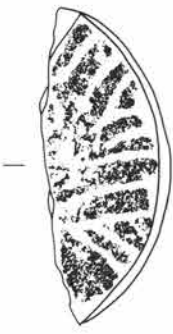
S D12-17 3



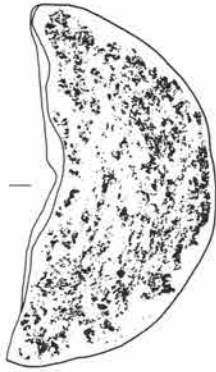
S E39-3 2

S D12-16 4





S D111 12



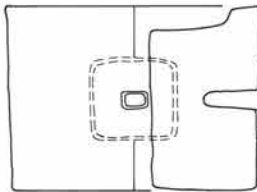
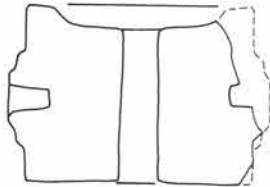
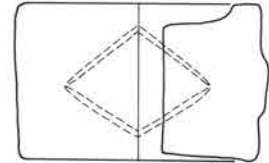
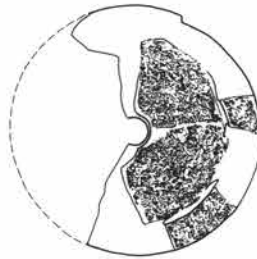
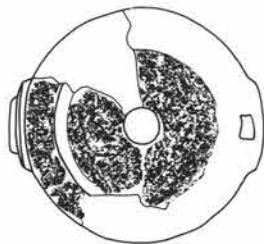
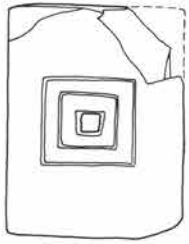
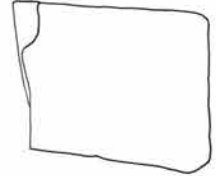
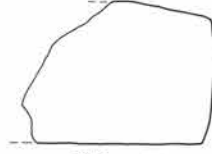
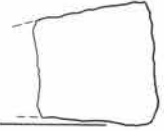
表採 13



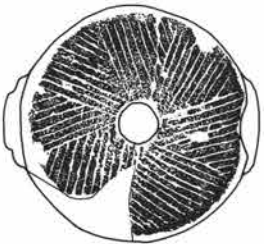
表採 14



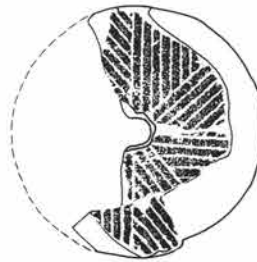
S E43-12 15



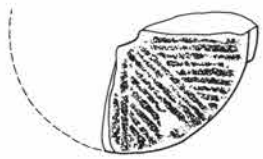
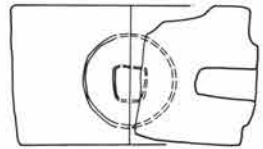
S E07-8 18



S D118-38 16



S D118-35 17

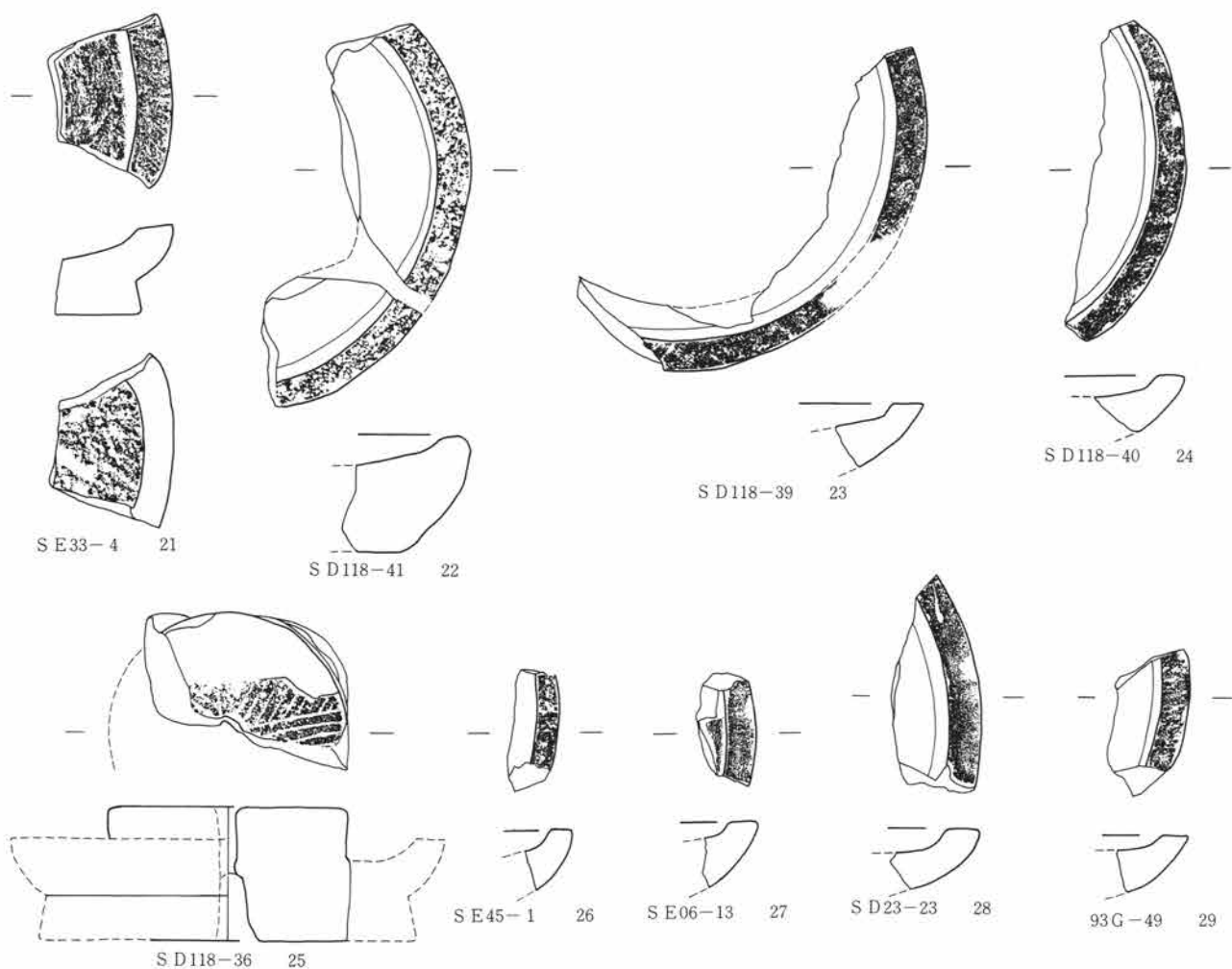


S D12-15 20

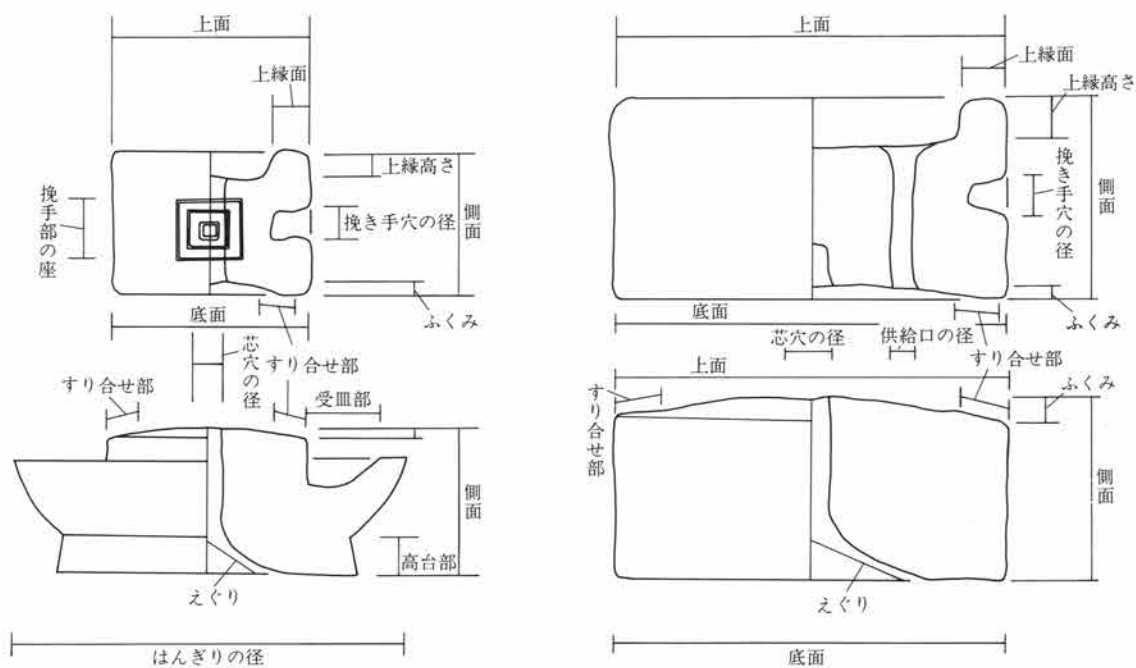


S J154-II 19

第4章 調査成果



石臼模式図



第5節 石製品について

番号	出土遺構	直径φcm 高さHcm	上縁高さHcm 幅Wcm	ふくみHcm 供給口の径φcm	芯穴φcm 挽き手穴の径cm	分画数× 溝数	石材	特徴 ①形状 ②分画 ③挽き手穴 ④芯穴 ⑤供給口 ⑥成形・整形 ⑦備考
1	SE39-2	32.5φ 14.8H	2.6H 2.8W	1.8H 4.5φ	4.5φ 3.2	7×4～ 10本	輝石安山岩 (粗粒)	①著しく片減りした上臼の完形品。②分画の基本溝数は4～5本であるが1ヶ所10本。③歪んだ正方形で丸ノミで穿孔。⑥側面及び上面は敲打仕上げ。底面の分画溝は外側から内側へ時計廻りのノミ切。⑦「こぼれ目」状の溝も認められるが、目立直し前の古い目跡と考えられる。
2	SE39-3	33.5φ 15.0H		1.8H	3.8φ	6×5～ 6本	輝石安山岩 (粗粒)	①下臼の完形品。②分画の基本溝数は5本。2ヶ所6本である。これ以外にも消えかけた溝跡が新しい溝間に認められる。④貫通穿孔。⑥側面は敲打仕上げ。底面えぐり部外縁は敲打仕上げ。芯穴付近は放射状に荒いノミ切り仕上げ。1の上臼と組。
3	SD12-17	27.6φ 11.85H	2.6H 3.4W	1.55H 4.5φ	2.8φ	不明×4 ～本	輝石安山岩 (粗粒)	①挽き手穴部を欠失する上臼。⑤上下両面よりノミ切穿孔され、穴にズレが生じている。⑦供給口側が著しく磨滅していて、目も部分的に消えかけている。
4	SD12-16	33.0φ 11.8H		2.2H	3.2φ	6×5～ 本	輝石安山岩 (粗粒)	①周縁部を欠失する下臼。②基本分画溝数5本。④丸ノミによる部分穿孔。⑥側面敲打仕上げ。底面えぐりは荒いノミ切仕上げ。すり合せ部の磨滅顕著
5	SE40-1	31.0φ 13.4H	2.3H 3.5W	1.7H 3.2φ	3.4φ 3.0	4×5～ 15本	輝石安山岩 (粗粒)	①著しく片減りした上臼完形品。②本来6分画の割付けに対し、1+3分画の特異なもの。③ほぼ正方形のノミ切穿孔。④ノミ切穿孔痕あり。⑥側面及び上面は敲打仕上げ。6の石臼と井戸底面より出土。
6	SE40-2	29.6φ 8.5H		2.1H	3.5φ	目無し	輝石安山岩 (粗粒)	①片減りの著しい下臼完形品。②目無し。④上下両面からのノミ切貫通穿孔。⑥側面敲打仕上げ。底面のえぐりは不規則方向からの荒いノミ切。⑦すり合せ面は目無しで芯穴付近2/3は敲打仕上げ。すり合せ部の磨滅著しい。5の上臼と組。
7	SD118-33	(33.0φ) 12.0H	2.5H 2.8W	(1.0)H (4.0)φ		不明×(6) 本	輝石安山岩 (粗粒)	①上臼の1/3程の破片。④上下両面からのノミ切貫通穿孔。⑦すり合せ部の磨滅あり。
8	SE07-9	(29.5φ) 9.5H	1.7H 3.0W	0.5H 3.3φ	2.7φ	不明×(4) 本	輝石安山岩 (粗粒)	①上臼の1/3程の破片。⑤上下両面からの穿孔で食い違いが生じている。⑦すり合せ部の磨滅が著しい。
9	SD118-34	33.3φ 13.0H		2.0H	3.0φ	6×6～ 8本	輝石安山岩 (粗粒)	①中央で割れているが完形に近い下臼。④貫通穿孔。⑥側面ノミ切りの敲打仕上げ。えぐり部は不定方向からの荒いノミ切り仕上げ。
10	SK299-7	8.0H				不明	輝石安山岩 (粗粒)	①下臼の小破片。
11	SD118-37	(19.0)φ				不明×8 本	輝石安山岩 (粗粒)	①茶臼下臼の小破片。⑥側面水磨き仕上げ。⑦すり合せ部の磨滅が進んでいる。
12	SD111	(27.0)φ 9.7H				不明×(4) 本	輝石安山岩 (粗粒)	①下臼の1/4程の破片。⑥側面に敲打痕。えぐり部は荒いノミ切。
13	表採	28.8φ 8.8H		0.8H		目無し	輝石安山岩 (粗粒)	①下臼1/2程の破片。②目無し臼。⑥側面及び裏面えぐり部に敲打痕。⑦すり合せ部の磨滅顕著。
14	表採	(2.8)φ 11.3H		1.3H		不明×3 ～本 不明×6 ～本	輝石安山岩 (粗粒)	①上臼(下臼)1/3破片。②上下両面に目を持つ。⑥側面に敲打痕あり。⑦上面すり合せ部の磨滅が顕著。下面にふくみは認められず、平坦。下面すり合せ部は上面ほど磨滅していない。

第4章 調査成果

番号	出土 遺構	直径φcm 高さHcm	上縁高 さHcm 幅Wcm	ふくみH cm・供給口 の径φcm	芯穴φcm 挽き手穴 の径cm	分画数× 溝数	石材	特徴 ①形状 ②分画 ③挽手穴 ④芯穴 ⑤供給口 ⑥成形・整形 ⑦備考
15	SE43 -12	(31.0)φ 18.5H		1.4H	2.8φ	不明×5	輝石安山岩 (粗粒)	①下白1/4破片。④上下両面方向より穿孔されているが、上部で食い違いが生じている。⑥側面敲打仕上げ。えぐり部ノミ切仕上げ。
16	SD118 -38	18.6φ 13.9H	1.2H 2.3W	0.25H	3.0φ 左2.2φ 右2.2φ (推定)φ	7×7～ 13本	輝石安山岩 (粗粒)	①縁の一部を欠損しているがほぼ完形の茶白(上白)。②分画の溝数は、7、10、11、13本と不規則。③挽手穴は正方形で、2重の正方形座が1対付く。⑥挽手穴は平ノミ状工具による穿孔。上面及び側面、挽手穴の座も含め全面水磨き仕上げされている。
17	SD118 -35	20.4φ 14.6H	1.4H 2.5W	0.2H	3.1φ 1.8×2. 2φ	(8?)× 7～8本	輝石安山岩 (粗粒)	①茶白1/2破片(上白)。③挽手部の座は剥離している。⑥上面水磨き。側面は平ノミ状工具による小叩き痕仕上げ。
18	SE07 -8	19.2φ 12.3H	1.4H 2.3W	0.5H	3.8φ	不明	輝石安山岩 (粗粒)	①茶白1/3破片。②分画及び溝の割付けに規則性無し。③挽手部の座は菱形。⑥上面水磨。側面小叩後水磨き。
19	SJ154 -11	(19)φ				不明×9	輝石安山岩 (粗粒)	①茶白小破片(上白)。⑥上面水磨。側面は剥離して不明。
20	SD12 -15	(19.6)φ 11.0H	1.1H 3.0W	0.6H	2.0φ 2.6φ	不明×10 本	輝石安山岩 (粗粒)	①茶白1/4破片(上白)。③挽手穴は方形。座は1重の円形。⑥上面及び側面水磨き。
21	SE33 -4	(3.5)φ (7.4)H					輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部破片。⑥皿面、上縁、側面、高台側面すべて水磨き仕上げ。底面は中央に向う放射状ノミ切り。
22	SD118 -41	(4.0)φ					輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部破片。⑦使用石材が質の悪い多孔質の為加工痕等詳細不明。
23	SD118 -39	(38)φ					輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部破片。⑥皿面、上縁面水磨き仕上げ。側面は平ノミ状工具で刻むように仕上げる小叩仕上げ。
24	SD118 -40	(38)φ					輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部破片。⑥上縁面～皿面は水磨き仕上げ。側面は小叩仕上げ。
25	SD118 -36	(19.5)φ		1.2×1.5 φ		不明	輝石安山岩 (粗粒)	①茶白下白部1/3破片。④芯穴は上下両面からの平ノミ状工具による穿孔。孔に食い違いが生じている。⑦白下側部には受皿剥離痕が残るが、上側部には著しい磨減が認められる。このことから上白が被せ蓋式の変形茶白とも考えられる。上面は2次的に火を受けている。
26	SE45 -1						輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部小破片。⑥皿面～縁部～側面すべてが水磨き仕上げ。
27	SE06 -13						輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部小破片。⑥皿面～縁部～側面すべてが水磨き仕上げ。
28	SD23 -23						輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部小破片。⑥残片の剥離面以外すべてに水磨きが認められるが、特に皿面、縁面は丁寧な水磨き。
29	93G- 49						輝石安山岩 (粗粒)	①茶白受皿部小破片。⑥皿面、縁面は水磨き。側面には水磨き確認しづらい。

4 板 碑

本遺跡出土の板碑は完形品、破片も含め62点の出土があり、明らかに個体を別にする板碑36点以上が存在していた。この内、種子は、62点中23点にあり阿弥陀三尊、あるいは阿弥陀一尊または、両者いずれかの部分破片である。紀年銘あるいはその痕跡の確認されるものは、「延文二年二月十三日 丁丙 年五十六 妙勝」の1と、右下半分破片に「甲」の認められる11、「二月十日」と判読できる8の3点のみであり、62点の板碑の中でも1・2は頂部山形の均整が取れた直線的な仕上げで、山形直下には2条線の割付け毛描線と、同位置左右側面に刻みが、また53にも2条線割付け毛描線が認められ、56は破片ながら頂部山形が直線的で、1・2・53に比べやや鋭角であり、山形直下の2条線は浅いながらも明瞭に彫られている。種子の彫りは、1・2・56とも深い葉研彫で、「キリーク」の「イ」の末端が「ク」の下まで伸びていて、2には磨き出された2重の界線が、種子直下には光明真言が彫られているなど、丁寧な点も目立つ。この内1・2・56には、界線や光明真言の有無、2条線の簡略化など幾つかの相違点は介在しているものの、板碑間にはさほどの年代差は存在せず、この種の板碑が本遺跡での板碑造立開始時期を示すもので、53は、これらに続く時期のものと考えられる。残りの大半の板碑は、頂部山形や全体の形が不整形で、2条線も認められず、種子も断面形が浅い半円形で「キリーク」の「イ」が「ク」の点の間に入り、碑表面も必ずしも平滑ではなく、更に年代の降るものであろう。

(注1)
板碑の石材はすべて緑泥片岩の範中に入るものではあるが、細分すると、緑色片岩45点で全点数の73%、黒色片岩15点で24%、雲母石英片岩2点で0.3%となり、古手の板碑は緑色片岩で良質の石材を使用し、剥離面が平滑で、石目の整っているなど、原材の選定に配慮の計られていたことが窺える。

板碑に認められる石材加工痕跡は、裏面に1～2種類の、まれに、5のように表面にも加工痕を留める場合もあるが、一般的に平ノミ状工具痕である。これは板碑原材を版状に切り出し、平滑面を表面に使用し、裏面は板碑の大きさに合わせた厚みに調整する際付くもので、表面に平ノミ状工具痕や荒い凸凹が認められるのは、質の良くない石材でも少し手を加え製品化すれば処分可能となった時期のものと考えられる。

さて、加工の面から若干の問題を含むものとして、1がある。1は、14世紀中頃の一般的な紀年銘板碑であるが、紀年銘の「延文二年二月 丁丙」までと、「十三日 年五十六 妙勝」の彫り方の間に以下の差異が認められる。

- 1 「延文二年二月 丁丙」は一見して力強い彫りで、断面が浅いV字形の葉研彫である。これに対して、「十三日 年五十六 妙勝」は達筆ではあるがやや細い断面U字形の浅い彫りになっている。
- 2 前者の「二年二月」の二の2画目の「一」の筆の打ち込みと、抜きがやや誇張気味ですらあるのに比べ、後者の2画目あるいは3画目の「一」ではこのことが顕著でない。
- 3 前者の「延文二年」の「年」には正字が使用されているが、「年五十六」には異体字の「𠂔」が使用されている。ここで使用されている異体字の「𠂔」は、当初「卒」とも考えたが、本遺跡近くに推定地が求められている東覚寺由来の鐘銘文中の1部に「曆應元年^{戌寅}・十二月廿一日」の「𠂔」に同じであることが判明している。^(注2)

これに類する例は、多摩ニュータウンNo.742遺跡でも「種子、蓮台、花瓶が同一形態を示しながらも紀年銘の表記方法が若干異なるものも認められる。」として確認はされている。^(注3)しかし本遺跡出土の1では紀年銘の表記そのものに明らかな差異が認められることから若干問題を異にしていると考えられる。仮に紀年の年月まで彫ってあるものを「妙勝」なる人物の関係者が手に入れた時点で年月までをそこで新たに注文で彫らせ

第4章 調査成果

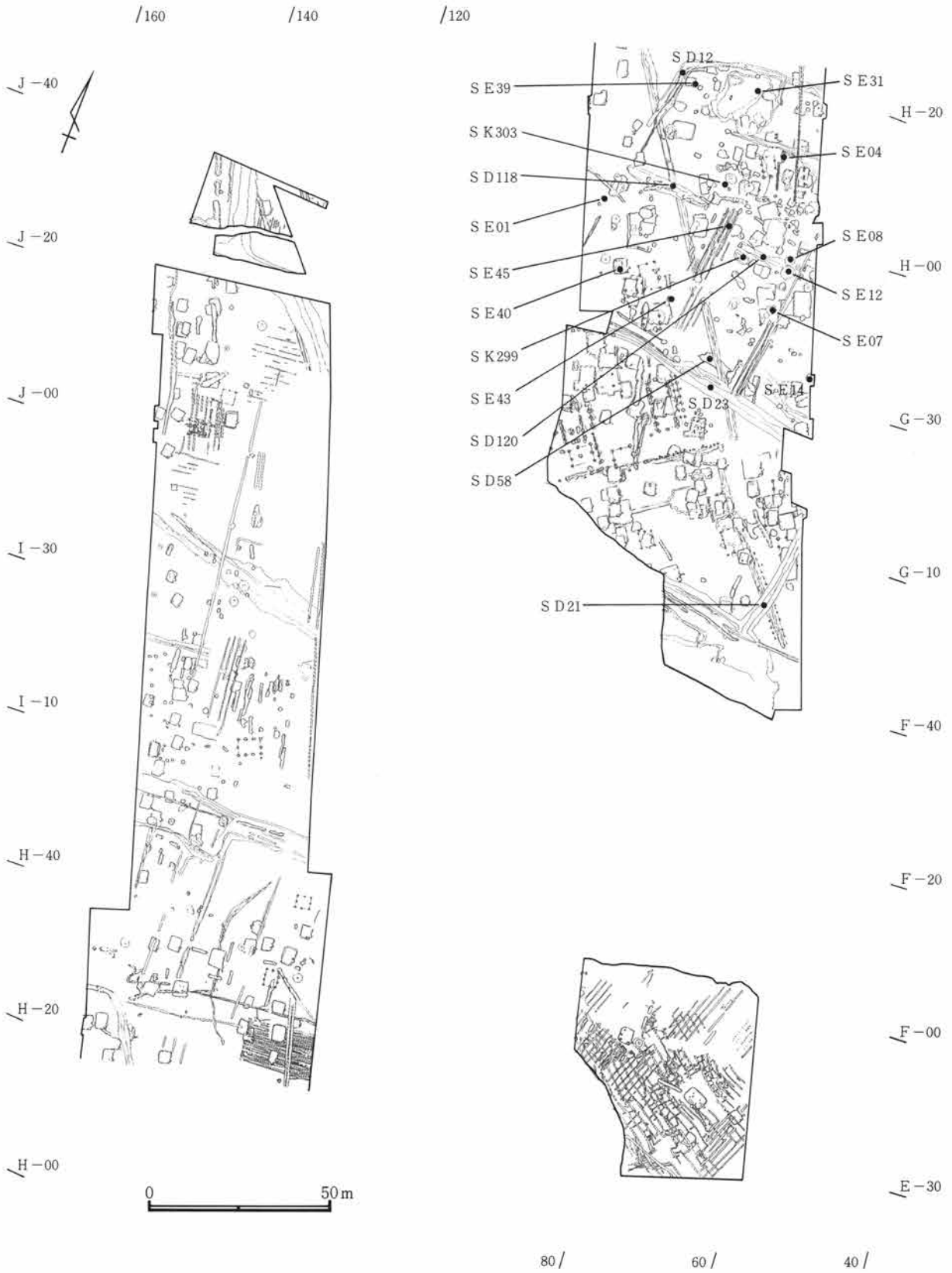
たのか、既製品として流通していたものを入手したものを持帰り追刻したかでは大きな違いがある。仮に年月までのみを彫った板碑が流通していたとすれば、月間購売数を把握しての計画生産したとも考えられるからである。本板碑の「年月」の「年」と「年」の間には、正字と異体字の問題もあり入手後使用地での追刻の可能性を窺わせていないだろうか。いずれにせよ同種の資料の増加を待って再考したい。さてここで視点を変え、本遺跡での板碑の廃棄について考えてみたい。本遺跡から出土している板碑は、井戸出土が35点で全体の56%を占め最も多く、次いで溝出土15点24%、土坑出土の10点16%、グリッド取上げの2点である。板碑の存在状況は、完形品、あるいはほぼ完形品に近いもの19点で全板碑62点中の30%であり、特にこの19点の内の17点、実に完形品の約90%は井戸内出土のものであった。溝出土の板碑はすべて破片で、破片同志での接合関係が認められないことから、破損していた板碑が他の不用礫と同様な扱いで廃棄されたものと考えられる。土坑出土の板碑の53・57は造立場所と検出場所の関連を考える上で重要なものである。井戸出土の板碑を見ると、1～2枚あるいは2～3枚までを単位として、多いものではSE43のように16枚が一括して井戸の底部から重なり合って検出されている。SE39では、磨滅はしているものの使用可能な石臼と、完形品の十分使用可能な石鉢が底に投げ込まれた後、やや間層をおいた井戸中位部より3枚の板碑が出土している。SE14では井戸下位部に2枚の板碑があり、2m以上に近い間層を狭んだ井戸上位部から五輪塔が出土している。板碑を廃棄するに当たって積極的な廃棄場所の掘鑿等は行わず、既存の古井戸へ目に付いた範囲にのみ存在していたものを、一度にすべてを捜し出してまで処分するのでなく、幾度となく繰返し長期間に渡り廃棄がなされたと考えられる。板碑の廃棄された時期は、井戸内共伴遺物の年代観から見て、必ずしも古い板碑が先に廃棄されたと云うものではないようで、手近に存在したものをそのつど処分したと考えられる。他の共伴遺物から、SE08出土13・14・15、SE14出土5・16が15世紀の後半に廃棄され、最も廃棄が盛んに行なわれたのは16世紀に至ってからで、SE43の16枚の板碑もこの頃の廃棄と考える。この頃の上州は機会あるごとに越山してくる上杉や、甲州の武田、相模の北条ら戦国大名の戦場となった時期で、これらの動きと無関係とは考えられず、現に、当遺跡周辺に推定地を持つ東覚寺の推鐘が天文十二年に信州佐久の神宮寺へ寄進されていることがそのことを暗示している。この時代前後を中心とした時期に、墓、あるいは関連寺院を維持管理してゆくべき人々に社会的変化が生じ、五輪塔や、板碑の廃棄に拍車がかかったことも考えられる。

最後に板碑造立場所の推定であるが、本遺跡内から数基の土坑墓は検出されているが、板碑および五輪塔の持つ年代観との差があり別箇所での使用を考えなければならない。板碑および五輪塔は、SD12、SD23に囲まれた範囲よりの出土が主で、この中に存在する遺構で石製品と分布範囲の重複する遺構には、竪穴状土坑があり、SK304入口部からは2点の板碑と2個の円礫が出土している。53・57の出土状況は、基部を下に向け落ち込んだ状態である。この他にも土坑内出土の板碑は存在してはいるが、いずれも破片であり造立位置を示すものではない。果して53・57がどう立てられていたか不明ではあるが、2個の大きな円礫の存在から、大胡町茂木古墓^(注4)、あるいは前橋市富田古墓^(注5)の板碑のように、この礫を台石として使用して入口付近に立てられていたものが流れ込んだとも考えられるが、今後の類例の発見を待ちたい。

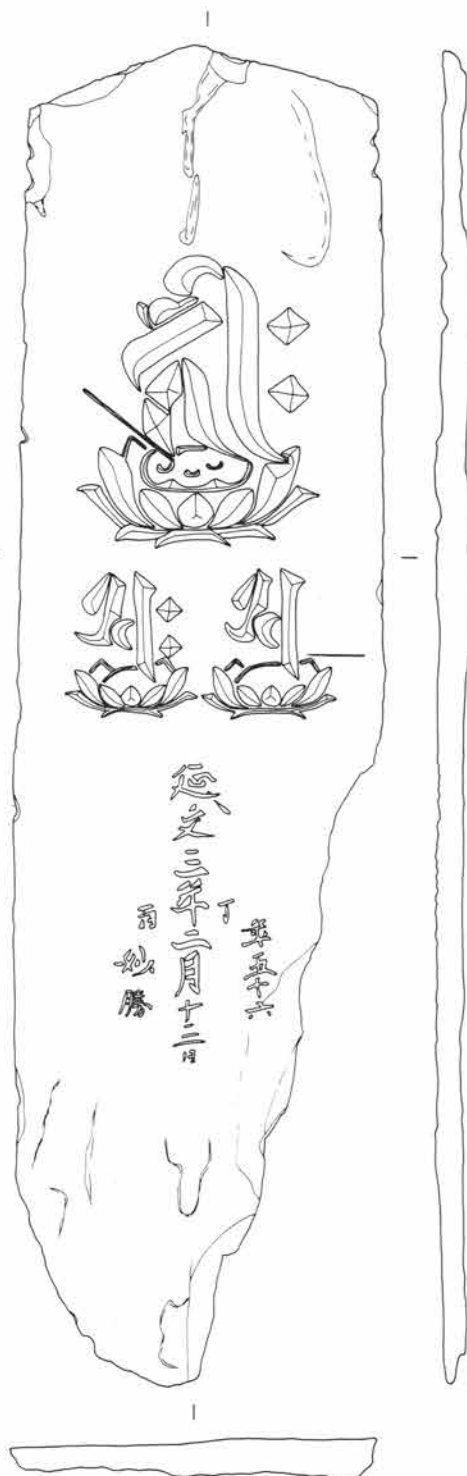
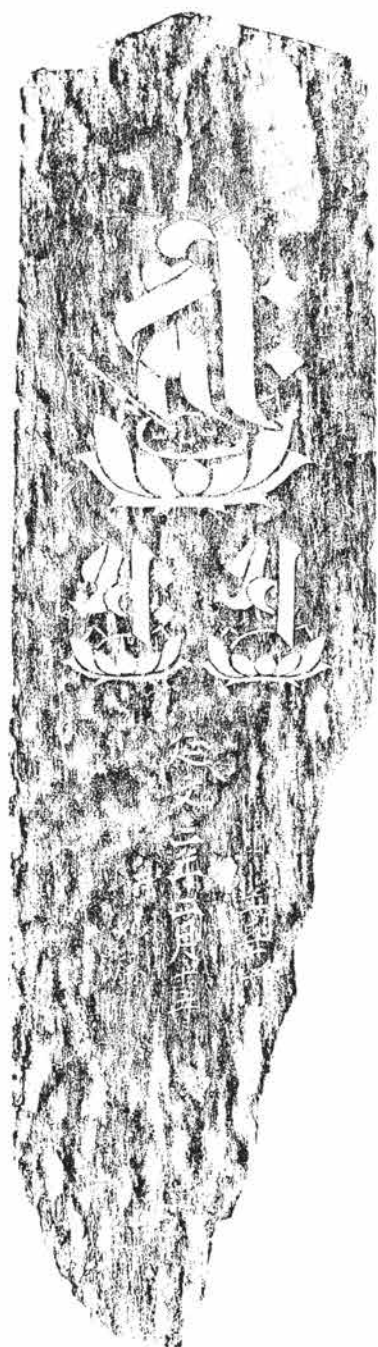
注

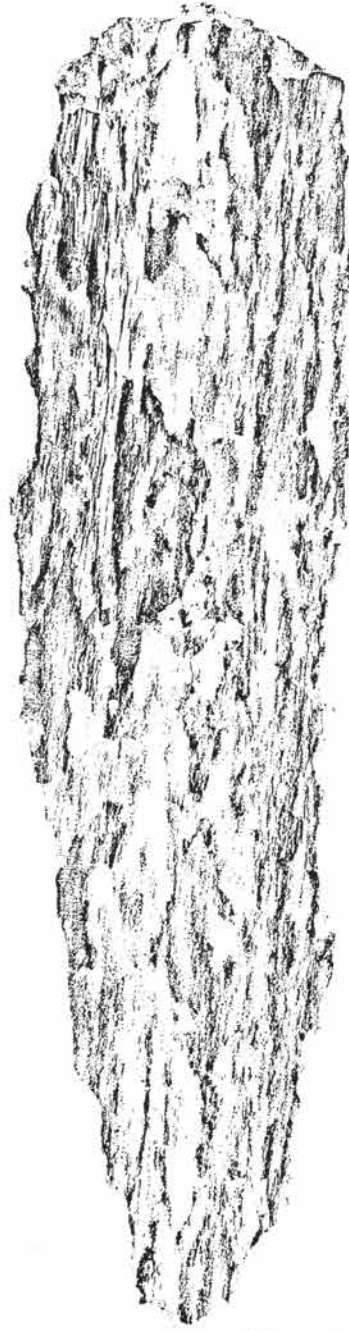
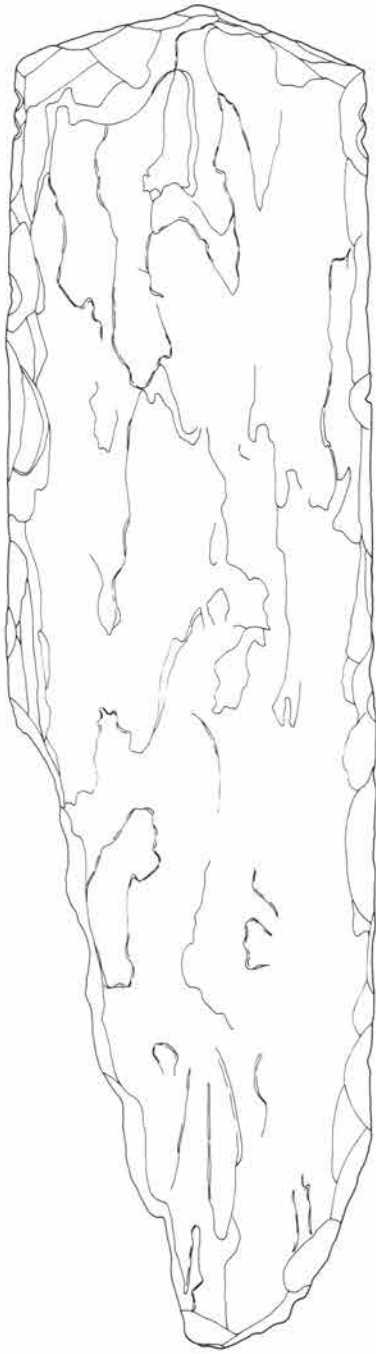
- (1) 石材の鑑定は、飯島静男氏による。
- (2) 「南閩浮提大日国上野国群馬郡高井郷東覚寺推鐘曆應元率戊寅十二月廿一日大工浄圓當寺衆徒等觀進沙門良義本願主昌助藤原龜之丸 信州佐久郡田口神宮寺且那田口左近將監長能奉寄進新海大明神御宝前天文十二年癸卯十一月吉日」
群馬県立歴史博物館『群馬ゆかりの文化財』1983年
- (3) 江里口省三『多摩ニュータウン遺跡』第5集 1984年
- (4) 大胡町誌編纂委員会『大胡町誌』1976年
- (5) 前橋市教育委員会『富田遺跡群』1980年

第5節 石製品について

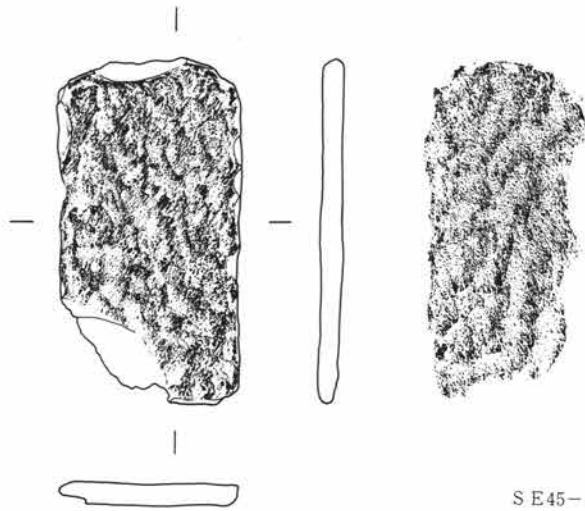
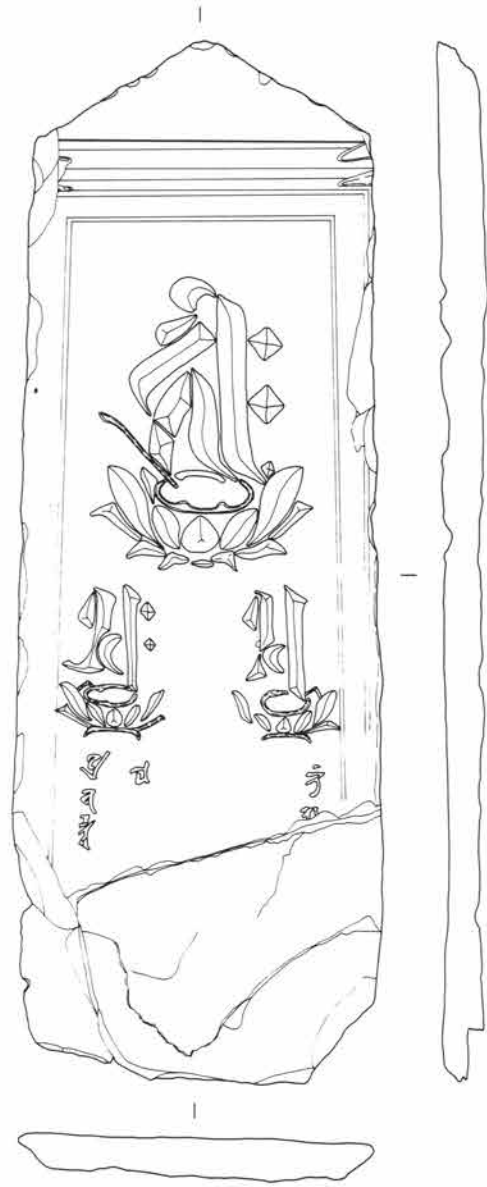
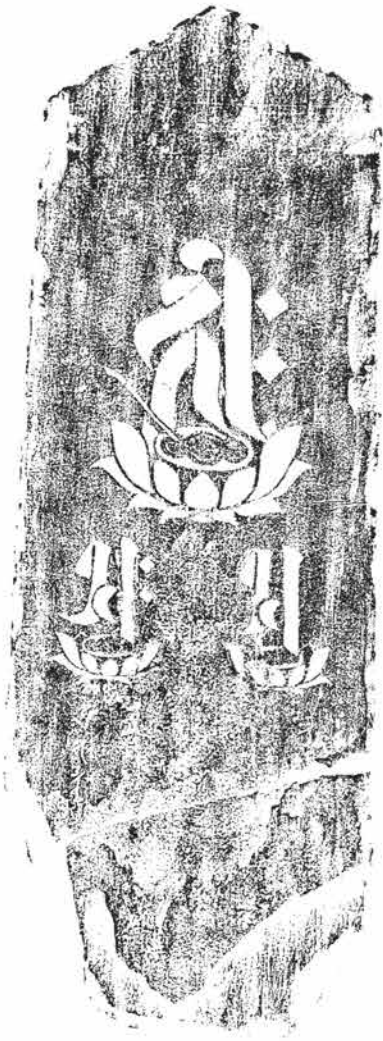


板 碑

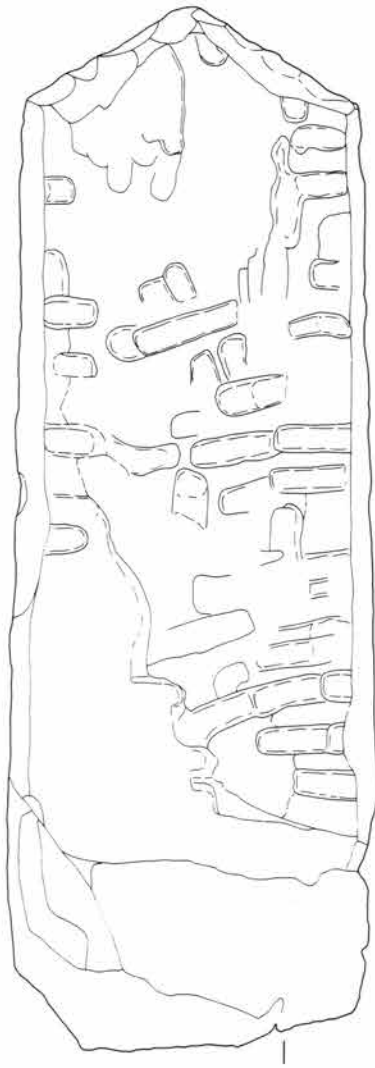




S E04-1 1



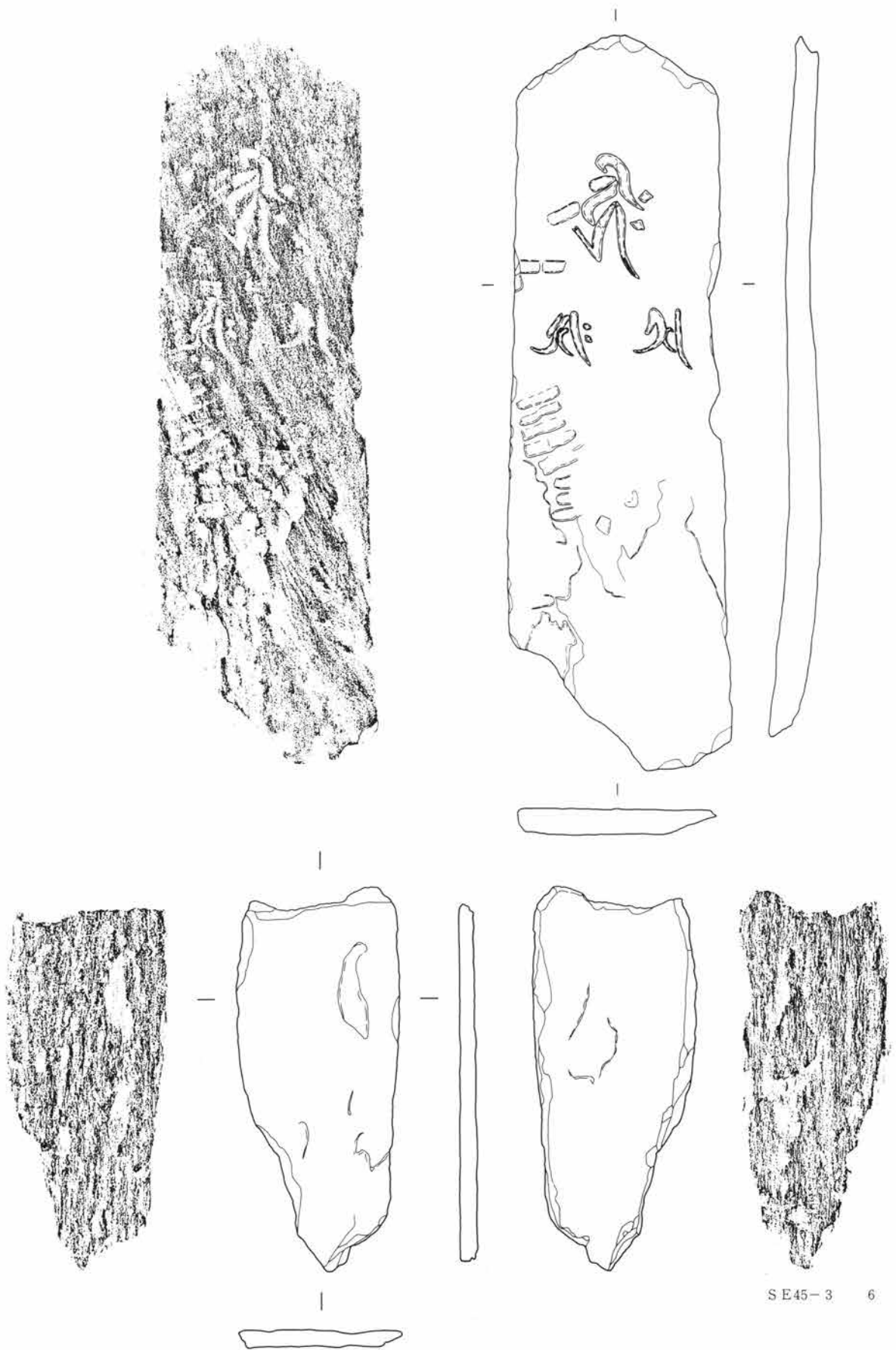
S E45-4 4



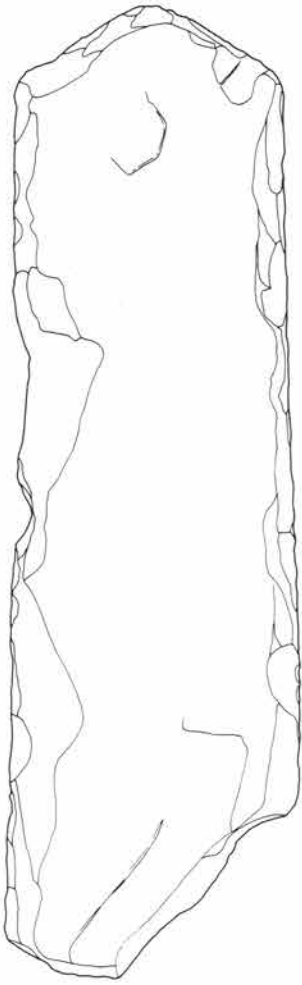
2



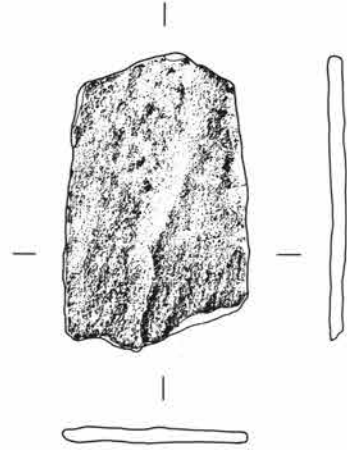
S E31-2 3



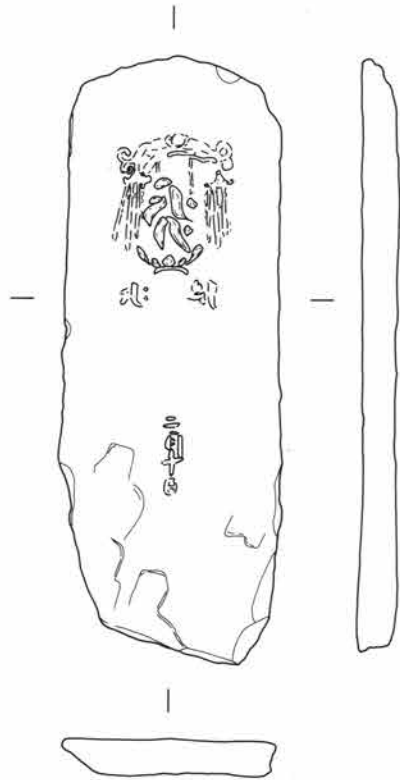
第5節 石製品について



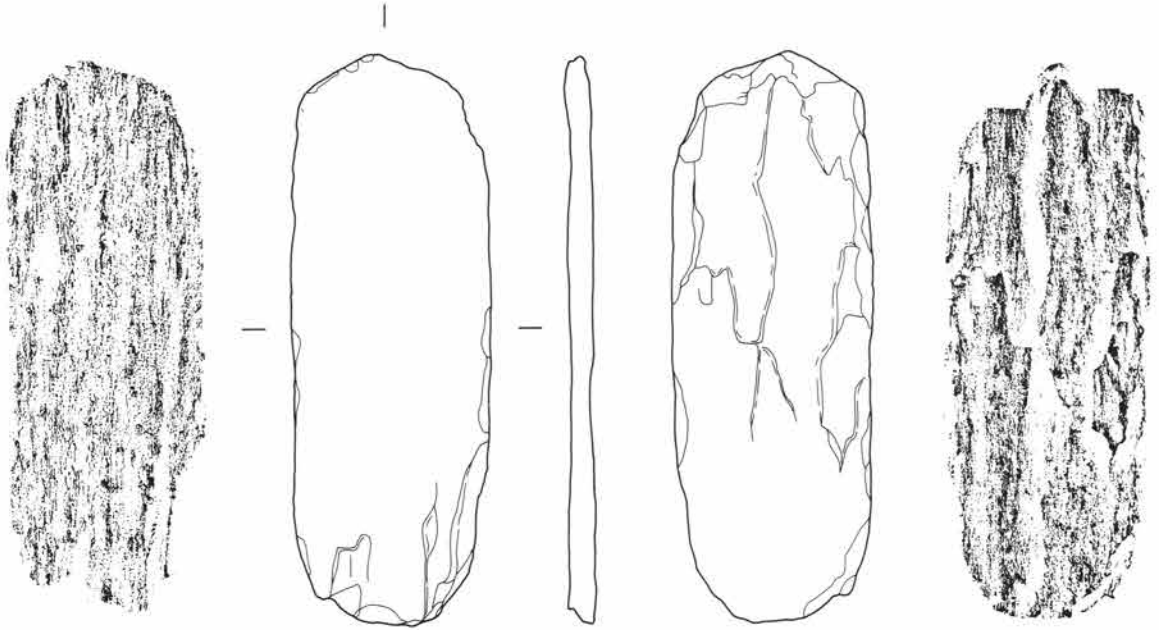
SE14-9 5



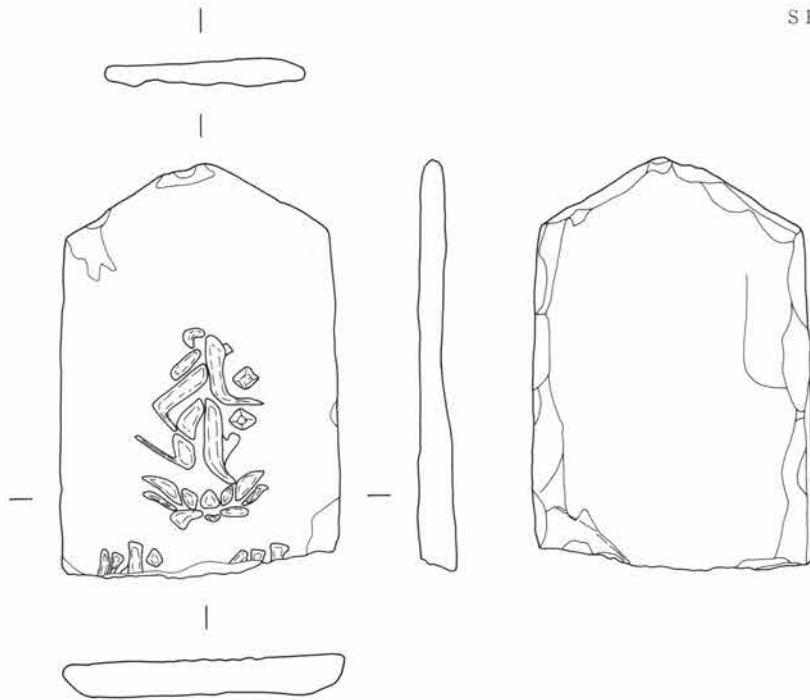
SE40-3 7



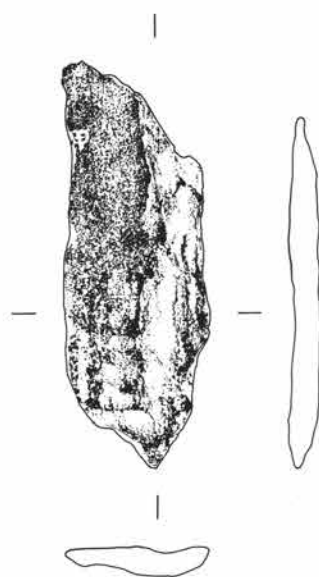
SE40-4 8



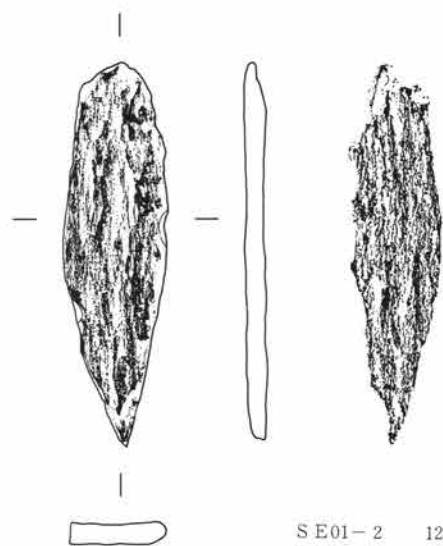
SE40-5 9



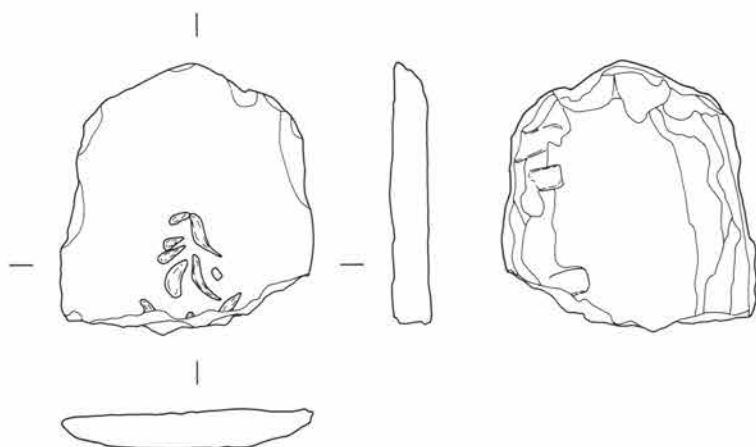
SE07-10 10



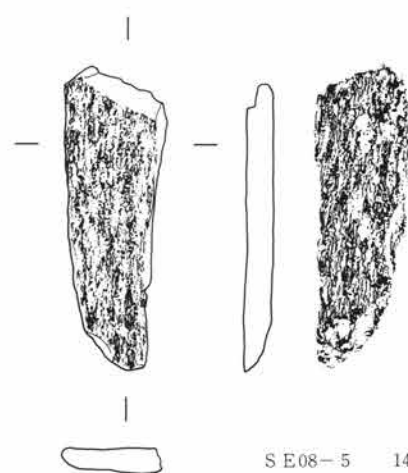
S E01-1 11



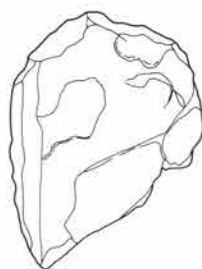
S E01-2 12



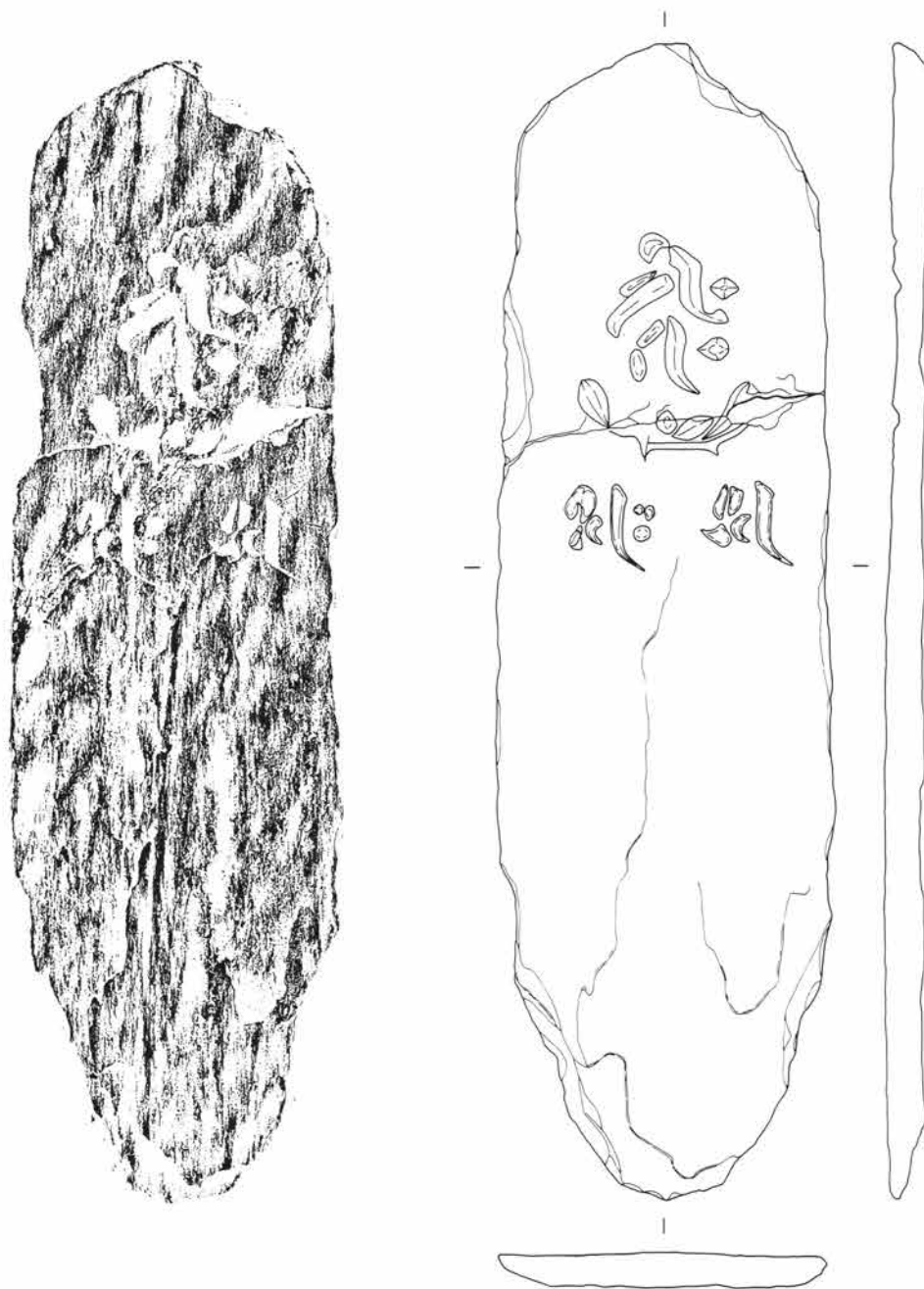
S E08-4 13

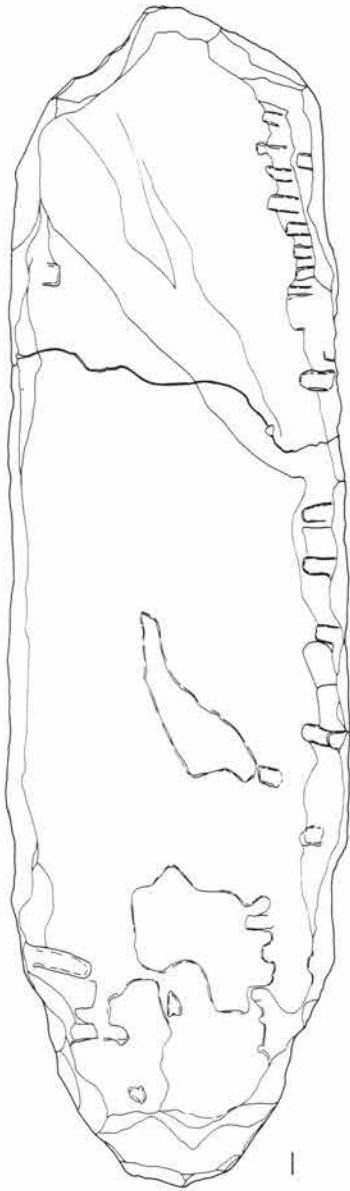


S E08-5 14

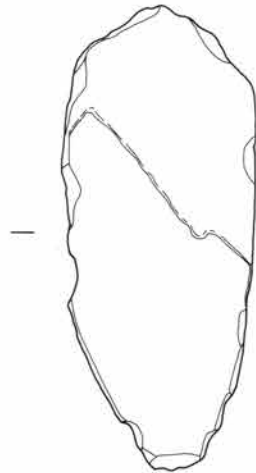
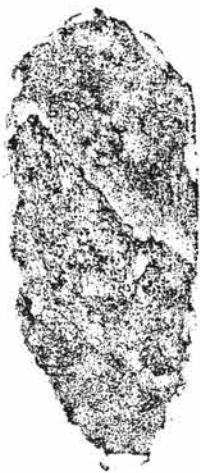


S E08-6 15

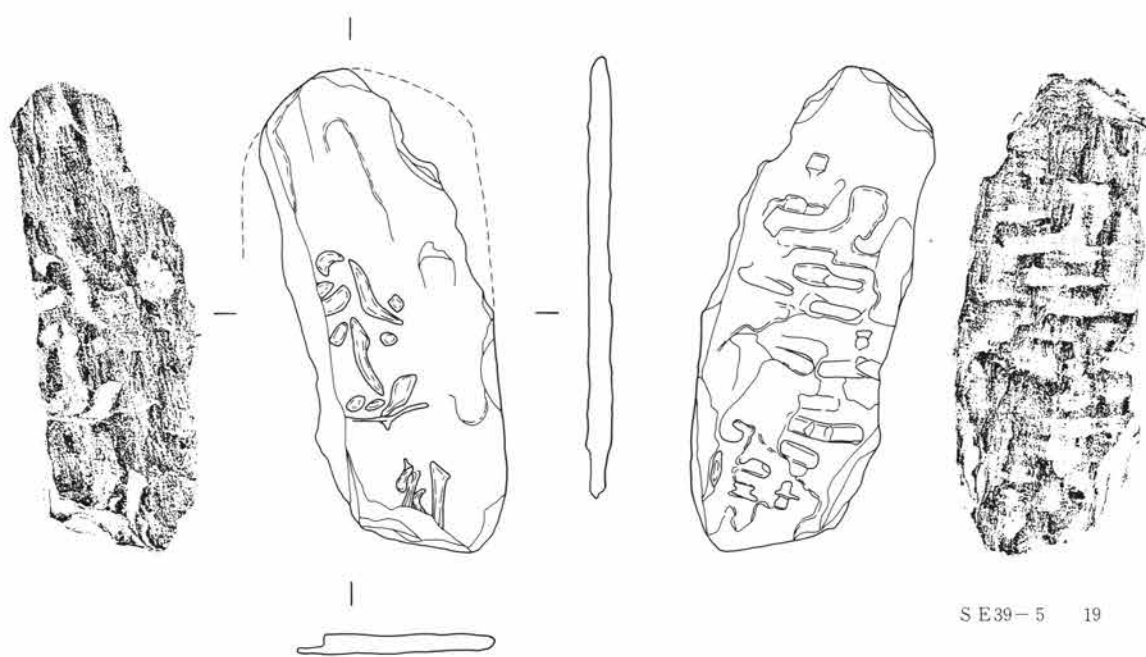
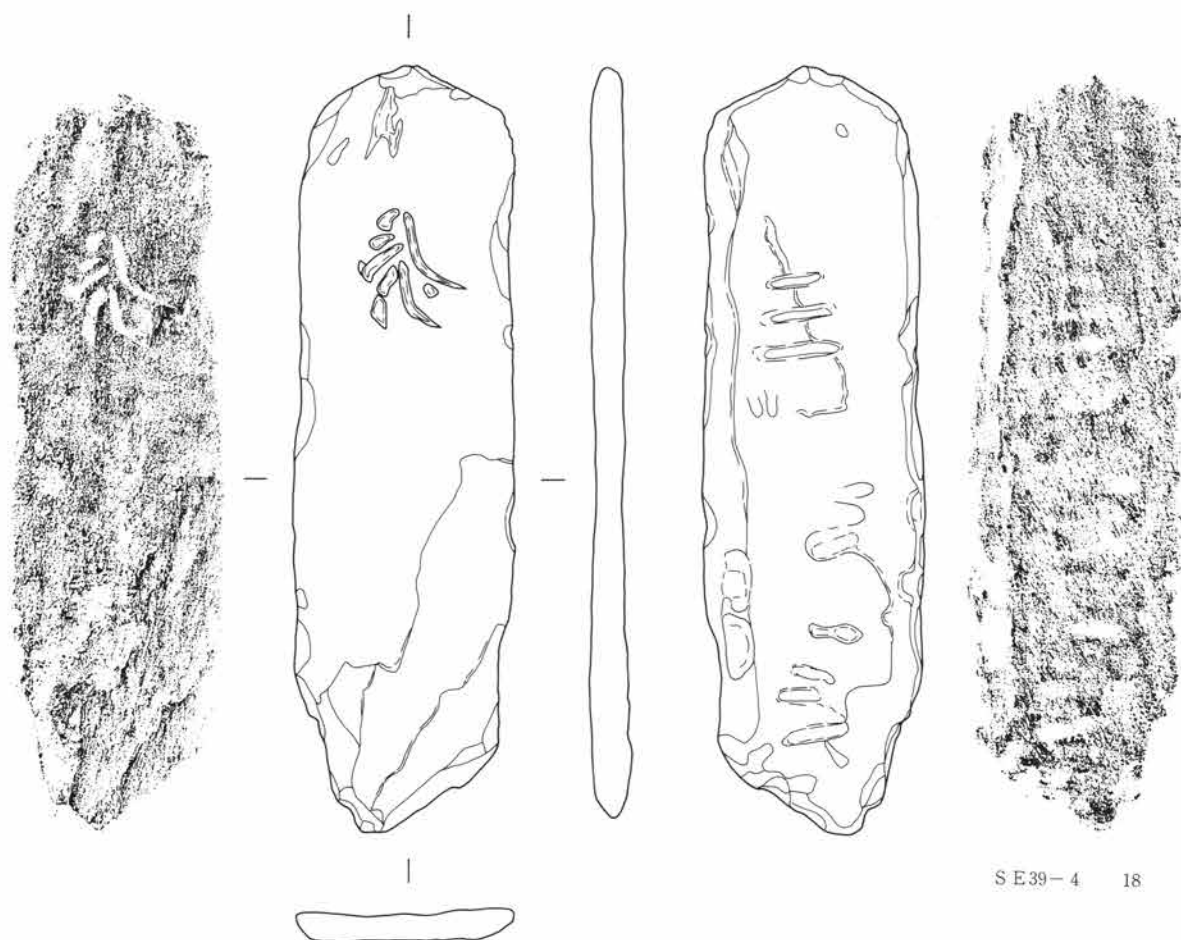




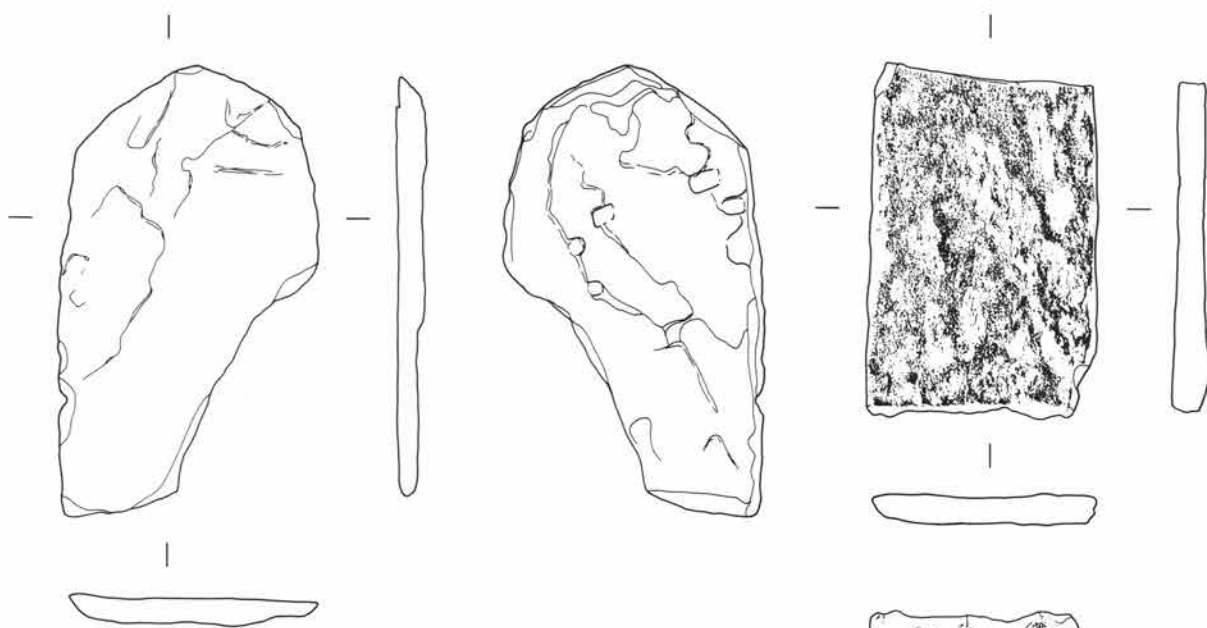
SE14-8 16



SE39-6 17

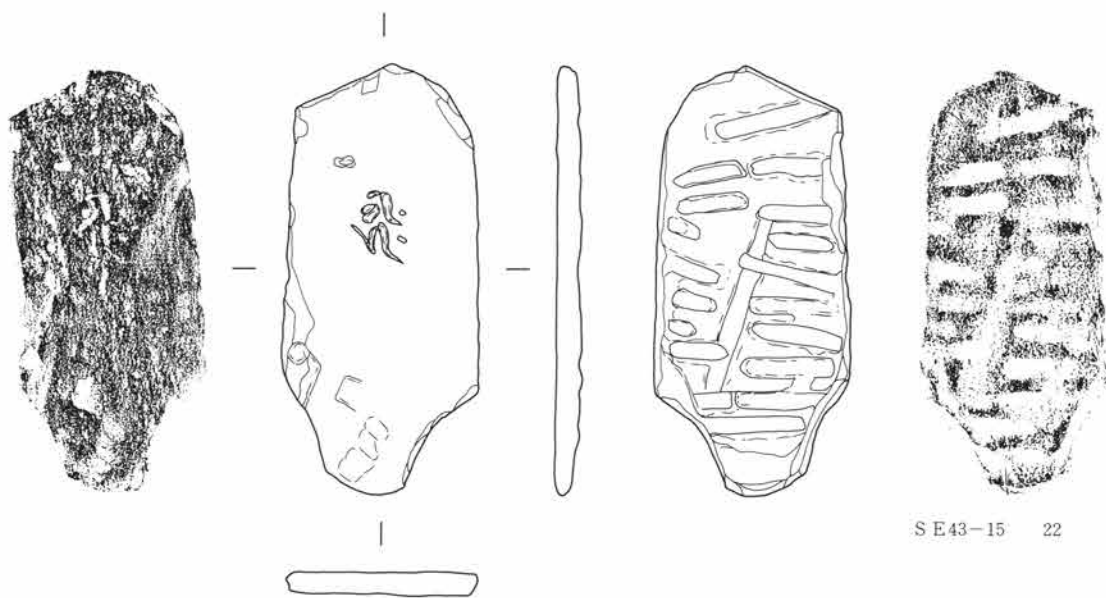


第5節 石製品について

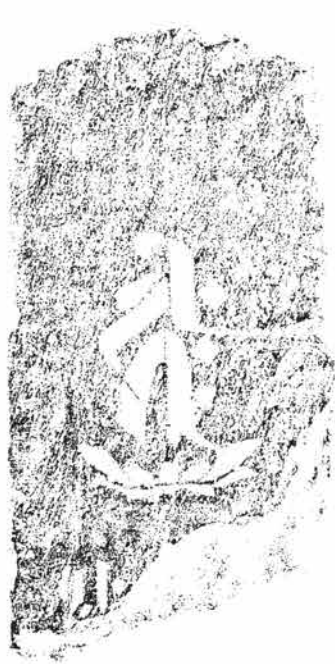
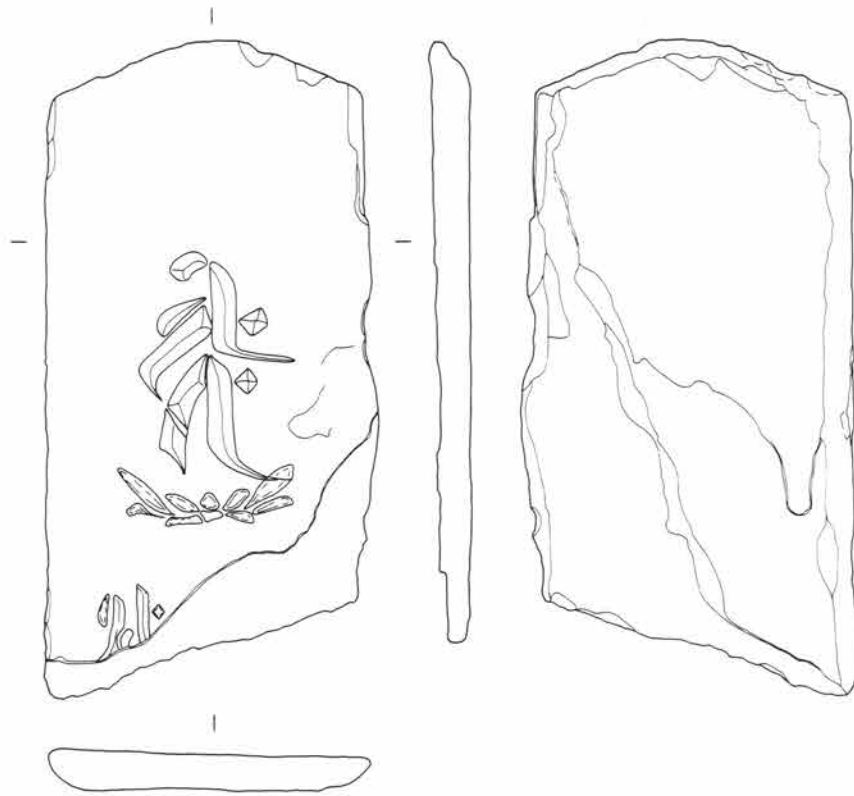


S E43-14 21

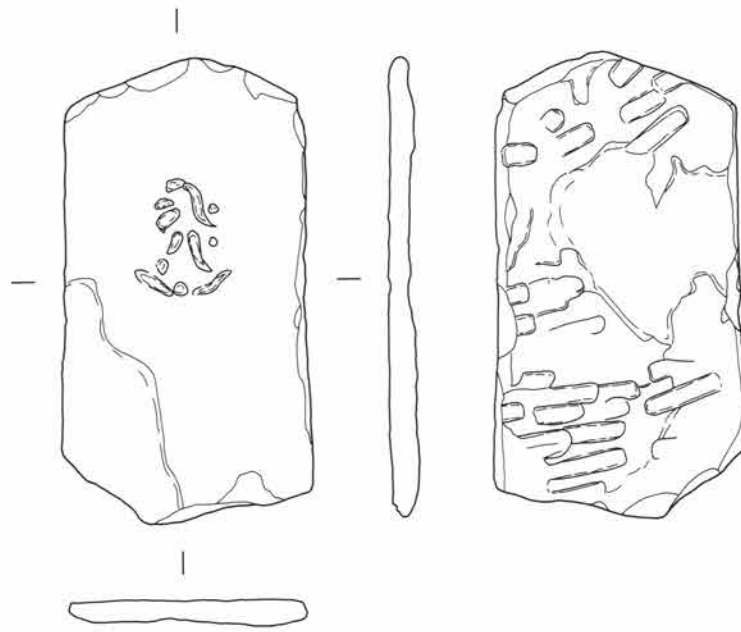
S E43-13 20



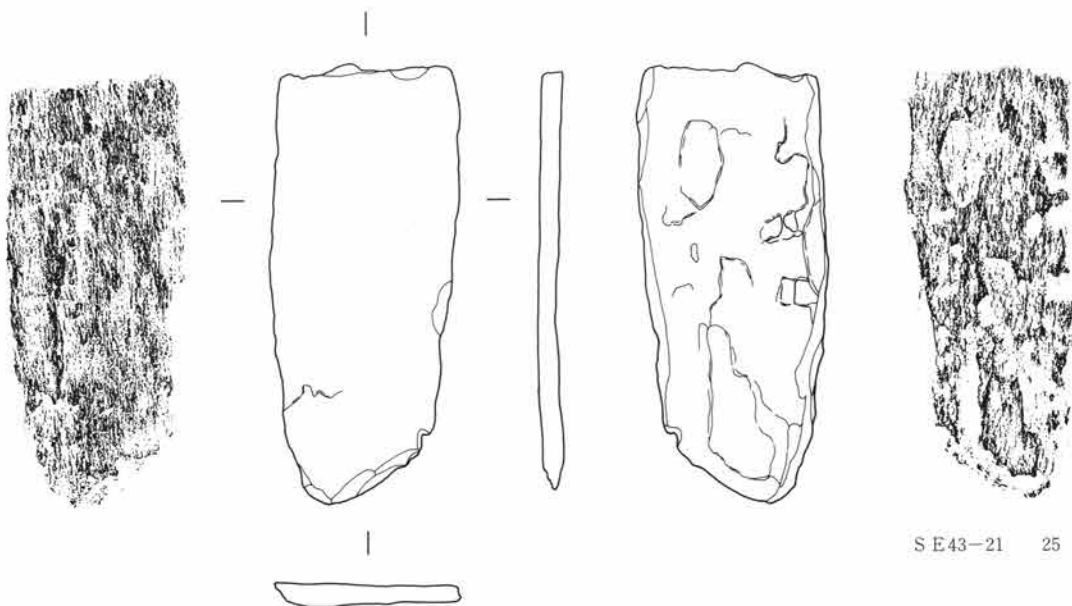
S E43-15 22



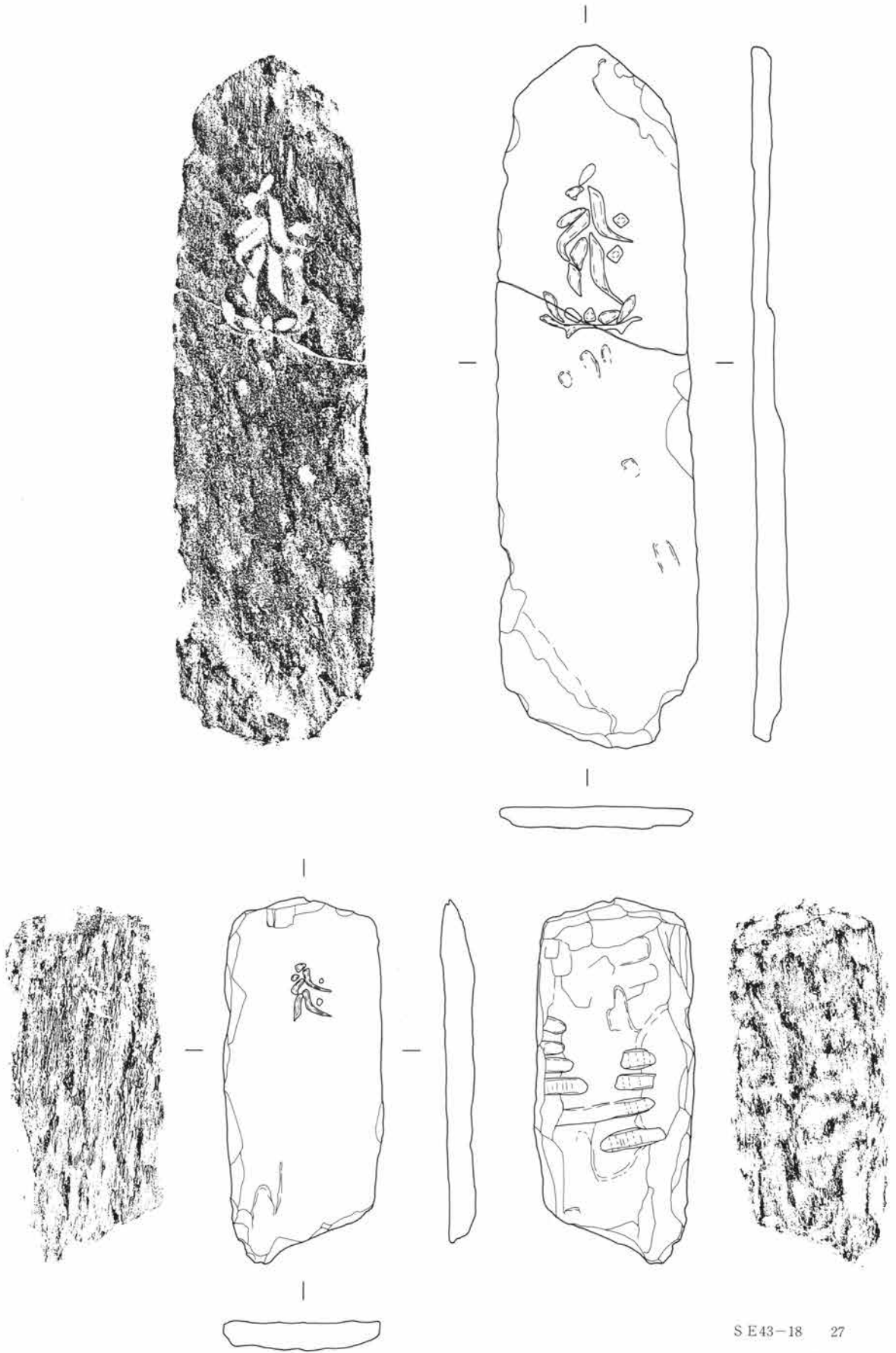
SE43-16 23



S E43-20 24



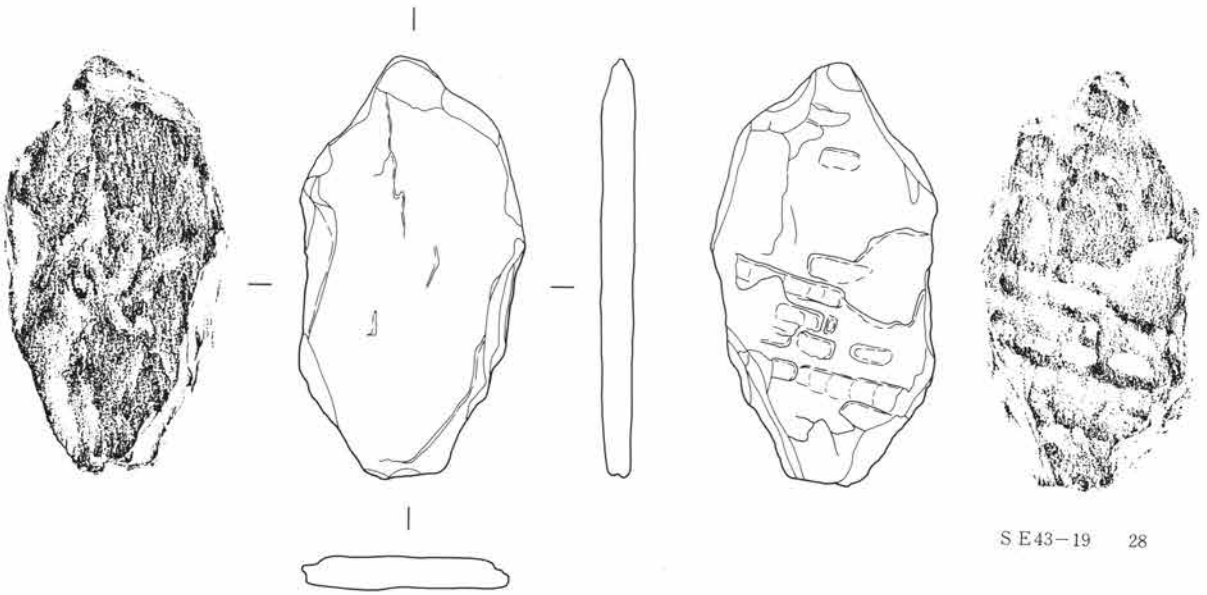
S E43-21 25



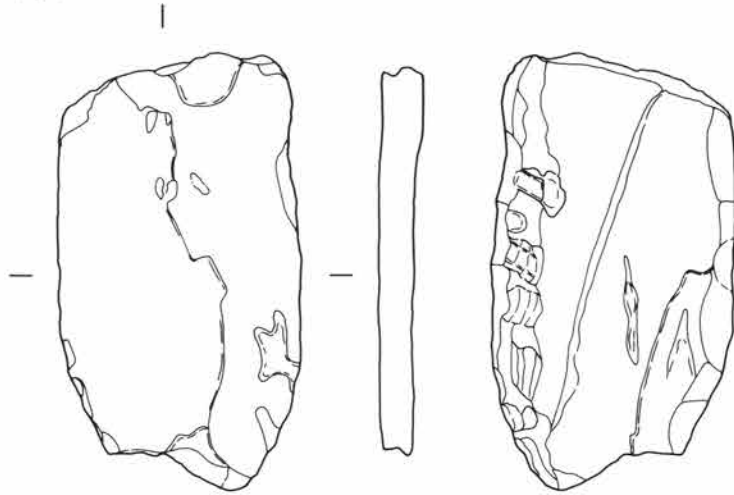
S E43-18 27



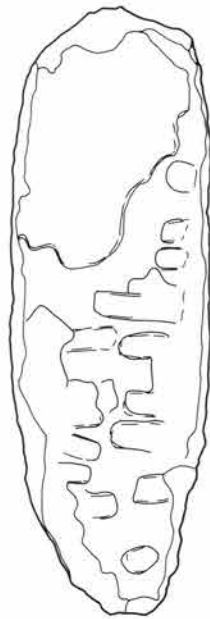
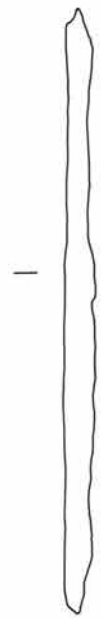
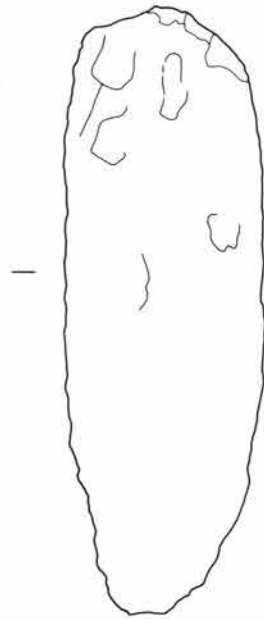
S E43-17 26



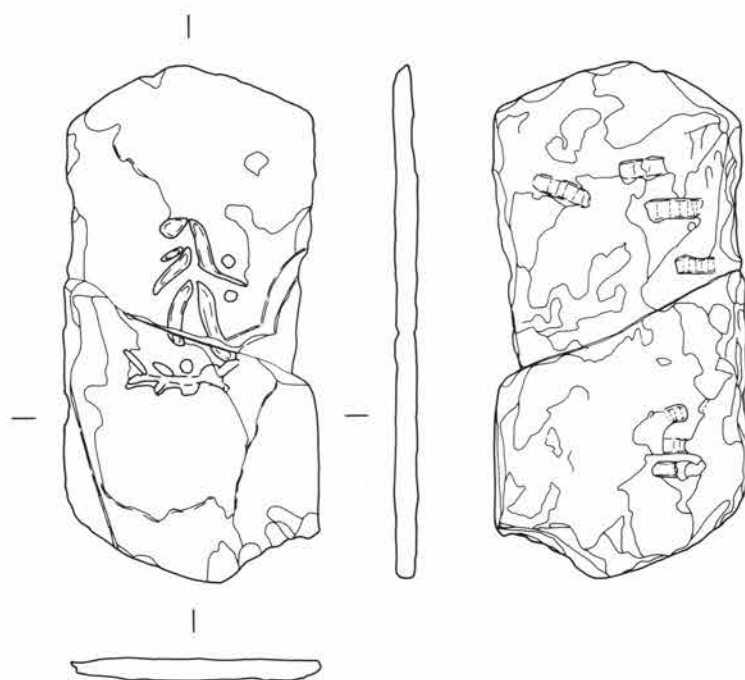
S E43-19 28



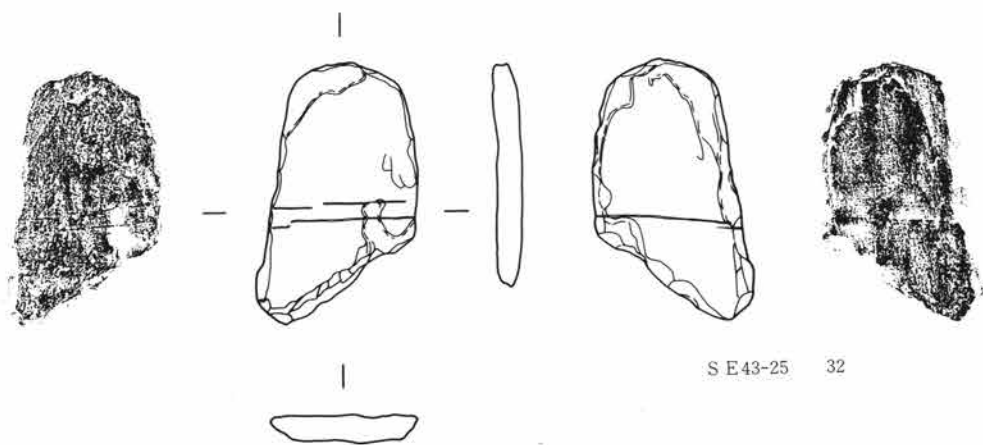
S E 43-22 29



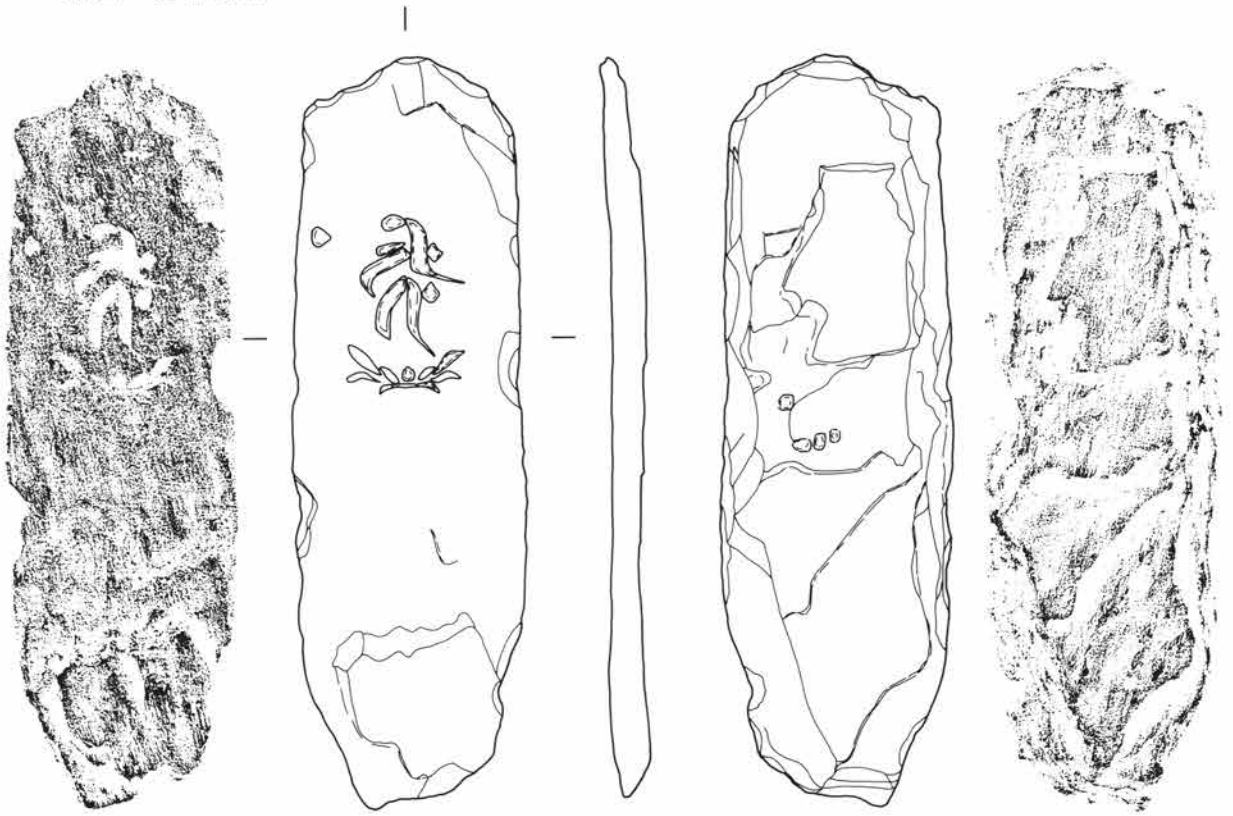
S E 43-23 30



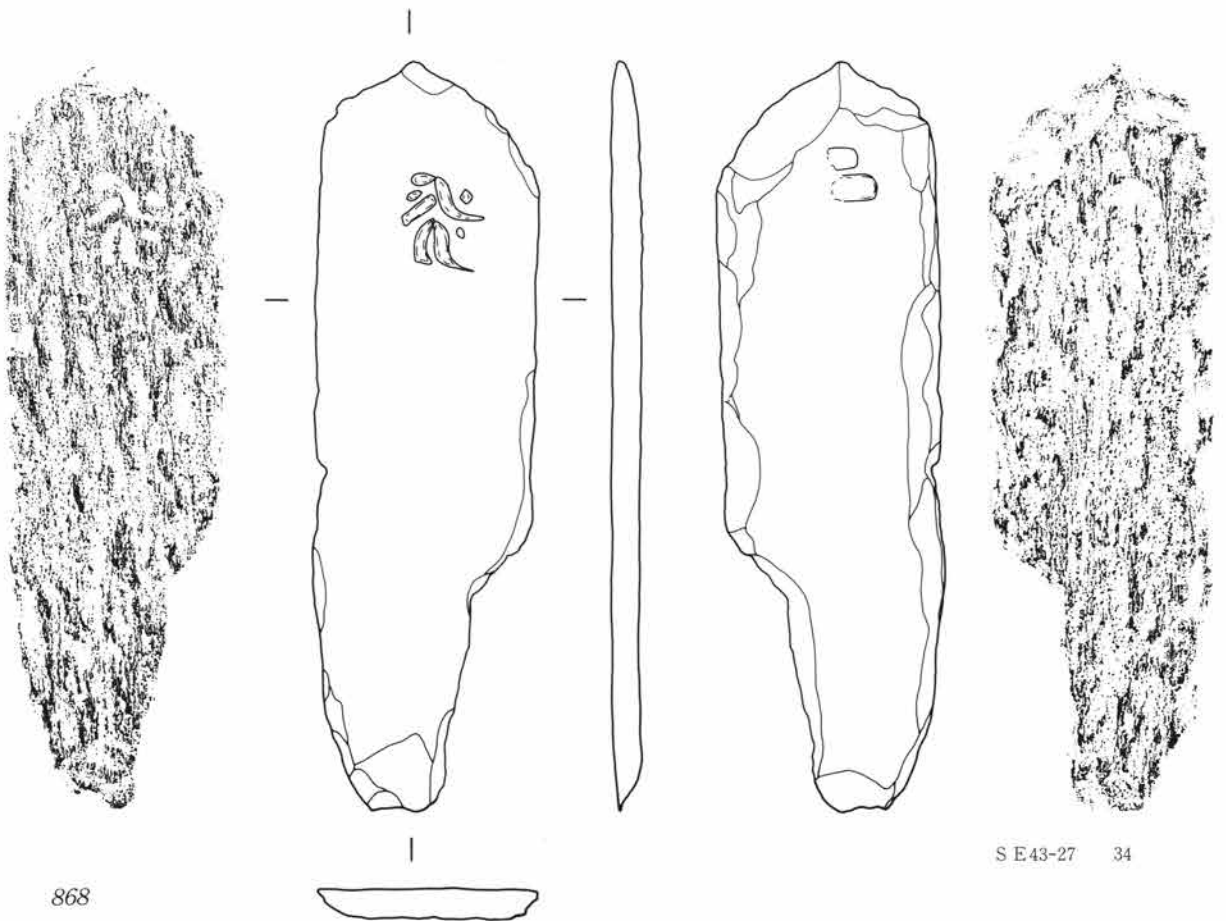
S E 43-24 31



S E 43-25 32

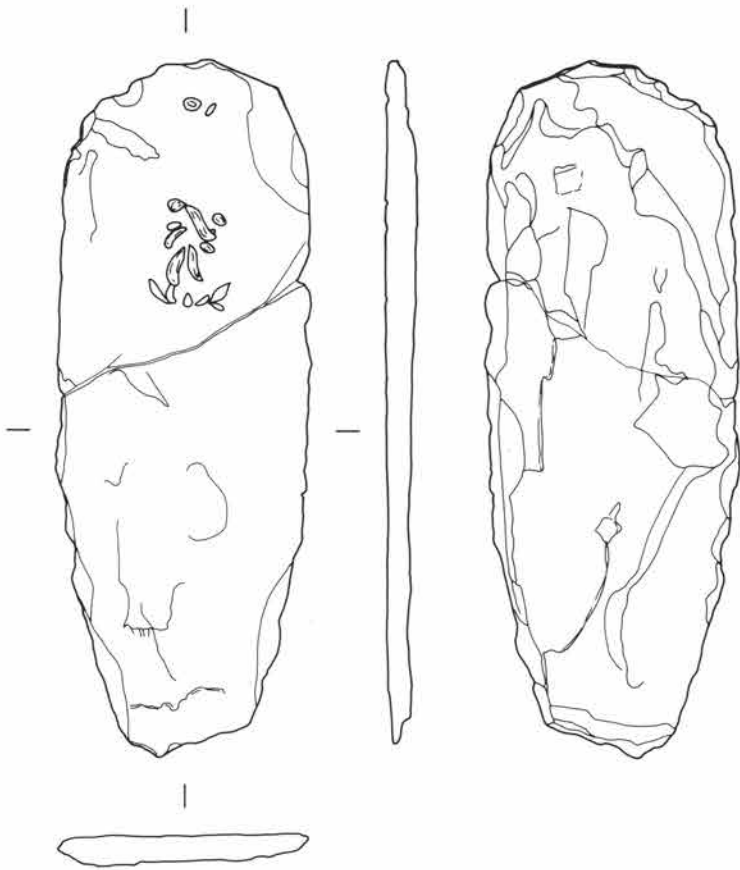


S E 43-26 33

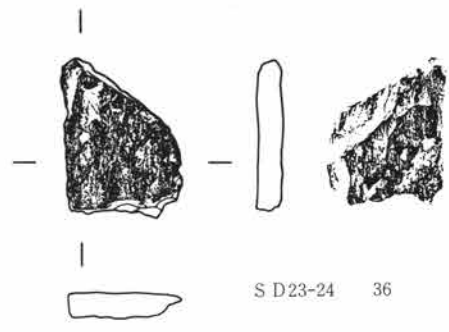


S E 43-27 34

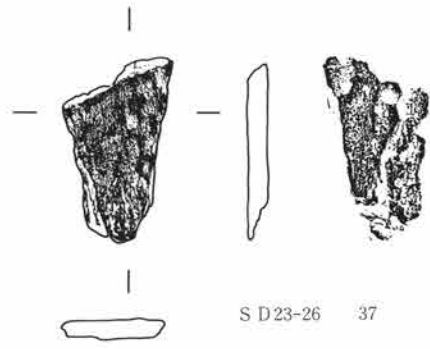
第5節 石製品について



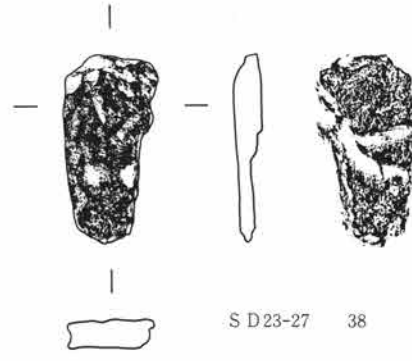
S E 43-28 35



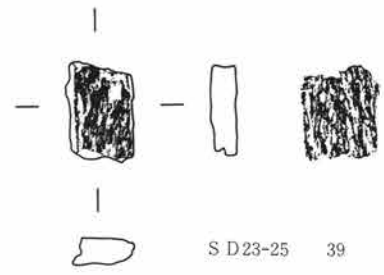
S D 23-24 36



S D 23-26 37

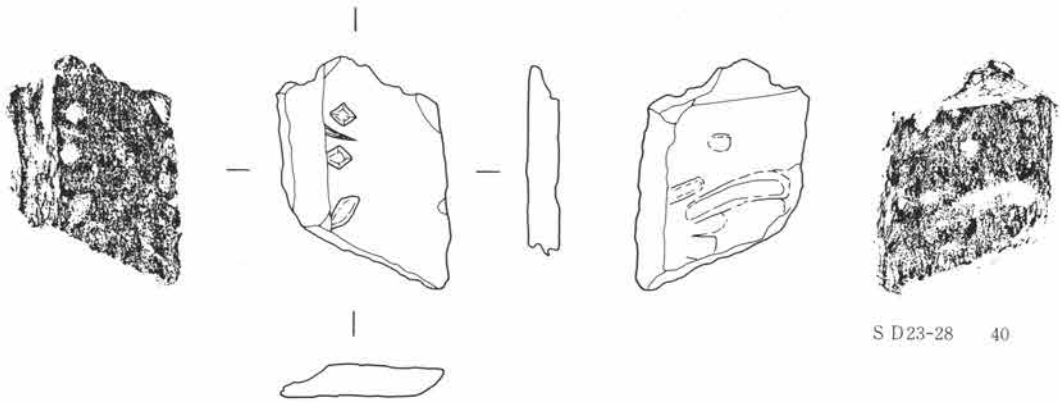


S D 23-27 38

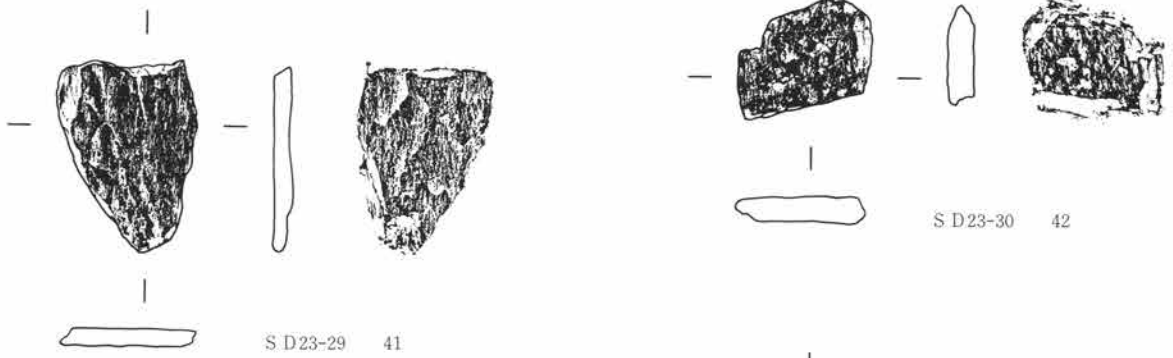


S D 23-25 39

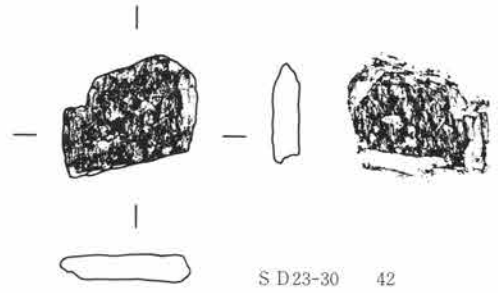
第4章 調査成果



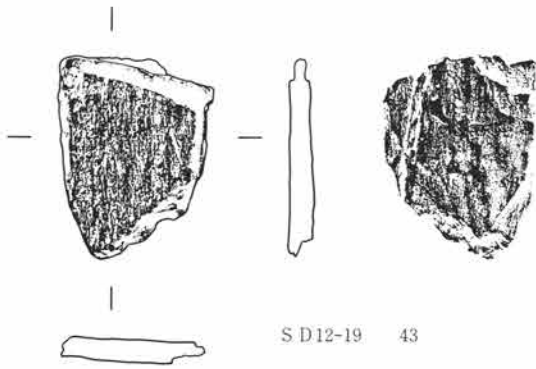
S D23-28 40



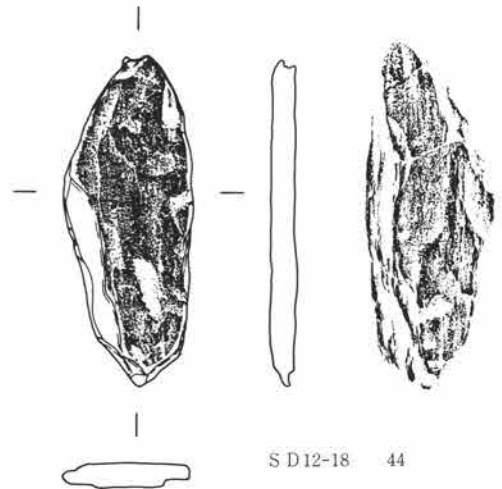
S D23-29 41



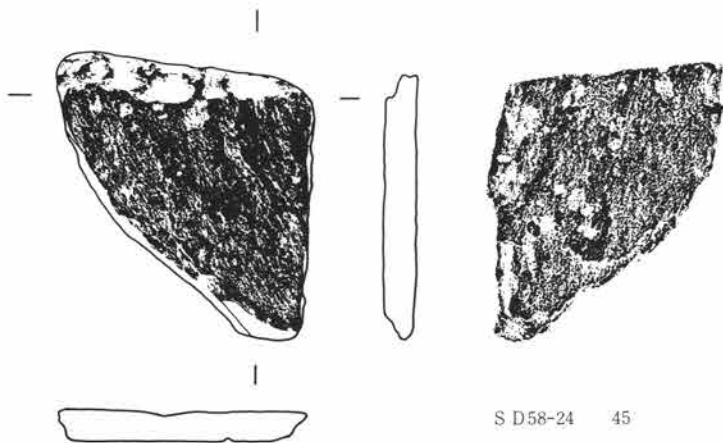
S D23-30 42



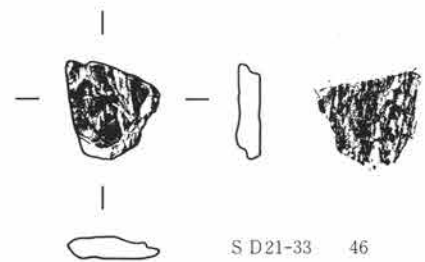
S D12-19 43



S D12-18 44

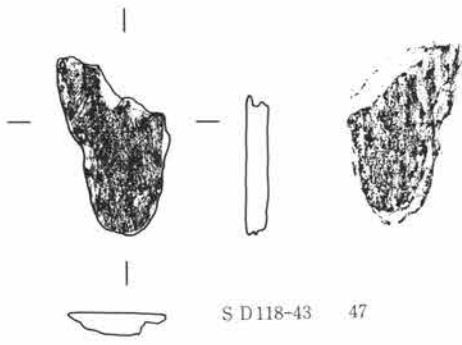


S D58-24 45

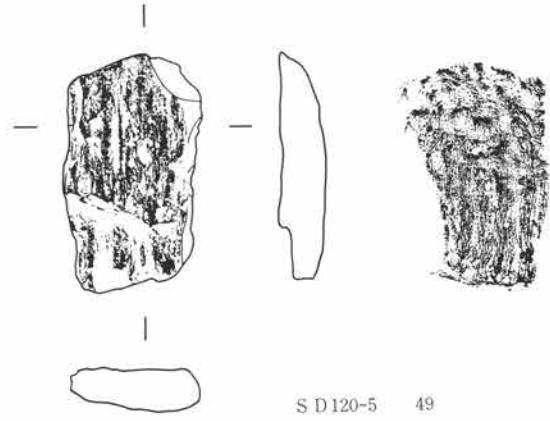


S D21-33 46

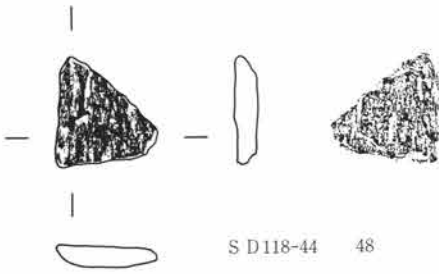
第5節 石製品について



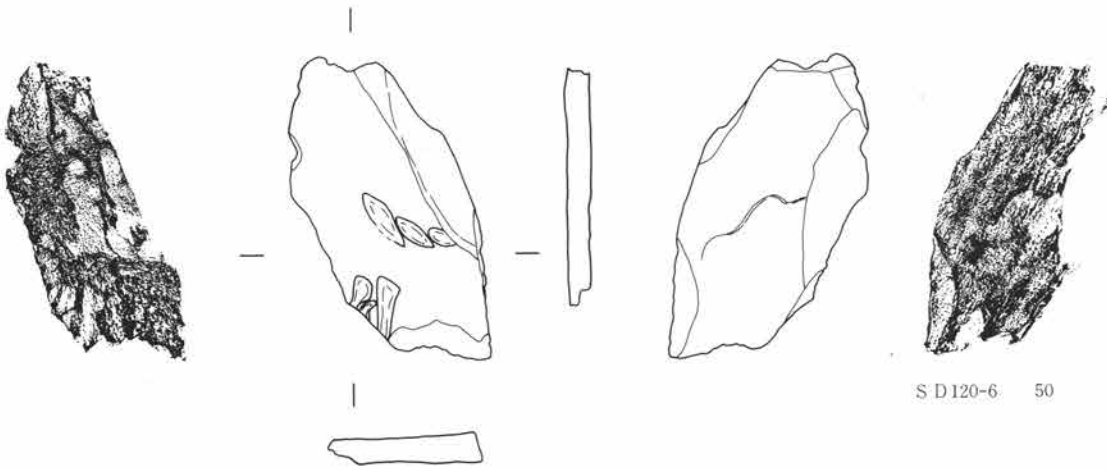
S D118-43 47



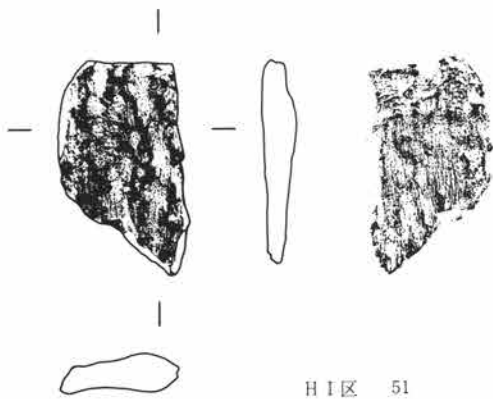
S D120-5 49



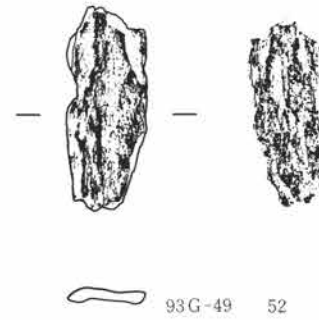
S D118-44 48



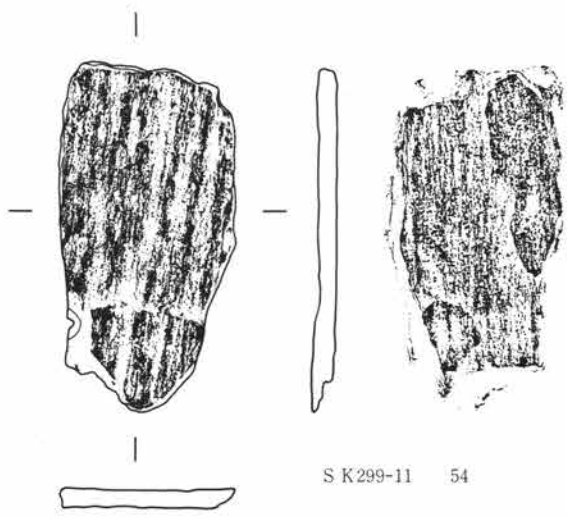
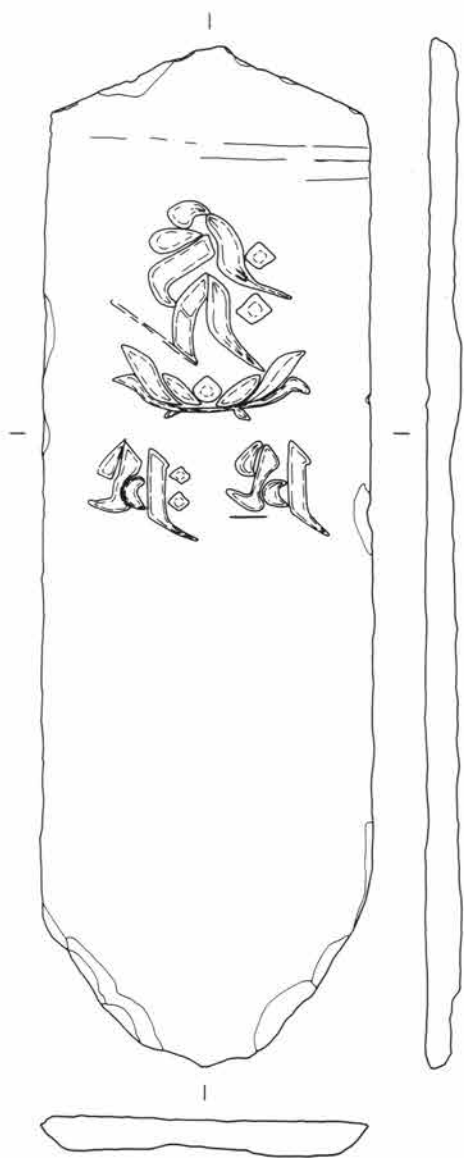
S D120-6 50



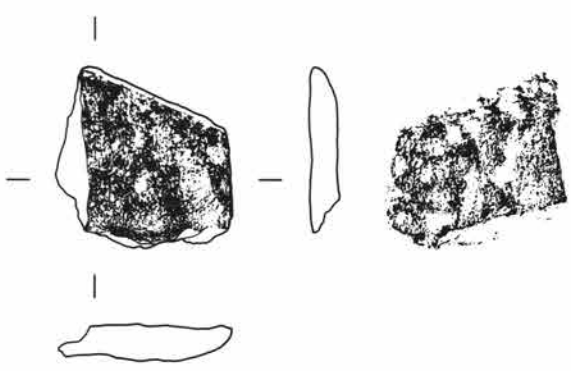
HI区 51



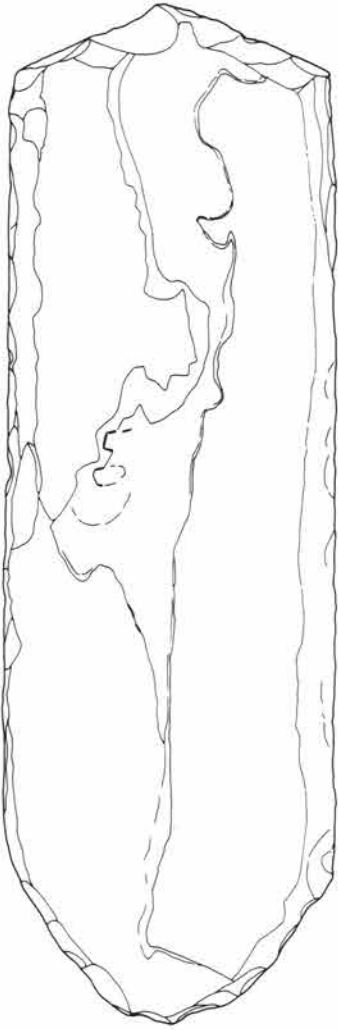
93G-49 52



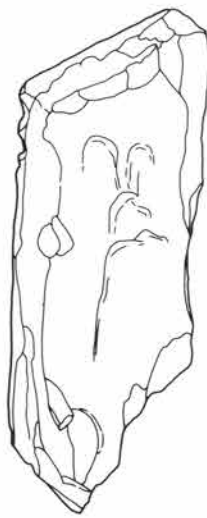
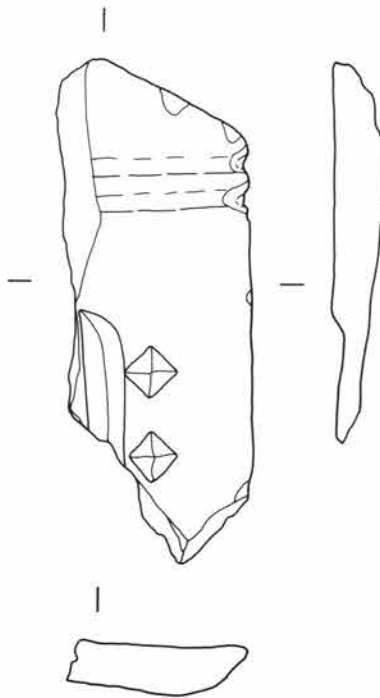
S K 299-11 54



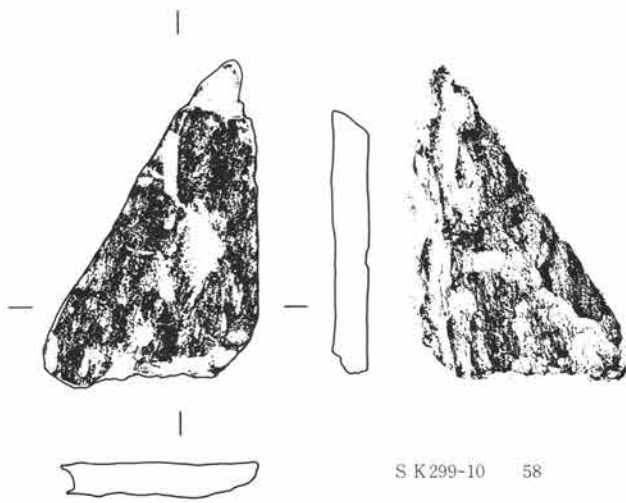
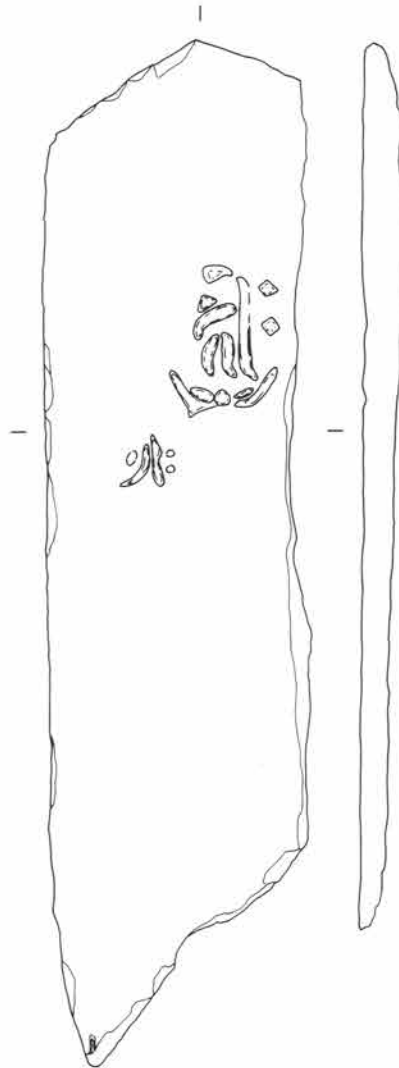
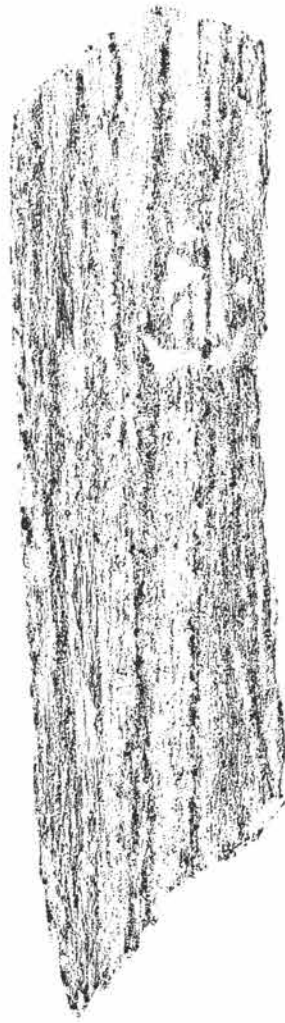
S K 299-13 55



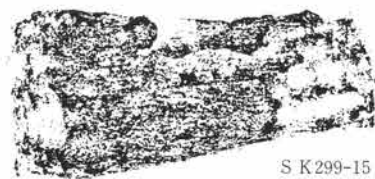
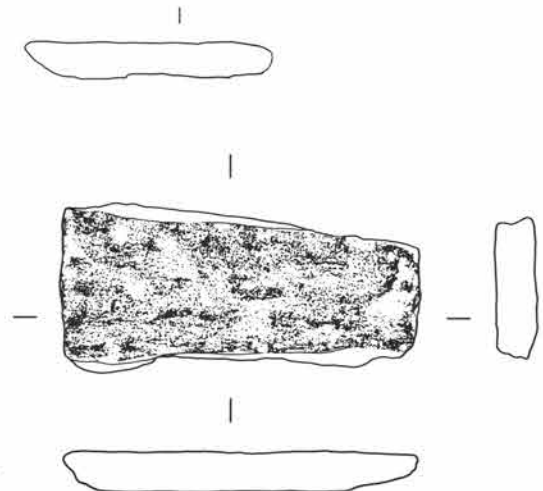
S K 304-1 53



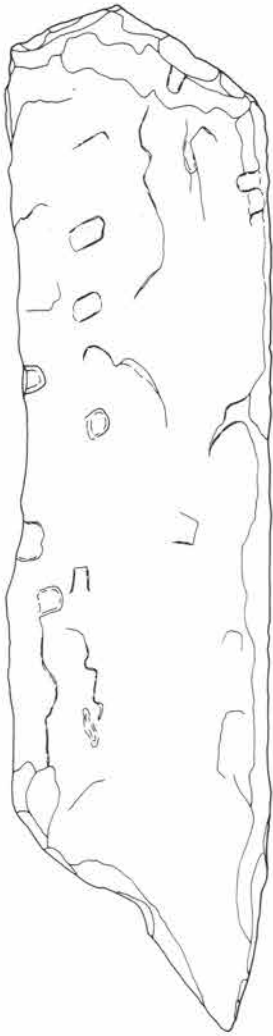
S K 299-14 56



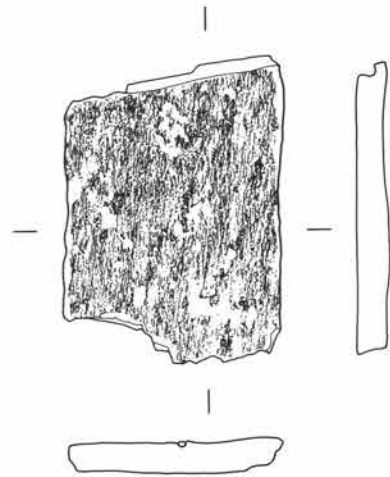
S K299-10 58



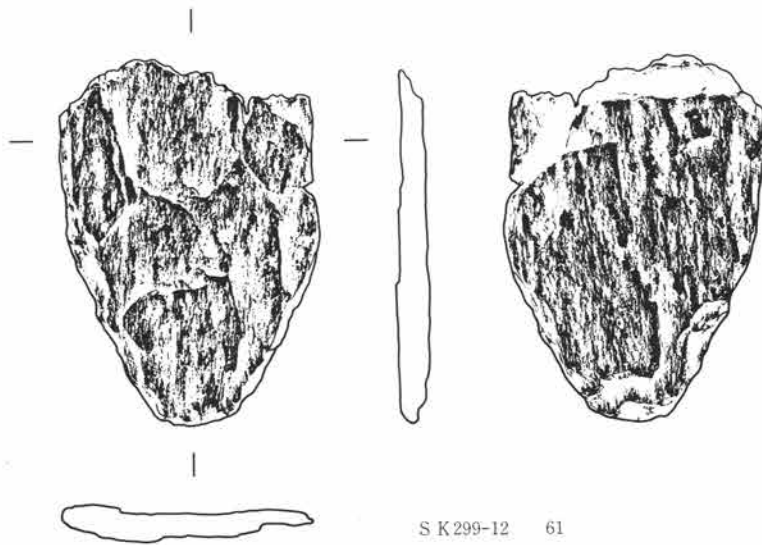
S K299-15 59



S K 304-2 57

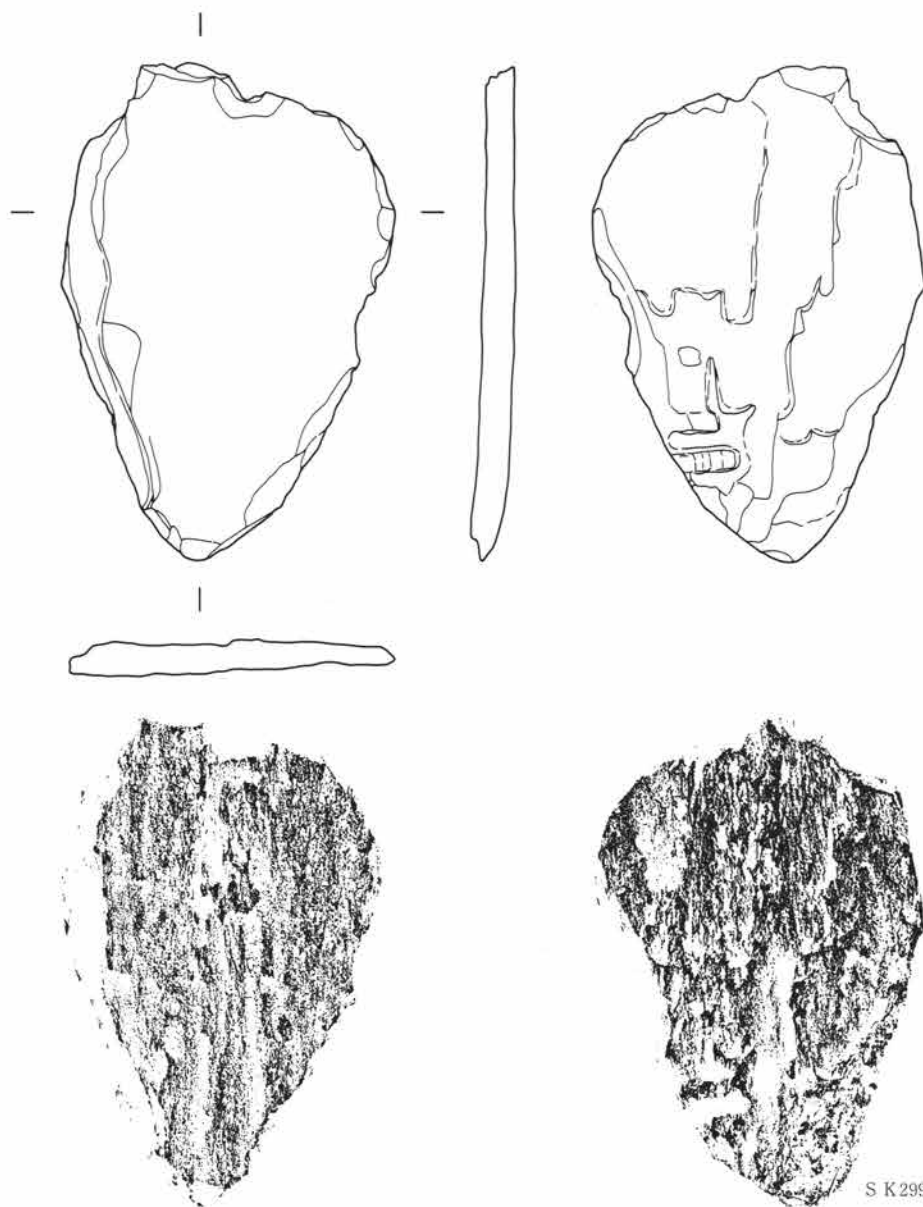


S K 299-8 60



S K 299-12 61

第4章 調査成果



S K 299-9 62

番号	出土遺構	石材	計測値(cm) 高さ・幅・厚さ	備考
1	SE04-1	緑色片岩	106・29・3	頂部側面左右に二条線の切込み4ヶ所を残す。阿弥陀三尊種子。薬研彫り。「サ」の蓮台直上に割付毛描痕有り。銘文「延文二年二月十三日 丁丙 年五十六 妙勝」
2	SE12-7 下位	緑色片岩	82・29・3.5	頂部に二条線毛描・左右側面切込4ヶ所を残す。二条線直下には石面磨き出しの2重界線あり。阿弥陀三尊種子薬研彫り。「サ・サク」の蓮台下に「光明真言」が4行で刻まれる。下部欠失。裏面に推定工具刃幅(以下工具幅という)1.4cm平ノミ状痕が縁から中央に向け認められる。井戸内で検出標高の判明する資料については井戸確認面から底部までを3等分し、上から上位、中位、下位とし、以下出土遺構欄に井戸下位等と示す。
3	SE31-2 上位	黒色片岩	2.7・14.6・1.8	頂端部・下部欠失・種子不明。板碑表面に向って右側面山形部には削り加工痕あり。
4	SE45-4 下位	黒色片岩	4.55・14.5・2.3	阿弥陀一尊種子、彫り浅く不鮮明。裏面に工具幅1.2cmと0.9cmの2種類の平ノミ状工具痕が認められる。

第5節 石製品について

番号	出土遺構	石材	計測値(cm) 高さ・幅・厚さ	備考
5	SE14-9 中位	緑色片岩	76.5・ 23・ 3.5	阿弥陀三尊種子、浅い断面半円形彫り。表面左下位に平ノミ状痕あり。16の板碑と共伴、尚本板碑の直上の井戸上位からは2の石鉢、2～5の五輪塔の地輪1、水輪1、火輪2が出土している。
6	SE45-3	緑色片岩	40・ 17・ 1.8	板碑左下半部破片。種子不明。4の板碑と共伴。
7	SE40-3 中位	緑色片岩	24・14.2・ 1.2	種子不明。頂部山形の中心がやや右にズレている。上半部のみの破片、8・9の板碑も一括出土。他に石臼2点も共伴。
8	SE40-4 中位	緑色片岩	47・17.8・ 3	阿弥陀三尊種子。主尊の「キリーク」は蓮台に乗り天蓋を有す。天蓋中央頂部の宝珠は円形を呈し、瓔珞も3条で対を成す。宝珠直下には瓔珞とも幡とも判断しづらい一条1対の垂飾が認められる。両脇土蓮台無し。銘文「二月十日」。種子、瓔珞、蓮台、銘文とも極めて浅い断面半円形の彫り、7・9の板碑と一括出土。
9	SE40-5 中位	雲母石英片岩	44.5・ 16・ 2.1	種子不明。頂部山形先端が中心軸線より左にズレている。表裏ともに顕著な加工痕は認められない。7・8の板碑と一括出土。
10	SE07-10 下位	緑色片岩	32.5・ 22・ 3	阿弥陀三尊種子。脇土「サ」「サク」の頭を残して、下部欠失。種子、蓮台とも浅い断面半円形彫り。18の茶臼も共伴。
11	SE01-1	緑色片岩	31.5・ 116・ 2.3	板碑中部破片。欠損面左上端部に干支「甲」が残る。表面下部に工具幅1.2cm程の平ノミ状痕あり。裏面の剝離が進んでいる。12号板碑と共伴。
12	SE01-2	雲母石英片岩	30・ 8.2・ 17	板碑の右上、あるいは左下部破片。11の板碑と共伴。
13	SE08-4 上位	黒色片岩	21・ 20・ 3	板碑上部破片。種子は蓮台に乗る。「キリーク」のみ残り、両脇土の存在不明。彫りは浅い断面半円形。裏面左側に工具幅1.3cm程の平ノミ状痕あり。14・15の板碑と共伴。
14	SE08-5	緑色片岩	23.8・ 8・ 2.2	板碑頂部右上あるいは基部左下の残片。13・15の板碑と共伴。
15	SE08-6 上位	黒色片岩	20・15.2・ 2.3	板碑頂部破片。欠損部下端に「キリーク」の「イ」部がかすかに認められる。13・14の板碑と共伴。
16	SE14-8 中位	黒色片岩	13・ 27・ 3.1	阿弥陀三尊種子。主尊のみ蓮台に乗り両脇土蓮台無し、「キリーク」は薬研彫的。「サ」「サク」は薬研と丸彫の中間的な彫り。裏面には右方向よりの工具幅1.1cm程の平ノミ状痕が集中する。5の五輪塔の地輪と共伴。
17	SE39-6	緑色片岩	36.5・ 15.2・ 2	種子不明。下側面の加工が完結していることから完形品と考えられる。18・19の板碑と共伴。
18	SE39-4 下位	緑色片岩	60・17.5・ 3	阿弥陀一尊種子、蓮台無し。彫りは浅い断面半円形で「ク」の一部が磨滅している。全体に風化が著しい。裏面には左方向からの工具幅0.9cm程の平ノミ状痕が、また左上側面には削り痕が認められる。17・19の板碑、1・2の石臼、1の石鉢と共伴。
19	SE39-5 中位	緑色片岩	39.5・ 15・ 2.2	板碑右上半分破片。頂部山形の一部も欠失。阿弥陀三尊種子。主尊は蓮台に乗り、右脇土の一部が残存する。種子は浅い断面半円形彫り。残存する頂部側面端に削り痕あり。裏面には横方向の工具幅0.6と1.2cm程の2種類の平ノミ状痕が残る。
20	SE43-13 下位	黒色片岩	35・20.5・ 2.2	板碑左上半部破片。種子不明。裏面に斜め方向より工具幅1.2cm程の平ノミ状痕あり。20の板碑から35の板碑までの16枚が井戸下位より一括出土。
21	SE43-14 下位	緑色片岩	28・18.2・ 2.8	頂部及び基部を欠失した板碑。種子不明。左右両側面削り整形。裏面左右数ヶ所に工具幅1.2cm程の平ノミ状痕あり。16枚一括出土の1枚。
22	SE43-15 下位	緑色片岩	34・ 15・ 2	阿弥陀一尊種子。頂部山形の左右形不揃い。基部は平面形が尖り気味の台形に仕上げられ、側面には削り痕が認められる。裏面には左右から工具幅1.0cm程の平ノミ状痕が残る。16枚一括出土の1枚。

第4章 調査成果

番号	出土遺構	石材	計測値(cm) 高さ・幅・厚さ	備考
23	SE43-16 下位	緑色片岩	51.5・26.4・3.2	板碑上部破片。阿弥陀三尊種子。右脇土及び左脇土「サク」の下部から欠失。種子は弱い葉研彫り。16枚一括出土の1枚。
24	SE43-20 下位	緑色片岩	37・19.7・2.1	基部欠失。阿弥陀一尊種子。極めて浅い断面半円形の彫り。裏面には工具幅1.1cm程の平ノミ状痕あり。16枚一括出土の1枚。
25	SE43-21 下位	黒色片岩	34.5・14.7・1.7	頂部欠失。種子不明。裏面に右方向から工具幅1.4cm程の平ノミ状痕が付く。16枚一括出土の1枚。
26	SE43-17 下位	緑色片岩	49・14・2.2	阿弥陀一尊種子。「キリーク」及び蓮台とも浅い半円形彫り。裏面には横方向より工具幅1.1cm程の平ノミ状加工痕あり。表面下部にも同様の加工痕も僅かに認められる。16枚一括出土の1枚。
27	SE43-18 下位	緑色片岩	38・16.4・3.1	阿弥陀一尊種子。蓮台無し、浅い半円形彫り。裏面には左右より水平方向に工具幅1.4cm程の平ノミ状痕が認められる。16枚一括出土の内の1枚。
28	SE43-19 下位	緑色片岩	33.5・17.5・2.5	板碑中部位より上を欠失した基部の残欠。種子不明。裏面には左右からの工具幅1.1cm程の平ノミ状痕あり。16枚一括出土の1枚。
29	SE43-22 下位	緑色片岩	34.5・19・3.4	板碑上半部及び下端部を欠失した破片。石面全体に風化が進んでいる。種子不明。裏面には左傾め上方向より工具幅1.2cm程の平ノミ状工具痕が認められる。この加工痕は板碑幅を確定してから後に、左側半分のやや肉厚の部分を均らす為に行なわれている。16枚一括出土の1枚。
30	SE43-23 下位	緑色片岩	47.5・16・2.4	頂部山形及び側面線が不均衡な板碑。種子不明。裏面中位部から基部にかけて、左右水平方向より工具幅1.3cm程の平ノミ状工具痕が多数認められる。石材は、石英粒状の夾雑物を多量に含む極めて質の悪いもの。16枚一括出土の1枚。
31	SE43-24 下位	緑色片岩	40.6・20・1.8	蓮台に乗る阿弥陀一尊種子で、断面が浅い半円形の彫り。「キリーク」下部で折れている。基部の加工が完結していることから、やや寸法が詰っているが完形品と考えられる。裏面には工具幅1.0cm程の平ノミ状痕が左斜め上方向と、主として、右水平方向からのものが認められる。16枚一括出土の1枚。
32	SE43-25 下位	緑色片岩	20.5・11.5・2.2	頂部あるいは基部の破片。頂部山形部あるいは基部端部に当る側端面部に削り加工痕が認められる。破片中位部に認められる2本の平行線は、石材の目による自然の筋。16枚一括出土の1枚。
33	SE43-26 下位	緑色片岩	58・18・3	蓮台に乗る阿弥陀一尊種子で、「キリーク」蓮台とも浅い断面半円形の彫り。頂部山形の成形はやや荒っぽい。板碑側面の種子両脇部を中心に削り整形痕が認められる。裏面上部と、中位部の一部に工具幅1.0cm程の平ノミ状痕が僅かに認められる。16枚一括出土の1枚。
34	SE43-27 下位	緑色片岩	58.7・17.5・2.3	蓮台を持たない阿弥陀一尊種子で、極めて浅い断面半円形の彫り。頂部山形は中心軸線を著しく左にズレる。基部も大きく右半分を欠き、石材取りのまま使用。裏面頂部付近には工具幅1.4cm程の水平方向からの平ノミ状工具痕あり。16枚一括出土の1枚。
35	SE43-28 下位	緑色片岩	54.5・20・2.4	蓮台に乗る阿弥陀一尊種子。彫りは断面半円形で浅い。蓮台下で折れている。碑全体が風化している。頂部山形先端部も、左右角も不明瞭で頂部全体があたかも歪んだ弧状を呈している。16枚一括出土の1枚。これらの板碑は、井戸のほぼ同一面より重なり合った状態で出土していることから一括投棄されたと考えられる。
36	SD23-24	黒色片岩	12・9・2	頂部右上板碑破片。
37	SD23-26	緑色片岩	14・8・1.6	部位不明板碑破片。
38	SD23-27	緑色片岩	14.8・7.3・2.2	部位不明板碑破片。
39	SD23-25	黒色片岩	7.5・5.3・7	部位不明板碑破片。

第5節 石製品について

番号	出土遺構	石材	計測値(cm) 高さ・幅・厚さ	備考
40	SD23-28	緑色片岩	15.4・13・2.5	蓮台に乗る阿弥陀の破片で「イ」の端部と「ク」及び蓮台の右端の残る板碑中央右隅破片。種子は浅い断面半円形の彫り。裏面には工具幅1.1cm程の平ノミ状工具痕がやや斜め下方向から付く。
41	SD23-29	黒色片岩	14.6・11・1.4	板碑基部破片。
42	SD23-30	緑色片岩	8.3・10.5・2.1	部位不明板碑破片。
43	SD12-19	緑色片岩	15.8・12.2・2	部位不明板碑破片。
44	SD12-18	緑色片岩	25.5・10.4・2	表面の一部に「キリーク」の「カ」の一部と考えられる浅い断面半円形の彫りが認められる。
45	SD58-24	緑色片岩	21・20・2.5	板碑側端部破片。
46	SD21-33	黒色片岩	7.5・7.3・1.9	部位不明板碑破片。
47	SD118-43	緑色片岩	14・7.5・1.7	板碑基部左下破片。
48	SD118-44	黒色片岩	8.5・8・1.9	板碑頂部右上破片か？
49	SD120-5	黒色片岩	18・10.6・3.5	部位不明破片。
50	SD120-6	緑色片岩	22.7・14・2.1	阿弥陀三尊か？。「サ」の右上付近と認められる板碑小破片。
51	H I 区	緑色片岩	16.7・9.7・3	部位不明破片。
52	93G-49	緑色片岩	15.8・6.3・1.1	部位不明破片。
53	SK304-1	緑色片岩	80・26.5・2.8	阿弥陀三尊種子。「キリーク」のみ蓮台に乗る。浅い葉研彫り。頂部には二条線を意識した割付けの毛描線あり。「サ」の下にも割付けの為の毛描線が認められる。板碑の形態も種字の配置も均整がとれている。地下式土壇の入口状施設部に基部を下に向けて57号板碑と二枚重なった状態で土壇床面4～5cmの位置で出土。
54	SK299-11	黒色片岩	27・14・1.7	部位不明板碑破片。
55	SK299-13	緑色片岩	14・14・2.3	頂部山形の右角部破片。裏面に工具幅1.1cm程の横方向の平ノミ状痕あり。
56	SK299-14	緑色片岩	39.7・14.5・4	頂部山形の右角部破片。頂部に二条線の側面切込みと、浅い二条線が彫れている。種子は阿弥陀で「キリーク」の上半分と「ク」部がしっかりした葉研彫りされている。
57	SK304-2	緑色片岩	81・21・2.8	阿弥陀三尊種子。「キリーク」のみ蓮台に乗る。浅い断面半円形の彫り。板碑右脇が縦に欠失している。裏面では左方向からの工具幅1.5cm程の平ノミ痕が集中している。
58	SK299-10	緑色片岩	25・16・3	阿弥陀三尊か。種子「サ」の右部が残る板碑中央右部破片。浅い葉研彫り。裏面には工具幅1.2cm程の平ノミ状痕あり。
59	SK299-15	緑色片岩	13.5・28.5・3.2	部位不明板碑破片。側面に側面処理が施されているのでこの面が板碑の側面と考えられるが、石の目が横方向になる特異なもの。板碑でない可能性もあり。
60	SK299-8	緑色片岩	24・17・2.5	阿弥陀一尊種子。極めて浅い断面半円形彫り。頂部及び基部を欠失している。
61	SK299-12	黒色片岩	28.5・17・2.5	板碑基部破片。表裏面とも剝離が進んでいる。
62	SK299-9	緑色片岩	39・26・2.6	板碑基部破片。裏面基部下端に工具幅1.2cm程の平ノミ状痕が認められる。

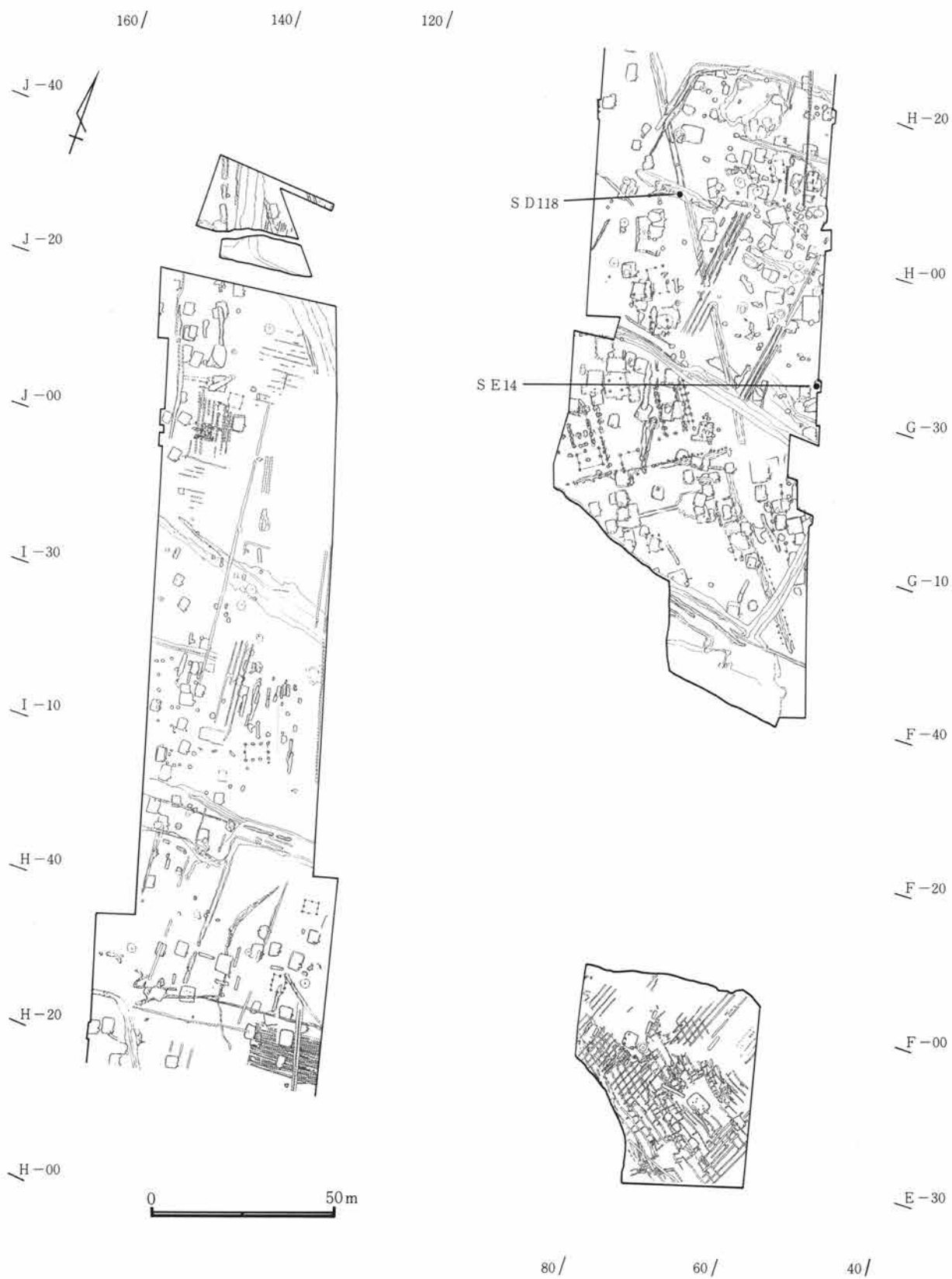
5 五輪塔

本遺跡では2ヶ所の遺構から、3個の火輪、1個の水輪、1個の地輪の計5個体の五輪塔が出土している。

S D118からは、輝石安山岩質の1の火輪の完形品が、石臼の破片や20~30cm大の円礫とともに、溝の肩の補強用材として転用された状態で出土した。この火輪は、平面形が正方形で、高さは平面の1辺の長さの約 $\frac{1}{2}$ で緩い屋根反りをし、軒端は薄く且つ内傾し、軒反りは弱く直線的である。上面には、空風輪を受ける為の柄穴を穿孔している。下面端部付近には、下面の反りを意識させるかのように幅1cmほどの縁取り加工が施されている。柄穴の穿孔も下面の仕上げも同一工具によるもので、いずれも荒仕上げのままである。

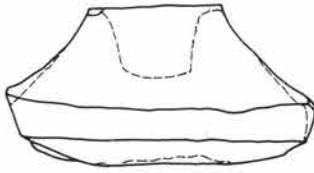
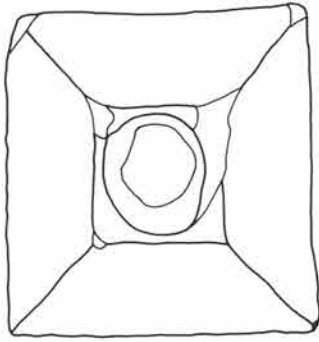
S E14から出土した五輪塔は、2・3の火輪、4の水輪、5の地輪で、いずれも軽石質角閃石安山岩であった。五輪塔は、井戸の確認面から50~100cm掘り下げた時に3の火輪と5の地輪が、その下から更に2の火輪と4の水輪が投げ込まれた状態で埋没していた。2の火輪は、平面形が正方形で、高さはやや高く、高さを1とした時、平(下)面の1辺の長さが1.5倍、平(下)面1に対し上面2.5の比を有している。屋根反りは扇の勾配状の強い反りで、軒端は厚く内傾斜の強いものである。軒反りと下面の弧とはほぼ同心円で、屋根反りに近い力強い弧である。上面は平滑に仕上げられ、屋根部、軒端部とも平行小呷の後、水磨き加工が施されている。下面には辺に合わせて4方向からの平行小呷加工痕が、特に縁辺に集中するように残っている。3の火輪は、平面形が、やや丸味を帯びた正方形で、高さは然程高くなく、屋根反りも直線気味の緩いもので、軒反りは、屋根反りよりもやや強い。軒端は厚く、内傾斜の強いものである。屋根部、軒部には平行小呷痕が残り、下面は、平ノミ状工具による荒仕上げのままとなっている。4の水輪は、最大幅を胴中部位を持つ平面形が円形で、側面形も上面及び下面をカットしているものの円形を呈している。この平面形と側面形はほとんど同一のものであかかも球形体の天地を均等に削り取ったかのようなものである。上面は下面に比べ窪みが強く、火輪の下面の弧と、地輪上面の窪みの縁で接するよう中央部付近が更に深くなるよう2段に掘られている。下面は地輪の上で安定するように浅く窪ませ、縁辺で接するよう配慮が加えられている。加工は側面全体を平行小呷で球形に仕上げている。上面及び下面の加工は、火輪あるいは地輪と接する部分に丁寧に行われている。この水輪は、最大径が2の火輪の幅と似かよっていること、水輪上面の窪みと、火輪下面の弧がシックリ合うこと、加工の痕跡が共通することから本来組を成していたものと考えられる。5の地輪は長方形を呈し、面の1部には剝離が生じてはいるが、長方形の4面には平行小呷後表面水磨きが施されている。これに対し小口部の正方形の面の水磨きが顕著でないことから、本来縦長に立てて使用することを目的にしているものと考えられる。

以上のことから、本遺跡では最低でも4組の五輪塔が存在していたと云える。S D118出土の火輪と、S E14出土の火輪との間では、風空輪受けの柄の有無と、石材及び五輪塔の規模の大小に明らかな差が認められるが、この差が両者の年代差を示すもので、S E14出土の一群を14世紀の後半から15世紀前半とし、S D118号溝の火輪を15~16世紀にかけてと幅を持たせておきたい。五輪塔は、遺跡内2ヶ所よりの出土と板碑に比べ少ない検出状況ではあったが、分布のあり方は板碑の分布傾向の範囲内であり、共通する場所で使用されていたものが板碑と同じ理由で廃棄されたものと考えられる。本遺跡出土の五輪塔の内、2・3・4・5の軽石質角閃石安山岩のものは、現在に亘るも、その石切場や加工場所は知られていないが榛名山麓を生産基盤とする石工集団の手によるもので、長期間に渡り製品を西上州を中心とする地域に供給し、本遺跡の五輪塔よりやや時代の降った時期に生産のピークを向え、わずかながらも、同種の石材を使用した板碑も生産し供給していた時期もあったと考えているが未だ未解明な部分を多く含んでいる。

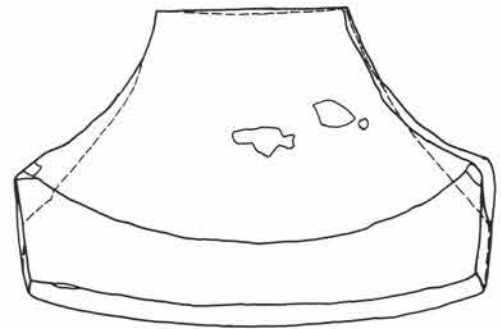
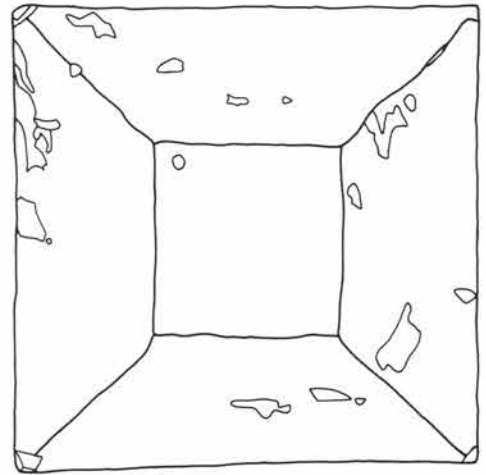


五輪塔

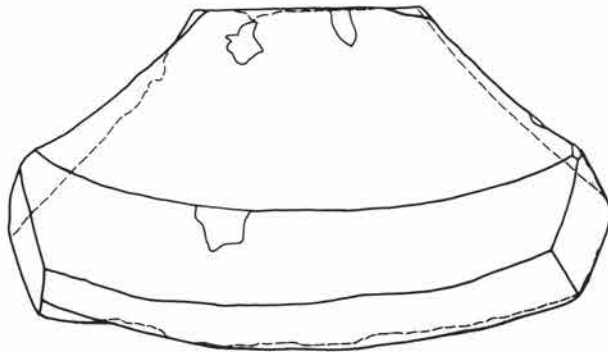
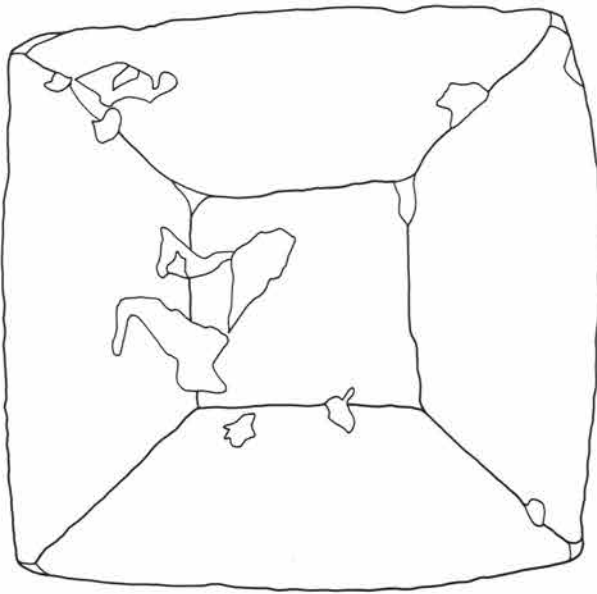
第4章 調査成果



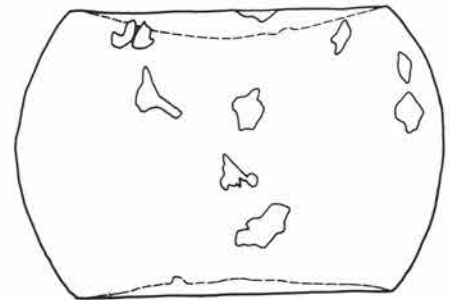
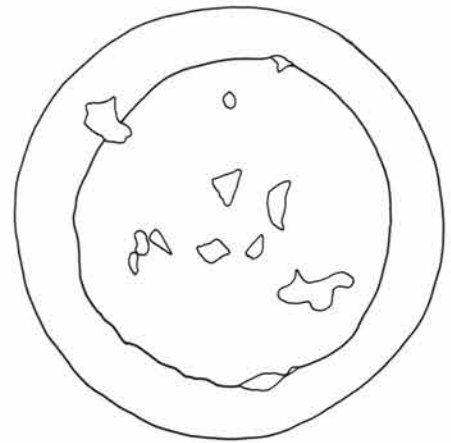
S D118-42 1



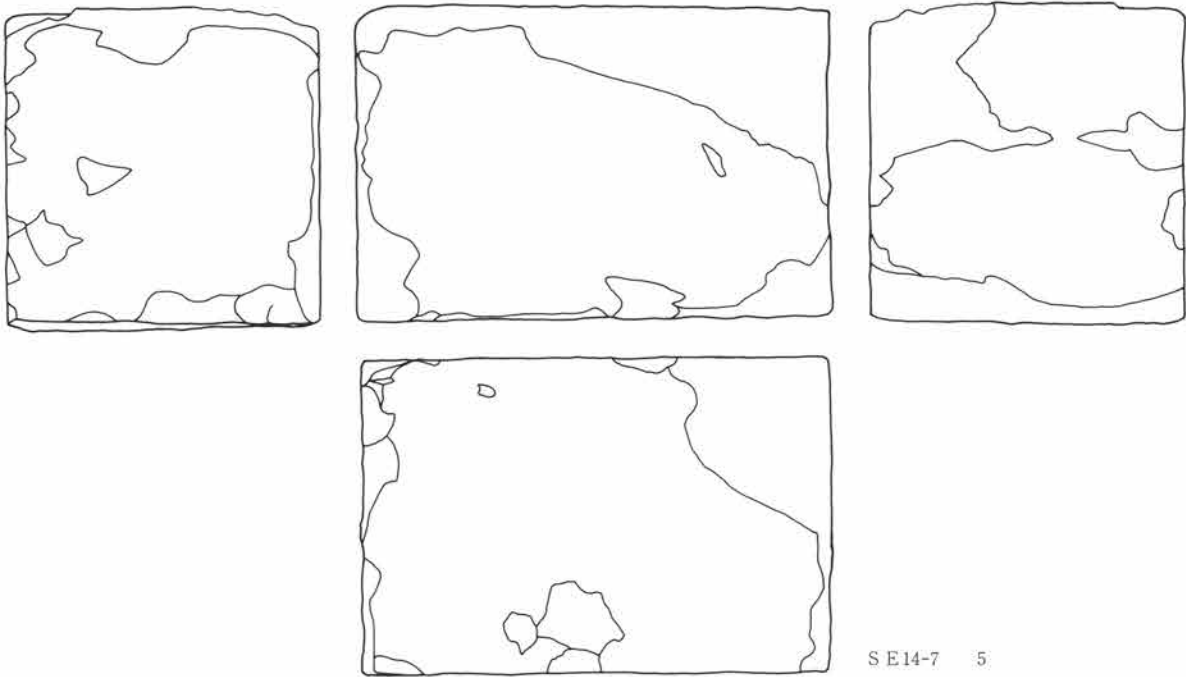
S E14-5 2



S E14-4 3



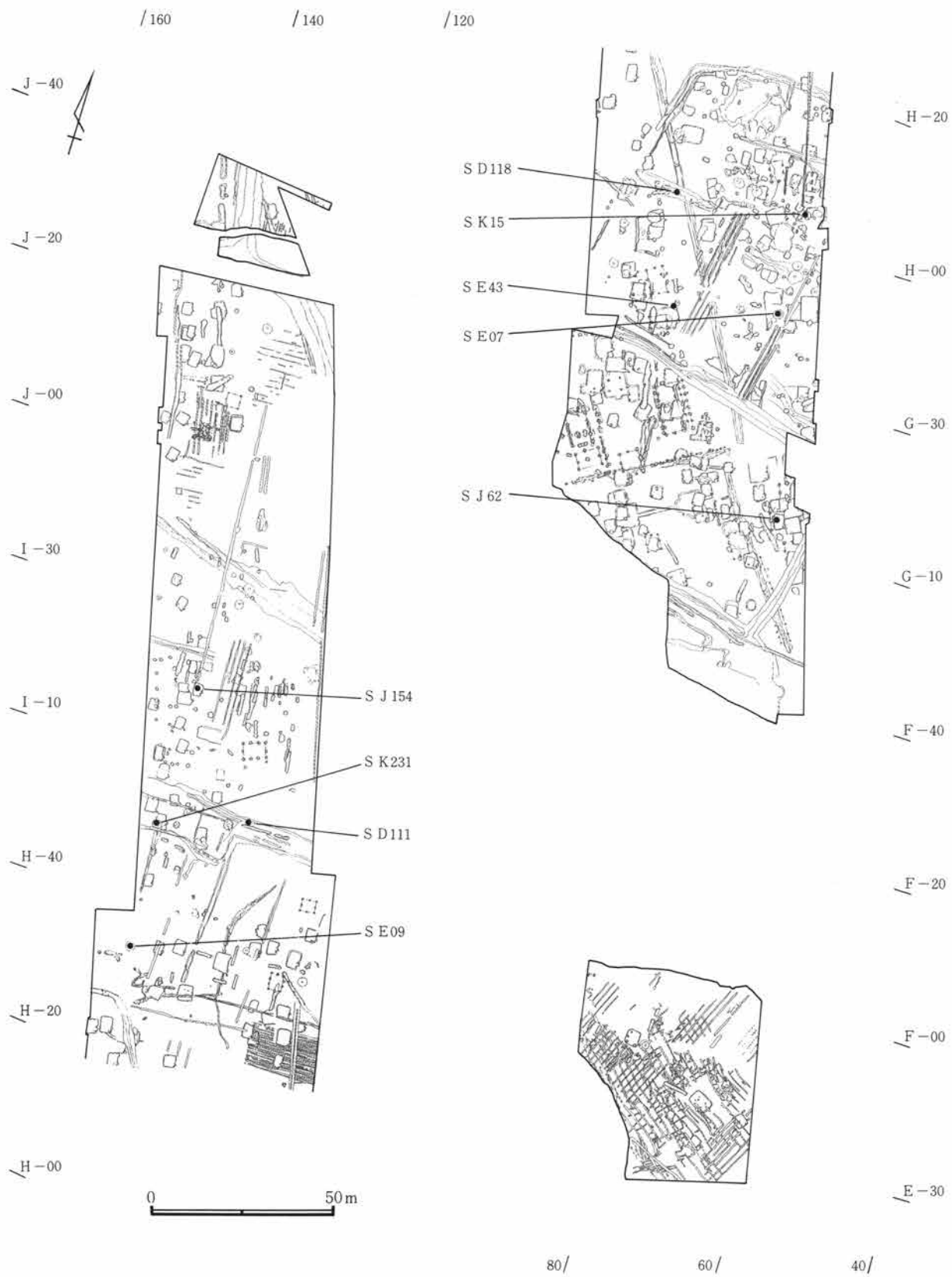
S E14-6 4



SE14-7 5

No	出土遺構	種別	石材	計測値(cm) 高さ・幅・厚さ	備考
1	SD118 —42	火輪	輝石安山岩（粗粒）	12.0・24.0	最大幅は高さの2倍、軒の高さは火輪最大高の1/2以下。軒端の内傾斜角度70°。空輪受け納穴の径8.0cm、深さ5.0cm。緩い屋根反り。底部の大半はほぼ平坦であるが、軒端部に至り、強い傾斜で立上り軒端の傾斜に続く。納穴及び底部は工具刃幅1.0cm程の平ノミ状工具による荒仕上げ。屋根、軒、底端部は平ノミ、あるいは小斧で刃方向を一定にし、叩き上げる最終仕上げの一種（以下平行叩き仕上げという）が認められる。溝の肩に石臼や円礫とともに張り付く状態で出土。
2	SE14 —5 上位	火輪	軽石質角閃石安山岩	25.0・37.7	最大幅は高さの約1.5倍、軒の高さは最大幅の約1/2。軒端りの内傾斜角度約80°。強い弧状の屋根反り。底面は丸味強く軒反り線と底面弧線と一致し、下端線は弱い弧状を呈す。屋根部及び軒部には工具刃幅2cm程の平行叩きが施され、更に表面水磨き仕上げがなされている。火輪平面プランは正方形。3・4・5の五輪塔と井戸上位より共伴。井戸下位からは5・16の板碑も出土している。
3	SE14 —4 上位	火輪	軽石質角閃石安山岩	27.0・47.6	最大幅は高さの1.8倍、軒の高さは火輪最大高の1/2強。軒端の内傾斜角度約75°。直線気味の緩い屋根反り。丸味を帯びた底面の弧が軒反りと一致している。火輪平面プランは4辺の中程がやや張り気味の正方形を呈す。底面には工具刃幅2.0cm程の平ノミ状工具痕が2辺方向より認められる。屋根部及び軒端部には平行叩き痕が軒反りに合う状態で残る。
4	SE14 —6 上位	水輪	軽石質角閃石安山岩	22.8・35.2	水輪平面プランの円弧と側面プランの円弧が一致する。上面火輪受けの凹は2段に凹加工されている。中央凹部は平ノミ状工具により荒仕上げのまま強い弧を成し、上段の外周は平行叩き仕上げが施されている。下面凹は1段で所々に平行叩きが認められる。側面は水輪を置いた状態で水平方向の平行叩きが上下反転させながら加えられている。
5	SE14 —7 上位	地輪	軽石質角閃石安山岩	42.7・24.9 25.0	面の一部が剥離しているが、長方形を呈することから、縦長の地輪と考えられる。平面プランが長方形の4面には長軸方向に目を合わせて平行叩きの加工が加えられた後に、表面水磨き仕上げが施されている。

第4章 調査成果



用途不明石製品

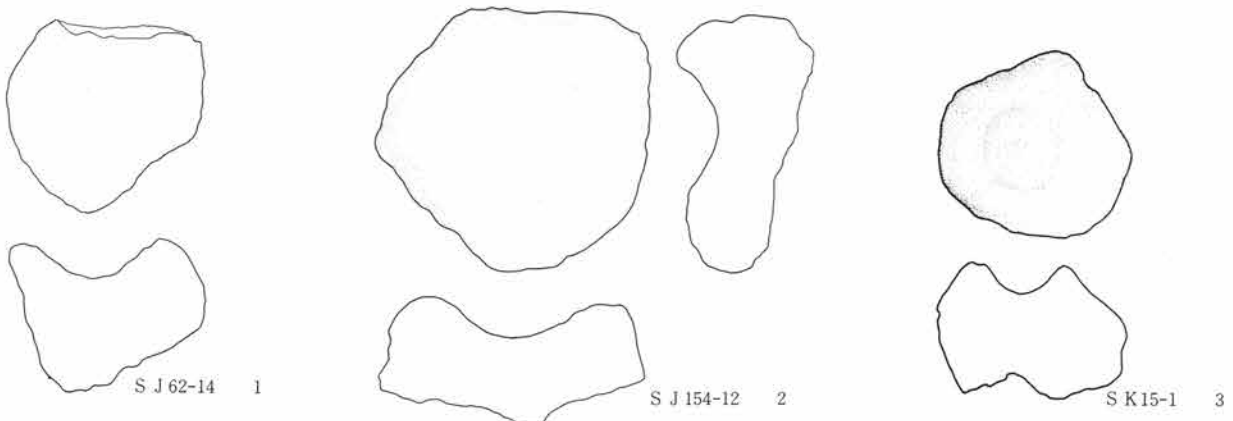
6. 用途不明石製品

用途不明の石製品は本遺跡から16個出土し、主として大きさ15~20cm前後の小ぶりの礫が使用され、まれに50cm近い大型の製品も含まれている。出土遺構は、井戸7点、溝5点、土壇2点、住居跡2点であった。

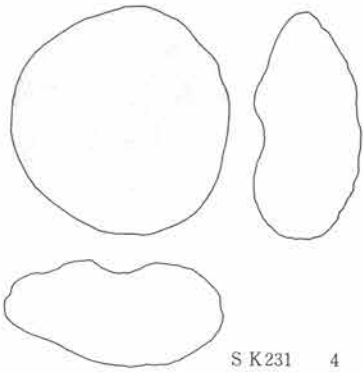
これらの石製品に共通することは、石の片面、または両面に径7~8cmから径12~13cm前後の窪みが付くことにある。窪みの深さはまちまちではあるが概ね径の大きさと同程度かやや浅いもので、この内面に使用痕を窺わせるスレの顕著なもの、これの目立たないものが存在している。石製品の底面は必ずしも平らとは云えず、むしろ、窪面を水平に平滑面に置こうとすればその大半の製品は大きく傾く。また使用している石材も、13が軽石である他は、15点すべてが石臼と同種の輝石安山岩（粗粒）を使用している。

この種の石製品は他の遺跡でも時折見かけるところであるが、太田市浜町屋敷内遺跡C地点の不明軽石製品、あるいは、小野上村椿原所在の中~近世墓出土の石製品に形態的には酷似している。しかし、本遺跡出土の石製品と異なる点は、同程度の大きさの石の中央に同規模の窪みを加工してはいるが、この面を2次的に使用していたことはなく、窪みを掘って完成用としていたことである。本遺跡の石製品の場合、浜町屋敷内遺跡C地点の軽石製品に比べ、硬質の石材を使用し敲打して窪みを付け、更にこの面に擦痕が残るまで使用している。両面に窪みを持つ6・9の場合、両方の窪みを比較してみると、径の大きい窪みの内面が小さい窪みの内面よりも良くスレている。このことは6に顕著である。しかし、あえて良く使い込んだ面の反対面に再び窪みを設けたと仮定すれば、この窪みは一定の大きさを越えては目的を達しづらい性格を帯びていたのかもしれない。このことは、これらの用途不明石製品と組を成すであろう工具との関係によるものであろうか。また、なぜ大きな石でなく小ぶりの石の中央に1ヶ所窪みを持たせるのかが、現に10のように大型で同一面に2ヶ所窪みを配する製品の存在からも疑問の持たれるところである。ところで、他と様相を少し異にしている10の窪みが残る同じ面の一部には、10×20cmの範囲程に平滑な研ぎ面が存在している。これが石製品の転用に基づくものなのかも不明である。8については、他の石製品と異なり両面からの窪みが貫通しているが、過度の使用の結果によるものか否か不明である。この穿孔部に煤が付着することから、一連の製品とは別の製品に転用されているのか別種の製品の可能性を含んでいる。このように不明な点の多い中であえて用途を推測すれば、少量の物質を突砕く為に使用する特殊な石臼の1種とも考えられるが、今後の類例の増加を持って用途を考えてゆきたい。

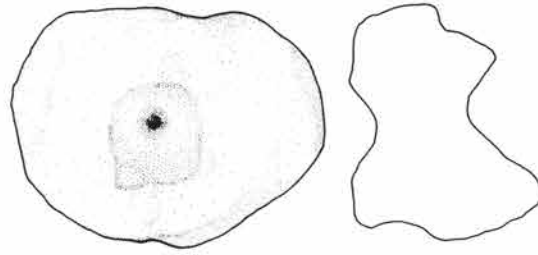
本遺跡出土の用途不明石製品は粉碎を目的とする共通部分から、石臼および茶臼と同年代の所産と考えたい。



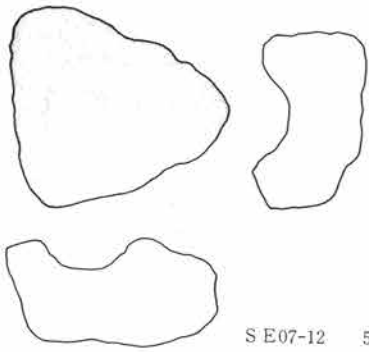
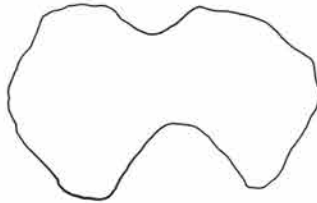
第4章 調査成果



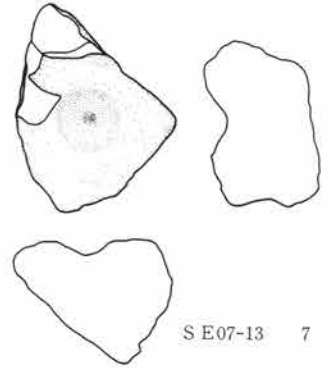
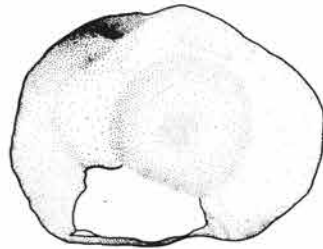
S K231 4



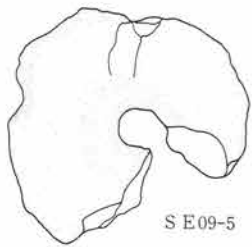
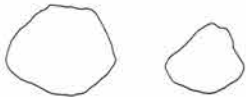
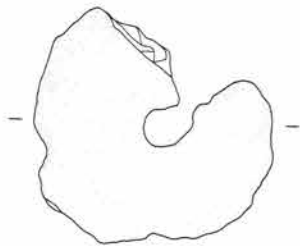
S E07-11 6



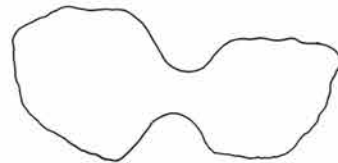
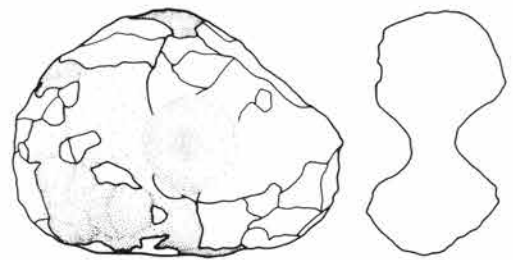
S E07-12 5



S E07-13 7

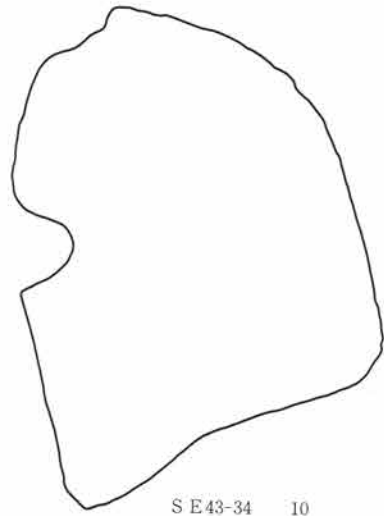
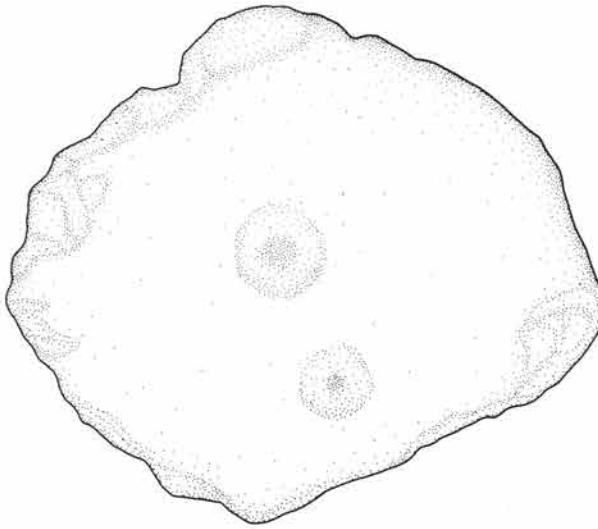


S E09-5 8

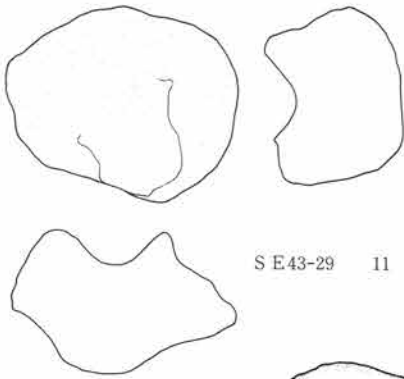


S E43-30 9

第5節 石製品について



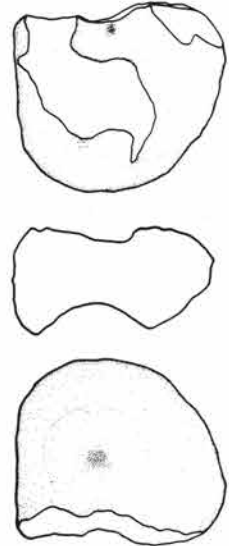
S E43-34 10



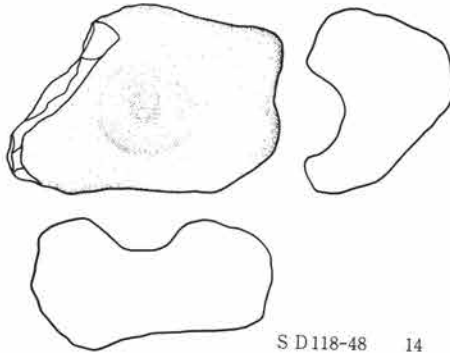
S E43-29 11



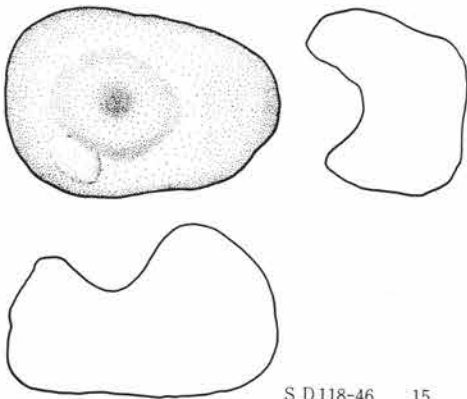
S D111 12



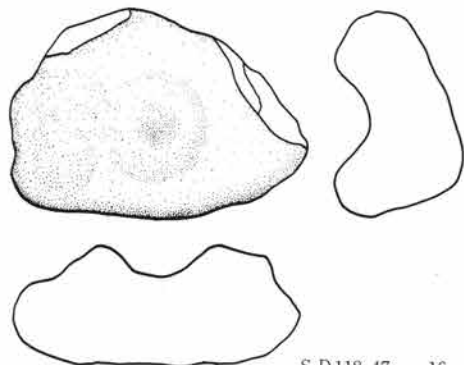
S D118-45 13



S D118-48 14



S D118-46 15



S D118-47 16

第4章 調査成果

NO	出土地点	大 き き 長径・短径・厚さ	穿孔部 直径・深さ	石 材	備 考
1	S J 62-14	15.5・14.5・11.5	8.0・2.8	輝石安山岩 (粗粒)	不整形の石材の一面方向に凹が認められる。凹面には敲打痕が確認されるがスレは少ない。裏面はやや尖り気味で不安定な自然面のままで加工痕等は確認されない。住居跡床面直上より出土。
2	SJ 154-12	21.4・20.3・10.8	12.5・2.8	輝石安山岩 (粗粒)	平面プランが歪んだ5角形を呈する石材の片面に凹が認められる。凹面には敲打痕とスレが残る。裏面凸凹していて不安定。住居跡床面直上より出土。
3	S K 15-1	15.5・15.0・10.8	6.5・2.5	輝石安山岩 (粗粒)	平面プラン不整5角形の中央部に円形の凹が認められる。凹の全面に敲打痕が残り、特に底面付近はスレている。
4	S K 231	17.8・17.0・7.7	5.0・1.0	輝石安山岩 (粗粒)	扁平円形礫の片面中央部に浅い凹が認められる。凹面は敲打されているが、スレは少ない。輝石の目立つ石材。
5	S E 07-12	17.0・15.8・8.5	8.0・2.5	輝石安山岩 (粗粒)	平面プラン3角形の中央に凹が敲打されているがスレは少ない。裏面は概ね表面と平行した安定した面を有す。
6	S E 07-11	25.0・18.0・15.5	(上)7.0・1.8 (下)11.0・5.6	輝石安山岩 (粗粒)	楕円形を呈する礫の表裏2面に凹が認められる。両方の凹に敲打痕とスレが確認されるが特に下面凹の中央付近に強いスレが残る。
7	S E 07-13	16.5・12.8・9.7	5.3・1.5	輝石安山岩 (粗粒)	平面プランが歪んだ3角形の中央に敲打された凹が認められるがあまりスレしていない。
8	S E 09-5	18.8・18.5・7.0	(上)9.0・— (下)8.0・—	輝石安山岩 (粗粒)	扁平円礫の中央付近に表裏両面より凹が施され孔が貫通している。両凹面には煤が付着している。
9	S E 43-30	26.2・19.5・12.0	(上)8.0・4.0 (下)7.8・3.5	輝石安山岩 (粗粒)	扁平隅丸3角形の表裏両面に敲打された凹が認められる。両凹ともよくスレている。
10	S E 43-34	48.0・40.0・32.0	(上)7.0・4.5 (下)3.5・1.0	輝石安山岩 (粗粒)	平面プラン変形菱形の中央とやや縁にズレた2ヶ所に凹が施されている。表面に付く凹と反対側の縁の20×10cmぐらいの範囲には磨滅した面が認められる。裏面には加工痕等認められない。
11	S E 43-29	18.0・14.1・10.0	7.0・2.0	輝石安山岩 (粗粒)	平面楕円形の礫中央に凹が認められる。凹内面は良くスレている。裏面の中央付近に剝離があることから、水平に据え凹方向から比較的強い力が加えられたと考えられる。
12	S D 111	15.0・9.0・9.5	10.0・3.0	輝石安山岩 (粗粒)	全体の1/3程を欠失している。平面ほぼ全面に凹が施されスレも認められる。
13	SD118-45	16.8・14.0・8.0	(上)6.5・1.0 (下)9.0・2.0	軽石(ニッ岳)	扁平円礫の表裏両面に凹が認められる。1/3を欠失している。表面の凹は不整形で、裏面凹は楕円形気味を呈す。特に裏面凹面には工具刃幅0.8cm程の平ノミ状工具痕が付くがスレは確認できない。
14	SD118-48	21.0・14.7・11.0	8.0・3.0	輝石安山岩 (粗粒)	長方体気味の石材中央に凹が付くがスレはあまり認められない。1側面には緩い弧を有する磨滅面あり。丸味を持つ鉄器の研磨に使用していると考えられる。
15	SD118-46	22.0・14.9・13.5	8.0・3.7	輝石安山岩 (粗粒)	平面プラン長楕円形、立面プラン隅丸長立形の礫上面に凹が施されている。凹面がややスレている。
16	SD118-47	23.6・16.7・9.2	7.5・2.7	輝石安山岩 (粗粒)	扁平楕円形礫上面中央に凹が付く。凹面にはスレが認められる。

第6節 金属製品について

本遺跡において鉄製品は、竪穴住居40軒から53点、竪穴状遺構1基から2点、溝7条から14点、土壇5基から6点、土壇墓2基から11点、井戸2基から3点、遺構外に9点出土している。銅製品は、竪穴住居1軒から2点、竪穴状遺構2基から2点出土している。総計101点で、この他形態不明で実測しなかった破片は30点程である。鉄滓は50点、韃の羽口も8点出土しているが、小鍛冶跡と想定できる遺構は検出されなかった。以下製品別に、若干の説明を行う。

鎌

鎌は5点出土している。1・2は、身が比較的直線的で、柄の着装部が直角に近い。2は刃の研ぎ減りが顕著である。3は身全体が大きく彎曲し、柄の着装部は鈍角を成す。4は、身が真直ぐで、先端は剣状を呈す小刀の感があり、鎌とするのに疑問もある。切っ先は棟側のみ片冠落とし造りである。柄の着装部は左側にあり、鈍角を成している。

刀子

刀子は、茎部や刃部の破片を加えると23点出土している。刃渡り10cm前後から3.6cmと小型のものまであり全体的に研ぎ減りが著しい。5～7は、他の刀子に比べ身幅が広く、関が鈍角を成すもので一般的な刀子と比べ用途の違う可能性も示唆されている。9～14は、峰部にのみ関をもち、関は直角に近い。16・17は、刃部にのみ関をもつ。18～22は、両側に関を持つが緩やかに立つ。出土位置については、23点中17点が竪穴住居出土であり、その中で出土位置の分るもの9点中6点が、カマド周辺部の出土であった。

釘

釘は23点出土している。その他棒状鉄製品が25点出土しており、大半は釘の可能性がある。30・31は基部を叩き潰すことによって造られ頭部が鉸形を成す。32～36は基部を一度叩いてから折り曲げて造られている。37～46は基部下端を薄く叩き延してから折り曲げたもので、基部と頭部の間に空間部分を持つものはない。釘については、竪穴住居から5点、土壇墓11点、溝・井戸から2点づつ、竪穴状遺構・土壇・遺構外に1点づつの出土である。このうちS Z 16では10本の釘が出土している。木質部の遺存するものもあり、木棺に打ち込まれた位置で出土したものと考えられる。

その他、鋸・鎌・紡錘車・壺金・鉈が一点づつ出土している。鉈は伴出遺物から8世紀前半の所産と考えられる。用途の不明なものは17点あり、環状を成すもの、棒状や篋状のもの、薄い鉄板を細工したもの等がある。

鍔帯

S D 59から銅製の鍔帯が2点出土している。100の巡方は、長さ3.0cm、幅2.3cmの比較的横長のものである。下辺に、長さ2.6cm、幅0.8cmの垂孔をもつ。裏金具は出土していない。101の鉈尾は、長さ1.35cm、幅1.3cmと非常に小型であり、何に使用されたものか不明である。

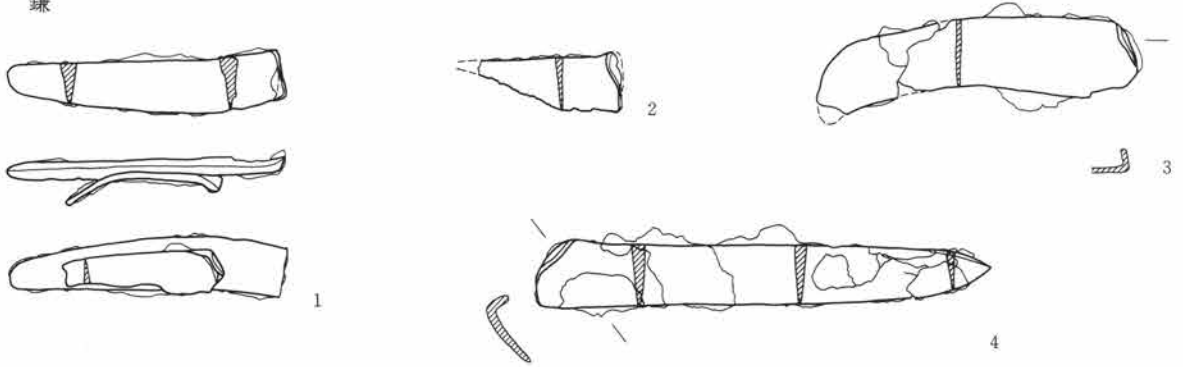
参考文献

- 1 松村恵司『山田水呑遺跡—上総国山邊郡山口郷美定遺跡の発掘調査報告書—』山田遺跡調査会 1977年
- 2 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』長野県教育委員会 1982年

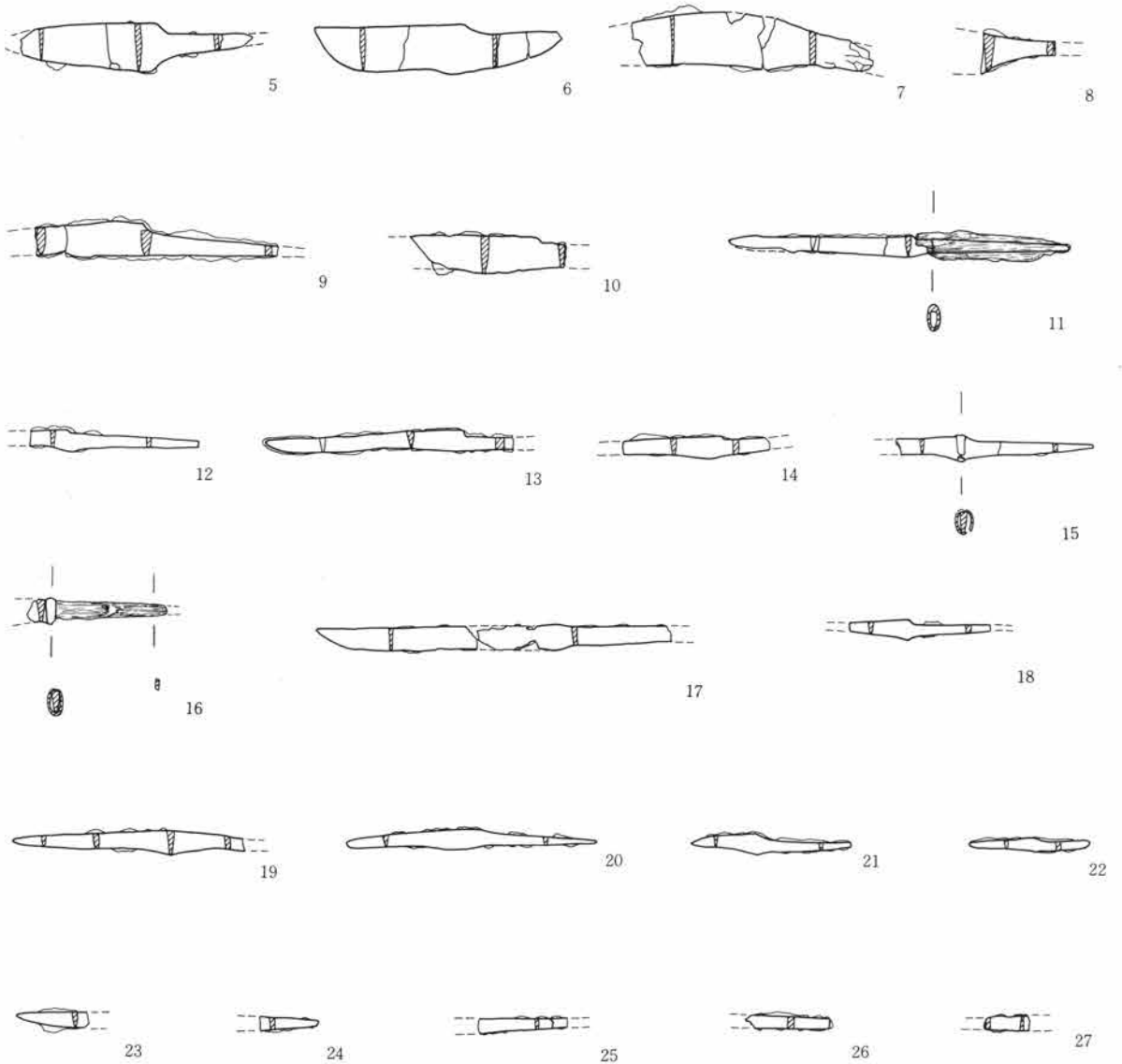
第4章 調査成果

1. 鉄製品

鎌

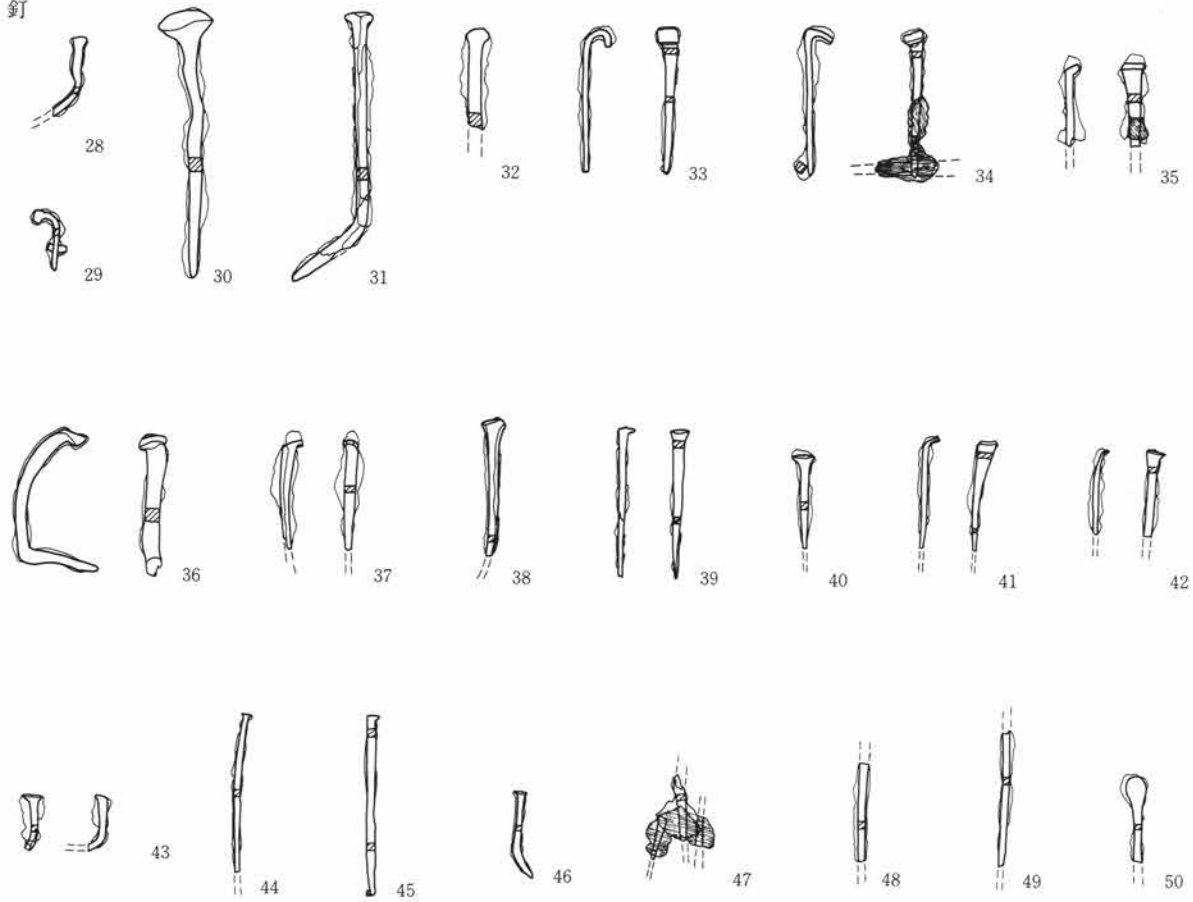


刀子

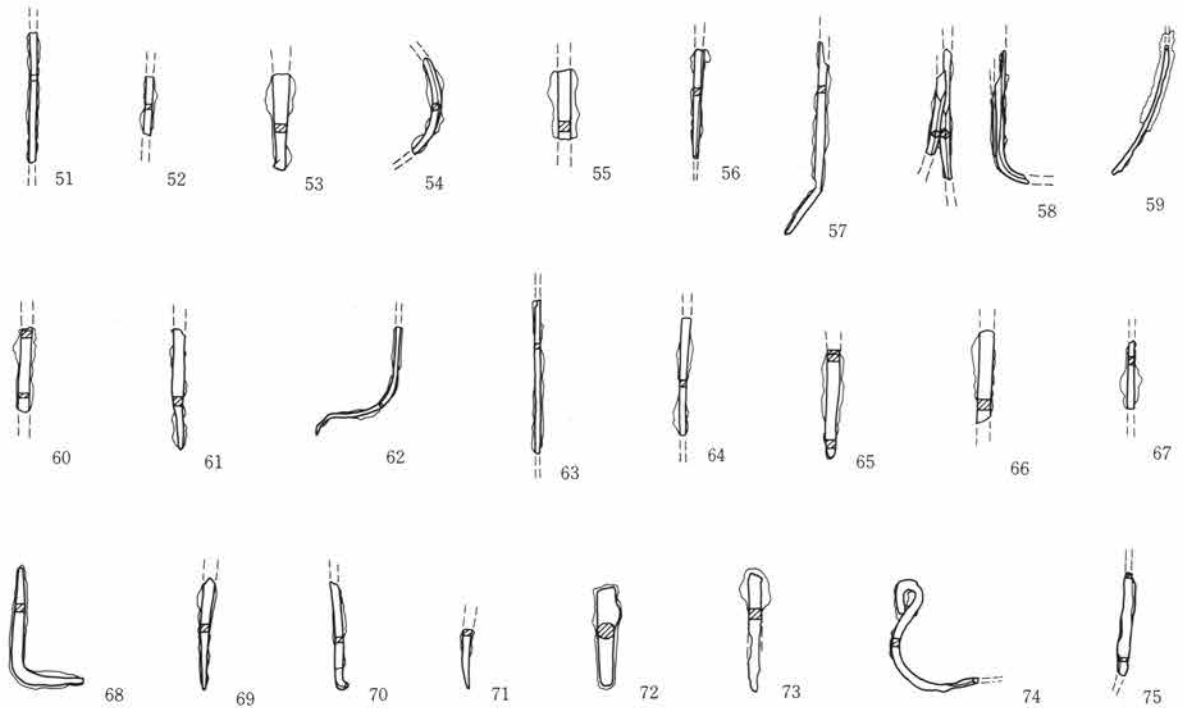


第6節 金属製品について

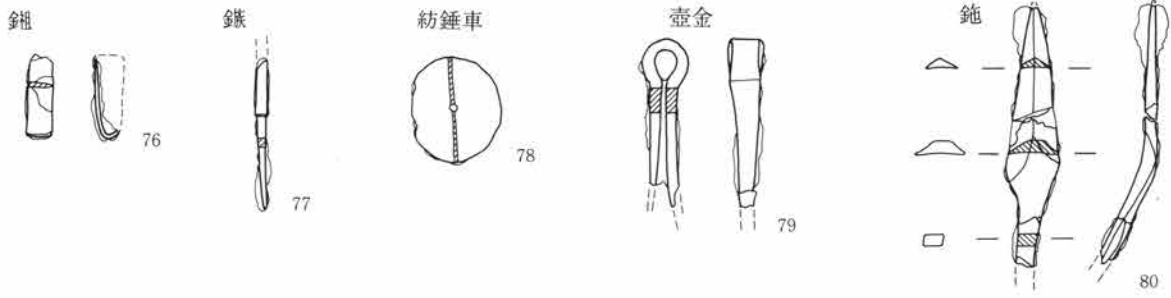
釘



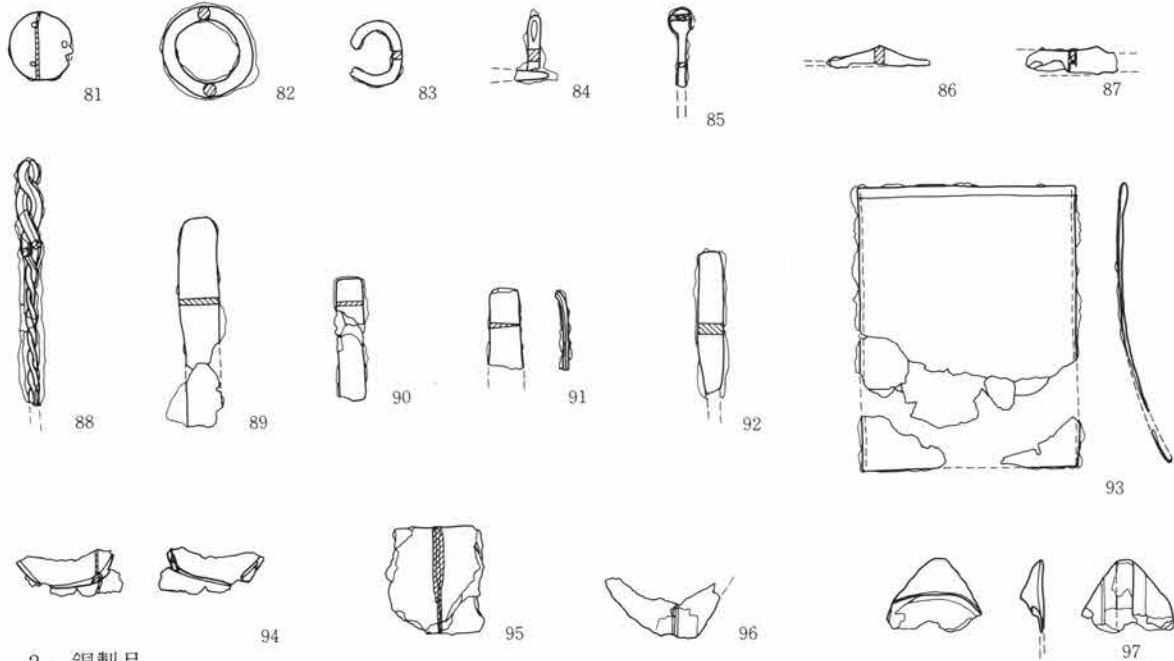
棒状不明鉄製品



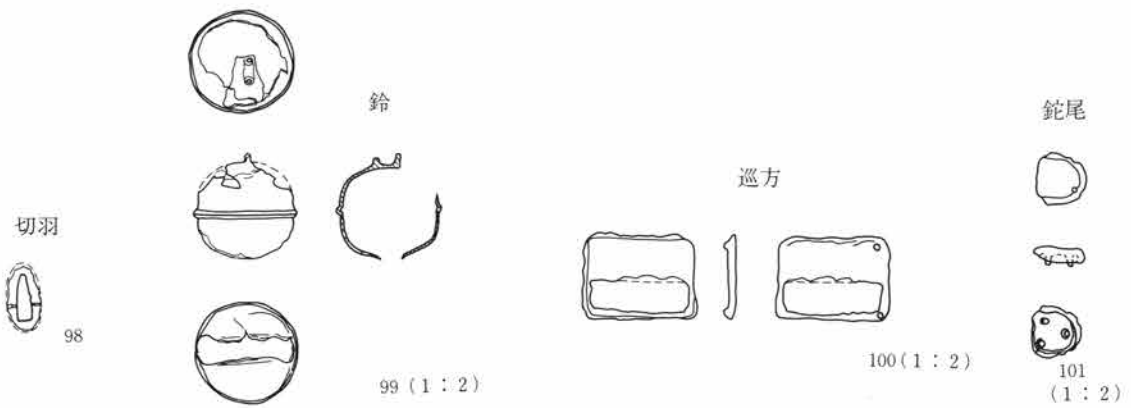
第4章 調査成果



用途不明鉄製品



2. 銅製品



No.	出土遺構	出土位置	製品名	遺存状態・特徴	現存計測数値(cm)		
					長さ	幅	厚さ
1	S D59-551	下層	鎌	鎌2点が錆によって接着している。1点は完存。基端部に折り返しを有する。他の1点は先端部を欠くが、基端部は折り返される。	全長14.7 8.3	2.8 2.3	0.8 0.4
2	S D59-549	上層	鎌	先端を欠き、基端部は折り返される。	7.5	2.8	0.3

第6節 金属製品について

No	出土遺構	出土位置	製品名	遺存状態・特徴	現存計測数値(cm)		
					長さ	幅	厚さ
3	S J 94-20	床面密着	鎌	先端を欠き、基端部は折り返される。	17.0	4.1	0.2
4	S J 74-9	カマド堀方内	鎌	完存。基端部に折り返しを有する。基端から先端まで直線的な大型品である。基端の折り返しは左側にあり、先端は片先のみ片冠落し造りである。	全長24.2	3.5	0.6
5	S J 01-2	床面密着 カマド前	刀子	身・茎ともに端部を欠く。	身 8.2 茎 4.8	身 2.7 茎 1.2	0.2
6	S J 146-3	床面密着	刀子	完存。関は刃部にはなく、峰部にのみあり、緩やかに括れる。	身 8.5 茎 5.4	身 2.8 茎 1.8	0.2
7	S J 210-1	床面密着	刀子	身・茎とも端部を欠く。明瞭な関はなく茎に向かって窄まる。	13.8	身 3.0 茎 1.8	身 0.2 茎 0.4
8	S J 24-3	床面密着	刀子	茎の一部が残存。	4.0	0.7	0.3
9	S J 140-1	床面密着 竈左側壁寄り	刀子	身は途中で欠損、茎は先端を欠く。錆化が著しい。刃部は直線的で、峰部に鈍角な関をもつ。	身 6.1 茎 7.8	身 2.0 茎 0.6	0.5
10	遺構外出土35	78-E15グリッド	刀子	身は途中で欠損、茎は大半を欠く。関は刃部になく、峰部にのみあり、ほぼ直角をなす。	身 7.0 茎 1.5	2.0 1.2	0.4 0.25
11	S J 69-11	床面-16cm 床下土域内	刀子	ほぼ完存。刃部を僅かに欠く。関は峰部にのみあり、ほぼ直角をなす。木質部が遺存する。	身 10.5 茎 8.8	1.0 0.6	0.2 0.3
12	S J 76-5	床面密着 竈左側壁寄り	刀子	身は大半を欠き、茎は端部を欠損。関は峰部にのみある。	身 2.2 茎 7.3	0.9 0.6	0.2 0.2
13	S J 99-7	床下土底面密着	刀子	茎は途中で欠損。関は峰部にのみあり、直角をなす。	身 12.2 茎 2.6	1.0 0.7	0.4 0.4
14	S J 142-8	床面密着 西壁際	刀子	身・茎とも途中で欠損。関は峰部にのみあり、直角をなす。身は錆化が著しい。	身 5.7 茎 2.7	1.0 0.9	0.3 0.2
15	S J 81-7	覆土	刀子	身は途中で欠損。関は鈍角をなし、鏝が残存するが、関部分の錆化が著しい。	身 4.0 茎 7.4	0.9 0.5	0.2 0.2
16	S D59-552	下層	刀子	身は一部残存、茎は端部を欠く。鏝が残存し、茎部には木質が僅かに遺存する。	身 1.1 茎 6.5	1.2 0.6	0.4 0.2
17	S K115-15	覆土	刀子	身は中途を欠き、茎は中途で欠損。関は刃部にのみあり、鈍角をなす。木質が僅かに遺存する。刃部は非常に薄手である。	身 13.8 茎 6.0	1.3 1.1	0.2 0.3
18	S J 113-2	覆土	刀子	身・茎ともに端部を欠く。関は刃部・峰部共にある。	身 3.4 茎 4.3	0.8 0.5	0.2 0.3
19	S J 77-6	覆土	刀子	身は完存。茎は端部を欠く。刃部は関付近で内彎する。関は刃部のみある。	身 9.0 茎 4.2	0.9 0.7	0.2 0.3
20	S J 161-9	床面密着 カマド右側	刀子	完存。刃部は内彎する。関は刃部・峰部共にあるが、鈍角をなす。	全長14.2 身 5.7 茎 8.5	0.7 0.5	0.2 0.2

第4章 調査成果

No	出土遺構	出土位置	製品名	遺存状態・特徴	現存計測数値(cm)		
					長さ	幅	厚さ
21	S J 148-17	床面密着	刀子	完存。刃部は著しく内彎する。関は刃部・峰部共にあるが、鈍角をなす。	全長9.0 身 3.7 茎 5.3	0.7 0.5	0.15 0.2
22	遺構外出土34		刀子	完存。関は刃部・峰部共にある。小形の刀子である。	全長6.9 身 3.7 茎 3.2	0.5 0.5	0.2 0.25
23	S J 199-25	カマド内覆土	刀子	身の先端のみ残存。	4.1	0.9	0.25
24	S J 75-11	堀方内	刀子	茎の端部のみ残存。	3.3	0.7	0.25
25	S J 188-9	覆土	刀子	茎の一部のみ残存。	5.2	0.6	0.2
26	S K 254-1	覆土	刀子	茎の端部のみ残存。	4.3	0.6	0.3
27	遺構外出土33	92-H01	刀子	身と茎の一部残存。	身 1.3 茎 1.0	0.9 0.7	0.2 0.2
28	S J 32-3	覆土	釘	先端部を欠く。頭部は方形で打ちつぶして造られている。	4.8		0.35
29	S J 93-7	覆土	釘	先端部を欠く。中途に木質の残存する釘の基部が付着する。頭部は錆化が著しく、巻き込まれたような固まりであるが、折頭式と思われる。	3.9		0.3
30	S J 137-9	床上4cm	釘	完存。断面は方形。頭部は大きく、直径2.8cmの円形を呈すが、頭頂部も首部も錆に被われていて詳細は不明である。	14.0		0.7
31	S K 127-1	覆土	釘	完存。断面は方形。頭部は円形、打ちつぶして造られる。	15.7		0.7
32	S E 06-14	覆土	釘	先端部を欠く。錆化が著しいが、頭部は折頭式と思われる。	5.4		0.7
33	S Z 16-4		釘	先端部を欠く。断面は方形、頭部は折頭式である。	7.6		0.45
34	S Z 16-11		釘	完存。断面は方形。頭部は折頭式である。先端部には木質部が残存し、直交して他の釘の幹部が付着している。	8.0		0.5
35	S Z 16-10		釘	先端部を欠く。断面は方形、頭部は折頭式である。基部には木質部が残存する。	4.0		0.7
36	S D 113-2	覆土	釘	完存。断面は方形。頭部は折頭式である。	11.0		0.8
37	S T 20-5	覆土	釘	先端部を欠く。断面は方形。頭部は薄くのぼして折り曲げている。	5.7		0.4
38	S J 66-3	覆土	釘	先端部を欠く。断面は方形。頭部は頂部を欠くが、折り曲げている。	7.3		0.35
39	S J 152-15	覆土	釘	完存。断面は方形を呈す。頭部は薄くのぼして、折り曲げている。	7.8		0.5

第6節 金属製品について

No.	出土遺構	出土位置	製品名	遺存状態・特徴	現存計測数値(cm)		
					長さ	幅	厚さ
40	S Z 16-2		釘	先端部を僅かに欠く。断面は方形、頭部は錆化が著しいが、薄くのぼして折り曲げている。	5.0		0.45
41	S Z 16-3		釘	完存。断面は方形。頭部は薄く打ちのぼして折り曲げられる。	6.0		0.5
42	S Z 16-5		釘	先端部を欠く。断面は方形、頭部は薄くのぼして折り曲げられるが、端部を欠く。	4.5		0.5
43	S Z 15-1		釘	先端部を欠く。断面は正方形。頭部は薄く打ちのぼしている。木質部が残存する。	3.0		0.3
44	S D 58-22	覆土	釘	頭頂部と先端部を欠く。断面は正方形。	8.3		0.4
45	S E 43-31	覆土	釘	完存。断面は正方形、頭部はほとんど基部から真直ぐで、僅かに打ちのぼされる。	9.5		0.45
46	遺構外出土29	118-I 06	釘	完存。断面は方形、頭部は円形を呈す。	4.7		0.4
47	S Z 16-9		釘	釘3本が木棺に打ち込まれた時の状態か、木質に被われている。すべて基部のみであり、断面は方形を呈す。	2.3 3.5 1.6		0.3 0.6 0.35
48	S Z 16-7		釘	基部のみ残存。断面は方形を呈す。	5.2		0.4
49	S Z 16-6		釘	基部のみ残存。断面は方形を呈す。	7.2		0.35
50	S Z 16-8		釘	先端部を欠く。頭部は錆化が著しく詳細は不明であるが、偏平な円形を呈す。	4.5		0.5
51	S J 34-15	覆土	棒状鉄製品	釘と思われるが基部のみ残存する。断面は方形。	6.8		0.35
52	S J 68-33	覆土	棒状鉄製品	基部のみ残存。断面は方形。	3.2		0.4
53	S J 87-10	床面密着	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は方形。	5.1		0.65
54	S J 92-12	覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は方形。	5.4		0.4
55	S J 98-11	覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は方形。	3.5		0.65
56	S J 94-21	覆土	棒状鉄製品	先端は僅かに欠損、断面は方形。	5.7		0.5
57	S J 94-22	床面密着	棒状鉄製品	上部を欠く。断面は方形。	11.0		0.45
58	S J 100-3	覆土	棒状鉄製品	二本が錆着いており、相方とも両端部を欠く。断面は方形。	7.8 4.5		0.5 0.3
59	S D 107-3	覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。錆化が著しく縦に裂けるように剥がれているので、厚さは不明であるが、断面は方形。	7.3		
60	S J 138-13	覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。錆化が著しく、詳細は不明であるが、上部は断面が正方形に近く下部は偏平になる。	4.5		0.7
61	S J 159-6	覆土	棒状鉄製品	上部を欠く。断面は方形。	6.3		0.5

第4章 調査成果

No.	出土遺構	出土位置	製品名	遺存状態・特徴	現存計測数値(cm)		
					長さ	幅	厚さ
62	S J 160-8	覆土	棒状鉄製品	上部を欠く。全体的に剥落している。断面は円形である。	8.4		0.25
63	S J 199-29	覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は方形。	8.1		0.3
64	S J 199-28	覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は方形。	6.2		0.4
65	S J 199-27	覆土	棒状鉄製品	上部を欠く。断面は方形。	5.5		0.6
66	S J 205-6	カマド内覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は方形。	5.0		0.7
67	S J 205-7	カマド内覆土	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は方形。	3.6		0.35
68	S T 15-64	覆土	棒状鉄製品	完存。両端部は細く窄まり、基部は「L字」状に曲る。断面は方形。	8.8		0.6
69	S E 12-15	覆土	棒状鉄製品	上部を欠く。断面は方形。	5.9		0.5
70	S E 12-16	覆土	棒状鉄製品	上部、先端部を僅かに欠く。先端部は直角に曲る。断面は方形。	5.5		0.6
71	S D 37-3	覆土	棒状鉄製品	先端部のみ残存。断面は方形。	3.2		0.5
72	S D 38-10	覆土	棒状鉄製品	完存? 錆化が著しく、上部の形状は不明。断面形は楕円形である。	5.4		0.9
73	S E 06-12	覆土	棒状鉄製品	全体的に剥落し、上部は錆化が著しく形状は不明。断面は方形。	6.3		0.6
74	遺構外出土30		棒状鉄製品	先端部を僅かに欠く。上部は曲って輪状となるが、先端は錆着いていて形状は不明。断面は円形を呈す。	9.0		0.5
75	遺構外出土31	110-G 35	棒状鉄製品	両端部を欠く。断面は偏平な方形。	5.3	0.55	0.25
76	S D 59-550	上層	罎		4.4	最大幅 推定1.5	0.2
77	S D 58-23	覆土	鉢	篋被と茎の一部を残す。	篋被 3.0 茎 5.0		0.6 0.4
78	S J 189-1	床上 6 cm	紡錘車	紡輪部のみ残存。		紡輪径 5.5	紡輪厚さ 0.4
79	S D 38-8	覆土	壺 金	端部を欠く。厚さ0.5cmの鉄を折り曲げ内径1.4cmの孔を作っている。	8.0		0.5
80	S J 75-10	堀方内	鉈	茎は途中で欠損している。刃部の断面は三角形、茎は方形を呈す。	身 10.0 茎 3.5	1.7 1.1	0.5 0.6
81	S J 69-12	覆土	用途不明 鉄製品	厚さ0.15cmの薄い円板状を呈す。錆化が著しく観察し得ないが、X線撮影によって三孔が確認された。	直径 3.4		0.15
82	S J 148-18	堀方内	用途不明 鉄製品	完存。環状を呈し、断面は0.65cmの円形である。一部分錆が盛り上っており金具のついている可能性もあるが、X線撮影によっても写らなかった。	直径 5.0		0.65

第6節 金属製品について

No	出土遺構	出土位置	製品名	遺存状態・特徴	現存計測数値(cm)		
					長さ	幅	厚さ
83	S D59-553	下層	用途不明 鉄製品	完存。径3.5×2.7cmの輪状を呈す。断面は円形。	径 3.5 2.7		0.5
84	S J 143-6	覆土	用途不明 鉄製品	棒状の2片が錆によって接合している。一方の端部には、楕円形の孔がある。	3.2 2.3		0.7 0.7
85	S J 118-49	覆土	用途不明 鉄製品	棒状をなし、頭部は環状を呈し、全体的に扁平である。	4.0		0.5 0.3
86	遺構外出土37	127-I 06	用途不明 鉄製品	部分的に剥がれているが、中央が三角形状に盛り上がり、両端が細く窄まる。	5.4	最大 0.9 最少 0.2	0.4
87	S K269-11	覆土	用途不明 鉄製品	薄く層状に剝離し、欠けているので、形態は不明。	5.0		0.5
88	S D38-9	覆土	用途不明 鉄製品	錆化が著しく、不明瞭だが、棒状の鉄を2つ折にして捻ったように見える。断面形は不明。	12.9		1.2
89	S J 62-15	覆土	用途不明 鉄製品	薄く筥状を呈す。	11.6		0.2
90	S T15-63	覆土	用途不明 鉄製品	短冊状を呈す。錆化が著しく、薄く剥がれている。片方の端が「くの字」状に曲がっている。X線撮影によっても孔は確認できなかった。	6.5	1.7	0.4
91	遺構外出土32	66-E 30	用途不明 鉄製品	短冊状を呈す。上端の角は丸みをもち、僅かに反っている。	4.2	1.5	0.25
92	遺構外出土38	116-H16	用途不明 鉄製品	片方の端は欠損。細長く厚みをもつ。断面は長方形を呈す。	7.5	1.4	0.55
93	S D78-1	覆土	用途不明 鉄製品	一枚の鉄板を2つに折り曲げて、両端を5mm程重ねて接着している。ハンダづけによる接合と思われる。	14.8	11.6	0.1
94	S J 160-7	覆土	用途不明 鉄製品	薄い鉄板が袋状になっている。			0.2
95	S J 199-26	覆土	用途不明 鉄製品	一枚の鉄板が2つに折り曲げられている。三方が欠けている。	5.5	5.0	0.3
96	S J 201-4	覆土	用途不明 鉄製品	薄い鉄片。全体的に薄く層状に剝離している。			
97	遺構外出土36	135-J 23	用途不明	薄い鉄板を折り曲げて、形を作っている。			
98	S T08-1	確認面	銅製切羽	縁はほとんど欠けるが、楕円形を呈す。	3.4 槽穴 2.5	1.2 最大幅 0.8	0.1 最小幅 0.2
99	S T24-1	覆土	銅製 鈴	鍍金される。球体を呈し、腹部に隆起突帯文が一条巡る。	2.6		
100	S J 59-7		銅製巡方	2.6×0.8の垂孔を持つ。鋸は欠けているが、一本は貫通している。	3.0	2.3	0.2
101	S J 59-8		銅製鉈尾	裏面に0.3cmの鋸が打たれている。	1.35	1.3	0.15

第7節 渡来銭

下東西遺跡からは、総数129枚の渡来銭の出土がみられた。渡来銭の出土した遺構は、竪穴住居4軒、土塚墓5基、井戸2基、溝3条、竪穴状遺構1基から111枚の出土がみられ、その他遺構外より18枚の出土がみられた。渡来銭は、銭名によって分類すると下記の表の通りである。時代別では、唐銭1種類13枚、北宋銭、21種類96枚、南宋銭4種類5枚、明銭2種類11枚である。

出土状態は、多くの遺構から単独で出土しているが、土塚墓からは、S Z 10 (2枚)、S Z 13 (4枚)、S Z 14 (3枚)、S Z 15 (15枚) から副葬品として埋葬されているためか複数の出土がみられる。S D 32からは、さし縄に通された状態での出土がみられる。多数出土した遺構の銭種は、S Z 15で10種類、S D 32では25種類もの銭種がみられる。

出土渡来銭を概観してみると、唐銭は、開元通寶1種類だけである。铸造年代は、武徳四年以降数回に渡っておこなわれているが、本遺跡出土のもので区別の可能なものはない。書体は、すべて隷書、穿形はすべて方形で、36に上仰月文、40に下仰月文の背文がみられる。

北宋銭は、21種類95枚と多く、その内でも皇宋通寶は、18枚と本遺跡の渡来銭出土数の内で一番多い。書体は、真書・篆書・隷書の3書体がみられ、7・56・120のものは「皇」・「通」・「寶」は隷書であるが、「宋」は真書に近い書体を示す。穿形は、59が○形である他は方形を示す。その他、熙寧元寶・元豊通寶・元祐通寶・紹聖元寶の出土が多い。北宋銭の書体は、真書・行書・篆書・隷書の4種類がみられ、同一銭種のなかでも2～3書体がみられるものもある。穿形は、ほとんど方形であるが、22・87の元祐通寶に○形がみられる。背文は90の紹聖元寶に上仰月文がみられる。

南宋銭は、4種類5枚である。書体は、紹興通寶が篆書である他は真書である。嘉泰通寶・開禧通寶・咸淳元寶には、二の背文がみられる。

明銭は、洪武通寶・永楽通寶の2種類がみられ、書体は、すべて真書である。9の洪武通寶には、一銭の背文がみられる。

引用・参考文献

- 陸原 保編 「改訂版東洋古銭価格図譜 全」万国貨幣洋行 1971年
 坂詰秀一編 「出土渡来銭」ニュー・サイエンス社 1986年
 宇田川恵子 「付編 株木遺跡出土古銭」『B4 株木遺跡』藤岡市教育委員会 1984年

NO	銭名	時代	初铸年代	西 暦	出土数
1	開元通寶	唐	武徳四年	621年	13
2	淳化元寶	北宋	淳化六年	990年	1
3	至道元寶	北宋	至道六年	995年	1
4	景德元寶	北宋	景德元年	1004年	1
5	祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008年	5
6	祥符通寶	北宋	大中祥符元年	1008年	1
7	天禧通寶	北宋	天禧元年	1017年	4
8	元聖通寶	北宋	天聖元年	1023年	4
9	景祐元寶	北宋	景祐元年	1034年	2
10	皇宋通寶	北宋	皇宋二年	1039年	18
11	嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年	1056年	1
12	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年	1056年	3
13	治平元寶	北宋	治平元年	1064年	2
14	熙寧元寶	北宋	熙寧元年	1068年	13
15	元豊通寶	北宋	元豊元年	1078年	13
16	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年	8
17	紹聖通寶	北宋	紹聖元年	1094年	8
18	元符通寶	北宋	元符元年	1098年	2
19	聖宋元寶	北宋	建中靖国元年	1101年	2
20	大觀通寶	北宋	大觀元年	1107年	3
21	政和通寶	北宋	政和元年	1111年	3
22	宣和通寶	北宋	宣和元年	1119年	1
23	紹興元寶	南宋	紹興元年	1131年	2
24	嘉泰通寶	南宋	嘉泰元年	1201年	1
25	開禧通寶	南宋	開禧元年	1205年	1
26	咸淳元寶	南宋	咸淳元年	1265年	1
27	洪武通寶	明	洪武元年	1368年	3
28	永楽通寶	明	永楽六年	1408年	8
29	判読不可能				4
合 計		28種類 (判読可能)		129枚	

注

(1) 書体の鑑定は、当事業団真下悦子氏にお願いした。



1



7



2



8



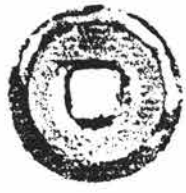
3



9



4



10



5



11

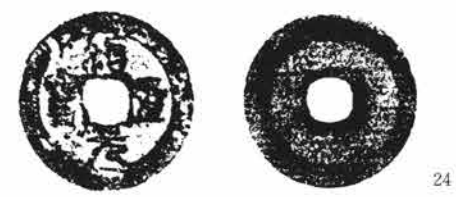
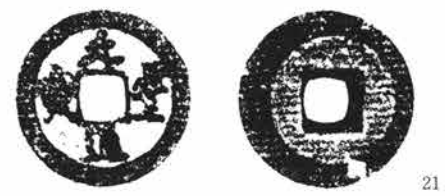
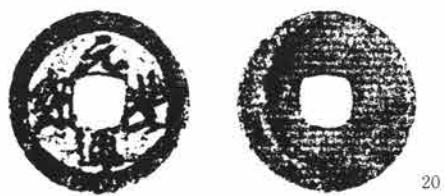
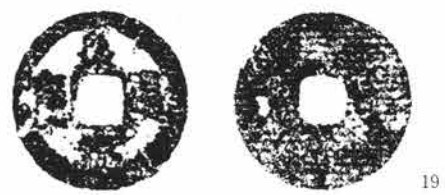
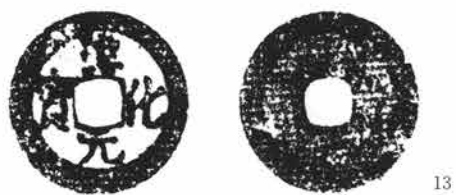


6



12

第4章 調査成果





25



31



26



32



27



33



28



34



29



35



30



36



37



43



38



44



39



45



40



46



41



47



42



48



49



55



50



56



51



57



52



58



53



59



54



60

第4章 調査成果



61



67



62



68



63



69



64



70



65



71



66



72



73



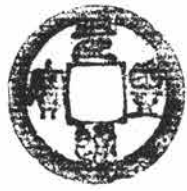
79



74



80



75



81



76



82



77



83



78



84

第4章 調査成果



85



91



86



92



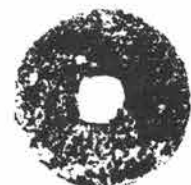
87



93



88



94



89



95



90



96



97



103



98



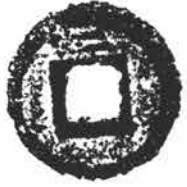
104



99



105



100



106



101



107



102



108

第4章 調査成果



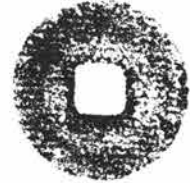
109



115



110



116



111



117



112



118



113



119



114



120



121



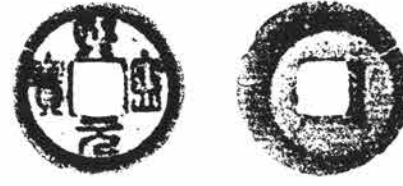
125



122



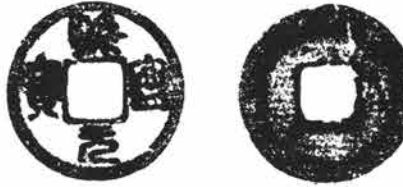
126



123



127



124



128

No	錢名	出土遺構	時代	初鑄年代	西曆	外輪徑	內輪徑	重量	穿形	書體 ⁽¹⁾	背文
1	紹聖元寶	S J 32覆土	北宋	紹聖元年	1094年	2.46cm	1.84cm	2.6 g	方穿	行書	
2	聖宋元寶	S J 84覆土	北宋	建中靖國元年	1101年			1.1	方穿	篆書	
3	永樂通寶	S Z 10	明	永樂六年	1408年	2.55	2.08	3.1	方穿	真書	
4	皇宋通寶	S Z 10	北宋	寶元二年	1039年	2.47	2.05	2.2	方穿		
5	紹興元寶	S Z 12	南宋	紹興元年	1131年	2.55	1.8	1.8	方穿	篆書	
6	開元通寶	S Z 13	唐	武德四年	621年	2.42	1.9	3.5	方穿	隸書	
7	皇宋通寶	S Z 13	北宋	寶元二年	1039年	2.49	1.89	3.4	方穿	隸書	
8	大觀通寶	S Z 13	北宋	大觀元年	1107年	2.43	2.18	2.2	方穿	真書	
9	洪武通寶	S Z 13	明	洪武元年	1368年	2.23	1.68	2.6	方穿	真書	一錢
10	元豐通寶	S Z 14	北宋	元豐元年	1078年	2.39	1.9	2.6	方穿	行書	

第4章 調査成果

No.	銭名	出土遺構	時代	初鑄年代	西曆	外輪径	内輪径	重量	穿形	書体 ⁽¹⁾	背文
11	紹聖元寶	S Z 14	北宋	紹聖元年	1094年	2.5 cm	1.92cm	3.4 g	方穿	行書	
12	永樂通寶	S Z 14	明	永樂六年	1408年	2.49	2.12	2.6	方穿	真書	
13	淳化元寶	S Z 15	北宋	淳化元年	990年	2.45	1.8	2.3	方穿	真書	
14	祥符元寶	S Z 15	北宋	大中祥符元年	1008年	2.49	1.9	2.7	方穿	真書	
15	祥符元寶	S Z 15	北宋	大中祥符元年	1008年	2.5	1.78	2.3	方穿	真書	
16	天聖元寶	S Z 15	北宋	天聖元年	1023年	2.44	1.98	2.5	方穿	真書	
17	天聖元寶	S Z 15	北宋	天聖元年	1023年	2.49	1.98	2.1	方穿	篆書	
18	皇宋通寶	S Z 15	北宋	寶元二年	1039年	2.41	1.86	2.8	方穿	真書	
19	皇宋通寶	S Z 15	北宋	寶元二年	1039年	2.42	2.06	2.5	方穿	真書	
20	元豐通寶	S Z 15	北宋	元豐元年	1078年	2.42	1.89	3.1	方穿	行書	
21	元豐通寶	S Z 15	北宋	元豐元年	1078年	2.37	1.8	2.9	方穿	行書	
22	元符通寶	S Z 15	北宋	元符元年	1098年	2.36	1.85	2.9	○	篆書	
23	政和通寶	S Z 15	北宋	政和元年	1111年	2.39	1.84	2.1	方穿	篆書	
24	紹興元寶	S Z 15	南宋	紹興元年	1131年	2.36	1.78	3.5	方穿	篆書	
25	洪武通寶	S Z 15	明	洪武元年	1368年	2.34	1.71	2.8	方穿	真書	
26	永樂通寶	S Z 15	明	永樂六年	1408年	2.54	2.01	3.1	方穿	真書	
27	永樂通寶	S Z 15	明	永樂六年	1408年	2.52	2.05	3.0	方穿	真書	
28	元祐通寶	S E 09	北宋	元祐八年	1093年	2.44	2.09	2.7	方穿	行書	
29	開元通寶	S E 43	唐	武德四年	621年	2.23	1.79	2.2	方穿	隸書	
30	皇宋通寶	S E 43	北宋	寶元二年	1039年	2.42	2.02	1.9	○	篆書	
31	元豐通寶	S K 13	北宋	元豐元年	1078年	2.43	2.01	2.5	方穿	篆書	
32	開元通寶	S K 266	唐	武德四年	621年	2.44	2.1	2.4	方穿	隸書	
33	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.36	2.03	2.4	方穿	隸書	
34	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.45	1.97	3.3	方穿	隸書	
35	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.46	2.02	3.3	方穿	隸書	
36	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.4	2.0	3.1	方穿	隸書	上仰月
37	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.41	2.1	2.8	方穿	隸書	
38	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.4	2.08	3.8	方穿	隸書	
39	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.37	2.09	2.8	方穿	隸書	
40	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.51	2.16	3.4	方穿	隸書	
41	開元通寶	S D 32	唐	武德四年	621年	2.46	2.03	3.2	方穿	隸書	下月文
42	至道元寶	S D 32	北宋	至道元年	995年	2.45	1.91	3.0	方穿	真書	
43	景德元寶	S D 32	北宋	景德二年	1005年	2.47	2.09	3.7	方穿	真書	
44	祥符元寶	S D 32	北宋	大中祥符元年	1008年	2.46	1.81	3.8	方穿	真書	
45	祥符元寶	S D 32	北宋	大中祥符元年	1008年	2.48	1.92	4.0	方穿	真書	
46	祥符通寶	S D 32	北宋	大中祥符元年	1008年	2.5	1.95	3.8	方穿	真書	
47	天禧通寶	S D 32	北宋	天禧元年	1017年	2.48	2.02	3.0	方穿	真書	
48	天禧通寶	S D 32	北宋	天禧元年	1017年	2.43	1.96	3.4	方穿	真書	
49	天禧通寶	S D 32	北宋	天禧元年	1017年	2.49	2.04	3.7	方穿	真書	
50	天禧通寶	S D 32	北宋	天禧元年	1017年	2.4	1.92	2.3	方穿	真書	
51	天聖元寶	S D 32	北宋	天聖元年	1023年	2.5	2.0	3.5	方穿	真書	
52	景祐元寶	S D 32	北宋	景祐元年	1034年	2.47	1.95	2.7	方穿	真書	
53	景祐元寶	S D 32	北宋	景祐元年	1034年	2.48	1.92	3.5	方穿	真書	
54	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.46	2.06	3.2	方穿	篆書	
55	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.41	1.9	3.3	方穿	篆書	
56	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.4	2.0	3.7	方穿	隸書	
57	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.45	1.72	3.4	方穿	真書	
58	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.53	2.1	4.1	方穿	篆書	
59	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.45	1.98	2.6	○	隸書	
60	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.42	2.01	2.9	方穿	篆書	
61	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.38	1.84	3.2	方穿	真書	
62	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.46	2.0	3.6	方穿	篆書	
63	皇宋通寶	S D 32	北宋	寶元二年	1039年	2.48	2.04	3.2	方穿	真書	
64	嘉祐元寶	S D 32	北宋	嘉祐元年	1056年	2.34	1.83	3.6	方穿	真書	
65	嘉祐通寶	S D 32	北宋	嘉祐元年	1056年	2.46	1.9	3.1	方穿	篆書	
66	嘉祐通寶	S D 32	北宋	嘉祐元年	1056年	2.44	2.02	3.8	方穿	篆書	
67	治平元寶	S D 32	北宋	治平元年	1064年	2.38	1.77	3.6	方穿	真書	
68	熙寧元寶	S D 32	北宋	熙寧元年	1068年	2.45	2.06	3.2	方穿	真書	
69	熙寧元寶	S D 32	北宋	熙寧元年	1068年	2.44	2.01	3.5	方穿	真書	

第7節 渡 来 錢

No	錢 名	出土遺構	時 代	初鑄年代	西 曆	外輪徑	內輪徑	重 量	穿 形	書 体 ⁽¹⁾	背 文
70	熙寧元寶	S D32	北 宋	熙寧元年	1068年	2.48cm	2.11cm	3.3 g	方 穿	真書	
71	熙寧元寶	S D32	北 宋	熙寧元年	1068年	2.43	1.97	3.2	方 穿	篆書	
72	熙寧元寶	S D32	北 宋	熙寧元年	1068年	2.4	2.08	4.1	方 穿	篆書	
73	熙寧元寶	S D32	北 宋	熙寧元年	1068年	2.43	2.01	3.6	方 穿	篆書	
74	元豐通寶	S D32	北 宋	元豐元年	1078年	2.44	1.91	3.5	方 穿	行書	
75	元豐通寶	S D32	北 宋	元豐元年	1078年	2.41	1.92	3.1	方 穿	篆書	
76	元豐通寶	S D32	北 宋	元豐元年	1078年	2.38	1.9	3.5	方 穿	行書	
77	元豐通寶	S D32	北 宋	元豐元年	1078年	2.45	1.85	3.2	方 穿	行書	
78	元豐通寶	S D32	北 宋	元豐元年	1078年	2.42	1.79	3.3	方 穿	行書	
79	元豐通寶	S D32	北 宋	元豐元年	1078年	2.4	1.9	3.6	方 穿	行書	
80	元豐通寶	S D32	北 宋	元豐元年	1078年	2.41	1.86	3.4	方 穿	行書	
81	元祐通寶	S D32	北 宋	元祐八年	1093年	2.48	1.99	3.7	方 穿	篆書	
82	元祐通寶	S D32	北 宋	元祐八年	1093年	2.4	1.94	3.7	方 穿	行書	
83	元祐通寶	S D32	北 宋	元祐八年	1093年	2.47	2.03	3.8	方 穿	行書	
84	元祐通寶	S D32	北 宋	元祐八年	1093年	2.46	1.93	3.7	方 穿	行書	
85	元祐通寶	S D32	北 宋	元祐八年	1093年	2.43	1.7	3.7	方 穿	篆書	
86	元祐通寶	S D32	北 宋	元祐八年	1093年	2.42	1.95	3.3	方 穿	篆書	
87	元祐通寶	S D32	北 宋	元祐八年	1093年	2.49	1.83	3.8	○	篆書	
88	紹聖元寶	S D32	北 宋	紹聖元年	1094年	2.47	1.8	3.9	方 穿	行書	
89	紹聖元寶	S D32	北 宋	紹聖元年	1094年	2.43	1.85	3.3	方 穿	行書	
90	紹聖元寶	S D32	北 宋	紹聖元年	1094年	2.5	2.0	4.3	方 穿	篆書	上仰月
91	紹聖元寶	S D32	北 宋	紹聖元年	1094年	2.37	1.9	3.5	方 穿	篆書	
92	紹聖元寶	S D32	北 宋	紹聖元年	1094年	2.4	1.85	3.8	方 穿	篆書	
93	元符通寶	S D32	北 宋	元符元年	1098年	2.36	1.79	3.8	方 穿	行書	
94	聖宋元寶	S D32	北 宋	建中靖國元年	1101年	2.42	1.82	2.8	方 穿	行書	
95	大觀通寶	S D32	北 宋	大觀元年	1107年	2.56	2.225	3.6	方 穿	真書	
96	政和通寶	S D32	北 宋	政和元年	1111年	2.44	2.1	3.3	方 穿	隸書	
97	政和通寶	S D32	北 宋	政和元年	1111年	2.47	2.11	4.1	方 穿	篆書	
98	嘉泰通寶	S D32	南 宋	嘉泰元年	1201年	2.43	2.04	3.0	方 穿	真書	二
99	開禧通寶	S D32	南 宋	開禧元年	1205年	2.43	2.05	3.1	方 穿	真書	二
100	咸淳元寶	S D32	南 宋	咸淳元年	1265年	2.39	1.9	3.4	方 穿	真書	二
101	洪武通寶	S D32	明	洪武元年	1368年	2.3	1.77	3.2	方 穿	真書	
102	永樂通寶	S D32	明	永樂六年	1408年	2.5	2.02	3.1	方 穿	真書	
103	永樂通寶	S D32	明	永樂六年	1408年	2.49	2.07	3.9	方 穿	真書	
104	永樂通寶	S D32	明	永樂六年	1408年	2.48	2.1	3.6	方 穿	真書	
105	不 明	S D32				2.34	1.79	3.0	円 穿		
106	不 明	S D32				2.36	1.8	2.2	方 穿		
107	不 明	S D57					1.3				
108	天聖元寶	S D59	北 宋	天聖元年	1023年	2.45	2.0	2.9	方 穿	篆書	
109	皇宋通寶	S D59	北 宋	寶元二年	1039年	2.46	2.02	3.2	方 穿	篆書	
110	熙寧元寶	S D59	北 宋	熙寧元年	1068年	2.36	1.99	3.8	方 穿	真書	
111	熙寧元寶	S D59	北 宋	熙寧元年	1068年	2.31	1.92	4.0	方 穿	真書	
112	熙寧元寶	S D59	北 宋	熙寧元年	1068年	2.4	1.83	3.5	方 穿	真書	
113	永樂通寶	S D59	明	永樂六年	1408年	2.5	2.1	3.2	方 穿	真書	
114	不 明	S T02				2.48	1.86	2.2	方 穿		
115	元豐通寶	G区斜面	北 宋	元豐元年	1078年	2.45	1.76	3.2	方 穿	行書	
116	紹聖元寶	S J 185覆土	北 宋	紹聖元年	1094年	2.42	1.82	2.7	方 穿		
117	開元通寶	S J 207No.1	唐	武德四年	621年	2.44	2.04	1.9	方 穿	隸書	
118	祥符元寶	表土	北 宋	大中祥符元年	1008年	2.43	1.81	3.3	方 穿	真書	
119	皇宋通寶	表土	北 宋	寶元二年	1039年	2.46	2.11	3.0	方 穿	真書	
120	皇宋通寶	表土	北 宋	寶元二年	1039年	2.46	1.98	3.0	方 穿	隸書	
121	嘉祐通寶	表土	北 宋	嘉祐元年	1056年	2.37	1.89	3.8	方 穿	篆書	
122	治平元寶	表土	北 宋	治平元年	1064年	2.4	1.87	2.6	方 穿	篆書	
123	熙寧元寶	表土	北 宋	熙寧元年	1068年	2.34	1.89	3.5	方 穿	篆書	
124	熙寧元寶	表土	北 宋	熙寧元年	1068年	2.4	2.06	3.7	方 穿	篆書	
125	熙寧元寶	表土	北 宋	熙寧元年	1068年	2.37	1.94	2.5	方 穿	篆書	
126	元豐通寶	表土	北 宋	元豐元年	1078年	2.41	1.95	2.5	方 穿	行書	
127	大觀通寶	表土	北 宋	大觀元年	1107年	2.5	2.22	2.9	方 穿	真書	
128	宣和通寶	表土	北 宋	宣和元年	1119年	2.44	2.0	1.8	方 穿	篆書	

第5章 付 編

第1節 下東西遺跡出土人骨について

聖マリアンナ医科大学 森本 岩太郎 教授

吉田 俊 爾 講師

平田 和 明 助手

I はじめに

昭和55年、同58～59年に、群馬県群馬郡群馬町と前橋市とにまたがる下東西遺跡の発掘調査が行なわれ、その際15世紀に属する人骨（土葬骨14体、火葬骨1体の合計15個体）が出土した。調査終了後、出土人骨は鑑定のため森本のもとへ届けられた。

調査関係者の説明によると、人骨の出土した地域は、中世に栄えた東覚寺の墓域であった可能性があるという。

人骨の保存状態は不良で、土圧による変形が進んでいるものが多く、残った人骨片を見ると頭蓋片と長骨体片がほとんどを占めている。また人骨にはパラフィン等の化学薬品による処理が施されているため、復原、観察が困難な場合があった。したがって、人骨の形質は不詳のことが多く、性別、年齢などよく分からない個体も少なくない。

以下人骨の所見を記載する。

II 出土人骨所見

人骨名については和名を用いた。歯の種別については、アラビア数字を用いて永久歯の番号を示し、また●印は歯槽閉鎖、×印は欠損のため状況不明のことをそれぞれ表わしている。計測は Martin 法に従ったが、計測値のうち左右のあるものについては右側の値だけを示し、左側の値を示す時は特にその旨記してある。

(1) S D59—人骨

残っている人骨は、遊離歯 2 と右の大腿骨体・脛骨体片および左右不明の腓骨体片が主なものである。2 の咬耗度は Martin の第2度である。大腿骨体中央部の横断示数は113.0で中等度のピラステル形成がある。これらの人骨は成人のものであるが、性別、年齢は不詳である。

(2) S E43—人骨

左右不明の大腿骨体片（6.6×2.6cm）をはじめとする大小様々の成人長骨片1個体分と思われるが、その総重量は約90gに過ぎない。大腿骨体片は作りがきゃしゃなので、女性人骨である可能性が大きい。

以上のほかに、成人火葬骨が1個体分混入しているが、その総重量は約20gだけであり、詳しいことは分からない。

(3) 104G—45グリッド—人骨

最大でも約3×2cm大の成人骨片が10gほどあるが、詳細は不明である。

(4) SZ01—人骨

左の肩甲骨片、下端を欠損した左上腕骨、骨頭のない右上腕骨、左の前腕骨体片、右大腿骨体上半など1個体分が残っている。上腕骨体、大腿骨体は比較的太く、大腿骨の殿筋粗面や粗線の発達は良好である。成人男性骨と思われる。

(5) SZ06—人骨 (図版337—1)

残っているのは頭蓋片だけで、そのうち後頭骨、左右の側頭骨、左上顎骨の歯槽突起および下顎骨が比較的良く保存されている。脳頭蓋片の骨質は薄く、乳様突起は小さい。また、下顎骨の歯列弓も小さい。

歯および歯槽の状況を次に示す。

7 6 5 4 3 2 1	1 × 3 × 5 6 7
7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7

2 1 | 1 3 は遊離歯である。咬耗度は全般に Martin の第2度である。

以上の所見から、壮年期女性人骨と推定される。

(6) SZ08—人骨 (図版337—2)

残っている人骨は、所属部位不明の自由上肢骨片1個と右寛骨の寛骨臼・腸骨片、下端部を欠く右大腿骨、左脛骨の上半、右脛骨体の大部分が主なものである。大腿骨体の横断示数は上部が75.7で超広型に近い広型に属し、中央部が100.0でピラステルの形成はない。また大腿骨、脛骨は極めて太く頑丈で、大腿骨の殿筋粗面や粗線の発達も良好である。壮年期の男性人骨と推定される。

(7) SZ10—人骨 (図版337—3)

残っている人骨は、少なくとも3個体分の頭蓋片と自由下肢骨片である。個体識別が困難なので頭蓋片と自由下肢骨片とを別々に記載する。

(A) 頭蓋

頭蓋片は上・下顎骨の破片がそれぞれ3個体分あるが、そのうち(a)、1個体は脳頭蓋の右半が比較的良く残り、乳様突起はそれほど小さくないが前頭部の形態や骨質の薄いこと、および歯の咬耗度などからみて壮年期の女性人骨と思われる。(b)、もう1個体は歯列弓が大きく、下顎骨が比較的頑丈なこと、および歯の咬耗度から熟年期の男性人骨と推定される。(c)、残り1個体は性別不詳で、歯の咬耗度から壮年期の成人骨と思われる。

次にそれぞれの個体の歯および歯槽の状況を示す。

(a) 壮年期女性

8 7 × × × × × ×	× × × × × × × ×
8 × × × × × × × ×	× × × × × × × ×

咬耗度は Martin の第2度である。

(b) 熟年期男性

× 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 × × × ×
8 7 ● 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 × ×

咬耗度は Martin の第2～3度である。

(c) 壮年期・性別不詳

8 7 6 5 4 3 × ×	× 2 × × × 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 ×	× × × × × 6 7

2は遊離歯で、6の歯頸部には齶蝕が見られる。8は未萌出で、歯槽は閉鎖している。咬耗度は Martin の第1度である。

(B) 自由下肢骨

左の大腿骨体片1個、右の大腿骨体片3個、左の脛骨体片1個、右の脛骨体片1個、左右不明の脛骨体片1個、右の排骨体片1個がある。詳しいことは分からない。

(8) S Z 12一人骨

頭蓋は後頭骨、右の側頭骨、右頬骨、下顎骨右半などの破片が主に残っている。外後頭隆起の膨隆度は Broca の第1度である。

歯および歯槽の状況を次に示す。

× 7 6 × 4 3 2 ×	1 × 3 4 5 6 7 8
× 7 6 5 4 3 2 1	× 2 3 4 5 6 7 8

咬耗度は Martin の第2～3度で、7・7 6 5以外の歯は全て遊離歯である。

以上のほかに、右肩甲骨の肩甲棘・内側縁の破片、左上腕骨体下部片、右上腕骨体の上、右橈骨体片などの上肢骨片がある。上肢骨片の作りは細くきゃしゃである。熟年期の女性人骨と思われる。

(9) S Z 13一人骨 (図版338-4)

残っている人骨は、頭蓋底を欠く脳頭蓋と所属部位不明の小白歯1個、左右不明の橈骨体下部片および左大腿骨体中央部片だけである。頭蓋の3主要縫合は内・外板ともおおむね閉鎖されており、外後頭隆起の膨隆度は Broca の第2である。小白歯片の咬耗度は Martin の第2度である。左大腿骨体は比較的太く頑丈で、中央部の横断示数は111.3を示し、中等度のピラステル形成がある。熟年期の男性人骨と思われる。

(10) S Z 14一人骨 (図版338-5、339-8)

残存する人骨は、まず後頭骨、頭頂骨などの脳頭蓋片と遊離歯7、歯槽を伴う7 6 5、および左右不明の前腕骨体片2個、左大腿骨体の上 $\frac{1}{2}$ 、右大腿骨体の上 $\frac{2}{3}$ 、左脛骨体の上 $\frac{3}{4}$ など1個体分がある。後頭骨外後頭隆起の膨隆度は Broca の第2度、遊離歯の咬耗度は Martin の第2～3度である。大腿骨体の上部横断示数は75.8で超広型に近い広型に属する。また大腿骨体、脛骨体は比較的太くたくましい、熟年期の男性人骨と思われる。

以上の人骨のほかに、異個体のもと思われる左大腿骨体中央部片1個が混在しているが、これは S Z 15一人骨 (壮年期女性) に混在している右の上腕骨体中央部片および右大腿骨体中央部片と形態学的に良く似ており、同一個体に属すると思われる。いずれも細くきゃしゃでおそらく成人女性骨1個体分と推定される。

(11) S Z 15一人骨 (図版339-6、7、8)

残存する人骨は、まず比較的保存良好な頭蓋と左右の上腕骨体上部片、左右大腿骨体の大部分、右脛骨体

の大部分など1個体分がある。

頭蓋についてみると、3主要縫合は内・外板ともほとんど骨結合化されていない。また、眉弓の発達は弱く、乳様突起もそれほど大きくない。骨質は薄い。

歯および歯槽の状況を次に示す。

8	7	6	5	4	3	2	1		1	×	3	4	×	6	7	×
8	7	6	5	×	×	×	×		×	2	3	4	5	6	7	8

8 7 6 5 | 8 7 6 5 | 以外の歯は全て遊離歯である。咬耗度は Martin の第1度である。

上腕骨、大腿骨、脛骨についてみると、細くきゃしゃである。左大腿骨体の横断示数は上部が82.8で広型に属し、中央部が100.0でピラステルの形成はない。壮年期の女性人骨と推定される。

以上の人骨のほかに、右上腕骨体中央部片1個と、右大腿骨体中央部片1個が混在しているが、これらの人骨は先に述べたSZ14一人骨に混在している左大腿骨体中央部片と形態学的に良く似ており、同一個体(女性成人骨)に属すると思われる。

III 若干の考察

以上の所見から出土人骨の性別・年齢をまとめたものが第1表である。これによれば、出土人骨は土葬骨14体・火葬骨1体の計15個体分である。性別は、男性5体・女性6体・性別不詳4体の割合で、男女比は5：6となりほぼ男女同数と言える。年齢構成は、熟年期4体・壮年期5体・年齢不詳6体の割合で、小児骨は見られない。

大腿骨については、男(SZ08)と女(SZ15)各1体につき骨体上部横断示数が得られたが、いずれも示数が小さく、扁平度が強かった。骨体中央横断示数は男2体・女1体・性別不詳1体につき得られたが、計4体のうち男1体(SZ13)と性別不詳の1体(SD59)の2体はピラステルの形成が認められるのに反し、他の2体(SZ08、SZ15)にはピラステル形成は見られなかった。病的所見としては、壮年期、性別不詳の1個体(SZ10(c))の6に齶蝕が見られただけである。

IV まとめ

下東西遺跡から出土した15世紀に属する人骨は成人土葬骨14体・成人火葬骨1体の計15個体分である。その性別は男女比がほぼ1：1で、年齢は熟年期と壮年期の比がほぼ1：1である。大腿骨体上部は扁平であるが、ピラステル形成は半数に見られるにすぎない。齶蝕をもつ性別不詳の個体が1体ある。

第1表 出土人骨の性別および年齢など

人骨番号	性別	年齢	備考	人骨番号	性別	年齢	備考	
SD59	不詳	成人	大腿骨にピラステルあり	SZ10 (b)	男	熟年	6 に齶蝕あり	
SE43	女	成人		(c)	不詳	壮年		
SE43 (火葬骨)	不詳	成人		大腿骨は扁平だがピラステルなし	SZ12	女	熟年	大腿骨にピラステルあり
104G45	不詳	成人			SZ13	男	熟年	
SZ01	男	成人	SZ14		男	熟年		
SZ06	女	壮年	SZ15		女	壮年	大腿骨は扁平だがピラステルなし	
SZ08	男	壮年	SZ14, 15		女	成人		
SZ10 (a)	女	壮年		(異個体)				

第2節 下東西遺跡出土の獣歯、獣骨について

財団法人 群馬県家畜登録協会常任理事 大江 正直

1 はじめに

前回日高遺跡及び三ツ寺Ⅲ遺跡出土の馬歯、馬骨並びに牛歯について調査した。日高遺跡出土の馬歯、馬骨は大部分平安時代のものであり、三ツ寺Ⅲ遺跡出土の馬歯、馬骨は中世のものであった。従ってこの2つの遺跡出土の馬歯、馬骨は夫々異なる時代のものであり、古代から中世までを通したものではなかった。同一の地区において古代から中世までの馬の変遷を知ることはその地区の社会状態、経済状態を知ることであり、その遺存体に重要な存在意義がある。下東西遺跡では奈良時代末期ないし平安時代前期から室町時代後期に至るまでの馬の遺存体が出土している。また牛、鹿の遺存体についても依頼があり以下その検討を行った。

(1) 依頼内容

① 性 ② 年令 ③ 大きさ及び改良度（改良度は牛、馬についてのみ）

(2) 調査方法

〔馬歯、馬骨〕 ① 出土馬歯、馬骨の部位の検討を行う。② 出土馬歯、馬骨の性の検討を行う。馬は家畜の中では大きさについて性差の少ない動物であるので寛骨と犬歯によって性別を検討する。③ 出土馬歯について年令の検討を行い、その方法としては出土馬歯について年令の特徴を検討し、また現代小格馬⁽¹⁾の馬歯と対比して出土馬歯を有する馬の年令を検討する。④ 出土馬歯について大きさ及び改良度の検討を行い、その方法として既往の出土馬歯の計測値並びに現代小格馬の馬歯の計測値と比較し、大きさ及び改良度について検討する。馬骨については風化が甚しく計測にとどめる。

〔牛歯、牛骨〕 牛歯、牛骨については風化が甚しく、周囲の土壌とともに保存処理が施してあるので馬歯、馬骨に準じて出来る範囲で検討する。

〔鹿歯〕 鹿歯については風化による欠損が甚しいので磨耗による年令の検討にとどめた。

2 使用した基準

〔馬〕

(1) 馬歯、馬骨の部位、記号、各部の名称。註2～5参照

(2) 馬の大きさ。馬の大きさは林田重幸⁽⁶⁾の体高区分による中形馬、小形馬の区分を用い、中形馬以上の大きさのものを大形馬とした。

(3) 馬の年令。馬の年令については市井正次⁽⁷⁾の老令馬、壮令馬、幼令馬の区分を用いた。

〔牛〕

牛歯、牛骨の部位、記号、測定部位は馬歯、馬骨に準じた。

〔鹿〕

鹿歯の測定部位、年令の検討方法は⁽⁸⁾⁽⁹⁾大泰司紀之の測定部位並びに「歯頸線の出現期及び歯冠の磨滅度による年令査定方法」を用いた。

〔その他〕

(1) 単位。計測値は特別に記載のない限りmmを表し、比率は%とする。

(2) 番号。図中の通番は本文、写真、及び附表中の通番と一致する。本文中の図は下東西遺跡整理班によって作成された。

3 結果

(1) 獣歯、獣骨の出土状況

下東西遺跡の奈良時代前期から室町時代後期に至る遺構、井戸跡、住居跡、テラス等の埋土の中から附図1～3に示すとおり馬の上顎切歯2、上顎頬歯15、下顎切歯3、下顎頬歯19、右橈骨近位部1、右側頭骨岩様部1、及び20数個の小骨片、並びに牛の頭蓋骨の一部、ニホンジカの下顎第三後臼歯1が出土している。これらの出土状況に関する発掘担当者の所見は附表1のとおりである。

資料番号	出土地	時代	出土状態
1～8 下東西馬 A平安	S K237埋土 129 I 39	平安時代前期	I区S D100を切ってもうけられた土壇S K237から出土。出土時点は連続した状態で8個の馬歯が検出され、頭骨に伴う一括埋納と考えられる。S D100は下東西遺跡の集落を区分する溝で、重複して設けられた唯一の古代井戸跡S E21が存在する浄所でもある。このため宗教性をおびた頭骨の一括埋納であるかもしれない。大江正直氏の検証によれば「8つの馬歯はほぼ同一水平面にあり、その配列は乱れていない。1体の馬の頭蓋が鼻端を西に向け、左頬を下に埋納している。」とされた。
9～32 42 下東西馬 B室町	S E09埋土 87.87G46	室町時代後期 15世紀	G区のS E09から出土した。S E09は朝顔形の井筒で、直径約2.5m、深さ約4mである。井戸の埋土は上半を人頭大の礫で埋没させていた。検出面より0.5m下った箇所から一括して馬歯、馬骨が円礫に押しつぶされたり、あるいは挟まった状態で出土した。その状況は、馬の埋納を呈しており、分解して骨のみを一括廃棄した状態ではなかった。大江正直氏の検証によれば「右下顎切歯3、左上顎切歯3、右下顎頬歯4、左上顎頬歯2、右下顎頬歯6、左下顎頬歯5、計23の馬歯と、橈骨の一部、右側頭骨岩様骨並びに20数個の頭骨、肢骨の小骨片が出土している。これらの馬歯は、ほぼ1ヶ所に固まっており、その配列は殆んど乱れていない。」としておられる。なお1体分としての骨の取り上げは、礫群に挟まった状態であったこと、骨の風化が顕著であったことなどから、遺存状態の良い部分取り上げとならざるを得なかった。埋没土の土器群は15世紀である。
33	S D99、100埋土 112 I 34	平安時代前期	I区にある溝跡S D99、100は調査区東側に至って1条の大溝となり、相互に新旧は認められない。その大溝の埋土下方から馬歯の出土があった。切り合い関係からすればS D100の埋土を切って設けられ下東西馬Aの出土したS K237が後出し、S D100が先行する。
34	S J104埋土	奈良時代末期～ 平安時代前期	奈良時代前期のS D46上に構築された住居跡S J104から出土した。S J104の発見面は住居跡床面上約10cmであり、この馬歯もS J104の年代に近いと見なされる。
35・36	G区テラス埋土	室町時代後期	台地南縁を削土し、G区テラス状遺構が存在する。この埋土中から馬歯2個が出土している。2個の出土状態は、発見時点を見定めていないので不明である。大江正直氏の検証で一個体とされたが、一個体として疑問点の生じない出土位置である。
37	S D20埋土 92G45	室町時代後期	S D20はG区を東西走する中世の溝遺構である。埋土の上部は人頭大の礫で充填され、それ以上は土の埋没であった。馬歯の出土は礫の多い埋土上方である。No37～39は一括ではなく散在的な出土である。
38	同上	同上	同上
39	S D20埋土 92G40	同上	同上

資料番号	出土地	時代	出土状態
40	S D23埋土	室町時代後期	S D23はG区を南北走する中世堀切遺構である。埋土の最大層は、近世陶器片がおよびそれ以下は中世の埋土と考えられる。馬歯の出土は中世の埋土からの出土である。No41との関連は明らかでない。
41	同上	同上	同上
43 下東西牛 A奈良	S D59埋土	奈良時代前期	S D59は奈良時代前期の祭祀的な土器廃棄が行われた大溝であるとともに掘立柱建物群の東縁を区画した大溝でもある。S D59は3ヶに区切の立ち上がりがあり、区分がなされている。No43はS D59の中程の溝の上方から出土している。出土時点では微精査を行わなかったため中頭骨と判明しなかったが、調査後の整理作業清掃の中で馬骨ではないことが明らかとなった。出土状態は横向でもあり、右頬面が下になっていた。清掃にあつては骨部だけの取り上げは行わず、遺存状態を留めるよう出土状態のまま樹脂処理した。このため測図も変測的な図法となってしまった。
44	S J51埋土	同上	S J51は奈良時代前期の住居跡である。埋土にはおびただしい土器群が廃棄され、鹿歯はその一括に含まれる。この一括の廃棄は遺物量があり完器が多く含まれ、その行為は極めて祭祀的であると想像され、一括性の信頼度は極めて高い。

附表1 出土状態一覧

(2) 出土獣歯、獣骨を有する獣の個体数

出土獣類遺存体の中で出土地点、風化の度合い、大きさ、年令、特徴から見て同一個体、または同一個体の確率の極めて高いものは馬3、牛1である。出土獣歯、獣骨を有する獣の個体数は最大限で考えると、馬10、牛1、ニホンジカ1である。時代別に分けると、奈良時代前期牛1、ニホンジカ1、奈良時代末期～平安時代前期馬1、平安時代前期馬2、室町時代後期馬7、計12である。同一個体と思われるもののうち、土坑S K237から出土したNo1～No8の馬歯及び井戸跡S E09より出土したNo9～No31、No32、No42の馬歯、馬骨並びに溝遺構S D59から出土した牛歯、牛骨は夫々一体分として良くまとまったものであり今後の検討に資するものと考えられるので、以後この2体の馬について前者を「下東西馬A平安」、後者を「下東西馬B室町」牛歯、牛骨は「下東西牛A奈良」と呼ぶことにする。

(3) 出土獣歯、獣骨の遺存状況とその形態

「下東西馬A平安」の馬歯No1～No8は風化によりエナメル質は薄く大変脆くなっている。8個の馬歯のうち4個は頬歯の形をとどめ、他の4個は短冊状に分かれている。全般的に馬歯は小さく、咬合面は方形に近く咬耗の度合いは軽い。「下東西馬B室町」の馬歯No9～No31は全体として白色粗ぞうで緻密さを欠いているが、形としては良く原相を保っている。馬骨No32、No42は風化の進行激しく極めて脆い。大きさはやや小さく重量は軽い。「下東西牛A奈良」と下顎体は上顎骨の一部である。風化著しく極めて脆いため周囲の土壌とともに保存処理によって固めてある。「ニホンジカ」の歯No44は表面滑らかで僅かに光沢を保っている。舌側の組織の大部分を失っているので内部褶襞は頬面の襞を除き不明である。その他No1～No44の獣類遺存体の遺存状況並びに形態は附表2のとおりである。

第2節 下東西遺跡出土獣歯・獣骨について

No	出土獣類の種類	出土獣歯の部位	同一個体	特 徴		欠損状態その他	
				大きさと全体の形	咬合状態		エナメル叢の特徴
1	馬	右上顎切歯の一部	同一土壇中に埋められており同一個体に属する (下東西馬A平安)	エナメル叢の中は小さく、唇面下部は細い。	咬合面を欠いている	歯冠唇面には縦溝が走り、下部唇面は弓なりに張り出し、横断面は強い彎曲を示している。	歯冠下部唇面の一部、歯冠中央部唇面及び左側面の一部、並びに歯冠上部唇面の一部である。
2	馬	RP ²		短冊状片なので不明である。	咬合面は不明。	中附錐の発達は良好である	20数片の短冊状に分れている。
3	馬	LP ²		同上	咬合面は舌面に向ってやや強い傾斜を示す。	頬面のエナメル叢は巾が広く小窩が原小錐に対し右に傾いている。	7つの短冊状に分れている。
4	馬	LP ³		歯冠は小さくやや長い。	咬合面は舌面に向って24°に傾いている。咬耗の度合いは軽い。	中附錐、前小窩、後小窩は大きく力強い。	歯根部を欠き、また歯冠上部の前附錐、後附錐、次附錐の一部を欠いている。
5	馬	LP ⁴		後方に向って軽く彎曲している。	中葉が軽く凹み、咬耗の度合いは軽い。	前附錐、中附錐の発達極めて良好で前錐部は強い彎曲を示している。	両小窩の舌面側で縦に割れ舌面部及び歯根部を失っている。
6	馬	LM ¹		歯冠は小さく軽くS字状に彎曲している。	咬合面はほぼ方形を示し、咬耗の度合いは軽い。	前錐部は強く彎曲し、次錐の後展と原錐の発達が目立っている。	原小錐の下部及び総ての歯根部を欠いている。
7	馬	LM ²		歯冠は細長く軽く前方に屈曲している。	同上	前錐部は強く彎曲し、前小窩及び原錐は大きくて力強い。	歯根部を欠き、原小錐と次錐に大きくひび割れている。
8	馬	lm ³		歯根上部に帯状隆起が認められる。	咬合面は叢の中心線に対し23°に傾いている。	エナメル叢は美しい弧状彎曲を示している。	原錐後谷の頬側のエナメル叢と象牙質の僅かな一部である。
9	馬	L1 ₁	同一井戸跡より出土しており同一個体である (下東西馬B室町)	やや細く美しい反りを示している。	咬合面は類三角形である咬耗度は余り強くない。	唇面に深い縦溝が走り、内エナメル質輪は三角形で左右に長く舌面エナメル叢に近い。	歯根部の舌面を欠く。
10	馬	L1 ₂		やや細い。	咬合面は椎実状を示し咬耗の度合いは余り強くない。	唇面に長く縦溝が走る。内エナメル質輪は長く左右に伸びている。	舌面右側エナメル叢の一部及び歯根部舌面を欠く。
11	馬	L1 ₃		やや細く短かい。	咬合面は歯冠正中線に対し26°傾いている。	内エナメル質輪は大きくふくらんで舌面近くに位置している。	歯根部の一部が欠損し、唇面右側の象牙質を失っている。
12	馬	R1 ₁		美しい反りを示している。	類三角形で咬耗の度合いは余り強くない。	唇面に長く縦溝が走り、内エナメル質輪は三角形で左右に長い。	歯根舌面の一部を欠く。

第5章 付 編

No.	出土獣類の種類	出土獣歯の部位	同一個体	特 徴		欠損状態その他	
				大きさと全体の形	咬合状態		エナメル襞の特徴
13	馬	RI ₂		やや細い。	咬耗の度合いは余り強くない。	唇面に浅い縦溝が走り、咬合面の唇側エナメル襞は僅かに波打っている。	歯根舌面の一部を欠く。
14	馬	RI ₃		細い	咬合面は歯冠正中線に対し右に26°傾いている。	内エナメル襞は左右に長く、唇面のエナメル襞は厚い。	歯根部の一部を欠く。
15	馬	RP ³		三角柱状である。	長三角形を示し咬耗度は余り強くない。	中附錐は柱状に展出し、前小錐、原錐後谷は大きくて力強い。	舌面歯根部を僅かに欠く。
16	馬	RP ³		やや太く力強い。	咬合面方形で咬耗度は余り強くない。	前附錐、中附錐は柱状で太く内エナメル襞は大きくて力強い。次錐の後展は強い。	舌面側原小錐の歯根を僅かに欠損する。
17	馬	RP ⁴		柱状で力強い。	咬合面は方形で前後縁及び中葉凹み、咬合状態やや不整である。	前附錐、中附錐は柱状に展出し、次錐の後展は強い。	歯根部の先端を僅かに欠く。
18	馬	RM ¹		細くやや短い。	同上	次錐の後展良好で原錐は前後に長い。	ほぼ原相を保っている。
19	馬	LP ²		三角柱状である。	咬合面は長三角形で咬耗度余り強くない中葉僅かに凹む。	中附錐の発達が目立ち内部エナメル襞は大きく力強い。	後葉歯根部の先端を欠く。
20	馬	LP ⁴		柱状で力強い。前側歯根部近く僅かに前方に隆起す。	咬合面方形で前後縁及び中葉の凹みが目立っている。	中附錐は柱状に発達し、内部エナメル襞はやや複雑で力強い。	ほぼ原相を保っている。
21	馬	RP ₂		歯冠巾少なくとも巾率は47.9である。	咬合面は椎実状を示し咬耗度は余り強くない。	前、中、後の三葉性を示す。下内錐谷が前後に長く伸びている。	下前隆起の一部及び下内錐の歯根部の一部を欠く。
22	馬	RP ₃		長方形柱状で長い。	咬合面山形波形を示し咬合やや不整。頰面に向って24°に傾く。咬耗度軽い。	下後附錐、下後錐の発達良好で下内錐谷は前後に長く伸びている。	下内錐の舌面側歯根部の一部を欠く。
23	馬	RP ₄		同上	前後縁及び中葉の凹みが目立っている。頰面への傾斜も強い(24°)	下原錐、下次錐の発達良好。	両歯根の先端を僅かに欠く。

第2節 下東西遺跡出土獣歯・獣骨について

No	出土獣類の種類	出土獣歯の部位	同一個体	特 徴		欠損状態その他	
				大きさと全体の形	咬合状態		エナメル嚢の特徴
24	馬	RM ₁	同一個体	長方形柱状で細くて長い。	咬合状態やや不整で頰面への傾斜は強い。	下後錐の発達良好である。	ほぼ原相を保っている。
25	馬	RM ₂		長方形柱状で長い。	中葉著しく凹む。	下原錐、下次錐の発達及び下次小錐の後展良好である。	両歯根部の先端を僅かに欠く。
26	馬	RM ₃		薄い三角柱状を呈し、歯根部の細かな帯状隆起が目立っている。	咬合状態やや不整である。	前、中、後の三葉性を示す。entostylidの発達が目立っている。	ほぼ原相を保っている。
27	馬	LP ₃		長方形柱状でやや太くて長い。	同上	下原錐、下次錐の発達良好で下内錐谷は前後に長く伸びている。	同上
28	馬	LP ₄		柱状で長い。	咬合やや不整で咬耗度は軽い。	下原錐及び下後錐の発達良好である。	同上
29	馬	LM ₁		咬合面の台形強く全体として小さい。	同上	下次隆起の後への張り出しが目立っている。	歯根の先端を僅かに欠いている。
30	馬	LM ₂		細くて長い、咬合面の台形は強い。	同上	下原隆起の張り出しと、下次隆起の後展が目立っている。	殆んど原相を保っている。
31	馬	LM ₃		薄い柱状で後方に反っている。歯根部の細かい帯状隆起が目立っている。	咬合状態は不整である。	前、中、後の三葉性を示して長い。entostylidは大きく後方に張り出している。	同上
33	馬	RM ₂		咬合面は軽い台形を示し歯冠はやや後方に彎曲している	咬耗の度合はやや強い。	舌面の各錐の発達は良好で、下次小錐の後展が目立っている。	下前隆起を欠き、下原錐の下部及び各歯根の先端を欠損している。
34	馬	RM ₂	歯冠著しく短い。	咬耗著しい。	下後錐、下後附錐、内下内錐は発達良好でやや大きい。エナメル嚢は全般に厚い。	下前隆起、下次小錐を失い内部象牙質の大部分を失っている。	
35	馬	LP ₃	大きさ、形状、年令、歯相から同一体である確率が高い	歯冠は後方に軽く彎曲し、歯冠全体に細かい帯状隆起が横ぎっている。	咬耗の度合は余り強くない。	各錐のエナメル嚢は良く発達して力強い。頰面のエナメル嚢は厚い。	ほぼ原相を保っている。
36	馬	LM ₂		同上	後葉は前葉より3mm低く段差をなし咬合は不整である。	同上	同上
37	馬	LM ₃	美しい弧状彎曲を示している。	中葉僅かに凹み咬耗度は軽い。	内部エナメル嚢はやや複雑で後小窩の後方に小円褶が見られる。頰面のエナメル嚢は厚い。	同上	

No	出土獣類の種類	出土獣歯の部位	同一個体	特徴			欠損状態その他
				大きさと全体の形	咬合状態	エナメル嚢の特徴	
38	馬	LP ³		柱状で太く力強い。	咬耗度は軽い。	内部エナメル嚢はやや複雑で大きくて力強い。頰面のエナメル嚢はやや厚い。	歯根の先端を僅かに欠いている。
39	馬	LP ³		僅かに後方に彎曲し柱状で力強い。	前後縁及び中葉凹み、咬耗度は余り強くない。	内部エナメル嚢はやや複雑で大きくて力強い。	歯冠咬合面近くの後部と舌面及び歯根部を欠いている。
40	馬	L1 ²		やや太目であるが歯冠巾は小さい。	舌面の嚢は未だ咬耗が始まっていない。	エナメル嚢は細く横に長く、内部エナメル質輪は大きく咬合面一杯に広がっている。	唇面に大きくひび割れを起こし歯根部の舌面及び唇面の一部を欠いている。
41	馬	LM ₂		やや太目で柱状を呈している。	咬耗の度合いは軽い。	内部エナメル嚢は大きく、特に下内錐谷は大きく左右に伸びており、下次小錐の後展は強い。	咬合面附近の下原錐、下次錐の一部と歯根部を欠いている。
44	ニホンジカ	RM ₃		頰面の前中葉歯冠の下部及び舌面の前葉歯冠下部に歯頸線が認められる。	咬頭は舌面前葉において三角形を呈し、咬耗度は進んでいる。	前葉頰面の三角形の外方展出が強い。前、中葉境と中、後葉境に夫々高さ2.9、4.1の極めて小さな錐状結節を認める。舌面における側柱は余り発達していない。	内部エナメル嚢から舌面側の組織を失い、舌面側は僅かに前葉の外部エナメル嚢を残すのみである。三葉とも歯根を失っている。
No	出土獣類の種類	出土獣骨の部位	同一個体	特徴		欠損状態その他	
32	馬	右腕骨近位部	下東西馬B室町	風化著しく甚だ脆い。掌面はやや平らである。断面は半円形に近く、緻密骨は薄い。		関節頭に近い部分で上下両端を失っている。	
42	馬	右側頭骨岩様部		内面は凸凹比較的小なく、ラセン孔列は小さい。指圧痕浅く、錐体稜低く、ともに不鮮明である。		筋突起及び後端部と外耳孔の先端を欠いている。	
43	牛	下顎体及び上顎骨の一部	下東西牛A奈良	風化が著しく極めて脆いため周囲の土壌とともに保存処理が施されている。全体として黄褐色を呈し、上下とも頰歯が植立している。歯列弓の彎曲は少なく殆んど水平に近い。咬頭の特に出たものがなく咬合は正常である。下顎体臼歯部は現代黒毛和種より伸びが少なく、下縁はやや彎曲が強くて丸い。翼突筋窩が歯列終えん部近くに迫り、全体として小さく小じんまりとしている。P ⁴ の細いことが目立っている。歯頸線近く迄咬耗が進み、老令である		右側下顎体臼歯部及び右上顎の舌面で、下顎骨は切歯部と下顎枝を失っている。上顎骨は頰歯と僅かな歯槽骨を残すのみである。上下顎骨は風化甚しく僅かに上塊中に痕跡を残すのみである。	

前附錐 parastyle 中附錐 mesostyle 後附錐 metastyle 前錐 paracone 前小窩 prefossette 後小窩 postfossette 原小錐 protoconule 原錐後谷 postprotoconal valley 原錐 protocone 次錐 hypocone 下原錐 protoconid 下次錐 hypoconid 下次小錐 hypoconulid 後錐 metaconid 下後附錐 metastylid 下次隆起 hypolophid 下内錐 entoconid

附表2 出土獣歯、骨の形態

(4) 出土獣歯、獣骨を有する獣の性別

〔馬〕 犬歯の有無を確認することが出来ないので性別は不明である。

〔牛〕 牛の犬歯は第4切歯に進化しており、牛の性別の判断は成畜では骨格の大小、寛骨による性差で行うが「下東西牛A奈良」は性別を判断し得るものが出土していないので不明である。

〔鹿〕 現在のところ鹿角による判断、及び大泰司紀之の「 P_2 、 M_2 下顎面積による性別査定法」⁽⁸⁾の研究がなされているが、今回は M_3 のみの出土であるので性別は不明である。

(5) 出土獣歯、獣骨を有する獣の年令

〔馬、牛〕 餌料が異なるので現代馬、牛の歯の磨耗度をもって古代及び中世の馬、牛の年令を類推することは妥当でないと考えられるが、一応現代馬、牛の磨耗度をもって出土した馬歯、牛歯を有する家畜の年令を類推すると附表9のとおりである。

〔鹿〕 この歯は風化による欠損と土壌による圧迫のため内部褶襞の位置が移動しているので大泰司紀之による「頬側咬頭磨滅面の最大径」⁽⁸⁾が計測出来なかったが、頬面前、中葉及び舌面前葉歯冠における歯頸線の出現度合、並びに「大泰司紀之による歯冠高」⁽⁸⁾が13.7を示していることから8～10才のものと考えられる。下東西遺跡より出土した獣歯、獣骨を有する獣の年令を時代別に分類すると次のとおりである。(数は最大限)

〔馬〕 奈良時代末期～平安時代前期 老令馬1、平安時代前期 老令馬1、社令馬1、室町時代後期 社令馬6、幼令馬1。

〔牛〕 奈良時代前期 老令牛1

〔鹿〕 奈良時代前期 老令鹿1⁽¹⁰⁾

(6) 大きさ及び改良度

No	4	5	6	7	9	10	11	12
出土馬歯の部位	LP ³	LP ⁴	LM ¹	LM ²	LI ₁	LI ₂	LI ₃	RI ₁
歯冠長	24.7	26.4	22.6	23.7	13.9	12.8	13.4	13.4
歯冠巾	ひび割	一部欠損	24.3	ひび割	9.9	9.5	9.7	10.3
巾率	//	//	107.5	//	71.2	74.2	72.4	76.9
頬(唇側)歯冠高	53.2	58.3	50.7	56.1	40.5	38.3	35.9	37.3
現全歯高	58.3	59.8	54.8	63.8	48.3	47.4	42.2	47.9
エナメル厚(頬、舌側)	0.9-1.0	0.9-	0.9-0.9	0.9-0.9	1.5-0.9	1.4-0.7	1.5-0.5	1.4-1.0
重量g	26.7	20.8	23.7	27.9	5.2	4.4	3.6	5.3
No	13	14	15	16	17	18	19	20
出土馬歯の部位	RI ₂	RI ₃	RP ²	RP ³	RP ⁴	RM ¹	LP ²	LP ⁴
歯冠長	13.8	14.6	33.2	27.2	26.1	24.5	35.0	26.1
歯冠巾	9.4	10.3	23.5	26.2	26.8	25.3	24.2	26.8
巾率	68.1	70.5	70.8	96.3	102.7	103.3	69.1	102.7
頬(唇側)歯冠高	39.1	34.7	34.4	36.7	46.8	34.7	31.5	38.4
現全歯高	48.4	45.6	55.3	54.7	59.9	51.2	59.6	59.8
エナメル厚(頬、舌側)	1.4-0.7	1.4-0.5	1.4-0.9	1.3-1.1	1.4-1.1	1.4-1.1	1.4-1.0	1.4-1.0
重量g	4.3	3.3	23.8	27.1	31.5	24.4	21.2	30.3
No	21	22	23	24	25	26	27	28
出土馬歯の部位	RP ₂	RP ₃	RP ₁	RM ₁	RM ₂	RM ₃	LP ₃	LP ₄
歯冠長	28.4	28.3	25.8	22.7	23.8	28.4	28.1	25.8
歯冠巾	13.6	15.6	15.4	13.6	12.2	11.4	16.1	16.1
巾率	47.9	55.1	59.7	59.9	51.3	38.9	57.3	62.4
頬(唇側)歯冠高	34.4	50.0	55.5	48.6	58.4	54.9	50.1	56.9
現全歯高	48.6	68.6	73.9	61.5	72.0	70.8	68.6	74.4
エナメル厚(頬、舌側)	1.4-1.0	1.3-0.9	1.4-1.1	1.3-0.9	1.4-0.9	1.4-1.2	1.5-1.2	1.3-1.0
重量g	15.1	28.5	28.9	20.1	23.8	24.6	30.2	31.7

No	29	30	31	33	34	35	36	37
出土馬歯の部位	LM ₁	LM ₂	LM ₃	RM ₂	RM ₂	LP ₃	LM ₂	LM ^a
歯冠長	24.1	24.8	28.8	25.7	一部欠損	27.0	24.8	23.8
歯冠巾	13.2	12.7	13.7	14.7	12.4	20.6	13.6	20.2
巾率	54.8	51.2	47.6	57.2	一部欠損	76.3	54.8	84.9
頬(唇側)歯冠高	51.4	63.5	53.6	44.0	14.2	46.3	44.2	57.7
現全歯高	66.3	74.3	70.3	53.3	31.4	61.8	60.3	66.6
エナメル厚(頬、舌側)	1.4-1.1	1.4-0.8	1.6-0.9	1.2-1.1	1.6-1.2	1.4-0.9	1.4-1.0	1.7-1.5
重量 g	21.7	24.8	24.1	14.2	4.7	29.8	21.0	35.5
No	38	39	40	41	No 1~No 8 は下東西馬A平安、No 9~No 32は下東西馬B室町である。 一般的に下顎頬歯の巾率は60%以下であり、特に下顎後臼歯の巾率は55%以下である。 風化が進んでいるので馬歯の重量は軽い。			
出土馬歯の部位	LP ^a	LP ^a	LP ^a	LM ₂				
歯冠長	28.5	26.5	ひび割	28.3				
歯冠巾	26.4	舌面欠損	9.5	14.8				
巾率	92.6	//	ひび割	52.3				
頬(唇側)歯冠高	53.8	48.2	42.8	一部欠損				
現全歯高	65.4	59.7	52.2	53.5				
エナメル厚(頬、舌側)	1.5-1.4	1.5-1.3	1.6-	1.2-1.1				
重量 g	40.5	34.8	9.3	26.5				
No	2	3	8	1-1	1-2	1-3		
出土馬歯の部位	RP ²	LP ² の一部	LM ² の一部	RIの一部	RIの一部	RIの一部		
長径	短冊状片	42.1	53.7	27.0	24.0	27.0		
短径		14.8	13.5	9.8	7.0	6.1		
厚(最大)		1.1	0.8	1.3	1.3	1.3		
重量 g		5.8	5.3	0.2	0.6	0.4		

附表 3 出土馬歯計測値

〔馬〕 出土馬歯、馬骨の計測値は附表3、4のとおりである。この計測値を既往の出土馬歯の計測値⁽¹⁾、及び現代小格馬の馬歯の計測値⁽²⁾と比較してその結果を取りまとめたものが附表9である。

No	32	No	42
馬骨の部位	右機骨近位部	馬骨の部位	右岩様岩
最大長	92.7	長径	32.8
最大巾	43.4	短径	23.9
最大巾部径	26.6	厚	26.7
最小巾	38.6	外耳孔径	11.5
最小巾部径	26.1	ラセン孔径	4.6
重量 g	57.8	重量 g	7.8

附表 4 出土馬骨計測値

〔牛〕 No43の牛歯、牛骨の計測値は附表5、6に示すとおりである。附表5に示す歯冠長を既往の古墳時代から平安時代までの出土牛歯の計測値及び附表7に示す現代和牛の計測値と比較して見るとP⁴の特に小さいことが目立っているが、その他の頬歯もすべて小さく、特に後臼歯の小さいことが目立っている。牛が大形になると第4前臼歯及び後臼歯が大きくなっていくが、第3後臼歯の変化はやや少ない。附表6に示す下顎骨体高は古

区分	P ²	P ³	P ⁴	M ¹	M ²	M ³
歯冠長	13.8	13.6	11.0	21.6	22.4	36.9
舌側歯冠高	11.2	10.8	10.1	9.2	12.6	11.8
区分	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃
歯冠長	11.2	15.9	20.8	19.2	22.3	37.8
舌側歯冠高	12.2	10.6	8.3	10.8	9.1	10.1

附表 5 「下東西牛A奈良」の牛歯測定値 (舌面)

区分	計測値	区分	計測部位	計測値
現下顎骨長	180.1	歯	P ² -M ³	126.2
現下顎枝高	110.8	例	P ² -P ⁴	44.1
現下顎骨体高P ₂ 前辺	33.7		M ¹ -M ³	83.9
下顎骨体高P ₂	38.0		P ₂ -M ₃	132.2
下顎骨体高M ₁	53.6	長	P ₂ -P ₄	48.1
下顎骨体高M ₃	63.4		M ₁ -M ₃	76.2
現下顎骨体高M ₃ 後辺	66.8			

附表 6 「下東西牛A奈良」の下顎骨及び歯列長計測値

第2節 下東西遺跡出土獣歯・獣骨について

墳時代から平安時代までの既往の出土牛の⁰⁴⁾2例の骨体高より大きいのが現代の黒毛和種の骨体高より小さい。また下顎骨体は伸びが少なく、伸びのない割合に高さがあり、下縁が丸みを帯びているためこの上、下顎全体としては小さいが、ややずんぐりしているように見える。

〔鹿〕 出土鹿歯の計測値は附表8に示すとおりであるが、この鹿歯を有する鹿の大きさについては不明である。

No	測定部位	P ²	P ³	P ⁴	M ¹	M ²	M ³	I ₁	I ₂	I ₃	I ₄	P ₂	P ₃	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃	摘要
2	歯冠長	17.2	19.1	21.1	23.8	26.8	32.4	18.3	16.4	13.6	12.7	10.8	22.6	27.5	26.9	30.9	39.5	黒毛和種 ♀ 4才 産地不詳
	歯冠巾	13.1	16.2	19.3	21.1	22.8	22.7	2.6	3.6	3.7	2.6	3.9	10.1	12.0	12.6	20.7	14.5	
	巾率	76.2	84.8	91.5	88.7	85.1	70.1	14.2	22.0	27.2	20.5	36.1	44.7	43.6	46.8	67.0	36.7	
	頰側歯冠高	20.4	19.4	21.2	18.4	22.1	28.8	25.2	24.4	20.5	18.7	14.9	24.5	30.2	31.4	42.7	46.2	
	全歯高	35.9	39.8	45.6	46.2	52.4	55.6	46.4	45.5	38.9	34.0	31.4	47.4	53.4	64.2	74.4	80.2	
3	歯冠長	17.1	21.9	19.4	28.5	32.0	32.1	16.3	15.4	13.9	13.4	11.2	19.2	21.7	25.1	26.6	40.1	黒毛和種 ♂ 5才 産地不詳
	歯冠巾	14.2	15.9	15.7	17.1	19.3	17.1	3.1	2.9	2.5	3.3	6.0	11.7	12.8	14.8	14.4	14.6	
	巾率	83.0	72.6	80.9	60.0	60.3	53.3	19.0	18.8	18.0	24.6	53.6	57.7	59.0	59.0	54.1	36.4	
	頰側歯冠高	26.5	30.4	31.1	34.7	44.3	50.3	18.1	17.2	13.9	10.3	9.9	14.3	19.7	19.4	21.8	27.4	
	全歯高	43.1	47.2	54.6	59.6	69.6	72.2	41.2	41.1	37.1	35.2	24.9	36.7	43.8	45.7	55.4	60.8	
1	歯冠長	19.2	21.5	24.4	29.2	29.8	30.9	19.4	未	未	未	12.1	21.1	未	22.4	29.5	39.9	ホル又は ホル種系 ♀ 2才産地 不詳
	歯冠巾	18.5	15.2	11.6	19.5	19.6	17.9	4.3	//	//	//	7.0	10.8	//	13.0	12.3	14.1	
	巾率	94.9	70.7	47.5	66.8	65.8	57.9	22.2	//	//	//	57.9	51.2	//	58.0	41.7	35.1	
	頰側歯冠高	31.3	32.4	28.8	32.9	38.6	48.2	24.8	//	//	//	13.0	24.1	//	30.5	40.6	48.1	
	全歯高	42.7	42.1	40.0	25.5	61.9	59.5	46.6	//	//	//	22.7	41.4	//	62.2	71.3	70.4	

未は未萌出歯を示す No1のP²、P³、P⁴、P₂、P₃は未萌出歯
 附表 7 現代牛の牛歯計測値
 附表 8 出土ニホンジカの歯の計測値

区 分	計 測 値
現在の頰側咬合面の歯冠の長さ	17.2
歯冠高 CREST HEIGHT (大泰司の前葉舌面歯頸線からの歯冠高)	13.7
現在の頰側全歯冠の高さ	19.4
現在の咬合面の歯冠の中	13.2
重 量	1.6g

No	同一個体	性	年 令	大きさ及び改良度	現代小格馬または黒毛和種との比較
1-8	下東西馬A平安	不明	壮 令	小形馬。	体高110cmの馬より大、130cmの馬より小。年令6-9才。
9-31	下東西馬B室町	不明	壮 令	中形馬の中でも小さい。	体高130cmの馬と同じ。年令10.5才。
33		不明	老 令	中形馬の中でも大きい。	体高130cmの馬より大、140cmの馬より小。年令18.5才。
34		不明	老 令	中形馬の中でも大きい。	体高140cmの馬より心持ち小さい。年令20才以上。
35-36	同一個体である確率高い。	不明	壮 令	中形馬の中でも大きい	体高140cmの馬より心持ち小さい。年令10-13才。
37		不明	壮 令	中形馬の中でも小さい。	体高130cmの馬とほぼ同じ。年令6才。
38		不明	壮 令	大形馬の中でも小さい。歯冠巾、巾率ともに大きく改良度も高い。	体高140cmの馬とほぼ同じ。年令9-10才。

No	同一個体	性	年 令	大きさ及び改良度	現代小格馬または黒毛和種との比較
39		不明	壮 令	小形馬の中でも大きい。	体高110cmの馬より大、130cmの馬より小。年令9-10才。
40		不明	幼 令	中形馬の中でも大きい。	ひび割れているが歯冠長はやや大きいので中形馬と考えられる。舌面エナメル質未磨耗。年令3.5才-4才。
41		不明	壮 令	大形馬の中でも小さい。	体高140cmの馬よりやや大きい。歯冠下部を失っているが歯相全体の若々しさから壮令でも若い方と考えられる。年令6-7才。
43	下東西牛A奈良	不明	老 令	やや小形の牛。改良度も低い。	頬歯の歯冠長、下顎骨体高すべて小さく、下顎骨体は伸びが少ない。歯頸線近くまで磨耗している。
44		不明	老 令	不明	頬面前、中葉、舌面前葉の歯冠下部に歯頸線を認め、大泰司紀之による歯冠高が13.7を示す。年令8-10才。

附表 9 出土歯、骨を有する獣類の性、年令、大きさ及び改良度

4 考察

〔出土馬歯、馬骨を有す馬について日高遺跡⁽¹²⁾との比較〕

(平安時代)(奈良時代末期または平安時代前期のもの1個体を含む)

平安時代における下東西遺跡出土の馬歯、馬骨を有する馬は3個体(個体数は最大限)である。そのうち中形馬は2個体66.4%、小形馬は1個体33.3%である。平安時代の下東西遺跡には中形馬が半数以上を占めていたが年令的には老令馬が66.4%を占めており、老令馬の比率が高い。平安時代には未だ馬の飼育頭数も少なく、また馬を飼育することは経済的にも負担の大きい時代であったので下東西遺跡の住民達は何らかの形で馬を飼育出来るだけの義務または権利と経済力とを持っていたと考えられる。しかし老令馬が70%近いことから、飼育されていた馬が農耗用を目的としていたとも考えられる。⁽¹⁵⁾

これに引きかえ日高遺跡では平安時代に中形馬以上の大きさの馬が81.9%も飼育され、そのうち55.5%が大形馬である。年令的にも幼令もしくは壮令馬が72.7%を占めており、この地区の馬は改良度も高く、年令的にも充実した馬であった。このためこの地区の飼育馬の充実度合いは大変高いもので、農耕用だけの必要度合いを越えたものであったとすることができる。時代的に見れば上野国は大和政権の蝦夷経営のための兵馬の供給基地としての重要性が高まっており、しかも日高遺跡の位置は国府、国分寺など国家的中枢部より南方約3kmの地点にあり、さらに周辺遺跡で検出された水田址から周囲に水田が発達していたことは想像に難しくなく、こうした点をふまえ日高遺跡の馬の改良及び整備について1例をあげるならば軍馬の生産、兵站食糧確保、公共機関の経営維持に必要な使役馬として官馬または優良馬の貸与等に関し何らかの政策的庇護が行われたものと考えられる。このように平安時代には下東西遺跡には主として農耕用としての馬が飼育され、日高遺跡では政策的庇護を受けた優良馬が飼育されていたものと考えられる。⁽¹⁶⁾

(室町時代)

室町時代には下東西遺跡から出土する馬歯、馬骨を有する馬は平安時代と様相を一変しており、下東西遺跡の馬は合計8個体で、小形馬が僅かに14.3%であるにも拘らず中形馬以上の大きさの馬が85.7%を占め、そのうち大形馬が33.3%を占めている。また年令的にはすべて幼令または壮令馬であり、その充実度合いは目を見張るものがある。これ程の馬の充実は単なる農耕用だけの目的では考えることが出来ない。この地区は長野氏、長尾氏の影響下かあるいは、それに近接した地点にあり、戦略上の理由と何らかの関係があるの

かもしれない。

日高遺跡からは中世の馬歯が1個出土しているのみであるが、この馬は幼令の大形馬である。

〔下東西遺跡で飼育されていた牛の姿〕

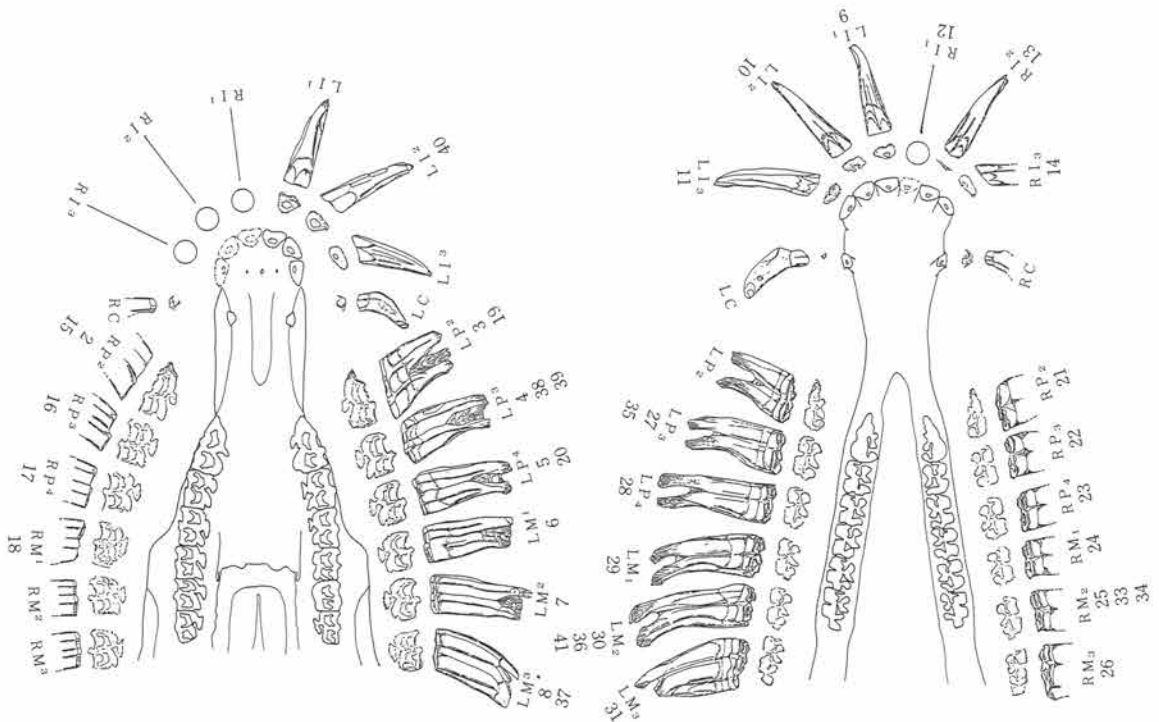
「下東西牛A奈良」の牛歯、牛骨は古墳時代から平安時代までの既往の出土牛歯、牛骨に比べて牛歯は小さく、下顎骨体が短かく骨体高がやや高い。また現代黒毛和種に比べて下顎骨体の伸びが少なく、下顎骨体下縁が丸みを帯びているところから「下東西牛A奈良」は、体は小さく頭部はずんぐりした牛で、いかにも改良度の低かった牛のように思われる。

謝辞：馬歯、馬骨及び鹿についての資料と種々御教導とを賜った東京大学農学部家畜解剖学教室西田隆雄先生、伊東信夫先生、北海道大学歯学部解剖学教室大泰司紀之先生、並びに牛骨標本を御提供賜わり、また種々御教導を賜った群馬畜産加工販売農協連中央ミート流通センター絹川辰朗氏に深甚な感謝の意を表します。

また本文中の実測図を作成して下さいました群馬県埋蔵文化財事業団下東西遺跡整理班の皆さんに心から感謝いたします。

註

- (1) 岡部利雄は『馬の品種図鑑』1968の中で、「馬とポニーの区別について英国では14ハンド2インチキ148cm以下のものをポニーと呼んでいる」と述べている。ここでは148cm以下を小格馬として取扱っている。
- (2) 馬歯の部位、記号並びに各部の名称
G.G.SIMPSON『HORSES』OXFORD UNIVERSITY 1951 直良信夫 『日本および東アジア発見の馬歯、馬骨』（日本中央競馬会）1970により、和名については、原田俊治訳 『馬と進化』1979による。
- (3) 馬歯の測定部位
『A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES』HARVARD UNIVERSITY 1976に準拠して行った。
- (4) 馬骨の名称
加藤嘉太郎 『家畜比較解剖図説（上巻）改訂増訂』1981 川田信平、醍醐正之 『図説家畜解剖学（上巻）新改訂』1974による。
- (5) 馬骨の測定部位
J. U. DUERST BERN『METHODEN DEN VERGLEICHENDEN MORPHOLOGISCHEN FORSCHUNG』1926 林田重幸 『日本在来馬の系統に関する研究』（日本中央競馬会）1978により、一部直良信夫 『日本および東アジア発見の馬歯、馬骨』を参考とした。
- (6) 馬の体高分について林田重幸は『日本在来馬の系統に関する研究』の中で、「日本及び東アジア地域の在来馬について、トカラ馬、海南馬、四川馬のような小形馬群と、御崎馬、木曾馬、蒙古馬のような中形馬群の2群に大別し、体高について小形馬が105～122cm中形馬が129cm～138cmの範囲にあることを述べている。
- (7) 馬の年令区分について市井正次は『馬学精説』1943の中で「5才以下を幼令、6才以上15～16才迄を壮令、17才以上を老令としている。
- (8) 大泰司紀之 「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別、年令、死亡季節査定法」『考古学と自然科学 第13号 51-74』1980
- (9) 大泰司紀之 「3 シカ」『縄文文化の研究第2巻 生業』1983
- (10) 大泰司紀之は「奈良公園のシカの生命表とその特異性」『昭和50年度天然記念物「奈良のシカ」調査報告』（財団法人春日顕彰会）1976の中で「最多死亡年令はオス6才前後、メス8才前後である」、「老令のオス：野生の場合8才前後になると角の小型化、変形化の傾向がある。これは性ホルモンと栄養や健康の影響による」と述べている。
- (11) 大江正直 「日高遺跡出土の馬歯、馬骨について」『日高遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982 大江正直 （三ツ寺III遺跡2号土坑出土の馬歯、馬骨について）『三ツ寺III遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1985
- (12) 大江正直 「日高遺跡出土の馬歯、馬骨について」『日高遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982
- (13) ①埼玉県秩父市皆野町三沢平草 ②長野県塩尻市平出遺跡 ③青森県下北郡東通村岩屋石灰洞 ④大阪府北河内郡四条畷町D古墳の①～④出土の古墳時代から平安時代までの出土牛歯計測値は直良信夫 『古代遺跡発掘の家畜遺体』（日本競馬会弘済会）1973による
- (14) ①埼玉県秩父市皆野町三沢平草 ③青森県下北郡東通村岩屋石灰洞の2例の古墳時代から平安時代までの出土牛下顎骨々体高計測値出典(13)と同じ
- (15) 「巻8 鹿牧令 駅長條」「巻8 鹿牧令 牧馬付軍団條」『令義解』（『国史大系第2巻2巻』）
- (16) 直良信夫は「日本および東アジア発見の馬歯、馬骨」の中で「日本の古代で生業関係の遺跡出土物は主として農業と関係した用向きに使役されていたらしく、こういうところでは比較的老年馬が遺骸をとどめている」と述べている。またここでは農耕用とは農業経営に必要な総べての農作業用を意味する。
- (17) 「巻12 聖武天皇 天平9年2月」「巻21 淳仁天皇 天平宝字2年12月」「巻22 淳仁天皇 天平宝字3年8月」「巻33 光仁天皇 宝龜5年8月」『続日本紀』（『国史大系 第2巻』）

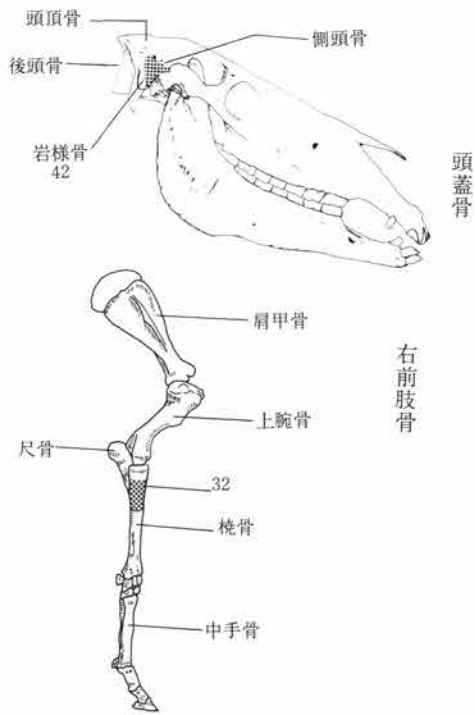


I¹数字がアルファベットの上 上顎歯
 I₁数字がアルファベットの下 下顎歯
 L左、R右、I門歯、P前臼歯、M後臼歯、C犬歯
 ※上記のほか上顎切歯I出土

L I¹左上顎第1門歯 L I₁左下顎第1門歯
 L P²左上顎第2前臼歯 L P₂左下顎第2前臼歯
 L M¹左上顎第1後臼歯 L M₁左下顎第1後臼歯

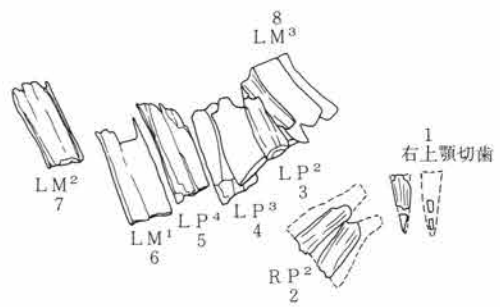
附図1. 馬歯模式と出土馬歯の部位

模式は15才小格馬



頭蓋骨は15才、♂又は♀、雑種のもの
 前肢骨原図はW. ELLENBERGERによる

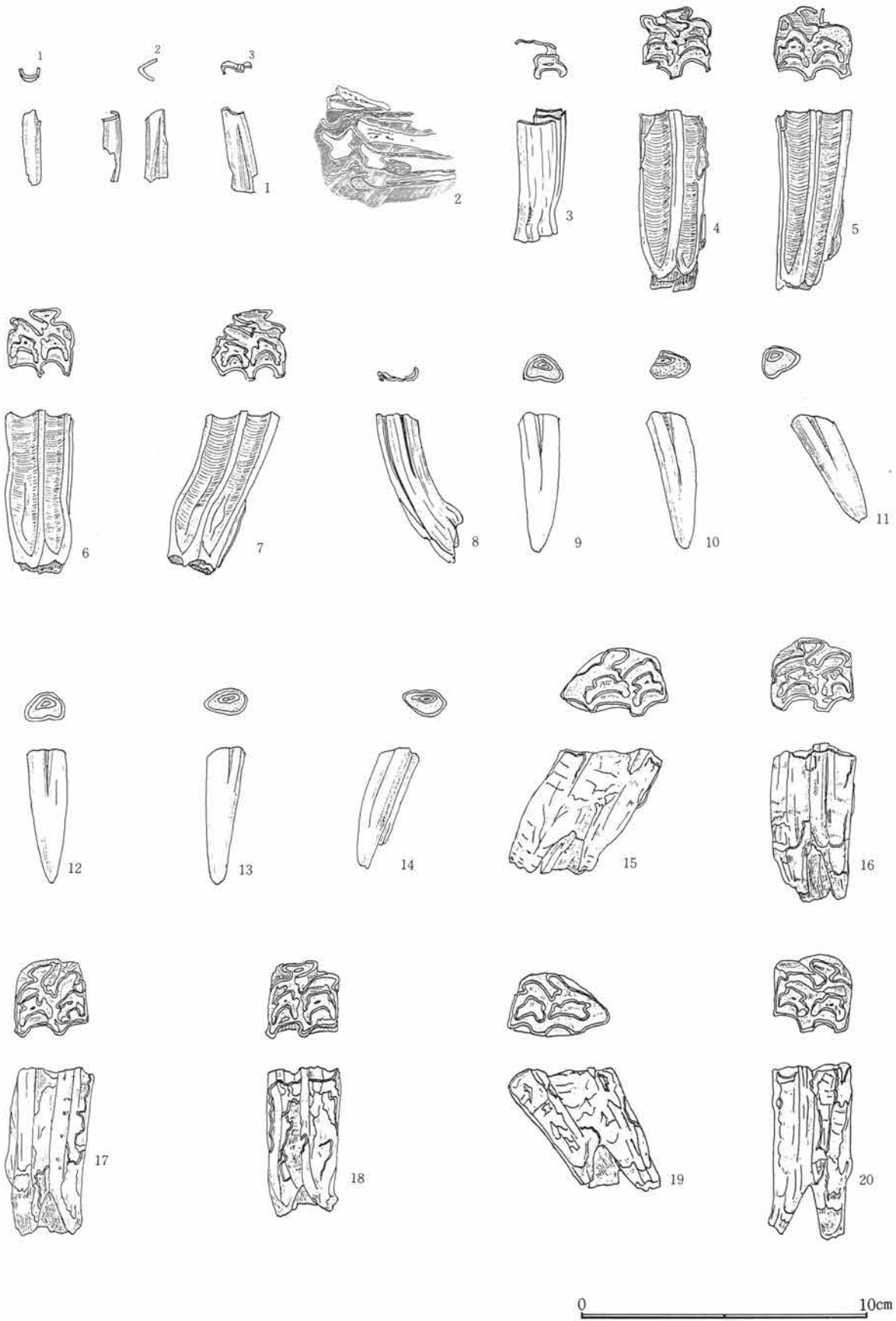
附図2. S E09出土馬骨の部位



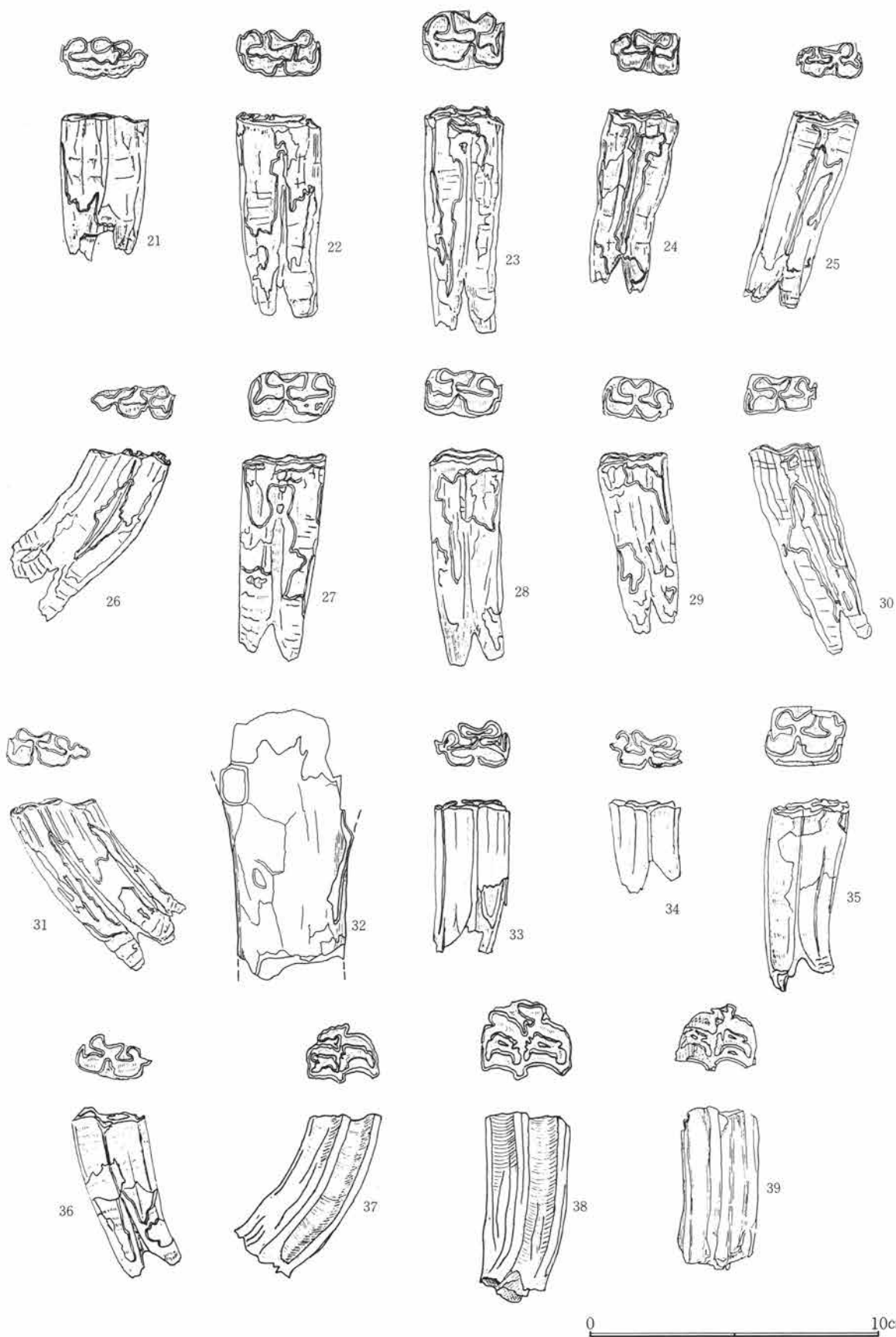
0 10cm

附図3. S K23馬歯出土状況

第2節 下東西遺跡出土獸齒・獸骨について



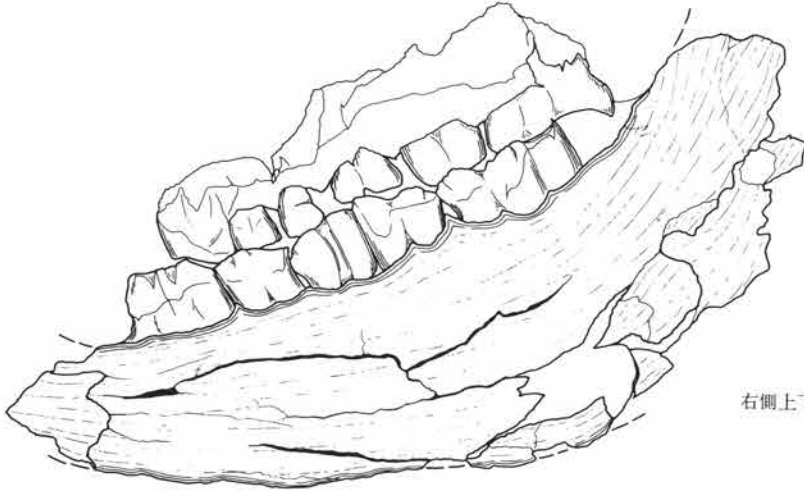
附図4. 出土馬齒馬骨 1:2



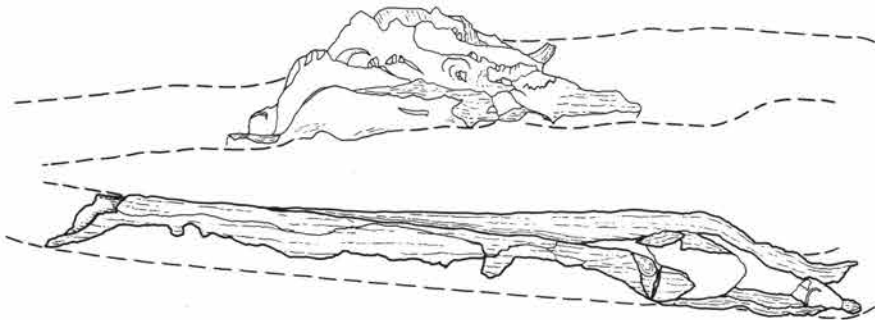
附圖 5 . 出土馬齒馬骨 1 : 2



左側頰面側



右側上下顎骨舌面側



下顎骨下面側



附図6.「下東西牛A奈良」ツメ・牛歯・牛骨S D59出土 1:2

第3節 胎土分析

群馬県工業試験場 花岡 紘一
独立 研究員

(財)群馬埋蔵文化財 三浦 京子
調査事業団 嘱託 員

はじめに

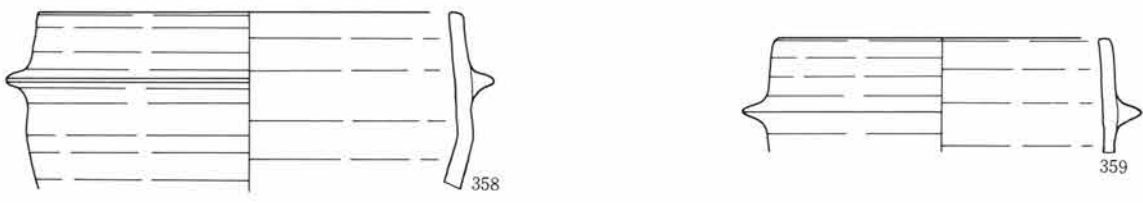
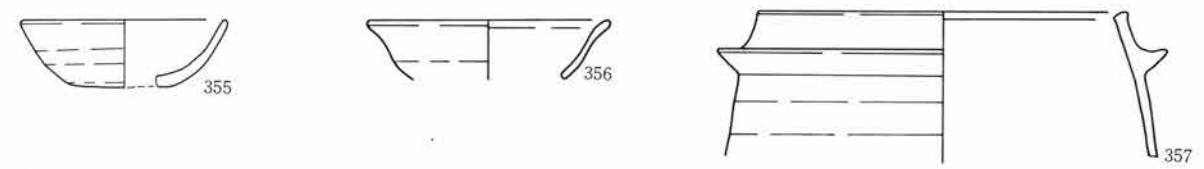
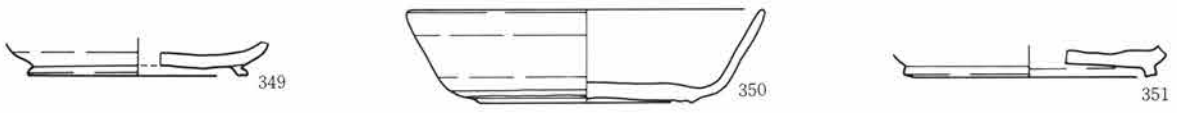
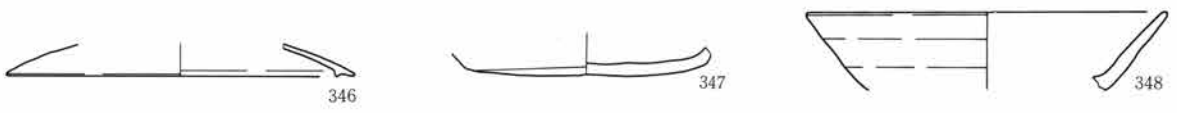
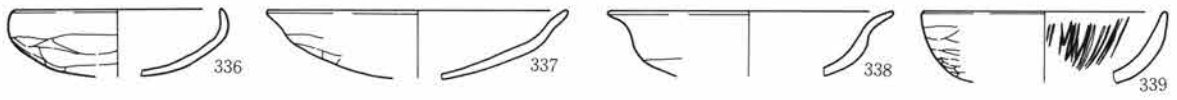
群馬県における須恵器、瓦等の胎土分析については、現在その試料も447点を数え、秋間、吉井、乗附、金山、中之条、月夜野古窯跡群については一傾向を知ることができるようになってきた。今回は下東西遺跡出土須恵器の傾向を促えるとともに、土師器についても胎土分析を試みた。

1 分析目的と試料の選択

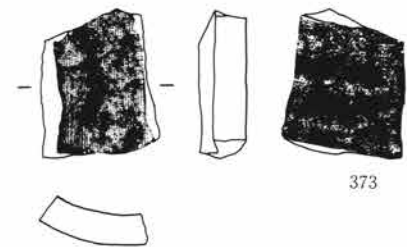
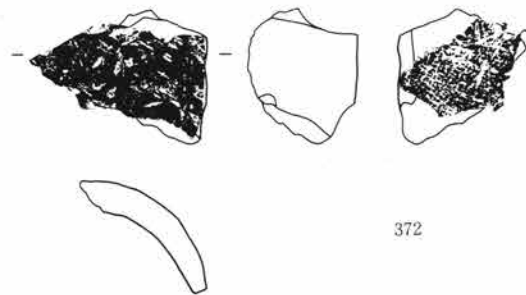
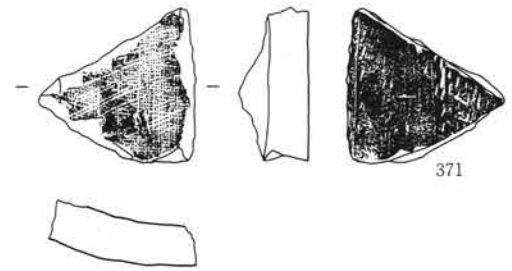
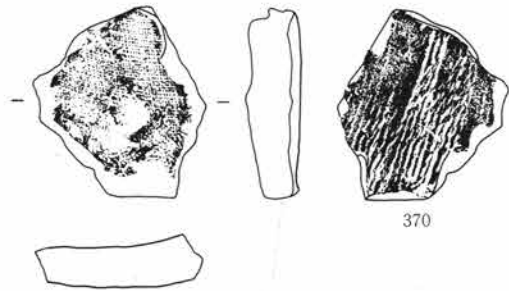
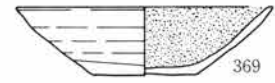
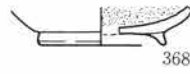
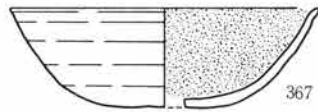
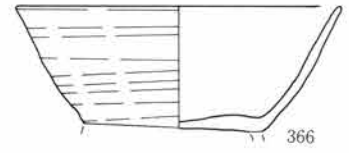
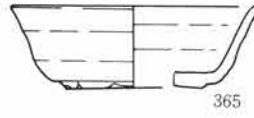
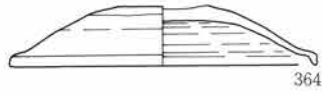
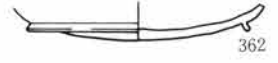
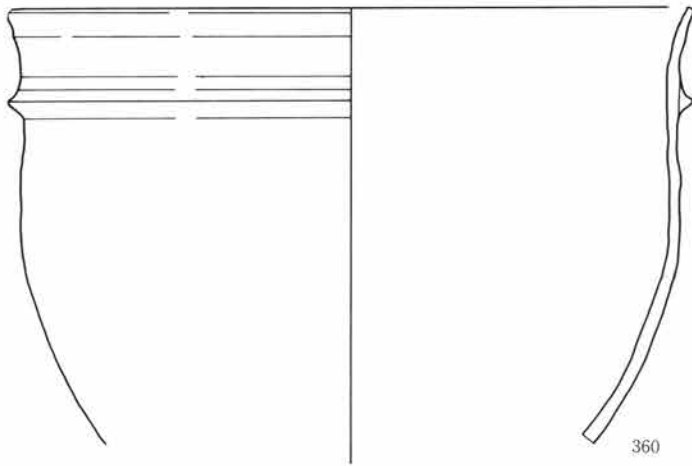
下東西遺跡は、弥生時代、古墳時代中期、奈良時代、平安時代と断続的に営まれてきた集落である。中心となるのは7世紀中頃から10世紀前半であるが、特に7世紀末から8世紀初頭にかけては官衙的な性格を持つ遺構群があり、それを区画する大溝（S D59）からは多量の須恵器・土師器が出土している。これらの須恵器は何処から供給されたのか、また土師器については何らかの傾向が掴めるのかを目的としたい。分析目的の具体的内容と実測図、肉眼観察表は以下に記す。

- (1) 須恵器は肉眼観察では秋間、吉井窯跡群製の特徴を持つものがあるが、分析結果と一致するか。その他の窯跡の可能性はあるか。また猿投、美濃、湖西古窯に多く見られる底部の突出する高台付坏がS D59から出土しているが、県内の窯跡にあてはまるか。
- (2) S D59出土土師器のうち一般的にみられる土師器、暗文を施された土師器・内外面篋磨きされた土師器について、それぞれの胎土傾向がどうか知りたい。肉眼観察ではこれらの土師器の胎土の相違は明瞭である。暗文土器は畿内の暗文土器の影響を受けて成立したものであるが、形態上からは類似点はみられない。胎土は一見肌理が細かく、夾雑物も少く精選された粘土を使っていると思われるので比較してみたい。また分析しておくことによって、県内と北武蔵に形態の類似する暗文土器が出土しているので将来的に比較できるようにしておきたい。
- (3) 内黒土師器は、本遺跡では9世紀中頃から10世紀のものが出土している。肉眼観察では土師器に近いものと須恵器（X段階以降）に近いものがあるが、土師器・内黒土師器・須恵器（X段階以降）とどのような傾向があるかを知りたい。羽釜も須恵器（X段階以降）・坏と近似する胎土と思われるので合わせて比較したい。試料No.360の羽釜は形態・胎土とも他の羽釜と著しく異なるものである。分析結果も相違するか否か。
- (4) 瓦は、46点出土している。全て破片であり、二次使用されたものと考えられる。肉眼観察では秋間、吉井、笠懸窯跡群の特徴をもつものが観察されるが、分析結果と一致するか否か。

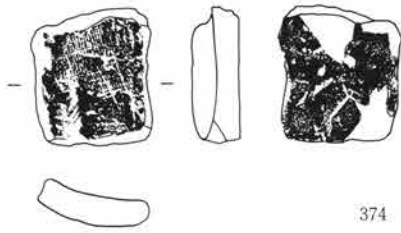
第3節 胎土分析



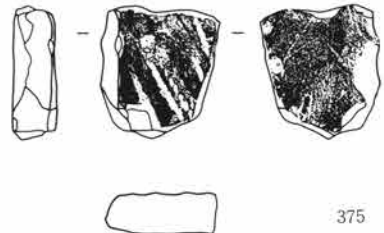
第5章 付 編



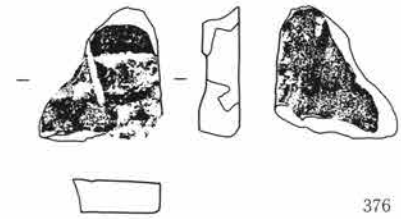
第3節 胎土分析



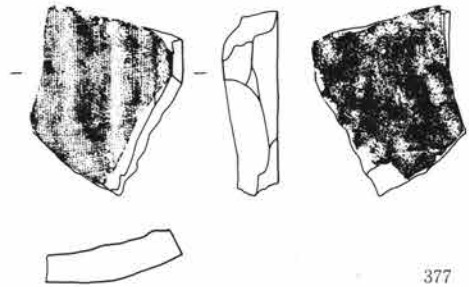
374



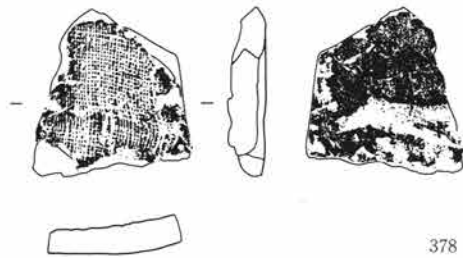
375



376



377



378

第1表 分析試料の肉眼観察表

番号	推定年代	種別	焼成・胎土の肉眼観察	備考
336	8世紀前半	土師器 坏	素地は細かいが嵩は軽い。胎土はわずかながら層状の走行となる。夾雑物は透明微鉱物が僅か入り、黒・白色微鉱物ほんの僅か入る。茶色小円粒状物質は見られない。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で器表面側につれ橙色が強くなる。	S D59-32
337	8世紀前半	土師器 盤	素地は細かいが嵩は軽い。胎土はわずかながら層状の走行となる。夾雑物は茶色小円粒状物質が均質な大ききで多く含まれ、白・黒色微鉱物粒を含む。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で器表面側につれ橙色味が強くなる。	S D59-227 在地製
338	8世紀前半	土師器 盤	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は僅かながら層状の走行となる。夾雑物に茶色小円粒状物質は見られず、白・黒色微鉱物粒が僅か入る。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で器表面側につれ橙色味が強くなる。	S D59-55 在地製
339	8世紀前半	土師器 坏	素地は細かいが嵩は軽い。胎土はわずかながら層状の走行となる。夾雑物に茶色小円粒状物質が見られ、白・黒色微鉱物は見られない。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で器表面側につれ橙色味が強くなる。	S D59-236 在地製
340	8世紀前半	土師器 坏	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は僅かながら層状の走行となる。夾雑物に茶色小円粒状物質が見られず、白・黒色微鉱物もほんの僅かである。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で均質な橙色を呈す。	S D59 S一括 在地製

第5章 付 編

番号	推定年代	種別	焼成・胎土の肉眼観察	備考
341	8世紀前半	土師器 坏	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は僅かながら層状の走行となる。夾雑物に茶色小円粒状物質が見られ、白・黒色微鋳物粒が僅か入る。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で器表面側につれ橙色が強くなる。	S D59 S 中層 在地製
342	8世紀前半	土師器 盤	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は僅かながら層状の走行となる。夾雑物に茶色小円粒状物質が僅か見られ、白・黒色微鋳物粒が僅か入る。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で均質な暗赤色を呈す。	S D59-278 山梨か
343	8世紀前半	土師器 坏	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は僅かながら層状の走行となる。夾雑物に茶色小粒状物質が僅か見られ、白・黒色微鋳物粒が僅か入る。胎土は342に似る。焼成は硬く、酸化を主体とした焼成で均質な橙色を呈す。	S D59-276
344	8世紀前半	須恵器 大形蓋	素地は細かいがざんぐりしている。胎土は僅かながら層状の走行となる。夾雑物は白色の微鋳物粒が僅か入り、チャートと思われる灰色の小円粒鋳物入る。焼成は還元を主体とした焼成で灰色を呈し、普通の焼上がりである。	S D59M 下層 吉井窯跡群か
345	8世紀前半	須恵器 短頸壺	素地は細かいがざんぐりしている。胎土は層状の走行となり、気泡が長い。夾雑物は白色の微鋳物粒が僅か入り、他の白色・灰色鋳物粒は角ばっている。焼成は還元を主体とした焼成で灰色を呈し、普通の焼上がりである。	S D59-137 吉井窯跡群製
346	8世紀前半	須恵器 蓋	素地は細かく密である。層状にはならないが僅か含む気泡は長い。夾雑物は白色の微鋳物が多く夾雑する。他の微鋳物や大粒鋳物は含まない。焼成は焼締り、自然釉がおよぶ。色調は還元気味で灰色を呈す。土味は余り見かけない土で、下郷遺跡などから出土した古墳時代須恵器に類似。	S D59 S一括 西毛地域製か
347	8世紀前半	須恵器 坏	素地は細かいがざんぐりしている。胎土は層状の縞走行となり、含む気泡は長い。夾雑物は角ばった白色のやや大粒の鋳物が多い。白色鋳物は石英・長石粒と思われる。焼成は焼締り、自然釉がおよぶ。色調は還元気味で灰色を呈す。層状の縞と白色鋳物粒から吉井古窯跡群製と考えられる。	S D59 S一括 吉井窯跡群製
348	8世紀前半	須恵器 坏	素地は細かいがざんぐりしている。胎土は層状の縞走行となり、含む気泡は長い。夾雑物は白色の大粒鋳物が多い。鋳物は角ばる。焼成は軟質である。色調は還元気味で灰色を呈す。層状の縞と白色鋳物粒から吉井窯跡群製と考えられる。	S D59 S 中層 吉井窯跡群製
349	8世紀	須恵器 埴	素地は細かいがざんぐりしている。胎土は層状の縞走行となり、含む気泡は長い。夾雑物は白色の大粒鋳物が多い。白色鋳物は角ばり、石英・長石粒と思われる。黒色鋳物は見えない。焼成は普通である。色調はやや酸化気味で黄灰色を呈す。土味はNo347・348と同様。	S T107-6 吉井窯跡群か
350	8世紀前半	須恵器 埴	素地は細かいがざんぐりしている。胎土はやや層状の走行となり、含む気泡は長い。夾雑物は白色の微鋳物粒が多く、灰色の鋳物を含む。黒色鋳物粒は含まない。夾雑物はやや丸みをおびる。焼成は軟質である。色調は還元気味の灰色を呈す。	S D59-333 吉井窯跡群か
351	8世紀前半	須恵器 埴	素地はやや荒く、嵩はやや軽い。胎土はやや層状の走行となり、気泡は長い。夾雑物は白・灰・黒色の微鋳物粒が多く、鋳物は丸みをおびる。焼成は軟質である。色調は還元気味の灰色を呈す。	S D59 S 中層 吉井窯跡群か
352	8世紀前半	須恵器 埴	素地は細かく、嵩は重い。気泡は含まず、胎土の層状走行は顕著でない。夾雑物は黒色物質(Fe ₂ O ₃ とSiO ₂ か)が入り、白色微鋳物粒を含む。鋳物は角ばっている。焼成は普通で、色調は還元気味の灰色を呈す。	S D59 S 上層
353	8世紀前半	須恵器 埴	素地はやや荒く、嵩はやや軽い。胎土はやや層状の走行となり、気泡は長い。夾雑物は白・灰・黒色の微鋳物粒が多く、鋳物は丸みをおびる。焼成は軟質である。色調は還元気味の灰色を呈す。土味はNo346に近い。	S D59M 最下層 西毛地域製か
354	10世紀後半	土師質 土器 坏	素地はやや荒く、嵩は軽い。胎土はやや層状の走行となり、気泡は短い。夾雑物は白・灰・黒色の微鋳物粒が多い。茶色小円粒状物質(Fe ₂ O ₃ とSiO ₂ か)を多く含む。白色鋳物の一部に火山岩軽石と考えられる円粒を含む。焼成は軟質である。色調は酸化気味の淡赤橙色をおびるが焼ムラが顕著である。	S J 173埋 床上 在地製

第3節 胎土分析

番号	推定年代	種別	焼成・胎土の肉眼観察	備考
355	10世紀後半	土師質 土器 坏	素地はやや荒く、嵩は軽い。胎土はやや層状の走行となり、気泡は短い。夾雑物は白・灰・黒色の微鉱物粒が多い。茶色小円粒状物質（ Fe_2O_3 と SiO_2 か）を多く含む。白色鉱物の一部に火山岩軽石と考えられる円粒を含む。焼成は、軟質である。色調は酸化気味の淡赤橙色をおびるが焼ムラが顕著である。	S J 173-3 カマド内 在地製
356	10世紀後半	土師質 土器 碗か	素地はやや荒く、嵩は軽い。胎土はやや層状の走行となり、気泡は短い。夾雑物は白・灰・黒色の微鉱物粒が多い。茶色小円粒状物質（ Fe_2O_3 と SiO_2 か）を多く含む。白色鉱物の一部に火山岩軽石と考えられる円粒を含む。焼成は、軟質である。色調は酸化気味の淡赤橙色をおびるが焼ムラが顕著である。No345～356の土味は共似する。	S J 173床下 覆土 在地製
357	10世紀	須恵器 羽釜	素地はやや荒く、嵩は軽い。胎土はやや層状の走行となり、気泡は長い。夾雑物は白・灰・黒色の微鉱物が多い。茶色の小円粒状物質を含む。焼成は普通である。色調は酸化気味の橙色をおびる。	S J 107カマ ド内覆土 在地製
358	10世紀	須恵器 羽釜	素地はやや荒く、嵩は軽い。胎土はざんぐりしている。気泡は多いが長くはない。夾雑物は、白・黒色の角ばった砂粒状で微鉱物が多く、茶色の小円状物質は少ない。焼成は普通である。色調は還元気味の淡灰色を呈す。	S J 175-10 在地製
359	10世紀	須恵器 羽釜	素地はやや荒く、嵩は軽い。胎土はざんぐりしている。気泡は目立たない。夾雑物は、白・黒色の角ばった砂粒状微鉱物が多く、茶色の小円状物質は少ない。焼成は甘く軟らかい。色調はやや酸化気味の淡橙色を呈す。	S J 175-11 在地製
360	10世紀後半 ～11世紀前	羽釜	素地はやや荒く、嵩は軽い。胎土はざんぐりしている。気泡は目立たない。夾雑物は、白色の角ばった砂粒状微鉱物が多く、茶色の小円状物質は少ない。焼成は甘く軟らかい。色調は燻が強くなるため還元・酸化の焼成が不明瞭で暗褐色を呈す。土味は土師器に近い。	S J 93-4 在地製
361	8世紀前半	須恵器 碗	素地は細かく、嵩は重い。胎土はねっとりしている。気泡は目立たない。夾雑物は白色の角ばった微鉱物粒を含み、黒色（ Fe_3O_4 と SiO_2 か）鉱物粒を僅か含む。焼成は甘く軟質である。色調は還元気味の灰色を呈す。土味の質感はNo351に共通する。	S D 59 S 中層 吉井窯跡群か
362	8世紀前半	須恵器 碗	素地は細かく、嵩は重い。胎土はねっとりしている。気泡は目立たない。白色・灰色の微鉱物粒を多く含み、黒色（ Fe_3 と SiO_2 か）鉱物粒を僅か含む。焼成は普通である。色調は還元気味の灰色を呈す。質感はNo351・361に似るが灰色の丸みのある砂粒が入る点が若干、異なる。	S D 59 M 下層 吉井窯跡群製 か
363	8世紀前半	須恵器 坏・碗	素地は細かく、嵩は重い。胎土はねっとりしているが層状の縞走行がわずかに見られる。夾雑物は灰色の角ばった砂粒状微鉱物が見られ、黒色の角ばった微物を僅か含む。焼成は甘く軟質である。色調は還元気味の灰色を呈す。	S D 59 S 吉井窯跡群製 か
364	9世紀前半	須恵器 蓋	素地は細かいが、ざんぐりしている。嵩は重い。夾雑物は白色の微物が僅かに見られ、別粘土微物と見られる小粒が入る。焼成は甘く軟質である。色調は中性焰的な卵殻色を呈す。	S J 199-12 吉井窯跡群製 か
365	8世紀後半	須恵器 坏	素地は細かいが、ざんぐりしている。嵩は重い。夾雑物は白色の微物が僅かに見られ、別粘土微物と見られる小粒が入る。焼成は甘く軟質である。色調は還元気味の灰色を呈す。土味はNo346に類似する。	S J 05-16 吉井窯跡群製 か
366	9世紀中頃	須恵器 碗	素地は細かく、層状の縞走行がわずかに見られる。嵩は重い。夾雑物は白色の微物が僅かに見られ、別粘土微物と見られる円状大粒の粘土粒が入る。焼成は甘く、軟質である。色調は還元気味の灰色を呈す。	S J 199-15 吉井窯跡群製
367	10世紀後半	土師質 土器 坏（内 黒）	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は縞状の走行となる。夾雑物に茶色小円状物質が多く含まれ、黒色の角ばった微物の入り方は少ない。白色微物粒は目立たない。焼成は普通である。色調は酸化を主体とした橙色で、内面は黒色の燻がおよび、割れ口の芯では還元作用による灰色化が見られる。燻の吸炭は還元作用の中で行われている。	S J 14-4 在地
368	10世紀後半 ～11世紀前	土師質 土器	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は縞状の走行となる。夾雑物に茶色の小円状物質はほとんど見られず、白色微物・黒色の角ばった微物粒が含まれる。焼成は普通である。色調は酸化気味の淡い褐色を呈し、内面は黒色の燻がおよび、割れ口の芯では還元作用による灰色化が見られる。燻の吸炭は還元作用の中で行われている。土味はNo367に近い。	S J 17-3 在地

番号	推定年代	種別	焼成・胎土の肉眼観察	備考
369	10世紀前半	土師質土器	素地は細かいが嵩は軽い。胎土は縞状の走行となる。夾雑物に茶色的小円状物質はほとんど見られず、白色鉍物が僅かに入る。焼成は普通である。色調は酸化気味の淡い褐色を呈し、内面に黒色の燻がおよび、割れ口の芯では還元作用による灰色化が見られる。燻の吸炭は還元作用の中で行われている。土味はNo.367・368に近い。	S J 180-3 在地
370	9世紀	瓦丸瓦	素地は細かく、嵩は重い。胎土は縞状の走行となる。胎土中に別粘土が縞状をなす。夾雑物に白・灰色鉍物の大粒が目立ち、角ばった黒色鉍物粒をわずか含む。焼成は普通で、色調はやや酸化気味の淡褐色を呈す。	S D23-18 吉井窯跡群製 外面縄叩
371	9世紀	瓦丸瓦	No.370に同じ。ただ夾雑物中に茶色小円状物質が多い点に差異あり。	86-F46 吉井窯跡群製 外面縄叩
372	9世紀	瓦丸瓦	素地は細く、嵩は重い。胎土は縞状走行となり、別粘土が入る。夾雑物に白色の粘土小粒が入り、茶色小円粒状物質が多い。焼成は甘く軟質である。色調は酸化気味で淡褐色を呈す。	S D82笠懸窯 跡群製秋間か
373	8・9世紀	瓦丸瓦	素地は細く、嵩は重い。胎土は縞状走行となり、別粘土が入る。夾雑物に白色の粘土小粒・白色鉍物・小円粒状物質が多く含まれている。焼成は硬く、焼締りあり。色調は還元気味で灰色を呈し、芯側やや酸化気味である。	S J 173-12 不詳 表面素文
374	8・9世紀	瓦丸瓦	素地は細く、嵩は重い。胎土は縞状走行となる。夾雑物に淡黄色の別粘土小粒入り。白色微鉍物含む。茶色小円粒状物質多い。焼成はやや甘く軟質である。色調は還元気味で灰色を呈す。	S D58-20 笠懸窯跡群製 か。表面素文
375	8世紀	瓦平瓦	素地は細く、嵩は重い。胎土は縞状走行となる。夾雑物に淡黄色の別粘土入り、白色微鉍物含む。茶色小円粒状物質多い。焼成はやや甘く軟質である。色調は還元気味で灰色を呈す。	S D23-19 不詳 裏面縄叩
376	8世紀	瓦平瓦	素地は細く、嵩は重い。胎土は縞状走行となり、ざんぐりしている。夾雑物に白色鉍物粒が多く含まれ、灰色鉍物も僅かに入る。茶色小円粒状物質僅かに入る。焼成は甘く軟質である。色調は酸化気味の橙色を呈す。	S K55-6 吉井窯跡群製 か 素文、模骨桶
377	7世紀後半～8世紀前	瓦平瓦	素地は細く、嵩は重い。胎土は別粘土が入り縞状走行となる。夾雑物に黒色（ Fe_3O_4 と SiO_2 ）物質粒が目立ち、白色鉍物粒入る。焼成は硬く自然釉およぶ。色調は還元気味の灰色を呈す。	S D58-8 秋間窯跡群製 素文、模骨桶
378	9世紀	瓦平瓦	素地はやや粗く、嵩もやや軽い。胎土は縞状走行となり、含まれる気泡が目立つ。夾雑物に白色鉍物粒が目立ち、黒色物質も僅か含む。焼成はやや甘く、軟かい。色調は還元気味の灰色を呈す。	121-I06 吉井窯跡群か 素文

2 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析・分析用試料は各試料を $10\mu m$ 以下に粉碎し、5～10gを径4cmの円板に成型して使用した。

測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置：理学電機(株)製KG-4型

X線管球：銀対陰極 50KV、20mA

分光結晶：Fe、Sr、RbにはLiF ($2d=4.28\text{\AA}$)

Ca、K、Ti、Si、AlにはEDDT ($2d=8.808\text{\AA}$)

MgにはADP ($2d=10.648\text{\AA}$)

検出機：LiFを使用したときS、C、EDDTを使用したときP、C

時定数：1

計数法：Fe、Ca、K、Ti、Sr、Rbはチャートにより、Si、Al、Mgは定時計数法によった。なお、チャー

トは4°1minとした。

波高分析器：積分方式

測定線：FeK β . CaK α . KK α . TiK α . SiK α . AlK α . SrK α . RbK α の各1次線を使用した。

X線照射面積：20mm ϕ

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器5点（295、310、336、345、360、380）を化学分析し標準試料とした。

3 分析結果

第1図は、須恵器の分析結果の分布図であり、比較上必要なため、吉井窯跡群⁽¹⁾、長尾根、未沢窯跡出土須恵器、瓦の分析結果を加え、また既成果の秋間窯跡群の領域を加えて作成した。第2図は、土師器の分析結果の分布図であるが、本遺跡の暗文土器との比較のため、鳥羽遺跡出土の暗文土器を加えた。第3図は、瓦の分析結果の分布図であり、参考⁽²⁾に笠懸・山際窯跡の分析結果を加えたものである。

- (1) 須恵器は、大きく2つの傾向に分けられ、Sr/Rbの値が大きい方のグループは、白色の角粗砂粒・小礫を多量に含み、胎土が層状をなす。一見して識別できる特徴的な胎土である。これは吉井窯跡群で表採されているものと酷似する。もう一方のグループは、秋間領域と一致するが、肉眼観察では吉井窯跡群製と想定したものである。吉井窯跡群が存在する付近の地質構造は4種類に分けられ、秋間窯跡群製須恵器の胎土と類似する胎土の須恵器も採集されているので、さらに多くの吉井窯跡群出土須恵器の胎土分析を行ない、それらの領域を確定した上で、肉眼観察も含め判断しなければ比較し得ないであろう。また、須恵器(X段階以降)は、Ca/Kの値が大きく、須恵器よりもばらつく傾向にある。しかし、Ca/Kの値が非常に大きい試料No.354の坏、No.360の羽釜を除いた他は、吉井窯跡群、長尾根、未沢窯跡の分布範囲と重なるので吉井窯跡群の可能性が高い。
- (2) 土師器の胎土分析による産地推定の試みは、三辻氏⁽³⁾によって行なわれている。方法として窯跡出土の須恵器のデータを活用し、土師器の場合もRb因子は須恵器と対応することをつきとめているが、東日本と西日本の相違というような大きな範囲での有効性であり、県内の窯跡と対応し得る方法があるかは不明である。本遺跡出土の土師器は、種類毎にある程度のまとまりが見られる。土師器は比較的小さくまとまり、吉井窯跡群の分布範囲に含まれるので、同地域の粘土を使用したとも考えられるが、これも分析数を増していかなければ結論の出せない問題である。暗文土器は、鳥羽遺跡の暗文土器も本遺跡の分布範囲の中に納まり、産地同定の可能性があるといえる。
- (3) 内黒土師器は、ばらつきがあり傾向が促えられない。しかし土師器の分布範囲に入るものもあり、試料を増していけば傾向が掴める可能性もある。試料No.360の羽釜は、Ca/Kの値が非常に大きい。Caの多少に関して原料の粘土にどのような成生の違いがあるのか不明であるが、須恵器よりも須恵器(X段階以降)、土師器の方がCaの値が高い傾向にある。
- (4) 瓦は、肉眼観察では秋間・吉井・笠懸窯跡群を想定した。秋間窯跡群と想定したものは、その領域内に納まるが、吉井・笠懸窯跡群としたものは、大きな範囲で混在する。吉井・笠懸窯跡群の領域は重複部分が多く、今後さらに分析数を増やし領域設定をしていかなければならないだろう。

(1) 今回同時に吉井町教育委員会で分析に出した試料。

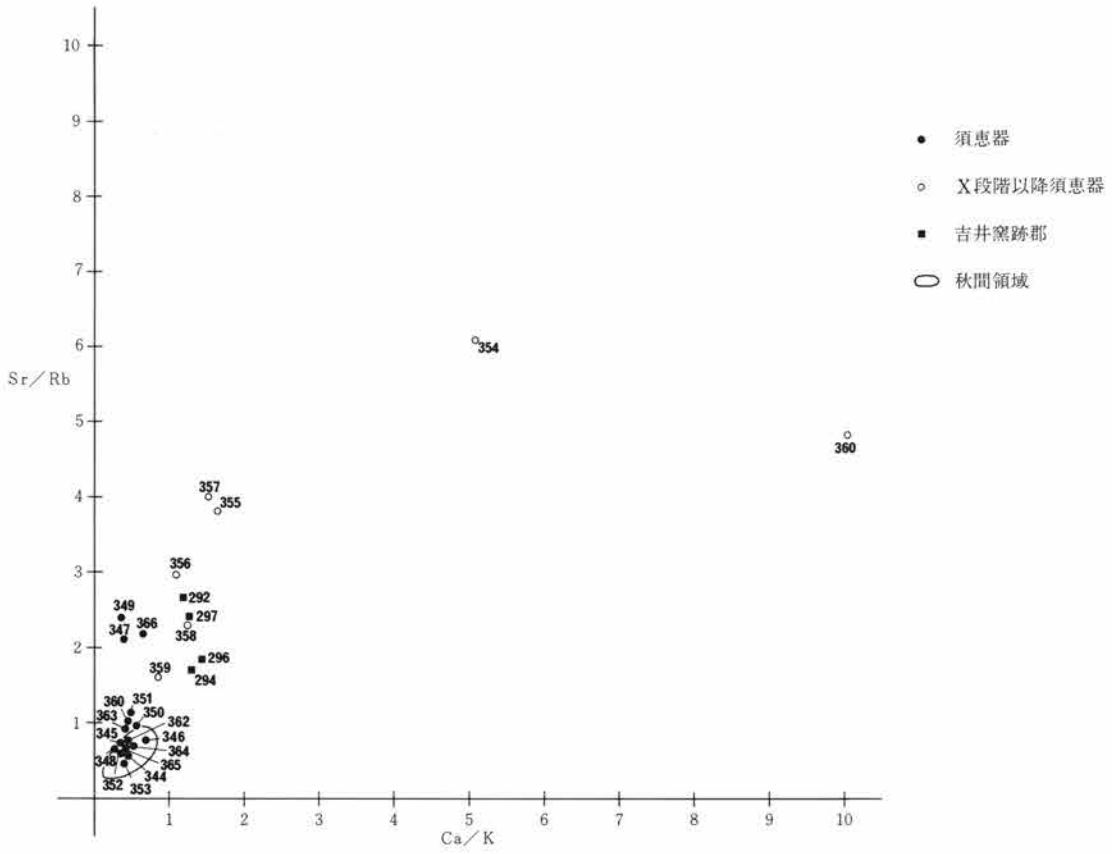
(2) 今回同時に分析した試料。

(3) 大江正行氏の御教示。

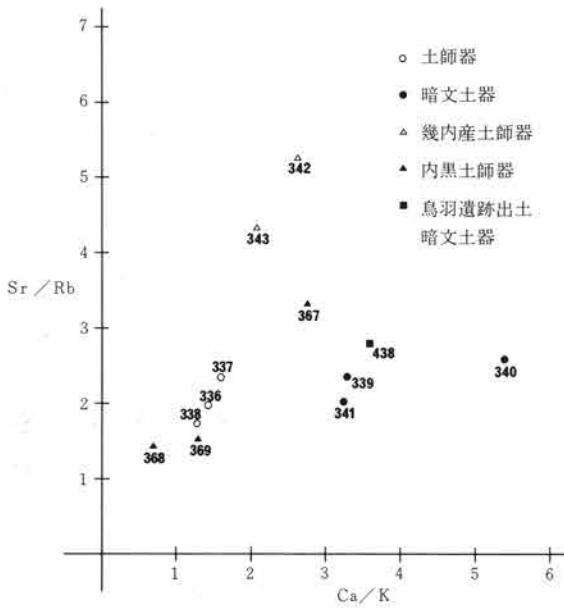
(4) 三辻利一 「古代土器の産地推定法」 ニュー・サイエンス社 1983

三辻利一・吉岡康暢・山本成顕、「横江庄遺跡（石川県松任市）から出土した土器の胎土分析」考古学と自然科学、第15号1982

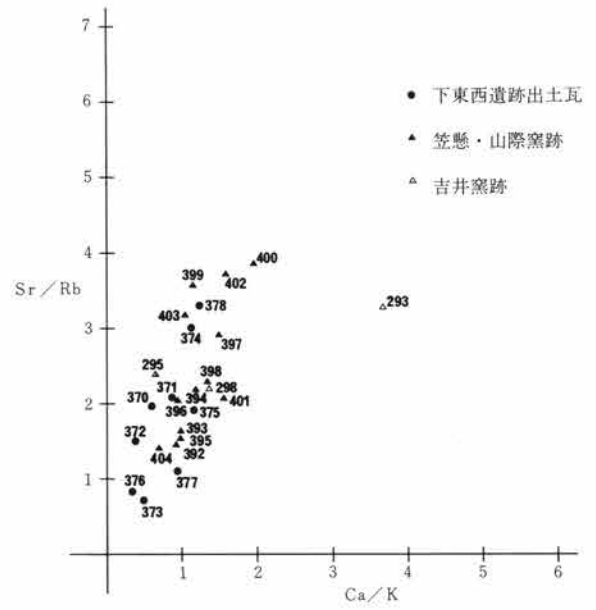
第5章 付 編



第1図 須恵器試料



第2図 土師器試料



第3図 瓦試料

第3節 胎土分析

第2表 試料分析値一覽表

下東西遺跡試料

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/ K	Sr/ Rb
336		56.9	19.9	11.1	1.26	1.41	1.16	1.31	1.42	1.98
337		57.2	18.9	11.05	1.22	1.57	0.77	1.28	1.61	2.35
338		61.3	17.8	8.2	1.15	1.48	0.69	1.51	1.3	1.72
339		60.3	13.5	9.27	1.09	2.99	1.27	1.19	3.28	2.34
340		59.5	14.1	8.95	1.15	4.8	1.26	1.16	5.39	2.62
341		61.1	13.7	9.0	1.06	2.84	1.14	1.15	3.22	2.02
342		55.1	18.1	12.9	1.08	1.67	0.52	0.83	2.63	5.25
343		55.1	17.6	13.4	1.22	1.95	0.72	1.15	2.09	4.34
344		76.9	16.4	2.8	0.84	0.45	0.79	1.53	0.4	0.6
345		74.2	17.9	3.45	0.79	0.42	0.69	1.51	0.38	0.74
346		75.7	15.6	3.0	0.8	0.84	0.68	1.77	0.69	0.79
347		67.3	20.7	3.6	0.93	0.4	0.74	1.44	0.38	2.1
348		73.8	19.6	2.86	0.75	0.27	0.89	1.25	0.3	0.64
349		69.4	24.1	2.95	0.85	0.28	0.81	1.13	0.34	2.425
350		77.3	18.5	1.8	0.83	0.35	0.61	0.87	0.55	0.98
351		73.7	17.8	3.7	0.73	0.37	0.51	1.06	0.48	1.13
352		75.2	16	4.3	0.72	0.29	0.46	1.01	0.39	0.6
353		76.2	18.2	2.55	0.94	0.44	0.53	1.62	0.37	0.49
354		66.7	19	3.8	0.89	2.86	0.68	0.73	5.08	6.09
355		63.4	20.1	3.9	0.88	2.31	0.5	1.88	1.63	3.81
356		68.1	18.1	3.87	0.86	1.57	0.6	1.9	1.09	2.98
357		63.6	17.1	6.0	0.83	2.19	0.73	1.93	1.5	4.025
358		68.5	18.5	5.4	0.82	1.61	0.81	1.73	1.23	2.34
359		69.9	16.1	5.3	0.69	1.55	0.76	2.43	0.84	1.61
360		59.3	20.6	6.7	0.93	3.33	0.81	0.41	10.4	4.85
361		79.4	15.5	2.1	0.85	0.34	1.06	1.06	0.44	0.98
362		78.2	16.4	2.25	0.81	0.37	1.09	1.18	0.44	0.71
363		77.7	16.9	2.1	1.07	0.63	0.9	1.93	0.43	0.96
364		70.5	23.8	2.4	1.32	0.55	1.0	1.55	0.48	0.74
365		70.5	22.3	3.2	1.12	0.61	0.95	2.09	0.39	0.69
366		70.5	19.5	1.95	1.14	0.88	0.79	1.83	0.64	2.18
367		63.9	14.9	11.6	1.73	2.25	0.44	1.08	2.75	3.31
368		74.8	17.9	3.8	0.92	0.46	0.58	0.88	0.7	1.42
369		64.5	16.8	5.85	0.86	1.36	1.57	1.38	1.29	1.54
370		66.7	19.4	4.1	0.8	0.66	0.88	1.45	0.6	1.98
371		64.3	20.5	3.55	0.91	0.75	0.59	1.09	0.9	2.09
372		69.3	18.4	4.9	0.74	0.51	1.06	1.76	0.39	1.52
373		71.5	17.8	5.4	1.09	0.55	0.59	1.58	0.47	0.73
374		60.3	19.3	12.7	1.04	1.26	0.68	1.47	1.13	3.025
375		63.8	20.6	5.7	1.03	1.39	0.53	1.59	1.15	1.91
376		69.6	18.8	4.5	0.84	0.66	0.51	2.57	0.34	0.85
377		74.2	17.3	4.45	1.21	0.74	0.37	1.06	0.93	1.13
378		70	19.6	4.1	0.77	1.35	0.44	1.47	1.22	3.31

吉井窯跡群試料

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/ K	Sr/ Rb
292		71.3	17	4.02	0.95	1.39	0.82	1.55	1.19	2.65
293		57.5	21.3	7.45	1.16	2.19	0.6	0.78	3.68	3.28
294		61.8	18	7.8	1.17	1.51	2.50	1.55	1.28	1.71
295		63.7	23.8	6.7	1.21	0.66	0.73	1.35	0.65	2.39
296		60.3	18	6.0	1.2	1.73	3.23	1.62	1.41	1.85
297		71.3	15.7	4.25	0.68	1.39	0.7	1.47	1.25	2.4
298		65.7	17.2	7.5	1.15	1.76	1.67	1.71	1.35	2.23

鳥羽遺跡試料

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/ K	Sr/ Rb
438		60.3	13.0	9.45	1.34	3.63	2.0	1.74	3.89	2.80

笠懸・山際窯跡試料

試料	成分	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/ K	Sr/ Rb
392		65.9	23.9	6.35	1.14	1.04	0.84	1.52	0.94	1.45
393		67.9	19.1	6.92	1.08	1.08	0.87	1.53	0.97	1.65
394		61.6	24.0	8.85	1.04	1.29	0.78	1.50	1.18	2.24
395		64.5	22.1	6.85	1.16	0.80	0.70	1.14	0.97	1.51
396		63.7	22.8	8.10	0.90	1.09	0.51	1.62	0.92	2.18
397		63.4	23.7	8.71	1.07	1.35	0.63	1.24	1.49	2.93
398		63.8	23.2	10.40	1.03	1.84	0.27	1.98	1.31	2.30
399		60.7	26.7	8.52	1.11	1.59	1.11	1.93	1.14	3.58
400		62.9	26.2	8.60	1.20	1.64	1.15	1.14	1.98	3.86
401		57.9	19.8	11.00	1.17	1.36	0.47	1.20	1.57	2.10
402		63.9	21.0	10.70	1.05	1.62	0.57	1.40	1.58	3.73
403		61.2	26.5	8.61	0.97	1.13	1.14	1.55	1.02	3.16
404		67.4	19.9	7.52	1.02	0.86	1.04	1.74	0.69	1.44

第4節 花粉分析

はじめに

下東西遺跡では、縄文時代から中・近世、近代に至るまでの遺構・遺物が検出されている。また、本遺跡の基本土層をみると大まかではあるが、各時代の生活面を知ることができる。本遺跡で検出された各時代の遺構の様相の復元を進めるなかで当時の植生を明らかにできれば、より一層の復元が可能であることから「花粉分析」をバリノ・サーヴェイ株式会社にお願した。

1 試料

試料は、北原B遺跡より採取された9点である。下記表1に各々の土質等を示す。

註1) 色調は、新版標準土色帖(小山・竹原、1967)による。

表1 下東西遺跡花粉分析試料土質

試料番号	土 質 (1)	試 料 採 集 地 点	試料採集遺構・土層年代観	図版番号
1	黒褐色シルト質砂質粘土	基本土層VI層	洪積世	341-3
2	褐灰色シルト質粘土	基本土層IV層～V層間の漸移層	洪積世	
3	黒褐色シルト質砂質粘土	基本土層IV層下位	縄文時代(包含層)	341-4
4	黒褐色シルト質砂質粘土	基本土層IV層上位	縄文時代～弥生時代	
5	黒褐色シルト質砂質粘土	基本土層III層	古墳時代前期～後期	341-5
6	黒褐色シルト質砂質粘土	S D59覆土下層	奈良時代	
7	黒褐色シルト質砂質粘土	S J218床下ビット埋土	奈良時代末	341-6
8	黒褐色シルト質砂質粘土	S E43底部際	中世	341-1
9	黒褐色シルト質砂質粘土	S E44中位井戸壁面(基本土層VI層)	洪積世	341-2

2 化石の抽出

花粉・胞子化石の抽出は、試料20g(湿重)を秤量し、48%HF一重液分離($ZnBr_2$ ・比重2.15)ーアセトリシス処理ー10%KOHの順に物理・化学処理を行なった。残査をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

3 分析結果及び考察

計数においては、プレパラート全域を走査した。その間に出現したすべての分類群とその個数を表2に示した。

分析結果は、樹木花粉はほとんど出現せず、全体でも18個以下と著しく少ない。状況写真に見られるように、黒色から褐色の植物片は多く含まれているが、本質的に花粉・胞子は少ないようである。花粉・胞子はおよそ $16\mu m$ 以下の微細粒子と挙動を共にする(松下、1982)ことから、粒度的には花粉・胞子が堆積時に取り込まれる可能性は高いものと考えられる。しかし、花粉・胞子が僅ど出現しないことから、分解・消失ということを示唆させる。花粉の外膜はスポロポレニンという物理・化学的に強靱な物質で形成されているが、酸化条件下においては消失してしまう。したがって、大半の花粉が消失し、一部選択的残存したものと考えられる。このような状況下にあることから、古植生等について言及することは困難である。

第5章 付 編

なお、残存していた化石は *Pinus* (マツ属)、*Cryptomeria* (スギ属) 等の針葉樹花粉および草本類の Cramineae (イネ科)、*Fagopyrum* (ソバ属) Chenopodiaceae (アカザ科)、*Artemisia* (ヨモギ属)、Carduoideae (キク亜科)、Cichorioideae (タンポポ科) 等である。胞子化石としては *Lycopodium* (ヒカゲノカズラ属) と単条型 (Monolete) 型胞子である。なお、淡水生藻類の Pseudoschizaea も検出された。

引用文献

松下まり子 播磨灘表層堆積物の花粉分析—内海域における花粉・胞子の動態—、第四紀研究、21、P15~22 (1982)

表2 下東西遺跡試料 花粉分析結果表

花粉・胞子化石名 (和名)	試料番号								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> (ゴヨウマツ亜属)						1			
<i>Pinus</i> (ニヨウマツ亜属)					1				
<i>Cryptomeria</i> (スギ属)	1								
AP-1 (針葉樹花粉)	1	0	0	0	1	1	0	0	0
Cramineae (イネ科)				1				1	
<i>Fagopyrum</i> (ソバ属)			1						
Chenopodiaceae (アカザ科)	1						1		
<i>Artemisia</i> (ヨモギ属)			4	14		11	3	1	3
Carduoideae (キク亜科)	2			1					
Cichorioideae (タンポポ科)								1	
NAP (草本花粉)	3	0	5	16	0	11	4	3	3
<i>Lycopodium</i> (ヒカゲノカズラ属)								1	
Monolete spore (単条溝型胞子)	1			2	2		1	3	
FS (羊歯類胞子・形態分類胞子)	1	0	0	2	2	0	1	4	0
Total Number	5	0	5	18	3	12	5	7	3
Pseudoschizaea (淡水生藻類)		1			1			1	

第5節 樹種同定

はじめに

下東西遺跡では、竪穴住居をはじめとして数多くの遺構が検出された。これらの遺構の存在する時代にはすでに多くの木器、木製品が使用されていたことが知られているが、本遺跡では、僅かにS Z 01・16等の土壇墓において木棺の使用が確認されたのとS E 12・16から曲物・井戸桶などの木製品と自然木片が出土したただけであった。S E 12・16より出土した木製品の使用材の樹種同定および若干の考察をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

1 試料

試料は、S E 12から検出されたもの6点(No.12-8、12-10~12-16)とS E 16から検出されたもの18点(No.16-1~16-5、16-7~16-19)の合計24点である。S E 12は室町時代後半のものとしてされ、試料は曲物と不明木製品である。S E 16は近世以降のものとしてされ、No.16-9(不明木製品)を除いて井戸桶の部材とされている。

2 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール(Cum Chloral)で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版(図版1-8)も作成した。

3 結果

同定結果を一覧表で示す(表1)。

表1 下東西遺跡出土材同定結果

試料番号	種名	図版番号	試料番号	種名	図版番号
12-8	styrax sp. (エゴノキ属の一種)	342-1	16-13	c.japonica	348-19
12-10	cf. chamaecyparis sp. (ヒノキ属類似種)	342-2	16-14	c.japonica	348-20
12-11	cf. chamaecyparis sp.	342-3	16-15	cf.chamaecyparis sp.	348-21
12-12	cf. chamaecyparis sp.	343-4	16-16	c.japonica	349-22
12-13	cf. chamaecyparis sp.	343-5	16-17	c.japonica	349-23
12-14	cf. chamaecyparis sp.	343-6	16-18	cf.chamaecyparis sp.	349-24
16-1	Cryptomeria japonica (スギ)	344-7			
16-2	c.japonica	344-8			
16-3	c.japonica	344-9			
16-4	c.japonica	345-10			
16-5	c.japonica	345-11			
16-6	c.japonica	345-12			
16-7	c.japonica	346-13			
16-8	c.japonica	346-14			
16-9	Morus bombycis (ヤマブツ)	346-15			
16-10	c.japonica	347-16			
16-11	c.japonica	347-17			
16-12	c.japonica	347-18			

次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などについて種類ごとに述べる。

- ・スギ (*Cryptomeria Japonica*) スギ科 No.16-1~16-5、16-6~16-8、
16-10~16-14、16-16、16-17

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

- ・ヒノキ属類似種 (cf. *Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No. 12-10~12-14、16-15
16-18

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか。放射組織は単列、1~15細胞高。

上記の特徴から、試料はスギまたはヒノキ属の材であることは明らかであるが、標本はいずれも細胞壁の劣化が進み、両者の識別点となる分野壁孔の型が確認できない。しかし、スギ型の壁孔にみられる大型の孔口をもつものはみあたらず、晩材部も狭いなどからヒノキ属類似種とした。消去法による同定ではあるがヒノキ属とみてよいものと考えている。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州 (福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州 (岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

- ・ヤマグワ (*Morus bombycis*) クワ科 No.16-9

環孔材で孔圏部は3~5列、晩材部へ向って管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は管壁は厚く単独または2~3個が複合、小道管は管壁厚は中庸で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~6細胞幅、1~50細胞高。柔組織は周囲状~翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、中国原産のカラグワ (マグワ) (*Morus alba*)・ロソウ (*M. alba* var. *multicaulis*) とともに多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。材の解剖学的特徴のみで、これらを区別することはできない。ヤマグワの材はやや重硬で強靱、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

・エゴノキ属の一種 (*Styrax* sp.) エゴノキ科 No. 12-8

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、2～4個が複合または単独で配列し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、段 (bar) の数は5～10、壁孔は小型で密に交互～対列状に配列する。放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

エゴノキ属には、エゴノキ (*Styrax Japonica*)、ハクウンボク (*S. obassia*)、コハクウンボク (*S. shiraiana*) の3種がある。エゴノキは北海道 (渡島)・本州・四国・九州・琉球に、ハクウンボクは北海道 (北見・石狩以南)・本州・四国・九州に、コハクウンボクは本州 (栃木県以南)・四国・九州に分布する落葉高木～低木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、旋作・器具・薪炭材などに用いられる。果皮にはエゴサポニンを含み、洗剤や魚毒として用いられた。またハクウンボクの種子から搾られた油脂からはロウソクが作られた。

4 考察

No.12-8は用途不明の加工材であるが、特異な形をしており、エゴノキ属の材を用いている。エゴノキ属の材は、緻密で、割れにくく、加工が容易、仕上りも良好であり、かつては和傘のろくろとして賞用されたほか、樽の呑口、漏斗、糸巻き、各種柄などに用いられたものである。試料は、このようなエゴノキ材の特長を活かした用途に使われたものであろう。

曲物とされる材 (No.12-10～12-14) は、いずれもヒノキ属類似種であった。県内では、ヒノキは北部を除いて自生するとされるが、サワラの自生地は限られる。したがって、自然分布からはこれらの材はヒノキである可能性が高いが、サワラはヒノキより耐水性にすぐれ、桶などに用いられることからサワラの可能性もある。この場合は遠方からの搬入品であろう。なお、高崎市吹屋遺跡から出土した中世のものとされる曲物底板1点がヒノキ属と同定されている (鈴木・能城1982)。

SE16の井戸桶の部材とされる17点のうち、No.16-15、16-18を除く15点はスギであった。この井戸桶はスギ桶であろう。残る2点はヒノキ属類似種である。同じ針葉樹であっても、スギとヒノキ (サワラ) の材質は異なり、一つの桶に両者の材を混ぜて作るとは考えにくい。出土状況からは桶の側板とされるが桶部材ではないことも考えられる。

高崎市矢島町村西遺跡の中世のものとされる7号井戸の井戸枠は縦木・横木ともクリであった (パリオ・サーヴェイ株式会社1986)。両者の違いは、桶と井桁組みという井戸枠の作り方の違いによるもののようにみえる。ただ、矢島町村西遺跡の井戸と同様の作り方をしていると思われる。神奈川県鎌倉市蔵屋敷遺跡の14世紀のものとされる2号・4号井戸の井戸枠材5点 (縦木・横木・支柱) は、全てスギであった (山内1984)。井戸枠材は耐水性と強度が要求されるものであるから、使用される樹種はスギ・ヒノキ属・クリなどに限定されるであろう。どの樹種が使用されるかは、時代・地域・製法などによって変異があるものと思う。

引用文献

- パリオ・サーヴェイ株式会社 樹種・種子同定報告 (抄)、「高崎市文化財調査報告書第71集 (宿大類遺跡群VII) 矢島町村西・増殿遺跡—県営宿大類地区圃場整備事業にともなう緊急発掘調査概要—」、高崎市教育委員会、1986
鈴木三男・能城修一 吹屋遺跡出土木材の樹種、「元島名B・吹屋遺跡—関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集—」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、1982
山内 文 蔵屋敷遺跡出土の木製品について、「蔵屋敷遺跡 日本国有鉄道鎌倉駅改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査」、鎌倉駅改築にかかる遺跡調査会、1984

遺構索引

遺構索引

遺構 No	本文頁	図版頁	遺構 No	本文頁	図版頁	遺構 No	本文頁	図版頁	遺構 No	本文頁	図版頁			
S J	01	74	26	S J	58	欠番	S J	115	262	138	S J	172	341	185
	02	75	27		59	164		116	263	139		173	345	189
	03	77	29		60	166	84	117	263	139		174	349	191
	04	81	31		61	167	85	118	266	141		175	350	192
	05	82	32		62	170	87	119	欠番			176	355	194
	06	86	34		63	170	87	120	275	144		177	355	194
	07	91	36		64	173	88	121	276	144		178	356	195
	08	92	36		65	174	89	122	250	129		179	356	195
	09	欠番			66	176	90	123	277	145		180	358	196
	10	92	38		67	177	91	124	60	16		181	360	197
	11	66	20		68	180	92	125	278	145		182	361	198
	12	70	23		69	186	94	126	278	146		183	欠番	
	13	94	39		70	189	95	127	281	148		184	362	199
	14	95	40		71	190	96	128	281	149		185	欠番	
	15	99	41		72	192	97	129	281	149		186	363	199
	16	102	42		73	195	98	130	282	150		187	364	
	17	104	44		74	196	99	131	283	150		188	366	200
	18	106	45		75	198	100	132	284	151		189	366	200
	19	108	46		76	200	101	133	286	152		190	欠番	
	20	108	47		77	202	103	134	287	153		191	367	201
	21	112	48		78	204	104	135	288	154		192	375	204
	22	114	50		79	206	106	136	290	154		193	376	204
	23	116	51		80	206	106	137	290	155		194	欠番	
	24	117	52		81	207	107	138	294	157		195	377	204
	25	58	13		82	209	108	139	欠番			196	378	205
	26	118	53		83	欠番		140	296	158		197	379	205
	27	120	55		84	210	108	141	297	159		198	381	206
	28	127	60		85	212	109	142	298	159		199	385	208
	29	128	60		86	214	110	143	300	160		200	389	210
	30	129	61		87	216	111	144	301	161		201	392	210
	31	73	25		88	218	113	145	305	162		202	393	211
	32	134	62		89	欠番		146	308	164		203	394	212
	33	130	62		90	219	114	147	309	165		204	398	213
	34	欠番			91	欠番		148	310	166		205	400	215
	35	134	65		92	221	115	149	313	168		206	欠番	
	36	136	66		93	223	116	150	314	168		207	欠番	
	37	138	67		94	225	117	151	315	169		208	401	216
	38	141	68		95	欠番		152	316	170		209	402	216
	39	141	68		96	230	119	153	319	171		210	405	217
	40	143	69		97	231	120	154	321	173		211	406	218
	41	146	70		98	233	121	155	323	174		212	欠番	
	42	148	72		99	236	122	156	324	175		213	欠番	
	43	150	73		100	237	123	157	326	176		214	406	218
	44	151	75		101	59	15	158	327	177		215	欠番	
	45	153	76		102	239	124	159	329	178		216	394	212
	46	欠番			103	242	125	160	331	180		217	欠番	
	47	154	78		104	245	127	161	333	181		218	407	219
	48	欠番			105	248	128	162	335	182		219	408	220
	49	155	78		106	250	129	163	336	183		220	242	125
	50	143	69		107	251	130	164	338	184		221	174	89
	51	157	79		108	254	131	165	339	184		222	174	89
	52	159	80		109	255	132	166	欠番					
	53	163	82		110	255	133	167	340	185				
	54	163	82		111	258	134、135	168	341	185				
	55	141	68		112	258	134、135	169	342	186				
	56	欠番			113	261	136	170	343	187				
	57	欠番			114	261	137	171	343	188				

遺構索引

遺構 No	本文頁	図版頁	遺構 No	本文頁	図版頁	遺構 No	本文頁	図版頁	遺構 No	本文頁	図版頁	遺構 No	本文頁	図版頁
S B 01	410	221	S D 28	594	278	S K 112	548		S K 219	637		S E 08	666	304
02	410	221	32	595	279	113	548		220	637		09	668	304
03	413		33	464	238	114	622		222	638		10	669	305
04	414	222	36	604		115	548	264	223	638		11	565	270
05	414	222	47	465	239	119	551		224	553		12	670	306
11	416	222	48	466	239	122	632		229	638		14	674	308
12	417	223	49	604		123	646		234	638		15	679	311
13	419	223	58	467	240	125	551		236	553		16	679	311
14	420	223	59	476	490	126	632		239	638		17	682	314
15	420	224	63	605		127	632		240	639	293	18	683	314
16	421	224	64	605		128	632		241	552		19	684	315
17	421	224	65	605		136	551		243	639		20	568	270
18	423	225	66	605		137	633		244	639		21	684	315
19	424	225	94	534	260	138	633		245	622	289	22	685	315
20	425	226	95	536	260	139	633		246	646		23	685	316
21	426	226	97	538	261	140	633		248	553	266	24	686	316
22	427		98	606	283	141	633		250	556	266	25	686	318
23	428	227	99	538	261	142	633		253	556	267	26	566	270
24	428	227	100	538	261	146	633		254	640		27	687	317
25	429	227	102	606		147	634		256	640		28	688	317
			104	542		148	634		260	647		29	688	318
S A 01	430	228	118	609	283	149	634		264	641	293	30	689	
02	430	228	119	615	280	151	634		266	640	293	31	689	318
03	430	228	120	616	286	152	634		267	641	294	32	690	319
06	433	229	126	617		153	634		268	641	294	33	693	320
07	433	229				154	634		274	642		34	690	319
08	433	229	S K 05	628		155	634		276	641		35	694	320
10	433	229	09	544		156	634		277	641		36	695	321
			10	544		158	552		287	557	267	37	697	321
S T 01	575	273	11	544		159	635		288	559		38	697	322
02	434	230	12	545		160	635		299	642	294	39	698	322
03	575	273	13	618	287	162	635		304	623	289	40	701	325
04	576	273	14	620	287	165	635		312	642		41	703	326
07	576	274	15	618	287	166	635		313	561	268	42	704	326
08	435	230	16	620	288	167	635		317	559	267	43	704	327
09	577		17	621	288	168	635		318	559	268	44	717	331
10	436	231	18	622	288	169	646					45	718	331
11	437	231	20	628	291	171	635		S Z 01	648	296			
12	438		21	645	295	172	635		02	648	296			
13	438		28	545		173	636		03	649	297			
14	577		29	545		177	646		04	649				
15	444	232	30	546		178	646		05	563	269			
16	578		31	546		179	646		06	649				
17	578		34	546		180	647		07	650				
20	453	235	42	645		182	552		08	650				
21	579	274	44	626	291	189	636		09	650	297			
22	579	274	45	629		190	633		10	651	297			
23	459	236	46	646	295	191	646		12	651	298			
24	459	236	47	645		195	636		13	652	298			
			48	629		197	636		14	653	299			
S D 02	461	237	49	629		205	636		15	654	299			
04	462	237	52	629		206	636		16	563	269			
06	462	237	53	629		207	636							
07	463	238	55	629		208	636		S E 01	656				
12	580	275	56	629		211	637		03	657				
21	589	277	62	632		214	637		04	657	301			
22	463	238	66	632		215	637		05	660	302			
23	580	276	82	547		217	637		06	660	302			
27	593	277	109	547		218	637		07	663	303			

下東西遺跡

本文編

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第16集一

1987年3月25日 印刷

1987年3月30日 発行

群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1番1号
電話(0272)23-1111

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社